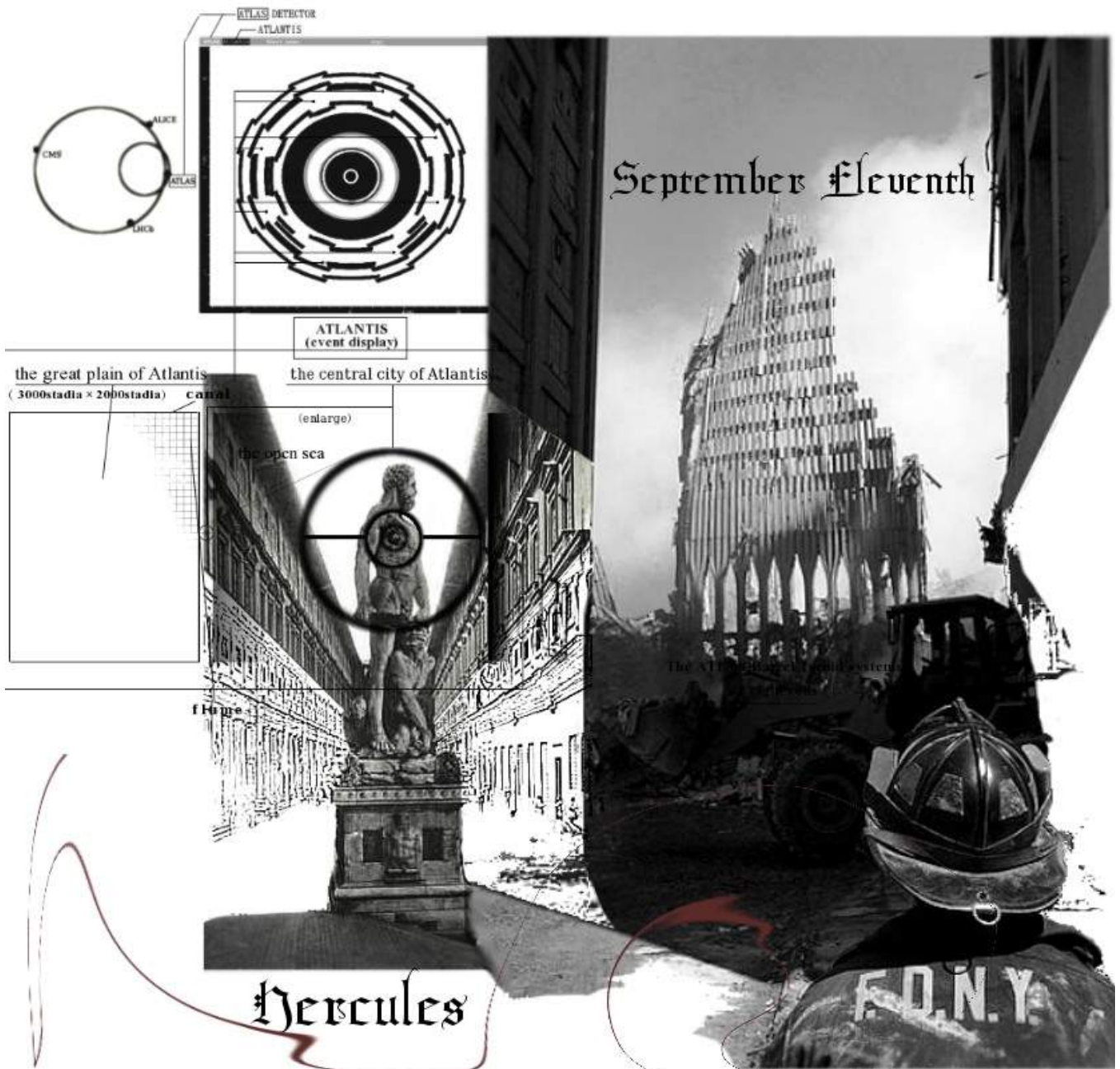


Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent

— [I I] —



[本稿の内容検証に際して「特段に」注意いただきことらとして]

※ [委細を尽くしての細部] によって [本筋] を見失われないよう、ご注意くださいことらとして

それこそ「ざっと見」にてご一読いただくだけでもご理解いただけることとは存じますが、本稿は「非常に細々とした表記をなしているもの」となります。その点に関して文書製作者としては（非常に細々とした表記がゆえに）読み手の方々が文書主筋となる箇所を見失われかねない —（本稿が「なぜ」「どのような」問題意識をもって作製されたものなのか、その指し示事項は究極的には奈辺にあるのかについて把握するうえで難渋される（そして文書検討をおやめになる）とのことになりかねない）— とのことに危惧・懸念いたしております。それゆえ、ここ冒頭部にて次のこと、注意喚起なさせていただきます。

（以下、文書内容についての冒頭部注意喚起としまして）

⇒「本稿の主要なる問題意識と訴求事項は文書タイトル — すなわちもってして Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent 『物理学者の類がブラックホールとよびならわしている存在ら、既に見てきた異様な予見的言及、そして、確たる他害意志の介在問題について』とのタイトル — にすべて集約されています。いかに細々としたものであれ、本稿中の記述はこれすべてそちら文書タイトルで表ししているまさにそのことを摘示「しきる」ために必要と判じてのものとして表記しております（脈絡・文脈なくも漫談じみた無為なるはなしを展開しようとの観点は全くございません）。微に入っ細やかな表記はそうもしてこれすべて【一つの目的に奉仕するために必要な手順】と判じてがゆえのものとなるのですが、他面、読み手銘々が一体全体何が問題になっているのか捕捉しづらいたのことが —（「ざっと見をまずもってなす」との嗜好が強い方ほど）— であろうと書き手たるこの身が深く懸念していることにも相違ございません。そこで本稿を真摯に検討なそうとの方々には本稿が「厳密な意味での段階説明方式を採用している」とのことをご理解いただきました上での【文書の最初から順を追っての検証】を、何卒、願わせていただきたく次第でございます。

※ 本稿内の数多の出典紹介部、そのすべての記載内容の即時的かつ効率的な確認方法につきまして

本稿は申し分を支える根拠、その出所紹介を極めて重んじているものともなります（書き手として【我々の生き死に関わる事柄】を詳述詳解すべく死命を賭して作製しているとの本稿内容が実際にこれすべて【後追い可能かつ容易なる典拠】に基づいているとのこと、そのことを読み手第三者にご理解いただくことこそが何よりも肝要であろうとの認識があつてのこととしまして、です）。そのため、出典紹介部の比重が重くなっています。

さて、ここでは紙幅の多くをそこに割くとのかたちで本稿本文中に入れ込んでいる数多の出典紹介部らの内容すべてを、「都度」、必要に応じて即時的に確認するうえでの方式をご案内させていただきます。

そちら【都度、即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認する方式】の実行の前提条件となることとしまして（出典の確認検証をなしたいとの方々におかれましては）まずもって本稿各巻巻末に全巻共通のものとして設けている【典拠紹介部ページ数一覧記載部】の内容「のみ」ご印刷いただきますよう（遺漏無くも確認にあつて必要なこととお含みいただきましたうえで「そこだけ」ご印刷いただきますよう）願わせていただきたく次第です。そして、印刷いただきましたうえでのそちら【「数ページよりのみなる」各出典紹介部ページ数一覧】をお手元に置いていただきましたうえで —ここからがポイントとなるところなのですが— 別ファイル名で本稿と全く同じPDF ファイルを（お手持ちのパーソナルコンピューターにて）同時に開いていただきたく次第です（:まったく同一内容同一巻の本稿をかたやファイル名1、かやたファイル名2とのかたちの異なったファイル名称のPDF ファイルとして「同時に」別ファイルとしてオープン・閲覧していただければ、とのこととなります）。

さて、まったく同一の本稿を同時並行的に別ウィンドウにて閲覧できるとの状況になりもするのが、既述の、【別ファイル名にての保存ファイル】を別々にオープンしたケースとなる次第なのですが、片方の電子ファイルを順繰りに検討している中で、たとえば、出典紹介部2の内容をなんとしても確認したくなつたとのことがあつたとします。といった場合、（最前にて「そこだけ」印刷のうえでお手元にご用意いただきたいと申し伝えさせていただきました）【「紙ベースでの」わずか数ページよりなる出典紹介部一覧】にて出典紹介部2は何巻何ページにて記載されているものなのか、一目にての確認をまずもってなしていただければ、と思います。出典紹介部一覧表記部における出典紹介部2のページ数（出典紹介部2ならば、具体的には本稿第一巻53ページから59ページ）を確認いただければ、そちら該当ページに掲載の出典紹介部の内容の確認を【（振り返って特定出典紹介部の内容が確認したくなつたところの）現在読解のセクション】から立ち位置を動かさずに「同時並行的に」なせもします。本稿PDF文書（便宜的に呼称して【File1】とのかたちで開いていただいているものとし）を閲覧しつつ、もう一方の【File2】名称で開いている別ウィンドウ表示の同じくもの、同一の本稿別名ファイルにあつてそちらPDF上の（画面上部にての）ページ数入力ボックスに【印刷した出典紹介部にて記載のページ数】を入力いただければ、【出典委細確認の必要を感じたセクションの表記の継続閲覧】と【（都度もってしての）出典内容の委細確認】を同時になせもします —確認対象と読解対象が同一巻数（vol.1からvol.4と分かちての本稿の同一巻数）に位置していても同時になせもします—（流れとしては【文書読解】→【疑問点表出（典拠出典番号として記載されている従前の出典表記確認の必要性の認識）】→【印刷した出典表記一覧部の該当出典紹介部のページ数の確認】→【文書名を分けて同時オープンしたPDFのページ数入力ボックスに出典紹介部のページ数の入力】→【File1での疑問点を感じたセクション以降の読解の継続とFile2での出典委細の確認の間断なくも同時実行】とのフローとなります）。

以上ご案内させていただきました手法を採択いただければ、ほとんど印刷することもなく都度、出典中身すべてを必要に応じて即時的に確認いただきながら長大な本稿の検証をなしていただけることと存じます。

本書第二巻 (vol.2) の構成

ここに至るまでの内容の大筋としての振り返り表記の部として (そこからして重要でもあるところの多くの摘示事項をすべて割愛したうえでの振り返り表記の部として)

(うち、表記見出しの通りのことのみを扱っての部 との部) p.5

文壇に君臨していた著名作家の手になる作品「群」、それらにすら【加速器によるブラックホールの人為生成問題に通ずる予見性】が複合的かつ異様に見受けられるとのことについて (**補説1** と区分付けしての部)

(うち、【「米国現代文学の旗手」とまでもはやされもしていた作家カート・ヴォネガットの代表作「ら」にすら見て取れる【加速器のブラックホール生成問題】に通ずる奇怪な予見的言及】について解説なしもしているとの部) p.9

(うち、【その登場時期からして【予見性】との絡みで非常に問題になる欧米圏作家ら文物らにあつて【ブラックホール】や【加速器によるブラックホール生成問題】に通ずる異様な先覚的言及がみとめられるとのこと】について、(補足として)、解説しもしているとの部) p.90

(うち、【米国にての大物作家カート・ヴォネガット特定作品が別作家アーサー・クラークの手になる著名な『2001年宇宙の旅』と結びつく作品となっており、まさにその意でも問題になるところとして【911の予見言及文物】かつ【ブラックホール問題に通ずる文物】となつてもするとのこと】について解説しもしているとの部) p.159

再びもつてダンテ『地獄篇』に立ち戻り、極めて根が深きこと、容易に伺い知れるところの複層的相関関係の指し示しに入るとして (**補説2** と区分付けしての部)

(うち、【ルシファーと結びつく素地ありの幾何学構造にして、かつ、史的に異界の境界と結びつけられてきたとの幾何学構造、そうしたものすらもが執拗性を感じさせるかたちでブラックホール関連領域を巡る事柄らに結びつきもしているとのこと】について解説なしはじめているとの部) p.214

(うち、【ルシファーと結びつく素地ありの幾何学構造にして、かつ、史的に【異界の境界】と結びつけられてきた幾何学構造(図形)が日本の伝承にあつて「も」異界との境界およびブラックホールとの接合性を見て取れる事物に接合している、とのこと】について解説しもしているとの部) p.284

レギュラー・ペンタゴン(正五角形)構造を巡る【ブラックホール「人為生成」問題】に通ずる関係性について (**補説2** と区分付けしての部)

(うち、(【ブラックホールおよびワームホールの人為生成にまつわる近年の科学界にての言われよう】を紹介しもしたうえで)、【特定の幾何学構造とブラックホールおよびワームホールら重力の怪物の人為生成にまつわる事柄らの多重的接合性の問題】について解説しもしているとの部) p.326

(うち、主軸となる話より一旦脇に逸れもして、【重力波(活用技術)にまつわつての言われよう、および、脳の機械的操作機序にまつわつての「可能性」論の問題】について解説しもしているとの部) p.692

(うち、【重力波(活用技術)を扱っての予見的作品】に注意を向けもしながら【特定の幾何学構造が何故、ブラックホール人為生成との絡みで問題になるのか、とのこと】を「さらに煮詰めもして」の部)
..... p.766

「【ブラックホール人為生成問題】に通ずる予見的な事物らとしてこれまでいかなうなことを取り上げてきたのか」について整理し、そして、がてらにももの訴求をなすとして（【補説2】と区分付けしての部）

(うち、表記見出しの通りのことを一意専心して扱っての部) p.805

容易に検証可能であり、かつ、露骨に剣呑さを示す事実関係らの存在そのものを韜晦(くらまさ)せんが如く海外陰謀論者やりようについて（【本論に対する付記】と位置付けての部）

(うち、表記見出しの通りのことを一意専心して扱っての部) p.839

各【典拠紹介部】記載箇所一覧表記部 p.929

巻をあらためての段にての開巻の部であるからこそそのこととして、まずもって、本稿の従前の段でいかようなことを摘示してきたのかについての振り返り表記をなしておくこととする。

[ここに至るまでの本稿内容の端的なる振り返り表記として]

本稿ではここに至るまで、大要、次のことらの解説をなしてきた（：それらのことが【なんら属人的心証など問題にならないとの堅い典拠によって指し示される現象】としてそこにあるとのことを(懇切丁寧を心掛けもし)解説なしてきた)。

・加速器実験によってブラックホール生成がなされると考えられるに至ったのはここ 10 数年とされている、正確には

【1998 年発の特定理論 — ADD Model — の登場を受けての (その後、数年の間の) 理論動向の地殻変動】

を受けてのことであるとされており、2001 年に登場した第一線の科学者ら由来の特定の科学論文ら — (ほぼ同時期に世に出たカリフォルニア大サンタバーバラ校の物理学者ら由来の **High energy colliders as black hole factories: The end of short distance physics.**『ブラックホール製造工場としての高エネルギー加速器:短距離物理学の終わり』、および、スタンフォード大の物理学者らによる **Black Holes at the Large Hadron Collider**『LHC にあつてのブラックホール』(こちらスタンフォード大関係者らの論文の方は(せんだって引用のように)ニューヨーク・タイムズに取り上げられるなどして物議を醸した)の二論文ら) — にあつてそうした可能性が主流筋の一部物理学者より示唆されるまでは

【(きたる)加速器 LHC の始動によってブラックホールが生成される可能性】

などは「ありえないことである」と見られ、かつ、加速器実験実施機関からしてそうも断言していたとのことがある — 同じくものことを多角的・一様に示す科学界の「公的」報告文書、そして、ノーベル賞級物理学者らの言行録らが存在して「いる」——。

(：1999 年になってはじめて「LHC 実験でブラックホール生成がなされる可能性があるのではないか?」との問題視が市井の活動家 — (ウォルター・ワグナー) — によってなされた、それがマス・メディアを通じて衆目につくようになったとの事情「も」ある中で、だが、そちら「1999 年の」ブラックホール生成可能性の問題視は運動家ワグナーによる懸念の理由付けも含めて科学界・主流科学者らになんら相手にされなかったとのことがあり(公式報告文書それ自体からして(先に引用しているように)「加速器でブラックホールが生成されるなどというのは狂人の妄夢 Pipe Dream のようなものである」との内容を前面に押し出していた)、そうした風潮が(ワグナー問題視に 1 年程先立ちもする)1998 年の特定理論登場 (ADD Model) に由来する「水面下での」理論動向の変転を受け、「結局」、変化・変節を見ることになった、すなわち、【プランク・スケールのエネルギー Planck Energy を極微領域投入した時のみのブラックホール人為生成可能性】に対する観点の修正を受けて【LHC による「科学の発展に資する」即時に蒸発する安全なブラックホール生成】はありうると思われるようになったとの(発表動向変化にまつわる)事情がある)

・上の点(・)となんら間尺・平仄が合わぬこととして、である。【加速器によるブラックホール

人為生成】について異様な程に正確に後の動向をなぞっているとの式での「予見的」特定フィクションらが実在しているとの事情がある。

(:本稿の従前の段では 1980 年初出の作品 —過去改変を主軸たるモチーフとして
いる作品— にあって

【加速器敷設型核融合プラントにあっての極微ブラックホール生成】

の粗筋が具現化を見ていることを指摘し、その粗筋が

【極微ブラックホールの生成個数】（現実世界での後の見立てでは通年 1000 万個のブラックホール生成が論じられるようになったのに対して当該のフィクションでは短期間の加速器敷設型核融合プラントの運用に伴う数百万個のブラックホール生成が描かれている)

【欧州生成元におけるブラックホール生成懸念具現化時にあってのホーキング輻射(極微ブラックホール蒸発に関する仮説)を持ち出しての責任逃れの言辞の具現化】（現実世界でも後にブラックホール生成可能性が問題視された折、ホーキング・エバレーション、ホーキング輻射による熱放射によるブラックホール消滅が安全性の論拠として盛んに強調されていたとの事情が存するのに対して、当該の小説ではブラックホール生成が問題視された折、「それでも蒸発するから問題ないだろう」との関係者強弁がなされていたとことが描かれている)

などの側面での[先覚性]が具現化していることを懇切丁寧に解説しもしてきた（さらに述べれば同じくものフィクションが異様なのはまだ建設計画の青写真すら存在していなかった（と実験機関文書らより後追いできるようになっている）LHC 実験の始動時期に「極めて」近い 30 年後の世界を当該作品が舞台にしているとのこと「も」ある）。

また、別の 1974 年初出のフィクションに関してはよりもって異様なことに CERN（現行の LHC 実験の主権者機関）を露骨に意識させる架空の欧州の加速器実験主催者機関によって

**【往時想像だにされもしなかったし、青写真すら出されていなかった（と実験機関公的資料より後追いできる）ところの】兆単位電子ボルトを実現する「架空の」巨大円形加速器 —しかもその巨大円形加速器、往時の CERN 運営加速器よりも今日の LHC に「重心衝突系エネルギーベースの比率で 200 倍も近い」との一品となっている（繰り返すがそうしたものの建設計画がなんらもちあがって
いなかった中でそうもして近いものとなっている)—**】

などとのものが登場を見ており、そうした巨大円形加速器が多角的にブラックホール人為生成のメタファーと結節するようになっているとのことすら「も」がある)

・上にあっては

【加速器による「後の」ブラックホール人為生成問題(の議論)に通ずる「異様な一致性を伴った」予見性】

が現出していると(委細をすべて先立っての段に譲りつつも)申し述べているわけだが、

【「異様な」予見性現出】

との点で言えば、—唐突ながらも— 911 の事件について「も」それが当てはまるようになっているとことが「ある」。

(:本稿の先だつての段ではたとえばもってして「さらに他例は後に示すと明示しての中での一例として」

【1999年初出作品であるにもかかわらず2001年9月11日とのそのものぴしゃりの日付を僅か数秒のカットで登場させている作品】(日本では1999年「9月11日」に封切られている映画『ザ・マトリックス』/DVDでの秒単位での再生箇所の呈示をなすとの式での容易なる確認方法も本稿にての先立っての段で紹介している作品)

【9とツインタワーを11状に並べて911との数値を全く蓋然性なく(極めて不自然に)ツインタワー絡みで描出させている作品】(1997年に世に出ている『ニューヨーク市対ホームー・シン普森』)

【片方が崩れ、片方の上階に風穴が開くとツインタワーを飛行機と描いている作品】(1993年に世に出ている映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』/DVDでの秒単位での再生箇所の呈示をなすとの式での容易なる確認方法も本稿にての先立っての段で紹介している作品)

のことなどを紹介してきたとの経緯がある)

・直前の点(・)にあつて言及の、

【911の「異様なる」予見性現出】

が、こともあろうに、

【加速器による「後の」ブラックホール人為生成問題(の議論)に通ずる「異様なる一致性を伴った」予見性】

と結節点をいくつも有しているとのことが「ある」。

具体的には次のことらがそこに「ある」。

→

[— (「問題なのはそうしたことの現出が(予見性それそのものの発現も含めて)[偶然の賜物]か[確たる故意の賜物]なのか、どちらであるのかとのことにある」としつつも) — 911の一部予見事物「にもブラックホールおよびブラックホールに通ずるワームホールのメタファーが介在しているとのことがある」]

【911の一部予見事物も「加速器のブラックホール人為生成問題」も【アトランティス】【アトラス】【黄金の林檎】とのユニークな(特異なる)要素との結節性を帯びているとのことがある(:911の一部予見事物がいかようにして[アトランティス][アトラス][黄金の林檎]と結びつくのかの(さらに補うことを前提にしての)一例紹介を先立ってなしもしている、また、LHC実験によるブラックホール生成可能性が【検出器ATLAS】【イベント・ディスプレイ・ウェアATLANTIS】といったものらと結びつけて実験実施機関それ自体に発表されるようになっていったとのことがある — LHC実験では検出器ATLASの目たるところで「科学の進歩に資する」安全な極微ブラックホール生成を観測しうる、イベント・ディスプレイ・ツールであるところのATLANTISによってブラックホール生成イベントを捕捉・ディスプレイしうるとの言い分が関係者によって前面に出されたしたとのことがある(本稿ではそうした言い分に結実することになった命名規則確定の【時系列】も当然に問題視しており、たとえば、ATLASとの命名規則が確定したのは1992年のLHC計画(まだ正式にゴー・サイン・予算承認が出されていなかったところのLHC計画)関連の趣意書にあるといったこともCERNサイド文書よりの原文引用によって(先行する部にて)示している) —]

・直上言及のことにも関わるところとして —これまた実にもって奇怪なことなのだが—

「人類の歴史にあっては「現代的観点で見た場合の」ブラックホールおよびワームホールに通ずる「特異なる表現」が「超」がつく程に著名な古典らにすらみとめられる—しかも、そこまではまったく指摘されないところながらも複数著名古典の相互に通ずるところにそういう側面が見てとれる— とのことがある」

・直近の点(・)にて(委細を端折りながら振り返りもして)言及しているように

「人類の歴史にあっては「現代的観点で見た場合の」ブラックホールおよびワームホールに通ずる「特異なる表現」が「超」がつく程に著名な古典らにすらみとめられる—しかも、そこまではまったく指摘されないところながらも複数著名古典の相互に通ずるところにそういう側面が見てとれる— とのことがある」

と指摘させるのだが、(「そうしたことがあるのが【偶然の一致の賜物】なのか【故意の賜物】なのかとのことが問題になる」と先行する段にて述べもしてきた) 同じくもの関係性が

【アトラス】

【アトランティス】

【黄金の林檎】

【ヘラクレス】

との要素らに濃厚に接続しているとのこともがまたもってしてある。

そうもした関係性の問題は先立って言及してきたところの【911の予見事物】【LHCによるブラックホール生成問題に関わる事物】の双方に通ずるもの「でも」あり(委細を先行する段に譲ってのことながらも最前の箇条書き部の他の点(・)らの内容として表記してきたことである)、またさらには

【伝承に見るトロイア崩壊の物語 —欧米の基準古典となっているところのホメロス叙事詩がそちらをモチーフとしているところの「木製の馬が用いられての城市崩壊の物語」—】

【エデンでの禁断の果実による誘惑の物語】

【蛇の種族によるアトランティスへの侵襲・崩壊にまつわる「旋毛(つむじ)の向きが左がかった」申しようの類 (という筋立ての第二次大戦期に遡る神秘家という人種に由来する「一見する限りは、」もの妄語の類)】

と「濃厚に」接続しているとのことがあるとのもの「でも」ある —※神秘家などとの筋合いの人種による言い分のこととは脇に置いたうえで述べれば、【(人類の基準古典に見る)トロイア崩壊の物語】【(あまりにも有名な)エデンでの禁断の果実による誘惑の物語】に問題となる関係性が「濃厚に」接続しているとのことは同じくもの関係性の根の深さを示すことであるとも判じられる。その点もってしてフォウビトゥン・フルーツ、禁断の果実は聖書それ自体には[林檎]と明示的に言及されているわけではないが、永年に及ぶ歴史的慣行の問題として禁断の果実は[林檎]と同一視されてきたとのことがあり、かつ、その林檎と同一視されてきた禁断の果実を【黄金の林檎】と関連付けて見て然るべきだけの多数数多の結節事由がある(現実にエデンの禁断の果実と黄金の林檎は一部欧州の識者に接続性があると歴史的に指摘されてきたとのことを示す苔むした資料も先立って原文引用にて呈示している)、そして、ブラックホール近似物を登場させているとの古典らは【エデンの誘惑の主体】にまつわるものであり、そこには【トロイア崩壊の寓意】【黄金の林檎の寓意】もがみとめられるようになっていたとのことがある—。

以上、箇条表記したことが本稿にあっての従前の段の主たる摘示事項らとなる(それらはさらにもつ

てして深化させて後の段で問題視するとの摘示事項ら「でも」あるわけだが、先行する段にあってからしてひたすらに入念を心掛けて摘示に努めてきたとのこととなる。

(ここまでをもってして本稿内容の振り返り部とする)

以上、振り返り表記をなしたとして、これ以降、本稿にて重きをもたせての区分としての **補説 1** から **補説 4** と分けもしての部に入ることとする。



米国文壇を代表する著名作家の手になる作品「群」、それらにすら【加速器によるブラックホールの人為生成問題に通ずる予見性】などが複合的かつ異様に見受けられるとのことについて

ここ本段以降の **補説 1** と銘打つての部にては

[米国の特定著名作家]

の手になる著名作品「ら」にあって

[我々全員を殺すことの意味の現われであると解されるが如しの「極めて不可解な」要素]

がみとめられるとのことがある、しかも、——「であるからこそ問題になる」ところとして—— [極めて先覚的]かつ[極めて巧妙]、そして、[極めて隠喩的] (だが、それが分かれば容赦なくも明示的) とのかたちでそうした要素がみとめられるとのことがある件について解説をなすこととする。

その点、まずもって

[本稿にて先述してきたこと「にも」関わるどころ]

として次の **a.** から **f.** のことらが問題になるとのことから解説をなしはじめる (: 以下にて表記の **a.** から **f.** のことらから解説をなし、その絡みで何が問題になるのか、関連事象との兼ね合いで話を広げていくとの構成で以降、話を進めていくこととする)。

a.

[米国文壇の寵児]として押しも押されもせぬとの立ち位置にあった著名作家カート・ヴォネガットによってもものされ、1976年に刊行されたとの Slapstick, or Lonesome No More (邦題)『スラップスティック』という小説作品がある。

b.

上作品『スラップスティック』(1976)にあつてはロックフェラーに由来する一対の双子が合体した際に[天才的閃き]が現出するとの(一見にして)奇態なる設定が採用されている。

c.

『スラップスティック』(1976)にあつては双子の合体時に顕在化するとの作中設定が付されての[天才的閃き]が応用されてのものらしいとのかたちで[地球規模で重力が増大を見ているとの状況]に至っているとの描写がなされてもいる(双子の天才的閃きを利用して中国がそういう状況、地球規模の重力増大をもたらす装置を造り上げたいとのが作中にて臭わされている)。

d.

『スラップスティック』(1976)にあつては合体することで[天才的閃き]を得るとの双子らが一方が片方に先立ち早世するとのかたちで離別を見ることになるが、後に[粒子加速器]([フリーガン]と作中呼称される放棄された加速器)の遺構が幽冥境にする彼・彼女ら双子を「再」度結合させることになったとの筋立てが採用されてもいる。

e.

『スラップスティック』(1976)にあつての(c. から d. にて言及したところの)特性は[重力増大状況]と[粒子加速器]が[双子の結合]との側面で結びつけられているがために[加速器によるブラックホール生成]のことをも観念させるものでもある(：双子が結合した際に[重力増大状況]につながるアイデアが生まれたとの設定、そして、双子の生死両界をまたいで再結合が[粒子加速器]によって実現されるなどという設定、すなわち、「どうしてこのような意味不明な設定が?」との筋立てが採用されていることに関して「粒子加速器と重力増大状況が際立つてのブラックホールの関係性にまつわる意図的言及がなされているのでは?」と見ることに無理はない)。

f.

また、小説『スラップスティック』のロックフェラーの血筋に属する双子の持ち出しよう

には形態的に(ロックフェラー一門の後押しがあって建設に至ったとの)ツインタワーのことを想起させるような側面が伴っている。他面、「ツインタワーが崩落を見たとの911の事件」と「通過可能なワームホール」(ブラックホールと質的につながるもの)を扱った書として911以前に刊行を見た著作キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』(との1994年初出の著作)とが時期的に不可解にも結びつくようになっているとのことが——(馬鹿げて聞こえもして然るべきことである中でながら本稿の先立っての部にて詳述してきたところとして)——この世界には「現実」にある。

以上、a. から f. のことが述べられるようになっており、それがため、奇怪である(加速器によるブラックホール生成が観念されるようになったのはここ10数年と知られるがゆえ奇怪である)とのことがある。

それではこれ以降、表記の a. から f. のことの論拠を——出典紹介を重視しているとの本稿だからこそ——これより細かくも網羅的に挙げていくこととする。

まずもって

a.

[米国文壇の寵児]として押しも押されもせぬとの立ち位置にあった著名作家カート・ヴォネガットによってもものされ、1976年に刊行されたとの *Slapstick, or Lonesome No More* (邦題)『スラップスティック』という小説作品がある。

とのことにまつわっての出典を挙げておく(：マイナーな作家およびその作品ではなく知名度・通用度の極めて高い作家・作品を俎上に上げているとのことを断っておくこと「も」また必要であろうと考えて、である)。

出典(Source)紹介の部 64



SOURCE

64

ここ出典(Source)紹介の部 64 にあつては

[カート・ヴォネガットがいわゆる文壇の寵児であったとのこと]

[カート・ヴォネガットが 1976 年に(書誌情報として)『スラップスティック』という作品を刊行しているとのこと]

について目立つところの解説のなされようを引いておくこととする。

(直下、通用度が高いことであるため、即時確認可能なウィキペディア[カート・ヴォネガット]項目よりの記述を引くだけで十分であろうとの判断の下、その現行にての記述を引用なすとして)

カート・ヴォネガット(Kurt Vonnegut,1922 年 11 月 11 日 -2007 年 4 月 11 日) はアメリカの小説家、エッセイスト、劇作家。1976 年の作品『スラップスティック』より以前の作品はカート・ヴォネガット・ジュニア(Kurt Vonnegut Jr.)の名で出版されていた。人類に対する絶望と皮肉と愛情を、シニカルかつユーモラスな筆致で描き人気を博した。現代アメリカ文学を代表する作家の一人とみなされている。代表作には『タイタンの妖女』、『猫のゆりかご』(1963)、『スローターハウス 5』(1969)、『チャンピオンのための朝食』(1973)などがある。ヒューマニストとして知られており、American Humanist Association の名誉会長も務めたことがある。20 世紀アメリカ人作家の中で最も広く影響を与えた人物とされる

(引用部はここまでとする)

よく知られた作家来歴にまつわることであるので [カート・ヴォネガットがいわゆる文壇の寵児であったとのこと] [カート・ヴォネガットが 1976 年に(書誌情報として)『スラップスティック』という作品を刊行しているとのこと] とのことについての紹介はこれにて終える。

(出典(Source)紹介の部 64 はここまでとする)

以上引用部記述に見るようにカート・ヴォネガットという作家は「きわめて著名な」(おそらく英文学を大学でまじめにかじった人間ならばほとんどがその名前と作品名ぐらいは知っているを受け取れるぐらいにきわめて著名な)作家となっている。

次いで、

b.

上作品『スラップスティック』(1976)にあつてはロックフェラーに由来する一対の双子

が合体した際に「天才的閃き」が現出するとの(一見にして)奇態なる設定が採用されている。

とのことにまつわって

(b1.) [『スラップスティック』は一对の双子が合体した際に「天才的閃き」が現出するとの設定が採用されているとの作品となっている]

とのことの典拠紹介をなすこととする。

出典(Source)紹介の部 64(2)



SOURCE 64(2)

ここ出典(Source)紹介の部 64(2)にあつては

[『スラップスティック』は一对の双子が合体した際に「天才的閃き」が現出するとの設定が採用されているとの作品となっている]

とのことについてウィキペディアのような目立つところの解説のなされようを引いておくこととする。

(直下、即時即座に誰でも確認できるところの英文 Wikipedia[Slapstick(novel)]項目にての [Plot introduction(粗筋紹介)]の部にての現時点での記載より原文引用をなすとして)

The novel is in the form of an autobiography of Dr.Wilbur Daffodil-11 Swain.

[...]

Dr.Swain is a hideous man whose ugliness,and that of his twin sister Eliza,caused his parents to cut them off from modern society.

[...]

The siblings came to realize that,when in close physical contact, they form a vastly powerful and creative intelligence.

(訳として)

「小説『スラップスティック』は[ウィルバー・ダフォディル-11・スワイン]博士の自伝との形式をとる作品である(訳注:ダフォディル「-11」の11については「11

世」などとは無縁なるミドルネーム構築様式によるものとなり、についても当該作品のなかで解説がなされている)。

…(中略)…

スワイン博士はその双子の姉エリザと同様に両親が彼らをして現代社会から無理矢理に隔絶させしめたような醜さを伴っているとの退隱の男である。

…(中略)…

双子の姉弟らは密接な物理的接触をなした際に彼らが強力かつ創造的な知性を発揮するとのこと、悟るに至った」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部 64(2)**は以上とする)

さらに続いて、

(b2.) [小説『スラップスティック』に登場する結合することで天才的閃きを発揮するとの双子らが [ロックフェラーの血筋] にあたると設定付けられている]

このことの出典を挙げておくこととする。

出典(Source)紹介の部 64(3)



SOURCE 64(3)

ここ**出典(Source)紹介の部 64(3)**にあつては

[小説『スラップスティック』に登場する結合することで天才的閃きを発揮するとの双子らが [ロックフェラーの血筋] にあたると設定付けられている]

このことを当該の著作よりの原文引用によって示しておくこととする(たかだかものそうしたこととも他の事柄らと複合顧慮することで悪辣な寓意付けの問題に相通ずるようになっていくとの認識があるからで

ある)。

上のことについては ——『必要以上に細々としたやりようを』と向きによっては見るかもしれないが——『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第11刷のもの)p.40-p.41の主人公述懐部(小説『スラップスティック』は上にての英文ウィキペディア記述に見るように主人公ウィルバー・ダフォディル-11・スワインの日記とのかたちで展開される作品となる)よりの[中略]なしつつもの原文引用をなしておくこととする。

(直下、訳書『スラップスティック』40ページから41ページよりの原文引用をなすとして)

わたしはこのニューヨーク市で生まれた。当時はまだダフォディルとは縁がなかった。洗礼名はウィルバー・ロックフェラー・スウェインという。しかも、わたしはひとりではなかった。二卵性双生児の姉がいた。姉の名はイライザ・メロン・スウェイン。

…(中略)…

わたしたちの両親は、愚かで、美しく、とても年若い夫婦だった。父はケイлеб・メロン・スウェインといい、母はレティシヤ・ヴァンダービルト・スウェインといった。母の旧姓はロックフェラーである。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※ちなみに、表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにあつての引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more? にての Chapter 2 より引用するところとして) “**I was born right here in New York City. I was not then a Daffodil. I was christened Wilbur Rockefeller Swain. I was not alone, moreover. I had a dizygotic twin, a female. She was named Eliza Mellon Swain.[. . .] Our parents were two silly and pretty and very young people named Caleb Mellon Swain and Letitia Vanderbilt Swain, nee Rockefeller.**” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる)

以上、引用部をもって『スラップスティック』の主人公たる双子 Twins の片割れ(ウィルバー・ダフォディル-11・スワイン Wilbur Daffodil-「11」 Swain) がロックフェラーの出であるとの作中設定が採用されていることを示した。

(**出典(Source)紹介の部 64(3)**はここまでとする)

ここまでにて b. と振つてのことの典拠を(細々と)挙げ終えたとして、次いで、

C.

『スラップスティック』(1976)にあつては双子の合体時に顕在化するとの作中設定が付されての[天才的閃き]が応用されてのものらしいとのかたちで[地球規模で重力が増大を見ているとの状況]に至っているとの描写がなされてもいる(双子の天才的

閃きを利用して中国がそういう状況、地球規模の重力増大をもたらす装置を造り上げたいとのことが作中にて臭わされている。

とのことにまつわっての典拠を挙げることとする。

表記の点については「まずもって」現行、書店に並んでいる小説『スラップスティック』（早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第 11 刷のもの）にあつて「重力の増大状況」が作中にて頻繁に取り上げられていることを原文引用によって指し示すこととする。

出典 (Source) 紹介の部 64(4)



SOURCE 64(4)

ここ出典 (Source) 紹介の部 64(4) にあつては

[小説『スラップスティック』にあつて重力の増大状況が作中にて頻繁に取り上げられている]

とのことを当該の著作よりの原文引用でもって示しておくこととする。

(直下、訳書『スラップスティック』（早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第 11 刷のもの）にての 98 ページより原文引用をなすとして)

この回顧録を書きはじめから、もう六日間経つ。そのうち四日は、重力が中ぐらい——ちょうど昔のような感じであつた。きのうはとても重力が強く、わたしのベッド、すなわち、エンパイアー・ステート・ビルのロビーに敷いたぼろ切れの罫(ねぐら)から、起き上がるのもむずかしかった。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにの引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は (Slapstick, or Lonesome no more? にての Chapter 13 より抜粋するところとして) “ **Six days have passed since I began to write this memoir. On four of the days, the**

gravity was medium — what it used to be in olden times. It was so heavy yesterday, that I could hardly get out of bed, out of my nest of rags in the lobby of the Empire State Building.” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする) とのものとなる)

(続いて直下、訳書『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版)にての 179 ページよりの原文引用をなすとして)

真相は、重力がとほうもなく増大したことにあったのである。

…(中略)…

もちろん、世界のいたるところで、エレベーターのケーブルが切れ、飛行機が墜落し、船が沈み、動力車輛の心棒が折れ、橋が落ちた。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部の原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?にての Chapter 31 より抜粋するところとして) “ **The truth was that the force of gravity had increased tremendously. [. . .] In other parts of the world, of course, elevator cables were snapping, airplanes were crashing, ships were sinking, motor vehicles were breaking their axles, bridges were collapsing, and on and on.**” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする) とのものとなる)

(さらに直下、訳書『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版)にての 180 ページよりの原文引用をなすとして)

最初の猛烈な重力の動揺は一分たらずつづいただけだったが、世界はもう二度と元にもどらなかつた。

…(中略)…

バドワイザーは死んでいた。この馬は立っていようとがんばったのだ。はらわたが下へ落っこちてしまった。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部の原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?にての Chapter 32 より引用するところとして) “ **That first ferocious jolt of heavy gravity lasted less than a minute, but the world would never be the same again.[. . .] Budweiser was dead. She had tried to remain standing. Her insides had fallen out.**” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする) とのものとなる)

(直下、『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版)にての 186 ページよりの原文引用をなすとして)

マンハッタン島は、もうその頃、のどかな海辺の保養地になっていた。あの最

初の重力の動揺で、高層ビルがエレベーターをひきちぎられ、海底トンネルが浸水し、橋という橋がブルックリン橋を除いてぜんぶ崩れ落ちた痛手から、とうとう立ち直れずじまいだったのだ。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※表記引用部の原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?)にての Chapter 33 より引用するところとして) “ **This island was by then a sleepy seaside resort. It had never recovered from that first jolt of gravity, which had stripped its buildings of their elevators, and had flooded its tunnels, and had buckled all but one bridge, which was the Brooklyn Bridge.** ” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる)

以上、引用部をもって小説『スラップスティック』にて執拗に作品世界の重力増大状況が描かれていると示した。

(出典(Source)紹介の部 64(4)はここまでとする)

直上の引用部でもってして『スラップスティック』の作中世界では [重力増大状況が問題となっていること] を指し示したわけであるも、次いで、同じくもの状況が[双子の天才的着想(を中国が応用したこと)に由来する]と臭わされていることを原文引用によって指し示すこととする (c. と振ってのことの典拠を挙げきるために、である)。

出典(Source)紹介の部 64(5)



SOURCE

64(5)

ここ出典(Source)紹介の部 64(5)にあつては

[小説『スラップスティック』にあつて作中頻繁に取り上げられている [重力増大状況] が双子(主人公格の Wilbur Daffodil-「11」 Swain をその片割れとするロックフェラーの血族としての双子)の [結合作用] に由来するところとしてもたらされたらしいと描写されている]

このことを原文引用にて示しておくこととする。

(直下、訳書『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第11刷のもの)の182ページよりの原文引用をなすとして)

あの恐ろしい重力の動揺が、果たして自然現象だったのか、それとも中国の実験だったのかは、この日になってもよくわからない。当時のわたしは、その動揺と、フー・マンチューがイライザとわたしの重力理論を写真にとったこととに、なにかの関係があると考えた。

…(中略)…

その重力論は、とうていわたしには歯が立たなかった。イライザとわたしが頭をつき合わせたときは、遠く離れたときに比べて、たぶん一万倍も利口なのだろう。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部の原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?にての Chapter 32 より引用するところとして) “ **I thought at the time that there was a connection between the jolt and Fu Manchu's photographing of Eliza's and my essay on gravity.[. . .] The paper on gravity was incomprehensible to me. Eliza and I were perhaps ten thousand times as smart when we put our heads together as when we were far apart.** ” (オンライン上より確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる。尚、ここでの引用部がどういう舞台背景を伴ったものであるのかの説明もなしておく⇒(引用部記述は)小説『スラップスティック』の主人公 —ウィルバー・ダフォディル- 11・スワインという人物でニューヨークのマンハッタンはエンパイア・ステイト・ビルの廃墟で日記をしたためているとの設定(先述)を付されたキャラクターにして[(見る者に不快感を与える行為態様で)男女一対の双子のもう片方との結合]をなすことで天才的閃きを發揮できるとの設定(先述)が付されてのキャラクター— が[死別した双子の片割れ](女の方のイライザというキャラクター)の霊廟を中国人大使(フー・マンチューという名が振られているキャラクター)に見せたとの折、その中国人大使が重力理論を収めた理論書を写真に撮って[重力操作装置]の着想を得たのではないかと、このことにまつわる表記となっている。訳書にては『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版)p.174—p. 177 がその記述箇所となる)

(続けて直下、『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版)にあつての186ページよりの原文引用をなすとして)

そして、重力はふたたび不快なものになりはじめていた。もはやそれは衝撃的

な経験ではなかった。もし、事実それが中国人のしわざだとしたら、彼らはたぶんそれによる死傷者や財物の損害を切りつめようという考えで、重力を徐々に強めたり弱めたりする方法を見つけたらしい。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにの引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?にての Chapter 33 より引用するところとして) “ **Now gravity had started to turn mean again. It was no longer a jolting experience. If the Chinese were indeed in charge of it, they had learned how to increase or decrease it gradually, wishing to cut down on injuries and property damage, perhaps.** ” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる)

直上までの原文引用でもってして[重力の増大状況]が[双子の結合による天才的閃き]を中国が利用したことにあるらしいと小説『スラップスティック』作中にて臭わされていることの出典紹介としておく。

出典(Source)紹介の部 64(5)は以上とする

それら内容については後にて再度振り返りもするが、ここまでで(a. から f. と振ってのここのうちの)c. と振ってのこの典拠を挙げ終えたとして、さらに続けもし、

d.

『スラップスティック』(1976)にあっては合体することで[天才的閃き]を呈するとの双子らが一方が片方に先立ち早世するとのかたちで離別を見ることになるが、後に[粒子加速器]([フリーガン]と作中呼称される放棄された加速器)の遺構が幽冥境にする彼・彼女ら双子を「再」度結合させることになったとの筋立てが採用されてもいる。

このことの典拠を挙げておくこととする。

出典(Source)紹介の部 64(6)



SOURCE

64(6)

ここ出典(Source)紹介の部 64(6)にあつては

[小説『スラップスティック』が[結合作用]を呈していた双子らが一端死別するも、粒子加速器(フーリガン Hooligan と呼ばれる放棄された加速器)によって幽冥境にする彼・彼女ら双子が再度結合を見たとの設定が採用されている作品となつてもいる]

とのことを当該の作品よりの原文引用にて示しておくこととする。

(直下、訳書『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版)にあつての 262 ページから 263 ページよりの原文引用をなすとして)

エピローグ

スウェイン医師は、その先を書かずに死んだ。

…(中略)…

スウェイン医師がとうとう書かずに終わったのは、アーバナの電子工学装置のことである。この装置のおかげで、彼は亡くなった姉と心と心をつ結び合わせ、子供の頃のふたりに備わっていた天才を蘇らせることができたのだ。

その存在を知っている少数の人たちから<フーリガン>と名づけられたこの装置は、ありふれた茶色の土管——長さ二メートル、直径二〇センチのそれ——だった。その土管がちょうどある角度で——巨大な粒子加速器をおさめたスチール・キャビネットのてっぺんに置かれていたのである。この粒子加速器は、原子より小さい生き物のための管状の磁性走路で、町はずれのトウモロコシの畑の中を一周していた。そう。フーリガンそのものも、ある意味で幽霊だといえた。なぜなら、その粒子加速器は、電力欠乏だけでなく、加速器の能力に対する熱狂者の欠乏も手伝って、ずっと前から死んでいたからだ。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部の原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?)にての Epilogue より引用するところとして) “ **Dr. Swain died before he could write any more. [. . .] He never got to tell about the electronic device in Urbana, which made it possible for him to reunite his mind with that of his dead sister, to recreate the genius they had been in childhood. The device,**

which those few people who knew about it called "The Hooligan," consisted of a seemingly ordinary length of brown clay pipe — two meters long and twenty centimeters in diameter. It was placed just so — atop a steel cabinet containing controls for a huge particle accelerator. The particle accelerator was a tubular magnetic race track for subatomic entities which looped through cornfields on the edge of town. Yes. And the Hooligan was itself a ghost, in a way, since the particle-accelerator had been dead for a long time, for want of electricity, for want of enthusiasts for all it could do.” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる)

(続けて直下、訳書『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版)にての268ページよりの原文引用をなすとして)

それでもとにかく、スウェイン医師とその姉とは再会することができた。スウェイン医師が、もしできれば土管の中へもぐりこもうとするほど、その親密さの表現は激情的だった。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにの引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?にての Epilogue より引用するところとして) “ **But Dr. Swain and his sister got together anyway, with such convulsive intimacy that Dr. Swain would have crawled into the pipe, if he could.** ” (オンライン上より確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる)

(加えて直下、『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版)269ページよりの原文引用をなすとして)

スウェイン医師は彼の姉に、そちら側にどんな交信装置があるのか、と問うた——やはりイライザも土管の上にまたがっているのか、それともどうしているのか?イライザは、こちらにはなんの装置もなく、あるのは一つの感じだけだ、と答えた。「どういう感じだね?」と、彼はたずねた。「死んでみなくちゃ、わたしの説明を聞いても、わからないでしょうよ」「とにかく話してくれ、イライザ」「ちょうど死んだような感じよ」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにの引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?にての Epilogue より引用するところとして) “ **Dr. Swain asked his sister what sort of communications apparatus there was on the other end — whether Eliza, too, was squatting over a piece of pipe, or what. Eliza told him that there was no apparatus, but only a feeling. "What is the feeling?" he said. "You would have to be dead to understand my description of it," she said. "Try it anyway, Eliza," he said. "It is like**

being dead," she said. ” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする) とのものとなる)

(出典(Source) 紹介の部 64(6) はここまでとする)

d. と振ってのこの典拠を示したことになるとの直近までの引用部には

[加速器遺構フリーガン Hooligan なるものが小説『スラップスティック』の主人公たる双子の片割れ(ウィルバー・ダフォディル-11・スワイン)をして死別した双子のもう片方(イライザ)との[生死両界線をまたいでの再会]をなさしめた]

と表記されているわけだが、彼・彼女ら双子のそうした再会以前に彼・彼女ら双子は[結合作用]をきたして天才的着想を具現化させているとの作中描写がなされている。

その着想のうちのひとつが

[中国に流用されて世界的重力増大傾向をもたらした(「らしい」)重力理論]

であるとの「奇怪な」設定が同作『スラップスティック』では採用されて「も」いる (:先の出典(Source) 紹介の部 64(5)にて邦訳版およびオンライン上より全文確認できるとの原著よりの原文引用をなしているところとして、(再度の引用をなすとして)「あの恐ろしい重力の動揺が、果たして自然現象だったのか、それとも中国の実験だったのかは、この日になってもよくわからない。当時のわたしは、その動揺と、フー・マンチューがイライザとわたしの重力理論を写真にとったこととに、なにかの関係があると考えた」(原著表記:“ I do not know to this day whether that awful jolt of gravity was Nature, or whether it was an experiment by the Chinese.I thought at the time that there was a connection between the jolt and Fu Manchu's photographing of Eliza's and my essay on gravity. ”)との部がそちら「奇怪な」設定の反映箇所となる)。

となれば、である。

[加速器フリーガン] → [双子の結合の再度の実現]

[双子の結合] → [重力作用の世界的増大]

との関係性が(そこまで気づく・気づけもする人間が如何程までにいるかは不分明であるが、)導出できるとのことになる。

そこより a. から f. と分けもしての指し示し事項にあつての e. 、すなわち、

e.

『スラップスティック』(1976)にあつての(c. から d. にて言及したところの)特性は[重力増大状況]と[粒子加速器]が[双子の結合]との側面で結びつけられているがために[加速器によるブラックホール生成]のことも観念させるものでもある(:双子が結合した際に[重力増大状況]につながるアイデアが生まれたとの設定、そして、双子の生死両界をまたいで再結合が[粒子加速器]によって実現されるなどという設定、すなわち、「どうしてこのような意味不明な設定が?」との筋立てが採用されていることに関して「粒子加速器と重力増大状況が際立つてのブラックホールの関係性にまつわる意図的言及がなされているのでは?」と見ることに無理はない)。

とのこの典拠をも挙げたとのことにもなる。

a.

[米国文壇の寵児] として押しも押されもせぬとの立ち位置にあった著名作家カート・ヴォネガットによってもものされ、1976年に刊行されたとの *Slapstick, or Lonesome No More* (邦題)『スラップスティック』という小説作品がある。

b.

上作品『スラップスティック』(1976) にあってはロックフェラーに由来する一対の双子が合体した際に[天才的閃き]が現出するとの(一見にして)奇態なる設定が採用されている。

c.

『スラップスティック』(1976) にあっては双子の合体時に顕在化するとの作中設定が付されての[天才的閃き]が応用されてのものらしいとのかたちで[地球規模で重力が増大を見ているとの状況]に至っているとの描写がなされてもいる(双子の天才的閃きを利用して中国がそういう状況、地球規模の重力増大をもたらす装置を造り上げたらしいとのことが作中にて臭わされている)。

d.

『スラップスティック』(1976) にあっては合体することで[天才的閃き]を呈するとの双子らが一方が片方に先立ち早世するとのかたちで離別を見ることになるが、後に[粒子加速器]([フーリガン]と作中呼称される放棄された加速器)の遺構が幽冥境にする彼・彼女ら双子を「再」度結合させることになったとの筋立てが採用されてもいる。

e.

『スラップスティック』(1976) にあっての(c. から d. にて言及したところの)特性は[重力増大状況]と[粒子加速器]が[双子の結合]との側面で結びつけられているがために[加速器によるブラックホール生成]のことも観念させるものでもある(:双子が結合した際に[重力増大状況]につながるアイデアが生まれたとの設定、そして、双子の生死両界をまたいでの再結合が[粒子加速器]によって実現されるなどという設定、すなわち、「どうしてこのような意味不明な設定が?」との筋立てが採用されていることに関して「粒子加速器と重力増大状況が際立ってのブラックホールの関係性にまつわる意図的言及がなされているのでは?」と見ることに無理はない)。

※【内容それ自体から離れもしての外挿表記としまして】:ここでのそれのように本稿では「頻繁に」文字色と背景色を変えての【出典紹介部】呈示のための表記をなしています。本稿全体の指し示し内容の重大性を顧慮して【後追い可能な典拠】の細部に至るまでの呈示からして必須事項ととらえているからではありませんが、無論にして、後追い「可能」であるだけではなく後追い「容易」である必要もあるとの認識が書き手この身にはございます。にまつわって後追い「容易」性の方をもたらす方式、すなわち、【都度即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認するための方式】を本稿にあっての冒頭 p.2 で細かく紹介しておりますので「頻繁に本稿の典拠内容の確認をなす必要」を感じておられるとの方々におかれましてはそちら本稿 p.2 で案内させていただいております方式を採択いただければと考えます(典拠内容確認を容易・即応的になすとのその紹介方式とは本稿を収めた PDF 文書を別名保存で二ファイル用意し、うち、片方を閲覧用、もう片方を(巻末数ページの出典紹介部一覧表記部「だけ」を印刷して役立てつつもの)出典確認用の電子文書として活用いただくとの方式となりませぬ)

f.

また、小説『スラップスティック』のロックフェラーの血筋の双子の持ち出しようには形態的に(ロックフェラー一門の後押しがあって建設に至ったとの)ツインタワーのことを想起させるような側面が伴っている。他面、「ツインタワーが崩落を見たとの911の事件」と「[通過可能なワームホール](ブラックホールと質的につながるもの)を扱った書として911以前に刊行を見た著作キップ・ゾーン『ブラックホールと時空の歪み』」(との1994年初出の著作)とが時期的に不可解にも結びつくようになっているとのことが——(馬鹿げて聞こえもして然るべきことである中でながら本稿の先立っての部にて詳述してきたところとして)—— この世界には「現実」にある。

とまとめて先に表記していたことであっての a. から e. についての出典紹介をなしたことになる(余すところは f. にまつわる典拠の紹介となるが、それについては続く段にあってなしていくこととする)。

さて、(ここで一端、話の方向性を変えるとして)、直前までにて摘示してきたとおりのことがあることに加えて問題となる小説『スラップスティック』作中において

「双子の着想を利用、[世界的な重力増大傾向をもたらすことになった何らかの機構]を開発したと作中臭わされている国家に属する中国人がそうした[重力操作機構]の開発前から人為的実験によって[小型化]の一途を辿り、あまりにも極小化したために、[不可視領域の存在]となっており、彼ら「極微の」中国人らが後に世界に災厄を引き起こした[緑死病]との病の病因となっている(とかつて[重力の増大をもたらす装置の開発]に繋がったようであると描写される[双子の結合過程]によって特定された)」

などこのこれまた「奇怪な」作中設定が見受けられることの紹介をなしておく(：『スラップスティック』作中では[緑死病]という死に至る奇病が猛威を奮っているとされ、その原因が何かと言え、[超極小化した中国人らを人々が気付かずに吸い込んでおり、そのために(人間を吸い込んだことに由来する)肺疾が引き起こされている]とのことに求められている、との「何故だ?人口爆発を揶揄しているだけで済むのか?」と思いたくなるような[滑稽]設定が採用されている)。

同じくものことについては原著版および邦訳版より以下にての表記を挙げておくことにする。

出典(Source)紹介の部 64(7)



SOURCE 64(7)

ここ出典(Source)紹介の部 64(7)にあつては

[『スラップスティック』作中にて中国人が人為的実験によって[小型化]の一途を辿り、あまりにも極小化したために、[不可視領域の存在]となつており、彼ら「極微の」中国人らが後に世界に災厄を引き起こした[緑死病]との病の病因となつている(そして、そのことが[双子の結合]作用によって「説明として」特定された)と描写されていること]

の典拠を当該作品よりの原文引用とのかたちにて挙げることにする。

(直下、邦訳版『スラップスティック』(現行書店にて流通を見ている早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第11刷のもの)にての216ページの内容よりの原文引用をなすとして)

しかし、万事がしごく順調に運んでいるそのとき、アメリカ人が、たとえその国は破産し、崩壊に瀕していようと、これまでのいつよりも幸福に暮らしているそのとき、何百万という人びとがばたばたと死にはじめた。ほかのたいいていの土地ではくアルバニア流感で、このマンハッタンではく緑死病で。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにての引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?にての Chapter 39 より引用するところとして) “ **But then, just when everything was going so well, when Americans were happier than they had ever been, even though the country was bankrupt and falling apart, people began to die by the millions of "The Albanian Flu" in most places, and here on Manhattan of "The Green Death."** ” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる)

(続けて直下、邦訳版『スラップスティック』(現行書店にて流通を見ている早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第11刷のもの)にての268から269ページの内容 一加速器遺構を通じて片方がもう片方と死別した後に双子が生死両界を分かちて再開することになったとの部(先だつて関連するところを引用なしたとのフーリガン Hooligan と振られての加速器遺構にまつわたつての記述部)の内容一 よりの原文引用をなすとして)

スウェイン医師は彼女に、生者たちがかかえている不治の病の問題を語つた。ふたりが一つになつて考えれば、その謎を解くのは赤子の手をひねるよりやさしかった。その解答とはこうである——流感のバイキンは火星人であるが、彼らの侵略は生存者の体内にある抗体によって撃退されるらしい。すくなくとも、現在のところ、流感はおさまっているからだ。緑死病の方は、これに反して、極微の中国人が原因である。彼らは平和を愛し、だれにも危害を加える意図はない。にもかかわらず、ふつうの大きさの人間が彼らを吸いこんだり、飲みこんだりすると、つねに致命的な結果が起きるのだ

(訳書より引用部はここまでとする 一※一)

(※表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにての引用テキストでもって

検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?にて Epilogue より引用するところとして) “ **Dr. Swain told her about the problems the living had been having with incurable diseases. The two of them, thinking as one, made child's play of the mystery. The explanation was this: The flu germs were Martians, whose invasion had apparently been repelled by anti-bodies in the systems of the survivors, since, for the moment, anyway, there was no more flu. The Green Death, on the other hand, was caused by microscopic Chinese, who were peaceloving and meant no one any harm. They were nonetheless invariably fatal to normal-sized human beings when inhaled or ingested.** ” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする) とのものとなる)

(**出典(Source) 紹介の部 64(8)**はここまでとする)

以上のこと、

[『スラップスティック』作中では中国人が人為的実験によって[小型化]の一途を辿り、あまりにも極小化したために、[不可視領域の存在]となっており、彼ら「極微の」中国人らが後に世界に災厄を引き起こした[緑死病]との病の病因となっている](とのことが加速器遺構を通じての双子の結合プロセスによって特定されるに至った)

と描写されていることがどうして問題になるのか。

その点、[緑死病]については『スラップスティック』原著表記でザ・グリーン・デス The Green Death と表されているが、そちら名称からは歴史的なペストの呼称のこと、すなわち、

[黒死病:ザ・ブラック・デス](the Black Death)

のことが想起されもし、the Black Death 黒死病あらため the Green Death グリーン・デスの原因(人間極微化に伴う原因)となっている中国が

[双子の着想を利用しての世界的な重力増大傾向をもたらすことになった何らかの機構]

の元凶となっているようにも設定付けられていることから、

[黒と結びつく死] ↔ [重力増大]

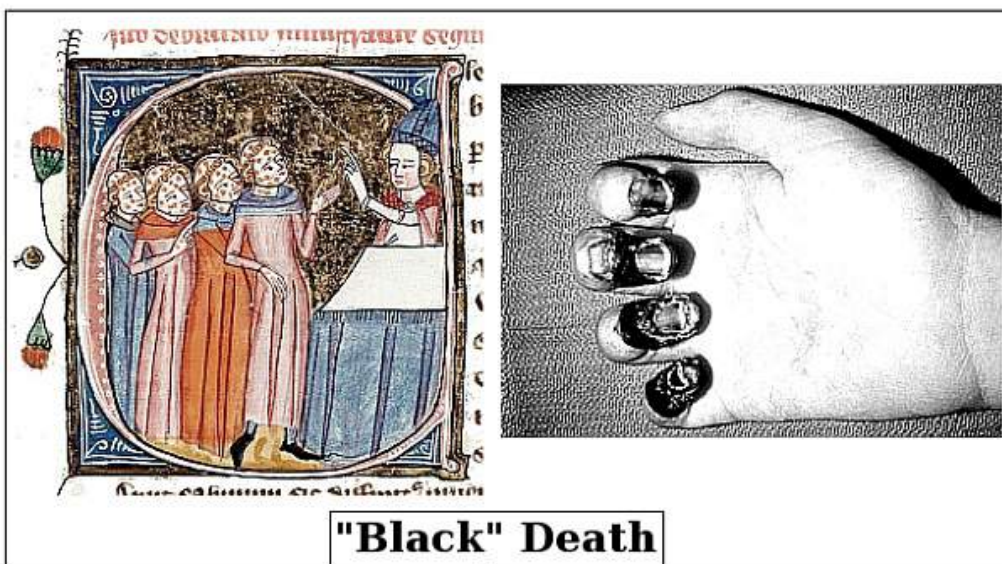
との観点で

[重力の怪物たる「ブラック」ホール Black hole]

のことが想起されるとのことがありもする(それにつきそうした話が別段、[飛躍]を含んだことにならないような側面が小説『スラップ・スティック』には伴っているから問題になる)。

加えて、[緑死病]の原因たる[極微サイズ]に圧縮されている中国人 —— 作中にて重力増大装置を造つたらしいと臭わされている国の住人ら —— にまつわる作用機序からは極めて僅少な領域に極大なる質量が集中しているとの空間の穴、「ブラック」ホールが人間を分解しながら吸い込んでいく(ある意味で極微化しながら吸い込んでいく)ことを想起させる(後の段でも出典挙げて紹介することにするが、地球(に相当する質量)をブラックホール化するには地球を1cmまでダウンサイジング・圧縮する必要があるとされることを想起させる、でもいい) とのこともある —— (述べておくが、『スラップスティック』に認められる[重力増大状況]が(先述のように[双子の結合]を介して) [加速器] と結びつ

けられているようなものでなかったならば、さして問題視するようなことではなかったか、とも考えてもいる。だが、[加速器]が間に入っているため、[加速器によるブラックホール生成問題]との観点からもその寓意性が問題になりもする(ゆえに捨て置けない)と見ている。その点、[加速器によるブラックホール生成]が小説『スラップスティック』作者たるカート・ヴォネガットの時代の人間の知見(Slapstick, or Lonesome No More! 原著が米国にて世に出た年たる 1976 年、そして、同年より執筆期間を顧慮しての若干遡っての時期)には想起できるようなものではなかったとの指摘がなせるよう「にも」なっており(同じくものことにまつわっての本稿前半部の内容を振り返っての復習も後の段になす)、それゆえ、[作家の尋常一様ならざる先覚性が介在している]との観点で問題となるのである) ——) 。



"Black" Death

Vonnegut's Slapstick

Green Death

" It is about this terribly old man in the ruins of Manhattan, you see, where almost everyone has been killed by a mysterious disease called "The Green Death." " ——Kurt Vonnegut, Slapstick, [Prologue]

" The Green Death, on the other hand, was caused by microscopic Chinese, who were peace-loving and meant no one any harm. They were nonetheless invariably fatal to normal-sized human beings when inhaled or ingested. " ——Kutr Vonnegut, Slapstick, [Epilogue]

" I do not know to this day whether that awful jolt of gravity was Nature, or whether it was an experiment by the Chinese. I thought at the time that there was a connection between the jolt and Fu Manchu's photographing of Eliza's and my essay on gravity. " ——Kutr Vonnegut, Slapstick, [chapter 32]

上掲図の上の段は英文 Wikipedia [Black Death] 項目にて掲載されている画像、著作権の縛り無きこと、現行、明示されている画像を挙げたものとなる(それら上の段の図らにあつての左側の方は 14 世紀英国にて編纂された百科事典 Omne Bonum 掲載の中世にてのペスト罹患者らを描いたとの図葉、右側の方はペスト罹患者の[進行ペスト壊死症状]を写し撮ったとの写真となる)。

それら図らに見るようにペストに冒されると
[全身が黒色を帯びて死地を歩む]
ことになる (:同じくものことについては英文 Wikipedia [Black Death] 項目にて(現行記載内容を引用するところとして) “ **Swedish and Danish chronicles of the 17th century described the events as "black" for the first time, not to describe**

the late-stage sign of the disease, in which the sufferer's skin would blacken due to subepidermal hemorrhages and the extremities would darken with a form of gangrene, acral necrosis, but more likely to refer to black in the sense of glum or dreadful and to denote the terror and gloom of the events.” (訳として)「17世紀にてのスウェーデンおよびオランダの年代記にあつてはペストの猖獗それ自体をもってして初めて[黒]との言葉と結びつけたのだが、それについては[病の後期段階にて罹患者表皮が皮下出血のために暗色を呈し、罹患者四肢が壊疽とのかたちで(黒色を呈して)壊死していくとのありよう]について言及したというよりもむしろ悪疫猖獗に対する恐怖・陰鬱さとの意味合い、消沈ないし恐れを示すとの心中をもって[黒]との言葉を使った節がある」(引用部訳はここまでとする)と表記され、他面、和文ウィキペディア[ペスト]項目にての[ペスト敗血症]の節にて、多少、英文ウィキペディアと内容を異にしながらも、(原文引用するところとして)“ペスト菌が血液によって全身にまわり敗血症を起こすと、皮膚のあちこちに出血斑ができて、全身が黒いあざだらけになって死亡する。ペストのことを黒死病と呼ぶのはこのことに由来する”(引用部はここまでとする)と表記されているようなどころともなる)。

上掲図にあつての下段の[英文テキスト原文引用による関係性摘示部]の方については本稿のここまでの流れを把握しているとの向きには説明不要のことか、とは思うが、カート・ヴォネガット小説『スラップスティック』に(黒死病ことブラック・デスをもじつての)グリーン・デスこと[緑死病]なる架空の病が登場し、そちらが[小型化した(マイクロスコープティック、視認不可能なまでに小型化した)中国人が吸引されて彼らが吸引者の肺に悪影響を及ぼして死に至らしめる病気である]と説明されていること(そうした奇異なる説明に至るまでのプロセスとしてこれまた奇異なることに【死別した双子らの加速器遺構を介しての生死両界をまたいでの再結合によってそうした問題特定がもたらされた】などとの作中設定が採用されてもいる)、また、その[緑死病]の原因たる中国が作中世界にて[世界規模で重力を増大させる機構]を開発した国家であるらしいと描写されているとのこと、それらのことにまつわる原著記述を引用なしのものとなる(：ポイントは「超コンパクトな存在へと国民を圧縮した国家」が「ブラック・デス」をもじつての「グリーン・デス」の原因となっている存在にして、なおかつ、「世界規模の重力増大をもたらしたらしい存在」と描写されていること(そちら描写には加速器遺構を介しての双子の再結合が関わる)、そのことに加速器と重力の増大を結びつけている小説にあつての【加速器による重力の怪物たるブラックホール——膨大な質量を極小の点に圧縮しての「ブラック」ホール——の生成問題】に対する先覚的言及がさらに見出せるように感じられるとのこと、そして、(続く段にて本稿冒頭部を振り返つての表記もなす所存であるところとして)、「奇怪なことに、」カート・ヴォネガットがSlapstickを世に出した1976年という折柄には加速器によるブラックホール生成リスクのことなどが世間的にはなんら取り上げられて「いなかった」し、そのような着想が想起されるところではなかったと判断できるようになっているとのことである——尚、そうしたことらに輪をかけて奇怪であると述べざるをえぬこととして(委細については続く段にて詳述することとなるが)「カート・ヴォネガットという作家については[かの911の事件の予言的言及]までをもなしていると判じられる作家ともなっており、そして、[かの911の事件]に関してはブラックホール関連の著名著作からしてその前言をなしていたと指摘できるようになっている」とのこともが存することを本稿にての続いての段にてさらに摘示していくこととなる——)。

さて、[緑死病]と[黒死病]の関係について言及したところで、次いで、先述したところの問題点 a. から問題点 f. にあつての、

f.

また、小説『スラップスティック』のロックフェラーの血筋の双子の持ち出しようには形態的に(ロックフェラー一門の後押しがあって建設に至ったとの)ツインタワーのことを想起させるような側面が伴っている。他面、「ツインタワーが崩落を見たとの911の事件」と「[[通過可能なワームホール](ブラックホールと質的につながるもの)を扱った書として911以前に刊行を見た著作キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』」(との1994年初出の著作)とが時期的に不可解にも結びつくようになっているとのことが——(馬鹿げて聞こえもして然るべきことである中でながら本稿の先立っての部にて詳述してきたところとして)——この世界には「現実」にある。

このことについての解説を講じる。

同じくもの点に関しては —まずもって述べるが—

「現実世界にてのツインタワーを内包する旧ワールド・トレード・センターは[[ロックフェラーの一族が造営旗振りをなしたマンハッタンの一画]としてつとに知れ渡っているとのことがある(直下にて出典を紹介する)。

対して、小説『スラップスティック』の架空世界に登場する[[ロックフェラーに由来する双子]は[[ニューヨークと縁深き存在となり、うち、片方はマンハッタンの廃墟で日記をものしている存在となっている]との描写がなされている([出典 (Source) 紹介の部 64(3)]にて『スラップスティック』主人公の双子がニューヨークにて生を受けたとされる部を引用したが、続いての段にては『スラップスティック』の内容が綴られているのがマンハッタンであるとの設定が採用されていることについての出典呈示もなしておく)。

とすれば、[[**ロックフェラーの一族**・[[**マンハッタン**]]と接合する双子]とのことで話がつながる(さらに述べれば、現実世界のワールド・トレード・センターにてのツインタワーが遠望すれば、数字の「11」のように見える外観を呈しているのに対して『スラップスティック』に登場している双子らのうち、男のほうは[[**ウィルバー・ダフォディル-11・スワイン**]との名を付されている、「11」と数値が付けられているとのことも類似性にあつての小さなところとしてあるように見えもする)」

このことがある。

上記のことにつき、

[現実世界の[[**双子の塔**]]ことツインタワーはロックフェラー関係者の旗振りによって造営されたものである]

この点についての出典紹介をなしておく。



SOURCE

64(8)

ここ出典(Source)紹介の部 64(8)にあつては

[現実世界の [双子の塔] ことツインタワーはロックフェラー関係者の旗振りによって
造営されたものである]

とのことについて(常識世界の常識的言い分のみが記載されている媒体であるとの意での)「堅い」典拠に依拠しての出典紹介をなすこととする。

(直下、[The World Trade Center: A Timeline] とのタイトルでオンライン上に流通している
The New York Times の記事(表記記事タイトルの検索エンジン上での入力で容易に特定で
きるもの)の記述を(経緯示すのに十分と判断した部だけ)掻い摘まんで引用をなすとして)

Oct. 31, 1955

Over lunch, Robert Moses suggests to David Rockefeller that his plans to build a new headquarters for Chase Manhattan Bank on Cedar Street could be "a disaster" unless he can stop the flight of other businesses from Lower Manhattan to Midtown.

[...]

Jan. 27, 1960

A proposal for a World Trade Center, citing a \$250 million cost, is put forth by David Rockefeller's Downtown-Lower Manhattan Association, and suggests the Port Authority should study the plan.

[...]

March 10, 1961

The Port Authority issues a report to Governors Nelson Rockefeller of New York and Robert Meyner of New Jersey strongly backing the concept of a World Trade Center that would coordinate area activities in business competition and global trade. The report says "only a public agency" could handle the job and envisions a "World Trade Mart rising 72 stories." Estimated cost of the project: \$355 million.

[...]

Feb. 8, 1966

New Mayor John Lindsay asks the Port Authority to delay construction until he can arrange a better deal for the City than that worked out by his predecessor,

Robert Wagner. The estimated cost of the Trade Center project has risen to \$575 million. The cost eventually rises to over \$1 billion.

[...]

Aug. 5, 1966

Construction of the towers begins, as a permit for the closing of West Street is issued by the city the previous afternoon. A temporary ramp over West Street is planned to allow traffic to pass during the construction.

(拙訳として)

「1955年10月31日:ロバート・モーセが昼食中、デービッド・ロックフェラー(訳注:1960年よりチェースマンハッタン銀行頭取に就任していた有力者)にチェースマンハッタン銀行の新たな中枢拠点を構築するとの同男デービッド・ロックフェラーのプランは同男がロウアー・マンハッタンからミドルタウンへのビジネス流出を止めることができなければ破滅的結果を招くことになるだろうとの提議をなした。

...(中略)...

1960年1月27日:2億5千万ドルのコストを要するとのワールド・トレード・センター建設計画がデービッド・ロックフェラー率いるダウタウン・ロウアー・マンハッタン・アソシエーションによって提出され、ニューヨーク・ニュージャージー港湾会社(ポート・オーソリティ)は同計画を検討するように求められた。

...(中略)...

1961年3月10日:ニューヨーク・ニュージャージー港湾会社(ポート・オーソリティ)はニューヨーク知事ネルソン・ロックフェラー(訳注:デヴィッド・ロックフェラーの兄。1959年から1973年にかけてマンハッタン島を包含するニューヨーク州の知事職に長期に渡って就く)とニュージャージー知事ロバート・メイナーに対して地域ビジネス競争力および国際商取引と調和するワールド・トレード・センター計画を強くも支持するとの内容の報告書を提出する。同報告書にては公的機関のみが取り扱えるようなところとしてワールド・トレード・センターは計にして72階、推定予算3億5千万5百万ドルのものになるとのヴィジョンが示されていた。

...(中略)...

1966年2月8日:新市長ジョン・リンゼイはニューヨーク・ニュージャージー港湾会社(ポート・オーソリティ)に彼の前任者ロバート・ワグナーにて同意されていた建設計画よりニューヨーク市側にとってより望ましきものへと調整されるまで建設計画は延期されるべしとの要求を出した。ワールド・トレード・センターの累計予測コストは5億7千万500万ドルに増額していた。同コストは最終的に10億ドルに跳ね上がった(訳注:当時のブレトンウッズ体制にての固定相場制では1ドル360円であったわけであるから双子の塔を中心とする一面に「当時の円換算で」3600億円以上が投じられたように解される)。

...(中略)...

1966年10月5日:市側に前日午後にて西側高速道路(ウェスト・ストリート)の封鎖許可が発せられツインタワーの建設がはじまる。建設期間中、ウェスト・ストリート越しの臨時ランプをして通行素通りなさしめることが計画される」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source) 紹介の部 64(8)**はここまでとする)

以上、ご当地のマスメディア、ニューヨークタイムズに紹介されているように[双子の塔](ツインタワー)を包含するワールド・トレード・センターの一面の建設計画はロックフェラー(の中のデヴィッド・ロックフェラー)の強い押しで推進を見、また、一時、ニューヨーク州知事(ニューヨーク市市長と混同しないこと)であったネルソン・ロックフェラーの追認を受けて実現へと向かっていったものであった(とオンライン上より確認できる主要メディア由来の情報媒体よりの原文引用でもって指し示せる)。

従って、カート・ヴォネガット『スラップスティック』(1976年)のロックフェラーの血筋の双子よりは、そう、ツインタワーのことが想起されることになる、というわけである(さらにその双子については[ニューヨーク・マンハッタンとツインタワーよろしく結びついている双子であった]との設定が見てとれることも下にて引用なして指し示しておくこととする)。

小説『スラップスティック』の作中で主軸をなすのは

[ロックフェラーの出の双子の片割れ](たるウィルバー・ダフォディル-11・スワインという人物)

とあいなっているわけだが、その[ロックフェラーの出の双子の片割れ](たるウィルバー・ダフォディル-11・スワインという人物)がマンハッタンで綴っているのが小説『スラップスティック』の筋立てであるとの設定「も」が採用されている。その典拠となるところを下に挙げておく。

出典(Source)紹介の部 64(9)



SOURCE

64(9)

ここ出典(Source)紹介の部 64(9)にあつては、

[小説『スラップスティック』に登場するロックフェラーに所縁ある双子らが(ロックフェラーと結びつくツインタワーがかつて屹立していた)[マンハッタンの地]と当該小説作中にて強くも結びつけられている]

とのことの典拠を原文引用にて示しておくこととする。

(直下、『スラップスティック』(早川書房ハヤカワ文庫版)31から34ページよりの原文引用をなすとして)

さて、マンハッタンの廃墟に、おそろしく年を食った老人がいた、としてほしい。
そこではほとんどの人びとが、<緑死病>と呼ばれる謎の病気で死に絶えた

のだ。この老人は、彼の孫でメロディという名の、文盲で、よたよたした、妊娠中の少女と暮らしている。この老人はいったい何者か?どうやらわたし自身らしい——老いを実験しているわたし自身。メロディとは何者か?わたしの記憶に残る姉のすべてではないかと、そんな気もした。

…(中略)…

老人はいま自伝を書いているところである。

…(中略)…

わたしは元アメリカ合衆国大統領である。史上最後の大統領であり、最も長身の大統領であり、ホワイトハウス在任中に離婚した唯一の大統領でもあった。わたしはエンパイア・ステート・ビルの一階に住んでいる。同居人は、一六歳の孫娘のメロディ・オリオール・2・フォン・ピータズウォルドと、その恋人のイザドア・ラズベリー・19・コーエン。この三人で、ビルを独占しているわけだ。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにの引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(Slapstick, or Lonesome no more?にての Prologue の部および Chapter 1 の部より引用するところとして) **“ It is about this terribly old man in the ruins of Manhattan, you see, where almost everyone has been killed by a mysterious disease called "The Green Death." He lives there with his illiterate, rickety, pregnant little granddaughter, Melody. Who is he really? I guess he is myself — experimenting with being old. Who is Melody? I thought for a while that she was all that remained of my memory of my sister. [. . .] The old man is writing his autobiography. [. . .] I am a former President of the United States of America. I was the final President, the tallest President, and the only one ever to have been divorced while occupying the White House. I inhabit the first floor of the Empire State Building with my sixteen-year-old granddaughter, who is Melody Oriole-2 von Peterswald, and with her lover, Isadore Raspberry-19 Cohen. The three of us have the building all to ourselves.”** (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる)

(**出典(Source) 紹介の部 64(9)**はここまでとする)

上の引用部でもってして『スラップスティック』という作品が

[ニューヨーク市で生まれ、住民が[緑死病]で死に絶えたとのことであるマンハッタンにて[ロックフェラーの出の双子の片割れ]がエンパイア・ステート・ビルの廃墟でものしている物語であるとの体裁がとられている作品]

となっていることを指し示した(以上のように書くと、さも重厚で奥が深い小説と思われるかもしれないが、『スラップスティック』という作品が [毒が効いた軽妙な語り口(多くの猥雑表現も用いられている)の小説] となっているとのことも申し添えておく)。『スラップスティック』(1976) がものされる前にニューヨーク・マンハッタンにてロックフェラーの人間のやりようが強く作用して[双子の塔]を含む一画の造営計画

がスタートを見ていたとのことがあり([出典(Source)紹介の部 64(8)])、他面、『スラップスティック』は[ニューヨークのマンハッタンと結びついたロックフェラー由来の双子の記録]との体裁をとっている作品となっているわけである。

(尚、強調しておくが、
「筆者はロックフェラーであろうとなんであろうと[システムの寵児としての代替性の人間ら]がこの世界の悲惨の因であるとする視点を持っていないし、そうした目立つ者たちを「単体で」この世界の悲惨の因であると強調するような——[真実を「それ自体の内容で」晦ますための煙幕]というより[真実に対する探索を「物量作戦的散布で」困難たらしめるノイズ]の供給者となっている——陰謀論者風情(多く[相応の者]だろうと見る存在ら)には何の共感も持っていないとの人間でもある。また、そうした陰謀論者由来の塵(ごみ)のようなものを(表向き)産業として供給させられている者達にも辟易させられているとの人間「でも」ある))

以上のこと(ツインタワーよろしく『スラップスティック』に現われている双子がマンハッタンに地理的親和性が高いロックフェラー由来の双子であるとの設定を有しているとのこと)に加えて、

f.

また、小説『スラップスティック』のロックフェラーの血筋に属する双子の持ち出しようには形態的に(ロックフェラー一門の後押しがあつて建設に至ったとの)ツインタワーのことを想起させるような側面が伴っている。他面、「ツインタワーが崩落を見たとの911の事件」と「[通過可能なワームホール](ブラックホールと質的につながるもの)を扱った書として911以前に刊行を見た著作キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』(との1994年初出の著作)とが時期的に不可解にも結びつくようになっているとのことが——(馬鹿げて聞こえもして然るべきことである中でながら本稿の先立っての部にて詳述してきたところとして)——この世界には「現実」にある。

とのことの後半部、

「[ツインタワーが崩落を見たとの911の事件]と「[通過可能なワームホール](ブラックホールと質的につながるもの)を扱った書として911以前に刊行を見た著名著作」とが結びつくようになってもいるとのことが——(馬鹿げて聞こえもして然るべきことである中でながら本稿の先立っての段にて詳述してきたところとして)——「現実」にある]

について(本稿従前内容を振り返りもしての)解説を講じておくこととする。

それにつき、

「[ツインタワーが崩落を見たとの911の事件]と「[通過可能なワームホール](ブラックホールと質的につながるもの)を扱った書として911以前に刊行を見た著名著作」とが結びつくようになってもいるとのことが「現実」にある]

とのことはより噛み砕いても表せば、次のようなこととなる。

(「[通過可能なワームホール(ブラックホールと質的につながるもの)をテーマとして扱った BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』と題名付されての著作(1994

年初出)と[2001年9月11日のツインタワー崩落事件]の間には次の通りの関係性が存する)

(直下、従前表記の振り返りをなすとして)

物理学者キップ・ソーン (Kip Thorne) の手になる、
『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』
という著作にあつては
[通過可能なワームホールにまつわる思考実験]
に関わるところで直下呈示の全ての要素が具現化を見ているとのことがある。

[ソーンは自著『ブラックホールと時空の歪み』にて [「双子の」パラドックス] にまつわるシミュレーション、[パサデナにて「空間軸上の」始点を置くワームホールタイムマシン生成挙動] たるシミュレーションに言及する前に「また別の」思考実験、[パサデナを走行する自動車の上で爆竹を順次爆発させるとの設定の思考実験] を —— 双子のパラドックス (上述のように1911年に提唱された概念) に通ずる時間の相対性の説明との絡みで—— 引き合いに出すとのことをなしている。そこにいう他の思考実験にあつて「も」認められる [パサデナ] とは (繰り返すが) 郵便番号「91101」が最も若い番号 (地区にての筆頭郵便番号) として割り振られている一画となる。であるから、[通過可能なワームホール] にまつわる思考実験の議論の前提として持ち出されている思考実験からして [「双子の」パラドックス (1「911」年提唱)]、[パサデナ (空間軸上の開始ポイントで郵便番号にして91101から地番表記されているとの一画)]、[(車上) 爆竹の「順次」起爆 firecrackers detonation] との観点で二〇〇一年九月一日に起こったツインタワー崩落事件 (「時間差を呈して」崩落したツインタワー以外に計七棟のビル群がワールド・トレード・センターにて崩れ去った事件) のことを想起させるとのことがある]

[先述のように (ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にあつての) パサデナを始点とする —— 郵便番号91101ではじまる地域区画を始点とする —— シミュレーション (思考実験) は [双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動] として言及されているものであるが、同じくものソーン著作 (原著1994年刊行) ではその思考実験開始年次につき [2000年1月1日午前9時] との明示がなされている (: ややこしいととらえられるところだろうが、1994年に刊行の書籍の中で双子のパラドックス (1911年提唱) を応用しての思考実験がパサデナ (地番91101ではじまる地区) を「空間軸上の」始発点にし、なおかつ、2000年1月1日9時を「時間軸上の」始発点として開始されたとの設定が採用されているわけである) 。その開始年次、2000年1月1日午前9時につき時間の単位として若い順番、[時刻→日付→年次] との順番で配置するとの一般的で「はない」方法で並べかえすと「9」「1」「1」「2000」とのかたちとあいなるものである。かの911の事件の発生時 (「9」「1」「1」「2000」) と差分が1年しかない日付け表記を意識させる数値が出てくる —— それ単体だけについて述べれば、牽強附会 (こじつけがましき論法) と見做されかねないだろうが、ソーン著書の兼ね合いでは [パサデナ郵便番号問題] [双子のパラドックスにまつわる意味的問題] が全く同じところで問題となっていることに留意すべきである ——]

[直近にて言及のようにソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』にて取り上げられる [双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動] の開始時期は2000年「1月1日午前9時」であるとされているわけだが、2000年という時期は [2000年紀のはじまり] (ニュー・ミレニアムの開始時期) として [2001年] と混同されるとの一般的理解が存し、その点について扱った科学読み本 —— チャールズ・サイフェ Zero: The Biography of a Dangerous Idea 『異端の数ゼロ』 —— よりの引用も本稿の先の段でなしているとのことがある。そして、その2000年に原著が刊行されたその問題となる他著作、2000年と2001年という年度が [どちらがニュー・ミレニアムの始点か] との観点で混同されているとのことと言及しているとの著作 —— チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ』 —— からして911の事件が発生する前よりブラックホールとの言葉を [グランド・ゼロ] と結びつけているとのことをなしているとの著作となり、また、キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』に挿絵提供しているのと同様のイラストレーターの手になる独特な画風のイラストレーションを [通過可能なワームホール絡みの図像] として挙げているとの著作とすらなっている (であるからあまりにもできすぎている) 。その点も加味して、キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』の時間の単位を若い順に挙げての「9」「1」「1」「2000」とのワームホール・ゲート構築開始時期は「9」「1」「1」「2001」と混同されるものとしての重み付けをなすべきである —— 片方で「9」「1」「1」「2000」と結びつく日付け表示がなされているかと思えば、それと同じイラストレーターの手による挿絵を [同じくものトピック] にまつわる挿絵 (通過可能なワームホールにまつわる挿絵) として採用しているとのもう一方の他の著作が「2000年と2001年のニュー・ミレニアム始点としての差分は曖昧模糊としている」とのことを述べている著作であるとのこと、その意味を重んずべきである ——]

まとめれば、

「問題となる 1994 年初出の(幅広く流通しての書籍化を見ている)科学解説書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』では [通過可能なワームホール; traversable wormhole] にまつわる思考実験が掲載を見ており、まさしくものそちら思考実験にあつての [空間軸上の始点となるポイント]、そして、[時間軸上の始点となるポイント]、その双方で [先に発生した 911 の事件を想起させる数値規則] が用いられており、かつまた、そちら思考実験で用いられるメカニズムからして [「1911 年に提唱された」双子のパラドックス]、要するに、[911 と双子を連想させるもの] となっている。だけではない。そちら思考実験、[通過可能なワームホール] にまつわる思考実験のことが叙述される前の段で同じくもの 1994 年初出の著作『ブラックホールと時空の歪み』にあつては他の思考実験のことが挙げられており、その実験(通過可能なワームホールのタイムマシン化に向けての応用の前提となる[時間の相対性]のことを説明するために挙げられている思考実験)からして [空間軸上の始発点] を [地番スタート番号との兼ね合いで 911 と結びつく地域] に置いており、また、同実験、[時間差爆発] を取り扱っているものともなる ([911 との数値] と [時間差爆発] との兼ね合いでかの 911 の事件を想起させもする)。

加えて、である。そうもした思考実験らを掲載している著作とまったく同じテーマ(通過可能なワームホール)をまったく同じイラストレーターになるところとして扱っている「他の」著作 Zero: The Biography of a Dangerous Idea 『異端の数ゼロ』からして [911 の事件とブラックホールの繋がり合い] を想起させるものとなつてもいる (2001 年に 911 の事件が発生する前、2000 年に世に出た「他の」著作からしてそうしたものとなつている) (細かくは本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 28](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 33-2](#) を包摂する原著および訳書よりの原文引用なしつつもの解説部を参照されたい)

(従前内容を振り返つての表記はここまでとする)

これにて

f.

また、小説『スラップスティック』のロックフェラーの血筋に属する双子の持ち出しようには形態的に(ロックフェラー一門の後押しがあつて建設に至つたとの)ツインタワーのことを想起させるような側面が伴っている。他面、[ツインタワーが崩落を見たとの 911 の事件] と [「通過可能なワームホール」(ブラックホールと質的につながるもの)を扱った書として 911 以前に刊行を見た著作キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』] とが結びつくようになってもいるとのことが —— (馬鹿げて聞こえもして然るべきことである中でながら本稿の先立つての段にて詳述なしてきたところ

として)—— この世界には「現実」にある。

とのことについての解説を終える。

さて、最前までの流れにて(先にて「指し示しが必要な要素。」と格別にアルファベット振っていたところの) a. から f. のことらについての説明「兼」出典紹介をなしてきたのだが、さらにもって、

「重力が非常に弱い力となっている」

とのことについて「も」下にて典拠挙げて紹介しておく。

出典(Source)紹介の部 64(10)



SOURCE 64(10)

ここ出典(Source)紹介の部 64(10)にあつては「重力が非常に弱い力である」とされることについて、その解説のなされようを端的に引いておくこととする。

より具体的には(本稿で度々、その内容を取り上げていたとの)紐理論の大家として知られるレオナルド・サスキンドの手になる著作 The Black Hole War: My Battle with Stephen Hawking to Make the World Safe for Quantum Mechanics『ブラックホール戦争』(邦訳版は早川書房が版元となる書籍/ブラックホールにまつわる理論の闘争の経緯を当事者が述懐しているとの色彩強き書)が筆者の目につくところにあつたのでそこにての記述を引いておくこととする。

(直下、邦訳版『ブラックホール戦争』p.30よりのワンセンテンス引用をなすとして)

意外かもしれないが、重力は非常に弱い力である。重量挙げの選手や高跳びの選手は違う感じ方をするかもしれない。だが、簡単な実験で、重力がどんなに弱い力かを示すことができる(以下略)。

(引用部はここまでとする)

(続けて直下、邦訳版『ブラックホール戦争』p.32 よりのワンセンテンス引用をなすとして)

重力は電気力や磁力と比べると非常に弱い。しかし重力が非常に弱いなら、なぜ私たちは月までジャンプできないのだろうか?答えはこうだ。それは地球の巨大な質量(6×10^{24} 乗キログラム)が簡単に重力の弱さを補ってしまうのだ。しかしそれほどの質量があっても、地球の表面からの脱出速度は光速の1万分の1に満たない。

(引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部 64(10)**はここまでとする)

以上のように本来的に微弱なる力であるとされている重力、その重力を立てられないほどに地球規模でもって強くもする(ときに人畜を殺しもし、建物らを倒壊させるとの按配で強くもする)との機構が—(具体的機序に関する説明一切なくに)— 描かれているのが『スラップスティック』という小説となる(：つい先程の**出典(Source)紹介の部 64(4)**にて a. から f. に分けての流れの中での c. の段についての原文引用による典拠紹介をなしたところとしてそうもなっている)。そこに相応の寓意性を見て取るのは易い(と筆者としては強調したい)。

重力の世界的増大状況 — [双子の結合] (後に[加速器遺構]によって生死両界をまたいでの再結合がなされたなどと描写される前の生前の[双子の結合]) によって得られた天才的閃きに帰因するといったかたちで描写される重力の世界的増大状況— を描くような問題となる小説の[設定]に見る特殊性について言及したところで

[加速器による(重力の怪物たる)ブラックホール生成のことが顧慮されだしたのが何時頃なのか]

について振り返っての表記をなしておく。

[小説『スラップスティック』(1976) と [加速器によるブラックホール生成可能性にまつわる理論登場] の先後関係について]

重力については[余剰次元理論]というものが 1998 年にあって顧慮されるに至るまでは[プランクエネルギー]という歴大なエネルギーを極小領域に一点集中・投下しなければ、それ(重力)の増大がブラックホールの生成をなすようなものとしてもたらされることはないと考えられていた(と幅広くも指摘されている)とのことがある。

同じくものことに関しては本稿の**出典(Source)紹介の部 2**にあってその記述内容を挙げていたところの文書、日本の LHC 実験参画グループ代表者によって作成されたものとしてオンライン上に公開されている、

『LHC 加速器の現状と CERN の将来計画』と題されての文書(検索エンジン上での表記文書タイトル名(『LHC 加速器の現状と CERN の将

来計画』)の入力で現行、捕捉できるようになっている文書)

にての[166]および[167]との頁番号が付されたところであって、

(直下、日本の LHC 実験参画グループ(元)代表者によって作成されたものとして現行、オンライン上に公開されている『LHC 加速器の現状と CERN の将来計画』と題されての PDF 文書よりの「再度の」原文引用をなすところとして)

「1998 年に提唱された ADD モデルでは余剰次元を導入することによってヒッグス粒子の質量の不安定性(階層性問題)を解決する。このとき重力は TeV 領域で強くなり、LHC での陽子衝突でブラックホールが生成され、ホーキング輻射のため 10^{-26} sec で蒸発すると予言された。これは理論屋にとって大変魅力ある新しい展開で、危険性などまでには考えが及んでいなかった」

(再度の引用部はここまでとする)

との部の記述内容を(疑わしきにおかれては当該文書ダウンロードの上でも)確認いただければ、と思う (:尚、上にての日本の LHC 実験参画グループ(元)代表者によって作成された文書 ——余事だが、同文書、『LHC 加速器の現状と CERN の将来計画』は本稿筆者が甲第 17 号証との番号を付して書証(文書証拠)として自身が原告として長くもかかわづらわされていた国内 LHC 関連訴訟にあつて第一回口頭弁論時前から法廷に提出したもの「とも」なる—— よりの引用部では 1998 年 がブラックホール生成議論の始期であるような書かれようがなされているが、その翌年、1999 年(加速器によるブラックホール生成可能性がウォルター・ワグナーという人物によって問題視されだした年)に至っても実験関係機関によって「ブラックホール生成可能性を完全否定する」安全報告書が出されており、2001 年以降になつてようやく(「1998 年に提唱の余剰次元理論を押し広げての見方に基づけば、LHC によるブラックホール生成はありうる」との権威筋物理学者の著名論文発表に付随するとのかたちで)[加速器によるブラックホール生成可能性]が科学界にて肯定されだしたとの流れが存する ——本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 1](#) および [出典\(Source\)紹介の部 2](#) はそのことを詳説するための部となっている——)。

また、

「余剰次元理論登場(およびその理論的展開)前までは[プランクエネルギーを極小領域に詰め込む]とのことをなす、
[[太陽系のサイズもあろうかという人間にはおよそ建設不可能な加速器]でもってプランク・エネルギーの極小領域への詰め込みを実現する]
とのこと以外にブラックホールおよびワームホールを生成する手立てはないとの発想法しかなかった(人間には加速器の類でブラックホールを造ることは不可能であるとの発想法しかなかった)」

とのことも摘示可能となつており、そちらについては本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 21](#) から [出典\(Source\)紹介の部 21-5\(2\)](#) を包摂する解説部を参照いただきたい。

以上、

[小説『スラップスティック』(1976)と[加速器によるブラックホール生成可能性にまつわる理論登場]の先後関係]

についての解説となしたが、関連するところとして下に図解表記をなしておく。

そちら図解表記でもって["こと"の奇怪性(の「極々」一断面)]についてご理解いただけることか、とは思う。

Slapstick, or Lonesome No More! (1976)

- "the force of gravity had increased tremendously" scenario
- the collider (named after Hooligan) which makes it possible that living persons talk with dead persons

connected man&woman
"union" of twins

Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC (1999)

quote :
"Of course higher-energy accelerators than RHIC achieve larger values of k_{qu} , but for the foreseeable future values even remotely approaching unity are a pipe dream. "

文献的事実 (philological truth) の問題として1976年初出の小説『スラップスティック』では

[地球規模の重力増大状況(を実現した装置)]

[幽冥境にして生者と死者の通話を実現なさしめるに至った加速器]

が[同じくもの男女一対の双子の「結合」と結びつけられていると]のことがある。

その点、加速器と重力の増大状況との併存並置とのことで述べれば、ここ10数年でその可能性が問題視されるようになった。

[加速器によるブラックホール生成可能性]

のことが脳裏をよぎるところである(※)。そこから70年代にての先覚性が問題になる。

(※本稿にての [出典 (Source) 紹介の部2] で実験関係者 (元LHC実験日本グループ代表者) の手になる文書、『LHC加速器の現状とCERNの将来計画』 (オンライン上にて現行PDF版が流通しているとの文書. 表記タイトル入力にて誰でも現行、取得可能なもの) より引用なして

「1998年に提唱されたADDモデルでは余剰次元を導入することによってヒッグス粒子の質量の不安定性 (階層性問題) を解決する。このとき重力はTeV領域で強くなり、LHCでの陽子衝突でブラックホールが生成され、ホーキング輻射のため 10^{-26} secで蒸発すると予想された。これは理論屋にとって大変魅力ある新しい展開で、危険性などまでには考えが及んでいなかった」

との部を引いているとおりである —— 筆者はそういうことに詳しくなっていたからこそ、LHC実験に関わるリスク問題につき加速器実験に国際的に枢要な役割を果たしている国内の最高学府特定機関を向こうにまわし、日本の [法律上の争訟] の類型に収まるように行政訴訟を提訴、そちら二年越しの裁判沙汰を通じて作成した [加速器実験機関の欺瞞性 (先方が先方弁護士らに偽りをなさしめたといった相応のことを含めての欺瞞性) を唯・常識的に指摘するための資料] にて呈示の問題点をいろいろな方面に諮ったりしての水面下訴求活動をなしてきた人間でもあるのだが、その間も含め、「どういわけなのか」筆者のような人間が影響力を行使するどころか社会的に呼吸・存在していることそれ自体をもまったく良しとしていないとの式で某・宗教団体系の相応の手合いら (その水準と卑劣なやりようから推し量れるところの漢字一字の罵倒語は用いない) に嫌がらせを受けたり、話を聴くべき立ち位置にいる者達より徹底的な無関心で応じられたりと相応の憂き目に遭い続けているもする。が、それは置く——)。

さて、学者ら申しようでは1998年提唱の余剰次元理論 (ADDモデル) の提唱にて加速器によるブラックホール生成が現実的に観念されるようになったとのことであるが、そうした科学理論が表立ってのものとして初出を見たのは2001年のことであり (本稿にての [出典 (Source) 紹介の部2] を参照のこと)、1999年に加速器のブラックホール生成可能性が余剰次元関連のトピック「外」のところで部外の人間 (ウォルター・ワグナー) に問題視された折、加速器実験機関 (Brookhaven National LaboratoryおよびCERN) より出された報告書では「加速器によるブラックホール生成はありえない」

のみならず

「今後ありうべき将来の加速器にてもブラックホール生成はパイプドリーム (アヘン吸引者が見るか如く夢) である」

との見解が前面に出されていた (: 上にての引用部はブルックヘブン国立加速器研究所のそうした申しよう —— 後の二〇〇四年にノーベル物理学賞を受賞したとの Frank Wilczekらから関与しての公式報告文書、オンライン上より当然に全文取得可能であるとの [Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC] に見る申しよう—— を引いてのもので本稿にての [出典 (Source) 紹介の部1] で意味合いを解説しているとの箇所である。尚、本稿にての [出典 (Source) 紹介の部1] では同じくもの帰結につき端的に表しているところとして米国法学者による案件解説論稿 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD (の838と振られた頁) よりの引用として In 1999, when questions floated in the media about accelerator-produced black holes, physicists issued an assurance that no particle collider in the foreseeable future would have enough power to accomplish such a feat. Busza report, which was done in anticipation of the commencement of RHIC operations. The report did a rough analysis of the particle collisions that would occur at RHIC and the gravitational effects that might result. The Busza team found that the forces created by the RHIC were orders of magnitude too small to possibly create a black hole.との箇所を引いている —— 訳は [出典 (Source) 紹介の部1] にて付している——)。

本稿の直近の部までの内容から申し述べられることとして

1976年小説に見るやりよう、すなわち、

[[加速器]・[重力の世界的増大状況] を [同じくもの双子の結合プロセス] で結びつけるとのやりよう]

は1998年初出の理論の内容を受けて2001年以降、言明されたとの、

[現行人類が到達しうる加速器にあっても (特定理論を媒介させることで) ブラックホールを生成するだけの重力の増大を見る可能性があるとの申しよう]

との類似性を感じさせるものである。

問題はそうした類似性の問題、ありうべき順序との兼ね合いでの時間的離隔が目につくとの類似性の問題が [一作家の「たまたまの」描写が的を得たもの] であるのか、否なのか。否であるのならば、関連するところでどういったことが問題になるのか、ということである。

(:それにつき

「筆者は陰謀論者らのそれと同様の愚にもつかぬ口と手でそのようなことを訴求しているのでは断じてない」

と強くも申し述べたうえで書いておいたが、ここにて問題視している1976年小説が [ブラックホール] との兼ね合いでさらに注視すべき要素を有しており、また、なおかつ、「どういうわけなのか」

[二〇〇〇年九月十一日に発生した事件に関する同一作家による「奇怪極まりない」先覚的描写]

とも結びついているとのことまでをも本稿ではこれより問題視する所存である。

どうしてそういうことがあるのか、との [機序] の問題はともかくもそうしたことがあることまでを [危険性] との兼ね合いで

[(洗練化を見た) 具象論にての問題]

としてはきと認識させたいと、なおかつ、[覚悟に根ざした行動] すらせぬ、しようせぬとの種族が我々人類ならば、当然に人類には存続もままならぬであろうと見、本当にそれでいいのか、と確認したいとの視点があってである)

※上記のことにまつわたりの補足として

以上摘示してきたようなことがあるわけであるが、「ただし」、当該分野に通じた「本当の」有識者 (欧米加速器実験の枢機について通暁している有識者) にして、かつ、[常識的な視点] を是が非でもごり押ししたいとの向きは次のようなことを述べるかもしれない。

「(本稿筆者の指摘するように) 作家カート・ヴォネガットがブラックホール生成のことを予見するようなことをなしていたというのならば、確かに奇怪である。[ヴォネガット小説『スラップスティック』刊行時期たる1976年] と [加速器によるブラックホール生成可能性問題化の折柄 (世紀の変わり目)] とのことでは、物事の順序が逆転しているとのことになるように映るからだ。

だが、しかし、カート・ヴォネガットが

[(1976年の小説刊行時期より若干前に遡る)70年代前半期より[加速器実験に関わる一部の関係者]の間で「秘密裡に」内輪で[異常核物質]の生成可能性のことが問題視されていた]

とのことを知っていればどうか。そう、奇縁あって(リークされた情報に対する仄聞といったかたちで)同じくものことについて聞き及んで知っていたらば、どうか。70年代より生成が問題視されていた[異常核物質](超高密度の異常核物質)についてはそれが加速器 Bevalac にて生成された折には際限なく[重いもの]になるとの見立ても(人知れず)内輪の加速器実験関係者に呈されていたのであり、また、それが融合作用を伴っていれば、地球と人類に破滅的事態をきたすとの懸念もあった。そうした内輪の懸念のことを作家カート・ヴォネガットが[揶揄]していた可能性とて否定しきれないではないか]

上のことは本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 11](#) で解説していることに委細がみとめられるところとなっている(ので、直下、そちら [出典\(Source\)紹介の部 11](#) にての引用元文書 ——加速器実験関係者が世間に全く知られないかたちでの内輪での集いで地球崩壊リスクの可能性を俎上に載せていたとのことを扱っている物理学者の回顧録としての性質帯びての文書(Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks (2007—2008年、ドイツのユプリンガー社が刊行する Physics in Perspective 誌に掲載されたとの回顧録的論稿で訳せば『加速器による災厄のシナリオら、ユナボマー、そして、科学の孕むリスク』とでもなろう文書、著者は Joseph I. Kapusta という物理学者)—— よりの再引用をなす)

(直下、オンライン上流通文書 Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks (訳せば『加速器による災厄のシナリオら、ユナボマー、そして、科学の孕むリスク』とでもなろう文書)、その論稿配布サーバー(arXiv サーバー)よりオンライン上にて配布されている PDF 版 p.7 から p.9 よりの([中略]なしつつもの)掻い摘まんでの再度の原文引用をなすとして)

The primary purpose in combining the SuperHILAC and the Bevatron to form the Bevalac was to create dense nuclear matter in the laboratory for a brief moment of time. During 1974-1975 the first beams of carbon and oxygen nuclei were accelerated up to 2.1 GeV per nucleon and smashed into various nuclear targets. An upgrade was necessary to accelerate uranium nuclei, and in 1981-1982 uranium was accelerated to 1 GeV per nucleon beam energy.

[...]

When the experimental program at the Bevalac began, no one really knew what to expect when nuclear matter was compressed to three-to-four times the density of atomic nuclei.

[...]

As noted above, in 1974 Lee and Wick suggested that in a limited domain of space a neutral scalar field may acquire an abnormal value (when compared to the rest of the universe), and that this state may be metastable. If the scalar field has sufficiently strong coupling to nucleons, then their masses would be greatly decreased, leading to a yet-unobserved physical system. They suggested that this might occur inside a heavy nucleus, but compressing nuclei in heavy-ion collisions was an obvious way to search for this new state of nuclear matter.

[...]

The curve in the middle shows a metastable "Lee-Wick abnormal state" at some density above the density in atomic nuclei; this state would eventually decay to

the lower-energy state. The curve on the right illustrates an extreme case in which the "Lee-Wick abnormal matter" lies lower in energy than normal nuclear matter; in this case, ordinary nuclei would eventually decay into this new state of nuclear matter. Our knowledge about high-density nuclear matter was so poor at this time that no one could rule out these last two possibilities. Lee and Wick actually were not the first to publish such a speculation: In 1971 Arnold Bodmer suggested on the basis of quark models and soft interactions between nucleons that collapsed nuclei might be formed. He called the abnormal states shown in figure 5 isomers in analogy to molecular isomeric states, but they soon came to be called "**density isomers.**" For whatever reason, however, Lee and Wick, rather than Bodmer, are usually cited as the originators of the concept of "abnormal" or "isomeric" nuclear states. No one had a clear idea about how the formation of such new abnormal or isomeric states of nuclear matter could be identified in heavy-ion collisions at the Bevalac. **Some said, with tongue-in-cheek, that: "Heavy-ion collisions will compress the nuclei to such a degree that abnormal nuclear matter will be formed in the core of the compressed nuclei. This abnormal nuclear matter, being more stable than ordinary matter, will accrete stuff around it and grow to visible size. Being so massive it will drop to the floor of the experimental hall where one can weigh it and measure its radius, thereby determining its density!" Such an object, however, would be denser than ordinary nuclear matter (2×10^{14} grams per cubic centimeter) and hence cannot be supported by steel or concrete and would fall to the center of the Earth! Further, what would prevent it from growing larger and larger until it would occupy the entire Earth? Simple estimates suggested that this could occur in a matter of seconds — and if it did no physicist would be around to be blamed for it! Moreover, it guaranteed that no physicist would ever win a Nobel Prize for the discovery of stable abnormal nuclear matter, since either this new state of nuclear matter does not exist, or the world would end before the Prize could be awarded. No one took all of this too seriously, and experiments with colliding beams of light and intermediate-mass nuclei proceeded apace.**

(上に対する訳として)

「SuperHILACとBevatron(訳注:1954年から運用開始を見ていた加速器)を結合してBevalacとすることとなした主たる目的はその折に相応しかつた濃密度の核物質を生成することにあつた。1974年から1975年にかけて炭素および酸素の原子核にてのビーム(最初期ビーム)を2.1GeV(2.1ギガエレクトロンボルト/21億ボルト)にまで加速し、それを諸種様々な核の対象らに衝突させた。ウラニウムの原子核を加速するためのアップグレードが必要となっており、1981年から1982年にかけてウラニウムが1核子に対応するビームエネルギーにて1GeVのところまで加速された。…(中略)… Bevalacにての実験計画がはじまった折、誰も核物質が原子核の密度より3から4倍に圧縮された折に何が期待されることになるのか、分かつてはいなかつた。

…(中略)…

上にて記しているように1974年、リーとウィックが提案していたところでは「制約課されての空間の領域、中性のスカラー場では異常な値(他の残りの宇宙と比した際にあつての異常な値)が得られるかもしれない、この状況は準安定的なことになりかねない」とのことであつた。「仮にもスカラー場が核子に対する結合にあつて十分に強いものであるのなら、それら質量は甚だしくもの減少を見、未だ観測されざりし物理系に導くとのことになる」。彼らは「これは重い原子核の中で起こるかもしれないことだが、重イオン衝突時にての原子核の圧縮はこの新しき核物質の状況を探索するのに明らかに適した方法である」と提

案していた。

…(中略)…

上遷移図(訳注:元となったPDF資料には三種の状態遷移図が挙げられている)にあっての中程のものは原子核にての密度を超えたところにある順安定的な

[ある種の密度におけるリーとウィックの異常状況]

を示して見せている。

同遷移図の右側は[リーとウィックの異常状況]が通常の核物質より低いエネルギーにて存在しているとの極端な場合を示しているとのものとなり、この場合にては通常の原子核は結果的に新しい核物質の状態へと結果的に崩壊していく。我々の高密度状態の核物質に関する知識はこのとき、あまりにも貧弱なるものであったため、誰も残り二つの可能性を排除することができなかった。

リーとウィックがそのような推測をした最初の人間ではなかった。1971年、Arnold Bodmer がクォークのモデルおよび核子らの間の軽い相互作用のところ、その基礎分野にあって崩壊した原子核が形成されることになるかもしれないとの提案をなしていた。彼(Arnold Bodmer)は図5に示されるようなその異常状態をもってして分子にての異性体の状況との類似性を顧慮して異性体(isomer)と呼んだが、しかし、すぐにそれらは**密集異性体(density isomers)**と呼ばれるようになった。いかな理由あれ、しかしながらのこととして Bodmer ではなくリーとウィックが一般に異常な、ないしは、異性体的な核の状態の提唱者として知られている。

誰もそのような

[新種の異常ないし異性体的な核物質(生成)の状況の具現化]

がベバラックにあっての重イオン衝突下にて特定化されうるところなのか、分からなかった。

幾人かの者達は舌先でチークダンスを踊るように軽々しくも次のように述べている。原子核の中心にて異常なる核物質が生成されうるとのそうした程度にまで重イオン衝突が原子核を圧縮するだろう。この異常なる核物質、通常の物質よりも安定しているとのその物質はその「周辺の物質を付着させ増大していき」(accrete の辞書的定義は Grow or become attached by accretion (accretion 付着の過程で成長または付属化させていくとなる)、そして、視認できるほどに巨大化する。とても重い物へと成長していくため、重さを量ることが可能、半径を測ることが可能との実験ホールの床に落とし込まれ、そこにはじめて密度を決することができるだろう！そのような物体は、だがしかし、普通の核物質(1立方メートルあたり 2×10^{14} 乗グラム)よりも濃厚なるものであるため、鉄製およびコンクリートでは支えきれずに、地球の中核へと落ちていこう！さらに遠くまで行って述べれば、それがそれが地球上のすべてを占有するまで大きく大きくなっていることを妨げるものがあるだろうか。単純な推論はこれが数秒の間に起こると提案し、そして、周囲に物理学者が非難の対象とすべき物理学者がいないとのことになるのかもしれない！加えて、それはいかなる物理学者も「安定した異常な核物質」の発見によってノーベル賞を勝ち得ないことを保証してくれている、というのも、世界は賞の授賞の前に終わりを迎えているからである。誰もこのことすべてを重く受け取っておらず、光のビームと中間質量の原子核を衝突させての実験は速やかなる進行を見てきた」

(訳を付しての引用部はここまでしておく)

くども繰り返しをなすが、

Some said, with tongue-in-cheek, that: "Heavy-ion collisions will compress the nuclei to such a degree that abnormal nuclear matter will be formed in the core of the compressed nuclei. This abnormal nuclear matter, being more stable than ordinary matter, will accrete stuff around it and grow to visible size. Being so massive it will drop to the floor of the experimental hall where one can weigh it and measure its radius, thereby determining its density!" Such an object, however, would be denser than ordinary nuclear matter (2×10^{14} grams per cubic centimeter) and hence cannot be supported by steel or concrete and would fall to the center of the Earth! Further, what would prevent it from growing larger and larger until it would occupy the entire Earth? Simple estimates suggested that this could occur in a matter of seconds — and if it did no physicist would be around to be blamed for it! Moreover, it guaranteed that no physicist would ever win a Nobel Prize for the discovery of stable abnormal nuclear matter, since either this new state of nuclear matter does not exist, or the world would end before the Prize could be awarded. No one took all of this too seriously, and experiments with colliding beams of light and intermediate-mass nuclei proceeded apace.

「原子核の中心にて異常なる核物質が生成されうるとのそうした程度にまで重イオン衝突が原子核を圧縮するだろう。この異常なる核物質、通常の物質よりも安定しているとのその物質はその「周辺の物質を付着させ増大していき」(accreteの辞書的定義は Grow or become attached by accretion (accretion 付着の過程で成長または付属化させていくとなる)、そして、視認できるほどに巨大化する。とても重い物へと成長していくため、重さを量ることが可能、半径を測ることが可能との実験ホールの床に落とし込まれ、そこにはじめて密度を決することができるだろう！そのような物体は、だがしかし、普通の核物質(1立方メートルあたり 2×10^{14} 乗グラム)よりも濃厚なるものであるため、鉄製およびコンクリートでは支えきれずに、地球の中核へと落ちていくだろう！さらに遠くまで行って述べれば、それがそれが地球上のすべてを占有するまで大きく大きくなっていることを妨げるものがあるだろうか。単純な推論はこれが数秒の間に起こると提案し、そして、周囲に物理学者が非難の対象とすべき物理学者がいないとのことになるのかもしれない！加えて、それはいかなる物理学者も「安定した異常な核物質」の発見によってノーベル賞を勝ち得ないことを保証してくれている、というのも、世界は賞の授賞の前に終わりを迎えているからである。誰もこのことすべてを重く受け取っておらず、光のビームと中間質量の原子核を衝突させての実験は速やかなる進行を見てきた」

とのことが70年代より異常核物質(density isomers)にまつわるところとして言明されているとのことがあるのである。

本稿 [出典\(Source\) 紹介の部 11](#) の内容より再度の引用をなしつつもの話を続ける。

(直下、オンライン上流通文書 Accelerator Disaster Scenarios, the Unabomber, and Scientific Risks (訳せば『加速器による災厄のシナリオら、ユナボマー、そして、科学の孕むリスク』とでもなろう文書)、その論稿配布サーバー(arXivサーバー)よりオンライン上にて配布されているPDF版 p.7 から p.9 よりの([中略]なしつつもの)掻い

摘まんでの再度の原文引用をなすとして)

To my surprise and satisfaction, Das Gupta and Westfall thanked me "for providing the impetus for writing this article," and they incorporated words from my draft paragraph almost unchanged, namely, writing that:

"Meetings were held behind closed doors to decide whether or not the proposed experiments should be aborted." "Experiments were eventually performed, and fortunately no such disaster has yet occurred."

The committee that had met behind closed doors included and reported to Bernard Harvey, Associate Director of LBL's Nuclear Science Division; it is dated May 14, 1979, and I provide a transcription of it in the Appendix.

The committee thus met about five years after the first experiments with light ions had begun at the Bevalac, but about two years prior to its upgrade to accelerate heavy ions like uranium. Thus, there apparently was little concern that colliding light ions would lead to abnormal nuclear matter, but considerable concern that colliding heavy ions might. In any case, based upon this one-page report the upgrade of the Bevalac was completed and heavy-ion experiments were carried out with it. No one seriously believed that a disaster of the type imagined could ever occur, given that QCD is the relevant theory of the strong interactions and that high-density nuclear matter should not be described as such, but as quark matter. Nevertheless, this astonishingly brief report was never widely circulated among physicists. Indeed, my request to the LBNL Director's Office for a copy of it was acknowledged conscientiously, but their search came up empty: The LBNL Director's Office has no official record of it.

(拙訳として)

「私が驚き、また、と同時に、満足させられもしたところとして、Das Gupta および Westfall は「この記事を執筆する原動力を与えてくれた」とのことで私に謝意を表してくれもし、そして、彼らはほとんど手つかずの式にて私の草稿に合筆をなしもしてくれ、次のように書いてくれた。

「提案された実験が中止されるべきか否かの会合は閉じたドアの後ろ側で行われた (Meetings were held behind closed doors to decide whether or not the proposed experiments should be aborted.)」

「実験は結局実施され、幸運なことに何ら災厄は発生しなかった (Experiments were eventually performed, and fortunately no such disaster has yet occurred.)」

「閉じたドアの向こう側で実施を見た会合」はLBL(ローレンス・バークレー研究所)科学部門のアソシエイト・ディレクターたる Bernard Harvey を含んで実施されたもの、そして、彼に報告されたとのものである。それは1979年5月14日の出来事であり、私は付録としてその転写記録を提供した。この会合はこのように

「最初のベバラックの軽イオンによる実験が開始されてより5年を経て後のもの」

であったが、ウラニウムのような重いイオンを加速させるためのアップグレードには二年ほど先んじてのものであった。このように明らかに軽イオンが異常な核物質への導きをなすとの懸念はほとんどなかったわけだが、重イオンがそれをなしうるとの懸念は思慮に値するものであった。

なんであれ、この「1ページの」完成を見たベバラック・アップグレードの報告書に基づいて重イオン実験らはそれとともに実行されてきた。QCD (量子色力学/クォンタム・カラー・ダイナミクス)が強くもの相互作用に関

わる関係性の理論であること、そして、高密度の核物質がクォークがそうであるようにそうして表されるものであるところを受け 誰も真剣には想像されるタイプの災厄が従前起こりえたかもしれないことを信じていなかった。にもかからず、この驚くべきほどに簡潔な報告書(本件報告書)は決して広くも物理学者らの間で流通を見なかった。「本当に、」私の LBNL(ローレンス・バークレー国立研究所) 責任者部署へのコピーを求めての要請は入念に(訳注:この場合、conscientiously コンシエンシャスリーは「良心的に」というより「入念に」と訳されるべきところである)も承認を見、しかし、彼らの調査の結果出てきたのは空っぽのものであった。LBNL(ローレンス・バークレー国立研究所)の統括オフィスはそれについての公的な記録を何ら保持していなかったのだ」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上に見るように[異常核物質]が生成されて世界が終わる可能性があるとの仮説が一部で呈示されていたにもかかわらず、その[検討](真摯さを伴っているとは思えぬ検討)は「決して表に出ぬようなやりようでなされ」、かつ、「その記録文書も何ら残置残存を見ていない」とされている——いいだろうか。オンライン上には相応の者達が(愚劣なやりようで真実を毀損するためであろうと容易に察しがつく式にて)フリンジ・サイエンスにまつわる証拠も出揃っていないところで不適切な資料を挙げて陰謀「論」を展開しているとのことがあるようだが(そしてそういう愚劣なるものにおいて筆者のような人間に由来する言辞にも添付するように努めているようだが)、ここで挙げているのは当時の加速器実験にて携わっていた一線の物理学者(Joseph I. Kapusta)による回顧録であることを忘れないでいただきたい——。

そうした経緯を望見しつつも、述べれば、である。

「とにかくも、カート・ヴォネガット著作『スラップスティック』が1976年に刊行される前から[異常核物質]が[極めて重い物質]として加速器によって生成され、それが地球と人類に引導を渡すことになるとの懸念が人知れず内輪で問題になっていた(ただその検討のための「秘密裡の」会合は70年代末葉まで開かれなかったとも上にては記載されている)とのことがある。であるから、[そうしたことを(極秘のリーク情報として)知っていたヴォネガットが『スラップスティック』で[揶揄]をなしていた可能性もある……]と主張なせるような背景も(若干ながら)ある」

以上は、だが、(極めて遺憾なことなのだが)、
[有効なる安心材料たりえない]
と斥けられるものとなっている。
次のような事由からである。

・カート・ヴォネガットが[黒死病(ザ・ブラック・デス)]と[重力増大機序]と[人間圧縮の寓意]とを結びつけている(:繰り返すが、ヴォネガットは『スラップスティック』にて[黒死病]を意識させる[緑死病]の原因を[極微に圧縮された中国人]に求めており、[極微に圧縮された者達の国家]たる中国が[重力増大機序]をもたらしたとの設定を付与している)との件につき、(黒死病との兼ね合いで)[ブラックホールに対するこだわり]を感じさせるようなところがある。ブラックホールは(直近にての資料に見られるような)[70年代より問題視されていた超高密度の異常核物質]とは異質なるものである。それがゆえに疑念は(皮相的なところからして)払拭さ

れない。

・こちらが重要である。(続いて取り扱うことにもなるのだが)ヴォネガットや
りょうに関しては

「[911の前言]が如くことを「他の」ブラックホール関連文物」と共有して
いる」

とのことがある。いかに話として奇矯なることでも、これより詳述をなしてい
く所存でもあるそうした側面から見れば、何れにせよ、疑義は払拭されえ
ないとのことになってしまう。

上にて言及していることに誇張・こじつけの類があるか。本稿にての先行する段およ
び後続する段の熟読によって是非とも批判的検討をなしていただきたいと筆者として
は強調するところである。

(以上でもって補足の部を終えることとする)

ここまでの出典(Source)紹介の部 64—出典(Source)紹介の部 64(10)を包摂させての典拠紹介で
もってして

a.

[米国文壇の寵児]として押しも押されもせぬとの立ち位置にあった著名作家カー
ト・ヴォネガットによってもものされ、1976年に刊行されたとの Slapstick, or Lonesome
No More (邦題)『スラップスティック』という小説作品がある。

b.

上作品『スラップスティック』(1976)にあつてはロックフェラーに由来する一対の双子
が合体した際に「天才的閃き」が現出するとの(一見にして)奇態なる設定が採用
されている。

c.

『スラップスティック』(1976)にあつては双子の合体時に顕在化するとの作中設定が
付されての「天才的閃き」が応用されてのものらしいとのかたちで「地球規模で重力
が増大を見ているとの状況」に至っているとの描写がなされてもいる(双子の天才的
閃きを利用して中国がそういう状況、地球規模の重力増大をもたらす装置を造り上
げたらしいとのことが作中にて臭わされている)。

d.

『スラップスティック』(1976)にあっては合体することで[天才的閃き]を呈するとの双子らが一方が片方に先立ち早世するとのかたちで離別を見ることになるが、後に[粒子加速器]([フリーガン]と作中呼称される放棄された加速器)の遺構が幽冥境にする彼・彼女ら双子を「再」度結合させることになったとの筋立てが採用されてもいる。

e.

『スラップスティック』(1976)にあっての(c. から d. にて言及したところの)特性は[重力増大状況]と[粒子加速器]が[双子の結合]との側面で結びつけられているがために[加速器によるブラックホール生成]のことも観念させるものでもある(:双子が結合した際に[重力増大状況]につながるアイデアが生まれたとの設定、そして、双子の生死両界をまたいでの再結合が[粒子加速器]によって実現されるなどという設定、すなわち、「どうしてこのような意味不明な設定が?」との筋立てが採用されていることに関して「粒子加速器と重力増大状況が際立つてのブラックホールの関係性にまつわる意図的言及がなされているのでは?」と見ることに無理はない)。

f.

また、小説『スラップスティック』のロックフェラーの血筋に属する双子の持ち出しようには形態的に(ロックフェラー一門の後押しがあつて建設に至ったとの)ツインタワーのことを想起させるような側面が伴っている。他面、「ツインタワーが崩落を見たとの911の事件」と「[通過可能なワームホール] (ブラックホールと質的につながるもの)を扱った書として911以前に刊行を見た著作キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』」とが結びつくようになってもいるとのことが——(馬鹿げて聞こえもして然るべきことである中でながら本稿の先立っての段にて詳述なしてきたところとして)—— この世界には「現実」にある。

との a. から f. のことらの論拠を呈示した、甚だしくも奇怪である(加速器によるブラックホール生成が観念されるようになったのはここ 10 数年であることもあつて奇怪である)」 とのことについて指し示すべくことの多くを指し示してきた。

さて、以上最前の部までにあつて著名作家 —先立って解説しているように米国文壇の寵児にして米国現代文学の牽引者として論じられていた程度の著名作家— であつたカート・ヴォネガットの手になる『スラップスティック』という作品が

[加速器によるブラックホール生成]

にまつわつての先覚的言及をなしていると判じられる論拠を事細かに摘示してきたわけではあるが、これ以降はそうした直前までの内容を受けもし、そこからさらにもつていかなことが問題になるのかの解説をなす。

そのこと、申し述べた上でのこととしてまずもつて願いたきところとして

【続いての本稿従前内容を振り返つての表記】

と【最前までの流れの関係性】について考えていただきたい次第である。

振り返っての記載内容として ——本稿にあってはここに至るまでおよそ次のような関係性のことを摘示・問題視してきた——

[[古代アトランティスに対する蛇の種族による次元間侵略]との内容を有する(一見すれば妄言体系としての)神秘家由来の申しようが今より70年以上前から存在している —— (所詮はパルプ雑誌に初出の小説『影の王国』(1929)の筋立てをその言い回し込みにして参考にしたのであろうと解される形態でながら前世紀、第二次世界大戦勃発の折柄(1939年)から存在している) —— とのことがある] (: **出典(Source)紹介の部 34**から**出典(Source)紹介の部 34-2**を包摂する解説部を参照されたい)

→

[(上にて言及の)[アトランティスに対する蛇の種族の次元間侵略]との内容と類似する側面を有しての[恐竜人の種族による次元間侵略]という内容を有する映画が[片方の上階に風穴が開きつつ][片方が崩落する]とのツインタワー —— (恐竜人の首府と融合するとの設定のツインタワー) —— をワンカット描写にて登場させながら1993年に封切られているとのことがある(子供向け荒唐無稽映画との体裁をとる『スーパーマリオ魔界帝国の女神』がそちら作品となる)] (: **出典(Source)紹介の部 27**を包摂する解説部を参照されたい)

→

[ある種、911の先覚的言及をなしているとも述べられるような性質を伴っての上記映画は[他世界間の融合]といったテーマを扱う作品ともなっていたわけだが、そうした内容([異空間同士の架橋]との内容)と接合する[ブラックホール][ワームホール]の問題を主色として扱い、また、同じくものところで[911の事件の発生に対する先覚的言及とも述べられる要素]をも「露骨」かつ「多重的に」帯びているとの著名物理学者由来の著作 —— BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作 —— が(申し分としては無論、頓狂に響くところなのだが)原著1994年初出のものとして「現実」に存在しているとのことある] (:疑わしきにおかれては(羅列しての表記をなし)本稿にての**出典(Source)紹介の部 28**,**出典(Source)紹介の部 28-2**,**出典(Source)紹介の部 28-3**,**出典(Source)紹介の部 31**,**出典(Source)紹介の部 31-2**,**出典(Source)紹介の部 32**,**出典(Source)紹介の部 32-2**,**出典(Source)紹介の部 33**,**出典(Source)紹介の部 33-2**を包摂する解説部を参照されたい。表記の部にてはBLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という1994年初出の作品が[双子のパラドックス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用] / [91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号で「はじまる」地を実験に対する[空間軸上の始点]に置いてのタイムワープにまつわる解説] / [2000年9月11日 ⇒ 2001年9月11日と接合する日付けの実験に対する[時間軸上の始点]としての使用] / [他の「関連」書籍に見るブラックホール⇄グラウンド・ゼロとの対応付け]を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで「すべて同時に具現化」なさしめ、もって、[双子の塔が崩された「2001年の」911の事件]の前言と解されることを事件勃発前にいかようになしているのかについて(筆者の主観など問題にならぬとの客観事実に関わるところとして)仔細に・緻密に摘示している。また、それに先立つところ、本稿にて

※【(繰り返しもしての)文書内容それ自体から離れもしての外挿表記としまして】:ここでのこのように本稿では「頻繁に」文字色と背景色を変えての【出典紹介部】呈示のための表記をなしています。本稿全体の指し示し内容の重大性を顧慮して【後追い可能な典拠】の細部に至るまでの呈示からして必須事項ととらえているからではありませんが、無論にして、後追い「可能」であるだけではなく後追い「容易」である必要もあるとの認識が書き手この身にはございます。にまつわって後追い「容易」性の方をもたらす方式、すなわち、【都度、即応的にすべての出典紹介部の内容を即時確認するための方式】を本稿にあっての冒頭p.2で細かく紹介しておりますので【頻繁に本稿の典拠内容の確認をなす必要】を感じておられるの方々におかれましてはそちら本稿p.2で案内させていただいております方式を採択いただければと考えます(典拠内容確認を容易・即応的になすとのその紹介方式とは本稿を収めたPDF文書を別名保存で二ファイル用意し、うち、片方を閲覧用、もう片方を(巻末数ページの出典紹介部一覧表記部「だけ」を印刷して役立てつつもの)出典確認用の電子文書として活用いただくとの方式となります)

の [出典 \(Source\) 紹介の部 29](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 30-2](#) を包摂させての解説部ではその前言問題に関わるところの[双子のパラドックス](1911年提唱)というものと結びついているとのことがよく指摘される浦島伝承(爬虫類の化身と人間の異類結婚譚との側面も初期(丹後国風土記)にては有していた浦島子にまつわる伝承)が欧州のケルトの伝承と数値的に不可解な一致性を呈していることを解説、その「伝承伝播では説明がなしがたい」ような特異性についての指摘「も」なしている)

→

[[[加速器](#)]および[(時空間の)ゲート開閉に関わる要素]および[爬虫類の異種族の侵略]らの各要素のうち複数を帯びているとの作品らが従前から存在しており、の中には、カシミール・エフェクトといった後に発見された概念(安定化したワームホール構築に必要と考えられるようになったエキゾチック・マターという物質の提唱に関わっている概念)につき尋常一様ならざるかたちにて先覚的言及なしているとの1937年初出の作品『フェッセンデンの宇宙』——人工宇宙にての爬虫類の種族による人類の皆殺しが描かれているとの作品—— も含まれている] (:疑わしきにおかれては [出典 \(Source\) 紹介の部 22](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 26-3](#) を包摂する一連の解説部を参照されたい)

→

[CERNのLHC実験は「実際の命名規則の問題として」1990年代の実験プラン策定段階にての1992年(米国にて2004年に放映されていたテレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』といったものを包摂する一連のスターゲイト・シリーズの嚆矢たる映画作品『スターゲイト』が1994年の公開にて世に出ることになった折より2年程前)から[アトラス——ヘラクレスの11功業にて登場した[黄金の林檎]の在所を把握すると伝わる巨人——]と結びつけられており(ATLASディテクターという[「後の」2000年代よりブラックホール観測「をも」なしうるとされるに至った検出器]にまつわる名称が1992年に確定したとも)、また、同LHC実験、後にその[アトラス]と語義を近くもする[アトランティス]ともブラックホール探索挙動との絡みで結びつけられるに至っているとのことがある(そのうえ、同LHC実験にあってブラックホールの生成を観測しうるツールと銘打たれているイベント・ディスプレイ・ツールのATLANTISについてはプラトン古典『クリティアス』記述から再現できるところの古のアトランティスの城郭構造を意識させるようなディスプレイ画面を用いているとの按配での堂の入りよう「とも」なっている)。CERNのLHC実験と結びつけられての巨人アトラスは[黄金の林檎の在処(ありか)を知る巨人]として伝承に登場を見ている存在でもあるが、そこに見る[黄金の林檎]は[トロイア崩壊の原因]となっていると伝わるものである。とすると、CERNがATLAS検出器でブラックホールの観測——その観測が「科学の発展に資する」と中途より喧伝されるに至った即時蒸発を見る極微ブラックホールらの観測——をなしうると後に発表するに至ったことは[黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)の在り処を知る巨人]によってブラックホール探索をなさしめていると呼ばわっているに等しい] (:疑わしきにおかれては [出典 \(Source\) 紹介の部 35](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 36\(3\)](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 39](#) を包摂する解説部を参照されたい)

→

[[古の陸塊アトランティスの崩壊伝承]は[古のトロイアに対する木製の馬の計略によ

る住民無差別殺戮「後」の洪水による城郭完全破壊伝承] (Posthomerica 『トロイア戦記』) と同様の側面を伴っているものとなる (アトランティスおよびトロイアの双方とも [ギリシャ勢との戦争の後]、[洪水]による破壊を見たとの筋立てが採用されている)。また、「巨人アトラスの娘」との意味・語法での女神「アトランティス」—— (アトランティスという語は[古の陸塊の名前]以外に Daughter of Atlas との響きを伴う語ともなり、そうした語が LHC の ATLAS 検出器に供されているイベント・ディスプレイ・ツールに供されている ATLANTIS の名にも転用されている)—— については「トロイア崩壊の原因となった果実たる黄金の林檎の園が実るヘスペリデスの園」とも「史的に結びつけられてきた」とのことがあり、といった絡みから、「黄金の林檎の園」は(アトラスと共に CERN の LHC 実験の命名規則とされているとの)「伝説上の陸塊アトランティス」の所在地と結びつけられもしていたとのことがある] (:疑わしきは出典(Source)紹介の部 40 から出典(Source)紹介の部 45 を包摂する一連の解説部を参照のこと)

→

[「ヘラクレスの 11 功業」というものは[「アトラス(1992 年より LHC 実験関連事項としてその命名が決せられた ATLAS と同じくもの名を冠する巨人)』および「黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)』と関わるもの] となるが(出典(Source)紹介の部 39)、先の 911 の事件の前言と解せられる要素を「多重的に」含む特定作品らがそうした「ヘラクレスの 11 功業」と濃厚に関わっていると指摘出来るとのこと「も」がある。

具体的には(ヘラクレス第 11 功業と 911 の事件の関係性を示すべくもまずもって挙げたところの作品としての)『ジ・イルミナタス・トリロジー』という 70 年代にヒットを見た小説作品が

[ニューヨーク・マンハッタンのビルの爆破]

[ペンタゴンの爆破] (時計表示を 180 度回転させて見てみると時計の 911 との数値が浮かび上がってくるとの 5 時 55 分にペンタゴンが爆破されたと描写 —— [180 度反転させることで 911 との数値が浮かび上がってくる数字列] をワールド・トレード・センター (の崩落) などと結びつけている文物「ら」は (複数形で) 他にもあり、本稿でそれらの特性について解説することになってもいる中での一例としての描写となる ——)

[「ニューヨーク象徴物」と「ペンタゴン象徴物」の並列配置シンボルの作中にての多用]

[米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄の描写] (現実の 911 の事件では事件後間もなくして米軍関係者と後に判明したブルース・イヴィンズ容疑者の手になるところの炭疽菌漏洩事件が発生しているが、そちら現実の状況と照応するような[米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄]との筋立ての具現化)

[関連作品でのツインタワー爆破・ペンタゴン爆破描写]

との要素らを内に含みつつもヘラクレスの第 11 功業と接合していると摘示できるとのことがある (『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品ではヘラクレス第 11 功業に登場する[黄金の林檎]が作品の副題に付されていたり、黄金の林檎を描いたものとされるシンボルが何度か図示までされて登場してきているといったことがある) (:疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 を包摂する一連の解説部、オンライン上より全文現行確認できるようになっているとの原著よりの原文抜粋および国内で流通している訳書よりの抜粋をなしつつ「どこが」「どのように」[911 の事件に対する奇怪なる前言と呼べるようなパート]となっているかにつき事細かに解説してもいるとのそちら一連の解説部を参照されたい)

→

[上にて言及の『ジ・イルミナタス・トリロジー』は

「蛇の人工種族を利用しての古代アトランティスの侵略がなされる」

「アトランティスと現代アメリカのペンタゴンが破壊されたことよってのそこに封印されていた「異次元を媒介に魂を喰らうべくも介入してくる存在」の解放がなされる」

といった作中要素を内に含んでいる小説作品「とも」なる——そこに見る「蛇の人工種族を利用しての古代アトランティスの侵略」という筋立ては一見すると先述の神秘家話柄(蛇の種族によるアトランティスに対する異次元間侵略)と同様により従前より存在していたロバート・エルヴィン・ハワードという作家の小説『影の王国』をモチーフにしていると解されるところでもあるのだが、であろうとなかろうと、奇怪なる先覚性(ナイン・ワン・ワンの事前言及)にまつわる問題性はなんら拭(ぬぐ)えぬとのことがある——。

といった「異次元との垣根が破壊されての干渉の開始」との筋立ては上述の著名物理学者キップ・ソーンに由来する著作、**BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作が(異次元との扉にも相通ずる)「ブラックホール」「ワームホール」の問題を主色として扱い、また、同じくものことで「911の事件に対する前言とも述べられる要素」をも「多重的に」帯びているとの作品として存在しているとのことと平仄が合いすぎる程に合う](：疑わしきにおかれては[出典\(Source\)紹介の部 37](#)から[出典\(Source\)紹介の部 37-5](#)に加えての[出典\(Source\)紹介の部 38](#)から[出典\(Source\)紹介の部 38-2](#)を包摂する一連の解説部の内容、そして、[出典\(Source\)紹介の部 28](#)から[出典\(Source\)紹介の部 33-2](#)を包摂する解説部の内容を参照されたい)

(振り返りの部はここまでとする)

以上、本稿従前指摘事項を振り返りもしての部と不可解に結びつく、(多く)「別の側面から」、

「[粒子加速器実験] および [ブラックホール生成挙動] が [二〇〇一年の事件(かの911の事件)] を想起させるもの」と「不可解に」結びついているように受け取れるようになってい

とのことで引き合いに出したのが直近までなしてきた『スラップスティック』関連の話である(「別のところから指摘できること」がその他のこと共々、[同じくもの方向性]を指していれば[奇怪性]、すなわち、[自然なる状況から逸脱して状況]([「不」自然性;恣意性]を示す状況)がよりもって明確に指し示されるとの観点にて引き合いに出しもしたところとなる)。

が、上の『スラップスティック』関連の話だけならば、[ただの印象論]、本稿にあって格別に強調するに値しない[印象論]にとどまるか、とも書き手たる手前自身からして見ている。

すなわち、(先述してきたところの『スラップスティック』の奇っ怪さに関わる点—[マンハッタンと色濃くも結びつけられたロックフェラー出の双子ら]についてその結合が[地球規模の重力増大]および[加速器]と結びつけられているとの点—につぎ振り返りながら表記するとして)、

[『スラップスティック』に見る[ロックフェラーに由来する双子]が確かにツインタワーとつながっている節があるとしても[ツインタワーのメタファー]を超えてのところとしての[往時未発であった911の事件に関するメタファー]とそれがつながるとは述べられないし、そもそももって、『スラップスティック』作中において「[粒子加速器]と[重力増大機

構]との双方がまったくもって意図不明に[双子の結合]と結び付けられていようともしそれが加速器によるブラックホール生成挙動のメタファーと断じること「も」できない——先述なしたところの[物理学者キップ・ソーンの911の事前言及と結びつく著作]との[ブラックホール]を介してのありうべき関係性だけでは[往時未発であった911の事件に関するメタファー]が『スラップスティック』にあつて介在していると明朗に述べることはできないし、ブラックホールの寓意が同作『スラップスティック』に介在していると断じきることできない——]

との批判は甘んじて受けねばならぬことか、と筆者自身、見ている(：先に a. から f. と振つての部を内包するところとして「甚だしくも奇怪である」とは表記しても[恣意によることは明らかである]とは表記しなかったのはそういう事情による)。そう、ここまでにて呈示の情報「のみ」が顧慮される限りには、である。

であるから、話を継続させ、述べるが、

「カート・ヴォネガットという作家(物故者／先に示したように、生前より[現代アメリカ文学にあつて最も著名な作家]との評価を確立していたとの向き)による「他の」作品らからして[同じくもの伝で問題となる]とのことがある(ために『スラップスティック』のことは軽んじることはできない)」

という[応分の事情]が山積して「ある」とのこをこれより摘示していきたい。

上にて言及したところの[応分の事情]に関わるところとして「まずもって」そこから解説することにするが、

「カート・ヴォネガットという作家の特定「他」作品が
[(問題となった作品の刊行の後に顕在化した)粒子加速器リスク論議に認められる特殊用語の供給源]
となっている」

とのことがある。

その点、粒子加速器実験に関しては「1999年」以降、

[負に帯電した[ストレンジレット]の生成に起因するリスク]

という[仮説上の粒子](ストレンジレット)にまつわるリスクが

[粒子加速器に起因する[ブラックホール暴走リスク]以外の[破滅的事態]をもたらすもの]

として巷間にて取り沙汰されるようになったとの経緯がある。

そして、そのストレンジレット・リスクにまつわる特定の表現方法(1999年以降現われたとの特定の表現方法)の命名規則がカート・ヴォネガットの60年代初出の特定小説作品に影響を受けているとのことが現実にあるとのことがある。

より詳しくは

「[ストレンジレット]というもの(亜原子粒子ことバリオンが結合して原子核になる際にストレンジクォークというものが介在すると形成される——仮説として形成されうるとされている)のがそちら[ストレンジレット]であると説明されている)が原初の超高エネルギー状態を再現する加速器実験にてたまさか生成された際に[ストレンジレットが「負に帯電」(negatively charged)しており、それがために、[コアレンセンス(ひきつけ)作用]というものをきたすと周囲のものをも同種のもの、ストレンジレットに変換しだし、地球のみならず銀河をもストレンジ化の中、崩壊させる]との懸念が取り沙汰されるようになったとのことがあり、そちら懸念上の特異なる現象

—ストレンジレットが周囲のものを同種のものに変換し出すとの特異なる現象— をして

Ice-nine[アイスナイン]

との呼称が与えられもしたとの経緯があり、そも、その [Ice-nine] との言葉の淵源は カート・ヴォネガットの小説作品 Cat's Cradle 『猫のゆりかご』 (1963) に登場する特殊な物質アイスナインに由来する

とのことが現実にあるのである。

以上、言及したところの [アイスナイン] という言葉と関わる、
[ストレンジレットリスク]

については「まずもって」本稿の冒頭部近くにての **出典 (Source) 紹介の部 1** から取り上げもしていた文書、

[Case of the deadly strangelets と題された英文文書] (表記英文タイトルの検索エンジン上での入力でそのダウンロードページを(現時点では)誰でも特定可能となつているとの PDF ファイル形式文書となり、英国にての物理学学会会員誌である Physics World 誌掲載の有識者由来の過去記事を収めたものの)

の内容を再度、引用することとする。

次のような記載が (表記文書の 19 と振られた頁よりの原文引用を再度なすところとして) なされている。

(直下、Case of the deadly strangelets よりの「再度の」原文引用をなすとして)

The trouble began a few months earlier, when Scientific American ran an article about RHIC (March 1999 pp65-70). Its title, "A little big bang", referred to the machine's ambition to study forms of matter that existed in the very early universe. Walter Wagner, the founder of a botanical garden in Hawaii, wrote a letter in response to that article. Citing Stephen Hawking's hypothesis that miniature black holes would have existed moments after the big bang, Wagner asked whether scientists knew "for certain" that RHIC would not create a black hole.

Scientific American printed Wagner's letter in its July issue, along with a response from Frank Wilczek of the Institute for Advanced Study in Princeton. Physicists hesitate to use the word "impossible", usually reserving it for things that violate relativity or quantum mechanics, and Wilczek called RHIC's ability to create black holes and other such Doomsday ideas "incredible scenarios". Amazingly, however, he then went on to mention another Doomsday scenario that was more likely than black holes. It involved the possibility that RHIC would create a "strangelet" that could swallow ordinary matter. But not to worry, Wilczek concluded, this scenario was "not plausible".

It was the July 1999 issue of Scientific American containing the Wagner-Wilczek exchange that then inspired the Sunday Times article in mid-July. This was followed by much more press coverage, and the filing of a lawsuit, by Wagner himself, to stop the machine from operating.

Shortly before the July issue of Scientific American was published, Brookhaven's director John Marburger learned of the letters, and appointed a committee of eminent physicists (including Wilczek) to evaluate the possibility that RHIC could cause a Doomsday scenario. After the Sunday Times article appeared, CERN's director-general Luciano Maiani — fearing a similar reaction to the Large Hadron Collider that was then in the planning stages - did likewise.

(上の引用部に対する拙訳として)

「問題はサイエンティフィック・アメリカン誌が加速器 RHIC についての記事 (1999 年 3 月号 65-70 ページ) を掲載した時より数か月前に遡る。『小さなビッグバン』とタイトルが付されていた同記事は [極めて早期の宇宙にて存在していた物質の組成を研究する装置の野心的側面に言及していた] とのものだった。ハワイの菜園の創立者となっていたウォルター・ワグナーがその記事に対してのものとしての手紙を書いてよこしてきた。[ビッグバン直後、ミニブラックホールが存在していた] とのステイブン・ホーキングの仮説を引用しながら、ワグナーは「科学者らは加速器 RHIC (訳注: 『小さなビッグバン』と題されての記事にて取り上げられていた加速器) はブラックホールを生成することがないとはきと分かっているのか」と訊ねてきた。

サイエンティフィック・アメリカンは 7 月発行版にプリンストン高等研究所のフランク・ウィルチェックよりの応答を脇に添えてワグナーよりの投書を載せた。物理学者というものは通例、相対性理論や量子力学の法則を侵すものに言及するとき、「不可能である」との言葉を使うのに躊躇するきらいがあり、ウィルチェックは RHIC によるブラックホール生成能力、および、その他に [黙示録のその日] に通ずる観念につき [信じられるものではない] と表した。

だがしかしながら、驚くべきことに、彼 (ウィルチェック) はブラックホールよりさらにありえやすくもある黙示録のその日の現出的状況 (ドゥームズ・デイ・シナリオ) に言及することまでなした。それは RHIC が通常の物質を呑みこみうるストレンジレットを生成する可能性を指し示して見せた、とのものであった。しかし、「心配することなかれ」とし、ウィルチェックは「このシナリオは plausible ではない」(「ありえることではない」あるいは「もっともらしくは見えない」と結論付けた。

後の 7 月中旬のサンデー・タイムズ紙の記事に影響を与えたのは 1999 年 7 月のサイエンティフィック・アメリカン誌のワグナー・ウィルチェック書簡を含む版である。これがより多くの紙誌における取扱い、そして、稼働中のマシンを止めるためのワグナー彼自身のものにもよる訴訟の提訴によって後追いされることになった。

サイエンティフィック・アメリカン誌の 6 月発行より少し前、ブルックヘブン国立研究所の所長ジョン・マクバーガーは書簡をめぐる状況を知り、RHIC が [黙示録のその日の現出的状況] を引き起こしうるかの可能性について見極めさせるためのウィルチェックを含む令名馳せていた物理学者らによる委員会を設立していた。サンデー・タイムズの記事が世に出た時には計画推進段階にあったラージ・ハドロン・コライダーにつき同じくもの反応が出てくることを危惧した CERN の所長ルチアーノ・マイアニも同様のことをなした」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のようなかたちで、そう、本稿 [出典 \(Source\) 紹介の部 1](#) の部より再引用した文書の記載に見るように巷間にてその発現可能性が問題視されるようになったとのストレンジレット・リスクではあるが、同リスクはそれが前世紀末にて問題視されだした初期より、

[アイスナイン]

という言葉 —— 先述のようにカート・ヴォネガットの 60 年代小説の作中設定に由来を求められる言葉 —— と結びつけられるようになっていたとのことがある (: 上にての引用部に認められる [ワグナーとのやりとり] でストレンジレット・リスクのことに言及して物議を醸すこととなったとの物理学者フランク・ウィルチェックの言いようそれ自体に通ずるところで [アイスナイン] という言葉とストレンジレット・リスクが結びつけられるようになったとのことがある)。

その点については「オンライン上より誰でもダウンロードできるところとなっている」実験機関安全報告

文書、すなわち、

Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet?

と題されての CERN 安全性報告文書に言及がなされている(のでそちら記述を下に引いておくこととする。尚、同じくもの Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet?と題されての報告文書——タイトルは和訳すれば、『加速器 RHIC は地球を壊しうるか』との[滑稽]染みた側面が感じられもするものだが、衆に加速器安全性を訴求するためにリリースされているとの公式報告書—— については 1999 年にあつて加速器 RHIC 安全性を問題視するとの風潮が生じた際に CERN より出された安全報告文書となり、本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 1](#)にてそこよりの原文引用をなしているとの文書「とも」なる)。

(直下、加速器実験機関の 1999 年報告書 Will relativistic heavy-ion colliders destroy our planet?にあつての 1 と振られてのページ、Introduction の部より原文引用するところとして)

There has been a recent surge of concern regarding the possibility that "strangelets" — hypothetical products of these collisions — may initiate the destruction of our planet. **The trigger of this characteristically millenarian concern may have been a comment by Frank Wilczek in the July 1999 issue of Scientific American, comparing strangelets to "ice-9", a sciencefiction substance that would, on contact, freeze an ocean.**

(拙訳として)

「それら加速器にあつてのビーム衝突過程にての[仮定的生成物]とされているところの[ストレンジレット]が私たちの惑星の崩壊を引き起こしうるとの可能性にまつわる懸念が近年の潮流として取り沙汰された。この[特徴としては[新千年期関連の懸念;ミレニアムコンサーン](訳注:宗教的終末論に対する言及となる)ともなろう]ところのものが取り沙汰されだした契機は 1999 年 6 月にあつてのフランク・ウィルチェックによるサイエンティフィック・アメリカン誌に対するコメント、サイエンス・フィクションの領分のものとなっている[接触した大洋を凍らしめるとのアイスナイン]と[ストレンジレット]を比較してのコメントにあつたようである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上の記述に見るように、

[実験機関(CERN)公式報告文書の中で [[ストレンジレット・リスク] がサイエンス・フィクション上の概念たる [アイスナイン] と関わるようになっている]との指摘がなされている —— 1999 年のフランク・ウィルチェックの科学誌(『サイエンティフィック・アメリカン』)に対する申しようそれ自体にあつて同じくものが顕在化していたとの式で指摘がなされている——]

わけである(“ The trigger of this characteristically millenarian concern may have been a comment by Frank Wilczek in the July 1999 issue of Scientific American , comparing strangelets to "ice-9", a sciencefiction substance that would, on contact, freeze an ocean.” (訳として)「この[特徴としては新千年期関連の懸念(訳注:宗教的終末論に対する言及となる)ともなろう]ところのものが取り沙汰されだした契機は 1999 年 6 月にあつてのフランク・ウィルチェックによるサイエンティフィック・アメリカン誌に対するコメント、サイエンス・フィクションの領分のものとなっている[接触した大洋を凍らしめるとのアイスナイン]と[ストレンジレット]を比較してのコメントにあつたようである」との部が該当部となる)。

さて、[有害なるストレンジレット生成懸念]が「サイエンス・フィクション上の概念たる」[アイスナイン]と結びつくようになっていっているとされているわけだが、そこに見る [Ice nine]のそもそもの由来がカート・ヴォネガットの小説 Cat's Cradle『猫のゆりかご』(1963 年初出/『スラップスティック』より 13 年前に

登場を見た作品) にあるとのことの典拠を続いて挙げることとする。

出典 (Source) 紹介の部 65



SOURCE

65

ここ出典 (Source) 紹介の部 65 にあつてはカート・ヴォネガット小説がそもそもの [アイスナイン] との言葉 — 90 年代末葉のストレンジレットにまつわる加速器議論動向にて破滅的事態を形容する言葉として物理学者フランク・ウィルチェックに持ち出された言葉 — の語源となっていることの典拠を目に付くところから挙げておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia [Ice-nine] 項目にあつての現行記載内容よりの引用をなすとして)

Ice-nine is a fictional material appearing in Kurt Vonnegut's novel *Cat's Cradle*. Ice-nine is supposedly a polymorph of water more stable than common ice (Ice Ih); instead of melting at 0 °C (32 °F), it melts at 45.8 °C (114.4 °F). When ice-nine comes into contact with liquid water below 45.8 °C (thus effectively becoming supercooled), it acts as a seed crystal and causes the solidification of the entire body of water, which quickly crystallizes as more ice-nine.

(訳として)

「アイスナインはカート・ヴォネガット小説『猫のゆりかご』に見る架空の物質である。同アイス・ナインは通常の水 (Ice Ih) よりもより安定的なる想像上の変種となり、通常の水が摂氏 0 度 (華氏 32 度) を融点とするのに対して同アイスナインは摂氏 45. 8 °C (華氏 114. 4 度) にて溶ける — (摂氏 45. 8 °C 以下では凍る) — となり、種結晶として振る舞い、そのために、水の全部を凝固化なさしめ、より多くの (あらたに生まれた) アイスナインでもって即座に (連鎖反応による) 結晶化を実現なさしめるとのものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする — ※ —)

(※尚、以上のようなアイス・ナインの性質よりヴォネガット小説ではアイスナインが撒かれた海は氷と化すといった描写がなされてもいる —— 筆者手元にある訳書『猫のゆりかご』(早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第21刷のもの)p.98より原文引用をなすとして) “空ほどもある巨大な門がそっとしまるような、天国の大扉がひっそりとしまるような、そんな音がした。壮大なズシーンだった。目をあけた一すると、海全体がアイス・ナインだった” (引用部はここまでとする)とあるとおりである——)

(続いて、直下、和文ウィキペディア[猫のゆりかご]項目の現行にあつての記載内容よりの引用をなすとして)

『猫のゆりかご』(Cat's Cradle)は、1963年に出版されたカート・ヴォネガットのSF小説。軍備拡張競争をはじめとする様々な標的を風刺しながら、科学、技術、宗教といった問題を探求する。シカゴ大学は、ヴォネガットの元々の修士論文を却下したが、1971年に『猫のゆりかご』をもってヴォネガットに人類学の修士号を授与している。

…(中略)…

小説が進むにつれ、語り手は「アイス・ナイン」と呼ばれる物質が、晩年のハニカーによって作り出され、今はその子供達が隠し持っていることを知るようになる。アイス・ナインは、水の結晶形のひとつで、室温で固体の性質を有する。アイス・ナインの結晶は、液体の水に触れると、液体の水の分子に固体の形に配列する方法を教える種になる。これは、通常の水が凍る過程によく似ている。ただし、アイス・ナインの場合、融点が摂氏 45.8 度(華氏 114.4 度)なので、簡単には水に戻らない。

(引用部はここまでとする)

[出典(Source)紹介の部 65]はここまでとする)

ここまででもってして

[ストレンジレット生成リスク]

をしてカート・ヴォネガット小説『猫のゆりかご』に登場する Ice Nine と呼びならわす慣行が形作られた背景について(不十分ながら)論じたが、同じくものことについては

「旧ソ連の科学者に由来するポリウオーター・スキャンダルのことも関係しているのではないか」

と考える向きもあろうか、と思う(ポリウオーター・スキャンダルというものと小説作品『猫のゆりかご』に登場するアイス・ナインの類似性については —— 続いてそこよりの引用をなすように —— 和文ウィキペディアにも解説されているようなところとなる)。

その点、

[1960年代、ソ連の科学者、Nikolai Fedyaikin ニコライ・フェダヤキン(一部ではボリス・デリャーギンともされる)が「発見」と主張することになった新物質、多くの水分子化が重

合している(ポリマー化を見ている)がゆえにポリウォーター (polywater) と呼称されるに至った新物質(後に存在自体が否定される)が自然界に放出されると地球上の水がすべてポリウォーター化することになりうるとのことで大騒動となった]

とのことがあるために(誰でも即時確認可能な和文ウィキペディア[ポリウォーター]項目の現行記述内容より一言のみ引用すると(以下、引用なすとして)“また、理論計算からポリウォーターは通常の水より安定した状態であると導かれたため、ひとたびポリウォーターが自然界に放たれると凝集核として作用し、地球上の水を全てポリウォーターに変化させてしまうのではないかと危惧された”(引用部はここまでとする)と解説されているような経緯があるために)、

「水に混ぜると常温で周囲の [水] を [氷] へと相転移させだす物体(アイスナイン)が登場する」

との意味にて

[質的にそっくりなものとしてポリウォーター・スキャンダルのことを意識させるものであった]

ためにヴォネガット小説『猫のゆりかご』が話題をさらいやすかったということは確かにあるのであろうと解されるようになってもいる (：フィクションならぬ現実世界で発生したポリウォーター・スキャンダルと小説『猫のゆりかご』(にてのアイスナインにまつわる描写)が親和性高いものであるとの指摘がなされていることについては(和文ウィキペディア[猫のゆりかご]項目にあつての現行の記載内容より一部引用をなすとして)“アイス・ナインは、水の結晶形のひとつで、室温で個体の性質を有する。アイス・ナインの結晶は、液体の水に触れると、液体の水の分子に個体の形に配列する方法を教える種となる。…(中略)…ただし、アイス・ナインの場合、融点が摂氏 45. 8 度(華氏 114. 4 度)なので、簡単には水に戻らない。…(中略)…後にポリウォーターが「発見」され、水より安定な状態とされたため同様の危惧がなされたが、そのような状態は実在しないことが判明したため、全くの杞憂で済んだ”(引用部はここまでとする)といった表記よりも後追いできるところとなっている)。

以上のようなポリウォーター絡みの背景があつて

『なるべくしてアイスナインのことが実験関係者によってストレンジレット・リスク性質を論ずるうえでの材料として取り上げられるに至ったのではないか。それがゆえに、[アイスナイン]のことを 1960 年代小説(『猫のゆりかご』)から登場させている小説家カート・ヴォネガットの 70 年代にての別小説(『スラップスティック』)がブラックホールのことを隠喩的に持ち出している——ストレンジレットと並行して[加速器による災厄の因]と批判家らによって言及されるに至ったブラックホールのことを隠喩的に持ち出している——ように「見える」ことがあつてもそのことを[アイスナインと後にて問題視されるようになった加速器リスク(ストレンジレット生成問題)との関係]でとらえようとするのは妥当ではないように受け取れる』

と考える向きもあるやもしれない。

だが、そうした見立て、

「科学界をかつて極めて騒がせもしたポリウォーター騒動があつたからこそそのアイスナインとストレンジレットの結び付けであり、そこに不自然なところはないし、ブラックホールとヴォネガット小説の間に関係はない」

との常識的な見立てについては次のようなことからして

「物事はそのようには楽観的に見られないだろう」

と述べる次第である。

「(Wikipedia の Polywater 項目に掲載されているように)周囲の水を同種のものに変換し出す Polywater のことが世界中の科学者にまともに、かつ、目立って検討される(そして後に否定される)ことになったのは 1966 年より「後」のことであると「され

ている」。

対してヴォネガット小説『猫のゆりかご』の発表時期は1963年であるのだから、ヴォネガット小説は
[ポリウォーター・スキャンダルのことが起こるとの事を予言していたが如き作品である]

ようにもとれる(：一言で表記すれば[Cat's Cradle(1963), Polywater scandal(1966(1969)一)]となっている — 尚、ポリウォーター関連の始原期論文の出は1961年から1962年であるとの説もあり、1969年に出たウォールストリートジャーナルなどは1961年がそれ絡みの論文の登場時期だと指摘している —)。

ただ、述べておけば、そのような先覚的言及(ととれるところ)に関してはヴォネガットの兄が

[ヨウ化銀を用いての[人工降雨]のメソッドの先駆的提唱者(40年代にあつての先駆的提唱者)の一人]

として著名な人間となっている(その同僚の Vincent Schaefer ヴィンセント・シェーファーと並び著名な人間となっている)とのヴァーナード・ヴォネガット Bernard Vonnegut その人となりもし、人工降雨の内、ヨウ化銀を用いる手法が[アイスナイン]の着想に通じうるようなものととれるようなところもあるにはある(1940年代に自身の兄が提唱したところから着想を得てカート・ヴォネガットはアイスナインを考案したのであって、ヴォネガットやりようにはその後のポリウォーター・スキャンダルを予言するような側面はないとの物言いもまたなせるようにはとれる)。につき、(和文ウィキペディア[人工降雨]項目にも同じくものこと記載されているように)[ヨウ化銀が氷の結晶(六方晶形)に組成が似ているために、ヨウ化銀撒布で雲の中での氷の生成を助け降雨を誘発する;雲の中に氷の結晶を人為的に生成しそれでもって降雨を誘発する]というのがヨウ化銀使用人工降雨のやりようとなっており、カート・ヴォネガットの兄たるバーナード・ヴォネガットがアイデア提唱にあつての嚆矢となっているとのことも容易に確認できるようになっている(英文 Wikipedia[Bernard Vonnegut]項目にて “ It was there, on November 14, 1946, that he discovered that silver iodide could be used as a nucleating agent to seed clouds. Seeding clouds involves inserting large quantities of a nucleating agent into clouds to facilitate the formation of ice crystals. The intent of this process is to cause the clouds to produce rain or snow. Rain- and snow-making companies still use silver iodide as a nucleating agent in seeding clouds. ” (大要)「1946年、バーナード・ヴォネガットは降雨・降雪の媒質用いてのやりようを発見した。[氷結晶への凝集化触媒としてヨウ化銀が用いることで]降雨・降雪を誘発するとの手法ははまだ人工降雨提供者によって用いられている」と掲載されているとのことがある)。

とにかくも、である。差し引いて見るべき要素も幾点もあるが([作家の兄]が[氷の結晶の組成]を利用しての[人工降雨メソッドの発見者]となっている、スキャンダルの勃発以前にポリウォーター概念について作家が作品執筆前に知ることが出来た可能性もある)、ヴォネガット申しよはポリウォーター・スキャンダルとの絡みからして[先覚性]を帯びていると解されるようなところがあり(上述の[1963年]と[1966年]の差分の問題)、同ヴォネガットに由来する[加速器によるブラックホール生成問題に対する隠喩的言及「ととれるもの」]については — ポリウォーターとの比較をなすとのそのこと自体からとらえたうえで、でも — 予断を持って見ることはできないとの側面がある。

また、かてて加えて(より性質が悪いことに)、カート・ヴォネガットやりよとの絡みではその「他」の同男の手になる小説(既述の『スラップスティック』や『猫のゆりかご』以外の他の小説)にあつて「も」[化け物がかったかたちでの先覚性]が具現化を見ているとのことがあり、それがために、(黒白における)[無害なる白][放念して構わ

ぬ白に近き灰色]は何にせよ、ほとんど観念できないようになってしまっているとのことがある」

(さらに述べれば、である。[ヴォネガット 60 年代小説に由来するアイスナインとの言葉のここ最近の加速器リスク問題の中での使用動機]との兼ね合いでは次のように考えている科学者もいる「とも」受け取れはする。『1) Ice-nine というものは water[水]←→ice[氷]との Phase Transition[相転移]に関わる関わる架空の物質である。2) [相転移]と来れば、かつて加速器にあって Vacuum Phase Transition [[真空の [相転移]] にまつわっての懸念 ([暫定的な偽の真空の間] と [真の真空] の間の [相; フェーズ] の転移が加速器によって引き起こされ宇宙の崩壊が引き起こされるとの懸念) のことが一部にて問題視されたことがあり (本稿でも、にまつわっては、**出典 (Source) 紹介の部 14** で委細に踏み込んでの解説をなしている)、そういう前歴の延長線上にあるところとして加速器実験をなす者達の用心棒として呼び出された節がある第一線の物理学者 (後の 2004 年にノーベル物理学賞受賞の運びとなったフランク・ウィルチェック Frank Wilczek) が安全性にまつわるやりとりで敢えてもヴォネガットのアイス・ナインのことを引き合いに出したのではないか?』。だが、同じくものこと「も」結局のところ、ヴォネガットの (以降解説なししていくとの) 他のやりようから斥けられる (斥け「られてしまう」) との「[欺瞞としての常識] 固執の見立て」の範疇を出でぬものと述べざるをえない)

これにて

「ヴォネガット小説と [ストレンジレット・リスク] の関係性からして問題になるようなところがある」
とのことにまつわる解説を終える。

さて、ここまでにあって著名作家カート・ヴォネガット (繰り返すが、同ヴォネガット、米国文壇の寵児にして米国現代文学の牽引者として論じられていた程度の著名作家である) の手になる、

Slapstick 『スラップスティック』 (1976)

Cat's Cradle 『猫のゆりかご』 (1963)

の両二作が

[加速器によるブラックホール生成]

[加速器による破滅的リスク]

と相通ずるようになってきていることの意味性を問題視してきた (専らにしてヴォネガットのそれら作品にみとめられる [奇怪な先覚性] との絡みで、である)。

上のこと、端的に述べたうえで本稿初言及の内容に入る。

(カート・ヴォネガットやりようが何故、問題になるのかについての話をさらに続けることとし)、カート・ヴォネガットやりようとの絡みで注視すべきことには同男が

The Sirens of Titan (邦題) 『タイタンの妖女』 (1959)

という小説作品をものしているとのことも挙げられる。

トロイアを木製の馬で滅ぼした武将オデュッセウスがトロイア崩壊後の帰郷の旅にあって苦しめられたとの人面鳥身の怪物たる [サイレン] の名を複数形 (サイレンズ) でもってして原著表題ザ・サイレンズ・オブ・タイタンに冠する ——サイレンがトロイア崩壊をもたらしたオデュッセウスを苦しめた怪物である

とのことについては直下出典紹介部を参照のこと—— どの同小説作品（**The Sirens of Titan**（邦題）『**タイタンの妖女**』）からして際立っての先覚性と絡みで「奇怪性」が問題となる作品となっていると
のことがあるのである。

そちらカート・ヴォネガットの著作 **The Sirens of Titan** 『**タイタンの妖女**』にてあつての表題に見るサイレンズが元来にしてホメロス叙事詩『オデュッセイア』に登場する人面鳥身の怪物であることを紹介することから話をはじめるといったこととて本稿の後の段の指し示しに影響するからこそ、そこから指し示しをなしておく（直下、出典紹介部を参照されたい）。

出典 (Source) 紹介の部 65(2)



SOURCE

65(2)

ここ出典 (Source) 紹介の部 65(2) にあつては

[小説『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』(邦題『**タイタンの妖女**』)の表題に付された「サイレン」の由来がホメロス叙事詩『オデュッセイア』に登場する人面鳥身の怪物に由来すること]

の典拠を挙げることにする。

表記のことについてはまずもって和文ウィキペディア[サイレン]項目より次の記述を引いておく。

(直下、和文ウィキペディア[セイレーン]項目にての現行記載内容よりの中略なしつつもの引用をなすとして)

「セイレーンは、ギリシャ神話などに登場する西洋の伝説上の生物。ギリシャ神話においては、上半身が人間の女性で下半身が鳥の姿をしているとされている海の怪物。…(中略)… 英語では「妖婦」という意味にも使われており、カート・ヴォネガットの小説『**タイタンの妖女**』の原題にも普通名詞として複数形で使用されている。…(中略)… 元はニュムペーで、ペルセポネーに仕えていたが、ペルセポネーがハーデースに誘拐された後に怪鳥の姿に変えられ

た。…(中略)… 海の航路上の岩礁から美しい歌声で航行中の人を惑わし、遭難や難破に遭わせる。歌声に魅惑されて殺された船人たちの死体は、島に山をなしたという。…(中略)… ホメロスの『オデュッセイア』に登場する。オデュッセウスの帰路の際、彼は歌を聞いて楽しみたいと思い、船員には蠟で耳栓をさせ、自身をマストに縛り付け決して解かないよう船員に命じた。歌が聞こえると、オデュッセウスはセイレーンのもとへ行こうと暴れたが、船員はますます強く彼を縛った」

(引用部はここまでとしておく)

また、さらにビブリオテーケー (**BIBLIOTHEKE**)、日本では『ギリシャ神話』と書物内容そのままに題名訳され流通しているとの同ギリシャ神話網羅的紹介書の中に [怪物サイレンの概要紹介] にまつわるくんだり認められるので、そちらよりの引用もなしておくこととする。

(直下、岩波文庫版『ギリシャ神話』(アポロドーロス著／故高津春繁東京大学名誉教授の訳)にあつての [オデュッセウスがトロイアよりの帰路にあつての船旅の折、逗留することになった魔女キルケーの元から出立後、すぐに際会することとなった出来事] に言及したパートとなる p.205 から p.206 よりの引用をなすとして)

(オデュッセウスは) キルケーの所に来て、彼女に送られて海に出て、セイレーンの島を通過した。セイレーンはアケローオスとムーサの一人たるメルポメネーの娘で、ペイシノエー、アグラオペー、テルクシエペイアであった。この中の一人は堅琴を断じ、一人は唄い、一人は笛を吹き、これによってそこを航し過ぎる船人を留まるように説かんとしたのである。太腿(ふともも)から下は彼女らは鳥の姿をしていた。これを過ぎる時、オデュッセウスはその歌を聞こうと欲して、キルケーの教えにより仲間の耳を蠟(ろう)で塞いだが、自分自身はマストに縛りつけるように命じた。そしてセイレーンたちによって留まるように説かれ、縛めを解いてくれるように頼んだが、仲間の者はなおさら彼を縛り、かくして航し過ぎた。セイレーンは、もし船が航し過ぎることがあれば死ぬという予言があつた。かくして彼女らは死んだ。

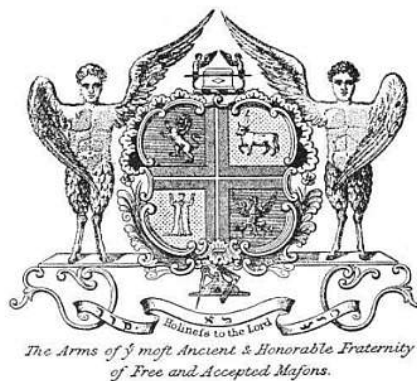
(引用部はここまでとしておく)

(**出典(Source) 紹介の部 65(2)**は以上とする)

(続いてサイレン似姿にまつわつての図解部を設けておく)



Siren



上にて呈示しているのは Siren 似姿を描いている(ないしそれと思しきものを描いている)との図葉らとなる。

最上段右側。同図、Project Gutenberg にて公開されている *Curious Creatures in Zoology (1896)* という書籍に掲載されているとのサイレンを欧州人が往古いかようにして描いていたかについての紹介図像となり、「Pompeii (火山噴火で丸ごとタイムボックスとなった古代都市ポンペイ)の遺物構図を再現したものである」と表記されているものとなる。

対して、最上段左側。同文に Project Gutenberg にて公開されているとの *MYTHS OF GREECE AND ROME* との著作、そこにて掲載の彫像写真となる(書籍刊行往時

にてはアテナの美術館にて収蔵されていたとのことが明示されているサイレン像)。

中段。フリーメーソン交流会館たるロッジ、の中でも影響力が強かったとされる本源的ロッジ、Ancient (Antient) Grand Lodge of England を表象するシンボルとしてかつて使用されていた紋章とのことで英文 Wikipedia [Ancient Grand Lodge of England] 項目に掲載されている図葉を挙げたものとなる。同図葉についてフリーメーソンは

「そこにて描かれているのは船乗りを座礁・溺死に誘うとの妖異サイレンなどではなく、Ark of the Covenant (モーセが十戒を収めた契約の箱 / 呈示のフリーメーソン・シンボルにもそれと思しき箱状のものが中央上部にて描かれているもの) とワンセットに描かれるキリスト教神学体系における智天使 (Cherub ケルブ)] である」

との強弁をなすことか、とも思われはするが、その図葉化のありようは [ケルビム] などではなく [サイレン] であろうとのものである (: 旧約聖書『エゼキエル書』に見るケルブ似姿にまつわる記述は [ライオン・牛・鷲の顔が人のそれと融合した四つの顔・四つの羽を持つ存在] とのものであり — 英文 Wikipedia [Cherub] 項目にて “ **In Christian art they are often represented with the faces of a lion, ox, eagle, and man peering out from the center of an array of four wings (Ezekiel 1:5-11, 10:12,21 Revelation 4:8)** ” と表記されているとおりである——、それがゆえ、オースドックスな天使というよりも [鳥と人間の目立っての混交型] であるとの (団体表象シンボルに見る) 上にて呈示の存在をケルビムと見ることには難がある。尚、といったサイレン状の存在を二対並べての紋章を掲げた Ancient Grand Lodge of England は既にグランド・ロッジ (中枢拠点) としての勢力を擁していないとされるが、ほぼデザインを同じくもする紋章が現況フリーメーソンの世界的中枢拠点、United Grand Lodge of England にて採用されていることも英文 Wikipedia 程度の媒体を通じても容易に確認できるようになっているとのこと、申し添えておく。

下段。Project Gutenberg のサイトにて公開されている Washington's Masonic Correspondence (『ワシントンのフリーメーソンとしての私信』とでも訳すべき著作。1915 年刊行) に見るシンボルを挙げてのものとなる。

サイレンの名を冠するヴォネガット小説作品 The Sirens of Titan こと『タイタンの妖女』、1959 年に初出を見たとの同作は

[異星人に推進された人類「育種」の究極目標が [くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助] であったとの内容を有している作品]

であり(後に続けての [出典 \(Source\) 紹介の部 65 \(3\)](#) で典拠を紹介すること、前もって言及しておく)、なおかつ、

[時間等曲率漏斗 (Chrono-synclastic-infundibulum クロノ・シンクラスティック・インファンディブラム) と呼称される [空想上の時空間回廊] が作品上のキー概念のひとつとして描かれている作品]

となっている (: 後に続けての [出典 \(Source\) 紹介の部 65 \(4\)](#) で典拠を紹介すること、前もって言及しておく)。

加えて、

[(直近言及の) [時間等曲率漏斗] の終端部が「何故なのか」赤色巨星ベテルギウス

(Betelgeuse)に設定されている作品]

ともなる(後に続けての **出典(Source) 紹介の部 65(4)** で典拠を紹介すること、前もって言及しておく)。

追って細かくも原文引用なしながらも指し示すように[文献的事実]として上のような内容を有しているとの『タイタンの妖女』という作品だが、同作につき本稿では[以下の観点]から軽んじざるべきものであると問題視するところである。

(これよりどうしてそのようなことが述べられるのかの詳述をなすところとして『タイタンの妖女』という作品には次のような側面が伴う)

第一。

(直近、言及しているところに見るように)

「異星人に推進された人類「育種」の究極目標が[くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助]であった」

という同作の粗筋にあってきがりとなるところとして

[地球は[地球質量]から見てブラックホールに換算すると cm (センチメートル) 単位のものにしかない]

との言われようがなされている —— 換言すれば、「地球をそうしたサイズに圧縮すればブラックホールができあがる」とされている—— とのことがある(：後の **出典(Source) 紹介の部 65(3)** の部で典拠を紹介する。につき、この段階では『だからどうしたんだ? 何をばかばかしいこじつけを。』と思われよう向きも[まじめな読み手]の中にはおられると思うのであるが、続く段を読んでいただきたいものである)。

第二。

[(つい先立っての段にて言及していたところとして) 小説『タイタンの妖女』で重視されている時間等曲率漏斗(なるもの)の終点が赤色巨星ベテルギウスであったと設定付けられている]

とのこともが[ブラックホール]との絡みで不気味に映るとのこと「も」またある。

知識を有していないとの向きから見れば[気まぐれ]を超えての意味合いでは[『タイタンの妖女』に対するベテルギウス関連の設定の付与]の理由が「ない」とも思われるところであろうが、

[ベテルギウスの赤色巨星としての終焉が「小説『タイタンの妖女』刊行より後の日 — 時期的先後関係が重要となるところにての[後の日]— にて現実世界にて導き出された知見より」「近々の」ブラックホール化であるとの見方が(人類に災厄をもたらしかねない[ガンマ線バースト]との現象に関わるところとして) 目立って問題視されるに至っている]

とのことがあり、また、と同時に、

[『タイタンの妖女』にてベテルギウスを終点としていると(何故なのか)設定付けられている[時間等曲率漏斗]というものが[くろぼち(・)ひとつよりなる親書を他星系に届けるための人類の育種]と当該フィクションの中で「濃厚に」結びつけられている]

とのこと「も」があり、もって[相応の寓意性]を感じさせる、それがゆえ、[不気味に映る]と申し述べもする。

(：整理すれば、[くろぼち(・)マークのみよりなる親書の伝達のための人類育種]と

[近々のブラックホール化を伴っての現象の発現可能性が(小説の刊行後に)目立って問題視された天体](時間等曲率漏斗のゴールとしてのベテルギウス)とが結びつけられていることにつき、(地球相当の質量をブラックホールに引き直すと[cmメートル単位のブラックホール]が導出されるとの現代物理学にての指摘のされよう(先述)も加味

して)、奇怪性が感じられると述べたいのである(お分かりだろうとは思うのだが、『タイタンの妖女』刊行の折にはベテルギウスのブラックホール化が目立って問題視されるような事情(ガンマ線バーストという現象に関わる事情)が取り沙汰されていなかった——時期的先後関係の問題も続いての段にて遺漏なくも解説試みる——がゆえに奇怪である」とも述べているのである)。につき、そうしたことらについては本稿の続いての段、**出典(Source)紹介の部65(4)**で典拠を紹介すること、前もって言及しておく。また、(詰め込み過ぎのきらいあるかとは思うのだが、そこを敢えて書くところとして)、作家ヴォネガットやりように関しては『タイタンの妖女』より後の作品らにあって「も」時期的に不可解なる言及がなされているとのこと、既に先述しているところともなる。すなわち、「粒子加速器リスクに用語転用されたストレングレット・リスクやそれ以前のポリウォーター事件と結びつく概念たる「アイスナイン」を「先覚的に」登場させている作品をヴォネガットはものしている」(1963『猫のゆりかご』)、「「粒子加速器」が「重力の怪物」と結びつくように隠喩的に匂わせての「先覚的」作品をヴォネガットはものしている」(1976『スラップスティック』)とのことらについて既に先述しているとのことがある——「であるから、」『タイタンの妖女』にあって人類育種の究極的目的が[くろぼちひとつ(シングル・ドット)よりなる親書の送達であった]との設定が(「どうしてこういう粗筋が?」との塩梅で)採用されていることからして[意味性介在の可能性を言下に否定する]のは賢明なやりようではない(というより愚劣極まりないやりようである)と申し述べたいのである——)

第三。

「(上の第一、第二のことに加えて)カート・ヴォネガットの『タイタンの妖女』は同男由来の『タイムクエイク』(1997)という他小説と一緒に見た場合に[911の事件の前言をなしているが如く小説]に化けるようなものであるということ「も」ある」

とのことがある。

その「911の事件の前言をなしているが如く小説に化ける」との側面が[偶然の賜物]ではないから「問題になる」と申し述べたきところとして、である(「911の事件の前言をなしている」などと述べると『何を奇矯なことを』と思う(あるいはそういうスタイルにて[情報処理]する)との人間が過半なところか、とも当然に思うのだが、[奇矯なること]は[真実ではないこと]と同義ではない。そして、本稿はそうした[奇矯なること]がいかにか相応のものとしてそこにあるのかの論拠を(容易に第三者が後追い出来るのかたちにて)入念に摘示することに重きを置いてのものともなる)。

※上にての第一、第二、第三の点にあっての第三の点、

[『タイタンの妖女』がそれ以降のヴォネガット小説『タイムクエイク』と複合顧慮することで[911の事件の前言をなしているが如く小説]に化ける]

とはどういうことか。

具体的典拠解説をなす前にそうも述べるところの理由につき「まずもって」の言及をここになしておく(出典紹介は本稿のより後の段でなすとして「まずもって」の言及をここになしておく)。

上記の三点の内の第一点目のこと——『タイタンの妖女』では「異星人に推進された人類「育種」の究極目標が[くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助]であった」との粗筋が採用されているとのこと——とも関わるところとしてまずもって述べるが、The Sirens of Titan(『タイタンの妖女』)という作品にあっては
[人類文明の操作をなしている存在の拠点]
が[土星の衛星タイタン]に置かれているとの設定が採用されている(:くろぼち

(シングル・ドット)一つよりなる親書を異星系に送り届けようとした異星人の使節のスペースシップがそこにて故障したからであるなどとの設定が採用されつつ、である)。

その土星の衛星タイタンには[三対の艶やかな美人たちの像](その立像が[サイレン]こと[妖女])に見立てられており、ザ・サイレンズ・オブ・タイタンとのかたちでの原著タイトルが付されている由来ともなる)らが据え置かれているとの設定が同作には採用されている(表記のことについては後に続けるの**出典**(Source)紹介の部 65(12)で小説そのものよりの原文引用とのかたちで典拠を紹介すること、前もって言及しておく)。

そうした The Sirens of Titan ((邦題)『タイタンの妖女』)の内容 —タイトルに付されている妖女ら(サイレンら)の由来としての艶やかな女らの彫像が木星の衛星タイタンに据え置かれているとの内容— を意識してのものにとれるのがカート・ヴォネガットの後の作品たる Timequake 『タイムクエイク』という小説作品(『タイタンの妖女』刊行後、40年近く後に刊行された1997年初出の作品)である。

何故、『タイムクエイク』が『タイタンの妖女』(の三対の妖女らの像)を意識したものととれるか、と述べれば、同作『タイムクエイク』では作中登場人物たる小説家が没にしたとの設定の

[B-36の三姉妹]という作中「内」小説]

が登場するとのことがあるからである。につき、(フィクションの中でフィクションへの言及がなされるとの体裁がとられるわけだが)、『タイムクエイク』作中「内」小説たる[B-36の三姉妹]は字義通り三姉妹の物語であり、そのことが『タイタンの妖女』の[三人ワンセットの女の像]と結節するように見えるとのことがある。さらに述べれば、『タイムクエイク』の[時空間の異常構造]にまつわる作中設定が『タイタンの妖女』の[時空間の異常構造]にまつわる作中設定(時間等曲率漏斗にまつわる作中設定)と重なること「も」そうした心証を強めるとのことがある。そして、『タイムクエイク』という作品が作家ヴォネガットが自身の今までの作品らの設定を多く反映させている作品となっているとのことがあるために、そうした類似性を導き出すことに[何ら行き過ぎはない]とのことがある、

以上のことを前提に述べるどころして次の a. から d. のことらが

[911の前言事象]

との兼ね合いで問題になる。

a. (まずはそれだけ述べれば『こじつけにすぎない』と受け取られようところからはじめるが)、『タイタンの妖女』は極めて目立つように作中冒頭部にて

「一時間ごとに太陽系は四万三千マイルずつヘラクレス座の M13 球状星団へと近づいている——それなのに、進歩なんてものはないと主張する非順応者がまだなくなるらない」

との

[意味不明なる「暗号」がかった序言]

からはじまる作品となっている(序言としての同フレーズのために設けられた部が「何故なのか」不自然に別個に設けられている作品ともなる)。

それにつき述べるが、911の事件(の発生の予見事物ら)が

[ヘラクレスの冒険(殊に、の中の、11番目の冒険)およびそこにて登場し

てくる黄金の林檎]

と「どうしてなのか」「なぜなのか」が問題となる場所として多層的に結びつくようになっているというのが長大なる本稿にて指し示さんとしていることの一つとなっている(本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 37** から **出典 (Source) 紹介の部 37-5** を包摂する部位はそのための一例紹介の部となる。尚、同じくものこと ——「どうしてなのか」「なぜなのか」が問題となる場所として2001年9月11日に発生した事件とヘラクレスの12功業(殊にその中の11功業)との間につながりがあるとのこと—— については本稿にての続いての段にても他例としてどういふことがあるのか事細かに具体例を挙げて解説をなす所存である)。

b. [ヘラクレス座のM13星団に地球が近付いている]との別個にて設けられている書き出し部ではじまる小説作品『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』こと『タイタンの妖女』に登場する艶やかな女らを象(かたど)った三対の像——それらの像が原著題名に見る[サイレンズ](妖女ら)に仮託されているとのこと、先述の像—— を想起させるとの作中「内」小説が『タイタンの妖女』刊行後40年近くを経て刊行されたヴォネガットの他小説『タイムクエイク』の中に認められる『**B-36**の三姉妹』であるとのこと、つい先立って言及した。

そちら不自然性を感じさせるタイトルの『**B-36**の三姉妹』という作中「内」小説 ——『**B-36**の三姉妹』などというタイトルが「ぽっと出」で出てきた自然なるものとする向きはあまりないかと思う—— に見る[**B-36**]とは米国の爆撃機のことを指す(**B-29**で有名なボーイング社製の一連の爆撃機シリーズに包摂される機種となる)。

その[**B-36**の三姉妹]に付されての[**B-36**]が(作中内小説『**B-36**の三姉妹』を登場させている)ヴォネガット小説作品『タイムクエイク』内で[**B-29**](東京大空襲で用いられ、また、原爆投下をなしたことでも有名な爆撃機)と多重的に結びつけられているとのことがある。

その点、「わざと」[**B-36**](原子炉搭載型飛行機[NB-36H]を含む合衆国ボーイング社製の通し番号付きの爆撃機シリーズのうちの一機種)と[**B-29**](核兵器を対人兵器として史上唯一使用したとの局面にて用いられた合衆国ボーイング社製の通し番号付きの爆撃機シリーズのうちの一機種)が結びつけられている節がある中でそれぞれ両機種 ——[**B-36**]と[**B-29**]—— の数字各桁を合算すると[9](3+6)と[11](2+9)が別個に出てくることすらもが計算されてそうなっている節がある。すなわち、[9][11]という数値に意識誘導するような側面がある。直下続けて述べるところのヴォネガット小説『タイムクエイク』の中に見受けられる特性からそうも述べられるようになっている(：それにつき、理由となる場所を続けての段でさらに述べようとも『こじつけがましい **far-fetched** こと限りなし』と受け取られるところか、と思われもするようなどころがある。しかし、この話には航空史にあってエポックメイキングなる一機種、**B-36**の亜種の[原子炉搭載型飛行機; Nuclear-powered aircraft]たるNB-36Hと同文に航空史にあってエポックメイキングなる一機種とされている[原子炉搭載型飛行機]たるTu-119(ソ連製)との関係性が想起されるとのこと「も」ある ——いいだろうか。**B-36**と対応するような機体としてのTu-「11」「9」である。その一事からして[9](3+6)と[11](2+9)に意を向けんとすることを笑殺することは出来ぬことになろうか、とは思ふ。[**B-29**][**B-36**]の

双方機種および[Tu-119]が[航空工学と核物理学(の兵器への応用)の観点で目立っての機種]であったとの共通項も関わっている中にての話として、である——)。

c. 先立っての段にて言及のように『タイタンの妖女』(1959年初出のヴォネガット作品)では[時空間の異常構造体](時空間のゲートとなってもいる Chrono-synclastic-infundibulum 時間等曲率漏斗)が取り上げられて[時空間の異常現象]が強調されているわけであるが、[B-36の姉妹]なる奇怪なるタイトルの作中内小説を[B-29]と露骨に結びつけて登場させている『タイムクエイク』(1997年初出のヴォネガット作品)にも[同様同文のこと]が当てはまり、それは[時間を過去に巻き戻しての追体験をさせるとの時空震動]こと[タイムクエイク]絡みのこととなる。

小説『タイムクエイク』ではそのタイムクエイク(時間震動)の結果、作中人物らは皆、過去の出来事の強制的追体験をなすことになる——そして、[二〇〇一年夏]にあつてその追体験が振り返られる——との作中設定が採用されている(いいだろうか。1959年初出の『タイタンの妖女』と作中内小説[B-36の姉妹][時空の乱れ]との観点で意図的に結びつけられている節がある『タイムクエイク』は1997年初出の小説であるにもかかわらず[2001年夏に向けての追体験]が重要な作中モチーフになっている作品なのである)。

さて、現実の世界にて

[二〇〇一年夏]

に起こったのは911の事件である(:日本における通念上の理解では2001年のかの事件が発生したとの[9月]は秋の頃となるわけだが(9月となれば時候の挨拶でも「新秋快適の候」といった筆の運びがなされるように[秋の頃]となるわけだが)、ヴォネガット故地の米国では6月から9月をして[夏]と見る風潮がある——については細かきことだが、(手前が示したきことに関わるために)英文 Wikipedia[Summer]項目よりの原文引用をなしての指し示しをここになしておく→(以下、英文 Wikipediaよりの引用をなすとして)“In the United States, summer is often fixed as the period from the solstice (June 20 or 21, depending on the year) to the fall equinox (September 22 or 23, again depending on the year)”「米国にて夏は夏至(6月20あるいは21日・年度に応じての異動あり)から秋分(9月22日または23日・同様に年度に応じての異動あり)の期間と特定される風がある」——)。

その「二〇〇一年夏の」事件——911の事件——の後に現実の世界では相応の政治屋(「質的に碌な人間ではない」とよく言われているポリティカル・マフィアにして「911の事件の如きことが起こりうることを事前に知っていた」と諸方面で唱えられている政治屋/ワールド・トレード・センター警備会社にその人脈が関わっていたことが知られ、また、と同時に、サウジのビン・ラディン一門ともビジネスパートナーだったとのことがよく知られている——吐き気を催す程に頭と人格の具合がよろしくはないとのアメリカ人の[標本]らが挙げられてもいるマイケル・ムーアのドキュメンタリー映画『華氏911』ですら取り上げられていることである——との政治屋にして「双子の」娘の父親でもあるとの政治屋/合衆国43代大統領たる政治屋)が率先して[湾岸戦争の再演]を煽り主導したとの歴史理解がなされているわけだが、その[湾岸戦争の再演]に遡ること、[第一次湾岸戦争]の勃発日時は

[一九九一年一月一七日]

となっている。

対して、カート・ヴォネガットの小説『タイムクエイク』では「まずもって」[二〇〇一年夏] —タイムクエイクに起因する追体験が振り返られるとの「二〇〇一年夏」—にて実演の「「焼きはまぐり」パーティ」に注意が向けられもし、次いで、その六か月前、二〇〇一年二月十三日から「一九九一年二月十七日」にかけての10年間の追体験を無理矢理なさしめるタイムクエイクが発生したことに対する振り返りがなされるなどの「どういう意図でなのか」の不自然極まりない粗筋設定が採用されている(後に出典紹介も当然になす)。一九九七年初出の小説にて何故、「二〇〇一年夏の焼きはまぐりパーティ」に注意を向けるとのやりようがなされているかも「不可解なところ」と述べるべきところか、ともとらえられるが(「表向きの理由は、」当該作品に作中登場人物として登場する作家が作家保養施設で二〇〇一年夏に催される予定のパーティにゲスト出演しそのゲスト出演を念頭に本作をものしているからであるなどの言及がなされていることに求められもする)、「より不可解なのは、」そうした二〇〇一年夏の焼きはまぐりパーティに対する注意喚起がなされつつもその半年程前を起点に発生するとされる時空間の変動による追体験ループにつき、「ループ終端ポイントたる二〇〇一年二月一三日の十年前のループのスタートポイントが一九九一年二月一三日ではなく、「どういうわけなのか」、四日ずれて一九九一年二月一七日とされている」ことである。

ここで着目すべきは

[一九九一年二月一七日](二〇〇一年夏の焼きはまぐりパーティにて振り返られることになった再現ループのスタートポイントの日付け)というのが湾岸戦争の勃発日時たる[一九九一年一月一七日]と丁度一か月の差分をきたしての日付けであるとのことである。

ここで911の事件(米国基準で見れば、「二〇〇一年「夏」の事件」)が契機となって大量破壊兵器の保持とテロ支援を口実に開始された征戦、二〇〇三年にて勃発を見た戦争、イラク戦争の別称は[第二次湾岸戦争]となっていることが想起されもする。

従って、二〇〇一年夏に注意が向けられた後、二〇〇一年の二月から起こることになったタイムクエイクの結果、二〇〇一年二月一三日から一九九一年二月一七日(現実世界では丁度一か月間ほどずれて第一次湾岸戦争が実演されている)に至るまでの出来事の再演がなされるなどという筋立ての小説を作家に書かshめていた力学として[前言をなす]とのものが介在していた「とも」想起させられもする(：同じくものことについては単線的に見るべきことでないといった性質のことでもある。その点、[ヘラクレス座への接近に注意を向けての冒頭文]からはじまる『タイタンの妖女』(1959)の原著タイトル The Sirens of Titan に見る妖女(サイレン)ら三人一対の存在と結びつく作品と解される[『タイムクエイク』(内作中小説『B-36の三姉』)]にあつて[B-36]と[B-29]とが「わざと関係付けさせられている」といった記載が当該作品(『タイムクエイク』)にて見受けられる中、そのことより[Tu-119]との結びつきを観念させもするものであるとのことがあり(上のb.の段にて述べていることだが、続いての出典紹介部にてそういうことが述べられることを示すべくもの具体的典拠も無論挙げることとする)、また、と同時に下のd.のようなことも顧慮する必要があるとのことである)。

d. 小説『タイムクエイク』では上の c. にて言及した日付表記上の問題と結びつくような形で[9]や[11] (や[12])との数値を想起させる描写がなされているとのこともある。

以上が委細(典拠となる場所)の解説をこれより後の段にあつて言及することとした、

『タイタンの妖女』がそれ以降のヴォネガット小説『タイムクエイク』と複合顧慮することで[911の事件の前言をなしているが如く小説]に化ける]

とのことの概要である。

上にて『タイタンの妖女』が軽んじられるものではないと述べるどころの三つの理由として次のことを挙げもした。

第一。

[異星人に推進された人類「育種」の究極目標が[くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助]であった]

という『タイタンの妖女』の粗筋にあつて気がかりとなる場所として[地球は[地球質量]から見てブラックホールに換算するとcm(センチメートル)単位のものにしかない]との言われようがなされている——換言すれば、「地球をそうしたサイズに圧縮すればブラックホールができあがる」とされている——とのことがある。

第二。

[小説『タイタンの妖女』で重視されている時間等曲率漏斗(なるもの)の終点が赤色巨星ベテルギウスであったと設定付けられている]

とのことが[ブラックホール]との絡みで不気味に映るとのこと「も」またある。

同点については

[ベテルギウスの赤色巨星としての終焉が「小説『タイタンの妖女』刊行より後の日——時期的先後関係が重要となる場所にての[後の日]——にて現実世界にて導き出された知見より」「近々の」ブラックホール化であるとの見方が(人類に災厄をもたらしかねない[ガンマ線バースト]との現象に関わるところとして)「目立って」問題視されるに至っている]

とのことがあり、また、と同時に、

『タイタンの妖女』にてベテルギウスを終点としていると(何故なのか)設定付けられている[時間等曲率漏斗]というものが[くろぼち(・)ひとつよりなる親書を他星系に届けるための人類の育種]と当該フィクションの中で結びつけられている]

とのこと「も」があり、もって、(ベテルギウスの作中設定への採用からして)不気味に映るとのことがある(:整理すれば、[くろぼち(・)マークのみよりなる親書の伝達のための人類育種]と[近々のブラックホール化が(小説の刊行後にて)「目立つかたちで」可能性呈示されだした天体](時間等曲率漏斗のゴールとしてのベテルギウス)とが結びつけられていることにつき、(地球相当の質量をブラックホールに引き直すと[cmメートル単位のブラックホール]が導出されるとの現代物理学にての指摘のされよう(先述)も加味し)、奇怪性を感じさせられるとのことである)。

第三。

「カート・ヴォネガットの『タイタンの妖女』は同男由来の『タイムクエイク』(1997)という

他小説と一緒に見た場合に 911 の前言小説に化けるようなものであるということもある(委細解説に先立って上にてその内容につきまづもっての言及をなしたこともなる)

以上、第一から第三の点につき、「多少」、というより、「かなり」細かく言及しての出典紹介を以下なすこととする(また、その出典紹介部、「延々と」続けるとのものともなるが、「出典紹介を重んじている(というより出典を紹介することが目的となっている)本稿なればこそ」との筆者考えに基づきそうもしている)。

それでは上記「第一の点」に関わるどころとして

[小説『タイタンの妖女』にあつて[異星人に推進された人類「育種」の究極目標が[くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助]であつた]との設定が採用されている]

[ブラックホールというものは地球をそれに圧縮させても 1cm 単位のものにすぎないものである]

とのことにまつわる出典紹介をなす。

出典(Source)紹介の部 65(3)



SOURCE 65(3)

ここ出典(Source)紹介の部 65(3)にあつては

[ヴォネガット小説『タイタンの妖女』の異星文明成員による人類育成の究極目標が[クロポチ・マークひとつよりなる親書の送付]にあつたなどと描写されていること]

および

[地球をまるごとブラックホールに圧縮しても半径 1 センチ程度のものにしかならないとされていること]

についての典拠を挙げることとする。

まずもって、目に付くところ、オンライン上より即時に確認できるようになっているところとしての和文ウィキペディア [タイタンの妖女] 項目にあつての現行にての記載内容よりの引用をなすこととする。

(直下、和文ウィキペディア[タイタンの妖女]項目にあつての現行記載内容よりの引用をなすとして)

トラルファマドール星人の探検者、サロは、実は何千年も前にトラルファマドール星から遠く離れた銀河へのメッセージを届けるために作られたロボットで、その宇宙船は「そうなるうとする万有意志」(Universal Will to Become,UWTB)で推進する。

サロは、宇宙船の小さな部品が壊れたため、太陽系タイタンで足止めされている。彼はトラルファマドール星に助けを求め、仲間のトラルファマドール星人は、地球人類の文明が交換部品を製造することができるように、人類の歴史を操作する。ストーンヘンジや万里の長城やクレムリンはすべて、トラルファマドール星人の幾何学的な言語で、彼らの進捗状況をサロに知らせるためのメッセージである。交換部品はひとつの角が丸められ、二つの小穴があけられた小さな金属片だと分かる。それを届けるために人間の歴史が操作されてしまったトラルファマドール星のメッセージは、点がひとつ。トラルファマドール語で「よろしく」という意味だった。

(引用部はここまでとする)

上にては

[「点がひとつ」のトラルファマドール星のメッセージを届ける(より正確には[「点がひとつ」のトラルファマドール星のメッセージを届ける使節のスペースシップを動かしめるための交換部品を用意させる])ためだけに人類の歴史が操作されてきた。そして、ストーンヘンジ・万里の長城・クレムリンらは幾何学的な方式で使節のための代替部品確保のためのオペレーションの進捗状況を知らせるためのメッセージであった]

との紹介(作品解説)がなされている。

次いで、同じくものことにつき、現行、多くの書店に並んでいる小説『タイタンの妖女』そのものよりの引用をなす。

(直下、邦訳版『タイタンの妖女』(現行書店にて流通を見ている早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第5刷のもの)にての420ページよりの引用をなすとして)

その不快な話とは、こういうことだ——これまであらゆる地球人がやったことは、十五万光年むこうの惑星に住む生物たちによって、歪められていた。その惑星の名はトラルファマドールという。トラルファマドール星人がどんなふうにもわれわれを操ったのか、わたしは知らない。だが、どんな目的でわれわれを操ったのかは知っている。彼らは、このタイタンに不時着したトラルファマドール星人の使者のところへ、われわれに交換部品を届けさせる目的で、われわれを操ったのだ。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにての引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(The Sirens of Titan にての chapter twelve THE GENTLEMAN FROM TRALFAMADORE の部より引用するところとして) “ **Everything that every Earthling has ever done has been warped by creatures on a planet one-hundred-and-fifty thousand light years away. The name of the planet is Tralfamadore. "How the Tralfamadorians controlled us, I don't know. But I know to what end they controlled us. They controlled us in such a way as to make us deliver a replacement part to a Tralfamadorian messenger who was grounded right here on Titan .** ” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする) とのものとなる——)

さらに幅広くもの書店に並んでいる小説『タイタンの妖女』(早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第5刷のもの)よりの原文引用なしつつもの出典紹介を続けることとする。

(直下、邦訳版『タイタンの妖女』(現行書店にて流通を見ている早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第5刷のもの)にての426ページよりの引用をなすとして)

「わたしが五十万年地球年近くも持ち歩いていたメッセージ——そして、もう千八百万年も持ちつづけるはずになっていたメッセージが、どんなものか知りたいかね?」サロは吸盤になった足でアルミの薄板を上にかざした。「点が一つ」とサロはいった。「たった一つのポツさ」とサロはいった。「ポツひとつの意味をトラルフアマドール語に翻訳すると」とサロはいった。「それは——よろしく、という意味なんだ」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※1 尚、表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにての引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(The Sirens of Titan にての chapter twelve THE GENTLEMAN FROM TRALFAMADORE の部より引用するところとして) “ **Would you like to know how I have been used, how my life has been wasted?**” he said. “**Would you like to know what the message is that I have been carrying for almost half a million Earthling years — the message I am supposed to carry for eighteen million more years?**” He held out the square of aluminum in a cupped foot. “**A dot,**” he said. “**A single dot,**” he said. “**The meaning of a dot in Tralfamadorian,**” said Old Salo, “**is — "Greetings.** ” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする) とのものとなる)

(※2 ちなみに、上の訳書および原著よりの原文引用部だが、先に引用をなした現行の和文ウィキペディア[タイタンの妖女]解説項目に見る「タイタンの足止めさせられているトラルフアマドールの使者の製造年が何千年も前である」との「現行の」書かれようと平仄が合わないとのものでもある。原文引用をなしている小説本体では(同じくも原文引用をなしているとの現行の和文ウィキペディア記述とは異なり)トラルフアマドールの使者の製造年は「少なくとも50万年前に遡る」との書かれようがなされている (“ Would you like to know how I have been used, how my life has been wasted?” he said. “Would you like to know what the message is that I have been carrying for almost half a million Earthling years — the message I am supposed to carry for eighteen million

more years?" ”「わたしが五十万年地球年近くも持ち歩いてきたメッセージ——そして、もう千八百万年も持ちつづけるはずになっていたメッセージが、どんなものか知りたいかね?」と表記されているとおり)。であるから、本稿執筆「現時点での」和文ウィキペディア記述は誤記を含んでいると解されているも一応、付記しておく)

ここまでにて先に表記した三点のうちの第一の点、すなわち、

第一. [「異星人に推進された人類「育種」の究極目標が[くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助]であった」という『タイタンの妖女』粗筋にあつて気がかりとなるところとして[地球は[地球質量]から見てブラックホールに換算するとcm(センチメートル)単位のものにしかない]との言われようがなされている——換言すれば、「地球をそうしたサイズに圧縮すればブラックホールができあがる」とされている——とこのことがある]

との点にあつての、

[『タイタンの妖女』は「異星人に推進された人類「育種」の究極目標が[くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助]であった」という粗筋を有した作品である]

とのことの典拠を指し示した。

続いて同じくもの[第一の点]に関わるどころ、

[地球の質量をブラックホール化するとcm(センチメートル)単位のブラックホールにしかならないとされている]

とのことについての出典を挙げることにする。

手前が捕捉・手元に置いている資料より手短かなかたちでの抜粋をなすことにするが、

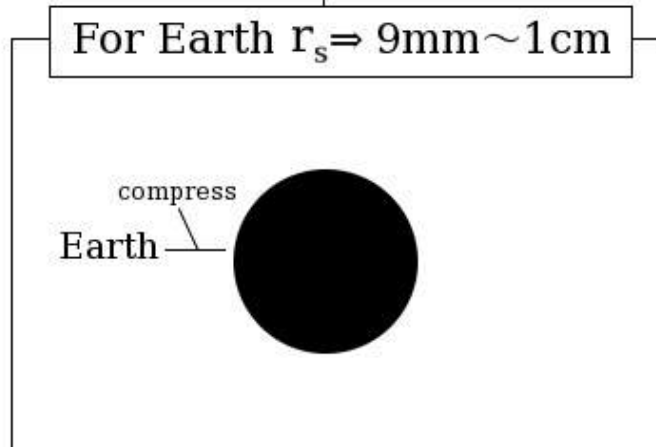
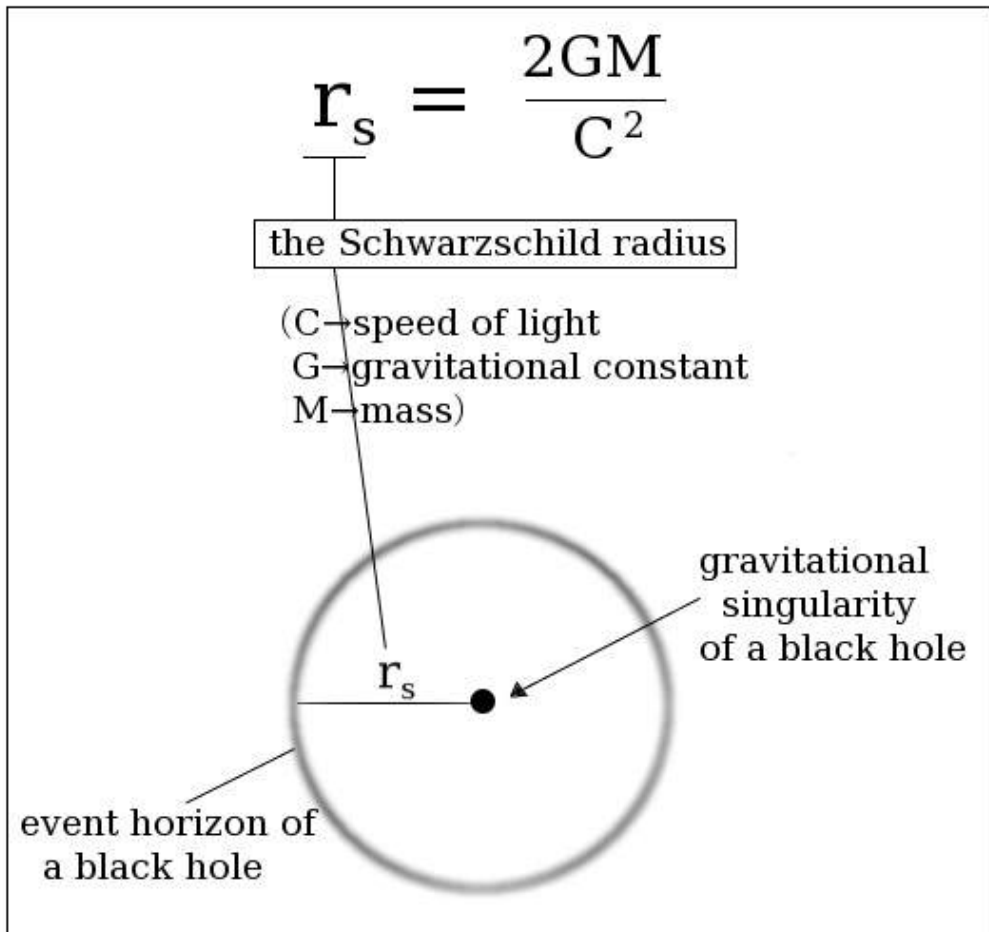
[**Black Holes, Extra Dimensions & the LHC**]

とのそのタイトル名称で検索エンジンを動かすことで同定・捕捉できる高エネルギー物理学関連の勉強会資料、[ロンドン大学クイーンメアリー]と[アトラス実験グループ]のロゴが表紙部に刻まれている資料の5と振られたページにて

For Earth $r_s=1\text{cm}$

と表記されている(地球相当質量の R_s (シュヴァルツシルト半径)は1cmであると表記されている)ところからして同じくものこと——[地球の質量をブラックホール化するとcm(センチメートル)単位のブラックホールにしかならないとされていること]——の出典となろうか、と思う。

同じくもの点については下にての図解部と続けて付しての解説をご覧戴きたい。



"Would you like to know how I have been used, how my life has been wasted?" he said. "Would you like to know what the message is that I have been carrying for almost half a million Earthling years? the message I am supposed to carry for eighteen million more years?" He held out the square of aluminum in a cupped foot. "A dot," he said. "A single dot," he said. "The meaning of a dot in Tralfamadorian," said Old Salo, "is — "Greetings."

——The Sirens of Titan (1959)

nonsense ?

上掲図にて示している式はよく知られているところのものとなり(筆者は門外漢だが物理学を専攻する者らには[常識]とされているぐらいに通用性高き式であるとも聞き及んでいる)、 r_s が Schwarzschild radius こと[シュヴァルツシルト半径](と呼称されるもの)、 c

ことラテン語にての速さを意味する *celeritas* が[光速]、*G* が Gravitational Constant、すなわち、(重力相互作用の強さを示す)お定まりの[重力定数]、*M* が Mass すなわち[質量]を指す。

同式の意味するところは — 筆者のような門外漢にも勞せず把握できるようなところとして —

[(光速の二乗たる c^2 と重力定数 *G* が式の不変要素として固定化している中) 特定質量 (Mass こと *M*) を外挿した際にシュヴァルツシルト半径、すなわち、ブラックホールの半径はどのくらいになるか]

換言すれば、

[特定の質量をいかほどのサイズにまで圧縮すればブラックホールになるのか] とのものである。

そして、上の式で *R_s* — ブラックホールの半径たるシュヴァルツシルト・レイディアス — が 9mm (およそ 1cm としてもよからう) になるのが地球質量を外挿した場合のことがよく知られており、その意味するところは地球ほどの質量をもったものを半径 9mm まで圧縮すれば、ブラックホールができあがるということである (地球はブラックホールとすれば半径 0.9 センチメートルのそれになるとのことである — につき、上掲図では読み手の理解に資するか、と地球をブラックホール化させた際の [ほぼ実寸大の黒い円] を描画しておいた —)。

などと述べても、筆者のことを信用したくないとの向きの [納得] を求めるのは難しいか、と思う。

であるから、極めて目につくところとしてオンライン上にて見受けられる英文 Wikipedia [Schwarzschild radius] 項目にあつての次のような「現行にての」記載内容 — ウィキペディアは編集によって記載内容が有為転変する媒体であるため、そちら内容の残置は保証しないが、とにかくも、の「現行にての」記載内容 — を引いておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia [Schwarzschild radius] 項目の現行にての記載内容よりの
掻い摘まんでの引用をなすとして)

The Schwarzschild radius (sometimes historically referred to as the gravitational radius) is the radius of a sphere such that, if all the mass of an object is compressed within that sphere, the escape speed from the surface of the sphere would equal the speed of light. [. . .] the value of *r* making this term singular has come to be known as the Schwarzschild radius. The physical significance of this singularity, and whether this singularity could ever occur in nature, was debated for many decades; a general acceptance of the possibility of a black hole did not occur until the second half of the 20th century. [. . .] Accordingly, the Sun has a Schwarzschild radius of approximately 3.0 km (1.9 mi) while the Earth's is only about 9.0 mm, the size of a peanut.

(補つても訳をなすとして)

[シュヴァルツシルト半径 (歴史的にはしばしばもつてグラビテーション・レイディウスと呼ばれてきたもの)]

は

[そちらを半径とする円の内側に物体 (考察対象となる物体) の全質量が圧縮された際、(円内部よりの) [脱出速度] が [光速] と等しくなるとの円の半径]

となる。

…(中略)…

[シンギュラー singular] (訳注: 英文意味合いを表せば、beyond from the usual or expected result、[従前法則が破綻するとの意味での特異性を呈する]との形容詞) という語法の所以ともなる(式にての) [r] (あるいは[rs]) は [シュヴァルツシルト半径] として知られるものの値となる。

この式にての

[シンギュラリティ] (訳注: 従前の値がその範囲内に入ってしまうと従前適用されていた法則が破綻するとのポイントとしての特異性の体現ポイント; ブラックホール化かそうはならないかを決するポイント)

にあつての物理的重要性及びそうした[シンギュラリティ] (従前適用されてきた法則が破綻するポイントとしての特異性体現ポイント) が自然界にて果たして生じうるのかは何十年も議論の的となっていたことである。すなわち、(rs の領域内部に質量が圧縮された際の) [ブラックホール] (の存在) を可能性論として認容するとの一般的思潮は 20 世紀後半まで生じることはなかった (訳注: 本稿にての後の段でも典拠に依拠して解説することとなるが、相対性理論を生み出した男として知られるアインシュタインをはじめ多くの科学者らがブラックホール「的なる」ものの存在を認容していなかった、それ(ブラックホール) が認容される状況になるまでにはかなりの時間が費やされたという科学史にまつわる背景があつて(ここでの引いているような) 表記がなされているのであると解される)。

…(中略)…

同式にもとづけば、地球のシュヴァルツシルト半径が 9mm、ピーナツ程度のそれであるのに対して太陽(に相当する質量)のシュヴァルツシルト半径は 3km (1.9 マイル相当) となる

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上記載したように地球質量に対するシュヴァルツシルト半径は 0.9cm (およそ 1cm)、地球を(どうやって圧縮するのかは別問題として) 圧縮してブラックホール化すると半径 0.9cm のブラックホールができあがるとされていることを紹介した。尚、同じくものことについては、[地球、0.9cm (1cm)、ブラックホール] などと検索エンジンに入力して表示されてくるとの専門の向きらの手になるまともな媒体 (相応のものばかりが「どういふわけなのか」表示されてくるとのネット上にあつてながらもものまともな媒体 — 英文媒体の方が望ましかろう —) を確認いただけるであろうから、疑わしきにあつてはそれら媒体を確認されたい)

(出典(Source) 紹介の部 65(3) はここまでとする)

直前直近の出典紹介部でもつてして『タイタンの妖女』との作品について問題としもしている点にあつての、

第一。

[「異星人に推進された人類「育種」の究極目標が「くろぼち(・)ひとつよりなる親書の

異星系への伝達の補助]であった」というカート・ヴォネガット小説『タイタンの妖女』(1959)粗筋にあって気がかりとなるところとして「地球は[地球質量]から見てブラックホールに換算するとcm(センチメートル)単位のものにしかない」との言われようがなされている——換言すれば、「地球をそうしたサイズに圧縮すればブラックホールができあがる」とされている——とのことがある]

とのことの出典紹介をなしたとして、次いで、先述の(問題としもしている点にあっての)三点のうちの[第二の点]たる、

第二。

[小説『タイタンの妖女』で重視されている時間等曲率漏斗の終点が赤色巨星ベテルギウスであったと設定付けられている]

とのことが[ブラックホール]との絡みで不気味に映るとのこと「も」またある。

同点については

[ベテルギウスの赤色巨星としての終焉が「小説『タイタンの妖女』刊行より後の日——時期的先後関係が重要となるところにての[後の日]——にて現実世界にて導き出された知見より」「近々の」ブラックホール化であるとの見方が(人類に災厄をもたらしかねない[ガンマ線バースト]との現象に関わる場所として)「目立って」問題視されるに至っている]

とのことがあり、また、と同時に、

[『タイタンの妖女』にてベテルギウスを終点としていると(何故なのか)設定付けられている[時間等曲率漏斗]というものが[くろぼち(・)]ひとつよりなる親書を他星系に届けるための人類の育種」と当該フィクションの中で結びつけられている]

とのこと「も」があり、もって、(ベテルギウスの作中設定への採用からして)不気味に映るとのことがある(:整理すれば、[くろぼち(・)]マークのみよりなる親書の伝達のための人類育種」と[近々のブラックホール化が(小説の刊行後にて)「目立つかたちで」可能性呈示された天体](時間等曲率漏斗のゴールとしてのベテルギウス)とが結びつけられていることにつき、(地球相当の質量をブラックホールに引き直すと[cmメートル単位のブラックホール]が導出されるとの現代物理学にての指摘のされよう(先述)も加味し)、奇怪性を感じさせられるとのことである)

との出典を「要素毎に分解しながら」挙げることとする。

出典(Source)紹介の部 65(4)



SOURCE

65(4)

ここ出典(Source)紹介の部 65(4)にあつては、

[小説『タイタンの妖女』には終点ベテルギウスとなる[時間等曲率漏斗](Chrono synclastic infundibulum クロノ・シンクラストティック・インファンディブラム)なるものが登場する]

[ベテルギウスを終点とする[時間等曲率漏斗]に入って超人となった『タイタンの妖女』登場人物が[黒ぼち(シングル・ドット)ひとつよりなる親書を送達するための人類育種のプラン]のために利用されている]

[ベテルギウスはガンマ線バーストの発生によって地球圏に甚大な被害を及ぼしつつもブラックホール化が取り沙汰されるように至った天体として知られるが、そもそもガンマ線バースト現象が発見されたのは小説『タイタンの妖女』原著刊行時点(1959年)より後のことであり、したがって、作家がその伝でベテルギウスのことを意識していたとは(普通には)考えられないようになっている]

とのことについての出典を挙げる。

まずもって現行、幅広くもの国内書店書架にて見受けられる The Sirens of Titan 訳書『タイタンの妖女』よりの引用をなす。

(直下、邦訳版『タイタンの妖女』(現行書店にて流通を見ている早川書房ハヤカワ文庫版、筆者手元にある重版にして第5刷のもの)にての 19 ページから 20 ページよりの原文引用をなすとして)

かつてウィンストン・ナイルズ・ラムフォードは、火星から二日の距離にある、星図に出ていない時間等曲率漏斗のまっただなかへ、自家用宇宙船でとびこんでしまったのである。彼と行をともしたのは、一頭の愛犬だけだった。現在、ウィンストン・ナイルズ・ラムフォードとその愛犬カザックは、波動現象として存在している——その起点を太陽内部に、そしてその終点をベテルギウス星に持つ歪んだらせんの内部で、脈動をつづけているらしい。地球はまもなくそのらせんと交差するところなのだ。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにの引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(The Sirens of Titan にての CHAPTER ONE BETWEEN TIMID AND TIMBUKTU の部より引用するところとして) “ **Winston Niles Rumfoord had run his private space ship right into the heart of an uncharted chrono-synclastic infundibulum two days out of Mars. Only his dog had been along. Now Winston Niles Rumfoord and his dog Kazak existed as wave phenomena — apparently pulsing in a distorted spiral with its origin in the Sun and its terminal in Betelgeuse.** ” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる)

直上引用部では

[『タイタンの妖女』の主要登場人物のナイルズ・ラムフォード(Winston Niles Rumfoord)という男が終点をベテルギウスに持つ螺旋構造呈しての時間等曲率漏斗に突入して[波動存在]となっている(… existed as wave phenomena)]

との描写がなされているわけだが、そうして存在が不確かになった同ナイルズ・ラムフォードが作中にてタイタンにて足止めを食らっている機械化存在としての異星人(サロというキャラクター)の背後にある思惑を受けて(それが[人類育種の究極目標]となっていること、[出典\(Source\)紹介の部 65\(3\)](#)にて先述の)[宇宙船代替部品をタイタン滞在の故障宇宙船に届けるとの目的]達成のために利用されていたというのが『タイタンの妖女』の主軸としての内容ともなっている(すなわち、ここでの指し示しポイントにあつての第二の点、『タイタンの妖女』にてベテルギウスを終点としていると(何故なのか)設定付けられている[時間等曲率漏斗]というものが[くろぼち(・)ひとつよりなる親書を他星系に届けるための人類の育種]と当該フィクションの中で結びつけられている]とのことがある)。

上にて表記のこと —赤色巨星ベテルギウスを終点とする時間等曲率漏斗に入って波動存在となったウィンストン・ナイルズ・ラムフォードがタイタン逗留の異星人(にして機械生命体たる)サロに利用されているとのこと— の出典を挙げておく。

(直下、邦訳版『タイタンの妖女』(現行書店にて流通を見ている早川書房ハヤカワ文庫版、筆者手元にある重版にして第5刷のもの)にての402ページから403ページよりの引用をなすとして)

「ラムファードさん——」とサロはいいなおした。「あなたは、わたしがあなたをなにかに利用したと思っているのかね？」

「きみだとは思っていない」とラムフォード。「きみのだいじなトラルファマドール星にいる、きみのお仲間の機械どものしわざだ」

「フム。あなたは——そのつまり——自分が利用されたと思っているのかね、スキップ？」

「トラルファマドール星人は」とラムファードは苦々しげにいった。「太陽系に手を伸ばし、わたしを選び、そして手ごろなジャガイモの皮むき器のようにわたしを使ったんだ！」

「もしそのことが未来に見えていたのなら」とサロは悲しげに聞いた。「どうしていままでそれを一言もいわなかったんだ？」

「だれだって、自分が利用されているとは思いたくない。自分でもそう認めるのを、最後の最後まで遅らせようとするものだよ」ラムファードは歪んだ微笑をうかべた。「こういうとたぶんきみは驚くだろうが、わたしにも一つのプライドがある。愚かな、まちがったプライドかもしれないが、自分なりの理由で自分なりの決断をくだすことへのプライドだ」

「いや、驚かない」とサロ。

「ほう？」ラムファードは厭味たっぷりにいった。「そういう微妙な心理は、機械にはちょっと把握しにくいだろうと思ったんだがな」

これはまさしく、ふたりの関係における最低点だった。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、表記引用部のオンライン上より確認できる(ここにの引用テキストでもって検索をなすなどすれば確認できる)との原著表記は(The Sirens of Titan にての CHAPTER ONE BETWEEN TIMID AND TIMBUKTU の部より引用するところとして) “ **“Not you,” said Rumfoord. “Your fellow machines back on your precious Tralfamadore.” / “Um,” said Salo. “You — you think you — you’ve been used, Skip?” / “Tralfamadore,” said Rumfoord bitterly, “reached into the Solar System, picked me up, and used me like a**

handy-dandy potato peeler!" / "If you could see this in the future," said Salo miserably, "why didn't you mention it before?" / "Nobody likes to think he's being used," said Rumfoord. "He'll put off admitting it to himself until the last possible instant.", He smiled crookedly. "It may surprise you to- learn that I take a certain pride, no matter how foolishly mistaken that pride may be, in making my own decisions for my own reasons." / "I'm not surprised," said Salo. / "Oh?" said Rumfoord unpleasantly. "I should have thought it was too subtle an attitude for a machine to grasp." / This, surely, was the low point in their relationship. ”
(オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)とのものとなる)

これにて『タイタンの妖女』における、

[終点をベテルギウスに置く時間等曲率漏斗(と結びつくナイルズ・ラムファードというキャラクター)が 人類育種の究極目標 ——くろぼちひとつよりなる親書を他星系に届けるための座礁宇宙船に対する代替部品の供給—— に利用されていた存在である]

との設定が採用されていることにまつわる出典紹介とした。

続けて、同じくもの[第二の点]にあつての、

[小説『タイタンの妖女』で重視されている時間等曲率漏斗の終点が赤色巨星ベテルギウスであったと設定付けられている]

とのことが[ブラックホール]との絡みで不気味に映るとのこと「も」またある。

同点については

[ベテルギウスの赤色巨星としての終焉が「小説『タイタンの妖女』刊行より後の日 — 時期的先後関係が重要となるところでの[後の日]— にて現実世界にて導き出された知見より「近々の」ブラックホール化であるとの見方が(人類に災厄をもたらしかねない[ガンマ線バースト]との現象に関わるところとして)「目立って」問題視されるに至っている]

とのことがあり、(また、と同時に、[『タイタンの妖女』にてベテルギウスを終点としている(何故なのか)設定付けられている[時間等曲率漏斗]というものが[くろぼち(・)ひとつよりなる親書を他星系に届けるための人類の育種]と当該フィクションの中で結びつけられている]とのこと「も」があり)、もって、(ベテルギウスの作中設定採用とのことからして)不気味に映るとのことがある。

とのことに関する出典紹介を続ける。

それでは小説『タイタンの妖女』に描かれる[時間等曲率漏斗(Chrono synclastic infundibulum クロノ・シンクラスティック・インファンディブルム)]の終点ベテルギウスが「近々にて」ブラックホール化を見るとの可能性が[人類に及びうるとの災厄]との兼ね合いで現実世界にて(「であるから」重要なることとして小説刊行「後」にあつて)目立って指摘されだしたことの出典を挙げることにする。

(直下、和文ウィキペディア[ベテルギウス]項目にての[ベテルギウスの未来]の小節にての「現行にての」記載内容 —これより有為転変を見る可能性があるも、の「現行にての」記載内容— よりの原文引用を直下なすとして)

ベテルギウスは、地球周辺で近い将来II型超新星爆発を起こす赤色超巨星の1つに挙げられている。ベテルギウスは質量が太陽の約20倍もあり、かつ

脈動変光するほど赤色超巨星としては相当不安定な状態にあるとされる。

…(中略)…

ベテルギウスが超新星爆発を起こした際には

地球にも何らかの影響が出る

とされている。研究者の中には、地球から距離が離れすぎているために(地球からは640光年も離れている)ガンマ線(ガンマ線バースト)の威力は弱まり、オゾン層が少し傷つく程度で惑星および生命体への影響は小さいとの予測もある。が、超新星爆発の際のガンマ線流出については近年では指向性があることが指摘されており、偶然地球方向に向けて爆発した際には地球に対して生命の存亡に関わるほどの多大なる影響が生じると唱える者もいる。

…(中略)…

なお、超新星爆発した際の明るさについてSN1054と同規模の爆発と仮定すると、地球からベテルギウスまでの距離は、かに星雲までの距離のほぼ1/10であるため…(中略)…明るさとなる。これは半月よりも明るく、それが点光源で輝くことになる。その後は中性子星またはブラックホールへと進化すると考えられている。

(引用部はここまでとする。尚、付言しておくが、「ベテルギウスの超新星爆発の変移については、ブラックホール化よりも中性子星化する可能性の方が強い」との意見もある)

その点、ベテルギウスが「近々」それを起こすと目される旨、上にて記載されている[ガンマ線バースト]は[ブラックホール化とワンセットたりうる]と(直近引用部の中それ自体でも)記述されているものだが、カート・ヴォネガットが The Sirens of Titan『タイタンの妖女』(1959)をものした折には

[ガンマ線バースト]

という現象がそもそもいまだ発見されておらず、その

[ブラックホール化(ないしは[よりありうる]ところでもあるとされる中性子星化)とワンセットに地球にも災厄をもたらしかねないガンマ線バースト]

との兼ね合いでベテルギウスが注目されるとのことはヴォネガット小説執筆往時には「なかった」と解される(であるから、上にてとも言及しているようにヴォネガットが『タイタンの妖女』(1959)を執筆した折にはベテルギウスのことが[地球に災厄をもたらしかねないとされるガンマ線バーストおよびその帰結としての「近々の」ブラックホール化]との兼ね合いで取り沙汰されることはなかったと解されるようになっており、といった中でなお、「先覚的に」黒ポチひとつよりなる親書の送達のための手段と関わる筋立ての中でベテルギウスのことを強調するように持ち出していることの恣意性の有無が問題になる、と述べるのである —※ただし、誤解を避けるために申し述べておくが、ベテルギウスが超新星爆発を起こしてブラックホール化ないし中性子星化することまでは1950年代末葉にも想起されていた[可能性]がある(筆者はその伝での先覚性の有無について「も」精査する必要があると考えているわけだが)。ベテルギウスの超新星爆発、および、それに次ぐブラックホール「的なる」ものへの変化が50年代末葉(すなわち『タイタンの妖女』刊行時期)から観念されていたと考えられるところの理由の第一。[超新星爆発という現象が観察されるに至ったのはかなり前からである]とされているとのことがある(英文Wikipedia[History of supernova observation]項目などを参照されるのもよからう。同項目にはスーパーノヴァとの言葉が生み出されたのが一九三一年であるとのことや超新星爆発の観測史(Observation history)に対する解説がなされており、その細かき観測挙動が往古に遡ることなどが解説されている)。赤色巨星ベテルギウスのブラックホール化が50年代に観念されていたようにも受け取れるところの理由の第二。恒星が[重力崩壊]を起こしてブラックホール「的なる」ものになるとのことは1950年代からして一部識者に提唱・知られるに至っていたことであるとされるわけだが(ブラックホール

理論の深化にまつわる史的経緯については本稿の後の段でも言及をなす)、の絡みで、その[重力崩壊]が[超新星爆発]に起因するところとして生じるとのことまで、そして、赤色巨星ベテルギウスの未来が超新星爆発にあるとのことまで 1950 年代からして一部識者に把握されていた可能性「も」ある(ガンマ線バーストなる現象の地球圏到達の可能性にまつわる後にての知見はなくとも、である)。であるからヴォネガットのような作家からして[ベテルギウスのようなもの]の未来を超新星爆発、そして、それに続くブラックホール的なものへの変化であると考えることができた可能性もあるか、と(筆者自身、その可能性にまつわる精査がいまひとつ及んでいないところなのだが)見もするのである。だが、「とにかくも問題となるのは、」ベテルギウスの超新星爆発が[ガンマ線バースト]という現象を伴い、かつ、そのガンマ線バーストがゆえに「地球にまで」災厄をもたらすことになると考えられるようになったのは、すなわち、ベテルギウスの未来がガンマ線バーストの地球圏到来の可能性との絡みで目立って着目されるようになったのは明らかに『タイタンの妖女』の刊行後であると言え切れるとのことである)——)。

以上のことにつき、目に付くところの和文ウィキペディア[ガンマ線バースト]項目よりの引用をなしておくこととする。

(直下、和文ウィキペディア[ガンマ線バースト]項目にての現行にあつての前半部記載よりの引用をなすとして)

「超大質量の恒星が一生を終える時に極超新星となって爆発し、これによってブラックホールが形成され、バーストが起こるとされる。しかし天体物理学界ではガンマ線バーストの詳細な発生機構について合意は得られていない。…(中略)…ガンマ線バーストは1960年代終わりにアメリカの核実験監視衛星ヴェラによって発見された。…(中略)…1973年にアメリカのロスアラモス国立研究所の研究者が、この衛星のデータから、これらのバーストが太陽系外の宇宙からやってきていることを突き止めた」

(引用部はここまでとする)

以上の記述に一例見るように[ガンマ線バースト現象]が発見されたのは『タイタンの妖女』が刊行されてよりかなり後のことであると広くも説明がなされている —— ※広くも同じくもの説明がなされている中で即時即刻確認できるところに強みがあるものとしての英文 Wikipedia、の中の、[ガンマ線バースト発見・観測史]のみを扱っている項目としての[History of gamma-ray burst research]項目にも 1967 年に米国軍事衛星 Vela によってはじめてガンマ線バースト研究の発端となる観測がなされたとのこと、また、1973 年に従前、説明不能であったとのガンマ線観測がガンマ線バーストに由来することが正式に特定されたとのことが記されている(現行にての同項目の記載内容を引用すれば、“ **The history of gamma-ray burst research began with the serendipitous detection of a gamma-ray burst (GRB) on July 2, 1967 by the U.S. Vela satellites.[. . .] In 1973, Ray Klebesadel, Roy Olson, and Ian Strong of the University of California Los Alamos Scientific Laboratory published Observations of Gamma-Ray Bursts of Cosmic Origin, identifying a cosmic source for the previously unexplained observations of gamma-rays.** ” との部が該当部となる)——)。

以上、ここまでもってして

[小説『タイタンの妖女』で重視されている時間等曲率漏斗の終点が赤色巨星ベテルギウスであった]とされるが、普通に考えれば[気まぐれ]を超えての意味合いでのベテルギウス関連の設定構築の理由づけが「ない」とも思われるところともなる中、赤色巨星ベテルギウスの恒星としての終焉が「小説発表より後の日にて導き出された」知見より[人

類に対する災厄]となりうるガンマ線バーストを伴った「近々の」ブラックホール化であるとの見立てが呈されているとのことがある]

とのことの典拠紹介とした。

カート・ヴォネガット『タイタンの妖女』について問題視している三つの点にあつての[第二の点]にまつわる要素要素に分解しての典拠紹介部はこれにて終える。

(**出典(Source) 紹介の部 65(4)**はここまでとする)

確認のために再言する。

先んじて著名作家カート・ヴォネガット —— (本稿の従前の段にて同人物代表作たる『猫のゆりかご』『スラップスティック』の両二作に [加速器によるブラックホール生成にまつわる異常異様な先覚的言及] が見てとれる節があるとのことを指摘もしてきた ([米国文壇を代表する] といった表されようをなされてきた) 著名作家) —— の手になる初期の作品、1959年刊行の小説作品『タイタンの妖女』からして軽んじられるものではないとする理由として以下の三つのことらを挙げました。

第一。

[異星人に推進された人類「育種」の究極目標が[くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助]であった]

という『タイタンの妖女』の粗筋にあつて気がかりとなるところとして[地球は[地球質量]から見てブラックホールに換算するとcm(センチメートル)単位のものにしかない]との言われようがなされている —— 換言すれば、「地球をそうしたサイズに圧縮すればブラックホールができあがる」とされている —— とのことがある。

第二。

[小説『タイタンの妖女』で重視されている時間等曲率漏斗(なるもの)の終点が赤色巨星ベテルギウスであったと設定付けられている]

とのことが[ブラックホール]との絡みで不気味に映るとのこと「も」またある。

同点については

[ベテルギウスの赤色巨星としての終焉が「小説『タイタンの妖女』刊行より後の日 — 時期的先後関係が重要となるところにての[後の日]— にて現実世界にて導き出された知見より」「近々の」ブラックホール化であるとの見方が(人類に災厄をもたらしかねない[ガンマ線バースト]との現象に関わるどころとして)「目立って」問題視されるに至っている]

とのことがあり、また、と同時に、

[『タイタンの妖女』にてベテルギウスを終点としていると(何故なのか)設定付けられている[時間等曲率漏斗]というものが[くろぼち(・)ひとつよりなる親書を他星系に届けるための人類の育種]と当該フィクションの中で結びつけられている]

とのこと「も」があり、もって、(ベテルギウスの作中設定への採用からして)不気味に映るとのことがある (: 整理すれば、[くろぼち(・)マークのみよりなる親書の伝達のための人類育種]と[近々のブラックホール化が(小説の刊行後にて)「目立つかたちで」可能性呈示されだした天体](時間等曲率漏斗のゴールとしてのベテルギウス)とが結びつ

けられていることにつき、(地球相当の質量をブラックホールに引き直すと[cmメートル単位のブラックホール]が導出されるとの現代物理学にての指摘のされよう(先述)も加味し)、奇怪性を感じさせられるとのことである)。

第三。

「カート・ヴォネガットの『タイタンの妖女』は同男由来の『タイムクエイク』(1997)という他小説と一緒に見た場合に911の前言小説に化けるようなものであるということもある」(委細解説に先立って上にてその内容につきまづもっての言及をなしたこともなる)

以上、第一から第三の理由について直前頁では第一および第二のそれを支える典拠を細かくも挙げてきた。

ここで表記の **The Sirens of Titan『タイタンの妖女』**を軽んじざるべきものと述べるところの理由のうち、第三の理由に関する典拠紹介(かつ「詳解」)の部に入る前に以下、

[長くなるも、の脇に逸れての補足表記] (かなりの紙幅を割きもしての補足表記)

をなしておくこととする。

事後、本書 p.90 から p.159 を補いもしての補足の部に割くこととする

「長くなるも、」の脇に逸れての補足の部として

ここに至るまでの **出典(Source)紹介の部 65(4)** にあって

[『タイタンの妖女』執筆往時にあつては[赤色巨星ベテルギウスに由来する「特定の」ガンマ線バースト] どころかガンマ線バーストという概念それ自体が提唱されていなかった]

とのこと、広くも知られた事実の問題として指摘をなしたわけだが(ガンマ線バーストの元となるデータが米国の監視衛星ヴェラによって特定されたのは1967年、そして、それがガンマ線バーストという現象として提言されだしたのは1973年であり、50年代末葉に世に出たザ・サイレンズ・オブ・タイタンにあつてベテルギウスの末路が地球圏に飛来しうるガンマ線バーストを伴ったブラックホール化でありうるとの見解は「人間レベルでは」顧慮されることがあつたわけがなかつたとのことを指摘したわけだが)、さらに述べれば、

[小説 The Sirens of Titan『タイタンの妖女』執筆された1959年という折柄にはいまだ[ブラックホール]という【言葉】(【概念】ではなく【言葉】)すら存在していなかった]

とのことまでもがある(：後述するように、それ以前から[今日、ブラックホールと呼称されるに至っているもの]についての理論的深化が科学者らによってなされていたことはよく知られているのだが、[ブラックホール]という通用語それ自体は記録的事実の問題として50年代末葉にはいまだ存在して「いなかった」とされているとのことがある)。

につき、ブラックホールと結びつくもの、[時空間のねじれ構造]に対してワームホールという言葉が

[「林檎」に対する虫食い穴]

とのニュアンスで物理学者ジョン・ホイーラーに生み出されたのは早くも1957年——『タイタンの妖女』刊行の二年ほど前の折柄——とあいなっているとのことが指摘されている(：同じくものは和文ウィキペディア[ワームホール]項目にすら記載されていることとなる。およそ次のようなかたちにて、

である。(以下、現行にて記載内容を引用するところとして) “ワームホールという名前はリンゴの虫喰い穴に由来する。リンゴの表面にある一点から裏側に行くには円周の半分を移動する必要があるが、虫が中を掘り進むと短い距離の移動で済む、というものである。ジョン・アーチボルト・ホイーラーが1957年に命名した” (引用部はここまでとする)。以上のようにワームホールという言葉が生み出されたのは50年代であるとされている——その点、[ワームホール]という言葉が直近言及のように1957年に生み出される前から、[時空間の歪み]としての同じくもの構造体についての原初的観念が考察対象となっていたとされ、それはかなり昔、「一九二〇年代に遡ることである」との指摘もなされている。その点についての言及もこれまた即時即座に確認できるところとしての英文 Wikipedia [Wormhole] 項目になされている。(引用なすところとして) “**The American theoretical physicist John Archibald Wheeler coined the term wormhole in 1957; however, in 1921, the German mathematician Hermann Weyl already had proposed the wormhole theory in connection with mass analysis of electromagnetic field energy.**” (訳として) 「アメリカ人理論物理学者ジョン・アーチボルト・ホイーラーが1957年にワームホールとの造語を生み出した。が、ドイツ人数学者ヘルマン・ワイルが既に電磁場のエネルギーの量的分析との絡みでワームホール(的なるもの)の理論を1921年から前面に出していた」(引用部はここまでとする。尚、引用元がウィキペディアという易変性伴う媒体がゆえに同じくもの記述が残置し続けるかは保証しないが、同様のことは他所でも確認できるようになっている)——)。

表記のように1957年に[ワームホール]という言葉が生み出されたとされるわけだが、そちら[ワームホール]という語の考案者として知れ渡っている同じくもの科学者ジョン・ホイーラーによって[ブラックホール]という言葉が生み出されたのはよりもって遅れてのこと、
[1967年]
のことであるとされている。

同じくものことについてはブラックホール理論の発展史にてまとめたの表記がなされているとの英文 Wikipedia [Timeline of black hole physics] 項目 ([ブラックホール物理学のタイムライン] とで訳されるところの項目) 程度のものからして

“1967——John Wheeler coins the term “black hole”” 「1967年:ジョン・ホイーラーが[ブラックホール]という語を考案する」

と記載されているとのがあり、同様の記述は(本稿にてのよりもって後の段にてそちらの記述をも引用することとするとの) 学者由来の書籍——下手な嘘はつかぬだろうという意味合いでは「まっとうな」書籍——にも認められるところとなる。

その点、

「カート・ヴォネガットという作家が「1959年初出の」自作品『タイタンの妖女』にてワームホール「的なる」もの——[時間曲率等漏斗](ベテルギウスを終点としている時空間の歪み)——を登場させていることは果たして目立って先覚的であったのか、そうではないのか。また、カート・ヴォネガットがそれにまつわる言葉もないところでブラックホール「的なる」ものを意識できたのか。【アイデアの根】となるところはいかほどまでに世間にあつたのか」

との疑念帯びての視点が事情知らぬ向きの脳裏・胸中に芽生えることもありうるか、と思う(：希望的観測の問題ながら、[自発的思考能力を伴った人間]が本稿を読み解かんとしている場合には(わざと[曖昧さ]を強くも前面に出してのここでの話の振り方からして)そういう疑義が呈されることもあるか、と思う)。

以上、疑念帯びての視点が呈された場合を想定しての本稿筆者意見について端的に述べれば、

「カート・ヴォネガットが1959年初出の小説にてワームホール「的なる」もの(ベテルギウスを終点とする[時間曲率等漏斗])を登場させていること、それ自体はさして奇異たることではないと「映る」」

「(こちらは IF の話として) 仮にカート・ヴォネガットがブラックホール「的なる」ものを「明示的に」登場させていたとしても —— 未だブラックホールという言葉はなかったわけだが —— それとても奇異たることではないと「映る」」

とのこととなる (ついせんだっての段にて解説してきたところの [シングル・ドットと地球圧縮 1 センチの問題] [(地球に影響を与える) ガンマ線バーストとベテルギウスの問題] からは離れて、である)。

同じくもの見方は (謙遜するわけでもなんでもなく) 卓識・卓見でも何でもなく、そして、本来的には講述するに値することですらなく、カート・ヴォネガット「以外」のサイエンス・フィクションの類を提供していた作家らがワームホール「的なる」ものやブラックホール「的なる」ものとの兼ね合いで [いかなるもの] を彼ら作品に登場させていたのかを突き詰めて見ようとするので容易に導き出されようとの視点、また、容易に理解が及ぶような視点ともなっている (と申し述べたい。そして、それは「極めて遺憾ながら」、同文に【近接するところの嗜虐的やりよう】に容易に理解が及ぶとの話にも通底するものである —— 同じくもの点については『リアンの剣』という作品との絡みで何が問題になるのかの細やかなる解説を本稿にての後の段、ここ補足部にあっての後の段にてなすこととなる ——)。

にまつわってのところとして申し述べるが、フィクション内にてのワームホール「的なる」ものやブラックホール「的なる」ものへの言及の変遷動向について「まで」は解説講じるとの気風までは俗世間にある (但し、それが【加速器によるワームホール「的なるもの」やブラックホール「的なるもの」の人為生成への言及のありやなしやの問題とその背景分析】となると話が別となる、世間一般にはそこまでのことについて論じようとの気風は何ら「無い」と見受けられるところとなっている)、英文 Wikipedia にての

[**Wormholes in fiction**]

[**Black holes in fiction**]

と題されての項目で [ワームホール「的なる」ものら・ブラックホール「的なる」ものらのフィクションでの言及動向] につき「事細やかに委細に踏み込んでいる」といった解説がなされていることが「現行にあって」捕捉できるようになっている —— (くどくもなるが、「ただし、Wikipedia は性質上、記載内容の変転が認められやすき媒体ともなり、解説の残置や変移については何ら保証できない」とのことも断っておく。また、直上言及しての「現行にての」[Wormholes in fiction] 項目などにある [アインシュタインの 1920 年代の写真] を [いまだワームホールの類を扱った文物が見受けられなかった折のことながらも挙げている] との [紛らわしいやりよう]「も」が目につくようになっているとのことも申し添えておく) ——)。

何も変え得ぬ (あるいはより悪いことに何かを変えることを妨げんとする) 人間以外、そう、語るに足らぬとの人間「以外」が本稿内容を検討してくれていることを祈念しつつも、といった観点で細かくもの解説をなしておくが、うち、英文ウィキペディア [Black holes in fiction] 項目ではブラックホール「的なる」ものがフィクション内にて目立って登場したのは 1940 年代末葉からである —— (具体的には後述の『リアンの剣』との題名で知られるようになった作品『火星の海王達』の登場以後からである) —— とのこと、そして、続く 50 年代から、(ブラックホールという印象深い言葉は未だ登場を見ていなかったとされる折柄にてのことであるわけだが)、同じくもの作品が散見されるところともなっていたとの趣旨の記載がなされている (当然に筆者もその背景について細やかなる分析をなしている)。

以上表記の点に関わるどころの英文ウィキペディアに認められる記載を引いておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia [Black holes in fiction] 項目 ([フィクションにおけるブラックホールら]と題されての項目) にあっての Early works [初期的作品ら] と付されての節にての「現行にあっての」記載内容よりの引用をなすとして)

・The Sword of Rhiannon (1950): a novel written by Leigh Brackett, originally published as "The Sea-Kings of Mars" in Thrilling Wonder Stories (June 1949). Greed entices the archaeologist looter Matt Carse into a forgotten tomb of the old Martian god Rhiannon. There a strange

singularity plunges the unlikely hero into the Red Planet's fantastic past, when vast oceans covered the land and the legendary Sea-Kings ruled from terraced palaces of decadence and delight. The tomb encloses a bubble of darkness ... [like] those lank black spots far out in the galaxy which some scientists have dreamed are holes in the continuum itself, windows into the infinite outside our universe!

[...]

・**Stowaway to the Mushroom Planet (1956)** : a juvenile science fiction novel written by Eleanor Cameron. Two boys experience adventures and strange encounters on and around the Mushroom Planet, a tiny moon in an invisible orbit around the Earth that is only visible using the special filter provided by a mysterious Mr. Bass. [4] One of the hazards of the journey there is a "hole in space," rendered visible by a swarm of meteors that orbits it in a funnel-shaped circle and falls into it to completely vanish from sight. In the hole, ...there's no time?that is, for [the infalling space traveler] Horatio there's no time.

(なるべくもってして分かり易くしての適訳に努めるとして)

「ザ・ソード・オブ・リアノン(邦題)『リアノンの魔剣』(1950年刊行→1950現行の1950記載はミスで書誌より1953年が正確なところと思われる) : 同作は初期、『火星の海王達』とのタイトルで『スリリング・ワンダー・ストーリーズ』誌に1949年6月にあつて発表されたとの作家リー・ブラケットの手になる作となる。(同作『ザ・ソード・オブ・リアノン』では)己が欲心に衝き動かされるとのかたちで考古学者兼ねての墓荒らしたるマット・カース(と命名されての作中キャラクター)が[古の火星の神リアノンの忘れ去られし墳墓]へと入っていく。その墳墓にあつて不思議なる[特異点]により意に沿わぬことながらも主人公(たるマット・カース)は幻想的なる過去の火星世界、広大な海が陸地を覆うように拡がり、伝説の海王達が頹廢と歓楽の巷としてのテラス仕様の宮殿から統治を行っているとの過去の火星世界へと突き落とされることとなった —— (訳注: 引用なししているところの直近の部では『リアノンの剣』主人公の盗掘者兼考古学者たる主人公マット・カースが Singularity[特異点]によって過去の火星世界へと突き落とされた、そういう粗筋が『リアノンの剣』に認められるとの表記がなされている。しかし、(本稿の後の段にて同著よりの原文引用を事細かになすこととしたとの) The Sword of Rhiannon 原著および国内にて流通している訳書を本稿筆者は全文検討することまでしているのだが、そこには[シンギュラリティー]、すなわち、[特異点]との言葉は登場を見て「いない」。そのため、ここで[特異点]との言葉が用いられているのは(引用元としたウィキペディア当該項目の)項目編集者の[自前の表現]であろうと解されるところである(訳注はここまでの)——。(引用部を続け) [トゥーム;リアノン墳墓]は「暗黒の泡」、そう、幾人かの科学者らが時空連続体それ自体に開いた穴、我々の宇宙から見ての果てなく拡がる外側の世界への窓となるものとして夢想してきたとの遙か彼方の銀河へと長く伸びきった黒点の如き「暗黒の泡」をそのうちに含んでいたのだ(以下略)。

...(中略)...

ストウワウェイ・トゥ・ザ・マッシュルーム・プラネット『きのこ惑星への密航者』(1956年) : 同作はエレノア・カメロンによる少年少女向けフィクションである(訳注: エレノア・カメロンという作家は『きのこ星シリーズ』という緑の小人らが菌類にて覆われた世界で暮らしているとの[架空世界もの]で知られている前世紀作家となり(そちらきのこ星シリーズは一部のみ邦訳を見てもいる)、ここにて挙げている『きのこ惑星への密航者』もその中に包含される作品となっている)。

同作では二人の少年がきのこ星、ミステリアスなバス氏によって提供されるものとしての特殊フィルター越しでしか見ることができぬとの地球を周回する不可視かつ微少なる月としてのきのこ星にて冒険、そして、奇妙なる出会いを体験することとなる。冒険にあつての危険の一つとして「空間の穴」、すなわち、漏斗状の円をまくとのかたちでその周りをまわる隕石の類によってのみその姿が可視的になるもの、そして、そこに落ち込んだらば、視界から消えることになるとの「空間の穴」が登場している。その穴の中にあつては「時間」は存在しない、すなわち、(重力にて)引き寄せられた宇宙の旅人ホレイショーにとって時間がなくなるのである(以下略)」

(訳を付しての引用部はここまでとする。尚、Wikipedia 当該項目では上記作品らに続くものとしてアーサー・クラークの『都市と星』といった作品もが 50 年代のブラックホール言及作品であるとの解説がなされている)

以上、引用なしたことに認められるように、

「[ブラックホール]という言葉はいまだ生み出されていなかった(についてはさらに後述することとはなるが、[通用語]としての[ブラックホール]との語の登場は 1967 年以降となるとされている) 折柄ながら」

「ブラックホール「的なる」もの・ワームホール「的なる」ものを[そうしたもの]として明示して、すなわち、時空間を架橋するものとしての暗黒のゲートとして明示して扱っているとのフィクションらは既に登場を見ており」

「その嚆矢的登場は 1959 年に登場を見たカート・ヴォネガット The Sirens of Titan『タイタンの妖女』(「時間等曲率漏斗」なるものを先述してきたようなやりようで登場させているとの作品)に遡ること、10 年を目安にしてのこと(直上の引用部にあつての 1949 年初出の The Sea-Kings of Mars『火星の海王』とのフィクションを目安にしてのこと)ともなっている(と目される)」

とのことがある。

であるから、カート・ヴォネガットが

「「わざと」ブラックホール「的なる」ものの比喩を「作家個人の思惑の問題として」『タイタンの妖女』作中に入れ込んでいた」

とのことがあると想定すること自体は問題にはならない「とも」解される(仮にブラックホールという語が 1967 年まで登場を見ていなかったとしても、である)。

「問題なのは、」

「作家カート・ヴォネガットがワームホール「的なる」「時間等曲率漏斗」というものを(ガンマ線バースト現象を伴つてのブラックホール化、ワームホールと同文に「重力の怪物としての空間の歪み」たるブラックホールと化すことが「後の時代にて」目立って取り沙汰されるようになった)赤色巨星ベテルギウスとつなげもし、その接合関係の中でもつてして[シングルドット・マーク(地球相当質量がブラックホール化すると半径 9mm になることも先述)よりなる親書の送達のための代替部品の確保としての地球人類育種の究極目標]なるものを作品粗筋の核としていることが果たして自然なることと述べられるのか否か([ベテルギウス]と[ガンマ線バースト]と[人類絶滅懸念]が複合顧慮されるようになったのは、くどいが、ヴォネガット小説が世に出たのよりかなり後である)」

「上のようなことが疑念視されるとの小説が、また、と同時に、「911 の発生の前言」が起きことをなしている(およそ人間がそのようなことができるとは思えぬかたちで不自然極まりなくもなしている)とのことがあるとすればどうなのか(こちらはさらにもつて煮詰めて

いくテーマとなる)」

ということである。

上の段までにて本段、

〔脇に逸れての補足の部〕

にあって伝えたくもあつたことの〔半分〕は記述した（：すなわちもつてして「ブラックホールという言葉が生み出されたのは60年代であつてヴォネガット小説『タイタンの妖女』の50年代末葉にての刊行はそれに先行するわけであるが、といった中でも、一たとえヴォネガットがブラックホールの的なるものを確信犯的に比喩として用いていたとしても— そのこと自体は問題にならない。それだけの〔時代的背景〕（知識の通用化）はあつたと述べられる。だが、ヴォネガット作品にまつわる他のことは問題になる」とのことを記述した）。

次いで、ここ本段、

〔脇に逸れての補足の部〕

にて伝えたくもあることの〔もう半分の話〕に入ることとする。

そちら（ここ〔脇に逸れての補足の部〕で）伝えたくもある〔もう半分の話〕とは

「ブラックホールに通底する事柄への言及文物には〔先覚性〕との絡みで〔異常なる側面〕もが往々にして現われていることがある」

とのことにまつることとなる —たとえば、である。つい先程言及した『リアンの剣』。同作にあってブラックホール「的なる」ものが登場を見ていることそれ自体は〔良し〕としよう（〔觀念の流通の態様〕に鑑みて際立って異常なことではないと判断せるとしよう（その論拠は下にて挙げるところとしてブラックホール「的なる」もの・ワームホール「的なる」もの、そう、〔ブラックホール〕やワームホールといった言葉はまだ生まれていなかったが、ブラックホール「的なる」もの・ワームホール「的なる」ものそれ自体への理論深化が1916年あたりから徐々に（目立ってではないが）一部科学者らの間で俎上にあがる、否定こそされ俎上にあがることになってきたことに求められもする）。だが、同作『リアンの剣』が【加速器実験によるブラックホールの人為生成】に対する「隱喩的なる」先覚的言及（普通に作品を楽しむかたちではまずもって気づけないようなかたちでの言及）が如きものまでを〔蛇の種族による侵略〕とつながるようなところで1949年初出の作品としてなしているような作品であつたらばどうか（ここ補足部にあっての後の段でオンライン上よりも確認出来るとの原著該当部テキストの原文引用によって細かくも指し示すように同作『リアンの剣』という作品は「実際に」そうした側面を含んでいる）。であれば、そこには〔異常なる側面〕が介在していると述べられることになる。というのも、（第一）【加速器によるブラックホール生成】が「ありうること」として問題視されだしたのはつい最近からであるとのことがあり、（第二）何故、そうしたこと（加速器によるブラックホール生成の可能性を想起させるとの言及）が「隱喩的なるやりよう」でもってなされているのか、とのことからして不可解に映るとのことがあり、（第三）〔蛇の種族による侵略（続く皆殺し）が如き話〕と〔現実の加速器実験〕が結びつくようになっているとの関係性は他のところにも複合的に及んでいるとのことが摘示できるようになせるようになってしまっているとのこともある（ここ〔補説1〕の部に入るまえに論拠を緻密に呈示してきたこととしてそうもしたことがある）からである（繰り返すが、そうしたことは全て確たる論拠に依拠しており、本稿にてはその摘示に努めている。容易に後追い出来るとの抽象論ならぬ具象論、それも極めて重みをもった具象論を無視するのは〔狂人〕か〔愚人〕（自身が「操り人形の世界の住民であるどころか、屠所の羊が如きものとされている」ことに気づけぬが如き愚か者）か〔臆病者〕だけであろうと口酸っぱくも強調したきところとして、である）—。

以上、話の方向性につき申し述べた上で

「何が」「どう」異常なる先覚性の現われとなっているのか」

とのことにまつる具体的なる話に入る。

先立っての段では小説 **The Sword of Rhiannon** 『リアンの剣』(初出の折のタイトルは『火星の海王達』)がブラックホール「的なるもの」へフィクションとして言及している「一九四〇年代末葉の」嚆矢の小説であると[**Black holes in fiction**]項目に記載されている旨、紹介したわけであるも、より昔から同じくもの特性を帯びての[大衆小説]が世に出ているとのことがある(ので「まずもって」そこからして取り上げることとする)。

につき、この身、本稿筆者は[タイトル]その他などから「目につくところの」書籍については「意味がある・ありうる」と判断した限りは ——「大の大人がそうしたものにまで食指を伸ばすのはどうかね」と言われるようなジュベナイル小説の類であろうとあからさまな逃避文学の類であろうと—— 網羅的に精査せんとしてきた人間である。そうまでしての探索活動(それが「浩瀚(こうかん)な読書量」にカウントされるような真っ当な部類の読書かは人によっては見方を違(たが)えるところか、とも思うのだが、少なからずもの読書量に支えられてのそうまでしての探究活動)の中でできるだけ多くの作品について(分析的視座でもって)検討してきた身として知るところとなったこととして、直近言及の『リアンの剣』「以前」からブラックホール「的なるもの」に言及しているとの大衆小説作品が存在している、それも「奇怪」ととれるかたちにて、かなり以前から存在しているとのことを捕捉しているとのことがある(ここでの補足部後半部、[ブラックホール関連の異常なる先覚性を呈しての文物]について取り上げるとの趣意での本段に通ずるところの話である)。

より具体的には、

[(その中に包含される **Rs**、シュヴァルツシルト・レディウス (シュヴァルツシルト半径) の意味合いについて本稿にての先立っての段、**出典 (Source) 紹介の部 65 (3)**にて門外漢ながらも解説を試みていたところの方程式にも通ずるとの) 物理学者カール・シュヴァルツシルトに由来するブラックホール存在に通ずる「次なる」展開をもたらした解法 (Schwarzschild metric / 続いての**出典 (Source) 紹介の部 65 (5)**にてもその歴史的提唱動向について取り上げることとする解法) が呈示されたその時(1916年)]
そして、
[それなくして現代的ブラックホールに対する観念も生じなかったであろうとの一般相対性理論の提唱時期(1915年)]

以前から「極めて不自然」に、そう、予言がかっているとのことで「極めて不自然に」

[ブラックホールの「的なるもの」——アインシュタインの特殊相対性理論(1905)に続く一般相対性理論(1915)およびその相対性理論を前提においてのシュヴァルツシルトの解法(1916)にて存在予見されるようになったブラックホール(後述)に相通ずるもの——に言及しているとの作品]

が存在しているとのことがあり、そちら具体的には

The House on the Borderland (邦題) 『異次元を覗く家』(1908年刊)

との怪奇小説となる (: 尚、同作『ザ・ハウス・オン・ザ・ボーダーランド』こと『異次元を覗く家』の作者はウィリアム・ホープ・ホジソンという英国人作家(一兵士として第一次世界大戦に従軍をなしていた折に命を玉と散らせての夭折を遂げた文士)となり、同じくもの『異次元を覗く家』は作者ウィリアム・ホープ・ホジソンの[ボーダーランド三部作]と呼ばれる一連の作品の一面をなすものとなる)。

同『異次元を覗く家』では

[[地に開いた巨大な底無し穴] と隣接・連結しており、[「時間の流れ」が外界に対して止まっているがごとき如き場所] にして、[遙か遠未来、世界の終わりの時期へと来入者をいざなう領域] (呪われた屋敷)]

などという「どうしてこのようなものを持ち出したのか?」と疑義呈さざるをえぬ領域、

[[「時間の流れ」が外界から見て止まったような状況] となり、[時空間の法則が破綻

「する領域」を内包するとの「底無しの穴」たるブラックホール」を「際立って露骨に」想起させる領域」

が作中舞台として設定されている（から（現実世界における理論展開と当該フィクションの登場時期の差分に関わる時系列上の関係のために）問題になる；小説『異次元を除く家』冒頭部では[大地にぽっかりと開いた底無し穴]の近く、その穴が地面に入り口をさらしているとの場の近傍にかつてあったとのことである屋敷の残骸よりかつてそこに住まっていたとの男の手記が偶然見つけ出され、その残された手記からその男が[時間の終わりにいざなわれていった]「らしい」ことが語られている……そういう粗筋が当該の小説では展開する——時間の終わりにいざなわれていった男の手記を[(作中の)現在の人間達]が目にしていてその手記の内容が妄想たる所以が感じられるとの見立てが(作中登場人物などの弁もあって)醸し出されつつも、他面、その手記の内容が妄想では済まされないとの作中設定もが採用されているからこそその[怪奇小説]となっている——)。

(※上の段にては

「[[地に開いた巨大な底無し穴]と隣接・連結しており[「時間の流れ」が外界に対して止まっているがごとき如き場所]にして、[遙か遠未来、世界の終わりの時期へと来入者をいざなう領域]（呪われた屋敷）などという特定小説に見る作中舞台は[ブラックホール]と目立ってのアナロジー(類似性)を呈するものである」

といった表記をなしたが、(振り返る必要もないか、とも思うのだが)、そうも表せられるとの理由については本稿の先にての[出典\(Source\)紹介の部 55\(3\)](#)で取り上げておいた。

すなわち、

(同出典紹介部にて取り上げた『ホーキングの最新宇宙論 ブラックホールからベビーユニバースへ』(日本放送出版協会(現社名株式会社NHK 出版))との国内にて多数流通した書籍にての p.108 から p.109 よりの「再度の」引用をなすとして)

このように、崩壊してブラックホールになっていく星を遠くから見ている人は、星が実際に消え去るところを見ることはできません。その代わりその星は、実質的に見えなくなるまで、どんどんぼんやりと、赤くなっていくだけでしょう。向こう見ずな宇宙飛行士が、ブラックホールに飛び込むのを見ていると、同じようなことが起きるはずで、たとえば、彼の時計で十一時〇〇分にブラックホールに入るとします。そこは光線ばかりか、何ものも脱出不可能な領域です。ブラックホールの外にいる人は、どんなに長い間待っても、宇宙飛行士の時計が十一時〇〇分を指すのを見ることはできません。その代わり、宇宙飛行士の時計の一秒一秒がどんどん長くなって、ついに十一時〇〇分の前の最後の一秒が、永遠に続くのを見ることになるでしょう。このように、ブラックホールに飛び込むことで、少なくとも外にいる人に対しては、自分の姿が永遠に残るということは確信できます。けれど、その像は急速に薄れ、誰にも見えなくなるくらい、ぼんやりとかすんでいくでしょう

(再度の引用部はここまでとする)

などとの表されての状況が具現化すると主唱されていることを(上にてのような形容をなしている因として)取り上げている。要するに、「科学理論に基づいて[穴]の中で「一秒が半ば無限化する」とのことが述べられているとの件については、ブラックホールに落ち込んだ者ら——その者の主観では「おそらく」瞬殺されているような状況となっている者ら——があつという間に[時果つる地]にいざなわれていることと等しかろう」ということである)

内容(というより[文献的事実])の真偽について確認をなしたいと思われた向きは早川書房から出ているとの同著邦訳版(絶版になっているかもしれないが図書館や古書購入で内容確認いただけるであろう)を借りるなり何なりして手ずから確認いただければ、と思う(あるいは英文読解に何ら苦勞もせぬとの向きならば、Project Gutenberg のサイトより The House on the Borderland の全文がダウンロードできるので、そちら参照されてみるのもよからうか、と思う)。

尚、英国にての再刊行版 (reprinted edition)、Panther Books との英国出版社より出されている **The House on the Borderland** (邦題)『異次元を覗く家』にての背表紙には同作の特徴にてここに記しているとおりの内容要約が「端的に」なされていもする。直下、引用なすようなかたちにて、である。

(直下、再版版 The House on the Borderland 背表紙にての粗筋紹介の部よりの原文引用をなすところとして)

In a mysterious, brooding ruin perched on the edge of an abyss in the timeless Irish hinterland, the journal of the last tenant is discovered. In it he has recorded his mind-wrenching involuntary adventures. **Descents into the Pit**, desperate battles against sub-human Swinefolk, **voyages across the dimensions and through aeons of time to the centre of the Universe and the death of the Solar System**, an other-worldly love on the shores of the Sea of Sleep — these are just some of the ingredients in this unique and long out-of-print tale.

(訳として)

「時の流れから取り残されたが如きアイルランド奥地にあつての深淵 Abyss (と見紛うばかりの大穴)の縁(ふち)の上に建っていた神秘的でぞっとさせるような廃墟でそこに最後に住まっていた住人の手記が発見された。手記を遺した男はそのなかで[心歪ませる(が如く苛烈な)不本意ながらも冒険の記録]を綴っていた。[大穴への降下]、(それに次ぐ)、[(大穴への)降下の中での亜人種としての豚人間らとの死命を賭しての闘い]、[次元を越え、永劫と見紛うばかりの時を経て銀河の中心へと、太陽系の死へと至ったとの旅]、そして、[眠りの海にての彼岸での愛]へと達したとの旅の記録である —— 以上がユニークでありながらも長らくも絶版を見ていたとのこの物語の作中特色をなすところである—— 」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※ポイントは「1908年」という時期に初出を見た小説にてアイルランド僻地にあつての [深淵 Abyss] としての [底無しの大穴] に降り立った男が

“ **voyages across the dimensions and through aeons of time to the centre of the Universe and the death of the Solar System** ” [次元を越え、永劫と見紛うばかりの時を経て銀河の中心へと、太陽系の死へと至ったとの旅] を経験しているなどとの描写がなされていること、その[記号論的な意味]である(履き違えないで戴きたいが、ここにては文学的値打ちがさも高そうに「見える」との作品のことを取り上げている中であつてながら好事家よろしく[内容・設定の妙]の類を問題としているのでは断じてないとのことである。(情報処理能力が欠けている、脳に箍(たが)でも嵌められているのかといった按配で思考能力が不自然に働いていないとの者らはそのようなことすら理解出来ぬか、とも懸念するのだが)、この身、筆者が問題視しているのは唯、[記号論的特性]とそこに認められる[「不」自然性]だけである))

以上のように再版版の背表紙にてその粗筋がまとめられているところの小説が[1908年]、カール・シュヴァツシルトという男が[ブラックホールの存在]を予言することとなつた解法(直下、解説するところの Schwarzschild metric)を提示した[1916年]のその「前」に世に出ていたことには[奇怪性]

が感じられると述べたいのである(：シュヴァルツシルトという男がシュヴァルツシルト解を編み出した後、第一次大戦で戦病死を遂げているのに対して、の後、『異次元から覗く家』をものしたウィリアム・ホー

プ・ホジソンも同文に第一次大戦下、兵士として戦死を遂げているといったことまではただの奇縁であったとしても、である)。

※上の「[奇怪性]を感じさせる」とのことについて、補ってものことを述べれば、である。

「[奇怪性]を感じさせるとのことだけ、それ単体を取り上げるだけではただの好事家話柄にしかならなからう「が」、その実、本件が我々全員の生き死にの問題に関わるとの認識がある」

からわざわざもって表記のようなことを取り上げているとのことがある。

その点、本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 55** から **出典 (Source) 紹介の部 55 (3)** では 17 世紀文豪ジョン・ミルトンの作

Paradise Lost『失樂園』

にあつて登場する Abyss [深淵] が

[時空間の意味が失われる領域]

[永劫の底無し of 暗黒領域]

としての [(今日的な科学見地にあつての) ブラックホールのなる特色] を帯びていることがいかなうな性質を帯びてのことなのかについての解説に努めていた、そうした事前経緯の延長線上のこととして『異次元から覗く家』の Abyss [深淵] (とも形容される大穴)「も」またミルトン『失樂園』にあつてのアビスと同文の特色— 時間と空間の意味が失われる領域としての特色— を有しているとのことがある (とのことからして問題になると映る) がゆえの問題視をなしているのである。

それにつき、くどくも書き記せば、『異次元から覗く家』では [アビス] とも形容される [底無しの大穴] に降り立った男が [時間] (あるいは自身が元いた空間とも述べられるであろう) に対する見当識を全くもって失い、気付けば、膨大な年月が経過していた — (東洋には不思議な童らの碁の帰趨を樵夫 (きこり) が観戦している内に膨大な月日が流れていた、との碁を打つ向きには有名な [爛柯らんか] (そちら [爛柯] とは白黒の碁石を並べて勝敗を競うゼロサムゲームたる [囲碁] の別称となり、碁に没頭しているうちに「柯 (斧の柄) が爛れる」ぐらいの按配で時が経っているとのこと) との故事が伝わっているのだが、そちら [爛柯] の故事と同文に、いや、[程度] では爛柯を遙かに陵駕する式で膨大な年月が経過していた) — 、そう、あつという間に [何百万年] もの月日が経過したなどとの粗筋設定が採用されてもいるとのそのことがミルトン『失樂園』と同文の表現が用いられる中でブラックホール「的である」がゆえに問題になるとらえてもいるのである — Project Gutenberg にて全文公開されている The House on the Borderland にあつての (XVI THE AWAKENING の部より) 引用なすところとして “ **For, a time, I mused, absently. 'Yesterday—' I stopped, suddenly. Yesterday! There was no yesterday. The yesterday of which I spoke had been swallowed up in the abyss of years, ages gone. I grew dazed with much thinking. Presently, I turned from the window, and glanced 'round the room. It seemed different— strangely, utterly different. Then, I knew what it was that made it appear so strange. It was bare: there was not a piece of furniture in the room; not even a solitary fitting of any sort. Gradually, my amazement went, as I remembered, that this was but the inevitable end of that process of decay, which I had witnessed commencing, before my sleep. Thousands of years! Millions of years!** ” (文脈把握をなしておらぬ向きに対して正確なる逐語訳を呈示しても文意伝わらぬかと判断、意識をなすとして) 「あるとき、立ち止まりもして感極まり口をついて出たのは「昨日」と

の言葉であった。昨日！最早、昨日なるものはなかった。私が口にしたところの昨日というものは「幾年・幾世もの時を去らしめたとのアビス」に吸い込まれてしまっていた。といった中、十二分なる思索、それへと没念してみ、現在へと至って私は窓から振り返って部屋の周囲ありように視線を這わせてみた。奇妙に視界が違ふ、何もかもが全くもって違って見えた。それから私はその「奇妙」に見えさせしめていることが何たるかを理解した。そこは裸のような様相を呈していたのだ。最早、部屋（訳注：作中、悪魔が建設したともされる手記執筆者が住まうことになった屋敷の中の日常起居に用いていた部屋）には家具のひとつも残されていなかった。取り付け用金具の欠片だけに最早そこには残っていなかった。驚愕の念が引いていく中で私は徐々に思い出していった。このありさまは私が寝入る前にそのはじまりを目にしていたとの崩壊の不可避的結末なのである、と。数千年！数百万年！そうした時が経過していたのだ」（意識はここまでとする）と記載されているところが該当部となる——。

かくのように時間の意味が（比喩表現である「一日千秋」や「光陰矢の如し」をそのままにとらえて形容したところでは済まされない按配で）破綻する底無しの大穴、それがブラックホールそのもののありようであるとの論拠は先立って細かくも論じている——先立っての「出典(Source)紹介の部 55(3)」を振り返っての解説部を参照されたいものである——が、「問題は、」である。

〔そういうものを登場させている文物らが時期的に奇怪なる折に世に出ている〕（換言すれば、〔ブラックホール関連の理論が世に出る前からそうしたものが世に出ている〕——同点についてはこれより解説を講ずる——）

とのことがありもすることであり、そして、

〔そうしたものを登場させている文物らが相互に結びつきもし、縦にも横にも装飾を華美にしながら広まっているとのこと、ありありと見てとれるとの一大伽藍としての「奇怪なる相関関係」を具現化させているとのことがある〕（ここでは『異次元を覗く家』とミルトン『失樂園』が類似のものとしての「アビス；深淵」（なるもの）を作中にて登場させており、それら「アビス」に名詞・属性との対応関係が存するとのことを指摘しているわけだが、そも、ミルトン『失樂園』（のアビス関連の描写）が問題になるのはあまりにも奇怪なかたちで「今日的な理解で見た」ブラックホールと類似するものを登場させているダンテ『地獄篇』にての描写と多重的に接合しているとのことがあるからであり、また、それと同様に奇怪なる他の関係性もが具現化を見ているからである——本稿にての先だつての段、出典(Source)紹介の部 55から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する段では「文献的事実」の問題としてダンテ『地獄篇』とミルトン『失樂園』の奇怪性呈してのその伝での相関関係についての解説を膨大な文量を割きもしながらなしている——）

とのことがありもすることである。

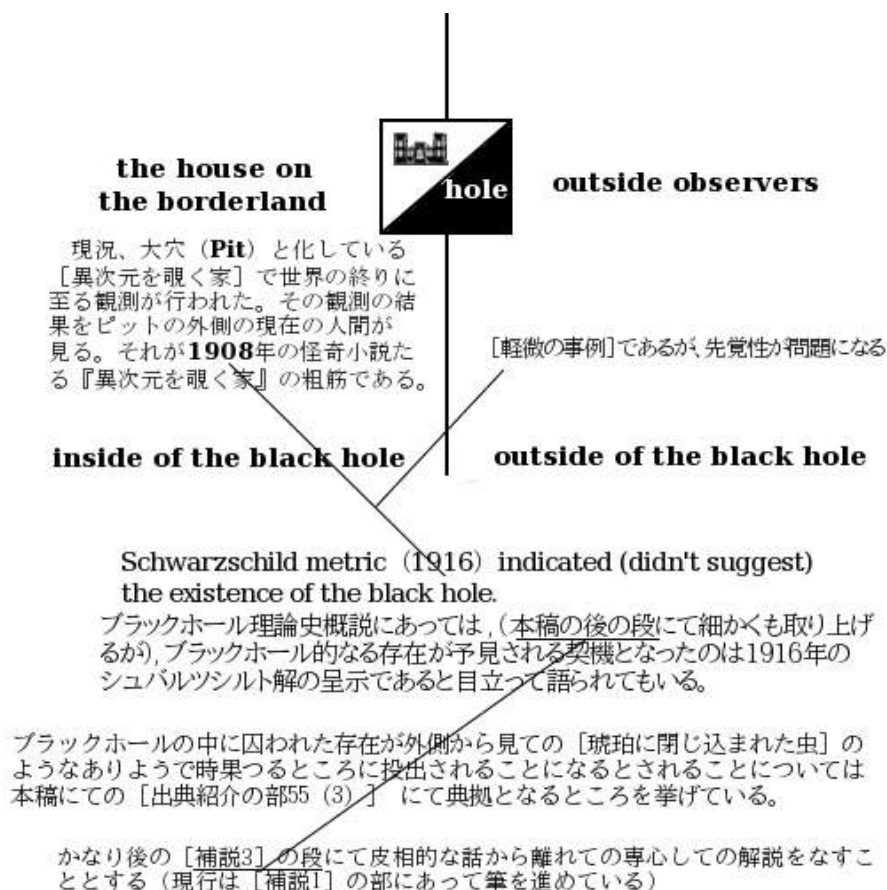
そして、「さらにもって問題となるのは、」

〔そうした「「奇怪な先覚性を帯びながらも」「相互に多重なる連結関係を呈している」とのことら〕が「人類を皆殺しにする」とのコンテクストに通じている〕

とのことがありもすることである（ミルトン『失樂園』ではブラックホール描写と結びつく先述してきたところの「アビス」横断路が（サタンことルシファーの擬人化

された妻子たる) [罪]と[死]が人類に襲いかかるためのものとして構築されるとの粗筋が採用されている。そうした皆殺しの比喩がトロイア —— 「ありがたいと招き入れた木製の馬」によって住民が騙し討ちに遭い、皆殺しにされたと伝わっている古の都市国家 —— と「実にもって巧妙かつ堂に入ったの式で」接合し、かつ、どういうわけなのか、今日の加速器実験にまつわる命名規則「とも」 多重的に接合しているようになっているとのことの入念なる指し示しに努めてきた(そして関連するところの指し示しにさらにもってこれより努める所存である)のが本稿となる)。

誤解をなされやすいと当然に思うところだが、筆者は「宗教的話柄を用いているわけではない」し —— そも、[事実]ベースのものではなく [観念と価値判断] ベースのものたる宗教的話柄に対して葬式仏教程度の無宗教・無神論者として [愚劣な機械の反復所作(どこまでいっても[まさしくもの空念仏]としての空虚なもの)] 程度の [軽侮の対象に相応しきもの] としか見ていない人間が本稿筆者となる —— 、また、と同時に、理性的な人間らが顧みもした際に [おかしいこと] ととらえるようなことを述べているわけでもない —— 現実そこに認められるとの多重なる純・記号論的一致性に着目し、そこに共通の確たるコンテキスト・確たる悪意のようなものが見出せることを摘示しながら、「そうしたことをもってして確率論的に偶然として斥けられるのか?」ということの問題視しているとのやりようが [おかしいとのこと] になれば、なんでもおかしいとのことになろうと当然に強調したい次第でもある (ただし、[偽り; 鼻をつく虚偽・欺瞞・偽善]を [常識; 生きるうえでの価値尺度] へとしつらえなおしている者達を相手に話が通じぬと解されてのところでそういうことを強調しているとの意では「おかしい」ととられることはあるか、そう、[滑稽]ないし [頭の具合がよろしくはない]との意で [おかしい]と(相応の、[生き死にの問題すら直視できぬとの愚劣な者ら]によって) [情報処理]されることはあるか、とも見ているのだが。) ——)



1908年に世に出た『異次元を覗く家』に先立つこと600年近くも前に世に出ているとの14世紀に著されたとされるダンテ Inferno『神曲;地獄篇』という作品からして[そういう側面](ブラックホール「的なるもの」への言及文物としての側面)が「露骨に」伴っている——だが、幾人かの著名な物理学者らはかする程度にしかその点について言及しようとしていない——というのが、

[事実] (そのことが偶然の一致として放擲してよいようなことなのか問題である中での [事実])

であると述べられてしまうようになっている (:ダンテ『地獄篇』のその伝での「際立っての」特質については(つい直上の部にもそちらへの注意を向けたとの)本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 55](#)から[出典\(Source\)紹介の部 55\(3\)](#)を包摂する段で細かく論拠挙げつつ詳解なしているとのこととなる。尚、ダンテ『地獄篇』が[ベアトリーチェという愛の象徴(亡き想い人とのかたちをとる愛の象徴)に誘(いざな)われもしての人生に迷った男ダンテのあの世巡りの物語]であったこと、そして、同『地獄篇』が[ベアトリーチェによるあの世巡りの旅人ダンテに対する救済の試みの物語]であったことを想起させるように『異次元から覗く家』という作品も[異次元を覗く家のかつての住人の亡き想い人が[眠りの海]なる領域に立ち現われて、[愛の象徴]として異次元の領域を探索しようという男をなんとか救済しようという粗筋が展開する物語]「とも」なっていることからして[不気味さを際立たせているような記号論的一致性]の範疇に入るように筆者なぞはとらえているのだが、解説の煩瑣さがゆえにそのことは(原文引用なさずにも)言及だけに留めておくこととする)

(長くも脇に逸れての部の中にあつての)補つてももの表記はここまでとする

時間が意味をなさなくなるとの「現代的な意味での」ブラックホール理解が生まれるようになったのは、すなわち、

[アインシュタイン相対性理論より導出された存在]

としてのブラックホールの存在が「予言」される契機となったのは一般にあつてはカール・シュヴァルツシルトという科学者が

[シュヴァルツシルト解]

を編み出した第一次世界大戦中のこと、1916年であるとの言明がなされている(※ブラックホール理論開闢史についてはかなり後の段、本稿にあつての [補説 3](#)でも細かくも取り上げるが、さしあたりの論拠としては下にの[出典\(Source\)紹介の部 65\(5\)](#)を参照のこと)。

[出典\(Source\)紹介の部 65\(5\)](#)



SOURCE

65(5)

ここ出典(Source)紹介の部 65(5)にあつては

[ブラックホールという存在にまつわる理解は 1916 年のシュバルツシルト解の提言に端を求められる]

とのことの典拠を紹介しておくこととする。

シュヴァルツシルト解がブラックホール理論開闢と結びついているとのことについて[基本的なところ]としてまずもって英文 Wikipedia[Black hole]項目の記述を下に挙げることにしたい。

(直下、英文 Wikipedia[Black hole]項目にての現行にあつての前半部記載内容よりの引用をなすとして)

Objects whose gravity fields are too strong for light to escape were first considered in the 18th century by John Michell and Pierre-Simon Laplace. The first modern solution of general relativity that would characterize a black hole was found by Karl Schwarzschild in 1916, although its interpretation as a region of space from which nothing can escape was first published by David Finkelstein in 1958.

(訳として)

「それが有する重力場があまりにも強く光さえ逃げられないとの存在については 18 世紀(の末頃)、ジョン・ミッチェルとピエール・シモン・ラプラスに最初に考案されることになった。ブラックホールというものを特徴付けることとなった一般相対性理論に則つての最初の現代的なる解法は ——[そこよりのなにも逃れえない領域]との解釈は 1958 年にあつてデヴィッド・フィンケルシュタインによつてはじめて発表されることになったわけだが—— 1916 年にカール・シュヴァルツシルトによつて発見されたところとなる」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※尚、18 世紀からブラックホールのような存在のことが観念されていた、ジョン・ミッチェルという人物および数学史に目立つての足跡を遺しているのかのラプラスに端を発するところとして観念されていたと上にては表記されてい

るわけだが、Dark Star[暗黒星]といった呼称が与えられてもいた18世紀より観念されていたそれは今日のブラックホール理解とは異質な存在、ただ単純に〔〔光〕=〔粒子〕仮説に基づいての〕重力が強すぎて光がそこに閉じ込められて不可視化している天体〕のことを指す(その点については下に解説書よりの引用もなす)。他面、〔時間(タイム)〕と〔空間(スペース)〕を〔時空(スペース・タイム)〕として一体に見るとのことをなした(〔ニュートン力学における万有引力〕に対して〔時空の歪み〕としての説明を付けた)とのアインシュタイン以後の理解では〔ブラックホール〕とは〔時間を巡る法則がそもそも適用されない〔時空間〕に開いた穴としての存在〕のことを指す——本稿で「それ」にまつわる先覚性を問題視しているのは後者の方である——)

につき、本稿で度々問題視してきたとの物理学者キップ・ソーンの手になる著作、

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』

にあつての(ウィキペディアなどに比してかなり充実したところの)解説部よりその記載内容を引いておくこととする——該当文言をもってしてオンライン上にてグーグル検索をかけることでそういう記述が書籍に認められるとのこと、すなわち、〔文献的事実〕であるとのこと、確認できるようになっているとの記載内容を引いておくこととする——。

(直下、洋書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (1994) にあつての 3. BLACK HOLES DISCOVERED AND REJECTED [第三: 発見、そして、拒絶されしブラックホール] の部、p. 122 から p.124 にかけての掻い摘まんでの引用をなすとして)

Throughout the 1700s, scientists (then called natural philosophers) believed that gravity was governed by Newton's laws, and that light was made of corpuscles (particles) that are emitted by their sources at a very high, universal speed. That speed was known to be about 300,000 kilometers per second, thanks to telescopic measurements of light emitted by Jupiter's moons as they orbit around their parent planet.

In 1783 John Michell, a British natural philosopher, dared to combine the corpuscular description of light with Newton's gravitation laws and thereby predict what very compact stars should look like. He did this by a thought experiment which I repeat here in modified form:

[. . .]

Nothing in the eighteenth-century laws of physics prevented so compact a star from existing. Thus, Michell was led to speculate that the Universe might contain a huge number of such dark stars, each living happily inside its own critical circumference, and each invisible from Earth because the corpuscles of light emitted from its surface are inexorably pulled back down. Such dark stars were the eighteenth-century versions of black holes.

Michell, who was Rector of Thornhill in Yorkshire, England, reported his prediction that dark stars might exist to the Royal Society of London on 27 November 1783. His report made a bit of a splash among British natural philosophers. Thirteen years later, the French natural philosopher Pierre Simon Laplace popularized the same prediction in the first edition of his famous work *Le Systeme du Monde*, without reference to Michell's earlier work. Laplace kept his dark-star prediction in the second (1799) edition, but by the time of the third (1808) edition, Thomas Young's discovery of the interference of light with itself was forcing natural philosophers to abandon the corpuscular description

of light in favor of a wave description devised by Christiaan Huygens — and it was not at all clear how this wave description should be meshed with Newton's laws of gravity so as to compute the effect of a star's gravity on the light it emits. For this reason, presumably, Laplace deleted the concept of a dark star from the third and subsequent editions of his book.

[. . .]

Only in November 1915, after Einstein had formulated his general relativistic laws of gravity, did physicists once again believe they understood gravitation and light well enough to compute the effect of a star's gravity on the light it emits. Only then could they return with confidence to the dark stars (black holes) of Michell and Laplace.

The first step was made by Karl Schwarzschild, one of the most distinguished astrophysicists of the early twentieth century. Schwarzschild, then serving in the German army on the Russian front of World War I, read Einstein's formulation of general relativity in the 25 November 1915 issue of the Proceedings of the Prussian Academy of Sciences. Almost immediately he set out to discover what predictions Einstein's new gravitation laws might make about stars.

[. . .]

Schwarzschild mailed to Einstein a paper describing his calculations, and Einstein presented it in his behalf at a meeting of the Prussian Academy of Sciences in Berlin on 13 January 1916. Several weeks later, Einstein presented the Academy a second paper by Schwarzschild: an exact computation of the spacetime curvature inside the star. Only four months later, Schwarzschild's remarkable productivity was halted: On 19 June, Einstein had the sad task of reporting to the Academy that Karl Schwarzschild had died of an illness contracted on the Russian front.

The Schwarzschild geometry is the first concrete example of space-time curvature that we have met in this book. For this reason, and because it is so central to the properties of black holes, we shall examine it in detail.

(上に対する本稿筆者拙訳として)

「1700年代を通じて科学者ら、その当時は[自然哲学者]と呼ばれていたわけだが、彼らは重力はニュートンの法則にて支配されていると信じており、光はとてつもなく高速かつ普遍的なる速度にて発光しているとの corpuscles (粒子) によって成り立っていると信じていた。その速度は母星の周囲を周回する木星の衛星に由来する光の測定のおかげで[およそ秒速 300000 キロメートル]であると知られるに至っていた。1783年、ジョン・ミッチェル、英国の自然哲学者たる彼が敢えても光にまつわる corpuscular (光を構成すると往時、想定されていた仮説上の粒子) にまつわる記述とニュートンの重力の法則らを結合させるなどのことをなし、それにより、[とても小さくまとまった星] (訳注: 脱出速度との兼ね合いで光さえ逃さぬとの小さくまとまったの星たるダークスター) もあるであろうと目するに至った。彼ジョン・ミッチェルはここ本書にて私 (訳注: 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』著者たる物理学者キップ・ソーンのこと) が修正を加えての式で再提示することとしたような思考実験を行った

…(中略/キップ・ソーンによるジョン・ミッチェルの思考実験の再現表記がなされての部となるも割愛)…

(ジョン・ミッチェルが生きた) 18世紀にて周知されていた物理法則はそうした小さくまとまった星の存在するとの考えをなんら妨げるとのものではなかった。こうしてミッチェルは宇宙は膨大な量のそうした[ダーク・スター]を内に含んでいるのかもしれないと推測するに及び至り、そうした星らはそれ自体満足

いこうとのかたちでそれらにとり重要な境界線内にのみ存在、その表面から発する光の微粒子を(十二分に強力なる重力によって)内側に引き戻すがゆえに地球より不可視なる存在であるのであろうと推測するにまで至っていた。

英国ヨークシャーはソーンヒルの管長(訳注:ジョン・ミッチェルの正業は牧師であったため、原文 Rector は聖職との兼ね合いの語と解されるようになっていた)であったとのミッチェルは[暗黒星]が存在しているかもしれないとの予測を1783年11月27日、ロンドンの王立協会に報告した。彼の報告は英国の自然哲学者らの間に(水をかけられたような)若干の衝撃を与えることになった。13年の後、フランスの自然哲学者ピエール・シモン・ラプラスがそのよく知られた自著 *Le Systeme du Monde*『世界の仕組み』の初版版にてミッチェルのより早期の事績に触れることもなくして同様の予測を世に周知させることとなった。ラプラスは1799年に刊行された同著『世界の仕組み』第二版にあっても同じくもの視点を保持・呈示し続けたが、同著第三版にあってはそうはしなかった。というのも、[トーマス・ヤングの光の解釈論にまつわる発見]が往時の自然哲学者らに光の微粒子としての叙述形式を放棄させしめるに至っていた、クリスティアーン・ホイヘンスによって考案された「光を波であろう」とする記述形態に対する支持を伴ってのかたちで放棄させしめるに至っていたからであり、そして、波動たる光に対する記述様式が[星の重力がその星の光の放射に対する与える影響を計算する]とのニュートンの重力理論といかようにして噛み合うのかまったくもって明らかではなかったとのことがあるからである。この理由のために、ラプラスは彼の自著にあつての第三版およびそれに続く版以降にあつてダークスターの概念にまつわる記述を削除したらしいのである。

…(中略)…

1915年11月、アインシュタインが彼の一般相対性理論を定式化したすぐその後の折になってはじめて物理学者らは、いまひとたび、[彼らが重力および光についてその光の放射に関わる星の重力の効果を計算するに十分なる理解をなしている]と信ずるに至った。その時になってより彼らはミッチェルとラプラスのダークスターら(ブラックホールら)に対する確信に立ち戻ることができた。**最初のステップはカール・シュヴァルツシルト、20世紀初頭にあつて最も際立っての能力を有していた天体物理学者の一人たる彼によつてもたらされた。シュヴァルツシルトは第一次大戦の折、対ロシア前線にドイツ軍兵士として従軍していた際にあつて1915年11月25日発行のプロシア科学アカデミーの会報でもって一般相対性理論の定式化を読み、把握することとなった。ほとんどその直後にとのかたちで彼シュヴァルツシルトはアインシュタインの新しい重力の法則が星々に対してなすであろうことの予測群を見出すための挙を開始した。**

シュヴァルツシルトはアインシュタインに彼の計算を書き記した論文を郵送し、そして、1916年1月13日、そのアインシュタインがベルリンにてのプロシア・アカデミーの会合にてシュヴァルツシルトの代理としてそちらを発表した。数週間後、アインシュタインはアカデミーにシュヴァルツシルトの手になる第二の論文を呈示した。[星(訳注:この場合は恒星か)の正確な「時空の」歪みに対する計算結果]を、である。僅か4ヶ月後、シュヴァルツシルトの際立っての生産的活動は停止を見た。6月19日、アインシュタインはアカデミーにシュヴァルツシルトが対ロシア戦線前線にあつて戦病死を遂げたとの旨、告げるとの悲しき役割を負うこととなった。[シュヴァルツシルト幾何]は本書(訳注:『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』)にて我々が目にするところの最初の時空の歪曲にまつわる正確な具体的事例となる。この理由のため、そして、それがブラックホールの特質にあつての中心をなすところ

であるがゆえに、我々はそちら(シュヴァルツシルト幾何)の詳細にわたっての検証をなすこととする」

(拙訳を付しての引用部はここまでとする)

以上に認められるように

「今日的な意味でのブラックホール理解が生じた画期(先程、述べたようにブラックホールという言葉が生み出されたのは1967年であるが、ブラックホール「的なる」事物への今日に通ずる理解が生じた画期)はシュヴァルツシルトの解法が世に出た1916年以降であるとされている」

とのことがあるわけである。

(:ちなみに[アインシュタインの「とんでもない」遺産](アインシュタインズ・アウトレイジャス・レガシー)といったニュアンスで後の世にて「とんでもない」付けで問題視されるようになったとのことである[ブラックホール]については、である。直近そよりの引用をなしたとの **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作(同著、本稿の先の段で他ならぬ同著自体が「とんでもない」側面を[事実]の問題として多重的に伴っているとのこと、事細かに問題となる部を原文引用なしながらも指し示さんとしてきた著作でもある)にあってからして
[アインシュタイン本人は頑なにブラックホール存在を容れようとしていなかった]

とのことが紹介されているとのことがある ——キップ・ソーン著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** の 3.**BLACK HOLES DISCOVERED AND REJECTED**[第三章:発見、そして、拒絶されしブラックホール]の冒頭部、p.121 にあって(オンライン上より該当部テキスト入力で文献的事実であることを確認できる余地があるがゆえに以下、原文引用するところとして) “ **The essential result of this investigation,**” **Albert Einstein wrote in a technical paper in 1939, “is a clear understanding as to why the Schwarzschild singularities do not exist in physical reality.” With these words, Einstein made clear and unequivocal his rejection of his own intellectual legacy: the black holes that his general relativistic laws of gravity seemed to be predicting. ”** (訳として)「この精査の本質的なる帰結は、」そのようにアルバート・アインシュタインは1939年にての専門的論文にて書き、続けて、「物理的実体としてシュヴァルツシルト特異点が何故存在していないとのことになるかの明瞭なる理解となる」と書いている。これらの申しようからアインシュタインは自己の知的遺産、すなわち、彼の重力の一般相対性理論が予測しているように見えたところのブラックホールに対する明確かつ絶対的なる否定の姿勢を前面に押し出してもいた(訳を付しての引用部はここまでとする)と記載されているところともなる——。

といった風に

[(先にての引用部によって言及されているような式で)現代的ブラックホール概念提唱の前提条件となった一般相対性理論(シュバツルシルト・メトリック)が提言されだした1916年の一年ほど前の1915年提唱]
の提唱者となっていた他ならぬアインシュタインをはじめ科学界の有力者に

その存在にまつわる議論が[総好かん]を食らっていたとのブラックホール概念が科学的に認められる契機を造り出したのは[スブラマニアン・チャンドラセカールという若き科学者による 1930 年代の挙](そちら帰結からしてアインシュタインは認容していなかった節があるものの挙)であるとのことが現況、広くも周知されているとのことがある——それについては和文ウィキペディア[ブラックホール]項目にあつての現行の[理論史]の節にあつての記載内容程度のものからして(そこよりの一文のみ原文引用をなすとして)“1930 年に、インド出身でイギリスに留学に来ていた当時 19 歳のスブラマニアン・チャンドラセカールが、ブラックホールが存在することを初めて理論的に指摘したが、当時の科学界の重鎮アーサー・エディントンがまともに検討することもなく頭ごなしに否定した”(引用部はここまでとする)と表記されているようなところが科学史にて取り沙汰されているとの背景がある(同じくものことについては BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy の **4. THE MYSTERY OF THE WHITE DWARFS** の章、国内にて流通を見ている訳書『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(白揚社刊)では[第 4 章 白色矮星の謎]と訳されてもいるセクションにて[シリウス B という白色矮星の崩壊過程を巡る考察がいかにしてブラックホールにまつわる理論予測につながったかについての詳述がなされている]との式での委細にまつわる表記がなされていることともなる)。尚、【**[シリウス B] にまつわるブラックホール理論開關史にあつてのチャンドラセカールという若者による予測挙動**】までもが[際立って奇怪なること]と地続きになっているとのこと「も」あるのだが、その点については本稿のさらに後の段にあつて膨大な文量を割いての解説(書籍 Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes (邦題)『ブラックホールを見つけた男』(草思社)といった書籍などよりの引用をなしながらも膨大な文量を割いての解説部)でもってして煮詰めることとする所存である——)

(出典(Source)紹介の部 65(5)はここまでとする)

直近の出典(Source)紹介の部 65(5)にて

[相対性理論に基づいての今日的な意味合いでのブラックホールにまつわる理論が生まれる培地が整ったのは 1915 年から 1916 年にかけてである]

とのことを示した(そして、そうもしたありように立脚してチャンドラセカールというインド系物理学者が(周囲よりは提唱理論否定のうえで冷遇されながら)ブラックホールの存在を具体的に示したのが 1930 年代であったというのが科学史上の周知されてのトピックとなっているとのことについての先駆けての表記をなした)。

といったことから鑑みるに、(繰り返しになるが)

英国人作家(ウィリアム・ホープ・ホジソン)の手になる、

The House on the Borderland (邦題)『異次元を覗く家』

と題されての 1908 年に世に出た怪奇小説（「問題となる」1915 年から 1916 年より見ての 7 年から 8 年前に世に出た怪奇小説）が

[[地に開いた巨大な底無し穴]と隣接・連結しているとの[時間の流れ]が外界に対して止まっているがごとき如き場所]にして[遙か遠未来、世界の終わりの時期へと来入者をいざなう領域](呪われた屋敷)]

という「どうしてこのようなものを持ち出したのか?」と疑義呈さざる場を作中主要舞台として設定、

[[「時間の流れ」が外界から見て止まったような状況]となり、[時空間の法則が破綻する領域]を内包するとの[底無し穴]たる[ブラックホール]]

のことを想起させる格好となっていた

このできすぎ具合について推し量りいただけることか、とは思う。

さて、そうしたブラックホール「的なる」ものが

[異なる時空間を橋渡しするもの]

として嚆矢的に登場させられているとの指摘がなされている作品が ——先立っての段でも英文 Wikipedia[Black holes in fiction]項目にあってその名前が挙げられていることを紹介した著作としての—— The Sword of Rhiannon『リアンの剣』という小説作品となる（:同 The Sword of Rhiannon『リアンの魔剣』については、英文 Wikipedia[The Sword of Rhiannon]項目に “ **The novel was first published in the June 1949 issue of Thrilling Wonder Stories as "Sea-Kings of Mars".** ”（訳として「同小説は 1949 年 6 月にて最初に『火星の海王たち』(シー・キングス・オブ・マーズ)との題名でスリリング・ワンダー・ストーリーズ誌にて初出を見たのものである」と記載されている作品となる）。

先だつての段では

「 **The Sword of Rhiannon** 『リアンの剣』という作品が[ブラックホール「的なる」もの]を登場させていることそれ自体に関しては[科学理論の流布態様の問題]からさして奇異たることには映らないかもしれない(取り上げるに値する[黒白]にあっての[黒]にはならない) 」

との旨、申し述べもしていたわけだが(その意では直近の段にて言及した『異次元から覗く家』にあってのそのようなブラックホール自体にまつわる先覚性は問題にならないとも受け取れる)、ただ、『リアンの剣』という作品に関してもここ [脇に逸れての補足部](ヴォネガット小説にみとめられる問題性を訴求するための話が[主]であるところを[従]として展開しているとの補足部)にて問題視しているところ、

「 **【ブラックホール】に通底する事柄への言及文物には【先覚性】との絡みで【異常な側面】もが往々にして現われていることがある** 」

とのことが「如実に」当てはまりもする。であるから、(ここ脇に逸れての補足部では)これより同作『リアンの剣』にまつわる細やかな解説をなすこととする。

さて、[ブラックホール]という言葉さえ未だ提唱されていなかった(先述のようにブラックホールという言葉が物理学者ジョン・ホイーラーによって考案されたのは 1967 年であったとされる)折柄の作品ながら『リアンの剣』がまさしくものブラックホール「的なる」ものを描いての作品であったこと、そして、同作にて描かれるブラックホール「的なる」ものが今日、著名な米国人物理学者らが提唱しているような、

[カー・ブラックホール] (本稿にて先述なしたところの[時空間の橋渡し]をなしもするとされているブラックホール)

のように[時空間の橋渡しをするもの]となっていることにつき直下、訳書および原著から該当するところの原文引用をなしておくこととする。

出典 (Source) 紹介の部 65 (6)



SOURCE 65(6)

ここ出典 (Source) 紹介の部 65 (6) にあつては小説『リアノンの剣』に(今日でいう)カー・ブラックホールの原文引用が描かれていることにまつわつて訳書および原著よりの原文引用でもつてして指し示しておくこととする。

(直下、昭和 51 年頃(原著初出に遅れること二十数年しての折)に早川書房より出されている邦訳文庫版『リアノンの魔剣』(「読み応えを増させるためになのか」かなりの意識がなされており、『リアノンの剣』ではなく『リアノンの「魔」剣』という邦題が振られての訳書)の 24 ページから 26 ページ、主人公マシュー(マツ)・カースが「伝説の存在たるリアノン」の墳墓に侵入、そちら墳墓内に存在していた「異世界(過去の火星の世界)に通ずる暗黒領域」の内部へと叩き落とされる(盗掘の手引き者たるペンコールというキャラクターの騙し討ちに遭い叩き落とされる)との記載がなされている部よりの原文抜粋をなすとして)

だが、その部屋には、たった一つのものしかなかった。それは巨大な泡立つ暗黒だった。ぶるぶるとうちふるえ、球形にたれこめた暗黒のかたまりだった。その中から細い光が射し、別世界からの流星のようにきらめいた。ランプの光は、この泡立つ暗黒にあたると、はね返りふるえた。

…(中略)…

それは時空連続体にうがたれた穴であり、われわれの宇宙の外にある無限の窓であるかもしれぬといっさいの神学者に夢想されているものであった。

…(中略)…

かれが完全に振り返る前に、ペンコールは両手で背後からかれを突き飛ばした。カースは自分の身体が、もだえ立つ暗黒の中にすいこまれていくのを感じた。

(※尚、上の訳書よりの引用部に対する原著にあつての対応箇所は(The Sword of Rhiannon 序章 I. The Door to Infinity[無限へのドア]の節よりの引用をなすとして) “ **It was a great bubble of darkness. A big, brooding sphere of quivering blackness**, through which shot little coruscating particles of brilliance like falling stars seen from another world. And from this weird bubble of throbbing darkness the lamplight recoiled, afraid. [. . .] **This brooding bubble of darkness — it was strangely like the darkness of those lank black spots far out in the galaxy which some scientists have dreamed are holes in the continuum itself, windows into the infinite outside our universe!** [. . .] Penkawr's snarling shout came to him from a great distance as he tumbled into a black, bottomless infinity. ” (引用部はここまでとする)との部位となる(本稿の先の段でも既述の状況から欧米圏書物の多くの書物はその原著テキストをオンライン上に入力する(望ましくは長文のセンテンス単位で入力する)ことでその通りの記載がなされていることが Google 検索エンジン表示結果より確認できるようになっている。であるから、[文献的事実]の問題を確認なす必要をお感じになられたとの読み手におかれてはここでの引用テキストの方、確認の用に供していただきたい次第である))

(続いて、直下、昭和 51 年頃に早川書房より出されている邦訳文庫版『リアンの魔剣』にあつての 172 ページから 173 ページ、主人公マシュー(マット)・カースが『リアンの墓所にての異世界(過去の火星の世界)に通ずる暗黒領域』より『異世界』(過去の火星世界)に移動、そこにて『身内より追放された神リアン(太古の超知性生命体との設定の存在)に由来する縁(えにし)』で蛇の傭人勢力たるドビュアン —— (同ドビュアン、部外から進入不可能の空間を捻転させての拠点(カール・ドゥ)に拠りながら『水晶テクノロジーを用いての催眠術』を用いて人間を操りつつ人間の独裁国家を通じて作中世界を間接支配しているとの設定が付されての存在にして、作中、『往古、リアンから超技術を掠め取った冷酷無情なる蛇の種族』であるとの設定が付されての存在でもある) —— と対決する局面に追い込まれた後、『磁気生命体と化したリアン』が迫り来る蛇の勢力に際会する前に主人公に一席ぶつことになった下りよりの原文引用をなすとして)

カースには、リアンが自分の怒りを静めようと努力をしているのが感じられた。そして思考による声が再び聞こえて来たとき、それは自制されたおだやかな誠意あふれるものであった。

"岩窟でわたしはおまえに真実を話した。おまえはわたしの墓地にいたのだ。**時間と空間の外にある恐るべき暗黒のなかに永久に変わることもなく、いつまでも閉じ込めておかれるのがどんなものか、おまえにはとてもわかるまい。**わたしは決して神ではない。おまえたちがいまわれわれをどう呼ぼうと、われわれは神であったことはないのだ——ただ、他の人間がやってくる前に、来ていた者であるに過ぎないのだ。人々はわたしを<呪われしもの>といみきらっている——だが、わたしはそうではなかったのだ。空疎で高慢だっただけだ。そして、おろか者でもあった。邪悪な気持はなかった。わたしは<蛇族>に教えた。かれらは利口で、わたしにおもねた——かれらがわたしの教えを利用して悪をはたらいたとき、かれらにやめさせようとして失敗した。かれらは防禦法をわたしから学び、カール・ドゥではわたしの力もかれらにはとどかなかった。それゆえ

にわたしの兄弟キルがわたしを裁いた。かれらは、あの用意した場所に、時間と空間を超越して、わたしを幽閉し、わたしの罪の事実がこの地上に続く限り、わたしをそこにとどめておくようにした。

(訳書『リアンの魔剣』よりの原文引用部はここまでとする —※—)

(※尚、表記引用部の原著 The Sword of Rhiannon にての該当部は XIII. Catastrophe との節にあつての “ I told you the truth in the grotto. You were in my Tomb, Carse. **How long do you think I could lie there alone in the dreadful darkness outside space and time and not be changed?** I'm no god! Whatever you may call us now we Quiru were never gods — only a race of men who came before the other men. / "They call me evil, the Cursed One — but I was not! Vain and proud, yes, and a fool, but not wicked in intent. I taught the Serpent Folk because they were clever and flattered me — and when they used my teaching to work evil I tried to stop them and failed because they had learned defenses from me and even my power could not reach them in Caer Dhu. / "Therefore my brother Quiru judged me. They condemned me to remain imprisoned beyond space and time, in the place which they prepared, as long as the fruits of my sin endured on this world. Then they left me. ” との部位となる (既述のようにオンライン上より以上のようなフィクションにての記述がなされているのが[文献的事実]として確認いただけるようになっている —上にての[時間と空間の外にある不変の暗黒の幽閉領域]というのが[ブラックホールのなる領域]となっている—)

(続いて、直下、昭和 51 年頃に早川書房より出されている邦訳文庫版『リアンの魔剣』にあつての 247 ページから 249 ページ、作中の宿敵で世界を間接統治していた蛇族(デュビアン)が滅んだ後、主人公マッシュ(マット)・カースが[伝説の存在リアンの墳墓]の暗黒トンネルから元の世界に戻る際にリアン本体の姿を垣間見たとの下りよりの(中略)なしつつもの引用をなすとして)

かれの身体は暗い水晶の棺の中に横たわっていた。その内面は、かれを永遠にそこに閉じ込めた不可解な力によって微光を放っていた。**かれはあたかも宝石の中心に、永久に凍りついているかのように見えた。**

…(中略)…

それは時を超越したものであり、時間がないため腐朽はなかった。リアンは自分の罪の記憶とともに、永遠にわたってそこに横たわっているのだろう。

…(中略)…

カースはリアンの熱心な呼びかけを聞いた——時空を通ってはるか彼方に送られた心の呼びかけだ。

…(中略)…

"兄弟たちよ、わたしも一緒に行かせてくれ！わたしは<蛇>を滅ぼし、わたしの罪ほろぼしをしたのだ"

"われわれの審判により、リアンを自由の身とする"

…(中略)…

"わたしの剣をとっておけ、地球人よ——誇りをもってそれを帯びるがよい。おまえなくしては、わたしはカール・ドゥを滅ぼすことはできなかったのだから"

なかば失神状態で、カースは最後の心による命令を受けた。かれはいまやユウェインとともに、暗黒の渦動の中を、得体の知れぬ陰影をつらぬいて、さまざまの速度で落ちていった。そのとき、かれはリアンの最後の別れの言葉がひびき渡るのを聞いた。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、表記引用部の原著 *The Sword of Rhiannon* にての該当部は XIX. Judgment of the Quiru との節にあつての “The pulsing darkness cleared in some strange way that had nothing to do with light or sight. **Carse looked upon Rhiannon. His body lay in a coffin of dark crystal, whose inner facets glowed with the subtle force that prisoned him forever as though frozen in the heart of a jewel.** [. . .] But there could be no death in this place. It was beyond time and without time there is no decay and Rhiannon would have all eternity to lie there, remembering his sin.[. . .] Carse heard Rhiannon's passionate call — a mental cry that pulsed far out along the pathway through space and time. [. . .] "Let me go with you, my brothers! For I have destroyed the Serpent and my sin is redeemed." It seemed that the Quiru pondered, searching Rhiannon's heart for truth. Then at last one stepped forward and laid his hand upon the coffin. The subtle fires died within it. "It is our judgment that Rhiannon may go free." [. . .] "Keep my sword, Earthman — bear it proudly, for without you I could never have destroyed Caer Dhu." Dizzy, half fainting, Carse received the last mental command. **And as he staggered with Ywain through the dark vortex, falling now with nightmare swiftness through the eerie gloom, he heard the last ringing echo of Rhiannon's farewell.** ”との箇所となる(既述のようにオンライン上より以上のようなフィクションにての記述がなされているのが[文献的事実]として確認いただけるようになっている)——。ポイントは[蛇の種族に知恵を与えたも、その罪障・咎(とが)より幽閉を強いられた神(とされる存在)の幽閉先たる時間と空間を超越した渦を巻く暗黒領域]とのその場にブラックホール「的なる」特性が見てとれることである(また、神が蛇族の滅尽を成し遂げ、そうした領域より解放されるのが『リアンの剣』の結末だが、それがいかに[反対話法]がかっているかについても続く段にて解説することとする))

※1949年初出の原著に対して1976年に輸入された『リアンの剣』の訳書の方には訳者が勝手に[ブラックホール]との言葉を付していることにまつわつての付記として

ちなみにここまでにそよりの引用をなしてきたとの和訳版『ザ・ソード・オブ・リアン』(邦題タイトル『リアンの魔剣』)の刊行時期は1976年となり(原著刊行時期が1953年(『シー・キングス・オブ・マーズ』とのタイトルでは1949年)であるのに対してそれに遅れること、23年(27年)を経てのこととなり)、早川書房より出されているとのそちら訳書には
(訳者が「分かり易さの弁に、」といった目的で付したのであろうと解されるところとして)

[1967年まで存在していなかったとの「ブラックホール」という言葉]
が訳にて付して用いられているとのことが見受けられもする(邦訳版『リアンの魔剣』p.25に「このもだえ泡立つ暗黒——それは宇宙の深淵にあるブ

ラックホールに奇妙に似ていた]などと書かれているパートがそうである)。

につき、[ブラックホール]という言葉が存在して「いなかった」折に世に出た原著の方には(遅まきに刊行され意識も少なからずなされているとの訳書とは異なり) 当然に[ブラックホール]という言葉は用いられて「いない」とのこと、お含みいただきたいものである —— 本稿筆者が手ずから調査して捕捉しているとの込み入ったことに言及すれば、である。物理学者ジョン・ホイーラーが[ブラックホール]という言葉が1967年に生み出す前まで英語圏で[ブラックホール]と言えば、18世紀、英国と現地勢力が争っていたインドのカルカッタ([女神カーリーの地]との語源があるとも言われるイギリスとの交易地として拓かれたインドの都市)に設けられていた[人間押し込み型の極めて密集度の高い地下監獄](そこにて押し込まれた者達が他の者らの下敷きになって圧死したとのことで有名な監獄)、いわゆる Black Hole of Calcutta[カルカッタのブラックホール]のことを取り立てて指しもする言葉だと解されるようになっている。それゆえに1940年代末葉から50年代初頭にかけて表題を変えもしながら世に出た『ソード・オブ・リアノン』にあつては[奇怪な黒々とした構造体]を指す名称として同じくもの言葉(ブラックホール)が用いられていなかった(そこを、繰り返すが、邦訳版に[科学理論の登場時期]までには注意を払う必要もないといった按配の訳者、フィクションを徹頭徹尾、[フィクション]として流布することを本然的役割(あるいは社会的使命か)としている節ある業界、サイエンス・フィクション業界の人間として彼らが広めることを業としているフィクションに対する読み手読みやすさのためにか何なのか自手流のアレンジで勝手に[ブラックホール]という言葉が付しているようなのだが、真実に向き合う勇気ある向きが確認なした折にといったことに惑わせられないように、とここに注記をなしておく(：こちら注記についても原著テキストを確認なしてみることで真たると瞭然としていることである))——。

以上、引用部にて示した『リアノンの剣』に登場のリアノン墳墓に存在しているとのゲート、

[[時空連続体にうがたれた穴でありこの宇宙の外側に向けての無限の窓であると夢想されてきたもの]と形容されての過去の異世界に通ずる時空間を架橋する通路としての存在](オンライン上より文言確認できるとの原著にては “ **This brooding bubble of darkness — it was strangely like the darkness of those lank black spots far out in the galaxy which some scientists have dreamed are holes in the continuum itself, windows into the infinite outside our universe!** ” と描写されてのもの)

[[時間と空間の外にある恐るべき暗黒][暗黒の渦動]と表されている存在](オンライン上より文言確認できるとの原著にては “ **the dreadful darkness outside space and time and not be changed** ”や“ **the dark vortex** ” と描写されてのもの)

がいかにもって[カー・ブラックホール然としたもの]であるかについては

[本稿にての従前の段にて取り上げた次の通りの記載]

から推し量りいただけるか、と思う。

(直下、Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』(邦訳版の版元は日本放送

出版協会(現 NHK 出版)で原著の米国にての初出は 2005 年であるとの著作)にあつての 384 から 385 ページよりの原文引用(出典(Source)紹介の部 20)になしたとの同様の引用)を「再度」なすとして)

カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。

…(中略)…

現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、表記引用部の原著 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos (2005) にての該当部は(CHAPTER ELEVEN Escaping the Universe の節より原文引用するところとして) “ The wormhole in the center of the Kerr ring may connect our universe to quite different universes or different points in the same universe. [. . .] **Currently, most physicists believe that a trip through a black hole would be fatal. However, our understanding of black hole physics is still in its infancy, and this conjecture has never been tested. Assume, for the sake of argument, that a trip through a black hole might be possible, especially a rotating Kerr black hole. Then any advanced civilization would give serious thought to probing the interior of black holes.** ” (オンライン上より文言確認できるとの原著よりの引用部はここまでとする)との部位となる)

これにて『リアンの剣』という作品(1949年初出時のタイトルは Sea-Kings of Mars)がいかようなかたちで

[(時空間の橋渡しをするとされる) カー・ブラックホール然としたもの]

を登場させているのかについての典拠紹介を終える。

(出典(Source)紹介の部 65(6)はここまでとする)

※補いもしての表記として —— (上にて [カー・ブラックホール] と [『リアンの剣』に登場のゲート装置] の類似性について取り上げた点に関して補いもしての話として) ——

作家ライ・ブラケットは、

[(往時の現実世界住民たるアメリカ人の視点から見ての) 未来の時代に於ける
「人が住める」火星]

より話がはじまる —— (要するに「[テラ・フォーミング]などといったものを観念しないと現代社会から見れば荒唐無稽にも見える」ところから話がはじまる) —— との『リアンの剣』(The Sword of Rhiannon) にあつて

[ブラックホール然としたものに落とされた主人公の述懐部]

にまつわる描写として次のような記述をもなしてゐる。

(直下、昭和 51 年頃に早川書房より出されている邦訳文庫版『リアンの魔剣』に
あつての 34 ページよりの引用をなすとして)

「泡立つ暗黒についてのかれの最初の考え方は正しかったのだろうか? 本当にあれが宇宙連続体にあいた穴だろうか? もし、そうだったとすれば、自分に起きたことが理解できるような気がする。なぜなら宇宙の時空連続体は、有限なのだ。アインシュタインとリーマンが、ずっと以前にそのことを証明している。かれはその連続体から完全にはみだしてしまつた。そして連続体に再び帰つた——だが、かれの属する時間帯ではなく、違つた時間に帰つてきたのだ」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、表記引用部の原著 The Sword of Rhiannon にあつての該当部は “ **Had his first guess about that bubble of darkness been right? Was it really a hole in the continuum of the universe? If that were so he could dimly understand what had happened to him. For the space-time continuum of the universe was finite, limited. Einstein and Riemann had proved that long ago. And he had fallen clear out of that continuum and then back into it again — but into a different time-frame from his own.** ” との部位となる)

上をもつてして作家レイ・ブラケット — ウィキペディア程度の媒体からして記載されているところとして後に於ける晩年には映画スターウォーズ・シリーズの脚本を担当しているとの作家でもある— が

[科学知識の摂取にやぶさかではないとの勉強家]

であると解されるようになってゐる (: ブラケット女史が [ブラックホール] という言葉さえ存在していなかつた (先述) との折柄に [ブラックホール然としたもの] にまつわるところの記述としてアインシュタインやリーマンの名前を持ちだしているからである —— (こちらリーマンはリーマン幾何学の旗手たる 19 世紀数学者ベルンハルト・リーマンのこと。一般相対性理論に関する英文 Wikipedia [General relativity] 項目にあつての Model-building の節にて “ The core concept of general-relativistic model-building is that of a solution of Einstein's equations. **Given both Einstein's equations and suitable equations for the properties of matter, such a solution consists of a specific semi-Riemannian manifold (usually defined by giving the metric in specific coordinates), and specific matter fields defined on that manifold.** ”、大要、「一般相対性理論にあつてのモデル構築で核となつたコンセプトはアインシュタインの解法のそれとなり、アインシュタインの方程式、および、リーマン多様体とそちら多様体をベースに定義されるところの特質に対する解法らによつて成り立つ適正な方程式を所与のものとして一般相対性理論は成り立つ」との趣旨のことが記載されていることに見受けられるようにリーマンによつて創始されたリーマン幾何学の応用が一般相対性理論の基礎になつてゐることが知られてゐる) ——)。

しかし、といった勉強家らしき作者によつて科学理論動向を顧慮している節ある書きようもがなされての同小説 (『リアンの剣』) には反面、

「ブラックホールの中に生身の人間が落ちれば、すさまじい重力のために生きていられるはずがない(溶岩轟く火山の噴火口にダイブした生身の人間が生存し続けられるはずがないのと同じである)のに人間がそれでも生きているとの設定が採用されていたり」

「ブラックホールが目立って光を反射するとのことが基本的には観念できない(ブラックホールには完全黒体、[光をまったく反射しないもの]に近いとの性質があるとされる)なかでブラックホール然としたものが露骨に光を反射しているような描写もなされていたり」

と「まったくもって科学的に不正確な」部位も含まれている。

(→ 表記のことについてはたとえばもってして英文 Wikipedia [Black body] (完全黒体) 項目にて “ A black body is an idealized physical body that absorbs all incident electromagnetic radiation, regardless of frequency or angle of incidence. ” 「黒体とは波長あるいは入射角によって異動呈することもなく全ての電磁場を吸収するとのかたちで理論想定されての物理的実体のことを指す」と表記されている(そして、さらには同じくもの英文ウィキペディア[黒体]項目にて Black Hole について “ It is called "black" because it absorbs all the light that hits the horizon, reflecting nothing, making it almost an ideal black body. ” 「ブラックホールが「黒い」とされているのはそれがその境界面に接する光を — なんら反射作用を呈することなく、それをして[ほとんどもってして理想的なる完全黒体]としているとの式で— 全て吸収するとのことがあるからである」と表記されるようなことがある) 中で【電磁波の一形態である(とのことが理系の世界の常識であるところの)[光]】を【問題となるゲート装置】が反射しているとの描写がリィ・ブラケット小説に見受けられるとのことが「ある」—— せんだって引用しているように “ It was a great bubble of darkness. A big, brooding sphere of quivering blackness, through which shot little coruscating particles of brilliance like falling stars seen from another world. And from this weird bubble of throbbing darkness the lamplight recoiled, afraid. ” (邦訳版記述)「それは巨大な泡立つ暗黒だった。ぶるぶるとうちふるえ、球形にたれこめた暗黒のかたまりだった。その中から細い光が射し、別世界からの流星のようにきらめいた。ランプの光は、この泡立つ暗黒にあたると、はね返りふるえた」などとの表記がなされているとのことが「ある」——)

だが、そうした側面については

「[選り分けてもとらえておくべき]との空想の側面が強く現われている部分(さらに述べれば、[顕著な予言的言及(後述)の脇にあっての作家の「人間レベルの」不勉強さが現われているところ]かもしれない)であろう」

とし、置いておく。

以上、含んだうえでここ[補いもしての部]にて述べたいのは

「『リアンの剣』(『ザ・ソード・オブ・リアン』)という小説作品に関しては荒唐無稽なる側面も多々伴うが、他面、[先覚性]が見てとれるとのところもあり、については、作者の勉強家としての側面に由来するとのことで説明がなせそうなどころが少なからずある(直近にてのアインシュタインやリーマン幾何学のリーマンに対する言及部などにもそうした特質が見てとれなくもない)。

だが、『リアンの剣』という作品が真に問題となるのは、(これよりその点について詳述を重ねていく所存だが)、[往時にての知見ではおよそ想像されるところではなかったと解されるようになっていること]を「極めて隠喩的に」先覚性が際立ってのやりようで言及しているとの側面がそこに見てとれるとのことがあり、なおかつ、奇怪性際立ってのその部が他の事物と結節しながら「根深い悪意」のようなものを感じさせるようになってもいると見てとれるようになっているとのことがある」

とのことである。

上記のこと(作品『リアンの剣』にて真に問題となるのと)についてはついでの段にて解説を講じていく。

(補いもしての表記はここまでとする)

話を続ける。ここからが **The Sword of Rhiannon** 『リアンの剣』という作品にあつての異常異様なる先覚性の具現化にまつわつての話となり、それは同作『リアンの剣』が「こともあろうに、」

[粒子加速器によるブラックホール生成]

を露骨に想起させることに触れている——本稿前半部にあつて細かくも述べているように[加速器によるブラックホール生成可能性]が想起されるようになったのはそう遠い昔のことではない(換言すれば、小説『リアンの剣』が世に出た半世紀以上前より遙かに最近になってのことである)にも関わらず、そうした時系列上の事実関係に『リアンの剣』ありようが矛盾・抵触している(しまつて)——とのことにまつわつての話となる。

具体的には、「まずもつて」のこととして、

「『リアンの剣』ではブラックホール状の泡立つ暗黒の穴に落ち込み、別の世界、過去の火星に降り立った男たるマシュー・カース(『リアンの剣』主人公)がプロトン・ガン(直訳すると[陽子銃])を武器として帯びていた男であるとの作中設定が採用されている」

とのことがあり、「かつもつて」、

「『リアンの剣』では[黒い泡立つ穴]に騙されて叩き落とされた主人公(マシュー・カース)がその叩き落とされた先の異世界の建物([こちら側の世界のリアン墳墓])に対して[あちら側の世界のリアン墳墓]といった設定の建物)内の外壁を破壊して脱出するために[プロトン・ガン](陽子銃)を「エネルギー切れを起こすまで乱射する」との作中設定が採用されている」

とのことが問題となる(同じくこのことの出典は下に挙げることとする)。



SOURCE

65(7)

ここ出典(Source)紹介の部 65(7)にあつては

[[『リアンの剣』主人公が彼を過去の世界にいざなうことになった[暗黒の泡立つ時空の穴](渦動を呈すとも)に叩き落とされた際に陽子銃(プロトン・ガン)を手に持っていたとのフィクション設定が採用されていること]

[[『リアンの剣』主人公が暗黒の時空間の穴から過去世界へ落ち込んだ際に移動先で建物外壁を壊すために手持ちの陽子銃(プロトン・ガン)をエネルギー切れを起こすまで乱射したとのフィクション設定が採用されていること]

を示すために当該のフィクションよりの原文引用をなしておくこととする(原著に遅れること20数年を経ての昭和51年頃に早川書房より刊行された邦訳文庫版『リアンの魔剣』(読み応えを増させるためにか、意識も認められ、[ブラックホール]といった語句もそちら訳書にのみ認められるところとして付け加えられていると先述したところの邦訳版)にての該当パート——[プロトン・ガン](陽子ガン)を保持した男が異なる時空間を架橋する暗黒の穴に落ち込んだ後、落ち込んだ先でそのプロトン・ガンを(エネルギー切れを起こすまで)乱射、壁を破壊して活路を開いたとの描写がなされているとのパート——よりの原文抜粋をなしておく)。

(直下、『リアンの魔剣』(早川書房)[1 無限への扉]の章、p.9よりのワンセンテンス引用をなすとして)

カースは皮ケースにおさめたプロトン銃を静かに抜いた。しかし、尾行者を逃がすつもりはなかった。かれは歩調をゆるめも速めもせず、ジェッカラの街を歩いていった。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、(グーグル検索エンジン上でのそちら英文テキスト入力で現行は文献的事実であることを確認できるようになっているところとして)表記引用部の原著 *The Sword of Rhiannon* にあつての該当部は[*Carse quietly loosened his proton-gun in its holster but he did not attempt to lose his pursuer. He did not slow nor quicken his pace as he went through Jekkara.*]との部位となる)

(続いて、直下、『リアンの魔剣』(早川書房)[1 無限への扉]の章、p.13 よりのワンセンテンス引用をなすとして)

小さな筋張った身体がかれの手の中でもがき、横腹に冷たくつきつけられたプロトン銃を感じて男は驚き、身を固くしてうめき声をあげた。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、(グーグル検索エンジン上でのそちら英文テキスト入力で現行は文献的事実であることを確認できるようになっているところとして)表記引用部の原著 The Sword of Rhiannon にあつての該当部は “ They drew abreast, passed and suddenly Carse had moved in a great catlike spring out into the street and a small wiry body was writhing in his grasp, mewling with fright as it shrank from the icy jabbing of the proton-gun in its side. ” との部位となる)

(続いて、直下、『リアンの魔剣』(早川書房)[2 見知らぬ世界]の章、主人公マシュー(マット)・カースがリアンという存在の墳墓で発見された[黒い泡立つ穴]に落とされて別世界(にあつてのリアン墳墓)にたどり着き、茫然自失の体で活路を見いだそうとしているとの部となる p.31 よりのワンセンテンス引用をなすとして)

ついにカースはあとへさがって、プロトン銃のねらいをつけた。原子の火炎の流れが岩に食いこみ、焦がし破片を飛ばした。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、(グーグル検索エンジン上でのそちら英文テキスト入力で現行は文献的事実であることを確認できるようになっているところとして)表記引用部の原著 The Sword of Rhiannon にあつての該当部は(“ He tried to move the slab. It would not budge nor was there any sign of key, knob or hinge.(に続き) [Finally Carse stepped back and leveled his proton-pistol. Its hissing streak of atomic flame crackled in the rock slab, searing and splitting it. ” との部位となる)

(続いて、直下、『リアンの魔剣』(早川書房)[2 見知らぬ世界]の章、主人公マシュー(マット)・カースがリアンという存在の墳墓で発見された[黒い泡立つ穴]に落とされて別世界(にあつてのリアン墳墓)にたどり着き、茫然自失の体で活路を見いだそうとしているとの部、そして、建物の外壁に穴を開けて[(元いた世界では夜であったところを)昼の時間帯となっていた別世界に出た]との描写がなされているとの部たる p.32 よりのワンセンテンス引用をなすとして)

ピストルのエネルギー源がつきて、熱線が跡絶えるまで、前へ前へと進んでいった。かれはもはや無用のピストルを投げ捨てると、熱くやけただれたくすぶる土塊に向かって剣をふるった。かれは支離滅裂な想いに心を乱されながら、息づかいも荒く汗をしたたらせて、やみくもに柔らかい土を掘り進んだ……と、行く手にぽっかりと小さな穴があいて、そこからまばゆい陽光が射しこんできた。陽光?それではかれは思っていたよりも長くあの奇怪な泡立つ暗黒の中にいた

のだ。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、(グーグル検索エンジン上でのそちら英文テキスト入力で現行は文献的事実であることを確認できるようになっているところとして)表記引用部の原著 The Sword of Rhiannon にあつての該当部は “ **With blind anger he used the flaming beam of the pistol to undercut the mass of soil that blocked his way. He worked outward until the beam suddenly died as the charge of the gun ran out. He flung away the useless pistol and attacked the hot smoking mass of soil with the sword.** Panting, dripping, his mind a whirl of confused speculations, he dug outward through the soft soil till a small hole of brilliant daylight opened in front of him. Daylight? Then he'd been in the weird bubble of darkness longer than he had imagined. ”との部位となる)

以上でもって The Sword of Rhiannon という作品にあつて

[[プロトン・ガン] (陽子ガン) を保持した男が異なる時空間を架橋する暗黒の穴に落ち込んだ後、落ち込んだ先でそのプロトン・ガンを(エネルギー切れを起こすまで)乱射、壁を破壊して活路を開かんとしたとの描写がなされている]

とのことを示すべくもの(容易に後追いできるようにしての)原文引用部を終える。

(**出典(Source) 紹介の部 65(7)** はここまでとする)

上の和書および原著よりの引用部 (**出典(Source) 紹介の部 65(7)**) に見るように作中小道具としてそれについての言及がなされるのは4カ所だけなのだが、[陽子(プロトン)ガン Proton Gun(また、Proton Pistol とも作中にて表記)]とは一体全体、どういう武器なのか。

少なくとも[陽子]を飛ばすとの設定の武器であることは理解できる(というよりそのようにしか理解のしようがない)。

とすると、真っ先に想起されるのは
[陽子ビーム(Proton beams)]
である。

その点、SF 作品らの小道具として[そういうもの]が登場してくることはよくあった、非現実的なものながら、よくあったとのことは容易に指摘可能となっている(※)。

※英文 Wikipedia[Particle beam (粒子ビーム)]項目にあつては陽子ビームを包摂する粒子ビームというものにつき

(以下、原文抜粋するところとして)

Though particle beams are perhaps most famously employed as weapon systems in science fiction, the U.S. Advanced Research Projects Agency started work on particle beam weapons in 1958. The

general idea of such weaponry is to hit a target object with a stream of accelerated particles with high kinetic energy, which is then transferred to the molecules of the target. The power needed to project a high-powered beam of this kind surpasses the production capabilities of any standard battlefield powerplant, thus such weapons are not anticipated to be produced in the foreseeable future.

「粒子ビームは

[おそらく最もよく知られていようのかたちでサイエンス・フィクションにて武器として採用されているもの]

だが、合衆国国防高等研究計画局(略称 DARPA)が粒子ビーム兵器に関する検討を(現実世界では)1958年にて開始しているとのことがある。そのような兵器にまつわる一般的な発想法としては高い規模での運動エネルギーでもって加速させた粒子の束、ターゲットの分子配列を変質させるものでもあるとの粒子の束を標的となるものにぶつけるとのことにある。この種の高出力ビームを投射するために要求されるエネルギーはいかなる戦場にての動力源の動力生成キャパシティをも凌駕し、そのような武器らは予見しうる未来にて製造されること、期待されていないとあいなつたものである」

(引用部はここまでとする)

との記載がなされている。

上にては

「粒子ビームについては1958年という折柄にあつて[実際に兵器として意をなすか否か]との観点で研究開始されてよりこの方、対人兵器としての応用可能性が現実世界では否定されているともされている」

と記載されつつ(ちなみにターゲットを殺さない、[盲目化]するのに留めるに特化した非殺傷兵器(ノン・リーサル・ウェポン)としてはDazzlerという光線兵器が90年代より実用化されているとのことがある)、

「サイエンス・フィクションの領分では[粒子ビーム]というものが(スタートレック・シリーズの[フェイザー]や後続するスター・ウォーズ・シリーズの[ブラスター]の登場前から)よくも用いられる小道具であった」

との心証を覚えさせられるとの書かれようがなされている——ちなみにその嚆矢はHG ウェルズがかの『宇宙戦争』にて登場させた Heat Ray であるといった解説も英文 Wikipedia にあつての[Raygun]項目にてなされている——)。

さて、(直下、出典を挙げるが)加速器実験は

[陽子ビーム]

を用いるとのものでもある。そして、現況、ブラックホールを生成する可能性が取り沙汰されるに至っている LHC、そのブラックホール生成につながりうるとされる挙が

[陽子ビームの衝突]

であるとされることがある(：いわば、LHCは[巨大なプロトン・ガン]として膨大な電力を消費し[極小領域]にあつての超高エネルギー状況を実現するためのものであるとも表されるようになっている——本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 10](#)などにて解説を加えているように[蚊の一兆分の領域に[蚊が飛ぶ程度の運動エネルギーである兆単位の電子ボルト]を投入するための陽子ビーム放出装置が加速器 LHC である]とも述べられるようになっている——)。



SOURCE

65(8)

ここ出典 (Source) 紹介の部 65 (8) にあつては

[LHC が [巨大な陽子銃] とでもいうべきものとなっている]

とのことの典拠を挙げることにする。

(直下、和文ウィキペディア[陽子線]項目冒頭部の現行にての内容を引用するとして)

陽子線 (Proton beam) とは、放射線、狭義には荷電粒子線の一種であり、水素の原子核である陽子 (プロトン、Proton) が数多く加速されて束になって流れている状態をいう。陽子線は線形加速器、サイクロトロン、シンクロトロンなど様々な加速器で加速することが可能であり、目的とする陽子の出射エネルギーによって使用する加速器を使い分ける。

(引用部はここまでとする)

上にあつて

「陽子線が線形加速器、サイクロトロン、シンクロトロンなど様々な加速器に利用されている」

との表記がなされている点について

「[ブラックホールを生成する可能性が取り沙汰される]に至っているとの加速器 LHC」

もその範疇に入るものとなり、そもそももって LHC ことラージ・ハドロン・コライダーにあつての[ハドロン]というのは [[陽子] を包摂する複合粒子のグループ名称] のことを指し、であるがゆえに、LHC は [ラージ・(ハドロン→)陽子・コライダー] と言い換えられるものとなりもするとのことがある。

その点についての出典を続いて挙げることにする。

(直下、和文ウィキペディア[大型ハドロン衝突型加速器]項目の該当する部位の内容を引用するとして)

(LHC は)陽子イオン源からスタートし、陽子イオンを加速する線形加速器、そして陽子シンクロトロンへ陽子ビームを注入するための陽子シンクロトロンブースター、陽子シンクロトロンブースターで加速された陽子ビームを、更に加速するための Super Proton Synchrotron (SPS)、SPS で蓄積され、パンチと呼ばれる状態になった陽子ビームを LHC 本体へ注入し、最終加速を行う。衝突点での陽子衝突のイベントは、1 秒間に 800 万回に達する。

(引用部はここまでとする —※—)

(※上にては大型ハドロン衝突型加速器が陽子ビームを段階的に加速していき、最終的な衝突(未知の現象を観測するための超高エネルギー状況を実現するとの名目での「衝突」)を実現するものであるとの表記がなされているわけだが、同じくもの[陽子ビーム衝突]については英文 Wikipedia[Large Hadron Collider]項目にあつて(「かなり掻い摘まんで、」とのかたちで一部引用をなすとして) “ The collider tunnel contains two adjacent parallel beamlines (or beam pipes) that intersect at four points, each containing a proton beam, which travel in opposite directions around the ring. [. . .] The LHC physics program is mainly based on proton – proton collisions. However, shorter running periods, typically one month per year, with heavy-ion collisions are included in the program. ” (意識なすとして)「LHC のトンネルでは四つの交点で二つの隣あわせに並置されてのビームライン(ビームパイプ)が交差するとの仕様となっており、各々のビームラインにはリングの周囲を反対側から周回するとの[陽子ビーム]が走るとの格好となる。…(中略)…LHC にまつわる物理学研究計画は主として陽子と陽子の衝突に力点を置いてのものとなるのだが、しかしながら、同計画には年に一ヶ月の間だけのより短期のビーム走査プログラムとして重イオンを用いての衝突計画が内包されている」(意識の部はここまでとする)と概要解説されているところともなる)

(続いて、直下、LHC 実験関連の解説書籍『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(著者がアミール・アクセルという比較的海外で名が知られたサイエンス・ライターとなっているところの書 Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider が早川書房より訳書として刊行されているとの著作)にあつてのハードカバー版、27 ページよりの「再度の」原文引用をなすとして —ここでの引用は本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 10](#) でなしたところと同じくものとなる—)

LHC を最大レベルで運転すると、陽子は加速しつづけて光速(秒速二九万九七九二・四五八キロ)の九九・九九九九九パーセントという想像を絶するスピードに到達する。このとき LHC はエネルギーレベルで一四 TeV (テラ電子ボルト) で運転される。一 TeV は蚊の飛ぶエネルギーに近く、ごく小さな値に思えるが、それがきわめて高密度になる。LHC は陽子二個の体積、つまり蚊の一兆分の一の空間の中にこのエネルギーを詰め込むのだ。体積あたりのエネルギーとして、これまでに達成された値をはるかにしのぐレベル

だ。この超高エネルギー領域で、今まで物理学者の頭の中にしかなかった新粒子や新規現象が現われると考えられている

(引用部はここまでとしておく —※—)

(※上に見るような陽子ビームを加速・衝突させて実現を見る超高エネルギー領域で LHC が[ブラックホール]を生成しようと「最近になって」考えられ出しているというのが本稿にての前半部で入念に論じてきたとのこととなる)

(さらに、直下、英文 Wikipedia[Proton]項目にあつての現行にての記載内容をワンセンテンス引用するところとして)

In the modern Standard Model of particle physics, the proton is a hadron, and like the neutron, the other nucleon (particle present in atomic nuclei), is composed of three quarks.

(訳として)「現代にあつての素粒子物理学にあつての標準理論では陽子(プロトン)とはハドロンであり、そして、中性子のようにその他の核子(原子核の中にある素粒子的実体)は三つのクォークから構成されている」

(引用部はここまでとする)

(以上にて「ブラックホールを生成する可能性が取り沙汰される」に至っているとの加速器 LHC が[巨大な陽子銃]とでもいふべきものとなり、そも、LHC ことラージ・ハドロン・コライダーにあつての[ハドロン]というのは[陽子]を包摂する複合粒子のグループ名称のことを指すがゆえに、同 LHC は[ラージ・(ハドロン→)陽子・コライダー]と言い換えられるものとなりもしている、とのことにまつわる出典表記を終える)

(**出典(Source)紹介の部 65(8)**はここまでとする)

ここまでの内容にて述べたきことは次のようなことである。

小説 **The Sword of Rhiannon 『リアンの剣』** では

[プロトン・ガンを持った男がブラックホール状の異なる時空間をつなぐ穴にたたき落とされる]

[その男はブラックホール状の時空間をつなぐ穴(世評でも初期的ブラックホールの体現物であろうと表されているとの露骨なるそれ)にてたたき落とされた先で外壁を破壊、活路を開くために手持ちのプロトン・ガンを使い切る]

との粗筋が現出を見ているわけであるが、

[巨大なプロトン・ガンとでも形容されよう加速器によってブラックホール生成の可能性が取り沙汰されるようになったのはここ最近である (Planck Energy プランク・エネルギーということを観念せずに人間の手の届く範囲での加速器にあってはここ十数年内である)]

ということがある(※)。

※本稿にての前半部、**出典(Source)紹介の部 1** から **出典(Source)紹介の部 21-5(2)** を包摂する部位では直上述べたような流れ、

[巨大なプロトン・ガンとでも形容されよう加速器によってブラックホール生成の可能性が取り沙汰されるようになったのはここ最近である(プランク・エネルギーということを観念せずに人間の手の届く範囲での加速器にあってはここ十数年内である)]

との流れが確としたものとなっていることの解説にひたすらに注力している([門外漢としての個人]の偏頗な主観(筆者主観)など一切問題になる余地なきようなかたちで専門家らの言説を多角的かつ微に入っての方式で呈示、同じくものことの典拠をひたすら入念に指し示ししている)。

そちら内容につき、(委細割愛して)、多少の言及をなせば、である。

今より20年以上前、90年代に入ろうかとの折より

「ブラックホールの人為生成はありうるかもしれないが、実験室の話としては[プランク・エネルギー]を極小領域より投入しなければ、何にせよ無理である」

とのことを特定の学究らが彼ら学者ら身内の中でのみ見当されるような専門的論文にて述べだしたとのことが[現象]としてあり(**出典(Source)紹介の部 21-5**にて引用なしている **IS IT POSSIBLE TO CREATE A UNIVERSE IN THE LABORATORY BY QUANTUM TUNNELING?** 『量子トンネル効果を用いて実験室にあって宇宙を造り出すことは可能か?』(著者らは往時にてマサチューセッツ工科大学所属の Edward FARHI および Alan H. GUTH)との一部にて着目されている特定論文の内容にまつわる話でもある)、そこに見る、

「[プランク・エネルギー](兆単位の電子ボルトがいわば[蚊の飛ぶエネルギー]であるとすれば、こちらプランク・エネルギーというのがジュール単位で[45リットルのガソリンにて車を駆動させ続けるに多少、増すところがあるエネルギー]に相当するものであるとのことは先に解説しているところである)でなければ無理」

という側面が1998年に登場した特定の理論(ADDモデル)の理論的發展によって[世紀の変わり目](2001年というのが一般の理解である)から変化を見はじめ、

「LHCのような加速器による[兆単位の電子ボルト(蚊の飛翔の際の運動エネルギー)の極微領域詰め込み]でも重力作用が強くなりえ、ブラックホールの人為生成予測がなされるようになった」

とのことが「ある」のである(そして、その「加速器によるブラックホール生成はありうる」との予測はスティーブン・ホーキングが1970年代に提唱した[ホーキング輻射]にまつわる[仮説]、「極微ブラックホールなどはすぐに蒸発するために自然界に存在しないのである」との[仮説]に基づき、安全なる即時蒸発するブラックホールであるとの主

張を伴ってのものとなっていた)。

以上のことの委細についてはとにかくも出典(Source)紹介の部 1 から出典(Source)紹介の部 21-5(2)を包摂する部の委細をきちんと検討いただきたい次第でもある。



teraelectronvolt

$$1.6 \times 10^{-7} \text{ J}$$

about the kinetic energy of
a flying mosquito

planck energy

$$2.0 \times 10^9 \text{ J}$$

energy of an ordinary 61
liter gasoline tank of a car

(本稿にあつての先の部にあつての解説事項内容を振り返るとして)

⇒

上の図にては

[兆単位の電子ボルト —— ひとつの電子を動かすエネルギーが一電子ボルトとしてそれが兆単位に及んでのもの(テラ・エレクトロン・ボルト: teraelectronvolt) ——]

とて蚊の運動エネルギーに等しいにすぎないとのことが科学の世界の一般教養として知られることを示すものである。

対して、

[プランク・エネルギー]

であるが、上の[兆単位の電子ボルト(テラエレクトロン・ボルト)]が蚊の飛ぶエネルギーであるの等しいものである(ジュール換算でナノ単位のもの)であるのに対して、そちら(プランク・エナジー)は

[ガソリンタンクで車を走り続けさせるのに等しいエネルギー]

とのことになり、テラ・エレクトロン・ボルト単位と雲泥の差どころのものではないエネルギーの単位となる(おおよそアバウトにして[10のマイナス6乗]と[10の7乗]の間に拡がる差分に近しいところであると指摘出来る)。

ここでそのようなことをわざわざ解説しているのは無論にして蘊蓄の類を傾けた(他から嫌われたい)とのためではない。

[従前、プランク・エナジー級のエネルギーを極小領域に投入しなければブラックホールの人為生成など無理であると考えられていた(計算上、そうしたことが述べられる素地があった)とのことがあった中でここつい最近(1998年)になって余剰次元理論(ADD Model)というものが提唱され、それがゆえの理論動向の変遷から2001年よりLHCでも大量のブラックホール —— 即時に蒸発する無害なブラックホールとなり、その生成・発見は科学の進歩にむしろ資するなど関係者が力弁するとのもの —— がテラエレクトロンボルト領域で生成されうると想定されることになったとの経緯がある]

とのことを強調、かつ、そうした経緯と何ら間尺が合わぬ先覚的言及が特定フィク

ジョン —1974年に初出を見ている『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』というフィクション— にてなされているとのことがある、そのことを視覚的に問題視したいがゆえに上記のような図を挙げもしているのである。その旨、ご理解いただきたい次第である(尚、そうも述べたうえでもさも小難しい話をなしているように勘違いされる向きもあるかもしれないが、そうではない。先述しもしているようにここ本稿にて筆者が問題視しているのは科学理論の適否——筆者を含め門外漢が(出歯亀的異常者とのレッテル貼りをされることなくしては)タッチできるようなところではないとの領域—— などではなく、誰でも、そう、高校卒業程度の標準的知性があれば、理解できるはずであろうとのこと、「言われよう変遷とそれと矛盾する別の側面の間の矛盾抵触関係」が何故そこにあるのか、ただそのことだけのことである)。
(図を挙げての繰り返しての表記はここまでとしておく)

巨大な陽子銃とも表せよう LHC がブラックホールを生成しうる可能性があると考えられるようになったのは(1998年の理論変転を受けての)つい最近のことと説明されているわけだが、しかし、LHC がその類となっているところの陽子銃の類とブラックホールの類を結びつけていたとの『リアンの剣』は40年代末葉に初出を見た作品となっている(正確に述べれば、1949年に Thrilling Wonder Stories (Magazine) にて Sea-Kings of Mars との題名で掲載され、後に、1953年に The Sword of Rhiannon とのタイトルで出版された作品となっている)。「であるからこそ、」奇怪である。

以上、プランク・エナジーまわりの事実関係について振り返ったうえで

The Sword of Rhiannon 『リアンの剣』(1949年初出時のタイトルは **Sea-Kings of Mars 『火星の海王達』**)

に伴う先覚性が何故、問題になるのかについての説明をさらに細かくもなしていくこととする。

さて、本稿にての直前部では

[小説作品『リアンの剣』にあつては(「不可解にも」—声を大にしてアクセントを置きたいところとして「不可解にも」—半世紀も後になって問題視されるようになったとの加速器(の陽子ビーム衝突)によるブラックホール生成に関する議論]のことを露骨に意識させるように [ブラックホール(然としたもの)] と [陽子ビーム(陽子ビーム)によるブラックホール然としたものによる転移先の壁面の破壊] とが結びつけられている]

とのことを(長々とした引用をなしもしながら)指摘してきたわけだが、そこより一転して申し述べたいところとして本稿にての、

[**出典(Source) 紹介の部 22**から**出典(Source) 紹介の部 25**を包摂する部位]

では次の趣旨のことの摘示に(延々くくださしくも)努めていたとのことがある。

加速器実験とは【**宇宙生誕の状況の再現**】をなすものであるとされている(本稿にての**出典(Source) 紹介の部 24**にあつてアミール・アクゼル著 **Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider** の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』(早川書房)24ページよりの原文引用をなしていたところとして)LHC 内部での陽子衝突により解放される凄まじい量の高密度エネルギーは、科学を未踏の新たなレベル、我々の宇宙ではビッグバン直後

以来観測されたことのない高エネルギーの領域へと押し進めてくれる。そのような形で大型ハドロンコライダーは我々を百数十億年昔に連れていき、誕生直後の灼熱の宇宙を満たしていた状態を見せつけてくれる(再度の引用部はここまでとする)とあるとおりである)。

同様のこと、【**宇宙開闢の再現**】とのことを空想的な作中テーマとして扱った1937年刊行のフィクションとして

Fessenden's World『フェッセンデンの宇宙』

という作品が存在している。

そちら『フェッセンデンの宇宙』にて描かれているとの、

【**宇宙開闢の再現**】をもたらす空想的かつ独特なる手法】

が「一体全体どういうわけなのか」(としか常識の虜囚は言わぬであろう)ところとして

【**1948年に実施された科学史上の著名な実験手法**】

と近似性を呈しており——具体的には1937年小説作品にあつての宇宙開闢の手法が【**反重力としての斥力と結びつく「負のエネルギー」の所在を示すものとしての「カシミール効果」の特定につながったヘンドリック・カシミールによる実験にての二枚の金属プレートを重ねあわせるとの手法**】と近似性を呈しており(本稿にての**出典**(Source)紹介の部22-2から**出典**(Source)紹介の部23を参照のこと)——、1937年初出小説のそれと似たようなことがなされての現実世界での1948年実施実験の帰結が後の時代にて

【**通過可能なるワームホール**】(traversable wormhole)

と結びつくものとされるに至っているとのことがある——ヘンドリック・カシミールらが1948年にて示したカシミール効果は斥力としての[負のエネルギー]の所在を示すものであったが、そちら負のエネルギー(negative energy)が八〇年代後半の思考実験・科学的考察のなかで【**通過可能なワームホールの安定化に利用可能たりうるもの**】(エキゾチック・マター)と目されるに至ったとのことがある(本稿にての**出典**(Source)紹介の部24を参照のこと)——。

そうしたことがある中で

【**反重力との兼ね合いで通過可能なワームホールを構築するエネルギーを測定するに至った手法であるカシミール効果測定技法**】(二枚の金属板を重ねそれを絶対零度まで冷やしてその動きを観測するとの1948年実験にあつての技法)

と近似性を感じさせるやりよう、

【**二枚の板を重ね合わせそこにての物理事象に「重力を中和しつつ」原子レベルでの変化を促すとの技法**】

とのやりようで【**宇宙開闢**】がもたらされたなどという粗筋が認められる1937年初出の空想小説『フェッセンデンの宇宙』にあつてはその作中、

【**開闢を見た悲劇の宇宙にあつて人為的に繋げられた惑星の間にて【爬虫類系統の種族による人類種族に対する完膚なきまでの絶滅戦】が展開される**】

との筋立てが認められるとのことがある(：宇宙開闢をもたらした科学者が神として振舞い、人工宇宙のなかで【爬虫類の種族の星】と【人類によく似た種族の星】という二つの世界を橋渡しし、そのために星間戦争がはじまった結果、人工宇宙の中で人間に似た種族は皆殺しにされるとの筋立てが(にまつわっては短編の中の僅かな紙幅しか

割かれていないわけだが)認められるとのことがある ——本稿にての**出典(Source)****紹介の部 25**では、長くもなるが、次のような引用をなしていたとのことがある。(以下、河出書房新社より刊行の「文庫」版、『フェッセンデンの宇宙』収録短編集 p.25－p.26よりの「再度の」挿い摘まんでの引用をなすとして) “それは黄色い太陽で、四つの惑星がその周囲をめぐっていた。そのうちの二つは大気がない世界だったが、残りのふたつは異なる生態の生物が棲息していた。片方は人間に生き写し、もう片方は爬虫類によく似ており、それぞれが自分の世界に君臨していた。…(中略)…両者のあいだには接触も通信もなかった。ふたつの惑星が、遠くへだたっているからだ。「さて、気になっているんだが」とフェッセンデンが、興味津々といった顔でいっていた。「あのふたつの種族が接触したら、どういう結果になるだろう。まあ、じきにわかるさ」彼はそういうと、もういちど針に似た装置のほうへ手をのばした。またしてもか細い糸のような力線が、極小宇宙のなかへすーっとのびた。わたしは望遠鏡ごしにその効果を目のあたりにした。力線の命中したはずみで、片方の惑星が軌道を変えはじめたのだ。…(中略)…間髪をいれずに、狭い淵を渡って片方の世界から船が飛びはじめた。通信が確立された。するとたちまちふたつの世界のあいだに戦争が勃発した。人間に似た種族と爬虫類に似た種族の闘いである。…(中略)…闘いの帰趨は爬虫類に似た種族にかたむいた。彼らの侵略軍団が、人間に似た種族をひとり残らず血祭りにあげた。…(中略)…わたしは叫んだ。「きみがあのもうひとつの世界と接触させなかったら、あの小さな人類は、ずっと平和と幸福のうちに暮らしていたんだぞ！なぜ放っておいてやらなかったんだ？」フェッセンデンがいらだたしげにいった。「莫迦なことをいうな、ブラッドリー。これはただの科学実験だ——ああいった蜚蜚(かげろう)みたいな種族も、やつらのちっぽけな世界も研究対象にすぎないんだ” (再度の引用部はここまでとする) ——)。

以上の(振り返りもしての)ことの摘示に努めていた理由は

【爬虫類の種族の侵略という「一群の物語の類系」】

【加速器に通ずる「物語の類系」】

【911の事件の発生の前言をなしているが如き「存在していること自体が奇怪なる」予見的文物らに認められる特性】

が諸所で相互に多重的に接合しているとのことにまつわる[知識](情報把握)が —— 様々な書籍や資料をジャンル問わず読み耽りもしての探求活動の中、関連セクションを捕捉し認識深化させてきたところとして —— この身にあったからである (:先行するところの[本稿にての前半部]にあっての後ろ半分のパートは専らその点についての記号論的指し示しをなすのに努めているとのものとなっている)。

さて、とにかくも、である。

筆者は

『フェッセンデンの宇宙』(1937)

という作品にあっての、

【「1940年代に」特定することとなったとの実験】(カシミール効果測定実験)と同様の手法による「重力中和状況の中で」開闢を見た宇宙にて**【爬虫類系統の種族】**による**【人類種族】**に対する**【絶滅戦】**が展開される ——宇宙開闢をもたらした科学者が神として振舞い、人工宇宙のなかで**【爬虫類の種族の星】**と**【人類によく似た種族の星】**という二つの世界を橋渡しし、そのために星間戦争がはじまった結果、人工宇宙の中で人間に似た種族は皆殺しにされるとの筋立てが展開を見ている—— との特定小説『フェッセンデンの宇宙』の設定は**【通過可能なワームホールの構築材料とな**

るとのことが「80年代より」目されるに至ったもの】（**【「反重力」「斥力」と結びつく負のエネルギー】**）のそもそもの発見の契機がまさしくものカシミール効果測定実験にあるとのことを想起させるものでもある]

との特性のことを本稿の従前の段にて（当該のセクションより [文献的事実を示すための後追い容易なる式での原文引用] をなしながらも）問題視していた。

そうした特性を帯びていることを細かくも問題視してきた『フェッセンデンの宇宙』（それ自体、予見的なる作品）の執筆者たるエドモンド・ハミルトンという作家と『リアノンの剣』執筆者たるリイ・ブラケットという女流作家が[夫婦関係]にある作家夫妻であったと述べたらばどうか？

また、リイ・ブラケットのものした『リアノンの剣』が**【「所在不明なるリアノン墳墓に込められたテクノロジー」(ブラックホール的なものと通ずるテクノロジーとの設定のもの) をもってして人間を蹂躪せんとしている [蛇の種族] を描いているとの作品】**ともなっていると述べたらばどうか？

そうしたことがあるのが
[事実]

となっている。残念ながら、客観的に指し示せるところの[記録的事実]となって「いる」のである。

(:「1937年に世に出た」『フェッセンデンの宇宙』では
【「後にての80年代に」ワームホール安定化手段と結びつけられるようになったもの(負のエネルギー・負の質量(Negative mass)と呼ばれる斥力作用を呈する物理的実体)を発見した実験手法 —1948年実施の実験—】
と同じような手法で開闢を見た宇宙にて「二つの星がくっつけられ」[爬虫類の種族による人類種族の皆殺し]が具現化したと描かれる。

他面、『リアノンの剣』では [リアノン墳墓] (と設定付けられている場) に存在しているとされる、

【「カー・ブラックホール」とも「ワームホール」とも述べられるような形態をとる [異なる時空を結びつける時空連続体に開いた穴としての黒く泡立つ領域]】

を通じて盗掘者たる主人公が異世界(大海で覆われた過去の火星)に到達、そこ(主人公が渡った迷い込んだ先たる世界)で[リアノンの墳墓]を探し求めており、[リアノン墳墓]に眠るテクノロジーを利用して人類を蹂躪しようとしている[爬虫類(蛇)の亜人種族]の陰謀に際会することになったとの筋立てが表出しているとのことがある。

双方共々、異常異様な先覚性を帯びている作品であることをこここれに至るまでに詳解講じてきたところの『フェッセンデンの宇宙』と『リアノンの剣』の両作には

【ブラックホール・ワームホールのなるもの】

【異なる世界の接合】

【爬虫類の種族による侵略の完遂】

との特性の共有が認められるわけである（そして、「さらにもって」両作作者が夫婦関係にあるとのもことが直下典拠呈示するところとしてある）。

この世界でそこまで深く、かつ、細かくもの指し示しを「わざわざもって」なそうとする人間がいるのかにつき絶望的にならざるをえない。そも、そうしたことに気付く人間がいるのか、ということにさえ悲観的にならざるをえないとのことがある中で、である——本稿で再三再四述べているように筆者は国内外にての[言論流通動態]というものまで仔細に分析しており、の中で、ここ本稿にて指し示しを試みているような限界領域にあつては[フリークショー] (畸形を売り物にするが如く「おかしな」者達の常軌を逸したやりよう・言辞)の類ばかりが目につく、他面、[最も問題になること]に対して入念なる指し示しをな

そうとの向きがまったくもって見受けられないとのことがあるのをよく把握している(つもりである;たとえば、筆者は[LHC]や[ブラックホール]との言葉で検索エンジンを動かす人間がいかほどまでにいるのか、広告出稿コストとの兼ね合いで提供されているサービスを通じて分析などなしてもおり、また、そういった検索結果に対していかような[屑のような媒体](種族に対する道義心や公共心とは無縁なるもの)が我々の視界を眩ますように山積して表示されてくるのか、とのことなどをも分析している。この世界では諸々不快なる「彼・彼女ら」の内面がどこまで人間らしいかは知らぬが(推し量れるところ、この身に絶えず諦観・失望・絶望を強いるとの推し量れるところは書かない)、[大概の人間]がネットを閲覧する折には日常的なあれやこれやにまつわることを見るのがせいぜいである、[認識]→[認容]→[行動]との3ステップが[運命を主体的に変えるプロセス]([家畜が屠所の羊であるとの現状に抗うプロセス]としてもいいだろうと見ている)であるとすると、第一段階、[認識]さえ問題となるところでは生じえないようになってしまっているとのことまでを推し量るに至っているのと同時に、である)——)

上にて表記のこと、『リアンの剣』作者とそれに先行するところの『フェッセンデンの宇宙』の作者らが夫婦であるとのこととまつわっての事実関係について以下、(オンライン上より即時に確認出来ることと)典拠となるところを指し示しておくこととする —— 作家 Leigh Brackett リイ・ブラケット(1915－1978)と作家 Edmond Hamilton エドモンド・ハミルトン(1904－1977)が夫婦関係にあったとのことについての典拠を挙げておく—— 。

(直下、英文 Wikipedia[Leigh Brackett]項目にあつての Career の節の現行記載よりのワンセンテンス引用をなすとして)

In 1946, the same year that Brackett married science fiction author Edmond Hamilton, Planet Stories published the novella "Lorelei of the Red Mist"
「1946年、ブラケットがサイエンス・フィクション作家のエドモンド・ハミルトンと結婚をなしたとのその年、Planet Stories (訳注:サイエンス・フィクション分野の小説を主に取り扱っていたとの米国にてのありし日のパルプ雑誌)にてブラケット小説『赤い霧のローレライ』が掲載された」

(引用部はここまでとする)

以上のようにリイ・ブラケットは1946年にサイエンス・フィクション作家のエドモンド・ハミルトンと結婚しているとされているわけだが、そちら Edmond Hamilton (彼もまたそこそこに名が知られた作家であった)が『フェッセンデンの宇宙』の著者ともなっていることの典拠を下に挙げておく(『フェッセンデンの宇宙』の書誌情報を検索して調べれば瞭然として確認なせるところではあるのだが、一応、典拠を下に挙げておく)。

(直下、和文ウィキペディア[フェッセンデンの宇宙]項目にあつての Career の節の現行記載よりのワンセンテンス引用をなすとして)

エドモンド・ムーア・ハミルトン(Edmond Moore Hamilton, 1904年11月21日 - 1977年2月1日)は、アメリカ合衆国のSF作家、ホラー作家、推理作家。オハイオ州ヤングスタウン(Youngstown)生まれ、ペンシルベニア州ニューキャッスル育ち。ペンネームとして他に、ロバート・キャッスル(Robert Castle)、ロバート・ウェントワース(Robert Wentworth)、S・M・テネショー(S.M. Tenneshaw)などがある。

…(中略)…

SF黎明期に多くのスペースオペラを発表。地球規模、あるいは宇宙規模の大

危機を数多く描き、「ワールドレッカー(宇宙破壊者)」「ワールドセイヴァー(世界救済者)」の異名をとった。当時の作品は、深みは少ないが、アイデアが豊富で、その後の SF でしばしば使われるガジェットが多数含まれている。主なスペースオペラ作品に「星間パトロール」シリーズ、「スターキング」シリーズ、「キャプテン・フューチャー」シリーズがある。1930 年代ごろからは年下の友人、SF 作家ジャック・ウィリアムスの影響もあり意図的に作風を変え始め、これまで通りの豊富なアイデアの中にペシミスティックな虚無感を盛り込むようになった。このころの代表的な作品のひとつが、マッド・サイエンティスト物の名作として知られる短編「フェッセンデンの宇宙」である。これは実験室内に「ミニチュアの宇宙」を創造してしまう科学者を描き、我々の住む宇宙もその種の科学者の創造物ではないかという不安感を掻き立てる名作である。

(引用部はここまでとする)

上に見るように、

Fessenden's World『フェッセンデンの宇宙』(1937)

は作家 Leigh Brackett リイ・ブラケットの夫となる作家の Edmond Hamilton エドモンド・ハミルトンによってもなされたとのことが知られている作品となっている (: 尚、Fessenden's World『フェッセンデンの宇宙』については和文ウィキペディアにあって同作のためだけに設けられたそれ専門の解説項目、[フェッセンデンの宇宙]項目が「現行にては」設けられている ([おそらくはいくつかの出版社から邦訳版が刊行されている関係上であろう] とのところとして「現行にては」そうした作品解説項目が設けられている) とのことがある一方でのこととして、英文ウィキペディアにあっては同作に対する言及が何らなされていない、作者 Edmond Hamilton に関する当該ウィキペディア解説項目にあってすら「現行にては」同作家作品リストの中に当該作品のことが全く言及されていないとのことがある — 常識的な事情の問題として考えれば、『Fessenden's World はパルプ誌 (Weird Tales 誌) に掲載された短編小説にすぎない』とのことで重きをもって見られていないとのことがあるの「かもしれない」 — 。 そのような[知名度の国内外温度差]はあるわけだが、エドモンド・ハミルトンという作家が Fessenden's World『フェッセンデンの宇宙』という作品をものしており、それが際立って先覚的なる内容を有しているとのことは(本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 22](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 23](#) を包摂する部で後追い容易なる出典を挙げながらも事細かにその旨、解説しているように)[事実]である)。

ここまでにて

[『フェッセンデンの宇宙』という作品 — 同作、既述のように【[斥力](反重力)としての[負のエネルギー]を測定したカシミール効果測定実験】を先取りしているとの内容を有し、その作中、「人工的に開闢を見た」と描写される(1980 年代にあって通過可能なワームホールをもたらすと考察されるに至った「負のエネルギー」を 40 年代に測定したことで知られるカシミール効果測定実験と同様の手法で「人工的に開闢を見た」などと描写される)[極小の小宇宙]にあって[人為的に惑星がつなぎあわせさせられた状況で]爬虫類の種族が我々人類を侵略・皆殺しにするとの内容が具現化しているとの作品ともなる — を執筆した作家たるエドモンド・ハミルトンと『リアンの剣』の作者たるリイ・ブラケットが夫婦関係にあったこと]

についての解説をなし終えたとして、次いで、

[[爬虫類の種族]による[人間に似た種族]の皆殺しが描かれる『フェッセンデンの宇宙』を記したエドモンド・ハミルトンと夫婦関係にあった作家リイ・ブラケットの手になる)小説『リアンの剣』が[[所在不明なるリアン墳墓(それは物語冒頭にてブラックホール然と結びつけられて登場してくるものである)に秘められたテクノロジー]をもってして人間を蹂躪せんとしている [蛇の種族](作中ドュビアン Dhuvian と呼称される人間を

歴年、間接統治してきた蛇の亜人種族)を描いているとの作品]ともなっている]とのことの典拠を挙げることとする。

出典(Source)紹介の部 65(9)



SOURCE 65(9)

ここ出典(Source)紹介の部 65(9)にあつては、

[小説『リアノンの剣』にあつて[先進種族の一個体リアノンのテクノロジーを受け継ぎもし外側より進入不可能な空間捻転領域に閉じこもりながら強大な(水晶;クリスタルを用いての)催眠技術体系を用いてきたとの蛇人間(デュビアン Dhuvian)らによる間接統治——暴虐の限りを尽くす人間の帝国の影に隠れての間接統治—— がなされてきた]
[蛇人間の種族がリアノン墳墓より新たに獲得せんとしているテクノロジーでもって人間を不用とする挙に出ようとしている]との作中設定が見受けられる]

とのことの出典を挙げることとする。

(直下、昭和 51 年頃に早川書房より出されている邦訳文庫版『リアノンの魔剣』(読み応えを増させるためにか、意識も認められ、[ブラックホール]といった語句もそちら訳書にのみ認められるところとして付け加えられていると先述したところの邦訳版)にあつての 224 ページから 225 ページ、[蛇の亜人種族デュビアン(the Dhuvian)が自分達のプランを述べているところ]から原文引用をなすとして)

「リアノンがその墳墓にとじこめられて以来、われわれは"白海"の沿岸の大半を支配下に収めてきた。われわれは少数だ。それゆえ大規模な戦闘に不向きだ。

したがって、人間の王国を使って工作をしてきた。欲ばりなおまえたちを道具に使ってきたのだ。

いまやリアノンの武器が手にはいった。これらの使用法にもすぐ熟達するだろう。そうれなれば人間の道具もいなくなる。<蛇の子たち>が、この世を征服するのだ」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、情報感度高き向きならばオンライン上より難なく確認できるだろうところの原著 *The Sword of Rhiannon* にての(訳書よりの引用パートに対する)対応箇所は XVII. *Caer Dhu* との節にての “ **Since Rhiannon was locked in his tomb we have gained subtle dominance on every shore of the White Sea. We are few in number and averse to open warfare. Therefore we have worked through the human kingdoms, using your greedy people as our tools. Now we have the weapons of Rhiannon. Soon we will master their use and then we will no longer need human tools. The Children of the Serpent will rule in every palace** ” の部なる)

上のように小説『リアンの魔剣』では上記のように[間接統治の終焉]との粗筋が採用されている(歴年道具として使っていた人間をして蛇の種族が「最早不要である」との段階に進めようとしているとの粗筋が採用されている)。

(直下、昭和 51 年頃に早川書房より出されている邦訳文庫版『リアンの魔剣』にあつての 118 ページから 119 ページ、[蛇の亜人族デュヴィアン(the Dhuvian)が水晶を応用してのテクノロジーを使って人間を影から支配している]との表記がなされている部よりの原文引用をなすとして)

これらの装置は、かれの知るものとは、ほとんどあらゆる面で異なった科学知識によって創りだされたものだったのだ。リアンの科学であり、そのわずかな部分がデュヴィアンの武器として、ここに現われているのだ。

カースはデュヴィアンが暗闇でかれに使った小さな催眠機械を見わけることができた。

水晶の星をちりばめた小さな金属輪で、指で軽く押せば回転を始めるものだった。かれがそれに回転を与えると、それはささやくような音を出しはじめた。かれの血の凍る思いを呼びさまされ、急いで回転を止めた。

その他のデュヴィアンの機械類は、さらに不可解なものだった。ひとつは奇妙な対称形をなした水晶のプリズムをまわりにめぐらした大きなレンズからできていた。いまひとつのものは、重い金属の盤で、その上に平らな金属製の振動器がのっていた。かれにできたのは、これらの武器が根本的に異質な光学および音響科学の法則により開発されたものであろうと、想像をめぐらすことぐらいだった。「デュヴィアンの科学は誰にも分からない……」ジャハルトがつぶやいた。「蛇と同盟を結んでいるサークでさえそうだ」。科学に無知なものが持つ、機械化された武器に対する畏怖と嫌悪の情を交えて、ジャハルトはそれらの装置を見つめた。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、情報感度高き向きならばオンライン上より難なく確認できるだろうところの原著 *The Sword of Rhiannon* にての(訳書よりの引用パートに対する)対応箇所は X. *The Sea Kings* との節にての “ **But it was the science of his own different world. These instruments had been built out of a scientific knowledge alien in nearly every way to his own. The science of Rhiannon, of which these Dhuvian weapons represented but a small part! Carse recognized the little hypnosis machine that the Dhuvian had used upon him in the dark. A little metal wheel set with crystal stars, that revolved by a slight pressure of the fingers. And when he set it turning it whispered a**

singing note that so chilled his blood with memory that he hastily set the thing down. The other Dhuvian instruments were even more incomprehensible. One consisted of a large lens surrounded by oddly asymmetrical crystal prisms. Another had a heavy metal base in which flat metal vibrations were mounted. He could only guess that these weapons exploited the laws of alien and subtle optical and sonic sciences. "No man can understand the Dhuvian science," muttered Jaxart. "Not even the Sarkes, who have alliance with the Serpent." He stared at the instruments with the half-superstitious hatred of a nonscientific folk for mechanical purposes. ”)

上抜粋部に認められるように小説『リアンの魔剣』ではその同盟者となっている人間の王国(蛇と同盟を結んでいるというサークという独裁国家)でさえ与り知らぬ水晶テクノロジーに基づいての機器群、催眠効果も発揮するとの機器群でもって蛇の種族(デュヴィアン)が間接統治をなしているとの描写がなされている。

(直下、昭和 51 年頃に早川書房より出されている邦訳文庫版『リアンの魔剣』にあつての 218 ページ、[蛇の亜人族デュヴィアン(the Dhuvian)が侵入不能な空間捻転領域から介入している]との表記がなされている部よりの原文引用をなすとして)

「そうでしょうとも、リアン様」ヒシャはつぶやいた。「空間をひずませ、いかなる力からもカール・ドゥを守る"ベール"の秘密を、われわれに教えてください。ほかならぬあなたが、お忘れになるはずがあり得ませんでしょうか」いまやカースは、その光の網が、エネルギーの防禦壁であることを知った。どのような方法でか、強大なエネルギーは、空間にひずみを創りだし、透過不可能なものにしているのだ。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、情報感度高き向きならばオンライン上より難なく確認できるだろうところの原著 The Sword of Rhiannon にての(訳書よりの引用パートに対する)対応箇所は XVII. Caer Dhu との節にての “ **"No, Lord," Hishah murmured. "How indeed could you forget when it was you who taught us the secret of the Veil which warps space and shields Caer Dhu from any force?" Carse knew now that that gleaming web was a defensive barrier of energy, of such potent energy that it somehow set up a space-strain which nothing could penetrate.** ”との部なる)

以上をもってして

[小説『リアンの魔剣』にあつて先進種族の一個体リアンのテクノロジーを受け継ぎもし外側より進入不可能な空間捻転領域に閉じこもりながら強大な(水晶を用いての)催眠技術体系を用いてきたとの蛇人間(デュヴィアン Dhuvian)らによる間接統治——暴虐の限りを尽くす人間の帝国の影に隠れての間接統治—— がなされてきた]／[蛇人間の種族がリアン墳墓より新たに獲得せんとしているテクノロジーでもって人間を不用とする挙に出ようとしている]との作中設定が見受けられること]

の出典を十全に挙げきった(つもりである)。

さて、ここまでにて次の通りのことを示した。

『フェッセンデンの宇宙』では

[ワームホール安定化手段と後に結びつけられるようになったものを発見した実験手法]

と結びつくかたちで開闢を見た宇宙にて「二つの星がくっつけられ」[爬虫類の種族による人類種族の皆殺し]が具現化したと描かれる。

他面、『リアンの剣』では[リアン墳墓] (と設定付けられている場) に存在しているとされる、

[[カー・ブラックホール]とも[ワームホール]とも述べられるような異なる時空を結びつける時空連続体に開いた穴としての黒く泡立つ波]

にて盗掘者たる主人公が異世界(大海で覆われた過去の火星などと設定されている異世界)に到達、そこで[リアンの墳墓]を探し求めており、[リアン墳墓]に眠るテクノロジーを利用して人類を蹂躪しようとしている[爬虫類(蛇)の亜人種族]の陰謀に際会することになったとの筋立てが表出しているとのことがある。

『フェッセンデンの宇宙』と『リアンの剣』の両作には

[ブラックホール・ワームホールのなるもの]

[異なる世界の接合]

[爬虫類の種族による侵略の「完遂」(の企図)]

との特性の共有が認められるわけである(そして、「さらにもって」両作とも尋常一様ならざる予見性を呈しているとのこともあり、両作の作者が夫婦関係にあるとのこともある)。

上に関して、

[「何が」「どのように」「先覚性」との絡みで問題になるのか]

ご理解いただけるか、とは思う。

また、以上のようなことが指し示せるようになっていいるとのことがあるのに加えて、である。

The Sword of Rhiannon 『リアンの剣』の内容は本稿で先の段にて既述の1929年に世に出た小説 **The Shadow Kingdom 『影の王国』** に認められる内容、

[アトランティスを蛇の種族が影から統治している]

との内容とオーバー・ラップするものとなっているとのこと「も」がある

とのことが問題となりもする(と判じざるをえない事由が[記録的事実]の問題として存在している)。

把握しきれていない、ないし、全く把握していないかもしれないとの向きのことを念頭に、(くどくも)繰り返しておくが、本稿の先の段では以下にての流れのことの解説に努めてきたとのことがある。

膨大な文量を割きもし、本稿にての先立つ段では直下再述するとおりのことの指し示し —それは文献的事実・映像記録上の事実、および、それら事実群から純・記号論的に導き出せるとの接合性をただひたすらに重んじての指し示しともなる— をなしてきた

[[古代アトランティスに対する蛇の種族による次元間侵略]との内容を有する(一見すれば妄言体系としての)神秘家由来の申しようが今より70年以上前から存在している

——(所詮はパルプ雑誌に初出の小説『影の王国』(1929)の筋立てをその言い回し込みにして参考にしたのであろうと解される形態でながら前世紀、第二次世界大戦勃発の折柄(1939年)から存在している)—— とのことがある] (: [出典\(Source\)紹介の部 34](#)から [出典\(Source\)紹介の部 34-2](#)を包摂する解説部を参照されたい)

→

[(上にて言及の)[アトランティスに対する蛇の種族の次元間侵略]との内容と類似する側面を有しての[恐竜人の種族による次元間侵略]という内容を有する映画が[片方の上階に風穴が開きつつ][片方が崩落する]とのツインタワー —(恐竜人の首府と融合するとの設定のツインタワー)— をワンカット描写にて登場させながら1993年に封切られているとのことがある(子供向け荒唐無稽映画との体裁をとる『スーパーマリオ魔界帝国の女神』がそちら作品となる)] (: [出典\(Source\)紹介の部 27](#)を包摂する解説部を参照されたい)

→

[ある種、911の先覚的言及をなしているとも述べられるような性質を伴っての上記映画は[他世界間の融合]といったテーマを扱う作品ともなっていたわけだが、そうした内容([異空間同士の架橋]との内容)と接合する[ブラックホール][ワームホール]の問題を主色として扱い、また、同じくものところで[911の事件の発生に対する先覚的言及とも述べられる要素]をも「露骨」かつ「多重的に」帯びているとの著名物理学者由来の著作 — BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作 — が(申し分としては無論、頓狂に響くところなのだが)原著1994年初出のものとして「現実」に存在しているとのことがある] (: 疑わしきにおかれては(羅列しての表記をなし)本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 28](#), [出典\(Source\)紹介の部 28-2](#), [出典\(Source\)紹介の部 28-3](#), [出典\(Source\)紹介の部 31](#), [出典\(Source\)紹介の部 31-2](#), [出典\(Source\)紹介の部 32](#), [出典\(Source\)紹介の部 32-2](#), [出典\(Source\)紹介の部 33](#), [出典\(Source\)紹介の部 33-2](#)を包摂する解説部を参照されたい。表記の部にては **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という1994年初出の作品が[双子のパラドックス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用]／[91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号で「はじまる」地を実験に対する[空間軸上の始点]に置いてのタイムワープにまつわる解説]／[2000年9月11日⇒2001年9月11日と接合する日付けの実験に対する[時間軸上の始点]としての使用]／[他の「関連」書籍に見るブラックホール⇔グラウンド・ゼロとの対応付け]を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで「すべて同時に具現化」なさしめ、もって、[双子の塔が崩された「2001年の」911の事件]の前言と解されることを事件勃発前にいかようになっているのかについて(筆者の主観など問題にならぬとの客観事実に関わるところとして)仔細に摘示している。また、それに先立つところ、本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 29](#)から [出典\(Source\)紹介の部 30-2](#)を包摂させての解説部ではその前言問題に関わるところの[双子のパラドックス](1911年提唱)というものと[際立つての類似性]を呈しているとのこと指摘される浦島伝承(爬虫類の化身と人間の異類結婚譚との側面も初期(丹後国風土記)にては有していた浦島子にまつわる伝承)が欧州のケルトの伝承と数値的に不可解な一致性を呈していることを解説、そ

の「伝承伝播では説明がなしがたい」ような特異性についての指摘「も」なしている)

→

[[加速器]および[(時空間の)ゲート開閉に関わる要素]および[爬虫類の異種族の侵略]らの各要素のうち複数を帯びているとの作品らが従前から存在しており、の中には、カシミール・エフェクトといった後に発見された概念(安定化したワームホール構築に必要と考えられるようになったエキゾチック・マターという物質の提唱に関わっている概念)につき尋常一様ならざるかたちにて先覚的言及なしているとの1937年初出の作品『フェッセンデンの宇宙』——人工宇宙にての爬虫類の種族による人類の皆殺しが描かれているとの作品—— も含まれている] (:疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部22から出典(Source)紹介の部26-3を包摂する一連の解説部を参照されたい)

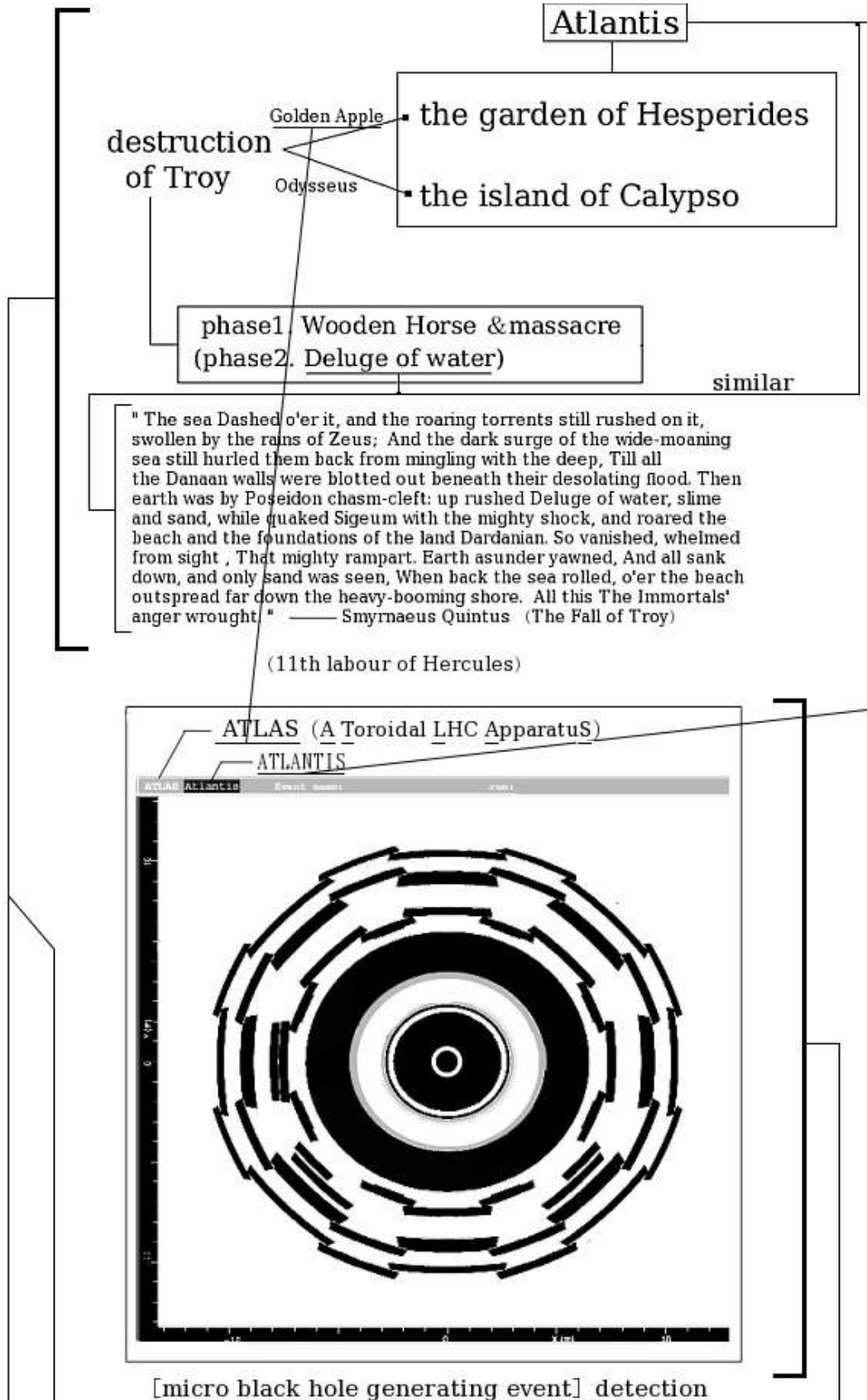
→

[CERNのLHC実験は「実際の命名規則の問題として」1990年代の実験プラン策定段階にての1992年(米国にて2004年に放映されていたテレビドラマ『スターゲイト・アトランティス』といったものを包摂する一連のスターゲイト・シリーズの嚆矢たる映画作品『スターゲイト』が1994年の公開にて世に出ることになった折より2年程前)から[アトラス——ヘラクレスの11功業にて登場した[黄金の林檎]の在所を把握すると伝わる巨人——]と結びつけられており(ATLASディテクターという[「後の」2000年代よりブラックホール観測「をも」なしうるとされるに至った検出器]にまつわる名称が1992年に確定したとも)、また、同LHC実験、後にその[アトラス]と語義を近くもする[アトランティス]ともブラックホール探索挙動との絡みで結びつけられるに至っているとのことがある(そのうえ、同LHC実験にあつてブラックホールの生成を観測しうるツールと銘打たれているイベント・ディスプレイ・ツールのATLANTISについてはプラトン古典『クリティアス』記述から再現できるところの古のアトランティスの城郭構造を意識させるようなディスプレイ画面を用いているとの按配での堂の入りよう「とも」なっている)。CERNのLHC実験と結びつけられての巨人アトラスは[黄金の林檎の在処(あ)りか)を知る巨人]として伝承に登場を見ている存在でもあるが、そこに見る[黄金の林檎]は[トロイア崩壊の原因]となっていると伝わるものである。とすると、CERNがATLAS検出器でブラックホールの観測——その観測が「科学の発展に資する」と中途より喧伝されるに至った即時蒸発を見る極微ブラックホールらの観測——をなしうると後に発表するに至ったことは[黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)の在り処を知る巨人]によってブラックホール探索をなさしめていると呼ばわっているに等しい] (:疑わしきにおかれては出典(Source)紹介の部35から出典(Source)紹介の部36(3)および出典(Source)紹介の部39を包摂する解説部を参照されたい)

→

[[古の陸塊アトランティスの崩壊伝承]は[古のトロイアに対する木製の馬の計略による住民無差別殺戮「後」の洪水による城郭完全破壊伝承](Posthomeric[トロイア戦記])と同様の側面を伴っているものとなる(アトランティスおよびトロイアの双方とも[ギリシャ勢との戦争の後]、[洪水]による破壊を見たとの筋立てが採用されている)。また、[巨人アトラスの娘]との意味・語感での女神[アトランティス]——(アトランティスという語は[古の陸塊の名前]以外に Daughter of Atlas との響きを伴う語ともなり、そ

うもした語が LHC の ATLAS 検出器に供されているイベント・ディスプレイ・ツールに供されている ATLANTIS の名に転用されている)—— については[トロイア崩壊の原因となった果実たる黄金の林檎の園が実るヘスペリデスの園]とも「史的に結びつけられてきた」とのことがあり、といった絡みから、「黄金の林檎の園」は(アトラスと共に CERN の LHC 実験の命名規則とされているとの)「伝説上の陸塊アトランティス」の所在地と結びつけられもしていたとのことがある」 (:疑わしきは [出典 \(Source\) 紹介の部 40](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 45](#) を包摂する一連の解説部を参照のこと)



<p>[トロイアとアトランティスの結びつき(1)] トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる ([出典(Source)紹介の部39])。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたとことがある ([出典(Source)紹介の部41])。 また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完遂したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では [カリュプソの島] というものが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた (e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど) とのことがある ([出典(Source)紹介の部43])。</p>	
<p>[トロイアとアトランティスの結びつき(2)] 黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』(英文タイトル the fall of Troy) に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬で内側から破壊させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである ([出典(Source)紹介の部44-3])。その点、[ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破壊] とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである ([出典(Source)紹介の部44-4] に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと)。</p>	
<p>[LHC実験とアトランティスの関係性について] どういった料簡でなのか、LHC実験はそのブラックホール生成可能性が現実的可能性をもって語られたとの始原期 (LHC実験のブラックホール生成可能性論議を巡る経緯については本稿にての [出典(Source)紹介の部1] から [出典(Source)紹介の部5] を包摂する解説部を参照されたい) より前に遡る折柄、LHC計画がLEP加速器に接ぎ木しての加速器設置案としてCERNサイドで「正式に」ゴーサインを出されることになった1994年より前よりATLASとの名前と結びつけられているとことがある (本稿の [出典(Source)紹介の部36(2)] で解説しているように1992年からのことである)。 そこに見るアトラスという名称はヘラクレスの功業に登場してきた伝説の天を支える巨人の名であるわけだが、同巨人アトラス、 [トロイア滅亡の原因ともなっている黄金の林檎] がたわわに実る果樹園の所在地を把握していると伝わっている巨人にして、それぞれ別個に、 [古のアトランティス] に比定される [黄金の林檎の園] [カリュプソの島]、それらの地の代表的住人たるヘスペリデスおよびカリュプソという女の神格らの父親とされる存在でもある ([出典(Source)紹介の部39] 以降の一連の解説部にて文献的論拠を明示していることである)。そうもしたことが指摘できる時点でCERNのLHC実験はアトランティスと接合していると述べられる。 のみならず、LHC実験ではATLANTISとの名前が付されているEvent Displayツールでブラックホール生成イベントを観測する可能性が実験関係者によって「肯定的に」(科学的知見発展に資する安全なブラックホールの生成・観測との文脈で) 宣伝されているとことがある。従って、ATLASとの名称それぞれ自体に留まらずATLANTISとの名称をも用いているとすることでLHCとアトランティスの関係はいよいよ色濃くも出てくることとがある。</p>	

→

[[ヘラクレスの11功業] というものは [[アトラス(1992年よりLHC実験関連事項としてその命名が決せられたATLASと同じくもの名を冠する巨人)] および [黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)] と関わるもの] となるが (出典(Source)紹介の部39)、先の911の事件の前言と解せられる要素を「**多重的に**」含む特定作品らがそうした [ヘラクレスの11功業] と濃厚に関わっていると指摘出来ること「も」がある。

具体的には(ヘラクレス第11功業と911の事件の関係性を示すべくもまずもって挙げたところの作品としての) 『ジ・イルミナタス・トリロジー』という70年代にヒットを見た小説作品が

[ニューヨーク・マンハッタンのビルの爆破]

[ペンタゴンの爆破] (時計表示を180度回転させて見てみると時計の911との数値が浮かび上がってくるとの5時55分にペンタゴンが爆破されたと描写 —— [180度反転させることで911との数値が浮かび上がってくる数字列] をワールド・トレード・センター(の崩落)などと結びつけている文物「ら」は(複数形で)他にもあり、本稿でそれらの特性について解説することになっていいる中での一例としての描写となる ——)

〔「ニューヨーク象徴物」と「ペンタゴン象徴物」の並列配置シンボルの作中にての多用〕

〔米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄の描写〕(現実の911の事件では事件後間もなくして米軍関係者と後に判明したブルース・イヴィンズ容疑者の手になるところの炭疽菌漏洩事件が発生しているが、そちら現実の状況と照応するような〔米軍関係者より漏洩した炭疽菌の災厄〕との筋立ての具現化)

〔関連作品でのツインタワー爆破・ペンタゴン爆破描写〕

との要素らを内に含みつつもヘラクレスの第11功業と接合していると摘示できるのことがある(『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品ではヘラクレス第11功業に登場する〔黄金の林檎〕が作品の副題に付されていたり、黄金の林檎を描いたものとされるシンボルが何度か図示までされて登場してきているといったことがある) (：疑わしきにおかれては[出典\(Source\) 紹介の部 37](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 37-5](#)を包摂する一連の解説部、オンライン上より全文現行確認できるようになっているとの原著よりの原文抜粋および国内で流通している訳書よりの抜粋をなしつつ「どこが」「どのように」〔911の事件に対する奇怪なる前言と呼べるようなパート〕となっているかにつき事細かに解説してもいるとのそちら一連の解説部を参照されたい)

→

〔上にて言及の『ジ・イルミナタス・トリロジー』は

〔蛇の人工種族を利用しての古代アトランティスの侵略がなされる〕

〔アトランティスと現代アメリカのペンタゴンが破壊されたことよってのそこに封印されていた〔異次元を媒介に魂を喰らうべくも介入してくる存在〕の解放がなされる〕

といった作中要素を内に含んでいる小説作品「とも」なる ―― そこに見る〔蛇の人工種族を利用しての古代アトランティスの侵略〕という筋立ては一見すると先述の神秘家話柄(蛇の種族によるアトランティスに対する異次元間侵略)と同様により従前より存在していたロバート・エルヴィン・ハワードという作家の小説『影の王国』をモチーフにしていると解されるところでもあるのだが、であろうとなかろうと、奇怪なる先覚性(ナイン・ワン・ワンの事前言及)にまつわる問題性はなんら拭(ぬぐ)えぬとのことがある――。

といった〔異次元との垣根が破壊されての干渉の開始〕との筋立ては上述の著名物理学者キップ・ソーンに由来する著作、**BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作が(異次元との扉にも相通ずる)〔ブラックホール〕〔ワームホール〕の問題を主色として扱い、また、同じくものことで〔911の事件に対する前言とも述べられる要素〕をも「多重的に」帯びているとの作品として存在しているとのことと平仄が合いすぎる程に合う) (：疑わしきにおかれては[出典\(Source\) 紹介の部 37](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 37-5](#)に加えての[出典\(Source\) 紹介の部 38](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 38-2](#)を包摂する一連の解説部の内容、そして、[出典\(Source\) 紹介の部 28](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 33-2](#)を包摂する解説部の内容を参照されたい)

以上、「度々」に続いてのこととしてさらにもって再提示したところの関係性に関わるところとして本稿では

小説『影の王国』(1929年初出のロバート・ハワードの手になる小説)

の内容 —— [古代アトランティス時代の蛇の種族による侵略・間接統治] といったフィクション内容 —— の如きものを問題視していた、との背景がある。

そうした『影の王国』の内容と

[(先述のように) 加速器 — 巨大な陽子ビーム発射装置 — によるブラックホール生成のことを奇怪極まりないことに「極めて早期に」言及しているといった描写を「露骨に」含む『リアンの剣』]

が [影からの蛇の種族による「間接」統治] との文脈にて接合している —— 下にて該当部を再引用する —— とのことを [偶然] ないし [ただの文化伝播の問題] と述べられるか。

[『影の王国』と『リアンの剣』の類似性にまつわるどころの典拠摘示]

(直下、1929年初出のロバート・エルヴィン・ハワード『影の王国』内容につき英文 Wikipedia [The Shadow Kingdom] 項目にあつての現行記載を(本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 34-2](#) でもって挙げていたところより再度の引用をなすとのかたちで) 挙げるとして)

The story starts shortly after the Atlantean barbarian Kull has conquered Valusia and become its King. Kull is invited to a feast by the Pictish ambassador to Valusia, Ka-nu the Ancient. [. . .] Brule reveals that the Serpent Men, an ancient pre-human race that had built Valusia but was almost extinct, ruled from the shadows, using their Snake Cult religion and ability to disguise themselves with magic. They intended to replace Kull with a disguised Serpent Man, just as they had done with his predecessors.

(訳として)「物語はアトランティスの蛮人カルがヴァルーシア国を征服、その王となってより間もなき折からはじまる。カルはピクト人の特使の老カ・ヌによって宴にまぬかれることになる。…(中略)…ブルーは[蛇人間ら、ヴァルーシア国を設立したもののほとんど絶滅しかけているとの人類より前より存在している太古のその種族が[スネーク・カルト]を用いて影よりの支配をなしていること、そして、魔法によって彼らの姿を偽れる能力を有しているとのこと]を明かした。彼ら蛇人間はカルを彼の前任者の王らがそうであったように人間に化けた蛇人間へと置き換えることを企図しているとのことをカル王に伝えた」

(『影の王国』筋立てにまつわる再度の引用はここまでとする)

(直下、レイ・ブラケット『リアンの剣』(初期タイトルは *Sea-Kings of Mars* 『火星の海王たち』とのタイトルで1949年に初出)の類似性が問題となる記載を(本稿にての [出典\(Source\)紹介の部 65\(9\)](#) でもって挙げていた訳書『リアンの魔剣』224ページから225ページより再度の引用をなすとのかたちで) 挙げるとして)

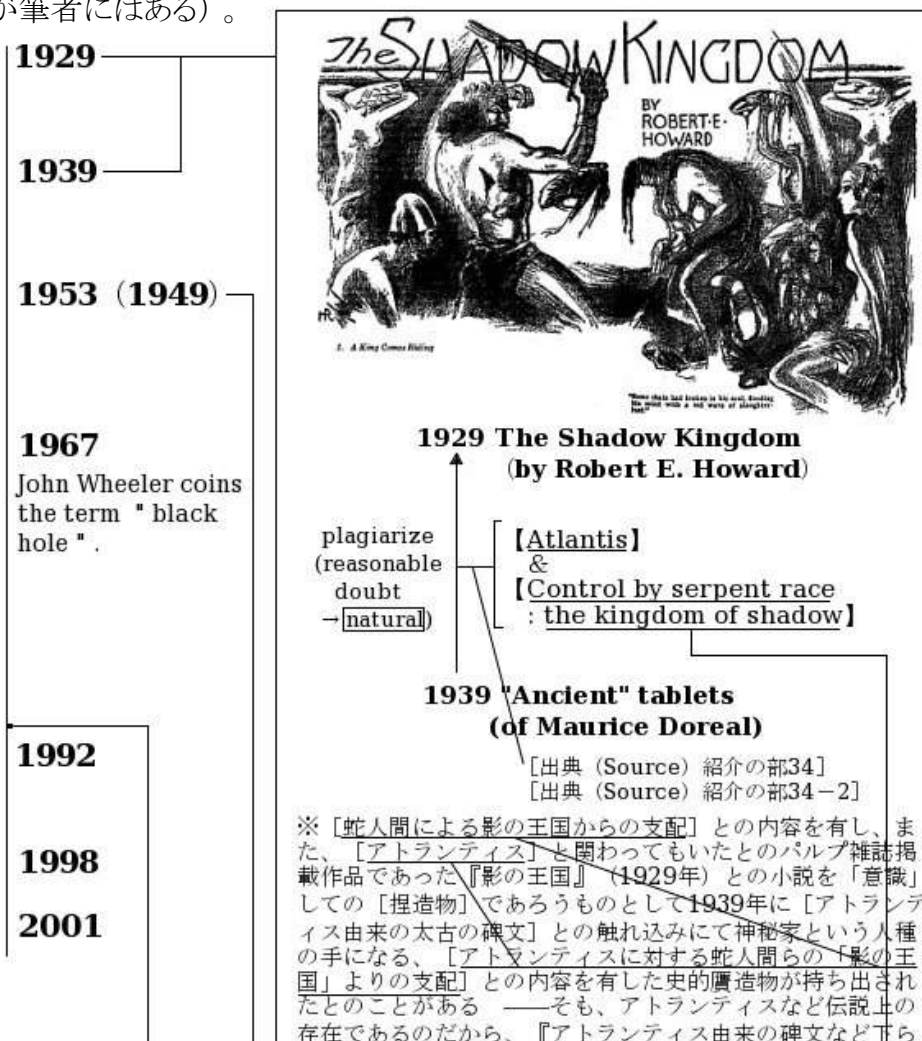
「リアンがその墳墓にとじこめられて以来、われわれは"白海"の沿岸の大半を支配下に収めてきた。われわれは少数だ。それゆえ大

規模な戦闘に不向きだ。したがって、人間の王国を使って工作をしてきた。欲ばりなおまえたちを道具に使ってきたのだ。いまやリアノンの武器が手にはいった。これらの使用法にもすぐ熟達するだろう。それなれば人間の道具もいらなくなる。＜蛇の子たち＞が、この世を征服するのだ」

(ここまでを訳書より引用部とする —※—)

(※尚、原著表記 The Sword of Rhiannon にあつての表記では “Since Rhiannon was locked in his tomb we have gained subtle dominance on every shore of the White Sea. We are few in number and averse to open warfare. Therefore we have worked through the human kingdoms, using your greedy people as our tools. Now we have the weapons of Rhiannon. Soon we will master their use and then we will no longer need human tools. The Children of the Serpent will rule in every palace.” が該当するところとなる)

上のような類似性につき、それが [偶然] ないし [ただの文化伝播の問題] とは述べられないだけの事情がある、山積してありもする。そのことを(すぐ先立っての段でくどくもの再掲をなしているような流れにまつわるところとして)詳述せんとしているのが本稿となる (その言に偽りやあるのかは本稿全体の内容から判断するとよからう。そして、その言に偽りがなんら「なかった」場合に我々人類がどういう状況に置かれているのかきちんと考えてみるのがよからう。その点、仮に我々の種族が現実を見る能力さえないのならば、「そのような種族は同族ながら運命を克服できなくて当然であろう」と(これ冷厳と)申し述べざるをえぬとの観点が筆者にはある)。



1998

2001

た、「アトランティス」と関わってもいたとのパルプ雑誌掲載作品であった『影の王国』(1929年)との小説を「意識」しての「捏造物」であろうものとして1939年に「アトランティス由来の太古の碑文」との触れ込みにて神秘家という人種の手になる、「アトランティスに対する蛇人間らの「影の王国」よりの支配」との内容を有した史的「捏造物」が持ち出されたとのことがある——そも、アトランティスなど伝説上の存在であるのだから、『アトランティス由来の碑文など下らぬ人種(詐欺師)が世間知らずらを相手に「人形劇」のようにお決まりの流れにて公共心も道義心もなくに用意した「捏造物であろうよ」と最低限の教養を有する人間に見られることは述べるまでもないことか、とは思うのだが、対象が詐欺師由来の猿真似・剽窃物であろうともそこに介在している力学のことをここでは問題視している——。

**1953 The Sword of Rhiannon
(1949 Sea-Kings of Mars)**

the man with the proton-gun
& the Black hole (gate)

The protagonist Matthew Carse ,the man with the proton gun had been pushed into the gate machine like the black hole. Matth Carse (the protagonist of The Sword of Rhiannon), then, broke the wall of the ruin ,the exit of the gate, with his proton-gun in another world where serpent race "Dhuvian" controled superpower from the behind of the curtain.

citation:

"It was a great bubble of darkness. A big, brooding sphere of quivering blackness, through which shot little coruscating particles of brilliance like falling stars seen from another world. And from this weird bubble of throbbing darkness the lamplight recoiled, afraid .
(. . .)

This brooding bubble of darkness — it was strangely like the darkness of those lank black spots far out in the galaxy which some scientists have dreamed are holes in the continuum itself, windows into the infinite outside our universe!
(. . .)

Penkawr's snarling shout came to him from a great distance as he tumbled into a black, bottomless infinity.

prophetic,
tremendously
(unnatural)

※裏付けとなることにつき細かくは本稿にての、
[[出典(Source)紹介の部65(5)]から[出典(Source)紹介の部65(9)]]
の内容を参照いただきたい次第だが、
[話柄の選択以上には筆者の個人的主観が介在する余地もなき話]として『リアノンの魔剣』という小説作品には
[ブラックホールに類似した異世界(過去の火星との設定の世界)へのゲート装置]
が登場してきており、同作では主人公がそれが何たるか知らぬ段階で同ゲート装置に叩き落とされて予想外に到達した異世界、その向こう側の出口となっていた遺跡の壁面をプロトンガン([陽子銃])で破壊するとの話が展開する。そうやって小説主人公(マット・カース)が入り込んだ異世界が[超大国を蛇の亜人種族が支配しているとの世界]であるとの作中設定が採用されている。その設定が先行するパルプ雑誌掲載小説たる『影の王国』に見るシナリオとよく似ているとのことが[気がかり]となる、そのように述べざるをえぬところとしてATLANTISと命名されたEvent Display toolを用いての[陽子ビーム(プロトン・ガンと形態が似ていようのもの)の衝突にて動く加速器によるブラックホール生成]
が取り沙汰されたのはここ10数年であるとの現実がある(：そも、改訳がなされている邦訳版はいざ知らず1953年で同名のタイトルで世に出た原著The Sword of Rhiannonの段階には[ブラックホール]との名詞すら登場していない。というも、まだ、ブラックホールという言葉すら考案されていなかったからである)。

1992

[the first official use of ATLAS by the LHC Experiments committee]

"The Toroidal LHC Apparatus collaboration propose to build a multipurpose detector at the LHC. The letter of intent they submit to the LHC Experiments Committee marks the first official use of the name ATLAS. Two collaborations called ASCOT and EAGLE combine to form ATLAS." (cf. [出典 (Source) 紹介の部36 (2)])

1994

[the approval of the construction of the Large Hadron Collider by the CERN council]

1998

[the proposal of the ADD model by N.Arkani-Hamed, S.Dimopoulos, and G.Dvali]

(2001)-) Some physicists began claiming the ADD model allow the production of black holes at the LHC. (cf. [出典 (Source) 紹介の部1] - [出典 (Source) 紹介の部2])

(2005)?-) ATLANTIS ,an event display program for ATLAS, which was claimed to detect [microscopic black holes generating events] appeared in front of public. (cf. [出典 (Source) 紹介の部35])

proton beams (collider) & black holes & Atlantis

※小説『リアンの魔剣』では

[ブラックホールの異世界へのゲート(とその出口での壁面破壊、続いての外界への脱出)]が

[陽子銃(プロトン・ガン/プロトン・ピストル)なるフィクション上の武器]

と結びつけられているわけだが、「現実世界では、」1998年登場の理論を受けての理論動向の変転を見るまで、

[「陽子ビーム」を衝突させる加速器の類によるブラックホール生成]

のことが[現実的な申しよう]であるとは考えられていなかったとことがある。

(:本稿にての[出典(Source)紹介の部1]で解説していることだが、Walter Wagnerという市民活動家が物理学者 Stephen Hawkingの原初宇宙にまつわる理論を受けて、

「加速器は原初宇宙の状況を極微的に再現するというが、それによって原初宇宙にあったというブラックホールの類を生成する可能性はないのか」

との疑義を発したことでブラックホール生成可能性のことが1999年に取り沙汰されだしたとことがある。その際、研究機関および著名物理学者らに牽引されての科学界は(「後に」問題となる1998年提唱の新規理論のことが触れられもしない中で、

[加速器によるブラックホール生成など今後も含めて一切ありえない]

と公式安全報告書の中で強調をなしていた。

そうした論調が2001年以降、

[安全な大量の極微ブラックホールの生成は1998年提唱のADDモデルに基づきありうると考えられるようになった]との発表動向に切り替わっていったとことがある。

要するに、(繰り返すが、)ここ10数年に至るまで加速器によるブラックホール生成は ——それが不十分に1999年に目立ってはじめて問題視された折も含めて—— 絵空事と看做される話であったとことである(本稿ではそうした理論動向にまつわる分析も仔細になしている)。

につき、本稿[出典(Source)紹介の部1]では米国人法学者の加速器問題案件分析論稿、THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD の838と振られたページ記述よりの抜粋として

In 1999, when questions floated in the media about accelerator-produced black holes, physicists issued an assurance that no particle collider in the foreseeable future would have enough power to accomplish such a feat.「1999年、加速器製ブラックホールについての疑問がメディアに浮かんできた折、物理学者らはそのような業(わざ)をなしうるのに十分な力を有した[予見しうる未来にあっての加速器]は存在しないとの保証を發した」との記載内容を引いてもいるわけだが、それがどう変節を見たかは重要なことと看做されて然るべきことである)。

さて、『リアンの魔剣』の尋常一様ならざる先覚性を巡る問題としては

[「プロトン・ビーム」によるブラックホール生成のことがおよそ想起されていなかった折、ブラックホールという言葉自体が存在していなかった折にてプロトン・ガンと異次元へのゲートとなるブラックホール「的なる」ものを結びつけていること]

以外に次のようなことがある。

・リアンの魔剣ではドウピアXと呼ばれる蛇の垂人種族が人間に統治される超大国の背後にて水晶テクノロジーといったものを用いて間接統治をなしているとの設定が採用されている。そのような[蛇の垂人種族による超大国の裏側よりの統治]との筋立ては先行する小説、[アトランティ

さて、『リアンの魔剣』の尋常一様ならざる先覚性を巡る問題としては
[プロトン・ビームによるブラックホール生成のことがおよそ想起されていなかった折、ブラックホール
という言葉自体が存在していない折にてプロトン・ガンと異次元へのゲートとなるブラックホール
的なるものを結びつけていること]
以外に次のようなことがある。

・リアンの魔剣ではドウビアンと呼ばれる蛇の亜人種族が人間に統治される超大国の背後にて
水晶テクノロジーといったものを用いて間接統治をなしているとの設定が採用されている。その
ような[蛇の亜人種族による超大国の裏側よりの統治]との筋立ては先行する小説、[アトランティ
スのカル・シリーズ]([Kull of Atlantis]シリーズと称されるもの)にあつての端緒的作品、
『影の王国』という短編小説(パルプ雑誌常連小説家として今日に名を残すロバート・E・ハワード
の作品)が[アトランティス時代の超大国に対する蛇の種族による影からの間接統治]との設定
を有していることとの絡みで問題になる。死地にあつても脳が天気でいられるといった向きらが「何
を下らぬサブ・カルチャーのごときなどを云々しているのか。頭が変なのか」と言下に切り捨てかねな
いところか、とは思うのだが、加速器実験と[アトランティス]との名称が最近になってより結びつけ
られ出している(本稿にての[出典(Source)紹介の部35]で示したようにブラックホール観測を
なすうる Event Display ツールが ATLANTIS と命名されている)とのことが気がかりなこととなる。

・のみならず、[アトランティスに対する蛇人間の侵略と支配]との粗筋を想起させるようなサブ・
カルチャー作品の中には[911の事件が発生することを予言しているとの按配のどういうわけ
なのか、の奇怪なる作品]および[ブラックホールおよびワームホールの生成問題を意識させる
ような作品]が実際に[文献的事実]の問題として含まれているとことがある(それらのことを
[都市伝説]といった頭がきちんとして働いていないとの者達—思考の自由度が生き残りの要件
となつていとの世界を想定すれば、生き残れなかつたとの者達—の話柄としてではなくオンラ
イン上より確認できるところの一次資料よりの原文引用でもって指し示しているのが本稿である)。

以上、極々端々な事例を補足として挙げたに過ぎぬとのここの話程度のものからでも、(果た
してそういう人間がいるのか否かは別として)、聞く耳を有した向きには何が問題になるのか、理解
いただけるか、と思う(：ちなみに、『リアンの魔剣』では外宇宙に旅立った超文明の担い手ら、リ
アノンといった作中表題に用いられている者を含む超文明の担い手らが残したゲート装置にて主
人公は異世界に迷い込んだとの粗筋が採用されているわけだが、その異世界、過去の火星では蛇
の種族らが自分達に力を与えたりアノンの遺産を入手、それでもって人間を必要としないシステム
の構築を目指しているとの内容が作品骨子をなすものとして見受けられる。英語が不得手でオン
ライン上より確認できるとの原著テキストを理解するにも苦勞するといった向きらが読み手ならば
尚更のこととして、そうしてみてもはいかがが、と薦めるが、詳しくは邦訳版、結果的に犯行現場を荒ら
すとの按配にて訳者がブラックホールという言葉が存在していない折の小説にブラックホール
という言葉を入れ込んでいるといった按配のものなからもの邦訳版を図書館で借りるなりなんなり
して確認されてみるといい。そうしたことにすら計算されての相応のやりようを感じざるをえないと
いうのがこの世界の「偽らざる」ありようであると筆者はとらえている。愚人がこととする抽象論では
なく、具体的材料の山に基づいての話として、である)。

直上の段までにて、「ここでの話は「長くもなるも、」脇に逸れてのものである」と断ったうえでの一連
の話の中にあつて)、

[小説『リアンの剣』にあつては(「不可解にも」—声を大にしてアクセントを置きた
いところとして「不可解にも」—半世紀も先になって問題となつた[加速器(のプロトン
ビーム衝突)によるブラックホール生成に関する議論]のことを露骨に意識させるように)
[ブラックホール(然としたもの)]と[陽子ビーム(プロトンビーム)によるブラックホール然
としたものによる転移先の壁面の破壊]とが結びつけられている]

[[加速器関連事物] と [爬虫類の異種族の来寇・来臨] とを結びつけているとの文物
らが他に「時期的に不可解な折に」存在しているとの中で小説『リアンの剣』もまたそ
の式での内容を有しているとの作品となつており、同作にあつては[(ブラックホールと紐
付けて描かれる)超存在リアノンの墳墓のロスト・テクノロジー]と[爬虫類の異種族の人
類支配体制の一大回転(人間種族による間接統治を必要としないよりもって悪い方向
での回転)]とが結びつけられて描かれているとのことがある]

とのことらを [半世紀以上前のフィクションにおける文献的事実の問題]として摘示してきた(：遺漏な
くも関連するところの表記を(原文引用にて)引くとのことをとにかくも重んじての典拠紹介部はつい先
立っての[出典(Source)紹介の部65(6)]から[出典(Source)紹介の部65(9)]。

同じくもの摘示事項に関して[さらにもって問題となること]の解説を今しばらくも続けることとする。(延々と本題より脇に逸れての補足部が長くなってしまっているくらいがあるが) ここでいまひとつ申し述べておくべきか、ととらえることがあるのでその点について筆を割いておくこととする。

さて、筆者は先におよそ以下の趣旨のことに注意を向けていた。

「作家リイ・ブラケットが —— ([ブラックホール]という言葉は未だ存在していなかった折ながらも) —— 世間に知られ出していたブラックホール近接領域の専門家研究動向にまつわる情報を勉強家として摂取して、

[ブラックホール「的なる」[異なる世界を橋渡しするゲート]としての時空間に開いた底無しの暗黒の穴] (人間が通過可能な上、また、光を反射するとの側面では[ブラックホール]とは異質なものと映るが、ブラックホール「的なる」形容がなされての暗黒の穴)

を登場させていたとしても、

[プロトン・ガン(陽子ビーム)を持った男のプロトン・ガンによる壁の破壊挙動]

とそうしたゲート —— 作中にて「時空連続体にうがたれた暗黒の泡としての穴であり宇宙の外側に向けての無限の窓であるかもしれぬ」と夢想されてきたもの(**The Sword of Rhiannon** 作中にて “ **it was strangely like the darkness of those lank black spots far out in the galaxy which some scientists have dreamed are holes in the continuum itself, windows into the infinite outside our universe** ” と表されているゲート) —— とを結びつけているのは([陽子ビームを用いての加速器実験]でブラックホールやワームホールの類が生成されうると考えられるようになったの「何十年も後のこと」であるがゆえに)[先覚性]との意味で尋常一様ならざることである]

上のような予言があったやりよう以外にも『リアンの剣』作者リイ・ブラケットやりようには予言があった側面が見てとれるとのことがある。

につき、

[時空の穴を通った先 — 過去の火星世界などと設定付けられての領域 — での [蛇の種族] の暗躍を描いている]

との小説作中設定の採用に見るリイ・ブラケットやりように関して「も」、その時点で、

[命名規則]にまつわるところでの[先覚性]

が見てとれるとのことがある。

どういふことか。それは直下続けて述べもするようなかたちのこととなる。

Wormhole[ワームホール]という言葉が生み出されたのは「1957年」であるとされている(:本稿にての先の段にてもほんのすこし言及しているようにそちら[ワームホール]に近接する概念自体は数学者ヘルマン・ワイル事績に伴うところとして既に一部にて知られるところとなっていたともされるが、[ワームホール]との言葉それ自体が物理学者ジョン・アーチボルト・ホイーラーによって生み出されたのは「1957年」であるとされている)。

そちら1957年に[新語]として生み出されたワームホールの命名理由については

[林檎を虫(ワーム)が食いちぎったとの穴のように空間のショート・カットをもたらすからそういう命名がなされた]

と広くも指摘されているところとなる —— (例えば、(和文ウィキペディア[ワームホール]項目にての「現行にての」記載内容よりワンセンテンス引用なせば) “ワームホールという名前はリンゴの虫喰い穴に由来する。リンゴの表面にある一点から裏側に行くには円周の半分を移動する必要があるが、虫が中を掘り進むと短い距離の移動で済む、というものである。ジョン・アーチボルト・ホイーラーが1957年に命名した” (ウィキペディアの現行にての記載内容よりの引用部はここまでとする) などとされている)。

そうして、

「[虫が食い進んだ [林檎の穴] のようなかたちでの時空に開いた穴] とのこと
でワーム・ホールとの言葉が生み出された」

などと通り一通りには説明がなされているわけだが、そも、そこに見る、

[ワーム]

という語は

[鱗翅目(りんしもく)、すなわち、蝶や蛾の類の幼虫あるいはミミズの類としての
這いずる虫(の類)を指す言葉]

というよりも「元来は、」

[[羽のない竜] あるいは [蛇] を指す言葉]

としての淵源を有している(ことが知られている)。

となれば、

[蛇・竜「の穴」]

というのが [ワームホール] の古典英語にあつての解釈論上の意味であるとのことになる(のが問題になる)。

そのような【言葉の淵源】(ワームとの語の淵源)に着目しての観点で見れば、

「物理学者ジョン・ホイーラーが1957年にあつてワームホールという語句を造語した(との科学史にまつわる事実関係がある)。それがゆえに、

[時空の穴の先で [蛇(→ワーム)の異種族] が暗躍している]

[時空の穴にて行き着いた先でその[時空の穴の運用を包摂するテクノロジー]を[蛇(→ワーム)の異種族]が手中に収めんとしている]

との1949年初出の作品内容でもって作家ライ・ブラケットは後にワームホールという語の造語がなされることを見越していた」

とのことなるようにも「とれる」わけである —— あるいは「馬鹿げた」見立てとしてジョン・ホイーラー程の大学者がパルプ雑誌に載せられていたようなライ・ブラケットの小説(『火星の海王』として初出を見ている『リアンの剣』)の内容を真摯に受け止めてワームホールという言葉を生み出した、とでも考えるべきか。いや、普通にはそうは考えられないところであろう。だが、事実としてそこに「ある」先後関係の問題に異動はない —— 」

上のことにまつわっての典拠紹介を下になすこととする。

出典 (Source) 紹介の部 65(10)



SOURCE 65(10)

ここ出典 (Source) 紹介の部 65(10) にあつては

[ワームホールという言葉が 1957 年に生み出されたこと]
[(ワームホールに見る) [ワーム]との語の由来はそもそも[鱗翅目の幼虫(芋虫の類)]
ではなく[蛇・竜の類]に求められるとされているとのこと]

の典拠を挙げておくこととする。

まずもって

[ワームホールという言葉が 1957 年に生み出されたこと]

についての振り返っての表記をなしておく。

(直下、英文 Wikipedia [Wormhole] 項目にあつての記述より「再度の」引用をなすところとして)

The American theoretical physicist John Archibald Wheeler coined the term wormhole in 1957; however, in 1921, the German mathematician Hermann Weyl already had proposed the wormhole theory in connection with mass analysis of electromagnetic field energy.

(訳として)「アメリカ人理論物理学者ジョン・アーチボルト・ホイーラーが 1957 年にワームホールとの造語を生み出した。が、ドイツ人数学者ヘルマン・ワイルが既に電磁場のエネルギーの分析との絡みでワームホール(的なるもの)理論を前面に出しているとのことがあった」

(英文ウィキペディア程度のものよりの再度の引用はここまでとする 一※一)

(※ちなみに[1957年]に([概念]それ自体ではなく[呼称]の方としての) [**Worm Hole**]という言葉を生み出した物理学者ジョン・ホイーラーは(こちらにも[概念]それ自体ではなく[呼称]としての) [**Black Hole**]という言葉を生み出した向きとして「も」知られている(そちらもまた既述のことである)。たとえば、本稿にての前半部でも度々そこよりの引用をなしてきたとの著作、Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos (邦題はNHK出版より刊行の『パラレルワールド —11次元の宇宙から超空間へ』)にあつての MONSTER MIND: JOHN WHEELER の節にあつては “ **It was Wheeler who coined the term “black hole” in 1967 at a conference at NASA’s Goddard Institute for Space Studies in New York City after the discovery of the first pulsars. Wheeler was born in 1911 in Jacksonville, Florida. His father was a librarian, but engineering was in his family’s blood. Three of his uncles were mining engineers and often used explosives in their work. The idea of using dynamite fascinated him, and he loved to watch explosions. (One day, he was carelessly experimenting with a piece of dynamite and it accidentally exploded in his hand, blowing off part of his thumb and the end of one finger. Coincidentally, when Einstein was a college student, a similar explosion took place in his hand due to carelessness, requiring several stitches.** ” との表記がなされている —以上のオンライン上よりも文言確認できるところの原著テキストに対しての訳書『パラレルワールド —11次元の宇宙から超空間へ』(現NHK出版刊行)での表記は(当該邦訳タイトル181ページから182ページより引用をなすところとして) “ **ブラックホール** ” という言葉をこしらえたのも、実は彼だった。一九六七年、最初のパルサーが発見されたあと、ニューヨークにあるNASAのゴダード宇宙研究所で開かれた会議の場でのことだ。ホイーラーは、一九一一年、フロリダ州ジャクソンヴィルに生まれた。父親は図書館の司書だったが、一族には技術系の血が流れていた。おじのうち三人は鉱山技師で、仕事でよく爆薬を使っていた。ホイーラーはダイナマイトに取りつかれ、発破を見るのが大好きだった(だがある日、彼がダイナマイトのかけらをいじっていると、不意にそれが爆発し、親指の一部ともう一本の指の先端を吹き飛ばしてしまった。偶然だが、アインシュタインも、大学生のとき、うっかり手のなかでそのような爆発を起こし、何針か縫う怪我をしている) ” (訳書よりの引用部はここまでとする)と [1967年:ブラックホール語法確立]にまつわつての言及がなされている——)

次いで、

[ワーム Worm という言葉の本来の意味合いが[鱗翅目、すなわち、蝶や蛾の類の幼虫(芋虫)あるいはミズノ類としての這いずる虫(の類)]を指す語であるというよりも元来は[羽のない竜]および[蛇]を指す言葉であった(古英語上の言葉でそうであった)]

とのことの典拠を挙げておくこととする。

最初に目に付きやすきところとして次の記載を引いておく。

(直下、英文 Wikipedia[Worm]項目よりの原文抜粋をなすとして)

Historical English-speaking cultures have used the (now deprecated) terms

worm, wurm, or wyrm to describe carnivorous reptiles ("serpents"), and the related mythical beasts dragons. The term worm can also be used as an insult or pejorative term used towards people to describe a cowardly or weak individual or individual seen as pitiable.

(補ってももの訳として)

「歴史的な英語口語文化にあつては[worm][wurm]ないし[wyme]との語を
[肉食性爬虫類(蛇)]

および

[幻獣としての竜ら]

を表するために用いてきた(だが、現行は同意されないところとして廃れている)。

同語 worm はまた、臆病ないし弱き者、あるいは、情けない向きを指すとの式で人間に対しても侮蔑語・軽蔑語として用いられていた言葉である(訳注: 英英辞書や英和辞書にあつての Worm 項目では(辞書にもよるだろうが)確かに[敬意に値しないいやな奴]といった訳語が[ワーム]との語の意味のひとつとして掲載されている)」

(補ってももの訳を付しての引用部はここまでとする)

同じくものこと —ワームとの語の由来は本来的には[竜][蛇]の類にあるとのこと— について加えての典拠を挙げておく。

ここではオンライン上より誰でも確認できるところとしての Project Gutenberg のサイトにて全文ダウンロード可能な書、

CURIOUS CREATURES IN ZOOLOGY (1890 年刊.同著、動物学にてさも存在するよりに扱われてきた [奇怪な空想上の生き物] たちにまつわる要覧書となる)

よりの抜粋をなすこととする。

(直下、Project Gutenberg のサイトより全文ダウンロード可能となっている著作 CURIOUS CREATURES IN ZOOLOGY (1890) にあつての [Serpents] の節にあつての (294 ページ) 内容を引くとして)

The Wingless Dragons belong to the serpent tribe, with the exception that they are generally furnished with legs. These are “Wormes,” of several of which we, in England, were the happy possessors. Of course, in the northern parts of Europe, they survived (in story at all events) much later than with us, and Olaus Magnus gives accounts of several fights with them, notably that of Frotho and Fridlevus, two Champions, against a serpent. Frotho kills a huge fierce great Serpent.

(補いながらもの拙訳として)

「翼を有さぬドラゴンはそうした存在が四肢を有しているとの例外に属さぬ限り、[蛇の類]に属している。それは[ワーム(Worm)]の類であり、我々が住まうイングランドの地にてその数多なるところが幸多き地所所有者となつていたとの存在であつた。無論、ヨーロッパ北部にあつてはそれら存在は我々人間と併存するとのかたちで遙か後々まで(全て物語の中の出来事として)生き残っており、オラウス・マグヌス(本稿筆者訳注: Olaus Magnus は有名な北欧海図カルタ・マリナの作者である 16 世紀活動の史家のことである) はそれら存在との戦いについての言及をなしている、著名なところとしてフロート王およびフリード

レーブ、二名の闘士が蛇と戦っていたことにまつわる言及をなしている。フロートは巨大で恐るべき膂力(りよりよく)ある蛇を屠っているのである(本稿筆者訳注:Frotho フロートもフリードレーブ Fridlevus も両者共々、GESTA DANORUM『デンマーク人の事績』に登場する伝承上のデンマーク王のことを指す)」。

(補ってもの訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※以上訳出なしの部につき、手前が全くの別件、半ば趣味にて、[ハムレット伝承の[オリジナル]となる文物であるとの理論が伴っているとのアムレート王の伝記]

との兼ね合いで検討したことがあるとのゲスタ・ダノールム GESTA DANORUM、そちらが和訳されての『デンマーク人の事績』(東海大学出版会刊行のもので北欧文学を専門としている谷口幸男元広島大学教授の訳になる版)にも

(上記訳出部に見る)

[フロート王(Frotho)およびフリードレーブ(Fridlevus)の蛇退治の物語]のことが「確かに」載せられている(ので、一応、そちらよりの部分的引用をもなしておく)。

(直下、訳書『デンマーク人の事績』、その p.51、第二の書より掻い摘まんでの引用をなすところとして)

「ハディングの後をついだのはその息子フロートである…(中略)…その丘は青銅と豊かな戦利品を蔵している山の主がそこでおびたしい宝を守っている。それはとぐろを巻いた龍で幾重にも輪をかさね尻尾をくねらせ螺旋形をなして毒を吐いている。これに勝とうと思ったら盾をもち牡牛の皮をひろげて身を覆い猛毒に四肢をさらさぬことだ。蛇の吐く毒液はあたるものを焼きこがす。三つ又の舌はふるえながらくわっと開いた口の中でうごめき恐ろしい口は傷を負わそうと威嚇するが心は不屈の態度を保て。ぎざぎざの歯に獣の冷酷さ、喉から吐き出す毒を気にするな」

(引用部はここまでとする)。

以上引用部でもって裏付けられるとのことに見るようにその著者たる人物に確たる知識が伴っていると推し量れるとの著作が Project Gutenberg 公開の著作、

CURIOUS CREATURES IN ZOOLOGY (1890)

となる([古語としてのワーム→蛇・竜の類]とのことの確度の強さの訴求のためにここでは労をとっての込み入った話をなしている))

ここまで述べてきたように[ワームホール]とは古英語に立脚して見れば、[大蛇やドラゴンの類の穴]を意味する語ともなる。

そうしたワームホールと類似するものが(いいだろうか、[ワームホール]という言葉が生み出された1957「以前に」刊行されたとの作品であるとの)リー・ブラケット小説『リアノンの剣』に[「異世界(過去の火星)との扉でもある」ブラックホール類似物としての顔]をも伴うものとして、そして、[蛇の種族の人間を排しての統治の野望]に関わるものとして登場しているのである(：『リアノンの剣』の元となった小説——出典(Source)紹介の部 65(5)の直後続く部にて言及しているように Sea-Kings of Mars とのタイトルの小説——の初出時期は1949年、その通りのタイトル、The Sword of Rhiannon で世に出

たのは 1953 年であるわけだが、権威筋の大物物理学者ジョン・アーチボルト・ホイラーがワームホールという言葉を用いたのはそれに後れること、1957 年のことであり、同ジョン・アーチボルト・ホイラーがブラックホールという言葉を生み出したとされるのは 1967 年のことである —— 出典 (Source) 紹介の部 65 (10) を参照のこと ——)。

(出典 (Source) 紹介の部 65 (10) はここまでとする)

以上、出典紹介なしてきたことと関わる場所として

[作家ブラケットがワームホール然としたものを「蛇(サーペントのみならずワームとの語とも古語では結びつく生物)の種族」の支配と結びつけている] (小説『リアンの剣』ではその主人公が「リアンという超高度文明に属する存在を幽閉した遺跡」(作中「リアンの墳墓」とされるもの)でブラックホール・ワームホール然としたものを用いて別世界(過去の火星世界)に行き着いたとの設定が採用されている(出典 (Source) 紹介の部 65 (6))わけだが、といった冒険譚にあって主人公が行き着いた先たる異世界にて「蛇の種族が([どこにあるか主人公以外が知らぬとの墳墓]に封じられたリアンのテクノロジーを用いて)間接統治を終えての支配体制の確立 — 一人間の「傀儡」を必要としないとの体制の確立— を企んでいる」との粗筋が採用されている(出典 (Source) 紹介の部 65 (9))

とのことに通ずるようなところとして「何が問題になるのか」は本稿にてのここに至るまでの段でも微に入り細に穿ちの式で典拠を挙げながら問題視してきたことともなる (つい先立っての段で振り返ったところの話、「蛇の一族の支配」を扱った 1920 年代末の pulp 雑誌掲載作品『影の王国』に関わる場所で何が摘示できるようになっているかにつき取り上げた話もその範疇に入ることとなる)。

あとは各自がここでの指し示しひとつからとして「自身を巡る状況 —— 生き残る「意志」があるのなら、抗う必要があることを理解させて然るべきであろうとの状況 —— 」を理解するうえでの一助となしていただければ、と思う次第である。

(直上の段にて述べたことを訴求するための図を挙げておくこととする)



the serpent tribe (including wingless dragons)
="Worm"

"Worm" hole (the term coined by John Archibald
Wheeler in 1957)

it is said that "apple & worm" as seen in the context of topological space time allegory affected the naming of the wormhole.



not serpent but
insect larvae



Forbidden fruits & Serpent
("Worm")

apple

apple incident (tale of Issac Newton)

Newtonian mechanics (1) — Newton's theory of gravitation

Einstein's theory of relativity — Black holes & Wormholes

far-fethced ?

図の上の段にて挙げているのは Project Gutenberg のサイトにて公開されている CURIOUS CREATURES IN ZOOLOGY (1890) ——先立って同著より[ワーム＝竜]にまつわっての記述を引いたとの著作—— に見る[ワーム]としての竜と騎士が死闘を繰り広げているさまを描いた欧州版画となる(おそらく、ウッドカット、木版画となり、先述の『デンマーク人の事績』などに見る竜と英雄の死闘のさまを描いたものと解される)。

中下段。それぞれ 14 世紀に活動のドイツ領域の画家 Meister Bertram マイスター・ベルトラムの手になる画(中段)と 15 世紀活動のルネサンス期イタリアの画家 Paolo Uccello パオロ・ウッチェロの手になるフレスコ画(下段)を挙げてのものとなる。

図解剖を通じて訴求せんとしていることについては識見を有した向きには次のようなものとしてとらえられるか、とも思う。

「ジョン・アーチボルト・ホイーラーが 1957 年に考案したワームホールとの語の命名の背景には

[林檎の虫喰い穴を位相幾何学的に見た場合の観点]

が作用していた、すなわち、虫(昆虫幼虫;ラーバ Larva)が林檎の皮の部分を這いずるよりも林檎を食いやぶった方が林檎の反対方向に素早く到達できるように[ワームホール]は空間上のショートカットを実現するものであるとの観点が作用していたとされる。

だが、ワームホールを

[芋虫に掘り進められた穴]

とのニュアンスで見ずに

[蛇・竜の類の穴]

と解すると[その他の意味での寓意性]が問題になってくる。

その点、聖書では[蛇](サタンと看做す風潮があることは先述である蛇)が[エデンの園]で[林檎]と見られもする果実を食させしめるべくもの誘惑をなしたとの描写がなされている(:[落下]とのニュアンスを英語圏で持つ Fall[墮落]の状況に落とし込まさせるための誘惑をなしたとの描写がなされている)。

[林檎][蛇][林檎による墮落(フォール)]

との伝で述べれば、アイザック・ニュートンが[林檎の落下]によって彼の重力理論を煮詰めたとの説話が伝わっている(それが真実かどうかは別としてそういう話が伝わっている)とのことが想起されもする。

そして、[ワームホール]とは[「重力の」怪物]である(:正確には古典力学、ニュートニアン・メカニクに相対性理論登場に付随する科学知見の修正がなされて時空間の歪みというものゝ顧慮されるようになって登場を見たとの[重力の妙技]としての構造体との側面を帯びた科学概念上の存在である)。

話が[林檎][蛇][フォール(Fall 重力理論と結びつくところの落下・墮落)]との式で

[蛇に由来する穴と見た場合の「重力の怪物」たるワームホール]

と結びつくとき受け取れるようになっているのである。

であるから、ジョン・アーチボルト・ホイーラーというワームホール命名者による命名時のやりようとの兼ね合いでは、である。ホイーラーやりように先行するものであるとのこと既述の特定小説作品『リアンの剣』に見る内容との兼ね合い以前に

「わざと聖書の物語に対する[皮肉]を込めてワームホールとの命名でもなしたか。」

との可能性論とてもが想起されうる」

上は常識的な話ではあるが、だが、そうした[常識的な話]では済まないとのこと
を指し示しているのが本稿である。そして、上にて代弁した常識的見解というものに関
してからして次のようなことが述べられもするとのことと指し示してきたというのが本稿
である。

第一。ワームホール命名者(ジョン・アーチボルト・ホイーラー)による聖書へ
の皮肉的言及があろうとなかろうと[蛇の種族の侵略行為の完遂]と[陽子
ガン(加速器のプロトン・ビームを想起させるもの)をブラックホール然としたも
のと繋ぎ合わせての先覚的言及]とを双方結びつけているとの小説『リアン
の剣』に伴う「奇怪なる」予見性の問題に異動はない。

第二。[エデンの物語を意識してのワームホール命名者の皮肉の介在の可
能性]は常識サイドよりの批判材料にはなりえず、却(かえ)って、本稿にて問
題視している『リアンの剣』に至るまでの一連の関係性の奇怪性を際立た
せるものとなるようなものである。「というのも、」(本稿にての従前の段では委
曲委細尽くしてその指し示しに注力してきたところとして)[エデンの禁断の果
実を巡る誘惑プロセス]と[黄金の林檎を巡るトロイア崩壊に通じた
誘惑プロセス]とが純・記号論的に多角的に接合しているとのことがある、また、
[エデンの禁断の果実]と[多頭の蛇の眷族退治の英雄として知られるヘラ
クレスが追い求めた黄金の林檎]にあっても同文のことが認められるとのこと
がある中で、どういうわけなのか、[ブラックホール生成をなしうるとこ
こ数十年になって考えられ出したLHCを巡る命名規則]が[トロイア][黄金の林檎]
と接合しているとのことがある、それゆえ、([エデンの禁断の果実]⇔[黄金の
林檎][トロイア]との関係性を媒質に)、間接的に[エデンの禁断の果実を巡
る物語]と[ブラックホール生成実験]のことが接合していると述べられるよう
になっている。一もし[ワームホール]との語の命名に[エデンの園の物語]を介
しての皮肉の介在があるとの可能性が可能性にとどまらなければそれも述べら
れるようになっている。— からである(：そして、同じくもの話に関しては接合し
て問題となることがいくつも想起されるようにもなっており、例えば、本稿にて
の先立っての段で解説を講じてきたところの[ジョン・ミルトンの著名古典『失
楽園』のエデンでの誘惑にまつわる描写部]にあつて現代的な意味でブラック
ホール理解と近似するものが「どういうわけなのか」登場を見ている]といった
こと「も」その絡みで問題となることの範疇に入る)。

以上、述べれば、図解部を設けて筆者がどういうことに対する注意喚起をなしたいと
考えているのか、慮(おもんばかり)りいただけるか、とは思う。

ここで明確な意図を持って[抽象的な訴求]をもなすべくも本稿の先の段、[出典紹介の部
50]にあつて、

[「エデンの禁断の果実」をして「林檎」であると看做す欧州人視点が歴史的に存すること]

を示すために挙げていた古典(現行、Project Gutenbergにて公開されているBible
Romanceとの書)よりの記述を再度、引いておくこととする。

" God made her to be Adam's helpmeet. She helped him to a
slice of apple, and that soon helped them both outside Eden.
The sour stuff disagreed with him as it did with her. It has
disagreed, with all their posterity. In fact it was endowed
with the marvellous power of transmitting spiritual stomach
-ache through any number of generations.
How do we know that it was an apple and not some other
fruit?
Why, on the best authority extant after the Holy Scriptures
themselves, namely, our auxiliary Bible, "Paradise Lost," in

themselves, namely, our auxiliary Bible, "Paradise Lost;" in the tenth book whereof Satan makes the following boast to his infernal peers after his exploit in Eden:—

"Him by fraud I have seduced From his Creator, and, the more to increase Your wonder, with an apple."

Yet another authority is the profane author of "Don Juan," who, in the first stanza of the tenth canto, says of Newton:

And this is the sole mortal who could grapple, Since Adam, with a fall, or with an apple."

Milton, being very pious, was probably in the counsel of God. How else could he have given us an authentic version of the long colloquies that were carried on in heaven?

Byron, being very profane, was probably in the counsel of Satan.

And thus we have the most unimpeachable testimony of two opposite sources to the fact that it was an apple, and not a rarer fruit, which overcame the virtue of our first parents, and played the devil with their big family of children. "

————— George William Foote, Bible Romances First Series

(背景知識なき向きを想定しての細かくも補っての拙訳として)

「神はアダムの協力者とすべくもイヴを造り出した。

その彼女イヴはアダムが

[a slice of apple一切れの林檎]

へと向かうよう「助力」し、すぐに両者共々、エデンの外側に行く結果へと「助力」することになった。酸っぱい食べ物はイヴにてそうだったようにアダムの口にも合わなかった。そして、それは彼らに続く世代にても同文であった。実際、それ(林檎)は幾世代を通じて精神の胃痛を媒介する驚くべき力を授けられていたとも言わなければならない。

では、どのように我々はそれが「林檎」であって他の果実ではないと分かるというのか(訳注:これは聖書にエデンの果実が林檎であるなどとの言及がなされていないことを所与の前提においての物言いであると解される)。

何故かと言えば、旧約および新約の聖書の「後の世」にあつて現存しているところの最良の典拠、の中にあつてのまさしくもの我々にとっての聖書補足版とも言うべき(ミルトンの)『失樂園』(訳注:失樂園は17世紀成立の古典)、その第10の巻にてサタンが彼のエデンでのやりようの後、地獄の貴族達に対して、「我は詐欺にて彼(アダム)を彼の造物主の方向より誘惑・墮落させた。そして、君らがより驚くところして[一個の林檎]にてそれを成し遂げたのだ」と勝ち誇って述べているとのことがあるからである。

そして、まだまだのところとして、他の典拠としては『ドン・ファン』(訳注:この場合は同名のフランスの大物文人モリエールの喜劇ではなく、文脈上明らかどころとしてロード・バイロンの詩『ドン・ファン』を指す)の敬虔ではないとのその著者、彼が『ドン・ファン』第1巻にての第10節にてニュートン([万有引力の法則着想と林檎の關係にまつわる俗信]が取り上げられてきたところのニュートン)のことを指しもし

ニュートンはそしてアダム以来、死せる者(ザ・モータル;人間)としてながら(動詞グラッブルをアップルとかけたの掛詞を用いつつ)唯一、[落下](人類の墮落 Fall of manとかけたの[落下]fall)と「林檎」とに取っ組みあつた男である。

と言及しているとのことがある。

(サタンの林檎による誘惑を扱っている『失樂園』をものした)ミルトンはとても信心深かつたとのことであるから、おそらく、その記述は神の助言によってなされているのだろう。他にどのようにしてミルトンは天の国にて行われた長い対話の真正なる型というものを我々に伝えられえただろうか?

ロード・バイロン、(上のニュートンについての言及パートを含む作たる)『ドン・ファン』を生み出したそちらロード・バイロン(訳注:放縦で退廃的な生き方をして最後はギリシャで客死したことで有名な詩人)の方は(ジョン・ミルトンに比して)不信心極まりない人間であつたので、おそらく、サタンの助言を得ていたのであろう。

そして、このように我々は正反対の情報源(ミルトンとロード・バイロン)から最も申し分ないとの証言、「我々の最初の父祖(アダムとイヴ)をして美德を越えるようなことをなさしめ、そして、その子供らの大家族(人類)をして悪魔と戯れることに至らしめたとの果実が「林檎」であつて他のよりもって珍しい果物ではない」とのことについての申し分ないとの証言を得ることになっているのである(であるからエデンの果実は林檎であろう)。

apple & gravity & "worm"

ここまでにて補足部 —— 米国現代文学の牽引者などと評されてきた著名作家カート・ヴォネガットの
手になる小説作品らにみとめられる[相互連関を呈しての(危機的状況にまつわっての)先覚性]のこ
とを訴求するための話が本筋、「主」であるところを他作家由来の文物らを問題視しての「従」たるところ
として展開してきたところの補足部 —— 、すなわち、

「ブラックホールに通底する事柄への言及文物にあつては[先覚性]との絡みで[異常
なる側面]が「往々にして」現われていることがある」

とのことを摘示するための補足部に一区切りをつけることとする。

「長くもなるも、」の脇に逸れての補足の部はここまでとする

最前直上までにあつて

[「長くもなるも、」と事前に明示しての脇に逸れての補足部] (米国現代文学の牽
引者などと評されてきた著名作家カート・ヴォネガットの手になる小説作品らにみとめら
れる[相互連関を呈しての(危機的状況にまつわっての)先覚性]のこを訴求するた
めの話が本筋、「主」であるところを他作家由来の文物らを問題視しての「従」たるところ
として展開しているところの補足部)

を通じもして、

「ブラックホールに通底する事柄への言及文物にあつては[先覚性]との絡みで[異常
なる側面]が「往々にして」現われていることがある」

とのことの摘示に努めてきたわけだが、ここ以降はそうもした補足部表記に一区切りをつけて(補説1と
銘打つての一連の段にての)本題となるところに立ち戻ることとする。

さて、先立つての段では作家カート・ヴォネガット、再述なせば、

[同作家の代表的作品のうちの一作、**Slapstick, or Lonesome No More!** 『スラップス
ティック』(1976) にあつて [ツインタワーを想起させるようなマンハッタンロックフェ
ラー絡みの双子] にかかわるところで「[加速器]によるブラックホール生成問題」を
露骨に想起させるとの「奇怪な」作中設定を採用している —— 関連するところの知識・
情報が科学界にすらなかったといった時分と同じくものを露骨に想起させるとの「奇
怪な」作中設定を採用している —— との人物」

にして、かつ

[同作家代表的作品のうちの一作、**Cat's Cradle** 『猫のゆりかご』(1963) でもって後
の加速器リスク問題で科学者らに用いられることとなった特殊用語([アイスナイン])を
生み出していた(結果的に[生み出していた]とのことになった) との人物]

ともなっている同カート・ヴォネガットが1959年に世に出していた小説 **The Sirens of Titan** 『タイタンの
妖女』に関して次のことらを問題視するとしていた。

第一。

「異星人に推進された人類「育種」の究極目標が [くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助] であった」

という同作の粗筋にあって気がかりとなるところとして

[地球は [地球質量] から見てブラックホールに換算すると cm(センチメートル) 単位のものにしかない]

との言われようがなされている —— 換言すれば、「地球をそうしたサイズに圧縮すればブラックホールができあがる」とされている —— とのことがある。

第二。

[小説『タイタンの妖女』で重視されている時間等曲率漏斗(なるもの)の終点が赤色巨星ベテルギウスであったと設定付けられている]

とのこともが [ブラックホール] との絡みで不気味に映るとのこと「も」またある。

知識を有していないとの向きから見れば [気まぐれ] を超えての意味合いでは [『タイタンの妖女』に対するベテルギウス関連の設定の付与] の理由が「ない」とも思われるところであろうが、

[ベテルギウスの赤色巨星としての終焉が「小説『タイタンの妖女』刊行より後の日 — 時期的先後関係が重要となるところにての [後の日] — にて現実世界にて導き出された知見より」「近々の」ブラックホール化であるとの見方が (人類に災厄をもたらしかねない [ガンマ線バースト] との現象に関わる場所として) 目立って問題視されるに至っている]

とのことがあり、また、と同時に、

[『タイタンの妖女』にてベテルギウスを終点としていると(何故なのか) 設定付けられている [時間等曲率漏斗] というものが [くろぼち(・)ひとつよりなる親書を他星系に届けるための人類の育種] と当該フィクションの中で「濃厚に」結びつけられている]

とのこと「も」があり、もって [相応の寓意性] を感じさせる、それがゆえ、 [不気味に映る] とのことがある。

(:整理すれば、[くろぼち(・)マークのみよりなる親書の伝達のための人類育種] と

[近々のブラックホール化を伴っての現象の発現可能性が (小説の刊行後にて) 目立って問題視された天体] (時間等曲率漏斗のゴールとしてのベテルギウス) とが結びつけられていることにつき、(地球相当の質量をブラックホールに引き直すと [cmメートル単位のブラックホール] が導出されるとの現代物理学にての指摘のされよう (先述) も加味して)、奇怪性が感じられると述べたいのである (お分かりだろうとは思うのだが、「『タイタンの妖女』刊行の折にはベテルギウスのブラックホール化が目立って問題視されるような事情 (ガンマ線バーストという現象に関わる事情) が取り沙汰されていなかった —— 時期的先後関係の問題も続いている段にて遺漏なくも解説試みる —— がゆえに奇怪である」とも述べているのである)。

第三。

「(上の第一、第二のことに加えて) カート・ヴォネガットの『タイタンの妖女』は同男由来の『タイムクエイク』(1997) という他小説と一緒に見た場合に [911 の事件の前言をなしているが如く小説] に化けるようなものであるということ「も」ある」

とのことがある (その「911 の事件の前言をなしているが如く小説に化ける」との側面が [偶然の賜物] ではないから「問題になる」と申し述べたきところとして、である)。

以上のことらのうちの第一、第二の点、すなわち、

第一。

「異星人に推進された人類「育種」の究極目標が[くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助]であった」

という同作の粗筋にあってきがりとなるところとして

[地球は[地球質量]から見てブラックホールに換算するとcm(センチメートル)単位のものにしかない]

との言われようがなされている——換言すれば、「地球をそうしたサイズに圧縮すればブラックホールができあがる」とされている——とのことがある。

第二。

[小説『タイタンの妖女』で重視されている時間等曲率漏斗(なるもの)の終点が赤色巨星ベテルギウスであったと設定付けられている]

とのこともが[ブラックホール]との絡みで不気味に映るとのこと「も」またある。

知識を有していないとの向きから見れば[気まぐれ]を超えての意味合いでは[『タイタンの妖女』に対するベテルギウス関連の設定の付与]の理由が「ない」とも思われるところであろうが、

[ベテルギウスの赤色巨星としての終焉が「小説『タイタンの妖女』刊行より後の日——時期的先後関係が重要となるところにての[後の日]——にて現実世界にて導き出された知見より」「近々の」ブラックホール化であるとの見方が(人類に災厄をもたらしかねない[ガンマ線バースト]との現象に関わるところとして)目立って問題視されるに至っている]

とのことがあり、また、と同時に、

[『タイタンの妖女』にてベテルギウスを終点としていると(何故なのか)設定付けられている[時間等曲率漏斗]というものが[くろぼち(・)ひとつよりなる親書を他星系に届けるための人類の育種]と当該フィクションの中で結びつけられている]

とのこと「も」があり、もって[相応の寓意性]を感じさせる、それがゆえ、[不気味に映る]とのことがある。

とのことらに関しては「既に」典拠となるところを十全に指し示している(：最前まで筆を割いてきたとの[「長くもなつての」脇に逸れての補足部]、そちら補足部に入る前の段にての**出典(Source)紹介の部 65(3)**と**出典(Source)紹介の部 65(4)**と振つての部で典拠を指し示している)。

そのため、ここ以降では解説未了であったところ、

第三。

「(上の第一、第二のことに加えて)カート・ヴォネガットの『タイタンの妖女』は同男由来の『タイムクエイク』(1997)という他小説と一緒に見た場合に[911の事件の前言をなしているが如く小説]に化けるようなものであるということ「も」ある」

とのことがある(その「911の事件の前言をなしているが如く小説に化ける」との側面が[偶然の賜物]ではないから「問題になる」と申し述べたきところとして、である)。

とのことにまつわる論拠を順次・段階的に呈示していくこととする。

その点、本稿にての先立っての段では「委細解説は後の段にてなす」と申し述べたうえで上の**第三の点**について、次のこと、述べていた。

カート・ヴォネガット『タイタンの妖女』にあつての [911の前言事象] との兼ね合いでは次の a. から d. のことが問題になる。
--

a. (まずはそれだけ述べれば『こじつけにすぎない』と受け取られようところからはじめ
るが)、『タイタンの妖女』は極めて目立つように作中冒頭部にて
「一時間ごとに太陽系は四万三千マイルずつヘラクレス座の M13 球状星団へと近づ
いている——それなのに、進歩なんてものはないと主張する非順応者がまだなくな
らない」

との

[意味不明なる「暗号」がかった序言]

からはじまる作品となっている(序言としての同フレーズのために設けられた部が「何
故なのか」不自然に別個に設けられている作品ともなる)。

それにつき述べるが、911 の事件が

[ヘラクレスの冒険(殊に、の中の、11 番目の冒険)およびそこにて登場してくる黄金
の林檎]

と「どうしてなのか」「なぜなのか」が問題となることとして多層的に結びつくように
なっているというのが長大なる本稿にて指し示さんとしていることの一つとなっている
(本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 37](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 37-5](#) を包摂す
る部位はそのための一例紹介の部となる。尚、同じくものこと ——「どうしてなのか」
「なぜなのか」が問題となることとして 2001 年 9 月 11 日に発生した事件とヘラクレス
の 12 功業(殊にその中の 11 功業)との間につながりがあるとのこと—— については
本稿にての続いての段にても他例としてどういうことがあるのか事細かに具体例を挙
げて解説をなす所存である)。

b. [ヘラクレス座の M13 星団に地球が近付いている]との別個にて設けられている書
き出し部ではじまる小説作品『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』こと『タイタンの妖女』
に登場する艶やかな女らを象(かたど)った三対の像 ——それらの像が原著題名に
見る[サイレンズ](妖女ら)に仮託されているとのこと、先述の像—— を想起させると
の作中「内」小説が『タイタンの妖女』刊行後 40 年近くを経て刊行されたヴォネガット
の他小説『タイムクエイク』の中に認められる『B-36 の三姉妹』との「フィクションの
中のフィクション」となる。

そちら不自然性を感じさせるタイトルの『B-36 の三姉妹』という作中「内」小説 —
—『B-36 の三姉妹』などというタイトルが「ぽっと出」で出てきた自然なるものと考え
る向きはあまりないかと思う—— に見る [B-36] とは米国の爆撃機のことを指す
(B-29 で有名なボーイング社製の一連の爆撃機シリーズに包摂される機種となる)。

その[B-36 の三姉妹]に付されての [B-36] が (作中内小説『B-36 の三姉妹』
を登場させている) ヴォネガット小説作品『タイムクエイク』内で[B-29] (東京大空襲
で用いられ、また、原爆投下をなしたことで有名な爆撃機)と多重的に結びつけられ
ているとのことがある。

その点、「わざと」[B-36] (原子炉搭載型飛行機[NB-36H]を含む合衆国ボーイ
ング社製の通し番号付きの爆撃機シリーズのうちの一機種)と[B-29] (核兵器を対
人兵器として史上唯一使用したとの局面にて用いられた合衆国ボーイング社製の通
し番号付きの爆撃機シリーズのうちの一機種)が結びつけられている節がある中でそ
れぞれ両機種 —— [B-36] と [B-29] —— の数字各桁を合算すると[9] (3+6)
と[11] (2+9) が別個に出てくることすらもが計算されてそうになっている節がある。すな
わち、[9][11]という数値に意識誘導するような側面がある。直下続けて述べるところ
のヴォネガット小説『タイムクエイク』の中に見受けられる特性からそうも述べられるよ
うになっている(:それにつき、理由となるところを続けての段でさらに述べようとも『こ
じつけがましい far-fetched こと限りなし』と受け取られるところか、と思われもするよ
うなところがある。しかし、この話には航空史にあってエポックメイキングなる一機種、B-
36 の亜種の [原子炉搭載型飛行機; Nuclear-powered aircraft] たる NB-36H と

同文に航空史にあってエポックメイキングなる一機種とされている[原子炉搭載型飛行機]たる **Tu-119**(ソ連製)との関係性が想起されるということ「も」ある——いいだろうか。**B-36**と対応するような機体としての **Tu-「11」「9」**である。その一事からして[9](3+6)と[11](2+9)に意を向けんとすることを笑殺することは出来ぬことになろうか、とは思ふ。[**B-29**][**B-36**]の双方および[Tu-119]が[航空工学と核物理学(の兵器への応用)の観点で目立っての機種]であったとの共通項も関わっている中にての話として、である——)。

c. 先立っての段にて言及のように『タイタンの妖女』(1959年初出のヴォネガット作品)では[時空間の異常構造体](時空間のゲートとなってもいる Chrono-synclastic-infundibulum 時間等曲率漏斗なるもの)が取り上げられて[時空間の異常現象]が強調されているわけであるが、[**B-36**の姉妹]なる奇怪なるタイトルの作中内小説を[**B-29**]と露骨に結びつけて登場させている『タイムクエイク』(1997年初出のヴォネガット作品)にも[同様同文のこと]が当てはまり、それは[時間を過去に巻き戻しての追体験をさせるとの時空震動]こと[タイムクエイク]絡みのこととなる。

小説『タイムクエイク』ではそのタイムクエイク(時間震動)の結果、作中人物らは皆、過去の出来事の強制的追体験をなすことになる——そして、[二〇〇一年夏]にあってその追体験が振り返られる——との作中設定が採用されている(いいだろうか。1959年初出の『タイタンの妖女』と作中内小説[**B-36**の姉妹][時空の乱れ]との観点で意図的に結びつけられている節がある『タイムクエイク』は1997年初出の小説であるにもかかわらず[2001年夏に向けての追体験]が重要な作中モチーフになっているのである)。

さて、現実の世界にて

[二〇〇一年夏]

に起こったのは911の事件である(:日本における通念上の理解では2001年のかの事件が発生したとの[9月]は秋の頃となるわけだが(9月となれば時候の挨拶でも「新秋快適の候」といった筆の運びがなされるように[秋の頃]となるわけだが)、ヴォネガット故地の米国では6月から9月をして[夏]と見る風潮がある——については細かきことだが、(手前が示したきことに関わるために)英文 Wikipedia[Summer]項目よりの原文引用をこの場にてなしての指し示しをなす;(以下、英文 Wikipediaよりの引用をなすとして) In the United States, summer is often fixed as the period from the solstice (June 20 or 21, depending on the year) to the fall equinox (September 22 or 23, again depending on the year)「米国にて夏は夏至(6月20あるいは21日・年度に応じての異動あり)から秋分(9月22日または23日・同様に年度に応じての異動あり)の期間と特定される風がある——)。

その「二〇〇一年夏の」事件——911の事件——の後に現実の世界では相応の政治屋(「質的に確な人間ではない」とよく言われているポリティカル・マフィアにして「911の事件の如きことが起こりうることを事前に知っていた」と諸方面で唱えられている政治屋/ワールド・トレード・センター警備会社にその人脈が関わっていたことが知られ、また、と同時に、サウジのビン・ラディン一門ともビジネスパートナーだったとのことがよく知られている——吐き気を催す程に頭と人格の具合がよろしくはないとのアメリカ人の[標本]らが挙げられてもいるマイケル・ムーアのドキュメンタリー映画『華氏911』ですら取り上げられていることである——との政治屋にして「双子の」娘の父親でもあるとの政治屋/合衆国43代大統領たる政治屋)が率先して[湾岸戦争の再演]を煽り主導したとの歴史理解がなされているわけだが、その[湾岸戦争の再演]に遡ること、[第一次湾岸戦争]の勃発日時は
[一九九一年一月一七日]

となっている。

対して、カート・ヴォネガットの小説『タイムクエイク』では「まずもって」「二〇〇一年夏」—タイムクエイクに起因する追体験が振り返られるとの「二〇〇一年夏」—にて実演の「「焼きはまぐり」パーティ」に注意が向けられもし、次いで、その六か月前、二〇〇一年二月十三日から「一九九一年二月十七日」にかけての10年間の追体験を無理矢理なさしめるタイムクエイクが発生したことに対する振り返りがなされるなどの「どういう意図でなのか」の不自然極まりない粗筋設定が採用されている(後に出典紹介も当然になす)。一九九七年初出の小説にて何故、「二〇〇一年夏の焼きはまぐりパーティ」に注意を向けるとのやりようがなされているかも「不可解なところ」と述べるべきところか、ととらえられるが(「表向きの理由は、」当該作品に作中登場人物として登場する作家が作家保養施設で二〇〇一年夏に催される予定のパーティにゲスト出演しそのゲスト出演を念頭に本作をものしているからであるなどの言及がなされていることに求められもする)、「より不可解なのは、」そうした二〇〇一年夏の焼きはまぐりパーティに対する注意喚起がなされつつもその半年程前を起点に発生するとされる時空間の変動による追体験ループにつき、「ループ終端ポイントたる二〇〇一年二月一三日の十年前のループのスタートポイントが一九九一年二月一三日ではなく、「どういうわけなのか」、四日ずれて一九九一年二月一七日とされている」

ことである。

ここで着目すべきは

「一九九一年二月一七日」(二〇〇一年夏の焼きはまぐりパーティにて振り返られることになった再現ループのスタートポイントの日付け)

というのが湾岸戦争の勃発日時たる「一九九一年一月一七日」と丁度一か月の差分をきたしての日付けであるとのことである。

ここで911の事件(米国基準で見れば、「二〇〇一年「夏」の事件」)が契機となって大量破壊兵器の保持とテロ支援を口実に開始された征戦、二〇〇三年にて勃発を見た戦争、イラク戦争の別称は「第二次湾岸戦争」となっていることが想起されもする。

従って、二〇〇一年夏に注意が向けられた直後、「二〇〇一年の二月から起こることになったタイムクエイクの結果、二〇〇一年二月一三日から一九九一年二月一七日(現実世界では丁度一か月間ほどずれて第一次湾岸戦争が実演されている)に至るまでの出来事」の再演がなされるなどと言及がなされての筋立ての小説を作家に書かshめていた力学として「前言をなす」とのものが介在していた「とも」想起させられもする(：同じくものことについては単線的に見るべきことでないといった性質のことでもある。その点、「ヘラクレス座への接近に注意を向けての冒頭文」からはじまる『タイタンの妖女』(1959)の原著タイトル The Sirens of Titan に見る妖女(サイレン)ら三人一対の存在と結びつく作品と解される『タイムクエイク』(内作中小説『B-36の三姉』)にあつて「B-36」と「B-29」とが「わざと関係付けさせられている」といった記載が当該作品(『タイムクエイク』)にて見受けられる中、そのことより「Tu-119」との結びつきを観念させもするものであるとのことがあり(上の **b.** の段にて述べていることだが、続いての出典紹介部にてそういうことが述べられることを示すべくもの具体的典拠も無論挙げることとする)、また、と同時に下の **d.** のようなことも顧慮する必要があるとのことである)。

d. 小説『タイムクエイク』では上の **c.** にて言及した日付表記上の問題と結びつくような形で「9」や「11」(や「12」)との数値を想起させる描写がなされているとのこと「も」がある。

以上のことらの出典を(要素要素に分解して網羅的に)これより挙げることとする。

まずもって、(上にて **a.** から **d.** と分割して示していることにある) **a.** と振ってのことに関する出典紹介をなすことから始める —ヘラクレスが本稿の先の段にて述べているところの多くの事由ら(出典(Source)紹介の部 34 から 出典(Source)紹介の部 63(4) に至るまでの多くの出典紹介部で多角的に摘示しようと試みてきたところの事由ら)から「911 の事件(の前言事象)」および「LHC 実験」の双方と「それら双方を多重的に結びつけながら」関わっているとの「留め金」となっている存在であることを意識しての話となる——。

出典(Source)紹介の部 65(11)



SOURCE

65(11)

ここ 出典(Source)紹介の部 65(11) にあつては[布石]としてまずもって

[**a.** 小説作品『タイタンの妖女』が「極めて目立つように」[ヘラクレス座の M13 球状星団に地球は近づいている]との書き出しではじまる作品となっている]

とのことにまつわつての典拠紹介をなす(無論、同じくものが真たることをそれ単体だけ示しても何の意味もなさないとは認識しつつも、である)。

(直下、小説『タイタンの妖女』(早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第 5 刷のもの)の目次部前の冒頭部記載内容よりの原文引用をなすとして)

「一時間ごとに太陽系は四万三千マイルずつヘラクレス座の M13 球状星団へと近づいている——それなのに、進歩なんてものはないと主張する非順応者がまだなくなるらない」

(引用部はここまでとする —※—)

(※原著 The Sirens of Titan にての目立っての序言の部、そちら原文テキストを挙げれば、“ **Every passing hour brings the Solar System forty-three thousand miles closer to Globular Cluster M13 in Hercules — and**

still there are some misfits who insist that there is no such thing as progress.” との箇所が該当するところとなる。尚、小説『タイタンの妖女』序言表記として表記のとおり書かれようがなされていることは海外にてそこそこに知られているようであり、現行の Wikipedia [Messier 13] 項目 ([M13 星雲]項目) にあつての Literary references [著名文物にあつての M13 に対する言及] の節にあつても [メシエ 13 (すなわち、18 世紀フランス天文学者 シャルル・メシエ作成のカタログに載っている M13 球状星雲) に対する言及事例] としてカート・ヴォネガット小説 The Sirens of Titan にて同じくもの文言にての言及がなされていることが紹介されてもいる。さらに述べれば、ヘラクレス座の [M13 球状星団] の中枢にあるの「も」 ([星雲] [球状星団] (Globular cluster) とは自然じねんとしてそうしたものだとも言われるのだが) [ブラックホール] であるとされている。疑わしきは M13, black hole など入力して検索、ご自身で英文の天文学関連のまともなウェブページに当たっていただきたい)

(出典 (Source) 紹介の部 65 (11) はここまでとする)

次いで、(上にて a. から d. と分割して示していることにあつての) b. と振つてのことに関する出典紹介を要素要素毎に分解して複数の出典紹介セクションを介してなすこととする。

出典 (Source) 紹介の部 65 (12)



SOURCE

65(12)

ここ出典 (Source) 紹介の部 65 (12) にあつてはまずもつて

[b. [時間等曲率漏斗] とのかたちで [時空間の歪み] がテーマとされている The

Sirens of Titan こと『タイタンの妖女』(1959)にはその作品由来として[三対の女らの像]が登場する。その三組ワンセットのサイレンらの像を想起させるような三姉妹を描いての『B-36の三姉妹』という作中「内」小説がヴォネガットの他小説作品、1997年に世に出た『タイムクエイク』——『タイタンの妖女』のように[時空間の歪み]がテーマとされている小説であり、かつ、ヴォネガット従前作品のモチーフを複合的に踏襲しているとの作品でもある——の中に登場を見ており、その『B-36の三姉妹』との兼ね合いで爆撃機[B-36]と[B-29]への注意喚起がなされていると述べられるようなことがある]

とのことであつての

[小説『タイタンの妖女』にあつて [タイタンに据え置かれている [三対のサイレン] の像] (訳書では[妖婦]といったニュアンスで[サイレン]が[妖女]と訳されている)が登場している]

との点にまつわたつての典拠紹介をなす(無論、これまた同じくものが真たることを単体で示しても何の意もなさないと認識しつつである)。

(直下、訳書『タイタンの妖女』(早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第5刷のもの)にての
393 ページよりの原文引用をなすとして)

八フィートの深さの水の底には、タイタンの三人の妖女(サイレン)、今を去るむかし好色なマラカイ・コンスタントに提供された三人の美しい女性たちがいた。それはサロがタイタンの泥炭(ビート)で作った彫像だった。サロの作った二百万個の彫像のうち、この三つだけが本物そっくりに彩色されていた。ラムフォードの宮殿の東洋風の壮麗な結構の中で重要性を持たせるためには、それを彩色することが必要だったのである。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、原著 The Sirens of Titan にての表記引用部に対する原文記載は(以下、引用なすところとして) “ **In the bottom of the pool, in eight feet of water, were the three sirens of Titan, the three beautiful human females who had been offered to the lecherous Malachi Constant so long ago. — They were statues made by Salo of Titanic peat. Of the millions of statues made by Salo, only these three were painted with lifelike colors. It had been necessary to paint them in order to give them importance in the sumptuous, oriental scheme of things in Rumfoord's palace.** ” (オンライン上より文言特定できるところの原著よりの引用はここまでとしておく)となっている)

(**出典(Source)紹介の部 65(13)**はここまでとする)

上にての引用部でもってして

[タイタンの三人の妖女(サイレン)の像が『タイタンの妖女』の表題由来になっている]

とのこと、ご理解いただけるか、とは思う（“ **In the bottom of the pool, in eight feet of water, were the three sirens of Titan, the three beautiful human females who had been offered to the lecherous Malachi Constant so long ago.** ”（訳として）「八フィートの深さの水の底には、タイタンの三人の妖女（サイレン）、今を去るむかし好色なマラカイ・コンスタントに提供された三人の美しい女性たちがいた」と記載されているわけだが、そこに見る the three sirens of Titan がそのまま The Sires of Titan (『タイタンの妖女』原題)との表題に転用されていること、ご理解いただけるか、とは思う)。

さらに (a. から d. と分割して示していることにある) b. と振ってのことに関する出典紹介を続けることとする(直下出典紹介部)。

出典 (Source) 紹介の部 65 (13)



SOURCE 65(13)

ここ出典 (Source) 紹介の部 65 (13) には、次いで、

[b. [時間等曲率漏斗]とのかたちで[時空間の歪み]がテーマとされている The Sirens of Titan こと『タイタンの妖女』(1959) にはその作品由来として[三対の女らの像]が登場する。その三組ワンセットのサイレンらの像を想起させるような三姉妹を描いての『B-36の三姉妹』という作中「内」小説がヴォネガットの他小説作品、1997年に世に出た『タイムクエイク』——『タイタンの妖女』のように[時空間の歪み]がテーマとされている小説であり、かつ、ヴォネガット従前作品のモチーフを複合的に踏襲しているとの作品でもある—— の中に登場を見ており、その『B-36の三姉妹』との兼ね合いで爆撃機 [B-36] と [B-29] への注意喚起がなされていると述べられるようなことがある]

とのことにある

[小説『タイムクエイク』では『B-36の三姉妹』という作中内小説が登場を見ており、同作中内小説に関わるどころとして爆撃機 [B-36] [B-29] への注意喚起がなされていると述べられるようになっている]

との部位に関する出典を挙げることとする。

『タイムクエイク1』のなかで、キルゴア・トラウトは原子爆弾に関する短篇を書いた。タイムクエイクのために、彼はそれを二度書く羽目になった。思い出してほしいが、タイムクエイクのあとにつづいた十年間のリプレイで、彼とわたしは、そして、あなたも、ほかのあらゆる人間も、一九九一年二月十七日から二〇〇一年二月十三日まで自分がやったありとあらゆることを、もう一度くりかえさなければならなくなったのだ。

…(中略)…

トラウトはその短篇に、『笑いごとではない』という題名をつけた。

…(中略)…

『タイムクエイク1』の結末、ふたたび自由意志のスイッチがはいった二〇〇一年夏の焼きはまぐりパーティーで、トラウトはすべての自作の小説、彼がびりびりに破いてトイレへ流したり、ごみの散らかる空き地やなにかに捨てた原稿のことをこう喝破した——「あぶく銭は身につかぬ」

…(中略)…

物語はこうだ。原子爆弾が広島に落とされ、つぎにもう一発が長崎に落とされたあと、《ジョイズ・ブライド》はさらにもう一発を横浜の"二百万の黄色いちび野郎ども"の頭上に落とす予定だった。その当時、黄色いちび野郎どもは、"黄色いちび野郎ども"と呼ばれていた。なにしろ戦時中である。トラウトは第三の原子爆弾をこんな風に描写している——「中規模のジュニア・ハイスクールの地下室のボイラーに負けないほどでっかい、むらさき色のマザーファッカー」

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

※直上にての原文引用部に見る筋立てについて解説をなしておく。

「ややこしい」と受け取られるかもしれないが、上の『タイムクエイク』よりの引用部にあっては

[二〇〇一年夏の焼きはまぐりパーティー(注:911の折を想起させる時期と先にも言及の時期)にあって[自由意志のスイッチ]が入る]

などとの書きようがなされている点について、[自由意志のスイッチ]が入る前のこととして、

[一九九一年二月十七日(注:第一次湾岸戦争の勃発からちょうど一か月前の日付であると先に言及しもしたところの日付)から二〇〇一年二月十三日までの一〇年間がループ(追体験)される]

などとされ、その[ループ期間]の中で、(小説『タイムクエイク』にての主役級登場人物たるキルゴア・トラウトという架空の作家によって二度書きされた・二回執筆された作品としての)[第三の原爆投下を扱った「架空の」小説](『タイムクエイク』の中に登場する作中内小説)についての言及がなされているとのかたちとなっている ——(尚、そちら引用

部に見る[第三の原爆投下を扱った小説]は『タイムクエイク』の中に登場していること、先に言及した作中小説『B-36 の小説』そのものではない。別の作中小説、『B-36 の小説』の[直前部]にて挙げられている『笑いごとではない』という作中内小説がその[日本に対する第三の原爆投下を扱った小説]である(：『B-36 の小説』という小説『タイムクエイク』内作中小説と[連続言及]されるかたちで日本に対する第三の原爆投下について扱った架空の小説作品『笑いごとではない』が同じく『タイムクエイク』には登場しているわけである)。また、さらに述べておけば、上の引用部では原爆被害者を愚弄しているような描写「も」なされているが、問題となる部がそのような描写を除外すると文意通じなくなるかたちで表出を見ているために不快な部を取ってもカットせずにの引用をなしたとのこと、ご理解いただきたい(低劣な感情論を展開する、憎しみを煽るといった意図はこの身には元よりないこと、お含みいただきたい)——。

(加えて、直下、邦訳版『タイムクエイク』(早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第2刷のもの)の p. 34—p. 35(上の引用部にほとんど間を経ずに続く部)よりの原文引用をなすとして)

ここに『タイムクエイク 1』の死骸から切りとったべつの短篇の出だしがある。題名は『B-36 の三姉妹』という。「カニ星雲のブーブーという家母長制の惑星に、B-36 という姓の三人姉妹が住んでいた。彼女たちの姓が、腐敗した指導者を持つ国の民間人の頭上へ爆弾を落とすように設計された地球の飛行機の名前で同じであったことは、たんなる偶然の一致としか思えない。地球とブーブー星は、おたがいに交信さえできないほど遠く離れているのだから」

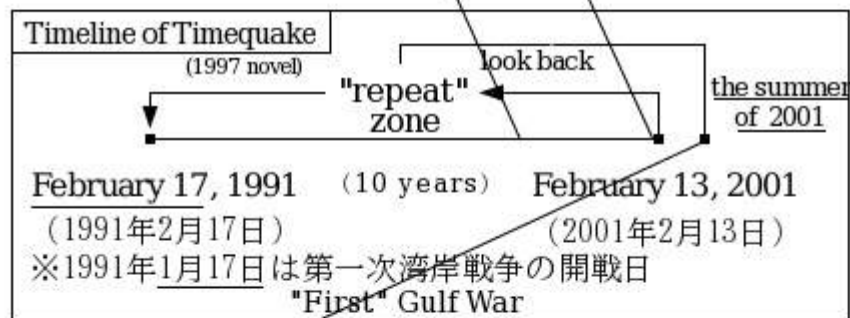
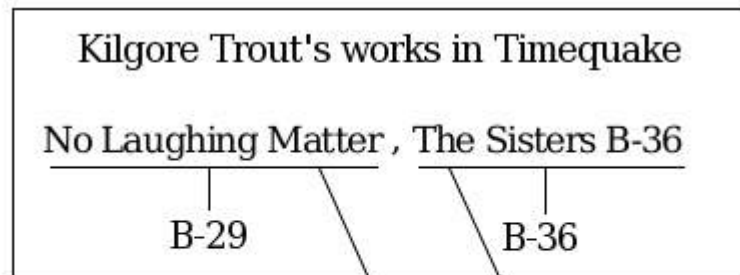
(訳書よりの引用部はここまでとする)

上にて引用なししているパートは[第三の原爆投下]を扱った『タイムクエイク』作中小説たる『笑いごとではない』に次いで『B-36 の三姉妹』という(本稿にて問題視している)作中小説——架空の作家キルゴア・トラウトの手になるとの設定の作中小説——が持ち出されていること、そのことを示す書き出しの部となっている。

そちら書き出し部では、(上にて引用しているように)、

「B-36 という姓の三人姉妹の姓が[腐敗した指導者を持つ国の民間人の頭上へ爆弾を落とすように設計された地球の飛行機の名前で同じであったこと]は偶然としか言いようがない」

との表記がなされているわけだが、その直前に言及されている作中小説の流れ(横浜にて第三の原爆が投下されるとの流れ／上に引用なししたところの訳書 p.23 から p.24 の内容)からして[B-36]という名称の使用はその実、[B-29](原爆投下をなした爆撃機)と結びつけてのわざとの挙動であると——(「[B-36]という姓は腐敗した指導者を戴く国に爆弾を落とした爆撃機と同じであるが[偶然]としか言いようがない」などとヴォネガットによって表記されているわけだが)——「当然に」推し量れるようになっている。



the terminal node of
1997 novel, Timequake

[the 2001 summer clam bake party that
both Kurt Vonnegut and Kilgoa Trout
took part in] (of 1997 novel, Timequake)

(出典 (Source) 紹介の部 65 (13) はここまでとする)

話を続ける。

次いで、直上までの段にて、にまつての典拠紹介をなしてきたところの (a. から d. と分割して示していることにあつての) b. と振つてのことにダイレクトに関わるところとして

「カート・ヴォネガットの長編分野の最終作であり、その集大成とされる『タイム・クエイク』については[時空間の歪み]との兼ね合いで[ヴォネガットの初期の名作とされる『タイタンの妖女』(土星の衛星タイタンに置かれた「三対の」艶やかな女ら Sirens の彫像が作中表題になっているとの小説)に端緒を見ての流れ]との接合性が観念されるようになってる」

との点「にも」関わるところとして以下のような

[兵器開発にまつわる動向]

があることを紹介しておく。

(直下、[B-36の亜種たるNB-36Hが[原子炉搭載航空機]であったこと]について言及しているとの和文ウィキペディア[原子力飛行機]項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

戦略爆撃を原子力動力化するWS-125(WS=Weapon System)を立案した米空軍では、**遮蔽性能検証用の実験機NB-36Hが実際に試作され、模擬原子炉を搭載して通常動力による飛行試験も行われた**が、データ収集のみに終わった。本格的に原子力動力を搭載するX-6計画でもB-36改造機を用いる計画であった。機内にP-1小型原子炉を搭載し、取り出した熱でJ47改造のX39原子力ターボジェットエンジン4基を駆動し推進するものである。熱交換には金属ナトリウムによる間接冷却法(高速増殖炉でも用いられる)が当初検討されたが、技術上・重量上の問題から、大気による直接冷却法が次善策として浮上した。これは吸入した大気を炉心に導入し、熱膨張させ噴流として推進する計画だったが、放射能汚染が発生するなど余りに危険なため机上案のみで放棄された。

(引用部はここまでとする)

(直下、[B-29が太平洋戦争末期にあつて対日本戦に用いられた爆撃機(かつ原爆投下機体)となっている]とのこと、また、[枢軸国のうち、ドイツに対してはより旧型のB-17が戦線投入されていた]とのことについての和文ウィキペディア[爆撃機]項目の現行記載内容よりの引用をなすとして)

ボーイング B-17 フライングフォートレス(空の要塞)

一万機以上制作された第二次大戦初期のアメリカの主力爆撃機。4発の大型機体で、5tに達する爆弾搭載量と4000kmに達する航続距離、充実した防衛火器はこの頃の世界随一。排気タービン採用により高空での飛行性能がよく、迎え撃つ枢軸国を悩ませた。ドイツの工業地帯を昼間爆撃したため損害も多かった。

ボーイング B-29 スーパーフォートレス(超要塞)

1944年のアメリカ軍のサイパン占領後、サイパンの飛行場より日本本土に飛来し、焼夷弾による絨毯爆撃で日本の諸都市を焼き尽くして継戦能力を奪い、1945年8月に広島市と長崎市に原子爆弾を投下した機体。

(引用部はここまでとする。上のウィキペディア[爆撃機]項目現行記載内容よりの原文引用部にも端的に記載されているように枢軸国のうち、ドイツへの爆撃(ドレスデン爆撃がことに有名)に対してはB-17が用いられ、大戦も末期に近付いてからの太平洋戦線での爆撃にはB-29が用いられていたということが知られている。従って、[B-29]とは[東京大空襲]や[原爆投下]などとの絡みで殊に有名な機体とも述べられる)

以上、The Sisters B-36『B-36の三姉妹』に見るB-36及びB-29についての説明のされよう([B-36]はある種エポックメイキングであったとの原子炉搭載試行機種を含むものであり、[B-29]は東京大空襲と原爆投下で有名な機種となっているとの説明のされよう)につき取り上げた。

そのうえで書くが、(くどくも申し述べるところとして)、ここ本稿では米国文壇寵児にして現代アメリカ

文学の代表的担い手とされていた(既述)のカート・ヴォネガットの小説『タイムクエイク』(1997年刊行)の中で

[2001年夏のやきはまぐりパーティ](現実世界で911の事件が起こった折たる2001年晩夏を想起させるような1997年小説の中で言及されているやきはまぐりパーティ)

への注意喚起がなされたうえで

[1991年2月17日(注:第一次湾岸戦争の勃発からちょうど一か月前の日付)から2001年2月13日までの出来事が「追体験」されるとの10年間のループ]

への言及がなされているとのことにつき[第一次湾岸戦争への再演](後に発生したイラク戦争の実現)との文脈で911の意識誘導がなされている可能性を問題視しており、それと関わるところで

[B-36(原子力・原子炉と「特段に」結びつくボーイング社製の爆撃機)]
[B-29(原爆投下と「特段に」結びつくボーイング社製の爆撃機)]

と関連する事柄らが問題となると訴求したいのである。

すなわち、『タイムクエイク』内の作中小説で目立てさせしめられている際立っての数値使用規則から9(3+6=9)11(2+9=11)との数値規則が焙りだされてくるとの事を訴求したいのである。

などと述べても、「無論にして」、

『話をつなげるために無理に数遊びをしているだけではないか。穿ちすぎ far-fetched であるように見える』

と思われる向きもあるだろうから述べておくが、次のこと「をも」押さえておくべきであると述べたい——作家ヴォネガットがどうして[奇怪な設定]をわざわざ採用したのか(ないしは採用させられたのか)よく考えてみるべきであると再強調しつつも、次のこと「をも」押さえておくべきであると述べたい——。

(直下、和文ウィキペディア[原子力飛行機]項目にての現行記載内容よりの部分的引用をなすとして)

ソ連も原子力飛行機を開発しており、**改造 Tu-95 ターボプロップ戦略爆撃機に小型原子炉を搭載した Tu-119 で試験していた**。Tu-119 は、…(中略)…実際に飛行中に原子炉を稼働させ、1965 年に初飛行したといわれている。一部情報によれば 48 時間連続して原子炉を稼働させることに成功したとされ、乗員は被曝せず生還できたというが、実際はその大半が数年のうちに亡くなったようである

(引用部はここまでとする)

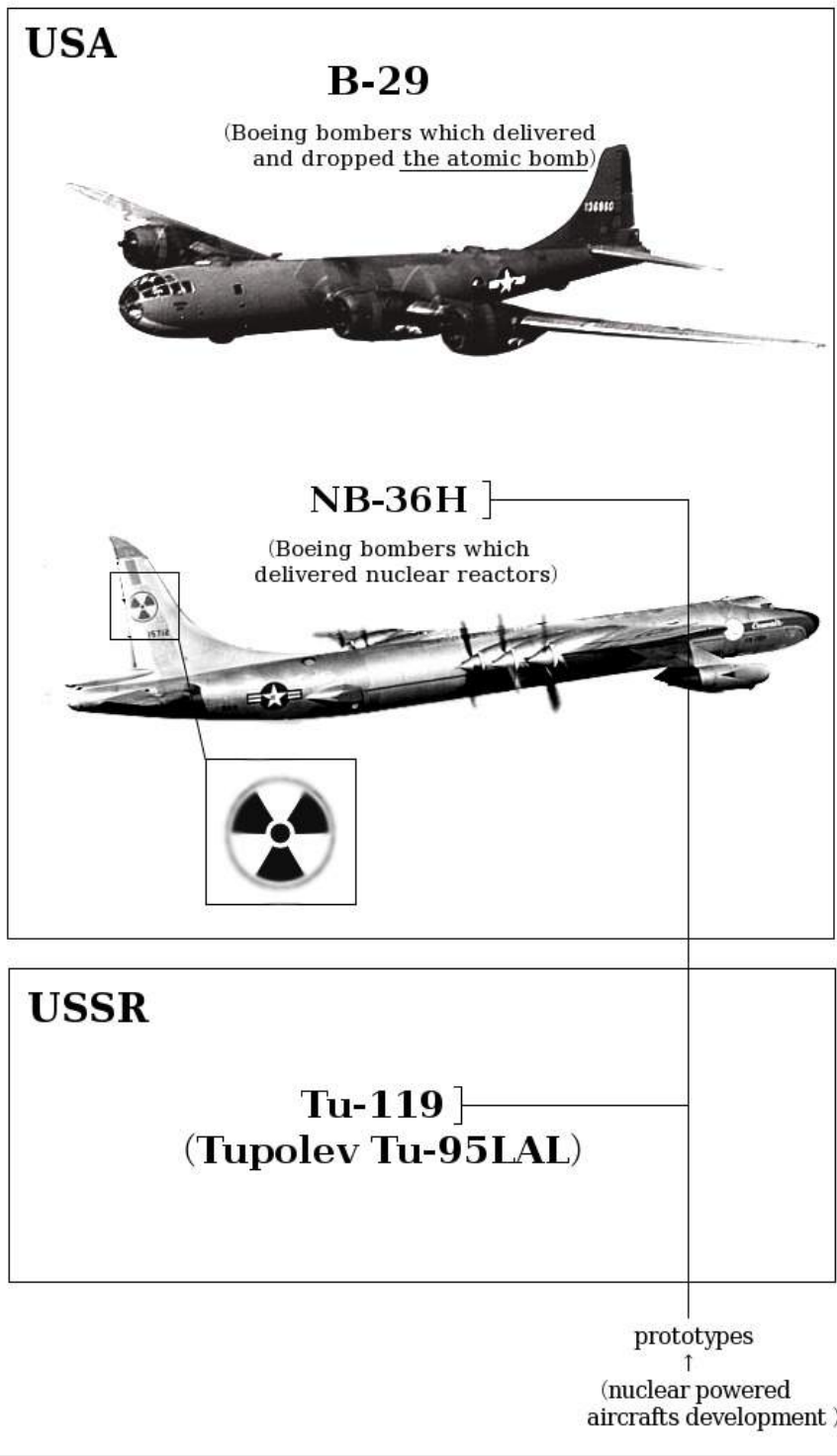
上もてお分かりだろうが、

『B-36 の三姉妹』

などという作中小説が持ち出されている件につき[B-36]という爆撃機の一亜種[NB-36H](先述のようにある種エポックメイキングな[原子炉]搭載飛行機)と対応関係を観念させるとのソ連版の[原子炉]搭載飛行機が Tu-「119」というものとなっているのである(ここで問題視しているのは 119 との数値である)。

(※[原子炉]を搭載したまま飛行するとの原子力飛行機というのは搭乗員らに被曝リスクを与え、また、それが撃沈・墜落した際に周囲に放射能リスクを与えるとのものであるため、開発されたものの袋小路を見て正式採用されなかったとされる存在となる——原子炉を搭載するに留め、原子炉を[推進機構]とするにまで至らずに計画頓挫したとされる存在となる——(につき先の段にあって和文ウィキペディア[原子力飛行機]項目の[遮蔽性能検証用の実験機 NB-36H が実際に試作され、模擬原子炉を搭載して通常動力による飛行試験も行われたが、データ収集のみに終わった]との記述を引きもしたところである。その点、以上の再度の引用部に記載されている NB-36H にあって搭載の[模擬原子炉]とは推進機構ではないものの原子炉であることに変わりはないと解されるものとなる。英文 Wikipedia [Convair NB-36H] 項目にて “ The Convair NB-36H was a bomber that carried a nuclear reactor. It was also known as the "Crusader".[. . .] **Unlike the planned Convair X-6, the three-megawatt air-cooled reactor in the NB-36H did not power any of the aircraft's systems, nor did it provide propulsion, but was placed on the NB-36H to measure the effectiveness of the shielding.** ” (訳として)「NB-36H は原子炉を運んだとの爆撃機となる。同機は[クルセイダー(十字軍兵士)]との名前でも知られている。…(中略)…計画されていた X-6 型機とは異なり、NB-36H にての 300 メガワット冷却原子炉は飛行機の動力系をなんらなすものではなく、また、推進力をもたらすものでもなかったが、NB-36H にて搭載のそちら原子炉は放射能防護性能を量るために据え置かれていたとのものとなる」と記載されているように、である))。

B-29 と B-36、ソ連の Tu-119 の関係性にまつわる図を挙げておく。
それら爆撃機らは航空史にて取り立てて[原子力技術]との関わり合いが深いとの機種らとなっている(B-29 は原子爆弾を投下した爆撃機となり、B-36(の中の NB-36H) およびそのソ連にての対応機体 Tu-119 は原子爆弾開発と共に世に現われた原子炉を搭載した史上初にして今日に至るまで再登場を見ていない—原子炉を搭載して飛行をなすなど効率性と安全性の面で勘定に合わなかったために今日に至るまで再登場を見ていない— のタイプの爆撃機らとなる—尚、爆撃機にも実験的に搭載された原子炉についてだが、世界初の[原子炉]たる実験用原子炉シカゴ・パイルー号は[B-29]が日本に原爆を起こすことになったとの帰結をもたらした[マンハッタン計画]にて生まれ落ちたものであることがよく知られている——英文 Wikipedia[Chicago Pile-1]項目にあってその冒頭部から “ Chicago Pile-1 (CP-1) was the world's first artificial nuclear reactor. The construction of CP-1 was part of the Manhattan Project, and was carried out by the Metallurgical Laboratory at the University of Chicago. ” (訳として)「シカゴ・パイルー号は[世界初の「人工の」原子炉]となる(訳注: 「人工の」原子炉と artificial との語がわざわざもって付されているのは天然の原子炉、[ガボンの天然原子炉]といったかたちで[かつて自律的核分裂反応を呈していたと目されるウラン鉱床]のようなものが存在していることに起因しているところと思われる)。そちらシカゴ・パイルー号(CP-1)の建設挙動はマンハッタン計画の一翼をなすところのものとなっており、シカゴ大学にて実行されたものとなる」と表記されているとおりである——)



以上表記の如きことがあるのを [偶然] と思われるだろうか？

につき、小説『タイムクエイク』内作中小説たる、

『B-36の三姉妹』(こちら作中内小説『B-36の三姉妹』については既述のように [第三の原爆投下にまつわる「別の」作中小説] (『笑いごとではない』と題されての別の作中内小説) が直前にて引き合いに出されており、それゆえ、(原爆投下をなした機種たる) [B-29]との結びつきが観念されるとのものとなり、また、「B-36の三姉妹に見るB-36が日本に原爆を投下した爆撃機と結びついているように見えるのは偶然の賜物以上のことではない」との言及がわざわざなされていることからしてかえって [B-29] と [原爆投下] への意識誘導が背景にあると解されるようになっている作品ともなる)

はそれがソ連版に切り替えられれば、

The Sisters Tu-119 『Tu-119の三姉妹』

となりうるものであるとのこと、そのことにつき筆者は[偶然]とは思っていない ——B-29(2+9=[11])とB-36(3+6=[9])まで加味しての悪質な「やらせ」挙動であると判断している——（であるから、このような話に長々と筆を割いている）。

尚、[偶然]ではなかった場合、カート・ヴォネガットという輩は([傀儡(くぐつ)])であろうとなんだらうと[911の予言]をなしている輩に化けることになるといったことがある（さらにその点については続く段で煮詰める）。

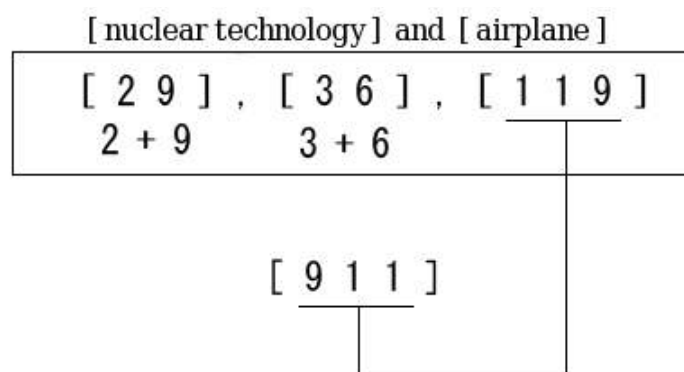
そういう輩が

[加速器のブラックホール生成挙動と関わりと露骨に解されること]

を(場合によっては[911の事件で崩されたツインタワー]と結びついているように解されるとの塩梅の)他小説(『スラップスティック』)にて言及しており、また、

[人類育種の究極目的が「まるぼちひとつ」であった]

との[サイレンが題名に付されての小説](ザ・サイレンズ・オブ・タイタンこと『タイタンの妖女』)をものしていることをこの身は問題視しているのである。



far-fetched?

[29][36][119]という数値が並べられ、それらが[原子力と結びつくエポックメイキングな爆撃機の機体コード]としての共通性を伴うものとしてそこに現出していたらば、どうか。そこより[2+9=11]および[3+6=9]および[[11][9]]から911を意識するのは[行き過ぎ]になるだろうか。「なるまい」。

そう述べられるところの理由として第一に、

[原子力と結びつくエポックメイキングな爆撃機(B-29)が[マンハッタン計画]との帰結として[グラウンド・ゼロ]という言葉のそもそもの元となっている爆心地を広島・長崎に生み出したとすることがあり、といった史的経緯がある中で[グラウンド・ゼロ]という言葉が後に[ペンタゴンの広場]を指すもの、そして、[マンハッタンにてツインタワーが破壊された跡地]を指すものへと、すなわち、[911の舞台に対する呼称「でも」あるもの]とされていると指摘できるようになっている]

とのことがある ——(同じくものことについては本稿にての先の段にての[出典\(Source\)紹介の部 33-2](#)と付した部にて紹介していたところの英文 Wikipedia[Ground Zero]項目にあって(再度の引用をなすとして) “ The origins of the term ground zero began with the Manhattan Project and the bombing of

Japan. The Strategic Bombing Survey of the atomic attacks, released in June 1946, used the term liberally, defining it as: "**For convenience, the term 'ground zero' will be used to designate the point on the ground directly beneath the point of detonation, or 'air zero.'**" (大要)「グラウンド・ゼロとの言葉の起源はマンハッタン計画、日本への原爆投下ポイントにある」と記載されているところ、および、
“The Pentagon, the headquarters of the U.S. Department of Defense in Arlington, Virginia, was thought of as the most likely target of a nuclear missile strike during the Cold War. **The open space in the center is informally known as ground zero, and a snack bar located at the center of this plaza was nicknamed "Cafe Ground Zero."**” (大要)「ワシントン郊外のヴァージニアはアーリントンにあるペンタゴンは冷戦下、最も核の標的になりやすかったところとはなるが、その広場は非公式にはグラウンド・ゼロと呼ばれてきた(広場にある軽食堂はカフェ・グラウンド・ゼロとのニックネームが与えられていた)」と記載されているところともなる)——。

表記の数値らから911のことを意識しても行き過ぎにならぬであろうと述べもする理由として第二に、である。カート・ヴォネガットの同じく『タイムクエイク』という作品——(1997年に出たヴォネガット晩年の作、『タイタンの妖女』(1959年)から40年近くを経ての作となるも、『タイタンの妖女』の影響を(『B-36の姉妹』ありようなどを通じて)受けているらしいとのことが窺われるとの作品)——に関してはその他にも2001年の事件の事前言及と解せられる要素を帯びている、作中内日付け使用との観点で帯びていると判断できるようになっているとのこともある(続く[出典\(Source\)紹介の部 65\(14\)](#)および[出典\(Source\)紹介の部 65\(15\)](#)を参照のこと)。

さて、さらに話を続けて、(上にて **a.** から **d.** と分割して示していることにある) **c.** と振ってのことに
関する出典紹介をなすこととする。

出典(Source)紹介の部 65(14)



SOURCE

65(14)

ここ[出典\(Source\)紹介の部 65\(14\)](#)にあつては

[c. カート・ヴォネガットの小説『タイムクエイク』では [2001年夏] にて実演の焼きはまぐりパーティに注意が向けられる中、その六か月前、2001年2月13日から1991年2月17日にかけての10年間の追体験を無理矢理なさしめるタイムクエイクが発生したなどの粗筋設定が「どういう意図でなのか」採用されており、それが第一次湾岸戦争の

再演(911に付随しての2003年のイラク戦争の敢行)のことを想起させる]

とのことの典拠を挙げることとする。

(直下、小説『タイムクエイク』(早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第2刷のもの)のp. 9
—p. 10よりの原文引用をなすとして)

タイムクエイク、つまり、時空連続体に発生したとつぜんの異常で、あらゆる人間とあらゆるものが、過去十年間にしたことを、よくもわるくも、そのままくりかえすかしかなくなる。

…(中略)…

わたしはそのタイムクエイクで、一瞬にして、あらゆる人間とあらゆるものを、二〇〇一年二月十三日から一九九一年二月十七日へと逆もどりさせた。

…(中略)…

タイムクエイクが起きたあの瞬間へ帰りつくまで、だれもがロボットのように自分の過去の再演をつづけなくてはならない。老SF作家キルゴア・トラウトがいみじくもいったように——「ふたたび自由意志のスイッチがはいるまで、だれもが自分でこしらえた障害物競争のコースを走りつづけるしかなかった」

…(中略)…

十年間のリプレイが終わり、彼を含めたあらゆる人間がとつぜん新しい行動を考え、ふたたび創造的になる必要にせまられたことに気づいた時、トラウトはこんな言葉を吐いた。「ああ、なんたることだ！ いやほど経験を積んだこの老いぼれが、またまた自由意志相手にロシアン・ルーレットのゲームをせにゃならんのか」

そう。このわたしも『タイムクエイク1』の登場人物であり、リプレイが終わって六カ月後、ふたたび自由意志のスイッチが入ってから六カ月後の二〇〇一年の夏、作家の保養施設<ザナドゥー>の近辺でひらかられた焼きはまぐり(クラムベイク)パーティー(砂浜に穴を掘り、石をしいて火を燃やし、魚介類、野菜などを焼いて食べる)にゲスト出演を果たすことになる。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

※上の部については『タイムクエイク』邦訳文庫版p.23より先にての**出典**
(Source) 紹介の部 65 (13) で原文引用したとの部位、

「『タイムクエイク1』のなかで、キルゴア・トラウトは原子爆弾に関する短篇を書いた。タイムクエイクのために、彼はそれを二度書く羽目になった。思い出してほしいが、タイムクエイクのあとにつづいた十年間のリプレイで、彼とわたしは、そして、あなたも、ほかのあらゆる人間も、一九九一年二月十七日から二〇〇一年二月十三日まで自分がやったありとあらゆることを、もう一度くりかえさなければならなくなったのだ」

と同じくものことを述べている部となるが、そういう記述がくどくもなされ、粗筋として強調されている小説が『タイムクエイク』となっているのをここでは問題視しているとのこと、お含みいただきたい(また、『タイムクエイク』というのは現実に発表されている小説のタイトルであるのと同時に作中にて発生する時空間振動、タイムクエイクを描いた作中にて言及される小説『タイムクエイク1』と結びつけられているものでもある。要するに、ヴォネガットは『タイムクエイク』という名の

小説のことが解説されているとの内容の小説を『タイムクエイク』という題にて出している(と述べられるわけである))

以上、引用したうえで書くが、第一次湾岸戦争(1991)がスタートを見たのは

(現行にての和文ウィキペディア[湾岸戦争]項目にての[戦争推移]の節、そこにての [砂漠の嵐] の部より引用するところとして)

1月17日に、多国籍軍はイラクへの爆撃(「砂漠の嵐」作戦 operation desert storm)を開始した。宣戦布告は行われなかった。この最初の攻撃はサウジアラビアから航空機およびミサイルによってイラク領内を直接たたく「左フック戦略」と呼ばれるもので、クウェート側に軍を集中させていたイラクは出鼻をくじかれ、急遽イラク領内の防衛を固めることとなった。巡航ミサイルが活躍し、アメリカ海軍は288基のUGM/RGM-109「トマホーク」巡航ミサイルを使用、アメリカ空軍はB-52から35基のAGM-86C CALCMを発射した。CNNは空襲の様子を実況生中継して世界に報道した

(引用部はここまでとする)

との解説ありように見るように1991年1月17日、すなわち、

[1997年初出小説『タイムクエイク』の中に認められる[2001年夏の焼きハマグリパーティと関わりどころの2001年2月13日からはじまって1991年に至るまでのリプレイをなさしめるタイムクエイク]の起算点[1991年2月17日]の丁度一ヶ月前]

であるというのが[史実]として語られるところである。

対して、

[第二次湾岸戦争](2003)

とは

[2001年9月にあつての911の事件]

が契機となって、そう、

[1997年小説に見る[2001年夏]の焼きハマグリパーティとの関係性が問題になるころの事件](時候の挨拶などに見るように日本では9月は[秋]とみられる折柄だが、米国では9月は[夏]の範疇に入られるとのこと、先述している——英文Wikipedia[Summer]項目にあつての現行記載よりの原文引用を再度なせば; “**In the United States, summer is often fixed as the period from the solstice (June 20 or 21, depending on the year) to the fall equinox (September 22 or 23, again depending on the year ”**(訳として)「米国にて夏は夏至(6月20あるいは21日・年度に応じての異動あり)から秋分(9月22日または23日・同様に年度に応じての異動あり)の期間と特定される風がある」とされていることを先述している——)

が契機となって

[[1991年1月17日]にスタートを見た湾岸戦争を2003年にあらためて再演した戦争]

であった——911を起こしたとの設定が付されてのアルカイダを支援していると目されたイラク、[大量破壊兵器]を保持していると目されていた(と強調される)イラクに侵攻するとのかたちで再演なさしめたものであった——(であるからこそ、[2001年夏から振り返られもしての1991年2月17日に起算点を持つ(丁度、湾岸戦争開戦日の一ヶ月後の日に起算点を持つ)ループ現象]を扱っているとの『タイムクエイク』という作品にあつての[911の事件との数値的接続性]が想起されることになる)。

「さらに」に加えてさらにももの指し示しをなすとして(上にて a. から d. と分割して示していることにある) d. と振ってのことに関する出典紹介をなすこととする。

出典(Source)紹介の部 65(15)



SOURCE

65(15)

ここ出典(Source)紹介の部 65(15)にあつては、

[d. 小説『タイムクエイク』では上の日付側面と結びつくような形で9や11や12との数値を想起させる描写がなされている]

との典拠を挙げることとする。

(直下、多くの書店に並んでいる小説『タイムクエイク』(早川書房ハヤカワ文庫版、重版にして第2刷のもの)のp. 11-p. 12よりの原文引用を直下なす(一部先にての出典(Source)紹介の部 65(13)にあつての原文引用部との[重複箇所]を含むところよりの原文引用を直下なす)として)

そう。このわたしも『タイムクエイク1』の登場人物であり、リプレイが終わって六カ月後、ふたたび自由意志のスイッチが入ってから六カ月後の二〇〇一年の夏、作家の保養施設<ザナドゥー>の近辺でひらかれた焼きはまぐり(クラムベイク)パーティー(砂浜に穴を掘り、石をしいて火を燃やし、魚介類、野菜などを焼いて食べる)にゲスト出演を果たすことになる。

キルゴア・トラウトを含めて、その本に登場する架空の人物たちといっしょに、わたしはそのパーティーに出席した。

…(中略)…

いま、こうしてわたしの最後の本は、このまえがきだけを除いて完成した。きよ

うは一九九六年一月一二日。たぶんあと九カ月ほどで、この本の発行日、印刷機という産道からの誕生日がやってくるだろう。

…(中略)…

わたしは二〇〇一年の焼きはまぐりパーティーまで自分が生きながらえるという前提で、この本を書いた。46章では、二〇一〇年になってもまだ自分が生きながらえていると想像した

(訳書よりの引用部はここまでとする)

上にては作家カート・ヴォネガットが「長編小説としては」自己の最後の作となった『タイムクエイク』(1997)という小説にあって、その作中、

「キルゴア・トラウトという作家（『タイムクエイク』作中の〔第三の原爆投下〕を扱った小説たる『笑いごとではない』の作者にして『B-36の三姉妹』の作者たる架空の小説家）と一緒に〔「2001年夏」の焼きはまぐりパーティー〕に（作中にての登場人物とも等しき立ち位置で）自分自身が参加することを念頭にこの小説をものしている」

と述べているとの部ともなるが、「問題なのは、」そうした小説『タイムクエイク』にあって(上にて引用している部に見るように)

「11月12日に完成、多分、あと、9か月で発行を迎えるであろう」

などと記述されている(“ this work has been accomplished on this day , 12th of[November→「11」], and will be published 「9」 months later. ”といった筋立てのことが小説 Timequake には冒頭の目立つ部において記述されている)とのことである。

につき、

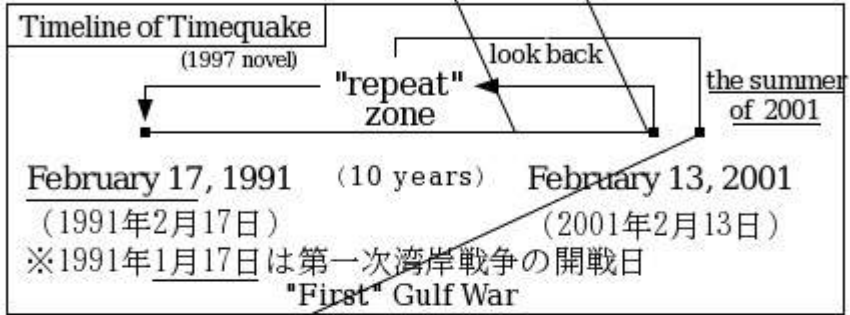
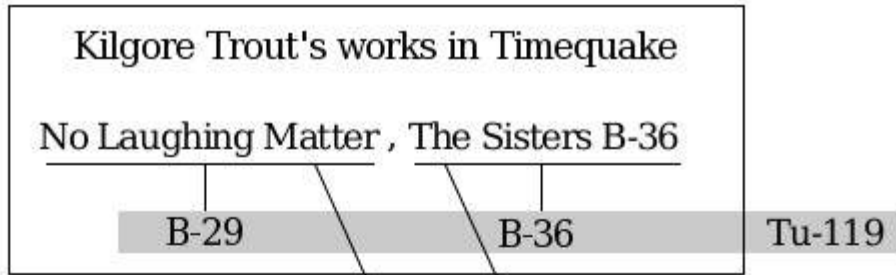
〔「2001年夏」の焼きはまぐりパーティー〕

に関しての言及がなされたうえで、次いで、「紙幅にして直後。」といったかたちで間を挟まずにそちら11月12日との脱稿日への言及がなされ、(どうしてそれも長期的に、かつ、きっかりと決まっているのか、と考えられるところとして)

「9か月後に本書発行とあいなろう」

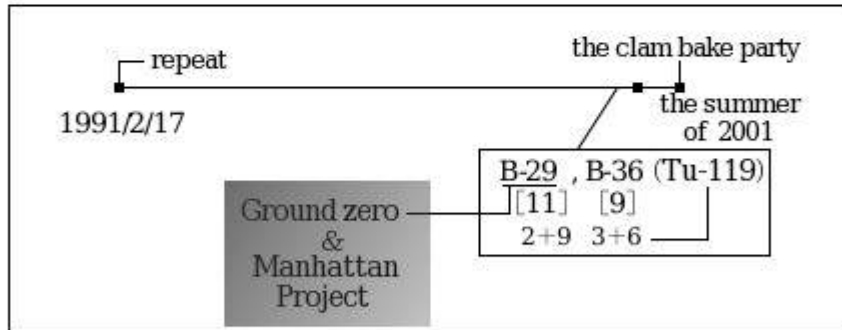
などとわざわざもってして記載されているところからして ——11月12日脱稿(12th of November)、9ヶ月後刊行との式での month(月次)表記における11月、9ヶ月の使用との意味で—— かの九一一の事件のことを想起させもするとの作品が『タイムクエイク』となっていると指摘したいのである(：それ単体で述べれば、『[頭の具合が相応の状況にある、ないし、確信犯的に煙幕の撒布を役割としているとの類ら由来の妄言]の類と見られようところか』と当然に見もするのだが、[他の事情]と複合顧慮して[そうでは済まぬであろう]と述べるのである)。

(出典(Source)紹介の部 65(15)はここまでとする)



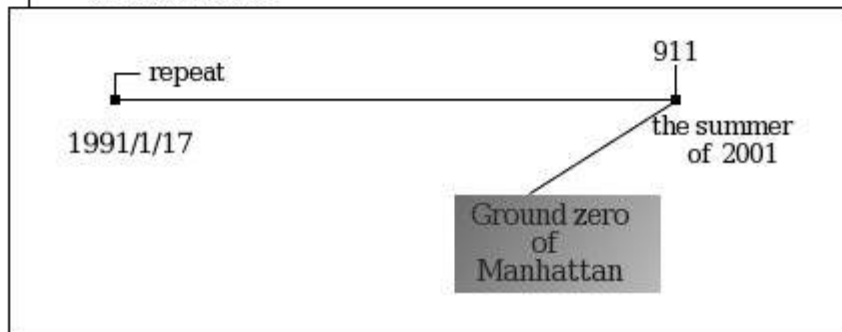
the terminal node of
1997 novel, Timequake

[the 2001 summer clam bake party that
both Kurt Vonnegut and Kilgore Trout
took part in] (of 1997 novel, Timequake)



the fictional world of 1997 novel Timequake

the real world



ここでは

『どうしてそのようなことが?』

との「機序」の問題はともかくも、

[同じくもの作家が予言的言及をなしているとのこと（加速器とブラックホール生成問題の関係に通ずる「奇怪な」予言的言及をなしているとのこと）]

との絡みで当該作家の「他のやりよう」（については「やらされよう」と述べた方が事実に適っているかもしれない）について取り上げている。

以上述べたうえで話柄の取捨選択以外、主観は介在させていないとの「現象」についての指摘をなすが、問題となる作家（米国文壇の大物、故カート・ヴォネガット・ジュニア）の1997年初出小説『タイムクエイク』にあつては

[（911の事件にあつては）ニューヨークにて2001年夏（米国基準で見れば夏）の9月11日に多数の焼死者を出すのがたちでツインタワーが崩落させられ、後、その出来事が1991年1月17日に勃発した第一次湾岸戦争の再演をもたらした。また、911の事件のワールド・トレード・センターのマンハッタンにての跡地はグラウンド・ゼロと呼ばれている]

とのことが「現実世界にての動向」となっているのに対して、

[2001年の夏頃に行われる「焼きはまぐりパーティ」を物語の未来にての終着ポイントとして「1991年2月17日」からはじまる10年間の出来事が時間振動にて繰り返し再演されるとの内容を有している。また、その再演プロセスの中で登場する文物らの兼ね合いで「119」との数値が「原子力の軍事利用と結びつく航空史にあつてのエポックメイキングな爆撃機ら」を共通項に浮かび上がるような格好となつており、また、の中では「日本にて原爆が投下された跡地」がそもそもそのグラウンド・ゼロとの言葉の由来、マンハッタン計画に起因するグラウンド・ゼロとの由来になつているとのこととも話がつながるようになっていく（ヴォネガットは日本への三発目の原爆投下についての言及をなしている）]

との特性が伴っているとのことがある。

9月となれば、日本の暦では秋に分類されているわけだが、米国ではそうはならないとのこと、といったことから本稿にての「出典紹介の部65(14)」では懇切丁寧に解説している。

ここまできたところで申し述べるが、カート・ヴォネガット ——同ヴォネガット、本稿にての「出典」(Source) 紹介の部 64 の段で述べているように米国文壇で最も影響力を持っていた作家、まさしく「文壇の寵児」との呼称が相応しくも当てはまる作家となる—— は

『タイムクエイク』(1997)

という作品をもって自身の「長編小説」分野の最終作と自ら号していた作家(物故者)ともなっている（：目立つところでは英文 Wikipedia [Kurt Vonnegut] 項目にて “ **With the publication of his novel Timequake in 1997, Vonnegut announced his retirement from writing fiction.** ” (訳)「1997年にての彼の小説『タイムクエイク』の刊行をもってしてヴォネガットはフィクション分野よりの引退を表明した」と記載されているとおりである ——ちなみにヴォネガットの執筆業それ自体はその後にもノン・フィクション、「非」長編分野にて単発的に続いていたとのこともあるのだが、本格的執筆・長編執筆とのことであれば、『タイムクエイク』がヴォネガットの打ち止めの作となる——)。そして、作家ヴォネガットは『タイムクエイク』という作品をして自身の作家人生の総決算、様々な要素の「ごった煮」として執筆したと述べていた作家「とも」なる（：目立つところでは英文 Wikipedia [Timequake] 項目にて(その冒頭部より引用するところとして) “ **Timequake is a semi-autobiographical work by Kurt Vonnegut, Jr. published in 1997. Vonnegut described the novel as a "stew", in which he alternates between**

summarizing a novel he had been struggling with for a number of years, and waxing nostalgic about various events in his life.” (訳として)「小説『タイムクエイク』はカート・ヴォネガット・ジュニアによって1997年に刊行された半・自伝的作品となる。ヴォネガットは同作『タイムクエイク』をして[自身が何年にもわたり取り組んできた小説の要約]と[彼の人生にての諸種様々な出来事の懐古的言明]を行き来しての[ごった煮]的作品であると表していた」と記載されているとおりである。

以上のことがここまで意図して典拠紹介してきた a. から d. のことらとあわさって

[『タイタンの妖女』と『タイムクエイク』の間の繋がり合い]

を判ずる材料となりもする。それにつき、「過去の作家としての歩みの集大成ともなっている」と作者自らが述べていたとの『タイムクエイク』、同作は「時空間の歪み」の如きことを主軸として扱った作品もとなり(目立つところでは英文 Wikipedia[Timequake]項目にて the Timequake has thrust citizens of the year 2001 back in time to 1991 to repeat every action they undertook during that time「(小説『タイムクエイク』にあつては)[時間震動]が2001年の市民らをして1991年に遡ってその間、なしてきたすべての行為を無理矢理再演させしめることとなった」と表記されているところに関わる場所である)、といった特性は(出典(Source)紹介の部 65(4)にて先述のように)[時間等曲率漏斗]なるものを登場させながら、(扱いかたこそ違いこそあれ)、そちらもまた[時空間の歪み]に重きを置いているとの『タイタンの妖女』の特性を想起させるところともなる——そも、ヴォネガットの小説は1959年に登場を見た『タイタンの妖女』以降、[トラルファマドール星人](Tralfamadore)なる作中存在のやりよとの絡みで一貫として[時間や空間の跳躍]を問題としている作品ばかりともなっており、『タイムクエイク』は『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』以降のそういう作家の執筆来歴に見る伝統とでもいべき流れを受け継いでいる作品となっている——(一言表記すれば、『タイムクエイク』は『タイタンの妖女』以降のやりよの影響を受けている)。

であるからこそ『タイタンの妖女』と『タイムクエイク』の繋がり合いが観念される。

そして、それは、『タイタンの妖女』、ブラックホールに[問題となる式]に関わる(「であるからこそ問題になる」と先述してきたところの同作が

[911の予見]

とも結びつくことに相通ずるとのことでもある。

『タイムクエイク』(の中にあつての三姉妹の物語たる『B-36の姉妹』)には[911の予見作品]との要素が伴い(その厭な臭いについてはここに至るまで詳述してきたことである)、『タイタンの妖女』(三人一組の艶やかな三つの像を表題にしているとの時空間のねじれが重きをなしているとの小説)がそちら三姉妹の物語と関わっているように解されるとのことがある。またもって『タイタンの妖女』ではまったくもって意味意図不明なことに極めて目立って巻頭言から地球がM13ヘラクレス座に接近しているなどとのことが言及されるが、ヘラクレス(の第11功業)というのはここ本段に至るまでの段階でも[ブラックホールと相通ずるところがある奇っ怪なる911発生にまつわっての事前言及文物]に重きをもって関わる(と摘示してきた)ところの[要素]であり、またもって、同じくものヘラクレス(の第11功業)というのは——黄金の林檎を介して——ブラックホール生成をなしうると近年考えられるようになった加速器実験にまつわっての命名規則にも関わる(と摘示してきた)ところの[要素]でもある。

これにて実に長くもなったが、『タイタンの妖女』が軽んじられるものではないとした三つの理由についての指し示しに一区切りをつけることとする。

すなわち、(以下、繰り返し表記なすとして)、

「異星人に推進された人類「育種」の究極目標が [くろぼち(・)ひとつよりなる親書の異星系への伝達の補助] であった」

という同作の粗筋にあって気がかりとなる場所として

[地球は [地球質量] から見てブラックホールに換算すると cm (センチメートル) 単位のものにしかない]

との言われようがなされている —— 換言すれば、「地球をそうしたサイズに圧縮すればブラックホールができあがる」とされている —— とのことがある。

第二。

[小説『タイタンの妖女』で重視されている時間等曲率漏斗(なるもの)の終点が赤色巨星ベテルギウスであったと設定付けられている]

とのこともが [ブラックホール] との絡みで不気味に映るとのこと「も」またある。

知識を有していないとの向きから見れば [気まぐれ] を超えての意味合いでは [『タイタンの妖女』に対するベテルギウス関連の設定の付与] の理由が「ない」とも思われるところであろうが、

[ベテルギウスの赤色巨星としての終焉が「小説『タイタンの妖女』刊行より後の日 — 時期的先後関係が重要となる場所にての [後の日] — にて現実世界にて導き出された知見より」「近々の」ブラックホール化であるとの見方が (人類に災厄をもたらしかねない [ガンマ線バースト] との現象に関わるところとして) 目立って問題視されるに至っている]

とのことがあり、また、と同時に、

[『タイタンの妖女』にてベテルギウスを終点としていると (何故なのか) 設定付けられている [時間等曲率漏斗] というものが [くろぼち(・)ひとつよりなる親書を他星系に届けるための人類の育種] と当該フィクションの中で結びつけられている]

とのこと「も」があり、もって [相応の寓意性] を感じさせる、それがゆえ、 [不気味に映る] とのことがある。

(:整理すれば、[くろぼち(・)マークのみよりなる親書の伝達のための人類育種] と [近々のブラックホール化を伴っての現象の発現可能性が (小説の刊行後に) 目立って問題視された天体] (時間等曲率漏斗のゴールとしてのベテルギウス) とが結びつけられていることにつき、(地球相当の質量をブラックホールに引き直すと [cmメートル単位のブラックホール] が導出されるとの現代物理学にての指摘のされよう (先述) も加味して)、奇怪性が感じられると述べたいのである (お分かりだろうとは思うのだが、「『タイタンの妖女』刊行の折にはベテルギウスのブラックホール化が目立って問題視されるような事情 (ガンマ線バーストという現象に関わる事情) が取り沙汰されていなかった — 時期的先後関係の問題も続いての段にて遺漏なくも解説試みる —— がゆえに奇怪である」とも述べているのである)。

第三。

「(上の第一、第二のことに加えて) カート・ヴォネガットの『タイタンの妖女』は同男由来の『タイムクエイク』(1997) という他小説と一緒に見た場合に [911 の事件の前言をなしているが如く小説] に化けるようなものであるということ「も」ある」

とのことがある (その「911 の事件の前言をなしているが如く小説に化ける」との側面が [偶然の賜物] ではないから「問題になる」と申し述べたきところとして、である)。

の三つの理由らについての指し示しに一区切りをつけることとする (三つ目の理由については a.. から d. に分割しての指し示しをつい最前の段までなしてきた)。

さてもってしてこれ以降は続けての補説部 —**補説 1**に続けての**補説 2**— につなげるべくもの

[半ば[伏線]となるような話]

をなしたいと思う (:伏線、すなわち、[水面下に密かに伏させしめて後にて浮上させる類の話]としては「続いての段につながることである」と手ずから明らかにしている時点で自己矛盾あり、妥当ならざりしとなることかとも思うので「半ば[伏線]となるような話」との形容を、(下らぬことをいちいちと断るようで何ではあるのだが)、なしている)。

その点、続いての部、**補説 2**と銘打つての段では中途まで話を進めたところにて、

CONTACT『コンタクト』(カール・セーガンという著名な言論人(後述)の手になる1985年初出のハード・サイエンス・フィクション小説)

という作品の内容を問題視することにする所存である(:後にて作品に対する世俗的評価についての説明もなすが、そちら『コンタクト』という作品も『タイタンの妖女』と並んで米国をはじめ欧米圏で有名な作品となっている)。

(以下、微に入った話とはなるが)

上にて言及をなしたハード SF 小説『コンタクト』は

[宇宙よりの電波探査活動(作中、[アーガス計画]と銘打たれている架空の電波探査活動)]

の中、

[ヘラクレス座の M13 星雲]

を調べたその直後、そのヘラクレス座と接する琴座の方向より

[宇宙にあつての他の高度文明よりの通信]

を受信するとのかたちで話が展開していくとの著名フィクションとなる —同『コンタクト』は女優ジョディ・フォスターが起用されてのハリウッド映画化もなされている作品となる— 。

(⇒小説『コンタクト』では(直上言及の)[外宇宙の他文明よりの通信の受信]の後、その受信データに基づいて「それが何のためのものなのか」も理解できないものながらも[十二面体構造を呈する装置の設計図]が暗号より再現されるに至る。

そして、ついぞその装置が何たるかを作中の人類が理解出来ないままに、[装置(遙か外宇宙の彼方に装置に入り込んだ人間を送り出すことになったとのこと)が後に明らかになったとの装置]の構築計画が進められるとの方向に話が進んで行く(につき、[フィクション]ならぬ[現実世界]の物理学者らが[仕組み]・[機序]ではなく[作動態様]についての科学考証に関わったことがよく知られている装置、[カー・ブラックホール]や[通過可能なワームホール]といったものと結びつけるべくもの考証が入念になされもして当該フィクション(『コンタクト』)にそうした考証が活かされたとの装置が建設されるに至ったとの描写がなされている、そう、フィクション作中ではその原理も動作態様も分かっていない中ながら異星より送られてきた電波受信情報に入れ込まれていたとの設計図に基づき(甲論乙駁なされながら)装置が結果的に建設されるに至ったとの描写がなされている)。

そうした小説筋立てについても
「問題視すべきところがある」

との関係上、本稿の後の段で取り上げることになる(詳しくは続いての補説 2 の中段以降の段を参照いただきたい。尚、[外宇宙よりの電波探査計画] などとの話を耳にすると [いかにもの空想家の領分] ととらえる向きもあろうかもしれないが、米国にあっては SETI こと Search for Extra-Terrestrial Intelligence と銘打たれての [地球外知的生命体探索計画] が 20 世紀中葉より息長くも行われてきたとの経緯が実際にあり、ここにて問題視している『コンタクト』作者の科学者カール・セーガン(同男が [調査しても無為たることと分かりきっていたこと] らをやらせるべく用意された [担がれての駒] であったとしてもそうではなかったとしてもとにかくも [大物] の片鱗を見せていたとのメディア露出型カリスマ科学者)も早くから同じくもの計画 —— SETI こと [地球外知的生命体探索計画] —— に深くもコミットしていたことがよく知られている。については和文ウィキペディア [カール・セーガン] 項目に立志伝調で記載されているところを引くが、(現行にてのウィキペディア記載内容より原文引用するところして) “(セーガンは) 1960 年から 1962 年まではカリフォルニア大学バークレー校でミラー 1 号望遠鏡の設計者となった。1962 年から 1968 年までスミソニアン天体物理観測所で研究員を務め、ハーバード大学で教鞭をとった。それからコーネル大学へと移り、1971 年には正教授になり、以降惑星科学の研究室を率いた。圏外生物学(宇宙生物学、天体生物学)の開拓者で、一般に地球外知的生命体探索計画の SETI と科学を押し進めたとされる。このように彼の業績には生命科学とのつながりが深いものが多く、惑星探査機、マリナー、バイキング、ボイジャー、ガリレオの実験計画の企画などに携わる。最初の妻は細胞内共生説を提唱した生物学者、リン・マーギュリスであった”(引用部はここまでとする)とされているようなことがある。そうした作者(セーガン)による「著名な」フィクションが『コンタクト』であること、お含みいただきたい)

表記の如き内容を有しているとの小説『コンタクト』にあっては

[外宇宙よりの不明電波を受信するに至った電波探査計画を巡る経緯] (作中、[アーガス計画] と銘打たれての外宇宙電波探査活動を巡る経緯)

を取り扱った部にて

「[ヘラクレス座 M13 星雲] を電波探査計画にて調べた直後、近傍ヴェガ星系より [ワームホール(ないしブラックホール)] を利用してのゲート装置設計図を暗号として混ぜ込んだものと「後にて判明した」電波] を捕捉・受信した」

との表記がなされ、その部にあつて

[[Silence サイレンス] と [Siren サイレン] の掛詞(かけことば)]

が印象深くも露骨に用いられているとのことがある。

すなわち、([ヘラクレス座 M13 星雲] を電波探査計画にて調べた直後、扉の構築につながった電波を受信することとなったとの下りにて)、

「 [沈黙] (サイレンス) こそが [サイレン] (トロイア攻城戦で木製の馬の計略を考案してトロイアを陥落させた後、苦難の船旅を強いられることになったオデュッセウスを洋上にて惑わしたギリシャ神話の怪物 —— 本稿にての 出典 (Source) 紹介の部 65 (2) でも言及 ——) の武器にして真に酷薄無情なるものである」

などとの申しようがなされてもいる —— [メディア露出型カリスマ科学者] として広くも認知されていたカール・セーガンによってそういう申しようがなされてもいる —— のである。



画家 John William Waterhouse の手になる妖異サイレンを描いた 19 世紀後半の画
同画にては

[トロイア滅亡をもたらした木製の馬の奸計の主唱者たるオデュッセウスが船の帆柱に自らを繋がせ、なおかつ、他の船員の耳を蝋で塞いだうえにて船を座礁させる魔声とされた[サイレンの歌声]に耳を傾けんとしたとの有名な伝承上一幕ありよう]

が描かれているのだが、そうした同画にあって多数匹描かれているとのサイレン、伝承にてはカート・ヴォネガット小説『タイタンの妖女』に見る惑星タイタンの三対の彫像(サイレン彫像)よろしく、ないし、カート・ヴォネガット小説『B-36の三姉妹』に見る三姉妹よろしく三匹一組の存在、すなわち、

[Peisinoe(ペイシノエー)および Aglaope(アグラオペー)および Thelxiepeia(テルクシエペイア)の三匹一組の存在]

であるとされている — 本稿にての **出典(Source) 紹介の部 65(2)** でそこよりの記述を引いたビブリオテケー (BIBLIOTHEKE / 岩波文庫版『ギリシャ神話』) より再引用なせば、**セイレーンの島を通過した。セイレーンはアケローオスとムーサの一人たるメルポメネーの娘で、ペイシノエー、アグラオペー、テルクシエペイアであった。この中の一人は豎琴を断じ、一人は唄い、一人は笛を吹き、これによってそこを航し過ぎる船人を留まるように説かんとしたのである(再引用部はここまでとしておく)**とされているような存在であるとされている — 。

そうしたサイレンら、[三匹一組]として言及されることが多き存在が先程来、[ブラックホール]との絡みでそちら特性について解説をなしてきたとの小説カート・ヴォネガット『タイタンの妖女』と別作家の他の小説作品『コンタクト』とを結びつける「留め金」の一となっていることにまつわっての「布石」としての話をここではなしている。

さて、最前にて言及のように小説『コンタクト』にあって

「ヘラクレス座の M13 方面に対する([アーガス計画]なる)宇宙電波探査計画の中での探査が他の宇宙文明よりの通信を受信した」

などとの話が[妖怪サイレン(Siren)の沈黙(サイレンス Silence)の声]と結びつけられるといった書きよりにてなされているとのことは

(長大な小説のわずかな部、隻句にまつわる一致性にすぎないため、[情報]としても伝播せず、また、

気付く人間もほとんどなかろうものことと言えそうなことではあるが)

「カート・ヴォネガットの **The Sirens of Titan** 『タイタンの妖女』の冒頭序言の部にて付されたヘラクレス座 M13 への言及を意識してやってのことであろう」

と「自然に」想起される場所となっている —— 『コンタクト』作者たるカール・セーガンの意中・胸中が奈辺にあったかは解しかねるが、「自然に」想起される場所となっている——。

本稿 **出典(Source)紹介の部 65(11)**にて引用なしたように **The Sirens of Titan** こと『タイタンの妖女(サイレンズ)』は

“ Every passing hour brings the Solar System forty-three thousand miles closer to Globular Cluster **M13 in Hercules** . and still there are some misfits who insist that there is no such thing as progress.” 「一時間ごとに太陽系は四万三千マイルずつヘラクレス座の M13 球状星団へと近づいている——それなのに、進歩なんてものはないと主張する非順応者がまだなくなるらない」

との冒頭部文句に見るように [ヘラクレス座 M13 星雲] が [サイレン] と結びつけられている作品と述べられるからである。

そのように、

[ヘラクレス座 M13 を探査した直後に琴座方面より異星系からの電波を受信したとの粗筋]
[妖異サイレンを沈黙サイレンスと [掛詞(かけことば)] としてつなげているとのやりよう]

が(カート・ヴォネガット『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』の[ヘラクレス座 M13]にまつわる序言部を想起させるように)つなげられて表出しているとの『コンタクト』という小説作品は、

(繰り返すが)

[[異星系より受信した電波] (ヘラクレス座 M13 に対する電波探査活動が不首尾に終わったその直後、近傍の琴座より受信したという設定が付された怪電波) に暗号として隠されていた設計図を元に地球上にて [ブラックホール・ワームホールと結びつくゲート装置] が構築されることになったとのことを描いている作品]

となっている。

以上のことについては ——そちらが[文献的事実]の問題として認識認知されたうえでものこととして一次のように考える向きもいそうなところか、とも思う。

『小説『コンタクト』(原著初出 1985 年 / 映画化作品 1997 年リリース)を世に出した米国の著名なる大物科学者たるカール・セーガンがカート・ヴォネガット『タイタンの妖女』に [ブラックホール絡みのゲートに対する隠喩] が「根深くも」含まれているとの可能性を顧慮の上、意識してヴォネガット作品に対する隠喩的言及をなしていたのではないか?』

が、筆者は上のようには考えていない。一義的には次のようなことがあるからである。

「『タイタンの妖女』にあっては —— (本稿にて既述のように「隠喩的・間接的な式での」そのことへの[予見的言及]はあったとは解されるのだが) —— 「明示的に」ブラックホールの類をゲートとするが如く観点は表出を見ていない (同作『タイタンの妖女』にあつて[時間等曲率漏斗に入った男が目的達成のために利用されるとの筋立て]と[黒

い点ひとつのために地球人類育種がなされてきたとの筋立て]がつけられていても「明示的に」ブラックホール・ゲートに対する言及がなされているわけではない)。それがゆえにカール・セーガンがそこまで穿っての視点を自著に反映したとはなかなか考えづらい。

また、**The Sirens of Titan**『タイタンの妖女』原著が世に出た**1959年**は言うに及ばず、カール・セーガン**Contact**『コンタクト』原著が世に出た**1985年**という時期からして[人類最大規模の装置(加速器)が用いられた結果としてのブラックホール生成]とのことが科学的に観念されて「いなかった」とのこともある。

従って、時代背景より、カール・セーガンには『タイタンの妖女』内容を意識してのその式での寓意を作品に込めるだけの動機がなかったと受け取れもする——(であるから、カール・セーガン1985年小説が[異星人より送られてきた装置設計図を元にして人類一丸となって「ブラックホール」「ワームホール」と結びつくゲート装置の構築が試みられだす(ゲート装置と知らずにももの構築が試みられだす)]との粗筋を有していたことからして「ある種、予見的なること」と見えもする(ちなみに、後述するところとはなるが、セーガン『コンタクト』のゲート装置は原作小説それ自体では加速器とは何ら関連づけられていない。映画版DVD流布コンテンツでは紛らわしいような描写も一部認められるのだが)。その点、本稿では**出典(Source)紹介の部1**から**出典(Source)紹介の部21-5(2)**を包摂するそれ自体、相当程度の文量を蔵しての解説部にて[ブラックホール生成が加速器にてなされうる]と考えられるようになった(と科学界にて主張されるに至った)のが「ここ10数年内のこと」であるとのこと、詳述をなしている。同じくものこの事実関係の調査に多大な時間を割いてきた、勿論、座学ではなく自身の足を動かしての取材活動をもなしている人間として(1998年に登場した理論動向を受けて2001年よりその可能性が現実視されるようになった)とのブラックホール人為生成を巡る議論動向について詳述をなしている次第でもある)——」

一義的なるところを述べれば、上のようになるのだが、本稿で「その実の、」のこととして着目に値すると見ていることが(またもってして)ありもし、それはおよそ次のようなところとなる。

「カール・セーガンという人物(物故者)についてはその言説からして[世間で取り沙汰するのがまったくもって好まれないとのことをわざわざ口に出すような人間ではなかった]と見受けられるのだが、といった中で、『コンタクト』という作品に関しては[二重話法(背面解釈可能な話柄)][反対話法(望ましきことと望ましくなきことを反転させる話柄)]

を「多角的に」含んでいると解される側面が露骨に見受けられもする。

そして、小説『コンタクト』内部に見受けられるとのそれら[二重話法][反対話法]関連部位が[カール・セーガンの属人的恣意の問題でおよそ済まされないような性質のものである]と見受けられるとのことがある(から問題である)。

それについては、たとえば、小説『コンタクト』という作品が[災厄の因たるととれるもの]([この地球上にブラックホールやワームホールの類を用いてのゲートを構築するためのものであるとその使用後にて判明した得体の知れない機械])をして

[実にもって望ましいもの]([進化進歩を見守る温かい異星文明が渡してくれた人畜無害なる先進文明への切符])

として担ぐとの作品となっているとのことも例となるところである(と明言したい)。

また、小説『コンタクト』が[[ブラックホール生成問題]をして[「他の」911の事件の先覚的言及事物「ら」]([カート・ヴォネガットの作品「以外」の先覚的言及事物]としての特定事物「ら」])と結びつけているが如くもの]

となっていること「も」問題になる(と明言したい) ——無論にしてこの段階では伝えんとしていること、おもんばかりなどなしていただけないかとも思うのであるが、同じくもの点については続いての補説2と区分けしての部、そこにて『コンタクト』内容に言及するに至った段階で典拠挙げつつ詳述をなしていく) —— 」

上記のことが事宜に適っているとの申しようなのか、黒白の問題としてどうなのか、ということについてはさらにもって後の段での解説部を検討してからご判断いただきたいのであるが(『コンタクト』という作品が具体的にどう問題になるかについては続いての補説2の段にての中盤以降の部にて詳述詳解をなす)、ここ本段ではとにかくも、

[小説『コンタクト』が[ゲート装置の設計図受信]につながった電波探査計画との絡みでヘラクレス座 M13 をいかように作品内に登場させているのか、また、その部がいかようにして[サイレン]の類と結びつくようになっているのか] (すなわち、[[サイレン]を作品タイトルに冠し、また、[ヘラクレス座 M13] に関する印象的な切り分けての序言部を含んでいるとの作品、そして、[ブラックホール]のことを想起させるとの作品たる『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』といかように接合性を観念できるようになっているのか])

とのこと(上にて言及したこと)の出典を先んじて挙げておくこととする(直下続けての内容を参照されたい)。

それでは(本頁初出のこととして)表記のこの出典紹介部に入ることとする。

出典(Source)紹介の部 66



SOURCE

66

ここ出典(Source)紹介の部 66 にあつては、

[小説『コンタクト』にあつての [ヘラクレス座 M13 方面の探査の直後にこと座方面より外宇宙生命体由来の通信を受信することになったとの下り] にてサイレンの声に対する言及が「不自然に」「執拗に」なされている]

とのことを原文引用にて示し、もって、そのことが冒頭部よりヘラクレス座 M13 のことを殊更かつ意図不明瞭にもちだしている『タイタンの妖女』(ザ・サイレンズ・オブ・タイタン)との繋がり合いを想起させるものであるとのことを示すこととする。

まずもって以下のような引用をなすこととする。

(直下、『コンタクト(上)』(新潮「文庫」版——池央耿／高見浩訳——、重版重ねての第六刷版)にあつての p.70-p.72 よりの掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

第三章 白色雑音

耳にひびくメロディーは美しい。が、耳に聞こえぬメロディーはもっと美しい。
——ジョン・キーツ『ギリシャの壺の歌』

もっとも残酷な嘘は、しばしば沈黙のうちに語られる。
——ロバート・ルイス・スティーヴンスン『青年男女のために』
…(中略)…

デスク・ランプのスイッチをひねり、しばらく引出しの中をかきまわしてから、彼女は一對のイヤフォンをとりだした。デスクのわきの壁に貼られた、フランツ・カフカの『寓話』からの引用が、一瞬、ライトの光に浮かびあがった。

歌よりもおそろしいサイレンたちのもう一つの武器
それは沈黙……
彼女らの歌を逃れる者あろうとも
その沈黙から逃れうる者は
一人としていない

片手をふってライトを消すと、彼女は仄暗闇(ほのぐらやみ)をつつきって戸口にむかった。

制御室に入ると、万事異常ないことをすぐに確認して安心する。窓ごしに、ニューメキシコの砂漠上数十キロにわたって並んでいる百三十一個の電波望遠鏡の一部が見えた。いずれも、空に向かって語りかけている、奇妙な機械の花のように見える。

(国内で流通を見ている訳書よりの掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

上にての訳書よりの引用部に対してオンライン上より確認できるところの Contact (1985) の原著版テキストも挙げておく。

(直下、カール・セーガン CONTACT 原著にあつての CHAPTER 3 White Noise 冒頭部よりの引用をなすとして)

CHAPTER 3 White Noise

Heard melodies are sweet, but **those unheard** Are sweeter.

— JOHN KEATS "Ode on a Grecian Urn" (1820)

The cruelest lies are often told in **silence**.

-ROBERT LOUIS STEVENSON Virginibus Puerisque (1881)

[...]

Turning on a desk lamp, she rummaged through a drawer, finally producing a pair of earphones. Briefly illuminated on the wall beside her desk was a quotation from the Parables of Franz Kafka:

Now the **Sirens** have a still more fatal weapon than their song, namely their

silence... Someone might possibly have escaped from their singing; but from their silence, certainly never.

Extinguishing the light with a wave of her hand, she made for the door in the semidarkness. In the control room she quickly reassured herself that all was in order. Through the window she could see a few of the 131 radio telescopes that stretched for tens of kilometers across the New Mexico scrub desert like some strange species of mechanical flower straining toward the sky.

(現行はオンライン上より確認なせるところの原著よりの引用部はここまでしておく)

上にての訳書および原著(オンライン上よりその文言すべてを[文献的事実]として確認できるところの原著)より引いたところに見るように小説『コンタクト』では

[章(Chapter 表記の部)の冒頭にて作品に興味を添えるためになしているように(普通には)とらえられる他の文物よりの引用](具体的には英国詩人ジョン・キーツ作品および[ジキルとハイドの物語]でも有名なスコットランド小説家ロバート・ルイス・スティーヴンソン作品よりの引用)

がなされた後(うち、スティーヴンソンのそれは *The cruelest lies are often told in silence*. [もっとも残酷な嘘は、しばしば沈黙のうちに語られる])と silence サイレンスと結びつけられているものとなっている)、その直後、第三章中身に入って、の中で、

Now the Sirens have a still more fatal weapon than their song, namely their silence...「歌よりもおそろしいサイレンたちのもう一つの武器 それは沈黙……」

とのフランツ・カフカよりの引用がさらにもなされつつ([妖異サイレンの武器は沈黙なり]という引用がなされつつ)、それが『コンタクト』本編にて描かれる、

[外宇宙よりの電波探査計画]

と結節させられているとのコンテキストが現出を見ている([制御室に入ると、万事異常ないことをすぐに確認して安心する。窓ごしに、ニューメキシコの砂漠上数十キロにわたって並んでいる百三十一個の電波望遠鏡の一部が見えた。いずれも、空に向かって語りかけている、奇妙な機械の花のように見える])との表記引用部テキストは『コンタクト』作中にて重きをなす[宇宙電波探査計画供用施設]に関する描写である)。

以上、言及したうえでのさらなる引用をなす。

(直下、邦訳版『コンタクト(上)』(新潮「文庫」版 ——池央耿／高見浩訳——、重版重ねての第六刷版) にあつての p.99-p.100、p.103-p.105 よりの掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

第四章 素数

月、このわれらが哀れな異教の星に、モラビア派信徒は一人もいないのだろうか、そこに文明を植えつけ、キリスト教を広める宣教師はただの一人も訪れていないのだろうか。

——ハーマン・メルヴィル『ホワイト・ジャケット』(一八五〇)

沈黙のみが偉大である。他のすべては弱点にすぎない。

——アルフレッド・ドヴィニー『狼の死』(一八六四)

…(中略)…

彼は管制室に入った。電波探査のプロセスをモニターしている十二のテレビ・スクリーンを、ひとわり見まわす。<アークス>はヘルクレス座を調べ終えたばかりのところだった。地球から数億年も離れている、銀河系のはるか彼方にある広大な銀河の群、ヘルクレス銀河団の中心部をのぞいたのである。二万六千光年彼方の、銀河系をめぐる軌道に沿って移動している、重力的にかたまった約三十万個の星の群れ、M-13にも照準をしばってみた。

…(中略)…

望遠鏡の何台かは、依然ヘルクレス座にむけられている。聞きのがしたデータがあったら、拾い直すためだ。残りの望遠鏡はすべて、その隣の天空領域、ヘルクレス座の東の星座にむけられている。いまから数千年前、東地中海に住んでいた人々の目に、その星座は絃(げん)を張った楽器のように見えたらしく、ギリシャ人のカルチャー・ヒーロー、オルフェウスと結びつけられた。その星座は"こと座"と呼ばれている。

…(中略)…

声が急にうすれて制御台に目が吸いよせられた。突然、警告灯が眩く点滅しはじめたのだ。"強度 VS 周波数"と記されたディスプレイ上で、垂直の棒線が急上昇しつつあった。

「おい、見ろよ、単色信号だぜ」

"強度 VS 時間"と記された、別のディスプレイでは、ひとまとまりのパルスが左から右に流れてスクリーンから消えている。

「これは数字だな」ウィリーが、かすれた声で言った。

(国内で流通している訳書よりの掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

上記引用部に対するオンライン上より確認できるところの Contact (1985) の原著版テキストも下に挙げておく。

(直下、カール・セーガン CONTACT 原著にあつての CHAPTER 4 Prime Numbers 冒頭部よりの引用をなすとして)

CHAPTER 4 Prime Numbers

Are there no Moravians in the Moon, that not a missionary has yet visited this poor pagan planet of ours to civilize civilization and Christianize Christendom?

—HERMAN MELVILLE White Jacket (1850)

Silence alone is great; all else is weakness.

—ALFRED DEVIGNY La Mort du Loup (1864)

The duty officer entered the control area. He made a quick survey of dozens of television screens monitoring the progress of the radio search. **They had just finished examining the constellation Hercules. They had peered into the heart of a great swarm of galaxies far beyond the Milky Way, the Hercules Cluster--**a hundred million light-years away; they had tuned in on **M-13**, a swarm of 300,000 stars, give or take a few, gravitationally bound together, moving in orbit around the Milky Way Galaxy 26,000 light-years away; [...]

A few of the telescopes, the duty officer could see, were devoted to picking up some missed data in Hercules. The remainder were aiming, boresighted, at an adjacent patch of sky, the next constellation east of Hercules. To people in the eastern Mediterranean a few thousand years ago, it had resembled a stringed musical instrument and was associated with the Greek culture hero Orpheus. It was a constellation named Lyra, the Lyre.

[. . .]

His voice trailed off as an alarm light flashed decorously on the console in front of them. On a display marked "Intensity vs. Frequency" a sharp vertical spike was rising. "Hey, look, it's a monochromatic signal." Another display, labeled "Intensity vs. Time," showed a set of pulses moving left to right and then off the screen. "Those are numbers," Willie said faintly. "Somebody's broadcasting numbers."

(現行はオンライン上より確認なせるところの原著よりの引用部はここまでとしておく)

上にての掻い摘まんでの引用部(邦訳文庫版『コンタクト』上巻 p.99-p.100、p.103-p.105より引用したところ)は先立って掻い摘まんでそこよりの引用なしたところ(邦訳文庫版『コンタクト』上巻 p.70-p.72より引用したところ)と同文に[Silence]に対するこだわりが垣間見れるとの按配のものである(沈黙のみが偉大である。他のすべては弱点にすぎない。——アルフレッド・ドヴィニー『狼の死』(一八六四) Silence alone is great; all else is weakness.-ALFRED DEVIGNY La Mort du Loup (1864)と記載されていることにそのことが垣間見れるとの按配のものである)。

先立って引用なしのように[サイレンス]と[サイレン]の掛け詞をカール・セーガンが『コンタクト』にて目立つように持ち出している(章にての冒頭部にて The cruelest lies are often told in silence. [もっとも残酷な嘘は、しばしば沈黙のうちに語られる]との『ジキルとハイド』でも有名な作家 Robert Stevenson の言を引いたうえでのこととしてそうした掛け詞 —— “ Now the Sirens have a still more fatal weapon than their song, namely their silence... Someone might possibly have escaped from their singing; but from their silence, certainly never. ” 「歌よりもおそろしいサイレンたちのもう一つの武器。それは沈黙……彼女らの歌を逃れる者あろうともその沈黙から逃れうる者は一人としていない」とのフランツ・カフカ Franz Kafka 作品に由来する掛け詞—— を持ち出している)ことに鑑みて、要するに、そこにも[サイレン]へのこだわりがあると見える。

そうした部にて

[外宇宙よりの電波探査計画] (架空のアーガス計画というもの)

という小説『コンタクト』にて重きをなす計画が

「ヘラクレス座の M13 界限を調べて成果が得られなかった直後にその近傍の [琴座方面] (作中にて(再度の引用をなすところとして)残りの望遠鏡はすべて、その隣の天空領域、ヘルクレス座の東の星座にむけられている。いまから数千年前、東地中海に住んでいた人々の目に、その星座は絃(げん)を張った楽器のように見えたらしく、ギリシャ人のカルチャー・ヒーロー、オルフェウスと結びつけられた。その星座は"こと座"と呼ばれている(原著にては “ The remainder were aiming, boresighted, at an adjacent patch of sky, the next constellation east of Hercules. To people in the eastern Mediterranean a few thousand years ago, it had resembled a stringed musical instrument and was associated with the Greek culture hero Orpheus. It was a constellation named Lyra, the Lyre. ” と表記されているところ))
より電波を受信する」

とのかたちで急転直下の展開を見せだしたということが描かれているというわけである(※)。

(※『コンタクト』でそこよりの電波の受信がなされるとの設定が採用されている琴座とは(小説それ自体に見るように)ヘラクレス座と接する領域となる。疑わしきにあつてはオンライン上より即時に確認できる星座の図などを参照いただきたいが、例えば、英文 Wikipedia [Lyra] 程度の媒体にても現行、

“ **Lyra is a small constellation. It is one of 48 listed by the 2nd century astronomer Ptolemy, and is one of the 88 constellations recognized by the International Astronomical Union. [. . .] Its principal star, Vega (Abhijit in Sanskrit), a corner of the Summer Triangle, is one of the brightest stars in the sky. Beginning at the north, Lyra is bordered by Draco, Hercules, Vulpecula, and Cygnus.** ” (大要として)「琴座(ライラ)はプトレマイオスに 48 星座に数えられることとなった小さき星座となり、主星をヴェガ、冬の大三角形の一角をなす明るき星とする星座となる。琴座はりゅう座(ドラコ)、ヘラクレス座、こぎつね座、はくちょう座に囲まれている」と端的に表記されているような位置関係が具現化している)



著作権の切れた書籍を無償公開しているとの Project Gutenberg のサイトにて現行、全文ダウンロードできるとの著作 Astronomy for Young Folks (20 世紀前半活動の天文家 Isabel Lewis の手になる著作)にての [August] (8 月) 項目にて掲載の図。同図からしてすぐにご理解いただけようことか、と思うが、Lyra (琴座) と Hercules (ヘラクレス座) の位置関係はまさに近接関係を呈しているものとなっている。

これにて

[小説『コンタクト』にあつてヘラクレス座 M13 方面の探査の直後にこと座方面より外宇宙生命体由来の通信を受信することになったとの下りにてサイレンの声 (凶器ともなると言及される「サイレン」スこと沈黙とも) に対する言及が「執拗に」なされている]

とのかつたの出典表記となした (その意味合いについては本稿の続く補説 2 の部にて解説をなす所存で

ある)。

(尚、小さなことをくぐらと書くようだが、ここにて引用なしているのが章を隔てての[第三章]と[第四章]にあつての記載内容となることより「離隔があるところから引用をなして、それがつながるように述べている。であるから、こじつけがましくもとれる」

と(一知半解といったかたちで)とらえる向きもあるかもしれない。

ゆえに書いておけるが、[こじつけ]と見なされるような位置的離隔も内容的離隔もここでの関係性にまつわる話にはさして認められ「ない」とのことがある。

第一。小説 Contact『コンタクト』原著は計 24 章からなるが —— ちなみに邦訳されての『コンタクト』(新潮社)文庫版上下巻では全三部に分かたれ、第一部は計九章、第二部は計九章、第三部は計六章との訳書特有の章の割り振りが(章のタイトルは原著そのままに)なされている —— 、そうもして 24 章からなる『コンタクト』にあつての第 3 章と第 4 章の前半部描写とのことであれば、紙幅にあつての離隔はさしてないこと、お分かりいただけるだろう。

第二。内容上の離隔もさしてないということがある。すなわち、[それまでなしのつづてであつた宇宙探査計画にまつわる一連の描写である][サイレンスとサイレンの関係性を想起させるやりようが連続して第三章および第四章でとられている]、そういう意味で内容上の隔たりもない(それがゆえにこじつけがましい話をなしているわけでもない)ということがある)

表記の通りの流れと小説 The Sirens of Titan『タイタンの妖女』にあつてはその冒頭部題句が意図不明に

“ Every passing hour brings the Solar System forty-three thousand miles closer to Globular Cluster M13 in Hercules — and still there are some misfits who insist that there is no such thing as progress. ” 「一時間ごとに太陽系は四万三千マイルずつへラクレス座の M13 球状星団へと近づいている —— それなのに、進歩なんてものはないと主張する非順応者がまだなくなるらない」

とのものとなつている(それは『タイタンの妖女』という作品それ自体の著名性がゆえにか英文ウィキペディアの[Messier 13]項目(M13 項目)にても言及されるような題句となる —— [出典\(Source\)紹介の部 65\(11\)](#) ——)とのことを複合顧慮なせば、[へラクレス座 M13] と [サイレン] に対する目立つての関連付けをもつてして『タイタンの妖女』(ザ・サイレンズ・オブ・タイタン / 1959 年初出) と小説『コンタクト』(原著 1985 年初出) が相通ずることはお分かりいただけることか、とは思う。そして、それは [ブラックホールとの関係] が問題となる繋がり合い「でも」ある。

第一。小説『タイタンの妖女』(人類養殖の究極目標が黒いドットマークにすぎなかつたとの粗筋を具備している作品) は既述のようにブラックホールとの兼ね合いでの不可解な先覚性が問題となる作品である(ベテルギウスとガンマ線バーストにまつわつてのやりようや作者カート・ヴォネガットの他作品にみる問題となるやりようの絡みでもそうもなる —— 先立つての[出典\(Source\)紹介の部 65\(4\)](#)を参照のこと ——)。

第二。小説『コンタクト』は [[ゲート] となるブラックホールないしワームホールのこの地球上での生成] が作品の主要テーマとなつているとの作品である(後にての補足 2 の段で当該の作品よりの原文引用をなしながら詳述に詳述を重ねていく所存であるが、小説『コンタクト』はへラクレス座近傍の琴座ヴェガから受信された外宇宙文明由来の電波暗号が解読され、そちら電波暗号に入れ込まれていた [ブラックホールないしワームホール生成装置たるゲート装置](人類サイドでは建設段階も含めて何のためのもものなのか、機序さえ理解されていなかつたものの使用して見てゲート装置と判明したとの装置)が構築されるとの筋立ての作品となつている)。

上にての出典紹介部にて訴求なししているように小説『タイタンの妖女』と小説『コンタクト』の繋がりがまた、と同時に、[911の事前言及]とも相互に相通ずるものとなっている(なってしまう)とのことをも本稿の後にての段、**補説2**の中頃から委曲尽くして摘示なししていく所存であるが、とにかくもってして、である。以上でもって細々とした話に加えてさらにもって細々としたことを書き記してきたこのこでの話、後の段に向けての[布石]としての

[カート・ヴォネガット作品 *The Sirens of Titan* 『タイタンの妖女』とカール・セーガン作品 *Contact* 『コンタクト』の接合性についての話]

を終えることとする。

さて、ここで付け加えて述べもしておくが、本**補説1**の部では

「何故、米国文壇の寵児・米国現代文学の旗手とされてきたとのカート・ヴォネガット作品「ら」が[奇怪なる予見性]を[911の事件]および[ブラックホール生成問題]との絡みで帯びていると述べられるのか」

の根拠となるところを相当量の紙幅を割いて今まで延々と解説してきたわけではあるも、いくら微に入っの解説をなそうとも、いや、であればこそ、

「偏執狂の類(昔ならば[小人]とでも表されていもしたであろう、[非本質的な、生きるうえで不必要なことに細々と[趣味]とは言えぬかたちで拘るとの特性の体現者]でもいい)が延々と無意味なる因数分解をなしているだけのことにすぎない」

と[勘違い]する向きがあるかもしれないとも見ている(話柄のありようから、ある種、当然の危惧・懸念かと自身、とらえてもいるところとして、である)。

そのように考えていもするため、次のこと、(ここ**補説1**の締め部のにて)、一応、述べておくこととする。

「ここでは[補説]が[補説]たる所以として「補ってもの話」をなしている。そこにいう「補ってもの話」が向かう先、[補われての対象]となるところは、(はきと述べ)、[人類にどういふ未来が用意されているのかの嗜虐的な予告]の「実在」の論拠をはきと、そう、具体的かつ客観的に(ひたすらに論拠を挙げながら)指し示すものとなっている。

補ってもの話がそれを意識しての[補いもして摘示せんとしていることの対象]が(その券面に偽りなければ)そうもして「極めて重大なこと」であるため、本段でなしてきたところでのひたすらに細かきことを突き詰めての話とて(そうしたものに過ぎぬと見えても)[偏執狂の無意味なる因数分解]の問題では済まされないところである(と書き手たる身として強調したい)。

人間という種に自浄能力が僅かでもあるのならば、そう、[[沈黙]でもって残酷な嘘を吐き通す——先にて **The cruelest lies are often told in silence.**「最も残酷な嘘らはしばしば沈黙のうちに語られる」との引用がカール・セーガンによってなされていることを問題視もしたとのことで「かくも、」の言いまわしを用いている——]

ことを[殺されても]遵守する(骨の髄まで脳死状態のゾンビのような存在に成り下がっている)ような[生きる能力さえないとの種族]でなければ、(どうしてそういうことがあるのか、

の[機序](作用原理)の問題は置いておき、[現象]から指し示されるとの)そうしたことに対する重み付けを見誤らないはずであろう」

上にての申しようが至当なるものか否か。

片々たるところでの筆致や知識水準からなどでもいい、書き手たるこの身の[程度]の問題につき思料いただいたうえででも確認いただきたいものである。ここ補説1に先行する段で何を具体的にどう指し示しているのか、また、ここ補説1に後続する段(これ以降の補説2から補説4と振っての段および長大なる本稿にての後半部)にあつて

[[属人的主観などとは全くもって無縁なところにて]何をどのように指し示しているのか]

との観点でもってして確認いただきたいものである(本来ならば、「貴殿らの[生き死に]に関わるところである。[死]を望むのでなければ、そう、状況を理解して事態に抗う[意志]の力があるのならば、本稿にて指し示しているようなことの理非曲直について確認をなして然るべきだろう」と上席からの言いようのように申し述べてもいいところかとの自負もこの身にはあるのだが、ここでは[常識]に配慮しての申しようをなしている)。

(以上述べたところでここ補説1の部に一区切りをつけたい)

さらにもって付け加えもしての部として

いまひとつ補説2の段に移行する前にカート・ヴォネガット小説『サイレンの妖女』と「他の」著名作品——小説『コンタクト』以外の他の著名作品——の関係性について指摘をなしておきたいと思うことがあったので付け加えての表記をここにたなしておく。

多くの人間がその名だけは耳にしていることであろうと思われる作品として

2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』

という作品がある。

同『2001年宇宙の旅』、映画版における、

[猿が黒い石碑状の物体によって[知能]を与えられて進化していく姿がいかめしくも荘厳な曲(リヒャルト・シュトラウスがニーチェ著作よりインスピレーションを得て作曲したとのことが知られる著名な交響詩『ツァラトゥストラはこう語った』冒頭部)とともに描かれる冒頭シーン]

があまりにも有名であるために[他の多くの商業的作品](CMなど)にパロディー化などされながらも取り上げがなされてきたとの作品でもある。

基本的解説をくたくたくもなすことの手間を避けるためにウィキペディアのような目立つ媒体より引けば、そちら『2001年宇宙の旅』とは

(直下、目立つところにあつての「現行にての」和文ウィキペディア[2001年宇宙の旅]項目の[あらすじ]の節の記述を掻い摘みもしながら引用なすとして)

『2001年宇宙の旅』(英:2001: A Space Odyssey)は、アーサー・C・クラークとスタンリー・キューブリックがアイデアを出しあつてまとめたストーリーに基いて製作

された SF 映画および SF 小説である。映画版はキューブリックが監督・脚本し、1968 年 4 月 6 日にアメリカで初公開された。小説版は同年 6 月にハードカバー版としてアメリカで出版されている。

…(中略)…

遠い昔、ヒトザルが他の獣と変わらない生活を送っていた頃、黒い石板のような謎の物体「モノリス」がヒトザルたちの前に出現する。やがて 1 匹のヒトザルが謎の物体の影響を受け、動物の骨を道具・武器として使うことを覚えた。獣を倒し多くの食物を手に入れられるようになったヒトザルは、反目する別のヒトザルの群れに対しても武器を使用して殺害し、水場争いに勝利する。喜びのあまり、骨を空に放り上げると、これが PAN AM のマークをつけた宇宙船に変る(人類史を俯瞰するモンタージュとされる)。

…(中略)…

18 か月後、宇宙船ディスカバリー号は木星探査の途上にあつた。乗組員は船長のデビッド・ボーマンとフランク・プールら 5 名の間人(ボーマンとプール以外の 3 名は出発前から人工冬眠中)と、史上最高の人工知能 HAL (ハル) 9000 型コンピュータであつた。

…(中略)…

(HAL の造反から)唯一生き残ったボーマン船長は HAL の思考部を停止させ、探査の真の目的であるモノリスの件を知ることになる。

…(中略)…

単独で探査を続行した彼は木星の衛星軌道上で巨大なモノリスと遭遇、スターゲイトを通じて、人類を超越した存在・スターチャイルドへと進化を遂げる。

(以上、誤りが無いこと、把握している映画版『2001 年宇宙の旅』粗筋解説部よりの記述の引用とする)

との作品ともなる (ちなみに上は映画版のストーリーとはなるが、小説版のストーリー展開についてもほぼ共通しての流れが当てはまり、に関しては、英語版 Wikipedia[2001: A Space Odyssey (novel)] 項目の現行にての Plot summary[作品概略] の節にて(掻い摘みながら引くとして) “ **In the background to the story in the book, an ancient and unseen alien race uses a device with the appearance of a large crystalline monolith to investigate worlds all across the galaxy and, if possible, to encourage the development of intelligent life. The book shows one such monolith appearing in ancient Africa, 3 million years B.C. (in the movie, this was altered to 4 million years), where it inspires a starving group of the hominid ancestors of human beings to develop tools. [. . .] The book leaps forward 18 months to 2001, to the Discovery One mission to Saturn. Dr. David Bowman and Dr. Francis Poole are the only conscious human beings aboard Discovery One spaceship. Their three other colleagues are in a state of suspended animation, to be awakened when they near Saturn. The HAL 9000, an artificially intelligent computer addressed as "HAL," maintains the ship and is a vital part of life aboard. [. . .] Bowman is transported via the monolith to an unknown star system. During this journey, he goes through a large interstellar switching station, and sees other species' spaceships going on other routes; he dubs it the "Grand Central Station" of the galaxy. Bowman is given a wide variety of sights, from the wreckage of ancient civilizations to what appear to be life-forms, living on the surfaces of a binary star system's planet.** ” と表記されているとおりである。以上、英文記述は直上にて引用なした和文ウィキペディア表記とほぼ似通ったものとはなるが、ただもって注記しておきたいのは [小説版では 300 万年の猿への介入が描かれているのに対して映画版では 400 万年前であるなどとされている] [モノリスは映画版では黒曜石状の不透明なるものであるところが小説版では透明な結晶状構造のものである] [映画版では [木星 Jupiter] とされているところの目的地が小説版では [土星 Saturn] とされている] [ボーマンが超人類に進化するとのプロセスが映画版に比して小説版では細やかに設定付けされている] とのことにまで言及していることに異動がある ——うち、多くは直上の和文ウィキペディア(映画粗筋表記)と

上の英文ウィキペディア(小説粗筋表記)それそのものから特定できるところである——)。

上のように目立つところ、基本的なところから内容紹介した『2001年宇宙の旅』(1968年初出の作品)と本稿にあってここに至るまでその問題性について長々と解説なしてきたとの『タイタンの妖女』(1959年初出)との間には明瞭なる記号論的繋がり合いがあり、そこに

[ブラックホールの影]

がちらつきもするとのことがある(とのことをここに問題視する)。

それにつき、まずもっては

[以下にての解説表記]

を参照されたい(※以下にての解説表記については本稿公開をなすこととしたサイトの一で試験的に従前より呈示していたページでの訴求事項をほぼそのまま踏襲しての解説表記ともなる。その点もってして、—ここでといったことをわざわざくださしくも述べるのも何なのではあるが—以下解説表記の元となりもしている記述を含む手前手仕事の媒体(ウェブページ)については、である。ほとんど顧みられていない節もあり、また、水面下訴求用にさえ用いていなかったとのものがゆえの甘えがありもし、そして、急場を縫っての作成形態(巧遅を犠牲にしての拙速に失しての作成形態)などもあって(本稿以上の)詰め込み過ぎによる内容の不明瞭さ、重大かつ基本的なところでの誤記の介在(たとえば、赤色巨星 Red Super Giant を赤色矮星 Red Dwarf などと表記してしまっているような我ながら「あまりにも基本的なところで。」と忸怩たるところがある重大な誤記などの介在)、典拠呈示の不十分さなどを問題となる側面を多く伴いもしているとのものでさえありもするのだが、他面・反面、多く重要なことを(反応を手探りするとの試験的なところながら)訴えてきたつもりであるとの自負もあるとの媒体「とも」なり、それがゆえにもものほぼそのまま記述踏襲をなしていること、断っておく—(以上、仮にもし、万々一、言論の来歴確認をなすような奇妙な向きがいた場合を期しての半ば閑話休題がかつての付記とした)—)。

(極めて著名なる 2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』(原著初出1968年)と刊行時期で同『2001年宇宙の旅』に先行する The Sirens of Titan 『タイタンの妖女』(原著初出1959年)の間には次のようなかたちでの目立つての結節点が存在する)

I. 『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン(タイタンの妖女)』および『2001年宇宙の旅』の両作ともども「土星(英語表記 Saturn) 界限へのスペース・ミッション」が作品主題となっている。

(→1959年初出の『タイタンの妖女』では主人公クラスの主要人物マラカイ・コンスタントと同マラカイ・コンスタントの息子クロノらが土星の衛星タイタンに逗留するサロ——本稿の先立っての**出典(Source)紹介の部 65(3)**にて関連するところの記述を引いているように[黒ぼちひとつよりなる親書]の伝達ミッションの完遂のためだけに人類文明を育成してきたとの設定の異星系文明の使節——の元に宇宙船代替部品を届けに行くとの結末に向けて物語が進んでいく——※同じくものことに関しては目立つところの英文 Wikipedia [The Sirens of Titan]項目にあって現行、“Rumfoord's encounter with the chrono-synclastic infundibulum, the following war with Mars, and **Constant's exile to Titan** were all manipulated via the Tralfamadorians' control of the UWTB. Stonehenge, the Great Wall of China and the Kremlin are all messages in the Tralfamadorian geometrical language, informing Salo of their progress. [. . .] **As it turns out, the replacement part is a small metal strip, brought to Salo by Constant and his son Chrono (born of Rumfoord's ex-wife).**”(訳として)「時間等曲率漏斗(クロノ・シンクラスティック・インファンディブラム)とラムフォードの接触、そして、

続く火星勢力との戦争、コンスタントのタイタンに向けての放浪は[UWTB(Universal Will to Become; そうなるべくしての万有意志)]の作用を用いてのトラルファマドール人の制御による操作の結果であり、ストーンヘンジ、中国の万里の長城、クレムリンらは(土星の衛星タイタンにて足止めをくらっている)サロに進捗状況を報せるためのこれすべてトラルファマドール人の地理的表現であった。代替部品が小さな金属一片であると判明したところで(主要人物たるマラカイ・コンスタントおよび彼の息子のクロノ(ラムフォードの前妻とマラカイ・コンスタントの間にできた子)が(タイタンに逗留する)サロの元へ送られることになった)と記されているところとなる(尚、[Chrono クロノ]という[主要登場人物(マラカイ・コンスタント)の息子にして、かつ、タイタンのサロの元に部品を届けに行く役割を負った子供]の名前は Chronos クロノスという[ギリシャ神話の時の神]にして Titan (ゼウスに敗れたギリシャ神話上の古き神々タイタン)の代表者である Cronos クロノス(ローマ語表記サトルナスが転じてサターンこと土星となっているとの神格)のことを想起させる名でもある([タイタン・クロノス] と [時の神・クロノス] の関係性については本稿にての先行する段にて解説しているとおりでである)のだから、[作品表題に付されての Titan (ギリシャのタイタン族に命名由来を持つ土星衛星) / Saturn (土星) にまつわたるの堂に入つてのやりよう] が感じられるところ「でも」ある——。他面、1968年初出の『2001年宇宙の旅』では(映画版にあつては[木星]Jupiter が最終目標地点であつたところを)[土星 Saturn] が目標地点として設定してある——※同文に目立つところの英文 Wikipedia[2001: A Space Odyssey (novel)]項目より引けば “ The book leaps forward 18 months to 2001, to the Discovery **One mission to Saturn**. Dr. David Bowman and Dr. Francis Poole are the only conscious human beings aboard Discovery One spaceship. ” (訳として)「物語はそれから18ヶ月後の2001年、ディスカバリー・ワン号による土星への到達ミッションにまつわたるの場へとうつる。デヴィッド・ボーマン博士とフランシス・プールのみが(冬眠ポットに入らずに)覚醒状態を維持しながらディスカバリー・ワン号にて活動している人間達だった」と端的に表記してあるとおりでである——)

II. 両作『タイタンの妖女』『2001年宇宙の旅』ともホメロス古典『オデュッセイア』

(本稿にての先行するところの出典(出典(Source)紹介の部46)にあつて当該の古典そのものより文言引いて示しているように[トロイア攻囲戦で木製の馬の奸計を用いてギリシャ連合軍のトロイア勢に対する皆殺し伴つての勝利をもたらした武将オデュッセウス]が[サイレン Siren] [スキュラ Scylla] [カリュブデス Charybdis]ら怪物が控えている航海の難所をふりきらんとして船旅の同道者らを失いつつ [女神カリュプソの島(オーギュギア一島)]に漂着するといった苦難の旅を経験する、そして、故郷に帰郷するとの内容の叙事詩) と「濃厚に」結びついているとのことがある。

(→ [直上にての解説部]にても言及しているように『タイタンの妖女』原題たる The Sirens of Titan にあつての Sirens とは叙事詩『オデュッセイア』(ὈΔΥΣΣΕΙΑ)に登場を見る人面鳥身の魔声でもつてして船を沈没に誘(いざな)う怪物となる。他面、これまた [上にての解説部]に言及しているように『2001年宇宙の旅』に登場を見ている人間のフリを難なくやり通せるだけの [強い AI] (Strong AI)の領域に入つての HAL9000 の似姿についても [サイクロプス Cyclops (オデュッセウスが叙事詩『オデュッセイア』の前半部で苦しめられた一つ目の巨人)のメタファーであろうとの識者分析] (がなされるだけの背景)が介在していることが問題となりもし、かつもつて、より直感的なところとして同 HAL9000 の似姿が [Siren (Alarm System) を想起させる明滅する

Emergency vehicle lighting[緊急車輛敷設ランプ]状の外観]から[怪物サイレン]を想起させるとのこともある ——英文 Wikipedia[Interpretations of 2001:A Space Odyssey] 項目(直訳すれば [2001 年宇宙の旅に対する解釈(論)] 項目)に(以下、引用なすとして) “ Homer's epic poem The Odyssey, which is signalled in the film's title. Wheat notes, for example, that the name "Bowman" may refer to Odysseus, whose story ends with a demonstration of his prowess as an archer. He also follows earlier scholars in connecting the one-eyed HAL with the Cyclops, and notes that Bowman kills HAL by inserting a small key, just as Odysseus blinds the Cyclops with a stake. ” との表記がなされるだけのことがありもする。そも、『2001 年宇宙の旅』の英文原題 2001:スペース・オデッセイに見る【オデッセイ】Odyssey とは叙事詩『オディッセイア』の英文表記であり、それが一般名詞化して【壮大な物語】を意味する語に転化したものであるとのことがあるとの中で『2001 年宇宙の旅』と叙事詩『オディッセイア』との関係がたとえばもってして『2001 年宇宙の旅』作中登場人物(ボウマン; 射手との語感に通ずる名の主要登場人物)が【射手としての(叙事詩『オデュッセイア』主人公たる)オデュッセウス】に言及する作品ありようなどとして表出していることを(先述の作中登場人工知能 HAL がキー解除をもってしてボウマンに沈黙させられたことを [(オデュッセウスに尖った木片にて眼を潰された『オデュッセイア』登場の) 独眼巨人サイクロプスに仮託する式] などと共に) 問題視するとの欧米圏一部識者評論が存在している、それだけの背景がそこにあるわけである——)

III. 両作品共々、「土星の衛星に深くも通ずる人類操作にあつての遠大な目標」が作品主題となっているとのことがある。

(→本稿にての出典(出典(Source)紹介の部 65(3))にても解説のように小説『タイタンの妖女』にあつては[黒ぼち(single-dot)ひとつよりなる親書]を送達するとの使節としての役割のためだけにサロという存在、そして、同機械生命体サロの背後に控える高度異星文明が人間文明を永年に渡って育て上げたとの設定の作品となっている。他面、『2001 年宇宙の旅』についても[モノリス](黒曜石状の石碑)らを宇宙に播種した先進文明が遠大な計画の一環として人類種を育て上げたとの作品ともなっている ——目につくところの英文 Wikipedia[2001: A Space Odyssey (novel)]項目冒頭にあつての Plot summary の部にて “ In the background to the story in the book, an ancient and unseen alien race uses a device with the appearance of a large crystalline monolith to investigate worlds all across the galaxy and, if possible, to encourage the development of intelligent life. The book shows one such monolith appearing in ancient Africa, 3 million years B.C. ” (大要訳として)「同書(『2001 年宇宙の旅』)の物語の背景となるところとして古代の見えざる外宇宙種族が銀河系すべての世界を網羅的に探査するために[結晶のように透明なモノリス](訳注:小説ならぬ映画版では黒曜石状になっているが、小説版では透明なクリスタルのようなありようが強調されている)を伴つての機構を用い、そして、可能ならば、知的文明の進歩を促進するとのやりようをとつたとの設定がなされている(といった設定に関わるところで『2001 年 宇宙の旅』小説版では月でのモノリス発見・通信開始に呼応して土星の衛星ヤペタスへのミッションが開始されるとの筋立てが採用されてもいる)。同書はそうしたモノリスのうちの一柱が 300 万年前のアフリカに現われたと描いている」と解説してあるとおりである(尚、私見を述べておけば、以上のよ

うなフィクション筋立てをして [[本当のことたりうる]と楽観的に真に受ける] のは多幸症気味、あるいは、半ば脳死状態の騙され人ならば大いにありそうなことであるとも見ている。につき、筆者としては本稿の先だつての段で解説してきた John Milton の Paradise Lost『失樂園』の設定、[[後発種族]に[罪]と[死]を進呈する結果に通ずるとの式で知恵(文明)を接受した](本稿にての出典(出典(Source)紹介の部 55)から出典(出典(Source)紹介の部 55(3))で[今日的な観点で見た場合のブラックホールに相通ずる描写]との絡みで原文引用なしたところの設定)とのことの方がよりもってありうる(more persuasive)ことであろうと見ているとも申し述べておく——)

IV. 『タイタンの妖女』『2001年宇宙の旅』両作品共々、「時空間の縛りを無視する能力を獲得するに至った超人」が作中にて重きをなし、また、彼ら「時を超越した」あからさまなる「超人」らが遠大な人類操作プラン —土星の衛星に関わるところの遠大な人類操作プラン— に重きをもつて関わることになる(使喚(しそう;使役)されるのかたち)に近しき式で関わることになる)とのありようが描かれている作品となっている。

(→『タイタンの妖女』では時空間曲率漏斗(なるもの)に入った主要登場人物のラムフォードが波動存在と化した後、土星の衛星タイタンに逗留するサロと交友を結んでの中でそれと知らずにサロのミッションの手助けをさせられることになるとの粗筋が具現化を見ている ——※再度、ほぼ同じくものところから引けば、英文 Wikipedia[The Sirens of Titan]項目にあつて現行、The chrono-synclastic infundibula are places where these "ways to be right" coexist. When they enter the infundibulum, Rumfoord and Kazak become "wave phenomena", somewhat akin to the probability waves encountered in quantum mechanics. They exist along a spiral stretching from the Sun to the star Betelgeuse. When a planet, such as the Earth, intersects their spiral, Rumfoord and Kazak materialize, temporarily, on that planet. [. . .] Rumfoord's encounter with the chrono-synclastic infundibulum, the following war with Mars, and Constant's exile to Titan were all manipulated via the Tralfamadorians' control of the UWTB. (訳として)「時間等曲率漏斗(クロノ・シンクラスティック・インファンディブラム)はそうなるべくしてのことが併存するところの場であった。ラムフォードと(彼の愛犬である)カザックが時間等曲率漏斗(クロノ・シンクラスティック・インファンディブラム)に入った後、彼らは[波動存在](ウェイブ・フィノーミナ)、量子力学における確率波動の如き存在へと変じた。彼らは太陽からベテルギウスにかけての渦にかけて存在することとなったのだ。地球のような惑星が渦と交点をもつた際、ラムフォードとカザックは一時的に惑星上に物質化するとの存在になったのである。…(中略)…時間等曲率漏斗(クロノ・シンクラスティック・インファンディブラム)とラムフォードの接触、そして、続く火星勢力との戦争、コンスタントのタイタンに向けての漂流は[UWTB(Universal Will to Become: そうなるべくしての万有意志)]の作用を用いてのトラルフアマドール人の制御による操作の結果であった」と記述されているとおりである—— 。 他面、『2001年 宇宙の旅』では土星(映画版では木星)へのミッションに参加した後、期せずして宇宙に放り出された主要登場人物の宇宙飛行士デヴィッド・ボーマンが人間を越えたところにある存在 Star Childなるものに進化させられ、[時空間を超越する存在]として目的の一部をなすに至るさまが(後にてのシリーズもののありようにも関わりところとして)描かれている ——※英文 Wikipedia[2001: A Space Odyssey (novel)]項目にて Bowman is transported via the monolith to an unknown star system. During this journey,

he goes through a large interstellar switching station, and sees other species' spaceships going on other routes; he dubs it the "Grand Central Station" of the galaxy. Bowman is given a wide variety of sights, from the wreckage of ancient civilizations to what appear to be life-forms, living on the surfaces of a binary star system's planet. He is brought to what appears to be a pleasant hotel suite, carefully constructed from monitored television transmissions, and designed to make him feel at ease. Bowman goes to sleep. **As he sleeps, his mind and memories are drained from his body, and he is made into a new immortal entity, a Star Child, that can live and travel in space.** (大要訳をなすとして)「(ディスカバリー号で唯一生き残った)ボーマン船長は(異星系文明に由来する黒曜石状の石柱である)モノリスの作用によって未知の星系に転移させられた。この旅の過程で彼は大規模な恒星間移動通路のありよう、そこを行き交う他の種族の宇宙船らを目にしながらいそ[グランド・セントラル・ステーション]に至った。ボーマンは恒星系にあつての往古文明の崩壊からうまれいずる生命の形態に至るまでの幅広くもの知識を与えられてホテルの一室にいるような快適環境(の幻影)を与えられながら眠りにつき、その眠りの中で彼の精神と記憶は肉体から抽出され、宇宙を旅することが可能なるスターチャイルドなる不死なる存在へと変ずることになった」と記載されているところでもある——)

直上くどくもなつての摘事項(I. から IV. と分かちての摘示事項)を通じてお分かりのことか、とは思いますが、The Sirens of Titan『タイタンの妖女』(1959)と 2001: A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』(1968)の間には

(一目瞭然たる)【顕著なる類似性】

が存在している(下らぬ人間はそのようなことが「ある」との事実に関して剽窃・被剽窃関係程度の問題に話を矮小化させるかもしれないが、のようなことは重要な問題ではない。尚、一応述べておくが、『2001年宇宙の旅』には The Sentinel(邦題)『前哨』(1948年初出)のようなアーサー・クラークによるプロトタイプとなった作品があることがよく知られているが(英文 Wikipedia[2001: A Space Odyssey (novel)]項目にも “ The story is based in part on various short stories by Clarke, most notably "The Sentinel" (written in 1948 for a BBC competition, but first published in 1951 under the title "Sentinel of Eternity"). ”と記載されているとおりで)、そちら小説 The Sentinel 内容 ——まるでセンチネル(番兵・門番)のような役割を果たしての異星系文明由来の Pyramid(結晶ピラミッドなるもの)が月にて発見されるとのそちら短編小説の内容——をも検証している人間として申し述べておけば、同作 The Sentinel には以上、ここまでにて呈示してきたような結節点は具現化して「いない」)。

The Sirens of Titan『タイタンの妖女』と 2001:A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』は双方ともに
「土星(近傍)行きが作中にて重きをなす作品であり」
「古典『オデュッセウス』と密接に結びつく作品であり」(両作品とも表題からして『オデュッセウス』との連結関係を呈している)
「[人ならざる者による遠大で機械的な目的を作中主題に据えた作品]であり」
「[人類の中から超人類に進化し、時空間の縛りを無視して具現化する能力を獲得した存在]が目的達成のために使役されている作品である」
との観点で際立った共通点を有している(：殊にトロイア城市を木製の馬の奸計で内側から破滅させたとの謀将オデュッセウスを主役に据えての古典『オデュッセウス』を介した結びつきが結びつきの度合を際立たせている、とも強調しておきたい)

The Sirens of Titan→【1959 A】

2001: A Space Odyssey→【1968 B】

1. Mission to Saturn (〔Mission to Titan (Saturn's Satellite) seen in 【1959 A】〕 ⇔ Mission to Saturn seen in 【1968 B】)

2. [Odyssey (Greek: ΟΔΥΣΣΕΙΑ)] Metaphor (【1959 A: Sirens】) ⇔ [【1968 B】: Cyclops Eyes and Red Emergency vehicle lighting (→Siren (Alarm System)) image of HAL 9000]

3. Theme related with the overall purpose of human history

4. Superhuman free from Time & Space (〔"wave phenomena" Rumford seen in 【1959 A】〕 ⇔ ["Star Child" Bowman seen in 【1968 B】])



Book XII of the Odyssey ⇒ Siren & Charybdis (Scylla)

上はオデュッセウスが海の妖異サイレンに際会した後、渦潮に呑まれることになったとの伝承に見るそちら状況を示すべくものコラージュとなる(画の上

の段ではハーバート・ドレイパーという画家の手になる絵画、**Odysseus and the Sirens (1909)**を挙げ、画の下段ではハリケーン・カトリーヌの宇宙空間よりの撮影写真に見る、渦潮と同文に対数螺旋構造を呈する渦巻き構図を挙げました。叙事詩『オデュッセイア』(すなわちもってして『2001年宇宙の旅』の原著タイトル、『2001スペース「オデッセイ」』にオデッセイとの語の由来となっている叙事詩)ではオデュッセウス—トロイア城塞に木製の馬の奸計で引導を渡した攻め手、ギリシャ勢随一の知将と伝承が語る存在—は同『オデュッセイア』第12歌で【サイレンらが航海者らを誘惑して座礁させる魔の海域】を越え、同第12歌で【渦潮の怪物カリュプティス】に吞まれて船旅同道のクルーを全て喪う。そして、身一つで女神カリュプソの島オーギュギア島、近世よりニュートンはじめ欧州一部識者に【アトランティス】と同一視されもしてきた(出典(Source)紹介の部43)との同島に漂着することになった(と伝わっている)。

以上のことを(最低限ながらも典拠—時間が押ししている中で本当に「最低限」としか表しようがない典拠— 挙げつつも)紹介したうえで書くが、

[2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』という作品が(世間一般にはそうしたことまで指摘されることはほとんどないものの)ブラックホール Black Hole「とも」結びつく]

との見立てがなせるからこそ極めて問題になる(いいだろうか、強意のための副詞、「極めて」が付くようなところとして[問題になる]のである)。

同じくものこと、**2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』という作品が(世間一般にはそうしたことまで指摘されることはほとんどないものの)ブラックホール Black Hole「とも」結びつく**とのことについては以下の**A. および B.**のポイントを参照されたい(ゾンビのように他の足を引っ張ることしかないとの知・情・意の欠損が甚だしいとの向きではなく、[嗜虐的な滅亡の途を歩ませられている]とのことが分かったならば、いかに絶望的状况であろうとといった状況に抗わんとする向きらにあっては参照されたい、ということである)。

A

前提となるところとしてまず述べるが、ポール・ハルパーン Paul Halpern という物理学者(本稿にての出典(出典(Source)紹介の部18)にあってもその著作——LHC 実験担ぎあげ本としての体裁を持つ**COLLIDER: The Search for the World's Smallest Particles (邦題)『神の素粒子—宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』**との著作——の内容を引いていたところの理論物理学の分野で博士号を持ち現合衆国フィラデルフィア科学大学教授との肩書きを持つ人物)はその著書、

Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts (邦題)『タイムマシン—ワームホールで時間旅行—』(丸善より訳書が出されているとの同著、粒子加速器による人為的ブラックホール生成や人為的ワームホール生成の話が可能性論としても全くもって取り上げられて「いなかった」時分に加速器に対する言及一切なしに[架空の超文明]が[詳細に言及されていないところの技術]で宇宙に存在しているカー・ブラックホールや人為生成してのワームホールの類をゲートとして使用できるかについて論じているとの著作ともなる)

にて次のとおりのことを表記している

(直下、ポール・ハルパーン著作の邦訳版『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』p.9 から p.12 より掻い摘まんでの引用をなすとして)

アーサー・クラーク原作、スタンリー・キューブリック監督の「2001年宇宙の旅」は、月旅行よりも冒険に満ちた宇宙間旅行を知りたいという一般の人々の想像力をとらえた。何百万の観客がこの画期的な映画を見、空間を巡り時間を旅することに想像を馳せ、驚嘆し、信じられないほど当惑もした。映画は原始人が道具を使用するとする最初の試みから始まる。そして、突然、話は未来(2001年)にとぶ。そこでは、人間の発明した道具として、棒きれと尖った石にかわって、コンピューターと宇宙船が登場する。月面基地で、木星の衛星から送られてきた不思議な信号を受信する。科学者は、その奇妙な現象を調べるために急遽調査船を組織する。

…(中略)…

ボーマン船長は木星の近くで宇宙船が運転不可能になってしまったのち、小さな宇宙船に乗ってその巨大な構造物にむけて進入していく。驚くべきことにその内部は空洞であって、たくさんの星が輝いているのである。えたいの知れない流れによって彼はモノリスに引き込まれ、ついには時間と空間の入れ替わった領域に到達する。そこでは、空間の中を高速で移動するが、時間はまったく変化しないのである。かれがその奇妙な世界を進んでいくにつれ、彼のもっていた時計は次第に進み方が遅くなり、ついには止まってしまう。

…(中略)…

ボーマンは銀河間の異動を可能にする宇宙の関門であるスターゲートを通じたのである。クラークの物語にしたがえば、この壮大な構造物は宇宙のはるかかなたに住む高度な知性をそなえた生命が星間空間旅行を高速化するために作り上げたことになっている。ボーマンは自分の時計がほんの数分進む間に、何十兆 km の距離を旅したのである。

…(中略)…

スターゲートが実際に存在すると何が起こるかを考えてみよう。スターゲートを宇宙空間の近道として使えば、宇宙船を使った長い旅や費用のかかる冷凍保存装置が必要ではなくなるのである。

(ここまでを訳書よりの引用部とする —※—)

(※注記:「時間と空間移動の関係が破綻している」ボーマンのもっていた時計の表示が止まってしまう」といった描写はスタンリー・キューブリック映画版『2001年宇宙の旅』にはまったくといっていいほど見受けられない。対して、映画版とほぼ期を一にして刊行された小説版にはそうした記述が克明になされている(少なくとも筆者手元にある早川書房より出されている『2001年宇宙の旅(決定版)』「第六部スターゲートを抜けて」の部にはそうした記述がみとめられるようになっている ——原著 2001: A Space Odyssey にての該当表記部は、(オンライン上より表記文言で検索いただければ、文献事実であるとのこと、捕捉いただけようが)、THROUGH THE STARGATE の章、Grand Central の節にての “There was no sense of motion, but he was falling toward those impossible stars, shining there in the dark heart of a moon. No - that was not where they really were, he felt certain. He wished, now that it was far too late, that he had paid more attention to those theories of hyperspace, of transdimensional ducts. To David Bowman, they were theories no longer. [. . .] Not only space, he suddenly realized, was involved in whatever was happening to him now. **The clock on the pod's small instrument panel was also behaving strangely. Normally, the numbers in the tenths-of-a-second window flickered past so**

quickly that it was almost impossible to read them; now they were appearing and disappearing at discrete intervals, and he could count them off one by one without difficulty. The seconds themselves were passing with incredible slowness, as if time itself were coming to a stop. At last, the tenth-of-a-second counter froze between 5 and 6. Yet he could still think, and even observe, as the ebon walls flowed past at a speed that might have been anything between zero and a million times the velocity of light.”との表記となる)——)

以上は1992年に原著刊行されての科学読み本、**Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts**(邦題)『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』にあって

[2001: A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』の劇中に「銀河間の異動を可能にする宇宙の関門であるスターゲート(宇宙空間のモノリス内部に展開する内的世界)が登場する]

とのことへの言及がなされているとの箇所となる。

そして、同じくもの著作(Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts)にあっては上に見る、

[(モノリス内部に展開する)時間と空間が入れ替わったスターゲイト]

につき、それが「ブラックホール特性」と結びつくの言いようが以下のようなかたちでなされもしている。

(直下、同じくもの書籍『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』、そのp.170よりの記述を引用するところとして)

「ブラックホールの地平線の内側には、時間と空間の逆転した領域があって、時間座標と空間座標の役割が入れ替わるのは本当である。もう少し専門的にいうと、時空のメトリックの役割が入れ替わるのである。空間座標が実数から虚数へ、時間座標が虚数から実数へと変わる。そうすると、時間と空間が入れ替わったといえるのである。時間方向には自由に移動できるが、空間方向への移動は自由ではなくなる」

(引用部はここまでとする)。

以上の書きようと同じくもの書籍『タイムマシン ——ワームホールで時間旅行——』にてのモノリス内部領域に対する言及は、(一面で噛み合わないように見えるところもあるが)、時間が止まってのモノリスの内部にての「時間と空間が逆転してのありよう」(時間が「止まり」距離が「意味をなさなくなる」と)の点においては接合性が感じられるようになっている。

B

2001: A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』の[続編]として小説にあっては映画化されもしている1982年初出の作品2010: Odyssey Two『2010年宇宙の旅』が世に出ている。前作『2001年宇宙の旅』映画版の方が小説版の方より遙かに盛況を博したとの事情あつてのことかとは思われるのだが、そちら『2010年宇宙の旅』では前作『2001年宇宙の旅』の行き先が(旧来小説版の土星から)[木星]へと変更されもしている —先立って英文Wikipediaなどより言及のなされようを引いたところでもある— のだが(作者アーサー・クラークの弁として「パラレル・ワールド」を描くが如く作品設定を採用しているとの物言いが引き合いにだされている)、そうした同作では(前作ディスカバリー号の行き先として描

写される)木星がモノリスの増殖によって黒くも侵蝕されていき、によって、[ルシファー;Lucifer]との真天体が誕生する様が描かれている。(表記のことについては、たとえば、英文 Wikipedia[2010: Odyssey Two]項目にあって(以下、引用なすところとして) “ **then the monolith vanishes from orbit and a mysterious dark spot appears on Jupiter and begins to grow. HAL's telescope observations reveal that the "Great Black Spot" is, in fact, a vast population of monoliths, increasing at an exponential rate, which appear to be eating the planet. [. . .] The Leonov crew flees Jupiter as the swarm of monoliths spread to engulf the planet. By acting as self-replicating 'von Neumann' machines, these monoliths increase Jupiter's density until the planet achieves nuclear fusion, becoming a small star.** In the novel, this obliterates the primitive life forms inhabiting the Jovian atmosphere, which the Monoliths' controllers had deemed very unlikely to ever achieve intelligence unlike the aquatic life of Europa. [. . .] **The creation of the new star, which Earth eventually names Lucifer, destroys Discovery.** ” (即時にての大意訳をなすとして)「それからモノリスが木星軌道から消失、そして、不可解なる巨大なる黒色の斑点(“Great Black Spot”)が木星に現われ、そして、拡大しはじめた。(ディスカバリー号のコンピューターたる)HALの望遠システムがその場で増殖しているのは膨大な数のモノリスであり、それらがまるで惑星そのものを喰っているような程度に増大を呈しているの事を明らかにした。(劇中、主人公たるフロイドが乗り込んだソ連の宇宙船たる)レオーノフ号のクルーらがモノリスの大群が惑星を覆い尽くすとの局面にて逃げることになりもした中、[自己複製フォンノイマン機械]と化したモノリスらが核融合を起こして恒星化するまでの密度を呈するまでに木星の密度を増さしめていた。小説では木星の衛星である水を帯びてのエウロパの方のそれとは異なり[知的営為をなすに至らないであろうと判じられての木星の大気下で生きるとの原始的生命形態]をモノリスを操る先進文明の操作者らが破棄することにしたとのことになっている(注:作中設定の問題として木星の生命を犠牲にして木星を恒星化させて、その衛星のエウロパの生命の進化を企図したとの上位存在の意図があったとされている)。新しい恒星、それは結果的に[ルシファー]と呼ばれるに至ったものだが、その創造は(木星軌道上にあった)ディスカバリー号を破壊することになりもした(訳はここまでするとする)と解説されているところである)。

そうもした小説 2010: Odyssey Two『2010年宇宙の旅』は[ブラックホール]のことを以下の事由から想起させるものである。

第一。

ヴィジュアルの問題。疑わしきにあつては Peter Hyams(ピーター・ハイアムズ)という映画監督が撮った映画版(英語原題では『2010』とだけタイトル付けされている1984年に封切られての映画版 2010: Odyssey Two『2010年宇宙の旅』)をレンタルするなりして見てみれば理解いただけるであろうが、そこでは星(木星)がブラックホールを想起させるような式で黒くもなって喰われていくありようが生々しくも描かれている。

第二。

これが大きい。国内の著名作家としての小松左京(物故者)が世に出していた作品として

[地球に接近しつつあるマイクロブラックホールを木星の爆破によって防ぐとの筋立てが具現化している]

との『さよならジュピター』との作品がありもし、同作では[木星の恒星化]とのプランもが作中にて取り上げられている(:和文ウィキペディアに[さよならジュピター]項目にあっての現行表記として(以下、引用なすとして)“あらすじ: 西暦2125年、太陽系外縁の開発に着手していた太陽系開発機構(SSDO)は、エネルギー問題の解決と開発のシンボルとして、2140年の実現へ向けて「木星太陽化計画」(JS計画)を進めていた。その前線基地であるミネルヴァ基地で、計画主任・本田英二は長らく音信不通だった恋人マリアと再会を果たす。彼女は過激な環境保護団体「ジュピター教

団」の破壊工作グループのメンバーとなっていた。英二は宇宙言語学者ミリセント・ウィレムに協力し、木星探査艇「JADE-III」で数万年前に太陽系を訪れた宇宙人の母船「ジュピターゴースト」の探査を行う。一方、英二の友人であるパイロット・キンと天文学者・井上を乗せて彗星源探査に向かっていた宇宙船「スペース・アロー」が謎の遭難を遂げる。計画責任者のマンスールの調査の末、原因はマイクロブラックホールとの接触によるものであり、しかも太陽に衝突するコースをとっている事が判明する。太陽系を救う方法はただ一つ、木星太陽化のプロセスを応用して木星を爆発させてブラックホールに衝突させ、そのコースを変更する事だった”（以上引用部とする）とあるとおりである）。

同作『さよならジュピター』は「全くもって奇しくもか」あるいは、さにあらずんば、「一群の（機序不明瞭なもの）傀儡クグツ化人間らの無意識的操作によるマスメディアの具現化としての必然なのか」（筆者はこの世界ではそうした言い分とて何ら行き過ぎにならないと見ている——出来るだけ避けたほうが賢明な物言いかとは思っているが、忌憚なくも思うところを示せば、魂の抜けたような人間「未満」のもので満ち満ちている節ある忌むべき世界の実体としてはそうした見方の方が正鵠を射ているとらえている——）

との按配で

[1984年]

との折柄、Peter Hyams (映画監督ピーター・ハイアムズ) がメガホンをとった映画『2010』の映画封切りと同年度のその1984年との折柄にかなりもの予算をかけての邦画として封切られたとの[映画化作品]ともなっているのだが、その書籍としての初出自体は82年であり、また、そのアイデアとしての初出は70年代末葉に遡ると言われている（きっちりと [Publication date 1982] との表記をも含む英文 Wikipedia [Sayonara Jupiter] 項目にあつて現行、“Sayonara Jupiter (さよならジュピター Sayonara Jupiter) is a novel by Sakyo Komatsu, released as two volumes. Komatsu adapted the story into the script for the **1984 film** of the same name, directed by Koji Hashimoto.” と表記されているところとなり、またもって、和文 Wikipedia[さよならジュピター]項目にて(以下、現行にての記載内容を引用するところとして)“**1979年半ばにシナリオの初稿は完成**。併せてアメリカでの著作権登録も行った。これは、初稿が上映時間3時間を越え、外国人俳優数百人を要するというスケールの大きさから、小松がアメリカとの合作も視野に入れたためである。後に現実にアメリカの映画会社から原作を買い取りたいという申し出があったが、アメリカ人を主役とし、小松を制作には関与させないという契約条件で、合作ではなくアメリカ映画として制作するというものだったため、小松が断ったという逸話がある”（引用部はここまでとする）と記載されているところでもある——1979年のシナリオ初稿完成との表記ウィキペディア記述の典拠としては『東宝特撮映画大全集』ヴィレッジブックス、2012年、204-207頁とのソースが現行にては挙げられている——）。

問題は、である。アーサー・クラークの2010: Odyssey Two 『2010年宇宙の旅』（1982年初出）にあつても小松左京のそれに先行するところと解されるころの『さよならジュピター』にあつても目立って

[木星の恒星化]

が描かれているとのことである（英文 Wikipedia[2010: Odyssey Two]項目にての（以下、「再度の」引用なすとして）“The Leonov crew flees Jupiter as the swarm of monoliths spread to engulf the planet. **By acting as self-replicating 'von Neumann' machines, these monoliths increase Jupiter's density until the planet achieves**

nuclear fusion, becoming a small star. ” (訳として)「(劇中、主人公たるフロイドが乗り込んだソ連の宇宙船たる)レオーノフ号のクルーらはモノリスの大群が惑星を覆い尽くすとの局面にて逃げることになった。といった中、**[自己複製フォンノイマン機械]**と化してのモノリスらが核融合を起こして恒星化するまでの密度を呈するまでに**木星の密度を増さしめていた**」(再度の引用部はここまでとする)との記述と和文 Wikipedia[さよならジュピター]項目の(以下、「再度の」引用なすとして) “あらずじ: 西暦 2125 年、太陽系外縁の開発に着手していた太陽系開発機構 (SSDO) は、エネルギー問題の解決と開発のシンボルとして、2140 年の実現へ向けて「木星太陽化計画」(JS 計画)を進めていた…(中略)…一方、英二の友人であるパイロット・キンと天文学者・井上を乗せて彗星源探査に向かっていた宇宙船「スペース・アロー」が謎の遭難を遂げる。計画責任者のマンスールの調査の末、原因はマイクロブラックホールとの接触によるものであり、しかも太陽に衝突するコースをとっている事が判明する。**太陽系を救う方法はただ一つ、木星太陽化のプロセスを応用して木星を爆発させてブラックホールに衝突させ、そのコースを変更する事だった**” (「再度の」引用部はここまでとする)との記述の複合検討でも容易に分かるところとなっている)。

世界的 SF 作家であるアーサー・クラークの作品とクラークに先行していたと解される・見えるところの国内 SF 作家大御所の小松左京の作品らの間の剽窃・被剽窃の現れ(あるいはリスペクトの先後関係とでも言うべきか)ぐらいにしか[程度の低いところ]では着目されないことかとは思いますが、問題はそのようなことにはない。**[ブラックホール]が主要結節事項となっていることこそが問題になるのだ**(小説『さよならジュピター』では木星の恒星化計画がかねてより進んでいた中で地球に接近するマイクロ・ブラックホールの影響を避けるためにそちら木星恒星化が利用されることになったと描かれる。他面、初出時期では『さよならジュピター』に後続するとも解されるところの『2010 年宇宙の旅』では「モノリスの蝟集の後、木星が黒くも浸食されてルシファーという名の新・恒星となる」との筋立てが具現化を見ている)。

第三。

アーサー・クラークの小説『2010 年宇宙の旅』では木星が(人間に知性を与えた存在でもあるモノリスらに蝟集される中で)黒くも喰われ、(核融合を起こすほどに密度増大を見ている中で)誕生したと描写される新天体の名がルシファーとなっている。ルシファー。本稿の先だつての段 —— 出典(出典(Source)紹介の部 55 から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する段) —— でそちら証示に努めてきたところとして著名古典ダンテ・アリギエーリ『地獄篇』およびジョン・ミルトン『失樂園』にあってはそのまさしくものルシファーに関わる場所として
[ルシファーに由来する領域]
[地獄門の先にある領域]
にあって
[今日的な意味で見た場合のブラックホールの質的近似物]
が露骨かつ多重的に具現化を見ているとのことがある(同じくものことからさらにもって何が述べられるのかは続いての補説 2 および補説 3 の部の主要テーマともするところだが、とにかくも、出典(Source)紹介の部 55 から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する従前内容を参照されたいものである)。

以上の (A. に加えての B. にあって小分けして問題点を呈示しての) ことらの検討をなしていただくことで

[カート・ヴォネガット『タイタンの妖女』とアーサー・クラークの『2001 年宇宙の旅』の

繋がり合い]

から [ブラックホール] との兼ね合いで何が問題になるか、「半ば」もってしてお分かりいただけるのではないか、とは思う。

そして、話はそれだけでは済まない。さらにもって問題となる場所として(まるで小説らに見る[文明操作のやりよう]が現実世界にそのまま当てはまってるの寓意であるかのよう) [明らかに人間のなせる業]を越えており、かつ、そこに[嗜虐的な遠大な目標にまつわる(傀儡グツを使ってる)示唆行為(としかとれぬもの)]が具現化していると申し述べたらば、どうか。

といったことすらも客観的かつ具体的に示せるようになっていくと、つまるどころ、それが我々人類への結末の付け方(の意志表明)と密接かつ根深くも結びついている。現実にもそうしたことが多重的・多角的に示せてしまえるように「なっている」のである。

その点、つい最前の段にあつては

「[布石]としてカート・ヴォネガット『タイタンの妖女』とカール・セーガン『コンタクト』の関係性に注意を向けましたが、その先には [911の多重的予見] の問題がある」

との旨のこと、申し述べていた(その委細については続いての補説2の部にあつてその詳説詳解を講ずるとしつつもそうも申し述べていた——ちなみに既に『タイタンの妖女』についてはどういう意味合いで[911の予見事象]と繋がるか、出典(Source)紹介の部65(11)から出典(Source)紹介の部65(14)を包摂する段にて(原文引用に力点を置いての)まずもってしながらもの微に入つての解説をなしている——)。

以上のこととも関わるところとして

「アーサー・クラークという作家の手仕事に関しては『2001年宇宙の旅』も含めての複数作が [911の予見事象]に関わるところのものとなっている」

とのことがあるのである(クラーク『2001年宇宙の旅』などについては海外でも一部陰謀論者や飛躍しての物言いを好む向きだが[似たようなこと]を述べているが、ここ本稿ではそうした者達の言い様とは性質を異にしての[文献的事実]のみに重きを置いての指し示しを「かなり後の段にて」なすことになると先立って申し述べておく——※ 同じくものことに関しては[911との日付と[77]との数値を結びつけての式をアーサー・クラークがその70年代初頭の小説作品にでもちだしていたり(かなり後の段にて解説するように77というのは一部でよくも認識されているところとして先の911の事件と多重的に結びついている数値でもある)、同クラークが他の小説にあつて双子の塔を登場させもしており、そのことがそれなりの予言的やりようと相通ずるようになっていく(どこからか手繰られてであろうか、相通ずるようになさしめられている、と解されるようになっていく)とのことを「かなり後の段にて」摘示することとする——)。

[911の先覚的言及をなしているが如く事物ら] が何故なのか多重的にブラックホールやワームホールとも結びつくようになっていくとの本稿これまでの段にて指摘してきたこと、そして、さらにもってこれより摘示していく所存であるとの指し示しの部とを複合顧慮すべきところとして、である。直上にて言及のようなカール・セーガンやアーサー・クラークの911の予見的言及ありようにまつわつての解説部を検討いただければ、何が問題となるのか、自ずとご理解いただけるであろう。その旨、請け合う。

これにて付け加えてもの表記の部の終えることとする



再びもってダンテ『地獄篇』に立ち戻り、極めて根が深きこと、容易に伺い知れるところの複層的相関関係の指し示しに入るとして

これより補説2とのかたちでひとまとめにしてのセクションに入る。

さて、本稿の先の段にては以下、(長くも)再述のこころを —[古典に見る文献的事実]と[科学理論にまつわる世間的解説のなされよう]の接合性に関わるところとして— 詳述していた。

i

ダンテ・アリギエーリ『地獄篇』には

[今日、物理学分野の人間らが研究対象として取り扱っているとのブラックホールとの「質的」近似物]

が描かれているとの[現象]が認められる。

具体的には

A. [ダンテらが「一度入ったらば[悲嘆の領域]に向けて歩まざるを得ず一切の希望を捨てねばならない」との[不帰の領域]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した[悲嘆]を体現しての地点]

B. [重力] —(古典『地獄篇』それ自体にて To which things heavy draw from every side[あらゆる方向から物の重さが引きつけんとする地点]と表されているところに作用している力)— の源泉と際立って描写されている場(地球を球と描いての中心ポイント)]

C. [(「悲嘆の」川コキュートス)にて(静的描写として)罪障がゆえに「凍りついた」者達が、と同時に、(動的描写として)「永劫に粉碎され続けている」との地点]

D. [[光に「語源」を有する存在](ルチフェロ)が幽閉されている地点]

との全ての要素を具備した[『地獄篇』にての地獄踏破にあつての最終ポイント](コキュートス・ジュデッカ領域)にまつわる描写が

A. [「一度入ったらば二度と出れない」との(事象の地平線の先にての)領域]

B. [重力] 一地獄篇それ自体の表現と際立っての近似性伴っての[質量]に由来する力 (アインシュタイン以後の科学的知見では物質(の質量・エネルギー)が周囲の時空を歪めることに起因する力) — の源泉となっている場]

C. [外側(生者)から見れば(静的描写として)被吸引者が「時が止まったような状況」になりつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場]

D. [[光さえもが逃がられぬ]とされる場]

との全ての要素を具備したブラックホール特性と共通のものとなっている(話としての奇異さはともかくも[記号論的一致性・文献的事実の問題]として共通のものとなっている)とのことが現実にある —— ※そうした一致性にまつわるところで初期ルネサンス期、13世紀の文人ダンテは「地球を球形と看做して」「地球の片面で夜ならばもう片面では昼である」との今日的描写までをもなしている。だが、といったことまでは常識で容易に説明ができるところである(と解される)。というのもギリシャに遡っての古典時代に既に地球は球体であるとの見解が呈されており、また、ギリシャ以後の古代ローマにてはそちら地球球体説が当然と容れられていた節もあり(ギリシャ・ローマ時代とのことではプラトン・アリストテレス・ストラボン・プトレマイオスなど主たる哲学者・地理学者は皆、同[地球球体説]を論拠あるものとして支持していたことがよく知られている)、一端、往古の知性が破壊されたとされる中世暗黒時代から近世にかけてのルネサンス期にあつて「も」同説(地球球体説)が各自銘々の知識人に積極的に容れられていた、イスラム世界で残置していた古典古代の知識の欧州への再流入より容れられていた節があるからである(ただし、ダブル・スタンダードとしていまだ[地球平面説]が社会の主たる構成員のマインドを規定していたとも当然に解されるようになっていっている)。しかし、古典古代のアリストテレス的[重力]観をダンテが知るところとなっていたと仮定しても現代的理解に近い重力関連描写といい、その他の側面といい、ダンテやりようについてはブラックホールとの多重の接続性の絡みで拭い去れぬ奇怪性がそこにある——)。

ii

他面、ジョン・ミルトン『失樂園』にあつて「も」
[今日の物理学上の話柄にあつてのブラックホールの「質的」近似物]が描かれているとの[現象]が認められる。

具体的には

E. [[果てなき(底無し)の暗黒領域]

F. [大きさ・「時間」・場所]が無意味となる領域]

G. [自然の祖たる領域]

とのミルトン『失樂園』に見るアビス(地獄門の先にある深淵領域)にまつわる描写が

E. [底無し]の暗黒領域]

F. [時空間の法則]が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域]

G. [それをもって自然の祖]であるとする観点が存する場]

とのブラックホール特性と共通のものとなっているとのことが現実にある(※続く段に付しての補うべくもの[出典(Source)紹介の部 55(3)]を参照のこと)。

iii

ダンテ『地獄篇』にあつての、

[今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:コキュートス)

とミルトン『失樂園』にあつての同じくもの、

[今日的な理解にあつてのブラックホール近似物の描写(於て:アビス)]

は双方別個に別々の側面からブラックホールとの近似性を呈するとのものであるが、「極めて奇怪なことに」双方共に

[ルシファーによる災厄]

[地獄門の先にある破滅・悲劇に関わる通路]

と結びつけられているとのことがある。

以上、i. から iii. と区切つてのことらにつき、まとめれば、『地獄篇』および『失樂園』との両古典を合算して見た際に、

[[ルシファーによる災厄] および [地獄門(と描写されるもの)の先にある破滅][悲劇]への通路]との両要素と結びついたポイント]

に関わるところで

- A. [[不帰の領域]にまつわる隻句(『地獄篇』地獄門隻句)を目にしたところから入って最終的に到達した「悲嘆」を体現しての地点] (『地獄篇』コキュートス)
- B. [重力の源泉と「際立って」描写されている地点] (『地獄篇』コキュートス)
- C. [(静的描写として)罪障がゆえに「凍りついた」者達が、と同時に、(動的描写として)「永劫に粉碎され続けている」との地点] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)
- D. [[光に語源を有する存在](ルチフェロ)が幽閉されている地点] (『地獄篇』コキュートスの中枢ジュデッカ)
- E. [[果てなき(底無し)の暗黒領域] (『失樂園』アビス)
- F. [大きさ・「時間」・「場所」が無意味となる領域] (『失樂園』アビス/17世紀成立の『失樂園』の刊行時には時間と空間を有機的の一体と見る相対性理論に通ずる発想法は無論、なかった)
- G. [自然の祖たる領域] (『失樂園』アビス)

との要素らを「全て兼ね備えての」ありようが具現化していると述べられるようになっており、そうしたありようが現代物理学——(その担い手らが本質的には知性も自由度もないにも関わらず知性あるフリをさせられている下らぬ人種(ダンテ地獄篇にて欺瞞をこととする[人類の裏切り者]らとして氷地獄に閉じ込められているような者達)か否かどうかはこの際、関係ないものとしての現代物理学)——の発展にて呈示されるようになったとの[「今日的な観点で見ての」ブラックホール像]と共通性を呈している、すなわち、

- A. [[一度入ったら二度と出れない]との(事象の地平線の先にての)領域]

(ブラックホール内側)

B. [重力] —地獄篇それ自体の表現と際立っての近似性伴っての[質量]に由来する力 (アインシュタイン以後の科学的知見では物質(の質量・エネルギー)が周囲の時空を歪めることに起因する力) — の源泉となっている場] (ブラックホール)

C. [外側(生者)から見れば(静的描写として)被吸引者が「時が止まったような状況」になりつつも(動的描写として)その被吸引者本人(死者と化した者)から見れば「粉碎され尽くしている」との場] (ブラックホール)

D. [[光さえもが逃がられない]とされる場] (ブラックホール内側)

E. [底無しの暗黒領域] (ブラックホール)

F. [時空間の法則が破綻する(「時間」と「空間」が本来通りの意をなさなくなる)領域] (ブラックホール)

G. [それをもって自然の祖であるとする観点が存する場] (ブラックホール)

との特徴を全て兼ね備えたものとしての[「今日的な観点で見ての」ブラックホール像]と共通性を呈していると摘示できるように「なっている」とのことがある。

さらに補ってもの表記として

ダンテは

[「ルシファー」(「金星」こと「明けの明星」を語源とする存在であるが、よりもって根本的には「光」に語源を有するとの存在)の幽閉地]

を

[重力の中心点]

として設定しているのと同時に

[永劫の凍土(氷地獄)]

とも設定している(先立って原文引用なししているとおりである)。

その氷地獄との描写の仕方からしてブラックホールのありようを想起させるところともなる。

というのもブラックホール理論の発展過程において[重力の怪物]たるブラックホールは[凍り付いた恒星](フローズン・スター)

と当初、(そうなるべくして)形容されていたからである。

については

[英文 Wikipedia [Black hole] 項目の History (理論史) の節]

にあって次の表記がなされているところである。

(直下、英文ウィキペディア [Black hole] 項目の History (理論史) の節にあっての現行記載内容より引用をなすとして)

Oppenheimer and his co-authors interpreted the singularity at the boundary of the Schwarzschild radius as indicating that this was the boundary of a bubble in which time stopped. **This is a valid point of view for external observers, but not for infalling observers. Because of this property, the collapsed stars were called "frozen stars"**, because an outside observer would see the surface of the star frozen in time at the instant where its collapse takes it inside the Schwarzschild radius.

(入念に補いもしての拙訳として)

「オープンハイマー(訳注: 重力崩壊に対する理論を煮詰めもしてブラックホー

ル理論の旗手ともなっていたかのマンハッタン計画の主導者ロバート・オッペンハイマー)および彼の共著者ら ——(訳注:文脈上、Tolman—

Oppenheimer—Volkoff limitこと[トルマン・オッペンハイマー・ヴォルコフ境界]という星の重力崩壊の区切り点にまつわる理論を提唱したオッペンハイマーの理論展開にあたっての論稿共著者ら)—— は

[[シュヴァルツシルト半径] (訳注:本稿の後の段で説明のされようを呈示するところの[ブラックホールができあがるうえでの円形領域の半径]/思索対象となる物体の[質量]によってそちら[半径]が変動するとのもの)の境界面にあっての特異点(訳注:そこを越えると従来の法則が成り立たなくなり際限なくもの重力崩壊プロセスが進むとのポイント)]

をして

[これは[時間]が停止を見る泡の境界を示しているのであろう]

と解釈していた。

この見方は外側の観測者ら(訳注:ブラックホールの外側の観測者ら)にとっては適正なる見方だが、ブラックホールに落ちこむ観測者らから見れば、適正なる見方ではない。

こうした属性がゆえに、[縮退星] (訳注: collapsed star はブラックホールという言葉が生み出される前にブラックホールを指して用いられていたところの一呼称) は

Frozen Stars [フローズン・スターズ(凍り付いた恒星)]

とも呼ばれていた、というのも外側の観察者はその星がシュヴァルツシルト半径の内側へ向けて崩壊していくまさにその場、その瞬間を「凍り付いた恒星の外面」とのかたちで見ることになるからである(訳注:ここにての[frozen stars]との呼称についての解説については引用元とした英文 Wikipedia [Black hole]項目にて現行は Ruffini, R.; Wheeler, J. A. (1971). "Introducing the black hole". Physics Today 24 (1): 30—41.との出典が紹介されている。そちら出典表記に見る Wheeler, J. A.ことジョン・アーチボルト・ホイーラーはブラックホールとの呼称を生み出した著名物理学者のことを指す)

(引用部はここまでとしておく)

以上のことから、そう、ブラックホールがそのように呼称されるべくして「凍り付いた星(Frozen Star)」と呼ばれていたとの歴史的経緯からもダンテ『地獄篇』の[光に語源をもつ存在が幽閉されている重力の中核領域]たる[氷地獄](外側から見れば永劫に凍り付いているとの者達が、と同時に、粉碎されつくしているとのポイント)が何故もってブラックホールと相通ずるものとなっているのか、よりもお分かりいただけることか、と思う。

さらに補ってもの表記はここまでとする

上のようなことがあることをして[偶然の一致]ととらえるのは至当か否か。その点について切り分けなすための材料を呈示せんとするに努めんとしているのが本稿となる。

以上、(長くも)再述なしたようなことが「ある」 —疑わしくは表記の上にて表記の出典紹介部を確認されたい— のを含んでいただいたうえで続いての段の内容につき読み解いていただきたい次第である。

さて、ここ補説2と銘打つての部では、

[ダンテ『地獄篇』にあって地獄の中枢(たる氷地獄)で罪人らを噛み砕き続けている悪魔の王(ルチフェロ ことルシファー)]が「その他の意味でも」今日的なる科学的トピックと接合しているとのことがある、また、そうしたこと「も」がブラックホールを巡る関係性へと帰着してしまうようになっているとのことがある]

とのことにつき、解説をなす所存である(そうもした訴求事項の性質のために書き始めの部からダンテ『地獄篇』にまつわる振り返っての話をなしている)。

さしあたり、直上にて言及の本稿ここ補説2での訴求事項に関わることであるがゆえにそこより取り上げるところとして、次のようなことがある。

「ルシファーは悪魔の王の名称とされるが、同ルシファー、
[惑星[金星](英語で言うところのヴィーナス Venus)と結びつく存在]
であると歴年認知されてきた存在ともなっている。

そして、ルシファーと結びつけられてきた天体としての[金星]については[会合]の周期 — こちら[会合]との用語の説明も当然に続いての段でなす — が太陽系にあって[五芒星(ペンタグラム)]形状を現出させているとのことが取り上げられてきた惑星でもある]

(以上のようなことがあるため、そう、

[[ルシファー]→[金星と結びつく存在]との関係性の成立]
[[金星]→[会合周期に応じて五芒星を現出させる天体]との関係性の成立]

ということらがあるがため、キリスト教信徒の一部の者は

「五芒星は(ルシファーの如く)悪魔の象徴である」

という主張の論拠としたりもすることがあるようなのだが、ここ本稿では宗教的話柄とは一切無縁なところとして

[金星とルシファーと五芒星にまつわる関係性]

のことを問題視していること、お含みいただきたい)

SOURCE

67



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 67 にあつては上にて言及しているところの

「ルシファーは悪魔の王の名称とされるが、同ルシファー、
[金星 (英語で言うところのヴィーナス Venus) と結びつく存在]
であるとも歴年認知されてきた。そうもしてルシファーと結びつけられてきた天体として
の金星は[会合]の周期から太陽系にあつて五芒星 (ペンタグラム) 形状を現出させて
いる惑星として取り上げられてきたものでもある」

とのことについての典拠紹介をなしておくこととする。

につき、まずもつては

[ルシファーは[悪魔の王]にして[惑星金星 (英語で言うところのヴィーナス Venus) と結
びつく存在]であると歴年認知されてきた]

とのことについての典拠を紹介しておく。

同じくものこと、ルシファーが金星の象徴的存在であるとのことについては本稿の先立っての段で既
に解説を加えている、すなわち、本稿にての出典 (Source) 紹介の部 49 および出典 (Source) 紹介の部
54 (3) で解説を加えているとのことともなる。

だが、「一応としての」再度の指し示しをなしておくこととする。

(直下、本稿にての出典 (Source) 紹介の部 54 (3) でも引用なしたところの文書、Project
Gutenberg のサイトにて全文公開されている、すなわち、オンライン上より全文確認できるよ
うになっているとのブリタニカ百科事典第 11 版、Encyclopaedia Britannica, 11th Edition,

LUCIFER (the Latinized form of Gr. φωσφόρος, “light-bearer”), the name given to the “morning star,” i.e. the planet Venus when it appears above the E. horizon before sunrise, and sometimes also to the “evening star,” i.e. the same planet in the W. sky after sundown, more usually called Hesperus (q.v.). The term “day star” (so rendered in the Revised Version) was used poetically by Isaiah for the king of Babylon: “How art thou fallen from heaven, O Lucifer, son of the morning! how art thou cut down to the ground, which didst weaken the nations” (Is. xiv. 12, Authorized Version). The words ascribed to Christ in Luke x. 18: “I beheld Satan as lightning fall from heaven” (cf. Rev. ix. 1), were interpreted by the Christian Fathers as referring to the passage in Isaiah; whence, in Christian theology, Lucifer came to be regarded as the name of 104 Satan before his fall. This idea finds its most magnificent literary expression in Milton’s Paradise Lost. In this sense the name is most commonly associated with the familiar phrase “as proud as Lucifer.”

(日本語表現に適合するように訳なしての拙訳として)

「LUCIFERとは

[φωσφόρος,「光を運ぶ者」との意のギリシャ語のラテン語表記]

となり、[明けの明星](モーニング・スター)、すなわち、

[日の出前に東の地平線の上に現われるとの金星]

に与えられての呼称、あるいは、しばしばもって、同様に金星、日没前に西の空に現われるとの[宵の明星](こちらは通例、ヘスペラスと呼ばれるところのもの「とも」なる)に与えられての呼称となっているとの語である。

同語、[デイ・スター](明けの明星)はバビロンの王によるやりようにまつわるところで(改訂訳版聖書に収録のその部にて記述されているように)旧約聖書イザヤ書にて

“How art thou fallen from heaven, O Lucifer, son of the morning! how art thou cut down to the ground, which didst weaken the nations”「黎明の子、明けの明星(Lucifer)よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは地に倒れてしまった」

と述べられているようなところの存在となり(オーサライズド・バージョン＝欽定訳聖書イザヤ書14章12節)、そうした書かれようと[ルカによる福音書]第10章18節にあつてのキリストによる言葉、

“I beheld Satan as lightning fall from heaven”「彼らに言われた、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た」

との文言(そちらについては Rev. ix. 1 すなわち、レベレーション(Apocalypsis)『黙示録』第9章第1節をも参照のこと)との兼ね合いでキリスト教教父らに解釈されてきたところ、そして、キリスト教神学で解されてきたところとして、(同じくものルシファーという語は)

[墮天の前にあつてのサタンの名称]

へとなったものでもある。

この観点はミルトンの『失樂園』にて最も壮麗なる文学的表現を見ているところのものとなり、そこより同語(ルシファー)はよく知られたフレーズ、“as proud as Lucifer.”「ルシファーよろしく高慢な」とのフレーズと巷間にて最もそうもなされているところとして関連づけられるようになったものものである」

(※尚、原文にて言及されている旧約聖書(『イザヤ書』)と新約聖書(『ルカによる福音書』)の日本語訳の部だけは日本聖書協会による1954年改訳版日本語聖書——オンライン上にてPDF版が広くも流通しているとの日本語訳聖書——の文言をそのまま利用することとしたこと、断っておく。ちなみに、ここにて引用元としたとの第11版ブリタニカ百科事典であるが、その通用性が極めて高いとのものともなり、(以下、現行にての和文ウィキペディア[ブリタニカ百科事典第11版]項目の記載を掻い摘まんで原文引用するところとして)“ブリタニカ百科事典第11版は、1910年から1911年にかけて発行されたブリタニカ百科事典の11番目の版で、全29巻からなる20世紀初頭の知識の集大成である。製作には当時の著名な研究者や、後に有名になる執筆者が多数参加している。また、この版は現在、米国で著作権の保護期間を経過しパブリックドメインになっている” (引用部はここまでとする)のものとなっている)

上のことについて、より一般の目に触れやすきところにてなされている解説も引いておくこととする。

(直下、ウィキペディア[ルシファー]項目にあつての[人文学研究によるルシファーの来歴]の部にての現行にての記載内容よりの引用をなすとして)

Lucifer はもともと、ラテン語で「光を帯びたもの」「光を掲げるもの」(lux 光 + fer 帯びている、生ずる)、「光をもたらす者 (lux 光 + fero 運ぶ) を意味する語であり、当初は悪魔や墮天使を指す固有名詞ではなかった。ラテン語としてのルキフェルが見出されるのは、ウルガータ聖書の以下の箇所においてである。「黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。」—旧約聖書「イザヤ書」14:12— ここでの明けの明星は或るバビロニアの専制君主のことを指し、輝く者を意味するヘブライ語の「ヘレル」が明けの明星 lucifer と訳されている。

(引用部はここまでとしておく)

(直下、ウィキペディア[ルシファー]項目にあつての[悪魔としてのルシファー]の部にての現行にての記載内容よりの引用をなすとして)

ルシファーの名の悪魔たるゆえんは、旧約聖書「イザヤ書」14章12節にあらわれる「輝く者が天より墮ちた」という比喩表現に端を発する。これはもともと、ひとりのバビロニア王がアッシリア王(サルゴン2世かネブカドネツアルであろうと言われる)について述べたものであった。キリスト教の教父たちの時代には、これは悪魔をバビロニアの王になぞらえたものであり、神に創造された者が墮ちて悪魔となることを示すものと解釈された。墮天使ないし悪魔とされたこの「輝く者」は、ヒエロニムスによるラテン語訳聖書において、明けの明星を指す「ルキフェル」の語をもって翻訳された。以上の経緯をもってルシファーは悪魔の名となったとされる。

(引用部はここまでとしておく)

※既に本稿出典(Source)紹介の部 54(3)にて指摘していることの再掲として

尚、上にて引用のブリタニカ百科事典や和文ウィキペディア[ルシファー]項目にあつて[聖書に見る[ルシファー=悪魔の王]の典拠]として問題視されているのは旧約聖書内のイザヤ書物 14 章 12 節以下に認められるくんだり —「オンライン上よりダウンロードできる」との分かりやすい章節番号が付されている邦訳版 PDF 版電子版聖書(日本聖書協会)よりもその内容が労せず確認できるとのくんだり— となるわけだが、(疑わしきには確認いただきたいところとして)

「天より落とされた存在としての明けの明星」(イザヤ書物 14 章 12 節)

「陰府(よみ)に落とされ穴の奥底に入れられた存在」(イザヤ書 14 章 15 節)

「国々を動かし世界を荒野のようにし、その都市を壊し、捕らえた者たちを解き帰さなかつた存在」(イザヤ書 14 章 16 節—17 節)

「つるぎで殺され存在に覆われ踏みつけられた死体のように穴に下る存在」(イザヤ書 14 章 19 節)

との表記がなされているとの部位がまさしくもの該当部となる(:そちら[バビロンの凋落に通ずる表記]が[悪魔の王 —新約聖書にてバビロンを破滅に誘(いざな)う存在—]たる[ルシファー=金星]と結びつけられるに至ったとのことがある、聖書上の典拠としてはそうもなっているとのことがある)。

その部しか —有名どころとして— 聖書それ自体の中では[明けの明星(金星)]を悪魔の中枢存在たるサタンと比定する上での論拠となるところがないとのことになっているのだが(のような中で現実にキリスト教会はルシファーこと明けの明星を悪魔の王としてきたとの経緯がある)、その『イザヤ書』該当部については中近東の異教神(旧約聖書を奉じていた一神教たるユダヤ教から見たうえでの異教神)たる[アッタル]という神(ウガリットの明けの明星と結びつく神)を指すのではないかとの理解「も」なされており、和文ウィキペディア転じて同様に誰でもオンライン上より即時確認できるとの英文 Wikipedia[Lucifer]項目にはその理解に基づいての記載がなされている —原文引用をなせば英文

Wikipedia[Lucifer]項目にて Mythology behind Isaiah 14:12[イザヤ書 14 章 12 節の背景にある神話]と振られた節にあつての “ **In ancient Canaanite mythology, the morning star is pictured as a god, Attar, who attempted to occupy the throne of Ba'al and, finding he was unable to do so, descended and ruled the underworld.** ” (訳として)「古代カナン地方神話にあつて明けの明星はアッタルという神、バアルの玉座を奪おうとして、それが出来ぬことがわかつて、冥界に下り、そこを統治したとの神と結びつけられている」と表記されているところとなる(については和文ウィキペディアに現行設けられている [アッタル]項目にての短き記載内容にもそのように言及されている)。往古ユダヤ人を迫害したと歴史が伝えるアッシリア王ではなくユダヤ教から見ての異教神が旧約聖書に見る[落ちた明けの明星の体現存在]であるともされているのである——。

由来どうあれ、ここまで呈示してきたような見解が存在していることと背景を同じくするところとして

[ルシファーが[金星]と結びつく言葉であるとの[イザヤ書]に基づいての理解が欧米圏識者層には「広く」かつ「深く」歴年、すなわち、相当程度、長らくも存在していた]

ということが事実であることを示すのもまた易い。

たとえば、Project Gutenberg のサイトにて全文ダウンロードできる(換言すれば誰でも容易に文献的

事実の問題を確認できるようになっている)ところの著作、有名なヴォルテール —(同 Voltaire、フランス革命前夜の時代にて識者の誉れが最も高かった者として日本の高校の世界史の科目の授業などでも(委細抜きに)その名だけの[暗記]が求められるとの歴史上の人物となる)— の手による、

A PHILOSOPHICAL DICTIONARY VOLUME I (『哲学事典 第一巻』. 刊行後、一〇〇年以上を経ての二〇世紀に入っの折、一九〇一年に英訳されたバージョン)

にあつてはその A から Z の頭文字で各項目、事典形式で掲載されているところの[ABUSE OF WORDS.]との節にて以下、引用なすような記載がなされていもするところとなる。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて公開されている A PHILOSOPHICAL DICTIONARY VOLUME I(20 世紀英訳版)より原文引用なすところとして)

Metaphysical terms, taken in their proper sense, have sometimes determined the opinion of twenty nations. **Every one knows the metaphor of Isaiah, How hast thou fallen from heaven, thou star which rose in the morning?** This discourse was imagined to have been addressed to the devil; and as the Hebrew word answering to the planet Venus was rendered in Latin by the word Lucifer, the devil has ever since been called Lucifer.

(訳として)

「応分に適切な意味で受け取られているとの抽象論的なる用語らはしばしば(往時欧州にての)二十カ国の意見ありようを決してきたものである。**全ての者**(訳注:ヴォルテールが生きていた時代の欧州の人間のことを指す)がイザヤ書に伴う隠喩、

How hast thou fallen from heaven, thou star which rose in the morning? (イザヤ書第 14 章 12 節に認められる「黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった」との部を指す)

に伴う隠喩については知っているところである。

この(聖書にての)言いようは[悪魔]に対する言及なしてのものであると想像されており、(旧約聖書がそちら言語によって記載されていたとの)[ヘブライ語]が[金星]に対してそのように言及していたところにつき[ラテン語]のルシファーへの翻訳がなされてより以降、[悪魔]は[ルシファー]と呼ばれることになった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上のようにフランス革命の時代、18 世紀に生きたヴォルテールからして[ルシファーの金星起源とイザヤ書にまつわる問題]について[常識として知られている]と言及していたとのことがある(ので確認したきは表記の英文テキストをグーグル検索エンジンに入力するなどして該当著作を特定の上、内容の方、確認いただきたい)。

以上でもって

[ルシファーは [悪魔の王] にして [惑星金星(英語で言うところのヴィーナス Venus)と結びつく存在] であると歴年認知されてきた]

とのことの典拠とした。

([出典\(Source\)紹介の部 67](#)にての表記を続けるとして)、次いで、

[金星がその [会合] のありようから太陽系に五芒星を現出させるとの指摘が存する]

とのことについて解説を講じておく。

同じくものことについては、そも、[会合]という現象が何なのかについての説明をなすことから始める(そうする必要があるので認識あってそこから始める)こととする。

その点、

誰でも理解が及ぼうとの「常識上の問題として」

[太陽系では複数の惑星、地球や金星や火星といった天体が太陽を中心に円運動をなしている]

とのことがある(ここまでは典拠を挙げるまでもないことか、と思う)。

そのように各々太陽の周りを円運動しているとの天体らが

「複数、太陽を含むかたちで一直線に並びあう」

との状況が定期的に出現しており、そうした状況をして天文学の用語で

[会合] (アストロジカル・コンジャンクション)

と表する(：言い方の伝としてあれではあるが、たとえばのこととして、[太陽と金星と地球が串で団子を三つ刺したような状況が[会合]の状況になった]ととらえてもらっていい——ただし、現実には一直線上に並ぶということはなく黄道傾斜角のずれの問題を観念する必要もあるとされる——)。

そして、そうした状況——[会合]の状況——につき太陽と一直線に並ぶ「他の」天体が([会合]現象発現時にあって基準となる星としてピックアップされた[外側の惑星]から見もして)太陽の反対側にあるか内側にあるのかの別をもってして[会合]は[外合]と[内合]に分類される。

などと述べても理解が及びづらいところか、と思うのでたとえ話をもってしての説明を講ずる。につき、[地球]と[太陽]と[もう一つの惑星]を[串に刺された団子]であると考えて見るとしよう。の際、[地球(基準点)]—[太陽]—[もう一つの惑星]との関係が成立しているのならば、(基準点たる地球から見ての)[太陽の外側にある惑星]と[地球]の関係は **Superior Conjunction**[外合]の関係にあると表す。他面、[地球]—[もう一つの惑星]—[太陽]との関係が成立しているのならば、(基準点たる地球から見ての)[太陽の内側にある惑星]と[地球]の関係は **Inferior Conjunction**[内合]の関係にあると表すというわけである(中心点たる太陽を中心に複数の円が軌道として重なって描かれているありようを想像いただきたい。その何重にも描かれている軌道としての円の上をそれぞれに回っている[球体]のことを頭の中で思い浮かべれば、二つの球の間に追い越す・追い越されるの関係が生じたときに会合の瞬間を指すこと、お分かりいただけることか、と思う)。

上にて言及のこの目立つところにあつての説明のされようとして、下に和文ウィキペディア[合(天文)]項目にあつての現行にての記載内容を引いておくこととする。

(直下、和文ウィキペディア[合(天文)]項目にあつての現行記載内容よりの引用をなすとして)

ある惑星 A 上の観測者から見て、それより内側を公転する惑星 B が太陽の真後ろに位置している時、惑星 B は惑星 A から見て外合の位置にあると言う。これに対して、惑星 A と惑星 B が太陽について同じ側に一直線に並んでいる時、惑星 B は惑星 A から見て内合の位置にあると言う。

…(中略)…

一般に太陽系天体の合は複数の天体の黄経が同じ値をとる状態を指すが、赤

経の値が等しい場合にも合と呼ぶ場合がある。両者を特に区別する必要がある場合にはそれぞれ黄経の合、赤経の合と呼ぶ。黄道と天の赤道は23.4°傾いているため、通常は黄経の合と赤経の合は完全に同時には起こらないが、ほぼ近い日時に起こる]

(引用部はここまでとする)

さて、[金星]は地球より太陽に近い軌道をまわっているとのなかで[地球]—[金星]—[太陽]との関係が(会合のうちの) **Inferior Conjunction**[内合]として成立する天体となる。

その金星と地球との[内合]の成立時期・成立態様が[五芒星]と結びついているとされていることにここでは着目している。

地球と金星と太陽が並ぶ内合については

[地球が太陽を8周する間、すなわち、太陽暦では1周およそ365日という公転周期に依拠してのこととしての約8年 —より正確には8年と5日— で計5回生じる]

とされている(地球と金星が一回分、内合を呈するまでの会合周期が[583.92日]($8 \times 365 \div 5$)となっているとの表されかたもされている。その点、地球が太陽系を8回経巡る期間、金星は公転周期がより短くも(より太陽に近いとの円軌道で)太陽周囲を13回程回転している —金星の1年は224日であるといった按配となっている— わけだが、8年間で地球より5回程多く円運動なしている金星は(円軌道を異にする中でも)地球を5周分だけ背にしている、追い越ししているとのことともなる。その追い越しのまさにそのポイントが(円軌道を外側の地球から内側の金星、そして、太陽へと見てみた際にあつての)[地球・金星・太陽が一直線に並ぶ会合ポイント]となる)。

以上のようなかたちで周期的に生ずる[会合](くどいが、[地球と金星と太陽が一直線に並ぶ内合]のことを指す)の現出ポイントを各天体毎のものとして8年にあつての5回分、天体図上に線を引くことでつなぎあわせると「繰り返し」[五芒星]および[黄金比]と結びつくものが描画されてくるとの指摘が広くもなされている(については[正確な五芒星]とはならず、1回の会合が生じる周期たる「約1.6年は584日ではなくより正確には583.92...となっている、そのために、何回かの会合が集積して起こっていく中で差分が集積して五芒星の顕在箇所が回転していくことになる」ともされている)。

同点にまつわり現行にては即時即座に確認可能となっているとの典拠を挙げておく。

(直下、本稿本段執筆の現時点にあつてはオンライン上より確認できるところとなっている「現行にての」英文ウィキペディア[Pentagram](五芒星)項目、その[In Astronomy and nature]の節の記載内容より原文引用をなすとして)

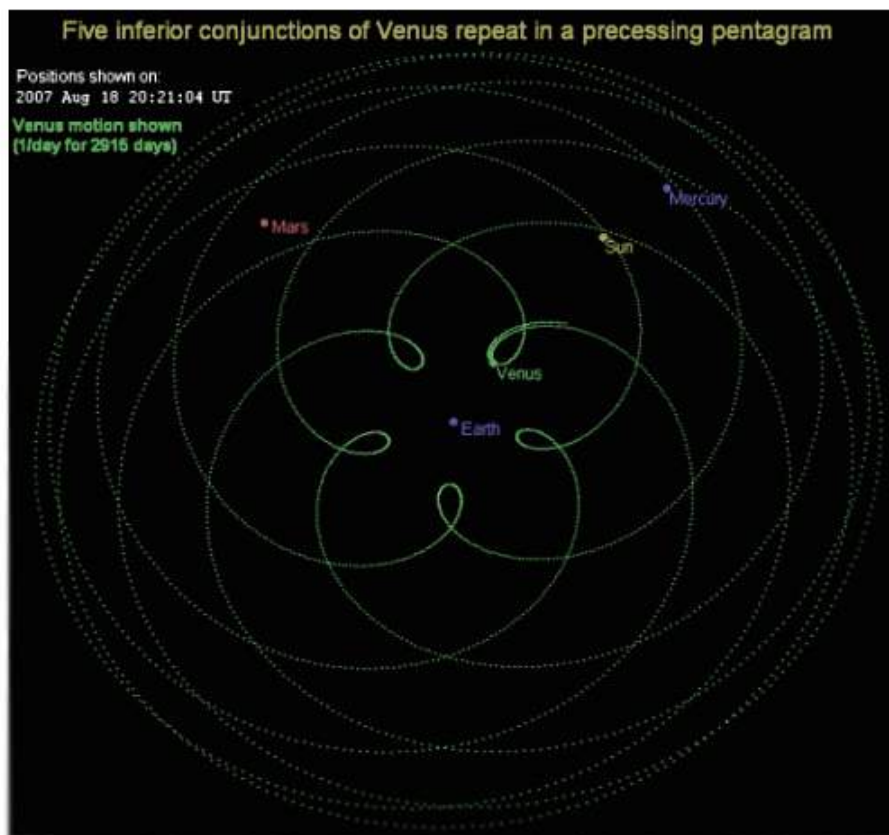
Successive inferior conjunctions of Venus repeat very near a 13:8 orbital resonance (The Earth orbits 8 times for every 13 orbits of Venus), creating a pentagrammic precession sequence.

(拙訳として)

「[五芒星形を呈するとのすりこぎ運動状の足跡]を生み出しながら[金星との継続的な内合]は対地球軌道比で13:8近く(地球8周、金星13周)となる軌道上での重ね合わせ状況を繰り返す」

(訳を付しての引用部はここまでとする。尚、表記引用部は易変性伴うウィキペディア上の

記述であるため、同じくこの部がこの先も残置し続けるかどうかは判じかねる。もし見当たらなかったならば、オンライン上には同様のことを扱った英文媒体が数多あるため、他のソースでご確認いただきたい)



(image seen in Wikipedia)

上掲図は、(これまたウィキペディア上の図像ということでそれがそのままのものとして残置し続けるか請け合いかねるのだが)、英文 Wikipedia[Venus]項目に掲載されているとの[金星の会合周期を五芒星と結びつける図](著作権放棄表記が伴ってのものでもある)となり、

“ Successive inferior conjunctions of Venus occur about 1.6 Earth years apart and create a pattern of precessing pentagrams, due to a near 13:8 orbital resonance (the Earth orbits nearly 8 times for every 13 orbits of Venus). ” (訳として)「およそ地球年にして 1.6 年毎に継続的に生じるとの金星との[内合]関係は[13 対 8 にての軌道上の対応関係(地球が 8 回回転する際に金星は 13 回回転するとの対応関係)]に応じて五芒星の周期的形状をもたらすものとなっている」

と解説が付されながら、

[おおよそながら(粗い、rough な、でもいい)もの五芒星]

が金星の会合周期によって太陽系に現出することが描写・訴求されているとのものとなる(：ちなみに、表記図像にあっては二〇〇七年をベースに見てのものであるとの記載がなされているが、同様の構図が **James Ferguson’s, Astronomy Explained Upon Sir Isaac Newton’s Principles (1799)** という著作、ジェイムズ・ファーガンソンという天文学者の手になるものとしてのニュートン力学に関する 18 世紀解説書籍にての付録図像に見てとれるとのことも訴求されてきたとの経緯もある。については「粗い、rough な、一致性を強弁しているにすぎぬ」との批判もあろうか、とは思いますが、とにかくも、ここにて引いた申しようや図像だけをもってからして金星の[内合]の周期が「おおよその」五芒星と結びつけられているとの

風潮があることはご理解いただけるであろう)

以上もってして

[金星がその[会合](地球との内合)のありようから太陽系に五芒星を現出させるとの指摘が存する]

とのことの紹介とした。

(出典(Source)紹介の部 67)はここまでとする)

さて、直上の段までにて

「ルシファーは悪魔の王の名称とされるが、同ルシファー、
[金星(英語で言うところのヴィーナス Venus)と結びつく存在]
であるとも歴年認知されてきた。そうもしてルシファーと結びつけられてきた天体として
の金星は[会合]の周期から太陽系にあって五芒星(ペンタグラム)形状を現出させて
いる惑星として取り上げられてきた存在である」

とのことの典拠を紹介してきたわけだが、対して、この身はここ補説 2 と記した部にて [次のこと] らを
——無論、典拠となるところを細かくも明示するとの式にて—— これより問題視したい、「まずもっての
第一段階として」問題視したいと考えている (:金星の会合周期における五芒星現出のことを上にて
取り上げたのはいわば、[次のこと]を問題視する上での[取っ掛かり]と位置付けてのことであるとも強
調しておく)。

α . (金星にまつわる会合周期にあって具現化するとの指摘もなされてきた)[五芒星相似形]
を[ブラックホール絡みの話]と接合させるような奇怪なることらがある。すなわち、次のようなことら
($\alpha 1$ から $\alpha 8$)がある。

$\alpha 1$. 地球と金星と太陽の内合(インフェリアー・コンジャンクション)時にあつての天体座
標を結んで出来上がるとのことがよくも取り上げられる(直近先述)との[五芒星]は[五角
形]と結びつく図形でもある。[(ほぼ正確な)[五芒星]が描写される局面]というのは[(ほ
ぼ正確な)[正五角形]に近しきものが内にて形成される局面]であるとも述べられる。どうい
うことか。[(正確な)五芒星]というものは[正五角形]に内接される図形として描けるもので
あり、[正確な五芒星の各点]を構成する五点というのが正五角形の各点にそのままに対応
することになるとのことがあるのである(→ややこしいことと思うので正確な図を続く段にて挙
げることとする)。

$\alpha 2$. 正五角形、英語に直せば、[レギュラー・ペンタゴン]との特質を持つのがアメリカ
の国防総省の本部庁舎である。そのペンタゴンの広場は先の 911 の事件の起こる前から
[ワールド・トレード・センターの跡地]がそう述べられるようになったのと同じ言葉で呼び慣
わされていた、[グラウンド・ゼロ]との言葉でもって呼び慣わされていた(「911 の事件が起

こる前から」グラウンド・ゼロという特殊な言葉がペンタゴンと結びつけられてきたとのことについては本稿の先の段で書き記していることだが、続く段で再度の出典紹介をなす)。

α3. グラウンド・ゼロという言葉は 911 の事件が発生する前からペンタゴンの広場と歴史的に結びつけられてきたとの沿革がある(上の **α2** にて言及)のだが、そちらグラウンド・ゼロという言葉、かの 911 の事件が起こる「前」から「使用局面が際立って限られていた特殊用語」として存在していた同語を「ブラックホール」と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が存在しており、その書籍、「不可解極まりない 911 の予見的言及とも関わる」とのことを本稿の先だつての段で先述してきたとの書籍でもある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』となる。同著『異端の数ゼロ』序盤部にては「**五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性**」のことが「**最小の単位(無限小)に向かう力学**」を指し示すようなものとして取り上げられているとのことがあるのである(**α1** の出典とも重なるところとして無論、そのようなことが述べられるところの出典も挙げる)。さて、そのように問題となる — 911 の異様な先覚的言及とも関わるとの式で問題となる — 書籍で取り上げられている

「**五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性**」

にて「も」表象される

「**最小の単位(無限小)に向かう力学**」

は言い換えれば、「**原子核の領域に向かう力学**」、さらに述べれば、「**原子核を構成する陽子や中性子の領域、そして、陽子を複合して構成するクォークのようなより極微の素粒子の世界に向かう力学**」のことを想起させるものでもある。

何故か。

原子のなかで原子核の占める割合はおそらく小さい、そのような原子核を構成するのが中性子や陽子であるといったかたちで(小さきことをひたすらに突き詰めていった際の)極小の世界というものは展開しているからである。「**五角形(ペンタゴン)および五芒星の両者の図形的特性**」のことを知っていれば、自然に想起されるのが「**最も小さな極小の世界へ向けての力学**」であり、それは換言すれば、「**素粒子物理学などが領分とする極小の世界へ向けての力学**」であると言い換えられるようなところがあるのである。

そして、そうした限りなくものゼロ・スケールに向かつて展開する極微の世界の領域の研究(たとえばヒッグス粒子や超対称性粒子など命名されてのものを発見に血道をあげるとの「研究」)を声高に唱道、「**原子核を壊す中での膨大なエネルギー**」(と述べても極微領域に集中しているからこそその膨大なエネルギー)で「**ブラックホール**」さえもが生成される可能性が取り沙汰されているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まったの LHC 実験であると言われている。

α4. ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』との書籍は 911 の事件が起こる「前」から特異な言葉であるとのグラウンド・ゼロという言葉ブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍、かつもって、不可解なる 911 の予見的言及とも関わっているとの書籍でもある(←**α3** で言及したことである)。

そして、同著『異端の数ゼロ』は「**五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性**」と結びつくことに言及しているとの書籍でもある(←**α1** および **α3** にての出典にまつわるところでもある)。

そうした書籍で扱われる

「**ゼロの世界**」「**極小の世界**」

に近しきところで(原子に比してその比率が恐ろしく小さいとの極小の存在たる)「**原子核**」を破壊しようとのことをなし、そこにて発生する膨大なエネルギーからブラックホールを生成しようとのところにまで至ったのが LHC 実験であると「される」(←**α3** にて言及のことでもあ

る)のだが、他面、[911の事件]では何が起こったのか。

[[正五角形]との形状を呈するとのペンタゴンが崩された]

とのことが起こっている(← $\alpha 2$ で合衆国防総省庁舎たるペンタゴンが(正確な五芒星と無限に続く相互内接外接関係を呈するとの)[正五角形]であることを問題視している)。

以上のことより次の関係性が想起されもする。

[現実世界で911の事件が起こる「前」からアメリカ国防総省本部庁舎たるペンタゴン(正五角形)の広場と結びつけられてきたグラウンド・ゼロという特殊な言葉(← $\alpha 2$)] ⇔ [911の事件が起こる前から「グラウンド・ゼロ」との特殊な言葉とセットとなっていた現実世界でのペンタゴン([正五角形]状の米国国防総省庁舎)の911にあつての部分崩壊] ⇔ [正五角形(合衆国防総省庁舎ペンタゴンとの同一形状)の(911にての)部分崩壊($\alpha 3$)] ⇔ [911の事件が起こる「前」から特殊用語として存在していた「グラウンド・ゼロ」という言葉を「ブラックホール」と関係するかたちでなぜもってしてなのか用いているとの書籍であり(そして、そちら著作、911の不可解なる予見事物とも通ずるようになっている書籍との意味でも際立っての著作ともなり) また、同時に、五芒星と五角形(ペンタゴン)の間の無限に続く相互内接・外接関係によって表象されもする極小の世界へ向かう力学に言及している著作「でも」ある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』という著作の内容] ⇔ [無限小に至る方向性での中での破壊挙動、原子核を壊す中での膨大なエネルギー発現状況でもって「ブラックホール」を作り出しうると言われるに至っている LHC 実験を想起($\alpha 3$)]。

以上のような⇔で結んでの関係性については『何を述べているか理解しがたい』と受け取られるか、あるいは、『穿ち過ぎ(考えすぎ)である』と思われるところか、とも思う。それゆえ、そうした物言いがなせてしまう「他の」事情があることにつき続く段で「補いながらもの」表記をなす。

$\alpha 5$. [グラウンド・ゼロ]という言葉 —(本来、[広島・長崎の爆心地]を指すべくも考案された特別な言葉であり、また、冷戦期、核戦争の標的たるところと結びつけられるに至った言葉である)— と[911]の事件の発生前から結びつけられていた[ペンタゴン](アメリカ国防総省本庁舎)というのはレズリー・グローヴズという男(往時、米国陸軍工兵隊大佐)を責任者にして1941年「9月11日に」建設が開始されたとの建物である。 そちらペンタゴンの建設計画を指揮していたレズリー・グローヴズという男が「ペンタゴン建造中に」大佐から准将に昇進、主導することになったのが「マンハッタン計画」となっており、同「マンハッタン計画」で実現・現出を見たのが「原子爆弾」と「広島・長崎への原子爆弾の投下」([グラウンド・ゼロ]との言葉がはじめて用いられるようになった爆心地を現出させた挙動との意味合いで本稿の先の段でも取り上げていた原爆投下)となる。そこに見る「原子爆弾」というのは「極小領域たる原子核のレベルでの崩壊現象、[核分裂反応]によって実現を見た兵器」でもある —根拠を入念に示さんとするものとして作成しているとの本稿スタンスに則り、無論、以上のようなことが述べられる確たる論拠もこれより「網羅的に」紹介していく— (:1941年9月11日から建設開始(着工)を見ていた[ペンタゴン]の建設計画を指揮していた男レズリー・グローヴズが[マンハッタン計画]の責任者でもあったわけであるが、[マンハッタン計画]というのはそもそも、[極小の領域、原子核のレベルでの崩壊現象が原子爆弾を実現ならしめること]が着想されて開始された計画である。[原子核レベルでの崩壊現象を利用しての核兵器開発]と「ペンタゴン」が結びつく、そう、[五芒星形と五角形(ペンタゴン)が無限に相互に内接・外接しあいながら無限小へ至る方向(原子核や素粒子の世界へ至る方向)を指し示すもの]であることを想起させるように結びつくとのことが歴史的沿革として存在していることが問題となる)。

$\alpha 6$. 金星の内合ポイントにてその近似物が具現化するとの五芒星は史的に見て[退魔

の象徴]とされてきたとの経緯があるものである(無論、そこからして典拠を後の段にて指し示す)。さて、その「退魔の象徴としての五芒星」と結びつくような「退魔の象徴物としてのペンタゴン(アメリカ国防総省本庁舎)」が爆破されて「異次元から」干渉する外側の銀河由来の妖怪が解き放たれるとの「荒唐無稽小説」が世に出ている。それが本稿の先の段で「911の「奇怪なる」予見的言及をなしている」との要素を同作が多重的に帯びていることにつき仔細に解説してきた70年代欧米でヒットを見たとの小説作品、『ジ・イルミナタス・トリロジー』である。につき、[退魔の象徴としての五芒星と結びつくが如き退魔の象徴としてのペンタゴンの崩壊、および、911の事件の発生(マンハッタンとペンタゴンが同時攻撃されたとの事件)を前言しているが如くの奇怪なる文物]などとのものより想起されるのは一繰り返しになるも一次のようなこととなる。⇒[(直近にて言及の)書籍『異端の数ゼロ』に特性として認められるとの「五角形(ペンタゴン)と五芒星の内接関係を無限小に至る機序として呈示するとのやりよう」・「グラウンド・ゼロという言葉が911の事件が発生する前からブラックホールと結び付けているとのやりよう」・「不可解なる911の予見的言及とも関わるとの側面」]←→(関係性の想起)←→[ペンタゴン(1941年9月11日に建造開始)の建設計画を主導した軍人が同様に主導して「原爆」と「グラウンド・ゼロ」を具現化させることになった「無限小に至る力学(五角形と五芒星が相互に無限に内接・外接されるかたちで表象される力学)の過程での原子核崩壊作用」]を利用するとの「マンハッタン計画」に見るありよう]。

α7. 会合周期(具体的に述べれば、8年単位で現出する5回の地球との周期的内合関係)でもって「五芒星」を描くとされる存在が金星となるとのことを先述した。また、同文に金星が悪魔の王ルシファーと欧州にて歴史的に結びつけられてきた星であることも先述した。さて、歴史的に惑星金星と結びつけられてきたとの悪魔の王ルシファーとのつながりで述べれば、ダンテ『地獄篇』にもミルトン『失樂園』にも「ルシファーと結びついた罪の領域」にあつて「今日的な観点で見てのブラックホールの近似物」が多重的に具現化していると申し述べられるようになってきていること、解説をなしてきたのが本稿である。

α8. 「五芒星」は「黄金比」と際立って結びつく図形でもある。そこに見る「黄金比」と「ブラックホール」が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある。

(これより要素分解なしたうえで網羅的にその典拠となるところを指し示していく所存であるとの上の**α1**から**α8**の流れに加えてのこととして)

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとのことがある。それは海女による「セーマン・ドーマン」と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用は「竜宮」に引き込まれないための呪(まじな)いであるとの物言いがなされてもいる。さて、伝承に見る「竜宮」とはどういう場か。

[時空間の乱れが発生した場]([外側に対して時間の進みが遅い場])

とされる場である。他面、重力の化け物、ブラックホールおよびその近傍領域も「時間の乱れ」が問題となるものである(時を止めるが如くブラックホールにおける時空間の法則の破綻とのことについては部分的に本稿の先の段でも典拠挙げながら問題視していることとなるが、続く段にて後追い確認を請うための再度の出典提示をなす)。以上のことは単体で述べれば、「考えすぎ」の謗(そしり)免れないこととあいなろうが(当たり前ではある)、上(の**α**の段)にて述べてきたようなことがすべて「事実」であると網羅的に指し示されたとき、ここ**β**の申しようも「考えすぎ」では済まされぬものとなって「しまう」とのことがある(その点についても無論、細かい解説をなす)。

以上のことら(α1 から α8 および β と振ってのことら)の解説と出典表記を順次段階的にこれ以降なすこととする (：確たる事実であるとのことを「証」して「示」す、[証示]をひたすらに重んじているというのが本稿筆者の理念である、そう、「[確たる事実]を[自分達を死地に追い込むまさしくものそのやりよう]として眼前に突きつけられてなおもって何もやらぬ者達に明日などあるわけがない」のことを訴求したい (そして、「[罪]の所在をつまびらやかにして[運命]の問題を確認しきりたい」) がゆえの本稿筆者の理念である)。

まずもっては

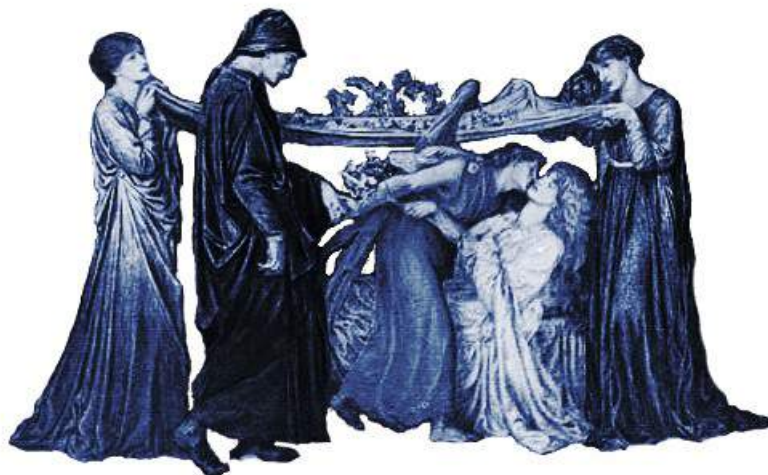
α1. 地球と金星と太陽の内合(インフェリアー・コンジャンクション)時にあつての天体座標を結んで出来上がるとのことがよくも取り上げられる(直近先述)との[五芒星]は[五角形]と結びつく図形でもある。[(ほぼ正確な)[五芒星]が描写される局面]というのは[(ほぼ正確な)[正五角形]に近しきものが内にて形成される局面]であるとも述べられる。どういふことか。[(正確な)五芒星]といふものは[正五角形]に内接される図形として描けるものであり、[正確な五芒星の各点]を構成する五点というのが正五角形の各点にそのままに対応することになるとのことがあるのである。

との部の典拠紹介をなすことから始める(：α1 にあつての前半をなす[五芒星形状が地球と金星と太陽の内合(インフェリアー・コンジャンクション)時にあつての天体座標を結んで出来上がるとのことがよくも取り上げられている]とのことについては本稿にてのつ先の段、[出典\(Source\)紹介の部 67](#)を包摂する解説部にて説明を加えていることなのでここではその内容は繰り返さないこととする)。

出典(Source)紹介の部 68

SOURCE

68



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 68 にあつては、

[五芒星は[五角形]と結びつく。見方を変えれば、[(ほぼ正確な)[五芒星]が描写される局面]というのは[(ほぼ正確な)[五角形](正五角形)に近しきものが内にて形成される局面]であるとも述べられる]

とのこと(α1と振つてのこと)の典拠紹介をなす。

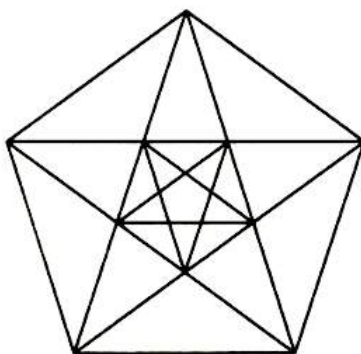
表記の点 —— [五芒星は[五角形]と結びつく。見方を変えれば、[(ほぼ正確な)[五芒星]が描写される局面]というのは[(ほぼ正確な)[五角形](正五角形)に近しきものが内にて形成される局面]であるとも述べられる]との点—— については数学者にして比較的著名なサイエンスライターであるチャールズ・サイフェという書き手による著作、これより別の観点でもその内容をさらに問題視するとの著作である ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』(ハードカバー版、邦訳版版元は早川書房)より次の部の原文引用をなしておく。

(直下、チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ』p.34より原文引用をなすとして)

ピュタゴラス教団の神秘的なシンボルは、ある数=形、すなわち五芒星形(ペンタグラム)、突端が五つある星だった。この単純な図形には無限が垣間見られる。星を形づくる線の中には五角形がおさまっている、五角形の角を線で結ぶと、逆立ちした小さな五芒星形ができる。もとの星の完全な相似形だ。この星にはさらに小さな五角形がおさまっており、そこにはさらに小さな五角形がおさまっている(図6)。このことも興味深いが、ピュタゴラス学派にとって五芒星形のもつとも重要な性質は、図形の自己複製にあつたのではなく、星の線のなかに隠されていた。そこには、ピュタゴラス的宇宙観の究極のシンボルだった数=形が含まれていた。その数=形とは黄金比だ

(引用部はここまでとしておく)

以上でもつて α1 と振つての部の典拠紹介とした。



チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ』(ハードカバー版)の引用部にて掲載されている図そのものではないが、普遍的な構図として図像化できるところの類似図を図示すれば、問題となる構図は上の通りのものとなる。

続いて、(先行するところの **α2** の部に先駆けてそちらの出典を挙げるとして)、**α3** にあつての前半部、

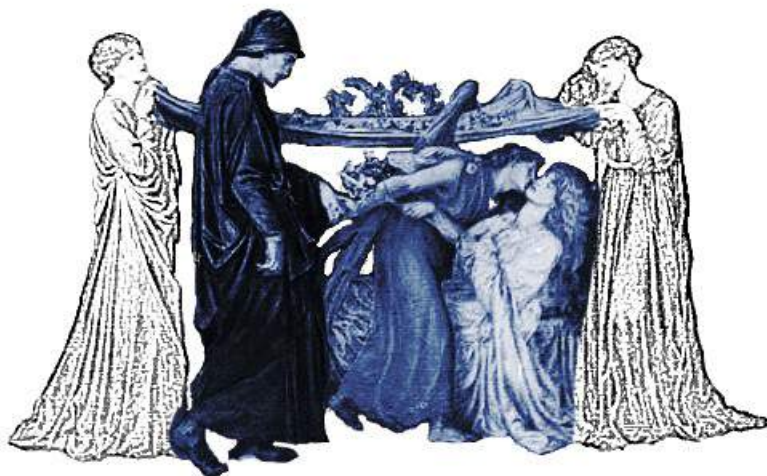
グラウンド・ゼロという言葉は911の事件が発生する前からペンタゴンの広場と歴史的に結びつけられてきたとの沿革がある(上の **α2** にて言及)のだが、そこからグラウンド・ゼロという言葉、かの911の事件が起こる「前」から「使用局面が際立って限られていた特殊用語」として存在していた同語を「ブラックホール」と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が存在しており、その書籍、「不可解極まりない911の予見的言及とも関わる」とのことを本稿の先だつての段で先述なしてきたとの書籍でもある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』となる (**α3** の前半部)

とのことの出典紹介をなす。

出典(Source)紹介の部 69 (ここ出典紹介部は本稿にての**出典(Source)紹介の部 33-2**にて既に原文引用をなしていたとの書籍内記述を「再度」紹介することになっているとのものである。に関しては、重要性に鑑みて、「例外的に」(本稿執筆に際して通貫するところとして課しているところの定例化させての記述様式から見て「例外的に」)出典番号を分けながらも、なおもつての典拠「再呈示」「だけ」をなしていること、断っておく)

SOURCE

69



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ**出典(Source)紹介の部 69**にあつては

[グラウンド・ゼロという言葉、かの911の事件が起こる「前」から「使用局面が際立って限られていた特殊用語」として存在していた同語を「ブラックホール」と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が存在しており、その書籍、「不可解極まりない911の予見的言及とも関わる」とのことも本稿の先だつての段で先述なしてきたとの書籍でもある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』となる] (本稿の流れ上、α3と振つての箇所の前半部)

とのことについての典拠を挙げることにする。

(直下、ZERO: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』(早川書房「ハードカバー」版)[第8章 グラウンド・ゼロのゼロ時——空間と時間の端にあるゼロ]p.240よりの再度の引用をなすとして)

[ゼロは、物理法則を揺るがすほど強力である。この世界を記述する方程式が意味をなさなくなるのは、ビッグバンのゼロ時であり、ブラックホールのグラウンド・ゼロだ。しかし、ゼロは無視できない。ゼロは私たちの存在の秘密を握っているばかりでなく、宇宙の終りの原因にもなるのだ]

(訳書よりの原文引用はここまでとしておく —※—)

(※尚、2003年に出されている日本語訳版に対して2000年に世に出ている上のパートの原著 ZERO: The Biography of a Dangerous Idea にての表記は最終章 Chapter Infinity: Zero's Final Victory: End Time に先立つ Chapter 8: Zero Hour at Ground Zero: Zero at the Edge of Space and Time に認められる、“Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. **It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense.** However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence, it will also be responsible for the end of the universe.” とあいなっている。表記の英文引用テキストをグーグル検索エンジンに入力して包含関係を指し示すテキストが出てくるかどうか(質的犯罪者による違法検閲か該当ページ削除を見ていなければ表示されてくるであろう)、また、書籍原著の刊行年が本当に2000年(グラウンド・ゼロとの言葉が目立って取り沙汰されたかの911の事件が起こったのより1年程前)なのか、疑わしきにおかれては確認いただきたい 一種族とおのれの運命に無頓着、「抗わずに」何時殺されても構わないとの心根があるのならば、別段、無理強いはしないが、そうではないとの向きにして、疑わしいとの向きにおかれては確認いただきたい—)

次いで、ZERO: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』との著作がいかようにして[911の事前言及事物]に関わっているかであるが、下の出典紹介番号挙げつつもの振り返つての枠内表記部、そのうちの5.の部がそのことに言及しているところとなる(ので疑わしきに対しては[振り返りなしての表記の部らの真偽確認]の方、切に請いたい次第である)。

物理学者キップ・ソーンの著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつては次のような特色が見てとれる。

1. 同著は[通過可能なワームホール(にしてタイムマシン化されての存在)にまつわる思考実験]を取り上げている著作となるが、そちら思考実験の[空間軸上の始発点]は[カリフォルニア州パサデナ]に置かれている(その表向きの理由はゾーンがカリフォルニア州パサデナに存する名門カリフォルニア工科大学に奉職しているからとのことに求められる)。さて、[通過可能なワームホール(にしてタイムマシン化されての存在)にまつわる思考実験]にての[空間軸上の始発点]とされているパサデナの地は郵便番号(ZIP CODE)頭番号、すなわち、地番上の始点を91101との数値に置くとの領域だが、[数値列]の問題として[91101]というのは 一半ば常識の問題として— 欧米圏の日付表記方法にあって[2001年9月11日]そのものを指す数値でもある。

(→以上のことは[国内で広くも流通している訳書]および[オンライン上で容易に文言確認できるとの原著]よりのそれぞれもつての原文引用などを通じて本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 28](#)および[出典\(Source\)紹介の部 31-2](#)で[遺漏なくもの指し示し]に注力していることである)。

2. キップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にて問題視されている[通過可能なワームホール(にしてタイムマシン化されての存在)にまつわる思考実験]は[双子のパラドックス]の原理を応用したものとして紹介されている。さて、そこに見る[双子のパラドックス]だが、—科学史にあっての出来事として記録されていることとして— 1911年に提唱されたものとなる。そのこと、[1「911」と「双子」との同時具現化]につき2001年「9月11日」の[双子の塔](ツインタワー)崩落事件のことが想起されるもする、上の1. にて言及の[思考実験の空間軸上の始点](91101を地番スタート・ポイントとする空間軸上の始点)の問題もあって想起されるとのことがある(「この段階では」ただの穿ちすぎにしか響かないかもしれないが、とにかくものこととして、そうも想起されるとのことがある)。また、キップ・ソーンの著作にては[通過可能なワームホール(にしてタイムマシン化されての存在)にまつわる思考実験]の説明に入る前の段で[時間の相対性]のことが説明されているのだが、そこでは[パサデナ](91101を始点とする一帯)にての[視差を呈する爆竹「順次」爆破](疾走する車の上での爆竹順次起爆)が引き合いに出されている。順次爆発とのことで双子の塔の[時差呈しての崩落]のことが想起されるようなところがある(→以上のことは[国内で広くも流通している訳書]および[オンライン上で容易に文言確認できるとの原著]よりのそれぞれもつての原文引用などを通じて本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 32](#)から[出典\(Source\)紹介の部 32-2](#)で[遺漏なくもの指し示し]に注力していることである)。

3. キップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にての[通過可能なワームホール(にしてタイムマシン化されての存在)にまつわる思考実験]ではその[時間軸上の始点]([空間軸上の始点]に対して[時間軸上の始点])が —同著が1994年著作であるのにも関わらず— 何故なのか、[2000年1月1日9時]に[設定]されているとのことがある。さて、[2000年1月1日9時]というのは[時刻]→[日]→[月]→[年度]との順序で並べると[[9][1][1][2000]]という[[9][11][2001]](繰り返すが、ナンバー・91101は2001年9月11日という日付の欧米圏での略記表示である)と[7桁]のナンバーで一桁しか違わないナンバーが導出されるもの「でも」ある。従って、錯視の問題として[2000年1月1日9時]などとの数をいきなり持ち出

されると[2001年9月11日]のことが[錯視]の問題として想起されようとのことがある。

(→以上のことは[国内で広くも流通している訳書]および[オンライン上で容易に文言確認できるとの原著]よりのそれぞれもっての原文引用を通じて本稿にての出典(Source)紹介の部 28-2で[遺漏なくもの指し示し]に注力していることである)。

4. [91101]を地番数値上のスタートポイントとする一帯(カリフォルニア州パサデナ)を[空間軸]上の始点としているとの[通過可能なワームホール(にしてタイムマシン化されての存在)にまつわる思考実験 —— 既述のように1「911」年に提唱された「双子の」パラドックスの原理を用いての思考実験でもある ——]にあっての[時間軸]上の始点の問題、上の3. にて言及の[9][1][1][2000]と[[9][11][2001]の類似の問題は[ほぼ一致の錯視]から[完全一致の錯視]に切り替わりうる。何故か。ニューミレニアム(新千年紀)の始期を2000年に置くのか、あるいは、2001年に置くのかが暦の定立の問題として論点となりうるとのことがある、2000年と2001年はニューミレニアムの始期として混同が問題になる数であるのことがあるからである。

(→以上のことは該当著作原文引用を通じて本稿にての出典(Source)紹介の部 33で[遺漏なくもの指し示し]に注力していることである)。

5. 上の4. に加えて、である。[2000年と2001年はニューミレニアムの始期として混同が問題になる]とのことをも扱った書籍チャールズ・サイフェ著 **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea** (邦題)『**異端の数ゼロ**』(原著2000年刊)が

[(2001年)にあってマンハッタンとペンタゴンが同時に攻撃されて)グラウンド・ゼロとの言葉が脚光を浴びながらツインタワー跡地を指す言葉として用いられるようになる前より[相当特殊な言葉・言いまわし]として従前よりそこにあった(グラウンド・ゼロとの言葉としての特殊性については先述のことだが、後にも再度、解説する)とのそちら[グラウンド・ゼロ]との語をブラックホールと結びつけている著作]

となりもし、なおかつもって、

[キップ・ソーン著作 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあって目立って取り沙汰されている(1. から4. とのかたちで上に問題点を指摘してきた)[通過可能なワームホールにまつわる思考実験]のことにも[まさしくもの BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』とほぼ同文の画風のイラストレーション](Matthew Zimetとの共通のイラストレーターの手になるイラストレーションと解されるようになっている)を用いて言及している著作]

となっているとのことがある。

(上のことらは該当著作原文引用および確認可能ページ数の指摘を通じて本稿にての出典(Source)紹介の部 33-2で[遺漏なくもの指し示し]をなしていることである —— 疑わしきにあっては、たとえば、国内で流通している訳書らに見る図像ら、[キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインの残したとんでもない遺産』(白揚社/原著刊行時期より遅れること3年しての1997年に刊行された邦訳版)にあっての p.453 及び p.456 にて呈示の図ら]と[チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ 数学・物理学が恐れるもっとも危険な概念』「ハードカバー」版(早川書房刊行)にあっての p.267(付録 E「自家製ワー

ムホールタイムマシンをつくろう」と題されての部)にて掲載の図]を図書館などで該当書籍取り寄せするなどして確認すれば「数秒で納得がいく」ようになっている()。

上もて流れ上、**α3**と振つてのこの前半部 ——かの911の事件が起こる「前」から使用局面が際立って限られていた特殊用語として存在していたグラウンド・ゼロという言葉がブラックホールと関係するかたちで用いていたとの書籍が存在していること、そして、その書籍は911の予見事象と関わりもしていること——にまつわつての典拠とした(順不同となるが、先行するところの**α2**の典拠はさらに後の段にて挙げる)。

(出典(Source)紹介の部69はここまでとする)

出典紹介を続ける。さらに**α3**の段、(再度、全文を挙げれば)、

α3. グラウンド・ゼロという言葉は911の事件が発生する前からペンタゴンの広場と歴史的に結びつけられてきたとの沿革がある(上の**α2**にて言及)のだが、そちらグラウンド・ゼロという言葉、かの911の事件が起こる「前」から「使用局面が際立って限られていた特殊用語」として存在していた同語を「ブラックホール」と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が存在しており、その書籍、「不可解極まりない911の予見的言及とも関わる」とのことを本稿の先だつての段で先述なしてきたとの書籍でもある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』となる。同著『異端の数ゼロ』序盤部にては「五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性」のことが「最小の単位(無限小)に向かう力学」を指し示すようなものとして取り上げられているとのことがあるのである(**α1**の出典とも重なるところとして無論、そのようなことが述べられるところの出典も挙げる)。さて、そのように問題となる —911の異様な先覚的言及とも関わるとの式で問題となる— 書籍で取り上げられている「五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性」にて「も」表象される「最小の単位(無限小)に向かう力学」は言い換えれば、「原子核の領域に向かう力学」、さらに述べれば、「原子核を構成する陽子や中性子の領域、そして、陽子を複合して構成するクォークのようなより極微の素粒子の世界に向かう力学」のことを想起させるものでもある。何故か。原子のなかで原子核の占める割合はおそらく小さい、そのような原子核を構成するのが中性子や陽子であるといったかたちで(小さきことをひたすらに突き詰めていった際の)極小の世界というものは展開しているからである。「五角形(ペンタゴン)および五芒星の両者の図形的特性」のことを知っていれば、自然に想起されるのが「最も小さな極小の世界へ向けての力学」であり、それは換言すれば、「素粒子物理学などが領分とする極小の世界へ向けての力学」であると言い換えられるようなところがあるのである。そして、そうした限りなくものゼロ・スケールに向かって展開する極微の世界の領域の研究(たとえばヒッグス粒子や超対称性粒子など命名されてのものを発見に血道をあげるとの「研究」)を声高に唱道、「原子核を壊す中での膨大なエネルギー」(と述べても極微領域に集中しているからこそその膨大なエネルギー)で「ブラックホール」さえもが生成される可能性が取り沙汰されているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まって

のLHC実験であると言われている。

にての中段部、

[五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性] ($\alpha 1$ にて言及しているところとして **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea** (邦題)『異端の数ゼロ』)にても取り上げられている関係性は[最小の単位(無限小)に向かう力学](ゼロ・スケールを目指しての力学)を指し示すものともなる。そのような[最小の単位(無限小)に向かう力学]は言い換えると、[原子核の領域に向かう力学]、さらに述べれば、[原子核を構成する陽子や中性子の領域や陽子を複合して構成するクォークのような素粒子の世界に向かう力学]のことを想起させるものである($\alpha 3$ 中段部)

とのことの出典を — $\alpha 2$ に先立つことながら— (出典(Source)紹介の部 69(2)と振って)下に呈示しておくこととする。

出典(Source)紹介の部 69(2)

SOURCE

69(2)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 69(2)にあつてはまずもって書籍『異端の数ゼロ』 ($\alpha 3$ 冒頭部の出典にまつわる直近表記の段にて「ブラックホールとグラウンド・ゼロとの言葉を911の事件の発生前から」結びつけているとのその内容を取り上げた書籍)で五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性のことが[最小の単位(無限小)に向かうが如く力学]を指し示すものとして言及されていることについて「確認のために」くどくもの再言及をなしておくこととする。

ピュタゴラス教団の神秘的なシンボルは、ある数＝形、すなわち五芒星形(ペンタグラム)、突端が五つある星だった。この単純な図形には無限が垣間見られる。星を形づくる線の中には五角形がおさまっている、五角形の角を線で結ぶと、逆立ちした小さな五芒星形ができる。もとの星の完全な相似形だ。この星にはさらに小さな五角形がおさまっており、そこにはさらに小さな五角形がおさまっている(図6)。このことも興味深いのが、ピュタゴラス学派にとって五芒星形のもっとも重要な性質は、図形の自己複製にあったのではなく、星の線のなかに隠されていた。そこには、ピュタゴラス的宇宙観の究極のシンボルだった数＝形が含まれていた。その数＝形とは黄金比だ

(引用部はここまでとしておく)

上のくどくもの再引用部では

[この単純な図形には無限が垣間見られる。星を形づくる線の中には五角形がおさまっている]

と五芒星形について表記しているが、その引用部に続く形で書籍『異端の数ゼロ』では次のような「無限に続く」内接関係を示す図が挙げられている。

続いて、

THE GOLDEN RATIO The story of Phi, the World's Most Astonishing Number
(邦題)『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』(早川書房ハードカバー版/著者は天体物理学者のマリオ・リヴィオという科学者となる著作)

との書籍に次のような記載がなされていることを引いておく。

(直下、『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』(早川書房ハードカバー版)にての p.49 から p.51 より[中略]なしつつもの掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

五芒星形は、正五角形——五つの辺の長さも頂角の大きさも等しい平面図形——とも深いつながりがある。正五角形の頂点を対角線で結ぶと、五芒星形ができる。この五芒星形の中心にも小さな五角形ができ、その五角形の対角線も五芒星形となって、さらに小さな五角形がなかにできる(図10)。

これがどこまでも続き、どんどん小さな五角形と五芒星形が作られていく。この一連の図形には際立った特徴がある。

…(中略)…

「どの線分もひとつ前の線分にくらべ、黄金比 ϕ にぴったり等しい比で小さくなっている」ことが、初頭幾何学によって簡単に証明できるのだ。

…(中略)…

なにより重要なことに、

入れ子状に小さくなる五角形と五芒星形の生じるプロセスが無限に続くという事実から、この五角形の対角線と辺が通約不可能である——つまり、両

者の長さの比(ϕ に等しい)がふたつの整数の比で表せない——と厳密に証明できる。

…(中略)…

ピタゴラス学派こそが黄金比と通約不可能性を最初に発見したと提唱する人がいる。そうした数学史家たちは、ピタゴラス学派こそが五芒星形と五角形に夢中になったことと、紀元前五世紀中葉に実際に知られていた幾何学とを考え合わせると、ピタゴラス学派——とくにメタポンティオンのヒッパソスかもしれない——が黄金比を、またそれを通じて通約不可能性を発見した可能性は非常に高いとしている。

…(中略)…

「十二個の五角形からなる球体を……描いた」というフレーズで、イアンブリコス は、正十二面体の作図に(図形が現実には球ではないので、やや不明確だが)言及している。正十二面体は、正五角形の面を一二枚もつ立体で、プラトン立体として知られる五つの立体のひとつにあたる。プラトン立体はどれも黄金比と密接に結びついており、それについては第4章で改めて語ろう。こうした話にはどこか嘘っぽさもあるが、数学史研究家のヴァルター・ブルケルトは一九七二年に刊行された『古代のピタゴラス学派の伝承と科学』で、「ヒッパソスにかんする話は、伝聞だらけだが納得できる」と言い切っている。

そう言える主な根拠として、図10(と付録2)が挙げられる。正五角形の対角線と辺の長さが通約不可能であるとの結論は、無限に小さな五角形ができるというきわめて単純な知見にもとづいている。

(引用部はここまでとする)

これにてお分かりだろうが、

「[五芒星と五角形の入れ子構造]は[数学史]にあって[無限(小)への力学と黄金比体现の力学と密接に結びつく形状]との認知・認識なされている構造となっている」

とことがある。

次いで、(ここにてその典拠を挙げることにしているとの $\alpha 3$ の「中段部」内容となっているところの)

[原子核や原子核を構成する陽子や中性子のそのまた構成単位たる素粒子が物質の最小単位に近付いての存在である]

とのことにまつわる典拠を挙げておくこととする。

(直下、[あまりに基本的なことであるため、誤謬の介在余地がほとんどないところ]として和文ウィキペディア[原子]項目の現行記載内容よりのワンセンテンス原文引用をなすとして)

原子(=中間構成単位としての原子)は、下部構造として原子核と電子が存在する。このうち、原子核は、更に陽子と中性子から構成され、その組み合わせに応じて現在約3000から約6000種類の原子の存在が知られている。

…(中略)…

原子核の半径は原子の半径の約10万分の1(1fm程度)と小さい。

(引用はここまでとする。尚、[陽子]・[中性子]から成り立っているとの[原子核]につき上

にて「1fmと小さなものである」と表記されているが、[fm]とは[フェムトメートル](10のマイナス15乗メートル、すなわち、[10の15乗こと1000「兆」]で10メートルを割った値)の略である)

(直下、[あまりに基本的なことであるため、誤謬介在余地がほとんどないところ]として和文ウィキペディア[クォーク]項目の現行記載内容よりのワンセンテンス原文引用をなすとして)

クォークどうしは結合してハドロンと呼ばれる複合粒子を形成する。最も安定なハドロンは、原子核の構成要素である陽子および中性子である。クォークの閉じ込めとして知られる現象により、クォークは相当な高エネルギー状態でなければ観測されることはなく、ハドロンの中においてのみ観測することができる。

(引用部はここまでとする ーワンセンテンスだけ引いたうえで述べるが、ここでのポイントは[クォーク]が結合して[ハドロン]ができあがっているとされていること、そして、[ハドロン]に含まれる[陽子]・[中性子]が[原子核(原子の10万分の1のサイズの存在)の構成要素]であると紹介されているとのことであるー)

(直下、[あまりに基本的なことであるため、誤謬の介在余地がほとんどないところ]として和文ウィキペディア[素粒子]項目の現行にての記載内容よりのワンセンテンス原文引用をなすとして)

物理学において素粒子(elementary particle)とは、**物質を構成する最小の単位**のことである。

…(中略)…

素粒子は大きく2種類に分類され、物質を構成する粒子はフェルミ粒子、力を媒介する粒子をボース粒子と呼ぶ。物質を構成するフェルミ粒子は更に、クォークとレプトンに分類される。

(引用部はここまでとする ーワンセンテンスだけ引いたうえで述べるが、ここでのポイントは[ハドロン](上にての引用部にて陽子・中性子を含むとされていることを紹介したハドロン)の中でのみ観測されるとの[クォーク]が[物質を構成する最小の単位]であるとされていることであるー)

以上の原文引用部「のみ」から指し示せるところして我々人間にあっての科学では次のような理解がなされているというわけである。

「原子の核をなす[原子核]は原子の10万分の1のサイズとの極小の存在である(その原子核の大きさがフェムトメートル、[1メートルの1000兆分のサイズ($1\text{m}\times 10^{-15}$)]となるとのそちらフェムトメートル[fm]単位のものであることも上にて引用をなしているとのウィキペディア[原子]項目に一言だけ言及されている)。

そうした[原子核]を構成するのは[陽子]や[中性子]といったものとなり、それら[陽子]や[中性子]を含む[ハドロン]が[クォーク]の結合体となっており、そちら[クォーク]が([レプトン]と並び)[素粒子]と呼ばれる存在、[最小の世界の存在](最小の単位となる存在)であると理解されているとのことがある」

とのことである。



上掲左上の[自己相似形を取る五角形内包五芒星の図]については手前手元にある **THE GOLDEN RATIO The story of Phi, the World's Most Astonishing Number** (邦題)『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』にも類似の図像が掲載されているところのものとなる。そうもしたかたちのものとして[五芒星と五角形の入れ子構造]は[無限小に至る力学(無限小へ至るまで小数点が続くとの割り切れなさ)を体現してのもの]として数学史にあって着目されてきたと述べられているものとなっている(ただ単純に割り切れぬ数、[無理数]の問題を視覚的に示すだけではなく[黄金比](後述)「とも」関わるとの観点からである)。

上もて[極小の世界に向かう力学] ([五角形と五芒星形の相互内接関係によって指し示されるが如き力学] でもいい) が記号論的に

[[原子核]、そして、そのまたさらに極微なる領域に至っての [素粒子] (クォークと称されるものの類) の領域に向かう力学]

と同様のものであるとの申しようがなせること、納得いただけたのではないかと、思う。

これにて流れ上、 **$\alpha 3$** と振ってのこの[中段]の部の内容、

[[五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性] ($\alpha 1$ にて言及しているところとして **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea** (邦題)『異端の数ゼロ』)にても取り上げられている関係性)は[最小の単位(無限小)に向かう力学] (ゼロ・スケールを目指しての力学)を指し示すものともなる。そのような[最小の単位(無限小)に向かう力学]は言い換えると、[原子核の領域に向かう力学]、さらに述べれば、[原子核を構成する陽子や中性子の領域や陽子を複合して構成するクォークのような素粒子の世界に向かう力学]のことを想起させるものである]

このことにまつわる典拠とした(:ここではウィキペディアのような媒体 —— 易変性を伴い、また、不正確なる記述もまま見受けられるとの媒体—— から多くを引いての解説をなしてしまっただが、ウィキペディア記述を引いているとの部は「通用性高き」基本的なところとして同様同一のこの確認をなせる媒体

が数多ある(と手ずから確認している)とのこと、すなわち、「そちら記述を引くだけで十分であろう」と判断をなしているとのことであること、断っておく。

(出典(Source)紹介の部 69(2)はここまでとする)

次いで、

α2. 正五角形、英語に直せば、[レギュラー・ペンタゴン]との特質を持つのがアメリカの国防総省の本部庁舎である。そのペンタゴンの広場は先の911の事件の起こる前から[ワールド・トレード・センターの跡地]がそう述べられるようになったのと同じ言葉で呼び慣わされていた、[グラウンド・ゼロ]との言葉でもって呼び慣わされていた

1941年9月11日に建設開始(着工)を見たペンタゴンの建設を指揮した男レズリー・グローヴズが同様に指揮をなしたのが(1942年に正式スタートを見た)マンハッタン計画であり、そちらマンハッタン計画にて開発が企図された[原爆]というものは[[極小の世界]にての[原子核の崩壊現象]が利用されたもの]となっている(α5の前半部)

とのことらについての典拠となるところを一挙に挙げることとする(※)。

(※につき、まずもって断っておくが、上にて表記のこと——順不同とのことでは[α2]および[α5](の前半部)——について「も」

『通用性が高くよく知られていることであるため、ウィキペディア程度の媒体(容易に確認可能であるとのメリットがあるも記載内容にあって易変性が伴い、また、誤謬・錯簡も散見されとの媒体)に少なからず依拠しての解説で十分であろう』

との認識が筆者にあり(ウィキペディアなぞから引用なす際には「常に」『巧遅を犠牲に拙速に傾きすぎているきらいもありはしないか』と振り返りもしているのだが、といった中でながら、ここでの話にあっての基本的なること——[目立っての歴史的事実]および[目立っての科学的共通認識]にまつわること——については『それで十分であろう』との判断をなしており、そちらウィキペディア現行記載内容に多く依拠しながらもの典拠紹介をなすこととしておく(—無論、筆者の方でもそちら記載内容に誤謬はないと確認しているとのこと断っておく—)

出典(Source)紹介の部 70

SOURCE

70



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部70にあつては流れ上、 $\alpha 2$ と振つてのことをさらに前半部・後半部に分けてもこの典拠紹介をなすとして、まずもつては、

[アメリカの国防総省の本部庁舎が[正五角形](レギュラー・ペンタゴン)構造を呈する]($\alpha 2$ の部の前半部)

とのことの典拠紹介をなすこととする。

(直下、英文 Wikipedia[The Pentagon]項目にての現行記載内容よりのワンセンテンス引用をなすとして)

Freed of the constraints of the asymmetric Arlington Farms site, it was modified into a **regular pentagon**.「[アーリントン・ファームズの用地にあつての非対称的な制約]を受けずにもこのこととして、ペンタゴン(の形状)は[正五角形]に調整されることとなった」

(引用部はここまでとしておく —※—)

(※上にての記述の出典とされているところは "How the Pentagon Got Its Shape". Washington Post. pp. W16. Retrieved May 26, 2007 とのワシントンポスト紙特定記事となる。また、ペンタゴンは当初、[非正五角形]として考案されていたところが後に[正五角形]プランとなったとのことも英文ウィキペディア[The Pentagon]項目には記載されている(“ The site originally chosen was Arlington Farms which had a roughly pentagonal shape, so the building was planned accordingly as an irregular pentagon. **Concerned that the new**

building could obstruct the view of Washington, D.C. from Arlington Cemetery, President Roosevelt ended up selecting the Hoover Airport site instead. ” (訳として)「元来、ペンタゴンの建設用地として選ばれたアーリントン農地はおおまかなところの五角形形状を呈しており、であるから、同庁舎はそれに応じて正五角形ではないとの五角形として建設計画策定された。そうもした新たな庁舎が (均一ならざるところとして) ワシントン DC の景観を損なうものとなることに懸念を持ち、往時合衆国大統領ルーズヴェルトはそうした初期用地に代わってフーバー空港の用地を選ぶところとなった」とのことが Bureau of Public Roads memorandum, October 25, 1960. といった出典表記を伴って紹介されている)。さらに述べれば、ネット上に「現行」複数散見される[英文辞書サイトら]でもそれぞれ一様同文にて[ペンタゴン]につき “ a building in Arlington, Virginia, having a plan in the form of a **regular pentagon**, containing most U.S. Defense Department offices ” 「(ペンタゴンとは) 合衆国国防総省の大部分のオフィスを内に含む「**正五角形の**」ヴァージニアはアーリントンに存在する建物となる」といかにも辞書的な表記がなされている。また、マニアックな英文の私的サイトでも同文の解説がなされているところとなる))

続けまして、

[ペンタゴンの広場は先の 911 の事件の起こる前から[ワールド・トレード・センターの跡地]がそう述べられるようになったのと同じ言葉、[グラウンド・ゼロ]との言葉でもって呼び慣わされていた](α2 の後半部)

このことについての典拠を挙げる。

(直下、本稿の先の段でも取り上げた項目、英文 Wikipedia [Ground Zero] 項目よりの「再度の」引用をなすとして)

The origins of the term ground zero began with the Manhattan Project and the bombing of Japan. The Strategic Bombing Survey of the atomic attacks, released in June 1946, used the term liberally, defining it as: "For convenience, the term 'ground zero' will be used to designate the point on the ground directly beneath the point of detonation, or 'air zero'.

[...]

The Pentagon, the headquarters of the U.S. Department of Defense in Arlington, Virginia, was thought of as **the most likely target of a nuclear missile strike** during the Cold War. **The open space in the center is informally known as ground zero**, and a snack bar located at the center of this plaza was nicknamed "Cafe Ground Zero".

(訳として)

「グラウンド・ゼロとの言葉の[起源]はマンハッタン計画および日本に対する原爆投下にある。1946年6月に出された核攻撃の戦略的爆撃調査書では「爆発ポイント真下の地番、すなわち、エア・ゼロの場のことを示すうえで便宜上、グラウンド・ゼロとの言葉が用に適している」との言いようをなしながら同語をふんだんに用いていた。

…(中略)…

ヴァージニアはアーリントン(ワシントン郊外)にあるペンタゴンは冷戦下、最も核の標的になりやすきところであると考えられていた。その中央にあつての広場は非公式には「グラウンド・ゼロ」と呼ばれており、広場にある軽食堂は Cafe

(訳を付しての引用部はここまでとしておく ー※ー)

(※[追記]:被爆国日本のウィキペディア[グラウンド・ゼロ]項目では「現況」(後に改訂される可能性もある)、より薄い解説しかなされておらず、(そこより原文引用するところとして)、「従来は広島と長崎への原爆投下爆心地や、ネバダ砂漠での世界初の核兵器実験場跡地、また核保有国で行われた地上核実験での爆心地を「グラウンド・ゼロ」と呼ぶのが一般的であった」(引用部終端)と記載されているにとどまる)

さらに続けて、

[1941年9月11日に建設開始(着工)を見たペンタゴンの建設を指揮した男レズリー・グローヴズが同様に指揮をなしたのが(1942年に正式スタートを見た)マンハッタン計画となる](a5の前半部)

とのことの典拠を挙げることとする。

(直下、英文 Wikipedia[The Pentagon]項目にての左側別枠部にて記載されている General information[一般的情報]の節にて記載されている建物データ紹介部よりの引用をなすとして)

Construction started September 11, 1941 [ペンタゴン着工時期:1941年9月11日]

(引用部はここまでとしておく)

(直下、英文 Wikipedia[The Pentagon]項目前半部に記載されているところよりの原文引用をなすとして)

The Pentagon was designed by American architect George Bergstrom (1876--1955), and built by general contractor John McShain of Philadelphia. Ground was broken for construction on September 11, 1941, and the building was dedicated on January 15, 1943. General Brehon Somervell provided the major motive power behind the project; Colonel Leslie Groves was responsible for overseeing the project for the U.S. Army.

「ペンタゴンはアメリカ人建築家ジョージ・ベルグストロムによってデザインされ、総合請負人としてのフィラデルフィアのジョン・マクシャインによって建設されたものとなる(訳注:ゼネラル・コンストラクターとの表記がなされているが、欧米圏のジェネラル・コンストラクターと日本のゼネコンでは規模や意味合いを異にしていること、留意すべきである)。その用地整理は1941年9月11日よりなされだし(工事の着工を見)、庁舎竣工を1943年1月15日に見た。ペンタゴン建設計画に対する背面での精神的支柱はブレオン・サマーベル将軍となっており、レズリー・グローヴス大佐が米陸軍のために同計画を管理管掌する立場にあった」

((訳を付しての引用部はここまでとする))

(直下、英文 Wikipedia [Leslie Groves] 項目にての現行記載内容よりの原文引用をなすとして)

Lieutenant General Leslie Richard Groves, Jr. (17 August 1896 -- 13 July 1970) was a United States Army Corps of Engineers officer who oversaw the construction of the Pentagon and directed the Manhattan Project, a top secret research project that developed the atomic bomb during World War II.

[...]

In September 1942, Groves took charge of the Manhattan Project. He was involved in most aspects of the atomic bomb's development. He participated in the selection of sites for research and production at Oak Ridge, Tennessee; Los Alamos, New Mexico; and Hanford, Washington.

「レズリー・リチャード・グローヴス・Jr 中將(生年一八九六年一〇月一七日、没年一九七〇年七月一三日)はペンタゴンの建設を監督し、マンハッタン計画、第二次世界大戦期に原爆開発を開始するとの極秘調査計画を主導したとのアメリカ陸軍工兵司令部の将校である(訳注:なお、直近引用部にて付されている階級ルーテナント・ジェネラル(中將)階級はグローヴスの退役時階級を指し、同男がペンタゴン建設計画を主導していた折の階級は大佐、マンハッタン計画を主導していた折の階級は准将であったとのことが容易に確認できるところとなっている)・・・(中略)・・・1942年9月、レズリー・グローヴスはマンハッタン計画の責任者になった。彼は原爆開発を巡る大部分の側面に関わっていた。彼は計画にあつてのオークリッジ、テネシー、ロスアラモス、ニューメキシコ、ハンフォード、ワシントンの研究開発拠点の選別に関わってました」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上をもって

[1941年9月11日に建設開始(着工)を見たペンタゴンの建設を指揮した男レズリー・グローヴズが同様に指揮をなしたのが(1942年に正式スタートを見た)マンハッタン計画となる](**α5**の前半部)

とのことの典拠とした。

続けて

[マンハッタン計画にて開発が企図された原爆というものが[極小の世界]にての[原子核の崩壊現象]とワンセットのものとなっている](こちら「も」また **α5**の前半部の内容となる)

とのことの典拠を挙げることとする。

(直下、和文ウィキペディア[原子爆弾]項目にて現行、基本的なこととして記載されているところよりの原文引用をなすとして)

原子爆弾、または原爆は、ウランやプルトニウムなどの原子核が起こす核分裂反応によって爆発させる核兵器である。

・・・(中略)・・・

原子爆弾の構造は単純である。本質的には、臨界量以下に分割した核分裂性

物質の塊を瞬間的に集合させ、そこに中性子を照射して連鎖反応の超臨界状態を作り出し、莫大なエネルギーを放出させる、というものである

(引用部はここまでとする)

上にては原爆というものの基本的なる作用機序として

[臨界量以下に分割した核分裂性物質の塊を瞬間的に集合させ、そこに中性子を照射して連鎖反応の超臨界状態を作り出し、莫大なエネルギーを放出させる、というものである]

との解説がなされているわけだが、そこに見る[核分裂性物質の塊を瞬間的に集合させ、そこに中性子を照射して連鎖反応の超臨界状態を作り出し、莫大なエネルギーを放出させる]とは一言で述べれば、

[核分裂反応]

のことを指す。

では Nuclear fission[核分裂]とはいかようなものかだが、次のような表されようをされるものでもある。

(直下、英文 Wikipedia[Nuclear fission]項目にて現行、基本的なこととして一言のみ記載されているところよりの原文引用をなすとして)

In nuclear physics and nuclear chemistry, nuclear fission is either a nuclear reaction or a radioactive decay process in which the nucleus of an atom splits into smaller parts (lighter nuclei).

(訳として)「核物理学および核化学の領域にあつての[核分裂]とは[原子核核反応]あるいは[原子の原子核がより小さな部分(より軽い原子核)に分解される「放射性崩壊」の過程]のことを指す」

(引用部はここまでとする)

あまりにも基本的なことであるため、原子力が何たるかの基本的なることを知っている人間には『いちいち何を述べているのか』

と失笑を買おうところか、と思うのだが、(一般の「何も知らぬ」人間らを想定してのこととして)、以下のことを直近までの内容にて指し示したことになる。

「原子爆弾の最も基本的なる機序は核分裂反応にある。では核分裂反応(膨大なエネルギーを発するとの核分裂反応)が何かと述べれば、原子核が「より小さいパーツに崩壊していく(変性していく)」過程のことを指す——換言すれば、[マンハッタン計画にて開発が企図された原爆というものが[極小の世界]にての[原子核の崩壊現象]とワンセットのものとなっている]($\alpha 5$ 前半部)のことになる——」

以上、ここまでの内容でもってして

$\alpha 2$. 正五角形、英語に直せば、[レギュラー・ペンタゴン]との特質を持つのがアメリカの国防総省の本部庁舎である。そのペンタゴンの広場は先の 911 の事件の起こる前から「ワールド・トレード・センターの跡地」がそう述べられるよ

うになったのと同じ言葉で呼び慣わされていた、「グラウンド・ゼロ」との言葉でもって呼び慣わされていた

1941年9月11日に建設開始(着工)を見たペンタゴンの建設を指揮した男レズリー・グローヴズが同様に指揮をなしたのが(1942年に正式スタートを見た)マンハッタン計画であり、そちらマンハッタン計画にて開発が企図された[原爆]というものは[[極小の世界]にての[原子核の崩壊現象]が利用されたもの]となっている(α5の前半部)

このことらの典拠紹介をなした。



central plaza
known as "ground zero"



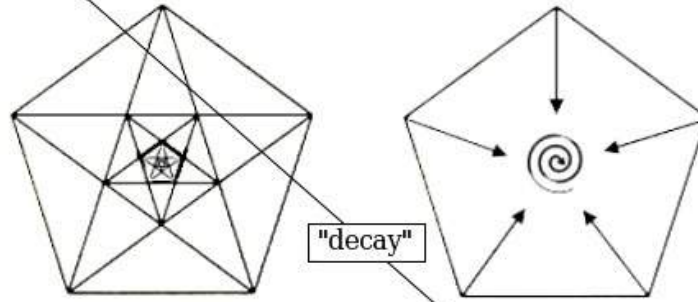
Construction of the Pentagon (started : September 11, 1941)

— Leslie Groves

Manhattan Project

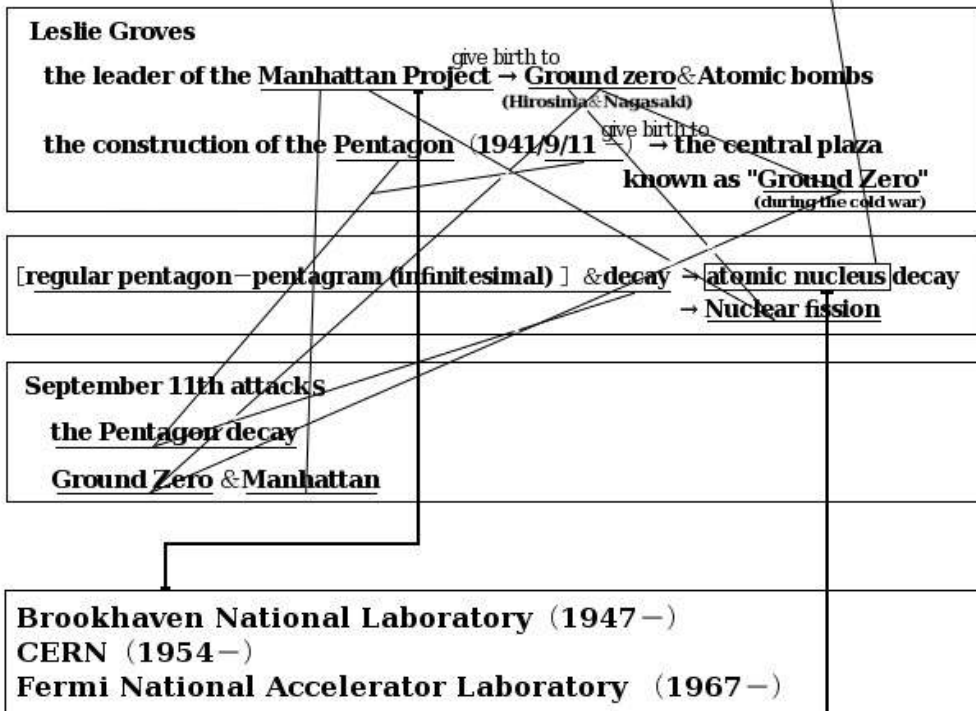
Nuclear fission

Nuclear fission



regular pentagon
→
pentagram
→
regular pentagon
→
pentagram
→

to **infinitesimal**
(infinitely small)
atom → **atomic nucleus** →
proton, neutron, etc. →
elementary particle



※本稿にて細かくも後述するところとしてマンハッタン計画関係者より、
[ブラックホール生成問題で矢面に立たされ、なるべくして訴訟の被告になったとの研究機関ら]が設立されているとのことがある。
また、マンハッタン計画にてその成果が利用されていたころの原子核領域の破壊作用は加速器「実験」(ブラックホールを生成するとされるに至った挙動)の基本となるところでもある。

**particle physics experiments
&
accelerators (→LHC)**

上掲図の通りのことを指し示すべくものことらを本稿の直前の段に至るまで(論拠挙げ連ねて)示してきた。

すなわち、

[[グラウンド・ゼロ]との言葉は「マンハッタン計画」の結果たる原爆投下、その投下地たる広島・長崎の爆撃地を指す言葉として歴史的に生まれたとの背景がある]

[ペンタゴン中央の広場は冷戦期、[グラウンド・ゼロ]と呼ばれていた(核

兵器の標的になるとのことで、である)]

[[グラウンド・ゼロ]との語を生み出した「マンハッタン計画」は[1941年9月11日 —ここでも911との数値が出てくる— から建設着工を見たペンタゴン建設]を指揮したのと同人物である軍人レズリー・グローヴズによって主導されていた]

[[グラウンド・ゼロ]との言葉が[ワールド・トレード・センター跡地]のこと「をも」指すようになったとの結果をもたらした911の事件は「マンハッタン計画」がその名を冠するところの[マンハッタン]をひとつのターゲットとしており、もう一方のターゲットを[ペンタゴン]としていた (ここで「再び」[マンハッタン]と[ペンタゴン]と[グラウンド・ゼロ]が一箇所につながる)

[合衆国防総省[ペンタゴン]は[正五角形]構造を呈するが、[正五角形と五芒星の永遠に続く相互内接・外接関係]が[極小の領域に向かう黄金比体现関係]と結びつけられてきたとのことが(数学発展史に詳しき)極一部の人間に指摘されているとのことがある —(先述なしたところの) 凶形信仰とでも形容できようピタゴラス教団のドグマにまつわる記録の問題となる— 。といった[極小の領域に向かう力学]に関わるところとして極小の原子核の領域にて人為的に破壊の機序をもたらし、もって、爆発的なエネルギーを得る、すなわち、原子核の領域にての崩壊現象を用いてそれを兵器に転用しようとした、そして、それを奏功させたのが[マンハッタン計画]であった(正五角形ことレギュラー・ペンタゴンと五芒星の相互内接・外接関係が向かう先での[破壊]のプロセスがマンハッタン計画にて利用された。そうしてできあがった[原子爆弾]と[グラウンド・ゼロとの言葉]、そして、[正五角形構造を呈する国防総省庁舎ペンタゴン]が冷戦期結びつけられていたということが現実にある)]

とのことらを示してきた。

(出典(Source)紹介の部 70 はここまでとする)

つい最前の段、直前頁に至るまでにて表記のことらのうち、[$\alpha 1$]、[$\alpha 2$]、[$\alpha 3$ の前半部および中段の部]、そして、[$\alpha 5$ の前半部]の典拠を指し示し終えた (: 都度そうしたものであるとそれぞれ明示しながら $\alpha 1$ にあっては出典(Source)紹介の部 67 および出典(Source)紹介の部 68 でもって典拠を、 $\alpha 2$ にあっては出典(Source)紹介の部 70 でもって典拠を、 $\alpha 3$ (の前半および中段の部) にあっては出典(Source)紹介の部 69 および出典(Source)紹介の部 67 (2) でもってして、そして、 $\alpha 5$ の前半部にあっては出典(Source)紹介の部 70 をもってして典拠を示してきた)。

以上、端的に振り返りなしたうえで話を続ける。

それでは次いでもってして、

[極小の領域の「研究」] (たとえば [ヒッグス粒子] や [超対称性粒子] などと命名されてのものの発見に血道をあげるとの「研究」) のための加速器実験は [原子核を壊す] こととつながる式での極微領域での高エネルギー状況を実現

するとのものだが、そのようなものとしてブラックホールを生成する可能性が取り沙汰されるにまで至っているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まったの(未曾有の高エネルギー状況を実現する加速器実験としての)LHC 実験である (α3と振っての部の後半部)

とのことの典拠を挙げることとする。

出典 (Source) 紹介の部 71

SOURCE

71



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 71 にあつてはまずもって

[加速器実験とは[原子核を壊す] との式で極微領域での高エネルギー状況を実現するものとなる]

とのことの典拠を挙げることとする。

表記のこの出典紹介としては本稿の先の段(出典 (Source) 紹介の部 18) にてもそこよりの引用をなした、

書籍 COLLIDER (邦題) 『神の素粒子 —宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』
(邦訳版刊行元は日経ナショナルジオグラフィック社/通俗的な実験機関担ぎあげ本ながらも事実経過記載部には信を置いてよかろうといった「まじめな」科学読み本)

の記述を引くことから始める。

円形加速器の場合は、粒子が回転するにつれて加速されると、回転半球が大きくなり、らせん状の軌道を描く。回転のリズムに合わせて、同じリズムで振動する電圧をかければ粒子を加速し続けることが可能であり、ついには原子核を破壊するだけの高エネルギーを達成できる。

(引用部はここまでとする —※—)

(※上の引用部は現在の加速器の主流となっている[シンクロトロン]と呼ばれる加速器の前によくも用いられていた[サイクロトロン]と呼ばれる種類の加速器の機序を説明しているとの部となり、加速器(サイクロトロン)が[原子核を破壊する]だけのエネルギーをどうやって得るのか解説しているとの部となる。
そちらの部をもってして[加速器が原子核を壊すとのものである]とのことは推し量りいただけるか、と思う。
その点、——すぐ後に同じくものを指し示す引用もなすが—— [加速器で原子核を破壊する]とのことは[加速済みの陽子ビームを対象原子核に衝突させて対象原子核を分割し別のものに変性させる]との挙のことを指しもするところとなる)

ここで[素粒子物理学(高エネルギー物理学)]の本質につき解説しているとの基本的項目、英文 Wikipedia[Particle Physics](素粒子物理学)項目よりの原文引用をなす。

(直下、英文 Wikipedia[Particle Physics]項目よりの原文引用をなすとして)

Modern particle physics research is focused on subatomic particles, including atomic constituents such as electrons, protons, and neutrons (protons and neutrons are actually composite particles, made up of quarks), particles produced by radioactive and scattering process, such as photons, neutrinos, and muons, as well as a wide range of exotic particles.

(訳として)

「現代素粒子物理学の研究とは[電子、陽子、中性子 —うち、陽子・中性子は現実にはクォークより構成される複合粒子である— そして、広いレンジでのエキゾチックな粒子と同様に「放射能を呈し」(radioactive)「四散なす」(scattering)とのプロセスにて生成されるとの光子・ニュートリノ・ミューオンのような粒子らの極小の構成単位を含む[亜原子粒子](サブアトミック・パーティクル/原子より小さい粒子)]に注力してのものとなっている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上の引用部にあつて[放射能を呈して]との言いまわしが現われているが、それは[放射性崩壊が具現化する]と同義のことであり、

〔極小の領域にての〔原子核の崩壊〕（と表せられよう作用）を最大限利用している素粒子物理学のありよう〕

を端的に示すものであることを指摘するのは門外漢（筆者のような門外漢）にも易い。

につき、〔放射能〕という言葉は誰でも把握していることか、とは思う（言葉の正確な意味は別として〔言葉〕それ自体と〔言葉が指し示すもののおおよその性質〕は誰でも把握していることか、と思うということである）。

そも、その〔放射能〕というのは

〔原子核が崩壊する — Radioactive Decay「放射性崩壊」の状況を見る— 〕

ときにて〔放射線を出す「能」力〕のことを指す（放射「能」という字が充てられているとののはつまるところそういうことである —※— ）。

（※以上の話とて本稿にあって重んじている段階的説明における振り出しのステップとしては欠かせぬところであると判じているのだが、そうは言えども、〔放射能とはなんぞや〕といったことは〔あまりにも基本的なところ〕であるから、（これまた）そうしたレベルでの媒体よりの引用で十分と見、和文 Wikipedia 〔放射能〕項目より省いての引用をなす。

（直下、和文ウィキペディア〔放射能〕項目よりの引用をなすとして）

放射能とは、物理学的な定義では、放射線を出す活性力（放射性、放射活性、放射線を放射する程度）を言う。…（中略）…原子核が崩壊する時に放射線を放射する。かつては、1グラムのラジウムが放つ放射能を単位とし、これを1キュリー（記号 Ci）としていた

（引用部はここまでとしておく）

とあるとおりである）

以上、〔放射能〕の問題にも部分的に関わるところとしてあらためて述べるが、〔素粒子物理学〕とは、また、〔加速器実験〕とは

〔放射性崩壊プロセス（原子核の崩壊のプロセス）の利用をなしているとのもの〕

〔原子核を壊す（放射線の発生元となっているところとして陽子ビームなどをぶつけて原子核を従前あったものとは別のものに破壊的に変性させ新種の粒子の誕生を促す）との性質と結びつく挙を本義としているとのもの〕

であることが門外漢にもつとに知られているものとなる —※— 。

※「半ば」余事表記となるところとして

放射線と結びつくことでも知られる、

〔放射性崩壊プロセス〕（繰り返しもするが、〔原子核を破壊的に変性させるプロセス〕である）

ということでは本稿をものしている筆者自身が国内加速器関連行政訴訟で主張なしていたことにすら関わっていることとなりもする。筆者が原告席に座って長期かかづらわされることになった訴訟、〔LHC 実験国内代表機関にして国際加速器マフィアの枢要部に関わる紐帯の国内法規を無視しての黙過しがたい不品行にまつわってのものとの名目で訴求の用に供する、そのためだけに提訴し

たとの行政訴訟] (2012年に遡りもし第一審からして2年近くも「延々と不毛なやりとりが続いていた」とのそちら行政訴訟、本稿執筆時、国内唯一のLHC関連訴訟ともなる)でも付随する法廷でのやりとりにあって(たかだかもの)[放射線リスク]なぞのことまで筆者手ずから問題視する必要を感じていたとのことがあるのである。

同じくもの訴訟、修飾語が長くなるが、そう、

[なんら話を聞こうとせぬばかりか、足を引っ張ろうとするとの「相応の」人間ら(あるいは人間らしい実質をなんら有していないのでは?とも受け取られた人間未満との臭いすら感じられたもの)のやりようから「無駄」に終わった節がある挙]
[筆者が代表を務めている会社や筆者個人的連絡先に圧力をかけるためなのか何なのか、脅迫があった電話(全部録音している)をかけてきたとの一群の男女らが属していると部分捕捉した宗教団体の影響下にありもするように見えるといった風の者らには殊更にも冷淡にあしらわれ、その他の向きら、[何も策(て)を打たなくとも生き残れる]([中長期的に[昨日]と同様に[明日]がそこにあり続ける])と[このような世界]で実に天気よくも信じている節ありとのその他の向きらにも結果的に[三猿]を決め込まれたとの挙]

となってしまうているとのそちら訴訟にあって、

[実験リスク関連文書の存否]

が争点になっていた折に

「LHC 実験には被曝リスク —(国内関係者も含めて実験関係者がフィルムバッジというものの着用を強いられるような放射線に起因するリスク)— も伴っているのに被告はそれにまつわる危機管理文書「すら」も含めて危機管理文書および危機管理やりとりがなんら存在して「いない」などこの場(真実が述べられて然るべきような場)にて主張するというのですか! 被告はそうしたことをやり、また、[グローマー拒否]のような法理論などまで持ち出して何を否定し、何を守りたいというのですか!」

なぞとの[枝葉末節に拘るがごとくもの主張]をも怒気帯びてのかたちにて法廷で被告研究機関(の弁護士ら)や裁判官に向けてなしていた、とのことが筆者にはあるのである——『実に下らないな。頭の具合のよろしくはない向きら、あるいは、相応のやらされ人の類が[無意味にやる]との滑稽訴訟の類に傾いてきているな』と我ながら内心で考えながら、そういう主張をもなしていたとのことがある——。

それにつき[事実]の問題としてLHC実験に関しては

[放射線安全マニュアル・放射線被曝問題対策文書] (「危機管理文書などない、そもそもLHC実験に過去も未来も現在もリスクなど存在した試しはない」などとLHC実験に責任もって関わっているとの[設定]で動いている者達の法廷でのふざけた主張を受け、筆者が『下らぬことを、』と思いながら、英文にてのそれを

法廷にて提出していたとのようなものらでもある)

が現実に作成されており、そうしたものに注意が払われての同 LHC 実験は粒子衝突が実施される地下孔と接合する区画にフィルムバッチ (放射線被曝量測定バッチ) の着用が義務付けられての一区画があるように

[放射性崩壊のプロセス]

が当然にかかわってくるものとなる。

つい先立っての部にてその内容を引いていたとの書籍『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』の p.12 にあって

(原文引用するところとして)

現場はまだ工事中のため、私はヘルメットをかぶり、案内役の研究者ラリー・プライスとチャーリー・ヤングに続いた。彼らは被曝バッジを身に着けていた。今はまだバッジが役立つとは思えないが、危険をともなう実験が始まれば、用心のため必ず着用しなければならない

(引用部はここまでとする)

とあるとおりに、である(そちら[実験担ぎあげ本]としての体裁が色濃くも現われている書籍にその通りの記載がなされているのかそこからして疑わしきにあっては確認してみればいい。また、同じくものはウィキペディアのような多く[皮相]をなせる程度の媒体でも当然に確認できるようになっており、極めて基本的なことであるが、英文 Wikipedia [Radiation damage] 項目 ([放射能障害] 項目) にあって、たとえば、“ Particles or various types of rays released by radioactive decay of elements, which may be naturally occurring, created by accelerator collisions, or created in a nuclear reactor. ” (補いもしての訳)「(放射能障害の原因ら (Causes) のリストの中の一として) 加速器による衝突ないし原子炉を通じて生成され、茶飯的に発生しうるのものらの放射線崩壊により放射される素粒子や様々なタイプの放射線 (が放射線障害の原因たりうる)」と挙げられているようなところともなる)。

(加速器実験と放射性崩壊プロセス (原子核の破壊的変性プロセス) は [実験手段それぞれのもの] との観点で切っても切れぬ関係にある、とのことについての「半ばもの」余事表記の部はここまでとしておく)

といったことは、そう、

[加速器実験が原子核を壊す (原子核を従前あったものとは別のものに破壊的に変性させ新種の粒子の誕生を促す) との性質と結びつく挙を本義としている]

[原子核を破壊的に変性させるとの挙動には、すなわち、放射線崩壊を利用することには [放射能] の問題が必然的に関わってくることである]

とのことは

[原子力の基本の「き」] (筆者のことが「相応の事情あって」好かぬとの向きら / 筆者のような人間が何らかの影響力を及ぼすことを阻止したいような向きらは筆者をして別の意の「き」の印付きの人間ととらえたいか、ないし、そうした人間に見せたいのだろうかとの反応を見もしてきた中で述べるところとしての基本の「き」)

となり、原子力が何たるかにつき専門知識、いや、一般教養として理解しているとの人間にとり、

「弾道学にはニュートンの三法則に対する顧慮が必要になっています」

「企業会計では貸借対照表の問題や損益計算書の問題が関わっています」

なぞとわざわざ御大層ぶって述べているぐらいに[ナンセンスな申しよう]ととらえられることもあるかとは百も承知だが(あるいは「食材の保存・流通には冷凍庫というものの冷凍作用が必須となります」なぞとわざわざ御大層ぶって述べるレベルでナンセンスな申しよう、「頭の具合に実にもって難あり」と見られかねない申しようであるでもいい)、それぐらいにまで基本的なることにつき、典拠となるところをわざわざ紹介しているのは

[何も把握していないとの向きら]

が多く読者たりうることを想定してのことである(と断ったうえで話を続ける)。

ここまでにて

極小の領域の「研究」(たとえば[ヒッグス粒子]や[超対称性粒子]などと命名されてのものの発見に血道をあげるとの「研究」)のための加速器実験は[原子核を壊す]こととつながる式での極微領域での高エネルギー状況を実現するとのものだが、そのようなものとしてブラックホールを生成する可能性が取り沙汰されるにまで至っているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まっての(未曾有の高エネルギー状況を実現する加速器実験としての)LHC 実験である (a3の後半部)

とのことにあるの

極小の領域の「研究」(たとえば[ヒッグス粒子]や[超対称性粒子]などと命名されてのものの発見に血道をあげるとの「研究」)のための加速器実験は[原子核を壊す]こととつながる式での極微領域での高エネルギー状況を実現するとのものとなる

とのことの解説をなした(段階的説明方式の第一段階として必要と目して解説なした)として、次いで、

[(原子核を破壊的に改変するとの加速器実験にあつて)ブラックホールを生成する可能性が取り沙汰されるにまで至っているのが未曾有の高エネルギー状況を実現する LHC 実験である]

とのことの典拠を挙げておく。

(直下、欧米圏では比較的著名なサイエンス系読み物の著者であるアミール・アクゼルの手になる Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(早川書房)の 27 ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

LHC を最大レベルで運転すると、陽子は加速しつづけて光速(秒速二九万九七九二・四五八キロ)の九九・九九九九九パーセントという想像を絶するスピードに到達する。このとき LHC はエネルギーレベルで一四 TeV(テラ電子ボルト)で運転される。一 TeV は蚊の飛ぶエネルギーに近く、ごく小さな値に思えるが、それがきわめて高密度になる。LHC は陽子二個の体積、つまり蚊の一兆分の一の空間の中にこのエネルギーを詰め込むのだ。体積あたりのエネルギーとして、これまでに達成された値をはるかにしのぐレベルだ。この超高エネルギー領域で、今まで物理学者の頭の中になかった新粒子や新規現象が現われると考えられている。

(引用部はここまでとする ——上は本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 10](#)にあつての補足

上にあつては

「LHC 実験では原子核に変性をきたす(破壊の機序を及ぼす)ためのビーム照射挙動に付随するところとして[体積あたりのエネルギーとしてはこれまでに達成された値をはるかにしのぐレベルのそれ]が実現される」

とのことが述べられている(※)。それこそがブラックホール生成をなしうるものであると(さらに続いての段で紹介するように)指摘されているところとなっている。

※補足として

「実験機関安全主張に関わるところであるから」との観点で度々ながらも補足をなしておく。

上にての書籍『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』よりの引用部では電子ボルトこと

[一個の電子を動かすエネルギー]

が兆単位になっても[蚊の飛翔エネルギーに等しい]と述べられているが、「兆単位の電子ボルトがその程度のものである」とのことは多くの理系の人間が知るところの

[エネルギー(仕事量)の程度]

に関わる問題となる。

については、和文ウィキペディアの[エネルギーの比較]項目、英文ウィキペディアの[Order of magnitude (energy)] 項目にあつての

[$1.6 \times 10^{-7} \text{J}$ (ジュール)] ([1.6] × [10 のマイナス7乗]ジュール)

に対応する箇所に対して

[1TeV (teraelectron volt), about the kinetic energy of a flying mosquito]

との記載がなされていることを見るように、

[蚊の運動エネルギー]

との比較は

[[テラエレクトロンボルト] と [ジュール単位] の比較]

にてよくもなされることとなっている。

そして、そうした[一兆電子ボルトとて蚊の飛翔レベルに近い]といった話が実験機関の安全論拠に(理系的知識が全くない、そして、加速器に関する知識が欠けているとの門外漢に訴求するためなのか「どういわけなのか」)目立ってなされているとのこともある。

たとえば、2008年にCERNより出されているリスク全否定の結論を明示しての著名な安全報告書、筆者も国内行政訴訟の場にてその写しを法廷に書証(文書証拠)として出していたとの、

[Review of the Safety of LHC Collisions] (表記のタイトルのグーグル入力などで容易に捕捉かつダウンロード可能な文書/ どういう料簡でなのか流通版には「ページ番号さえ付されていない」との文書)

にて

“ On the other hand, each collision of a pair of protons in the LHC will release an amount of energy comparable to that of two colliding mosquitos, so any black hole produced would be much smaller than those known to astrophysicists. ” (訳として)「他面、[LHCにあつての一对の陽子衝突]はその結果が天体物理学者に知られているどのブラックホールよりも大きいものにはなりえないとのブラック

ホール生成となるにすぎぬとのかたちでの「二匹の蚊(モスキート)のそれに対置可能な量のエネルギー」を開放する(とのものにすぎない)」と記載されているように、である。

それにつき、申し述べたきところとして、「蚊の一兆分の1」の領域に「蚊の飛翔レベルのエネルギー」を無理矢理に詰め込むなどとの「不自然極まりないこと」を「人為的挙動」としてなしている——直上にて引用なした邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる **CERN** と究極の加速器の挑戦』にて記載されているとおりである——のが「科学の地平を切り拓く」との大義で実施・実行されている LHC 「実験」であることを忘れるべきではないだろう

続いて下のような引用をなしておく。

(直下、上と同じくもの著作、アミール・アクゼル著 Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる **CERN** と究極の加速器の挑戦』(早川書房ハードカバー)の 275 ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

LHC の中で起こるように物質が高密度に潰れることでもブラックホールは生じると考えられる。LHC の陽子は一個あたり七 TeV のエネルギーレベルに達し、陽子のペアの衝突で合計でその二倍(一四 TeV)のエネルギーが生成するが、これは今までに加速器の粒子衝突で達成されたレベルをはるかにしのぐ。LHC によって我々は未知のエネルギー領域に突入し、はるかに大きいエネルギーを持つと考えられている宇宙線由来を除けば地球上で見られたことのない衝突が起こる。

(引用部はここまでとする。上もまた本稿にての **出典(Source) 紹介の部 10** で取り上げたところである)

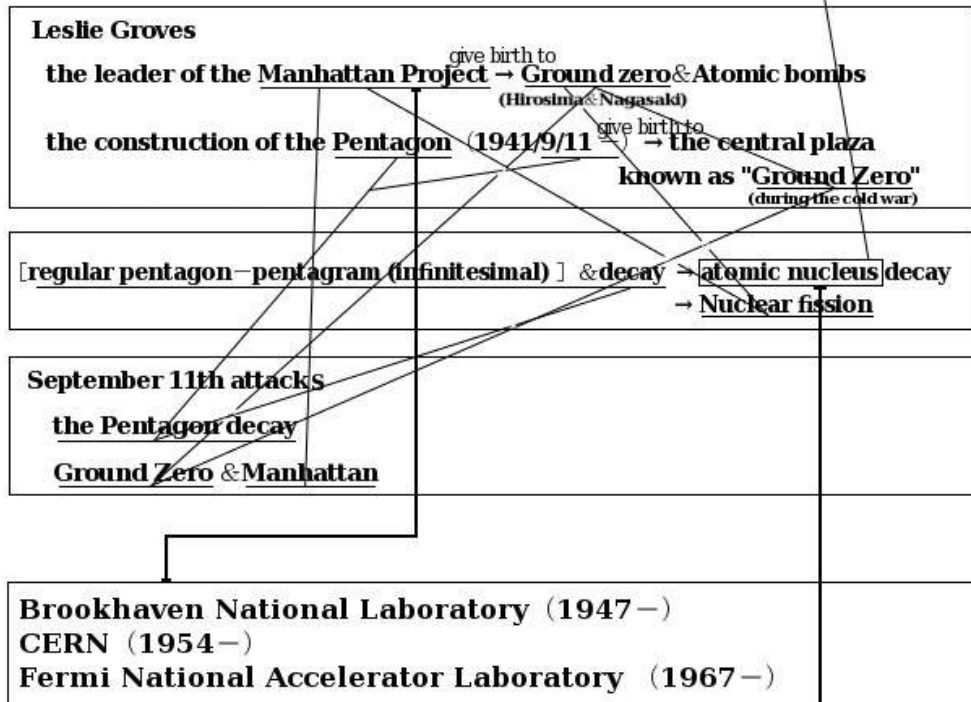
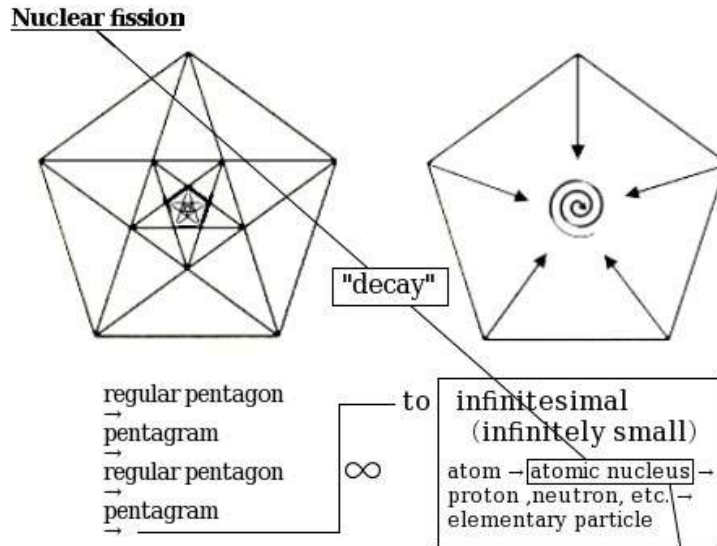
引用部では「原子核領域・素粒子領域の物理事象を研究する」ために蚊の一兆分の一の領域に蚊の飛翔相当の電子ボルトを詰め込み、その結果、ブラックホールが生成されることになりうるとの表記が端的に述べられている(：それに関してどういう論点が取上げられてきたのか、そこにいかな欺瞞が伴っているのかの指し示しをなすのが本稿にあつての先の段、冒頭からの前半部の主たるテーマとなっていた)。

以上、ここまでで

[極小の領域の「研究」](たとえば[ヒッグス粒子]や[超対称性粒子]などと命名されてのものの発見に血道をあげるとの「研究」)のための加速器実験は「原子核を壊す」こととつながる式での極微領域での高エネルギー状況を実現するとのものだが、そのようなものとしてブラックホールを生成する可能性が取り沙汰されるにまで至っているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まった(未曾有の高エネルギー状況を実現する加速器実験としての)LHC 実験である(**a3**後半部)

とのことの出典紹介をなし終えた。

[先立っても挙げたところの図の再掲として]



※本稿にて細かくも後述するところとしてマンハッタン計画関係者より、
[ブラックホール生成問題で矢面に立たされ、なるべくして訴訟の被告になったとの研究機関ら]が設立されているとのことがある。
また、マンハッタン計画にてその成果が利用されていたころの原子核領域の破壊作用は加速器「実験」(ブラックホールを生成するとされるに至った挙動)の基本となるところでもある。

([原子核の崩壊](あるいは原子核の変性を無理矢理促す挙動)というのは

[[原子爆弾]誕生の機序と深くも結びついている極小の領域の改変・破壊

作用]

と言い換えることができる。

であるから、本段に至るまでにあつて長々と摘示してきたこととあわせて見
もして、

[9月11日に着工されたペンタゴン(米国国防総省)の建設を主導したの同
じ軍人レズリー・グローヴスによって主導されたマンハッタン計画(の帰結とし
ての[原爆]誕生・投下とグラウンド・ゼロとの核兵器爆心地を本来的には指
す特殊用語の発生)]

[レギュラー・ペンタゴン(正五角形)と五芒星の永劫の内接・外接関係によつ
て表象されもすると述べられるところの極小の領域に向かつての力学のなか
での崩壊現象]

らは

[「原子核の崩壊」作用を利用する加速器実験]

とも接合しているとのことにもなる ——のみならず、「マンハッタン計画」に連
なる人脈から[CERN]をはじめ「主要な」加速器実験機関(米国の「ブルック
ヘブン国立加速器研究所」や「フェルミ研究所」などここ数十年間にてブラッ
クホール生成問題で矢面に立たされ、また、同じくものことにまつわる訴訟の
相手方にされてきもしたとの研究機関)が生み出され、そうした人脈によつて
「科学の地平を広げる」などという「大義」が掲げられて加速器実験が実施さ
れてきたとのことがあるのだが、については本稿のさらに後の段で解説する
こととする——)

さて、ここに至るまで摘示してきたところの典拠(α1 から α3 と振つての部の内容を全てカバーして
の典拠)によつて

α4. ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』と
の書籍は911の事件が起こる「前」から特異な言葉であるとのグラウンド・ゼロと
いう言葉をブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍、かつもつ
て、不可解なる911の予見的言及とも関わっているとの書籍でもある(←α3で
言及したことである)。そして、同著『異端のゼロ』は[五角形と五芒星の「無限
に」相互内接しあう関係性]と結びつくことに言及しているとの書籍でもある
(←α1およびα3にての出典にまつるところでもある)。そうした書籍で扱わ
れる[ゼロの世界][極小の世界]に近しきところで(原子に比してその比率が恐
ろしく小さいとの極小の存在たる)[原子核]を破壊しようとのことをなし、そこ
にて発生する膨大なエネルギーからブラックホールを生成しようとのところにまで
至ったのがLHC実験であると「される」(←α3にて言及のことでもある)のだが、
他面、[911の事件]では何が起こったのか。[[正五角形]との形状を呈する
とのペンタゴンが崩された]とのことが起こっている(←α2で合衆国国防総省庁舎
たるペンタゴンが(正確な五芒星と無限に続く相互内接外接関係を呈する
との)[正五角形]であることを問題視している)。以上のことより次の関係性が想
起されもする。

[現実世界で911の事件が起こる「前」からアメリカ国防総省本部庁舎たるペン
タゴン(正五角形)の広場と結びつけられてきたグラウンド・ゼロという特殊な言
葉(←α2)] ⇔ [911の事件が起こる前から「グラウンド・ゼロ」との特殊な言
葉とセットとなっていた現実世界でのペンタゴン([正五角形]状の米国国防総
省庁舎)の911にあつての部分崩壊] ⇔ [正五角形(;合衆国国防総省庁舎

ペンタゴンとの同一形状)の(911にての)部分崩壊($\alpha 3$)] \leftrightarrow [911の事件が起こる「前」から特殊用語として存在していた「グラウンド・ゼロ」という言葉をブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍であり(そして911の不可解なる予見事物とも通ずるようになっている書籍ともなり) また、五芒星と五角形(ペンタゴン)の間の無限に続く相互内接・外接関係によって表象されもする極小の世界へ向かう力学に言及している著作たる ZERO:The Biography of a Dangerous Idea(邦題)『異端の数ゼロ』という著作の内容] \leftrightarrow [無限小に至る方向性での中での破壊挙動、原子核を壊す中での膨大なエネルギー発現状況でもってブラックホールを作り出しうると言われるに至っている LHC 実験を想起($\alpha 3$)]。

との部位の論拠をもカバーしたことになる。

上のこと、端的に申し述べたうえで話を続け、次いで、

[金星の内合ポイントにてその近似物が具現化する五芒星は史的に見て[退魔の象徴]とされてきたとの経緯がある] (— 順不同とのことで — $\alpha 6$ と振つての部の前半部内容)

とのことの出典を挙げることにする。

出典(Source)紹介の部 72

SOURCE

72



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 72 にあつては、

[金星の内合ポイントにてその近似物が具現化する五芒星は史的に見て [退魔の象徴] とされてきたとの経緯がある]

とのことの典拠を挙げる。

につき、直近までにての

[堅いことらの [記号論的繋がり合い] としてどうしたことが摘示出来るのか (それが偶然か否かは「この段階では」さておきものこととして、まずもって堅いことらの [記号論的繋がり合い] としていかようなことが摘示出来るのか)]

との流れで典拠を挙げ連ねてきたとの話からギア・チェンジをなして、向きによっては『オカルト染みた...』と見るだろう方向に向けてギア・チェンジをなしもして上にて表記のこの出典を挙げる (:尚、『オカルト染みた...』と曲解されかねない方向にギア・チェンジをなすと書きはしたが、先にも述べているように筆者は「確たる論拠」もないところでおどろおどろしい「だけ」の話芸を展開するだけの「オカルティスト」といった人種もそうした手合いらやりようも「取るに足らぬものである」(いや、むしろ、唾棄すべき害物である) とらえている人間となる。筆者を含めて万人にとり不幸かつ遺憾なことは「たとえ筆者が指し示さんとしているとのことが「部分的に」オカルティストといった人種の話柄に近しいような [響き] を含むものであってもそこには筋道の通った論拠と事実をすべからくも重視する思考が働いていることである」としつつも強調なせば、である。

ここでは[魔術]などというものに重きを置いていたとの人間が社会の隅々にいた欧州は中世末期から近世にかけてのものされたことで知られる、

[グリモア(魔術書)] (『そのようなもの、全くもって下らぬ愚書・悪書の類であろう』と判断しているのだが、[未開人][妄信を押しつけられた類ら]がどういう思考方式の制約下にあり続けたのかを[特定の側面]に着目して示すべくも取り上げることとした[グリモア(魔術書)]でもいい)

に包摂されるところの、

[The Lesser Key of Solomon] (『ソロモンの小さな鍵』)

との題名で知られる文書 一複数文書の合本一 の内容についての解説をなすことからはじめることとする。

そちら『ソロモンの小さな鍵』についての具体的内容の解説をなす前に世間一般で同文書についていかなる解説がなされているのか、ウィキペディアの解説を引くことからはじめる。

(直下、英文 Wikipedia[The Lesser Key of Solomon]にあつての現行記載内容よりの原文引用をなすところとして)

It appeared in the 17th century, but much was taken from texts of the 16th century, including the Pseudomonarchia Daemonum, by Johann Weyer, and late-medieval grimoires. It is likely that books by Jewish kabbalists and Muslim mystics were also inspirations. Some of the material in the first section, concerning the summoning of demons, dates to the 14th century or earlier.

『ソロモンの小さな鍵』は17世紀ごろに登場を見たが、しかし、その大部分は16世紀のヨハン・バイヤーの the Pseudomonarchia Daemonum 『悪魔の偽王国』や中世後期の魔術書群よりテキストを踏襲してのものとなっていた。同文

書（『ソロモンの小さな鍵』）はユダヤ系カバラ主義者らによってものされたものであるらしく、そして、イスラム神秘主義者らのやりようがインスピレーションの元ともなっていた。同文書第一部の内容の幾分か、悪魔らの召喚に関わるとの部については 14 世紀ないしそれ以前に遡るとのものとなっている」

（訳を付しての引用部はここまでとする）

以上のような概要表記でもって知られているとの The Lesser Key of Solomon『ソロモンの小さな鍵』（の中の『ゴエティア』と題される部）にあつては

〔悪魔の攻撃に対する守護を約束するものとしての五芒星と六芒星が複数配置された魔法円〕

なるものが持ち出されているとことがある、そういうことも同じくもの Wikipedia 項目にあつてからして言及されている。

具体的には —ウィキペディアというその媒体の性質上、これよりの記述内容の変転を見る可能性があるわけだが—

（直下、英文 Wikipedia [The Lesser Key of Solomon] 項目にあつての脇の図解部にて付されている解説よりの引用をなすとして）

The circle and triangle, used in the evocation of the seventy-two spirits of the Goetia. The magician would stand within the circle and the spirit was believed to appear within the triangle.

『ゴエティア』（『ソロモンの小さな鍵』の主要パート）に記載されている 72 の霊（ソロモン 72 柱として知られる悪魔ら）を召喚するうえで（上図の）魔法円とトライアングルが用いられる。魔術師は魔法円の中に入り、召喚対象となる霊がトライアングルの中に現れると信じられていた」

（訳を付しての引用部はここまでとする）

と — nonsense な事項にまつわるところながらも— 表記されている箇所脇の図解部にて、

〔四方に〔五芒星〕らを、内部に〔六芒星〕らを配置させた魔法円〕

が描かれている（その図 —『ソロモンの小さな鍵』の中の『ゴエティア』の部にて挙げられている図— も本稿にての続く段にて挙げておくこととする）。

さて、以上、ウィキペディア内容を引きもしたわけだが、原典 The Lesser Key of Solomon それそのものの内容も問題視しておく。

具体的にはオンライン上のアーカイブサイト（Internet Archive）より表記のタイトルの検索エンジン上での入力にて容易に全文入手できるところとしての、

[The Lesser Key of Solomon, Goetia]

との 20 世紀初頭に現代語訳された『ソロモンの小さな鍵』（にあつてのゴエティアの部）の内容を問題視することとする。

(直下、The Lesser Key of Solomon, Goetia (MacGregor Mathers が 1903 年に訳をなし、Lauron William de Laurence という人物の手になる 1916 年の版がインターネット・アーカイブ上にて流通しているとのもの)よりの特定部原文引用をなすとして)

This is the Form of Pentagram of Solomon, the figure whereof is to be made in Sol or Luna (Gold or Silver), and worn upon thy breast ; having the Seal of the Spirit required upon the other side thereof. It is to preserve thee from danger, and also to command the Spirits by.

「これは[ソロモンの五芒星]の形態となり、ソル神(太陽体現神格/金)ないしルナ神(月体現神格/銀)にて形作られる構造にして、そして汝が胸にあって帯びられるとのものとなり、汝の側ではない方にて求め乞われているとの霊の印を伴っているとのものとなる。[ソロモンの五芒星]は汝をして危難より守り、また、霊達 (訳注:ゴエティアが取り扱っているとのソロモン 72 柱の悪魔の如き悪しき霊) に命令を与えることができるとのものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする ——くどいが、私はオカルティストなどではない (I am not an occultist.)。そうも述べつつ書くが、上の通りの記載がなされていることが文献的事実であるか否かとのことを確かめたいとの向きにおかれてはアーカイブサイトの表記の書籍の紹介ページの内容を確認いただき、該当ページ閲覧時に ctrl キーと f キーの同時押しでブラウザ(ネット閲覧ソフト)上での検索機能をオンにして(インターネット・エクスプローラーなどの上側に文字入力窓が表示される格好として)、上抜粋英文の数語を入力、該当センテンスが含まれているか、確認いただければ、と思う——)。

続いて図示もなすところとして原典として英文にてのそれが取得可能であるとの
The Lesser Key of Solomon, Goetia

にあつては

[ソロモンの「五芒星」]

なるものがそれを用いる者をして危難から守り、また、悪しき霊の使役を可能ならしめる呪符として(上にて引用のように)紹介されているのである。

(:尚、表記のアーカイブサイトより入手できる版の『ソロモンの小さな鍵』の供給者かつ編集者は英文 Wikipedia にも現行、[L. W. de Laurence]項目にて事績解説がなされている Lauron William de Laurence (ウィリアム・ローレンス) というオカルト出版物を商ってもいたという 20 世紀前半活動のオカルティストであると配布サイト書誌情報にて明示されている ——さらに述べれば、インターネット・アーカイブのサイトよりダウンロードできるのと同じくもの『ソロモンの小さな鍵』は マグレイザー・メイザーズ (MacGregor Mathers / 和文および英文 Wikipedia よりも確認できるように Freemason でもあったとの著名オカルティストで著名哲学者のベルグソンと縁戚関係にあったとのことでも知られる者) やアレクスター・クローリー (Aleister Crowley / マグレイザー・メイザーズの盟友で著名なオカルティストかつ悪魔主義的な類であったことでも知られる者) が訳を付しつつ追補を加えて供給していたとの『ソロモンの小さな鍵』をそのまま頒布している節があるとのものともなる

。それにつき、余事だが、

[悪魔の召喚と使役]

にまつわる『ソロモンの小さな鍵』(の中の『ゴエティア』の部)の訳書を頒布していたような 20 世紀前半のオカルティストのウィリアム・ローレンスがローマ・カトリックとは別にアメリカにて設立されたカトリック教会 (American Catholic Church) の司祭に任じられていたと同男関連の英文 Wikipedia [L. W. de Laurence] 項目に記載されているとのこともある (

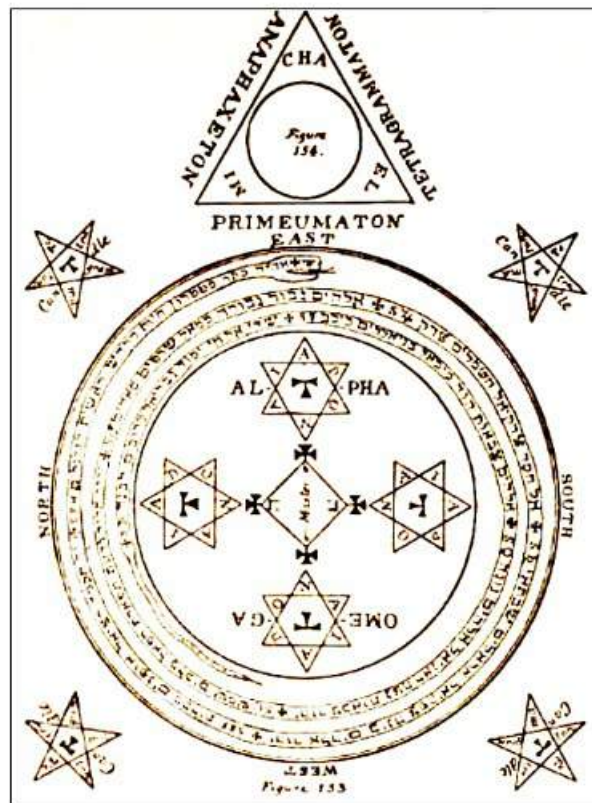
“ In early 1930 he was consecrated a bishop by the Spiritualist Arthur Edward Leighton (1890 to 1963), a bishop of the American Catholic Church (a church body founded by Joseph Rene Vilatte). ” と記載されているところである ——ちなみにアメリカ・カトリック・チャーチなるローマ・カトリックから独立性を主張していたカトリック系組織体は教勢を伸張させることもなく、歴史の闇に消えていったともされる——)。

『今日的な意味でのスピチュアリズムの先達となっていた人間でもあるようだが、と同時に、【悪魔の召喚と使役にまつわる本を供給していたようなオカルティスト】が [カトリックの司祭] になって活動していただと？ どうしてこのようなことが？』

とも思われるところであるが、その点については [欺瞞の構図] の一個の例ではないか、とも筆者はとらえている。(延々と非本質的に映るかもしれぬ余事表記を続けるようで何ではあるが) 筆者から見れば、[神] と [悪魔] の存在 (仏教であれば、[仏] と [魔縁] の存在でもいいが) を観念するという [宗教] というものはその実、[神] で表象される力学のみならず [悪魔] で表象される力学の影響「をも」促進しようとの存在であると受け取れる。[光] (というにはあまりにも胡散臭くも見えるが) を投じるとともに (そこにはなかった) [影] をも作り出すシステム、[神] を奉ずる教会が [悪魔] の業をも、と同時に、広めているとも言えるのとらえている、同じくものを指摘する他の向きら同様にとらえているのである ([理解不能なるもの・不可解なるもの] に「相応の」宗教的なドグマで本来的にまともな人間からすれば [狂っている] としか言いようがない的外れな類型化像 —あるいは敵手が人間を欺く、ディスガイズするうえでの方便・手段— を与えている、お墨付きを与えている、としてもいい)。につき、信じ難きことであろうが、カトリックについてはローマ・カトリックとても神父による被害者数数多なる児童性的虐待と結びつき、そのためにカトリックは多くの賠償金を負っていると諸種メディアで報じられてきたとのこと「も」我々の生きるこの世界にある ——疑わしきは各自お調べいただきたいとも思うが、本稿を公開することとしたサイトの他のページで取り上げてもいることである——。そうしたことなどを顧慮しつつながらも書くが、「コアな」オカルト領域の人間なぞがカトリック司祭に任じられていることに唾棄すべき側面が実体としてなかったとしても、である。いずれにせよ、

「[政治] と [宗教] の領域というのは、古来、諸共、(神・仏なぞではなく、もの) [悪魔] の領分であるとされてきた」(あるいは迂闊に触れば棘が刺さる、君子近寄らざるべからずの危うい・怪しき領域として「まともな大人は社交上や職場上の付き合いにて [政治] と [宗教] の領域のことは話柄にすべきではない」との申しようがよくもなされてきた)

とのことは本来的には軽んじざるべきことであろうと見ている (とのことまで本稿執筆者スタンスにつき押し量っていただきたくもあるところとして申し述べておく)。その点もってしてドイツかぶれの日本のインテリ層に歴年重視されてきた社会学者マックス・ヴェーバーの著名な講義録ポリティーク・アルス・ベルーフ『職業としての政治』などにては(大要)「世界はデーモンに支配されており、政治に関わる人間、手段としての権力・暴力と関わっている人間らは悪魔と契約を結ぶ存在であり、善よりは善のみが生じ、悪よりは悪のみが生じうる、という観点はそうした人間の行為に関しては真実ではなく、往々、その逆が真実たりうること、これを古代のキリスト教徒たちは非常によく知っていた」といった物言いが [現実を「悪い意味」で認容するような申しよう] としてなされてきただけの「相応の」背景があるのとらえているのである。筆者は(宗教がその存在と影響力にさらにリアリティを与えもしているとの) [悪魔] などという言葉で形容される存在 ([オズの魔法使いに見る科学者よろしくトリックを弄して悪魔や天使といったもののフリをしてきた存在ら] でもいい) は (かの [ファウスト博士] の物語にあるように) [最期には人間を裏切る存在] であり、(マックス・ヴェーバーが言うようには) 「悪から善が生じる」などということは本来的かつ長期的には「ない」と考えているわけだが(本稿にて摘示しているようなことがある中でそのように判じているわけだが)、とにかくも、下らぬものにこれ以上、人類 — と述べても、の中に筆者が語るべき相手と認めるに足る操り人形ではない勇士がいかほどまでにいるのか、残っているか不分明ではあるが — は謀(たば)かれるべきではないとの観点で以上のこと、記しておいた)



上にて呈示なしているのは Internet archive のサイトにて著作権表示 Not In Copyright となっている Lauron William de Laurence という向きの編集になるところの 1916 年刊行 The Lesser Key of Solomon, Goetia に掲載の図像となる。

そこにては[ソロモンの「五芒星」]と呼ばれるもの、そして、六芒星が[悪魔よりの保護][悪魔の使役]と結びつけられている[魔符]の構成要素として描かれている。

さらに、

[五芒星が退魔の象徴として用いられてきた経緯がある]

とのことについて次のような書籍内容の記述「も」引いておくこととする。

(直下、THE GOLDEN RATIO The story of Phi, the World's Most Astonishing Number 『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』(早川書房) p.240 から p.241 よりの[中略]なしつつもの原文引用をなすとして)

ドイツの詩人・劇作家ゲーテ(一七三四～一八三二)は、間違いなく世界最高の文学の大家にかぞえられる。彼の全方面的な才能は、『ファウスト』——知識と力を欲しがる人間を象徴的に表現した作品——に結実している。ファウストは、博学なドイツ人医師で、知識や若さや魔力と引き換えに自分の魂を悪魔(メフィストフェレスとして擬人化されている)に売ってしまう。メフィストフェレスは、ファウストの部屋の敷居に五芒星形の「ドルイデンフス」(ケルトの魔術師の足)が描かれているのを見つけると、部屋から出られなくなる。ピタゴラス学派以来、(黄金比の定義をもたらした)五芒星がもつとされる魔力は、キリスト教でも別の象徴的な意味を生んでいた。五つの頂点が、イエスの名前の文字 JESUS を

表すと考えられたのだ。そのため五芒星形は、悪魔が恐れるものと見なされるようになった。…(中略)…結局メフィストフェレスは、その抜け道——五芒星形に小さな隙間があること——を利用してうまく逃げ出す。もちろん、ゲーテは、『ファウスト』で黄金比の数学的概念に触れるつもりはなかったし、五芒星形を象徴的な意味で採り入れたにすぎない。

(引用部はここまでとする —※—)

(※以上、そちら記述内容を引いたところの THE GOLDEN RATIO The story of Phi, the World's Most Astonishing Number『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』という書籍は本稿にあってのつい先の段、**出典(Source)紹介の部 69(2)**にて[五芒星と五角形の無限に続く相互内接・外接関係]についての出典として紹介した書ともなり、その著者の Mario Livio マリオ・リヴィオは宇宙物理学者にして米国の宇宙望遠鏡科学研究所の部門長を勤めた向きとしての来歴紹介がなされている人物ともなる)

上もて、

[金星の内合ポイントにてその近似物が具現化する五芒星は史的に見て[退魔の象徴]とされてきたとの経緯がある](**α6**の前半部)

との典拠として十二分に指し示してきたことになるか、と思う(:ただし、典拠のうちの一つとした 20 世紀前半に世に出た現代訳版『ソロモンの小さな鍵』については仰々しくも数百年前の欧米にて標準書体としてよくも用いられたアルファベット書体(今日に至るまで工芸・デザインの世界で幅広くも用いられると聞き及ぶブラックレターとして知られる書体)までもが印象的に古めかしくも用いられているものではあるものの、といった外観に関わらず、20 世紀のオカルティストなどによる改変が施されている可能性がある一品であるとのことも一応、断わっておく。

出典(Source)紹介の部 72はここまでとする)

上の部までにて **α6** と振っての部の前半部がいかように堅い話となっているのかについての指し示しを終えたとして、間髪入れずに、

[退魔の象徴としての五芒星]と結びつくような[退魔の象徴物としてのペンタゴン(アメリカ国防総省本庁舎)]が爆破されて「異次元から」干渉する外側の銀河由来の妖怪が解き放たれるとの[荒唐無稽小説]が世に出ている。その小説とは本稿の先の段で「911の「奇怪なる」先覚的言及小説となっている」との要素を同作が多重的に帯びていることにつき仔細に解説してきた 70 年代欧米にてヒットを見たとの小説作品、『ジ・イルミナタス・トリロジー』となる(**α6**の部の後半)

とのことについての出典紹介(既になしてきたところの出典紹介部の再掲)をなすこととする。

その点、欧米にて 70 年代にヒットを見た『ジ・イルミナタス・トリロジー』という小説作品に関しては —ここで問題としているところについては続いての段で別個に再引用をなす所存でもあるが— 本稿にあっての先立っての段にて次のことらを呈示してきたとのことがある。

70年代小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に関しては

1. 「「ニューヨークのマンハッタンのオフィスビル爆破」より話がはじまり」(本稿の先の段、出典(Source)紹介の部 37にて国内で流通している邦訳書(集英社文庫版)およびオンライン上より全文確認できるとの原著の引用でもって呈示)
2. 「クライマックスに向けて魔的封印を解くとの目的で「ペンタゴンの爆破・部分倒壊」が実演され」(本稿の先の段、出典(Source)紹介の部 37-2にて国内で流通している邦訳書(集英社文庫版)およびオンライン上より全文確認できるとの原著の引用でもって呈示)
3. 「現実の米軍関連細菌学者ブルース・イビンズ容疑者を巡る911以後の状況を事前に描くように「米軍関連細菌学者から漏出した炭疽菌改良株が大災厄をもたらしかねないとの状況に至った」とのことが描かれ」(本稿の先の段、出典(Source)紹介の部 37-3にて国内で流通している邦訳書(集英社文庫版)およびオンライン上より全文確認できるとの原著の引用でもって呈示)
4. 「そのスピンアウト・カードゲーム作品(スティーブ・ジャクソン・ゲームズ製の「カードゲーム・イルミナティ」)までもが「崩されるツインタワー」「粉塵をあげるペンタゴン」とのイラストの使用から911の事前言及物であると問題視されており」(本稿の先の段、出典(Source)紹介の部 37-4にて解説)
5. 「ペンタゴン体現物(作中にて爆破されているペンタゴンの体現物)と明示されての五角形」と「(作中にてマンハッタンのビルが爆破されているとのニューヨーク体現物との分析結果が出てくる)黄金の林檎」を対面並置させての独特なるシンボリズムを図示してまでして頻出させている作品となっている」(本稿の先の段、出典(Source)紹介の部 37-5にて国内で流通している邦訳書(集英社文庫版)およびオンライン上より全文確認できるとの原著の引用でもって呈示)

とのことらが摘示可能となっているとことがある。

上記のような特性を帯びての小説はそれが2001年9月11日以降ではなく、よりもって以前、70年代に登場を見ていたとのものであれば、

(上にての1.から5.の描写と対応させて表記するところとして)

1. 「ニューヨークのマンハッタンのビルが破壊され」
2. 「米国の国防総省(ペンタゴン)がその後、間を経ずにも攻撃を受け」
3. 「事件後、炭疽菌テロもが発生し(後に米軍関係者ブルース・イビンズ容疑者による世論操縦を企図しての単独犯として決着)」
4. 「崩されるツインタワー」「粉塵をあげるペンタゴン」とのありようが具現化しており)
5. 「(1. と2. に関する地域特性をまとめて述べれば)「ニューヨーク市(ビッグ・アップル)」と「ペンタゴン(アーリントンの五角形ビル)」が同時に攻撃されたものとなっている」

とのかの911の事件の事前言及をなしている作品と述べても「なんら差し障りない」(異常なる話をなしていることは論を俟たないが、その響き異常たりといえども、筋道として理に適っていると述べても「なんら差し障りない」とのことになろう —にあってはあわせて下にて枠に括っての部のようなことがあること「も」複合顧慮すべきである—。

本稿の先立っての記述をそのまま繰り返すところの「さらにもって」問題となるところとして

小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』作中にあつては[午後五時五五分]がペンタゴンの爆破時間として描かれているわけだが、

[アナログ式時計] (今日、文明社会で普段用いられているインド・アラビア式の数字での時刻表記のものであればなお望ましい)

が手元にあるとのことであれば、そちら手元に寄せて見ていただきたい。

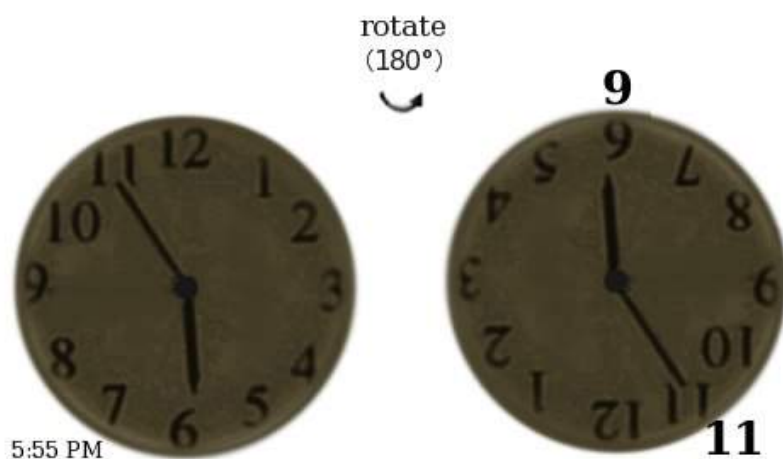
[午後五時五五分] (題としている小説作中に見るペンタゴンの爆破時間)

というのが

[時計の時針にての短針がアラビア数字で6の位置を指し、時計の時針にての長針がアラビア数字で11の位置を指す]

時刻であること、お分かりいただけることか、と思う。そこで時計を上下逆様にひっくり返して見てみると、[9]と[11]への時針の指し示しが浮かびあがってくる(下にて呈示の図など参照のこと)。

far-fetched ?



The Illuminatus! Trilogy BOOK#3: LEVIATHAN (1975)

"In any case, at 5:55 PM, Washington time, a series of explosions destroyed one-third of the river side of the Pentagon, ripping through all four rings from the innermost courtyard to the outermost wall."

note (["only coincidence" probability] = the probability should be estimated to be higher because of authors' adherence to the Law of Fives.)

偶然か?

筆者はそこからして[偶然]であるとはとらえていない。その他の判断材料——これよりさらに述べていくところの同じくもの小説の事前言及作品としての性質——から恣意的挙動であろうと判じている（：但し、である。ジ・イルミナタス・トリロジー・シリーズの作中テーマとしては the Law of Fives[5の法則]なるもの(数値の五には重きを置いて然るべきであるとする当該のフィクションの中で頻繁にもちだされる法則ザ・ロー・オブ・ファイブズ)が重きをなしている。といった中でジ・イルミナタス・トリロジーでは正五角形を呈しもするペンタゴンがその形状から[5の法則]にて重んじられる存在として言及されており(ペンタゴンは五角形であるから五を重んじる法則の枠内にある云々)、ペンタゴンが(5が三連続するとの)5時55分に爆破されているとのことは「フィクション体系なりの蓋然性ありであろう」、「逆転すると911と結びつく時間帯に爆破されていることは前言事象としてとらえるべきところではなかろう」との言い分もなされる、「それ単体だけ」顧慮された際にはそういう言い分がなされやすくもあるところか、と言及しておく)。

[「強くも訴求したいところにまつわっての」追記として]：加えて述べておくが、上のような話をなしている背景には[180度回転させると911との数値が浮かび上がってくるもの]を[ツインタワー(崩落)関連事物]と結びつけて911の事前予告なすが如き作品「ら」が他に複数作、存在しているとのことがありもする([ツインタワー(崩落)関連事物]と(911の事件の発生前に)[数値を180度変換させることで911となるもの]があわせて描写されているとの作品らがあること自体が、いわば、常識的に考えてみて「信じがたいようなこと」ではある)。にまつわっては(ここにの一文が[追記部]のそれであるからこそかなり先んじての段についても細々と言及できるのだが)本稿のかなり後の段、[補説4]と銘打っての段にての[出典(Source)紹介の部106(3)]および[出典(Source)紹介の部108]との部にて具体的な作品らを挙げての出典紹介を[容易に後追いできるかたち]にてなしている。

さらに述べれば、

[午後5時55分にあつてのペンタゴン爆破]

を目立って描くとの小説『ジ・イルミナタス・トリロジー・シリーズ』最終巻『リヴァイアサン襲来』(英文タイトルはBOOK#3: LEVIATHAN)にあつては巻末に付されての[付録の部]として

[秘教象徴体系紹介部]

と銘打たれての部が設けられているとのことがあるのだが(いいだろうか。要するに[「隠された象徴」に対する解説部]が設けられているとのことがあるわけだが)、そちら秘教シンボル知識紹介部の中にあつてまったくもって意図不明に

“But we say no more at this point, lest the reader begin seeking for a $5 = 4$ equation to balance the $5 = 6$.” 「読者が「 $5 = 6$ 」の公式と釣り合わせるように「 $5 = 4$ 」の公式を探そうとしないように今はこれ以上話すのはやめよう」。

などといった申しようがなされているとのこともがあり、そちらもまた

[注視に値すること]

であるとの身、筆者はとらえている——訳書よりの引用をなす。(以下、文庫版『イルミナティIII リヴァイアサン襲来』(集英社)にての付録の部 p.370より原文引用するところとして)[あらゆる秘術の公式と同じく、ここにも火の父、水の母、気の息子、地の娘がすべて含まれている。だが、読者が $5 = 6$ の公式に釣り合わせるた

めに $5=4$ の公式を探しはじめたりしないよう、いまはこれ以上いわないでおこう。この項の最後は、次のように警告、明言してしめくりたい。(アステカ帝国、カトリック教会の異端審問、ナチスの殺人収容所に見られるような)集団的犠牲に訴えるのは、真の"死にゆく神の儀式"をおこなうことのできない者の方策である](以上、訳書よりの引用部とする)。また、邦訳版にあつての表記引用部に対する原著該当部についてもここにて挙げておく。アーカイブサイトなどからオンライン上より全文確認できるところの The Illuminatus! Trilogy BOOK#3 : LEVIATHAN (にあつての APPENDIX LAMED: THE TACTICS OF MAGICK の部)の “ The fiery father, the watery mother, the airy son, and the earthy daughter are all there, just as they are in every alchemical formula. **But we say no more at this point, lest the reader begin seeking for a $5 = 4$ equation to balance the $5 = 6$.** [. . .] We conclude with a final warning and clarification: Resort to mass sacrifice (as among the Aztecs, the Catholic Inquisition, and the Nazi death camps) is the device of those who are incapable of the true Rite of the Dying God. ” との箇所が原著にての該当部となる)——。

以上表記のような先覚性を帯びての作品 (記号論的側面より普通に考えてみても[不可解なる先覚性]が具現化しているとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』) にあつて、

[[退魔の象徴としての五芒星]と結びつくような[退魔の象徴物として作中描かれるペンタゴン] (正五角形状を呈するアメリカ国防総省本庁舎) が爆破されて「異次元から」干渉する妖怪 —より以前にて米国にて流行ったというクトゥルー神話という荒唐無稽なホラー小説体系に認められる妖怪から[設定]拝借されての妖怪— が解き放たれるとのあらすじが現出している]

とのことを(「再度の」)原文引用をなすとのかたちで指し示しておくこととする。

まずもって次のようなかたちでの再引用をなしておくこととする。

(直下、邦訳版『イルミナティII 黄金の林檎』214 ページより(出典(Source)紹介の部 38-2 の段にて抜粋なしたところよりの)「再度の」原文引用をなすとして)

「魂を食らう別の銀河系のその奇怪なエネルギー体で自由を与えることにしたのだ。ヨグ・ソトートは、大陸南部の荒涼とした原野にあるアトランティスのペンタゴンに閉じ込められていた」

(引用部はここまでとする —※—)

(※ここでの引用部は[太古のアトランティス時代にあつてのペンタゴンに魂を食らう別銀河由来の生命体が封印されていたとの[設定]が当該荒唐無稽フィクションにて採用されている]とのことを示すところのものとなっている(尚、オンライン上より確認できるところの原文表記は The Illuminatus! Trilogy The Golden Apple (の THE EIGHTH TRIP, OR HOD の部)にあつての “ **He and his associates decide on a desperate expedient, unleashing the Ilogor Yog Sothoth. They will offer this unnatural soul-eating energy being from another universe its freedom in return for its help in destroying Gruad's movement. Yog Sothoth is imprisoned in the great Pentagon of Atlantis on a desolate moor in the southern part of the continent.** ” との部となる))

(直下、邦訳版『イルミナティII 黄金の林檎』223 ページから225 ページより(出典(Source) 紹介の部 38-2)の段にて抜粋なしたところよりの)「再度の」原文引用をなすとして)

「ペンタゴンの壁に沿って男も女も列を作って歩かされ、レーザーで焼き殺された。それか死体の山に装薬が仕掛けられると、マスクをかぶった制服姿の破れざる環は引きあげていった。連続して爆発が起き、…(中略)…廃墟となったペンタゴンの周辺の柔らかい土の上に、巨大な鉤爪の痕が現れた。…(中略)…グルアドと破れざる環がペンタゴンの崩壊とアトランティス人の大虐殺を見つめていた。…(中略)…「これまで多くの者がわたしを利用しようとしてきたが、味方になった者は一人もない。そなたの魂のために特別な場所を用意したぞ。未来の人類の最初の人よ」グルアドはヨグ・ソトトに話しかけようとしたが、憑依は明らかに消え去っており、破れざる環のほかの連中は、エヴォエが用意した発酵させた葡萄から作られた新しい飲み物を褒め称えていた」

(引用部はここまでとする 一※一)

(※ここでの引用部は「太古のアトランティス時代にあつてのペンタゴンに魂を食らう別銀河由来の生命体が封印されていたものの、その存在が太古のペンタゴン爆破によって解放されて「憑依」とのかたちで異次元より介入しだしたとの「設定」が当該荒唐無稽フィクションにて採用されている」とのことを示すところのものとなっている (尚、オンライン上より確認できるところの原文表記は The Illuminatus! Trilogy The Golden Apple (の THE SEVENTH TRIP, OR NETZACH の部) にあつての “**Being on the southern plain, which was relatively uninhabited, the Pentagon of Yog Sothoth becomes the center of a migration of people who survived the disaster. Emergency cities are set up, those dying of radiation sickness are treated. A second Atlantis begins to take root. And then, from the Himalayas, the ships of the Unbroken Circle come swooping down on one of their raids. Lines of Atlantean men and women are marched to the walls of the Pentagon and there mowed down by laser fire. Then explosive charges are placed amid the heaps of bodies and the masked, uniformed men of the Unbroken Circle withdraw. There is a series of explosions; horrid yellow smoke goes coiling up. [. . .] In the Himalayas, Gruad and the Unbroken Circle watch the destruction of the Pentagon and the massacre of the Atlanteans. The Unbroken Circle cheers, but Gruad strangely weeps. "You think I hate walls?" he says. "I love walls. I love any kind of wall. Anything that separates. Walls protect good people. Walls lock away the evil. There must always be walls and the love of walls, and in the destruction of the great Pentagon that held Yog Sothoth I read the destruction of all that I stand for. Therefore I am stricken with regret."** At this the face of EVOE, a young priest, takes on a reddish glow and a demoniac look. There is more than a hint of possession. "It is good to hear you say that," he says to Gruad. "No man yet has befriended me, though many have tried to use me. I have prepared a special place for your soul, oh first of the men of the future." Gruad attempts to speak to Yog Sothoth, but the possession has apparently passed, and the other members of the Unbroken Circle praise a new beverage that Evoe has prepared, made of the fermented juice of grapes.” との部となる))

上のような [往古アトランティスにあつてのペンタゴン爆破に伴う異次元介入存在の解放] との [設定] と対応付けさせられるような格好で『ジ・イルミナタス・トリロジー』では

[現代アメリカにてペンタゴンが爆破され、また、そこにて閉じ込められていた異

次元介入存在が解放される]

との[設定]もが採用されている(：そうした[設定]伴ってのフィクションがいかに荒唐無稽なるもの(ridiculous fiction)かは論ずるまでもないが、ここでは[荒唐無稽なるもの]にあつての背後に控えている[純・記号論的意味性]の問題を——「他に重要な相関関係が存する」ため、そう、それであるからこそ——問題視しているとのことはある程度の水準を有した向きには言うまでもなくご理解いただけることか、とは思う。「たかが[荒唐無稽なるもの]を[荒唐無稽なるもの]としてしか情報処理出来ぬとの向きには話すだけ時間の無駄である」との観点は筆者にも当然にあるとしつつも申し述べれば、である)。

そちら[アメリカのペンタゴンが爆破されて魂を食らうとの別次元由来の異次元介入存在(クトゥルー神話という荒唐無稽フィクション神話体系から名前が拝借されての存在)が解放される]との筋立てが具現化しているとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』の該当部を(これまた「再度のこと」ながらも)挙げておくこととする。

(直下、邦訳版『イルミナティIIIリヴァイアサン襲来』120ページより(出典(Source)紹介の部 37-2)の段にて抜粋なしたところよりの)「再度の」原文引用をなすとして)

ワシントン時間で午後五時五五分に、一連の爆発によりペンタゴンの三分の一が破壊され、いちばん内側の中庭からいちばん外側の壁まで、四重の環状構造がずたずたにされた

(引用部はここまでとする —※—)

(※ここでの引用部は(言うまでもなく)[アメリカのペンタゴンが爆破される]とのことを描写した部位であるが、そちらが異次元介入存在の解放との設定と結びつけられている(尚、オンライン上より確認できるところの原文表記は The Illuminatus! Trilogy LEVIATHAN(の THE NINTH TRIP, OR YESOD の部)にあつての “ **In any case, at 5:55 P.M., Washington time, a series of explosions destroyed one-third of the river side of the Pentagon, ripping through all four rings from the innermost courtyard to the outermost wall.** ” との部となる))

(直下、邦訳版『イルミナティIIIリヴァイアサン襲来』152ページから153ページより再度の原文引用をなすとして)

ヴォルフガングは周囲で勃発していた戦闘の音を忘れた。「おまえ、いつの間に?どうやって抜けだした?」相手の声は砂礫層から浸みだしてくる原油のようにわきあがり、また石油と同様、化石時代のものだった。南極がサハラ砂漠のなかにあり、頭足類が最も進化した生命の形だったころ、この惑星に現われた生物の声だった。「どうやったかなどどうでもよい。わたしはもはや幾何学には縛られない。わたしは出で訪れ、わたしは魂を食った。長い年月おまえたちに与えられてきた粗末な原形質ではない。生きのいい魂だ」「何ということだ、それがおまえの感謝の仕方か?」ヴォルフガングはくっつかかった。少し低い声で彼はヴェルナーにいった。「護符をさがすんだ。ソロモンの印とイモリの目で封印された黒いケースに入っていたはずだ」そしてヴィルヘルムの肉体を乗っ取っている存在に向かっていた。「ちょうどよい時にきたな。ここでこれから大量の殺しがはじまる。魂もたくさん食べられるはずだ」「このあたりの者たちには魂はない。奴らには見せかけの命しかない。それを感じるだけでもおぞましい」ヴォルフガングは声をあげて笑った。「ロイガーでも嫌悪感を抱くことはあるというわ

けだ」「わたしは何百年もの長い間、おまえたちに次から次へと五角形のなかに封印され、生きのいい魂ではなく粗末な保存エキスを与えられて、うんざりしていた」

(引用部はここまでとする 一※一)

(※1 ここでの引用部は[アメリカのペンタゴンが爆破された後、[古代アトランティスのペンタゴンに封印されていたのと同様の存在]がそこより解放され、不可視の憑依靈感の存在として人間の魂を食しだした]とのことが描写されているとの部となる(尚、オンライン上より確認できるところの原文表記は The Illuminatus! Trilogy LEVIATHAN(の THE NINTH TRIP, OR YESOD の部)にあつての “ **Wolfgang forgot the sounds of battle that raged around him. / "You! Here! How did you escape?" The voice was like crude petroleum seeping through gravel, and, like petroleum, it was a fossil thing, the voice of a creature that had arisen on the planet when the South Pole was in the Sahara and the great cephalopods were the highest form of life. / "I took no notice. The geometries ceased to bind me. I came forth. I ate souls. Fresh souls, not the miserable plasma you have fed me all these years." / "Great Grud! Is that your gratitude?" Wolfgang stormed. In a lower voice he said to Werner, "Find the talisman. I think it's in the black case sealed with the Seal of Solomon and the Eye of Newt." / To the being that occupied Wilhelm's body he said, "You come at an opportune time. There will be much killing here, and many souls to eat." "These around us have no souls. They have only pseudo-life. It sickens me to sense them." / Wolfgang laughed. "Even the lloigor can feel disgust, then." / "I have been sick for many hundreds of years, while you kept me sealed in one pentagon after another, feeding me not fresh souls but those wretched stored essences." ” との部となる))**

(※2 尚、上にては lloigor ロイガーという存在がペンタゴンより解放された忌まわしき存在であるとの[設定]が採用されているわけだが、そうした[設定]はアメリカにて 20 世紀前半より隆盛を見出したクトゥルー神話の[設定]を表向き踏襲してのものとなっている([ロイガー]というのはクトゥルー神話に数多出てくる架空の超存在の名前のひとつである)。

その点、クトゥルー神話などと述べれば、
[下らぬもの] [おどろおどろしきもの]
として名前だけでも知る向きは多からうととらえるが(尚、くどくも述べれば、筆者は[下らぬもの]をその額面・券面通りのものと受け取ることが賢明ではないとのケース、「大の大人が取り上げることができぬとの[下らぬもの] ridiculous fiction と見られるものであればこそ、」の相応の二重話法が含まれているケースもがこの世界には存在しているとの観点 —— 実例把握に基づいての観点 —— に基づいてここでの話をなしている)、[クトゥルー神話]というものについての世間一般での解説のされようを引けば、

(英文 Wikipedia[Cthulhu Mythos]より引用するところとして)

“ **The Cthulhu Mythos is a shared fictional universe, based on the work of American horror writer H. P. Lovecraft. The term was first coined by August Derleth, a contemporary correspondent of Lovecraft, who used the name of the creature Cthulhu — a central figure in Lovecraft literature and the focus of Lovecraft's short story "The Call of Cthulhu" (first published in pulp magazine Weird Tales in 1928) — to identify the system of lore employed by Lovecraft and his literary successors.** ” (訳として)「ク

クトゥルー神話はアメリカのホラー作家 H.P.ラヴクラフトの作品をベースにしているとの(多くの作家に)共有されてのフィクション上の世界像となる。[クトゥルー神話]との語はオーガスト・ダーレス、ラヴクラフトの同時代人にあつての文通相手であつたとの同ダーレスが 1928 年にウィアード・テイル誌に掲載された『クトゥルーの呼び声』との短編にラヴクラフトが登場させたクトゥルーという存在の名を(格別に取り上げて)ラヴクラフトおよび彼の文学上の後裔らに採用されることになった物語体系を表象するものとして用いしたことによる」とのまとめかたがなされているものとなるとも一応解説しておくこととする)

以上、引用なしの部をもってして

[[退魔の象徴としての五芒星]と結びつくような[退魔の象徴物として作中描かれるペンタゴン(正五角形状を呈するアメリカ国防総省本庁舎)]が爆破されて「異次元から」干渉する妖怪 一より以前にて米国にて流行ったというクトゥルー神話という荒唐無稽なホラー小説体系に認められる妖怪から設定拝借されての妖怪一 が解き放たれるとのあらすじが現出している]([α6](#)の後半部)

とのことの出典紹介とした(:それ単体だけにおける[聞こえの馬鹿馬鹿しさ]については論ずるまでもないことかとは思ふが、性質上、本稿の先の段の話、『ジ・イルミナタス・トリロジー』が 911 の前言小説となる根拠につき論じた部と複合顧慮いただきたいところである)。

([α1](#) から [α8](#) の典拠を紹介するとの方向性での話を続けるとして)

さらに

[会合周期(具体的に述べれば、8年単位で現出する5回の地球との周期的内合関係)でもって[五芒星]を描くとされる存在が金星となるとのことを先述した。また、同文に金星が悪魔の王ルシファーと欧州にて歴史的に結びつけられてきた惑星であることも先述した。さて、[歴史的に会合周期にて五芒星を現出させるとのことが指摘されてきた惑星・金星]との繋がり合いが問題視されもすることがある悪魔の王ルシファーとのからみで述べれば、である。ダンテ『地獄篇』にもミルトン『失樂園』にも[ルシファーと結びついた罪の領域]にあつて[今日的な観点で見てのブラックホールの近似物]が多重的に具現化していると申し述べられるようになっていること、解説をなしてきたのが本稿である]([α7](#))

との部に関わるところの典拠についてだが、従前出典紹介部に対する注意喚起を再度なしておくこととする。

会合周期(具体的に述べれば、8年単位で現出する5回の地球との周期的内合関係)でもって[五芒星]を描くとされる存在が金星となるとのこと、また、惑星金星が歴年、欧州にて悪魔の王ルシファーと結びつけられてきたとのことにまつわる出典紹介部として

⇒

([α1](#) から [α8](#) と分けての項目を挙げる前にそちら解説部を設けていたところの)

[出典\(Source\)紹介の部 67](#)

を参照されたい。

歴史的に惑星金星と結び付けられてきたとの悪魔の王ルシファーとのつながり

で述べれば、ダンテ『地獄篇』にもミルトン『失樂園』にも[ルシファーと結びついた罪の領域]にあって[今日的な観点で見てのブラックホールの近似物]が多重的に具現化していると申し述べられるようになっていくとのことの出典紹介部として
⇒

(数万余字を割き、古典、その原文を挙げながらも「何が問題になるのか」具体的に解説しているところの)

[[出典 \(Source\) 紹介の部 55](#)から[出典 \(Source\) 紹介の部 55 \(3\)](#)を包摂する解説部]

を参照されたい。

以上、照応するところの参照先の紹介をもってして[[α7](#)にまつわっての(既述の)出典]についての紹介を終えたとして、余すところは [α1](#)から [α8](#)にあっての [α8](#)のみとのことになった。

それでは以下、

[[五芒星]は[黄金比]と際立って結びつく図形でもある。そこに見る[黄金比]と[ブラックホール]が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある]([α8](#))

とのことの出典を挙げておくこととする。

出典 (Source) 紹介の部 73

SOURCE

73



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 73 にあつては

[黄金比(正五角形と五芒星に深くも関わりとの数値)がブラックホールと深く関わっているとの見解が呈されている]

このことの典拠を示しておくこととする。

表記のことについてはアメリカのリベラル系インターネット新聞との触れ込みで現時、和文ウィキペディアにも一項目設けられている[ハフントン・ポストのウェブサイト(huffingtonpost.com)]にて公開されている記事、

[The Golden Ratio and Astronomy]

とタイトルが付されての記事 ——記事タイトルの検索エンジン入力で特定できようとのもので記事上部にての記述内容からおそらく初出時期は2012年10月頃(本稿本段執筆をなしている現時点から見てつい最近との按配の折柄)であろうとの記事—— にあつての記述内容を引いておくこととする(:同記事執筆者はマリオ・リヴィオ(Mario Livio)という人物となり、同人物は本稿にての出典(Source)紹介の部 72 の部などで取り上げた書籍『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』(早川書房ハードカバー版/原著原題 THE GOLDEN RATIO The story of Phi, the World's Most Astonishing Number) の著者ともなっている[そこそこに名が知られた天体物理学者]となつている)。

(直下、つい最近、お目見えしだした(公開されてから日が浅い)との The Golden Ratio and Astronomy と題されての huffingtonpost.com 掲載の記事よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

Another intriguing area of astronomy in which the Golden Ratio made an unexpected appearance is that of the extreme objects we call black holes.

Black holes warp space in their vicinity so much that in Einstein's classical General Relativity, nothing can escape from them, not even light.

[...]

Spinning black holes (called Kerr black holes, after the New Zealander physicist Roy Kerr) can exist in two states: one in which they heat up when they lose energy (negative specific heat), and one in which they cool down (positive specific heat). They can also transition from one state into the other, in the same way that water can freeze to form ice. Believe it or not, but the transition takes place when the square of the black hole mass (in the appropriate units) is precisely equal to ϕ times the square of its spin!

(拙訳として)

「[黄金比]が予想外の出現をなすとの天文学分野にあつての興味深い領域とは我々が[ブラックホール]と呼ぶ[極限の存在]である。ブラックホールというのはアイシュタインの古典的な一般相対性理論にて何物もそれらから逃れられない、光さえも逃れられないとのかたちでそれら近傍の空間をひずませる。…(中略)…

自転するブラックホール(ニュージーランド人物理学者ロイ・カー以後、[カー・ブラックホール]と呼ばれるようになったもの)は二種の存在形態をとりうる。うちひとつはそれらがエネルギーを失う時に熱を発するとのもの(正の比熱)となり、もう一つは冷却化するとのもの(負の比熱)である。それらは一方からもう一方へと水が凍って氷になるのと同様の式で移行する。信じよう信じまいと、その移行は「正確に」ブラックホール質量の平方が「ブラックホール角運動量(スピンと書かれているが、アンギュラー・モメンタムこと角運動量のことを指す

と解される)の平方]の「 ϕ 」倍——(訳注: ϕ ファイは黄金比の体現数値;黄金数を指す)——に達したときに起こる」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※黄金比にまつわる註記として:

[黄金比]とは単純に書けば

「縦を1とした際に[縦横比 **1:1.6180339887(以下略)**]となる比率(長さ逆転させて[横縦比 **0.6180339887(以下略):1**]の比率でもいい)のことを指す」のだが、そちら黄金比は二次方程式 $[x^2-x-1=0]$ の二つの解とそのまま対応するものとして[重き]をもって表される、すなわち、(たかだが中学校の初等代数学で[学習]を強制されるものだったかとも思うのだが、いわゆる[二次方程式の解の公式]で導出されるとの)そちら二次方程式 $[x^2-x-1=0]$ の二つの解、

[1.6180339887...]

および

[-0.6180339887...]

とそのままに対応するものとして[重き]をもって表されるもの「とも」なる(： $[x^2-x-1=0]$ の正負の解のうち、正の解の方がゴールデン・ナンバーこと黄金数としてギリシャ語アルファベット・ファイ ϕ にて表象される)。

につき、通例、「黄金比とは**[1.6180339887...]**との数値にて体現されるものである」とただ単純に説明されがちだが(ϕ ファイ即**[1.6180339887...]**の比率であるだけでなく説明されがちだが)、表記の二次方程式 $[x^2-x-1=0]$ では[第一桁目以外、[奇跡]とでも述べられるような数値として安定的なる一致性を呈する解]が現出していることとなっており(もう一度、**[1.6180339887...]****[-0.6180339887...]**との数をご覧頂きたい)、うち、マイナス符号付きの解である**[-0.6180339887...]**の方の符号取り払っての絶対値が黄金比の逆数バージョン $[1/\phi]$ と等しくもなっていることすら「も」があるとのこととなっている(理解なそうという意志があるのならば、それでもって[黄金比]というものがあるという性質の「よくできた数」なのか、若干はご理解いただけるか、と思う)。

とにかくも、ここ訳出部にて黄金比体現記号 ϕ ファイで示されている部はこの場合、**[1.6180339887...]**のことを指すこと、お含みいただきたい)

(※2 また、ここでの指し示し対象、

[[五芒星]は[黄金比]と際立って結びつく図形でもある。そこに見る[黄金比]と[ブラックホール]が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある](a8)

とのことであっての

[[五芒星]は[黄金比]と際立って結びつく図形でもある]

との部位については先立っての段、[出典\(Source\)紹介の部 69\(2\)](#)にあって THE GOLDEN RATIO The story of Phi, the World's Most Astonishing Number(邦題)『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』(早川書房ハードカバー版)にての49ページから51ページより(再引用なすところとして)“五芒星形は、正五角形——五つの辺の長さも頂角の大きさも等しい平面図形——とも深いつながりがある。正五角形の頂点を対角線で結ぶと、五芒星形ができる。この五芒星形の中心にも小さな五

角形ができ、その五角形の対角線も五芒星形となって、さらに小さな五角形がなかにならできる(図 10)。これがどこまでも続き、どんどん小さな五角形と五芒星形が作られていく。この一連の図形には際立った特徴がある。…(中略)…「どの線分もひとつ前の線分にくらべ、黄金比 ϕ にぴったり等しい比で小さくなっている」ことが、初頭幾何学によって簡単に証明できるのだ”(再度の引用部はここまでとする)との文言を引いていたとおりのことがよく知られているとのことがある)

筆者知識不足ゆえにカー・ブラックホールの相にまつわたるところの訳に一部問題があるかもしれないが、「とにかくも、」である。カー・ブラックホールの遷移プロセスが [黄金比] と際立ったかたちで結びつくとのことが [指摘] されているとのこと、上もて理解いただけただか、と思う (何故、そうした話までも問題視しているかはさらもって後の段で [理由となるところ] をつまびらやかにする)。

(出典 (Source) 紹介の部 73 はここまでとする)

道程として実にもって長々とした歩み、だが、歩幅はこれ遅々・細々としたものであるとの歩み、そう、不消化感ばかりもたらしかねないとのくくだとした歩みとなってしまったと筆者自身からしてとらえているのだが、敢えてもそうした筆の運びをなしたとのその目的は達しえた、すなわち、
[以下のこと]

の典拠を属人的主観の問題とは無縁なところとして「網羅的に」示しきる — 響きとしては奇態なところがあるが、だが、同じくものことらが堅くも成立しているとのことを示しきる — との目的を達しえたかと判じている。

(ここにまでにて典拠を遺漏なくも示してきたのは下にある $\alpha 1$ から $\alpha 8$ の部となる)

α . (金星にまつわる会合周期にあつて具現化するとの指摘もなされてきた) [五芒星相似形] を [ブラックホール絡みの話] と接合させるような奇怪なることらがある。すなわち、次のようなことら ($\alpha 1$ から $\alpha 8$) がある。

$\alpha 1$. 地球と金星と太陽の内合 (インフェリアー・コンジャンクション) 時にあつての天体座標を結んで出来上がるとのことがよくも取り上げられる (直近先述) との [五芒星] は [五角形] と結びつく図形でもある。[(ほぼ正確な) [五芒星] が描写される局面] というのは [(ほぼ正確な) [正五角形] に近きものが内にて形成される局面] であるとも述べられる。どういふことか。[(正確な) 五芒星] というものは [正五角形] に内接される図形として描けるものであり、[正確な五芒星の各点] を構成する五点というのが正五角形の各点にそのままに対応することになるとのことがあるのである。

$\alpha 2$. 正五角形、英語に直せば、[レギュラー・ペンタゴン] との特質を持つのがアメリカの国防総省の本部庁舎である。そのペンタゴンの広場は先の 911 の事件の起こる前から [ワールド・トレード・センターの跡地] がそう述べられるようになったのと同じ言葉で呼び慣わされていた、[グラウンド・ゼロ] との言葉でもって呼び慣わされていた。

α3. グラウンド・ゼロという言葉は911の事件が発生する前からペンタゴンの広場と歴史的に結びつけられてきたとの沿革がある(上の **α2** にて言及)のだが、そちらグラウンド・ゼロという言葉、かの911の事件が起こる「前」から「使用局面が際立って限られていた特殊用語」として存在していた同語を「ブラックホール」と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が存在しており、その書籍、「不可解極まりない911の予見的言及とも関わる」とのことを本稿の先だつての段で先述してきたとの書籍でもある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』となる。同著『異端の数ゼロ』序盤部にては[五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性]のことが[最小の単位(無限小)に向かう力学]を指し示すようなものとして取り上げられているとのことがあるのである。さて、そのように問題となる—911の異様な先覚的言及とも関わるとの式で問題となる—書籍で取り上げられている

[五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性]

にて「も」表象される

[最小の単位(無限小)に向かう力学]

は言い換えれば、[原子核の領域に向かう力学]、さらに述べれば、[原子核を構成する陽子や中性子の領域、そして、陽子を複合して構成するクォークのようなより極微の素粒子の世界に向かう力学]のことを想起させるものでもある。

何故か。

原子のなかで原子核の占める割合はおそらく小さい、そのような原子核を構成するのが中性子や陽子であるといったかたちで(小さきことをひたすらに突き詰めていった際の)極小の世界というものは展開しているからである。[五角形(ペンタゴン)および五芒星の両者の図形的特性]のことを知っていれば、自然に想起されるのが[最も小さな極小の世界へ向けての力学]であり、それは換言すれば、[素粒子物理学などが領分とする極小の世界へ向けての力学]であると言い換えられるようなところがあるのである。

そして、そうした限りなくものゼロ・スケールに向かつて展開する極微の世界の領域の研究(たとえばヒッグス粒子や超対称性粒子なぞと命名されてのものを発見に血道をあげるとの「研究」)を声高に唱道、[原子核を壊す中での膨大なエネルギー](と述べても極微領域に集中しているからこそその膨大なエネルギー)で[ブラックホール]さえもが生成される可能性が取り沙汰されているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まったの LHC 実験であると言われている。

α4. ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』との書籍は911の事件が起こる「前」から特異な言葉であるとのグラウンド・ゼロという言葉ブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍、かつもって、不可解なる911の予見的言及とも関わっているとの書籍でもある(←**α3** で言及したことである)。

そして、同著『異端の数ゼロ』は[五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性]と結びつくことに言及しているとの書籍でもある(←**α1** および **α3** にての出典にまつわることもある)。

そうした書籍で扱われる

[ゼロの世界][極小の世界]

に近しきところで(原子に比してその比率が恐ろしく小さいとの極小の存在たる)[原子核]を破壊しようとのことをなし、そこにて発生する膨大なエネルギーからブラックホールを生成しようとのところにまで至ったのが LHC 実験であると「される」(←**α3** にて言及のことでもある)のだが、他面、[911の事件]では何が起こったのか。

[[正五角形]との形状を呈するとのペンタゴンが崩された]

とのことが起こっている(←**α2** で合衆国国防総省庁舎たるペンタゴンが(正確な五芒星と無

限に続く相互内接外接関係を呈するとの) [正五角形]であることを問題視している)。

以上のことより次の関係性が想起されもする。

[現実世界で911の事件が起こる「前」からアメリカ国防総省本部庁舎たるペンタゴン(正五角形)の広場と結びつけられてきたグラウンド・ゼロという特殊な言葉($\leftarrow \alpha 2$)] \leftrightarrow [911の事件が起こる前から「グラウンド・ゼロ」との特殊な言葉とセットとなっていた現実世界でのペンタゴン(「正五角形」状の米国国防総省庁舎)の911にあつての部分崩壊] \leftrightarrow [正五角形(合衆国防総省庁舎ペンタゴンとの同一形状)の(911にての)部分崩壊($\alpha 3$)] \leftrightarrow [911の事件が起こる「前」から特殊用語として存在していた「グラウンド・ゼロ」という言葉を「ブラックホール」と関係するかたちでなぜもってしてなのか用いているとの書籍であり(そして、そちら著作、911の不可解なる予見事物とも通ずるようになっている書籍との意味でも際立つての著作ともなり) また、同時に、五芒星と五角形(ペンタゴン)の間の無限に続く相互内接・外接関係によって表象されもする極小の世界へ向かう力学に言及している著作「でも」ある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』という著作の内容] \leftrightarrow [無限小に至る方向性での中での破壊挙動、原子核を壊す中での膨大なエネルギー発現状況でもって「ブラックホール」を作り出しうると言われるに至っている LHC 実験を想起($\alpha 3$)]。

$\alpha 5$. 「グラウンド・ゼロ」という言葉 — (本来、[広島・長崎の爆心地]を指すべくも考案された特別な言葉であり、また、冷戦期、核戦争の標的たるところと結びつけられるに至った言葉である) — と[911]の事件の発生前から結びつけられていた[ペンタゴン](アメリカ国防総省本庁舎)というのはレズリー・グローヴズという男(往時、米国陸軍工兵隊大佐)を責任者にして1941年「9月11日に」建設が開始されたとの建物である。 そちらペンタゴンの建設計画を指揮していたレズリー・グローヴズという男が「ペンタゴン建造中に」大佐から准将に昇進、主導することになったのが「マンハッタン計画」となっており、同「マンハッタン計画」で実現・現出を見たのが「原子爆弾」と「広島・長崎への原子爆弾の投下」(「グラウンド・ゼロ」との言葉がはじめて用いられるようになった爆心地を現出させた挙動との意味合いで本稿の先の段でも取り上げていた原爆投下)となる。そこに見る「原子爆弾」というのは「極小領域たる原子核のレベルでの崩壊現象、[核分裂反応]によって実現を見た兵器」でもある — 根拠を入念に示さんとするものとして作成しているとの本稿スタンスに則り、無論、以上のようなことが述べられる確たる論拠もこれより「網羅的に」紹介していく — (:1941年9月11日から建設開始(着工)を見ていた[ペンタゴン]の建設計画を指揮していた男レズリー・グローヴズが[マンハッタン計画]の責任者でもあったわけであるが、[マンハッタン計画]というのはそも、[極小の領域、原子核のレベルでの崩壊現象が原子爆弾を実現ならしめること]が着想されて開始された計画である。[原子核レベルでの崩壊現象を利用しての核兵器開発]と「ペンタゴン」が結びつく、そう、「五芒星形と五角形(ペンタゴン)が無限に相互に内接・外接しあいながら無限小へ至る方向(原子核や素粒子の世界へ至る方向)を指し示すもの」であることを想起させるように結びつくとのことが歴史的沿革として存在していることが問題となる)。

$\alpha 6$. 金星の内合ポイントにてその近似物が具現化するとの五芒星は史的に見て[退魔の象徴]とされてきたとの経緯があるものである。さて、その[退魔の象徴としての五芒星]と結びつくような[退魔の象徴物としてのペンタゴン(アメリカ国防総省本庁舎)]が爆破されて「異次元から」干渉する外側の銀河由来の妖怪が解放されるとの「荒唐無稽小説」が世に出ている。それが本稿の先の段で「911の「奇怪なる」予見的言及をなしている」との要素を同作が多重的に帯びていることにつき仔細に解説してきた70年代欧米でヒットを見たとの小説作品、『ジ・イルミナタス・トリロジー』である。につき、[退魔の象徴としての五芒星と

結びつくが如き退魔の象徴としてのペンタゴンの崩壊、および、911の事件の発生(マンハッタンとペンタゴンが同時攻撃されたとの事件)を前言しているが如くの奇怪なる文物]などとのものより想起されるのは一繰り返しになるも一次のようなこととなる。⇒[(直近にて言及の)書籍『異端の数ゼロ』に特性として認められるとの[五角形(ペンタゴン)と五芒星の内接関係を無限小に至る機序として呈示するとのやりよう]・[グラウンド・ゼロという言葉葉を911の事件が発生する前からブラックホールと結び付けているとのやりよう]・[不可解なる911の予見的言及とも関わるとの側面]]←→(関係性の想起)←→[ペンタゴン(1941年9月11日に建造開始)の建設計画を主導した軍人が同様に主導して[原爆]と[グラウンド・ゼロ]を具現化させることになった[無限小に至る力学(五角形と五芒星が相互に無限に内接・外接されるかたちで表象される力学)の過程での原子核崩壊作用]を利用した[マンハッタン計画]に見るありよう]。

α7. 会合周期(具体的に述べれば、8年単位で現出する5回の地球との周期的内合関係)でもって[五芒星]を描くとされる存在が金星となるとのことを先述した。また、同文に金星が悪魔の王ルシファーと欧州にて歴史的に結びつけられてきた星であることも先述した。さて、歴史的に惑星金星と結びつけられてきたとの悪魔の王ルシファーとのつながりで述べれば、ダンテ『地獄篇』にもミルトン『失楽園』にも[ルシファーと結びついた罪の領域]にあって[今日的な観点で見てのブラックホールの近似物]が多重的に具現化していると申し述べられるようになってきていること、解説をなしてきたのが本稿である。

α8. [五芒星]は[黄金比]と際立って結びつく図形でもある。そこに見る[黄金比]と[ブラックホール]が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある。

(上のα1からα8の流れに加えてのこととして)

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとのことがある。それは海女による[セーマン・ドーマン]と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用は[竜宮]に引き込まれないための呪(まじな)いであるとの物言いがなされてもいる。さて、伝承に見る[竜宮]とはどういう場か。

[時空間の乱れが発生した場] ([外側に対して時間の進みが遅い場])

とされる場である。他面、重力の化け物、ブラックホールおよびその近傍領域も[時間の乱れ]が問題となるものである。以上のことは単体で述べれば、「考えすぎ」の謗(そし)り免れないこととあいなろうが(当たり前ではある)、上(のα)の段)にて述べてきたようなことがすべて[事実]であると網羅的に指し示されたとき、ここβの申しようも「考えすぎ」では済まされぬものとなって「しまう」とのことがある。

さて、本稿にての続いての段では表記のこらにあつてのβ.と振つての部の解説に入ることとする。

表記のβ、すなわち、

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとのことがある。それは海女による[セーマン・ドーマン]と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用は[竜宮]に引き込まれないための呪(まじな)いであるとの物言いがなされてもいる。さて、伝承に見る[竜宮]とはどういう場か。[時空間の乱れ

が発生した場]（[外側に対して時間の進みが遅い場]）とされる場である。他面、重力の化け物、ブラックホールおよびその近傍領域も[時間の乱れ]が問題となるものである。

の前半部をなすところ、

[日本でも五芒星紋様が海女によるセーマン・ドーマンの使用としてのかたちで呪いにあって用いられてきたとの経緯があり、それがまた竜宮と結びついているとのことがある]

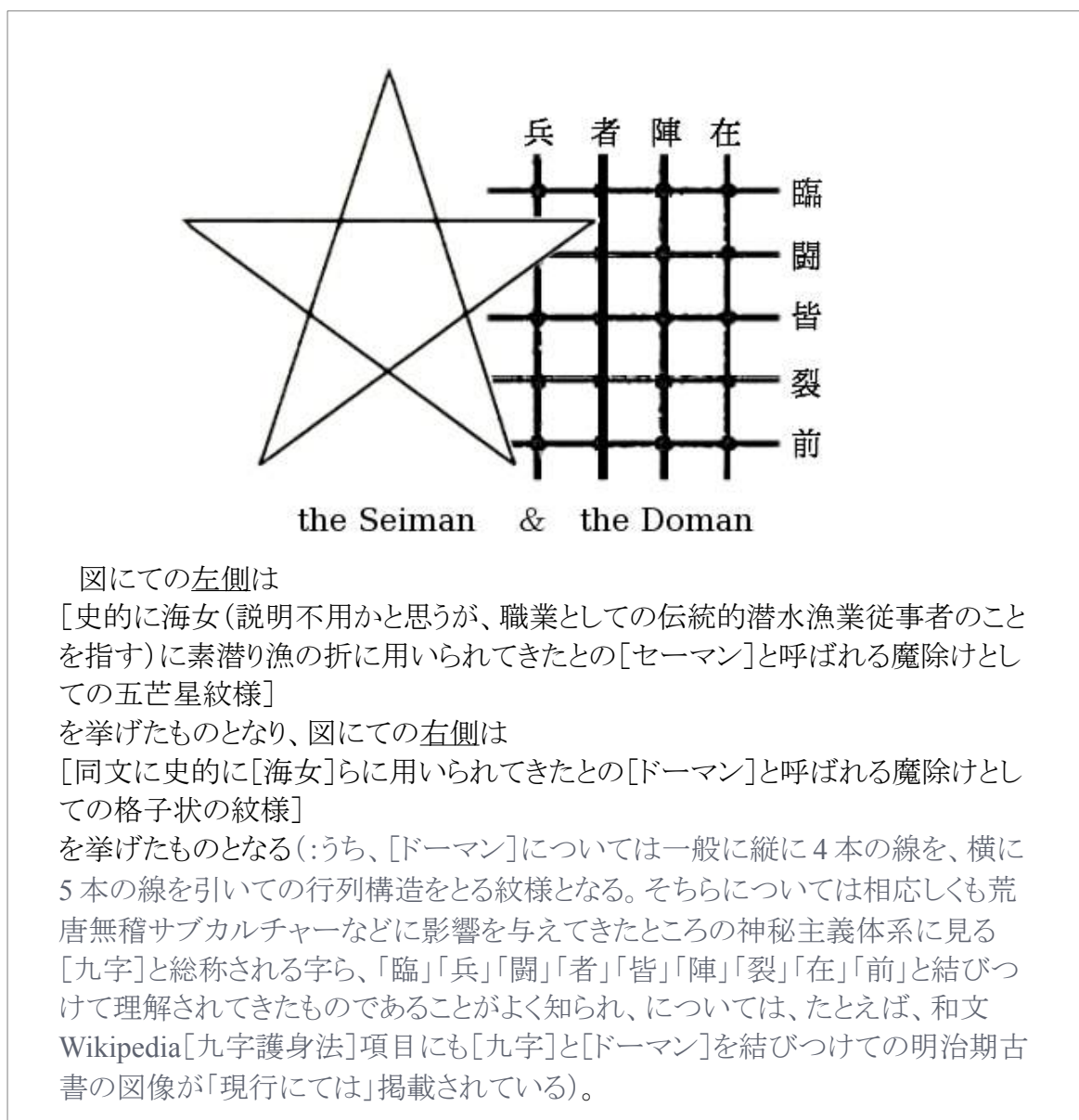
とのことについて「取りあえずも、」確認なしにいただければ、とのことを申し述べることから始める。

につき、グーグル検索エンジンなどで

[セーマン、海女]

と入力、[画像検索]をかけていただきたい。

その行為によって、現行、下の「ような」図像でもって示されるものを挙げてのページらが複数表示されてくることか、と思う(それらのページがすべて消除を見ることは観念しづらいとの観点での話をなししている)。



以上のように歴史的に日本国内でも[魔除け]として五芒星紋様が用いられてきたとのことについてはオンライン上の検索にて労せず同定できる場所として、次のような説明がなされている。

出典(Source)紹介の部 74

SOURCE

74



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 74 にあつては

[日本国内にて[魔除け]として五芒星紋様が史的に用いられてきたとことがある]

とのことの典拠を挙げることにする。

(和文ウィキペディア[セーマンドーマン]項目よりの現行の記述よりの原文引用として)

セーマンドーマンまたはドーマンセーマンとは、三重県鳥羽市及び志摩市の海女が身につける魔除けである。

これに関してははっきりとした謂われは伝わっていないが、魔除け、魔おどし、龍宮にひきこまれるを防ぐためのおまじないとされている。…(中略)… 陰陽道と関係するのではないか、ともいわれ、星形の印は安倍晴明判紋、格子状の印は九字紋と同じ形状である。このセーマンは安倍晴明、ドーマンは芦屋道満の名に由来するともいわれる。…(中略)… 安倍晴明判紋は晴明桔梗とも呼ばれ、五芒星と同じ形をしている。九字紋は横5本縦4本の線からなる(九字護身法によってできる図形)をしている。ドーマンの線数は必ずしも9本とは限らない。ウェットスーツの普及で、この風習は急速に廃れつつある。

(引用部はここまでとする)

上の引用部にてはセーマンが[龍宮]に引き込まれないようにすべくもの呪いであると「言われている」と表記してある。

(:尚、[セイメイ⇒セーマン]とのことで[セーマン]の呼称の由来と俗に言われているところの[安倍清明](極めて有名な平安期陰陽師)の紋(上にてのウィキペディアにて[清明桔梗]として言及されているもの)が五芒星形状を呈していることはよく知られたこととなっており、といった情報の周知度・流布され度合いについてはオンライン上にてはすぐに確認できることである。

その点、

[京都(の戻橋の界限)に存在する[清明神社]は諸所に五芒星を配した神社である]

とのことはよくも通人には認知されており(写真公開しているウェブページもある。疑わしきは[清明神社]関連のウェブサイトにあたってみるとよからう)、ウィキペディア[清明神社]項目にも

(現行にての記載内容より引用するところとして)

(清明神社にあつての)この井戸は五芒星(清明紋)を描き、その取水ぐちがその星型の頂点の一つにあり、立春には、清明神社の神職がその清明井の上部を回転させ、その年の恵方に取水口を向けるのが、慣わしとなっている

(引用部はここまでとする)

と表記されているようなところとなる)

また、[竜宮と五芒星が結びついている]とのことまでは言及されていないのだが、

[五芒星が日本にて伝統的に用いられてきた魔除けである]

とのことについては博物学者として並ならぬ知識を有していた南方熊楠の手になる『十二支考 一蛇一』(本稿の先だつての部でもそこよりの引用を他所表記との兼ね合いでなしているとの論稿)にあつても一和製プロジェクト・ゲーテブルクとでも言うべき青空文庫のサイトを通じてオンライン上よりテキスト確認できるとのかたちにて一 以下、引用するような表記がなされているとことがある。

(直下、オンライン上の青空文庫媒体より全文確認できるとの南方熊楠の手になる『十二支考 蛇に関する民俗と伝説』より原文引用をなすとして)

種彦の『用捨箱(ようしゃばこ)』巻上に、ある島国にていと暗き夜、鬼の遊行するとして戸外へ出でざる事あり。その夜去りがたき用あらば、目籠を持ち出て出なり、さすれば禍なしと、かの島人の話なりといえるは、やはり新島辺の事で、昔は戸口にも策を掛け、外出にも持ち歩いたであらう。種彦は、江戸で二月八日御事始おことはじめに策を門口に懸けた旧俗を釈(と)くとて、昔より目籠は鬼の怖るといい習わせり、これは目籠の底の角々は☆如此(かく)清明九字(あるいは曰く清明の判)という物なればなり。原来の俗説、ただ古老の伝を記すと言つたが、その俗説こそ大いに研究に用立つなれ。すなわちこの星状多角形の辺線は、幾度見廻しても止まるところなきもの故、悪鬼来りて家や人に邪視を加えんとする時、まずこの形に見取れ居る内、邪視が利かなくなるの上、この清明の判がなくとも、すべて籠細工の竹条は、此処(ここ)に没して彼処(かしこ)に出で、交互起伏して首尾容易に見極めにくいから、鬼がそれを念入れて数える間に、邪視力を失うので、イタリア人が、無数の星点ある石や沙や穀粒を、袋に盛って邪視する者に示し、彼これを算(かぞ)え尽くすの後にあらざれば、その力利(き)かずと信ずると同義である。節分の夜、豆撒くなども、鬼が無数の豆

を数え拾う内に、邪力衰うべき用意であろう。

(引用部はここまでとする 一※一)

(※上にての下線部は、大要、(南方熊楠曰くのところとして)次のような書かれようがなされている箇所となる → (以下、要約表記をなすとして) [特定古文献—江戸期戯作者たる柳亭種彦の手になる随筆『用捨箱』—などに典拠求められるところとして「鬼の遊行」による災いを避けるため籠(かご)を持ち歩く風習や箆(ざる)を家屋に立てかけるとの風習があるとのことである。これは籠(かご)などの底の編み目が「五芒星紋様」「晴明九字」の形態に近しく、各辺に出口のないその構図より悪鬼がやってきて「邪視」をなさんとしてもそれに見入ってその「邪視」が「邪視」の用をなさなくなるからであるとされていることによる]

(出典(Source)紹介の部 74 はここまでとする)

調査対象のうちの極一領域にすぎないながらも、多くの民俗学系の書籍「をも」検討対象としてきた(時間があまりにも限られている中でコンテキストを素早くも捕捉するとの合理的アプローチでありながらも検討対象としてきた)とのこの身にあっても、

(五芒星が「魔除け」として日本で用いられているとのことを越えて)

「[龍宮に引き込まれないための呪(まじ)ない]として日本では五芒星紋様が用いられてきた」

とのことに関する明示的な文献上の根拠、伝承上の根拠について

[古典の具体的表記「そのもの」]

を挙げながら紹介しているとの書籍に出会ったことがない(筆者が把握していないとのところでそのレベルでの論拠につき言及しているとの真つ当な書籍もある可能性もあるが)。

それがゆえ、

「龍宮に引き込まれないための呪いが五芒星紋様によって体現される」

とのことが海女らに伝わっているとされはすれどもそれは口伝・口誦の問題に留まっている、そう、そこから内容さえ後追えば、そういう伝承が残っているとのことが「[記録的事実]であると異論なくも誰もが確認できる」といった文献を名指しできるわけ「ではない」(:これが例えば、江戸期に成立の通用性高き古文献に「龍宮に引き込まれるのを防ぐための五芒星状の呪符」に対する言及が認められるのならば話も違つたろうとのことになろうが、そういう古文献・伝承上の論拠は 一当方が探査する限り— 見当たらない)。

しかしながら、

[関連すると思しきところ]

の古典上の記述、すなわち、

[海女が「龍宮」に向けて潜水した]

との[古典上の記述]までは確と存在しているとの指摘まではなせるようになっている(口伝・口誦の問題として「龍宮に引き込まれないためのもの」ともされるセーマンという五芒星状の魔除けを用いてきた

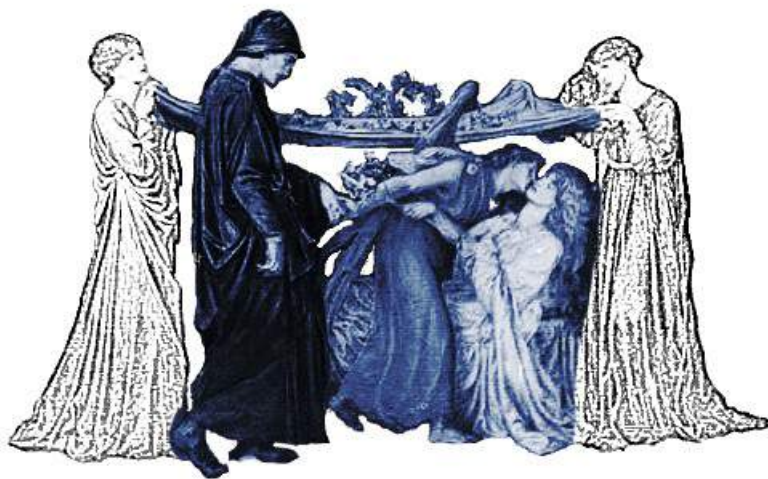
と現在、俗間にて語られている潜水漁業従事者たる海女、彼女らが(五芒星を帯びていたかどうかは別として)[龍宮]に潜水したとの[古典上の記述]までは存在していると指摘できるようになっている。

この身も把握するところとして以下、出典紹介部にて示すような古文献上の記述がなされていることまでは容易に確認可能な記録的事実となっているのである。

出典(Source)紹介の部 75

SOURCE

75



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 75 にあつては

[著名古典『源平盛衰記』(げんぺいじょうすいき/『平家物語』の異本として成立したもので江戸期よりその由来について争いがあったとの古典)にあつても[[海女]が[龍宮]に向けて潜水した]との記述までは認められる]

とのことを紹介する。

その点、オンライン上より「現行」確認可能となっているとの記載を引くが、『源平盛衰記』には次のような記載が含まれている。

(直下、オンライン上の国内サイト(大学人が運営している媒体と見受けられるところの j-texts.com とのサイト)にて掲載されている『源平盛衰記』(国民文庫刊行版として紹介されているとのもの)の特定の下りよりの抜粋をなさせていただくとして)

老松は母也、若松は女也。 勅定の趣を仰含。母子共に海に入て、一日あり

て二人共に浮上る。

若松は子細なしと申す。

我力にては不(レ)叶、怪き子細ある所あり、凡夫の可(レ)入所にはあらず、如法經を書写して身に纏て、以(二)仏神力(一)可(レ)入由申ければ、貴僧を集て、如法經を書写して老松に給ふ。

海人身に經を巻て海に入て、一日一夜不(レ)上。人皆思はく、老松は失たるよと歎ける処に、老松翌日午刻計に上。

判官待得て子細を問。

非(レ)可(二)私申(一)、帝の御前にて可(レ)申と云ければ、さらばとて相具し上洛。

判官奏し申ければ、老松を法住寺(ほふぢゆうじの)御所に被(レ)召、庭上に参じて云、宝劍を尋侍らんが為に、竜宮城と覺しき所へ入、金銀の砂を敷、玉の刻階を渡し、二階(にかい)楼門を構、種々(しゆじゆ)の殿を並たり。

其有様(ありさま)不(レ)似(二)凡夫栖(一)心言難(レ)及。暫惣門にたゞずみて、大日本国(だいにつぽんごく)の帝王の御使と申入侍しかば、紅の袴著たる女房二人出て、何事ぞと尋、宝劍の行へ知召たりやと申入侍しかば、此女房内に入、やゝ在て暫らく相待べしとて又内へ入ぬ、遥在て大地動、氷雨ふり大風吹て天則晴ぬ。

暫ありて先の女来て是へと云。老松庭上にすゝむ。御簾を半にあげたり。庭上より見入侍れば、長さは不(レ)知、臥長二丈(にぢやう)もや有らんと覺る大蛇、劍を口にくはへ、七八歳の小兒を懷、眼は日月の如く、口は朱をさせるが如く、舌は紅袴を打振に似たり。詞を出して云、良日本(につぽん)の御使、帝に可(レ)申、宝劍は必しも日本(につぽん)帝(みかど)の宝に非ず、竜宮城の重宝也。我次郎王子、我蒙(二)不審(一)海中に不(二)安堵(一)、出雲国簸川上に尾頭共に八ある成(二)大蛇(一)、人をのむ事年々なりしに、

素盞烏尊(そさのをのみこと)、憐(二)王者(一)孚(レ)民、彼大蛇を被(レ)失。其後此劍を尊取給(たまひ)て、奉(二)天照太神(てんせうだいじん)(一)、景行天皇(けいかうてんわう)の御宇(ぎよう)に、日本武尊東夷降伏の時、天照太神(てんせうだいじん)より巖宮御使にて、此劍を賜ひて下し給(たまひ)し、胆吹山のすそに、臥長一丈の大蛇と成て此劍をとらんとす。去共尊心猛おはせし上、依(二)勅命(一)下給間、我を恐思事なく、飛越通給(たまひ)しかば力及ず、其後廻(レ)謀とらんとせしか共不(レ)叶して、簸川上の大蛇安德(あんとく)天皇(てんわう)となり、源平の乱を起し竜宮に返取、口に含るは即宝劍なり、懷ける小兒は先帝安德(あんとく)天皇(てんわう)也、平家の入道太政大臣(だいじやうだいじん)より始て、一門人皆此にあり。見よとて傍なる御簾を巻上たれば、法師を上座にすゑて、氣高上藤其数並居給へり、汝に非(レ)可(レ)見、然而身に巻たる如法一乘(いちじよう)の法の貴さに、結縁の為に本の質を不(レ)改して見ゆる也、尽未来際まで、此劍日本(につぽん)に返事は有べからずとて、大蛇内には(はひ)入給(たまひ)ぬと奏し申ければ、法皇を奉(レ)始、月卿(げつけい)雲客(うんかく)皆同成(二)奇特思(一)給(たまひ)にけり。偕こそ三種神器の中、宝劍は失侍りと治定しけれ。

(引用部はここまでとする)

以上、引用なしたところに対して[文系]と呼ばれるような進路選択をなしたうえでほぼ意のままの大学に入学できるだけの古文・漢文知識(込: 上にての引用文に含まれるレ点表記や一・二点表記に見る訓読メソッドに関する知識も含めての知識)を身につけた向きならば勞せずもなせるであろうところの現代語訳をも 一長々としたものになるが一 下に付しておくこととする。

(直下、壇ノ浦の合戦の後、宝剣草薙が海中に没し、法皇(後白河上皇)が草薙の回収が
図った中、海女が回収に召集されたとの下りについての直上『源平盛衰記』引用部に対
するこの身による現代語訳を付すとして)

**(宝剣回収のために招集された海女らのうち)老松オイマツという女の方は母親
となり、若松ワカマツという女はその娘であった。**

勅命の趣旨を言い含められたうえで彼女らは母子共々、壇ノ浦に潜り、一日
を経て、浮上してきた。

若松が言うには「子細なし」とのことであった(註:「子細なし」とは「別状ない」と
訳されるような言いまわしだが、この場合は悪い意味で「どうしようもない」との
ニュアンスともとれる)。

続いて、

**「我らが力では適うところではなく、怪しいとのところはあったものの、普通の人間
が入り込めるようなところではなかった。如法経(法華経別称)を書写して身に
帯び、神仏の加護を受けてのことならば先へと進めるであろう」と言うので、
由緒ある僧らを集め、如法経(註:[法華経]の別称である)を書写しそれを老松に与えた。**

海女(註:引用元の『源平盛衰記』の表記では海人)としての彼女らはその如
法経(法華経)を身にまとって潜水し、一日一夜の間、浮上してこなかった。
人々が老松らは死んでしまったのであろうと嘆いていたところ、老松が翌日の
午後に海中より浮上してきた。

そこで義経(註:この部は原文では[判官]と表記されているが、前段の文脈
上、検非違使として朝廷に仕えていた源義経、頼朝に討伐される前の源義経
が草薙之剣回収作戦に旗下 100 騎を伴って関与しているとの記載が認められ
るので、この場合の[判官]とは[判官鼻肩]の語源としても知られる[検非違使
(判官)としての九郎義経]のことであろうと当然に解せられるようになっている)
が「どうだったのか」と委細を問うた。

すると海女らは

「申し上げることができません、帝の御前でならば申し上げられますが」
と言うので、義経は海女らを伴って上洛した。

義経が用向きを上奏したならば、老松は法住寺(の後白河の)御所に召し出
され、そちら御所庭園にて彼女老松が申し述べたところ、(彼女らは)宝剣を得
るがために[童宮城]と思われるところへ入り込むことになり、そこにて金銀の砂
が敷かれているとのありさま、玉(宝玉)製の渡りが設けられ二階建ての楼門と
種々様々な御殿があったとのありさまのを見出したという。

そのありようはまさしく普通人には形容しがたいこの世のものとは似ても似つ
かぬものであったという。

しばらくの間、そこにての門前でたたずみ、次いで、「大日本国の総攬者たる
帝の使いでやってきた」と言い伝えたらば、紅色の袴を着た女官(女房)らがそ
ちら童宮内部より二人出てきて、「何事か」、と問うてきたので、
「宝剣(註:文脈上、壇ノ浦海戦で海中に没した[草薙の剣]のこと)の行方が知り
たいのです」

と伝えたところ、女官らは宮殿内に入り、ややあって「しばらく待つように」と伝え
に来もし、それからまた宮殿内に入っていった。大地が動くほどにも長き間、氷
雨が降り風が吹き、そして、天は晴れたとの長き間、待つような想いであった
(註:海底の龍宮の中で天候の話をしているようにとれ、妙にも映るとの部だが、
[遥在て大地動、氷雨ふり大風吹て天則晴ぬ]とは時間が長くも経っていること
の修辭的表現と受け取れもする)。

しばらくしてから先の女官がやって来て、「これへ」と言うので、老松らは中庭の中へと進んでいった。
(その先の龍宮の統治者が座する場にて)すだれが半分ほど、上にあげられていた。

庭の方より老松らがそちらを見ると、正確には分からぬが、全長にして二丈(今日で言うところの6メートルか)もあろうことかとは分かる大蛇が口に剣を加えて、七から八歳の小児(註:別の古典内容から判断するにこれは[八歳の竜女]との法華経用語への言及と解される)を懐に抱いてそこに座しており、その眼は日月のように見え、また、口は朱を塗ったようになっており、その舌は紅の袴が動いて揺れるようにゆらゆらと振られていた。

その存在(竜宮主催者との出で立ちで描写される大蛇)が言葉を発して言うところ、
(以下、かなりもっての長口上の記載箇所であるため、他との別を設けるために段下げして表記するとして)

「良き日本よりの使者よ、帝(みかど)へと申すがよい。宝剣(註:文脈上、草薙の剣)は必ずしも日本国の帝の宝物(ほうもつ)ではなく、竜宮城にあっての至宝なのだ。私の次男にあたる王子、それが我が不興を蒙(こうむ)つてのこととし、海中にて安心しての居所を見出せず、出雲の国の簸川(ひかわ)の地にて頭と尾が共に8本ある大蛇と化し、人を呑み込んで殺していたとのこと、多年に渡ってなしていた。そこを素盞烏尊(すさのおのみこと)が土地の王を憐れみ、民を慮つての挙に出たために、その次男坊としての大蛇を失うことになった。その後、素盞烏尊(すさのおのみこと)がその大蛇より剣を取り、天照大神(あまてらすおおかみ)に献上し、その宝剣を景行天皇(註:伝説上の帝で九頭竜を草薙で退治した日本武尊こと[やまとたける]の父でもある)の統治期に日本武尊(やまとたける)が夷(蛮族)の討伐にと東征に出た際に天照が同皇子に授与することになった。授与されての宝剣を[全長1丈(註:3メートル程か)の大蛇]へと変じて(註:元[ヤマタノオロチ]であった存在の親たる竜宮の主が、か)胆吹山の裾野のところで略取しようともした(註:話の筋立て上、[日本各地に伝わる日本武尊の[九頭龍]退治伝承]へのそれと明示せずの言及であるように解される)。

しかし、剣を佩(お)びての日本武尊が心猛々しき者にして、また、勅命を帯びていたとのかたちでもあったために、この我を恐れることもなく、飛び越えて行ってしまつて力が及ばなかった。

後、謀(はかりごと)を再度めぐらし、剣を略取せんとしたがすべてうまくいかなかった。

さらにその後、簸川(ひかわ)にて素盞烏尊に退治された大蛇(註:文脈上、竜宮の主催者の次男で八岐大蛇のこと)は生まれ変わって安徳天皇(註:壇ノ浦で平家一門と共に入水して果てた、平家一門の権力の源泉となっていた幼帝)となり、(騒乱を煽つて)、[源平の合戦]を引き起こし、竜宮に宝剣を取り返した。いま口に咥えているのがまさにその剣であり、ここに抱いている幼児が先の帝、安徳天皇である。平家の入道太政大臣(註:壇ノ浦の合戦の前に没した平清盛のこと)よりはじまつて、その一門も皆、ここにいる。見るがいい」

と述べてその大蛇が簾(すだれ)を全て巻き上げて見せたらば、法師(註:剃髪して仏門に入ったとのスタンスを生前取った平清盛のことであろうと当然に解される)を上座に平家の高貴なる者たち(公達)がそこに居並んでいた。

(大蛇が続けて口を開いて言うには、との文脈にて)

「本来ならば汝(註:老松のこと)は見る事が出来なかつたようなところだが、身につけた如法一乗(註:先述のように[法華経]のこと)の尊さ、および、縁(えにし)がゆえに[ことの本質]を見せた。未来永劫、この剣が日本に返ることはないであろう」

と述べ、大蛇は奥へと入って行った。

そのように(老松が上皇に)上奏したらば、法皇(後白河上皇)をはじめとしたその場に居合わせた公達らは皆、一同、「奇特なることだ」との面持ちであられた。三種の神器のうち、宝剣が失われたとのこと、これにて定まった」

(抽出部に対して筆者がなしたところの補つても現代訳はここまでとする)

以上、[現代訳]を付しつつもの引用元古典『源平盛衰記』内記述に見るように、

[[竜宮] と [海女] はときに結びつく存在となっている]

とのことまでは(口伝・口誦の類に留まらず)著名な古典に見受けられる[文献的事実]の問題として摘示できるようになっている。

(出典(Source)紹介の部 75 はここまでとする)

さて、

[竜宮と海女が古典上にあつて結び付けられている] (『源平盛衰記』)

[竜宮に引き込まれないようにと海女が用いる魔除けがセーマン(五芒星)であるとの言われようがなされている] (現代に伝わる口伝にあつての語られよう)

との両二点がみとめられるようなことがある中で[セーマン(五芒星紋様)]が[竜宮]と色濃くも結び付いていると述べることは — 現在現時点での俗間での言われよう・口伝(に見る風習伝播ありよう)には[近代以後由来の夾雑物]が入りうるとのことが念慮される中でも — [牽強付会の論法](こじつけがましき論法)になるだろうか。いや、ならないだろう。そのように申し述べたい(：現代にて[竜宮に引き込まれないようにするためのものである]と[五芒星紋様]が言及されることがあるとのことからして取り上げるに足りることであると見えもする中、さらにもって — たった一事例のことながらも — 伝承上・文献上の記録とのつながりも見出せるのであるから、牽強付会にはならぬであろうと述べたいのである)。

ここまで書き進めたうゑで申し述べるが、[竜宮]とくれば、

[時間の流れが外の世界より遅くも流れる場]

としてつとに知られている場でもある(浦島伝承)。

そして、

[時間の流れが外の世界より遅くも流れる場]

とのことで述べれば、同じくものが

[ブラックホール(の近傍領域)]

にも当てはまるとのことがある。同じくものがここにて指し示しの対象としている β と振っての段の後半部内容となるわけだが、その出典を下に挙げておくこととする。

出典 (Source) 紹介の部 75-2

SOURCE

75-2



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 75-2 にあつては

[ブラックホール近傍領域では時間の遅れが発生するとされている]

とのことの典拠を挙げておくこととする。

(直下、The Black Hole War: My Battle with Stephen Hawking to Make the World Safe for Quantum Mechanics 『ブラックホール戦争』(早川書房刊行の邦訳書／紐理論大家として知られるレオナルド・サスキンドがスティーブン・ホーキングとのブラックホール理論にまつわる争いをテーマにしてものしたとの趣旨の著作) にあつての 49 ページから 50 ページよりの「再度の」原文引用をなすとして)

「アリスが(ブラックホールの)帰還不能点の方へ漂っていくとき、同じことが彼女の歌声に起こる。最初に、ボブは 262 ヘルツで音を聞く。それから音は 200 ヘルツ、次に 100 ヘルツ、50 ヘルツというふうに変わっていく。帰還不能点に近いところで歌った歌声は、脱出するのに長い時間がかかる。…(中略)…しかし一連の音波がボブに届くのにかかる時間はどんどん長くなるので、アリスに関するすべてのことが遅くなってほとんど止まってしまう。ボブが最後の波を感じと

るには無限の時間がかかる。実際、ボブから見ると、アリスが帰還不能点に達するには、無限の時間がかかるように見える。…(中略)…ボブにとっては、彼が聞く音から判断するとアリスが帰還不能点に達するには無限の時間がかかる。だが、アリスにとっては、まばたきするほどの時間もかからない」

(引用部はここまでとする。この部は**出典(Source)紹介の部 55**にでも引用なししていたところともなる)

以上のように原文引用なししたところに加えて、同じくもの引用元にあつては ——(ここ**出典(Source)紹介の部 75-2**にて本稿でははじめて引用なしところとして)—— 次のような書かれようもがなされている。

(直下、レオナルド・サスキンド著『ブラックホール戦争』にあつての 86 ページよりの原文引用として)

大きなブラックホールはもうひとつの非常に手軽なタイムマシンになるだろう。それにはこのようにする。まず、軌道をまわる宇宙ステーションと、地平線の近くまであなたを吊りおろす長いケーブルが必要だ。ブラックホールに近づきすぎないようにしなければならないし、絶対に地平線を通って落ちないようにしなければならないので、ケーブルはとても頑丈なものにしなければならない。宇宙ステーションにあるウィンチがあなたを下におろし、一定時間経過した後、リールを巻いて上に戻す。たとえば、ケーブルにぶらさがって 1 年過ごすだけで 1000 年後の未来に行きたいとする。重力の加速による不快感は少なくしたい。それは可能かもしれないが、それには私たちの銀河系とほぼ同じくらい大きな地平線を持つブラックホールを見つける必要がある。

(引用部はここまでとする)

直上引用部は

「事象の地平線を「超えずに」ブラックホールの近傍領域に足入れた者がいたと仮定すれば、(事象の地平線を「超えて」ブラックホールに呑まれた者が凍り付くが如くように[時の停止]と[粉碎]を見るとされるのに対して)、[耐えられるぐらいの重力の加速感で時の遅れを体感することになるだろう]との見解が呈されている」

とのものである。

(**出典(Source)紹介の部 75-2**はここまでとする)

上にて

[ブラックホールの近傍領域では時間の流れが(竜宮よろしく)乱れるとされている]

とのことを指し示した。

そのうえで書きもするが、

[[ブラックホール] と [竜宮] の関係]

から多少、逸れるところがあるのであるも、「ほぼ似たようなところ」に関わる場所として、

[([時空間に生じた重力の歪み] として [ブラックホール近縁の存在] ともなる) [ワームホール] と [竜宮] の関係]

について本稿の先立っての段で取り上げてきたとの事前経緯がある。

すなわち、

「[通過可能なワームホール]を構築したうえでそちらワームホールを(ケージなどに入れて)光速でも到達に時間がかかるとの領域にまで搬出すれば、(竜宮に見受けられるそれとまったくもって同様の[時間の遅れ]に関わる場所の)[双子のパラドックス]が具現化する中で[タイムマシン]ができあがるとの物理学者申しようがなされている」

とのことにまつわり同文のことを取り上げてきたとの事前経緯が(本稿には)ある。

本稿の先だつての部にては問題となる箇所より微に入つての原文引用をなしつつ、キップ・ゾーンという物理学者の著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(原著の方は1994年刊行)のそうした伝での内容、

[[通過可能なワームホールを用いてのタイムマシン] に関わる場所で [[双子のパラドックス] = [竜宮関連説話に見ると同様の時間の遅れにまつわるパラドックス] の現出化] に通底することが目立って取り上げられている]

とのことについて解説してきたとの事前経緯があるのである(出典紹介部としては本稿にての **出典** (Source) 紹介の部 28-2 および **出典** (Source) 紹介の部 28-3 が解説なしていたとの部位となる)。

同じくものことにまつわつての [おおよその内容] を下に再掲しておくこととする。

(以降、双子のパラドックスと龍宮伝承、そして、通過可能なワームホールにまつわつての(一部で著名な)思考実験との絡みで本稿にての先行する段にて何を述べていたのかについて振り返つての表記をなす)

(直下、まずもつて[竜宮における「如く」時間の遅れ]を利用する[ワームホール(ブラックホールに近縁のもの)式タイムマシン構築方法]にまつわるキップ・ゾーン著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』解説部 p.456-p.457 の内容の「再度の」原文引用をなすとして)

私は彼女の手を握つたまま …(中略)… ワームホールを通して眺めながら私は当然、彼女がちょうど十二時間後の二〇〇〇年一月一日午後九時頃に帰つたことに同意する。午後九時〇〇分にワームホールを覗いた私に見えるのは、カロリーだけではない。彼女の背後、わが家の前庭、そしてわが家も見ることができる。

…(中略)…

この旅は地球上で測れば、…(中略)… 一〇年もかかる旅である。(これは典型的な「双子のパラドックス」だ。高速度で往復した双子の一人(カロリー)は時間の経過を一二時間と測るが、地球に残つた双子のもう一方(私)は、旅が終わるまで一〇年も待たなくてはならない。

…(中略)…

二〇一〇年一月一日が到来し、カロリーは旅から帰ってきて、前庭に着陸する。私は走り出て彼女を出迎え、予想どおり、彼女が一〇年ではなく一二時間しか年をとっていないのに気づく。彼女は宇宙船の中に座っており、マウスに手を差し入れている。だれかと手を繋いでいるようだ。私は彼女の背後に立って、マウスの中を覗き、彼女が手を握っている相手は一〇年若い私自身で、二〇〇〇年一月一日の私の居間に座っていることに気づく。ワームホールはタイムマシンになっていたのである。

(再度の引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、Google 海外版が現行展開しているオンライン上の書籍内容閲覧サービスよりも確認できるところの原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にあつての該当表記部(原著 p.503 –p.504、[14. WORMHOLES AND TIME MACHINES の章]の表記)を引用すれば次のとおりとなっている: “ Carolee departs at 9:00 A.M. on January 1 2000, as measured by herself, by me, and by everybody else on Earth. Carolee zooms away from Earth at nearly the speed of light for 6 hours as measured by her own time; then she reverses course and zooms back , arriving on the front lawn 12 hours after her departure as measured by her own time. I hold hands with her and watch her through the wormhole throughout the trip, so obviously I agree while looking through the wormhole , that she has returned after just 12 hours , at 9:00 P.M.on 1 January 2000. Looking through the wormhole at 9:00 P.M., I can see not only Carolee; I can also see, behind her, our front lawn and our house. [. . .] Instead, if I had a good enough telescope pointed out the window, I would see Carolee's spaceship flying away from Earth on its outbound journey, a journey that measured on Earth , looking through the external universe, will require 10 years. [This is the standard“twins paradox”; the high-speed“twin”who goes out and comes back (Carolee) measures a time lapse of only 12 hours, while the“twin”who stays behind on Earth (me) must wait 10 years for the trip to be completed.]I then go about my daily routine of life. For day after day, month after month, year after year, I carry on with my life, waiting—until finally, on 1 January 2010 , Carolee returns from her journey and lands on the front lawn. I go out to meet her, and find, as expected, that she has aged just 12 hours, not 10 years. She is sitting there in the spaceship, her hand thrust into the wormhole mouth, holding hands with somebody. I stand behind her, look into the mouth, and see that the person whose hand she holds is myself, 10 years younger, sitting in our living room on 1 January 2000. The wormhole has become a time machine. ” (オンライン上より確認できる原著よりの引用はここまでとしておく)。

上がどうということなのかを「堅い線で」(「ひたすらに原意に忠実たらんとする式で」)要約すると次のようなこととなる。

「ソーンの妻は宇宙船で旅を開始した。そのソーンの妻の主観時間では12時間の間だけ宇宙旅行をして地球に戻ってくるとのことになっているわけだが、彼女のスペースシップは光速近似のスピードで飛んでいる(との設定である)。そのような[光速近似のスピードの存在]から見た時間と地球で我々が体験している時間の間ではずれが生じる(と現代物理学では説明されている)。アインシュタインの特殊相対性理論より導き出せ

る[双子のパラドックス](上にての引用部でも「これは典型的な「双子のパラドックス」だ(This is the standard“twins paradox”)」とそのままたに言及されているもの)と呼称されているような現象が作用するなかで[物理学者キップ・ソーンが地球で10年間過ごしている間にソーンの妻カロリーの光速に近きスピードで動く領域では12時間分の時間しか流れていない]([時間の遅れ]が宇宙船サイドで生じている)とのことになっている。

従って、ソーンの妻カロリーが2000年1月1日午前9時に出発して2010年1月1日午後9時に帰ってきたとのつもりでも地球は20「10」年1月1日になってしまっている。

そうして[12時間のつもり]で[10年経過していた]との地球に帰ってきたカロリー女史(物理学者ソーンの妻)であるが、彼女の手からは[ワームホール]が出発時と同様に発生している(ソーンと彼の妻は当初よりワームホールでリンクされているといった思考実験上での[設定]が採用されている)。その[手より発生しているワームホール]が繋がる先は10年前の世界のソーンの家である。

それがため
[ソーンの妻のワームホール付きロケット]
が2010年に地球に辿り着いたところで
[2001年(地球)と2010年(地球)がワームホールゲート]
で結ばれたことになる。

これにて —そのワームホールが自由に通過可能なものであれば(ここでのソーンの設定上ではワームホールを介して手を繋いでいるようにそうになっている)— タイムマシンが構築されたことになる」

馬鹿げたことを云々しているように見えるかもしれないが、「上は科学関連書籍に見る[まじめな思考実験]にまつわっての物言いである」と強くも述べ、話を続ければ、である。同じくもの話の流れの中にて利用されているとのTwins Paradox[双子のパラドックス]とは次のようなものである。

(直下、和文ウィキペディア[時間の遅れ]項目、そこにての[特殊相対性理論における時間の遅れ]の節にあっての現行記載よりの「再度の」原文引用をなすとして)

特殊相対性理論では、物体が高速で移動するほど、その系における時間の流れが遅くなる。速度の条件は光速なので、光速に近い速さで運動する物体はほとんど時間の進みがないことになる。

…(中略)…

これは、時間と空間を合わせて座標変換をしないと、電磁気学の法則に現れる光速の意味が説明できない、という理論的な要請から導かれたローレンツ変換による帰結である。

…(中略)…

この現象を利用すると、光速に近い宇宙船で宇宙を駆けめぐり、何年後、出発地点に戻ってきたような場合、出発地点にいた人は年を取り、宇宙船にいた人は年を取らないという現象が生じ、宇宙船は未来への一方通行のタイムマシンの役目を果たすことになる(宇宙船から静止系を見ると、静止系は相対的に運動していることになるが、時間の遅れが生じるのは宇宙船側である。詳しくは双子のパラドックスの項を参照のこと)

(引用部はここまでとする)

(続いて直下、和文ウィキペディア[双子のパラドックス]項目、そこにての[双子のパラドックスのストーリー]の節にあっての現行記載よりの「再度の」原文引用をなすとして)

双子のパラドックスのストーリーは次のようになる。双子の兄弟がいて、弟は地球に残り、兄は光速に近い速度で飛ぶことができるロケットに乗って、宇宙の遠くまで旅行したのちに地球に戻ってくるものとする。このとき、弟から見れば兄の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように兄の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、兄の方が弟よりも加齢が進んでいない。一方、運動が相対的であると考えるならば、兄から見れば弟の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように弟の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、弟の方が兄よりも加齢が進んでいない。これは前の結果と逆になっており、パラドックスである。このパラドックスは、双子の兄弟の運動が対称ではないことから解決される。弟は地球(慣性系と仮定してよい)にいるのに対し、ロケットに乗った兄は、出発するときおよび、Uターンするときに加速されるため、少なくとも加速系に一時期いることになる。すなわち、ずっと慣性系にいる弟とは条件が異なるのである。

(引用部はここまでとする)

上にて引用しているところにつき[双子の兄⇒(変換)⇒浦島][双子の弟⇒(変換)⇒浦島が故郷に残してきた関係者ら][ロケット⇒亀(型スペースシップ)]との切り替えをなした「だけ」でそのまま表記しなおすと次のようになる。

(引用部に対して一部単語のみを切り替えたテキストとして)→

[双子のパラドックスのストーリーは次のようになる。[浦島]と[浦島の故郷の関係者ら]がいて、[浦島]は地球に残り、[浦島]は光速に近い速度で飛ぶことができる[亀]に乗って、宇宙の遠くまで旅行したのちに地球に戻ってくるものとする。このとき、[浦島の故郷の関係者ら]から見れば[浦島]の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように[浦島]の時間が遅れるはずである。すなわち、[亀]が地球に戻ってきたときは、[浦島太郎]の方が[浦島の故郷の関係者ら]よりも加齢が進んでいない。一方、運動が相対的であると考えれば、[浦島]から見れば[浦島]の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように[浦島太郎の関係者ら]の時間が遅れるはずである。すなわち、[亀]が地球に戻ってきたときは、[浦島]の方が[浦島]よりも加齢が進んでいない。これは前の結果と逆になっており、パラドックスである。このパラドックスは、[浦島と浦島の関係者ら]の運動が対称ではないことから解決される。浦島太郎の関係者は地球(慣性系と仮定してよい)にいるのに対し、[亀]に乗った[浦島]は、出発するときおよび、Uターンするときに加速されるため、少なくとも加速系に一時期いることになる。すなわち、ずっと慣性系にいる浦島の故郷の関係者らとは条件が異なるのである]

世間一般にての説明のなされようからただ[特定の単語]のみをそのまま切り替えただけで上のように変換できることになるわけである。もって、お分かりいただけると思うが、[双子のパラドックス]とは浦島太郎伝説に非常に親和性が強い科学理論上の

概念となってる。

(ここまでをもってして[双子のパラドックスと龍宮伝承、そして、通過可能なワームホールにまつわっての(一部で著名な)思考実験との絡みで本稿にての先行する段にて何を述べていたのか]についての振り返っての表記を終えることとする)

以上振り返って見たように

[竜宮]

とは[ワームホール(ブラックホール近縁の重力の怪物)を用いてのタイムマシン関連のトピックス][とも]実にもって親和性が強いものとなっているとのことが述べられるようになっている。

「長くもなるも、」の[付記]の部として

直近までの段にあって

「[竜宮 一現行にて世に語られているところでは海女らがそこに引きずり込まれるのを避けるために[五芒星]形状の呪符(セーマンと呼ばれるもの)を用いるとされている領域—]

に関しては

[時間が外側に遅れるとの側面]

にて

[ブラックホール近傍領域]

と結びつくような側面があり、また、同様の側面で

[双子のパラドックス(ブラックホール類似のワームホールに関する先進的トピックと接合するパラドックス)]

と結びつくような側面がある」

とのことを指摘してきた。

以上のことを踏まえてさらに述べれば、

[竜宮]

に関しては

[常夜(とこよ)・常闇(とこやみ;定常的なる闇の領域)の領域]

との側面が伴っているとの申しようもなせ、その伝でも

[常夜(とこよ)・常闇(とこやみ)の領域とも表せようブラックホール]

との近接性を観念できるようになっているとのことがある(『竜宮が[常夜の領域=定常的なる闇の領域だど?そのような話は聞いたことはない』と考える向きもあろうが、典拠は続いての段で示す)。

以上のことにまつわる典拠について「も」ここににての

[脇に逸れての付記の部] (いくつかの出典紹介部を包摂させての長めのものとして設けての付記の部)

にて解説しておきたいと思う。

その点、日本の民俗学の先駆けとしての役割を柳田國男に引き立てられるとのかたちで果たしたことで有名な(そして[私生活にての問題ある行状]および[確たる自身の学統(後裔)をついぞ生み出せず(育てられず)に生涯を閉じた(とされている)との側面]から毀誉褒貶が激しいことでも知られている)折口信夫(シノブ)の手になる、

『国文学の発生 まれびとの意義』(和製プロジェクト・グーテンベルクとでも表すべき青空文庫でもオンライン上に全文公開されている著作権消失著作)

にあつて「も」上のこと ——[竜宮が常闇の領域と通ずる]とのこと—— に通底していると判じられる記述がなされているので同著にてのそちら記述をまづもつて引いておくこととする。

出典(Source)紹介の部 75-3

SOURCE

75-3



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 75-3 にあつては

[民俗学分野の特定著作にあつて「竜宮は常闇(とこやみ)の領域に通ずる」との観点に通底する記述がなされている]

とのことの紹介をなしておくこととする。

(直下、『国文学の発生 まれびとの意義』 ——著作権の切れた著作を無料公開している[青空文庫]のサイトより全文ダウンロード可能となっているとの著作—— より読み仮名を付しての原文引用をなすとして)

常夜往(とこよゆく)と言ふ古事記の用例は、まづ一番古い姿であらう。「とこよ

にも我が往かなくに」とある大伴坂上郎女(おおとのさかのうえのいらつめ)の用法は、本居宣長によれば、黄泉の意となる。此(これ)は少し確かさが足りない。が、とこよを樂土とは見て居ないやうで、舊用語(きゅうようご)語例に近よつて居る。

常夜・常暗(とこやみ)など言ふとこは、永久よりも、恆常(こうじょう)・不變(ふへん)・絶對(ぜったい)などが、元に近い内容である。ゆくは續行(ぞっこう)・不斷絶(ふだんぜつ)などの用語例を持つ語だから、絶對(ぜったい)の闇のあり様で日を経ると言ふことであらう。

而(しか)も、記・紀には、其すぐ後に海の彼方の異郷の生物を意味するとこよの長鳴鳥(ながなきどり)を出して居るから、一つづきの物語にすら、用語例の變化(へんか)した二つの時代を含んでゐることが見られる。

古事記には尚、常世の二つの違つた用例を見せて居る。

海龍の國を常世として、樂土を考へてゐること、浦島子の行つた常世と違(ちがひ)はない。此(これ)は新しい意味である。

たちまもりの橘を求めた國は、實在(じつざい)の色彩濃いながら、やはり常世の國となつて居る。其他異色のあるのは、常陸風土記の常陸自身を常世國だと稱(しょう)した事である。此は理想國の名を、如何にも地方の學者らしく、字面からこじつけ引きよせた一家言であつたのだらう。

ほをりの命と浦島子との場合の常世は、目無筐(まなしかたま)に入ると言ひ、魚族の居る國と傳(つた)へ(記・紀)、海中らしく見えるが、他の場合の常世の意は、すべて海の彼岸にあるらしく傳(つた)へてゐる。つまりは、古代人の空想した國、或は島であつたのだ。たちまもりの場合は、其出自が漢種であり、現實性(げんじつせい)が多い書き方の爲(ため)に、如何にも橘を賣(さい)した國が南方支那の様に見える。けれども、此出石(いずし)人の物語も、一種のりつぷあんゐんくる式の要素を備へてゐて、常世特有の空想の衣がかゝつてゐる。思ふに、古代人の考へた常世は、古くは、海岸の村人の眼には望み見ること出来ぬ程、海を隔てた遙かな國で、村の祖先以來の魂の、皆行き集つてゐる處(ところ)として居たであらう。そこへは船路或は海岸の洞穴から通ふことになつてゐて、死者ばかりが其處へ行くものと考へたらしい。さうしてある時代、ある地方によつては、洞穴の底の風の元の國として、常闇の荒い國と考へもしたらう。風に關係のあるすさのをの命の居る夜見の國でもある。又、ある時代、ある地方には、洞穴で海の底を潜つて出た、彼岸の國土と言ふ風にも考へたらしい。地方によつて違ふか、時代によつて異なるか、其は明らかに言ふことは出来ない。

(引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、昭和初期時点での「いかにも、」での文語調で書かれている上のパートを「補いもしながら」現代語風に内容変換すると、以下のようなになる)

古事記に見ることのできる、

[常夜往(とこよゆく)]

とのパートは[常夜] ——常(つね)なる夜の領域—— という語の使用で[一番古い例]とならう。

同じくものことについて(江戸期国文学者の)本居宣長の解説するところでは

「[とこよ]にも我が往かなくに」

という大伴坂上郎女(おおとのさかのうえのいらつめ、万葉集にて

の代表的な女流歌人の語句使用例に関しては

[[黄泉]のことを指してのもの]

とのことになるとされている。

といった本居宣長の見方に関しては確度の面で幾分欠けるところがあるが、そうしたところは

[とこよ]

を[楽園・楽土]とは見ていないとの筋ありの古い用語法に近いもののように見える(本稿にての註記:ここは[楽園]としての[常世]ではなく闇の領域としての[常夜]との意味合いに近いもののように見える、とのことが述べられている部となる)。

[常夜・常闇(とこやみ)]

といった語句の用い方については

[永久・永遠性]

といったところよりも

[恒常性・不変性・絶対性]

といったところの方が元来からしてのその語感に近いといえるものと言える。

しかも、日本書紀・古事記に関しては

[常夜往(とこよゆく)]

との記載がなされているとのその後ろの部分([常世]ではなく[常夜]の記載がなされているとのその後のパート)にて

[海の彼方の[異郷]の生物]

としての

[長鳴鳥(ながなきどり)]

のこをもち出しているのであるから、そのために、[同じくもの一続きの物語]であっても古事記にての常世には

[用語例が変化しつつあるとの二つの時代]

の感覚が反映されているように見える(本稿にての註記:長鳴鳥(ながなきどり)というものが異郷の生物であるとされることの由来についてはすぐ下の段にてどういうことか解説をなすが、ここで折口信夫は「長鳴鳥(ながなきどり)という異郷の象徴と結びつけられている側面では[とこよ]は[黄泉]ではなく[異郷]的ニュアンスを伴っていると解される」と述べている、すなわち、「[夜の国たる黄泉=とこよ]と[異郷としてのとこよ]が古事記にて併存している」との趣旨のことを述べているのである——註記はここまでとしておく——)。

『古事記』にあつては[常世]に(時代を異にする)二つの違った用例を見出せる。

海童の国を[常世]として楽園・楽土の類いを考えていることについては浦島子——(註:室町時代以前の浦島伝承での浦島太郎の呼称)——の伝承と同じである。こちらの方は[新しい時代の例]と言えるであろう。

田道間守(本稿にての註記:たじまのもり/帝の命を受けて常世の国に渡り[非時香菓(ときじくのこのみ. 橘とされる)]を持ち帰った者と記紀神話が語る存在)が[橘](本稿にての註:古事記に登場する[たちばな]は紀州蜜柑のようなものであるという説「も」ある)を求めて渡ったとの国も実在性が強いものでありながら、やはり[常世の国]と表されている。『常陸国風土記』で当の[常陸]をして[常世(つねにそうあつての世界)の国]としたといった類のことである。これは[理想的な土地]の名をいかにも地方の学識者がやるように字面で

もってかこつけての申しようであったのであろう。

ほおりのみこと(訳注:漢字表記は火遠理命. 記紀神話に登場する山幸彦の別名で神武の祖父との設定が付された存在であり、海神の娘・豊玉姫と婚儀を結び三年を海の宮殿で過ごしたとの設定が付されている存在でもある)や浦島子(訳注:先述のように浦島太郎の旧呼称)の伝承に見る[常世]は魚族の住まう国とされ、海中の国のようにも見えるが、海の彼方の国であったと伝えられている。つまりは古代人の空想した国ないし島だったわけである。田道間守(たじまのもり)の場合はその出自が漢人(中国の民)であったこと、また、現実性が感じられるとの記載がなされているため、田道間守が目指した方向は中国大陸南方の部とも見える。が、出石(田道間守伝承を伝える兵庫県豊岡界限)の者の伝える伝承に関してもある種のリップ・ヴァン・ビュルク(訳注:折口著作表記では[りつぷあんみんくる]。リップ・ヴァン・ビュルクとはアメリカにて19世紀にワシントン・アーヴィングが発表した短編小説に登場する木こりの名前でそちら木こりが山の中で遊戯に興じていたならば、故郷で数十年が経っていたとの筋立てで有名な存在となっている——その筋立て、中国の『述異記』に認められる木こりが時から取り残されたとの[爛柯(らんか)の故事]に近い内容のものだが、アメリカ版[浦島太郎]と表されること多き物語ともなる——)的なる側面があり、[常世]の話に通ずる空想があった側面が透けて見える。思うに、古代人の考えた常世とは古くは[遙か海の彼方の異郷の国土]であり、また、[祖先らの魂が最後にはそこに行き着く場所]とも見られていたのだろう。そちら常世へは船で、ないしは、洞窟から行けると考えられていたと見え、死者のみがそこへの道を歩むと考えていたらしい。そのようにある時代、ある地域によっては洞窟の底にある(洞窟から吹きすさぶ)風が吹いていく元となる国、常に闇なる荒れた国として考えもしたのだろう。風に関係があるとのスサノオノミコト(訳注:スサノオについては暴風雨の神との言い伝えの伝がある)が控えている[夜見(よみ)の国]でもあるということである。同様にある時代、ある地域によっては洞窟経由で海の底に潜った先にある彼岸の国土といったように考えられていたようにも見える。地方によってどう違うのか、時代によってどう違うのか、そちらは明確な区別はできない。

(これにて『国文学の発生 まれびとの意義』(昭和初期文語調の著作)を現代語訳しての部を終える)

上に現代語訳を付したうえでもなおもって

「(明治大正はおろか)昭和さえ遠くなりにはけり」

の昨今にあっては分かりづらいところもあろうと見るから上に見る折口信夫の申しようについてその要旨を「さらに」下に記載しておく。

「古事記には[常夜]と[常世]の二つの[とこよ]が登場しており、それは[時代が違っての認識を受けてのこと]であらう。

前者は本居宣長が江戸期にて「黄泉の領域」と表したもの、万葉集の[とこよいく]を古事記風の[常夜往く]と解するようなところに認められるとのもので、そ

の意味するところは楽園・楽土といった語感のものではなく、より古い用法としての[常なる夜の領域]との意味合い、不変・絶対との語感が強いとの[黄泉]のことを指している節があるものである。

他面、[常夜往く]との常なる夜の領域について持ち出している古事記ではそうした[常夜(常なる暗闇の領域)]の後の段にあつて[異郷の生物]のことを指す[長鳴鳥(ながなきどり)]のことなどをもち出しており、そのうえでさらに(常「夜」ならぬ)[常「世」]との字を充てているので、加えて、新しい時代の[常世]([常夜]に対する新しい異境としての[とこよ])との語感、浦島が異郷を想起させる海底の童宮に向かったとの楽園・楽土のイメージでの常世が出てきていることになりましょう。それについては田道間守(たじまのもり)が[橘]を探し求めたとの[外地]としての楽土としての常世でもあろう。

火遠理命ほおりのみことや浦島に関わる常世は海中の国とも伝わる一方で異郷・外地としての色彩が強いものである。他面、田道間守の伝承については田道間守の渡来人としての属人的特性もあつて中国大陸を指しているように見えよもつて現実的なかたちの外地であるように見える。ただ、そちらも(アメリカの)リップ・ヴァン・ビュル的な側面が伴っており、常世にまつわる空想的な側面がつきまとっているものではある。

思うに、古代人は[常世]をして「海の彼方の遙か異郷の国にして先祖の魂が還る場所」とみなしていたようにもとれ、そこに行くには船あるいは洞窟経由であつたとされているようである。常世は「洞窟の先にある常闇(とこやみ)の夜の国(夜見の国)」であり「彼岸の国」であつたのもあろうが、地域・時代毎にそうした定義がいかようになされていたかはこれと判ずることができない(ここまでを[さらにもつて噛み砕いても要約表記部]とする)

(出典(Source)紹介の部 75-3 はここまでとする)

上にて意味合いを解説したようなパートを含む折口信夫『国文学の発生 まれびとの意義』との書にあつては

[[長鳴鳥(ながなきどり)]をもち出し、そのうえでさらに(常夜ならぬ)[常世]との言葉を持ち出しているから古人の[とこよ]にまつわつての理解は[(亡者が行き着く)絶対性・不変性体現しての常闇の領域]であるのと同時に[理想郷としての外地]との二面性がある]

との趣旨の記載がなされているわけだが、—(脇に逸れての付記の部とは言えども)過度に細々とした話を延々続けるようではあるが— [同じくもの箇所]は続いて挙げるような

[[『古事記』記載]

が現実に存在していることを念頭に当該著作『国文学の発生 まれびとの意義』著者たる民俗学者(折口信夫)がこれまた古典に通じた識者(明治生まれの訓詁学にも通じていようとの識者)ともなろうそういう著作を読みもせんとしてきた往時の読み手らを想定して書き記していると判断できるようになっているものでもある。

出典(Source)紹介の部 75-3(2)

SOURCE

75-3(2)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部75-3(2)にあつては、(細々としたことに拘っているようにとらえられるかもしれないが)

[[常世]と「常夜」との語は古典・古事記それもので接合するものである(近代民俗学者の弁だけによるところだけではなく元来からして接合するものである)]

とのことを紹介しておくこととする。

(直下、アマテラスがスサノオの狼藉に苦しみ岩戸に引きこもったとの部に関わるところ、オンライン上でも容易に特定できる——著作権の切れた著作を無料公開している青空文庫のサイトより全文ダウンロード可能となっているとの著作——ところの『古事記』(角川書店版)よりの抜粋をなすとして)

[かれここに天照らす大御神見み畏かしこみて、天の石屋戸(いはやど)を開きてさし隠(こも)りましき。ここに高天の原(たかまのはら)皆暗く、葦原の中つ國(あしはらのなかつくに)悉に闇し。「これに困りて、常夜(とこよ)往く」。

ここに萬(よろづ)の神の聲(おとなひ)は、さ蠅(ばえ)なす満ち、萬(よろず)の妖(わざはひ)悉に發(おこ)りき。ここを以ちて八百萬の神、天の安の河原に神集(かむつどひ)集(つどひ)て、高御産巢日(たかみむすび)の神の子思金(おもひがね)の神に思はしめて、「常世の長鳴(ながなき)鳥を集(つど)へて鳴かしめて」、天の安の河の河上の天の堅石(かたしは)を取り(以下略)]

(『古事記』よりの引用部はここまでとする)

上はスサノオミコトがアマテラスのところへ皮を剥いだ馬を投げつけるなどの悪逆非道の限りを尽くし、

太陽神アマテラスが岩戸に引きこもり、天上界・高天原(タカマガハラ)が闇に包まれ、また、地上界の葦原の中つ国もまた闇に包まれ、まさしくも世は[常夜]の状況に陥った、とのことが述べられているとの部位となり、また、八百万の神々が集まり、対策の一環として

[「(異郷のか)常世」の長鳴鳥(ながなきどり)を集めて鳴かせた]

といったことを実行したとのことが記載されているとの部位である。

といったパートに[常世]と[常夜]の二語が登場している——[葦原の中つ國(あしはらのなかつくに)悉に闇し。「これに因りて、常夜(とこよ)往く」]との部位と[高御産巢日(たかみむすび)の神の子思金(おもひがね)の神に思はしめて、「常世の長鳴(ながなき)鳥を集(つど)へて鳴かしめて」]との部位がそうである——とのことが柳田國男の高弟であったとのことでも知られる折口信夫の物言いの背景にあるところであると自然に解されるようになっている(古典に対して多少の知識があればそのように解されるようになっている)。

出典(Source)紹介の部 75-3(2)はここまでとする

さて、仮に[常世](『古事記』に具現化しての[往時にあつて新しい語法を受けての表記]とされる書かれよう)に[常夜](『古事記』に具現化しての[往時にあつて新しい語法を受けての表記]とされる書かれよう)としての意味を残置させて用い続ける力学があればどうか。

となれば、日本の民俗学分野の大家であったとの折口信夫の申しようとは幾分異なるが、

「[竜宮](折口信夫が[新しい意味での常世の領域=海外異郷の領域]に近いと述べている[海竜の支配する海底の領域]となる)はまた[常夜](不変なる常闇の世界)としての領域「とも」親和性が強い」

とのことになると、実際にそういう解釈が出てくる余地が大いにある。

以上言い様に関して下の記述「をも」ご覧いただいて飛躍や無理があるのか、判じていただきたい次第でもある。

[竜宮]とは古典字面そのものからして[常世]との言葉と結びつくようになっているとの領域である。

その点、本稿の先の段にて取り上げた著作、

『浦島子伝』(一九八一年に現代思潮社より刊行／著者は重松明久元広島大学教授(物故者))、

にてはその p.120 より「再度の」原文引用をなすとして次のような記載がなされている。

(直下、本稿にての**出典(Source)紹介の部 29**でなしたところの『浦島子伝』(現代思潮社)p.120 よりの再度の引用をなすとして)

『風土記』系と『万葉集』系のうち、何れをこの伝説の本源的な型と考えるべきかについて、従来対蹠(たいしよ)的な見解が見られる。まず『万葉集』系に軍配を上げられるのは、佐々木信綱氏である。佐々木氏は『万葉集』の長歌が、浦島伝説のなかで最も原始的かつ本源的な形をもつとする。その理由として、「日本紀も風土記も、ともに浦島が亀を得、亀が神女と化したとあるが、これは長歌にはない。両書とも女を蓬菜の神女とした。これは言ふまでもなく志那思想の影響で、長歌では単にわたつみの神の女となつてゐる。而してまた、蓬菜といふ如き思想は長歌には見えないで、単にとこ世、即

ち遠い国なる海底の宮となつてゐる(以下略)」

(以上、再度の引用部とする)

上の再引用部に見るように、「原初の」浦島伝承(『丹後国風土記』などに見るそれ)では浦島が向かった先は

[蓬莱(ほうらい)]

であり、また、

[とこ世]

であると言及されている([両書とも女を蓬莱の神女とした。これは言ふまでもなく志那思想の影響で、長歌では単にわたつみの神の女となつてゐる。而してまた、蓬莱といふ如き思想は長歌には見えないで、単にとこ世、即ち遠い国なる海底の宮となつてゐる]とのパートがそうしたことを述べているところとなる)

原初、浦島が向かった先が目立って竜宮とは表されず[蓬莱(ほうらい／不死の仙境)]ないし[とこ世]とされているのだから、後にて目立って[竜宮]とされるに至った同じくも場が[蓬莱(ほうらい／不死の仙境)][とこ世]と結びつくことと述べることに何の無理も飛躍もないというわけである。

そのような[竜宮]=[常世][蓬莱]との側面がある点について常世との側面に着目すれば、である。原初、記紀神話(日本書紀と古事記)にあつての古事記にあつて[とこよ]が[常世]であるのと同時に[常夜]であつたと字面として記載されているとこのことがある(上にての[出典\(Source\)紹介の部 75-3\(2\)](#)で原典引用なしたとおりである)、また、そちら[常「夜」]が[夜見(よみ)の国]としての[常闇(とこやみ)の領域]とのニュアンス強きものであつたとされる(折口信夫も黄泉の国たる常夜の国に[洞窟]ないし[洞窟および海底]にて至るとの見方があつたとまでは書いている)とのことから[竜宮]が[常闇の領域]たる[とこよ]と接合しうるものであると述べることにまた無理はないというわけである——折口信夫はそこで[竜宮](=蓬莱・常世)は海外の異郷的ニュアンスが強いものであると強調しているわけだが、筆者はそうした[場合分け]をなす必要はないと見ている——。

以上、ここまでにて細々と書いてきたことから、

[竜宮=常世⇒常夜⇒常闇の領域]

と申し述べるのだが、先程来より問題視していることとして

[竜宮は[時空間が歪んだ領域としての性質]をも伴っている]

とのことがある。

まとめれば、

[竜宮とは[常闇(とこやみ)の領域に(訓詁学的見地から)親和性強き領域]と[時空間が歪んだ領域]との融合が想起させられる場である]

とのことである(:[属人的心証の押し付け]といったところは「ない」と申し述べたくもあることである。竜宮が[時間が歪んだ領域]であるとされるのは伝承にそのように語り継がれているところとなり、[常夜]と併存を見てきた[常世]と竜宮が歴年結びつけられてきただけの文献的事実「も」またある、そういった事実に基づいての自然なる解釈論をここでは述べているにすぎない)。

そして、それは

【ブラックホールの特質】([常闇]の[時空間が歪んだ]世界)

の特質を語ることに近似している(さらに述べれば、竜宮が[重力作用が存在に強くも及ぶとの水圧高き場]であるとのことも筆者としては想起している)。

何が述べたいか分かるであろう。

無論、そういうことを

「それ単体だけで云々する」

だけでは非本質的な話をこととする[神秘主義者](筆者などは近付いてきたらば塩を撒きたいと考えているような種別の[現実を望ましい方向で変化・回転させるようなことを絶対にやりはしなかり]との種別の人種、本当に賢明なる者らの世界(があれば、だが)では軽侮の対象にしかならぬとの質的に狂った人種)やりようとなんら変わるまい。

だから書いておくが、本稿筆者が[浦島伝承]のような類のものまでをくくだ延々とここ本段にて問題視しているのは

「そうした伝承(浦島伝承)と関係があるところで「極めて不可解に」犯罪予告がなされているとのことすらもがあるというのがこの世界であり、その「極めて不可解に」なされている犯罪予告がまたブラックホール生成問題とも接合している」

とのことに関する「十分な」情報——いいだろうか、それは「属人的主観などとは無縁なるものである」との典拠を入念に指し示しているところの[情報]である——を捕捉しているとのことがあるからである。

同じくものこと、そう、浦島伝承と接合することが[ブラックホールと接合する奇怪なる予見的やりよう]と接合するようになっている(なってしまう)とのことが

【「時空間が歪んだ常闇の領域と親和性が強くなっている」竜宮にまつわる浦島伝承」と
[「時空間が歪んだ常闇の領域そのものである」ブラックホール]の関係について論じているとのここでの話が [こじつけ] で済まされないとの論拠】

となるのだが、につき、疑わしきにおかれては本稿にあつての以下のとおりの先掲なしてきたところの内容をきちんと把握いただきたい次第である(と強くも申し述べたい)。

[911の事件が起こることを[双子のパラドックス]と結びつくセクションで多重的に前言しているが如くの著作として——そちらが[通過可能なワームホール]をタイムマシンとして言及しているとの著作ともなるのだが——BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(原著の方は1994年刊行、邦訳版は白揚社より1997年刊行)が存在している] (:本稿にての**出典(Source)紹介の部28**から**出典(Source)紹介の部33-2**を包摂する段にて『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作が[「双子のパラドックス(1「911」年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用] / [91101(2001年9月11日を指し示す数)との郵便番号ではじまる地を時間軸上の始点に置いてのタイムワープにまつわる解説や同じくもの地で疾走させた爆竹付き自動車の爆竹順次爆発にまつわる思考実験による[時間の相対性]にまつわる説明の付与] / [2000年9月11日⇒2001年9月11日と通ずる日付け表記の使用] / [他の関連書籍に見るブラックホール⇔グラウンド・ゼロと

の対応付け]といった複合的要素を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで同時に具現化させ——個人の主観など問題にならぬ文献的事実の問題として同時に具現化させ——、もって、[双子の塔が崩された911の事件]の前言と解されることをなしているのかについて詳述なしているのでそちらのほうを(筆者の主観など問題にならぬ客観情報にまつわるところとして)確認いただきたい次第ではある)

[意味論的に[双子のパラドックス]が[浦島伝承]と接合するとの指摘がなせるようになっている] (:直近にでも振り返ったところだが、本稿にての**出典 (Source) 紹介の部 28-2**から**出典 (Source) 紹介の部 28-3**を包摂する解説部にて言及なしはじめていたことである)

[[双子の塔(ツインタワー)倒壊の予言]を[上階に穴が開き、片方のタワーが崩れるとのツインタワー]を登場させることで1993年時点でなしているとの映画作品があり、そちら「一見するかぎりは、」もの荒唐無稽映画作品たる『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』は[(本稿にて先述の論稿)キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』がそれについて取り扱っているワームホール(のようなもの)と接合するような作品]にして[映画原作の「亀」の悪役から変じての[恐「竜」人]を悪役とする作品]となっている] (: **出典 (Source) 紹介の部 27**を包摂する部位にて論じていることである)

[先の911の事件の前言をなしている、また、ワームホールといったものと意味論的に通じているとの按配の「一見するかぎりは、」もの荒唐無稽映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』が[亀から転じての恐竜を悪役とする作品]であることは浦島伝承、[双子のパラドックス]との近似性を有しているとのそちら浦島伝承が[「亀」の背に乗って海底の「竜」宮に行く男の物語]であることとのつながりを想起させもする] (:筆者としてこうした話が額面通りの[馬鹿げたもの]で済めばどれほどよいか、と考えてもいる中で敢えてもこうした話をおおまじめになしている)

上のことらが「すべて無理なき申しようである」とはきとした論拠に基づき指し示せるようになっている(実に残念だが、すべてそのように指し示せるように「なっている」とのこと、[確認]いただければ、何故、筆者が

[竜宮とブラックホールの結びつき]

などについてここ付記の部 (**出典 (Source) 紹介の部 75-3** および **出典 (Source) 紹介の部 75-3(2)**)との出典紹介部を内包させての付記の部) にあって縷々(るる)細々延々と問題視なしてきたのか、一面にてでもご理解いただけることか、とは思う。

長くもなつての [付記] の部はここまでとしておく

補つてももの表記が実にもって長くもなりもしたが、ここまででもってして、

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとのことがある。それは海女による[セーマン・ドーマン]と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用は[竜宮]に引き込まれないための呪(まじな)いであるとの物言いがなされてもいる。さて、伝承に見る[竜宮]とはどういう場か。[時空間の乱れが発生した場]([外側に対して時間の進みが遅い場])とされる場である。他面、重力の化け物、ブラックホールおよびその近傍領域も[時間の乱れ]が問題となるものである。

とのことについての指し示しを終えることにする。

さて、本稿ではここに至るまでにて α (アルファ)1 から $\alpha 8$ 、そして β と振ってのことら、すなわち、以下のことらが[論拠を伴って述べられること]となっていることを(脇に逸れての記載も多くもなってしまった中で)入念に指し示してきた。

α . (金星にまつわる会合周期にあつて具現化するとの指摘もなされてきた)[五芒星相似形]を[ブラックホール絡みの話]と接合させるような奇怪なることらがある。すなわち、次のようなことら($\alpha 1$ から $\alpha 8$)がある。

$\alpha 1$. 地球と金星と太陽の内合(インフェリアー・コンジャンクション)時にあつての天体座標を結んで出来上がるとのことがよくも取り上げられる(直近先述)との[五芒星]は[五角形]と結びつく図形でもある。[(ほぼ正確な)[五芒星]が描写される局面]というのは[(ほぼ正確な)[正五角形]に近しきものが内にて形成される局面]であるとも述べられる。どうか。[(正確な)五芒星]というものは[正五角形]に内接される図形として描けるものであり、[正確な五芒星の各点]を構成する五点というのが正五角形の各点にそのままに対応することになるとのことがあるのである。

$\alpha 2$. 正五角形、英語に直せば、[レギュラー・ペンタゴン]との特質を持つのがアメリカの国防総省の本部庁舎である。そのペンタゴンの広場は先の 911 の事件の起こる前から[ワールド・トレード・センターの跡地]がそう述べられるようになったのと同じ言葉で呼び慣わされていた、[グラウンド・ゼロ]との言葉でもって呼び慣わされていた。

$\alpha 3$. グラウンド・ゼロという言葉は 911 の事件が発生する前からペンタゴンの広場と歴史的に結びつけられてきたとの沿革がある(上の $\alpha 2$ にて言及)のだが、そちらグラウンド・ゼロという言葉、かの 911 の事件が起こる「前」から「使用局面が際立って限られていた特殊用語」として存在していた同語を[ブラックホール]と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が存在しており、その書籍、「不可解極まりない 911 の予見的言及とも関わる」とのことを本稿の先だつての段で先述なしてきたとの書籍でもある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea(邦題)『異端の数ゼロ』となる。同著『異端の数ゼロ』序盤部にては[五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性]のことが[最小の単位(無限小)に向かう力学]を指し示すようなものとして取り上げられているとのことがあるのである。さて、そのように問題となる — 911 の異様な先覚的言及とも関わるとの式で問題となる — 書籍で取り上げられている
[五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性]

にて「も」表象される

[最小の単位(無限小)に向かう力学]

は言い換えれば、[原子核の領域に向かう力学]、さらに述べれば、[原子核を構成する陽子や中性子の領域、そして、陽子を複合して構成するクォークのようなより極微の素粒子の世界に向かう力学]のことを想起させるものでもある。

何故か。

原子のなかで原子核の占める割合はおそらく小さい、そのような原子核を構成するのが中性子や陽子であるといったかたちで(小さきことをひたすらに突き詰めていった際の)極小の世界というものは展開しているからである。[五角形(ペンタゴン)および五芒星の両者の図形的特性]のことを知っていれば、自然に想起されるのが「最も小さな極小の世界へ向けての力学」であり、それは換言すれば、[素粒子物理学などが領分とする極小の世界へ向けての力学]であると言い換えられるようなところがあるのである。

そして、そうした限りなくものゼロ・スケールに向かって展開する極微の世界の領域の研究(たとえばヒッグス粒子や超対称性粒子など命名されてのものを発見に血道をあげるとの「研究」)を声高に唱道、[原子核を壊す中での膨大なエネルギー](と述べても極微領域に集中しているからこそその膨大なエネルギー)で「ブラックホール」さえもが生成される可能性が取り沙汰されているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まったの LHC 実験であると言われている。

$\alpha 4$. ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』との書籍は 911 の事件が起こる「前」から特異な言葉であるとのグラウンド・ゼロという言葉がブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍、かつもって、不可解なる 911 の予見的言及とも関わっているとの書籍でもある(← $\alpha 3$ で言及したことである)。

そして、同著『異端の数ゼロ』は[五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性]と結びつくことに言及しているとの書籍でもある(← $\alpha 1$ および $\alpha 3$ にての出典にまつわることもある)。

そうした書籍で扱われる

[ゼロの世界][極小の世界]

に近しきところで(原子に比してその比率が恐ろしく小さいとの極小の存在たる)[原子核]を破壊しようとのことをなし、そこにて発生する膨大なエネルギーからブラックホールを生成しようとのところにまで至ったのが LHC 実験であると「される」(← $\alpha 3$ にて言及のことでもある)のだが、他面、[911 の事件]では何が起こったのか。

[[正五角形]との形状を呈するとのペンタゴンが崩された]

とのことが起こっている(← $\alpha 2$ で合衆国国防総省庁舎たるペンタゴンが(正確な五芒星と無限に続く相互内接外接関係を呈するとの)[正五角形]であることを問題視している)。

以上のことより次の関係性が想起されもする。

[現実世界で 911 の事件が起こる「前」からアメリカ国防総省本部庁舎たるペンタゴン(正五角形)の広場と結びつけられてきたグラウンド・ゼロという特殊な言葉(← $\alpha 2$)] ⇔ [911 の事件が起こる前から「グラウンド・ゼロ」との特殊な言葉とセットとなっていた現実世界でのペンタゴン([正五角形]状の米国国防総省庁舎)の 911 にあつての部分崩壊] ⇔ [正五角形(合衆国国防総省庁舎ペンタゴンとの同一形状)の(911 にての)部分崩壊($\alpha 3$)] ⇔ [911 の事件が起こる「前」から特殊用語として存在していた「グラウンド・ゼロ」という言葉を「ブラックホール」と関係するかたちでなぜもってしてなのか用いているとの書籍であり(そして、そちら著作、911 の不可解なる予見事物とも通ずるようになっている書籍との意味でも際立っての著作ともなり) また、同時に、五芒星と五角形(ペンタゴン)の間の無限に続く相互内接・外接関係によって表象されもする極小の世界へ向かう力学に言及している著作「でも」ある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』という著作の内容] ⇔ [無限小に至る方向性での中での破壊挙動、原子核を壊す中での膨大

なエネルギー発現状況でもって「ブラックホール」を作り出しうると言われるに至っている LHC 実験を想起(α3)。

α5. [グラウンド・ゼロ]という言葉 —(本来、[広島・長崎の爆心地]を指すべくも考案された特別な言葉であり、また、冷戦期、核戦争の標的たるところと結びつけられるに至った言葉である)— と[911]の事件の発生前から結びつけられていた[ペンタゴン](アメリカ国防総省本庁舎)というのはレズリー・グローヴズという男(往時、米国陸軍工兵隊大佐)を責任者にして1941年「9月11日に」建設が開始されたとの建物である。そちらペンタゴンの建設計画を指揮していたレズリー・グローヴズという男が「ペンタゴン建造中に」大佐から准将に昇進、主導することになったのが「マンハッタン計画」となっており、同「マンハッタン計画」で実現・現出を見たのが「原子爆弾」と「広島・長崎への原子爆弾の投下」(「グラウンド・ゼロ」との言葉がはじめて用いられるようになった爆心地を現出させた挙動との意味合いで本稿の先の段でも取り上げていた原爆投下)となる。そこに見る「原子爆弾」というのは「極小領域たる原子核のレベルでの崩壊現象、[核分裂反応]によって実現を見た兵器]でもある —根拠を入念に示さんとするものとして作成しているとの本稿スタンスに則り、無論、以上のようなことが述べられる確たる論拠もこれより「網羅的に」紹介していく — (:1941年9月11日から建設開始(着工)を見ていた[ペンタゴン]の建設計画を指揮していた男レズリー・グローヴズが[マンハッタン計画]の責任者でもあったわけであるが、[マンハッタン計画]というのはそも、[極小の領域、原子核のレベルでの崩壊現象が原子爆弾を実現ならしめること]が着想されて開始された計画である。[原子核レベルでの崩壊現象を利用しての核兵器開発]と「ペンタゴン」が結びつく、そう、「五芒星形と五角形(ペンタゴン)が無限に相互に内接・外接しあいながら無限小へ至る方向(原子核や素粒子の世界へ至る方向)を指し示すもの」であることを想起させるように結びつくとのことが歴史的沿革として存在していることが問題となる)。

α6. 金星の内合ポイントにてその近似物が具現化すると五芒星は史的に見て「退魔の象徴」とされてきたとの経緯があるものである。さて、その「退魔の象徴としての五芒星」と結びつくような「退魔の象徴物としてのペンタゴン(アメリカ国防総省本庁舎)」が爆破されて「異次元から」干渉する外側の銀河由来の妖怪が解放されるとの「荒唐無稽小説」が世に出ている。それが本稿の先の段で「911の「奇怪なる」予見的言及をなしている」との要素を同作が多重的に帯びていることにつき仔細に解説してきた70年代欧米でヒットを見たとの小説作品、『ジ・イルミナタス・トリロジー』である。につき、「退魔の象徴としての五芒星と結びつくが如き退魔の象徴としてのペンタゴンの崩壊、および、911の事件の発生(マンハッタンとペンタゴンが同時攻撃されたとの事件)を前言しているが如くの奇怪なる文物」などとのものより想起されるのは —繰り返しになるも— 次のようなこととなる。⇒〔直近にて言及の〕書籍『異端の数ゼロ』に特性として認められるとの「五角形(ペンタゴン)と五芒星の内接関係を無限小に至る機序として呈示するとのやりよう」・「グラウンド・ゼロという言葉が911の事件が発生する前からブラックホールと結び付けているとのやりよう」・「不可解なる911の予見的言及とも関わるとの側面」] ↔ (関係性の想起) ↔ [ペンタゴン(1941年9月11日に建造開始)の建設計画を主導した軍人が同様に主導して「原爆」と「グラウンド・ゼロ」を具現化させることになった「無限小に至る力学(五角形と五芒星が相互に無限に内接・外接されるかたちで表象される力学)の過程での原子核崩壊作用」を利用しての「マンハッタン計画」に見るありよう]。

α7. 会合周期(具体的に述べれば、8年単位で現出する5回の地球との周期的内合関係)でもって「五芒星」を描くとされる存在が金星となるとのことを先述した。また、同文に

金星が悪魔の王ルシファーと欧州にて歴史的に結びつけられてきた星であることも先述した。さて、歴史的に惑星金星と結び付けられてきたとの悪魔の王ルシファーとのつながりで述べれば、ダンテ『地獄篇』にもミルトン『失樂園』にも「ルシファーと結びついた罪の領域」にあって「今日的な観点で見てのブラックホールの近似物」が多重的に具現化していると申し述べられるようになっていくこと、解説をなしてきたのが本稿である。

α8. 「五芒星」は「黄金比」と際立って結びつく図形でもある。そこに見る「黄金比」と「ブラックホール」が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある。

(上の **α1** から **α8** の流れに加えてのこととして)

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとある。それは海女による「セーマン・ドーマン」と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用は「童宮」に引き込まれないための呪(まじな)いであるとの物言いがなされてもいる。さて、伝承に見る「童宮」とはどういう場か。

【時空間の乱れが発生した場】 (【外側に対して時間の進みが遅い場】)

とされる場である。他面、重力の化け物、ブラックホールおよびその近傍領域も**【時間の乱れ】**が問題となるものである。以上のことは単体で述べれば、「考えすぎ」の謗(そしり)免れないこととあいなろうが(当たり前ではある)、上(の **α** の段)にて述べてきたようなことがすべて**【事実】**であると網羅的に指し示されたとき、ここ **β** の申しようも「考えすぎ」では済まされぬものとなって「しまう」とのことがある。

表記のここの典拠をここまでにて示してきたとして、まずもって、うち、**α1** から **α8** と振ってのここのことと本稿にてのより従前の段より呈示に努めてきたこととを複合顧慮することで、何が述べられるのかの解説を下になしておくこととする。

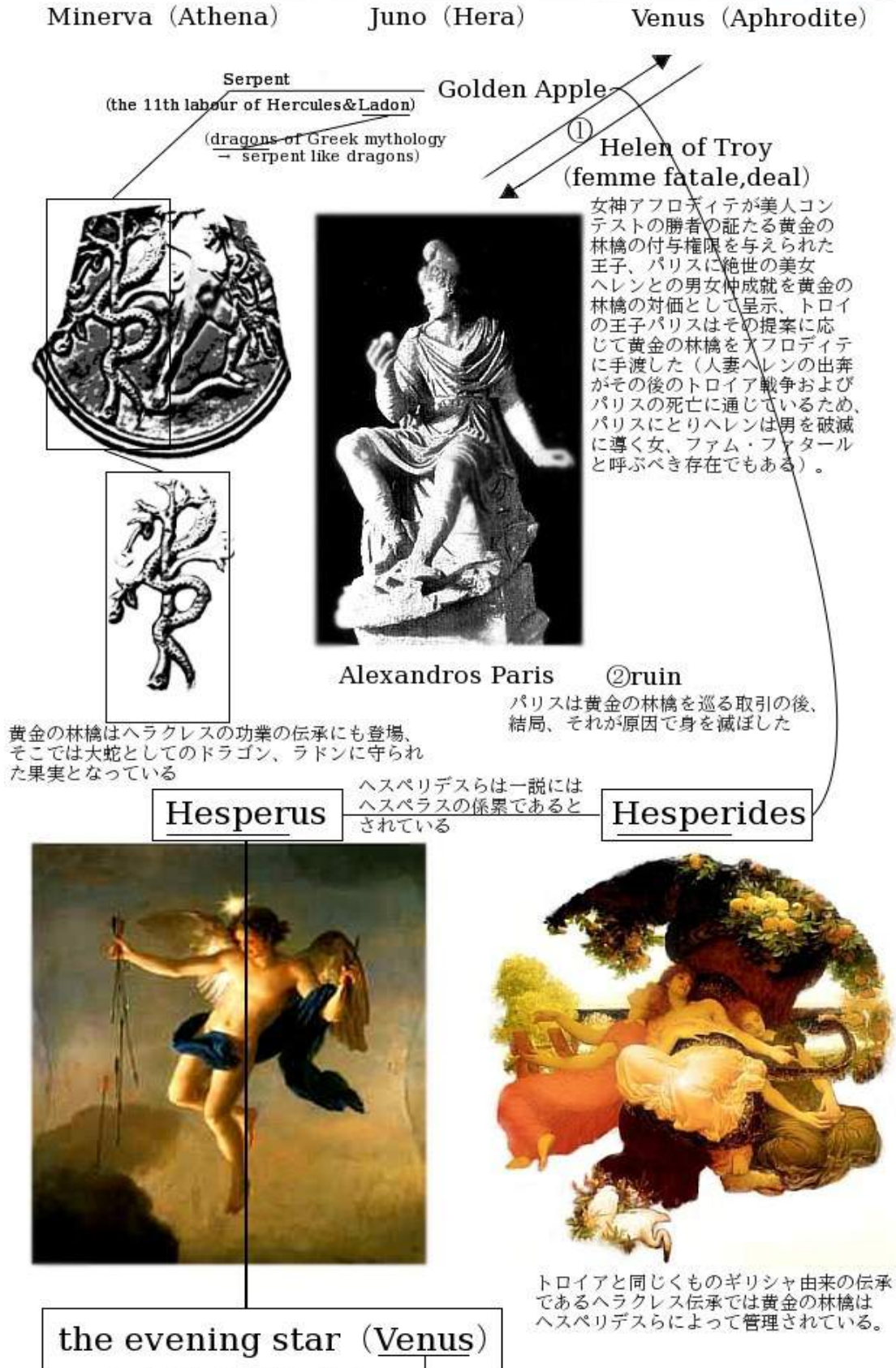
ここに至るまでにて指し示しなしてきたことからどういった関係性が示せるのかについて

α1 から **α8** と振ってのここの解説に初頭より入っているとの本稿ここ本段、**補説 2** と銘打っての部に入る前の段(よりもって述べれば、**補説 2** 以前の**補説 1** と銘打っての段に入る前)に、である。本稿にあっては**【以下のここのこと】**を典拠仔細に呈示しながらも指し示しなしてきた。

【黄金の林檎】(と呼称される神話上の果実)を巡る争いともなる**【パリスの審判】**として一般によく知られるギリシャ神話上の出来事が**【エデンの園にての誘惑プロセス】**と「純・記号論的に」接合しているとのことが「ある」]

【エデンの園で誘惑をなした存在と聖書が語り継ぐルシファー】(Lucifer とのラテン語(Lat.)呼称にあっての原義より**【金星】**に対応する存在)と**【ギリシャ神話で黄金の林檎を取得すべくもヘレン取得を対価にパリス買収を試みたアフロディテ】**(ローマ名ヴィーナスで**【金星】**を体現する美神として知られる存在)の両者については類似の特性を「複合的に」帯びているとのことが「ある」]

以上表記のことらについての帰結を扱った図解部は[次の如きもの]となる（：図解部の内容が[個人の狭隘・偏頗な主観・属人的心証に左右される余地なき、「そこに確としてあるところの純・記号論的關係性の実在」をただそのありのままに指し示したもの]であると断じもするその論拠については本稿に於ての先行するところ、[出典\(Source\)紹介の部 48](#)から[出典\(Source\)紹介の部 51](#)を包摂する解説部および[出典\(Source\)紹介の部 62](#)を参照されたい）。



本稿の先立っての段 (現時点、本PDF版では巻の2のセクションに入っているわけであるが、巻の1 - vol.1 - での先立っての部) にあっては【黄金の林檎】と【エデンにおける人間の始祖の失楽園】が多重的に結びついているとのことを以下の観点で問題視もしていた。

・【黄金の林檎】はLHC実験と濃厚に結びつくものでもある。

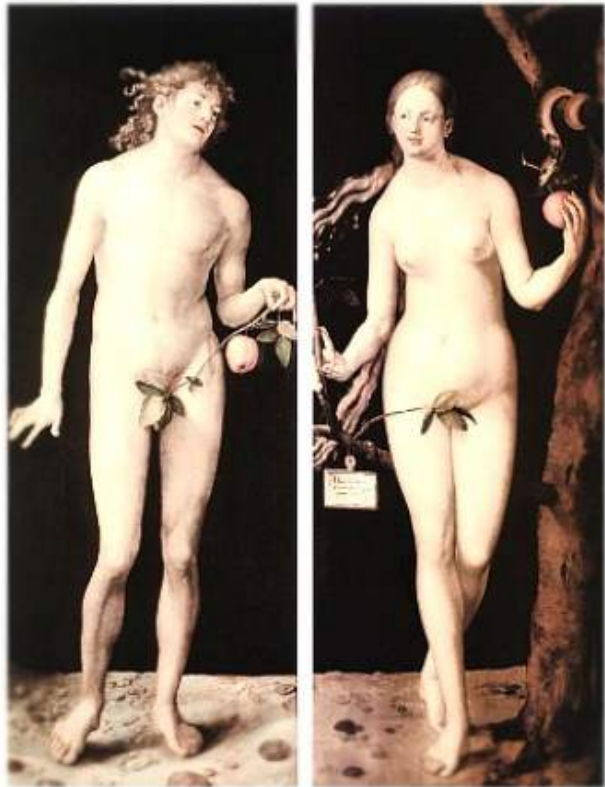
・【黄金の林檎】はエデンの禁断の果実と結びつくわけだが、禁断の果実に関わる楽園喪失の物語については古典ら、しかも、極めて知名度が高いとの著名古典らに見受けられるところとして「不可解にも」今日的に見たブラックホールに近似するものの描写が多重的になされているとのことが「ある」。

・上の古典内特定描写については往時の古典著者が知り得たとは思えないような【情報】もあいまってのカタチとしてトロイア崩壊に関する事項への言及が「極めて多重的に」なされているとの側面が伴う。そして、トロイアだが、同都市は黄金の林檎にて滅んだ都市であるため、【エデンでの失楽園】と【ブラックホール近似物】が結びつくセクションの描写としてトロイア関連のそれは - LHC実験のこともありもし - あまりにもできすぎていると解されることもある。

ヘスペラスは金星の体現神格でもある。

Lucifer (the morning star)

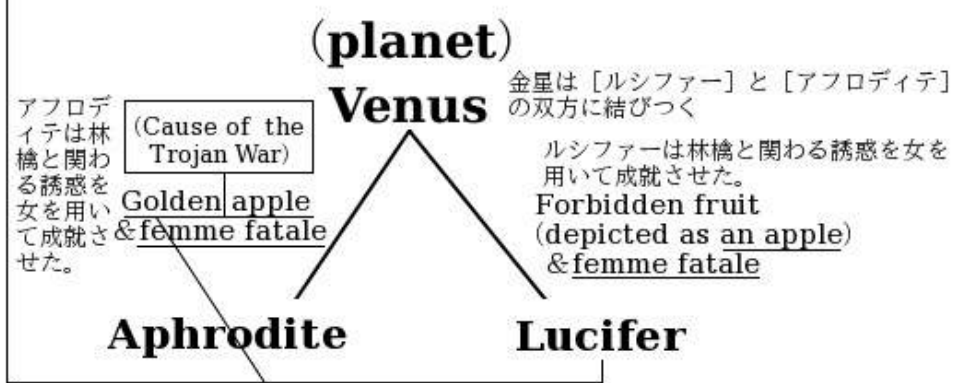
ルシファーは金星、明けの明星と名前を共有している。



①forbidden fruit (depicted as the apple) & Eve (femme fatale, deal)

ルシファーとも同一視されるエデンの蛇はファム・ファタールとも評せられるイヴを用いて林檎とも見られている禁断の果実を食するよう、アダムを籠絡するとのことをなした。

②ruin アダムとイヴは行為を問責されるとのかたちで楽園より追い出された。



Hesperus—Hesperides—connection

アフロディテ誘惑と関わる黄金の林檎 - 蛇とも結びつく林檎 - はヘスペリデスらに管理される林檎でもある。そのヘスペリデスらはルシファーと同文に金星の体現存在であるヘスペラスの係累であるとの説が伴っている者達である。

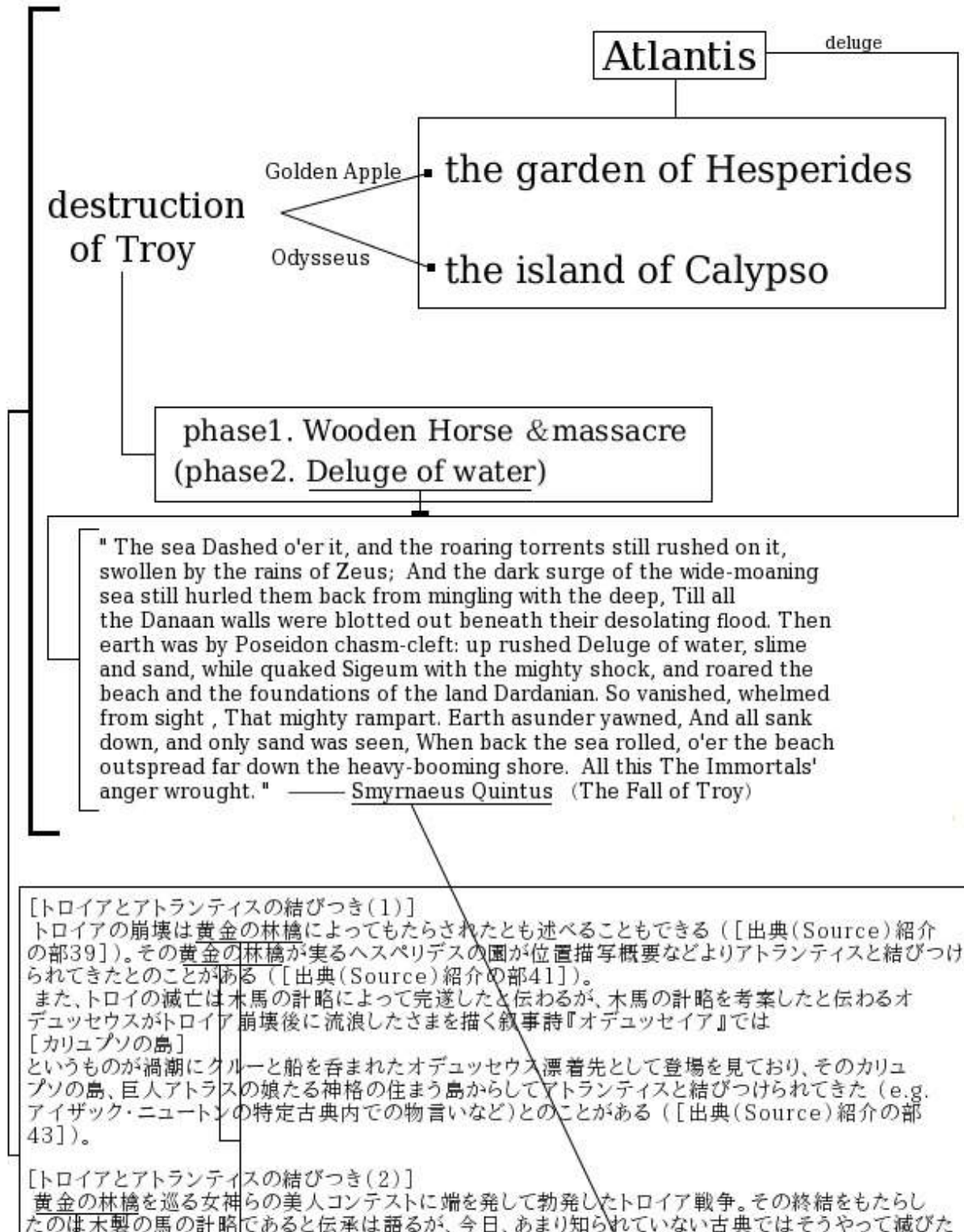
図解部込みにしての[直上表記]にて再度振り返りもしている関係性、

[[【黄金の林檎を巡る争い】が【エデンの園の誘惑プロセス】と接合している (そして【黄金の林檎を巡るやりとりにての贈賄当事者アフロディテ】と【エデンの誘惑者たる蛇に比定されもするルシファー】とが接合している)]

との関係性についてはそこに関わる【黄金の林檎】というものを媒介にして

[[【トロイア崩壊伝承】および【アトランティスの沈没伝承】と接合するよう「にも」なっている]

このこともが指摘できるところとなりもしており、本稿にあつては —他にもいろいろと問題となる関連するところの関係性を呈示してきたなかで一例のみ挙げるところとして— おおよそ下に呈示の如き図解部を先立って挙げもしてきた（：上とほぼ同じくもの言いまわしを用いるとして、そちら図解部の内容が **[個人の狭隘・偏頗な主観・属人的心証に左右される余地なき、[そこに確としてあるところの純・記号論的關係性の実在]をただそのありのままに指し示したもの]** であると断じもするその論拠については本稿にあつての **出典(Source) 紹介の部 48** から **出典(Source) 紹介の部 51** を包摂する解説部およびそれに先立つところの **出典(Source) 紹介の部 40** から **出典(Source) 紹介の部 45** を包摂する解説部を参照いただきたい。



【トロイアとアトランティスの結びつき(2)】

黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スマイルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』(英文タイトル the fall of Troy)に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬で内側から破壊させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである(【出典(Source)紹介の部44-3】)。その点【ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破壊】とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである(【出典(Source)紹介の部44-4】に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと)。

" The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods : it was another Eden. "

— Alexander Murray (Manual of Mythology)

トロイア崩壊の元凶とも定置される【黄金の林檎】、それがたわわに実る【黄金の林檎の園】は「大洪水にて滅した」アトランティスにも仮託されてきたものであると同時に【エデンの園】と結びつくとの見立てが一部より呈されてきたものでもある(ここにては一例として本稿にての【出典(Source)紹介の部51】で挙げているMurray's "Manual of Mythology,"(『ムーレイの神話学の手引き』)という19世紀の著作に見る文言を引いている)

さらに【振り返ってもの表記】をなす。

[【エデンの誘惑 —Fall 墮落のプロセス—】と結びつくとの【トロイア崩壊伝承 —フォール(陥落)・オブ・トロイアにまつわる伝承—】]

が

【黄金の林檎】・【アトランティス崩壊伝承】

らを媒介項に

(近年、ブラックホールを生成すると考えられるに至った)【LHC 実験】

「とも」多重的接合性を呈しているとのことがありもし、その点についての図解部として本稿では以下にて呈示の通りのものを先立って挙げてきたとのことがある(：繰り返す。図解部の内容が【個人の狭隘・偏頗な主観・属人的心証に左右される余地なき、【そこに確としてあるところの純・記号論的關係性の実在】をただそのありのままに指し示したもの】であるとのその論拠については本稿にあつての先行するところの【出典(Source)紹介の部35】から【出典(Source)紹介の部36(3)】を包摂する解説部および【出典(Source)紹介の部46】の内容を参照いただきたい)。

Atlantis

destruction
of Troy

Golden Apple

Odysseus

the garden of Hesperides

the island of Calypso

phase1. Wooden Horse & massacre
(phase2. Deluge of water)

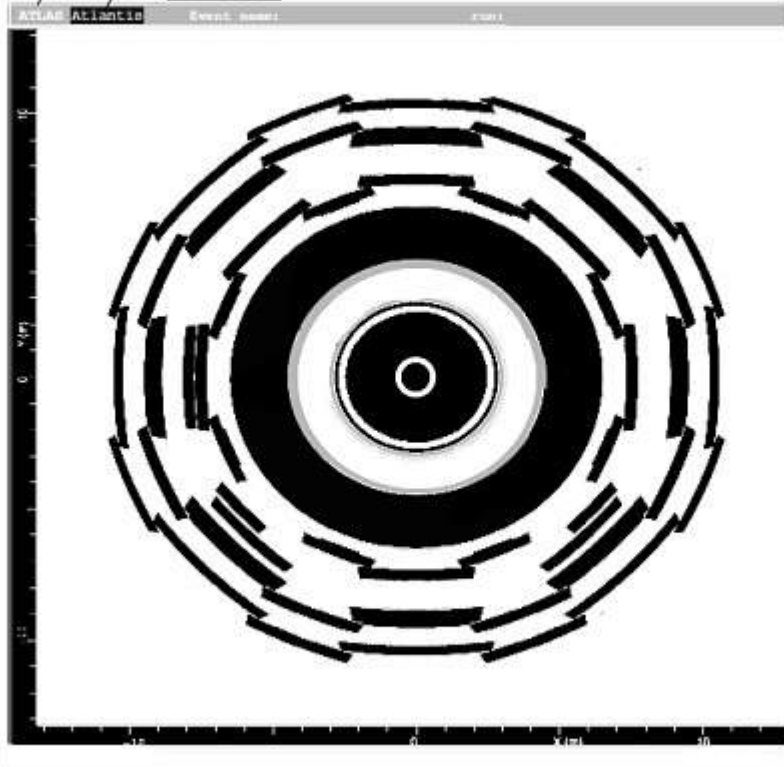
similar

" The sea Dashed o'er it, and the roaring torrents still rushed on it, swollen by the rains of Zeus; And the dark surge of the wide-moaning sea still hurled them back from mingling with the deep, Till all the Danaan walls were blotted out beneath their desolating flood. Then earth was by Poseidon chasm-cleft: up rushed Deluge of water, slime and sand, while quaked Sigeum with the mighty shock, and roared the beach and the foundations of the land Dardanian. So vanished, whelmed from sight, That mighty rampart. Earth asunder yawned, And all sank down, and only sand was seen, When back the sea rolled, o'er the beach outspread far down the heavy-booming shore. All this The Immortals' anger wrought " — Smyrnaeus Quintus (The Fall of Troy)

(11th labour of Hercules)

ATLAS (A Toroidal LHC ApparatuS)

ATLANTIS



[micro black hole generating event] detection

<p>[トロイアとアトランティスの結びつき(1)] トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる（[出典(Source)紹介の部39]）。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたとのことがある（[出典(Source)紹介の部41]）。 また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完遂したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では[カリュプソの島]というものが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた（e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど）とのことがある（[出典(Source)紹介の部43]）。</p>
<p>[トロイアとアトランティスの結びつき(2)] 黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』（英文タイトル the fall of Troy）に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬に内側から破滅させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである（[出典(Source)紹介の部44-3]）。その点、[ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破滅]とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである（[出典(Source)紹介の部44-4]）に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと）。</p>
<p>[LHC実験とアトランティスの関係性について] どういった料簡でなのか、LHC実験はそのブラックホール生成可能性が現実的可能性をもって語られたとの始原期（LHC実験のブラックホール生成可能性論議を巡る経緯については本稿にての[出典(Source)紹介の部1]から[出典(Source)紹介の部5]を包摂する解説部を参照されたい）より前に遡る折柄、LHC計画がLEP加速器に接ぎ木しての加速器設置案としてCERNサイドで「正式に」ゴーサインを出されることになった1994年より前よりATLASとの名前と結びつけられているとのことがある（本稿の[出典(Source)紹介の部36(2)]で解説しているように1992年からのことである）。 そこに見るアトラスという名称はヘラクレスの功業に登場してきた伝説の天を支える巨人の名であるわけだが、同巨人アトラス、[トロイア滅亡の原因ともなっている黄金の林檎]がたわわに実る果樹園の所在地を把握していると伝わっている巨人にして、それぞれ別個に、[古のアトランティス]に比定される[黄金の林檎の園][カリュプソの島]、それらの地の代表的住人たるヘスペリデスおよびカリュプソという女の神格らの父親とされる存在でもある（[出典(Source)紹介の部39]以降の一連の解説部にて文献的論拠を明示していることである）。そうもしたことが指摘できる時点でCERNのLHC実験はアトランティスと接合していると述べられる。 のみならず、LHC実験ではATLANTISとの名前が付されているEvent Displayツールでブラックホール生成イベントを観測する可能性が実験関係者によって「肯定的に」（科学的知見発展に資する安全なブラックホールの生成・観測との文脈で）宣伝されているとのことがある。従って、ATLASとの名称それ自体に留まらずATLANTISとの名称をも用いているとのことでLHCとアトランティスの関係はいよいよ色濃くも見えてくるとのことがある。</p>

「さらに」に「さらに」を加えての[振り返ってもの表記]を続ける。

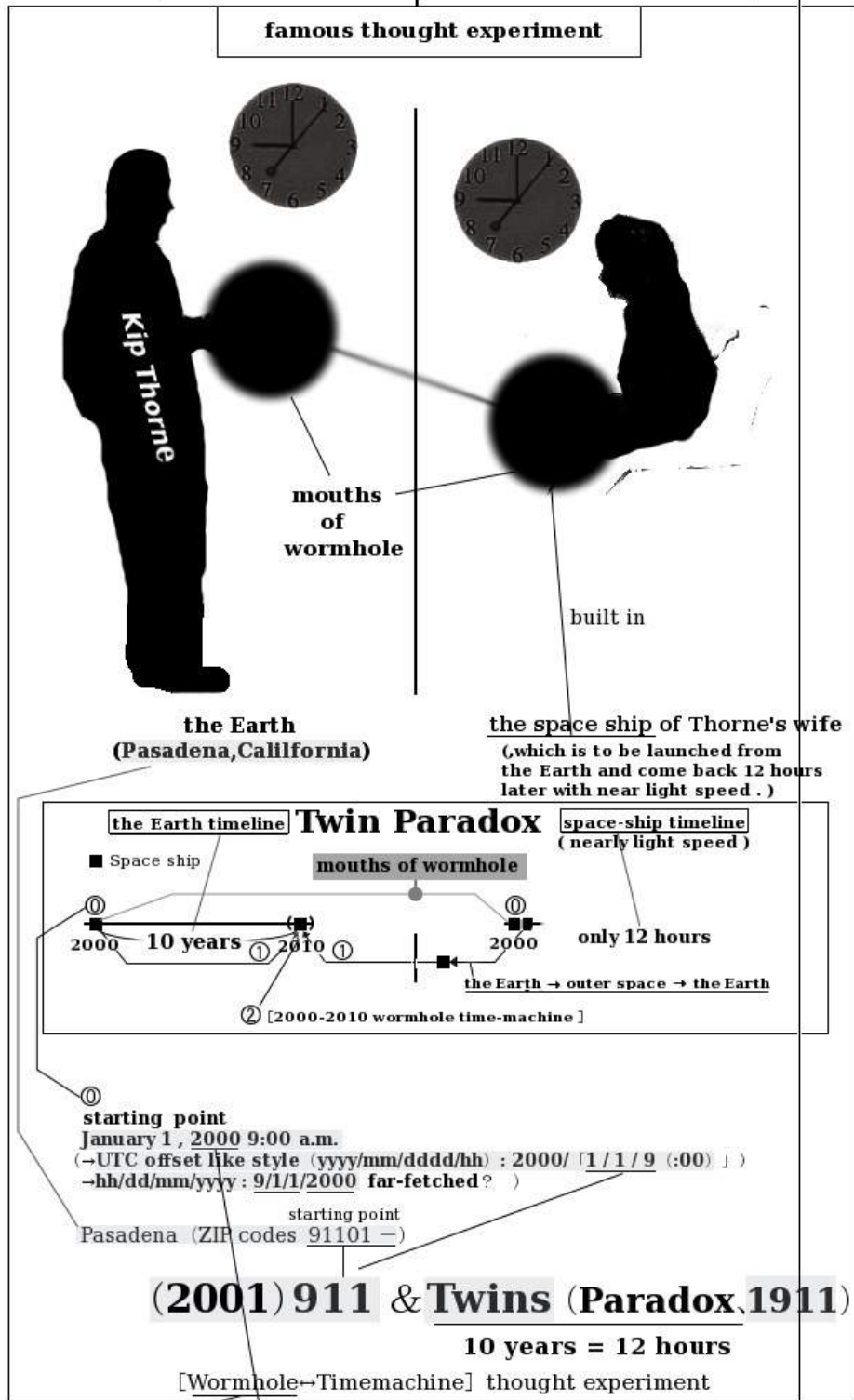
LHC 実験が —— 属人的主観など一切問題にならぬところで —— [アトランティス][トロイア崩壊]と実験関係者ら由来の命名規則にて結びついていると指摘できるようになっている（そうもされている）との中でそうしたそちら LHC 実験が生成する可能性があると考えられるに至ったブラックホールというもの（1998 以降登場を見た新規理論に基づき、2001 年以降、LHC 実験のような加速器実験で生成されると考えられるに至ったブラックホールというもの）からして[次のようなこと]が述べられるようになってしまっているとのことがある。

[ブラックホール絡みの事物が**【911 の事件の発生の前言をなしているが如く「奇怪な」文物ら**】（普通に考えれば、存在していることそれ自体が「奇怪な」特色を帯びての文物らではある）とどういふわけなのか、結びついている]

以上のようなこととともがあり、それについては下のように図示なせるところともなる（詳しくは本稿にての**出典(Source)紹介の部 28**から**出典(Source)紹介の部 33-2**を包摂する解説部を参照のこと）。

Black Holes and Time Warps: Einstein's Outrageous Legacy (1994)

1994年に初出を見た当該の文物にあっては【アインシュタインのとんでもない遺産 (Einstein's Outrageous Legacy)】であるところの Black Hole や Worm Hole らが主題として取り上げられているのだが (先立っての引用部を参照されたい)、それらブラックホールやワームホールの生成さえなしうると近年考えられるようになったとの LHC 実験にあっては同じくものブラックホールやワームホールらの (生成・観測挙動にて【黄金の林檎】や【アトランティス】といったものと結びつく装置群が意をなしてくると「されている」 (: 【黄金の林檎の在処を識る巨人】たるアトラスの名を冠する検出器 ATLAS や【黄金の林檎の園】との同質性が歴史的に取り沙汰されてきた古の陸塊アトランティスの名を冠するイヴェント・ディスプレイ・ウェア ATLANTIS が LHC にあってのブラックホールの生成・観測時に意をなすと発表されてきたとのことを本稿の先行する段では (関係者ら一次資料より引用なしながら) 仔細に解説している)。そして、そうもした【黄金の林檎】や【アトランティス】といったものが 911 の予見事物「ら」とも複合的・多層的に結びついているとのことを重ねて指し示さんというのが本稿のひとつのテーマともなっている (ここにての振り返っての図示の部で取り上げているキップ・ソーン著作 *Black Holes and Time Warps : Einstein's Outrageous Legacy* それ自体「も」【911の予見事物】としての側面を呈するが、同著作それ自体は【黄金の林檎】や【アトランティス】とは結びついては「いない」。だがしかし、当該著作からして —【911の予見事物としての側面】や【ブラックホール】を媒介にして—【黄金の林檎】や【アトランティス】との相関関係が問題になるとのものであることに変わりはない)。



Charles Seife's

Zero: The Biography of a Dangerous Idea (2000)

- (containing a similar illustration of the same thought experimentation as Thorne's one)
- (asserting that the watershed between year 2000 and year 2001 is vague)
- (making a prophetic comment :
 " Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense. However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence. it will also be responsible for

remind

こちら 1993 年公開の映画のシーンが尋常ならざるものであるところとしては (本稿にての出典 (Source) 紹介の部 27 で市中流通 DVD を通してのその旨の確認方法を紹介しているように) 【片方が崩れ片方の上階に風穴が開くとのツインタワーのありよう】などといったものが飛行物体 (画面にては小さいがゆえに旅客機か戦闘機か、どういものとして入れ込まれているか判然とせぬ飛行物体) のツインタワーの間の中空横切り描写と結びつけられているとのことで「も」ある。その点、映画公開前の数ヶ月前、1993 年にあってツインタワーの地下駐車場が爆破テロに曝されているとのことも本稿にて解説しているところとしてあるのだが、そうした往時にあっての状況では当該描写の際立った【予見性】を否定できないとことがある、それがゆえに問題になる。

またもって述べておけば荒唐無稽映画『スーパーマリオ魔界帝国の女神』のメインモチーフが【爬虫類の異種族の次元間をまたいでの来襲】とのものとなっている中で【加速器におけるブラックホールやワームホールの類の生成に通ずる時期的に不可解な予見的言及】に通ずるようになって【他の】文物らにあって【爬虫類の異種族の来襲】とのテーマが見てとれるとのことがある (本稿では既にもってそれら作品がいかに問題になるのか詳述するとの式で『リアンの剣』『フェッセンデンの宇宙』といった作品らのことを問題視してきた)。さらに述べれば、【爬虫類の種族の異次元間侵略】との要素に関しては神秘家の類が先行するフィクションからの影響なども受けつつ【アトランティス】と結びつけてのそちら絡みの妄語の類を前世紀 (大戦期) から発していたとのことも本稿では指摘している (お分かりかと思うが、筆者は神秘家の予見能力を尊んでいるのでは断じてない。そこらじゅうにいそうであるとの愚劣な操り人形の脳機序操作の可能性、そして、そこにて示唆されることを問題視しているだけだ)。

One scene of SUPER MARIO BROS. (1993 film)

※一見にして子供向けの荒唐無稽映画としての体裁をとる『スーパーマリオ魔界帝国の女神』では隕石によって分かれたたれた[人類の世界]と[恐竜人の世界]の融合が企図される。その融合と関わるところで頭上に風穴が開き、崩落を見るツインタワーが描写されるのだが、[911の予見的描写]に通ずるそうしたところでも異世界・異空間をつなげるものとしてのワームホールやブラックホールの特性を思い起こさせられるとのことがある (:ワームホールやブラックホールの異世界間をつなぐ性質については本稿にての[出典(Source) 紹介の部20]などを参照されたい)



Dinosauroids' world
↓ fusion
this world

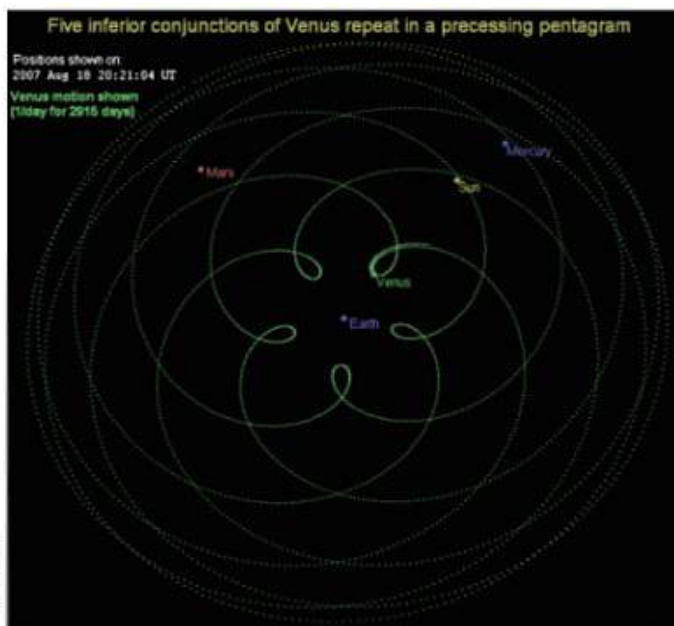
Hole

キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』(原著1994年刊行)に見る、
[同一の思考実験] ([通過可能なワームホールのタイムマシン化] についての思考実験)

は次の側面より911の事件と「予言的に」結びつくと言べられるようになっている。

- 問題となる思考実験は91101を郵便番号上のスタート・ポイントとする地域で始められるのだが、[91101]とは米国表記での2001年9月11日を示すとの数値ともなる。
- 実験それ自体が1「911」年に提唱された[「双子の」パラドックス]にまつわるものである (:2001年9月11日の事件では双子の塔ことツインタワーが崩落させられている)。
- 実験の(地域としてではなく)日付けとしてのスタート・ポイントは何故なのか(1994年刊行著作であるのに)2000年1月1日9時頃に設定されている。それ自体、時間単位を若い単位から読み替えれば911を意識させる実験開始時刻だが、加えて、2000年と2001年については21世紀のはじまりのポイントをどこに置くかとの意味合いで暦表記のズレがあると指摘され、混同が問題視されている年度らであるとのことがある。
- 2000年と2001年の混同の問題を論じ、また、キップ・ソーンのここにて問題としている思考実験と同じもの実験をキップ・ソーンのまさしく問題となる著作『ブラックホールと時空の歪み』と同じイラストレーターを起用して挙げているとの筋合いの著作、『異端の数ゼロ』(原著2000年刊)では「ブラックホールとグラウンド・ゼロとの言葉が結びつけられている」とのことが見受けられる(先述のところとしてグラウンド・ゼロというのは相当使用局面が限られている言葉となっており、その主たる使用対象は核兵器投下地および冷戦下の核攻撃対象推測地としてのペンタゴンの広場であった。そうしたグラウンド・ゼロがワールド・トレード・センター跡地をも指すようになった2001年の事件の前に2000年の著作『異端の数ゼロ』はブラックホールをグラウンド・ゼロと結びつけて使用している)。
- キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』では問題となる思考実験(通過可能なワームホールにまつわる思考実験)と同文に双子のパラドックスに関する説明をなすための思考実験が展開されているのだが、その実験からして「91101」との郵便地番からはじまる地域(カリフォルニア州パサデナ)で「頭上に爆竹をつけた車のうえでの[爆竹の時間的差分をきたすスパーク]を観察する」とのものである。爆竹爆発の順次的観察との観点で述べれば、ツインタワーの崩落プロセス、双子の塔ことツインタワーが差分をきたす外的衝撃によって倒壊していったとのプロセスのことが想起される。

以上の「振り返っての」本稿従前内容と【先の段までにてその典拠を仔細に指し示してきたとの $\alpha 1$ から $\alpha 8$ のことら】を複合顧慮する...、そうもすることで問題性がさらに際立ちもするとのかたちで下のような図らが導出できる(ようになってしまっている)。



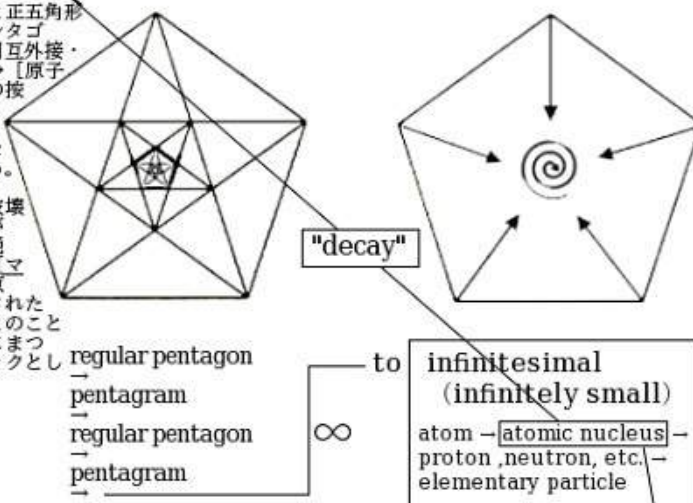
天文学における金星の会合(内合)周期は五芒星描画の問題と結びつけて長らくも語られてきたものとなる。

Successive inferior conjunctions of Venus occur about 1.6 Earth years & Pentagon

Pentagram & Pentagon & Golden Ratio

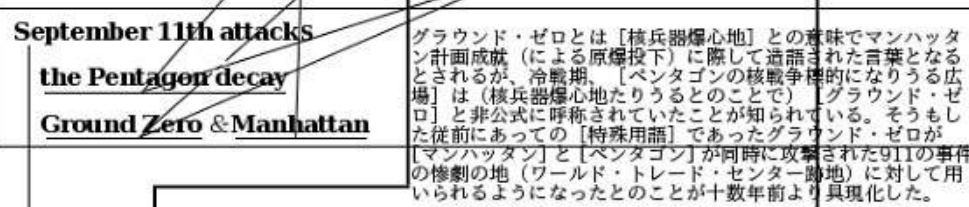
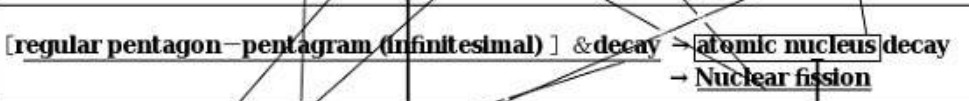
Nuclear fission

先述のように五芒星と正五角形(レギュラー・「ペンタゴン」)の無限に続く相互外接・内接関係は【原子】→【原子核】→【素粒子】との按配でスケールを小さくしていく【極小の領域】に向けての力学を体現するものでもある。さて、【極小の領域】にあっての原子核の破壊的変性プロセスこそが(先立って細かくも説明しているように)【マンハッタン計画】での原子爆弾の開発に利用された【機序】となっているとのことが一科学ありようにまつわたりの常識的トピックとしてある。



原子核崩壊の機序が核兵器を誕生させたとのことがある

マンハッタン計画を主導してきた軍人レスリー・グローヴスはマンハッタン計画に先立つところとして1941年9月11日に建設着工を見たペンタゴン建造計画を主導していた者ともなる。かくのように【マンハッタン】計画と【ペンタゴン】は結びつくようになっていく。



ここでの部にあつては【ルシファー(金星)にあっての会合周期との接合性】などのこともあり、そうしたことだけに問題性が収斂しているわけでもない申し述べているところなのだが【911の事件】と【マンハッタン計画】の双方が【グラウンド・ゼロ(との言葉)】【マンハッタン(との結びつき)】【ペンタゴン(の崩壊に関わる機序)】との共通の属性らを帯びつつ、また、同じくもの【911の事件】と【マンハッタン計画】の双方のことらが「極めて異様な」予見性(【911の事件に通ずる「極めて異様な」予見性】)に関わるところで【ブラックホール】に通ずるものらとなり「も」していることを問題視している(【911の事件】に関してはその極めて異様な予見事物が【ブラックホール】と結びつくとのことを本稿の先の段で問題視してきた。他面、【グラウンド・ゼロ】、【マンハッタン】、【ペンタゴン】に通じている)【マンハッタン計画】については同計画なくして今日の【ブラックホール】人為生成問題(の主たる関係筋)が存在していないとのことがあるとのことを本稿では重視している)。

Brookhaven National Laboratory (1947-)
 CERN (1954-)
 Fermi National Accelerator Laboratory (1967-)

※本稿にて細かくも後述するところとしてマンハッタン計画関係者より、
 [ブラックホール生成問題で矢面に立たされ、なるべくして訴訟の被告になったとの研究機関ら]が設立されているとのことがある。
 また、マンハッタン計画にてその成果が利用されていたころの原子核領域の破壊作用は加速器「実験」(ブラックホールを生成するとされるに至った挙動)の基本となるところでもある。

particle physics experiments
 &
 accelerators (→LHC)

ATLAS

The Illuminatus ! Trilogy & Golden Apple

911 prophecy
 ("extremely" odd)

regular pentagon
 as the Pentagon
 (USA)



(symbol in Discordianism)

細かくも先述のようにローマのVenus神(金星体現格)に比定されるギリシャのAphrodite (アフロディテ) 神の誘惑、トロイア崩壊につながったパリスの審判にてその取得が争われた黄金の林檎にまつわるモチーフが多重的にLHC実験にあつての命名規則に用いられている(黄金の林檎の在処を知るとされる巨人ATLASの使用や黄金の林檎の園と同じくもの場と語られてきたATLANTISの使用などがそうである)。

Golden apple
 (⇒Judgement
 of Paris & Venus)

金星の英語表記Venusは美の女神アフロディテのローマ版呼称ウエヌス(ビーナス)に由来しているとのことは半ばもの一般教養の問題である。

※荒唐無稽小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』では「マンハッタンビルが爆破され」「ペンタゴンが爆破され」「炭疽菌テロが問題になり」「ニューヨークとペンタゴンの並列化象徴(上掲のデイスコーディアニズム・シンボル)が作中、頻出し」ている。また、同作より派生したカード・ゲームにあつて「爆破投下するツインタワー」「粉塵を上げるペンタゴン」が描かれている」ことも知られている。要するに、複合的要素から、70年代米国にてヒットを見た当該小説作品には「ニューヨークのビルとペンタゴンが標的になり」「事件直後、炭疽菌テロが発生し」たとのかの911の事件に対する尋常一様ならざる先覚性が見てとれると述べてもいい(機序はともかくも[現象]の問題としてである)。

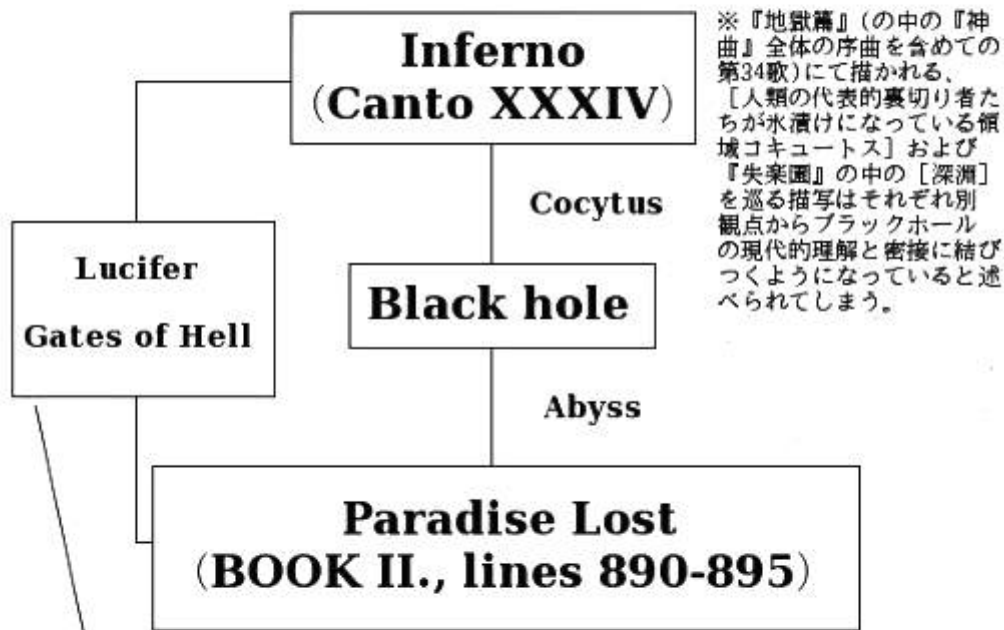
Lucifer

本稿では悪魔の王として知られるルシファー(サタン)とギリシャ神話のアフロディテ(ローマ名ヴィーナス)が複合的に結びつくこと、そして、アフロディテと関連づけられる黄金の林檎がエデンの園の禁断の果実と複合的に結びつくとの指し示しに注力してきた。

本稿従前の[出典紹介部 55]から[出典紹介部 55(3)]とナンバリングしての典拠解説部では名称由来として【惑星・金星】(【五芒星】と接合する天体)と同一視される【ルシファー】(悪魔の王サタンにあつての[墮天使]としての側面が強調されての呼称) という存在が「超」がつく程に著名な古典、ダンテ『神曲;地獄篇』およびミルトン『失樂園』(エデンの蛇としてのルシファーの誘惑が主軸に据えられての作品)にていかようにもつて「今日的な視点で見た場合の【ブラックホール近似物】(の描写)と多重的に結びつくのかの指し示しに注力している。そして、同じくものが属人的な印象論としてではなく易々と確認させる純粹なる記号の一致の問題として摘示できてしまうとの事実がそこにあるとのこと、そのことが【よくできた偶然の一致で済むこと】なのか、そうではなく、【入念に仕組まれた故意の問題が関わるところ】なのか(あるいは【なんらかの対処をなさぬのは愚の極みであるとのレベルでの故意性までもが疑われるところ】)なのか)が重要な問題となってくるだけのことが存在している(：死地にて殺されるに相応しいほどに頭が機能していないというのなら話は別であるが、【偶然の一致の問題】を斥ける要素として【「あまりにもできすぎた」「多重的」相関関係】がある)。

※ ダンテ『地獄篇』がブラックホールと結びつくとはきと述べる、ないし、示唆することをなす向きまでは海外にはいるが、ミルトンの『失樂園』までがそうであるとはきと述べる、問題となる該当部を指し示しながらわざわざ指摘せんとするような向きは、(そのように考えた人間は少なからずいるとは思われもする中)、絶無といったほどに海外にもいない。一であるから、ミルトンとダンテの各作品がその伝で結びつくことを論証しようという人間もいない、とのことになっている。

そうした言論流通動態の問題は置いておいて、([文献的事実]と[そこから導き出せる無理なき解釈]に依拠し)ここまでにて表記してきた関係性につき下にて図示をなしておく(下図に見る関係性の理非曲直につき ―[物事を判断するだけの意志力]を有したまともな向きに― [本稿で紹介した古典原著該当部]および[ブラックホール基本的特質の諸種解説媒体]にあたってでも検討いただきたいとこの身は考えている次第である)。



※『地獄篇』と『失樂園』を巡るブラックホール関連の話には[共通項]も存在しており、その共通項とは[ルシファー(悪魔の王)]および[地獄門]となる(ルシファーについては[光でも脱出速度のハードルを越えられぬブラックホール特質]のことが問題になり、[地獄門]については(人形らに許された何も変ええぬ不明なレベルの話と受け取れるが)一部の著名な科学者らが極めて隠喩的に、かつ、示唆する程度にブラックホールの外延部[事象の地平線]と結びつけてダンテ『地獄篇』の地獄門のことを持ち出している、との経緯が問題になる)。

「実に遺憾なことは、」以上の一連の関係性が有象無象の陰謀論に見るような駄法螺とは一線を画するものとして、そう、

[そのような関係性が成立しているとのことを[客観的事実関係]として摘示できるようにして「しまっている」]

とのことである、確たる論拠の山の積み重ねによってそのように指し示せてしまえるようになっていたとのことである。

上の申し分に問題がないか、本稿内容を通じて検証・確認なしていただきたいとして、さて、「問題となるのは、」

[はきとして成立している関係性らは[偶然]で成立する程度のものなのか]
[そうではないのならば(偶然性が棄却されるのならば)、では一体、何が問題になるのか]

ということである(別段、おかしいことを述べているつもりはない)。

そして、本稿では唯々(ただただ)具体的証拠らに基づいて、

[それが偶然で成立するようなもこと「ではない」]
[[偶然ならぬ方向]が執拗に指し示すのは[種族の存続をみとめるつもりはない、「時限性の」養殖種養殖プロセスには終わりが訪れるとの確たる意思表示]であると当然に解されるようになっている]

とのことに直結する「相互」関係性に次ぐ「相互」関係性を徹底呈示なし、そして、それら[多重的相互関係性]に共通して当てはまる[際立ってユニークな(この場合のユニークは「特殊な」ということである)特定共通要素群]の介在の事実をつまびらやかにすることで[種族の前に控えている岸壁の実在]を「証」して「示」す、証示なすつもりである。

(ここまでをもってして最前、指し示しに努めてきた $\alpha 1$ から $\alpha 8$ と振ってのこらと本稿のよりもって従前の段で呈示に努めてきたこらとを複合顧慮することでどうということが述べられるようになっているのかについての解説部とする)

レギュラー・ペンタゴン(正五角形)構造を巡る【ブラックホール人為生成問題】に通ずる関係性について

さて、これ以降は大局的にはここに至るまで $\alpha 1$ から $\alpha 8$ および β と振ってその論拠を示してきたこらのうちの $\alpha 8$ 、すなわち、

$\alpha 8$. [五芒星]は[黄金比]と際立って結びつく図形でもある。そこに見る[黄金比]と[ブラックホール]が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある。

とのことより押し広げて何が問題になると述べられるのか、ということについての指し示しを($\alpha 1$ から β の内容に多重的に関わるところとして)特段になしていく所存である。

その点、

[黄金比にまつわる話]

などをわざわざなしていることにつき[本稿を中途半端にしか検討されていないとの向き]にあっては

[牽強付会との論法](こじつけがましき論法)

を展開するために [ブラックホールと黄金比の関係性] のことなどを筆者が問題視していると受けられるかもしれないと思もする (先の **出典 (Source) 紹介の部 73** でも [黄金比とカー・ブラックホールの関係についての学者ら指摘] などにつき紹介してきたわけだが、そちらとても「きわめてマイナーな話」であるなどと受け取ってそのようにとらえる向きもあるやもしれないと思もする)。

だから述べるが、
(理由は他にもあるのだが)

「ひとつに」

[次のようなこと]

がある、はきとした重みづけをなしてのこととして [次のようなこと] が筆者意中にあるからこそ、
[カー・ブラックホールの変化現象と黄金比の関係性の話]
を持ち出すとのことをなしてきたのである。

→

その変異が [黄金比] と結びつくこととされるのが着目されるに至っているカー・ブラックホールというものはブラックホール分類中において自転しているブラックホールのことを指すのであるが、同カー・ブラックホール、[時空間のゲート] となる可能性が取り立てて取り沙汰されているともの「とも」なる

上記のことにあつての

[カー・ブラックホールのゲートとしての側面]

については本稿の先立っての段でかなり細やかに専門家ら言いようについての紹介をなしてきたとことがある。

につき、(α8 の部との兼ね合いで何が問題になるか煮詰めていくとの方向性の話に入る前に) そうもした「先の段の内容を振り返りつつ」、また、加えて、「その他の意味でどういことが問題になるか新たに指摘する」ための部を続いて設けておくこととする。

長くなるも、のカー・ブラックホールやワームホールにまつわる解説部として

本段より

こちら解説部には本書 p.327 から p.365 までの紙幅を割くことにする。

[カー・ブラックホールやワームホールといったものの [ゲート] としての言われよう]

について本稿にて従前何を述べてきたのかについて振り返りなしつつ、また、加えて、何が問題になるかの新たな指摘をなすこととする。

本稿の前半部 (にあつての **出典 (Source) 紹介の部 20**) にあつては

書籍 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 『パラレルワールド —— 11 次元の宇宙から超空間へ』 (同著 邦訳版の版元は NHK 出版)

より次のような記載を引いていた。

(直下、カー・ブラックホールが時空間の扉となりうることに言及した邦訳版『パラレルワールド

カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。

…(中略)…

現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通過することができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう。

(訳書よりの(本稿の先の段で既に引用なしていたところよりの)再度の引用部はここまでとする ―※―)

※1 尚、以上をもって訳書よりの再度の原文引用としたが、オンライン上より記載内容確認できるところの原著 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* にての原著該当表記部も引用なしておくこととする。(以下、引用なすとして) “**The wormhole in the center of the Kerr ring may connect our universe to quite different universes or different points in the same universe.** […] Currently, most physicists believe that a trip through a black hole would be fatal. However, our understanding of black hole physics is still in its infancy, and this conjecture has never been tested. **Assume, for the sake of argument, that a trip through a black hole might be possible, especially a rotating Kerr black hole. Then any advanced civilization would give serious thought to probing the interior of black holes.**” (表記の引用センテンスを検索するなどしてオンライン上より[文献的事実]の問題の確認ができるようになってきているとの原著よりの引用部はここまでとする))

※2 なお、直上引用部にて…(中略)…と表記した箇所には以下、*Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* よりそちら記述の引用もなすとして)

Since a trip through a black hole would be a one-way trip, and because of the enormous dangers found near a black hole, an advanced civilization would likely try to locate a nearby stellar black hole and first send a probe through it. Valuable information could be sent back from the probe until it finally crossed the event horizon and all contact was lost. (A trip past the event horizon is likely to be quite lethal because of the intense radiation field surrounding it. Light rays falling into a black hole will be blueshifted and thereby will gain in energy as they get close to the center.) Any probe passing near the event horizon would have to be properly shielded against this intense barrage of radiation.

(引用部はここまでとする)

とのことが表記されており、そちらは大要、「ブラックホールへの突入旅行は概ね片道旅行となり、そこにはあまりにも多くの

危険が伴う。そのため、先進文明 —— 文脈上、ニコライ・カルダジェフ Nikolai Kardashev という物理学者が利用資源リソースとの絡みで案出した[仮説上の先進文明の分類方法]にあつて最もレベル高きところ、[分類 III]とされている先進文明 (type III civilization) —— にあつてはプローブ probe (プローブとは医学用語で言うところの「探針」のことを指す) をブラックホールに投入するとのやりようをとるであろう。 そうしたブラックホールに対するプローブ投入に際してはブラックホールの中の ([潮汐力]と) [放射]が凄まじいために、それに対する防備もきちんとなさされていないなければならないであろうとのことが述べられているところとなる。

以上、引用をなした部に見るように、

[(カー・ブラックホールの)カー・リングとワームホールの結合]

が [別の宇宙に対する旅立ちを実現する] といった物言いが著名物理学者な米国物理学者 (ハーバード出の権威サイドの学者としてのミチオ・カク) によってなされている。

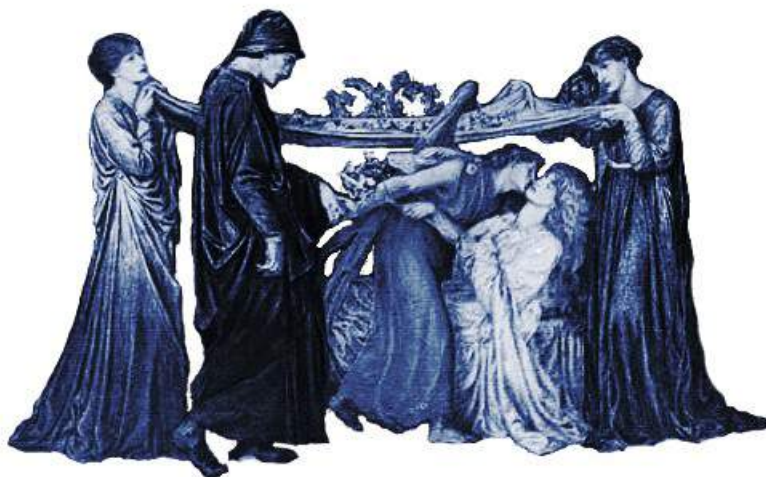
さて、そうしたかたちで紹介されている [カー・リング] というものについて書籍『パラレルワールド —— 11 次元の宇宙から超空間へ』の中の別の段にあつてはより詳しくも [下にて引用なすようなこと]

が —— その部よりの記述を引用なすのは本稿では初めてとなるために **出典 (Source) 紹介の部 76** との出典番号を振っておくが —— 述べられて「も」いる (: 疑わしきにおかれては書籍を手にとられてみて、あるいは、オンライン上より確認せるとの原著電子データにあたられてみて、そのとおりの記載がなされているのか、是非とも、直に確認いただきたいものである) 。

出典 (Source) 紹介の部 76

SOURCE

76



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

[ありうべき先進文明やりようにまつわっての科学予測として[(カー・ブラックホール)のカー・リングとワームホールを結合させてのもの]が「別の宇宙」への扉として利用されうる]

との見解が呈されているとのことを紹介しておく。

(直下、[カー・リング]が何たるかにつき言及した『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』(現 NHK 出版刊行) 147 ページから 148 ページよりの原文引用をなすとして)

自転する星は、つぶれると中性子のリングになり、強烈な外向きの遠心力が内向きの重力を打ち消すのでそのまま安定する。そうしたブラックホールは、驚くべき性質を持つ。このカー・ブラックホールに落ち込んでも、あなたはつぶれて死にはしないだろう。アインシュタイン-ローゼン橋を通過してどこかの並行宇宙に出られそうなのだ。「この魔法のリングを抜けると、あら不思議、君は半径も質量も負のまったく別の宇宙に出ているんだ！」この解を見つけたとき、カーは同僚に大声でそう言った。つまり、アリスが通り抜けた鏡の枠は、カーの見つけた回転するリングに相当する。しかし、このカー・リングを抜けるのは、片道切符の旅になる。カー・リングを取り巻く事象の地平線を通過するとき、重力でつぶれて死にはしないにしても、事象の地平線を超えてまた戻ることはできないのだ(実を言うと、カー・ブラックホールには事象の地平線がふたつある。一部の科学者は、その並行宇宙とわれわれの宇宙をつなぐ第二のカー・リングがあれば、帰りの旅ができると考えた)。カー・ブラックホールは、高層ビルのエレベーターにたとえてもいい。エレベーターはアインシュタイン-ローゼン橋を指し、それで行ける各階は別の宇宙を示す。この高層ビルの階数は無限にあり、どの階もほかの階と違う。だがこのエレベーターは下へは行けない。「上」のボタンしかないのだ。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

※1 尚、原著 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos* にての原著該当表記部も「オンライン上より[文献的事実]であると確認できる」ものとして原文引用なしておくこととする。(以下、引用なすとして) “A spinning star could collapse into a ring of neutrons, which would remain stable because of the intense centrifugal force pushing outward, canceling the inward force of gravity. The astonishing feature of such a black hole was that **if you fell into the Kerr black hole, you would not be crushed to death. Instead, you would be sucked completely through the Einstein-Rosen bridge to a parallel universe. “Pass through this magic ring and presto! you’re in a completely different universe where radius and mass are negative!” Kerr exclaimed to a colleague, when he discovered this solution. The frame of Alice’s looking glass, in other words, was like the spinning ring of Kerr.** But any trip through the Kerr ring would be a one-way trip. If you were to pass through the event horizon surrounding the Kerr ring, the gravity would not be enough to crush you to death, but it would be sufficient to prevent a return trip back through the event horizon. **(The Kerr black hole, in fact, has two event horizons. Some have speculated that you might need a second Kerr ring, connecting the parallel universe back to ours, in order to make a return trip. In some sense, a Kerr black hole can be compared to an elevator inside a skyscraper. The elevator represents the Einstein-Rosen bridge,**

which connects different floors, where each floor is a different universe.” (セ
ンテンスの入力でグーグル検索エンジンより現行、捕捉できるようになっている
ところの原著よりの引用部はここまでしておく))

※2 尚、上にては

[そうしたブラックホールは、驚くべき性質を持つ。このカー・ブ
ラックホールに落ち込んでも、あなたはつぶれて死にはしない
だろう。アインシュタイン-ローゼン橋を通過してどこかの並行宇
宙に出られそうなのだ。「この魔法のリングを抜けると、あら不思議、君は半径も質量も負のまったく別の宇宙に出ているん
だ！」この解を見つけたとき、カーは同僚に大声でそう言った。
つまり、アリスが通り抜けた鏡の枠は、カーの見つけた回転す
るリングに相当する。…(中略)…カー・ブラックホールは、高
層ビルのエレベーターにたとえてもいい。エレベーターはアイ
ンシュタイン-ローゼン橋を指し、それで行ける各階は別の宇
宙を示す。この高層ビルの階数は無限にあり、どの階もほかの
階と違う。だがこのエレベーターは下へは行けない。「上」のボ
タンしかないのだ]

と表記されているが、そのうち、

In some sense, a Kerr black hole can be compared to an elevator
inside a skyscraper. The elevator represents the Einstein-Rosen
bridge, which connects different floors, where each floor is a
different universe. [カー・ブラックホールは、高層ビルのエレベ
ーターにたとえてもいい。エレベーターはアインシュタイン-ローゼン
橋を指し、それで行ける各階は別の宇宙を示す。この高層ビルの階
数は無限にあり、どの階もほかの階と違う。だがこのエレベーターは
下へは行けない。「上」のボタンしかないのだ]

との部は言い換えれば、

「異なる宇宙 (different universes ないし parallel universes) を
結ぶエレベーターはカー・ブラックホール、そして、ワームホ
ールたりうる」

と述べられているに等しいとのところともなる([アインシュタイン・ローゼン橋]と
いうのが[ワームホール]の別名であるからである)。

(出典(Source)紹介の部 76) はここまでとする)

直上の段にて和書『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』およびその原著 Parallel
Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos の内容を原文引
用にて紹介したが、そこにて述べられているところの、

The frame of Alice’s looking glass, in other words, was like the spinning ring of Kerr. 「つまり、
アリスが通り抜けた鏡の枠は、カーの見つけた回転するリングに相当する」

との申しようについて

『LHC 実験を構成する検出器および実験グループの名には「大型イオン衝突実験」に絡んで「ALICE」との略称が与えられている(目に付くところでは、たとえば、英文 Wikipedia「ALICE: A Large Ion Collider Experiment」項目などに基本的な解説がなされているところとして「A」「L」arge「I」on「C」ollider「E」xperimentとの接頭語に起因する略称が「大型イオン衝突実験」に絡んで与えられている。

それとて 一表記の申しようの兼ね合いで 一 [偶然による結びつき]によるところでは「ない」と考えられるようなことがある』

との観点を本稿を公開しているサイトにあつての他所では呈示してきたとのことがある(そちら話すに値するとの向きには今まで顧みられてこなかったとの節があるようにとらえているのだが、とにかくも、である)。

以上のこと、そう、

「LHC 実験。同実験が[アリス]との名称と結びつけられているとのことがあるなかでそちら LHC 実験は、と同時に、ワームホール生成をなす可能性があると「中途より考えられるようになった」との実験ともなっている。そして、ワームホールにはアリスの物語と結びつくとの話が伴う。そうもしたことからして[偶然]ではないと考えられる」

とのことがこじつけ (far-fetched) とはならぬとの典拠をもここ整理のための解説部にあつて挙げておきたい。

につき、ALICE こと「A」「L」arge「I」on「C」ollider「E」xperiment[大型イオン衝突実験]に関しては

[そちらは核物理学者 (nuclear physics を専門とする系統の科学者ら) が重きをもつて関わる重イオンを用いての衝突実験に力点置いての実験名かつ実験グループ名 (アリス・グループなどと呼称) である]

などと実験関係者らには言われているが、先頭の冠詞 a まで略称に加えられるのそもした[アリス]の命名を一部関連セクションに採択しての LHC 実験に関しては以下、再引用なすようなかたちで

[ワームホール生成可能性]

が問題視されてきたとのことがある。

(直下、ポール・ハルパーン著 COLLIDER (邦題) 『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器一』(邦訳版刊行元は日経ナショナルジオグラフィック社となっているとの同著、実験機関担ぎ上げ本としての色彩強き書籍ではあるが([提灯]としての色合いが強い書籍だが)、国内の LHC 実験参画グループの代表者が監訳に携わっているといった意味で少なくとも研究者らにどういう可能性の認容がなされているのか推し量るうえでは意をなす著作ではある) の p.287-p.289 よりの「再度の」原文引用 (出典 (Source) 紹介の部 18 で引用なしたところよりの再度の引用) をなすとして)

これまでの議論は明確な科学的根拠に基づいているが、最後に紹介するのは、SF 小説のような、あるいは夢のような話である。CERN がここまで太鼓判を押してまだ不安ならば、未来から何の警告もないことで安心すればよいのだという。ロシアの数学者イリーナ・アレフエワとイゴール・ヴォロビッチによれば、LHC は現在と未来を結ぶ時空の通路、通過可能なワームホールを生み出すだけのエネルギーを持っている。もし、LHC が危険なら、未来からのメッセージがあったり、LHC の完成を阻止して歴史を改変する科学者が出てくるであろう

う……。

通過可能なワームホールは、アインシュタインの一般相対性理論方程式を解くことで得られるもので、時空の離れた二点をつなぐという特徴がある。ワームホールもブラックホールと同じく、物質が宇宙という織物を強力に曲げてできる重力井戸だ。しかし、そこに含まれる幽霊物質(未知の物質)という仮想の物質が負の質量とエネルギーを持っているため、侵入者に対する反応が違う。ブラックホールに落ちた物質が崩壊するのに対し、幽霊物質は通過可能なワームホールを開け、時空に通路をつくって宇宙の別の場所へつなぐ。

…(中略)…

1980年後半以来、通過可能なワームホールはCTC(時空曲線)をつくり、これをたどれば過去へタイムトラベルできるという説が唱えられてきた。

…(中略)…

勇敢な宇宙船が飛び込めるほど大きいワームホールなら、ループは完全につながっているので、理論的にCTCが出来た後のどの地点にも戻ることができる。

…(中略)…

アレフエとヴォロビッチは、LHCの衝突現場のエネルギーなら過去との通信が可能なワームホールが出現すると推測する。LHCの研究者たちはもし未来の日付の奇妙なメッセージがモニターに現れたら、このことを真っ先に知るだろう。

(訳書『神の素粒子 一宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』よりの再度の引用部はここまでとしておく —※—)

(※ここで再度の引用をなしたことについては次のことも繰り返し述べておくこととする ⇒ [ステクロフ数学研究所]成員のイリーナ・アレフエバとイゴール・ヴォロビッチら申しようのことがある程度は市民権を得て欧米圏に受け取られているとの点については主流メディア「にさえ」同じくものが(ほとんど目立たないとのウェイト付けなされての節ありの中ながらも)取り上げられていたことから推し量れるようになっている。たとえば、検索エンジン上での **Time travellers from the future 'could be here in weeks'** とのそちら英文記事タイトル(『未来からのタイムトラベラーがここ数週間のうちにお目見えするかもしれない』といった語感の英文記事タイトル)の入力で同定・捕捉できるところの2008年2月発のデイリー・テレグラフ(The Daily Telegraph/英国主要新聞)のオンライン上記事にあって(以下、一部引用なすとして) “ **Prof Irina Aref'eva and Dr Igor Volovich, mathematical physicists at the Steklov Mathematical Institute in Moscow believe that the vast experiment at CERN, the European particle physics centre near Geneva in Switzerland, may turn out to be the world's first time machine, reports New Scientist.** ” (訳として)「ステクロフ数学研究所に所属の数理物理学者であるイリーナ・アレフエバ教授とイゴールヴォロビッチ博士は、ニュー・サイエンティスト誌が報ずるところ、ジュネーブにある欧州素粒子物理学の中核たるCERNの大規模実験が世界初のタイムマシンたりうると判明するであろうと考えているようである」(訳付しての引用部はここまでとする)と[報道]されているところからもステクロフ数学研究所の彼・彼女らの[タイムマシンとしてのワームホール]の生成にまつわる申しようがそれなりに市民権を得ている(時事的に報じられるとの[ニュース]ではなくなったために、最近の出来事(あるいは猿芝居)にしか意を向けぬとのマス・メディアとその情報の摂取者らには[過去形]と見られるに至っているにも受け取られるが)とのことが察せられるようになっている)

以上、再度の出典呈示をなして取り上げたこと、

[LHC 実験がワームホールを生成しうるとされている]

とのことに関して

[LHC 実験にての実験名(実験グループ名)に ALICE との名称が採用されていること]

との結びつきを観念して然るべきであろうとここで筆者が述べていることについては Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos (邦題)『パラレルワールド——11次元の宇宙から超空間へ』にあつて(つい先立ってその部を引いたように)

“Kerr exclaimed to a colleague, when he discovered this solution. The frame of Alice’s looking glass, in other words, was like the spinning ring of Kerr.” 「アリスが通り抜けた鏡の枠は、カーの見つけた回転するリングに相当する」

と表記されていることだけが問題となるわけではない。

同じくもの洋書 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos にあつて以下にて引用なすようなことも言及されていることも [ワームホール生成と LHC 実験の ALICE の命名のつながり] を観念して然るべきであろうと述べるどころの理由となっている。

出典(Source)紹介の部 76(2)

SOURCE

76(2)



Dante’s Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 76(2)にあつては、

[アリスの物語それ自体がワームホールの類と結びつく]

との見解が呈されているとのことを紹介しておく。

(直下、同様にオンライン上検索エンジンにての表記の長文の英文テキスト入力で同定できるところの Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos (原著初出 2005 年) にあつての CHAPTER FIVE Dimensional Portals and Time Travel の章よりの原著原文記述の抜粋をなすとして)

The first person to popularize wormholes was Charles Dodgson, who wrote under the pen name of Lewis Carroll. In *Through the Looking Glass*, he introduced the wormhole as the looking glass, which connected the countryside of Oxford to Wonderland. As a professional mathematician and Oxford don, Dodgson was familiar with these multiply connected spaces.

(大要)

「ワームホールのなるものを最初に大衆に広めたのはチャールズ・ドジソンことルイス・キャロルである。彼はオックスフォードの数学者として multiply connected spaces [多重連結構造] に知悉していたのだ」

(引用部は以上とする)

(出典 (Source) 紹介の部 76(2) はここまでとする)

直上表記のごとき引用をなしたところで申し述べるが、日系米国人物理学者ミチオ・カクが 2005 年に
出た同じくもの著作にて

[アリスが入り込んだ鏡の縁(ふち)のようなもの]

であると表している[カー・ブラックホール(のカー・リング)]というもの、そのカー・ブラックホール「をも」LHC 実験というものは生成しうると一部にて述べられてきたとのことがある。

同 LHC 実験については(直近にて再述のように)ワームホールを生成するとされているわけだが、そのことと結びつくようなところとして LHC 実験は[ブラックホール生成]のみならずもの[カー・ブラックホール生成]をなしうるとも述べられてきた実験ともなるのである(そちら典拠についても続いての段で無論、挙げる)。

その点、まずもってそこから述べるが([LHC 実験によるカー・ブラックホール生成の言及のされよう] の典拠について解説する前に述べておくが)、

「LHC 実験にあつての [アリス] 関連の命名はワームホールやカー・ブラックホールの生成可能性との絡みでなされたものである」

との言明は実験関係者によってなされていない、まったくもってなされていないとのことがある(少なくとも現行にあつてはそうした申しようは表出を見ていない)。

につき、LHC 実験にあつて[ALICE]などという名が —[ATLAS] (本稿にての先立っての段で既

述のように住民皆殺しを伴ったトロイア崩壊の原因となっている[黄金の林檎]の在り処を知る巨人アトラスと同一の名である) などと付された実験ユニット・実験グループと並列して一用いられていることには

[カー・ブラックホール生成を期しての伝での命名背景]

がありそうに「も」見える、そして、そこには(2004年原著初出の著作 *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions, and the Future of the Cosmos* にあつての申しように依拠して申し述べるところとして) [『鏡の国のアリス』作者ルイス・キャロルからして数学者としてアリス・シリーズにワームホールと結びつく[多重連結空間]の寓意を込めた]との話もが関係しているように見えるとのこと(既述のように)あるわけだが、だがしかし、世間的には

「ALICEとの命名背景は「A」「L」arge「I」on「C」ollider「E」xperimentの略字にある」

とだけされており、そちら命名動機は表向きにはなんらもって

[重力の妙技(ワームホールやカー・ブラックホールの類)の人為生成]

と結びつけられて「いない」とのことがある。

(:そもそももって、1999年まで加速器によるブラックホール生成可能性は批判的にさえ取り沙汰されてこなかった(言論動向として[無]だった)、2001年まで加速器によるブラックホール生成可能性は学界一丸となって否定されていた(とのことを本稿の前半部にて仔細に摘示してきた)という事情「も」ある中にてそうもなっている、ALICEの命名動機が[重力の妙技(ワームホールやカー・ブラックホールの類)の人為生成]と明示的には結びつけられて「いない」ようになっているとのことがある。

その点、90年代「末葉」までブラックホール生成可能性が完全否定されていた一方でのこととしてLHCにあつてのALICEグループの命名はおそらく1993年(の3月)の時点には「既に」決していたと申し述べられるようになっている。

本稿出典(Source)紹介の部36(2)にて呈示のCERNサイドオンライン文書に見るようにLHC実験の正式認可がCERN運営委員会によってなされたのは1994年とされている(“16 December 1994 The CERN council approves the construction of the Large Hadron Collider.”とされている)わけだが、そうした表記をなしているのと同じくものCERNサイドのオンライン媒体(timeline.web.cern.chとドメイン名付されたところにあつての[The Large Hadron Collider | CERN timelines]とタイトル付されてのオンライン媒体)にての

ALICE collaboration publishes letter of intent [ALICE コラボレーションが趣意書発行をなした]

との箇所に1 March 1993との表記がなされているからである(きたるべきLHC計画開始に向けてALICEグループの設立趣意書が1993年3月1日に出されていたとも)。それについて英文Wikipedia[ALICE: A Large Ion Collider Experiment]項目には現行、[ALICE Collaboration at CERN(CERNにてのALICEコラボレーション)]の発足時にまつわる場所として“Letter of Intent submitted in July 1993”「ALICEグループの趣意書は1993年7月に提出された」との記載がなされているようなところがあるが、『[発刊]と[提出]の時期に差分があるのか』(疑問符?を呈示したいところではある)といった見方をする程度にしか現行、筆者の方でも煮詰めていないのだが、とにかくも、[ALICEという(きたるべきLHC計画始動に

関連しての) 名称] は 1993 年には決していたとのこと、推し量れるようにはなっている。

となれば、である。(まじめな読み手にはお分かりいただけていることかとは思うが)、時期的先後関係の問題から見て「も」ワームホールやブラックホールの生成が「表立って」一切認められて「いなかった」折に命名なされての ALICE グループにカー・ブラックホール絡みの思考法などが反映されていたとはおよそにして想起しづらいと判じられるわけである)

ここまで[LHC 実験がワームホールやカー・ブラックホールを生成しうるとされること]が書籍『パラレルワールド — 11 次元の宇宙から超空間へ』の記述にみとめられもする [アリスの物語] 関連の寓意と結びついていると解されると述べてきたことについていくつか補足となることを([1]から[3]と振って)述べておくこととする。

[1]. ここでは Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions, and the Future of the Cosmos 著者の Michio Kaku に由来する、

「『鏡の国のアリス』作者ルイス・キャロルが数学者としてアリス・シリーズにワームホールと結びつく[多重連結空間]の寓意を込めた」

との物言いが妥当なのかには[疑義がある](invalid とも受け取れる)とのことがあることにも言及しておくのがフェアであると思われたのでそうすることとする。

につき、容易に特定出来ようところとして Through the Looking-Glass, and What Alice Found There こと『鏡の国のアリス』が世に出たのが 1871 年のことであり、ワームホール「的なるもの」への理論開闢前史にあつての想起がなされるようになった時期については(本稿にあつての先だつての段でも引用した英文 Wikipedia[Wormhole]項目の記述を引くが) “ **The American theoretical physicist John Archibald Wheeler coined the term wormhole in 1957; however, in 1921, the German mathematician Hermann Weyl already had proposed the wormhole theory in connection with mass analysis of electromagnetic field energy.** ” (訳として)「**アメリカ人理論物理学者ジョン・アーチボルト・ホイラーが 1957 年にワームホールとの造語を生み出した。が、ドイツ人数学者ヘルマン・ワイルが既に電磁場のエネルギーの分析との絡みでワームホール(的なるもの)理論を前面に出している**(訳付しての引用部はここまでとする)とされており、ドジソン(ルイス・キャロル)の先覚性発露の話からして時期的に間尺が合わないようにとれもする ——ただし、1871 年という時期は既に「非」ユークリッド幾何学、すなわち、空間を従前通りのものとして見ずに [マイナスの曲率を呈しての空間]などといった歪んだものを導入しての幾何学のダークホース的なる存在たる[リーマン幾何学]の成立を見ていたとされる折であり(非ユークリッド幾何学にまつわる英文 Wikipedia[Non-Euclidean geometry]項目にて “ Bernhard Riemann, in a famous lecture in 1854, founded the field of Riemannian geometry, discussing in particular the ideas now called manifolds, Riemannian metric, and curvature. ” と記載されているようなことである)、数学を専門としていたルイス・キャロルらを先駆的人間として[空間に対する位置付けに対する人類の理解]が変容をきたしだしていたとのことを考えるのに無理はないようにも「見える」とのことはあるにはある——)。

[2]. さらに述べておけば、[アリス]名称の LHC 実験にあつての使用については

『[ミラー・マター] (アリス・マター Alice matter) といった名称を振られての仮説上の物質「とも」結びつく理論の探究目的が加速器実験にはあったからでは?』

との申しようが相応の類 (LHC 実験にあつての(冠詞 a をも略称構成要素に取り込んで)先述なしたような「A」 Large Ion Collider Experiment に対する ALICE の使用を[常識の範疇]にて語りきらんとする向きら) によって持ち出される可能性もあるか、と思われるとのこともある。

その点、ミラー・マターないし「アリス・マター」というものについては以下のように一言解説されるものとなっている。

(和文ウィキペディア[ミラーマター]項目より引用するところとして)

「ミラーマターは通常の物質に対する仮説上の鏡像パートナーである。これは通常の物質とはパリティが反転しており、パリティ対称性を保存するために導入される。シャドーマター (Shadow matter)、アリスマター (Alice Matter) または鏡像物質ともいう」

(和文ウィキペディアよりの引用部はここまでとする —※—)

(※ちなみに英文 Wikipedia[Mirror matter]項目にあつてはほぼもって同文のこととして “ **In physics, mirror matter, also called shadow matter or Alice matter, is a hypothetical counterpart to ordinary matter. [. . .]** Modern physics deals with three basic types of spatial symmetry: reflection, rotation and translation. The known elementary particles respect rotation and translation symmetry but do not respect mirror reflection symmetry (also called P-symmetry or parity). Of the four fundamental interactions — electromagnetism, the strong interaction, the weak interaction, and gravity — only the weak interaction breaks parity. [. . .] However parity symmetry can be restored as a fundamental symmetry of nature if the particle content is enlarged so that every particle has a mirror partner. The theory in its modern form was written down in 1991, although the basic idea dates back further. **Mirror particles interact amongst themselves in the same way as ordinary particles, except where ordinary particles have left-handed interactions, mirror particles have right-handed interactions.** ” との表記がなされている)

以上のような定義がなされてのミラーマターに関わるところとして —門外漢なりの流布情報についての解析については延々と脇に逸れることになりかねないために割愛するもの—

Parity conservation[対称性の保存]

Parity violation[対称性の破れ]

といった概念が学究らの間で問題とされてきたようなのだが(それは[ミラーマターは通常の物質とはパリティが反転しており、[パリティ対称性を保存する]ために導入されているものである]と上にてのウィキペディア引用部に記載されていることからして伺い知れることである)、 それら概念[対称性の保存][対称性

の破れ]についての理論的深化を目指すのが **LHC** 実験の目的の一つとして挙げられているとことがある。

については英文 Wikipedia[Large Hadron Collider]項目にあつての Purpose[実験目的]に挙げられている多数の項目の中のひとつとして

“ Why are there apparent violations of the symmetry between matter and antimatter? See also CP violation.” 「物質と反物質の間の対称性の中に明示的なる破れがある理由は何か?(とのことを検証するのが **LHC** 実験の目標のひとつである)。同点については **CP 対称性** の破れも参照のこと」

とことが挙げられているといったことから確認できるようになっている。

それがゆえ、そう、[鏡]といったものと親和性強くもの命名規則を伴ってきたとの[対称性]にまつわるトピックを検証する実験でもあるがゆえの[異世界への扉たるワームホール]とは一切無縁なるかたちでの(鏡の国の)[アリス]であるなどとのことが相応の向きには主張されるかもしれないと「思われもする」。

だから述べておくが、

「**LHC** 実験にあつての対称性にまつわる研究が [鏡 ⇒ アリス ⇒ アリスの命名] とのかたちでアリスの命名背景にあると考えるのは色鮮やかな孔雀の羽から一色をとってその色でもって孔雀の略称を決めていると述べるぐらいに不自然性を感じさせるものとなろう」

と見立てられもするところである ——につき、アリスの命名事由としてそういうことを持ち出すのは不自然 **unnatural** であり、不適切 **invalid** であろうと見立てられもすると述べているのだ (他面、ワームホールが生成されうるとの考えは加速器 [実験]なるものの[本質]を問うものであると述べても差し障りあるまい、そうも判じられるだけの論拠となる相関関係ら(不快な記号論的かつ意味論的な意味合いを見事に共有し合っているところの相関関係ら)を長大なる本稿にあつてのここまでの段で示してきているし、また、さらにもって論拠となるところを示す所存である)——)

[3]. また述べておくが、

[LHC 実験はパラレルワールドの道を開く実験である]

などとは少なくとも書籍『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』という書籍の中では一切述べられて「いない」とのこと「も」断っておく (: 『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』という書籍でワームホールやブラックホールが人為生成されたうえでそれがゲートたりうると言及されているとの文脈は[ニコライ・カルダジェフという物理学者が案出した高度文明のランク付け]にあつて遙か人類を引き離れたところにある[タイプ III]と呼称されての文明の考えられるところのやりようにまつわる予測の部であつて、人類の話、それも **LHC** 実験にまつわる場所としてそれが実現可能であるなどとのことは同著『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』自体ではまったくもって言及なされて「いない」。書籍『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』では[LHC がマイクロ・ブラックホールを大量に生成しうる]とのことには何度か筆が割かれているのだが、そうして生成された極微ブラックホールがゲートとなるとは述べられていないのである ——**LHC** がなせるのはパラレル・ユニヴァースの存否を探索することだけであるとも——) 。

他方で[LHC はワームホール(アインシュタイン・ローゼン・ブリッジ)を生成し

うる]とのことを述べているとの[別の学者ら](ステコロフ数学研究所のイリーナ・アレフェバ)がいる一方でのこととして、とにかくも、そうしたことがある。

さらにもう一筆付け加えておけば、本稿筆者は[権威の物言い]を——たとえ権威がその方面でいくら偉い学者に由来するものであるといっても——全幅の信を置くに足りるものであるとは思って「いない」し、また、権威の物言いに過分に信を置くべしとのことを強調するような人間でもない(権威が信頼に値するケースは[世界に裏表が何らなく、また、権威の選別にあつて完全に能力に比例した公正さが担保されている]ときだけだろうが、多くの向きがご存知のようにこの世界には[ふんぞりかえっている紛いもの]が数多おり、また、そもそももつて、この世界そのものが虚偽を孕んでいるといった側面すらも見受けられるとのことがある)。

勘違いしないでいただきたいのだが、

[真偽不確かな仮説の類] (ここでは[カー・ブラックホールなるものが時空をつなぐ扉となること][LHC がワームホールやカー・ブラックホールを生成しようとされていること]でもいい)

を偉いとされる学者らが紹介し、云々しているからといって、そのことを[真実]と仮定して重んじるべきであるなどといった短絡的なことをこの身は申し述べたいのでは「ない」(筆者の申し分を理解していない、また、理解する能力も十二分にないとの向きはそのように短絡的に判ずる(そして、相応の結末が具現化した際には字義通りの屠所の羊として殺されていくとのその状況を[それで変えられないようならば絶対に変えられないとの式]で訴求するとのことの意味合いを理解しない)ことかとは思)。

「問題なのは、」権威サイドの学者ら——その人間がどこまで真摯で、どこまで真実に近いことを語っているかの問題とは別個に見た上での取りあえずも学者稼業の向きら——が[カー・リングなるもの][ワームホールなるもの]にまつわる言説として上のようなことを述べているとのこととともが現実存在しており、そうした学者らの専門家としての申しようが、(それらがどこまで信用に値するかは門外漢には判じることができないものであれ)、

[その他の山とある事情ら、および、その間に認められる「専門家でなくとも指摘できる」との奇怪な相関関係ら]

と「結びつくにもほどがあろう」との按配での「異常な」密結合関係を呈しているとのことまでははきと指し示せるようになってしまっていることであり、その背景にどういう危険性が控えていると考えられるのかが相関関係、および、にまつわっての意味合いから摘示できるようになっているということである——本稿「全体」を通して固い因果関係の問題として何を筆者が重んじているのかよくよくも検討いただきたい(につきここでは[理解力(機械に強制された硬直的思考の如きものではなく人間としての意志の力)を有した向き]に次のような端的な要望を出しておきたい。[トロイアを滅ぼした木製の馬の伝説とはいかようなものだったか。その伝説にまつわってこここれに至るまで何をどう本稿にあつて指摘してきたのかよく把握いただきたい])——。

(以上、ここまででもつてして[LHC 実験がワームホールやカー・ブラックホールを生成しようとされること]が書籍『パラレルワールド——11次元の宇宙から超空間へ』の記述における[アリスの物語]関連の寓意と結びついていると解されると述べもしたことについていくつか補足しておきたかったことを申し述べた)

直近までをもってして
[そうであるように解される]
にも関わらず、
[「LHC 実験でワームホールやカー・ブラックホールの類が生成されるとされている」ことと[LHC 実験
でアリス関連の命名規則が採用されている]ことは明示的に結びつけられていない]
とのことにまつわる指摘をなしてきた (LHC のワームホール生成にまつわる言われようは既に先行する
段で指し示しもしている) として、次いで、

[LHC のカー・ブラックホール「生成」可能性にまつわる言われよう]
についての典拠紹介をなしておきたい。

出典 (Source) 紹介の部 76 (3)

SOURCE

76(3)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 76 (3) にあつては

[LHC 実験でブラックホールが生成された場合にそれはカー・ブラックホールたりうる
とのことを論じての物理学者ら論文が世に出ていた]

とのことを紹介しておくこととする。

具体的には、である。そこにみる内容の真偽・適否はどうあれ、カー・ブラックホール (の如きもの) が
LHC 実験で生成される可能性について論じている (あるいは 時事性を重んじれば論じて「いた」か) と
の資料の「一例」表記を下になしておく 一尚、資料名の隣に付した () カッコ内で資料の入手方法、資
料の特質などを表記している 一。

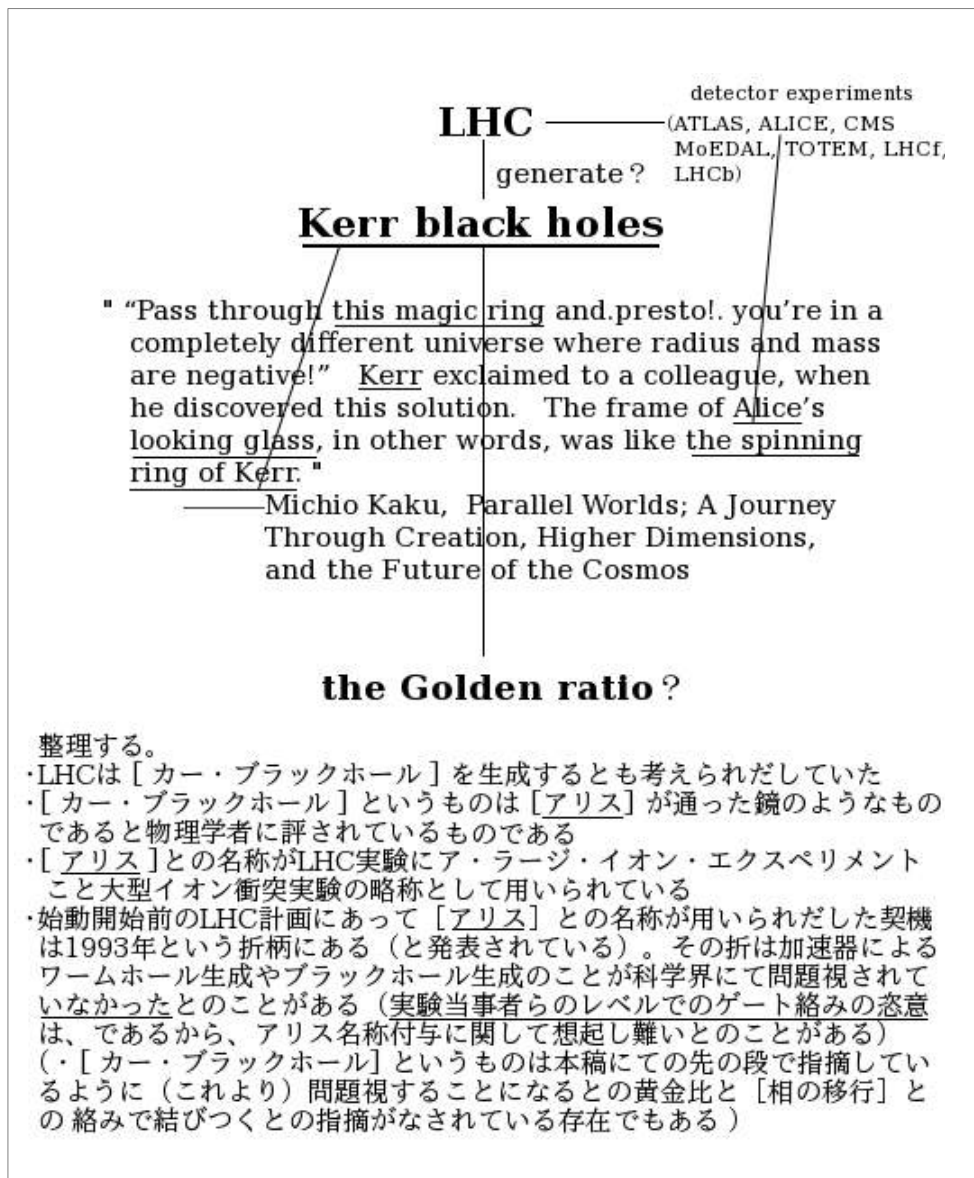
([LHCによるカー・ブラックホール生成可能性]について指摘なしていたものとしてオンライン上より容易に捕捉できるところの資料らとして)

・Extra dimensions in LHC via mini-black holes: effective Kerr-Newman braneworld effects との論稿 (現時、オンライン上にての論稿配布サーバーたる arXiv にて公開されている 2006 年発の論稿で表記の英文タイトルの入力で特定可能. 作者らは「現行」ブラジルの国立大で現行テニユア (終身在職権) の資格を持っているようである物理学者らとなる。同論稿にあってはその冒頭頁イントロダクションと書かれた部にて “ It is a consequence of such models the possibility that Kerr-Newman mini- black holes can be produced in LHC.” (訳として)「LHC にてカータイプのミニ・ブラックホールが生成される可能性がそのようなモデルの帰結である」と表記されている)

・Black hole formation in the head-on collision of ultrarelativistic charges との論稿 (現時、表記の英文タイトル入力でオンライン上よりダウンロード可能な論稿. 作者らは日本とカナダのそれぞれの物理学者ら. 2006 年発の論稿. その 2 と振られてのページにあっての INTRODUCTION の部にて “ If such TeV gravity scenarios are realized, we would be able to directly observe black hole phenomena in planned accelerators such as the Large Hadron Collider (LHC) at CERN. The general scenario is expected to be as follows. First the horizon forms (the black hole production phase), **after which the black hole is expected to go to a stationary Kerr black hole by radiating gravitational waves (the balding phase).** ” (訳として)「CERN の LHC のような加速器にてそのようなテラエレクトロンボルト領域での重力にまつあるシナリオが容れられるとするならば、考えられるところの一般的なシナリオは次のようなものになるだろう。第一に地平線が形成され(ブラックホール生成フェーズ)、その後、ブラックホールが重力波を放しつつ固定化されたカー・ブラックホールに移行することが期待される(無毛化フェーズ)」と表記されている)

LHC がブラックホールを生成するとして、それがカー・ブラックホールとなりうるとの物言いが (少なくとも 2006 年時点では) 学者らになされていた —それが適宜適切な物言いなのか、どれくらい主流説から逸脱を見ているのか門外漢には推し量る余地がないところながらもなされていた— ことはオンライン上より現行、誰でもダウンロード出来るようになっていとの上論稿らより伺い知れるようになっている。

(出典(Source)紹介の部 76(3)はここまでとする)



以上のようなことが摘示できるようになっていることについて「さらにもって」指摘しておきたきところについて述べておく。

その点、本稿の前半部にあつての **出典 (Source) 紹介の部 16** を包摂する部位にて「より後の段にてさらに細かい話をなす」として記載したことでもあるのだが、

[実験が開始され、ヒッグス粒子が発見されるに至るまでの間、LHC でブラックホールが生成される見込みよりもって低く見積られるようになっている]

との話が専門家らより出るに至っているとのことがある (については「多く非常に嫌がられているところを」迷惑承知のうで敢えても [匿名回答との条件] で手前が意見聴取試みた大学関係者・実験関係者 (からデータ得ているとの理論物理学者的色彩強き国内の向き) よりもそのように、実験開始後、ブラックホール生成可能性は低く見積られるようになっていると聞き及んでいるとのこともある —— 追記として: 向きによっては「実験開始してからしばらくしてより全く可能性がないと見られるようになった」との見方すらあるとの趣旨のことを述べていたこともあり、「一部実験関係者だけが期待を持っているだけである」との物言いも耳にした——)。

本段執筆時現在、複数方向より聞き及ぶところに至っているとのそうした風潮 —— LHC 実験ではブラックホール生成見込みが極めて低く見積られるようになっているとの物言いがなされるに至っているとの風潮—— の根強さを傍証するようなことが物理学者書籍の記載にもみとめられることは本稿のか

なり先の段にても言及なしていた。次のようなかたちで、である。

(直下、著名な物理学者リサ・ランドール (Lisa Randall) の手になる著書 KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR の邦訳版『宇宙の扉をノックする』(原著の刊行年は2011年、NHK出版よりの邦訳版刊行はここ最近のことで2013年)にての253ページから254ページ記載内容につき **出典(Source) 紹介の部 16** で引いていたところを)「再度の」原文引用をなすところとして)

「この計算により、たとえ素粒子物理現象の高次元説明が正しかったとしても、オージェ実験で微小なブラックホールが見つかる可能性はないだろうとわかってみると、ほかの物理学者が LHC でふんだんにブラックホールが作られるかもしれないと主張しているのはどうしてなのかと私たちは不思議に思うようになった。その見積もりは、私たちの計算ではやはり多すぎだったのだ。たしかにおおざっぱな概算では、そうしたシナリオにおいて LHC は多数のブラックホールを作り出すのかもしれない。しかし私たちが行なった、より詳細な計算は、そうはならないことを実証していたのである。パトリックと私は、危険なブラックホールのことなど考えてもいなかった。私たちが知りたかったのは、小さくて無害な、急速に蒸発する高次元ブラックホールが生み出されるのかどうか、そして、それにより、高次元重力の存在が暗示されるのかどうかだった。そして、実際に計算してみると、それは皆無ではないにしろ、めったに起こらないことだった。もちろん、もしありうるのであれば、極小ブラックホールの生成はラマンと私が提唱した理論の素晴らしい裏づけとなっていたらう。しかし科学者として私は計算を直視しなくてはならない。私たちの出した結果を考えると、誤った期待を抱くわけにはいかなかった。パトリックと私は(そして大半のほかの科学者も)、たとえ極小のものであってもブラックホールができるとは考えていない。これが科学の仕組みである」

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、グーグル検索エンジンにてのテキスト入力で該当部がオンライン上より捕捉できるとの原著 KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR よりの引用もここにてなしておく。(以下、原著 KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR の紙面 p.175 よりの「再度の」原文引用として) “ After recognizing that Auger wouldn't discover tiny black holes, even if higher-dimensional explanations of particle physics phenomena were correct, our calculations made us curious about the claims other physicists had made that black holes could be produced in abundance at the LHC. We found that those rates were overestimates as well. Although the rough ballpark estimates had indicated that in these scenarios, the LHC would copiously produce black holes, our more detailed calculations demonstrated that this was not the case. **Patrick and I had not been concerned about dangerous black holes. We had wanted to know whether small, harmless, rapidly decaying higher-dimensional black holes could be produced and thereby signal the presence of higher-dimensional gravity. We calculated this could rarely happen, if at all. Of course, if possible, the production of small black holes could have been a fantastic verification of the theory Raman and I had proposed. But as a scientist, I'm obliged to pay attention to calculations. Given our results, we couldn't entertain false expectations. Patrick and I (and most other physicists) don't expect even small black holes to appear. That's how science works.**” (原著よりの引用部はここまでとしておく))

上の繰り返しての引用(本稿前半部にてなした原文引用を再度繰り返しての引用)でもってして

[リサ・ランドール(ランドール・サンドラム・モデルと呼ばれる有名な理論モデルを呈示

したカリスマ女物理学者でブレーンワールド理論の大家として知られる有力物理学者)が「2011年時点の物言いとして」LHC 実験でブラックホール生成がなされる可能性が否定される方向に向かっているとのことを強調している —— パトリックと私は(そして大半のほかの科学者も)、たとえ極小のものであってもブラックホールができるとは考えていない。これが科学の仕組みである “Patrick and I (and most other physicists) don't expect even small black holes to appear. That's how science works.” —— こと、お分かり(あるいは再確認)いただけるだろう。

だが、以上のようなことがある一方で次のようなこと「も」がまたある。

[2012年以降になっても別の実験関係者由来の科学誌・書籍などに見受けられる物言いではブラックホール生成可能性が否定されて[いない]とのことがある]

直下、表記のことについての出典を挙げることにする。

出典(Source)紹介の部 76(4)

SOURCE

76(4)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 76(4)にあつては、

[(LHC「実験」開始後、実験データ収集が進捗を見てより「ブラックホール生成はどうやらなされないようだ」との見立てが呈されだしているとのことがある一方でのこととして)2012年以降になっても実験関係者由来の科学誌・書籍などに見受けられる物言いではブラックホール生成可能性が否定されていないとのことがある]

とのことを示す資料を紹介しておく。

(国内刊行の多数書籍の中で2012年以降もブラックホール生成可能性を否定「していない」内容の記述がなされていることを一覧紹介することもできたが一例表記にとどめるとして)

国内の科学に親和性高き向きを購買対象としているとの雑誌、Newton誌のヒッグス粒子発見時の増刊号 —書店に並んでいたもの— の内容を下に挙げておく。

(直下、株式会社ニュートンプレス刊行『ニュートン別冊 ヒッグス粒子 素粒子の世界』(二〇一二年一〇月十五日発行日付の号)p153よりの原文抜粋をなすとして)

Newton—もし余剰次元が実在すれば、ATLAS 実験で、微小ブラックホール(マイクロ・ブラックホール)が生成される可能性を指摘する理論もあるそうですね。

ジアノッティ—マイクロ・ブラックホールを発見できれば、余剰次元が存在していることの明確な証拠になります。マイクロ・ブラックホールが確認できれば、私たちの宇宙観にまったく新しいシナリオがひらけてくるでしょう。マイクロ・ブラックホールは、発生後、ただちに消滅するため、危険性はありません。地球上の加速器では絶対に再現できないほど、きわめて高いエネルギーと強度で、宇宙線が地球大気に衝突しているという事実(36 ページ参照)からも、安全であることがわかっています。宇宙空間ではこうしたすさまじいエネルギーをとまなう事象がおきていますが、私たちはこうして無事に生活していますからね。

(引用部はここまでとしておく —※—)

(※以上は刊行後まもなくもながら自身が関わっていた裁判での国内行政訴訟法廷にあって写しを2012年時点での裁判供用文書(準備書面)に付していたところの2012年10月発行日付表記の国内流通雑誌の記載内容となり、その概要としては

[ニュートン誌(手前なぞは科学界の当たり障りないところをまとめて紹介するとの「官報」程度の雑誌とも見立てている)がCERNのアトラス実験の責任者でもあり、広報にも奔走しているところのファビオラ・ジアノッティという女物理科学者へのインタビューを掲載している]

とのものである。

お分かりだろうが、

[表記のニュートンの別冊号が出た折(2012年下半期)からしてブラックホールは生成されうる]

との可能性に対する言及がなされている(同じくものが記載されていることが事実か否か疑わしいと思われた向きはニュートン誌の表記の別冊号のバックナンバーを借りるなり何なりして手に取られてこの身が正しき原文引用をなしているのか確認されたい —述べておくが筆者は[引用行為]でもって[虚偽]をなすような[無意味であるだけでなくマイナスとなるようなこと]をなす人間ではない(オンライン上では「匿名の」「人間の屑」のような如きがときにそういうことをやり遂せることも目に付くが(なかんずく相応の狂信的集団がやりたい放題をなせるような日本では、である)、私はそのようなことをなす人間ではない)——)。

にも関わらず、ブラックホール生成が肯定的に言及されているのと同時期からしてリサ・ランドールの書籍などでは(先にてその内容を引用しているように)ブラックホール生成の可能性は「ほぼない」との言及がなされ、また、筆者自身、国内の科学者から同様の意見が実験開始後より固まっていたと聞

き及ぶとのことがあるのである。

といった、

[脇より望見されるところの専門家筋の意思・見解の「まったくもってしての」不統一感]

からしてブラックホール生成可能性(どこから介入されることもなく、の実験機関関係者だけの営為によつてのブラックホール生成可能性)がいかほど残置しているのか、それがどれだけ強くも否定されるようなものなのか、なかかもって筆者含めて門外漢には判断しづらいようになっている(あるいは「専門家向けの身内の論調」と「素人向けの話」を選り分けて関係者には安全であるとの認識を、非関係筋には「当を得ていない批判」をなさしめる、との意思不統一を図るといった力学がある可能性もあるか、なども穿つのだが、それは置く)。

尚、一話が脇に逸れるが— 表記のニュートン誌よりの抜粋部ではアトラス実験のスポークスパーソンであるファビオラ・ジアノッティ(という人物)が「宇宙線との比較から LHC 実験は絶対安全である」

と述べているとのありようが見受けられるわけだが、(食い扶持との兼ね合いで権威との蜜月関係を重視する御用雑誌との感ありで)インタビューなしでニュートン誌もそれ以上細かいことも書いていないところとして、その宇宙線に依拠しての安全性主張についてからして複雑な論点が伴っているとのことがある(筆者のような注意していないと錯誤をよくも呈してしまいがちな門外漢でも指摘できるところとして関係筋の発表動向・英文論稿にてそういう書かれようがなされているとのことである)。

加速器実験実施機関が安全性論拠として最大限重視している論稿の中で「電氣的に中性で、かつ、蒸発しない安定化したブラックホール」が生成された場合、宇宙線の比較対照だけでは安全性が主張できない」

との論点があることを実験広報責任者であるジアノッティ申しようを掲載しているニュートン誌は言われていないがゆえにか端折ったのか一切言及していないとのことである。

(ブラックホール生成それ自体の可能性論にまつわつての言われようのことから「これまで取り沙汰されてきた安全性論拠」の方に話がずれての脇に逸れての表記を続け)、直上にて引用の誌面では一切言及されていない安全性にまつわる論点としては、より具体的には

「電氣的に中性で、かつ、蒸発しない安定化したブラックホール」が生成された場合、宇宙線生成の電氣的に中性な極微ブラックホールが地球を通り抜けると考えられているところ、他面、加速器生成のそうもした「電氣的に中性な」極微ブラックホールは生成場所の近傍を回転し続け、地球圏に残置し続ける「不自然な」人工物となりうる、であるから、追加の安全性論拠が必要である」

との視点(実験関係者が「そこまで顧慮している」とのスタイルを前面に押し出しているとの視点)が存在している、そのことがすっぽりニュートン誌誌面に見るジアノッティ申しようでは剥落しているとのことがある。

実験機関、たとえば、国内の高エネルギー加速器研究機構(KEK)のような CERN の安全性論拠をそのまま和訳して発表している機関の文書 — 「kek.jpとのドメインで公開されている「LHC の安全性について」(The safety of the LHC の和訳)」とのタイトルが振られての HTML 文書 — にておよそ以下のように表記されているところが同じくものことの絡みで(常識的な線ですら)問題視されているところとなる。

(高エネルギー加速器研究機構(KEK)ウェブサイトの「LHC の安全性につ

いて(**The safety of the LHC** の和訳)]とのタイトルのページより原文引用するところとして)

“もしブラックホールが中性で電荷を帯びていなければ、地球に対しての相互作用は非常に弱いので、宇宙線によって作られた場合は無害に地球を通り抜けて宇宙に行きます。ところが LHC によって作られた場合は、地球に残る可能性が考えられます。しかしこの場合でも、宇宙には地球より非常に大きくて、より密度の高い天体があります。中性子星や白色矮星などの天体と宇宙線の衝突でブラックホールが生じたとしたら、その星の中に留まります。そのような密度の高い天体が今も存在しているという事実から、LHC ではいかなる危険なブラックホールも作れないということを示しています”

(KEK 発表文書よりの引用部はここまでとする)

脇に逸れての話がさらにもって長くなるが、同じくものは俗間にて執筆者ら頭文字をとって GM Paper と呼称されている実験機関関係者らの 2008 年発の安全性訴求論稿、**Astrophysical implications of hypothetical stable TeV-scale black holes**『テラエレクトロンボルト・スケールの仮説的安定化ブラックホールに対する天体物理学に基づいての示唆』に目立って主張されることとなりもしたことである (右論稿 Astrophysical implications of

hypothetical stable TeV-scale black holes (2008) ではその 5.2 Stopping: neutral black holes [中性ブラックホールの滞留]との節にて安全性の論拠にまつわっての記述がなされているわけだが、そうもした同論稿の冒頭部にあっては(引用なすところとして) “ We analyze macroscopic effects of TeV-scale black holes, such as could possibly be produced at the LHC, in what is regarded as an extremely hypothetical scenario in which they are stable and, if trapped inside Earth, begin to accrete matter. We examine a wide variety of TeV-scale gravity scenarios, basing the resulting accretion models on first principles, basic, and well-tested physical laws.” (訳として)「我々は[LHC にて生成されうる TeV スケール (LHC 実現の兆単位の電子ボルトにて生成されうるスケール) のブラックホールの極大レベルでの影響を「生成ブラックホールが安定的なものであり、かつもって、地球の内部に留め置かれ物質呑み込んでの増大傾向を呈する]との極度に仮説的シナリオでもってして分析した。我々は広い範囲で TeV スケールでの重力シナリオを増大基調を第一に考え、そして、基本的かつよく検証された物理原則に則ってのモデルらでもって検証した」と申し述べられもしており、同じくものことにまつわっての帰結として neutral black holes に関してそちら冒頭部にて “ We argue that cases with such effect at shorter times than the solar lifetime are ruled out, since in these scenarios black holes produced by cosmic rays impinging on much denser white dwarfs and neutron stars would then catalyze their decay on timescales incompatible with their known lifetimes. ” (訳として)「それらシナリオにての宇宙線生成のブラックホールが(中性を呈しており)(普通ならば宇宙に放出されるどころながらも)よりもって密度が高い白色矮星や中性子星に影響を与えてそれらに時ならぬ崩壊をもたらすとのことでもってして、(だが、実際には電気的中性を呈しての宇宙線生成ブラックホールとのありうべきものを内に貯えてもいよう白色矮星や中性子星は寿命に一致していない崩壊をなんらなしていないことをもってして)、太陽の寿命以下のスケールでの短期間影響は排除できる」との結論への言明がなされているところとなっている)。

その点、海外の法律家(ノースダコタ大で教職に就いている米国法曹 Eric Johnson エリック・ジョンソン)の手になる流布版文書、本稿前半部にてそち

ら内容を問題視してきたところの、THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD『ブラックホール裁判事例;世界の終わりへの差し止め』の848と振られた頁にてほぼ同文のことについての言及がなされており、(以下、引用なすところとして)“ Since the Earth is mostly empty space, it could well be incapable of stopping any black holes that are produced by cosmic rays. Thus, cosmic ray-produced black holes might exit Earth as fast as they were created. LHC-created black holes, on the other hand, would not necessarily evacuate instantaneously. Because protons in the LHC are propelled around the ring in opposite directions and collide nearly head-on, the momentum of each proton will largely cancel out that of the opposite proton, meaning that any resulting black holes could end up loitering in the vicinity.” (拙訳として)「地球はほとんど空虚な (※註記:原子のサイズに対する原子核の極小さという特性より「密度が低い」と述べているのだと解される) 空間であるから、宇宙線にて生成されたブラックホールを留め置くことはできない。このように宇宙線生成ブラックホールはたとえ生成されても間を置かずに地球より出ていく。他面、LHC製ブラックホールは必ずしも即時に立ち退かないとなりうる。LHCにあっての陽子らは反対方向から周軌道上を前進させられほとんど正面衝突のような格好となっているのだから、それぞれの陽子の運動量は反対方向よりの陽子の運動量におおむね相殺される格好となり、そのことは結果としてのブラックホールらがその限界を回り続けるだけのことになりうる」(訳付しての引用部はここまでとする)

と表記されているところがその部となる。
門外漢でも指摘できるような、それでいて専門的な色彩が強くを帯びていると受け取られやすいとの脇に逸れての話が長くなったが、筆者のスタンスはこうである。

「恣意的に構築された人間の科学にあっては顧慮されるべきところが顧慮されていない側面がある」

「もし仮に第三者の介入、人間のテクノロジーでは検知もままならぬとの重力波(多世界解釈で多数の世界をペネトレイト、貫通しながら進むとの申しようもなされている電磁波近似のもの)なぞのテクノロジーに知悉した「他」文明——馬鹿げたウチュウジン陰謀論とでも思うだろうか?だが、筆者は宇宙人陰謀論者などで「はない」——の介入を想定した場合、すべての安全性論拠は「当然に」覆されることになる」(ファウストであろうと薄っぺらい中身空っぽの紛い物らでも学者という人種がそれこそ不磨の大典のように重んずるとの basic, and well-tested physical laws「基本的かつよく検証された物理法則」というものに「人為的」例外があった場合、彼ら学者論理は全て破綻を来たすことになりかねないわけだが、[先進文明が(多世界を貫通するとされる)重力波でゾンビ人間らを手繰っているといった可能性]がといった中で一切顧慮されていないとすることが問題になる)

そして、筆者が殊に重要視しているのは第二の懸念までもが —もとより[この世界]そのものが[悪魔のように振る舞いもする存在に魂を売り払ったが如く多くの人間ら]に無理矢理それらしくも「根本より」演出させているものであるとの[可能性]を強調せずにも問題となるところとして— 「現実に」的を射ているのではないかとのことである(脇に逸れての表記はこれにて終える)

(出典(Source)紹介の部 76(4)はここまでとする)

繰り返し強調する。上述のような雑誌ニュートンが出た折(2012年下半期)からして方々で(それが安全なものであると強調されているものであれ)ブラックホール生成可能性が言及されており、にも関わらず、他面、

「ブラックホール生成可能性それ自体が(2009年後期の実験本格開始後)ヒッグス粒子発見に至る前から[全くない]と見積られるようになっていく」

との専門家申しようがある (2011年に世に出たリサ・ランドール著書 KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR 邦訳版『宇宙の扉をノックする』(NHK出版)に見る[パトリックと私は(そして大半のほかの科学者も)、たとえ極小のものであってもブラックホールができるとは考えていない。これが科学の仕組みである] “Patrick and I (and most other physicists) don't expect even small black holes to appear. That's how science works.” との申しようなどがその典型例となる) という、

[認知的不協和をもたらすような動向]

があるとのこと、—そういう向きにこそ本稿を読んでいただきたき世を変えんとするだけの自身一個の意志の力を有している向きにあっては—、押さえておくべきであろうと考えている。

(【頻繁に外挿しての脇に逸れての話として】):

直上、そこよりの抜粋をなしているリサ・ランドールの書籍 KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR 邦訳版『宇宙の扉をノックする』(NHK出版)にみとめられる別のセクションよりの申しようを原文引用とのかたちで引けば、—そこからして相互に全くもって矛盾する申しようともとれるのだが—

“この賞と次の章を読んで納得してもらえるといいのだが、実際にブラックホールによる地球の消滅にやきもきするより、自分の401k(確定拠出年金)の中身が減っていくことを心配するほうが、よほど有益に時間を使えるというものである。LHCにとってスケジュールの問題や予算の問題がリスク要因になったことはあっても、ブラックホール問題がリスク要因になったことは一度もない——これは純理論的な考えからいっても、それを補足する精細な調査によっても、実証済みである”(以上、訳書.243 ページよりの原文引用)

との申しようと

“こういっても私の偏見にはならないと思うが、LHCのブラックホールの場合、私たちは論理的に思いつけるかぎりのあらゆる潜在的なリスクを検討した”(以上、訳書282 ページよりの原文引用)

との申しようが混在するとのかたちでなされていたりもする(：重箱の隅をつつくような申し分であろう、小人、下らぬ輩のやりくちであろうと人によっては受け取られるかも知れないが、ブラックホールがリスク要因になったことはない)との申しよう(ちなみに原著 Knocking on Heaven's Door にての CHAPTER 10 BLACK HOLES THAT WILL DEVOUR THE WORLD の表記は “Although schedules and budgets posed a risk for the LHC, theoretical considerations, supplemented by careful scrutiny and investigations, demonstrated that black holes did not.” となる)と [LHCのブラックホールの場合、私たちは論理的に思いつけるかぎりのあらゆる潜在的なリスクを検討した] との申しよう(こちら Knocking on Heaven's Door にての CHAPTER ELEVEN RISKY BUSINESS の表記は “I don't think it is my bias that leads me to say that in the case of LHC black holes, we examined the full range of potential risks that we could

logically envision.”となる)との真向いから矛盾するように「とれる」ことら、そう、[リスク要因 Risk Factor] と [潜在的リスク potential risks] との言葉・概念がまったく別の意味合いのものとならない限り矛盾するように響くとの奇態なる言い様が同じくもの科学読み本に箇所隔てても現われていたりする——筆者も裁判などでよく知る [彼ら] のやりようからすればそれとてさして悪質ではない(ブラックホール生成という問題の性質を考えてみても一連の行為群の中で相対的に見ればさして悪質ではない)、[よくもあること]なのだが——)。

以上、言及なしたところで書いておくが、表記のように[重み]として軽やかな物言いをよくもなす「彼ら」やりように本質的な意味でいかような問題が伴っているのかは本稿の末尾で深くも計数的観点で取り上げることとする。本稿の末尾近く段にてLHCにあってはどのようなリスクの呈示のなし方が実験機関側公式発表グループ、そして、部外の反対派のように見える有識者に計数的になされてきたのか、また、そこに認められる計数的側面にいかような問題点が伴っており、それが社会に、また、社会の構成単位としての人間・組織体の群れにいかように無視されてきたのかの問題について深くも取り上げることとする所存である。そのように先立って前言しておく——[実利的な他の目的]があつてのことながら、筆者は経営学修士なぞという実の下らぬ学位(現行、他に色眼鏡越しに見られるとの意で足枷にしかならぬかを見るに至っている下らぬ学位)をとった人間となりもするのだが、『といった人間なりの悪癖であろう』などと思つてほしくはないところとして、[リスクにまつわつての関係者らによる計数的示唆のありよう](実験機関や批判的学究による「地球倒壊リスク10万分の1は期待値としていかなものか」云々の呈示ありよう)を望見したうで別観点に依拠しての確率論的分析を本稿末尾の段にてなすこととする。すなわち、本稿末尾近くの[付録と位置付けての段]にて(一部例示もなすこととする)専門家筋やりよりも遙かに単純で分かり易い、が、よりもつて問題となるところの確率的問題点を呈示することとする(確率論を煮詰めたことがある大卒以上の数学的見識がある向きにあっては「なるほど、そういう式での話を(平易なるやりかたで)なすか」と思ふのではないかとの式にての確率的問題点の呈示をなす)。しかし、など書いても当然に『近寄りがたい話だ』と思われる向きも多からうか、とも思ふので書いておくが、本稿にて[世間人並み]の識見を蔵した向きが知識の欠如より「まったくもつて不可能」とまでに理解しがたいとらえられる部分はおそらくその部だけであること、お断りししておく。そう、長大なるものとなっている本稿はそも、万人(といつても、カルトの狂信者のように特定の[現実]を処理しないで自分達の[願望]を[現実]と強くも履き違えているような狂っているとの類は別だが)が[状況を理解できるように]とものしているものであり、[臆病さ][偏狭さ]というファクター以外で近寄りがたい話を「わざわざ貴重な時間を割いて」なそうなどというものではない——)

さらに話を続けるが、直近にて述べたようなこと、

[「ブラックホール生成は(実験が進捗を見た)現在もつてしておよそ考えられないと判じられるに至っている」との物言いがなされている]

とのことがあつて「も」何ら安心材料にならぬとのことが[ある]と[常識的な言い分として「も」指摘出来る]との点についてここ本段からして述べておくこととする。

その点、リサ・ランドールという物理学者は直上にてそこよりの原文引用をなした著作、

KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR『宇宙の扉をノックする』(NHK 出版)

にあつて次のようなこと「をも」述べている。

出典(Source)紹介の部 76(5)

SOURCE

76(5)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 76(5)にあつては物理学者リサ・ランドールが
[ブラックホール生成問題の顧慮開始時期]
にあつて「やはり」疑義を呈さざるをえないとの申しようをなしていることを紹介しておく。

(直下、KNOCKING ON HEAVEN 'S DOOR『宇宙の扉をノックする』(NHK 出版)第10
章[ブラックホールは世界を呑み込むか]245 ページよりのワンセンテンス引用をなすとして)

「一九九〇年代より前の時代には、実験室でブラックホールが生成される可能性など、誰も考えていなかった。なにしろブラックホールを生み出すのに必要な質量は、最低限でもとほうもない大きさだから、一般的な粒子の質量や現行の加速器のエネルギーを考えれば、まったく問題外だったわけである」

(ワンセンテンス引用はここまでとする —※—)

(※同じくもの箇所原著 KNOCKING ON HEAVEN'S DOOR にての表記は
CHAPTER TEN BLACK HOLES THAT WILL DEVOUR THE WORLD より原文引用するところとして、“ **Before the 1990s, no one thought about creating**

black holes in a laboratory since the minimum mass required to make a black hole is enormous compared to a typical particle mass or the energies of current colliders.”との部となる)

(**出典(Source) 紹介の部 76(5)**はここまでとする)

以上のようなことがある半面で、愚人がこととしようところの話柄、主観先行の物言いや印象論とは異なるところで次のようなことを摘示できるように「なっている」から問題なのである。

[リサ・ランドールら世間的には[信頼のおける科学者]となっている向きら物言いと全く一致せざる[予見的言及]にまつわっての[文献的事実]が摘示可能となっていると
のことがある. . .]

よりもって述べれば、

[門外漢 ——本稿筆者を含めての門外漢—— が判断などなすことができないとのまさしくものその筋の専門家由来の専門的な理論の適否といった次元の問題ではなく「その他の」より基本的・根本的な次元で LHC 実験には 一大卒レベルの教育水準があれば— 誰でも理解できようとの[あかさまな予見的言及]がもう何十年も前からなされている]

(:ただし、[あかさまな予見的言及]がもう何十年も前からなされているのにも関わらず、そのことを具体的かつ客観的に摘示して、その絡みで何が問題になるのかとのことを訴求しようとの人間はこの世界には「どういわけなのか」まったくもって存在しない。オンライン上で馬鹿な(としか表しようがない)ことを述べている相応の人間ら、ないし、紙媒体上で問題摘示未満の皮相浅薄なことしか述べていないとのマスコミ関係者、ないし、主流派の論法に主流派の論法で挑もうとしているに留まるとの欠陥性伴うやりようを伴っている批判家(うち、ウォルター・ワグナーやルイス・サンチョ、オットー・レスラーのやりようについては本稿にての**出典(Source) 紹介の部 17**以降の段で事細かに紹介している)しか目につかない、というのが絶望したくなるようなこの世界の現状である——筆者は当該案件で第一審からして2012年から2014年、延々と法廷にて不毛なやりとりが続いた行政訴訟の一方の当事者に求められるだけの最低限の情報把握に努めてきたからそのようなことが(『それも述べられるとの資格があるのか?』と首をかきげられるところでありながらも)述べられるのである(につき、資格なき分際で人間の屑の類が軽侮失笑を買うだけの馬鹿なことを放言しているとのことではないこと、何卒、心ある向きには長大なもの、多大な労力を割いたものとなっているとの本稿の内容を[検証]なしにいただきたい次第である)——)

その点、リサ・ランドールが自著にて述べているところの、

[一九九〇年代より前の時代には、実験室でブラックホールが生成される可能性など、誰も考えていなかった] (直近にての**出典(Source) 紹介の部 76(5)**)

との物言いに反して

・[往時の加速器より現行の LHC に 200 倍以上、実現エネルギー規模で近い (CERN ならぬ) CEERN 加速器なるものを登場させ][ブラックホール生成問題を隠喩的ながらも複合的に匂わせるとの内容を有し]、また、[惑星がブラックホールに飲

み込まれるとの筋立ての別の他作品と接合している]との「1974年発の」小説作品が存在しているとのことがある（本稿の前半部にあつての[出典(Source)紹介の部6, 出典(Source)紹介の部7, 出典(Source)紹介の部8], [出典(Source)紹介の部9, 出典(Source)紹介の部10]を包摂する部位にて当該作品より事細かに文言を抜粋しながら詳述のことである）

・1980年代初頭からして大量の極微ブラックホールの生成を加速器との兼ね合いで扱ったサブ・カルチャー作品が存在しているとのことがある（本稿の前半部、[出典(Source)紹介の部4]を包摂する部位にて当該作品より事細かに文言を抜粋しながらも詳述のことである）

というのが —そのようなことは筆者とて当然に認めたくはないところなのだが—

[現実]にそこに存在しているとの動かしようもない Philological Truth [文献的事実] の問題]

となっているとのことが「ある」のである（：本稿の前半部の内容はそうしたことの兼ね合いで研究機関の表面額面上の発表と具体的にそれ以前から存在していた文物の間に横たわる[深刻な矛盾]を挙げ連ねて問題視している。それが我々の生き死にの問題にダイレクトに接合する欺瞞の所在に係るとの認識からである。に対して、不誠実な人間、自分の命も、自分の係累縁者の命も売り払えとの相応の人間は「そういうことがあってもただの偶然ですよ」なぞと言うところか、とも思うのだが（あるいはそうした[歴とした現実]を[現実]として情報処理しない）、きちんと内容を読めば、いかな[欠陥人]にも不実な反論がなせぬとの矛盾がある、そう、[1970年代からして特定数値的特性で200倍ほど、現行のそれに近い **CEERN** (**CERN** ではなく **CEERN**) の加速器がブラックホールによる惑星呑み込み問題と接合するようなかたちで言及されていること]と[1990年代まで(否定的にも、か)ブラックホール生成問題については考えられるところがなかったとの権威申しようがなされていること]との間の矛盾という何らかの原因なくして成立せぬ矛盾が存在しているということが揺るぎようもない事実の問題としてそこにあること、納得いただけるようになっている）。

(直上表記の「現実]にそこに存在しているとの動かしようもない[文献的事実]の問題]が何たるかを部分的に示すべくもの(再掲しての)図解部を以下、付しておくこととする)

(本稿にての従前の段で取り上げてきたところの[加速器による[破滅の子]生成]にまつわっての先覚的言及ありようを以下、一例、再呈示しておくこととする 一尚、本稿では他にも『フェッセンデンの宇宙』(原題 Fessenden's World)や『リアノンの剣』(原題 The Sword of Rhiannon)といった作品らが同じくものことに関わるところで何故、問題になるのかの詳解を講じたりもしてきた一)

■前世紀末葉(1999一)から今世紀初頭にかけての科学界論調

加速器によるブラックホール生成の可能性が[リスク]となるのではないかと研究機関部外の間人よりの質問が寄せられる(その質問の背景にあった考えが[粒子加速器が原初宇宙の高エネルギー状態を再現するとされること]と[原初宇宙には極微ブラックホールがあったとされること]に対する専門外の間人よりの推論であったと一般に説明されていることも本稿では解説している)。対して、研究機関ら(ブルックヘブン国立研究所およびCERN)は「今後実現されうるありとあらゆる粒子加速器によるブラックホール生成はありえない」との報告書を出す(：本稿では1999年における報告書の内容(ブルックヘブン国立研究所およびCERNの報告書の内容)の原文引用 および2000年(2001年)にてのノーベル平和賞をバグウォッシュ会議を代表して受賞した物理学者フランチェスコ・カロジェロらの公衆に対する訴求を兼ねての論稿での申しようの原文引用を[出典(Source)紹介の部1][出典(Source)紹介の部5]にてなしている)。

■2001年以降の新規理論に対する分析を受けての科学界の論調

余剰次元理論(1998年提唱)の発展動向を受け、同年(2001年)より權威を伴っての専門の物理学者らが「粒子加速器(LHC)による[年にして千万個単位のマイクロ・ブラックホールの生成]の可能性がある(生成されたブラックホールはホーキング輻射との現象で即時蒸発する)」との論稿を発表し出す(：本稿[出典(Source)紹介の部2]では表記のことにつき案件分析をなした米国法学者論稿よりの原文引用をなしている)。

■2003年以降の安全報告書にあつての明確化しての方向性

CERNが余剰次元理論によるブラックホール生成の可能性が觀念されだした件につき、[潜在的な脅威]と看做しつつも「生成ブラックホールは即時に蒸発するから安全である」と専らに主張する報告書を出す(：本稿[出典(Source)紹介の部3]では表記のことにつき2003年のCERN安全報告書よりの原文引用をなしている)。

■2004年以降の科学界の変節(を受けての事後の安全報告書に見る兆候)

生成ブラックホール蒸発の論拠となっている理論、ホーキング輻射に対して専門の科学者が疑義を呈しだし、ホーキング輻射の発現に広くも疑義がもたれるようになる(：本稿[出典(Source)紹介の部3]では案件の解説をなしているとの米国法学者論稿およびホーキング輻射權威(William Unruh)の変節が現われているところの同權威の手になる論文よりの抜粋をなしている)。それを受けて、加速器実験機関は従前、ストレンジレット生成問題といった問題に対する安全性論拠として報告書の中で言及していたものである[宇宙線(宇宙を飛び交う高エネルギー放射線)現象と比較しての申しよう]をブラックホール生成問題に関して「も」強くも前面に押し出すようになる。

[文献的事実]の問題として摘示できるし、本稿にて実際に
出典に依拠して呈示しているとの[変節]の流れ

Thrice Upon a Time (1980)

(邦題『未来からのホットライン』)

部外の間人(ウォルター・ワグナー)が「加速器はブラックホールを生成するのではないかと突発的に問題視し、耳目をさらったとの1999年にあっては[加速器によるブラックホール生成可能性]は研究機関発表動向として完全否定されていた(それが肯定的に論じられるようになったのは2001年である)にも関わらず原著1980年初出のThrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』からして[加速器によるブラックホール生成]をテーマとしていたとこのことがある

加速器によるブラックホール生成については2001年よりの科学界発表動向で[通年単位で1000万個の生成可能性あり]とされるに「至った」(1998年に提唱された余剰次元理論の兼ね合いでそうした新規理論が出てきた)の対して、問題となる1980年初出小説Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』でも極微ブラックホール[200万個]生成(2009年末から2010年初頭にかけての作中世界での加速器利用型核融合炉使用による[200万個]生成)が描かれているがゆえに大量の極微ブラックホール生成との式で話が非常に似通っている

加速器運営元が(2001年から2003年に至る)初期動向として[ホーキング輻射]をブラックホール生成が安全であるとの論拠として用いているのに対して問題となる1980年初出の小説Thrice Upon a Time(邦題)『未来からのホットライン』「でも」ホーキング輻射による極微ブラックホール蒸発がブラックホール生成がなれていても[安全である]とのブラックホール生成元の言い訳として持ち出されていた旨、描かれているとこのことがある

Thrice Upon a Time (1980)

(邦題『未来からのホットライン』)

setting seen in the [1980 released] fiction

2009 ————— 2010 —————

1980年初出のフィクションThrice Upon a Timeに見る作中設定は(小説刊行時期30年後の)2009年の年末から2010年年初にかけての作中世界で[ブラックホール生成による破滅をもたらす拳]が問題となるのものであった。

black holes factory
& extinction of mankind

LHC

2008 ————— 2009 ————— 2010 —————

September 10 November 20

1980年という[問題となる小説]の刊行時期にあっては計画の具体案がまとまっていなかったとのLHC計画だが、後、長期の前準備段階を経て結果的にLHCの運転は2008年9月10日にスタートを見、(その直後のヘリウム漏出事故を受けての1年の停止を経て)、2009年年末(11月)より同LHCは本格運転されることとなった。そうもした2009年年末よりの本格運転開始とのことに着目すれば、LHC実験は時期的観点から見た上でも(2009年年末から2010年年初の世界を描く)1980年初出の小説と際立つての類似性を感じさせるものとなっていると言える。

1974年刊行作品らに認められる "文献的事実" の問題

[15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の粒子加速器を運用する機関によるビーム照射によって主人公をホログラム上に投影された超マイクロサイズの分身へと圧縮して、その分身を黒々と渦を巻く底無しの穴に放り込むとの筋立ての小説] の 実在 (: 本稿にあっての [出典(Source) 紹介の部6] および [出典(Source) 紹介の部9] にての原著および訳書よりの引用で摘示)

七〇年代の賞の受賞態様に起因する七〇年代初出の撰集にての該当作品ら連続掲載 / 一方の小説作品の作中明示されている主人公のファースト・ネーム正式呼称と愛称がもう一方の作品の作者のファースト・ネームの正式呼称・愛称と同一となっているとの関係性の存在 (: 本稿にての [出典(Source) 紹介の部8] で解説)

[加速器の類は一切登場「しない」ものの、ケージ (容器) より漏れ出た極微ブラックホールが惑星を呑み込むとの筋立ての (上記小説作品とは別の他作家由来) 小説] の 実在 (: 本稿にあっての [出典(Source) 紹介の部7] にての原著および訳書よりの引用で摘示)

要するに、リサ・ランドールの抜粋したところの物言い ——「90年代までブラックホールが生成されるなど観念されるところではなかった」(出典(Source) 紹介の部 76(5)) とのおそらく Planck Energy プランク・エネルギーの実験室再現不可能性(本稿にての前半部にて入念に解説してきたところの[加速器ブラックホール人為生成にあって従前必要と考えられていた要素])を典拠にしての物言い—— からして、(同様の申しようが大同して科学界にて共有されていることは本稿の冒頭部から先述なしているわけでもあるが)、

[既に「人間レベルで」予見されていたことに対して科学者らがそれを無視するが如く無責任なる気風の体現物]

ないし

[ランドール博士の無知の体現物としての物言い]

ないし

[我々全員の運命を嘲笑うが如く嗜虐的予言の予言たる所以(ゆえん)を傍証しもすること]

と容易に判じられるようになって「いる」のである (: ランドールの表記の物言いと密接不可分だろうとの研究機関報告書の内容についてはそこに認められる[欺瞞性]も込みにして本稿の前半部、文字カウ

ントしているところとして十万字超を割いての前半部で入念に論じたてていることである。すなわち、問題となるところの研究機関報告書の特定部らを原文抜粋し、といった文言を含む研究機関報告書に対して米国の法律学者などからはいかなる指摘がなされているのかを指摘しつつ、同じくもの研究機関申しようの欺瞞性を嘲笑うような、[偶然性を否定するような先覚的言及]がなされていたとのことを—そのようなことを該当部の具体的紹介なしつつ、いかな側面で問題になるのか懇切丁寧に指摘しようとする人間など「どういうわけなのか」この世界ではこの身を除き「絶無」なのであるが— [事実 A]から [事実 J]とのかたちで順次摘示してきもした —詳しくは本稿にての **出典(Source) 紹介の部 1**から **出典(Source) 紹介の部 10**を包摂する解説部を参照されたい—)。

などと述べても、

「リサ・ランドールのことは知っている。ハーバードを出たというあのカリスマ物理学者であらう？」

彼女ランドールがブレンワールド仮説に伴うシャワーカーテン世界観の呈示といったことで有名な科学者ということで知っているが、現代の科学は細分化・専門家の極みを見ており、ランドール本人は重要なこと —(たとえば同輩の科学者の一部は既に加速器の類によるブラックホール生成の可能性をかなり早くから想起していたとこのことがあるといった重要なこと)— を知らずに 1990 年代までブラックホール生成のことが誰にも観念されていなかったなどと述べているのではないか」

と分け知った顔で述べる人間もいるかもしれない。

だから書くが、

[リサ・ランドールは【加速器によるブラックホール生成理論に関して一廉ならぬ貢献をなしていた人物】として知られている向きとなる]

この身が鼻を覆いたくなるような臭気のを辿っていった先にあったことの探索、そこからその程度のことまでは門外漢ながらも細やかに把握しもするようになったところ、そして、

[素粒子物理学(高エネルギー物理学)に近いところで研究をなしているといった人間らには述べるまでもないことか]

とはとらえられるところなのだが、そのこと、ランドール博士がブラックホール生成の理論深化に関して一廉ならぬかたちで関与しているとのことにまつわる出典を挙げておくこととする。

出典(Source) 紹介の部 76(6)

SOURCE

76(6)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 76 (6) にあってはリサ・ランドールが加速器によるブラックホール人為生成にまつわる理論の大御所の一人となっていることの典拠を挙げておくこととする。

(直下、本稿前半部で挙げてきたところの法学者論稿 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD 一入手方法も紹介済みの論稿— の 848 と振られた部よりの抜粋を(そちらへの言及は本稿ではいままでなしていなかったところとして)なすとして)

In 2000, Giddings, along with renowned Harvard physicist Lisa Randall and MIT physicist Emanuel Katz, wrote a paper that provided an in-depth treatment of gravity and black holes in a five-dimensional universe, arguing that the 5-dimensional arrangement is possible. Faced with this potential gap in their safety argument, Giddings and Mangano went back to the drawing board to find empirical evidence of the LHC's safety.

Specifically, Giddings and Mangano sought to bolster the cosmic-ray argument.
(拙訳として)

「2000年においてギディングスと著名なハーバード大学の物理学者リサ・ランドール、そして、マサチューセッツ工科大学の物理学者エマニュエル・カッツの三名は5次元宇宙(ファイブ・ディメンショナル・ユニバース)における重力とブラックホールに関する込み入りの扱いを条件にした場合、5次元にまつわる修正が可能となると論じた論文を書いた。彼らの安全性議論と(そこから導き出せる)潜在的ギャップに直面し、ギディングスとマンガノはLHCの安全性に関する経験的証拠を見つけ出すために製図板に戻って行った。特にギディングスとマンガノは宇宙線の議論(にあっての安全性論拠呈示)のでこ入れを追

及するとのことになった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source) 紹介の部 76(6)**はここまでとする)

上にて引用なした法学者論稿記述内容は

[「1999年にはブラックホールの生成可能性は否定された」→「2001年には余剰次元モデル(1998年に提唱の新規の理論のモデル)に基づく新規の理解からブラックホール生成可能性が目立って肯定されるようになった」との経緯 —本稿前半部にて仔細に提示しているとの経緯— の合間(2000年)に横たわる水面下のやりとり]

について解説しているとの部位、報告書が陽のあたる世界ならば幕間の舞台裏の動向を扱っているとの部位となる(：本稿前半部でも詳述を試みていることだが、1999年にウォルター・ワグナーら(実験関係者にこれ軽侮の極み、といった扱いを受けている向きら)がブラックホール生成可能性があるのではないのかと疑義を發しだしていた —**出典(Source) 紹介の部 1**および**出典(Source) 紹介の部 2**を参照のこと— 加速器によるブラックホール生成について当初「ありえるところではない」と言われていた状況から一転、それがありうるとの意見の呈示に至った展開でもある)。

とにかくも、である。上にて見るようにリサ・ランドールというのは

[ブラックホールの人為生成が可能である]

との論拠を水面下で呈示していた人間となるのである(：ランドールらが関わってのブラックホール生成可能性認容へ向けての理論上の地殻変動は[粒子加速器実験に係るリスクやりとりの問題性に関して非を鳴らすべく手前が水面下で実行していた挙動]のうちのひとつ、手前が原告として関与していた行政訴訟、第一審からして年度にして二年をまたいでずると続いていた国内行政訴訟で提出した第五準備書面と題しての準備書面(法廷やりとり文書)に付した提出の膨大な書証(証拠)でもってそれについて「も」法廷で(これ無為にといったかたちで)訴求を試みていた[現実としての実験関係者やりとり]の一側面上のものでもある —行政訴訟については背面の意図あって「ためにして」提訴していた訴訟であったところをカルト成員にその典型例が見出せようとの相応の者達、[[事実]を[事実]として認識する自由度すら有して「いない」との相応の者達][自己および自組織の都合の良いようにしか現実を解釈しないとの傾向が強くもあると見受けられる者達]によって「結果的に無為」に終わったきらいありの訴訟でもあるわけだが、とにかくものこととして、筆者はこのような世界でそうしたことまでをやっていた—)。

が、まだ、

[ランドールがブラックホール生成可能性認容に向けての流れに関与した科学者]

となっていることについて疑義があるとの向きもあるかもしれない。

であるから、ボローニャ大学の学究の Robert Casadio (Dipartimento di Fisica, Universit'a di Bologna)とアラバマ大学の学究の Benjamin Harms (Department of Physics and Astronomy, The University of Alabama)ら二名の物理学者に由来する論稿、

Can black holes and naked singularities be detected in accelerators? (訳せば『加

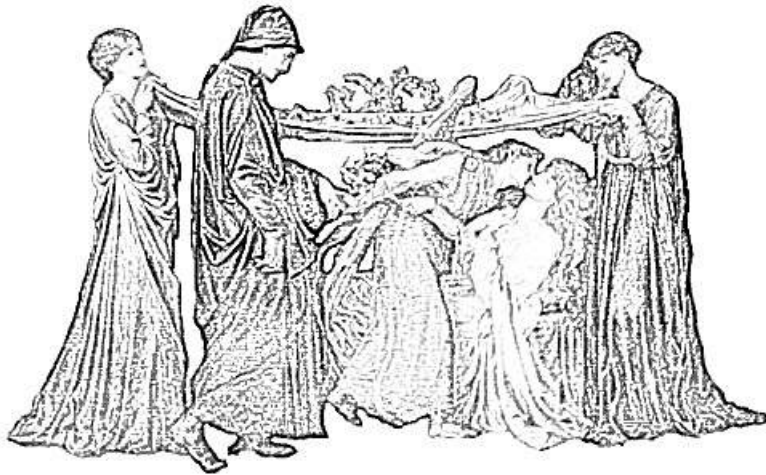
速装置でブラックホールと裸の特異点は検出されるか』といった塩梅となる論稿)

の内容も下に引いておく。

出典 (Source) 紹介の部 76(7)

SOURCE

76(7)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 76(7) にあってはリサ・ランドールら定立の理論である **RS モデル** がいかようにして加速器におけるブラックホール生成議論に影響を与えているかについての典拠を紹介しておく。

その点、2002 年に初出の物理学者ら論稿、

Can black holes and naked singularities be detected in accelerators? (左記のタイトルをそのままにグーグル検索エンジンに入力すれば、オンライン上の論稿配布サーバー arXiv より誰でもダウンロードできるようになっているとの論稿)

にあっては次のような記載がなされている。

(直下、論稿 Can black holes and naked singularities be detected in accelerators? にあっての冒頭部よりの原文引用をなすとして)

We study the conditions for the existence of black holes that can be produced in colliders at TeV-scale if the space-time is higher dimensional. On employing the microcanonical picture, we find that their life-times strongly depend on the details of the model. If the extra dimensions are compact (ADD model),

microcanonical deviations from thermality are in general significant near the fundamental TeV mass and tiny black holes decay more slowly than predicted by the canonical expression, but still fast enough to disappear almost instantaneously. However, with one warped extra dimension (RS model), microcanonical corrections are much larger and tiny black holes appear to be (meta)stable. Further, if the total charge is not zero, we argue that naked singularities do not occur provided the electromagnetic field is strictly confined on an infinitely thin brane. However, they might be produced in colliders if the effective thickness of the brane is of the order of the fundamental length scale ($\sim \text{TeV}^{-1}$).

(拙訳として)

「我々は仮に時空間が高次元的なものであった場合のこととし TeV スケールでの粒子加速器で生成されうるブラックホールの存在状況についての研究をなした。小正準的な(マイクロカノニカルな)理解を採択した場合、それら(ブラックホールら)の寿命は強くもモデルらの詳細に依存するとのことを我々は見出している。もし余剰次元がコンパクトなものであるのなら(ADD 理論)、小正準的な熱を持った状態からの小正準的な意味での偏差(逸脱)は一般的に根本的な TeV スケール質量に近くもなり微小なブラックホールは正準的な(カノニカルな)表現で予測されるよりゆっくりと蒸発していく、だが、ほとんど瞬時にといった形でまだ十二分に早く蒸発する。だがしかし、ワープド・エクストラ・ディメンジョン・モデル(ワープする余剰次元モデル, RS モデル)にあってのブラックホールは小正準なる修正がより大きくなり、極微なブラックホールはより安定的(ないし準安定的)となるように見える。さらに言えば、仮にもし総電荷がゼロでなければ、極めて薄い膜にあっての電磁場が厳密に制限されていない限り[裸の特異点]は生じない。しかしながら、それら(ブラックホールの裸の特異点)はもし有効的な膜の厚さが最小長単位 (TeV のマイナス一乗 / TeV の逆数)のオーダーに達するのなら粒子加速器によって生成されうる」。

(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※注記として:

実験機関から見ての「外部の」LHC 実験批判者らは上にて引用なしたところの論考内容そのものをもってして実験批判に用いていもするとのことがある。上にて言及なししているように論稿の書き手がボローニャ大学(かのダンテもそこで学んだことが知られるイタリアの極めて歴史古き大学)に所属の権威サイドの物理学者 Robert Casadio であることを持ち出しもし、「そういった権威もが[生成されたブラックホール]は蒸発しない可能性がある」と述べているのではないか。であるから、LHC 実験は危険と言えるのではないか」

と実験に対する批判を批判者らは展開もしてきたというわけである(その点についてはその気があるのならば難なくオンライン上に流通している英文実験批判文書「複数」を捕捉・ダウンロードできしようとかたちとなっている)。

しかし、

「生成されたブラックホールは蒸発しないかもしれない」

との趣旨のことを表記論稿にて見積もりしているとの Robert Casadio らにしてみても「後」にあって「LHC の安全性にはきと太鼓判を押す側にまわっている。

については、英文 Wikipedia[Safety of high-energy particle collision experiments]項目にも

(以下、引用をなすところとして)

“ On 19 January 2009 Roberto Casadio, Sergio Fabi and Benjamin Harms posted on the arXiv a paper, later published on Physical Review D, ruling out the catastrophic growth of black holes in the scenario considered by Plaga. ”

(大要訳なすとし)「彼らが論稿配布サーバー arXiv にて公開した論稿(註: 具体的には直近挙げたのとは別の論稿の Possibility of Catastrophic Black Hole Growth in the Warped Brane-World Scenario at the LHC『LHC 実験にあってのワープした余剰次元モデルに依拠しての破滅的ブラックホール成長の可能性』との論稿のことを指す)にあって物理学者 Robert Casadioらは [プラガに提示されたシナリオ](註:ここで[プラガ]と表記されているのは加速器生成ブラックホールにて欧州だけが限局的に吹き飛ぶことになるやもしれぬとの[ボサノバ・シナリオ]に言及したことで知られる「元」マックス・プランク研究所研究員たる Rainer Plaga ——実験機関関係者にその言いようが結果的に否定されたとの向き—— のことを指す)を排除せんと試みている]

と記載されているとおりである。

以上をもってして一応の注記とした)

上にて挙げた 2002 年の Robert Casadio ら論稿に見るところの、

「だがしかし、ワープド・エクストラ・ディメンジョン・モデル (ワープする余剰次元モデル、RS モデルこと Randall-Sundrum model) にあってのブラックホールは小正準なる修正がより大きくなり、極微なブラックホールはより安定的(ないし準安定的)となるように見える」

のワープド・エクストラ・ディメンジョン・モデル(ワープする余剰次元モデル、RS モデル)の提唱者がリサ・ランドールとなっているとのことがある。

[1998 年提唱の同じくも余剰次元にまつわる嚆矢的理論たる ADD モデル](本稿の先の段、例えば、[出典\(Source\)紹介の部 2](#)にて言及していたところの加速器のブラックホール生成論拠となっているとの理論)

の ADD がその発表者アルカニハメド、ディモプロス、ドバリの三名の頭文字よりとられているように RS モデルの R は「ラ」ンドール・「サ」ンドラム・モデルのランドールであり、リサ・ランドールのことを指すのである(英文 Wikipedia にも余剰次元にまつわる[Randall-Sundrum model]にまつわる解説項が設けられているので疑わしきは ——ただ単純にリサ・ランドールが RS モデルとされるものの提唱者か、という観点からでもいいので—— その部からして確認されるのがよろしいか、と思う)。

[出典\(Source\)紹介の部 76\(7\)](#)はここまでとする)

以上述べてきたこと、および、先に ——[出典\(Source\)紹介の部 76\(6\)](#)の段で—— 法学者論稿 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD より引いたこと (“ In 2000, Giddings, along with renowned Harvard physicist Lisa Randall and MIT physicist Emanuel Katz, wrote a paper that provided an in-depth treatment of gravity and black holes in a five-dimensional universe, arguing that the 5-dimensional arrangement is possible. Faced with this potential gap in their

safety argument, Giddings and Mangano went back to the drawing board to find empirical evidence of the LHC's safety.” (訳として)「2000年にあつてギディングスと著名なハーバード大学の物理学者リサ・ランドール、そして、マサチューセッツ工科大学の物理学者エマニュエル・カツの三名は5次元宇宙(ファイブ・ディメンジョナル・ユニバース)における重力とブラックホールに関する込み入った扱いを条件にした場合、5次元にまつわる修正が可能となると論じた論文を書いた。彼らの安全性議論と(そこから導き出せる)潜在的ギャップに直面し、ギディングスとマンガノはLHCの安全性に関する経験的証拠を見つけ出すために製図板に戻って行った)を複合顧慮しもし、

[「一九九〇年代より前の時代には、実験室でブラックホールが生成される可能性など、誰も考えていなかった」との物言いがその方面の大家たるリサ・ランドールによってなされている(彼女ランドールは上にて引用しているように「ブラックホール生成問題をリスクとして考えるより401k(米国にあつての確定拠出型個人年金)の目減りの方を気にした方が良い」などとのことをどの口でか述べて、ブラックホール生成問題に「安全である」との太鼓判を押しているとの向きでもある)]

とのことからして「実にもって問題である」と指摘できるのである(：極々単純化すれば、「リサ・ランドールは加速器によるブラックホール生成問題に関する論拠を呈示しているそちら方面の専門家である」→「その彼女が[90年代まで誰も実験室でブラックホールが生成される可能性など考えていなかった]と強調している」→「しかしながら、現実には極めて緻密に加速器によるブラックホール生成を予測するが如く先覚的言及がなされていたとのことがあると容易に摘示できるようになってしまっている」とのこと)が問題になる)。

それにつき、再度、繰り返しもするが、

[[往時の加速器より現行加速器LHCに200倍以上、実現エネルギー規模で近い加速器——しかも、その架空の加速器の運営機関は露骨にCERNを想起させるCEERNという名前を振られてのもの——を登場させ] そのうえで[ブラックホール生成問題を隠喩的に複合的に匂わせもしている]との作品にして、また、[惑星がブラックホールに飲み込まれる作品と接合している]との1974年発の小説作品が存在していること]

といったようなことらがある中で以上のランドールの申しように対して述べられることはそれが[既に予見されていたことに対して科学者らがそれを無視するが如く無責任なる気風の体現物]ないし[我々全員の運命を嘲笑うが如く嗜虐的予言の存在を傍証しもすること]であるとのことになる([ランドール博士の無知の体現物としての物言]である可能性はここまでの内容から省くことができることは理解いただけることか、と思う)。

生き死にに関わるところでそういうことが垣間見れるということについてそれが本当に[危険]なものであるとの可能性を一切顧慮しないとの向きらが眼前にもした場合にはそういう向きらに対しては正直、—「悪い意味で」だが— まったくもって感心させられる次第でもある。『カモにされて殺されていくという[知的生命体の尊厳]とはおよそ無縁の最期をも認諾・認容するだけの心根をそうした向きらが有している』と思うがゆえにである——お分かりいただきたいもあるのだが、ここでは世間的人間のありようを念頭にもしもて痛烈な皮肉・厭味をわざと発している。につき、読み手、『自分は本当に生き残るに値する存在である』と考えているような向きにあつては本稿([危険]が[危険]たる所以を事実の山とそれら事実の山によって示される堅い因果関係の集積でもって摘示することを使命としてもものしているとの本稿)の内容の検証をなすことでこの身にそのような皮肉を吐く資格があるかないかどうかよく判断していただきたいものである——。

以上をもってして

[時空間を結ぶ通路]としてのワームホールやカー・ブラックホールを巡るトピックとして

いかようなことがあるのか。また、加速器とそれらワームホールやカー・ブラックホールがいかに関係づけられているのか]

とのことについての長くもなつての解説部を終えることとする。

長くなるも、のカー・ブラックホールやワームホールについての解説はここまでとする

最前直上の部までにあつては

[カー・ブラックホールやワームホールといったものの「ゲート」としての言われよう]

について本稿にて従前何を述べてきたのかについて振り返りなしつつ、また、加えて、それらカー・ブラックホールやワームホールといったものについて何が問題になるのか、新たな(本稿初出の)指摘をなすとの式での筆の運びをなしてきた。

これ以降はそうもした直近の段まで長くもなつての細々とした解説をなしてきたところ、すなわち、

[LHC 実験に関しては時空間のゲートたりうるワームホールやカー・ブラックホールの生成がなされうるとの申しようがなされるようになった]

とのこと「にも」関わるどころとして、せんだってよりその成立論拠について細々とした説明をなしてきたことらである、

α . (金星にまつわる会合周期にあつて具現化するとの指摘もなされてきた)[五芒星相似形]を[ブラックホール絡みの話]と接合させるような奇怪なることらがある。すなわち、次のようなことら($\alpha 1$ から $\alpha 8$)がある。

$\alpha 1$. 地球と金星と太陽の内合(インフェリアー・コンジャンクション)時にあつての天体座標を結んで出来上がるとのことがよくも取り上げられる(直近先述)との[五芒星]は[五角形]と結びつく図形でもある。[(ほぼ正確な)[五芒星]が描写される局面]というのは[(ほぼ正確な)[正五角形]に近いきものが内にて形成される局面]であるとも述べられる。どうか。[(正確な)五芒星]というものは[正五角形]に内接される図形として描けるものであり、[正確な五芒星の各点]を構成する五点というのが正五角形の各点にそのままに対応することになるとのことらがあるのである。

$\alpha 2$. 正五角形、英語に直せば、[レギュラー・ペンタゴン]との特質を持つのがアメリカの国防総省の本部庁舎である。そのペンタゴンの広場は先の 911 の事件の起こる前から[ワールド・トレード・センターの跡地]がそう述べられるようになったのと同じ言葉で呼び慣わされていた、[グラウンド・ゼロ]との言葉でもって呼び慣わされていた。

$\alpha 3$. グラウンド・ゼロという言葉は 911 の事件が発生する前からペンタゴンの広場と歴史的に結びつけられてきたとの沿革がある(上の $\alpha 2$ にて言及)のだが、そちらグラウンド・ゼロという言葉、かの 911 の事件が起こる「前」から「使用局面が際立って限られていた特

殊用語]として存在していた同語を「ブラックホール」と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が存在しており、その書籍、「不可解極まりない911の予見的言及とも関わる」とのことを本稿の先だつての段で先述なしてきたとの書籍でもある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』となる。同著『異端の数ゼロ』序盤部には「五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性」のことが「最小の単位(無限小)に向かう力学」を指し示すようなものとして取り上げられているとのことがあるのである。さて、そのように問題となる —911の異様な先覚的言及とも関わるとの式で問題となる— 書籍で取り上げられている

「五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性」

にて「も」表象される

「最小の単位(無限小)に向かう力学」

は言い換えれば、「原子核の領域に向かう力学」、さらに述べれば、「原子核を構成する陽子や中性子の領域、そして、陽子を複合して構成するクォークのようなより極微の素粒子の世界に向かう力学」のことを想起させるものでもある。

何故か。

原子のなかで原子核の占める割合はおそらく小さい、そのような原子核を構成するのが中性子や陽子であるといったかたちで(小さきことをひたすらに突き詰めていった際の)極小の世界というものは展開しているからである。「五角形(ペンタゴン)および五芒星の両者の図形的特性」のことを知っていれば、自然に想起されるのが「最も小さな極小の世界へ向けての力学」であり、それは換言すれば、「素粒子物理学などが領分とする極小の世界へ向けての力学」であると言い換えられるようなところがあるのである。

そして、そうした限りなくものゼロ・スケールに向かつて展開する極微の世界の領域の研究(たとえばヒッグス粒子や超対称性粒子など命名されてのものを発見に血道をあげるとの「研究」)を声高に唱道、「原子核を壊す中での膨大なエネルギー」(と述べても極微領域に集中しているからこそその膨大なエネルギー)で「ブラックホール」さえもが生成される可能性が取り沙汰されているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まったの LHC 実験であると言われている。

α4. ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』との書籍は911の事件が起こる「前」から特異な言葉であるとのグラウンド・ゼロという言葉がブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍、かつもって、不可解なる911の予見的言及とも関わっているとの書籍でもある(←α3で言及したことである)。

そして、同著『異端の数ゼロ』は「五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性」と結びつくことに言及しているとの書籍でもある(←α1およびα3にての出典にまつわることもある)。

そうした書籍で扱われる

「ゼロの世界」「極小の世界」

に近しきところで(原子に比してその比率が恐ろしく小さいとの極小の存在たる)「原子核」を破壊しようとのことをなし、そこにて発生する膨大なエネルギーからブラックホールを生成しようとのところにまで至ったのが LHC 実験であると「される」(←α3にて言及のことでもある)のだが、他面、「911の事件」では何が起こったのか。

「正五角形」との形状を呈するとのペンタゴンが崩された」

とのことが起こっている(←α2で合衆国国防総省庁舎たるペンタゴンが(正確な五芒星と無限に続く相互内接外接関係を呈するとの)「正五角形」であることを問題視している)。

以上のことより次の関係性が想起されもする。

「現実世界で911の事件が起こる「前」からアメリカ国防総省本部庁舎たるペンタゴン(正五角形)の広場と結びつけられてきたグラウンド・ゼロという特殊な言葉(←α2)」 ↔ 「911

の事件が起こる前から「グラウンド・ゼロ」との特殊な言葉とセットとなっていた現実世界でのペンタゴン（「正五角形」状の米国国防総省庁舎）の911にあつての部分崩壊（ $\alpha 3$ ）⇔「正五角形（合衆国国防総省庁舎ペンタゴンとの同一形状）の（911にての）部分崩壊（ $\alpha 3$ ）」⇔「911の事件が起こる「前」から特殊用語として存在していた「グラウンド・ゼロ」という言葉を「ブラックホール」と関係するかたちでなぜもってしてなのか用いているとの書籍であり（そして、そちら著作、911の不可解なる予見事物とも通ずるようになっている書籍との意味でも際立っての著作ともなり）また、同時に、五芒星と五角形（ペンタゴン）の間の無限に続く相互内接・外接関係によって表象される極小の世界へ向かう力学に言及している著作「でも」あるZERO: The Biography of a Dangerous Idea（邦題『異端の数ゼロ』という著作の内容）⇔「無限小に至る方向性での中での破壊挙動、原子核を壊す中での膨大なエネルギー発現状況でもって「ブラックホール」を作り出しうると言われるに至っているLHC実験を想起（ $\alpha 3$ ）」。

$\alpha 5$. 「グラウンド・ゼロ」という言葉 —（本来、「広島・長崎の爆心地」を指すべくも考案された特別な言葉であり、また、冷戦期、核戦争の標的たるところと結びつけられるに至った言葉である）— と「911」の事件の発生前から結びつけられていた「ペンタゴン」（アメリカ国防総省本庁舎）というのはレズリー・グローヴズという男（往時、米国陸軍工兵隊大佐）を責任者にして1941年「9月11日に」建設が開始されたとの建物である。そちらペンタゴンの建設計画を指揮していたレズリー・グローヴズという男が「ペンタゴン建造中に」大佐から准将に昇進、主導することになったのが「マンハッタン計画」となっており、同「マンハッタン計画」で実現・現出を見たのが「原子爆弾」と「広島・長崎への原子爆弾の投下」（「グラウンド・ゼロ」との言葉がはじめて用いられるようになった爆心地を現出させた挙動との意味合いで本稿の先の段でも取り上げていた原爆投下）となる。そこに見る「原子爆弾」というのは「極小領域たる原子核のレベルでの崩壊現象、核分裂反応」によって実現を見た兵器でもある——根拠を入念に示さんとするものとして作成しているとの本稿スタンスに則り、無論、以上のようなことが述べられる確たる論拠もこれより「網羅的に」紹介していく——（:1941年9月11日から建設開始（着工）を見ていた「ペンタゴン」の建設計画を指揮していた男レズリー・グローヴズが「マンハッタン計画」の責任者でもあったわけであるが、「マンハッタン計画」というのはそも、「極小の領域、原子核のレベルでの崩壊現象が原子爆弾を実現ならしめること」が着想されて開始された計画である。「原子核レベルでの崩壊現象を利用した核兵器開発」と「ペンタゴン」が結びつく、そう、「五芒星形と五角形（ペンタゴン）が無限に相互に内接・外接しあいながら無限小へ至る方向（原子核や素粒子の世界へ至る方向）を指し示すもの」であることを想起させるように結びつくとのことが歴史的沿革として存在していることが問題となる）。

$\alpha 6$. 金星の内合ポイントにてその近似物が具現化すると五芒星は史的に見て「退魔の象徴」とされてきたとの経緯があるものである。さて、その「退魔の象徴としての五芒星」と結びつくような「退魔の象徴物としてのペンタゴン（アメリカ国防総省本庁舎）」が爆破されて「異次元から」干渉する外側の銀河由来の妖怪が解放されるとの「荒唐無稽小説」が世に出ている。それが本稿の先の段で「911の「奇怪なる」予見的言及をなしている」との要素を同作が多重的に帯びていることにつき仔細に解説してきた70年代欧米でヒットを見たとの小説作品、『ジ・イルミナタス・トリロジー』である。につき、「退魔の象徴としての五芒星と結びつくが如き退魔の象徴としてのペンタゴンの崩壊、および、911の事件の発生（マンハッタンとペンタゴンが同時攻撃されたとの事件）を前言しているが如くの奇怪なる文物」などとのものより想起されるのは——繰り返しになるも——次のようなこととなる。⇒「（直近にて言及の）書籍『異端の数ゼロ』に特性として認められるとの「五角形（ペンタゴン）と五芒

星の内接関係を無限小に至る機序として呈示するとのやりよう]・[グラウンド・ゼロという言葉
葉を911の事件が発生する前からブラックホールと結び付けているとのやりよう]・[不可解
なる911の予見的言及とも関わるとの側面]]←→(関係性の想起)←→[ペンタゴン(1941
年9月11日に建造開始)の建設計画を主導した軍人が同様に主導して「原爆」と「グラ
ウンド・ゼロ」を具現化させることになった「無限小に至る力学(五角形と五芒星が相互に
無限に内接・外接されるかたちで表象される力学)の過程での原子核崩壊作用」を利用し
ての「マンハッタン計画」に見るありよう】。

α7. 会合周期(具体的に述べれば、8年単位で現出する5回の地球との周期的内合
関係)でもって「五芒星」を描くとされる存在が金星となるとのことを先述した。また、同文に
金星が悪魔の王ルシファーと欧州にて歴史的に結びつけられてきた星であることも先述し
た。さて、歴史的に惑星金星と結びつけられてきたとの悪魔の王ルシファーとのつながりで
述べれば、ダンテ『地獄篇』にもミルトン『失樂園』にも「ルシファーと結びついた罪の領
域」にあつて「今日的な観点で見てのブラックホールの近似物」が多重的に具現化してい
ると申し述べられるようになってきていること、解説をなしてきたのが本稿である。

α8. 「五芒星」は「黄金比」と際立って結びつく図形でもある。そこに見る「黄金比」と
「ブラックホール」が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注
目を浴びているということがある。

(上の **α1** から **α8** の流れに加えてのこととして)

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとことがある。それは海女による「セーマン・ドー
マン」と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用
は「竜宮」に引き込まれないための呪(まじな)いであるとの物言いがなされてもいる。さて、伝承
に見る「竜宮」とはどういう場か。

【時空間の乱れが発生した場】(【外側に対して時間の進みが遅い場】)

とされる場である。他面、重力の化け物、ブラックホールおよびその近傍領域も「時間の乱れ」が
問題となるものである。以上のことは単体で述べれば、「考えすぎ」の謗(そしり)免れないこととあ
いなるうが(当たり前ではある)、上(の **α** の段)にて述べてきたようなことがすべて「事実」であると
網羅的に指し示されたとき、ここ **β** の申しようも「考えすぎ」では済まされぬものとなって「しまう」と
のことがある。

にあつての

α8. 「五芒星」は「黄金比」と際立って結びつく図形でもある。そこに見る
「黄金比」と「ブラックホール」が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧
米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある。

との部よりさらにもって何が述べられるのか(**α1** から **β** と相補関係を呈するところとして何が述べられる
のか)についての「煮詰めての解説」をなすこととする (: 本来ならば直線的・間断なくも、シームレスに
そちら解説に入るべくもの話の展開を先立ってなしもしていた中、つい直前まで【LHC 実験によるカー
ブラックホールおよびワームホール生成にまつわって何が述べられるのかについての話】を必要以上
に細々かつ長々としてなしもしていたとの経緯がある、それがゆえ、以降の部は「ようやくと本題に回帰し
ての話に入る」と述べられるようなところでもある)。

その点、つい直前まで[時空間のゲートとなる可能性が取り沙汰されているとのもの]、そして、[LHCで生成されうるとの見立てが存するもの]であるとのカー・ブラックホールにまつわる解説をなしてきた背景には —**α8**. を煮詰めての話が向かう方向ともなるところとして— 次のようなことがある。

([「この段階では」頓狂なることを頭の具合のよろしくはない風で述べているとの風にしかとられないことか]とは当然に思うが、これ以降続いての内容を順々にお読みいただくことで納得いただけてもしようところとして)

[[**黄金比と結びつくカー・ブラックホール**]が[プラトン古典にみとめられる(黄金比を全身で体現するものにして第五元素「的なる」位置付けの)正十二面体]と特定の文物ら(さらに幾頁か後に解説なしだすとの現代にてヒットを見た作品『コンタクト』ら)を介して結びつき、また、そのことが本稿にての指し示し事項と密接に結びつくとのことがある]

以降、上にて言及のことについての指し示しに入る前に、である。

[**カー・ブラックホールの位相変換プロセスが「きっかりと」黄金比 (the Golden ratio) と結びつくとの言いようがなされているとのそのことがアトランティスにまつわる伝承に言及しているものでもあるプラトン古典の記述内容と相関性を呈する**]

とのことにつき少なからずの文量を割いての解説をまずもって(そこからして段階的に)講じていくこととする。

さて、歴史上、

[**アトランティスに言及していることできわめて著名な古典**]

はプラトンの手になる**古典『ティマイオス』**となるのだが(『ティマイオス』のアトランティス伝承言及箇所については本稿にての**出典(Source)紹介の部 36**で既に取り上げているが、再度、続いての段でもそちらよりの引用をなす所存である)、同『ティマイオス』、次のような内容を含むこと「でも」その名が知られることとなっている。

(プラトン『ティマイオス』にての記述内容として知られているところとして)

[**この世界を支える元素 (リゾーマタ) は [多面体] で表される**]

[**この世界を造った存在はデミウルゴス (ギリシャ語で[工匠]といった意味の言葉) と表すべき存在であり、同デミウルゴスがアイデア界を模しての挙としての世界創造がなされた**]

上の部がいかようにして(特定の問題となる文物らを通じて) [[黄金比] と結びつけられているカー・ブラックホール] と関わるかについては続く段で解説をなすとし、とりあえずもは古典そのものに上のような記載がなされているとのことが [文献事実] であることを示すべくもの出典紹介をなしておく。

SOURCE

77



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部77にあつてはプラトンの手になる『ティマイオス』という古典が

[世界を構成する元素(リゾーマタ)が[多面体]で表される]

[この世界を造った存在はデミウルゴス(ギリシャ語で[工匠]といった意味の言葉)と表すべき存在であり、同デミウルゴスがアイデア界を模しての挙としての世界創造がなされた]

との内容を有していることについて典拠となることを挙げておく。

につき、まずもって基本的なところとしてオンライン上より即時に確認できるところの和文ウィキペディア[ティマイオス]項目の記述よりの引用をなしておく。

(直下、和文ウィキペディア[ティマイオス]項目にての「現行の」記載の引用をなすとして)

『ティマイオス』(希: Τίμαιος、羅: Timaeus)は、古代ギリシアの哲学者プラトンの後期対話篇の1つであり、また、そこに登場する人物の名称。副題は「自然について」。アトランティス伝説、世界の創造、リゾーマタ(古典的要素)、医学などについて記されている。自然を論じた書としてはプラトン唯一のもので、神話的な説話を多く含む。後世へ大きな影響を与えた書である。プラトンは、『ティマイオス』と未完の『クリティアス』、未筆の『ヘルモクラテス』を三部作として構想していたという。

…(中略)…

[内容]

…(中略)…

・創造者「デミウルゴス」について説明されている。デミウルゴス(希: δημιουργός)のギリシア語の原義は工匠、建築家である。アイデアを見て、模倣しながら現実界(物質世界)を作る存在として、デミウルゴスの名を挙げている(善なる存在と捉えられている)。現実界はデミウルゴスが創造したアイデアの似姿(エイコーン)である。

…(中略)…

・地(土)・水・火・風(空気)の4つのリゾーマタ(希: ριζώματα、「根本」の意)が説かれる(後世にいう四元素説)。それぞれのリゾーマタは正多面体であり、その形状によって運動の性質や他のリゾーマタとの親和性が決まる。たとえば火は正四面体であり、最も軽く、鋭い。水は正二十面体、空気は正八面体である。これに対して土は正六面体であり、運動することが最も遅い。自然の諸物はリゾーマタがまざりあうことによって形成されているとした。

(引用部はここまでとする)

以上の「現行にての」ウィキペディアの記述は —(媒体性質上、これより記載内容の転変を見る可能性もあるが)— 「要を得て簡、」との類の解説と見受けられるものである(:アトランティス絡みで本稿にての先の段でその内容を抜粋してきたとの『ティマイオス』を完読しているとの筆者としてもそうもとらえている)。であるから、本稿筆者が内容補って何かを述べる必要も無いことか、とも思うのであるが、ウィキペディアという媒体につき取り沙汰される出典としての危うさの問題も顧慮して、原著、『ティマイオス』、オンライン上よりその全テキストを確認できるようになっているとの英訳バージョンよりの[関連するところの抜粋]をなしておく。具体的には Project Gutenberg のサイトより人を選ばず誰でも全文をダウンロードできるとの TIMAEUS by Plato (Benjamin Jowett との 19 世紀にあつてのオクスフォードのプラトン翻訳家の訳になるバージョン)より関連するところの表記の抜粋をなしておくこととする。

(直下、 Benjamin Jowett ベンジャミン・ジョウエットとの 19 世紀、オクスフォードの古典研究家(英文ウィキペディアに一項目設けられているとのその方面での 19 世紀の大家)の手になる TIMAEUS 英訳版にあつての[訳者解説]としての側面が強くも出されての部、 INTRODUCTION AND ANALYSIS、その Section 3. よりの引用をなすとして)

Fire, air, earth, and water are bodies and therefore solids, and solids are contained in planes, and plane rectilinear figures are made up of triangles. Of triangles there are two kinds; one having the opposite sides equal (isosceles), the other with unequal sides (scalene). These we may fairly assume to be the original elements of fire and the other bodies; what principles are prior to these God only knows, and he of men whom God loves. Next, we must determine what are the four most beautiful figures which are unlike one another and yet sometimes capable of resolution into one another... Of the two kinds of triangles the equal-sided has but one form, the unequal-sided has an infinite variety of forms; and there is none more beautiful than that which forms the half of an equilateral triangle. Let us then choose two triangles; one, the isosceles, the other, that form of scalene which has the square of the longer side three times as great as the square of the lesser side; and affirm that, out of these, fire and the other elements have been constructed.[. . .] I must now speak of their construction. **From the triangle of which the hypotenuse is twice the lesser side the three first regular solids are formed—first, the equilateral pyramid or tetrahedron; secondly, the octahedron; thirdly, the icosahedron; and from the isosceles triangle is formed the cube. And there is a fifth figure (which is made out of twelve pentagons), the dodecahedron—this God**

used as a model for the twelvefold division of the Zodiac.

(一部を割愛しての[意識]をなすとして)
「炎、大気、地、水は(自然界を構成する)実体たるところの存在ら(bodies)であり、従って、立体構造を呈し、そして、立体構造は面らにて内包具現化しているものとなり、直線で囲まれた立体は三角形より構成される(訳注:この場合、四面体、すなわち、ピラミッド形状が三角形たる四つの面によって成り立っているといったニュアンスである)。その三角形の立体は2種ある。うち、一種は2辺が同じ長さの二等辺三角形、もう一種は長さ等しくはないとの不等辺三角形となる。これらをして我々は適切に炎および他の実体たるものら、元素たるものについて観念しうるところとなる。それに関して何が最も均整が取れた形態かと述べれば、二等辺三角形にあつての残る一辺に起因する形態の変容のありかたを顧慮することで正三角形が最も均整が形態となるであろう。これによって火および他の元素らが構成されていると確言するところである。…(中略部)…次いでその組成について語れば、第一にはピラミッド構造をとる正四面体、次いで、正八面体、三番目に正二十面体、さらに、二等辺三角形(を二つ重ねて出来る正方形にて)よりなる立方体こと正六面体である。そして、五番目の元素、「12の五角形よりなるものとして正十二面体(dodecahedron)」があり、これは神(プラトンの言うデミウルゴスと親和性強き存在)が黄道12宮の12枚重ねのモデルとして用いもするものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上がオンライン上より確認できるとのプラトン『ティマイオス』英訳版(19世紀に世に出された版)、ここにての元素論にまつわる解説部となるが、プラトンがその彼の見方、[正十二面体などをして世界を構成する元素としての造化の妙]をもたらした存在、[世界創造の神(デミウルゴスなる存在)]をどのように見ていたのかの記述も下に引いておく。

(続いて直下、Benjamin Jowett という19世紀の古典研究者の手になる同じくものTIMAEUS英訳版にあつての[訳者解説]としての側面が強くも出されての部、INTRODUCTION AND ANALYSIS、そのSection 8.よりの引用をなすとして)

The Timaeus contains an assertion perhaps more distinct than is found in any of the other dialogues (Rep.; Laws) of the goodness of God. 'He was good himself, and he fashioned the good everywhere.' He was not 'a jealous God,' and therefore he desired that all other things should be equally good. He is the IDEA of good who has now become a person, and speaks and is spoken of as God. Yet his personality seems to appear only in the act of creation. In so far as he works with his eye fixed upon an eternal pattern he is like the human artificer in the Republic. Here the theory of Platonic ideas intrudes upon us. God, like man, is supposed to have an ideal of which Plato is unable to tell us the origin. He may be said, in the language of modern philosophy, to resolve the divine mind into subject and object.

(補つても訳として)

「ティマイオスは造化の神の善性というものにつき他の対話篇(対話篇『法律』)のどれとも異なつての断定を含むものである。プラトンにとり彼は嫉妬深き神などではなく、従って、全てのものが等しくも善たらんことを希求した存在であった。彼は現在、人格化を見ているアイデアとしての善性であり[神]として言及されるものとなっている。だが、プラトンにとり、その人格性は創造にてのみしか

現われていない。永遠なる形態(イデア)に黙して目を投じるとの限りにおいては共和国にあっての技術工のような存在となっている。ここにてプラトンの理念にまつわる理論が我々のそれと抵触するところとなる。我々(訳注:19世紀欧州、キリスト教が今日以上に社会精神を規定していたその時代の人間たる Benjamin Jowett に代表される宗教なるものに対する理解と共感を抱いているとの向きのことであろう)にあってはプラトンが原初的なありようを話すことができないでいるとの理念・理想を神が人間のように持っていると考えられている。彼は近代の哲学にての言葉でとらえれば神意なるところを主体と客体に分化していると言われるようなところがある存在であろう」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※上のようにプラトンは
[善なる技術工(artificer)]

と神をとらえていたとされているわけだが、同じくものプラトンにとっての神は Dmiurge デミウルゴスと称される工作者としての神ともなり、そちらデミウルゴスとしての神は後に、欧州で隆盛を見たグノーシス主義の大系では
[この世界を悪しきものとして構築した劣悪な下位の存在]
と看做されるところの存在ともなっている。

それにつき、要らぬところか、と承知の上で敢えても表記すれば、本稿筆者は

『宗教など[家畜であることに心底満足し、そちら結果責任を引き受けてやむなしとの人間ら]を造り出すためのものである』
と[論拠の山]に基づいて考えている人間であるがため(I am an atheist.)、
[神]などという言葉を使うのも本来的には馬鹿馬鹿しい、実にもって忌むべきことであるとは考えているのではあるが(よりもって述べれば、『諸種事由から絶滅収容所であると判断できるところに放り込まれてその場にての「[仕事]に悪趣味を持ち込んでいるとの」嗜虐的看守らやその看守らが用いる機械装置の類、[チューリング・テスト(機械が人間のフリを出来るかの基準テスト)に易々と合格できるだけの性能を有した機械装置の類]を神とただただ[無心]に崇めるが如く行為が果たして[生き残るに値する種族の成員]に相応しき振舞いなのか、との問題に通底するぐらいに馬鹿馬鹿しい』と考えているのではあるが)、今日伝わっているプラトン申しようとの兼ね合いで述べれば、
[神]と歴年表されてきた存在を[技術工]のようなものであるととらえること、といったプラトン視点に適合する要素はこの世界には数多あるであろうことについてはこの身、本稿筆者とても同意していると述べている)

(出典(Source)紹介の部 77 はここまでとする)

以上、紹介したところのプラトン申しように関しては

[現代物理学者には「宇宙そのものの構造を規定する」、位相幾何学との兼ね合いで規定するのが正十二面体構造である可能性があるとの仮説が最近になって登場しだした——いいだろうか。仮説である(同仮説についての紹介は続く段にてなす)——。他面、プラトン『ティマイオス』元素論体系にてはデミウルゴス手仕事として「星天を構成する」第

五元素が(古典そのものの次元で)正十二面体と結びつけられている]

とのことが気になる場所としてある。

につき、[プラトンが星天の構造を規定するものとのことで引き合いに出しているとの正十二面体(ドデカヘドロン)]を引き合いに出していることが

[最近の現代物理学者に由来する「正十二面体構造が宇宙を規定する」との仮説と適合する]

とのことも無論、気になる場所ではあるのだが(続いて典拠を挙げるがそうしたことを取り上げている学者もオンライン上に散見される)、本稿にて論じていることとの兼ね合いでは

[正十二面体に黄金比が密接に関わっているとのことがある]

とのことが意をなしてくるだけのことがある(:これより [プラトンが、そして、(後述するように)現在の天文学者らもが宇宙の根源をなすものであるとしている正十二面体が黄金比と結びつくようになっていくとのこと] が特定の文物を通じて「黄金比と結びつくカー・ブラックホール」とも通ずるようになっていくとのことの解説を順次なしていくこととする)。

ここで繰り返し表記をなすが、本稿の先の段では以下の

[カー・ブラックホールの[黄金比]に基づく変化の態様について論じているとの先の段
—— **出典(Source)紹介の部 73** の段 —— にて引用をなしたとの記事]

の内容を問題視していた。

およそ次のようなかたちにて、である。

(直下、huffingtonpost.com というメディア媒体(アメリカのリベラル系インターネット新聞との触れ込みで現時、和文ウィキペディアにも一項目設けられているハフントン・ポストという媒体)にて[The Golden Ratio and Astronomy]と題されて掲載されている記事となり、本稿にての(α8) [五芒星は黄金比と際立って結びつく数である。その黄金比とブラックホールが結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある]とのことの論拠としてそこよりの引用をなしたとの記事よりの「再度の」引用をなすとして)

Another intriguing area of astronomy in which the Golden Ratio made an unexpected appearance is that of the extreme objects we call black holes. Black holes warp space in their vicinity so much that in Einstein's classical General Relativity, nothing can escape from them, not even light. [. . .] Spinning black holes (called Kerr black holes, after the New Zealander physicist Roy Kerr) can exist in two states: one in which they heat up when they lose energy (negative specific heat), and one in which they cool down (positive specific heat). They can also transition from one state into the other, in the same way that water can freeze to form ice. Believe it or not, but the transition takes place when the square of the black hole mass (in the appropriate units) is precisely equal to ϕ times the square of its spin!

(拙訳として)

「[黄金比] が予想外の出現をなすとの天文学分野にあつての興味深い領域とは我々が[ブラックホール]と呼ぶ[極限の存在]である。ブラックホールというものはアイシュタインの古典的な一般相対性理論にて何物もそれらから逃れられない、光さえも逃れられないとのかたちでそれら近傍の空間をひずませる。…(中略)…自転するブラックホール(ニュージーランド人物理学者ロイ・カー以後、[カー・ブラックホール]と呼ばれるようになったもの)は二種の存在

形態をとりうる。うちひとつはそれらがエネルギーを失う時に熱を発するとのもの(正の比熱)となり、もう一つは冷却化するとのもの(負の比熱)である。それらは一方からもう一方へと水が凍って氷になるのと同様の式で移行する。信じようと信じまいと、その移行は「正確に」ブラックホール質量の平方が「ブラックホール角運動量(スピンと書かれているが、アンギュラー・モメンタムこと角運動量のことを指すと解される)の平方」の「 ϕ 」倍 —— (訳注: ϕ ファイは黄金比の体現数値を指す) —— に達したときに起こる」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のそこよりの再引用をなしての、

[The Golden Ratio and Astronomy]

と題されての記事(同記事執筆者はマリオ・リヴィオ(Mario Livio)という人物となり、同人物は本稿にての**出典(Source)紹介の部 72**で取り上げた書籍『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』(早川書房ハードカバー版/原著原題 THE GOLDEN RATIO The story of Phi, the World's Most Astonishing Number)の著者ともなっている[そこそこに名が知られた天体物理学者]となっている)にあっては —— 本稿で初言及するところとして —— 続いて引用なすような記述「も」が含まれている。

出典(Source)紹介の部 77(2)

SOURCE

77(2)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 77(2) には

[米国の著名人らが多く寄稿するインターネット新聞であるハフィントン・ポストにあって掲載の天文学者マリオ・リヴィオ執筆の「カー・ブラックホールと黄金比の関係を論ずる記事」にプラトン古典『ティマイオス』に見る十二面体に対する言及もがなされているとのこと]

を紹介しておく。

(直下、ハフィントン・ポスト huffingtonpost. com 内の記事、「The Golden Ratio and Astronomy」と題された記事に見る黄金比のエキスパートでもある学者の Mario Livio の十二面体にまつわる申しようより(本稿にては初言及のところとして)引用をなすとして)

In the pentagram, in each one of the five side triangles, the ratio of the side to the base is precisely equal to Φ . **Second, when Plato wanted to discuss the cosmos as a whole in his celebrated Timaeus, he chose the dodecahedron (Figure 2) as the shape "which the god used for embroidering the constellations on the whole heaven." The dodecahedron has the Golden Ratio written all over it.**

(拙訳として)

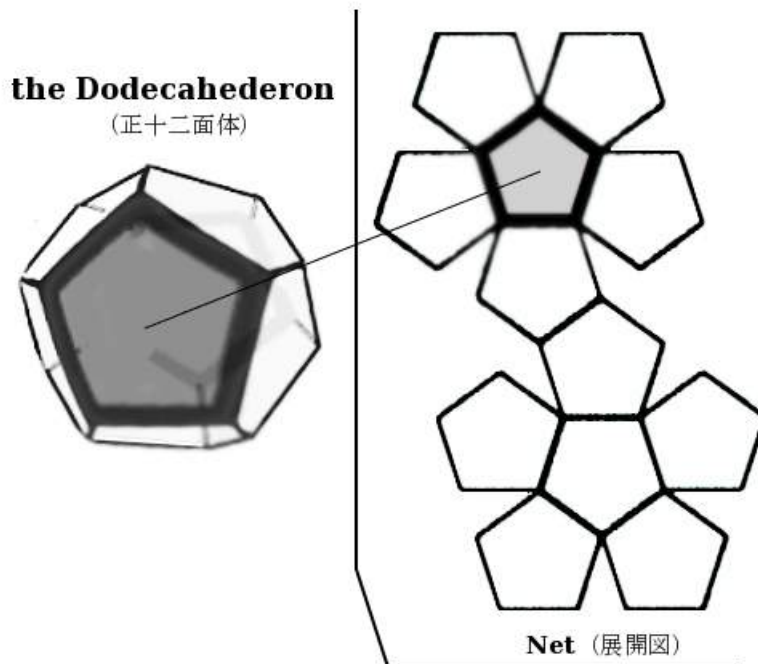
「五芒星にあってのはしばしの部にある計 5 つの三角形らはそれぞれ[脇の線分の底の線分に対する比率]が正確に黄金比(ギリシャ文字 ϕ ファイで体現される比率)に等しくなっているとのものである。第二にプラトンが彼の著名な『ティマイオス』にて宇宙を一なる全体として論じようと欲した際に彼は「正十二面体」(図 2)をして神が全天にあって星座を刺繍するために用いた形とした。正十二面体はその描画されているところのすべてにて黄金比を持っている」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※1:ドデカヘドロンこと正十二面体が「正五角形十二個でもって造りだされる多面体」となっており、その構成単位たる正五角形が(そこに内接する五芒星が黄金比の体現物であるとのことの由来ともなっていることとして)各辺と対角線が黄金比の関係をなすとの図形であることがここ引用文の背景にある事情となっている。——正五角形が黄金比と結びつくことについては現行ウィキペディア「五角形」項目にての「定理」の節にて記載されている次の記述の引用で足りるであろう⇒「正五角形の一辺と対角線の比は、黄金比に等しい。・正五角形の交わる対角線は、互いに他を黄金比に分ける——」)

(※2:つい先立っての出典(Source)紹介の部 77にて Benjamin Jowett という 19 世紀英国、オクスフォードのプラトン翻訳家(英文ウィキペディアに一項目設けられているとのその方面での 19 世紀の研究大家)による TIMAEUS 近代英訳版の記載内容を Project Gutenberg のサイトより引いたわけであるが、そこに見る解釈の部、INTRODUCTION AND ANALYSIS と振られた節にあっての(再引用なすところとして) “ **And there is a fifth figure (which is made out of twelve pentagons), the dodecahedron—this God used as a model for the twelvefold division of the Zodiac.** ” 「そして、五番目の元素、12 の五角形よりなるものとして正十二面体があり、これは神(プラトンの言うデミウルゴスと親和性強き存在)が黄道 12 宮の 12 枚重ねのモデルとして用いもするものである」との記述からも分かるように「正十二面体」は

(炎・水・気・土というプラトンの元素、リゾーマタにあって第四元素に次ぐ)
[第五元素]としての意味づけを強くも与えられているものである)



以上訳出部に見るようなこと、

[黄金比の全面的体現物たる正十二面体がプラトンの宇宙観で全天の根源とされている]

とのことが

[黄金比とカー・ブラックホールの関係について論じているとの(天体物理学者マリオ・リヴィオの筆になる)記事[The Golden Ratio and Astronomy]]

の中で取り上げられているとのことがある。

(出典(Source)紹介の部 77(2)はここまでとする)

ここまででもってしても(アトランティスを登場させるプラトン古典である)『ティマイオス』のことが全身黄金比の体現存在である正十二面体につき第五元素として言及している古典として[カー・ブラックホールと黄金比の関係性について扱った記事]内で言及されていることはお分かりいただけただか、とは思う。

続いて、直下、プラトン著作『ティマイオス』がいかようにアトランティス伝承に言及している著作なのか、プラトン著作がいかように古典的要素論にあって重きをなす正十二面体と結びつく著作となっているのか、正十二面体構造が最近の科学界論調としていかようにもってして宇宙の構造と結びつけられるに至っているのかとのことらについてのさらなる典拠紹介をなしておくこととする。

SOURCE

77(3)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 77 (3) にあっては —(直近にて[カー・ブラックホールと黄金比の関係について扱った米国学識者の手になるオンライン上流通記事]が[プラトン古典に見る正十二面体が黄金比と結びつくことを論じたもの]ともなっていることを摘示もしてきたうえでのこととして)—

[プラトン古典『ティマイオス』がアトランティス伝承を扱った古典であること]

[同じくものプラトン古典『ティマイオス』が星天を構成する[第五元素](と表せられるに至った存在)を正十二面体として描写していること]

[正十二面体が現代の天文学者らによって(最新の知見に基づき)宇宙の構造をなすものと仮説づけられるに至っていること]

について[整理]のための表記を(出典紹介なしつつ)なしておくこととする。

まずもって英文ウィキペディア[Atlantis]項目にあっての冒頭部記載内容(本稿執筆時現時点での記載内容)を引用することとする。

(直下、英文 Wikipedia[Atlantis]項目にあっての現行にての冒頭部記載内容よりの引用をなすとして)

Atlantis (Ancient Greek: Ἀτλαντὶς νῆσος, "island of Atlas") is the name of a fictional island mentioned within an allegory on the hubris of nations in Plato's works *Timaeus* and *Critias*, where it represents the antagonist naval power that besieges "Ancient Athens", the pseudo-historic embodiment of Plato's ideal state (see *The Republic*).

(訳として)

「アトランティス(古代ギリシャ語表記は *τλαντις νῆσος*、[アトラスの島]を意味する)とは [プラトンにとっての理想政体(プラトン著作 *The Republic*『国家』にまつわる項目を参照のこと)を体現する存在である古代アテナに押しよせることになった敵対国としての海洋大国] ともなるプラトンの著作『ティマイオス』および『クリティアス』に於ける国家的傲慢の寓意たるところとして言及されている架空の島の名前である」

(訳を付しての引用部はここまでとしておく)

以上のようにアトランティスに関する英文ウィキペディア解説項目の出だし開口一番の部にてそうだと
言及されていることからもお分かりいただけるか、とは思うが、そも、古の海洋大国にして海中に没した
アトランティスの根本たる言及はプラトン古典(として今日に伝わる『ティマイオス』および『クリティアス』)
に由来しているとのことがある(：プラトン古典 —先述のように[宇宙の構成要素が十二面体である]
[世界の創造者は工匠としてのデミウルゴス(という存在)である]といった内容をも含む『ティマイオス』
ら— なくしてアトランティス伝承もなかったと申し述べられるようなかたちとなっている)。

次いで、『ティマイオス』がアトランティス伝承について言及した古典であることについては次のように
再引用をなしておく(出典(Source)紹介の部 36 の段で既になしたとの引用を繰り返しなす)。

(直下、プラトン全集 12(岩波書店刊行)『ティマイオス』収録部の p.22—p.23 より中略をなし
つつの再度の原文引用をなすとして)

というのは、あの大洋には——あなた方の話によると、あなた方のほうでは「ヘ
ラクレスの柱」と呼んでいるらしいが——その入口(ジブラルタル海峡)の前方
に、一つの島があったのだ。そして、この島はリビュアとアジアを合わせたよりも
なお大きなものであったが、そこからその島の他の島々へと当時の航海者は
渡ることができたのであり、またその島々から、あの正真正銘の大洋をめぐる
ている、対岸の大陸全土へと渡ることができたのである。

…(中略)…

さて、このアトランティス島に、驚くべき巨大な、諸王侯の勢力が出現して、
その島の全土はもとより、他の多くの島々と、大陸のいくつかの部分に支配下
におさめ、なおこれに加えて、海峡内のこちら側でも、リビュアではエジプトに
境を接するところまで、またヨーロッパではテュレニアの境界に至るまでの地域
を支配していたのである。

…(中略)…

しかし後に、異常な大地震と大洪水が度重なって起こった時、苛酷な日が
やって来て、その一昼夜の間に、あなた方の国の戦士はすべて、一挙にして
大地に呑み込まれ、またアトランティス島も同じようにして、海中に没して姿を
消してしまったのであった。

(引用部はここまでとする —※—)

(※以上は国内にて流通を見ている訳書よりの表記の引用となるが、ここ本稿では Benjamin Jowett ベンジャミン・ジョウエットとの 19 世紀、オクスフォードの古典研究家(英文ウィキペディアに一項目設けられているとその方面での 19 世紀の大家)の手になる『ティマイオス』英訳版、Project Gutenberg にて公開されている版 —すなわち、検索エンジン入力(たとえば下にて抜

粋のテキストの入力)で誰でもオンライン上よりその中身を即時即座に確認出来るとのもの—としての近代成立のTIMAEUS 英訳版の対応するところの表記をもに引いておくこととする。(以下、引用なすとして) “The most famous of them all was the overthrow of the island of Atlantis. This great island lay over against the Pillars of Heracles, in extent greater than Libya and Asia put together, and was the passage to other islands and to a great ocean of which the Mediterranean sea was only the harbour; and within the Pillars the empire of Atlantis reached in Europe to Tyrrhenia and in Libya to Egypt. This mighty power was arrayed against Egypt and Hellas and all the countries bordering on the Mediterranean. Then your city did bravely, and won renown over the whole earth. For at the peril of her own existence, and when the other Hellenes had deserted her, she repelled the invader, and of her own accord gave liberty to all the nations within the Pillars. A little while afterwards there were great earthquakes and floods, and your warrior race all sank into the earth; and the great island of Atlantis also disappeared in the sea. This is the explanation of the shallows which are found in that part of the Atlantic ocean.’” (以上、対応するところの欧米圏学者の訳よりの引用とした))

さらにもってしてプラトンの『ティマイオス』に見る元素論体系とつながるところとして[ドデカヘドロン]と[正十二面体]が[天そのものを構成するもの]にして、かつまた、[古典的要素論にあつての第五元素と親和性が高いもの]であるとの言われようがなされているものであることの論拠を(誰でも即時即座にオンライン上より確認可能とのかたちにて)挙げておく。

(直下、英文 Wikipedia[Platonic solid]項目(ちなみに「プラトンの立体」ことプラトニック・ソリッドは正多面体を指す言葉である)にての「現行」記載内容よりの原文引用をなすとして)

The fifth Platonic solid, the dodecahedron, Plato obscurely remarks, "...the god used for arranging the constellations on the whole heaven". Aristotle added a fifth element, aithêr (aether in Latin, "ether" in English) and postulated that the heavens were made of this element, but he had no interest in matching it with Plato's fifth solid.

(拙訳として)

「プラトンが規定した第五の正多面体、それはプラトンが不明瞭に言及しているところとして[全天にあつての刺繍にて神(プラトンの指摘するところでは[デミウルゴス])が用いた]のが正十二面体である。 アリストテレスは五番目の元素としてアイテール(ラテン語表記で aether、英語ではイーサーことエーテル)を加え、そして、天はこの元素にて成り立つと主張したが、師たるプラトンの[第五の立体]とそちらを整合させるのに意を向けはしなかった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(続いて直下、英文 Wikipedia[Dodecahedron]項目(英語版[正十二面体]項目)にあつての現行記載よりの原文引用をなすとして)

In Theaetetus, a dialogue of Plato, Plato was able to prove that there are just five uniform regular solids; they later became known as the platonic solids. **Timaeus (c. 360 B.C.), as a personage of Plato's dialogue, associates the other four platonic solids with the four classical elements, adding that there is a fifth solid pattern which, though commonly associated with the dodecahedron, is never directly mentioned as such; "this God used in the**

delineation of the universe."

(拙訳として)

「対話篇『テアイテス』—『ティマオス』と並ぶ著名なプラトン由来の文物—にてプラトンは正多面体には五種の形態があるとのことを説明することができた(訳注: 現実に現代的理解でも正多面体、すなわち、厳密な定義では[すべての面が同一の正多角形で構成されており全ての面の数が等しい]との図形は数学的に[正四面体][正六面体][正八面体][正十二体][正二十面体]の五種類のみが存在するとされている)。それらは後にプラトニック・ソリッド(正多面体の英語表記)として知られるようになった。『ティマオス』(紀元前360年頃成立とされる)、プラトンによる著名人対話録との形態をとる同著では一般には正十二面体と関連づけられるものの決して直にはそうしたものとして言及されていないとの「第五の」正多面体が「これは神が宇宙を輪郭描画のために用いたものである」と付け加えられながら、(正十二面体以外の)他の4つの正多面体が古典的四大元素と結びつけられてもいた」

(訳を付しての引用部はここまでとする 一※一)

(※以上、ウィキペディアから引いたとの記載は Project Gutenberg のサイトよりダウンロード可能であるとの TIMAEUS by Plato (Benjamin Jowett との 19 世紀にあつてのオクスフォードのプラトン翻訳家の訳になる版)より先立っての [出典\(Source\) 紹介の部 77](#) にて引用なしたところと同文の記載となる)

さらに加えてもして、最新の知見に基づき宇宙構造そのものを正十二面体と結びつけて語る論調が現代の天文学者らにあるとのことを端的に示す媒体を挙げておくこととする。

(まずもって、現行の英文 Wikipedia [Shape of the universe] 項目にあつての [Universe with positive curvature] の節に認められるところにあつての現行記載よりの原文引用をなすとして)

A positively curved universe is described by spherical geometry, and can be thought of as a three-dimensional hypersphere, or some other spherical 3-manifold (such as the Poincaré dodecahedral space), all of which are quotients of the 3-sphere. Poincaré' dodecahedral space, a positively curved space, colloquially described as "soccerball-shaped", as it is the quotient of the 3-sphere by the binary icosahedral group, which is very close to icosahedral symmetry, the symmetry of a soccer ball. This was proposed by Jean-Pierre Luminet and colleagues in 2003 and an optimal orientation on the sky for the model was estimated in 2008.

(あまりにも専門的な話であるために訳に誤謬介在の可能性ありと断りつつもなすところの拙訳として)

「(曲率にあつて)正の湾曲を示した宇宙像は球面幾何によって描写され、三次元状の超球(ハイパー・スフィア)ないし「ポアンカレの正十二面体宇宙のような」球状の三次元多様体か何かのようなものと考えられうる。「ポアンカレの正十二面体宇宙」は正の曲率を持つ空間構造(訳注: 負の曲率を持つとは三角形構造の各角度が足しても 180 度未満となるような凹んだサドル型の空間構造を指し、正の曲率を持つとはその逆の状況を指す)となり、正二十面体対称性ととても近づくとの二項正二十面体群(the binary icosahedral group)にて三維球面の比率とあいなるような「サッカーボール形状」と講学的には描写されるものである。これは 2003 年にて Jean-Pierre Luminet およびその同僚らによって

(訳を付しての引用部はここまでとする)

門外漢を斥けるような専門用語(ジャーゴン)で溢れているとのものとなるが、以上の引用項目にあつては

「[ポアンカレの正十二面体構造宇宙(と表されるようなもの)]にまつわる観点が2003年に呈示された」

との表記がなされていることまでは(英語を解するとの向きには)押し量れるようになっている。

また、オンライン上より表記表題入力ダウンロードできるとの論稿にして Nature 誌にて掲載されたとのものであるとの2003年発の論稿、

[Dodecahedral space topology as an explanation for weak wide-angle temperature correlations in the cosmic microwave background]

の記述内容をも引いておく(:直近にてなした引用と同文に門外漢に[やたらと込み入つての小難しい話をなしている]との感を覚えられるのは必定であろうかとも思うのだが、理論動向の委細や適否ではなく理論が存在していることそのものが本稿のこれよりの流れにての指し示しに多少関わるとの認識をもって上記論稿の記述内容をも引いておく——[宇宙の構造が科学者らについて昨今になって[正十二面体構造を呈する]と宇宙背景放射の観察結果に基づき考えられるようになった]とのことが(その仮説自体の真偽は置くとして)[仮説]として存在しているとの一事だけを指し示すために専門的な論稿よりの内容引用をなす——)。

(直下、論稿 Dodecahedral space topology as an explanation for weak wide-angle temperature correlations in the cosmic microwave background (ウィキペディアにもその名を見出せる Jean-Pierre Luminet らの手になる論稿)の3と振られたページよりワンセンテンス 原文引用をなすとして)

While most potential spatial topologies fail to fit the WMAP results, the Poincaré dodecahedral space fits them strikingly well.

(訳として)

「最もありうべき空間上の位相は WMAP (ウィルキンソン・マイクロ波異方正探査機; NASA が打ち上げた宇宙探査機)よりの観測結果と一致せざるものであったが、ポアンカレ正十二面体状宇宙(モデル)は WMAP データと極めてよく接合するものであった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(続いて直下、同じくもの論稿 Dodecahedral space topology as an explanation for weak wide-angle temperature correlations in the cosmic microwave background の4と振られたページよりの原文引用をなすとして)

The excellent agreement with WMAP's results is all the more striking because the (such as the Poincaré dodecahedral space), dodecahedral space offers no free parameters in its construction. The (such as the Poincaré dodecahedral space), space is rigid, meaning that geometrical considerations require a completely regular dodecahedron.

(訳として)

「WMAP —(訳注:WMAPとはCMB(宇宙マイクロ波背景放射)を探索する目的で打ち上げられたとの The Wilkinson Microwave Anisotropy Probe こと[ウィルキンソン・マイクロ波異方正探索機]のことを指す)— の結果にまつわる優位性伴っての同意は[ポアンカレ正十二面体状宇宙がその構築にあって修正可能性を残す媒介変数を呈示しない]とのことによってより際立ったものとなっている。ポアンカレ型宇宙は固いものであり、それは幾何的考察が完全に[正十二面体]を要求しているとのことである」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※ちなみに上にての引用部に認められるウィルキンソン・マイクロ波異方正探索機こと WMAP については 2001 年に打ち上げされたものとなり、については、和文ウィキペディア[WMAP]項目にて現行、その冒頭部に(引用するところとして)WMAP (Wilkinson Microwave Anisotropy Probe: ウィルキンソン・マイクロ波異方正探索機)は アメリカ航空宇宙局 (NASA) が打ち上げた宇宙探査機である。WMAP の任務はビッグバンの名残の熱放射である宇宙マイクロ波背景放射 (CMB) の温度を全天にわたってサーベイ観測することである。この探査機は 2001 年 6 月 30 日午後 3 時 46 分 (EDT) にアメリカのケープカナベラル空軍基地からデルタ II ロケットで打ち上げられ、太陽と地球のラグランジュ点 (L2) で 2010 年 8 月まで観測を行った(引用部終端)と記載されているところとなる)

以上をもって

[プラトン古典『ティマイオス』がアトランティス伝承を扱った古典であること
[同じくものプラトン古典『ティマイオス』が星天を構成する[第五元素](と表せられるに至った存在)を正十二面体として描写していること
[正十二面体が現代の天文学者らによって(最新の知見に基づき)宇宙の構造をなすものと仮説づけられるに至っていること]

について整理するための部(かつ出典紹介の部)とした。

(**出典(Source)紹介の部 77(3)**はここまでとする)

以上のようにプラトン古典にて第五元素と親和性が高くも見受けられるとのかたちで言及されている正十二面体は宇宙のありうべき構造形態として「も」熱い視線を集めているため、

[**黄金比**]がカー・ブラックホールと結びつくと宇宙論的問題]

を扱っている天文学物理学者(マリオ・リヴィオ)由来の[**The Golden Ratio and Astronomy**]との記事—(つい先程にてもそこよりの原文引用をなしたとの記事)— にあつてのまさしくその内容を引いた部にて

[**プラトニック・ソリッド**である正十二面体(全身「黄金比」の体現物)およびその言及をなしての**プラトン古典『ティマイオス』**のことに注意が向けられているとのやりよう]

がなされていることは別段、恣意的なことと思われたいかもしれない。

だが、ここで考えてみるべきである。

第一。LHC に関しては(同 LHC がブラックホールを生成しうる可能性があるとして)カー・ブラックホールを生成する可能性もが取り上げられていたとのことがある(つい先立っての**出典(Source)紹介の部 76(3)**にあつて解説してきたことである)。

第二。LHC にあつてのブラックホール観測は ATLAS との検出装置・ATLANTIS というイベント・ディスプレイ・ウェアによってなされうるとの言明がなされてきたとのことがあるが(本稿にての**出典(Source)紹介の部 35**で典拠紹介し、何度も言及していることである)、さて、黄金比の全身体現存在でもある正十二面体を万物の根源、第五元素と親和性高きものとして取り上げているプラトン古典『ティマイオス』の方についても「アトランティス」についての言及をなしている古典としてそれがつとに知られているとのことがある(つい最前の段にて確認のための言及をなしたところでもある)。

上のことから、天文学者マリオ・リヴィオの先立って引用なした記事内の申しよう 一再言するが、[黄金比とカー・ブラックホールの関係性]について取り扱っているとの記事内でプラトン古典『ティマイオス』にあつての黄金比を体現した正十二面体に注意を向けているとの申しよう— は[恣意]を感じさせるものであるとのことになりもする。

だが、たとえそうであったとしてもそれは特定科学者の属人的恣意の問題として片付けられる素地あるところか、と思う(当たり前である)。

であるから述べるが、

[[正十二面体]と[ブラックホール]との(プラトン古典に見るアトランティスをも間に挟んでの)繋がり合い]

にはそのようなレベル、科学者個人のやりようで[ことが済まない]といった形態での多重的かつ不可解なる関係性が指摘できるよう「にも」なっているとのことがある(詰まるところ、その指し示しをなさんというのが本稿のこれよりの流れとなる)。

ここまで説明なし終えたところで先程、[話の向かう方向性]として明示してきたところの

[[黄金比と結びつくカー・ブラックホール]が[プラトン古典にみとめられる(黄金比を全身で体現するものにして第五元素「的なる」位置付けの)正十二面体]と何故、いかように特定の文物ら(現代にてヒットを見た作品ら)を介して結びつくのか、また、そのことがどうして本稿にての指し示し事項と密接に結びつくのかとのことについての指し示しをなす]

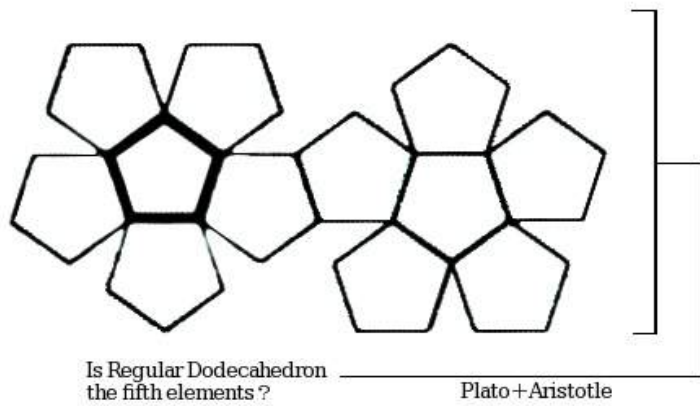
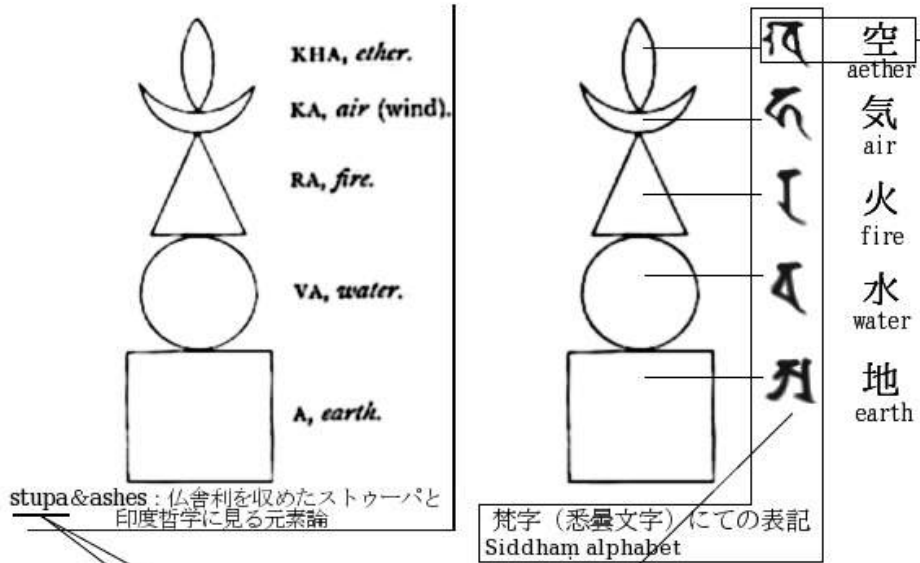
ための段に入るべきか、とも考えたのだが、その点について詳述なす前に

[[元素論]にまつわる布石としての話]

をなした方がよからうと考えたため、以下、(そこからして長くもならざるをえないとの性質のものなのだが)、そのための解説の部をさらに設けておくこととする。

長くなるも、の [元素論] についての解説として

ここにては元素論をテーマとして[布石]となる解説をなすこととする。
 まずもって下の図をご覧頂きたい。



プラトン・アリストテレスの師弟の系譜に連なる同文同様の元素を並びたてての元素論では [空] (星の世界の構成要素)、第五元素とでも表すべきものは正12面体で体现されるとの見方がある

図葉三段に分けもしているとの表記図の概要を下にて説明する。

最上段。うち、左の方に挙げての図は印度や東南アジア文化圏に認められる仏教関連の歴史的建造物、釈迦の舍利(遺灰)を収めたとされるかたちにて各地に建立されている、

[ストゥーパ([仏塔]/Stupa)]

に際立って類似するものとしてペルシャ系の民族が諸所にて用いてきたとのことである標識 —歴史的・地理的アイコン— を図示したもの(として古書にて紹介されている図)となる。そちら図の出所は19世紀刊行の著作、Project Gutenberg のサイトにて誰でも全文閲覧・ダウンロード可能であるとのかたちにて公開されている、

A MANUAL OF THE HISTORICAL DEVELOPMENT OF ART (1876)

との著作となり、同著、革命家にして Spy 間諜の類であったとも英文 Wikipedia に表記されているハンガリー人、Gustav Zerffi の手になる著作となる(筆者が表記著作を検証した限り、どういった筋目の人間であれ、上記著作に見てとれる著者見識は深いものであると見てとれる)。

抜粋した同図に見る仏教建築物たるストゥーパ(Stupa)に類似の歴史的標識は

[ether(エーテル/英語圏で第五元素とも呼称された観念上の天体構成要素),air(空気),fire(火),water(水),earth(地)]

との古典的要素論に見る各元素と結びつけられていもするものとなる(:図の抜粋元となる著作、初歩的英語力を有した人間にとって意味が歴然としたタイトルの著作 A MANUAL OF THE HISTORICAL DEVELOPMENT OF ART (1876) の中にての同図にまつわる一言解説として —そこよりの原文引用をなすところとし— “the Persians, like the Indians, expressed the cosmical elements of creation symbolically by means of geometrical signs, which are given below.” 「ペルシャ人は印度人のように創造にまつわる宇宙的 [元素] を下図に認められるようなかたちで幾何学的に表した」と記載されているとおりである)。

そして、実際、同最上段左の図にその構図の類似構造が描写されているとのストゥーパそれぞれものが「五大元素」と結びつけられているとのことは —ここ日本にての故人への供養のありよう、墓石の隣にぎざぎざの板(卒塔婆)を立てるとのやりよう、いわゆる、[卒塔婆供養]に伴う細かき様式とも結びついているところとして— 現代社会にてあつて「も」知る向きには知られている、といったことである(出典として:基本的なところであるため、そこよりの引用で十分か、と判断、そうすることとするが、墓地に見受けられる卒塔婆にまつわる和文ウィキペディア [板塔婆] 項目にて [次の記載] が現行なされているとおりである。(Wikipedia [板塔婆] 項目より引用なすところとして) “板塔婆(いたとうば、いたとば)とは、追善供養のために墓の脇などに立てる木製の長い板のこと。卒塔婆(そとうば、そとば)とも。塔婆とはストゥーパの音訳であり、ストゥーパとは仏舎利を納めた墓のことであり、その形を模した板である。板塔婆は、日本の仏教のいくつかの宗派で用いられている。五輪塔に似せた形に作られており、五大を表し、上から空、風、火、水、地である。それぞれ宝珠形、逆半円形、三角形、円形、長方形をしている” (引用部はここまでとする)。以上、Project Gutenberg サイトより引用した19世紀著作(A MANUAL OF THE HISTORICAL DEVELOPMENT OF ART)の構図と全く同一のものとのものにまつわる表記として(ストゥーパは)五大を表し、上から空、風、火、水、地である。それぞれ[宝珠形][逆半円形][三角形][円形][長方形]をしているとの書かれようがなされているわけである)。

次いで、最上段の右、及び、(最上段から下っての)中段の図の端的なる解説をなす。

最上段右の図についてはサンスクリット語、その表記のための[梵字]に含まれる[悉曇(したん)文字] (と呼ばれる日本仏教界にて歴史的に用いられてきた字体)にて[空][風][火][水][地]の五大元素を体現する字を「本稿用に、」と最上段左の書籍掲載図に修正・付け加えたものとなる。

につき、何故、筆者のような「非」宗教的人間 一心底、宗教や宗教的やりようを軽侮しているとの人間一 が悉曇文字(日本仏教界にて歴年重んじられてきたとの字体)による[空][風][火][水][地]の表記などをここに易々と再現できもしているのか、と述べれば、である。そうもしたやりようをとっている理由が、そも、[そのこと自体を訴求したくもあった]とのことにあるとのこととして、悉曇文字にて五大元素を意味する文字表記がここ日本にての「そこかしこの墓地の隣の卒塔婆」に書き記されているとのことがある、それぐらい「卒塔婆と五大元素の繋がりあい」が色濃いのとのことがあるからである(：直に「卒塔婆、サンスクリット、梵字」などを入力して検索いただいてその通りの意味合いの悉曇(したん)文字が果たして本当に墓地の卒塔婆に一般的に描かれているものなのか、確認頂きたいものである)。

そうしたサンスクリット語での五大(元素)にまつわる表記がそこにてなされているところの墓地にての卒塔婆とはいかなる様相のものなのかの確認・強調のために挙げもしているのが上掲図中段の図となり、その抜粋元となった著作は **ROMANCES OF OLD JAPAN (1920)** との Project Gutenberg サイトにて全文公開されているとの 20 世紀初頭にての欧州圏流通著作となる(：そちら著作、Madame Ozaki Yukio、[日本の議会政治の父]といった二つ名を伴っての政治家・尾崎行雄(一般に知られている方の名は号しての尾崎号堂かと思う)、軍国主義化風潮の中であらかじめ辞世の句を詠んでおくとのやりようで思想的狂人(モードの駒)らに抗したとの事績などで今日に至るまでつとに知られる同・尾崎行雄の妻たる尾崎テオドラの手になる著作となる)。同著 (**ROMANCES OF OLD JAPAN**) にあつての図にまつわって解説されているところ、想い叶わず現世で結ばれることがなかった女が不遇をかこって死にもし、霊として出沒するようになったため女の遺骸を墓地から男が掘り出すとの物語の内容はここでは置くとして、画に見るような卒塔婆、今日でも墓地に据え置かれているとのその卒塔婆にわざわざもってサンスクリット由来文字を用いるなどして[空][風][火][水][地]と五大のことが表記されているとのありさまを筆者は問題視している(として話を続ける)。

次いで、上掲図にあつての下段の図。同図は古代ギリシャ哲人の元素理解にて **[エーテルとも表されるもの (第五元素とも表されること多き星天の世界の構成要素)を示すものとの理解があることをここまでに解説してきた正十二面体の展開図]** である(本稿にての **出典(Source) 紹介の部 77** で世間一般の講学的な解説のされようを引いているように古代ギリシャの代表的知識人プラトンは[四つの自然界の元素]と[四つの多面体]を対応させていたと古文書を介して伝わっているのだが、プラトンは[天を構成するもの]として後にそこに[正十二面体]を付け加えるに至った(とのことがあると先に紹介していたところである)。といった中でプラトン自身は(彼自身が四大元素に付け加えたものでありながらも)正十二面体をしてはきと [第五元素] そのものであると強調していないのだが ーただし本稿の先だつての段で引いている部にも見るようにプラトン著作を英訳しているような欧米圏識者らがプラトンにまつわつての注釈として正十二面体を第五元素と表しているといったことはまあある ー、プラトンの弟子、諸学の父ともされるアリストテレスが四つの元素に次いで天体構成物質をアイテル(エーテルの語源)、[上層の気]としての第五元素として表していたことから引き直して見れば、プラトン・アリストテレスが創始した学問体系では

正十二面体が[空]こと第五元素と同一視される[エーテル]を現わすものであるとの解釈が自然に成り立つ(アリストテレス自身も「五大元素イコール正十二面体」との申しようを目立ってなしていたわけではないとされているが、そういう解釈が自然に成り立つ)ところとなっている——同じくものことについては本稿にての[出典\(Source\) 紹介の部 77\(3\)](#) にも英文 Wikipedia [Platonic solid] 項目から “**The fifth Platonic solid, the dodecahedron, Plato obscurely remarks, "...the god used for arranging the constellations on the whole heaven". Aristotle added a fifth element, aithêr (aether in Latin, "ether" in English) and postulated that the heavens were made of this element, but he had no interest in matching it with Plato's fifth solid.**” (拙訳として)「プラトンが規定した第五の正多面体、それはプラトンが不明瞭に言及しているところとして[星天にあつての刺繍にて神(プラトンの指摘するところではデミウルゴス)が用いた]との正十二面体である。アリストテレスは五番目の元素としてアイテール(ラテン語表記で aether、英語ではイーサーことエーテル)を加え、そして、天はこの元素にて成り立つと主張したが、彼とて師たるプラトンの第五の立体とそちらを整合させるのに意を向けはしなかった」との記述を引いていもした——)。

何故、本稿筆者は以上のようなことをわざわざこの場で持ち出しているのか?「後の段への[布石]として意図しての話をなすことにしている」とは先述しているところなのだが、

『この男が鼻持ちならぬペダン(術学趣味者;学をひけらかすような類の悪癖の持ち主)だからだろうよ』

と考える向きもあろうかもしれないから「然にあらざ」との意を兼ねさせて、さらにもって、次のこと、申し述べておきたい。

「筆者には[死んだ知識]など[犬](システムの奉仕者)と[漢字二字ないし一字で侮蔑的に形容される人種](下らぬ人種)にくれてやればいいとの考えがある。しかし、[ここでの一見する限り、非本質的な元素論にまつわる話]もが[敢えて筆を割くべきであるとの[我々の生き死にの問題]に関わる——加えて述べれば、「実にもって嗜虐的に関わる」——ものである]との指し示しが「実証的に」なせてしまうから、同じくものことにつき、(脇に逸れての話をなすのかたちでながら)[布石]としてここにてわざわざ取り上げることとしている」

さて、ここからが[布石]として意をなしてくるとの話である。

につき、(唐突とはなるが)、ダン・ブラウンとの作家の手になる小説として『天使と悪魔』(2000年刊行)という有名な小説作品がある。同作、『天使と悪魔』、ハリウッド俳優トム・ハンクスが主演を張って(主要登場人物の象徴主義研究者ラングドン教授を演じて)の映画化バージョンが『ダ・ヴィンチ・コード』の続編として封切られ、大ヒットを見たとの作品ともなっているのだが、その小説としての初出自体は一同作が[911の事件の前]に登場しだしたとのこととて重んじざるをえぬ側面がある(本稿にてのまた後の段で言及することとしてそういう側面がある)がゆえにわざわざもってそこまで言及しているとのことであるのだが——映画とは逆に『ダ・ヴィンチ・コード』に先立つもの、2000年に遡るとのものとなる(映画化の経緯はともかくも『ダ・ヴィンチ・コード』の方が『天使と悪魔』の「」続編にあたる)。

そちら『天使と悪魔』という小説作品、

[CERN(本稿にての最初部から問題視している欧州はジュネーブに本拠を置く研究機関でその主催するLHC実験にてブラックホール生成が取り沙汰されてきたとの研究機関である)より強奪された反物質が時限爆弾に転用され、バチカンを崩壊させる手

段へとされると描かれるとの作品]

であり、また、

[CERNより反物質を強奪した犯人が教皇選出のためにバチカンに馳せ参じたローマ・カトリックの枢機卿らを欧州にて古代から伝わる元素論——気・火・水・地を世界の根源とする古典的要素論——に基づき順々に儀式的に殺していくさまが描かれるとの作品]

ともなっている。

通俗的で、かつ、すぐに調べがつくとのよく知られたことであるため、出典呈示を割愛したいとの気持ちもあるのだが、論拠呈示に重きを置いている本稿として上記のことらの出典を目につくところから—それら出典表記にあっては問題としている作品『天使と悪魔』を把握・検討しもしている人間として誤りはないと確認したうえで—挙げておくこととする。

(直下、英文 Wikipedia[Angels & Demons]項目にての現行記載内容より掻い摘まんでの引用をなすとして)

Angels & Demons is a 2000 bestselling mystery-thriller novel written by American author Dan Brown and published by Pocket Books. The novel introduces the character Robert Langdon, who is also the protagonist of Brown's subsequent 2003 novel, *The Da Vinci Code*; his 2009 novel, *The Lost Symbol*; and the 2013 novel *Inferno*.

[. . .]

The plot follows Harvard symbologist Robert Langdon, as he tries to stop the Illuminati, a legendary secret society, from destroying Vatican City with the newly discovered power of antimatter.

CERN director Maximilian Kohler discovers one of the facility's physicists, Leonardo Vetra, murdered. His chest is branded with an ambigram of the word "Illuminati". Kohler contacts Robert Langdon, an expert on the Illuminati, who determines that the ambigram is authentic. Kohler calls Vetra's adopted daughter Vittoria to the scene, and it is ascertained that the Illuminati have stolen a canister containing antimatter — a substance with destructive potential comparable to a nuclear weapon.

[. . .]

Langdon and Vittoria make their way to Vatican City, where the Pope has recently died. It is discovered that the four *Preferiti*, cardinals who are the most likely papal successor, are missing. Langdon and Vittoria search for the *Preferiti* in hopes that they will also find the antimatter canister. Their search is assisted by Camerlengo Carlo Ventresca (the late pope's closest aide) and the Vatican's Swiss Guard.

Langdon attempts to retrace the steps of the " Path of Illumination ", a process once used by the Illuminati as a means of inducting new members; aspirants to the order were required to follow a series of subtle clues left in various landmarks in and around Rome. The clues indicate the secret meeting place of the Illuminati. Langdon sets off on the Path of Illumination in hopes of delivering the *Preferiti* and recovering the antimatter canister. **The Path leads Langdon to four locations in Rome, each associated with one of the primordial elements: 'Earth', 'Air', 'Fire', and 'Water'**. Langdon finds one of the *Preferiti* murdered in a way thematically related to each location's related element. The first cardinal was branded with an Earth ambigram and had soil forced down his throat, suffocating him; the second was branded with an Air ambigram and had his lungs punctured; the third was branded with a Fire

ambigram and was burned alive; and the fourth was branded with a Water ambigram and was wrapped in chains and left to drown at the bottom of a fountain.

(肩肘ばらずに即時に訳したところとして)

『『天使と悪魔』は 2000 年にベストセラーを記録したアメリカ人著者ダン・ブラウンの手になる作品、ポケット・ブックス社から刊行されたとのミステリー・スリラー小説である。同作『天使と悪魔』はロバート・ラングドンという登場人物、ダン・ブラウンの他の小説、2003 年刊行の『ダ・ヴィンチ・コード』、2009 年刊行の『ロスト・シンボル』、2013 年刊行の『インフェルノ』の主人公となっているとのそのキャラクターをはじめ登場させたとの小説となっている。

……(中略)……

同『天使と悪魔』の粗筋はハーバードの象徴主義研究者ロバート・ラングドンが伝説上の秘密結社イルミナティがあたらしく発見された反物質の力でもってバチカン破壊しようとしているのを阻止せんとしているとのその足跡を追うとのものである。

(以降、具体的粗筋 Plot 紹介の部として)

CERN 役員マクシミアン・コーラーが同研究機関物理学者の一人レオナルド・ヴェトラが殺害されているのを発見した。その遺体胸部にはアンビグラム(訳注:アンビグラムとは上下反転して見て見たり、鏡に映して見たりと見方を変えても同様の単語が読み取れるように調整された特別の文字記述様式のことを指す)でもって **Illuminati** と焼きごてにて刻印されていた。コーラーはイルミナティに関する専門家であるロバート・ラングドンにコンタクトを取り、ラングドンはそのアンビグラムが真正のものであるとの判断を下した。コーラーはヴェトラ(被害者)の養女のヴィットリアを事件現場に呼び出し、イルミナティ(を名乗る存在)によって反物質——核兵器に比肩する潜在的破壊力を持った物質——を収めたキャニスターが盗み取られていることが確認された(訳注:尚、「反物質を兵器に転用できるようなかたちで持ち運ぶことは荒唐無稽極まりない馬鹿げたことである」と諸種の科学者ら—『天使と悪魔』に寸評加えているとの科学者ら—に諸所で指摘されており、については、オンライン上より容易に確認できるようになっていることともなる。だが、ここで問題視しているのは荒唐無稽小説の体裁を取る小説の額面通りの荒唐無稽なる設定を問題視することではなく[背面で問題となる]との性質悪き寓意性にまつわることであること、お含みいただきたいものである)。

……(中略)……

ラングドンと彼に同道することになったヴィットリア(殺された **CERN** 科学者の娘)は最近、教皇が帰天したヴァチカン市に(イルミナティを追っての)目的地を定めた。そこにて、

[四人のプレフェリーティ](新教皇の最有力候補たる枢機卿ら)が失踪しているとのことが判明した。ラングドンとヴィットリアは彼らもまた反物質を入れた容器を(それなりの理由あって)見出しているのではないかと期し、四人のプレフェリーティ(新教皇の最有力候補たる枢機卿ら)を捜すこととなった。ラングドンらのといった探索行は前教皇の[教皇侍従長]たるカメルレンゴのカルロ・ヴェントレスカおよびヴァチカン詰めのスイス衛兵隊のサポートを受けることになった。

ラングドンは(反物質を略取したイルミナティの足跡を追うべく)啓蒙の過程[パス・オブ・イルミネーション]、かつてイルミナティによって新参者を入会・手ほどきするのに用いられていたとのその過程を辿ることを試みだした。すなわち、ローマ界限にての諸種様々なランドマークにてのかすかに残された一連の手がかりを追う、組織入団希望者が求められたとの形式を辿って追うとのこ

とを試みだした。そうして煮詰められた証跡がイルミナティの秘密の会合の場を示唆するところとなる。ラングドンはプレフェリーティ(新教皇の最有力候補たる枢機卿ら)を見つけ出し、また、反物質入りのキャニスターを見つけることにそれが通ずると期待し、[パス・オブ・イルミネーション]の過程を(実際に足で)追うことになった。その啓蒙の過程 [パス・オブ・イルミネーション] はラングドンをしてローマ市内の四つの地点、各々が原始的要素論 [地・気・火・水] の各々と関わっているとの地点へといざなった。

ラングドンはその過程でプレフェリーティ(新教皇の最有力候補たる枢機卿ら)がテーマ性をもつのかたちにて各々、元素に関わるかたちで殺害されているとのそのありさまを発見することになる。

最初の枢機卿は[アース](大地)とアンビグラム(注記:再度記すが、アンビグラムとは上下反転して見て見たり、鏡に映して見たりと見方を変えても同様の単語が読み取れるように調整された特別の文字記述様式のことを指す)にて焼きごてを押されて、土を喉に無理矢理詰め込められ、それでもって窒息死させられていた。第二の枢機卿は[エアー](大気)とアンビグラムの焼きごてが押されて肺に穴を開けられて殺されていた。第三の枢機卿は[ファイア](火)とアンビグラムで焼きごてが押されて生きたまま焼き殺されていた。そして、第四の枢機卿は[ウォーター](水)とのアンビグラムの焼きごてが押されて鎖で繋がれ溺れ死ぬようにと噴水に放置されていた」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

さて、2000年初出の小説作品『天使と悪魔』が教皇候補の枢機卿らを元素論に基づいて殺していくとの粗筋を有しているとのことを扱っている解説媒体の記述を引いた上で述べるが、今日用いられている枢機卿との言葉の語源はラテン語のカルド Cardo [蝶番(ちょうつがい)]にあると一般に知られているとのことがある。

たとえば、英文 Wikipedia [Cardinal (Catholicism)] 項目にてはその冒頭部からして

“ The term cardinal at one time applied to any priest permanently assigned or incardinated to a church, or specifically to the senior priest of an important church, based on the Latin cardo (hinge), meaning "principal" or "chief". The term was applied in this sense as early as the ninth century to the priests of the tituli (parishes) of the diocese of Rome.” 「[カーディナル]との語(現在の枢機卿を指す語)は教会にて終身任命されるか、赤き服を割り当てられるかしての諸々の聖職者ら、すなわち、殊に重要な教会にての上級僧に対して[ヒンジ(蝶番)]を指すラテン語[Cardo]に依拠して、(扉の留め金のように)[主要な][主たる]といったニュアンスで用いられるに至ったとのものである。この意でのカーディナルとの語はローマ司教区の教区にての僧らに対して早くも9世紀頃から用いられだしたものである」

と記載されているわけであるが、よりもって確度高きものと解されるソース、19世紀にての書、

The Study of Words (1851年に刊行されたものが1888年表記と共に Project Gutenberg サイトにて公開されているとの著作/著者はイングランド国教会の大司教(アークビショップ)にして詩人、言語学者として今日にその事績が今日に伝わっている **Richard Chenevix Trench** リチャード・チェネヴィックス・トレンチとの人物)

にも(当然にオンライン上より誰でも確認可能なところであるからそこよりの引用をなすとして)[Cardinal]の語源(etymology)につき次のような記載がなされている。

(直下、Project Gutenberg のサイトにて公開されているとの往時の聖職者系文筆家であった Richard Chenevix Trench という人物の手になる著作 **The Study of Words (1851)** より抜粋をなすとして)

Various explanations of 'cardinal' have been proposed, which should account for the appropriation of this name to the parochial clergy of the city of Rome with the subordinate bishops of that diocese. [. . .] . **One of the favourite comparisons by which that See was wont to set out its relation of superiority to all other Churches of Christendom was this; it was the hinge, or 'cardo,' on which all the rest of the Church, as the door, at once depended and turned. It followed presently upon this that the clergy of Rome were 'cardinales,' as nearest to, and most closely connected with, him who was thus the hinge, or 'cardo,' of all.**

(19 世紀中葉の書物とのことで流石に訳をなしがたいところがあるので[意識]としての側面を強めて訳をなすとして)

「カーディナルとの語に対しては諸種様々な説明が講じられてきたわけだが、といった説明はローマ市の教区の聖職者に対しては[教区司教の従位階者]に対してもこの名称が割り当てられていたことに対して説明を付けるべしとのものであった…(中略)…よく持ち出される比較差異化に依拠しての便法は他の全てのキリスト教世界教会に対する(総本山の)優位性認識に端を発してこうも述べるものであった。「それは残余のキリスト教教会にとっての蝶番(hinge)、カルドとのことに由来し、ドアにてはそれが支柱となるところ、回されるところなのである。それに応ずるところとしてローマ聖職者らはカーディナルであった、最も近しきところとして最も緊密なる接合部との役割を果たしているがために他の全員に対してヒンジ(蝶番)すなわちカルドであったのである」

(以上、19 世紀の書 The Study of Words よりの訳を付しての引用とした)

さて、ここまでの話から申し述べられるとのことは

「小説 **Angels & Demons** 『天使と悪魔』は「蝶番(ちょうつがい)をその名称由来とする枢機卿の位にある四人の教皇候補者」が古典的要素論に基づき順々に殺されていくとの粗筋の作品である。につき、蝶番(ちょうつがい)、すなわち、Hinge ヒンジとは扉の開閉を可能にする扉(ドア)の端っこの部分に付けられた金物(かなもの)のことであるが、(各自、自身でドアを観察すれば分かることとして)蝶番が破壊されたドアというのは最早、「留め金をなくした一個の板」にすぎず、それがあったところに通気口を残すようなかたちで倒れるしか道がないのものになる」

とのことともなる。

以上のことに加えて次のようなことが述べられるようになっているとのこと、ここ[布石]の部では指し示していきたい。

1. 「そもそもローマ教皇とはその歴代の紋章に[鍵]を採用している存在となり、ローマ・カトリックが総本山として本拠としているサン・ピエトロ大聖堂それ自体が「巨大な鍵」を模しているといった按配の特色を有している(ヒンジを取り除くのが強引に扉を開く手法ならば、鍵を用いるのは筋道に沿って扉を開く手段ともなろう)。何故、そうもなっているのか、と述べれば、ローマ教皇について言えば、その初代教皇(とされる)ペテロがキリストより「天国の鍵」を渡された存在であるとの言い伝えの伝が存する、新約聖書に記述されているとのそうした言い伝えの伝が存するからである」

2. 「ローマ・カトリック教会始祖であるペテロの教会については新約聖書(の中のマタイ福音書)にあってからして「地獄の門に対する蓋(ふた)となる存在」であるとの表記がなされてもいるとのことがある」

3. 「先に既述のようにローマ教会を CERN より略奪した反物質でもって破壊しようとする存在がいるというのが小説『天使と悪魔』の粗筋設定である(：そうした内容の小説『天使と悪魔』、黒幕たるカメルレンゴ、教皇の侍従長が教会の権威を高めるためにイルミナティの名を騙って一芝居を打ったなどという取って付けたような結末がどんでん返しとして付されているのだが、そういう二重人格的な悪役の存在による自作自演を描いての結末部を観念しようとしまいと当該作品にて通貫して取り上げられているのは「被害者である」との設定の CERN より略取された反物質でもってローマ教会を壊滅させようとの行為動態である)。小説作品『天使と悪魔』は教皇位を争う四人の(「扉の蝶番ちょうつがい」に語源を持つ役職保持者である)枢機卿らを殺し、反物質で鍵に似姿が酷似している聖パウロの教会の総本山・聖ピエトロ大聖堂を中心とした一面を灰燼に帰せしめるとの作中悪役のプランが進行していると受け取られるようになっていたとの粗筋展開を見せているわけである。その点、[蝶番](カーディナル枢機卿と結びつくカルド)が外れた扉、「地獄の門への蓋(ふた)となる聖なる教会」(と歴年、自称されてきたもの)が破壊されるとのことで述べれば、天国であれ、地獄であれ、冥界との扉が開かれるとの寓意を観念することができる」

4. 「『天使と悪魔』にはそれを指摘する人間がこの世界にあっては「どういふわけなのか」絶無であることとして、高度に寓意的なやり方で地理的特質から「CERN に通ずる扉」の寓意が含まれているとのことがある(筆者は自身いろいろと分析していくなかでそのことに気付いて、「なるほど、こういうことか」と全く世間では言及されていないところの『天使と悪魔』という作品の背面にあるメッセージングの意図、その悪質性に辟易させられたとのことがある)」

面倒ではあると見るが、出典を紹介しながら、上記のことが各々どういふことなのかの解説——そも、[解説]とは言葉の意味合いとしてそういうものであるべきなわけだが、[主観などは話柄の選択以上には働いていないとの客観性に重きをおいての指し示し]としての解説——を事細かになすこととする。

まずもって、

1. 「そもそもローマ教皇とはその歴代の紋章に[鍵]を採用している存在となり、ローマ・カトリックが総本山として本拠としているサン・ピエトロ大聖堂それ自体が「巨大な鍵」を模しているといった按配の特色を有している(ヒンジを取り除くのが強引に扉を開く手法ならば、鍵を用いるのは筋道に沿って扉を開く手段ともなろう)。何故、そうもなっているのか、と述べれば、ローマ教皇について言えば、その初代教皇(とされる)ペテロがキリストより「天国の鍵」を渡された存在であるとの言い伝えの伝が存する、新約聖書に記述されているとのそうした言い伝えの伝が存するからである」

2. 「ローマ・カトリック教会始祖であるペテロの教会については新約聖書(の中のマタイ福音書)にあってからして「地獄の門に対する蓋(ふた)となる存在」であるとの表記がなされてもいるとのことがある」

とのことらについての典拠を挙げることとする。下の図解部をご覧頂きたい。



歴代教皇の紋章はここで抜粋しているピウス7世のそれのように歴年、二本の鍵 (Key) と結びつけられてきたとことがある。



**The statue of St. Peter
(the work of Arnolfo di Cambio)**

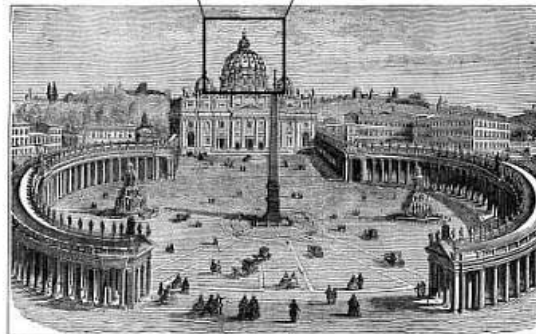


初代ローマ教皇とされるペテロを彫った、バチカン在の彫像。ペテロがキリストより与えられたとの伝承が伝わっている「天国への鍵」を手を持っている。

Territory of Vatican City State



St. Peter's Basilica



バチカン市国領土の少なからずを占めるカトリック中枢の「サン・ピエトロ大聖堂」(英語呼称ではセント・ピーターズ・バシリカ) それそのものが「鍵」のようなかたちを呈している。

図の内容だけでもってしてだけ何が述べたいのか明確化しているところではあるが、図像ら概要について若干の説明をなしながら、表記の 1. のことの典拠となるところにつき解説を講じることとする。

図解部にあつての最上段の図はナポレオンがフランス皇帝の位に就いた際にその戴冠に関わった教皇ピウス七世の肖像を描いているとの古書掲載の図像(Project Gutenberg のサイトにて掲載の古書)となり、そちら図像、教皇紋章として特徴的な[二本の鍵を交差させる紋章様式]が見てとれるものとなる(:歴代のローマ教皇の紋章が鍵と結びついているとのことについては英文 Wikipedia[Papal regalia and insignia] (教皇の権威象徴物および記章) 項目などにも細かき解説がなされていることとなる。それについて和文 Wikipedia[教皇] 項目にも現行、(そこよりの引用をワンセンテンスでなすところとして) “ 金と銀の二つの鍵が交差する形で描かれる天国の鍵もまた教皇のシンボルとして用いられている。そのうちの銀の鍵は現世的な権威を、金の鍵は宗教的な権威を示している ” (引用部はここまでとする) と表記されているようなことが広く知られている)。

図解部の中段にて挙げているのはサン・ピエトロ大聖堂に据え置かれているローマ教会の創始者とされる聖ペテロの彫像化作品となり、一三世紀から一四世紀初頭(一三〇〇年代初期)にかけて活動したイタリア人彫刻家 Arnolfo di Cambio アルノルフォ・ディ・カンビオの手になる一品となる(写真に著作権の縛りなきもの、そういう表示が付されている英文 Wikipedia[St. Peter's Basilica] 掲載のものよりの抜粋となる)。一目瞭然かとは思いますが、写真に見る彫像が鍵を手を持っている。それはパウロが天国の鍵をキリストより与えられているとの伝承によるところ、それがゆえに、ローマ・カトリックが自分達こそが天国への鍵の正当なる管理者となる存在である(カトリックに帰依することで天国行きが約束される)と主張してきたとの歴史的沿革をよく示すものである。

それにつき、パウロを初代教皇とするローマ・カトリックについてはその天国の鍵にまつわる聖書の特定の下りにて

[地獄の門を塞ぐ役割を果たす存在]

であるとも表記されている存在ともなる(:具体的にはオンライン上よりすぐに該当記述特定できようのところとしてマタイ福音書 16 章 18 節から 19 節(Matthew 16:18-19)にて次のような表記がなされているとことがある。(以下引用なすとして) “ I tell you that you are Peter, and on this rock I will build my church, and **the gates of Hell will not overcome it.** I will give you **the keys of the kingdom of heaven;** whatever you bind on earth will be bound in heaven, and whatever you loose on earth will be loosed in heaven.” (訳として)「(イエス曰くのこととして)我は汝に言う。汝はペテロ、我はこの[岩]の上に我が教会を打ち立てよう(註:ペテロという語句が[岩]とのニュアンスに近いことと通じている)、そして、**[地獄の門](ゲイツ・オブ・ヘル)はその教会に打ち破ることはできないであろう。我は汝ペテロに[天国への鍵]を授ける。汝が地上で束縛として課すことは天の国にても束縛として課されるであろうし、そして、汝が地上にて揺るめんとするが如くことは天の国にてもまたゆるめられるであろう**」(英文表記に対する拙訳はここまでとしておく)。その点、日本にて流通を見ている電子版新約聖書の[マタイによる福音書]第 16 章第 18 節から第 19 節にては(日本聖書協会作成のものとしてその PDF 版がオンライン上に頒布されているとの版、1954 年改訳版新約聖書より原文引用するところとして)そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。**黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。**わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつなぐがれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう(原文引用部はここまでとしておく)と表記されてもいる —— 国内で多く流通している邦訳版聖書では引用なしのようにゲイツ・オブ・ヘル、[地獄の門]が[黄泉]と表記されているが、基本的ニュアンスは変わらない ——)。

図解部の下段にて挙げている図らはそれぞれ英文 Wikipedia[St. Peter's Basilica] 項目及び同 Wikipedia[Vatican City] 項目及び Project Gutenberg 媒体掲載著作(A HISTORY OF ART FOR BEGINNERS AND STUDENTS (1887) との著作) に掲載されている著作権の縛りなき画像らとなり、

[カトリックの中枢部[サン・ピエトロ大聖堂の図彙・写真に認められるよく知られた似姿]

および

[バチカン市国の領域策定時(ラテラノ条約 Lateran Treaty とのかたちでムッソリーニを首班として

いたイタリア王国との間で領土決定されたとの時)から今日に至るまで変転を見ていないとのバチカン市国の「国土」のありようを描き取った図]

となる。

一目にてお分かりいただけていることか、とは思うが、それら図葉らから見てとれることはカトリック中枢センター[サン・ピエトロ大聖堂]がバチカンの領域の多くのスペースを占めているとのこと、そして、サン・ピエトロ大聖堂についてはその眼前に広がる柱廊付きの広場の構図までひっくり返ると[鍵]状のありようを呈するようになっているとのことである(そして、といったことがあること、カトリック総本山が建築構造、そのレベルで[鍵]と結びつけられている節があるとのことはさして不自然なことではない。キリスト教徒ではないとの向きら(筆者も無神論者・無宗教の人間としてそのようなものの信徒ではない)は言うに及ばず、[最後の審判で救うものと救わないものを厳然と選り分けている条件付き正義と帰依の絶対視の宗教]であるキリスト教、の中の旧教徒に分類されている者達、カトリック教徒らにあってもたかだかその程度のことは理解しているとの信徒がいかほどにいるのか情報流通の動態からよく分からないのだが(英文 Wikipedia[Catholic sex abuse cases]との項目に見るようにカトリック信徒である限りは[視野角狭くも宗教「仕様」の人間]としていろいろなことに目を瞑る特性が求められているところかと思われるが、彼ら信徒がいかほどまでに欧州各国からその運営費が給与より天引きされて供給されているとの[教会]という組織が根本的にどういふものなのか把握しているのかには疑念となるところがある)、教皇権威の象徴にして根源は(イエスから授与されたとされる)[天国の鍵]にあると歴年説明されてきたとのことがあり、については、たかだか和文ウィキペディア[ペテロ]項目にても現行、(そこよりの記述を引用するところとして)カトリック教会ではペテロを初代のローマ教皇とみなす。これは「天の国の鍵」をイエスから受け取ったペテロが権威を与えられ、それをローマ司教としてのローマ教皇が継承したとみなすからである(和文ウィキペディア[ペテロ]項目よりの引用部はここまでとする)と記載されているとおりである)。

ここまでにて、

1. 「そもそもローマ教皇とはその歴代の紋章に[鍵]を採用している存在となり、ローマ・カトリックが総本山として本拠としているサン・ピエトロ大聖堂それ自体が[巨大な鍵]を模しているといった按配の特色を有している(ヒンジを取り除くのが強引に扉を開く手法ならば、鍵を用いるのは筋道に沿って扉を開く手段ともなろう)。何故、そうもなっているのか、と述べれば、ローマ教皇について言えば、その初代教皇(とされる)ペテロがキリストより[天国の鍵]を渡された存在であるとの言い伝えの伝が存する、新約聖書に記述されているとのそうした言い伝えの伝が存するからである」
2. 「ローマ・カトリック教会始祖であるペテロの教会については新約聖書(の中のマタイ福音書)にあってからして[地獄の門に対する蓋(ふた)となる存在]であるとの表記がなされてもいるとのことがある」

とのことらの典拠挙げでの解説とした。それら解説部の検討によって、

3. 「先に既述のようにローマ教会を CERN より略奪した反物質でもって破壊しようとする存在がいるというのが小説『天使と悪魔』の粗筋設定である (:そうした内容の小説『天使と悪魔』、黒幕たるカメルレンゴ、教皇の侍従長が教会の権威を高めるためにイルミナティの名を騙って一芝居を打ったなどという取って付けたような結末がどんでん返しとして付されているのだが、そういう二重人格的な悪役の存在による自作自演を描いての結末部を観念しようとしまいと当該作品にて通貫して取り上げられているのは「被害者である」との設定の CERN より略取された反物質でもってローマ教会を壊滅させようとの行為動態である)。小説作品『天使と悪魔』は教皇位を争う四人の([扉の蝶番ちょうつがい]に語源を持つ役職保持者である)枢機卿らを殺し、反物質

で鍵に似姿が酷似している聖パウロの教会の絵本山・聖ピエトロ大聖堂を中心とした一面を灰燼に帰せしめるとの作中悪役のプランが進行していると受け取られるようになっていたとの粗筋展開を見せているわけである。その点、[蝶番](カーディナル枢機卿と結びつくカルド)が外れた扉、「地獄の門への蓋(ふた)となる聖なる教会」(と歴年、自称されてきたもの)が破壊されるとのことで述べれば、天国であれ、地獄であれ、冥界との扉が開かれるとの寓意を観念することができる」

とのことも無理なく述べられること、理解いただけることか、と思う(：上の3. にあって言及の[ダン・ブラウンの小説 Angels&Demons『天使と悪魔』にての枢機卿らを元素論に基づいて殺していくとの粗筋設定]についてからして本当かどうか疑わしいとのことであれば、つい先立っての解説部をご覧ください)。

次いで、

4. 「『天使と悪魔』にはそれを指摘する人間がこの世界にあつては「どういふわけなのか」絶無であることとして、高度に寓意的なやりようで地理的特質から「CERNに通ずる扉」の寓意が含まれているとのことがある(筆者は自身いろいろと分析していくなかでそのことに気付いて、「なるほど、こういうことか」と全く世間では言及されていないところの『天使と悪魔』という作品の背面にあるメッセージングの意図、その悪質性に辟易させられたとのことがある)」

とのことについて解説を講じる。

まずもって下の図をご覧ください。



Coat of arms of the canton of Geneva

同図、英文 Wikipedia[Geneva]項目にて掲載されている著作権の縛りなきことが明示されてのジュネーブの歴史的に用いられてきたところの市章となる(スイスにまつわる歴史的切手の英文紹介・販売サイトなどをご覧ください分かりますが、同市章は今日に至るまで数百年用いられてきたとの沿革を有するものである)。

一目瞭然のことかとは思いますが、同市章の左半分には[鷲]が描かれ、右半分には[鍵]が描かれている。

そちら図につきより細かく述べれば、[鷲]の方はローマの後裔を称するドイツ圏領邦国家にて重んじられた象徴である[インペリアル・イーグル]を指すものとされ(かつて鷲を象徴にしたとされるローマに倣ってか神聖ローマ帝国、ビザンツ帝国などが鷲を象徴に刻み込み、結果的に欧米圏の権力機構の枢要なところが鷲と結びつくに至ったとの解説のされようがなされたりもするところである)、他面、[鍵]の方については先にも教皇の紋章とのことでもそれについて解説していたとの[聖人ペテロの天

国に至る鍵] であるとされている (:その点、英文 Wikipedia [Flags and coats of arms of cantons of Switzerland] 項目 ([スイス各県の旗および紋章]項目) には “ The flag of Geneva is the **historical flag of the city of Geneva, showing the Imperial Eagle and a Key of St. Peter** (symbolizing the status of Geneva as Reichsstadt and as episcopal seat, respectively), in use since the 15th century. ” (訳として)「ジュネーブの旗はジュネーブ市の歴史的な市旗となり、15世紀以来の使用を見ているとのインペリアル・イーグルおよび聖ペテロの鍵を前面にもちだしているとのものである (これはジュネーブの[帝国都市](ライヒシュタット/神聖ローマ帝国が貢納を対価に独立を確保していた都市)と[司教座設置都市]との特性を各々示している)」(引用部はここまでとする)と同市市章に関する由来が端的に解説されているところとなる)。

何故、いきなりジュネーブの市章のことをもちだしたのか。それは次のような事情があるからである。

本稿で延々とその問題性についての指し示しに注力してきたとのLHC実験はスイスのジュネーブにて執り行われているものである。

そのジュネーブにて上記のような紋章が採用されていることが「極めて性質の悪いとのかたちで」「複合的に」

4. 『天使と悪魔』にはそれを指摘する人間がこの世界にあっては「どういうわけなのか」絶無であることとして、**高度に寓意的なやりようで地理的特質から[CERNに通ずる扉]の寓意が含まれている**とのことがある(筆者は自身いろいろと分析していくなかでそのことに気付いて、「なるほど、こういうことか」と全く世間では言及されていないところの『天使と悪魔』という作品の背面にあるメッセージングの意図、その悪質性に辟易させられたとのことがある)

とのことに[通ずる]とのことがある (ためにいきなりジュネーブの市章を持ち出した)。

直上表記のことを煮詰めるべくもの話を続ける。

さて、小説作品『天使と悪魔』ではジュネーブ(直近呈示のようにもう何百年も前から[左側に鷲を、右側に聖ペトロの天国の鍵を配しているとの紋章]が掲げられてきた都市)に本拠を構える[CERN]にて略取された反物質が略取の上でローマ教会の本拠地バチカン吹き飛ばす手段へと転用された——小説ではポーズとしての恫喝材料として用いられているとの設定も付されているのだが、額面上、そういう転用がなされた——との筋立てが見てとれる(その点についてはハリウッド俳優トム・ハンクスが主演している映画版を見ることでもご理解いただけることか、と思う)。

問題となる紋章を掲げる都市から反物質が奪われてそれがバチカン吹き飛ばす手段に転用されるとのその粗筋についてはそれがいかに荒唐無稽な(かつ先述のように科学的に不正確な)ものでも、

[[扉の破壊の寓意] と「地理的」・「歴史的」にあまりにもできすぎたやりようで結びつくもの]

であることに相違ないとのことらがある。

段階的に述べれば、以下のようなことらがある。

「ジュネーブとバチカンとを直線で結ぶと地図上のその直線の間地点に[ジェノバ](英語呼称はジェノア)という都市が存在していることがある。そちらジェノバは現在にあつての「イタリアにおける神戸」的な立ち位置の都市であるのだが、同都市、[日本でも世界史の科目をお受験で使うことにしたとの高校生らが必須知識として暗記を求められるぐらいに欧州の歴史にとって極めて重きをもってその名を轟かせていた都市国家]に端を発する中核都市でもある (:たとえ実体を反映していない空疎極まりないもの

であったとしても [人間の歴史] をして [経済力と軍事力を有した政体らが影響力の増減を賭けて競い合うパワーゲームの記録] と無理にでも見た場合、ジェノバ共和国は欧州にあって極めて重要な役割を帯びていた都市、一時、経済戦争の覇者となっていた都市となる —— 本稿筆者にとって、そして、読み手にとっても非本質的な下らないことであるととらえているため、ここでは手間を割くことを避け、その程度のものの解説の一言引用に留めるが、ジェノバについては和文ウィキペディア [ジェノヴァ] 項目にて (そこよりの原文引用をなすところとして) “ 1100年頃より自治都市となり、その後はジェノヴァ共和国として発展する。ヴェネツィア、ピサ、アマルフィなどの他の海洋都市国家と競いながら、軍事力、経済力の影響力を増した。特に商船、軍艦による通商・金融の分野でヨーロッパ全土に権威をふるい、黒海貿易を独占するなどした ” (引用部はここまでとする) と記載されているが如くの歴史がジェノバには伴っている——)。 そうもしたジェノバ、日本ではおそらく極一部の人間のみが知るところとして [ローマの門の神ヤヌス] (二つの顔を持つ神) に由来を持つ都市としての由来を有している存在「でも」ある (典拠は続いての段で挙げる) 」

「ジェノバは[ヤヌス] (二つの顔を持つ門の神) に由来する都市であると一部にて知られているわけだが、小説『天使と悪魔』ではその[ヤヌス]、二つの顔を持ったローマの扉の神 —— ポイントは同ヤヌスが[門・扉の神]であるということである—— の名を自己の通り名としているとの男が次のような挙動に及んだと描写されている。

第一。[ジュネーブの CERN から盗んだ反物質でバチカンを吹き飛ばすことに通ずるとの挙動]。

第二。[枢機卿ら、すなわち扉に対する蝶番 (ちょうつがい) を名称由来にするカーディナルら) を順々に [元素論] に基づいての方式で儀式的に殺していった (元素論に基づく枢機卿らの殺人儀式の話については先にウィキペディアの『天使と悪魔』の粗筋解説部よりの記述を引いているとおりでである) との挙動]。

小説版および映画版にての『天使と悪魔』にあってジュネーブとバチカンをつないだ直線上の中間地点にある都市ジェノバのことが重きをもって取り上げられているとのことは「ない」のだが (であるから作品に明示的に現われていないとの「「隠れた」寓意性」にまつわる話とはなる)、のような中において、

[**【ジュネーブ】 (天国の鍵を紋章としている都市 / CERN による LHC が郊外に据え置かれている場) ←→ 【ジェノバ】 (門と扉の神ヤヌスに由来を持つ都市) ←→ 【バチカン】 (天国の鍵・天国の扉と多重的に結びつく都市)** にあっての三都市が一直線に並ぶとの「地理的」接合性]

および

[門と扉の神ヤヌスを名乗る登場人物による 【蝶番】 (ちょうつがい) を意味する肩書きカーディナル (枢機卿) の位を持つ者達を順々に殺害していくとのやりよう] 【 天国の鍵] と結びつくバチカンを灰燼に帰さしめるとのやりよう] に見る小説作品『天使と悪魔』に見る寓意性]

のことが問題になる。

それにつき、[蝶番] を意味する教皇候補者の枢機卿らを順々に殺していくことは [扉を「無理矢理」開く] とのことと同文であるとは先に述べたとおりである (ドアの開閉を可能にする蝶番が外された扉はあとは倒れるしかない)。 また、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂の一画、天国の鍵「そのもの」と結びつく教皇のお膝元のその場を灰燼に帰せしめることは [錠前破壊による門の開閉の寓意] に通ずるというわけである (つい先程の段にてマタイ福音書 (Matthew 16:18-19) の記述を引き (再言すれば、“ I tell you that you are Peter, and on this rock I will build my church, and **the gates of Hell will not overcome it**. I will give you **the keys of the kingdom of heaven**; whatever you bind on earth will be bound in heaven, and whatever you loose on earth will be loosed in heaven.” (訳として) 「(イエス曰くのこととして) 我は汝に言う。汝はペテロ、我はこの

[岩]の上に我が教会を打ち立てよう(註:ペテロという語句が[岩]とのニュアンスに近いことと通じている)、そして、[地獄の門](ゲイツ・オブ・ヘル)はその教会に打ち破ることはできないであろう。我は汝ペテロに[天国への鍵]を授ける。汝が地上で束縛として課すことは天の国にても束縛として課されるであろうし、そして、汝が地上にて揺るめんとするが如くことは天の国にてもまたゆるめられるであろうとの記述を引き)、ローマ教会が一二つの顔を持つ門の神ではないが— [天国の扉の管理者]であるのと同時に [地獄の門に対する蓋(ふた)]のようなものであると聖書それ自体(マタイ福音書)に記載されていることを挙げていたとのことがあるからである)。

そうした[ジュネーブ(天国の鍵を紋章とする都市)よりの CERN 反物質]でもって[バチカン(天国と地獄のゲートと結びつけられた都市)]を— ([扉の蝶番(ちょうつがい)]を語源としている役職の者ら(枢機卿カーディナルら)]を順繰りに殺しながら— 破壊しようとするように見せての挙が[ヤヌス犯行](ローマの門と扉の神)と結びつけられて具現化しているのが『天使と悪魔』というフィクションであり、そして、フィクションならぬ現実世界では[ヤヌスに由来する都市(ジェノバ)]がジュネーブとバチカンを結ぶ一直線上の中間地点に存在するのであるから当然にその伝での寓意、[扉を開閉する寓意]が「わざと」、「極めて執拗に」当該フィクションに込められているものとの観点が生じて然るべきなのである(そのようなことをわざわざもって問題視しようとの人間はこの世界には絶無といった按配で見受けられないのだが)。

そして、極めつけとしてジュネーブの英語表記 Geneva とジェノバのイタリア語表記 Genova(英語表記は Genoa)とが極めて似た綴りのものであるとのことがあり、いよいよもっての[恣意性]を浮かび上がらせるとのこともある」

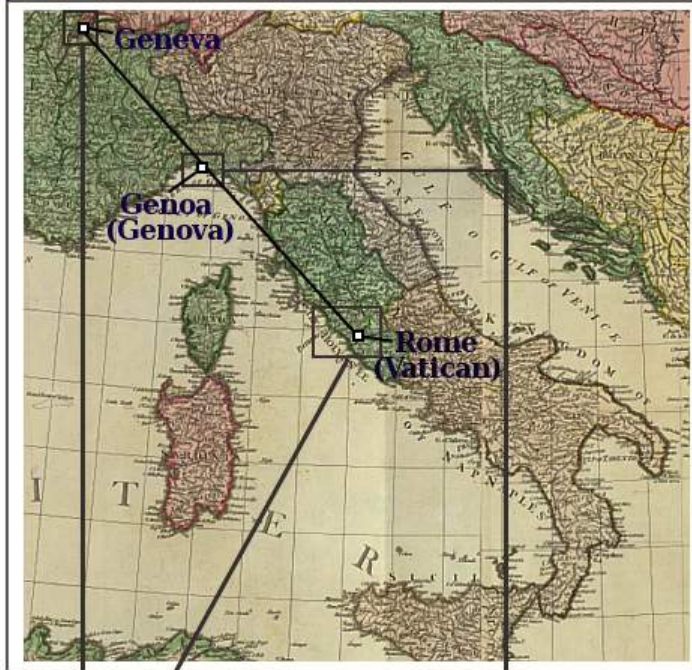
以上のことらの典拠となるところにつきまづもって

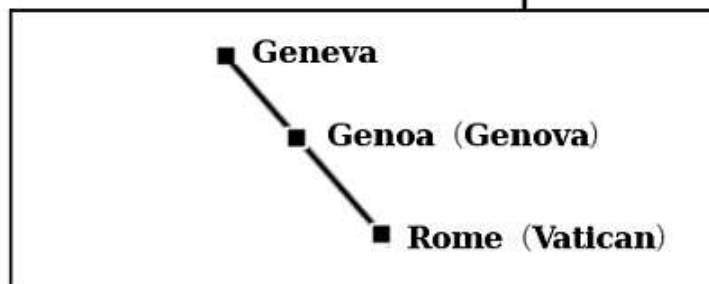
[都市ジュネーブと都市ジェノバと都市バチカンは地図にて一直線上に存在している都市らである(三点が直線上に存在している)]

とのことについてであるが、下の地図らを参考に手元の地図帳——ネット上のそれを印刷したものであれ、高等学校などにて購入を強られるとのそれであれ、とにかくもの地図帳——で位置確認してみてもらいたいものではある(筆者の指摘事項をここでのそこからして疑わしくも見ているとの向きには特にその確認を請いたいと考えている)。

別個の地図帳らというものはそれぞれ縮尺表記、三次元構造を二次元に落とし込んだうえでの湾曲度合いの相違から大なり小なりの特徴的差異をきたすものだが、それら差分を吸収するかたちでジュネーブ(スイス)・ジェノバ・バチカン(ローマ市に内包)が一直線にあるとの按配になっていること、理解なせるようになっている(：任意に地図上に描いてみた点が三つ揃って一直線上にあることはそれ自体が[あまり具現化しない]ことであることはお分かりいただけることか、と思う(大概にして三点はそれがいかに扁平なものであれ、三角形を構成する三点になるはずである)。

ちなみに筆者が下にての呈示の用に供した地図らは上の段の方が 18 世紀後半(正確には 1785 年)に世に出たイングランドの William Faden という地図作製者に由来する各都市名入りの地中海領域の精密地図(の拡大図)となりもし、対して、下段にて挙げているのが Project Gutenberg のサイトにて公開されている著作権喪失著作 First Lessons in Geography(初出 1856/19 世紀にあつての地理上の必須教養にまつわる教科書的著作)に見る[アバウトな欧州地図]および Project Gutenberg のサイトにて公開されている An Introduction to the History of Western Europe との著作(1903 年初出、幾分高度性が増すもこちらも教科書的著作)に見る[かなりもってしての正確な地図]の両地図となる(計三地図を挙げた)。





次いで、
[ジェノバの由来が二つの顔を持ったヤヌスにあるとされる]
とのことについては

[ウィキペディア「程度」の媒体]

および

[相当レベルの歴史通をもって任ずる向きでもなければわざわざもって振り返って読みもしないであろうが、確度は高いとの 20 世紀前半初出の辞典内の記述内容] からそれぞれ引用をなしておくこととする。

(直下、和文ウィキペディア[ジェノバ]項目にての[歴史]の節にての「現行の」記載内容 —— 有為転変するとの媒体性質よりこれより消除を見る可能性もあるとのものだが、最も目に付きやすきと受け取れるところにある記載内容—— よりの抜粋をなすとして)

ジェノヴァの古名 Janua または Jenua はケルト語の入り口の意、他の説によると先住民族の王だったと思われるヤヌス(イタリア語では Giano)から来たとも。

(目に付くところの媒体よりの引用部はここまでとする)

(直下、古書に認められる[文献的事実]の確認をオンライン上よりなすにはうってつけの Project Gutenberg のサイトにて全文公開されているとのブリタニカ百科事典(第 11 版) THE ENCYCLOPAEDIA BRITANNICA A DICTIONARY OF ARTS, SCIENCES, LITERATURE AND GENERAL INFORMATION ELEVENTH EDITION、その[J]の索引項目よりの記述よりの抜粋をなすとして)

JACOBUS DE VORAGINE (c. 1230-c. 1298), Italian chronicler, archbishop of Genoa, was born at the little village of Varazze, near Genoa, about the year 1230. He entered the order of the friars preachers of St Dominic in 1244, and besides preaching with success in many parts of Italy, taught in the schools of his own fraternity.

[...]

His two chief works are the Chronicon januense and the Golden Legend or Lombardica hystoria. The former is partly printed in Muratori (Scriptorum Rer. Ital. ix. 6). It is divided into twelve parts. **The first four deal with the mythical history of Genoa from the time of its founder, Janus, the first king of Italy, and its enlarger, a second Janus “citizen of Troy”, till its conversion to Christianity “about twenty-five years after the passion of Christ.”**

(ブリタニカ百科事典[J]項目にての著名な年代記作者[ヤコブス・デ・ウォラギネ]にまつわる上記抜粋記載項目の訳として)

「 JACOBUS DE VORAGINE (1230 年生 - 1298 年没)、イタリアの年代記作成者にしてジェノバ(ジェノア)の司教であるとの同人物ヤコブス・デ・ウォラギネはおよそ 1230 年の折にジェノバ近郊の小村 Varazze 村にて生を受けた。彼は 1244 年、ドミニコ修道会に入会、そして、イタリア各地の説諭を成功裡になしとげながら、同伝道団の学堂で教鞭をとるに至った。

…(中略)…

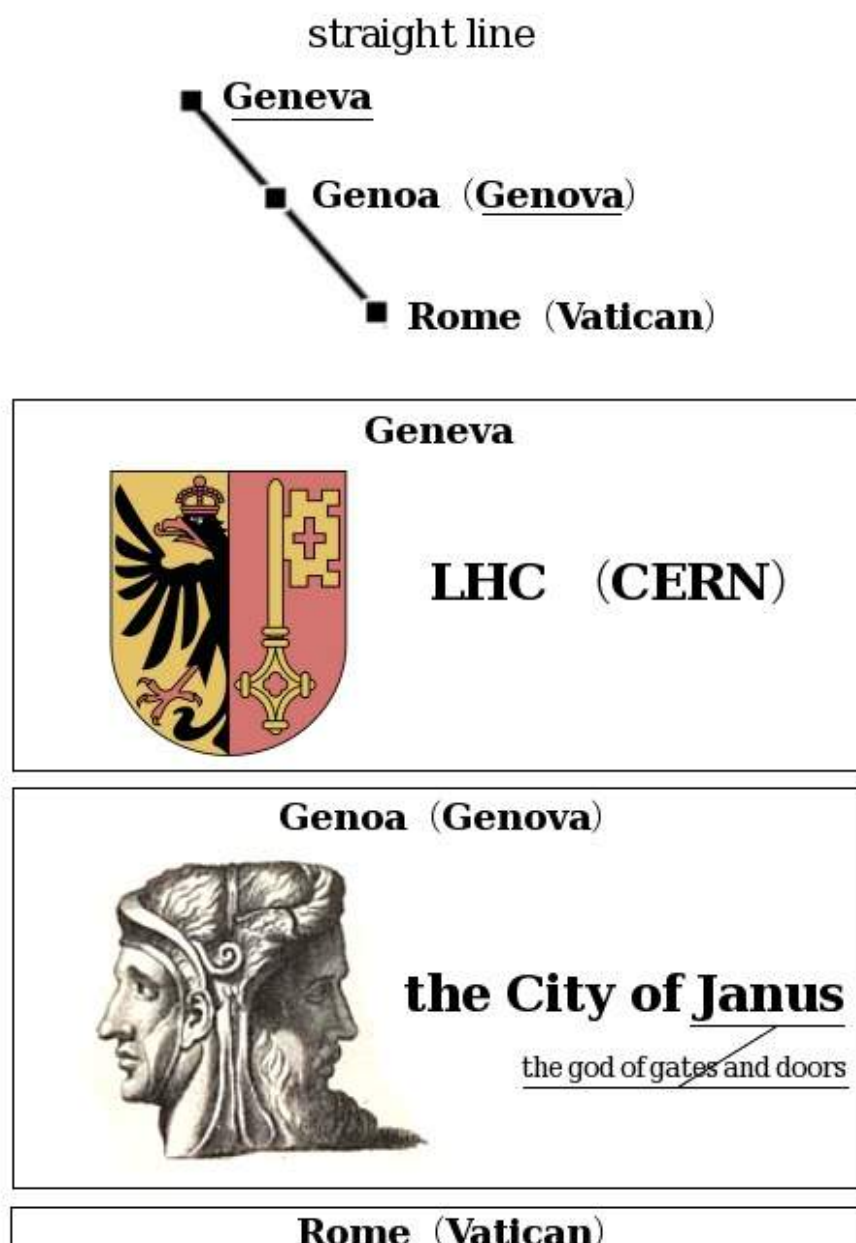
同ヤコブス・デ・ウォラギネの主要な二著作は the Chronicon januense (『ジェノバ年代記』)と『黄金伝説』(あるいは『ロンバルディア史』)である。前者『ジェノバ年代記』については資料 Scriptorum Rer. Ital. ix. 6 にて記載されているところとして Muratori によって印刷を見ている。同『ジェノバ年代記』(the Chronicon januense)は十二のパートに分割されており、**最初の四つのパートはその創建者たる[ヤヌス]、最初のイタリア王であるとのヤヌスに遡るジェノバの神秘のベールに包まれた歴史を扱い、さらに押し広げて、[トロイアの市民]であった第二の[ヤヌス]といった存在、キリストの 25 年の受難の後のキリスト教への改宗に至るプロセスが描かれている**

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※尚、イタリア古代国家の歴史が[木製の馬で滅ぼされたトロイア]の落ち武者伝説と結びつけられていたり、反対に、[トロイア創建者]の伝説と結びつけられているとのことは、(無論、といったことは真偽など問題にならぬとの[伝説]上の話にとどまることなのだが)、本稿の後の段にてもアエネイウスという神話上の存在との絡みで必要に応じて解説する所存であるとのことともなり、また、部分的には先の段でも解説をなしてきたとのこととなる(：本稿にての先の段にてジョヴァンニ・ヴィッラーニというイタリアはフィレンツェの史家由来のフィレンツェ地史を扱った書として **Nuova Cronica『新年代記』**という書籍の内容をその近代英訳版から引き、の中にあつて、[アトラス王の息子のうち的一方がイタリアに留まって王になり、もう一方がダルダネスとの名でもってトロイアの王になった]との偽史・贋造史観がかなり昔から伝わっていることを問題視していたとの経緯がある。偽史それ自体の内容を問題視していたのではなく、そういう文献的記録が残っていることが[アトラス]との呼称と[トロイア]の複合的なる関係の極一端を指し示しているとの観点に基づいて、である(詳しくは本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 45](#)を参照されたい))

上もてジェノバ(かつてのジェノバ共和国の首府)がヤヌスと結びついていることの出典表記とした。

ここまできたところで下の図らをまとめを兼ねてのものとして挙げておく。



Rome (Vatican)

St. Peter's Basilica



Heaven

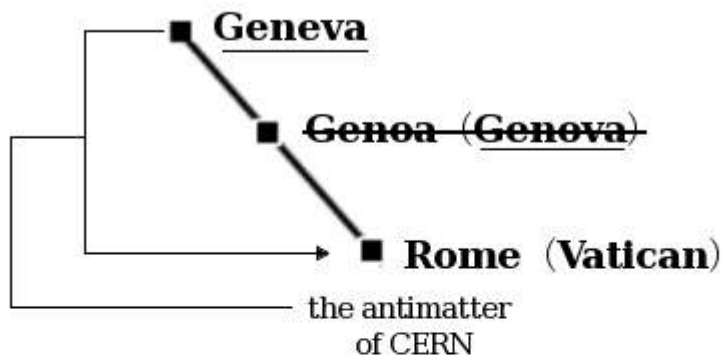
keys of the heaven

[Gate & Barricade]

Hell

"I tell you that you are Peter, and on this rock I will build my church, and the gates of Hell will not overcome it. I will give you the keys of the kingdom of heaven" — Matthew 16:18-19

Angels & Demons (2000)



[Annihilation of Vatican] scenario

[Janus's crime] scenario

[Cardinals killing (cardo = door hinges breaking)] scenario

[Gates (of Hell) Open] scenario

Only ["hidden" and elaborated gimmicks by Dan Brown] ?
(Because of other disgusting bases, I conclude , " never ".)

さて、以上示してきたこと、

1. 「そもそもローマ教皇とはその歴代の紋章に[鍵]を採用している存在となり、ローマ・カトリックが総本山として本拠としているサン・ピエトロ大聖堂それ自体が[巨大な鍵]を模しているといった按配の特色を有している(ヒンジを取り除くのが強引に扉を開く手法ならば、鍵を用いるのは筋道に沿って扉を開く手段ともなる)。何故、そうもなっているのか、と述べれば、ローマ教皇について言えば、その初代教皇(とされる)ペテロがキリストより[天国の鍵]を渡された存在であるとの言い伝えの伝が存する、新約聖書に記述されているとのそうした言い伝えの伝が存するからである」
2. 「ローマ・カトリック教会始祖であるペテロの教会については新約聖書(の中のマタイ福音書)にあってからして[地獄の門に対する蓋(ふた)となる存在]であるとの表記がなされてもいるとのことがある」
3. 「先に既述のようにローマ教会を CERN より略奪した反物質でもって破壊しようとする存在がいるというのが小説『天使と悪魔』の粗筋設定である(：そうした内容の小説『天使と悪魔』、黒幕たるカメルレンゴ、教皇の侍従長が教会の権威を高めるためにイルミナティの名を騙って一芝居を打ったなどという取って付けたような結末がどんでん返しとして付されているのだが、そういう二重人格的な悪役の存在による自作自演を描いての結末部を観念しようとしまいと当該作品にて通貫して取り上げられているのは[被害者である]との設定の CERN より略取された反物質でもってローマ教会を壊滅させようとの行為動態である)。小説作品『天使と悪魔』は教皇位を争う四人の([扉の蝶番ちょうつがい]に語源を持つ役職保持者である)枢機卿らを殺し、反物質で鍵に似姿が酷似している聖パウロの教会の総本山・聖ピエトロ大聖堂を中心とした一面を灰燼に帰せしめるとの作中悪役のプランが進行していると受け取られるようになっていたとの粗筋展開を見せているわけである。その点、[蝶番](カーディナル枢機卿と結びつくカルド)が外れた扉、[地獄の門への蓋(ふた)となる聖なる教会](と歴年、自称されてきたもの)が破壊されるとのことで述べれば、天国であれ、地獄であれ、冥界との扉が開かれるとの寓意を観念することができる」
4. 「『天使と悪魔』にはそれを指摘する人間がこの世界にあつては「どういふわけなのか」絶無であることとして、高度に寓意的なやりようで地理的特質から[CERNに通ずる扉]の寓意が含まれているとのことがある(筆者は自身いろいろと分析していくなかでそのことに気付いて、「なるほど、こういうことか」と全く世間では言及されていないところの『天使と悪魔』という作品の背面にあるメッセージングの意図、その悪質性に辟易させられたとのことがある)」

とのことらが真なりといえども、

『それが何だというのか? ダン・ブラウンという作家の手の込んだ「表面に出ない」暗号入れ込みの方式が問題になるだけではないのか(作家ダン・ブラウンは【スイスのジュネーブの紋章が天国の鍵になる】とのことを小説『天使と悪魔』作中内で言及して「いない」、そして、【スイスのジュネーブとバチカンを結んだ直線上の中間地点にジュネーブの英文綴りが近いイタリア語呼称を伴っての都市ジェノバが存在しており、そのジェノバの由来が(『天使と悪魔』の悪役がその名を用いている)門の神ヤヌスに由来している】とのことにもならん作中言及して「いない」、また、【作品『天使と悪魔』のモチーフが天国および地獄との境界を無理矢理破壊して開く一幽冥境をする領域を無理矢理に接合させるものである—とのことにある】とのことにも言及して「いない」とのことがあるために「表面に出ない」暗号入れ込みの方式が問題になるということである)。そのようなことを云々するのは諸種文物について高等批評を講じるとの職業的批評家

ないアマチュアの好事家的やりようにすぎないではないか』

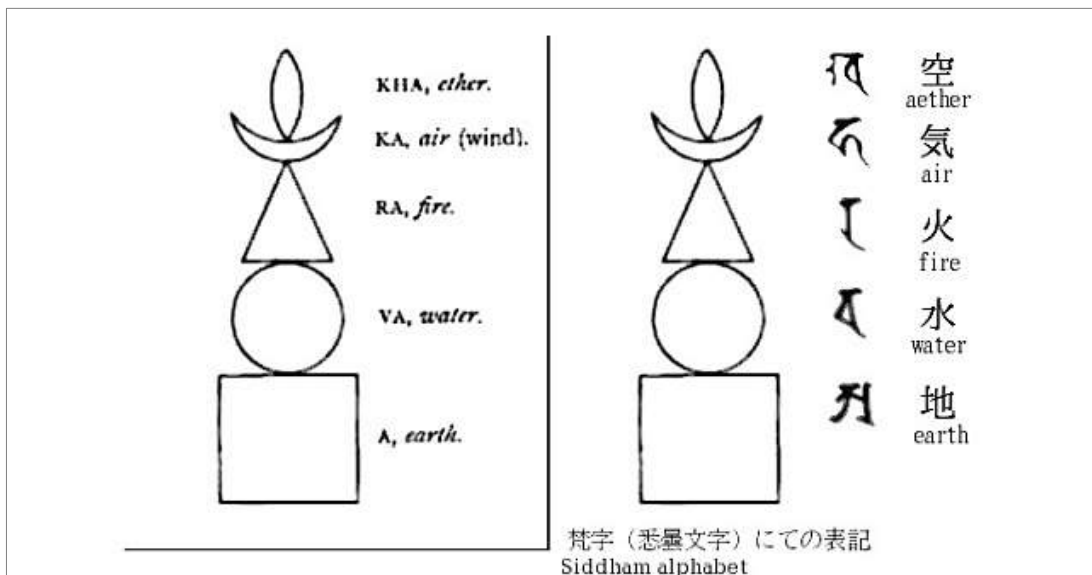
と思われる向きも当然にあるだろう(現実にはたかだかもその程度のことの指摘をなす人間としてこの世界には[いない]ことに筆者は嘆息させられているわけだが 一本稿執筆前に試みに検索結果がゼロになるまでの絞り込み検索をなしたことがある一、とにかくものこととして、である)。

であるから、以下のこと、申し述べておく。

「ここでの[布石]と明示しての脇に逸れての部では元素論のことを取り扱っているわけだが、そちら話の初期段階として

[西洋にあつて[第五元素]までもつてして網羅される(第六元素なるものは「ない」)との元素論]

が我々の[墓地]の隣の板卒塔婆にサンスクリット(体現の悉曇文字)が用いられるまでして影響を与えているとのことを指摘した 一西洋の[第五元素]に相当するエーテル(アイテール=星天構成要素)に至るとの寓意が日本の墓地の卒塔婆の最上段にサンスクリットで[空]と刻まれているとのことを解説することからはじめている一。



先の段でも取り上げた図よりの再掲載をなす。

再掲なしての上図の左側は **A MANUAL OF THE HISTORICAL**

DEVELOPMENT OF ART (1876)との Project Gutenberg サイトにあつて全文公開されている著作にて認められる [印度のストゥーパ(釈迦の遺灰・仏舎利を収めた仏教建築物/日本の卒塔婆の原初的形態)に通ずるペルシア系民族の地理的・歴史的標識が五大(五大元素)と結びつけられているとのことを示す図] となる(同図最上段にて ether イーサー・エーテルと表記されているのがアリストテレス以来[第五元素]とされてきた Aether のことを指し、同イーサー、東洋では五大たる [空] [氣] [火] [水] [地] にあつての [空]、[虚空=空] とされているものとなる)。

他面、上の図の右側は [釈迦の仏舎利(遺灰)を収めたとされる卒塔婆ストゥーパ] が [板塔婆 一本来的には上部から宝珠形、逆半円形、三角形、円形、長方形と対応付けさせられるとされるもの一] へと転じもして日本にての墓地に林立することともなっており、その [板塔婆] にサンスクリット(表記のための梵字としての悉曇(したん)文字)にて五大元素 [空] [氣] [火] [水] [地] のことが「執拗に」「そこらじゅうに」表記されていることを再度訴求すべくもの図となっている。

それにつき、「問題視したいのは、」

[小説『天使と悪魔』がギリシャの古賢プラトンのそれに遡る元素論と結びつけられている——繰り返すが、言葉として[蝶番(ちょうつがい)]と結びつく枢機卿らが古典的要素論に基づいて儀式的に殺されていくというのが(CERN 反物質と結びつく)『天使と悪魔』という作品である——とのそのことは[仏舎利(あるいは仏教徒の遺灰)を収めたストゥーパ(あるいは卒塔婆)が元素論と結びつけられているのと同文の式にて[人間存在の行き先]を[際立っての予見的やりよう]との絡みで示すがごとくものとなっている]

と「論拠に基づいて」判じられるようになってきているとのことである。

につき、上のことを支える[論拠]となるのは

[1970年代に欧米圏で大ヒットを見た小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』——同『ジ・イルミナタス・トリロジー』、本稿にての先の段で尋常一様ならざる予言的側面を有している(黄金の林檎のシンボルを相応の式で用いるなどして911の事件が起こることにまつわる前言と述べられようことを多重的になしている)とのことの指し示しに原文引用なしながらも努めてきたとの作品である—— にあっての[予見描写]との絡みで小説『天使と悪魔』と「奇怪にも」多重的に接合しているとの側面]

そして、

[小説『天使と悪魔』における元素論依拠型殺害方式と結びつく「第五元素」(『天使と悪魔』では四大元素で言及が伴っているわけだが、その先にはアイテール・エーテルと呼称される第五元素の存在が観念できる)の体現象徴物と一部にて史的に解釈されてきたところのドデカヘドロン(正十二面体)、黄金比の全身での体現物であるその多面体からんで問題となる側面]

である。

表記のことが何故もってして[墓地における五大元素(虚空を最上部に据える構図)に至るまでの対応付け]とその結びつきが問題となる小説作品『天使と悪魔』——最前までにて[扉を破壊する寓意]が(普通に読むだけでは気づきもしなかつた)との地理的メッセージングまで用いられもしながら執拗に込められているとのことを解説してきたとの作品——の予見的側面に関わるのかについてはさらにもって後の段で解説をなす

これにて[布石]として元素論に絡み解説しておくべきかと判じてのことをほぼ解説しきったことになる(：くどくも繰り返すが、ダン・ブラウン小説『天使と悪魔』について問題となるところに関しては同じくものことを別観点からの掘り下げでの解説を後の段でなす)。

[元素論]にまつわっての解説の部はここまでとしておく

(長くもなった [布石] を兼ねての元素論にまつわっての話に一区切りをつけたうえで本題に戻るとして)

さて、先に「それこそが問題である」として取り上げるとしたとのこと、すなわち、

([話の向かう方向性]として明示もしていた)、

[「黄金比と結びつくカー・ブラックホール」]が[プラトン古典にみとめられる(黄金比を全身で体現するものにして、かつ、[第五元素]に近いき位置付けの)正十二面体]と何故、いかように特定の文物ら(現代にてヒットを見た作品ら)を介して結びつくのか、また、そのことがどうして本稿にての指し示し事項と密接に結びつくのかのことについての指し示しをなす]

ための段

に足を踏み入れもしての[順を追っての説明]にこれ以降、入ることとする(※)。

(※尚、黄金比がいかようなものなのかについては本稿の[出典\(Source\)紹介の部 73](#)にておよそ次のようなことを端的に指摘もしている。

→

[黄金比]とは単純に書けば

「縦を1とした際に[縦横比 1:1.6180339887(以下略)]となる比率(長さ逆転させて[横縦比 0.6180339887(以下略):1]の比率でもいい)のことを指す」

のだが、そちら黄金比は二次方程式 $[x^2 - x - 1 = 0]$ の二つの解とそのまま対応するものとして[重き]をもって表される、すなわち、(たかだが中学校の初等代数学で[学習]を強制されるものだったかとも思うのだが、いわゆる[二次方程式の解の公式]で導出されるとの)そちら二次方程式 $[x^2 - x - 1 = 0]$ の二つの解 [\[1.6180339887...\]](#)

および

[\[-0.6180339887...\]](#)

とそのままに対応するものとして[重き]をもって表されるもの「とも」なる(： $[x^2 - x - 1 = 0]$ の正負の解のうち、正の解の方がゴールデン・ナンバーこと黄金数としてギリシャ語アルファベット・ファイ ϕ にて表象される)。

につき、通例、「黄金比とは[\[1.6180339887...\]](#)との数値にて体現されるものである」とただ単純に説明されがちだが(ϕ ファイ即[\[1.6180339887...\]](#)の比率であるとだけ説明されがちだが)、表記の二次方程式 $[x^2 - x - 1 = 0]$ では[第一桁目以外、[奇跡]とでも述べられるような数値として安定的なる一致性を呈する解]が現出していることとなっており(もう一度、[\[1.6180339887...\]](#) [\[-0.6180339887...\]](#)との数をご覧頂きたい)、うち、マイナス符号付きの解である [\[-0.6180339887...\]](#)の方の符号取り払っての絶対値が黄金比の逆数バージョン $[1/\phi]$ と等しくもなっていることすら「も」があるとのこととなっている)

ここで振り返るが、本稿の先の段では「極微極小領域に至る力学」とも相通ずるとの式にての

[五芒星・正五角形・正十二面体それぞれと黄金比の関わり合い]

について次のとおりの解説のなされようを引いていた。

(直下、天体物理学者マリオ・リヴィオ著作 THE GOLDEN RATIO The story of Phi, the World's Most Astonishing Number 訳書『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』(早川書房ハードカバー版)にての p.49 から p.51 よりの引用を(出典(Source)紹介の部 69(2)にて引用をなしていたところながらも)再度なすとして)

五芒星形は、正五角形——五つの辺の長さも頂角の大きさも等しい平面図形——とも深いつながりがある。正五角形の頂点を対角線で結ぶと、五芒星形ができる。この五芒星形の中心にも小さな五角形ができ、その五角形の対角線も五芒星形となって、さらに小さな五角形がなかにならできる(図 10)。これがどこまでも続き、どんどん小さな五角形と五芒星形が作られていく。この一連の図形には際立った特徴がある。

…(中略)…

「どの線分もひとつ前の線分にくらべ、黄金比 ϕ にぴったり等しい比で小さくなっている」ことが、初頭幾何学によって簡単に証明できるのだ。

…(中略)…

なにより重要なことは、入れ子状に小さくなる五角形と五芒星形の生じるプロセスが無限に続くという事実から、この五角形の対角線と辺が通約不可能である——つまり、両者の長さの比(ϕ に等しい)がふたつの整数の比で表せない——と厳密に証明できる。

…(中略)…

ピタゴラス学派こそが黄金比と通約不可能性を最初に発見したと提唱する人がいる。そうした数学史家たちは、ピタゴラス学派こそが五芒星形と五角形に夢中になったことと、紀元前五世紀中葉に実際に知られていた幾何学とを考え合わせると、ピタゴラス学派——とくにメタポンティオンのヒッパソスかもしれない——が黄金比を、またそれを通じて通約不可能性を発見した可能性は非常に高いとしている。

…(中略)…

「十二個の五角形からなる球体を……描いた」というフレーズで、イアンブリコスは、正十二面体の作図に(図形が現実には球ではないので、やや不明確だが)言及している。正十二面体は、正五角形の面を一二枚もつ立体で、プラトン立体として知られる五つの立体のひとつにあたる。プラトン立体はどれも黄金比と密接に結びついており、それについては第 4 章で改めて語ろう。こうした話にはどこか嘘っぽさもあるが、数学史研究家のヴァルター・ブルケルトは一九七二年に刊行された『古代のピタゴラス学派の伝承と科学』で、「ヒッパソスにかんする話は、伝聞だらけだが納得できる」と言い切っている。そう言える主な根拠として、図 10(と付録 2)が挙げられる。正五角形の対角線と辺の長さが通約不可能であるとの結論は、無限に小さな五角形ができるというきわめて単純な知見にもとづいている。

([極小領域に至る力学]ともかかわるところの五芒星・正五角形・正十二面体・黄金比にまつわっての書籍内内記載内容よりの再度の引用部はここまでとする)

以上、

[五芒星・正五角形・正十二面体それぞれと黄金比の関わり合い]

にまつわる再度の引用をなしたうえで(換言すれば、[五芒星と正五角形の無限小の世界へと向かっていく相互内接・外接関係には黄金比とのつながりがあり、また、正五角形を十二枚つなぎあわせた立体である正十二面体にも黄金比との密接なつながりがある]とのことについての再度の摘示をなしたうえで)、

[大宇宙にある極大ブラックホールの形態から自然界の生物の諸相にまで関わり、また、黄金比とも関わるとの「対数螺旋構造」]

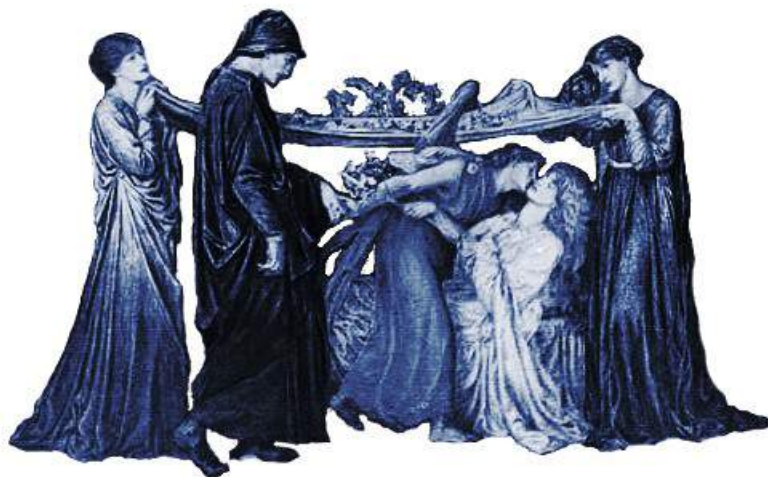
というものについて（それが結節点になるとの観点があるからこそ）取り上げることとする。

下にてのそちら対数螺旋構造に対する通俗的解説のなされようをまずもって参照されたい。

出典(Source)紹介の部 78

SOURCE

78



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

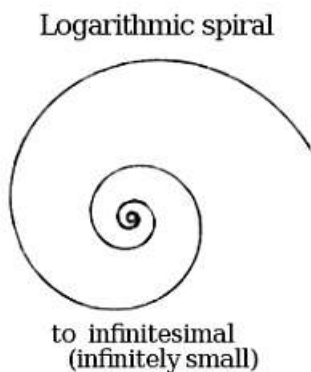
ここ出典(Source)紹介の部 78 にあってはそも、対数螺旋構造とは何か、そして、それが渦巻き銀河構造などにも具現化しているとはどういうことなのかについて基本的なる解説のなされようを紹介しておく。

(直下、和文ウィキペディア[対数螺旋構造]項目よりの抜粋をなすとして)

「対数螺旋とは、自然界に見られる螺旋の一種である。等角螺旋、ベルヌーイの螺旋ともいい、「螺旋の部分」は螺旋、渦巻線、匝線(そうせん)などとも書く。…(中略)… 対数螺旋は自己相似である。すなわち、任意の倍率で拡大または縮小したものは、適当な回転によって元の螺旋と一致する。…(中略)…軟体動物の殻、牛や羊の角、象の牙など、硬化する部位で、本体の成長に伴って次第に大きい部分を追加することで成長するような生物の器官において、対数螺旋が観察される。その理由は、図のように相似で少しずつ大きくなる多角形が次々に形成されていくと、螺旋に近い形が描かれるからであると説明される。…(中略)… 渦巻銀河の渦上腕は、ピッチがおおよそ10度から40

(引用部はここまでとする —※—)

(※尚、ここ引用部にて[対数螺旋構造]と結びつくと表記されている(渦巻き)銀河はブラックホールと結びつくものであることが知られている。その点について和文ウィキペディア[銀河バルジ]項目に現行見受けられるところの次の記載を引いておくこととする。(以下、和文ウィキペディア[銀河バルジ]項目よりの抜粋として) “ 銀河バルジは、渦巻銀河や棒渦巻銀河の中心部に存在するふくらみ。「バルジ」は「膨らみ」という意味。単にバルジとも。…(中略)…バルジには年老いた恒星が数多く集まっていると考えられている。また、銀河の中心部には超大質量ブラックホールがあると推定され、その重力により星が集まっているのだと考えられている ” (引用部はここまでとする))



M51

上掲図左側は対数螺旋構造を図示してのもの。対数螺旋構造とは中心部が[無限小の領域] (Infinitesimal)に通ずる構造ともなる(：については和文ウィキペディア[対数螺旋]項目にあって(そこよりの対数螺旋構造記述式におけるパラメーターにまつわる記述を原文引用するところとして)bが正(負)の場合、rが0に近付くとθはいくらでも小さく(大きく)なるので、中心近くでは無限回渦巻いている(引用部はここまで

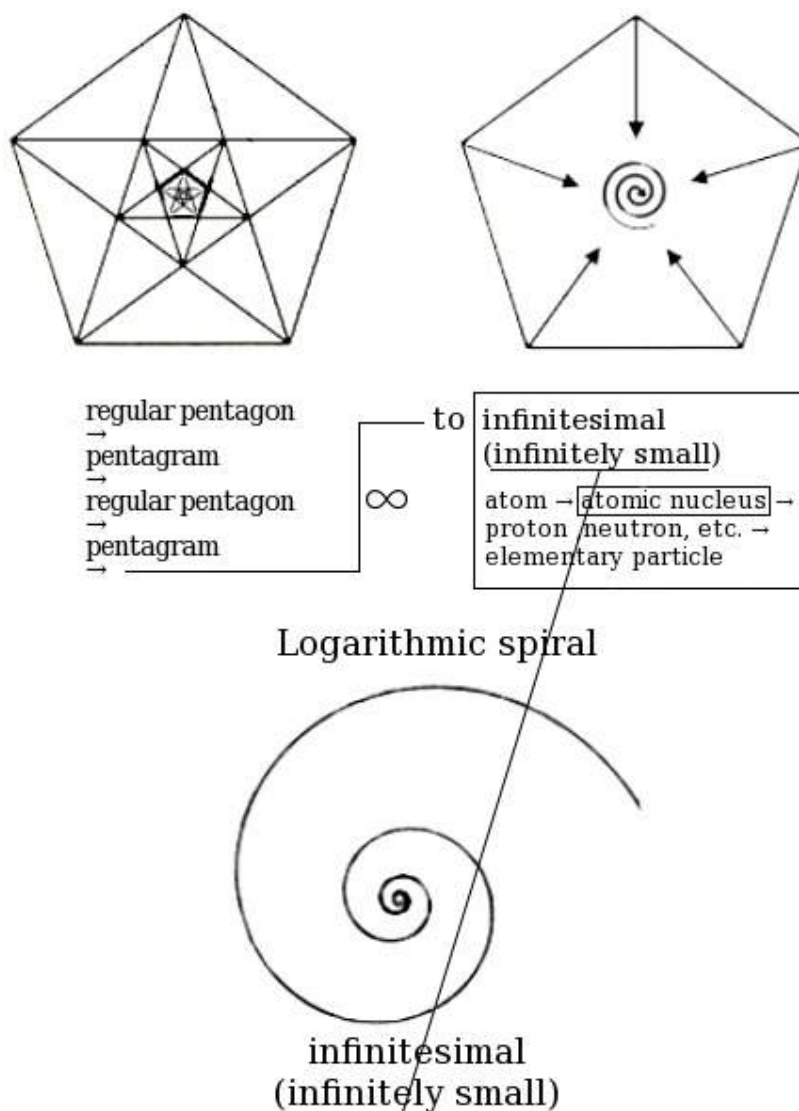
とする)と表記されているとおりである ——その点、対数螺旋構造(という名の渦巻き紋様)が[極小領域に向けての力学]を体現したものであるとのことについては(対数螺旋構造の)渦巻き紋様を見れば、渦巻き紋様が小さき方向に向かっているとのことで自然にお分かりいただけることか、とも思う——)。

他面、上掲図右側は獵犬座渦巻き銀河の M51 星雲、そのウィキペディアにて掲載されている著作権の縛りなきこと明示の写真、それを挙げてのものとなる。一目して分かるうか、とは思いますが、渦巻き銀河が対数螺旋構造と結びつく格好となっている。

(出典(Source)紹介の部 78 はここまでとする)

直上、基本的事項解説部を設けたうえであらためて後の段へ向けての注意喚起をなしておくも、

「[対数螺旋構造が無限小の領域への力学を強くも体現した構造である]とのことがある一方で(本稿のここに至るまでの流れにて細かくも出典挙げて申し述べてきたところとして)[正五角形と五芒星の永劫に続く内接・外接関係もまた無限小の領域への力学を強くも体現した構造である]とのことがある」



さて、ここまできたところで述べるが、何故、[対数螺旋構造]なのか、と言え、である。同じくもの[対数螺旋構造]がノーチラス、和名ではオウムガイとなっているその著名な生き物の殻に具現化を見ているとことが知れ渡っていることに

[不快で悪辣、そして、「奇怪」でもあるとの予見描写と関わる寓意添付の問題]（特定の文物ら作中にて見受けられ、[カー・ブラックホール]にも通ずるとの予見描写と関わる寓意性添付がなされているとの問題）

が介在しているとのことをこの身(本稿筆者)が捕捉しているからである。

これより以上のこと、順繰りに説明していく所存だが、につき、まずもって述べるも、ノーチラスことオウムガイの外殻構造それ自体が
[対数螺旋の体現存在]

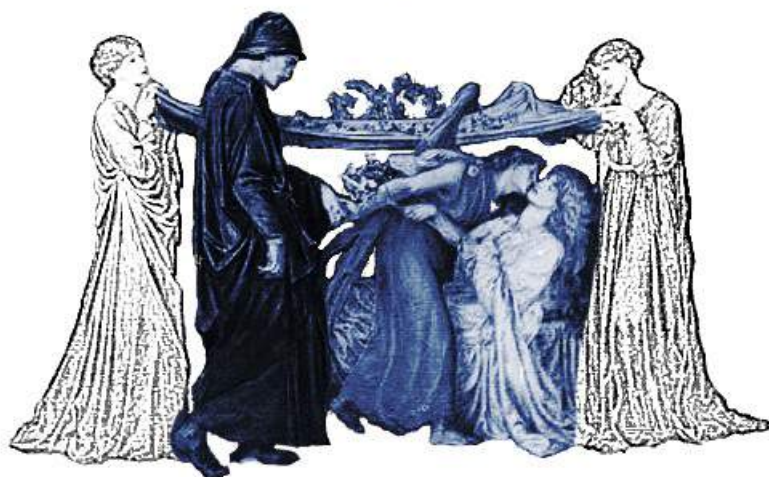
となっていることは比較的知られていることである。ばかりではなく、そちらノーチラスの殻が[黄金比]と結びつく対数螺旋構造の特殊な形態である[黄金螺旋]の体現物であるなどとの指摘・言われようも—「実際はそのようには言えないとのことになっているようでもある」との見立ても[黄金螺旋]構造に興味ある向きから呈されていたりもするのだが— よくもなされているとことがある。

上のことにまつわる出典表記を以降なすこととする。

出典(Source)紹介の部 78(2)

SOURCE

78(2)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 78(2)にあつてはノーチラスことオウムガイの外殻構造が対数螺旋構造、

のみならず、の中の特殊系たる【黄金螺旋構造】と結びつくとの申しようがなされていることを紹介することとする。

(直下、和文ウィキペディア[対数螺旋]項目の[黄金螺旋]と銘打たれた一節にあつての現行の記載内容よりの原文引用をなすとして)

[黄金螺旋 (golden spiral) は黄金比 Φ (ファイ) に関連した対数螺旋の一種であり、…(中略)…黄金螺旋のピッチは約 17.03239 である。オウムガイの殻の様子は黄金螺旋を描いている、という説は有名である。しかし、その合理的な理由は知られておらず、実際にはオウムガイの殻のピッチは 8 度から 10 度であつて 17 度とはかけ離れているなどの、黄金螺旋ではないとの指摘もある]

(引用部はここまでとする —※—)

(※尚、ほぼ同様のことをより細かくも解説しているところとして英文 Wikipedia の [Golden Spiral] 項目にあつては(以下、引用をなすとして) “**In geometry, a golden spirals is a logarithmic spiral whose growth factor b is related to ϕ , the golden ratio.** [. . .] Approximate logarithmic spirals can occur in nature (for example, the arms of spiral galaxies). **It is sometimes stated that nautilus shells get wider in the pattern of a golden spiral, and hence are related to both ϕ and the Fibonacci series. In truth, nautilus shells (and many mollusc shells) exhibit logarithmic spiral growth, but at an angle distinctly different from that of the golden spiral.** This pattern allows the organism to grow without changing shape. Spirals are common features in nature; golden spirals are one special case of these.” (和訳として)「幾何にあつて黄金螺旋とは螺旋拡大要因となる固定実数 b が黄金比 ϕ となるとの対数螺旋である。近似対数螺旋は自然界にて現われえる(たとえば、渦巻銀河の腕の部らがそうなる)。時折、ノーチラス(オウムガイ)の殻が[黄金螺旋]のパターン、そのうえ、 ϕ およびフィボナッチ数列に関係するものとして拡大していくものであると言われたりする。しかし、実際はオウムガイの殻(および多数の軟体生物の殻)は対数螺旋構造を呈しこそすれ、そのアングルは明らかに黄金螺旋とは異なるものである。このようなパターン生成は生体組織をして形を変えることせず成長することを許すものである。螺旋構造は自然界にあつて一般的な性質であり、黄金螺旋はそれらの中にての特殊な一事例にすぎない」(訳はここまでとする)との記載がなされている)。

ノーチラス外殻構造が(黄金比と極めて濃厚に結びつく対数螺旋構造である)[黄金螺旋]と結びつくとの話が果たして根深くも自然界に見受けられることなのかは置き(世間一般での[黄金螺旋とノーチラスの関係性]にまつわる語られようが真正なものかは置き)、ノーチラスの殻が[対数螺旋構造][黄金螺旋]と結びつく「言われている」ことまでは広くも認知・認容されていることである(中心部に向けての渦巻き構造、の中にあつて、角度一定の渦巻きの中に自己相似形が現出しているのが対数螺旋構造なのであるから、オウムガイの殻の格好を見れば分かるか、とは思う——については英文 Wikipedia [Logarithmic spiral] 項目にてオウムガイの殻の写真が挙げられて、現行、その写真に対して “Cutaway of a nautilus shell showing the chambers arranged in an approximately logarithmic spiral” (訳として)「各小室がおおよそにしての対数螺旋構造を体現しての配置構造を呈しているとのオウムガイの殻の切断図」と表記されているとおりである——)。

以上引用部に認められるように、

「現実にはそうとは述べられない」

との申しようがなされる中ながら、

「ノーチラス外殻が黄金螺旋(別名フィボナッチ螺旋)と結びつく」

との指摘・言われようがなされてきたとの経緯自体は——その正確性の問題は脇に置いたうえでのこととはなるが——「確かに」あるわけである。

[追記 postscript として]

直近言及しているようにオウムガイの外殻が ϕ と黄金螺旋構造の体現存在であるとの申しようはさながら[都市伝説]のように扱われるとのことであるのだが(実際に英語圏にては Urban legend アーバン・レジェンドであると断じる向きも目につく)、ここ最近になって、この部を書き記しているとの 2014 下半期年現在以降になって、

[そうした過てる(とされる)理解がなされている一方で見様見方によってはオウムガイの外殻として[黄金比の体現存在たる螺旋構造]となりうる]

との指摘が[都市伝説に対する批判論調]それそのものを顧慮なしつつも英語圏の黄金比専門サイトにてなされるに至っていること、特定した。

望見するところのそのサイト申しようによると

【伝統的な黄金螺旋(解釈)】とは違う見方をすれば、オウムガイの外殻のカーブも黄金比に近似する側面が出てくる]

とのことである。

すなわち、黄金比と対数螺旋の結びつきには[黄金長方形](ゴールデン・レクタングル)という[黄金比を縦横アスペクト比で体現した四角形]を回転・拡大させて螺旋を作り出すとのやりようが強くも関わっているとのことがある中で、その回転の方式を変えるとオウムガイの外殻として黄金比と強くも結びつく螺旋に化けるとの申しようが —[都市伝説]の誤りを顧慮しもしているとの向きに— なされていたりもするのである。

その方面の道を商業的に極めているらしき向きが運営しているとのことのようにある goldennumber.net との web サイト、そこにての

[The Nautilus shell spiral as a golden spiral]

と振られてのページでは現行、下に引用なすような記述がなされていもするのだ。

(直下、黄金比にまつわるあれやこれやを煮詰めているとのことが見受けられ、かつ、その黄金比関連事物を商材にまでしているとの goldennumber.net とのサイトにての

The Nautilus shell spiral as a golden spiral よりの一部原文引用をなしておくとして

There is, however, more than one way to create spirals with golden ratio proportions based on 1.618 in their dimensions. **The traditional golden spiral (aka Fibonacci spiral) expands the width of each section by the golden ratio with every quarter (90 degree) turn. Below, however, is another golden spiral that expands with golden ratio proportions with every full 180 degree rotation.**

「(通常のやりようではノーチラス外殻は黄金螺旋を形作らないところながら) それら方向性にて1.618の黄金比のスタイルを有した螺旋を構成するとのやりようがある。伝統的な黄金螺旋(フィボナッチ螺旋)では(螺旋経緯を示すべくもの黄金長方形の回転にて)すべての角にて90度回転させながら各々で黄金比を現出させながら幅の拡大をなさせていくとのやりようがとられる。しかし、下のやりようではすべてのところで180度回転を(漸近性に工夫しながら)なすとのやりようで「他の」黄金比体现の拡大螺旋構造が実現を見る。

(訳を付しての引用部はここまでとする)

また、同じくもの点について誤解を避けるために述べておくが、

「ノーチラスの殻が(先にての**出典(Source)紹介の部78**でそこよりの記述を引いたとのウィキペディア程度の媒体にあつても言及されているように[大質量ブラックホールが中枢にある]とされる)渦巻銀河よろしく[対数螺旋構造]をとることは確かでありながらも、しかし、オウムガイ外殻はその対数螺旋構造の一形態たる黄金螺旋構造には適合しがたいと考えられているということをごこの話にて取り扱っている」

のであって

[対数螺旋構造それ自体は「一般論として」適切に黄金比とよく結びつけられているものである]

とのこと「も」断っておく。

幾何的な解説をしても([過半の人間]には理解が及びづらいとのことになっていると見受け)[詮方なし]ととらえているので、誰にでも分かる日常語でその点について言及している媒体を挙げれば、たとえば、著名な数式処理システム(Mathematica ウェア)の開発者たる人物スティーブン・ウルフラムが商業運営するサイトたる mathworld.wolfram.com にての

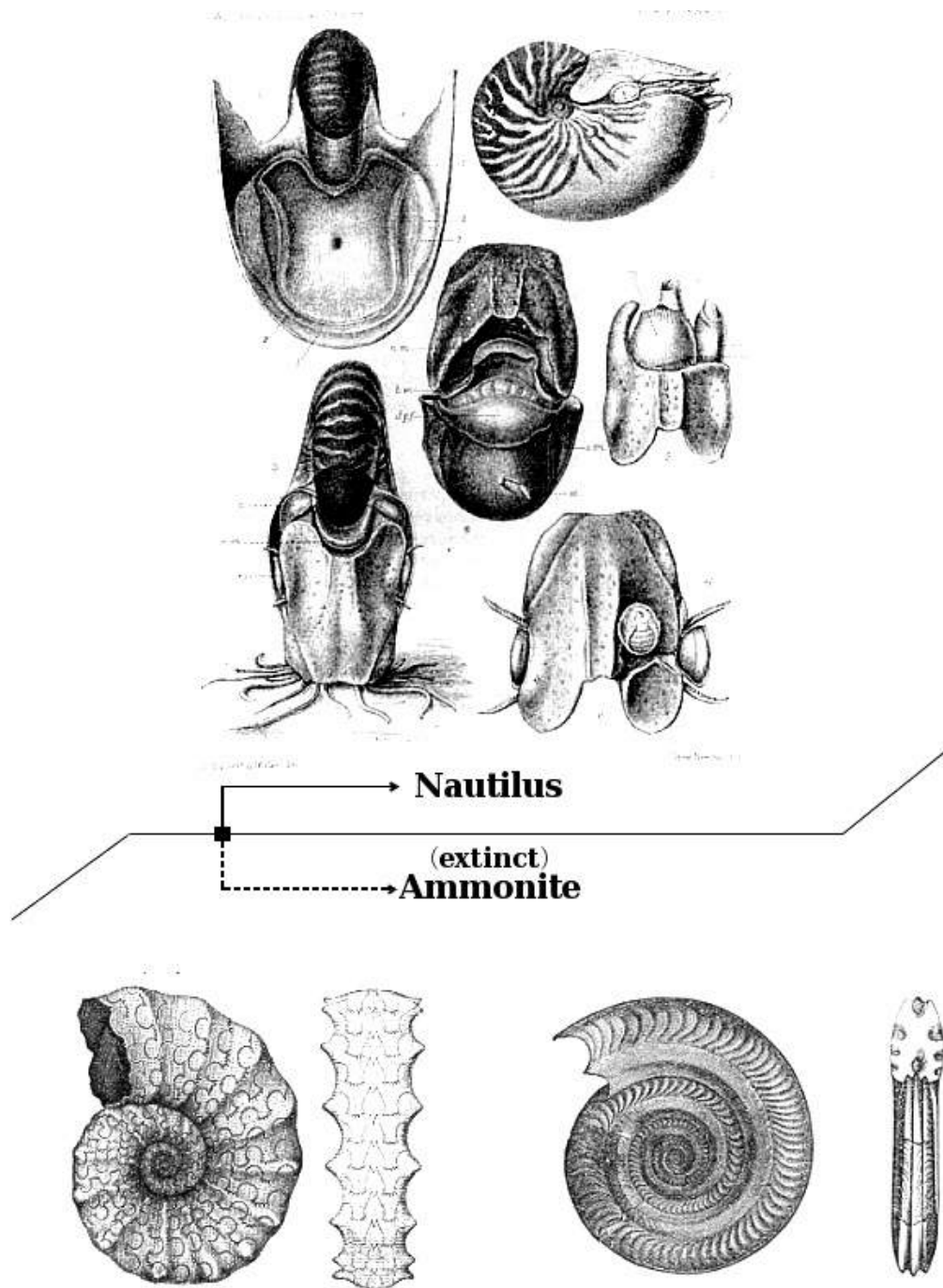
[LogarithmicSpiral.html]

とのページでも Logarithmic Spiral [対数螺旋構造] をして

(引用するところとして)

“ **This spiral is related to Fibonacci numbers, the golden ratio, and the golden rectangle, and is sometimes called the golden spiral.** ” (訳として)「こちら対数螺旋構造はフィボナッチ数、黄金比、黄金長方形と関係性あるもので(その意では)しばしば黄金螺旋と呼ばれる」

と現行、はきと表記されているとおりである)



Logarithmic spiral

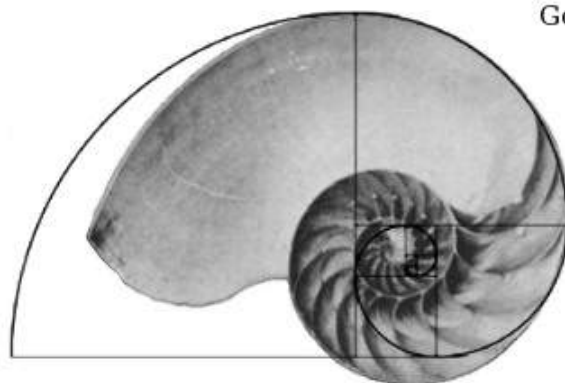
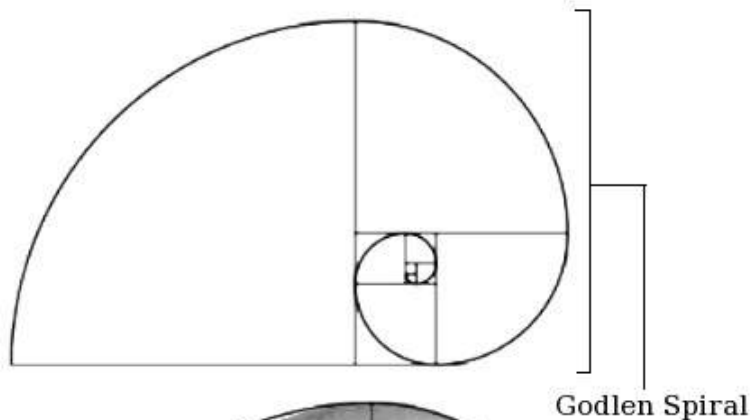
Golden spiral

上掲図上段はオウムガイとノーチラスの解剖図となり、上掲図下段はノーチラスと往古枝分かれし絶滅したとされるアンモナイトの化石である(上段図出典は英文 Wikipedia に掲載されている著作権放棄画像、下段図出典は Project Gutenberg サイトにて公開されている **The Ancient Life History of the Earth (1877)** との著作の [Fig. 145. — *Ceratites nodosus*, viewed from the side and from behind.] および [Fig. 171. — *Ammonites bifrons*.] とそれぞれ付されての図葉らとなる)。彼ら現存および滅亡のノーチラスおよびアンモナイトの外殻構造が[対数螺旋構造]と結びついていることは強くも申し述べられることとなる。他面、彼ら外殻構造が[黄金螺旋構造]とまで結びついているとのことは不分明なること、都市伝説 (urban legend) のようなものと看做されかねないことともとらえられるが、しかし、黄金比と親和性高き構造を殻が呈してい

るとまでは申し述べても行き過ぎにならぬところであると申し述べたい。



photographs of the shell of the pearly nautilus
seen in *The Outline of Science*, Vol. 1 (of 4), 1922



Urban Legend ?

上にあつて掲載のノーチラス(オウムガイ)外殻は現行、Project Gutenberg サイトにあつて著作権喪失著作として全文公開されているとの 20 世紀前半時点にて世に出ていた科学知見にまつわる要覧書たる **The Outline of Science, Vol. 1 (1922)** に載せられている写真より抽出したものとなり、[ノーチラス外殻のピッチ(螺旋構造回転角度)ありよう]をよくも示し

ているものかと判じもしてもちだしたものと異なる（ただし、その一般性については筆者この身の浅見さがゆえに保証しかねるところもあると一応、断っておく）。 対して、上掲図にあっての[図形部]は[黄金螺旋構造の近似的描画方形態]（フィボナッチ数と結びついたフィボナッチ螺旋（Fibonacci spiral）として知られるもの）を挙げもしてのものとなり（そちらフィボナッチ螺旋、英文ウィキペディアにも掲載されているような構図となりもする）、両者構図（ノーチラス外殻と黄金螺旋近似のフィボナッチ螺旋の構図）を重ね合わせて顧慮してみると確かにノーチラス外殻のピッチ、螺旋構造回転角度の方が黄金螺旋形態に対して「よりもっておおらか」であるように映るようになっていたとのことがある（「本稿用に、」と作成なした上掲図でも実際に図像ら重ね合わせを試行してみせており、といった中でそれも判じている）。

以上のようなことがあるから、
「ノーチラス外殻構造と黄金螺旋の結びつきを云々するのはまさしくもの都市伝説（urban legend）めかしたことだ」と巷間にての一步進んだ向きらに指摘されているのかとも思われもするのではあるが、ここ本稿では
[ノーチラス外殻は黄金比を渦にて体現しているものである]との言いようが広くもなされているとのそのありようそれ自体を重んじていること、かさねがさね申し述べておく。

につき、

『何を支流・細流に分け入ったこと —— オウムガイことノーチラス外殻構造と黄金比の関係にまつわる議論の動向のことなど —— を延々うだうだと書きつらねているのか、この者は。』

などととらえる向きもいるかもしれないが、この身には非本質的なことをうだうだと書き記しているとの心づもりはない。一切もってない（「そういう話からして 読み手貴殿を含めての我ら種族を狙う弾丸がどういう意図で発射されるか、その軌道・方向性にまつわるものである」とくどくも、そして、強くも、申し述べたい一方、である）。

ここからが[主眼]として問題としたきこととなる。

以下のこと、

[これよりの指し示し事項]

としてお含みいただきたき次第である。

(はきと申し述べ)

オウムガイこと[ノーチラス]が極小の領域に向けての対数螺旋構造、そして、黄金比体現の黄金螺旋構造と結びつくと言われてきた — 後者[黄金螺旋]構造については結びつきの話それ自体を無条件に確言することまでは不適切であるようにもとれる中、「どういうわけなのか」鼓吹されてきた — とのことが

Atlantis「アトランティス」

および

[911の事件が起こることを前言しているが如くやりよう]

の双方を[作中要素]として具備しているとの特定文物と結びつき、さらには、その接合関係が

[五芒星の退魔の象徴としての史的沿革]

[(五芒星形状と無限に続く相互内接・外接関係を呈する)五角形形状と結びつく異界へのゲート]

[(そういうもの「ら」が存在していること自体が奇っ怪なわけであるが)911の予見をなしているが如く事物らの多くにみとめられる通貫しての内容]

との絡みで

[黄金比と結びつくカー・ブラックホール]

[正五角形を12枚重ねての全体としての黄金比の体現存在である正十二面体を星天構成要素として登場させているプラトン古典(アトランティス伝承に言及している古典としても有名な『ティマイオス』)]

と接合するようになっているとのことが「現実にある」—などと述べても、[きちんと本稿を読んでいないとの向き]にあっては何を述べているのか、およそ理解できないかもしれないが、話を半分でも理解している向きにあっても信じがたいことと映るだろう。しかし、「極めて遺憾」なことだが、「全て容易に後追い可能な事実の話をしている」。そう強調する—。

(: 上のことを「信じがたい」ととらえられた向きにあってはこの身が先にて順々に典拠指し示してきたこと、 $\alpha 1$ から $\alpha 8$ 、そして、 β と振っての各事項の指し示しに注力してきたとの流れの中にあつての次のことらの典拠がきちんと呈示されているかどうか、そこからして確認いただきたい次第でもある。

$\alpha 6$. 金星の内合ポイントにてその近似物が具現化する五芒星——(同五芒星は出典(Source)紹介の部 69(2)にて真っ当な出典に依拠して述べているように正五角形と並んで[数学発展史にあつて黄金比と非常に密接に結びつくとの来歴がある形状]ともなっている)——は歴史的に見て[退魔の象徴]とされてきたとの経緯がある。その[退魔の象徴]としての五芒星と結びつくような[退魔の象徴物]としての[正五角形]形状をとるペンタゴン(アメリカ国防総省本庁舎)が爆破されて「異次元から」干渉する妖怪が解放されるとの[荒唐無稽小説]が世に出ている。それが本稿の先の段で[911の前言小説と述べられるが如く要素を「多重的に」「奇怪極まりなくも」含む]こと、仔細に解説しているとの70年代欧米にてヒットを見たジ・イルミナタス・トリロジーである。その点、[911の予言事象とペンタゴンの崩壊]の関係性について本稿では(これまた問題となる書籍としての)『異端の数ゼロ』に認められる[五角形(ペンタゴン)と五芒星の内接関係を無限小に至る機序として呈示するとのやりよう] および [グラウンド・ゼロとの言葉を911の事件が発生する前からブラックホールと結び付けているとのやりよう] の関係性] について論じてきたとの経緯がある

(出典(Source)紹介の部 72)を参照のこと)

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとのことがある。それは海女による[セーマン・ドーマン]と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。海女によるセーマンこと五芒星の使用は[竜宮]に引き込まれないための呪(まじな)いであるとの言い伝えがある(とされている)。さて、竜宮とはどのような場か。[外側に対して時空間の進みが遅い場]と伝えがある場である。他面、重力の化け物、ブラックホール(の近傍領域)も時間の乱れが問題となるものである(出典(Source)紹介の部 74)から出典(Source)紹介の部 75-2(2)を包摂する解説部を参照のこと)

(以降では上の $\alpha 6$ から β と通ずるところとしてどういふことがあるのかを幾作もの文物に認められる相応の比喩的やりようとの絡みで取り上げることになる次第である)

ここで「唐突続きの唐突。」との感あること、だが、最終的にすべて「これ至当な」との結論に結び付けるべくものこととして述べるが、読者がある程度、空想小説の沿革に詳しい、ないし、空想小説の類を愛好してきたとの経緯ある向きであれば、

[ジュール・ベルヌ]

という名は知っておろうことか、と思う。

同ジュール・ヴェルヌ、『月世界旅行』などの冒険小説をものしたことで有名な 19 世紀後半に活躍したフランスの作家 — ([SF の父]などとも評される作家) — となっているのであるが、同作家がものした作品に

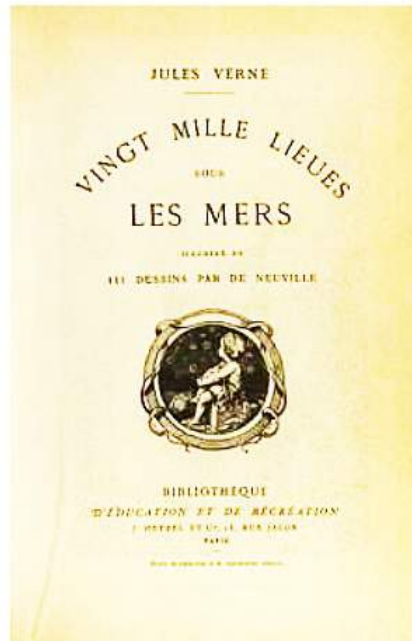
Vingt mille lieues sous les mers 『海底二万里』 (1870)

というものがある(極めて著名な作品であるため、本来であるのならば、「というものがある」などとの式での書きようをなすのは不適切ともとれるのだが、本稿にあっての意欲ある向きに対する懇切なる説明を重んずるとの観点よりそうした書きようをなしている)。

そちら『海底二万里』、その著名性がゆえに少なからずの人間が幼少のみぎりなどに接することがあるとの同小説では

[インド独立運動のために闘う闘士であるとのネモ船長 — ついでに述べれば、同ネモ船長、インド独立運動の父たるガンジーが渡欧して近代文明人としての嗜(たしな)みを身につけた地元インドの藩王国の宰相の子息であったのを想起させるようにガンジー以前の小説にての作中登場人物ながらもインドのマハラジャ(大公)の子息との身で渡欧して嗜(たしな)みを身につけ、欧米列強やりように抗するに至ったとの[設定]の人物である — が潜水艦 [ノーチラス] (そう、オウムガイことノーチラスである) を駆って世界中の反体制運動を支援している]

との粗筋が展開しているとの作品である。



Vingt mille lieues sous les mers
(Twenty Thousand Leagues Under the Sea)
&
Nautilus

最前申し述べたところどおりの内容の『海底二万里』(直上にてはそちら表紙絵も挙げた)という作品の中ではアトランティスの存在が僅かながら「海中に没した存在」として取り上げられているとのことがある。(そこからして重要であるとの認識があつてその典拠を示すのだが)以下、典拠紹介部をご覧頂きたい。

出典 (Source) 紹介の部 79

SOURCE

79



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 79 にあってはジュール・ヴェルヌ『海底二万里』にあって[海底に沈んだアトランティス]の探索が描かれているとのことを紹介しておく。

(直下、まずもって目につくところとしての和文ウィキペディア[海底二万里]項目にあっての粗筋記載欄に見る「現行の」記述より原文引用をなすとして)

「彼らは幸運にも艦首に衝角(船の横腹に穴を開けていたのはこれであった)を備えたその怪物こと潜水艦ノーチラス号と、ネモ船長と自称する男に救助され、彼らと潜水艦の旅にでることになる。かくてアロナックス博士たちは、紅海の本物の(しかも美しい)サンゴ礁やヴィゴ島の海戦の残骸や、沈んだアトランティス大陸の遺跡などを目撃することになる」

(引用部はここまでとする)

上にてウィキペディア程度の媒体にての書かれよう引いたが、オンライン上にてアーカイブサイトより確認できる原著それぞれのもののフランス語から英語に訳された、

Twenty thousand leagues under the sea (往時の版元 WARD, LOCK & CO., LIMITED より刊行のもの)

の該当部記述を原文引用(オンライン上にて誰でも[全文確認]できるとの英訳版『海底二万里』よりの原文引用)とのかたちで引いておくこととする。

(直下、仏語から英訳なされての Twenty thousand leagues under the sea (オンライン上より確認なせる版)よりの原文引用をなすとして)

In fact, the Nautilus was **moving only five fathoms from the soil of the Atlantis plain**. It was flying like a balloon before the wind above terrestrial prairies ; but it would be more according to fact to say that we were in this saloon like being in a carriage of an express train. In the foreground were fantastically-shaped rocks, forests of trees transformed from the vegetable to the mineral kingdom whose immovable outlines appeared under the waves. **Whilst passing these sights I related the history of the Atlantides to Conseil. I told him all about the wars of this extinct nation. I discussed the question of the Atlantis as a man who has no doubts left on the subject.**

(拙訳として)

「実際、ノーチラス号は 5 ファゾムのみほどアトランティスの台地から離れて進んでいた。ノーチラス号はまるで大地にあっての草原、その上方にて吹く風を受けてのバルーンであるかのように進んでいた。だが、急行列車、その客室にこそ我々はいたのだ、と述べた方がより事実^に即した言いようであったことだろう。幻想的なかたちをした岩ら、波の下で動かざりしの似姿をさらす鉱物の王国へと元の植物から似姿を変えての樹林らが前方に見出された。そうした景観呈している場を通過している合間にアトランティスの人々の歴史につき私はコンセイユ(『海底二万里』登場人物)に水を向けてみた。そして、この滅亡した王国の戦争について語れるところをあますことなく彼に語ってみせた。その実体について何ら疑念残すことなかったとの「一個の人間」と見立てもしてのアトランティス王国、そのありうべき疑義についても彼と論じてみたのだ(以下略)」

(オンライン上より全テキスト確認可能となっているとの『海底二万里』英訳版よりの訳を付し

での引用部ここまでとしておく)

(出典(Source)紹介の部 79 は以上とする)

ここからが「強調」なして伝えたいことなのだが、上にて呈示のようにアトランティス遺構深訪に関する記述が(少々ながらも)なされているとの冒険小説『海底二万里』の影響を「露骨に」受けた作品となりもしているのが本稿にてその異常性について筆を尽くして論じてきたとの小説作品、振り返りなせば、

[「911の事前言及作品としての側面を有しているとの作品」(と本稿にての出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 を包摂する一群の解説部にあつて入念に指し示してきたとの作品)、かつ、「アトランティスに対する蛇人間らが用いられての侵略挙動が描かれているとの作品」にして「アトランティスに存在するペンタゴンおよび現代アメリカのペンタゴンの外壁が破壊されて魂を奪い取る異次元介入妖怪が解放されたとの筋立てを有しているとの作品」(出典(Source)紹介の部 38 から出典(Source)紹介の部 38-2)]

であるとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』(70年代欧米圏ベストセラー)となっているとのことが「現実」にある。

その点、まずもって書くが、表記の『ジ・イルミナタス・トリロジー』、主人公格のハグバード・セリーンというキャラクターが「黄金色の」潜水艦をネモ船長(先述のようにインド独立運動のやりようとしてノーチラスを用いて世界中の反体制勢力を支援しているとの向き)よろしく駆って世界中のアウトローと共に反体制運動——最悪小説が最悪小説であるところのひとつの所以として麻薬をディーリングしながら潜水艦内での麻薬を用いての乱交パーティに興じながらも反体制運動と自称されての行為——をなしているとのあらすじの作品となる(余談ともなるが、ジ・イルミナタス・トリロジーのハグバード・セリーンとは「現実の世界の出来事にも影響を与えた架空世界のキャラクター」とのことでそこそこに知られているキャラクターともなっており、たとえば、ドイツ人のハッカーがその名を用いてスパイ行為を働き、お縄になったことなどが知られている——※経緯は邦訳されもしている書籍、クリフォード・ストール著『カコウはコンピューターに卵を産む』(草思社)との書籍にも詳しいが、ドイツ人のハッカーが現実の世界で「ローレンス・バークレー研究所」(加速器の運営を実施している研究機関にして円形加速器を発明したアーネスト・ローレンスという男に由来する研究所)を「踏み台」にしてのハッキング行為をなしていた際に当該研究所の職員に見咎められ、「ハグバード・セリーン」の名前を使ってもした中、東側に情報を売り捌くためのスパイ行為が仇となって逮捕されたことなどがそこそこに知られている。閑話休題——)。

につき、問題小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』では「ネモ船長」よろしくの反体制運動の主導者ハグバード・セリーンが「黄金色の潜水艦」(作中ではコロンブス以前にアメリカにかつて行き着いたのではないかとの説が出されているアイスランドのヴァイキング、レイフ・エリクソンから取られてのレイフ・エリクソン号)を用いて活動しているとのことが描かれるのだが(出典紹介は下になす)、そうした同作の中では

[沈んだアトランティス遺構]

も登場してくる。

その伝でも、そう、「反体制派支援の潜水艦登場の主人公格の人物」と「沈んだアトランティス遺構との遭遇」の結びつきからして『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品が『海底二万里』の影響下にあることは「「ほぼ」歴然。」といった塩梅となっている。

そして、両作（『海底二万里』および『ジ・イルミナタス・トリロジー』）の関わり合いが「「ほぼ」歴然」から「歴然」となるところとして、他ならぬ『ジ・イルミナタス・トリロジー』の作中にて

[同作が『海底二万里』の影響を受けている作品である]

との作中内自己言及が「明示的に」なされているとのこともある——具体的には『ジ・イルミナタス・トリロジー』の主要級の人物たるハグバード・セリーンにつき「ネモ船長になりきった男である」との登場人物の発言が「明示的に」幾度かなされているとのことがある——。

出典 (Source) 紹介の部 79 (2)

SOURCE

79(2)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 79 (2) にあつては、

[[『ジ・イルミナタス・トリロジー』にて[[「黄金色の」潜水艦]が主要級の登場キャラクター (ハグバード・セリーン) の移動拠点として登場してくること]

[[上作品にて[[「黄金色の」潜水艦]がアトランティスを探索するとの粗筋が展開すること]

[[上作品にて[[「黄金色の」潜水艦]を駆るハグバード・セリーンがネモ船長に「明示的に」仮託されていること]

とのことにまつわつての出典表記を小説作品そのものよりの原文引用とのかたちでなしておくこととする (※)。

(※1: 先立って引用なしたことだが、ジ・イルミナタス・トリロジーは下のような言われようがなされるとの式で往時、非常に反響を呈していたとの作品ともなっている。

(直下、出たのが70年代だったところを2007年まで邦訳されなかったとの意味合いで遅まきに— 四分冊で邦訳・刊行されたとの文庫版『イルミナティI ピラミッドからのぞく目(下巻)』、その284ページにての同作邦訳版訳業に携わった邦訳者の作品に対する解説を引くとして)

“あの幻の伝奇小説の古典 ILLUMINATUS!の刊行をとうとうスタートすることができました。…(中略)…といっても、多くの読者のみなさんには、これがどれほど大変な事件なのかおわかりいただけないかもしれません。…(中略)…ロバート・アントン・ウィルソンとロバート・シェイの二人がアメリカのデルという出版社から三部作として発表し、たちまち百万部のベストセラーとなり、全世界でカルト的人気を博した、究極の陰謀小説ともいわれ、多くの流行語まで生み出した大傑作なのです。そればかりではなく、ミュージカルになり、大きな賞をとる傑作ゲームになり、ロックのさまざまな名曲を生み出し、いかがわしい秘密結社を描くデモ本の大流行まで招いた、一つの社会現象になった作品です。”
(以上、再度の引用部とする)

(※2 また述べておくが、以降、小説作品原著および訳書そのものよりの原文引用をなそうとしているところは英文 Wikipedia[The Illuminatus! Trilogy]項目にての Plot summary(粗筋要約)の部にて現行、

“ The prison is bombed and he is rescued by the Discordians, led by the enigmatic Hagbard Celine, **captain of a golden submarine**. Hagbard represents the Discordians in their eternal battle against the Illuminati, the conspiratorial organization that secretly controls the world. He finances his operations by smuggling illicit substances. ” (補ってももの訳として)「牢獄は爆破され、そして、彼(訳注:ジョージ・ドーンとの当該フィクションにあつての主要登場人物の内の一人)は謎に満ちた男、**黄金の潜水艦の艦長**であるハグバード・セリーンに率いられてのディスコルディア運動勢力(訳注:不協和の象徴としての[女神エリスの黄金の林檎]をシンボルとする作中内の勢力)に救出された。彼ハグバード・セリーンは影の世界より世界を秘密裡にコントロールしているとのイルミナティ(訳注:作中の敵対勢力で陰謀論の世界ではお馴染みの存在、啓明結社)および陰謀をこととする諸団体と果て無き戦いを繰り広げる中でディスコルディア運動の代表者となっていたのだ。彼は違法薬物の密売を通じてその挙に資金供給をなしていた(訳注:ジ・イルミナタス・トリロジーでは主人公らが駆る黄金の潜水艦が[違法薬物の密輸拠点]となっており、なおかつ、[日常的乱交の実演の場]となっているとも描写される——卑猥描写で満ち満ちている『プレイボーイ』誌出身の著者らがものしている作品だけあって、である——)」(補ってももの訳はここまでとする)

と記載されているところに関わるところのものである(荒唐無稽小説のあれやこれやについて「暇人の話柄」にて云々している(と誤解される)ようなところがある時点で厭なのであるが、とにかくもの以降引用部に対する解説をなせば、そうもなっている)

それでは以下、

[[『ジ・イルミナタス・トリロジー』にて[**黄金色の潜水艦**]が主役級の登場キャラクター(ハグバード・セリーン)の移動拠点として登場してくること]

を示すための当該作品よりの原文引用をなすことからはじめる(:本来ならば端的な引用をなすような性質の話ではないともとらえるのだが、[文献的事実]を摘示することを重んじる本稿ならではのことで、端的な引用を断片として切るように呈示していくこととする)。

(直下、広くも書店に流通を見ているとの邦訳文庫版『イルミナティI ピラミッドから覗く目
(上巻)』(集英社)139 ページよりの原文抜粋をなすとして)

いまだに陽光の反射がまぶしかったものの、長く低い本体の中央に小さな塔が載っているのがわかるようになってきた。箒の上にマッチ棒を載せたみたいだ。やがて自分の距離感が間違っていたのがわかった。船か何かわからないが、それは最初に思っていたよりずっと遠くにあるのだ。潜水艦だ——金色の潜水艦だ——都市の五ブロック分ほどの長さがあり、これまでに聞いたどんな大型客船より大きい。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、原著 The Illuminatus! Trilogy にての The Eye In The Pyramid の巻にての THE SECOND TRIP, OR CHOKMAH の章では上の訳書表記に対応するところとして “ It was still blinding from reflected sunlight, but I was now able to make out a long, low silhouette with a small tower in the center, like a matchbox on top of a broomstick. Then I realized that I had my judgment of distances wrong. The ship, or whatever it was, was much more distant than I'd first realized. **It was a submarine-a golden submarine-and it appeared to be the equivalent of five city blocks long, as big as the biggest ocean liner I had ever heard of.** ” との表記がなされている。そちらは(であるから原著よりわざわざの抜粋をなしているわけだが)オンライン上より「表記の英文テキストのグーグル検索エンジン入力などを通じて」確認なせるところである)

次いで、

『ジ・イルミナタス・トリロジー』にて[「金色の」潜水艦]がアトランティスを探索することの粗筋が展開すること]

[上作品にて[「金色の」潜水艦]を駆るハグバード・セリーンがネモ船長に仮託されていること]

を示すための当該作品よりの原文引用をなすこととする。

(直下、邦訳文庫版『イルミナティI ピラミッドから覗く目(下巻)』(集英社)196 ページよりの原文抜粋をなすとして)

「浮上」とハグバードは命じた。ジョージには巨大エンジンの振動がはじまるのが感じられ、彼らはアトランティスの丘や谷の上高く舞いあがった。ハグバードのテレビ画面システムの特別照明のおかげで、海洋の上に浮かぶ大陸の上をジェット機で飛んでいるような気分がしてきた。「アトランティスの奥地までいく暇がなくて残念だったな」とハグバードがいった。「りっぱな都市がたくさん見られるんだが。もちろん、邪悪な目の刻以前に存在していた都市の足元にも及ばないようなものだがね」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、原著 The Illuminatus! Trilogy にての The Eye In The Pyramid の巻にての THE FIFTH TRIP, OR GEBURAH の章では上の訳書表記に対応するところとして “ He was gone. "Lift off," Hagbard called. George felt the surge of the

sub's colossal engines, and they were sailing high above the hills and valleys of Atlantis. With the special lighting of Hagbard's television screen system, it seemed much like flying in a jet plane over one of the continents above the ocean's surface. **"Too bad we don't have time to get deeper into Atlantis," said Hagbard. "There are many mighty cities to see. Though of course none of them can approach the cities that existed before the Hour of the Evil Eye."** ”との表記がなされている。そちらは(であるから原著よりわざわざもの抜粋をなしているわけだが)オンライン上より「表記の英文テキストのグーグル検索エンジン入力などを通じて」確認なせるところである)

(直下、広くも書店に流通を見ているとの邦訳文庫版『イルミナティI ピラミッドから覗く目(下巻)』(集英社)223 ページよりの原文抜粋をなすとして)

ハグバードがこの店を会場場所を選んだ理由が、その内装が好きだからだということに疑問の余地はなかった。**このあきれた男は自分をネモ船長であると思いこんでいる。**

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、原著 The Illuminatus! Trilogy にての The Eye In The Pyramid の巻にての THE FIFTH TRIP, OR GEBURAH の章では上の訳書表記に対応するところとして “ Hagbard, undoubtedly, had chosen this meeting place just because he liked the decor. **Crazy bastard thinks he's Captain Nemo. Still: we've got to deal with him.** ” との表記がなされている。そちらは(であるから原著よりわざわざもの抜粋をなしているわけだが) オンライン上より「表記の英文テキストのグーグル検索エンジン入力などを通じて」確認なせるところである)

(直下、邦訳文庫版『イルミナティIII リヴァイアサン襲来』(集英社)46 ページよりの原文引用をなすとして)

そもそも、瓶やら缶やらいっぱい細菌を培養し、毛深い指一本でそっとボタンを押すだけで、炭疽菌のつまった魚雷を大西洋の海中に撃てるような、病的なネモ船長の性格をもつハグバード・セリーンを信じることができるのか。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※尚、原著 The Illuminatus! Trilogy にての Leviathan の巻にての THE NINTH TRIP, OR YESOD の章では上の訳書表記に対応するところとして “ **Was it possible to really believe in a Hagbard with the Captain Nemo psychosis, brooding over tubes and jars full of bacteria cultures, one hairy finger hovering tentatively over a button that would send a torpedo full of Anthrax Tau germs out into the inky waters of the Atlantic?** ” との表記がなされている。そちらはオンライン上より「表記の英文テキストのグーグル検索エンジン入力などを通じて」確認なせるところである)

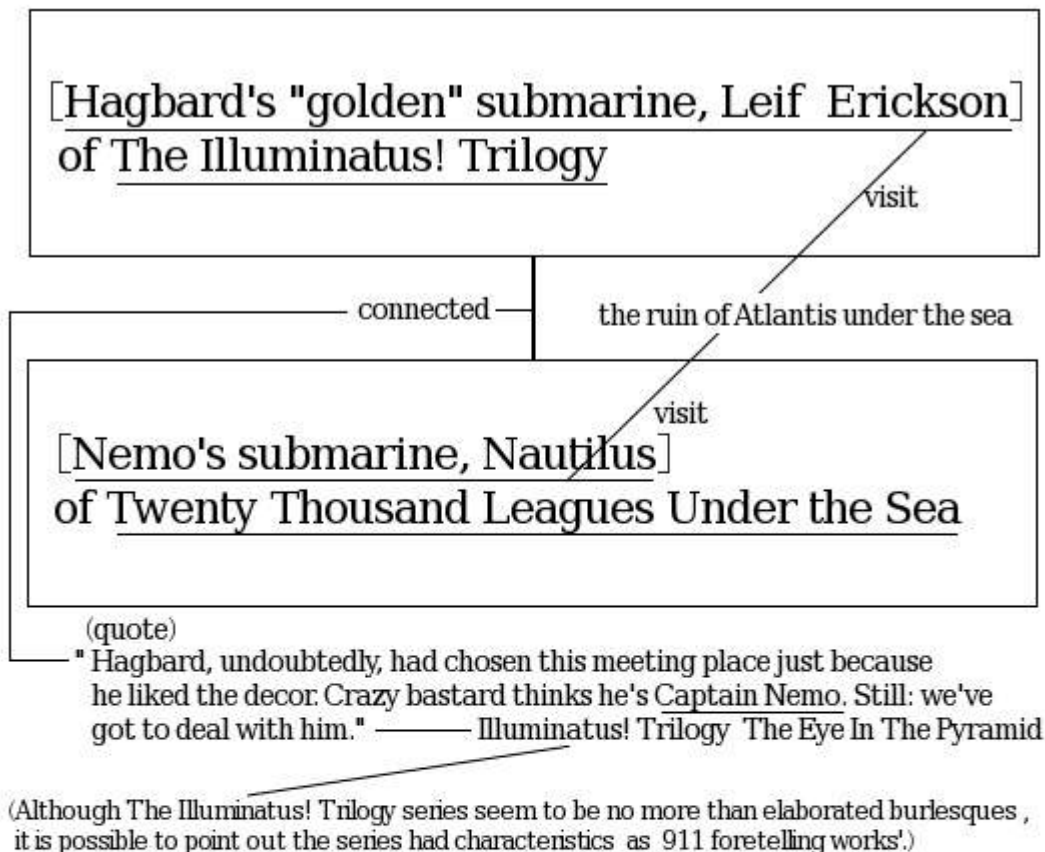
これにて、(オンライン上より容易に確認できるとのかたちにての)、

『ジ・イルミナタス・トリロジー』(70年代欧米圏ベストセラー)にて[「黄金色の」潜水艦]が主役級の登場キャラクター(ハグバード・セリーン)の移動拠点として登場してくること]

[上作品にて[「黄金色の」潜水艦]がアトランティスを探索するとの粗筋が展開すること]

[上作品にて[「黄金色の」潜水艦]を駆るハグバード・セリーンがネモ船長に「明示的に」仮託されていること]

とのことの出典表記とした。



ここまでにて俎上にあげている一次資料となる書籍それものに何が記載されているかの[文献的事実]の問題 (philological truthの問題)として原文引用なしながら指し示してきたように『ジ・イルミナタス・トリロジー』と『海底二万里』に登場する潜水艦らは相互に対応付けさせられていると指摘できる。第一。双方共にアトランティス遺構を探索した反体制アウトローの母艦となっている潜水艦であるとのことがある。第二。片方(『ジ・イルミナタス・トリロジー』の方)にてもう片方(『海底二万里』)の意識的模倣をなしているとの言及が作中にてなされているとのこともある(オンライン上より確認可能な原著引用文の通り)。

その点、「問題となることには、」ここにて俎上に挙げていた作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』シリーズの方が[荒唐無稽喜劇小説]のように見えて、その実、性質の悪い[九一一の事件が発生することにまつわる「多重的」予告小説]としての側面を帯びているとのことを指摘可能となっているとのこと「も」ある(：その不可解性につき[機序]との兼ね合いでいかに説明できるのかとの話は置いておいても取りあえず[現象]に着目してそう述べられるようになっている)。

(出典(Source)紹介の部 79(2)はここまでとする)

以上、書き進めてきたところで最前までの流れについて一端、ほんの少々の振り返りをなしたうえで同じくものこととの絡みで何が問題となるのか、さらにもって煮詰めていくこととする。

最前までの流れ、その前半分のパートにあつては

[[黄金比と対数螺旋構造]の融合系として知られる[黄金螺旋構造]がオウムガイことノーチラスの外殻構造と結びついているとの言われようが広くもなされている]

とのことを紹介し、そのうえで、一転、(巷間にて取り沙汰される)[ノーチラスと対数螺旋・黄金比の結びつき]のようなことまでもが重要な予見的物事らと複合的に結びついているとのことがありもする、と申し述べた。

そして、最前までの流れにての後ろ半分では

[潜水艦ノーチラス号(すなわち[オウムガイ]の名を冠する潜水艦)を主人公ネモ船長が駆るとの小説作品『海底二万里』]

のことをとっかかりとして取り上げもし、同作、ジュール・ベルヌの手になる『海底二万里』までもが(本稿にあつてより従前の段から問題視してきたとの)[911の予見小説]としての顔を持つ欧米圏70年代ヒット小説の『ジ・イルミナタス・トリロジー』と[意味深長なところ]で結びつくようになっているとのことに注意を向けもし、その典拠たるところの一部を紹介するとのことをなした。

肝心なのはそうした相関関係が

[よくできた偶然の賜物]

としてそうなっているのか、あるいは、

[明らかな恣意の賜物]

としてそうもなっているかなのであるが(「因果関係と相関関係は違う」とはよく言うわけであるも、ただ単純に相関関係の存在を指摘し、そこに因果関係までもがあるなどと言い切るような話柄は責任感との兼ね合いで筆者はとらない)、とにかくも、以上、振り返りをなしたうえでさらにもって話を進める。

さて、

[(70年代欧米圏にてのヒット作品にして予見的作品でもあること、先述の)小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』に見る国際的アウトローにして反体制のハグバード・セリーンの黄金色の潜水艦(レイフ・エリクソン号)] ↔ (対応) ↔ [国際的アウトローにして反体制のネモ船長の潜水艦(『海底二万里』のオウムガイ号ことノーチラス号)]

との対応関係がみとめられる、[黄金色の潜水艦](『ジ・イルミナタス・トリロジー』の中での黄金の潜水艦、「ゴールデン」・サブマリンたるレイフ・エリクソン号)と[ノーチラス](海底二万里の中でのネモ船長乗艦ノーチラス号)の対応関係がみとめられることからして——当然、そうした皮相的なことでは話が済まない他の事情もあるからここでの取り上げをなしているわけであるが——

[オウムガイ(ノーチラス)が「ゴールデン」・スパイラル近似物(「黄金」螺旋構造近似物)]と看做される風があることと対応しているように「見える」とのことがある]

とも言えそうではある。

ただ、以上のことだけを述べもするのならば、[愚にも付かぬ印象論]を吹くこと以外、能がないとの相応の人種ら(愚見愚論の撒布で言論流通動態にあつての言論の品質を規定している情報操作要員のごとき者ら)やりようと何ら変わらないだろうと筆者自身としても「当然に」考える。

そうも述べもしたうえでそちらに注意を向けたいところとして、

小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』

にあつては

[[正五角形]と[黄金の林檎](ヘラクレスの11番目の冒険にての取得対象物)を向かい合わせに並置させた象徴物] (作中にあつて[聖なるカオ]などと呼称されるもの)

が図示までされて「頻繁に」登場してくるとのことがある——につき、既述のこととして(そして、よりもって細かくもの解説を後の段になす所存でもあることとして)、[911の事件が起こることを前言しているが如く要素を多重的に帯びているとの当該作品](ジ・イルミナタス・トリロジー)の中にあつて度々お目見えしているとのそちら[[正五角形]と[黄金の林檎]を向かい合わせに並置させた象徴物]とは[「ペンタゴン」(合衆国国防総省本庁舎)と「ニューヨーク市」(ビッグ・アップル)の体現シンボルをそれぞれ向い合せに並置させた象徴物]とも言い換えることができるようなものとなつて「も」いる——。

同じくものことは下にての振り返つての表記の部でも言及しておくこととする。

ここでは[振り返つての表記]をなす。以下の図をご覧頂きたい。



The Illuminatus! Trilogy
&
The Symbol of Discordianism

this is the regular pentagon correlated with the Pentagon located in Arlington (; The choice of the pentagon as a symbol of the Aneristic Principle is partly related to The Pentagon in Virginia near Washington, D.C.—Wikipedia [Discordianism] article)

本稿にての**出典(Source)紹介の部 37-5**で紹介したように上の通りのシンボリズム、

[[**ペンタゴン(正五角形構造を取る米国国防総省本庁舎)の体現物であると「明示」されての五角形**] (左側) と **黄金の林檎**] (右側) を並列描写してのシンボリズム]

としての上の通りのシンボリズムが図示までされるとの格好にて小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品には頻繁に登場してくるとのことがある(: 図示の掲載部について挙げれば、当方所持の版の国内で流通している集英社邦訳文庫版ではそれぞれ『イルミナティI ピラミッドから覗く目(上巻)』p.161/集英社『イルミナティI ピラミッドから覗く目(下巻)』p.236/集英社『イルミナティ

III リヴァイアサン襲来』p.367 がそちら掲載箇所となる)。

その点、

[ニューヨークの [マンハッタン島] (ビッグ・アップルとの俗称を伴うニューヨーク市の中核部) が [黄金の林檎] (ゴールデン・アップル) に仮託されている]

との指し示しがなされれば(本稿筆者はそうした指し示しがなせしめようとしてよく把握している上、その一部の論拠は本稿の先の段で呈示しているし、これよりの段でも呈示していく所存でもある)、

[【ペンタゴン (正五角形構造を取る米国国防総省本庁舎) の体現物であると「明示」されての五角形】(左側) と【黄金の林檎】(右側) とを並列描写してのシンボリズム
⇒(変換)⇒

[【ペンタゴン (正五角形構造を取る米国国防総省本庁舎) の体現物であると「明示」されての五角形】(左側) と【マンハッタン】(右側) を並列描写してのシンボリズム

との申しようが純・記号論的になせるようになる。

そのような申しようが「実際に」なせるとの中で

[【ペンタゴン (正五角形構造を取る米国国防総省本庁舎) の体現物であると「明示」されての五角形】(左側) と【黄金の林檎】(右側) を並列描写してのシンボリズム

を頻出させているとの小説作品(『ジ・イルミナタス・トリロジー』)が

- a.[マンハッタンのビルが爆破されるとの粗筋を有し]
- b.[ペンタゴンが部分爆破倒壊しとの粗筋を有し (その爆破時刻の時針表記は5時55分となるが、それがいかように911との時針と結びつきうるのか、という話は先になしたところでもある)]
- c.[(現実の911の事件の後にての経緯を先んじて述べるようなかたちにて)米軍関係者の細菌兵器科学者の漏洩した炭疽菌の災厄が現出するとの筋立てをも伴っており]
- d.[そのスピンオフ作品(スティーブン・ジャクソン・ゲームズ社より1992年に出されたカードゲーム)からして[爆破倒壊させられるツインタワー][噴煙をあげるペンタゴン]を登場させている]

との作品ともこれまた「実際に」なっているとのこと(オンライン上よりも確認可能な原著原文を典拠にしての**出典(Source)紹介の部 37**から**出典(Source)紹介の部 37-5**にて論拠は呈示している)は当該の作品が

[a.マンハッタンのビルが爆発倒壊し、b.ペンタゴンが爆発部分倒壊し、c.事件後、米軍関係者の細菌兵器科学者(ブルース・イヴィンズ容疑者)によって漏洩させられたものであると後に判明したとされる炭疽菌による騒動が発生し、(a.とb.の複合事象として)d.マンハッタンとペンタゴンが同時に標的にされたとの911の事件]

に対する[前言作品]との要素を露骨に帯びている作品と同義であると述べても言い過ぎにならぬことである。

(:しかも同作『ジ・イルミナタス・トリロジー』の作中にあつてはアーカイブ・サイトなどから全文確認できるところとして The Illuminatus! Trilogy BOOK#3 : LEVIATHAN (の APPENDIX LAMED: THE TACTICS OF MAGICK の部) にあつて ——先の段にてなした引用を繰り返すところとして——

The fiery father, the watery mother, the airy son, and the earthy daughter are all there, just as they are in every alchemical formula.
But we say no more at this point, lest the reader begin seeking for a 5 = 4 equation to balance the 5 = 6. [. . .] We conclude with a final warning and clarification: Resort to mass sacrifice (as among the Aztecs, the Catholic Inquisition, and the Nazi death camps) is the device of those who are incapable of the true Rite of the Dying God.
(訳書表記では『リヴァイアサン襲来』(集英社)にての付録の部 370 ページより原文引用するところとして)「あらゆる秘術の公式と同じく、ここにも火の父、水の母、気の息子、地の娘がすべて含まれている。だが、読者が 5=6 の公式に釣り合わせるために 5=4 の公式を探しはじめたりしないよう、いまはこれ以上いわないでおこう。この項の最後は、次のように警告、明言してしめくりたい。(アステカ帝国、カトリック教会の異端審問、ナチスの殺人収容所に見られるような)集団的犠牲に訴えるのは、真の"死にゆく神の儀式"をおこなうことのできない者の方策である」(以上、引用部とする))

などとの表記もがなされている。

その点、原著に見る **5 = 4 equation to balance the 5 = 6**「[5 イコール 4 の式]と[5 イコール 6 の式]とのバランス」との「相応の語感の」不自然なる表記にて[成り立たぬとの等号]に変えて+符号を充てることで導出できるのは「9」と「11」との数値であるとも指摘できてしまう —さらに述べれば、本稿の先だつての段では「『ジ・イルミナタス・トリロジー』小説作中ペンタゴン爆破時間が 911 との数値と結びつく側面もある」との指摘をもなしている—)。

振り返つての部はこれにて終える。

ここまでの振り返つての指摘に加えて述べられるところとして、

[911 の事件が起こることを前言しているが如き側面を有している (との根拠を本稿にて詳述してきた) 作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』]

の中にあつては

[正五角形 —[黄金比]の体現構造にして[五芒星]と相互内接関係を呈するとのことを先だつての段にて指し示もしてきた正五角形形状— が(古代アトランティス文明および現代アメリカにあつての)[退魔の象徴]たるペンタゴンとして言及されている] (: 出典(Source)紹介の部 38—2 を参照のこと。そこにて挙げた文献記載よりのくどくも繰り返しての原文引用をなせば、“魂を食らう別の銀河系のその奇怪なエネルギー体で自由を与えることにしたのだ。ヨグ・ソトートは、大陸南部の荒涼とした原野にあるアトランティスのペンタゴンに閉じ込められていた” (以上、邦訳版『イルミナティII 黄金の林檎』214 ページよりの「再度の」原文引用。オンライン上より確認できる原著英文テキスト

は The Illuminatus! Trilogy The Golden Apple にての “ He and his associates decide on a desperate expedient. unleashing the Ilogor Yog Sothoth. They will offer this unnatural soul-eating energy being from another universe its freedom in return for its help in destroying Gruad's movement. Yog Sothoth is imprisoned in the great Pentagon of Atlantis on a desolate moor in the southern part of the continent. ” といった部が該当部となる)

とのことが見受けられ、そうした小説のありようから離れて、[文献的事実]との兼ね合いで同文に容易に後追いできる史実との兼ね合いで述べれば、

[(小説作中にて「マンハッタン並列シンボルと結びつくペンタゴン爆破」と関連付けさせられている「退魔の象徴」とすれば、歴年、洋の東西でそれは五角形ではなく五角形と相互外接内接関係を呈する[五芒星]の方となっていた] (:先に指し示してきたところの $\alpha 6$ および β の出典となる場所で解説している。すなわち、[西洋にての五芒星の退魔の象徴としての使用]についてはゲーテ『ファウスト』や近世刊行の魔術書が近代版として出版されたもの(神秘主義者の類、要するに、[相応の類]が愛読するような愚書悪書の類のグリモア The Lesser Key of Solomon, Goetia)の文言記載を挙げての[出典(Source)紹介の部 72を包摂する解説部]にて解説、[東洋にての五芒星の退魔の象徴としての使用]を示す[魔除けとしてのセーマン紋様]については[出典(Source)紹介の部 74から出典(Source)紹介の部 75-3(2)を包摂する解説部]にて解説している)

とのこと「がありもする(※)。

(※出典(Source)紹介の部 72にてなした **THE GOLDEN RATIO The story of Phi, the World's Most Astonishing Number**『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』(早川書房)p.240 から p.241 よりからの引用を繰り返さなければ、“ドイツの詩人・劇作家ゲーテ(一七三四～一八三二)は、間違いなく世界最高の文学の大家にかぞえられる。彼の全方面的な才能は、『ファウスト』——知識と力を欲しがる人間を象徴的に表現した作品——に結実している。ファウストは、博学なドイツ人医師で、知識や若さや魔力と引き換えに自分の魂を悪魔(メフィストフェレスとして擬人化されている)に売ってしまう。メフィストフェレスは、ファウストの部屋の敷居に五芒星形の「ドルイデンフス」(ケルトの魔術師の足)が描かれているのを見つけると、部屋から出られなくなる。ピタゴラス学派以来、(黄金比の定義をもたらした)五芒星がもつとされる魔力は、キリスト教でも別の象徴的な意味を生んでいた。五つの頂点が、イエスの名前の文字 JESUS を表すと考えられたのだ。そのため五芒星形は、悪魔が恐れるものと見なされるようになった。…(中略)…結局メフィストフェレスは、その抜け道——五芒星形に小さな隙間があること——を利用してうまく逃げ出す。もちろん、ゲーテは、『ファウスト』で黄金比の数学的概念に触れるつもりはなかったし、五芒星形を象徴的な意味で採り入れたにすぎない”(再度の引用部はここまでとする)

以上のことを顧慮することで何が述べられるのかと言え、である。次のようなことが申し述べられるようになっている。

異様な予見的側面を帯びているとの小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあっての[五芒星・五角形・黄金(比)と関わる側面]をまとめて表記すると以下のようになる。

→

『ジ・イルミナタス・トリロジー』

という作品は

[**【正五角形】**(作中、合衆国国防総省本庁舎ペンタゴンの象徴と明示されている)と**【黄金の林檎】**(ゴールデン・アップル)とを並列描写させて登場させている作品 ——そして、同じくもの点に関わるところとして、911の前言要素を帯びての作品——]

となっており、また、

[**正五角形**にまつわる封印が破られて、古代アトランティス(先述のように後の世にて正五角形を12枚重ねてできあがる正十二面体が**【第五元素】**と見なされるように至ったとの契機となった古典がプラトン古典『ティマイオス』となるわけだが、これまた先述のようにそちらプラトン古典『ティマイオス』にて言及されだすことで今日に至るまで幻の存在として物議を醸してきたのがアトランティスでもある)およびアメリカで人間の魂を食らう別の銀河に由来する魂を食らう異次元介入存在が解き放たれたとの粗筋を有している作品]

ともなっている。

他面、**正五角形**の封印が破られて悪しき存在が解き放たれるとの筋立ての表記小説 ——額面上は荒唐無稽小説にしか受け取られなかつた小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』—— の内容を想起させるように

[現実世界では**正五角形**と共に**【黄金比】**の体現存在となっており、**正五角形**と無限に続く相互内接・外接関係を呈するとの**【五芒星】**という図形的形状が**退魔・封魔の象徴**として歴年用いられてきた]

とのことがある。

さて、本稿をきちんと読まれているとの語るに値すると筆者が判じもしようとの向きらならば、次のことの連関性について気づけましょうか、とは思う。

第一。オウムガイ号ことノーチラス号でネモ船長のグループがアウトローとして活躍するとのジュール・ヴェルヌ著作『海底二万里』とゴールデン・サブマリンでハグバード・セリーンのグループがアウトローとして活躍するとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』は明示的に結びつけられている(後者の作中内で同作の粗筋が前者の影響を受けていることがはきと文中明示されている)とのことがある。にまつわって結節点となるのは**【黄金比ととかく結びつけられもする(そして、無限小への力学にも通ずる対数螺旋構造と現実には確として結びつく)オウムガイの名を関するノーチラス号】**と**【「ゴールデン」・サブマリン】**の明示的結びつけとの観点である。そこからして黄金比に関する言及をなしているとの側面が感じられる(**【ノーチラス】** ←→ **【黄金比体現の黄金螺旋構造と結びつくと言われてきた海洋生物】** にして **【無限小に至る力学と親和性高い対数螺旋構造を外殻構造を有する海洋生物】** というところがネックである)。

第二。「『ジ・イルミナタス・トリロジー』に見る **【正五角形(ペンタゴン)】**と**【黄金の林檎】**(**【ゴールデン】・アップル**)とを並置させてのシンボル]でもそれが描かれるとの**【正五角形】**は**【五芒星】**とワンセットになって**【黄金比】**の体現存在として数学史にあって(ピタゴラス学派やりようとの絡みで)意をなしてきたとされる図形である ——極一部の人間が把握しているところの一般論の問題として、である—— (先にて黄金比と科学の関係にまつわっての解説書籍より引用なしたとおりである)」

第三。「【正五角形】が【五芒星】とワンセットになって[黄金比]の体現存在となっていると」のことがある中で、[五芒星]は洋の東西で[退魔の象徴]となってきたとの背景がある。他面、(それが[五芒星]とワンセットになることで黄金比との関係性がさらにもって明確化する)[正五角形]をもつてして問題となる小説——『ジ・イルミナタス・トリロジー』——は[[五芒星]に代えての退魔の象徴]として用いていると「のことがある。そして、その[正五角形](レギュラー・ペンタゴン)が問題となる小説——(黄金比を体現しての存在との俗説がある(ただし、**出典(Source)紹介の部 78(2)**)にて言及しているようにそれが真実とは限らない)とのノーチラスことオウムガイの名を冠する『海底二万里』ネモ船長のノーチラス号よろしくの「黄金の」潜水艦を駆る男が主人公の小説である『ジ・イルミナタス・トリロジー』)——で「黄金の」林檎と並置されるとの式で図示までされて何度も描写されていると「のことがある。要するに、である。【はなから(退魔の象徴である)五芒星】と【五角形】との関係について意識していると——五芒星と五角形の役割変換をなしもしている中で——臭わせ、かつもつて、それを「黄金の」林檎と作中にて頻繁に結びつけることで【五芒星・五角形が一体となってあわせてそちらに向かうとの「黄金」比との際立つとの関係性】について示唆していると受け取れるようになっている」

以上の第一から第三の関係性より

【【ノーチラス】に関わる黄金比の問題・対数螺旋の構造の問題】(換言すれば、ノーチラス号と対応付けさせられている黄金色の潜水艦が登場してくる小説が【911の予見描写】とも関わるところで黄金比そして対数螺旋構造に相通ずるようになっているとの問題)

を想起しないのは——既述のようにノーチラスに黄金螺旋構造が表出しているというのは都市伝説、アーバン・レジェンドの類と見られるような傾向があるわけだが——「甘すぎる」と申し述べたいところである。

(:その点もつてして上の如き話が、である。カール・セーガンという著名な科学者「兼」作家の手になる小説作品『コンタクト』(原著1985年初出)を引き合いにして訴求なさねばならぬところであると手前が結論付けている、

【正十二面体構造と結びつくカー・ブラックホール・ゲート】

というものに関わるところにあつて

「[黄金比と結びつくとされるカー・ブラックホール]が[(アトランティス伝承紹介古典でも有名な)プラトン古典『ティマイオス』に認められる(黄金比を全身で体現するものにして第五元素「的なる」位置付けの)正十二面体]と特定の文物らを介して結びつき、そのことが問題となると「のことがある」

との伝で本稿の後の内容に通ずるようになっているとも申し述べておく)

[Hagbard's "golden" submarine, Leif Erickson]
of The Illuminatus! Trilogy

visit

connected

the ruin of Atlantis under the sea

[Nemo's submarine, Nautilus]
of Twenty Thousand Leagues Under the Sea

visit

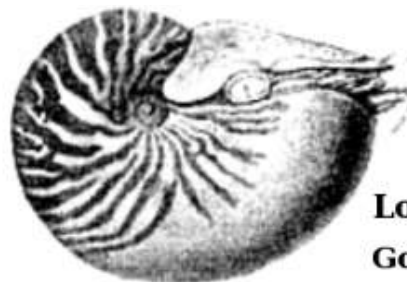
(quote)

"Hagbard, undoubtedly, had chosen this meeting place just because he liked the decor. Crazy bastard thinks he's Captain Nemo. Still: we've got to deal with him." — Illuminatus! Trilogy The Eye In The Pyramid

(Although The Illuminatus! Trilogy series seem to be no more than elaborated burlesques, it is possible to point out the series had characteristics as 911 foretelling works!)

ここまでにて姐上にあげている一次資料となる書籍それものに何が記載されているかの「文献的事実」の問題 (philological truthの問題)として原文引用なしながら指し示してきたように『ジ・イルミナタス・トリロジー』と『海底二万里』に登場する潜水艦らは相互に対応付けさせられていると指摘できる。第一。双方共にアトランティス遺構を探索した反体制アウトローの母艦となっている潜水艦であるとのことがある。第二。片方(『ジ・イルミナタス・トリロジー』の方)にてもう片方(『海底二万里』)の意識的模倣をなしていると言及が作中にてなされているとのこともある(オンライン上より確認可能な原著引用文の通り)。

その点、「問題となることには、」ここにて姐上にて挙げている作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』シリーズの方が「荒唐無稽喜劇小説」のように見えて、その実、性質の悪い「九一一の事件が発生することまつわる「多重的」予告小説」としての側面を帯びているとのことを指摘可能となっているとのこと「も」ある(：その不可解性につき「機序」との兼ね合いでいかに説明できるのかとの話は置いておいても取りあえず「現象」に着目してそう述べられるようになっている)。



Nautilus

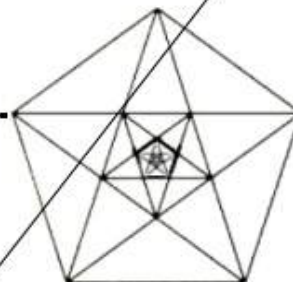
Logarithmic spiral

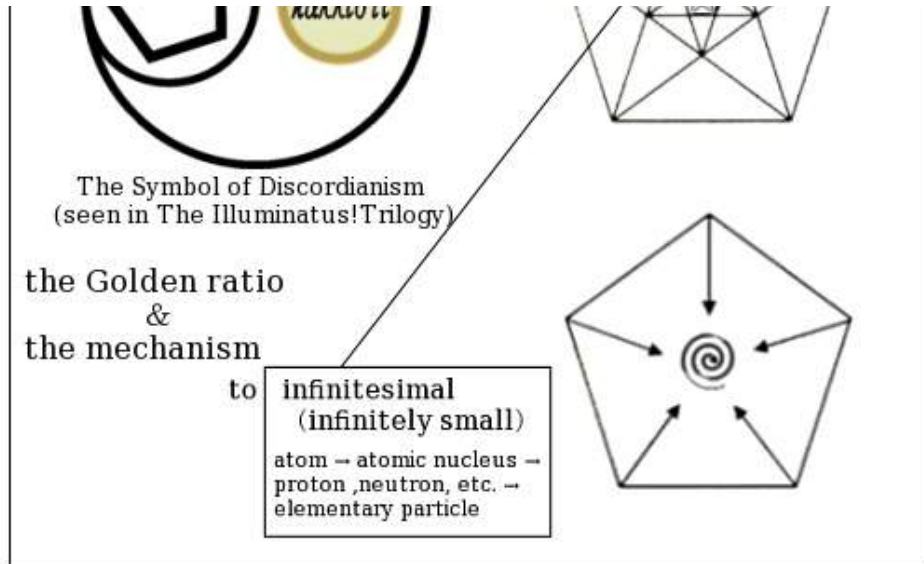
Golden spiral

(Setting for the novel) Hagbard = a member of Discordians



The Symbol of Discordianism
(seen in The Illuminatus! Trilogy)





小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』レイフ・エリクソン号 および 小説『海底二万里』ノーチラス号には小説作品内それ自体で明言されているような明示的接合関係が存在するのであるが、うち、ノーチラス号のノーチラスはオウムガイの意となり、そのオウムガイ、対数螺旋構造と結びつくのことを本稿ここまでの段にて細かくも解説してきた存在である。その対数螺旋構造(うち、甚だしくは黄金螺旋構造)は黄金比と親和性高いものであり、また、無限小の領域への力学を体現する構造でもある。他面、ノーチラス号と結びつけられているレイフ・エリクソン号の方の艦長、911の前言事象と「奇怪極まりないことに」結びついていると述べられてしまう作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』の主演級の人物ハグバード・セリーンはディスゴルディア運動闘士とのフィクション設定が付与されているキャラクターだが、そこに見るディスゴルディア運動の(当該フィクションの中でも何度も図示されて登場してくる)シンボルは
 [[黄金の林檎] と [(黄金螺旋と同様に) 黄金比の体現物となり無限小の力学と結びつく五角形] を並置させてのもの]
 であるとの「極めて独特なもの」となっているとのことがある。
 ここで論点はそうしたことまでもが指摘可能となってしまうとのことが [偶然の一致] の問題で済むか、それで済まないのならば、その背景に介在している [恣意] の発するところの [意図] が奈辺にあるか、ということである。

ここまでにてその委細につき指し示しをなしてきたとの、

[**【黄金比】【黄金比体現の無限小への力学と結びつく五角形】**に関わるところでの『海底二万里』(潜水艦ノーチラス号を駆ってのネモ船長を描く冒険小説／海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品) と『ジ・イルミナタス・トリロジー』(黄金の潜水艦を駆ってのハグバード・セリーンを描く小説／海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品) とのつながりあい]

については以下、再掲することとした $\alpha 1$ から $\alpha 7$ のことら(すべて[容易に裏取りできる]とのかたちにて典拠を密に指し示してきたことら)との連結関係が観念されるところ「とも」になっている。

(直近まで指し示しをなしてきたこととの連結関係を続いて摘示していく所存であるとの $\alpha 1$ から $\alpha 7$ の内容の再掲を以下、なすとして)

α . (金星にまつわる会合周期にあつて具現化するとの指摘もなされてきた) [五芒星相似形] を [ブラックホール絡みの話] と接合させるような奇怪なることらがある。すなわち、次のようなことら ($\alpha 1$ から $\alpha 8$) がある。

$\alpha 1$. 地球と金星と太陽の内合 (インフェリアー・コンジャンクション) 時に

あつての天体座標を結んで出来上がるとのことがよくも取り上げられるとの
[五芒星]は[五角形]と結びつく図形でもある。[(ほぼ正確な)「五芒星」が
描写される局面]というのは[(ほぼ正確な)「正五角形」に近しきものが内に
て形成される局面]であるとも述べられる。どういふことか。[(正確な)五芒
星]というものは「正五角形」に内接される図形として描けるものであり、「正
確な五芒星の各点」を構成する五点というのが正五角形の各点にそのまま
に対応することになるとのことがあるのである。

α2. 正五角形、英語に直せば、「レギュラー・ペンタゴン」との特質を持
つのがアメリカの国防総省の本部庁舎である。そのペンタゴンの広場は先
の911の事件の起こる前から「ワールド・トレード・センターの跡地」がそう述
べられるようになったのと同じ言葉で呼び慣わされていた、「グラウンド・ゼ
ロ」との言葉でもって呼び慣わされていた。

α3. グラウンド・ゼロという言葉は911の事件が発生する前からペンタ
ゴンの広場と歴史的に結びつけられてきたとの沿革がある(上の **α2** にて言
及)のだが、そちらグラウンド・ゼロという言葉、かの911の事件が起こる
「前」から「使用局面が際立って限られていた特殊用語」として存在してい
た同語を「ブラックホール」と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が
存在しており、その書籍、「不可解極まりない911の予見的言及とも関わ
る」とのことを本稿の先だつての段で先述なしてきたとの書籍でもある
ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』
となる。

同著『異端の数ゼロ』序盤部にては「五角形と五芒星の相互に「無限に」
外接・内接しあう関係性」のことが「最小の単位(無限小)に向かう力学」を
指し示すようなものとして取り上げられているとのことがあるのである(α1の
出典とも重なるところとなる)。

さて、そのように問題となる —「どうしてそういうことが？」の問題はともか
くにももの911の異様な先覚的言及をなしているとの式で問題となる— 書
籍で取り上げられている「五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接し
あう関係性」にて「も」表象される「最小の単位(無限小)に向かう力学」は言
い換えれば、「原子核の領域に向かう力学」、さらに述べれば、
「原子核を構成する陽子や中性子の領域、そして、陽子を複合して構成す
るクォークのようなより極微の素粒子の世界に向かう力学」
のことを想起させるものでもある。

何故か。

原子のなかで原子核の占める割合はおそらく小さい、そのような原子
核を構成するのが中性子や陽子であるといったかたちで(小さきことをひた
すらに突き詰めていった際の)極小の世界というものは展開しているからで
ある。「五角形(ペンタゴン)および五芒星の両者の図形的特性」のことを
知っていれば、自然に想起されるのが「最も小さな極小の世界へ向けての
力学」であり、それは換言すれば、「素粒子物理学などが領分とする極小の
世界へ向けての力学」であると言い換えられるようなところがあるのである。

そして、そうした限りなくものゼロ・スケールに向かつて展開する極微の世
界の領域の研究(たとえばヒッグス粒子や超対称性粒子なぞと命名されて
のものを発見に血道をあげるとの「研究」)を声高に唱道、「原子核を壊す
中での膨大なエネルギー」(と述べても極微領域に集中しているからこそ

膨大なエネルギー)で「ブラックホール」さえもが生成される可能性が取り沙汰されているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まったの LHC 実験であると言われている。

α4. ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』との書籍は 911 の事件が起こる「前」から特異な言葉であるとのグラウンド・ゼロという言葉がブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍、かつもって、不可解なる 911 の予見的言及とも関わっているとの書籍でもある(←**α3** で言及したことである)。そして、同著『異端のゼロ』は「五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性」と結びつくことに言及しているとの書籍でもある(←**α1** および **α3** にての出典にまつわるところでもある)。

そうした書籍で扱われる
[ゼロの世界][極小の世界]
に近しきところで(原子に比してその比率が恐ろしく小さいとの極小の存在たる)[原子核]を破壊しようとのことをなし、そこにて発生する膨大なエネルギーからブラックホールを生成しうるとのところにまで至ったのが LHC 実験であると「される」(←**α3** にて言及のことでもある)のだが、他面、[911 の事件]では何が起こったのか。[[正五角形]との形状を呈するとのペンタゴンが崩された]とのことが起こっている(←**α2** で合衆国国防総省庁舎たるペンタゴンが(正確な五芒星と無限に続く相互内接外接関係を呈するとの)[正五角形]であることを問題視している)。

以上のことより[次の関係性]が想起されもする。
[現実世界で 911 の事件が起こる「前」からアメリカ国防総省本部庁舎たるペンタゴン(正五角形)の広場と結びつけられてきたグラウンド・ゼロという特殊な言葉(←**α2**)] ⇔ [911 の事件が起こる前から「グラウンド・ゼロ」との特殊な言葉とセットとなっていた現実世界でのペンタゴン([正五角形]状の米国国防総省庁舎)の 911 にあつての部分崩壊] ⇔ [正五角形(合衆国国防総省庁舎ペンタゴンとの同一形状)の(911 にての)部分崩壊(**α3**)] ⇔ [911 の事件が起こる「前」から特殊用語として存在していた「グラウンド・ゼロ」という言葉がブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍であり(そして 911 の不可解なる予見事物とも通ずるようになっていた書籍ともなり) またなおかつもってして、五芒星と五角形(ペンタゴン)の間の無限に続く相互内接・外接関係によって表象されもする極小の世界へ向かう力学に言及している著作ともなる ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』という著作の内容] ⇔ [無限小に至る方向性での中での破壊挙動、原子核を壊す中での膨大なエネルギー発現状況でもってブラックホールを作り出しうると言われるに至っている LHC 実験を想起(**α3**)]。

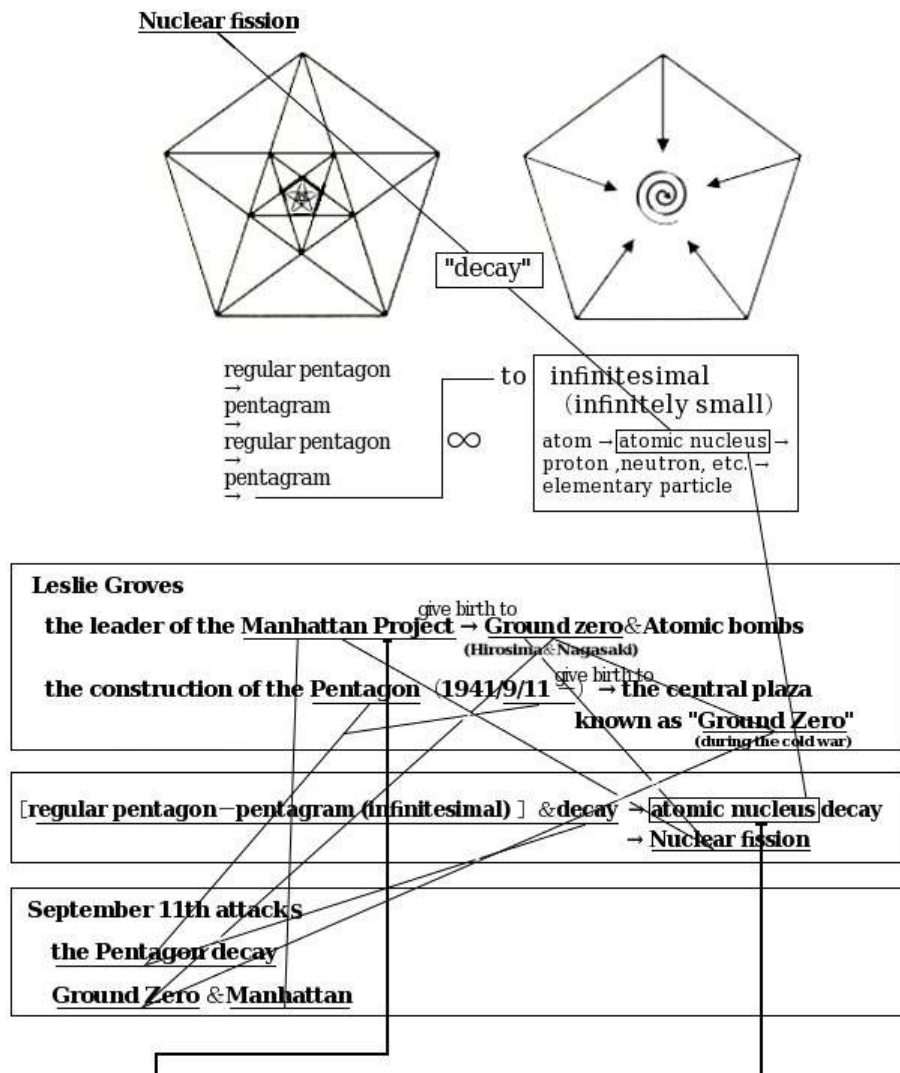
以上のような⇔で結んでの関係性については『何を述べているか理解しがたい』と受け取られるか、あるいは、『穿ち過ぎ(考えすぎ)である』と思われるところか、とも思う。それゆえ、そうした物言いがなせてしまう「他の」事情があることにつき続く段で「補いながらもの」表記をなす。

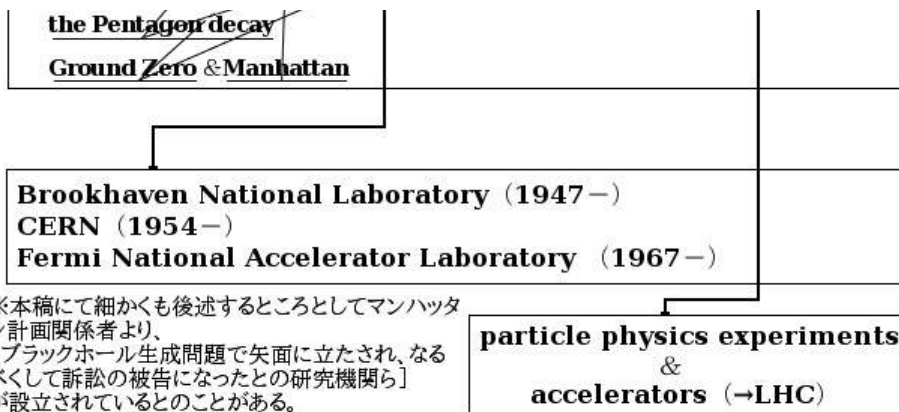
α5. [グラウンド・ゼロ]という言葉 —(本来、[広島・長崎の爆心地]を

指すべくも考案された特別な言葉であり、また、冷戦期、核戦争の標的たる
 ところと結びつけられるに至った言葉である) — と[911]の事件の発生前
 から結びつけられていた[ペンタゴン](アメリカ国防総省本庁舎)というのは
 レズリー・グローヴズという男(往時、米国陸軍工兵隊大佐)を責任者にして
 1941年「9月11日に」建設が開始されたとの建物である。

そちらペンタゴンの建設計画を指揮していたレズリー・グローヴズという男
 が「ペンタゴン建造中に」大佐から准将に昇進、主導することになったのが
 「マンハッタン計画」となっており、同「マンハッタン計画」で実現・現出を見
 たのが「原子爆弾」と「広島・長崎への原子爆弾の投下」(「グラウンド・ゼロ」
 との言葉がはじめて用いられるようになった爆心地を現出させた挙動との
 意味合いで本稿の先の段でも取り上げていた原爆投下)となる。

そこに見る「原子爆弾」というのは「極小領域たる原子核のレベルでの崩
 壊現象、「核分裂反応」によって実現を見た兵器」でもある (：1941年9月
 11日から建設開始(着工)を見ていた[ペンタゴン]の建設計画を指揮して
 いた男レズリー・グローヴズが[マンハッタン計画]の責任者でもあったわけ
 であるが、[マンハッタン計画]というのはそも、[極小の領域、原子核のレ
 ベルでの崩壊現象が原子爆弾を実現ならしめること]が着想されて開始さ
 れた計画である。「原子核レベルでの崩壊現象を利用した核兵器開発」
 と「ペンタゴン」が結びつく、そう、「五芒星形と五角形(ペンタゴン)が無
 限に相互に内接・外接しあいながら無限小へ至る方向(原子核や素粒子の
 世界へ至る方向)を指し示すもの」であることを想起させるように結びつく
 のことが歴史的沿革として存在していることが問題となる)。





※本稿にて細かくも後述するところとしてマンハッタン計画関係者より、
 [ブラックホール生成問題で矢面に立たされ、なるべくして訴訟の被告になったとの研究機関ら]が設立されているとのことがある。
 また、マンハッタン計画にてその成果が利用されていたころの原子核領域の破壊作用は加速器「実験」(ブラックホールを生成するとされるに至った挙動)の基本となるところでもある。

$\alpha 6$. 金星の内合ポイントにてその近似物が具現化するとその五芒星は史的に見て[退魔の象徴]とされてきたとの経緯があるものである。

さて、その[退魔の象徴としての五芒星]と結びつくような[退魔の象徴物としてのペンタゴン(アメリカ国防総省本庁舎)]が爆破されて「異次元から」干渉する外側の銀河由来の妖怪が解き放たれるとの「荒唐無稽小説」が世に出ている。それが本稿の先の段で「911の「奇怪なる」予見的言及をなしている」との要素を同作が多重的に帯びていることにつき仔細に解説してきた70年代欧米でヒットを見たとの小説作品、『ジ・イルミナタス・トリロジー』である。

につき、
 [退魔の象徴としての五芒星と結びつくが如き退魔の象徴としてのペンタゴンの崩壊、および、911の事件の発生(マンハッタンとペンタゴンが同時攻撃されたとの事件)を前言しているが如くの奇怪なる文物]などとのものより想起されるのは 一繰り返しになるも 一 次のようなこととなる。

⇒[直近にて言及の書籍『異端の数ゼロ』に特性として認められるとの[五角形(ペンタゴン)と五芒星の内接関係を無限小に至る機序として呈示するとのやりよう]・[グラウンド・ゼロという言葉が911の事件が発生する前からブラックホールと結び付けているとのやりよう]・[不可解なる911の予見的言及と関わりもするとの側面]]←→(関係性の想起)←→[ペンタゴン(1941年「9月11日」に建造開始の国防総省庁舎)の建設計画を主導した軍人が同様に主導して[原爆]と[グラウンド・ゼロという言葉]を具現化させることになった[無限小に至る力学(五角形と五芒星が相互に無限に内接・外接されるかたちで表象される力学)の過程での原子核崩壊作用]を利用しての[マンハッタン計画]に見るありよう]。

$\alpha 7$. 会合周期(具体的に述べれば、8年単位で現出する5回の地球との周期的内合関係)でもって[五芒星]を描くとされる存在が金星となることを先述した。また、同文に金星が悪魔の王ルシファーと欧州にて歴史的に結びつけられてきた星であることも先述した。

さて、歴史的に惑星金星と結びつけられてきたとの悪魔の王ルシファーとのつながりで述べれば、ダンテ『地獄篇』にもミルトン『失樂園』にも[ルシファーと結びついた罪の領域]にあって[今日的な観点で見てのブラック

ホールの近似物]が多重的に具現化していると申し述べられるようになって
いること、解説をなしてきたのが本稿である。

以上再掲したところの $\alpha 1$ から $\alpha 7$ と、そして、ここまでなしてきたとの話、すなわち、

[[**黄金比**][**黄金比体现の無限小への力学と結びつく五角形**]]に関わるところでの『**海底二万里**』(潜水艦ノーチラス号を駆ってのネモ船長を描く冒険小説/海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品)と『**ジ・イルミナタス・トリロジー**』(黄金の潜水艦を駆ってのハグバード・セリーンを描く小説/海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品)とのつながりあい]

がいかにどのように結びつくというのか。下にて指摘していく。

まずもって、 $\alpha 1$ (と振ってのこと)との兼ね合いでは

[**黄金比と結びつく五芒星**]

を巡る関係性のことが問題となる(五芒星が金星の会合周期と結びつけられているとの経緯があり、また、金星がルシファーと結びつくようなことがある中で、である)。

次いで、 $\alpha 2$ (と振ってのこと)との兼ね合いでは

[**911の事件**]で崩された[**黄金比体现の正五角形構造**]体现のペンタゴン]

を巡る関係性のことが問題となる(：先だってその点について申し述べているように国防総省ペンタゴンが[ニューヨークとペンタゴンが同時に攻撃された911の事件]の発生にてニューヨークに現出した[グラウンド・ゼロの地]を想起させるように[911前から]グラウンド・ゼロと結びつけられていたことがポイントとなる中で、である)。

$\alpha 3$ 、 $\alpha 4$ 、 $\alpha 5$ (と振ってのことら)との兼ね合いでは

(各々、多少、長くなるが、下線を引いての箇所を中心にしての対応関係に着目いただきたいところとして)

[元来、[(原子爆弾)投下爆心地]と[**ペンタゴン(正五角形構造の国防総省庁舎)の区画**]]を指していた(そして後に911の発生の後にてツインタワーの崩壊地のこと「をも」指すようになった)[**グラウンド・ゼロ**]というその特殊な言葉が(911の発生前より)[**五芒星と五角形の無限に続く黄金比体现の繋がり合いのこと**][にも]言及している**特定著作**]]内で「不自然に」[ブラックホール]と結び付けられているとの経緯がありもする(：**ZERO: The Biography of a Dangerous Idea**『**異端の数ゼロ**』(早川書房ハードカバー版)にあっては(その240ページよりの「再度の」引用をなすとして)ゼロは、物理法則を揺るがすほど強力である。この世界を記述する方程式が意味をなさなくなるのは、**ビッグバンのゼロ時であり、ブラックホールのグラウンド・ゼロだ**。しかし、ゼロは無視できない。ゼロは私たちの存在の秘密を握っているばかりでなく、宇宙の終りの原因にもなるのだ(再度の引用部はここまでとする)との記載がなされている——2000年に世に出た原著ではその最終章 **Chapter Infinity: Zero's Final Victory: End Time** に先立つ **Chapter 8: Zero Hour at Ground Zero: Zero at the Edge of Space and Time** に認められる、“Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. **It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense.** However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence, it will also be responsible

for the end of the universe.”との記載がなされている——との経緯がありもする。そして、当該書籍『異端の数ゼロ』に関しては[五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性]のことが[最小の単位(無限小)に向かう黄金比を体現しての力学]を指し示すようなものとして取り上げられているとのことがあり、かつ、他の濃厚なる接合性を呈している別著作(同じくものイラストレーターの挿絵を挙げながら同じくもの特異なる思考実験(通過可能なワームホールにまつわる思考実験)のことを扱っているとのことで濃厚に接合性を呈しているとの別著作)である **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の内容を複合顧慮すると[911の先覚的言及文物]となるとのこと、詳述してきたとの著作となりもする)

【**五角形と五芒星の無限に続く相互内接関係**】(そこよりの引用をなした書籍『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』にあってはピタゴラス学派が突きつけたとの**黄金比**の体現とされる構図)

および

【**黄金比と結びつくペンタゴン**(グラウンド・ゼロと冷戦期から従前から呼び慣わされていた場を含むことも先述の米国国防総省庁舎)の**911の事件** —ニューヨークはマンハッタンの方にあつてグラウンド・ゼロを現出させた事件— にあつての崩壊】

の双方に着目することで

【(五芒星と正五角形の無限に相互内接関係がそちらへと向かうとも表せられること、先述の)[極小の領域]に接合する原子核の領域の崩壊機序を利用してのものである原子爆弾開発挙動が1941年「9月11日」に遡る**ペンタゴン建設計画**を主導した男でもあつた**レズリー・グローヴス**が同様に主導していたマンハッタン計画であつたとのこと】

および

【**原子核崩壊(極小領域での破壊的作用)**と密接に関わる**ビッグバン直後の状況の再現**を目指しての**粒子加速器実験**([ビッグバン]直後の状況の再現をなす——本稿出典(Source)紹介の部24にてなした『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』(早川書房)24ページよりの再度の引用を再度なせば、LHC内部での陽子衝突により解放される凄まじい量の高密度エネルギーは、科学を未踏の新たなレベル、我々の宇宙ではビッグバン直後以来観測されたことのない高エネルギーの領域へと推し進めてくれる。そのような形で大型ハドロンコライダーは我々を百数十億年昔に連れていき、誕生直後の灼熱の宇宙を満たしていた状態を見せつけてくれる(引用部はここまでとする)——との**LHC実験**はブラックホール生成挙動たる可能性もあるとされている。また、ブラックホールについては**ZERO: The Biography of a Dangerous Idea**『異端の数ゼロ』にて(くどくもの再引用をなすとして)ゼロは、物理法則を揺るがすほど強力である。この世界を記述する方程式が意味をなさなくなるのは、ビッグバンのゼロ時であり、ブラックホールのグラウンド・ゼロだ。しかし、ゼロは無視できない。ゼロは私たちの存在の秘密を握っているばかりでなく、宇宙の終りの原因にもなるのだ(引用部終端)と表記されているとのもので「も」あるのこと】

を巡る関係性のことが想起される]

との点らが問題になる(につき、何度も何度も申し述べるが、ここ本段にて黄金比との兼ね合いでの『海底二万里』との関係を示さんとしている『ジ・イルミナタス・トリロジー』が[ニューヨークのビル爆破やペンタゴンの崩壊などにつき言及している際立っての911の事件の発生を多重的に予告しているが如き小説作品]にして[黄金の林檎と五角形の並置につながるところで黄金比と結びつく側面がある小説作品]であることを本稿では問題視してきたから以上の関係性が意をなすのである)。

α6との兼ね合いでは

[[歴史的に[退魔の象徴]と看做されてきた五芒星]と[[退魔の象徴]としてのペンタゴン(五芒星と密接に内接関係で無限に切っても切れない関係にある黄金比体現存在)が崩壊するとの粗筋の911の前言をなしているが如き小説](ノーチラス号と対応するゴールデン・サブマリンを登場させている『ジ・イルミナタス・トリロジー』)との間に横たわるつながりが(同文に)あるとのこと]

を巡る関係性のことが問題になる。

a7との兼ね合いでは

[[**五芒星**]と会合周期より接合する金星の別名[明けの明星]の体現存在と歴年看做されてきたルシファーが古典上で登場するくだりが現代的観点で見た場合のブラックホール理解に通ずるものを登場させているとのこと]

を巡る関係性のことが[黄金比とカー・ブラックホールの指摘されるところのつながりあい](理論としての適否はともかくもLHC実験でその種類のブラックホールが生成される可能性があるとして学者らに論じられてきたとのこと、本稿の**出典(Source)紹介の部76(3)**にて言及のカー・ブラックホールと黄金比のつながりあい)の絡みで問題になる。

以上が

[[**黄金比**][**黄金比体現の無限小への力学と結びつく五角形**]]に関わるところでの『海底二万里』(潜水艦ノーチラス号を駆ってのネモ船長を描く冒険小説/海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品)と『ジ・イルミナタス・トリロジー』(黄金の潜水艦を駆ってのハグバード・セリーンを描く小説/海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品)とのつながりあい]

と**a1**から**a7**との間に横たわる関係性である(問題はそうした関係性がそれ単体で成り立つものだけではなく他の文物—これより解説するところの他の文物—と相俟って【異様かつ執拗なるブラックホール人為生成にまつわる粗筋設定および寓意性】と「濃厚に」結びつくことなのではあるが、その点についてはこれより詳述をなす)。

さて、ここまで申し述べもしたことを受けもして、である。

次いで、

(直近にて**a1**から**a7**とそれらとの関係性につき摘示してきたとの)

[[**黄金比**][**黄金比体現の無限小への力学と結びつく五角形**]]に関わるところでの『海底二万里』(潜水艦ノーチラス号を駆ってのネモ船長を描く冒険小説/海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品)と『ジ・イルミナタス・トリロジー』(黄金の潜水艦を駆ってのハグバード・セリーンを描く小説/海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品)とのつながりあい]

から

[[**黄金比と結びつくカー・ブラックホール**]](**a8**[[**五芒星**]]は[黄金比]と際立って結びつく図形でもある。そこに見る[黄金比]と[ブラックホール]が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある]とのことを押し広げていった先にあることとしてそちらにつき問題視すると先述なしていたとのカー・ブラックホール)が[(アトランティス伝承紹介古典でも有名な)プラトン古典『ティマイオス』に認められる(黄金比を全身で体

現するものにして第五元素「的なる」位置付けの)正十二面体]と特定の文物らを介して結びつき、そのことが問題となるとのことがある](先だってよりそのことを「これより問題視する所存である」と申し述べてきたところ、だがもってして、現段階では解説どころか内容についてすら言及未了であるとの点でもある)

とのことに至るまでの全てを

【結節点たるブラックホール】

との兼ね合いで「極めて多重的・多層的に」連関させて結びつけるだけのことがある——そして、そこでは[際立っての恣意性]、要するに、[計算尽くでのわざとのやりよう]が強くも問題になりもする——。

とのことにまつわる指し示しを[a]から[f]と振ってなしていくこととする。

(事前に断っておくが、以降、[a]から[f]と振って取り沙汰していくとのことはそれぞれ各段([a]から[f]の各段)からして非常に長くなる、ともすれば、内容を見失いかねないといった程に長くもなるとのことがあるので、その点、留意していただきたい次第である)

[a].

プラトン古典『ティマイオス』に際立っての言及がなされているアトランティスについては

【LHC 実験(によるブラックホール生成挙動ともされる行為)】

ともつながるものとなっているとのことを本稿の先立っての段で指摘していた。

その点につき、まずもって直下、振り返りをなしておくこととする。

(以下、本稿にての **出典(Source) 紹介の部 35** にあつての摘示事項を振り返るとして)

LHC 実験にあつての ATLAS 検出器にあつては[ATLANTIS]との[イベント・ディスプレイ・ツール]が用いられている。

同じくものことについては

[LHC 実験関係者の手になるオンライン上に流通を見ている PDF 論稿—— Visualizing Data from the LHC with the Atlantis Event Display Program と題されての論稿——] (コロンビア大学付属の研究施設 Nevis Laboratories のウェブ媒体、nevis.columbia.edu とのドメイン付されての媒体にて公開されている PDF 論稿で Joshua Auriemma というコロンビア大学所属の向きによつてもものされているとの論稿)

の冒頭部にあつて、(以下、再度の原文引用をなすところとして)、

When events are properly flagged, **the ATLANTIS program will provide extremely convincing evidence** as to the validity of those flags.「(LHC にて発生を見た) イベントが適正にフラグと対応付けられれば、アトランティスプロ

グラムは極めて確信の行くものであるとのそれらフラグの適正さを示す証拠を呈示してくれるだろう」

と記されているように **ATLANTIS** プログラム(と命名されてのイベント・ディスプレイ・ウェア)が **LHC** 実験におけるイベントを正確に測定するためのツールとして用いられているわけだが、同プログラムによって生成ブラックホールが観測されうる「とも」されてきたとの従前経緯がある。

たとえば、Victor Lendermann というドイツの物理学者(ユニヴェルジテート・ハイデルベルク Universität Heidelberg ことハイデルベルク大学に所属の物理学者)の手になる、**[アトラス実験グループの極微ブラックホール探索挙動について一言解説をなしているとのプレゼンテーション資料形式文書]**

となりもし、表題が

[Mini Black Holes in ATLAS]

となり、副題(とでもいうべきところ)が

[Physics at the Terascale]

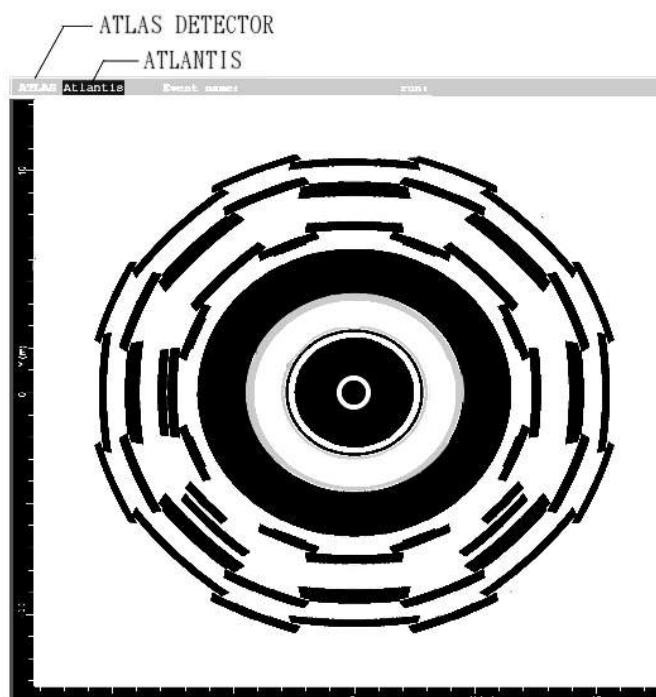
となるとの文書(表題と副題をグーグル検索エンジンで入力すれば、現行、文書特定およびダウンロードできるようになっているとの資料)の 17 と付されたページなどには **Black Hole Event@ATLAS**

などと表記され(直訳すれば、「ATLAS でお目見えするブラックホール生成挙動」などと表記され)、

[ブラックホールが生成された場合のアトランティス ATLANTIS のディスプレイ画面]

が掲載されている(ので疑わしきにあられてはそちら文書をダウンロードするなどして確認されるとよい)。

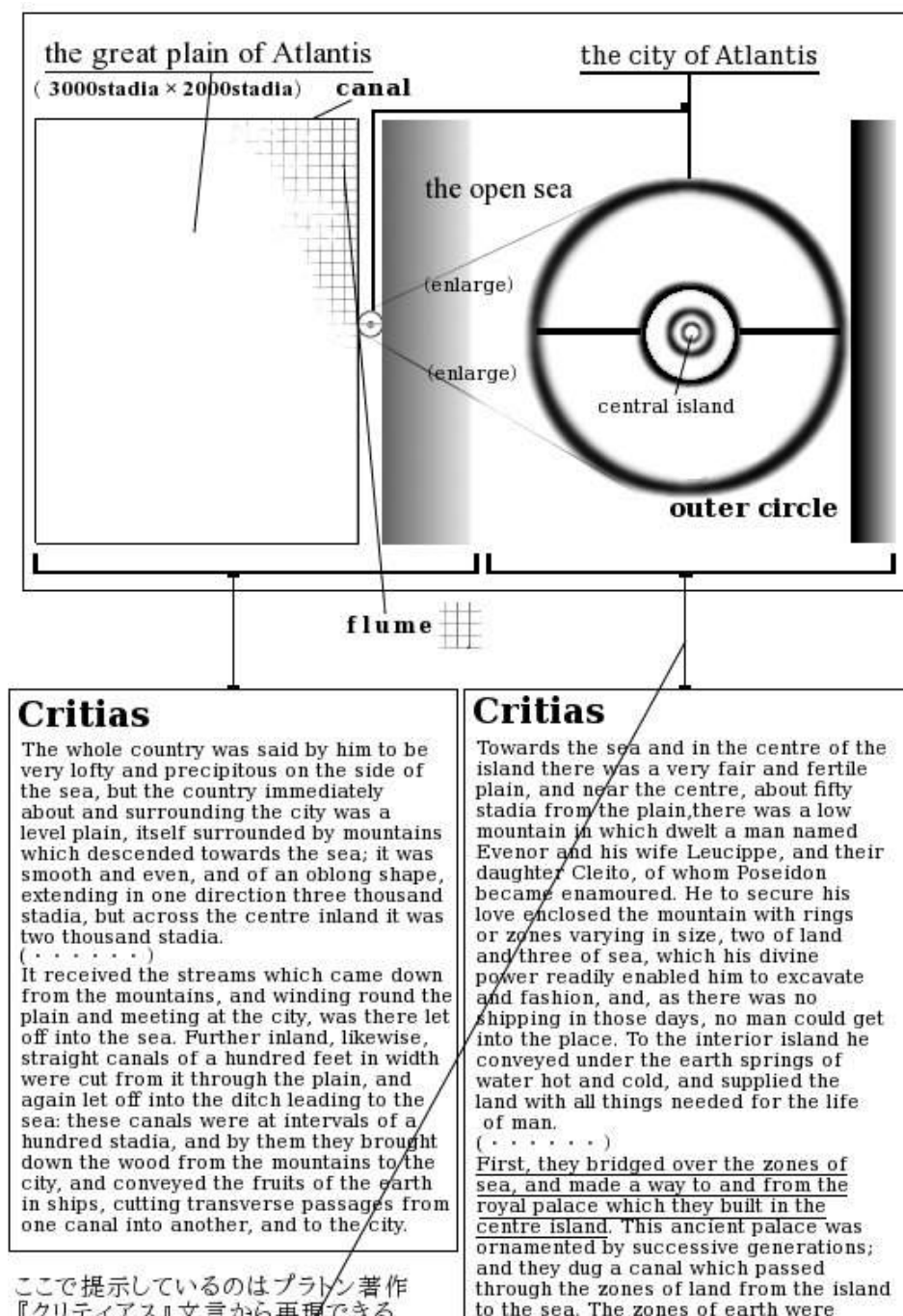
以上、振り返っての本稿既述事項の再表記をなしたところで直下、ブラックホール生成イベントを感知することにもなる銘打たれてきたアトランティスの管理画面の再現図の再掲をもなしておく。



またもってして述べておくが、本稿の従前の段(具体的には出典(Source)紹介の部47を包摂する段)では

[ブラックホール生成イベントが発生した場合、そちらイベントを映し出すとされるイベント・ディスプレイ・ウェアの ATLANTIS、そのイベント分析画面が「よくそこまでしたものだ」と(悪い意味で)感心させざるをえぬとのことに「(プラトン古典『ティマイオス』で海中に没したとされる)アトランティス王国首府の似姿」(プラトン古典『クリティアス』にみとめられるアトランティス構図)をなぞるが如きものとなっているとのことまでもがある]

とのことをも解説していたとのことがある。については下の図を参照いただければ、半面でもご理解いただけることか、とは思う。



were cut from it through the plain, and again let off into the ditch leading to the sea: these canals were at intervals of a hundred stadia, and by them they brought down the wood from the mountains to the city, and conveyed the fruits of the earth in ships, cutting transverse passages from one canal into another, and to the city.

water hot and cold, and supplied the land with all things needed for the life of man.

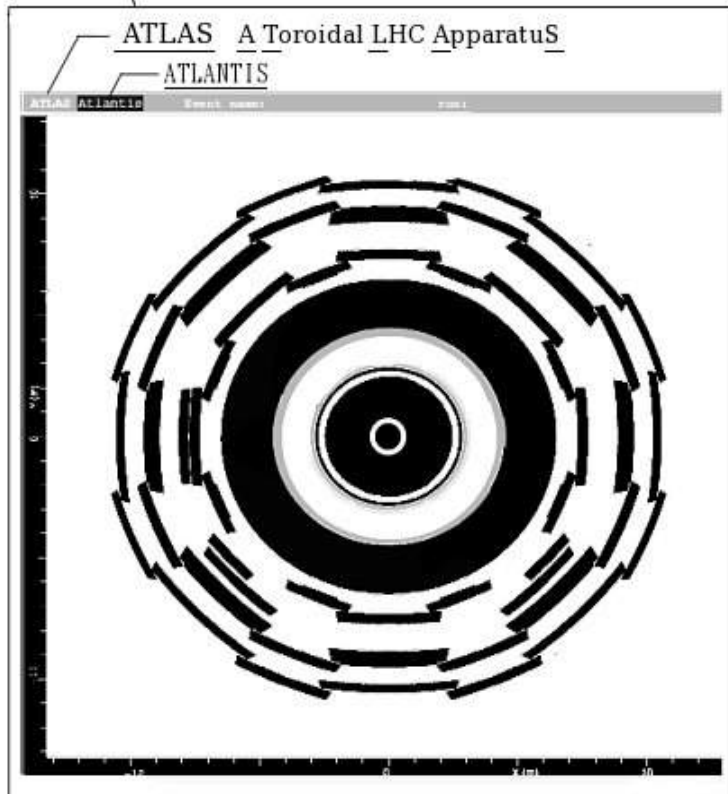
(.)

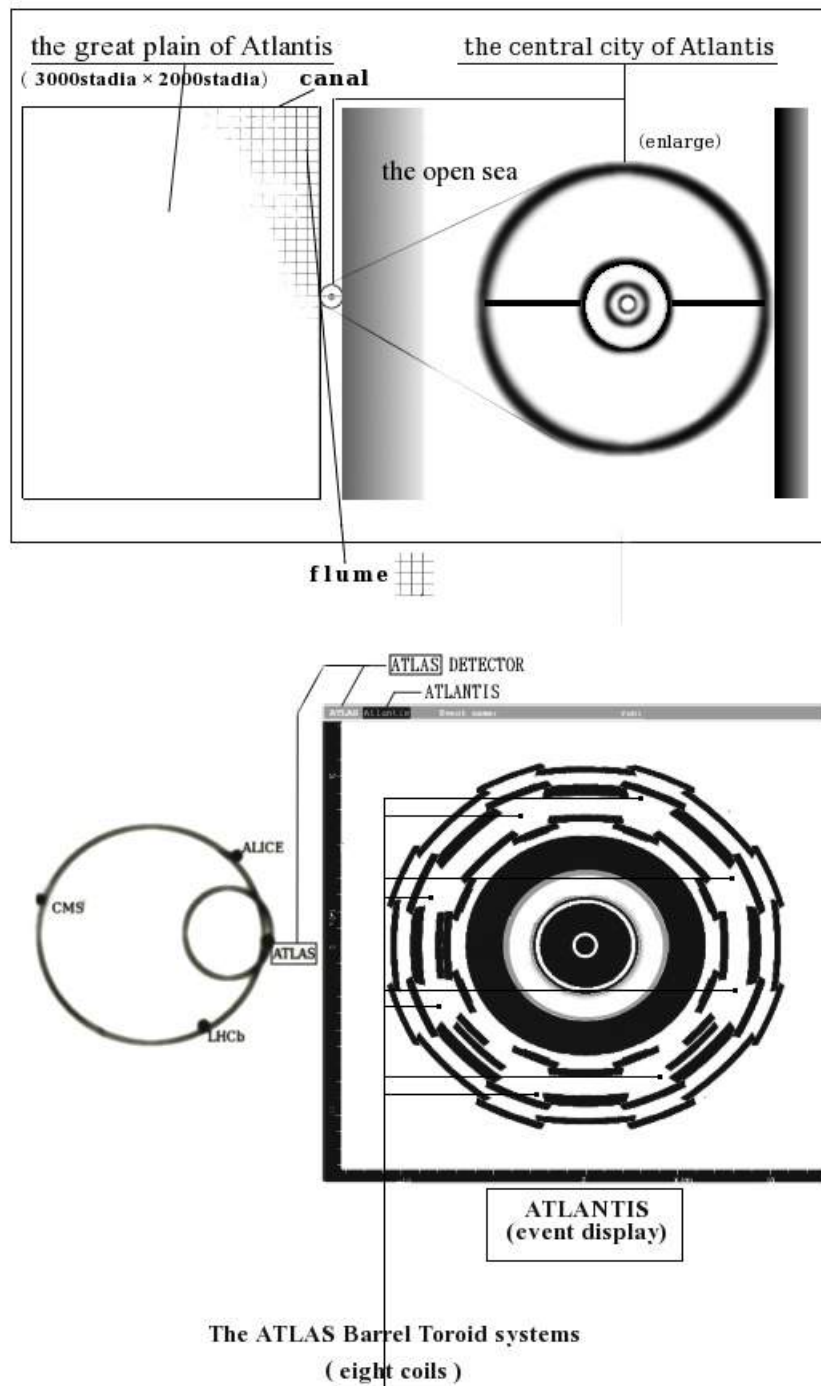
First, they bridged over the zones of sea, and made a way to and from the royal palace which they built in the centre island. This ancient palace was ornamented by successive generations; and they dug a canal which passed through the zones of land from the island to the sea. The zones of earth were surrounded by walls made of stone of divers colours, black and white and red, which they sometimes intermingled for the sake of ornament; and as they quarried they hollowed out beneath the edges of the zones double docks having roofs of rock. The outermost of the walls was coated with brass, the second with tin, and the third, which was the wall of the citadel, flashed with the red light of orichalcum. In the interior of the citadel was a holy temple, dedicated to Cleito and Poseidon, and surrounded by an enclosure of gold, and there was Poseidon's own temple, which was covered with silver, and the pinnacles with gold.

(.)

Also there were fountains of hot and cold water, and suitable buildings surrounding them, and trees, and there were baths both of the kings and of private individuals, and separate baths for women, and also for cattle. The water from the baths was carried to the grove of Poseidon, and by aqueducts over the bridges to the outer circles. And there were temples in the zones, and in the larger of the two there was a racecourse for horses, which ran all round the island. The guards were distributed in the zones according to the trust reposed in them; the most trusted of them were stationed in the citadel. The docks were full of triremes and stores. The land between the harbour and the sea was surrounded by a wall, and was crowded with dwellings, and the harbour and canal resounded with the din of human voices.

ここで提示しているのはプラトン著作『クリティアス』文言から再現できるところの「古の」アトランティス再現図——運河水路が長方形区画状に張り巡らされた平野部に近接して王城を兼ねての国家中枢部(中央島)を含む円形都市が何重もの内部外壁によって仕切られながら外海に面して存在していると語られるところのアトランティス似姿——であるが(：似たような図は国内から出版されている岩波書店刊『プラトン全集』に見る学者の作品紹介部にも図示されており、についてはその解説テキストを本稿にての[出典(Source)紹介の部47]でも該当ページ数挙げて解説部文言引用とのかたちで紹介している)、本稿ではそうしたアトランティスの似姿が下に呈示のLHCのEvent displayウエア「ATLANTIS」の管理画面、LHC実験関係者ら曰く「安全な」ブラックホール生成がなされれば、そこにてその観測がなされるとのATLANTISの管理画面([出典(Source)紹介の部35])と「実によくできている」とに相似形を呈していること、そのことの[意味性]について問題視している(たかだか実験関係者レベルの恣意でそういうことが具現化を見ているとのことで済むか否かという観点で、である)。





(ここまでを振り返っての表記部とする)

以上、振り返って見たようにアトランティス —— ブラックホール生成を感知しうるとされもしてきたイベント・ディスプレイ・ツール ATLANTIS —— と結びつくCERNのLHC実験では

[カー・ブラックホール]

といったものまでが生成されうるとのことが専門家特定論稿らにて取り上げられてきたとの従前経緯がある(※)。

(※[現時点でその申しようがいかように見られているのか]ということとは話が別だが、そして、その科学理論の適切さについては筆者をはじめ門外漢には判断なしようもないことだが、本稿にて arXiv 流布の論稿として紹介なしている

Extra dimensions in LHC via mini-black holes: effective Kerr-Newman braneworld effects

との論稿や

Black hole formation in the head-on collision of ultrarelativistic charges

といった論稿にあつてのオンライン上より全文後追いできるとの文言の引用でもってして[LHCにおけるカー・ブラックホール生成可能性]が過去にて取り上げられてきたとの従前経緯があることを指摘している(出典(Source)紹介の部76(3)を参照のこと。——尚、繰り返すが、問題となる論稿らが正しい正しくはないといったことは本稿の論点ではない。 “ **Whether those papers are right scientifically or not, it makes no difference. Those papers' contents themselves have little to do with the conclusion of my analysis.** ” ——)

加えて、カー・ブラックホールというものについては

[他空間との扉]

となりうるとの言及がなされてきたとのものにでもある(:当然にそちらからして本稿の従前の段で出典挙げつつも既述のことである。につき、先だつての出典(Source)紹介の部20で邦訳版『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』384ページより引用なしたところを繰り返せば、(再度の引用として)“ **カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。**…(中略)…現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう”(引用部はここまでとする ——尚、以上引用部に対応するオンライン上より確認できるところとの Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos にての原著表記は “ **The wormhole in the center of the Kerr ring may connect our universe to quite different universes or different points in the same universe.**[. . .] Currently, most physicists believe that a trip through a black hole would be fatal. However, our understanding of black hole physics is still in its infancy, and this conjecture has never been tested. Assume, for the sake of argument, that a trip through a black hole might be possible, especially a rotating Kerr black hole. Then any advanced civilization would give serious thought to probing the interior of black holes. ” となる——)といったことが述べられているとの背景がある)。

また、アトランティス(ブラックホール生成をも感知しうるとされるイベント・ディスプレイ・ツール名称)と結びつくLHCにあつて生成されうるとされてきたカー・ブラックホールについてはそれが

[空間を結びつける扉]

となると述べられているばかりではなく、

[黄金比]

と結びつくとの指摘もがなされている(出典(Source)紹介の部73/二類型の変化変転に[黄金比]の問題が強くも現れると計算されているとのことは先に既述のところである)。

以上のことらにつき振り返ったうえで、すなわち、

[LHC(のブラックホール生成挙動)はアトランティスと結びつけられている]

[LHCではカー・ブラックホールというものが生成されうるとの物理学者申しようがなされてきたとの経緯がある]

[カー・ブラックホールというものについては【異なる空間を結びつけるゲート】たりうるとの話が伴っている。また、カー・ブラックホールというものについては【黄金比】との結びつきが指摘されてきたとのことがある]

とのことらにつき振り返ったうえでここ[a]と振っての段にて主眼として問題視したいことを取り上げることとする（[a] から [f] と振って段階的に指し示しなしていくと先述した[結節点]となるところにつきここ[a]の部にての中心となるところを取り上げるところとする）。

さて、本稿の先立っての段でそれが

[アトランティスの存在と沈没に言及していることでも著名な古典となっている]

との解説をなしてきたとのプラトン古典『ティマイオス』——につき同文のところを扱ったウィキペディア [アトランティス]項目程度のものの記述を引けば、(以下、引用なすとして) “『ティマイオス』の冒頭でソクラテスが前日にソクラテスの家で開催した饗宴で語ったという理想国家論が要約されるが、その内容はプラトンの『国家』とほぼ対応している。そして、そのような理想国家がかつてアテナイに存在し、その敵対国家としてアトランティスの伝説が語られる ” (引用部はここまでとする)とされているようなことがある——、そちら『ティマイオス』にあつては

[全身で[黄金比]を体現しているとの[正十二面体]が[星天を造る元素]として言及されている —— (尚、[星天を造る元素]についてはプラトンの弟子にあたるアリストテレスに[第五元素]とみなされるに至ってもいる) ——]

との古典としての要素もが伴っていることを指摘しもしてきた。

そこに見る、

[第五元素「的なる」ものと結びつけられている、全身で[黄金比]を体現しているとの[正十二面体]]

が[「特定の」著名文物]にあつて、

[通過可能なワームホール概念の提唱、そして、通過可能なカー・ブラックホールと深くもつながっているもの]

にして、なおかつ、

[異常異様なる側面と深く、深くも結びついているもの]

となっているとのことがある。

どういふことか。これより委細を解説していくところとして次のようなことがあるのである。

[科学考証を依頼されたカリスマ物理学者キップ・ソーンに[通過可能なワームホール]の考察をなさしめることになったことでよく知られもしている小説作品として『コンタクト』という作品が存在している(作者は著名な科学者でもあつたカール・セーガン)。そちら小説作品『コンタクト』にては[ワームホールないしカー・ブラックホールと描写されるものの生成で宇宙の彼方と地球を結ぶ装置]が登場を見ており、その装置の形状は「際立って」のものとして十二面体構造 — 正五角形を12枚重ねしての全身黄金比の体現存在たる正十二面体構造 — をとる(正確には[三層の球殻構造体を有し人が入り込む本体は十二面体構造となっている]との構造をとる) と描写されているとのことがある。そもした作品たる『コンタクト』ではあるが、同作[不自然なる911の予見的言及]と相通じ合っているとの作品ともなり、またもつてして、異常異様なるその他問題となる側面を帯びての作品ともなっている] (その[できすぎ度合い]に気付くことになった折に、「なるほど。全部計算づくでやっているわけか。」と手前などは合点したものであるわけだが、それが[頓狂なる一人合点の類]で済むものなのか以降の内容の検証を心ある向きには求めたいところである)

(※1 尚、1985年に原著初出を見たとのカール・セーガンの**CONTACT**という作品はミリオンセラーを記録した作品となっている(読者層が偏っている傾向があるように見えるサイエンス・フィクションというジャンルにあつて、しかも、設定が高度に専門的なところがみとめられる作品(いわゆるハードSF)とのことで大衆受けするようなものとは見えぬ中で——作者カール・セーガン自身の著名性や初版からして大量に刷り販促に力を入れた出版社動向を加味しても——それ自体異質なこととしてミリオンセラーを記録した著名作品となっている)。については英文 Wikipedia[Contact (novel)]項目にての Publication history の節にて“ The first printing was 265,000 copies. In the first two years it sold 1,700,000 copies. It was a main selection of Book-of-the-Month-Club. ”(初版 26万5000部、刊行後最初の2年で170万部を売り上げた)と記載されているところともなる)

(※2 存じておられる向きも多かろうと判じられることであるため、そうもしたことまでいちいちもってして説明を付すのもなんではあるとは思うのだが、小説『コンタクト』(最前にて十二面体構造——全身黄金比の体現存在——をとるゲート装置が描かれると言及してのヒット作品としてのハードSF小説作品)の作者カール・セーガン(故人)は[米国科学界の牽引者(いわゆるオピニオン・リーダー)としての卓抜したメディア露出型知識人]としてよく知られている向きである。現行現時点での和文ウィキペディア[カール・セーガン]項目にての解説のなされようを引けば、次のような式にて、である。(以下、ウィキペディア著名人来歴解説内容としての[カール・セーガン]項目にての現時点での記載内容を引用するとして)“カール・エドワード・セーガン(Carl Edward Sagan, 1934年11月9日—1996年12月20日)は、アメリカの天文学者、作家、SF作家。元コーネル大学教授、同大学惑星研究所所長。**NASAにおける惑星探査の指導者。惑星協会の設立に尽力。核戦争というもの地球規模の氷河期を引き起こすと指摘する「核の冬」や、遺伝子工学を用いて人間が居住可能になるよう他惑星の環境を変化させる「テラ・フォーミング」、ビッグバンから始まった宇宙の歴史を”1年という尺度”に置き換えた「宇宙カレンダー」などの持論で知られる。…(中略)…科学啓蒙書やSF小説の執筆でも知られる。代表作にはテレビシリーズにもなった『コスモス』、その続編『惑星へ』、映画化されたハードSF小説『コンタクト』や、ピューリッツァー賞を受賞した『エデンの恐竜 - 知能の源流をたずねて』などがある…(中略)…火星探査機マーズ・パスファインダーの着陸地点は彼にちなんで「カール・セーガン基地」と名付けられた。**1993年にアメリカ天文学会は「公共の科学理解のためのカール・セーガン賞」を設立した。最初の受賞者はセーガン自身である。以降、公共の科学理解に寄与した科学者、団体、テレビ番組などが受賞している。セーガンの死後の1997年にはアメリカ天文学会がカール・セーガン記念賞を創設した。これは宇宙の研究と理解のために寄与した人物、団体に贈られる**”(引用部はここまでとする))**

これ以降は、——長くもなってしまうのだが——小説『コンタクト』という作品の上の段にて言及なしたところの特性、[911の事件の予見的言及]にも通ずる作品にして、その他、異常異様な側面が伴っているとの特性にまつわっての解説および典拠紹介をなすための部とする。

まずもって表記のカール・セーガン著書『コンタクト』——全身[黄金比]の体現存在であるとのゲート装置を登場させての作品ありようをこれより問題視していくとの1985年初出の小説——が

[物理学者キップ・ソーンによる通過可能なワームホールにまつわる理論深化]

と密接に結びついていることの典拠紹介をなすことから始める。

については本稿の先の段(出典(Source)紹介の部 20-2)にでも挙げた(現行にての)英文ウィキペディア[Kip Thorne]項目の現行の記載内容よりの「再引用」をなすことから始める。

(直下、英文 Wikipedia[Kip Thorne]項目の現行にての記載内容よりの引用をなすとして)

Carl Sagan once asked Thorne to examine the time travel section of the manuscript for Contact. Thorne immediately dismissed Sagan's hypothesis; however, he later had an epiphany -- wormholes may be used as time machines.

「カール・セーガンがかつてキップ・ソーンに小説『コンタクト』との絡みでタイムトラベル関係部の記述内容の検証を頼んだことがある。の折、ソーンはセーガンの仮説を即時に斥けた。だが、しかし、かれキップ・ソーンは後にワームホールがタイムマシンとして使われうるとの閃きのアイディア(エピファニー)を得る(そして呈示する)に至った」

(引用部はここまでとする ——ウィキペディアとの媒体の易変性に鑑み、上記記述の残置は請け合わない——)

次いで、

キップ・ソーン著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**
邦訳版『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(原著の方は1994年刊行、邦訳版は白揚社より1997年刊行)

にての特定の下り —キップ・ソーンが[通過可能なワームホール]兼[タイムマシン化可能なワームホール]を考案することになった経緯にまつわる下り— よりの各ページ数センテンス単位にとどめての「再度の」原文引用 (これまた出典(Source)紹介の部 20-2)にて取り上げたところよりの「再度の」原文引用) をなすこととする。

(直下、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』437 ページ前半部よりの再度の原文引用をなすとして)

私は一九八四年—八五年度の最後の授業をちょうど終えて、研究室の椅子に深々と座り、アドレナリンの分泌が鎮まるのを待っていた。電話のベルが鳴ったのはそのときだった。コーネル大学の天体物理学者で古くからの友人でもあるカール・セーガンからだった。「邪魔してすまん。キップ」と彼は語った。「人間と地球外文明との最初の接触に関する小説を今、書き終えたところだが、困っているんだ。科学的なことではできるだけ正確を期したいと思っているんだが、重力物理学の中に間違いがあるのじゃないか、と心配なんだ。どうだろう。目を通して助言してくれないだろうか?」私はもちろん引き受けた。

(ここまでを引用部とする —※—)

(※上の訳書よりの引用箇所に対応する原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての「抜粋部をそのまま検索に用いることでオンライン上より確認できる」との表記は(原著にての 14 Wormholes and Time Machines の部 (p.483)より引用をなすとして) “ I had just taught my last class of the 1984-85 academic year and was sinking into my office chair to let the adrenaline subside, when the telephone rang. It was Carl Sagan, the Cornell University astrophysicist and a personal friend from way back. ” **Sorry to bother you , Kip, ” he said. ”But, I’m just finishing a novel about the**

human race's first contact with an extraterrestrial civilization and I'm worried. I want the science to be as accurate as possible, and I'm afraid I may have got some of the gravitational physics wrong. Would you look at it and give me advice?" Of course I would. ” (引用部はここまでとする)とのものとなっている)

(直下、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』438 ページ前半部よりの再度の原文引用をなすとして)

カールは確かに困難にぶつかっていた。彼はヒロインのエリノア・アロウェイを地球の近くにあるブラックホールに飛び込ませ、図 13・4 のような具合に超空間を通して旅させて、一時間後に二六光年の恒星ベガの近くで出現させていた。カールは相対論の専門家ではないので、摂動計算のメッセージに親しんでいなかった。ブラックホールの芯から、超空間を通して、われわれの宇宙の別の部分に旅することは不可能である。どのブラックホールも、小さな電磁的な真空のゆらぎと少量の放射にたえず爆撃されている。これらのゆらぎと放射がホールに落ち込むと、ホールの重力に加速されて、巨大なエネルギーをもつようになり、「小さな閉じた宇宙」あるいは「トンネル」あるいはわれわれが超空間を通る旅行に利用しようとするその他の乗り物に、破壊するような勢いで衝突する。…(中略)…アイデアがおぼろげに浮かんだ。ブラックホールを超空間を通るワームホールに取り替えさせたほうがいいだろう。

(ここまでを引用部とする—※—)

(※上の訳書よりの引用箇所に対応する原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての「抜粋部をそのまま検索に用いることでオンライン上より確認できる」との表記は(原著にての 14 Wormholes and Time Machines の部 (p.484) より引用をなすとして) “ The novel was fun, but Carl, indeed, was in trouble. He had his heroine, Eleanor Arroway, plunge into a black hole near Earth, travel through hypnospac in the manner of Figure 13.4, and emerge an hour later near the star Vega, 26 light-years away. Carl, not being a relativity expert, was unfamiliar with the message of perturbation calculation. **It is impossible to travel through hyperspace from a black hole's core to another part of our Universe. Any black hole is continually being bombarded by tiny electromagnetic vacuum fluctuations and by tiny amounts of radiation. As these fluctuations and radiation fall into the hole, they get accelerated by the hole's gravity to enormous energy, and they then rain down explosively on any “little closed universe” or “tunnel” or other vehicle by which one might try to launch the trip through hyperspace.**[. . .] Carl's novel had to be changed.[. . .] **a glimmer of an idea came to me. Maybe Carl could replace his black hole by a wormhole through hyperspace.** ” (引用部はここまでとする)とのものとなっている)

(直下、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』439 ページ末から 441 ページ冒頭部よりの再度の原文引用をなすとして)

ワームホールは SF 作家のたんなる空想の産物ではない。それらは一九一六年、アインシュタインが場の方程式を定式化したわずか数ヵ月後に、その方程式の解として数学的に発見されたのである。ジョン・ホイーラーと彼の研究グループは、一九五〇年代にさまざまな計算を行って、それを徹底的に調べ上げた。…(中略)…ワームホールはある瞬間に作り出され、やがてちぎり取られて消えてしまう——創造からちぎれるまでの全寿命はあまりにも短すぎて、

何物も(人も、放射も、どんな種類の信号も)、その中を通過して一方のマウスから他方のマウスまで行くことはできない。

(ここまでを引用部とする —※—)

(※上の訳書よりの引用箇所に対応する原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての「抜粋部をそのまま検索に用いることでオンライン上より確認できる」との表記は(原著にての 14 Wormholes and Time Machines の部 (p.486)より引用をなすとして) “ Wormholes are not mere figments of a science fiction writer's imagination. They were discovered mathematically, as a solution to Einstein's field equation, in 1916, just a few months after Einstein formulated his field equation; and **John Wheeler and his research group studied them extensively, by a variety of mathematical calculations, in the 1950s. However, none of the wormholes that had been found as solutions of Einstein's equation, prior to my trip down Interstate 5 in 1985, was suitable for Carl Sagan's novel, because none of them could be traversed safely.** Each and every one of them was predicted to evolve with time in a very peculiar way: **The wormhole is created at some moment of time, opens up briefly, and then pinches off and disappears — and its total life span from creation to pinch-off is so short that nothing whatsoever (no person, no radiation, no signal of any sort) can travel through it, from one mouth to the other.** ” (引用部はここまでとする)とのものとなっている)

(直下、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』p.444よりの原文引用をなすとして)

そこで、パサデナに着くと、私はカールに長い手紙を書いて、なぜ彼の小説のヒロインは急ぎの星間旅行にブラックホールを使うことができないかを説明し、ヒロインにはそのかわりにワームホールを利用させること、そして小説の中のだれかにエキゾチックな物質がほんとうに存在し、ワームホールを開けておくのに利用できることを発見させるように提案した。カールは私の提案を喜んで受け入れ、それを彼の小説『コンタクト』の最終稿に取り入れた。カール・セーガンに私の意見を伝えた後、私は彼の小説が一般相対性理論を学ぶ学生の教育用に使えることを思い当った。こうして学生に役立たせるために、マイク・モリス(私の学生の一人)と私は、一九八五年の冬にエキゾチックな物質に支えられたワームホールに対する一般相対論の方程式と、これらの方程式とセーガンの小説との関連について論文を書きはじめた。…(中略)…一九八七—八八年の冬以前に、われわれは論文を[アメリカン・ジャーナル・フィジクス]誌に投稿したが、その時点では論文はまだ掲載されていなかった。

(ここまでを引用部とする —※—)

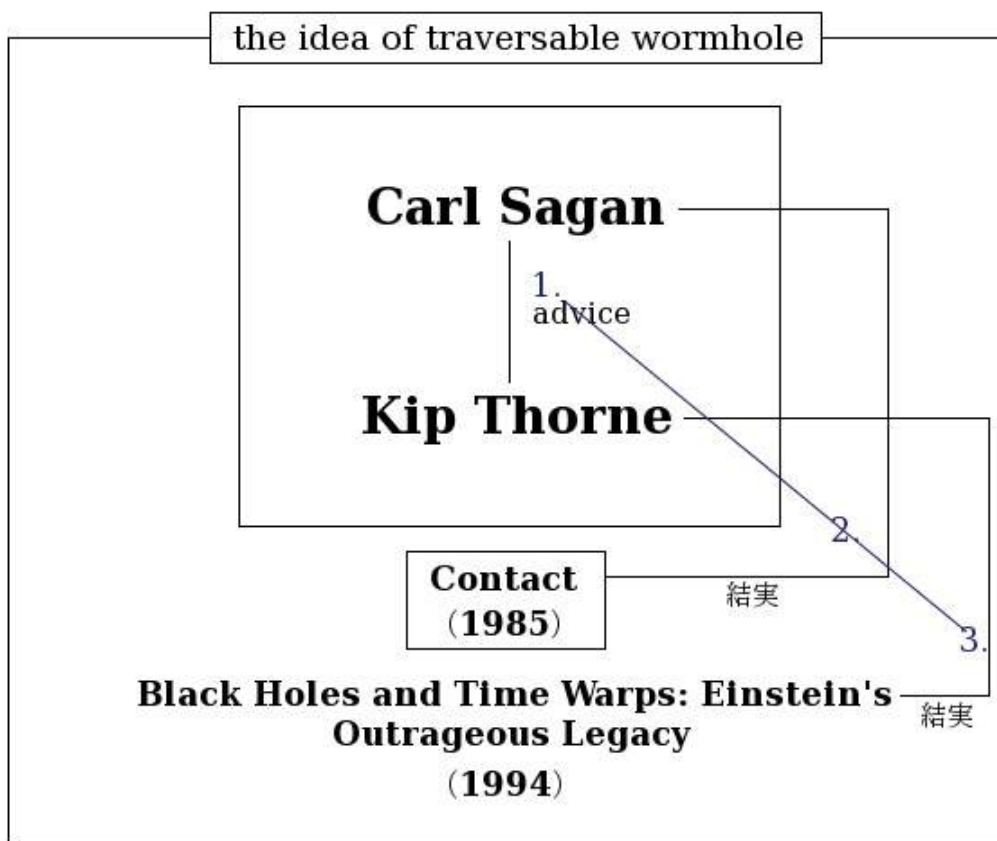
(※上の訳書よりの引用箇所に対応する原著 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy にての「抜粋部をそのまま検索に用いることでオンライン上より確認できる」との表記は(原著にての 14 Wormholes and Time Machines の部 (p.490)より引用をなすとして) “ **So upon reaching Pasadena, I wrote Carl a long letter, explaining why his heroine could not use black holes for rapid interstellar travel, and suggesting that she use wormholes instead, and that somebody in the novel discover that exotic material can really exist and can be used to hold the wormholes open.** Carl accepted my suggestion with pleasure and incorporated it into the final version of his novel, Contact. / It occurred to me, after offering Carl Sagan my

comments, that his novel could serve as a pedagogical tool for students studying general relativity. As an aid for such students, during the autumn of 1985 Mike Morris (one of my own students) and I began to write a paper on the general relativistic equations for wormholes supported by exotic material, and those equations' connection to Sagan's novel. / We wrote slowly. Other projects were more urgent and got higher priority. By the winter of 1987-88, we had submitted our paper to the American Journal of Physics, but it was not yet published ;” (引用部はここまでとする)とのものとなっている)

以上の数センテンス内に留めての複数の原文引用なした部にて

[通過可能なワームホール(というもの)の「科学的に煮詰められての」アイデアが世に出た経緯]

がカール・セーガンの『コンタクト』という小説にあること —正確にはカール・セーガンがキップ・ソーンに自身の小説『コンタクト』の科学考証を頼み、それに応じたソーン思索の中で「科学的に至当と目されるもの」としての通過可能なワームホール(トラバザブル・ワームホール)のアイデアが煮詰められていったとあること— が言及されているとのこと、お分かりいただけたか、とは思う(同点については本稿の前半部でも述べているため、復習の話ともなる)。



1985年以前に遡る【物理学者キップ・ソーンと天体物理学者にしてメディア露出型の万能型言論人であったカール・セーガンのやりとり】から【通過可能なワームホール】のアイデアが科学的に煮詰められ出したとの経緯がある。

表記のこの延長線上にどうしたことがあるのか、これより煮詰めていくこととする。

(続く段に入る前に補注として以下の※1から※3のことを述べておく)

※1. 最前、つい先だっの **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』よりの原文引用部にあつては物理学者キップ・ソーンが

「ブラックホールは異なる空間を結びつけるゲートとして利用することはできないが、ワームホールならばできるとの解答が(新規に)導き出せそうである」

とのことを述べている様がみてとれる。

要するに「ブラックホールを空間を橋渡しする機構として利用することはできないと専門家は口にしている」とのことだが、に対して、

「ブラックホールは入口に、ワームホールはその間のゲートに利用する」

という観点が「他の」物理学者の解説にて呈示されているとのこと「も」ある。

本稿の先の段にて引用したことであるが、米国のカリスマ日系人物理学者として知られるミチオ・カクがその著書、

Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』(同著邦訳版の版元はNHK 出版)

にあつて

(**出典(Source)紹介の部 20**)にて挙げていたところ、『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』の384ページから386ページより掻い摘まんでの引用なししていたところを「度々もの」再引用なすところとして)

「カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない。……(中略)…… 現在、おおかたの物理学者は、ブラックホールを生きて通り抜けることはできないと考えている。しかし、ブラックホールの物理的解釈はまだ未熟な段階で、この推測は検証されていない。ここでの議論のために、ブラックホールを通り抜けることができ、とくに回転するカー・ブラックホールでそれが可能だと考えてよう。すると、どの先進文明も、ブラックホールの中を探索しようと真剣に考えるだろう」

(引用部はここまでとする)

と言及されているようなこと、換言すれば、

[カー・ブラックホールとワームホールは一基のエレベーターを構成する各パートのように言及されている ——[カー・リングの中心にワームホールがあれば、われわれの宇宙をまったく別の宇宙と、あるいは、同じ宇宙のなかにある別の地点と、結びつけてくれるかもしれない](原著表記では The wormhole in the center of the Kerr ring may connect our universe to quite different universes or different points in the same

universe)と言及されている——]

とのことがある(そして、後述するところとしてキップ・ソーンよりアイディアを供与されてのカール・セーガン小説『コンタクト』でも[ゲート]としてのカー・ブラックホールに関する言及がなされている)。

その点、キップ・ソーンはその著書『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』——これよりの段でもくどくもの振り返り表記をなす所存だが、本稿の先の段、[出典\(Source\) 紹介の部 28](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 33-2](#)を包摂する解説部で同著がなぜなのか「多重的に、執拗に、911の前言をなしている著作と解されるようになっていく」との論拠を挙げもしてきたとの著作—— にあつてのついで先ぞの原文引用部にあつて

[ブラックホールの芯から、超空間を通過して、われわれの宇宙の別の部分に旅することは不可能である。小さな電磁的な真空のゆらぎと少量の放射にたえず爆撃されている。これらのゆらぎと放射がホールに落ち込むと、ホールの重力に加速されて、巨大なエネルギーをもつようになり、「小さな閉じた宇宙」あるいは「トンネル」あるいはわれわれが超空間を通過する旅行に利用しようとするその他の乗り物に、破壊するような勢いで衝突する・・・(中略)・・・アイデアがおぼろげに浮かんだ。ブラックホールを超空間を通過するワームホールに取り替えさせたほうがいいだろう](以上、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』438 ページ前半部よりの引用 —オンライン上よりそちら文言を検索することで文献的事実であるとのことを確認できるようになっているとの原著表記は **It is impossible to travel through hyperspace from a black hole's core to another part of our Universe. Any black hole is continually being bombarded by tiny electromagnetic vacuum fluctuations and by tiny amounts of radiation. As these fluctuations and radiation fall into the hole, they get accelerated by the hole's gravity to enormous energy, and they then rain down explosively on any “little closed universe” or “tunnel” or other vehicle by which one might try to launch the trip through hyperspace. [. . .] Carl's novel had to be changed.[. . .] a glimmer of an idea came to me. Maybe Carl could replace his black hole by a wormhole through hyperspace.—**)

との書きようをなしているが、についても、ハーバード卒のカリスマ物理学者として知られるミチオ・カクは

[「仮定」上の超高度文明の水準に関してのニコライ・カルダジェフという物理学者の分類法(the Kardashev classification)]

にあつての

[タイプⅢの領域に達した文明](銀河系で得られる全エネルギーさえも自由に利用できるといったレベルの文明)

が他宇宙に自己の種族と自己の種族の文明を再現するために[種子]として送り出すナノマシンのようなものを観念すれば、ゲート内にあつての[凄まじい潮汐力と放射]を回避できるような書きようをなしているとのことが見受けられる。

Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions

and the Future of the Cosmos 『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』

より原文引用すれば、以下のような按配にて、である。

(直下、Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos より原文引用をなすとして)

Because the tidal forces and radiation fields would likely be intense, future civilizations would have to carry the absolute minimum of fuel, shielding, and nutrients necessary to re-create our species on the other side of a wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole inside a device no wider than a cell. If the wormhole was very small, on the scale of an atom, scientists would have to send large nanotubes made of individual atoms, encoded with vast quantities of information sufficient to re-create the entire species on the other side.

(原著よりの引用部はここまでとしておく —※—)

(※邦訳版『パラレルワールド』にあつては[オンライン上より(調査能力ある向きならば)確認できようとの上の如しの「原著よりの」引用部]に対して次のような訳が充てられている:(以下、NHK 出版『パラレルワールド』403 ページよりの原文引用として) **ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならぬだろう。**そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある。ワームホールが非常に小さくて原子サイズだとしたら、その向こう側で全人類を全人類を再々できるだけの莫大な情報を、原子でできた長いナノチューブに詰めて送ることになるだろう(引用部終端))

上の引用に見受けられるナノマシンは[フェムトマシン](原子核のサイズにまつわる単位たる fm 規模の femto machine)にも置き換え可能か、とも思われるが(に關しては[フェムトマシン]に言及しての同じくもの思索にまつわつてのサイエンス・フィクション小説、本稿の前半にてそこよりの引用をなしたとの『ディアスポラ』が存在しているとのこともある)、とにかくも、以上のような物言いがなされていることを本稿のさらに後の段「でも」問題視していく(：尚、ワームホールにナノマシンを投下、別世界での文明再建の[種子]とせんとするとのありうべき先進文明やりようにまつわる科学的仮説がいったい何時頃あたりに世に出てきたのかと考えられるのか、についても本稿にての前半部では深くも掘り下げてきもしたとのことがある ——本稿の前半部で重点的に問題視していたとの「奇怪な」予言的文物がそういう言及「をも」なしていると解される側面を有していると判断をなさざるをえぬようになっていとのこととの絡みで掘り下げてきもしたとのことがある(詳しくは **Adrift Just off the Islets of Langerhans: Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W** 『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』との作品にまつわつての予見的言及に關して深くも踏み込んでの本稿前半部の内容を参照されたい) ——)。

※2. また、カール・セーガンの『コンタクト』執筆に際してアイディアを供与したことで知られる物理学者キップ・ソーンは

「ワームホールはSF作家のたんなる空想の産物ではない。それらは一九一六年、アインシュタインが場の方程式を定式化したわずか数ヵ月後に、その方程式の解として数学的に発見されたのである」(『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』439ページ末)

とのことをその著書『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の中にて表記しているが、について、おそらく、キップ・ソーンは

[カール・シュヴァルツシルトという一次大戦で戦死したドイツ人科学者がブラックホールの境界線上の問題につながる理解をもたらした解法 (Schwarzschild metric) を提示したその時(1916年)]

のことを述べているのだと受け取れる——和文ウィキペディア[シュヴァルツシルト半径]の現行記載内容より原文引用をなせば、“1916年、ドイツの天文学者・シュヴァルツシルトはアインシュタインの重量場方程式の解を求め、非常に小さく重い星があったとすると、その星の中心からある半径の球面内では曲率が無限大になり(以下に述べるように、現在はこの考えは誤りとされている)、光も脱出できなくなるほど曲った時空領域が出現することに気づいた。その半径をシュヴァルツシルト半径(Schwarzschild radius)または重力半径と呼ぶ。シュヴァルツシルト半径よりも小さいサイズに収縮した天体をブラックホールと呼ぶ”(引用部はここまでとする)とされているが、そのように1916年に時空が歪みに歪んだ領域の存在を想定させる解法が出てきたとのことで上のように表記されているのだと受け取れる——)。

に対しては、本稿の先の段にて挙げたウィキペディア項目[Wormhole]項目にての理論史紹介の箇所では

[ヘルマン・ワイル]

が今日、ワームホールと呼称されるもの——別世界との扉といったニュアンス、況や、人類がそれを具現化する手段を有しているといった話とは全く関係ないと受け取れる時空間の歪み「的なる」もの、そういうニュアンスと思われるが——を1921年に示さんとしていたとの記載がなされていたりもすることに一応、ここで言及しておく

(Wikipediaにての現行の記載としては“wormholes in The American theoretical physicist John Archibald Wheeler coined the term wormhole in 1957; however, in 1921, the German mathematician Hermann Weyl already had proposed the wormhole theory in connection with mass analysis of electromagnetic field energy.”(訳として)「アメリカ人理論物理学者ジョン・アーチボルト・ホイラーが1957年にワームホールとの造語を生み出した。が、ドイツ人数学者ヘルマン・ワイルが既に電磁場のエネルギーの分析との絡みでワームホール(的なるものの)理論を前面に出しているとのことがあった」とある)。

※3. さらに、(要らぬところかもしれないが)、ここ補足と位置付けての部にて述べておくが、世間的にはその物理学者としての天才性が称揚されているキップ・ソーンとて[重大なことにつき天啓を与えた「偉大な」学者]なぞではないだろうとの[判断]がなせるようなところがある(英語的に述べれば、[ワイズ]ないし[スマート]であっても断じて[グレート]ではない——あるいは最悪、ただの紛いもの・傀儡(くぐつ)である——と受け取れもしようところがある)。

そうした判断を支える事由は二点ほどある。

うち、第一点目として——そこから触れるのは妥当ではなかったかもしれないが——

同男キップ・ソーンがその批判されて然るべきとのやりようが常識の世界でもつとに知れ渡っているところの、

[モルモン教の熱心な会衆]

であるとされているとのこと「も」ある(：『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』訳書 p.501 末にての邦訳なしもしている訳者が —(原文引用するところとして) “ソーンはすでに賭でホーキングに一回勝っているが、本書によればソビエトの科学者との賭に破れてホワイトホースを一本、モスクワに運んだらしいから、この敬虔なモルモン教徒は二勝一敗でまあまあ賭運はいい方らしい”(引用部終端)として— キップ・ソーンが[敬虔なモルモン教徒(なるもの)]であることに言及している(ちなみにソーンに助言を請うたとの著名なカール・セーガンはユダヤ教徒となっている))。

それがゆえ、キップ・ソーンには

[思考の幅が[ドグマ]によって制限されている人間] (不条理性とともにある特定のドグマを何の論拠もなく奉じたてまつり、そうした生き方を「是」としないとの選択をとり「なかった」向き)

としての固有の限界性がある、ないしは、そういう生き方を自分のものとして重ね合わせるだけの人間性が根深くもあるということが自然(じねん)として観念されると手前はとらえている。

脇に逸れての[半ばもってしての余事記載]として

(筆者の意見ではなく、やりように対する世間的評価というものについて言及すれば)

モルモン教の門人については[婚前交渉]や[自慰行為]を罪とするとの「常軌を逸して」お堅いドグマを奉ずる一方で、組織内不満分子や脱会者を[滅びの子]として組織的に不合理不条理に排斥する風が強くもあることが[一般論]としてよくも知られている集団である(：ときに、といった気風とワンセットになってモルモンが組織的にスパイ行為を働くとの指摘もある —モルモン教徒が自組織の人間を言論監視・制裁を加える「違法な」検閲行為に手を出している、表沙汰になっているところでもそういう監視機構を設けていることについては英文 Wikipedia [Strengthening Church Members Committee] を参照なすことだけでもある程度理解なせるようになっている。その点、モルモンの監視機構は自宗派内に対する締め付け・制裁をなす(モルモンに依存して生きることを選んだ[相応の人格ら]を内部的に組織的に排斥する、破門に付すというのも[制裁]である)ためのものとなり、[より性質の悪いカルト]が[「彼ら」とは本来的に無縁なはずの「外部」の人間]に対してすらも行っている[対・部外者違法行為]よりは「幾分まし」といった感を呈するものではある(：仮に特定宗教の徒がモルモンがその[内部]になしているやりようと同様に彼らの[外部]の言論を封殺しようとするれば(日本ではそれは「仮に」付きで論じられる段階を越えている、特定カルトの数十年前に遡る躍進時期から越えてしまっている)、「違法な」かたちで通信トラフィックや個人情報収集することと同様にその法的根拠は「当然に」存在しないことになり、同文に当然に「違法」ということになる(文明社会維持の最低限の建て前と合致しないとのことになる)わけだが、そして、さらに述べれば、封殺される言論の公的・情動的値打ちが高ければ高い程、その[悪質性]は増すわけだが(違法行為をなす団体の規模によっては[私人間効力]という法理論から国権の最高法規、本来は国家に箍(たが)をはめるために存在しているはずである憲法の問題にすらなりう

る。この滑稽なる日本では法適用の不備の問題から憲法が画餅と化している、はなから唯名無実のものであることは置き、とにかくも、法的形式論としてはそうもなるとの話を聞き及んでいる)、この軽重・悪質性の問題は置き、米国にてのモルモンとはそういう[身内への検閲行為]をなすにもやぶさかではない組織として知られている)——)。

そうした一般的に語られるところのモルモン気風に言及したうえで、(唐突とはなるが)、

[人類文明が(はなから[崩壊]を前提・念頭にして人間のものはなから都合「だけ」に基づいて)操作されてきたものであった]

とのことが[本当のところ]としてあったと[仮定]したならばどうか(ここではその[仮定]にそれを指示する材料が山と伴っているとのこととは分けてもの話をなしている)。

(それだけ述べれば、取るに足らぬ妄言と述べられようものだが)、のような[仮定]が「仮に」真実であった場合であろうとも脱会者を[滅びの子]として排斥するような団体の人間らの[思考法](思考の幅)では一況や、彼らからみた場合の外部の人間に対してすら違法行為を平然と働くような人類の進化進歩の可能性を本質的には否定するような団体成員の思考法(思考の幅)では尚更— そうした向きが[宗教的機序で「そうではない」と否定されたもの]を「是」としないのと同様に同じくもの[仮定]を容れることは絶対にならないだろう。

なぜならば、そうした[仮定]、すなわち、(その真偽はここでは置き)[人類文明が(はなから(人間のものではない都合「だけ」に基づいて)崩壊を前提に操作されてきたものであった]との[仮定]を容れることは彼らが極めて熱心にやっていることが[神仏の振りをした存在に根本からたばかられての愚挙]であることを[容れること]に等しいとのことになろうからである(あちら立てばこちら立たずの相互矛盾とのかたちでの当然の論理的帰結である)。

お分かりだろうが、モルモン教徒たれば、いや、全ての[神や仏による救済や啓明]の主張を「熱心に」容れている宗教の徒に関しては、思考の幅(情報処理能力でもいい)の問題として[思考自由][価値尺度自由]との原則は当てはまらず、それがゆえ、彼らには特定の発想法を完全否定するとの側面が見出せもし、それは

[こちら側にて構築させる必要があったブラックホールないしワームホールによって人類は「計画的に養殖され」全滅する運命にある(全ての人間が例外なく救済とは一切無縁なる無残なる殺され方を[予定]どおりされる)]

などという仮定は絶対に容れない —たとえ、それが[ありうべきかもしれない]ところの論拠を山と伴っての話として眼前に披瀝されたとしても絶対に容れない— との側面となる、[ドグマ]の問題としてそうもなっていると申し述べたいのである(他の心中を探ることは霊長類としては最も基本的なところであるとしつつ書くが)。

そう、

「そのような観点は(その話柄の馬鹿馬鹿しさとは別のところで)語るにすら足らぬ(となれば、検討するにさえ足らぬ)」
とのレベルで「絶対に」容れないうらうと考えられるぐらいに(論理矛盾を呈する)[救済]の観点を与えられている、彼らがどういう機序(作用原理)でか崇め奉るとの上位者(神・仏・教祖の類)より与えられているというのが宗教というものに埋没してしまっている向きらであるにとらえられるのである(：モルモンの教えによると、である。仮にその【身内】が上記のような観点を容れだすと、のみならず、それを唱導しだすと彼には[滅びの子]のラベリングがなされる、すなわち、組織的排斥対象となるとのことにあいなろう —もうその時点で彼らの教義と「ずれる」からである—)。また、相応のカルトが猛威を奮っているとのアジアの極東にあってだからこそ書くことだが、日本にあって同様の機序で組織的に動く存在が見受けられる。卵が先か、鶏が先かの問題があるが、仏教系カルトにまつわるところとして特定の言論が彼らに「相応の機序あって」反対分子と認定された人間由来のものであれば、[流布が妨害されて然るべき申しよう]との扱いを受けることになるだろうとのことが日本にあって「も」あるとのことがある —筆者なぞも『「悪い意味で」実によくできたシステムだ』と常日頃思っている。目をつけられぬようにしていても目をつけてくるとの者達がこの日本「にも」いるのだとしつつも、である([相応の者らに敵対者と目を付けられる要件] が【本当のことを言う潜在力を有している(狂信者仕様の人間にはない)力を有している】とのことにあるとも解される中で、である)——)。

につき、上にて便宜的に挙げた[仮説] —人間がゴール目指してのリミット付きで養殖されてきた種(存続自体が時限性の養殖種)であるとの[仮説]— と表記していることに関しては本稿をここまで読んでいない向きであれば、すなわち、

[はきと指し示されるどころの具体的材料の山に視点向けていないとの向き]

におかれては、

[あまりにも馬鹿げている申しよう]

ととらえる向きが多かろうことか、と「当然に」思う(：この恩寵に塗(まみ)れたとでも形容できよう、ないし、限界はあるも良いところも数多ある(と相応の人間らしくも勝手に合点しての)人類文明は見掛けどおり楽天的に繁栄し続けるのだと思う向きも多かろう)。

だが、差し当たって(限局しての)「この段」にあって論じたきは

[そういう[観点]が[仮説]にとどまらず[部分的真実]ないし
[真実]であるように見えるということ証拠の山をもって「具
象論として」示そうとの本稿の内容の適否それ自体]

についてではなく(本稿の適否については長大な本稿、その内容を検討されてよくも読み手自身でご判断いただきたい)、本稿で呈示せんとしていることがたとえ[仮説]としてでも世に出ることを妨害する(そういう[観点]が唾棄すべきドグマ以下の取るに足らぬ「非論理的」かつ「論拠を伴わぬ」終末論にすぎぬ場合は格別、そうではない場合にあって「も」仮説として世に出るとのレベルですら妨害する)との機序、あるいは、[馬鹿げたもの]へと同じくものを貶めて見せんとする機序が[二律背反の奴隷らを用いての機序]としてこの世界にビルトインされているようであるとのことである)、そして、そうした排斥メカニズムが人間の世界での名分を伴って発現する際に

は[狂信性]・[排他性](あるいはその欠如を補う臆病さ・唾棄すべき無責任性など諸々の人間性の腐敗)を伴った宗教の徒ら由来の作用となるだろうとのことである——[排斥なす名分](反対イデオロギーや反対教義でもいい)も存在しないところでは[属人的無視]といったレベルを超えて[組織的排斥]のメカニズムは本来的には働かないとも思われる(自我がまったくないと不快な機械人間が「連結」・「連動」させられての存在が相方手ならば[あまりにも不自然な拳]としてそういうことが具現化しうるとのことでは別だが、ここでは人間の領域の話として[名分・建て前を伴っての組織性]を顧慮しての物言いをなしている)——。また、ここで述べていることはありうべき[仮定]が[真実]たりうる可能性がある、それを支える具体的証拠がある場合に危機管理・危機対策を「妨害」するのも二律背反の宗教的ドグマの奴隷の部類のやりようとあいならうと強くも指摘しての部となる。

ここまでもって

「キップ・ソーンのような[新興宗教の会衆](ソーンがそうであるとのモルモン教徒の場合はフリーメーソンのメンバーであったと史的に認知認容されているジョセフ・スミスに由来する神の文書モルモン書を最高経典としてのドグマを奉ずるとの会衆)は「平気で」ドグマに基づいて人を攻撃することも「是」とし、[他の尊厳]や[彼らのドグマと一致しないありとあらゆる有意義なるもの]をドグマに基づいて無体に扱うという意味でも全幅の信を置けない」

ということを述べてきた(:私はモルモン教徒の向きを、いや、新興宗教一般を奉ずるような向きを「無条件に」[差別]しているわけではない。何も知らない、法律的に述べるところの[善意]であるとの観点も成り立つし、彼ら個人個人に対しては恨み・つらみもない。さらに言えば、彼らが日常的に何を奉じようが勝手であろうと思っているわけだが、ただ、彼らの[内面][思考の幅]は自身とは異なることを認識したうえでの話として、[彼ら流のドグマ]にあっての敵対者(と勝手に彼らが認定した向き)を——主義主張が違うというただそれだけの理由で——物理的・精神的に排斥しようという生き方は到底、是とはできない、そして、そうした生き方は真実を「組織的に」破壊・毀損するうえで往々にして悪用されるようなものであると述べているのであり、また、彼らにあっての尖鋭化した人間、組織的に動かされる人間が「どういう意図でか」この身の道のまえに石を置けば、当然に[相応の分類に値する存在]であると判ずるに足りる、そう述べているにすぎない)。

以上のような新興宗教(拡大志向を持ち、敵対者認定した人間を組織的に排斥するとの話が他のカルトと同様のこととしてあるとされるモルモン教)の機序にまつわる話は同じくもの観点でキップ・ソーン以外の「他の」重要な物理学者個人にも当てはまる可能性がある——だからここでの話をなしてきた、との背景「も」ある——。

すなわち、モルモンの聖地たるユタ州はソルトレイクシティ(人口のかなりの割合がモルモン教徒であるというモルモン教徒の聖地として造成された街/ただしユタ州の人口の6割超がモルモン教徒であるとされる中でその比率は5割を切るとの分析もある)にて生まれ育ったとのことである特定物理学者が「LHC 実験実施研究機関が最も重視する」ブラックホール安全性論拠を呈示するものとしての
Astrophysical implications of hypothetical stable TeV-scale black holes

という論稿(俗称として GM paper とされるそれ)で提供しているとのことがある、すなわち、スティーブン・ギディングスにもソーンと同じことが言えることかもしれないと手前なぞが収集情報から見ていることも問題になりうる。

が、そうしたことは、それ以上述べれば、

[不当な人身攻撃] (理論・論理の適正さが問題になって
いるところにて[論理]ではなく[主義信条]などの個人的特
性を攻撃するとの卑劣なやりようである Hominem attack)

のそしりを免れないかとも思うのでこれ以上は執拗に掘り下げることをするのは本意ではない(ただし、モルモン教徒の向きなのか判然としていないとの向き、ブラックホール生成実験とされる実験のその伝での安全性に太鼓判を押す役割を果たしているとのギディング氏が[宗教の類]につき「宗教こそが人類にかけられた呪い、諸共、毒といったものである」と批判・非難なしていることでも知られる無神論者ならば、あるいは、不可知論者ならば、まだもって信用に足るか、などと私などはついつい思ってしまう)。

につき、くどくも述べるどころとして、人は(それが自由な選択の結果ならば)何を信じようが勝手だろうも、

[不審事で塗れたブラックホール生成問題、我々全員を殺すことになるかもしれないブラックホール生成問題]

につき[研究機関で最も重要視される 2008 年発の安全性主張論稿]の共著者のうちの一人が(キップ・ソーンがそうであるように)不合理極まりないものを信じ、多く不条理なことをも平然とやってのけるとの団体の成員であるとの[懸念]が「仮に」当を得ていたのならば、そう、そうした場合にて最悪の仮定——本稿でその接合領域の実証を試みているとの仮定——が「真なり」と判じられるときにはそこからして悪質性・悲劇性(人類を操っている存在がいれば腹を抱えて嗜虐的に「嗤(わら)」うような喜劇性かもしれない)が具現化しているとのことをも筆者としては[危惧]してはいるとだけは述べたい——先述の二律背反のドグマに拘束されているととれる向きの問題がそこにあると考えられるからである—— (:ここまでの申しようからお分かりだろうが、[高度な理論的思考]と[妄信]が学者(との役割を社会的に与えられている者)の脳の中で「不可解極まりなくも」両立を見ていようと、鰯(いわし)の頭も信心から、との言葉がある通りに、いかな観念を有していようと基本的に[内面的な領域の問題]として頓着しない(「不思議・不自然である」との疑義抱く以上には頓着しない)との人間がこの身だが、そうした向きらが[状態][属性]から推し量れる[懸念]どおり自身や自身の愛するものの存続を完全否定するようなことに手を課すような機序に沿って動くような存在ならば、そして、最悪の場合には「組織的に」そういうことをなすとのかたちで動いている[ユニット]であるようなケースでは「はきと異を唱える」という人間がこの身である)。

(補注の部にあつての※3 の話を長々と続けるとして)

直近の宗教がらみの話(キップ・ソーンがその熱心な信者であると言われているところのモルモン教にまつわる話)から離れて、ソーンは[「偉大な」科学者]なぞではなく[全幅の信が置けない向き]であろうと述べたきところの決定的な理由が(他にも)存す

る。

それは 一本稿全体で問題視していることだが— 「どうしてそういうことが具現化するのか」というその機序(作用原理)はともかくも、

[キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつて[偶然]とはおよそ観念できないやりようでの911の事件と「事件発生前に」接合する要素が多数・多重的に見受けられる]

ということが「ある」とのことである。

キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の同じくもの伝の異様性についてはこれよりさらに煮詰める格好ともなるわけだが、既にもつてして常軌を逸した話、であるも、それに着目する必要が当然にあるだろうこととして「原文引用をなしながら」「具体的に何が問題になるのか」について本稿の先の段で数万余字を割いて詳説をなしているところである(：この身申しようが疑わしいと思われるのならば、その部を検討されて申しよう黒白につきご判断いただきたい——具体的には本稿にての**出典(Source)紹介の部 28**, **出典(Source)紹介の部 28-2**, **出典(Source)紹介の部 28-3**, **出典(Source)紹介の部 29**, **出典(Source)紹介の部 31**, **出典(Source)紹介の部 31-2**, **出典(Source)紹介の部 32**, **出典(Source)紹介の部 32-2**, **出典(Source)紹介の部 33**, **[出典(Source)紹介の部 33-2]**らを包摂する一連の解説部によってここまでその内容を取り上げてきた『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作がいかようにして[文献的事実]の問題として**[双子のパラドックス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用]** / **[91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号ではじまる地を始点に置いてのタイムワープにまつわる解説や同じくもの地で疾走させた爆竹付き自動車にまつわる思考実験による「双子のパラドックス」にまつわる説明の付与]** / **[2000年9月11日⇒2001年9月11日と通ずる日付け表記の時間軸上でのスタートポイントとしての使用]** / **[他の関連書籍を介しての「ブラックホール⇄グラウンド・ゼロ」との対応図式の介在]**といった複合的要素を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで同時に具現化させ、もつて、「[双子]の塔が崩された2001年9月11日の911の事件」の前言と解されることをなしているのか、について(筆者の主観など問題にならぬ客観情報にまつわるところとして)確認いただきたい次第である(尚、同じくもの解説部の振り返つての表記を不十分ながらも続く段でもなす)——。そして、そうもした予見的言及と平仄が合うにもほどがあるとの「他の」予見的言及らがあるとの点について解説してきたところを確認いただきたい次第である。につき、述べておけば、「疑わしい云々以前にそのような[おかしなこと]は絶対に認めないし検討しない」と思いたければ、そう思つていただいても構わない。だが、といった向きに対しても(無駄かとは思ふが)敢えても申し述べれば、「容易に裏取り可能な論拠(図書館での本の借入及びインターネットの閲覧のレベルで容易に裏取り可能な論拠)を山と挙げ連ねて[話柄奇矯なれども、堅いところの関係性]を指し示している人間——その水準は本稿からご判断いただきたい——の言い分([証示]でもいい)を無碍(むげ)・無批判・無条件に蹴ることは賢明なことではない。そして、語り手(この私)申しように見るべきところがあれば、それを無碍・無批判・無条件にその指し示しを足蹴にして無視を

決め込むことは(申しよう真たれば引き受けなければならぬであろう)[結果としての無残なる死]を迎えることになっても[文句を言えぬ]とのことだけは覚悟なしておくべきであろう——覚悟なさずにそういう手合いが死んでいくのならば「あまりにも愚劣」と映る——」)

余事記載も多くなったが、※1から※3と振っての補注の部はここまでとする。

さて、(振り返りなしもして)、

[通過可能なワームホールにまつわる科学的観念が世に出た経緯がカール・セーガンの『コンタクト』という小説にあること](正確にはカール・セーガンが物理学者キップ・ソーンに自己の小説『コンタクト』の科学考証を頼み、それに応じてのソーン思索の中で科学的に至当と目されるものが[通過可能なワームホール]絡みで煮詰められていったとこのことがあること)

については、(長くなりすぎた感がある補注としての※1から※3と振っての話に入る「前」に)細かくも指摘してきたわけであるが、次いで、

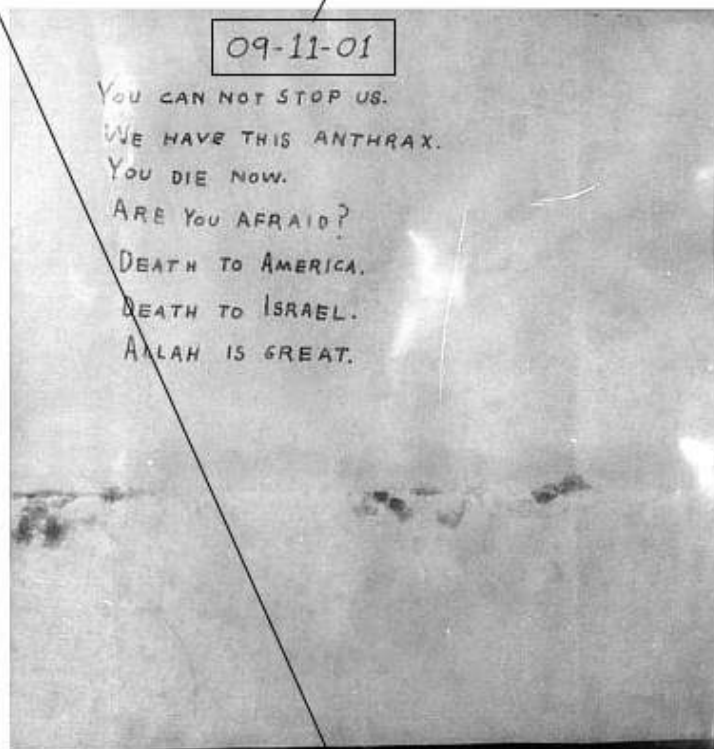
[カール・セーガン著書『コンタクト』に対する執筆協力をなす中でキップ・ソーンによって理論上の基礎が固められることになったとの[通過可能なワームホール]の問題を扱っているキップ・ソーン著作(**BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』)が「奇怪にも」まさしくものその[通過可能なワームホール]にまつわるところで911の事件(の予見的言及)と多重的に結びつくようになっている]

とのことについても再度の振り返り表記をなしておくこととする——先の補注としての※3と振っての表記部にてにもかする程度に言及したことだが、同じくものこと、キップ・ソーン著作に911の予見的言及がみとめられるとのことが[著名物理学者キップ・ソーンに[通過可能なワームホール]の考察をなさしめることになったことで知られているカール・セーガン小説として『コンタクト』という作品があり、同『コンタクト』にては[宇宙の彼方と地球を結ぶ装置の形状]が「際立って」十二面体構造をとると描写されているといったことがある、しかも、他の事由とあわせて顧慮して奇怪性が問題となるようなかたちでそういう描写がなされているとのものとなっている]とのことに関わりもするとの認識で再度の振り返り表記をなしておくこととする——。

(以下、ここに至るまで「オンライン上より文言確認出来る」原著および「図書館などで容易に借り入れられる」訳書より原文引用なしてきたこと(文献的事実)に基づいて「のみ」述べられるようになってきていることとしてせんだって指し示しもしてきたことについて再度の振り返り表記をなす)

[原著は1994年に刊行を見、邦訳版は1997年に刊行を見たとのキップ・ソーン著書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(邦訳版版元は白揚社)という著作にあっては[仮説]を支えるための[机上のシュミレーション(思考実験)]が「目立って911の事件とつながるような数値および意味上の規則を伴って」持ち出されているとのことがある。につき、まずもって述べれば、物理学者キップ・ソーンとその妻が「郵便番号91101」(こちら91101という数値は20「01」年「9」月「11」日を米国にてのIDカード日付表示などで911/01とのかたちで指し示す日付表記たりうるものでもある——(英文Wikipedia [Calendar date] 項目にて9「月」11「日」(20)01「年」表記に通ずる Gregorian, month-day-year [グレゴリウス方式: 月: 日: 年] とのフォーマットについて This sequence is used primarily in the United States.「こちら〔月〕〔日〕〔年〕の順番での)日付表記法は主として合衆国にて用いられるものである」と記載されているようなところとしてそうもなっている——)、すなわち、米国郵便番号に該当するZIPコードが91101ではじまる地域で[「双子のパラドックス」に依拠したワームホール型タイムマシン生成挙動]を開始したとの思考実験(現時点での人類文明にあっての実現不可能技術を前提にしての思考実験)が同著にあって登場を見ているとのことがある。そちら思考実験につき、問題と見えるポイントは[双子]との言葉を含む[双子のパラドックス]と結びつく思考実験を「91101」というかの事件、[双子の塔が崩壊させられたかの事件]を想起させる郵便番号の地番ではじまる地域(英語圏表記で01年9月11日の略記数値列でもある91101で郵便番号がはじまるパサデナ)を「始発点として」実施しているとのことである]

Second anthrax note



(From Wikimedia Commons)

炭疽菌テロの容疑者(suspect)としてのBruce Ivins 容疑者が書いたとされる犯行声明書(英文Wikipedia掲載のものよりの転載)。同犯行声明文については(本稿の後半部にて意図して)後にも問題視する所存だが、ここで注目いただきたいのは犯行声明文に見る「91101」というナンバー、米国記述式で2001年9月11日を指すものとして用いられているとの同ナンバーがパサデナという地区のジップコード(郵便番号)の開始番号となっていることに「こだわらざるをえぬ」との奇怪な相関関係が現出していることである。

[上にて表記の BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』に認められる[ソーンが郵便番号91101ではじまる一面(Pasadena)にてなしはじめたとの設定のシュミレーション(思考実験)]にあってその原理が利用されている「双子のパラドックス」というものだが、その提唱年は前世紀初頭1「911」年であると一般に認知されている(出典も無論、先に挙げている)。それにつき「問題となるのは、」(「それなくしてはキップ・ソーン著作に見る表記の思考実験、すなわち、[ソーンが郵便番号91101ではじまる一面にてなしはじめたとのシュミレーション(思考実験)]が語れないとの按配になっている)そちら[「双子のパラドックス」]の提唱年が1「911」年であることより「双子の」塔が崩された日付(9月11日という日付)が想起されもするということである]

[ソーンは自著『ブラックホールと時空の歪み』にて [「双子の」パラドックス] にまつわるシミュレーション、[パサデナにて「空間軸上の」始点を置くワームホールタイムマシン生成挙動] たるシミュレーションに言及する前に「また別の」思考実験、[パサデナを走行する自動車の上で爆竹を順次爆発させるとの設定の思考実験] を —— 双子のパラドックス (上述のように1911年に提唱された概念) に通ずる時間の相対性の説明との絡みで—— 引き合いに出すとのことをなしている。そこにいう他の思考実験にあって「も」認められる [パサデナ] とは (繰り返すが) 郵便番号「91101」が最も若い番号 (地区にての筆頭郵便番号) として割り振られている一画となる。であるから、[通過可能なワームホール] にまつわる思考実験の議論の前提として持ち出されている思考実験からして [「双子の」パラドックス (1「911」年提唱)]、[パサデナ (空間軸上の開始ポイントで郵便番号にして 91101から地番表記されているとの一画)]、[(車上)爆竹の「順次」起爆 firecrackers detonation] との観点で二〇〇一年九月一日に起こったツインタワー崩落事件 (「時間差を呈して」崩落したツインタワー以外に計七棟のビル群がワールド・トレード・センターにて崩れ去った事件) のことを想起させるとのことがある]

[先述のように (ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にあっての) パサデナを始点とする —— 郵便番号91101ではじまる地域区画を始点とする —— シミュレーション (思考実験) は [双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動] として言及されているものであるが、同じくものソーン著作 (原著1994年刊行) ではその思考実験開始年次につき [2000年1月1日午前9時] との明示がなされている (: ややこしいととらえられるところだろうが、1994年に刊行の書籍の中で双子のパラドックス (1911年提唱) を応用しての思考実験がパサデナ (地番91101ではじまる地区) を「空間軸上の」始発点にし、なおかつ、2000年1月1日9時を「時間軸上の」始発点として開始されたとの設定が採用されているわけである)。その開始年次、2000年1月1日午前9時につき時間の単位として若い順番、[時刻→日付→年次] との順番で配置するとの一般的で「はない」方法で並べかえすと「9」「1」「1」「2000」とのかたちとあいなるものである。かの911の事件の発生時 (「9」「1」「1」「2000」) と差分が1年しかない日付け表記を意識させる数値が出てくる —— それ単体だけについて述べれば、牽強付会 (こじつけがましき論法) と見做されかねないだろうが、ソーン著書の兼ね合いでは [パサデナ郵便番号問題] [双子のパラドックスにまつわる意味的問題] が全く同じところで問題となっていることに留意すべきである ——]

[直近にて言及のようにソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』にて取り上げられる [双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動] の開始時期は2000年「1月1日午前9時」であるとされているわけだが、2000年という時期は [2000年紀のはじまり] (ニュー・ミレニアムの開始時期) として [2001年] と混同されるとの一般的理解が存し、その点について扱った科学読み本 —— チャールズ・サイフェ Zero: The Biography of a Dangerous Idea 『異端の数ゼロ』 —— よりの引用も本稿の先の段でなしているとのことがある。そして、その2000年に原著が刊行されたその問題となる他著作、2000年と2001年という年度が [どちらがニュー・ミレニアムの始点か] との観点で混同されているとのことと言及しているとの著作 —— チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ』 —— からして911の事件が発生する前よりブラックホールとの言葉を [グランド・ゼロ] と結びつけているとのことをなしているとの著作となり、また、キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』に挿絵提供しているのと同一のイラストレーターの手になる独特な画風のイラストレーションを [通過可能なワームホール絡みの図像] として挙げているとの著作とすらなっている (であるからあまりにもできすぎている)。その点も加味して、キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』の時間の単位を若い順に挙げての「9」「1」「1」「2000」とのワームホール・ゲート構築開始時期は「9」「1」「1」「2001」と混同されるものとしての重み付けをなすべきである —— 片方で「9」「1」「1」「2000」と結びつく日付け表示がなされているかと思えば、それと同じイラストレーターの手による挿絵を [同じくものトピック] にまつわる挿絵 (通過可能なワームホールにまつわる挿絵) として採用しているとのもう一方の他の著作が「2000年と2001年のニュー・ミレニアム始点としての差分は曖昧模糊としている」とのことを述べている著作であるとのこと、その意味を重んずべきである ——]

まとめれば、

「問題となる1994年初出の(幅広く流通しての書籍化を見ている)科学解説書 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』では [通過可能なワームホール; traversable wormhole] にまつわる思考実験が掲載を見ており、まさにものそちら思考実験にあっての [空間軸上の始点となるポイント]、そして、[時間軸上の始点となるポイント]、そ

の双方で「先に発生した911の事件を露骨に想起させる数値規則」が用いられており(2001911との数値と結びつくナンバーをそうではないというのならば別だが)、かつまた、そちら思考実験で用いられるメカニズムからして「1911年に提唱された」双子のパラドックス、要するに、「911と双子を連想させるもの」となっているとのことがある。だけではない。そちら思考実験、「通過可能なワームホール」(のタイムマシンとしての利用)にまつわる思考実験のことが叙述される前の段で同じくもの1994年初出の著作『ブラックホールのと時空の歪み』にあっては他の思考実験のことが挙げられており、その実験(通過可能なワームホールのタイムマシン化に向けての応用の前提となる[時間の相対性]のことを説明するために挙げられている思考実験)からして[空間軸上の始発点]を[地番スタート番号との兼ね合いで911と結びつく地域]に置いており、また、同実験、「時間差爆発」を取り扱っているものともなる([911との数値]と[時間差爆発]との兼ね合いでかの911の事件を想起させもする)。

加えて、である。そうした思考実験らを掲載している著作とまったく同じテーマ(通過可能なワームホール)をまったく同じイラストレーターになるところとして扱っている「他の」著作 *Zero: The Biography of a Dangerous Idea*『異端の数ゼロ』からして[911の事件とブラックホールの繋がり合い]を想起させるものとなってもいる(2001年に911の事件が発生する前、2000年に世に出た「他の」著作からしてそうしたものとなっている)」

とのことがある。

(振り返っての表記はここまでとする)

何故、上記のような「馬鹿げたこと」(悪い意味でそうとしか表しようがあるまい)が現実に具現化を見ているのか、その[機序](作用原理)の問題は置く(:そこには先述のところの【ある特定の可能性ら】を[教義と矛盾するところ]として決して容れないようにできあがっている節が濃厚にある宗教的人間らの存在理由(【人間の滅亡を前提にしてのオペレーションが「宗教的ドグマの類を家畜種の思考限界の規定するものとして脳・前頭葉などを弄って押しつけられるだけの」技術的高度文明に由来するものとして存在しており、そういった存在によってある特定の所作がある特定の条件下で外側からなされれば(多世界解釈における他世界間を貫通するともされる重力波が人間の関知せざるところから加速器実験に作用する等々)、それが何の情容赦もなくも発動するとのことにまつわる可能性)「など」を絶対に容れないようにできあがっている(彼らが「帰依」した神仏なるものの紛い物性をみとめることに等しい)との中で容れないようにできあがっている)節ある宗教的人間の存在理由)にも通ずるところの仮説、[マリオネット仮説 —その内容は言及するまでもないだろう—]のようなものが真たる可能性も念頭に置かねばならなくなるが、とにかくも、[機序](作用原理)の問題は置く。宗教的で、まったくもって、論理的ではなく何を言っているのか正常人には理解の仕様が無い(たとえば、「処女が子を孕んだ」「題目を唱えれば、勤行に励めば、人間的な安逸がもたらされる」などという申しようを平然と「無恥にも」のたまえとのありようを呈している、そして、そうしたドグマを容れないとの正気の人間らを歴史的に数多殺してきた)との中で[理に基づいての話]がなんら通じぬ —というより論理や理に基づいて何かを訴えるありようを台無しにばかりしようとする— との狂った宗教「的」神秘「的」人間 —狂ってなければ、詐狂者とのことでそういう連中はよりもって性質が悪い— が横溢しているとの人間世界の(酸鼻を極めての)[そもそももってしての馬鹿馬鹿しさ]に関わていそうであるとの[機序]の問題を置くとしてさらにもって続けて、

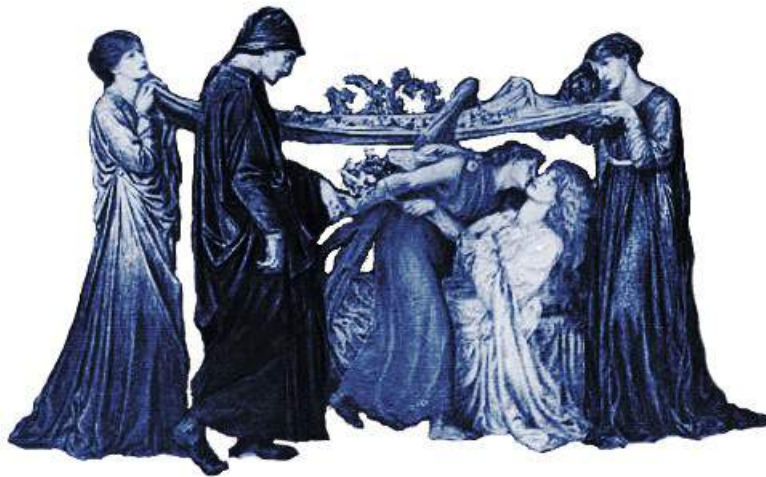
[カール・セーガン著書 **CONTACT『コンタクト』**に登場する異星文明より供与されたとの設定のゲート装置 —— 上の振り返っての部にて問題視した著作たる **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』**の著者たるキップ・ソーンがそちら著作にて問題視している[通過可能なワームホール](直上、911 の先覚的言及と関わっているとの点について再述をなしたとの[通過可能なワームホール]である)のアイデアを提供したことによって、そも、小説『コンタクト』でのその形態が定まったとの申しようがなされていることについても解説済みのゲート装置—— がカー・ブラックホール「とも」結びつくことを示す出典]

をも挙げておくこととする。

出典 (Source) 紹介の部 80

SOURCE

80



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 80 にあつては

[カール・セーガン著書『コンタクト』に登場する異星文明より供与されたとの「設定」が付されたゲート装置 —— **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』**の著者たるキップ・ソーンが同じくもの著作にて問題視されている[通過可能なワームホール]のアイデアをカール・セーガンに提供したことで小説『コンタクト』での形態が定まっていたと解説されているところのゲート装置—— が[通過可能なワームホール]のみならず[カー・ブラックホール]「とも」結びつく]

とのことの出典を取り上げることとする。それにつき、ここ出典紹介部では問題となる小説『コンタクト』の記述内容を直に引くのが直裁な方法であるととらえるのでそうすることとする。

(直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)218 ページから219 ページ、[グラウンド・セントラル・ステーション]の章よりの中略なしつつもの原文引用をなすとして)

「問題は」エダが控え目に口を挟んだ。「そのトンネルがブラックホールだとすると、非常な矛盾が生じるということなんです。アインシュタインの場の方程式に R・P・カーが与えた解によれば、たしかにトンネルができて、これをカー・ブラックホールと言っていますが、このトンネルはとても不安定でしてね。ほんの少しの擾乱で、たちまちトンネルは塞がって特異点に変わってしまいますから。何物もそこを通り抜けることはできないんです。わたしは極めて技術的に水準の高い文明が、陥没星の内部構造を制御して、トンネルを安定に保っているのではないかと、いうふうに考えてみました。…(中略)…「おまけに」エダが引き取って続けた。「カー・ブラックホールでは、因果律がめちゃくちゃに破られてしまうんです。ほんの僅かに針路が狂っただけで、飛び出したところはまだ宇宙がはじまったばかりということになりかねないとも限りません。例えば、ビッグ・バンのピコセコンド後かもしれないんです。宇宙はまだ、まったくの無秩序ですよ」

(訳書よりの引用はここまでとする 一※一)

(※以上の原著 CONTACT にあつての Grand Central Station の章にあつての表記は —オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして— “ “You see,” Eda explained softly, “if the tunnels are black holes, there are real contradictions implied. **There is an interior tunnel in the exact Kerr solution of the Einstein Field Equations, but it's unstable. The slightest perturbation would seal it off and convert the tunnel into a physical singularity through which nothing can pass. I have tried to imagine a superior civilization that would control the internal structure of a collapsing star to keep the interior tunnel stable. This is very difficult. The civilization would have to monitor and stabilize the tunnel forever. It would be especially difficult with something as large as the dodecahedron falling through.**” [. . .] “**Ana finally,**” Eda continued, “**a Kerr-type tunnel can lead to grotesque causality violations. With a modest change of trajectory inside the tunnel, one could emerge from the other end as early in the history of the universe as `you might like--a picosecond after the Big Bang, for example.** That would be a very disorderly universe.” ” とのものとなる)

さらにもって

[カール・セーガン著書『コンタクト』でのゲート装置が [通過可能なワームホール] と同時に [カー・ブラックホール] と結びつけられているところの出典]

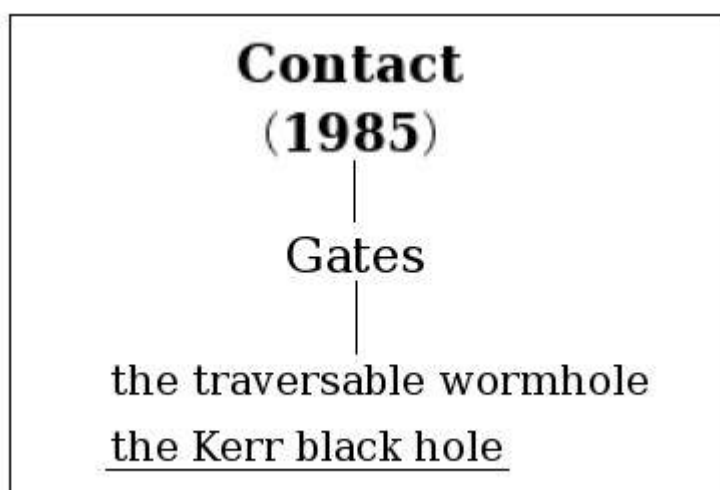
として当該著作より次のような記載を(直近引用部の後の段にあつてのものとして)引いておくこととする。

(直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)241 ページ、[異星人のゲート装置]につき登場人物らがどのようにとらえているかにつき記載してあるとの[グラウンド・セントラ

輸送システムの網の目が、電光で表示されたパリの地下鉄の路線図のように見えはじめた。エダが言った通りだった。各駅は恒星系の内部に口を開けた低質量の一对のブラックホールであると思われた。ブラックホールはその大きさから判断して、大質量の星が正常な進化の果てに陥没したものではあり得なかった。おそらくは、ビッグ・バンの名残りの原始ブラックホールを捕獲して、超絶機能を備えた宇宙船で所定の位置に曳航したのであろう。あるいは、星間物質を局所に集積して作り出したとも考えられる。エリーはそれについて質問したいと思ったが、息を呑むばかりの移動の速度に気圧されて機会を失った。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 **CONTACT** にあつての Grand Central Station の章にあつての表記は ——オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして—— “ A network of straight lines appeared, representing the transportation system they had used. It was like the illuminated maps in the Paris Metro. Eda had been right. Each station, she deduced, was in a star system with a low-mass double black hole. She knew the black holes couldn't have resulted from stellar collapse, from the normal evolution of massive star systems, because they were too small. Maybe they were primordial, left over from the Big Bang, captured by some unimaginable starship and towed to their designated station. Or maybe they were made from scratch. She wanted to ask about this, but the tour was pressing breathlessly onward. ” とのものとなる)



(出典(Source)紹介の部 80 はここまでとする)

以上、出典紹介でもって示しもしたことに関わるどころとして重んじて然るべきと判じられることにつき指摘する。

その点、カール・セーガンの『コンタクト』という小説は [エイリアンに供与された技術によって製造された装置] が「ブラックホールをゲートにしている「らしい」とのもの」として構築されもすることになったことを描く作品であり(カー・ブラックホールのゲート化についてはそれが否定されるようにも描かれているが、その後の段で結局、[ブラックホール・ゲート]であることが言明されている —— 上の引用なししている部のページ数に「先後関係込みで」着目されたい ——)、また、生成されたと思しいと作中にて言及されているブラックホールが原始ブラックホールと作中にて結び付けられているとの作品でもあり(上にての引用部では “ **Maybe they were primordial, left over from the Big Bang, captured by some unimaginable starship and towed to their designated station.**” [おそらくは、ビッグ・バンの名残りの原始ブラックホールを捕獲して、超絶機能を備えた宇宙船で所定の位置に曳航したのであろう]との箇所を参照されたい)、加えて、ゲートありようによってはビッグバン直後の状況(世界)に転移させられる可能性があるのではないかと作中人物に想起されるとの描写がなされてもいるとの作品でもある(上にての引用部では “ **With a modest change of trajectory inside the tunnel, one could emerge from the other end as early in the history of the universe as `you might like--a picosecond after the Big Bang, for example.**” [例えば、ビッグ・バンのピコセコンド後かもしれないんです。宇宙はまだ、まったくの無秩序ですよ]との箇所を参照されたい)。

といったことら「も」実に不気味ではある。

何故か。本稿の内容をきちんと読まれており、目分量が利くとの人間には述べんとしていることにつき理解が及ぶであろうとのこととして、次のようなことらがあるからである。

「ラージ・ハドロン・コライダーが箱ものの装置として[ブラックホール]を生成すると考えられるようになり、そのことが実験機関に肯定的に認められるようになったのは「2001年以降」のことであるとされている(本稿の前半部にて詳述に詳述を重ねてきたことである)。セーガンの小説はそれに先立つこと、[1985年]の作品であるということが、要するに[ブラックホールの「人為」生成]との絡みでは時期的に平仄が合わない、予見的性質が問題に[なりうる]ように見える(この段階では「[なりうる]ように見える」と表記する)とのことがある —— また述べておけば、セーガンの『コンタクト』でブラックホールを生成するとされているのは明示的には加速器とは異なる存在、[黄金比の全身での体現物、レギュラー・ペンタゴン(正五角形)が12面重なって構築された正十二面体構造の構造物(小説作中で厳密なる用途および機序が人間サイドでは不明であるとされていた構造物)]であるとのこと「も」ある(そこからして問題であると判じられるだけの理由があり、については本稿の続く段にてその点にまつわっての解説を入念になすこととする) —— 」

「他面、セーガンの小説ではカー・ブラックホールにつき[落とし込まれれば、その先はビッグバンのピコセコンド後といった状況にありかねない]とほんのすこしわざわざ形容されていること「も」あるのだが(出典(Source)紹介の部 80にて訳書よりの記載も当然に引いているとの “ **Eda continued, "a Kerr-type tunnel can lead to grotesque causality violations. With a modest change of trajectory inside the tunnel, one could emerge from the other end as early in the history of the universe as `you might like--a picosecond after the Big Bang, for example.**” との部がそうなる)、といった描写からして、ビッグバン直後の状況を人為的に再現しようとしているとの加速器のことを想起させるものであるとのことがある(：出典としては本稿の先の段にて加速器がビッグバン直後の状況を再現しようとしているとされることを扱った部 —— 出典(Source)紹介の部 24 —— にあって次の通りの原文引用をなししていた通りであるとのことがある。(以下、アミール・アクゼル著 **Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider** 邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』(早川書房)24ページよりの再度の原文

引用をなすとして) “ LHC 内部での陽子衝突により解放される凄まじい量の高密度エネルギーは、科学を未踏の新たなレベル、我々の宇宙ではビッグバン直後以来観測されたことのない高エネルギーの領域へと押し進めてくれる。そのような形で大型ハドロンコライダーは我々を百数十億年昔に連れていき、誕生直後の灼熱の宇宙を満たしていた状態を見せつけてくれる ” (以上、再度の引用部とした)とのいわれようがなされているところである。といった一致性があることについては『[カー・ブラックホール]に自然(じねん)と伴うと受け取れる特質を述べただけ、であるから、牽強付会なこと(こじつけがましいこと)であろう』と思われる向きもあるかもしれないが、筆者はそうはとらえていない)」

「また、セーガンの小説にては(出典(Source)紹介の部 80)で引用なしているように) “ Each station, she deduced, was in a star system with a low-mass double black hole. She knew the black holes couldn't have resulted from stellar collapse, from the normal evolution of massive star systems, because they were too small. Maybe they were primordial, left over from the Big Bang, captured by some unimaginable starship and towed to their designated station. ” (新潮社より出されている訳書表記では)各駅は恒星系の内部に口を開けた低質量の一对のブラックホールであると思われた。ブラックホールはその大きさから判断して、大質量の星が正常な進化の果てに陥没したものではあり得なかった。おそらくは、ビッグ・バンの名残りの原始ブラックホールを捕獲して、超絶機能を備えた宇宙船で所定の位置に曳航したのであろう(再度の引用部はここまでとする)と[宿駅としての原始ブラックホール]のことが問題視されているが、そこに見る原子ブラックホールとは要するに原始宇宙にしかなかったと考えられるなどとされるブラックホールにしてラージ・ハドロン・コライダー(後述するように、映画化作品はともあれ、セーガンの原作小説『コンタクト』自体では当初、厳密なる用途および機序が不明との中で建造されていたとの設定のゲート発生装置と結びつけられて「いない」粒子加速器)で生成されうる極小ブラックホールのことであること「も」ある (:オンライン上より即時確認できようとの英文 Wikipedia[Micro black hole]項目の現行にての冒頭部記述を引いておく。→ “ Micro black holes, also called quantum mechanical black holes or mini black holes, are hypothetical tiny black holes, for which quantum mechanical effects play an important role. It is possible that such quantum primordial black holes were created in the high-density environment of the early Universe (or big bang), or possibly through subsequent phase transitions.[. . .] Some hypotheses involving additional space dimensions predict that micro black holes could be formed at an energy as low as the TeV range, which are available in particle accelerators such as the LHC (Large Hadron Collider). ” (大要として)「極微ブラックホールとは量子力学的ブラックホールとも呼ぶ仮説上の極小ブラックホールで初期宇宙の高エネルギーにて作られた原始ブラックホールとして存在していた可能性があるとのものである。近年の余剰次元などにまつわる仮説ではそういうブラックホールが LHC のような加速器にて実現なさしめられるテラ・エレクトロン・ボルト(兆単位の電子ボルト)程度のレンジにて生成される可能性がある」とされている通りである)」

「そして、[カー・ブラックホールというものが黄金比と結びつくとの指摘がなされるに至った —— 始原期については不分明なところも多少あるが、おそらく、セーガン小説の刊行後にそういう指摘がなされるに至ったと目される—— との存在(出典(Source)紹介の部 73)]であることを想起させるように『コンタクト』に登場する[ゲート発生装置]が[正十二面体構造]を呈するものとして[全身での黄金比の体現存在となっている装置]となっている(出典(Source)紹介の部 80(3)の部で後述する)とのこと「も」またある」

以上のようなことから「も」があるために『コンタクト』という作品の不気味さが増しめると申し述べるのである —— そうした類似性の話から一歩進んでより奥まったところにはきと存在していると見受けられる不快な相関関係としていかなことがあるのかについては本稿にあっての続く段でさらに解説する —— 。

Contact (1985)

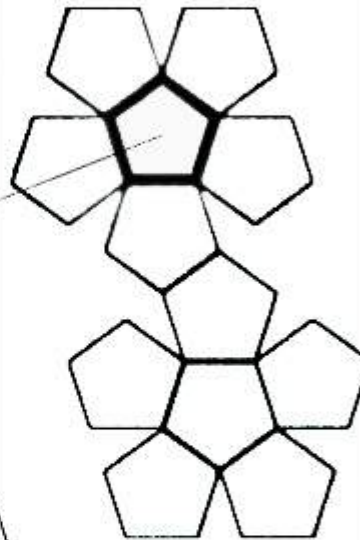
Gates

the traversable wormhole
the Kerr black hole

the Dodecahederon (正十二面体)



※正十二面体は黄金比(the golden ratio)の全身の体現存在とも述べられる図形であるが、そちらが小説『コンタクト』のゲートと描かれていることについてはいろいろな意味での科学的寓意性が問題になる。



Net (展開図)

ADD model (1998-)

LHC

generate?

detector experiments
(ATLAS, ALICE, CMS
MoEDAL, TOTEM, LHCf,
LHCb)

Kerr black holes

"Pass through this magic ring and presto! you're in a completely different universe where radius and mass are negative!" Kerr exclaimed to a colleague, when he discovered this solution. The frame of Alice's looking glass, in other words, was like the spinning ring of Kerr."

Michio Kaku, *Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions, and the Future of the Cosmos*

the Golden ratio?

" Another intriguing area of astronomy in which the Golden Ratio made an unexpected appearance is that of the extreme objects we call black holes. Black holes warp space in their vicinity so much that in Einstein's classical General Relativity, nothing can escape from them, not even light. (. . .) Spinning black holes (called Kerr black holes, after the New Zealander physicist Roy Kerr) can exist in two states: one in which they heat up when they lose energy (negative specific heat), and one in which they cool down (positive specific heat) . They can also transition from one state into the other, in the same way that water can freeze to form ice. Believe it or not, but the transition takes place when the square of the black hole mass (in the appropriate units) is precisely equal to ϕ times the square of its spin ! "

—— an article titled "The Golden Ratio and Astronomy" written by definitive astronomer Mario Livio (from huffingtonpost.com)

本稿にての【出典(Source)紹介の部73】を包摂する部で取り上げているように権威サイドの天体学者マリオ・リヴィオ（下らぬ陰謀論者らが真実をゴミに埋もれさせんとするがごとく紛い物の論法を展開する際に引き合いに出すようなフリンジサイエンスの話柄をこととするわけではないとの堅い筋目の科学者）に由来するところの申しよう、2012年10月22日発のという媒体のオンライン記事に見るところの申しようとして、「カー・ブラックホールには二通りの形態が存在しており、内、一方から他方への変異、水が氷になるが如く変異は一方の【質量】が【角運動量】（【スピン】と書かれてはいるが、門外漢ながらもアンギュラー・モメンタムこと【角運動量】のことを指すと解されるとのこと述べておく）の二乗の【 ϕ 倍】（黄金比そのものである縦横比1.6180339887... 倍）になった際に生じる」

との物言いがなされている。

「問題は、」カール・セーガンがそうしたカー・ブラックホールの黄金比と結びつく特性が公に理論として呈示される前、「1985年」にカー・ブラックホールと結びつくゲート装置を全身黄金比の体現存在である正十二面体と結びつけていたようである——ただし、その意での時期的な先後関係については保証しかねるところがある——との「節がある」こと「でも」ある（そして、こちらは門外漢ながらも「確実である」と述べられるところとしてセーガンがブラックホールゲートを【黄金比体現の正五角形（五芒星と永遠に続く相互内接関係によって無限小への力学を示すとの図形）を十二枚重ねての構造】と結びつけてのやりようを同男小説作品にてとったという1985年という時期はLHC実験によって「人為的に」カー・ブラックホールの類が生成されると科学界に肯定されるようになったのよりも【かなり前】に遡るものとなるとのことである——ブラックホール生成問題が取り上げられるに至った科学界動向については本稿にての【出典(Source)紹介の部1】から【出典(Source)紹介の部3】を包摂する解説部を参照のこと——）

さて、上のようなことらがあるとのことにつき、（カール・セーガン小説がそれと連携しているとのキップ・ソーン著作が化けものがかった不快なる予言をなしていると延々と詳述してきたものであったとしても）、常識的目線からすれば、次のような発想が出てくるであろうか、と当然に思いもする。

『カール・セーガンという男が加速器によるブラックホール生成可能性が世間ではまったく観念されていなかったとされる（本稿前半部にては加速器にてのブラックホール生

成が何時頃より観念されるようになったと実験機関はじめ科学界にあって断じられているかにつき解説をなしている)ところの1985年以前、小説執筆以前にて加速器におけるブラックホール生成問題を想起する余地があり、(何故、わざわざ明示しないとのやりかたをとる必要があったかは置いておき)、隠喩的に自身の小説にそうしたことにつらなる寓意を配したのではないか?』

以上のような当然ありうべきところの疑念——繰り返すも、カール・セーガン小説がそれと連携しているとのキップ・ソーン著作(BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy (邦題タイトルは原著に後れること三年後に刊行されたものとして『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』))が化け物がかった不快なる予言をなしていると延々と詳述してきたものであることは置いておいたうえでの常識目線での疑念—— については筆者が原著および邦訳版の小説『コンタクト』—映画版ではなく小説版の『コンタクト』—を精査したうえで得た知見に基づいてのこととして、次のこと、申し述べておく。

「DVD コンテンツ化されもして今日に至るまで多くの人間に視聴されているとの映画版はいざしらず小説版の『コンタクト』の方はブラックホール・ゲートといった塩梅のゲートの発生装置が[加速器]と「明示的に」作中にて結び付けられている形跡は「全くない」とのことがある。そして、同ゲート発生装置(『コンタクト』作者カール・セーガンの相談に応じてキップ・ソーンが[通過可能なワームホール]のアイデアを推し進めていき、それが科学界にてもある程度、着目されるに至ったとの経緯とつながっているところのゲート発生装置)については小説『コンタクト』作中にて結果的にゲート発生装置と判明したものであり、作中ではそれが完成して使用されるまで一体全体、どういう目的の装置なのかも判然としないとの描写がなされているものでもある」

とのことがある(下の出典部を参照のこと)。

出典(Source)紹介の部 80(2)

SOURCE

80(2)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 80(2) には小説『コンタクト』登場のゲート装置(作中では[マシン]と記載されている装置)が

[異星人から送信されてきた設計図を元に同装置を建設している作中登場人物にも意図不明な装置 ——結果的にゲート発生装置として判明したもの—— と見られているものである(換言すれば、既知の[加速器]のような装置とは無縁なるものと描写されているものである)こと]

の出典を挙げておく。

(直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)178 ページ、[超統一理論]の章よりの原文引用をなすとして)

明けてく始動の日>、計画本部では上級スタッフを対象に、結果を予測するアンケートを行なった。<マシン>は動かず、何事も起らない、とする回答が大半を占めていた。少数ながら、相対性理論に反しようとうとうと、五人は瞬時にヴェガ系に移動するに違いない、と予測する回答もあった。その他、意見は多岐にわたっていた。<マシン>は太陽系探査機であるとするもの、史上最大級の浪費を狙ったいたずらだとするもの、その他、教室、タイムマシン、銀河世界の公衆電話など、いろいろな解釈が示された。ある科学者は、「五人は座席に坐ったまま徐々に緑の鱗と鋭い牙を持つ醜悪な姿に変わることだろう」と回答した。これは<トロイの木馬>に最も近い考え方だった。一人だけ、ずばり<終末機械>と記した者がいた。

(引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 CONTACT にあつての Superunification の章にあつての表記は ——オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして—— “ Next day, Activation Day, they took an opinion poll of the senior staff on what would happen. Most thought nothing would happen, that the Machine would not work. A smaller number believed that the Five would somehow find themselves very quickly in the Vega system, relativity to the contrary notwithstanding. **Others suggested, variously, that the Machine was a vehicle for exploring the solar system, the most expensive practical joke in history, a classroom, a time machine, or a galactic telephone booth. One scientist wrote: "Five very ugly replacements with green scales and sharp teeth will slowly materialize in the chairs." This was the closest to the Trojan Horse scenario in any of the responses. Another, but only one, read "Doomsday Machine."** ”とのものとなっている)

(以上に関してはその記述内容との兼ね合いでいろいろと問題となるところがある([トロイの木製の馬の懸念の持ち出し]や[ドゥームズ・デイ・マシンという言葉の使用]や[爬虫類への変化促進]といったことがそうである)のだが、後にも問題視することにするとのそうした描写に伴う問題点のことは置いて、「とりあえず、」ここ本段ではゲート発生装置が[その厳密なる用途および機序が不明なるもの]と小説『コンタクト』登場人物に見られているとのことを指し示すのに注力している)

さらに述べれば、カール・セーガンの『コンタクト』原作小説に関して言えば、相応の英単語ら、[アクセレーター(加速器)][リニアコライダー(線形加速器)][コライダー(衝突加速器)][サイクロン(前時代の汎用型円形加速器)][シンクロトン(サイクロトンの進化形)]といった加速器を指す英単語らと

ゲート発生装置が結び付けられている形跡すら「ない」、手前が精査する限り「ない」とのことがある(：などと述べても、—[あることが記述されている]とのことを証明することは該当となる部位を細かくも出典として挙げることで済むが— [そういう風にはなつて「いない」]ことを証明することは難しいので「疑わしい」と考えられた読み手におかれては『コンタクト』の原著ないし邦訳版を直に手に取ってみてそうした語が含まれて「いない」のか確認してみるとの視点で検証いただきたいとも思っている)。

(補足として)

ただ、上記のこと——小説『コンタクト』の[ゲート装置]が加速器の類と結びつけられていないうえに、小説『コンタクト』には[加速器]という言葉も用いられていないとのこと——については二点ほど、補足しておくべきことがある。

第一。書籍からして(確認する限り)一か所だけ、[ゲート装置属性]とは直接的に関わらないところで加速器にまつわる用語ともなるものが出ているとのことがある。その点、紛らわしいところではあるが、『コンタクト』第十九章[裸の特異点]の部にて(新潮社版文庫版下巻 208 ページより抜粋するところとして)
「エリーが察した通り、もしここが銀河系の中心だとすれば、十二面体は強いシンクロトン輻射にさらされているはずである」
との[ゲート装置ではなくゲート装置の行き先に関する作用]として加速器(円形加速器)実験に伴う現象として知られる *synchrotron radiation* [シンクロトン輻射]との言葉(円形加速器シンクロトロンを用いての高エネルギー状況下にて[ローレンツ力]というものによって荷電粒子軌道を曲げることによって発生する電磁波の放射現象)が唯一回だけ用いられているとのことがある——疑わしきにおかれては原著および和訳版を検討して確認いただきたいものである——。

また、補足しておくべきととらえた第二の点として小説版ではなく映画版の方には加速器と結びつくような色合いが付されているとのことがある。小説『コンタクト』(1985)より12年後、セーガン没後まもなくしての1997年に封切られた映画版『コンタクト』および、その公開後、さらに後の日に世に出たDVD版解説部ではセーガン小説由来の移動装置が加速器と結びつくような描写・解説がなされている。

具体的には手前が検討した日本国内で流通を見ているDVDコンテンツ『コンタクト』日本語解説部(おまけ・追加要素としてよくDVDコンテンツに付されている作品解説項目の部の内容)によると[ポッドの建造]と付された部にて

(以下、国内流通DVDコンテンツにてのボーナストラック部表記より原文引用するところとして)

「設計図によれば、マシーンはリング状の線状加速器の組み合わせで、そのリングが回転して強いエネルギー空間やプラズマ渦を作り出すことになっている。ポッドは、この渦の中心にできた”ワームホール(連絡路)”へと落とされ、乗員は瞬時に宇宙の別の場所に運ばれるのだ」

(以上、日本語サブタイトル(字幕)付きの特定DVDコンテンツに認められる、(俗にボーナストラックと呼ばれるような部にての)、主演女優ジョディ・フォスターの写真を背景とした和文解説箇所よりの原文引用とした)

との解説が付されているのである。

ロバート・ゼメキスという著名映画監督が撮った映画版『コンタクト』に表記のような背

景設定が[1997年映画版のオリジナル要素]として採用されているとすることがあるのか、あるいは、DVD版の発売に伴って「後付けで」そういう解説が付されたものなのか判然とはしないのだがひとつ述べられることは、

「1997年に世に出た映画版『コンタクト』(ないしさらに後に出たDVDコンテンツ版)のゲート装置に加速器との接合要素があっても1985年初出の小説版『コンタクト』のゲート装置に関しては加速器との接合性は明示的には見受けられない」

ということである(：生成されるのが[カー・ブラックホール]であるのならば、そして、それが周囲を飲み込みだしたらば、トロイアの木製の馬としての字義通り皆殺しを伴うゲートが構築されることになるとも述べられようものにつき、[マーベラスな世界に誘(い)ざな]う少数人利用型ワームホール生成装置]などの作中設定が採用されているのは[実に都合が良い、「大衆」向けやりよう]であると受け取られることがあるとこのことは置く。尚、加速器でブラックホール生成が可能ではないのかとの疑義が批判家によって呈されたしたのは1999年以降であると知られており、1999年当時でさえ粒子加速器実験機関を主軸とする科学界動向が[ブラックホール生成はありえない]の一辺倒であったところが2001年より1998年に登場した新規理論に依拠しての理論変転でブラックホール生成可能性が肯定的に容れられ出したとこのことが事情が(フィクションならぬ)現実世界にはあり——[出典\(Source\) 紹介の部 1](#)および[出典\(Source\) 紹介の部 2](#)——、それ以前に関しては[人間の手の届く範囲の加速器]ではブラックホール生成など夢もまた夢とされていたとこのことが現実世界を巡る状況となっている——[出典\(Source\) 紹介の部 1](#)にて複数挙げている文書ら(加速器実験実施機関の専門的一次資料も含む文書ら)のうちの実験機関公的報告文書 Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC および米国法学者による案件分析文書 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD などよりの本稿にての抜粋部を参照のこと——。であるが、そのことはここ10数年以前に加速器とブラックホール・ワームホールの類が結びつけられて「なかった」とのこととは直結しない。本稿の先の段でも述べているような現実的活動の一環として本件に取り組んできたとの背景があるがために突き詰めての分析・調査をなした者として指摘できることとして[プランク・エネルギー](現行、人類が到達しうるテラ・エレクトロン・ボルトがナノジュール相当のエネルギーに過ぎないものであるところをギガジュール相当のエネルギーと結びつく絶大なエネルギー)相当のエネルギーを極小の領域に詰め込めるような加速器が存在すれば、加速器でブラックホール・ワームホール生成がなしうとの視点は(本稿で問題視したアラン・グースといった物理学者らの論稿が世に出ていた)「1990」年前後から取り沙汰されるだけの素地が実際にあったと解され、そうした兆候を体現しての小説作品([太陽系サイズの加速器]を登場させている小説作品たる『ディアスポラ』)もが現実に存在しているとのことがある——本稿にての[出典\(Source\) 紹介の部 21](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 21-5\(2\)](#)を包摂する解説部を参照のこと——。が、といったことらは[ダイナマイトしか製造する能力が無い文明]が[核爆弾級の火力の時限爆破装置]のことを云々するのに等しいことであるようなところがあり、何にせよ、ブラックホール生成の問題が現実的に見られるようになったのは従前枠組みから見てのプランク・エネジーではなくテラエレクトロン・ボルト単位のエネルギー(本稿にて先述のように蚊の飛ぶ静止エネルギー kinetic energy に等しいエネルギー)を陽子の領域、蚊の一兆分の一のサイズの領域に投下するだけでブラックホールが生成されると「新たに」考えられるようになった(1998年以降の理論動向を受けての)「2001年以降」であるとのことが専門家らが身内間で申し述べているところとなっている——本稿にての冒頭部、具体的には[出典\(Source\) 紹介の部 1](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 3](#)の内容をよくも精査いただきたい——)。

何故、そも[時期的厳密性]を重視するのだが、(脳の天気が良いとの向きら・あるいはそもそもって生き残るための努力の意味合いさえ理解しない程に頭が機能していないとの向きらにはそこからして「最期」まで慮り難いかとも思うのであるが)、これよりさらに摘示することになる小説『コンタクト』に見るカール・セーガンやりよう——あるいは[ユースフル・イディオット](意味は各自お調べいただきたい)として有用との意で「愛いやつよ」と引き立てて用意した類であったとも取れるカール・セーガンという「紐付き」の傀儡ググツの背面にあつて作用していた[力学の作用の仕方]とした方が適切かもしれないが、繰り返すも、本稿本義は[マリオネット仮説]を専一に云々することにはない——、そのセーガンの「特定の」やりようからして

[我々の生き死にの問題に関わるどころ]として[正確性を重視しながら突き詰めて見ねばならぬ]との要素が伴っている、という認識が 一本稿にてここまで具体的に摘示してきたような[あまりに奇怪]かつ[あまりに不快]な事由らを斟酌したうえでも— この身にあるからである(:尚、そうしたことをひたすらに突き詰めて見る必要があると訴求するこの身ではあるが、かく述べる自身とてときに錯簡・誤記の類をなしてしまう、固有名詞を誤って表記する、基礎概念について脱字・脱漏を含んでの表記をなしてしまう、といった汎ミス¹の範囲ではミスをなしてしまう(しかもときに不寛容な人間に軽侮冷笑を買おうとのところでそういうミスをなしてしまう)こともある[人間としての欠点]を有していることもあるとは重々認識している。しかし、筆者の述べていることの本質部を傷つけるようなかたちでそういうことが生じるのに努めて神経を使うべきであると最近「より一層」注意するようになっており、その体現物が慎重を期しての本稿であるとも述べておく)。

出典(Source)紹介の部 80(2)はここまでとする

さて、ここまできたところで

[カール・セーガン著書『コンタクト』に見るゲート発生装置が **黄金比 —カー・ブラックホールと**呼称されているものにまつわる理論動向でも重要視されていることを先述してきたとの**黄金比—の全身での体現物たる正十二面体構造**]([三層の球殻構造体を有し人が入り込む本体は十二面体構造となっているとの構造])との形態を呈する]

とのことの出典を挙げることとする(:同じくものこと、小説『コンタクト』に見る [ブラックホール人為生成と結びつけられたゲート装置] が [正十二面体構造] を呈するとのことが「何故もってして問題になるのか」についてはこれよりも振り返り、かつ、整理しながらもの解説をなす所存だが、証して示す、[証示]をなによりも重視している本稿ならではのこととして[文献的事実]の問題をつまびらやかにすべくも小説よりの原文引用にて典拠を示すとのことを「まずもって」なすこととする)。

出典(Source)紹介の部 80(3)

SOURCE

80(3)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 80(3)にあつては

[カール・セーガン小説『CONTACT』に見るゲート発生装置が「三層の球殻構造に囲まれた、正五角形を十二面つなぎ合わせての正十二面体」との構造を呈する]

このことの典拠を原文引用にて挙げておくこととする。

(直下、邦訳版カール・セーガン『CONTACT』文庫版下巻(新潮社)99 ページ、[エルビウムの車知]の章よりの中略なしつつもの原文引用をなすとして)

座席の上下、十二面体の内壁が斜めになっているところに例の異様な有機物体が取り付けられ、その間隙を縫って、一見無作為に、エルビウムの車知が埋め込まれている。十二面体の外側を三層の同心球殻が覆っている球殻の回転軸は、そのまま三次元座標軸に相当すると言える。球殻は磁力によって保持されるものようである。それは<メッセージ>に強力な磁場発生装置の指定があり、十二面体と球殻の間は高度の真空でなくてはならないとされていることから得られる結論である。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 CONTACT にあつての Erbium Dowe の章にあつての表記は——オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして—— “ Placed **throughout the interior of this part of the dodecahedron**, apparently at random, were the dowels of erbium. And

surrounding **the dodecahedron** were the three concentric spherical shells, each in a way representing one of the three physical dimensions. The shells were apparently magnetically suspended-- at least the instructions included a powerful magnetic field generator,' and the space between the spherical shells and **the dodecahedron was to be a high vacuum.**” とのものとなる)

(続けて、直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)134 ページ、[オゾン
の長老たち]の章よりの中略なしつつもの原文引用をなすとして)

<マシン>は三層の同心球殻に覆われています。球殻はニオブウム合金製で、その表面に特殊なパターンが彫られている。これが真空中で三方向に直交する軸を中心に高速回転する構造であることは明らかで、今ではベンゼルと呼ばれ習わされています。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 CONTACT にあつての The Elders of Ozonel の章にあつての表記は —オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして— “ There are three big spherical shells, one inside the other. They're made of a niobium alloy, they have peculiar patterns cut into them, and they're obviously designed to rotate in three orthogonal directions very fast in a vacuum. Benzels, they're called.” とする)

(さらに直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)189 ページから 190 ページ、[裸の特異点]の章よりの中略なしつつもの原文引用をなすとして)

<マシン>に乗って五人は落下していった。**十二面体の正五角形の隔壁は透明に変わった。**…(中略)…十二面体は、ほとんど内接するばかりの狭いトンネルに飛び込み、闇の奥へ突き進んだ。…(中略)…地球のマントルの中を、溶けた鉄が煮えたぎる核へ向かって潜行しているという印象を拭えなかった。…(中略)…エリーはこの何とも説明しようもない体験を、ギリシャ神話の黄泉の川、スティクスをフェリーボートで渡る光景になぞらえて把握しようと試みた。…(中略)…底無しの井戸を限りなく落下して行くとしたら、その先にはいったい何が待ち受けているのだろうか。…(中略)…**ブラックホール。彼女は確信した。これはブラックホールに違いない。<マシン>は事象の地平線を超えて、恐るべき特異点に向かっているのだ。あるいは、ここはブラックホールではなく、<マシン>は裸の特異点に接近しようとしているのだろうか。裸の特異点……。**

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 CONTACT にあつての Naked Singularity の章にあつての表記は —オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして— “ They were falling. **The pentagonal panels of the dodecahedron had become transparent.** So had the roof and the floor. [. . .] The dodecahedron plunged, racing down a long dark tunnel just broad enough

to permit its passage. [. . .] It was hard not to entertain the thought that they had plunged into the mantle of the Earth, bound for its core of molten iron. Or maybe they were on their way straight to... She tried to imagine this improbable conveyance as a ferryboat upon the River Styx.[. . .] Or what if this was an endless fall into a bottomless well?[. . .] **Black hole, she thought. Black hole. I'm falling through the event horizon of a black hole toward the dread singularity. Or maybe this isn't a black hole and I'm headed toward a naked singularity.**”とのものとなる)

上にて新潮社邦訳版および原著版よりの抜粋をなして示しているように『コンタクト』主人公(エリーという女性科学者)が入り込んだとの、

[外宇宙の先進文明から設計図送られてきて構築されたゲート地球圏内構築装置兼移動装置]

というのは

[**三層の球殻構造に囲まれた、正五角形を十二面つなぎ合わせての正十二面体 (The pentagonal panels of the dodecahedron) 構造**]

をとるとのものなる(尚、先述もしてきたところとして同装置、明示的には[加速器]とは結びつけられていない —※—)。

※カール・セーガン小説『コンタクト』(1985)に見るゲート装置、すなわち、
[三層の球殻構造に囲まれた、正五角形を十二面つなぎ合わせての正十二面体構造をとる装置]
が明示的には加速器とは結びつけられていないとのことは先述してきたことだが、
ただしもって、隠喩的に「仕様」との面でそれが加速器と結びつけられている可能性は否定できないところがあるとも私的には考えている。

そも述べる理由としては

[三層の球殻構造に囲まれた、正五角形を十二面つなぎ合わせての正十二面体構造をとる装置]
が原作小説作中にて[真空]や[磁場の増大]といったことと結びつけられているとのことが挙げられる(：上にて引用なしたところとして邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)99ページ、[エルビウムの車知]の章にて“球殻は磁力によって保持されるものようである。それは<メッセージ>に強力な磁場発生装置の指定があり、十二面体と球殻の間は高度の真空でなくてはならないとされていることから得られる結論である”(引用部はここまでとする/オンライン上より確認できるとの原著表記は“The shells were apparently magnetically suspended — at least the instructions included a **powerful magnetic field generator**, and **the space between the spherical shells and the dodecahedron was to be a high vacuum.**”となる)と記載されているとおりである)。

その点、ここ数十年で新規理論の登場によってブラックホール生成可能性が取り沙汰されだしたとのLHCのような加速器は[双極性の[磁場]を発生させるものたる磁石]、その超強力版の超伝導磁石を用いているとのものであり、また、その超電導磁石を用いての運用に際して[真空]状態の管を利用しているとのものともなる(下にそちら典拠をも挙げる)、であるから、その伝、すなわち、[磁場発生]の要求と[真空状態の要求]との伝では『コンタクト』に登場の12面体構造を呈する【マシン】と[加速器]の接合性を感じさせられなくもないとのことがある — (先述のように『コンタクト』原著作中には[アクセレーター(加速器)][リニアコライ

ダー(線形加速器)][コライダー(衝突加速器)][サイクロン(前時代の汎用型円形加速器)][シンクロトロン(サイクロトロン(の進化形))]といった言葉はゲート装置ありよとの兼ね合いで用いられていないとのことがあるのだが、とにかくものごととして、である)——。

[加速器が [超電導磁石] および [真空状態] と結びつくことにまつわる出典として]

ここでは[人類の辿り着いた技術の精華としての加速器ありよう]についても言及しているとのリサ・ランドール著『宇宙の扉をノックする』にあっての次の如き記述を紹介しておく。

⇒

(以下、リサ・ランドール著『宇宙の扉をノックする』192 ページから194 ページにみとめられる記述内容の[大要紹介]をなすとして)
[人類史上最大規模の機械である LHC で用いられるのは[工業生産された中で「史上最強」の超伝導双極磁石](地球磁場の 10 万倍規模の磁場を生み出すとのもの)となり、また、ビッグバン 1 兆分の 1 秒後の高エネルギー状態を現出するための陽子ビーム衝突のための陽子を入れる管 —LHC は全長 27 キロメートルを陽子ビームが駆け巡る装置である—には大気の 10 兆分の 1 の真空状態が実現されている。陽子ビームのエネルギーが凝集されるシリンダーは 1000 トンのコンクリートに包まれている。そうした LHC はテクノロジーを限界まで推し進めてのものである]

以上、『宇宙の扉をノックする』(NHK 出版ハードカバー版) 192 ページから 194 ページに見る内容の要旨紹介としたとし、原著にての

[工業生産された中で「史上最強」の超伝導双極磁石の使用](地球磁場の 10 万倍規模の磁場を生み出すとのものの使用)

および

[ビッグバン 1 兆分の 1 秒後の高エネルギー状態を現出するための陽子ビーム衝突のための陽子を入れる管 —LHC は全長 27 キロメートルを陽子ビームが駆け巡る装置である—にての大気の 10 兆分の 1 の真空状態の実現]

に対応する記述も挙げることとする。

その点、原著にての同じくものところに対応する表記は以下のようなものとなる。

→

Lisa Randall の手になる原著 **Knocking on Heaven's**

Door にあっての、

CHAPTER EIGHT ONE RING TO RULE THEM

ALL[第八章 **すべてをすべる環**] (トールキンのあまりに

もよく知られたハイ・ファンタジー小説、**The Lord of the**

Rings『指輪物語』にて登場する冥王サウロンの指輪である

[ひとつの指輪(One Ring)]に鑄込まれているとの設定が

よくも知られている文章、**One Ring to rule them all, / One**

Ring to find them, / One Ring to bring them all, / And in

the darkness bind them. 「ひとつの指輪は全てのものを
統べるものなり／ひとつの指輪は全てを見出すものなり／
ひとつの指輪はすべてを捉えて放さぬ、闇へと捉えて放さ
ぬものなり」より影響を受けてのものであろうこと自明の[第
八章 すべてをすべる一つの環]との題が(巨大なリングで
ある LHC を形容するためにであろう)付されての章)

に見る、

**“ The magnetic field is not merely big: the
superconducting dipole magnets generating a magnetic
field more than 100,000 times stronger than the Earth’s
are the strongest magnets in industrial production ever
made. And the extremes don’t end there. The vacuum
inside the proton-containing tubes, a 10 trillionth of an
atmosphere, is the most complete vacuum over the
largest region ever produced.”**

との部位(が【強力な磁場の要請】【真空状況の実現】との
加速器実験に伴う特性にまつわる部となる)

上にて示したように、である。これぞ[人類文明の精華]といった評されようがなされもしている LHC (その著作 Knocking on Heaven’s Door にてカリスマ女流物理学者であるとの Lisa Randall リサ・ランドールが述べているところとして「LHC とは、」 **there is no question that it’s a stupendous achievement.**「疑問差し挟む余地無くもの偉業」であり、**Although the scientist in me recoils at first in thinking of this incredibly precise technological miracle as an art project — even a major one — I couldn’t help taking out my camera and snapping away.**「科学者との人種はこうもしたテクノロジー上の奇跡をして芸術品とみるには後じさりするものだが、自分としては LHC を前にして思わずシャッターをひたすらにきりまくらざるをえなかった」との如きもの、**The extremes achieved at the LHC push technology to its limits.**「LHC はテクノロジーを限界までに押し進めたものである」とのことである) に関しては仕様として[地球磁場の 10 万倍の磁場を生み出すことが要求されてのもの]であること、そして、[大気 10 兆分の 1 の真空状態の 27 キロメートルもの管の構築が要求されてのもの]であるとの観点が呈されている。それが『コンタクト』の[マシーン](先述のように明示的には加速器とは結びつけられていない装置にして[ブラックホール生成ないしワームホール生成をなした存在]とその使用后、判明した装置)の作中にての設計仕様 — [磁場発生させるための超電導磁石の使用]と[真空状況の実現]が求められるとの仕様 — と接合性を感じさせるとの按配となっているわけである。

知識がない人間がただ単に読むだけでは気づけないことかもしれないが(というより知識がない限り「絶対に」「間違いなく」気づけないことであろう)、といったことまで顧慮すると、小説『コンタクト』に関してはカール・セーガンが[一個人の意思]として加速器に対する意識誘導を分かる人間に対して隠喩的になしていた、とのこと「も」考えられなくもない。

仮にもし、そうであるのだとすれば、(後述するような鼻をつくような役者臭「など」のために筆者としてはカール・セーガンという男の【属人的意志の賜物】としてそのようなことがなされていたとは考えていないのだが「仮に」そういうことがなされていたのであるとすれば)、『小説『コンタクト』リリース往時、米国にて建設計画が進んでいた加速器 SSC に対して[注意を向ける意図]が「言論人」カール・セーガンにあったのではないか?』と見る向きによってはとらえるところか、とも思う。

それにつき、くどくも繰り返すところとして、筆者は『そういうことではないだろう』と判じているわけだが、そのように『ないだろう』との見立てをなしている理由としては

[コンタクト初出時の1985年には加速器のブラックホール生成問題は観念されるところではなかったとの理論動向にあつての問題が伴っている]

とのこと、及び、

[カール・セーガンやりようおよびその属人的特性には悪い意味で希望的観測をおけぬとの要素が伴う]

とのことがある(本稿の続く段を検討いただき、その[妥当性]についてはご判断いただきたいものである)。

尚、先にもそちら文言引きながら言及しているところとして小説版ではない映画版の『コンタクト』(1997年公開)の日本国内DVDコンテンツにて特典として付されているボーナス・トラックの部には文字情報解説部に見るところとして

[ゲート発生装置が粒子加速器と「明示的に」結びつけられている]

とのことがあるのだが、そも、完全版DVDコンテンツが普及しだした折には1999年以降の流れが(本稿**出典(Source)紹介の部1**で述べているように)ターニング・ポイントとなって既に加速器のブラックホール生成が(ありうる、ありえないの別は置き)問題になっていたと解されもすることを顧慮する必要がある——ただし、厳密に海外初期ロットのDVDの中身までを検討して先後関係を煮詰めているとのわけではないため、何とも言えない。それにつき、先にその内容を原文引用なしもしたDVDコンテンツに付された文字情報解説部は原作小説『コンタクト』の先覚性問題を韜晦(とうかい、見えづらく)させるが如くのやりよう(DVDコンテンツ作成時のやりよう)のものであるか、そうでなければ、映画監督ロバート・ゼメキスの時点で付されたそちらかして問題になりうる「先覚的」やりよう(1998年では未だブラックホール生成可能性は加速器に関しては取り上げられていなかったがため、1997年映画公開前にそういう背景設定が現実付されているところならば、こちら「先覚的」やりようになる)であろうと見立てている——。

(**出典(Source)紹介の部80(3)**はここまでとする)

さて、ここまできたところで述べるが、以上、**出典(Source)紹介の部80(3)**を通じて指し示しもしたとのこと、小説『コンタクト』に見るブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲート構造装置が正十二面体構造の装置として登場を見ているとのことは、(先行するところの**出典(Source)紹介の部77**、**出典(Source)紹介の部77(2)**の指し示しの内容をも加味して)、

「アトランティス(Atlantis)の存在およびその沈没に言及していることでも著名なプラトンのTimaeus『ティマイオス』にて全天を造る元素——後の思想界での第五元素アエテル(エーテル)に通じているとのもの——となっていると言及されていることで著名な「正十二面体」が小説『コンタクト』にあつては(「全身での黄金比の体現存在」であることに加えて)「通過可能なワームホールの提唱と深くもつながっているもの」とされている]

とのことと同義のことである——著名物理学者キップ・ソーンに[通過可能なワームホール]の考察を

なさしめることになったとのことでよく知られているカール・セーガン小説『コンタクト』にて「宇宙の彼方と地球を結ぶ装置の形状」が「際立って」十二面体構造をとると描写されているとの文献的事実を示したとのことと(本稿従前指し示し内容を加味しての)上のことは同義である——。

[整理のための部として]

ここまで来たところで

「[a]から[f]と振っての段階的な話をなしていく」

と先述なしていた一連の流れにあつて[a]の段を終え、次の[b]の段に入る前にあつて[a]の段(およびその直前の段)にて示してきたことにつき[整理]のためのまとめ表記をなしておくこととする。

本稿では[a]と振っての部に入る前に以下のことにつき指し示してきた。

「そうしたものが存在していること自体が奇っ怪なことではあるが、**[911の事件の発生に対する多層的的事前言及をなしていることで問題となる作品]**であるとの小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』には**[[正五角形(ペンタゴン)と黄金の林檎](「ゴールデン・アップル)を並置させてのシンボル]**が頻出を見ている。につき、そちらシンボルで描かれる**[正五角形]**(黄金の林檎と対面並置させられているとのシンボル)は**[五芒星]**とワンセットになって**[黄金比]**の体現存在として人類の数学史にあつて(ピタゴラス学派やりようとの絡みで)意をなしてきたとの図形であることが知られている」

「**[正五角形]**は**[五芒星]**とワンセットになって**[黄金比]**の体現存在となっているとのことが指摘される中で、**[五芒星]**の方は洋の東西で**[退魔の象徴]**となってきたとの背景がある。他面、(それが五芒星とワンセットになることで黄金比との関係性が明確化する)**[正五角形]**に関しては本稿にてそちら奇怪なる特性について問題視してきたとの表記の小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあつて**[退魔の象徴]**として登場を見ているとのものである。そういう**[退魔の象徴]**とのかたちで(本来的には**[五芒星]**がそれに相当するところを)問題となる小説にて登場する**[正五角形]**(ペンタゴン)が同じくもの小説(『ジ・イルミナタス・トリロジー』)で**「黄金の」林檎**と並置されたうえで図示までされて何度も描写・登場してきているとのことがある。であるから、**[五芒星←→正五角形(黄金比に結びつく対応関係)]**を想起させるように**[五芒星→(退魔の象徴)→正五角形との転換方式]**が**【「黄金の」林檎と「正五角形」の対応関係が頻出を見ている小説】**にあつて具現化してもいる、はなから**[正五角形と黄金比の関係に対する隠喩的言及]**を企図して具現化していると受け取れもするところとなっている。そして、そうした小説(911の先覚的言及を多重的になしているといった特質がゆえに奇怪性が問題になりもするとのこと本稿で解説してきた小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』)では古代アトランティスおよび現代アメリカの**ペンタゴン**(**[正五角形]**)が爆破されて異次元介入存在が解き放たれるとの筋立てが現出を見もしている(アトランティスについてはプラトン古典『ティマイオス』、黄金比と結びつきもする正五角形を十二枚重ねての正十二面体をして宇宙を構成する第五元素のように描写しているとの同古典にてその存在と崩壊過程が語られているとの古の海洋国家なる)」

「ノーチラスことオウムガイについては**[黄金螺旋]**とのかたちにて全身で**[黄金比]**を体現しての存在であるとの俗説が根強くも伴っている(ただし、**出典**

(Source) 紹介の部 78 (2) にて言及しているようにそれは必ずしも真実とは限らない。ノーチラスことオウムガイは(黄金比とも親和性が高い)対数螺旋とは「確として」結びついている、そして、対数螺旋構造は(五芒星と五角形の黄金比と結びつく相互内接関係が「無限小に至る力学」を体現するように)「無限小に向かう力学」を指し示すものともなっているわけだが、ノーチラス外殻構造が黄金螺旋状を正確に呈するのには都市伝説の域を出ないとの言われようも他面ではなされている)。さて、頭足類のノーチラス(オウムガイ)の名を冠するジュール・ヴェルヌ小説作品『海底二万里』に登場するのがネモ船長のノーチラス号という潜水艦となるのだが、そちらノーチラス号よろしくの「黄金の」潜水艦を駆る男がせんだって言及の『ジ・イルミナス・トリロジー』の主人公となっていることがある。文献的事実の問題として「ノーチラスの名を冠する潜水艦」と「黄金の潜水艦」の接合性を介して『海底二万里』と『ジ・イルミナス・トリロジー』の両作が「明示的に」結びつけられているとのことがありもするのである(後者の『ジ・イルミナス・トリロジー』の中で黄金の潜水艦のことが前者の『海底二万里』のノーチラス号と作中内それ自体にて明示的に結びつけられているとのことがある。また、『海底二万里』も『ジ・イルミナス・トリロジー』も双方、「海底にあってのアトランティス遺構の探索」が描かれる作品「とも」なっている)

以上のことらを加味すれば、

[911 の露骨なる前言小説としての特徴を帯びている指し示しを本稿にてなしている(出典(Source) 紹介の部 37 から出典(Source) 紹介の部 37-5 を包摂する解説部などで延々となしている)との小説『ジ・イルミナス・トリロジー』の主役級人物であるハグバード・セリーンが駆る「黄金」色の潜水艦(レイフ・エリクソン号)] ⇔ (対応) ⇔ [ネモ船長の潜水艦(『海底二万里』のオウムガイ号ことノーチラス号/ノーチラスは黄金螺旋ことゴールデン・スパイラルを近似的に体現している存在であるなどと 一たとえ不適切に、でも 一 よくも表されるオウムガイの名を冠するノーチラス号)]

との関係性に「黄金比」との兼ね合いで着目するのは行き過ぎにならないだろうとのことにもなる(そして、そうした関係性はより先立ってもの段にて摘示してきた $\alpha 1$ から $\alpha 7$ の一連の関係性とも接合するものとなっている)。

上の式で[a]の段に入る「前」にあって解説なしてきたことに通ずるところとして[a]の段では「まずもって」本稿にての従前の段にて指し示していたこと、

[LHC (のブラックホール生成挙動) はアトランティスと結びつけられている]

[LHC ではカー・ブラックホールというものが生成されうるとの物理学者申しようがなされてきたとの経緯がある]

[カー・ブラックホールというものについてはワームホール同様、[異なる空間を結びつけるゲート]たりうるとの話が伴っている。また、カー・ブラックホールというものについては「黄金比」との結びつきが指摘されてきたとのこともある]

とのことらにつき振り返りもしながらも解説を加えもした。

そのうえで同じくもの[a]の段にあっては

[カリスマ物理学者キップ・ソーンに「通過可能なワームホール」の考察をなさしめることになったことでよく知られもしている小説作品としての小説『コンタクト』]

につき「これより問題視していく」として、話を進めた。

以上のことを[a]の段にて指し示す過程で次のことらを(再)訴求・摘示することとなった。

・[911の事件の発生前の事前言及事物としての特性]を多重的に含むとの[通過可能なワームホールにまつわる思考実験にまつわる記述部]を内包している(具体的・客観的にそのように摘示なせてしまうようになっている)というのが「これまたもの奇っ怪なる文物」である書籍 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** (邦題)『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』となるが、同著をものした物理学者キップ・ソーン、そのキップ・ソーンがまさしくも問題としている小説『CONTACT』作者カール・セーガンに小説設定に対するアイデアを提供するよう求められ、その過程で煮詰めていったのが[そもそもの通過可能なワームホールを巡る理論の登場経緯]となっているとのことがある(：本稿にあつての従前表記を振り返るとのかたちで典拠となるところを紹介したこととなる——言い換えもしてまとめれば、キップ・ソーン著作 **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy** (原著 1994 年初出)にあつて[911の事件の発生前の事前言及事物としての特性]に関わって問題となりもするのが[通過可能なワームホール]にまつわる部であるとのことがあり、また、カール・セーガン小説 **CONTACT**『CONTACT』(原著 1985 年初出)に物理学者キップ・ソーンがアイデア提供なしたことがそちら[通過可能なワームホール]にまつわるそもそもの理論的出発点となっているとのことがあるわけである——)。

・キップ・ソーンよりアイデア提供なされていることでも知られるカール・セーガン著書『CONTACT』に登場する異星文明より供与されたとの設定のゲート装置が通過可能なワームホールのみならずカー・ブラックホール(本稿にての[出典 (Source) 紹介の部 73]で黄金比との関係が指摘されていることにつき言及したカー・ブラックホール)とも結びつけられているとのことがフィクションそれ自体(に見る文献的事実に関わること)からしてあり、現実の世界でも実際に一部の理論家によってはカー・ブラックホールの類はゲートになるとの意見が呈されているとのこととの絡みで不気味さが際立つとのことがある([a]にあつての本稿にてのより従前の内容を振り返っての部および[出典 (Source) 紹介の部 80])

・小説『CONTACT』に登場するゲート発生装置は加速器ならざるものだが、その形状が黄金比の全身での体現存在たる[正十二面体] (アトランティスに対する言及でもよく知られたプラトン古典『ティマイオス』にあつて星天の構成要素とされている[正十二面体]と同様の構造)となっているとのものである([出典 (Source) 紹介の部 80 (2)]および[出典 (Source) 紹介の部 80 (3)])

以上が[a]に至るまでの流れ、そして、[a]の中にて論じ、かつ、示しもしてきたことのおおよその流れとなる。

(振り返っての表記はここまでとして続いて[b]の段に入る)

[b].

先にての[a]の段ではカール・セーガン小説『コンタクト』作中にあるの「正十二面体ゲート装置」(なるもの)が

[通過可能なワーム・ホール —— (本稿にての 出典 (Source) 紹介の部 28 から 出典 (Source) 紹介の部 33-2 で物理学者キップ・ソーン(小説『コンタクト』にアイデア供与なしたことで知られる物理学者)のそれにまつわる思考実験がこれ奇怪にも 911 の事件の発生を事前言及しているとの要素を多層的に帯びているとのことを詳述してきた(ただし、[2001年9月11日]との日付け表記と[双子]とのキーワードが 2001年9月11日「の前」に多重的に問題となっていることをして事前言及と呼ばないならば、それは事前言及にならないかもしれないが・・・)との通過可能なワームホール) ——]

及び

[カー・ブラックホール —— [黄金比]と結びつくとの指摘がなされているとのカー・ブラックホール ——]

と結びついていることを指し示してきた。

そうもした『コンタクト』作中にある登場の「正十二面体ゲート装置」が

[トロイアを滅ぼした木製の馬の計略の寓意]

「とも」小説『コンタクト』作中それ自体にて「執拗に」結びつけられていることが現実に「ある」(このことをここ[b]の段ではまずもって問題視する)。

そちらについては下の部にての解説を参照されたい。

まずもって先の 出典 (Source) 紹介の部 80 (2) にて引用したところの『コンタクト』記述を下に再引用する。

(直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)178 ページ、[超統一理論]の章よりの「再度の」原文引用をなすとして)

明けてく始動の日、計画本部では上級スタッフを対象に、結果を予測するアンケートを行なった。＜マシン＞は動かず、何事も起らない、とする回答が大半を占めていた。少数ながら、相対性理論に反しようとうしようとう、五人は瞬時にヴェガ系に移動するに違いない、と予測する回答もあった。その他、意見は多岐にわたっていた。＜マシン＞は太陽系探査機であるとするもの、史上最大級の浪費を狙ったはずらだとするもの、その他、教室、タイムマシン、銀河世界の公衆電話など、いろいろな解釈が示された。ある科学者は、「五人は座席に坐ったまま徐々に緑の鱗と鋭い牙を持つ醜悪な姿に変わるだろう」と回答した。これは＜トロイの木馬＞に最も近い考え方だった。一人だけ、ずばり＜終末機械＞と記した者がいた。

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 CONTACT にあつての Superunification の章にあつての表記は —— オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして—— “ Next day, Activation Day, they took an opinion poll of the senior staff on what would happen. Most thought nothing would happen, that the Machine would not work. A smaller number

believed that the Five would somehow find themselves very quickly in the Vega system, relatively to the contrary notwithstanding. Others suggested, variously, that the Machine was a vehicle for exploring the solar system, the most expensive practical joke in history, a classroom, a time machine, or a galactic telephone booth. One scientist wrote: "**Five very ugly replacements with green scales and sharp teeth will slowly materialize in the chairs.**" **This was the closest to the Trojan Horse scenario in any of the responses.** Another, but only one, read "Doomsday Machine." ” (とのものとなる)

以上、印象深いとの下り ——小説『コンタクト』にて建造されているマシーンをして [操縦者を爬虫類の怪物に変える存在][トロイアの木製の馬][終末機械]と表しているとの印象深いとの下り——よりの再度の引用をなしたうえで書くが、本稿筆者が原著を精査したところ、小説『コンタクト』では作中登場人物らが

[外宇宙生命体から送られてきた(三層の球殻構造体を有し、人が入り込む本体に関しては)正五角形を十二面重ねて造られているとのマシーン]

をして[トロイアの木製の馬]と危惧して形容する箇所が (少なくとも)「10箇所以上」

登場している。

それについては直下、続く表記を参照されたい。

CONTACT

CHAPTER 11 The World Message Consortium (訳書としての新潮文庫版『コンタクト』にては第二部マシーン第二章ワールド・メッセージ・コンソーシアム)よりの抜粋として

It is not a happy one. What if this machine is a Trojan Horse? We build the machine at great expense, turn it on, and suddenly an invading army pours out of it. Or what if it is a Doomsday Machine? We build it, turn it on, and the Earth blows up.

Several delegates asked for clarification from the Chair. "If Baruda is right about a Trojan Horse or a Doomsday Machine," shouted out a Dutch delegate, "isn't it our duty to inform the public?" But he had not been recognized and his microphone had not been activated. They went on to other, more urgent, matters

"I recognize that Academician Baruda has raised an important and sensitive issue," Sukhavati began, "and it would be foolish to dismiss the Trojan Horse possibility carelessly.

This is no confrontation between Greeks and Trojans, who were evenly matched. This is no science-fiction movie where beings from different planets fight with similar weapons.

"Mr. Chairman, I believe we can shed some light on these two questions--the Trojan Horse and the Doomsday Machine. I had intended to discuss this tomorrow morning, but it certainly seems relevant now."

"What I'm trying to say is that you don't put chairs inside a bomb. I don't think this is a Doomsday Machine, or a Trojan Horse. I agree with what Dr. Sukhavati said, or maybe only implied: the idea that this is a Trojan Horse is itself an indication of how far we have to go."

CONTACT

CHAPTER 12 The One-Delta Isomer (訳書としての新潮文庫版『コンタクト』にては第二部マシン第三章ワン・デルタ異性体よりの抜粋として)

"Baruda's Trojan Horse maybe it's not a completely foolish idea," she found herself saying. "But I don't see that we have any choice, as Xi said. They can be here in twenty-some-odd years if they want to."

Der Heer hastened to add that these would be contingency plans only, that no final decision was being made, and that no doubt Soviet concerns about a Trojan Horse were at least partly genuine. Kitz asked about the composition of "the crew."

CONTACT

CHAPTER 15 Erbium Dowel (訳書としての新潮文庫版『コンタクト』にては第二部マシン第六章エルビウムの車知よりの抜粋として)

Her opponent warned of Trojan Horses and Doomsday Machines and the prospect of demoralization of American ingenuity in the face of aliens who had already "invented everything."

CONTACT

CHAPTER 17 The Dream of the Ants (訳書としての新潮文庫版『コンタクト』にては第二部マシン第八章蟻の夢よりの抜粋として)

Did she think the device could be a Trojan Horse or a Doomsday Machine? In her answers she tried to be courteous, succinct, and noncontroversial. The Machine Project public relations officer who had accompanied her was visibly pleased.

CONTACT

CHAPTER 18 Superunification (訳書としての新潮文庫版『コンタクト』にては第二部マシン第九章超統一理論よりの抜粋として)

This was the closest to the Trojan Horse scenario in any of the responses. Another, but only one, read "Doomsday Machine."

——ここ章題に見る、Superunification (超統一理論) については着目すべきところがあるために続く段にて取り上げることとする。

※以上、オンライン上より特定可能な原著にあつての各センテンスを順々に抜粋したように小説『コンタクト』にあつては「トロイアの木馬」として問題となる装置を形容しているとの箇所が10箇所以上存在している(些末なことに偏執的にこだわっていると当然に思われるところか、と思うが、そうではないと強調しておきたい。それにつき続く段をお読み頂ければ分かりますが、小説『コンタクト』の問題となる装置は「カー・ブラックホール」・「黄金比体現構造」・「黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)」を結びつける「留め金」の一つとなるとの指摘が現実になせるとのものとなっているからこそ、そして、それが尋常一様ならざる恣意性と結びついていると指摘できるようにしているからこそ、ここでの話の如くものをなしているのである)。

さて、

(『コンタクト』ゲート装置と執拗に結びつけられていること、直近にて呈示の
[木製の馬で引導を渡されたトロイア]

とくれば、である。

トロイア崩壊のそもそもの原因が

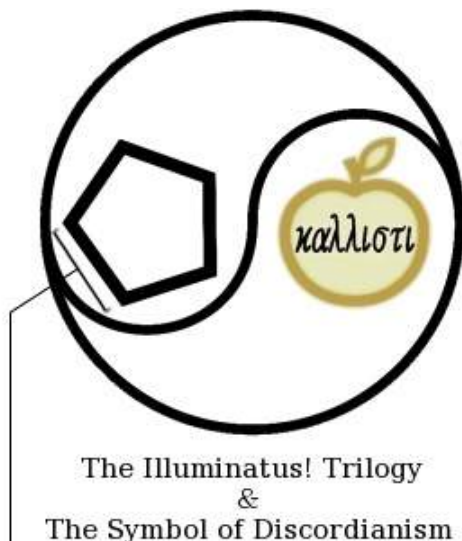
[**黄金の林檎**] (ヘラクレス 11 番目の功業にての取得目的物にして巨人アトラス
がその在り処を知るものであると本稿で詳述してきた神話上のシンボル)

と伝わっており(出典(Source)紹介の部 39)、そちらゴールデン・アップルを作中の重要なモチーフに据えている小説作品こそが —表面上は荒唐無稽なる陰謀論小説の体裁を取りながらも— [911 の事前言及要素] を多重的に帯びているとのことで決して一笑に付せぬ(と強調したい)との

『ジ・イルミナタス・トリロジー』

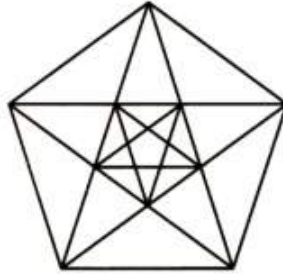
となっている

とのことが想起されもすると —ここまでの本稿の流れから— 指摘する次第でもある(本稿にあつては [『黄金の林檎』と『ジ・イルミナタス・トリロジー』] との関係性) を問題視してきたとの事前経緯がある —尚、くどくも繰り返せば、1. 「ニューヨークのマンハッタンのオフィスビル爆破より話がはじまり」2. 「作中クライマックスに向けて魔的封印を解くとの目的で「ペンタゴンの爆破・部分倒壊」が実演され」3. 「現実世界のブルース・イビンス容疑者(アメリカ陸軍感染症医学研究所に奉職の科学者)を巡る 911 以後の状況を事前に予告して示すように「米軍から漏出した炭疽菌改良株が大災厄をもたらしかねないとの状況に至った」ことが描かれ」4. 「小説スピンアウト・カードゲーム作品(スティーブ・ジャクソン・ゲームズ製の[カードゲーム・イルミナティ])からしてまでもが[崩されるツインタワー][爆破されて噴煙をあげるペンタゴン]とのイラストの持ち出しから 911 の事前言及物であると問題視されているようなものとなっており」5. 「[ペンタゴン体現物とされる五角形とニューヨーク体現物との分析結果が出てくる黄金の林檎を対面並置させての独特なるシンボリズム]を図示してまで作中にて頻出させている」との要素と共にある作品として[911 の事前言及文物]としての側面を帯びているのが当該作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』となる— (「典拠については本稿にての出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 を包摂する解説部を参照されたい)。



The Illuminatus! Trilogy
&
The Symbol of Discordianism

作品副題として
The Golden Apple [黄金の
林檎]
との名称を冠するジ・イルミ
ナタス・トリロジー・シリーズ
では作中にパロディ宗教ディ
スコディアニズムの図示の
通りのシンボル、黄金の林檎
とペンタゴンの並列をなしてい
るとのシンボルが頻出を見て
いる。内、黄金の林檎がニュ
ーヨークに仮託されるよう
なものとなり、他面、ペンタゴ
ンが黄金比の体現存在であ
るとのことも本稿では問題視
している



pentagon (pentacle⇒pentagon
⇒pentacle⇒ . . .)
&
"eternal" golden ratio

本稿にての先の段でも図示したことを
再提示しておく。黄金の林檎は [トロ
イア崩壊に発展した三女神の美人投票]
のトロフィーともなっているのである
が、その黄金の林檎、後に問題性
を細かくも解説する映画『ファイト・
クラブ』にてツインタワー敷設のオブ
ジェ (スフィア) に仮託されていた
のと同様の姿にて歴史的に描画されて
きたとことがあるものでもある。



Lucas Cranach the Elder's
"Judgement of Paris"



Golden Apple



※円の中に [アルファベッ
トのTの字] を入れ込むと
の式は中世欧州にての [宝
珠] の構図に用いられてき
たものであり、またもっ
て、TO Mapと呼ばれる原
初的世界地図の構図を示す
ものでもあったのだが、こ
こではその [黄金の林檎]
としての具現化を重んじて
いる。



The Sphere (Fight Club version)

ルネサンス期画家ルーカス・クラナッハが描いた [黄金の林檎] は映画『ファイト・クラブ』(後述) にて登場するバージョンのツインタワー敷設オブジェのイミテーションとそっくりなものである。

その点もってして、

[911 の「多重的」前言作品としての性質]

とのことでくどくも述べれば、である。「まったくもってどういうことなのか」カール・セーガン『コンタクト』に対して

[「**林檎の虫食い穴に語源がある**」などと主張されているワームホール — そちらワームホールに関しては [[大蛇]あるいは[竜]の穴] と Worm という語にあっての英語の古い用法にて変換できるとのこと「も」あり、については本稿にての**出典(Source)紹介の部 65(10)**で解説なしている—— の通過可能性にまつわるアイデア]

を供与した物理学者キップ・ソーンの手になる『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあって「も」同様の要素、911の事前言及文物としての要素が不可解にも多重的に伴っているとのことがあるのを本稿にては原文引用とのかたちで典拠細かくも指し示しながら摘示してきた (**出典(Source)紹介の部 28**から**出典(Source)紹介の部 33-2**を包摂する解説部を参照のこと)。

以上、述べた上で書くが、「これ以降の指し示しにあって呈示する数多の不愉快なる事実関係に通ずるとの肝要・重要なところであるがゆえに。」との認識で「実にもってくどくも」繰り返すところとして、

[不可解な911の事件の「多重的」「事前」言及文物]

との要素をキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』「とも」共有する『ジ・イルミナタス・トリロジー』は[黄金比]の寓意を複数、[黄金の林檎](トロイア崩壊の原因)との兼ね合いで内に含んでいる作品であると判じられるようになっているとのことがあり、なおかつ、[五芒星]と同様に黄金比の体現存在となる正五角形構造のペンタゴン — 作中、黄金の林檎のシンボルと並置されて何度も何度も登場してくるペンタゴン(古代アトランティスの幻のペンタゴンと現代アメリカの国防総省本庁舎)—— が崩されて、異次元より介入する外宇宙生命体が解放される (**出典(Source)紹介の部 38-2**) との筋立ての作品ともなっている (：黄金比との兼ね合いでは本稿にての**出典(Source)紹介の部 78**から**出典(Source)紹介の部 79(2)**を包摂する解説部、レイフ・エリクソン号とノーチラス号など複数要素を引き合いに出しての解説部をも参照されたい。尚、本稿では五芒星と正五角形がギリシャ時代のピタゴラス学派やりようとの絡みで数学史にあって黄金比や最小の領域への力学と取り立てて結びつけられていることの意味合いをも問題視している)。

さらに述べれば、同『ジ・イルミナタス・トリロジー』に関しては

[**【黄金の林檎が原因になって木製の馬によって滅ぼされたと伝承が伝えるトロイア】**との一貫性問題・接合性問題を本稿の先だつての段で細々と指摘なしてきたところの**【アトランティス】**(同**【アトランティス】**に関しては**【エデンの林檎の園】**のことが介在しもしての**【黄金の林檎の園】**および**【トロイア】**との一貫性問題について本稿にての**出典(Source)紹介の部 44-2**、**出典(Source)紹介の部 44-3**、**出典(Source)紹介の部 44-4**、**出典(Source)紹介の部 45**を包摂する解説部や**出典(Source)紹介の部 58(2)**を包摂する解説部にて詳説なしてきたとのことがある)、その**【アトランティス】**が小説作中にて**【ペンタゴン崩壊】**および**【異次元妖怪浸食】**と結びつけられつつもの人工生命体としての蛇人間が用いられての侵略の対象となったとの描写がなされているとの作品となる]

との内容を有する作品「でも」ある (：それ単体だけをもってして口の端に掛けんとすれば、無論、[非論理的に些末なことを云々する愚人の語り口上]と看做されるような性質のことであろうとは百も承知のうで述べるが、同点については既に何が具体的にどう問題になるのか原著より引用をなして指し示さんとしてきたところとなる)。

かてて加えて(よりもっての性質の悪さが感じられるところとして)、同『ジ・イルミナタス・トリロジー』、繰り返すも、[往古アトランティスおよび現代アメリカにてのペンタゴン(正五角形)の外壁が破壊されて魂を奪い取る異次元介入妖怪が解放されたとの筋立て]を有した同作が[黄金比]と — [トロイアの

崩壊原因たる黄金の林檎] (**出典 (Source) 紹介の部 39**) のことが問題となる箇所にて — 暗示的ながら多重的に結びつけられていると指摘可能となっているとのことがあり、そちらに関わるころのレギュラー・ペンタゴンこと正五角形が 12 面重ねられての黄金比の全身体現存在、それこそが

[正十二面体(ドデカヘドロン)]

となっていることもが【**寓意の多層的連関性**】に関わるとの指摘「も」がなせるところになっている (:この段階で疑わしいと考えられた向きも【**正十二面体のブラックホール(ないしワームホール)・ゲート**】とも述べられそうなものを作中の主軸として登場させているとの小説『コンタクト』作者のカール・セーガンの相応のやりよう(あるいはよりもって忌憚なくも述べて【**傀儡(くぐつ)**による手繰られてのやらされよう】といった方が至当ともとれる)についての解説をご覧いただければ、【**寓意の多層的連関性**】がいかようなものかご理解いただけるかと思う)。

そちら

[正十二面体(ドデカヘドロン)]

が他にもないキップ・ソーン著作『**ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産**』に見るやりとりと結びつく小説『コンタクト』にてブラックホール・ゲートに通ずるようなものとして描かれ、ゲート装置としてのその効用が作中の人間サイドには不明であったために同『コンタクト』では[**トロイアの木製の馬**] ([**黄金の林檎**]が原因で破滅に至る戦争へと導かれた都市に引導を渡したもの) のことが作中にて頻繁に言及されているとの設定が採用されているとのことがありもするのである。

以上のことは 一問題はここまで指摘してきたことにとどまらないのだが—

[極めて不気味なる相互連結関係]

を呈しているとのものでもある。

(:要するに、911 の事件の不可解かつ奇怪なる前言小説としての側面を持つ

『**ジ・イルミナタス・トリロジー**』という作品にあっては

[**アトランティスのペンタゴン**]

[**トロイア(アトランティスとの関連性を本稿にて論じてきた都市)を崩壊させた[黄金の林檎]との並列描写がなされているペンタゴン**]

[**古代アトランティスと現代アメリカのそれが崩されて異次元介入妖怪が復活を見よとの筋立てと結びつくペンタゴン**]

といったかたちにてペンタゴン — いいだろうか、何度も何度も申し述べているところとしてペンタゴンというのは黄金比の体現存在となっている— をその作中にて持ち出しており、そのペンタゴン(英語で述べるところの五角形ないし国防総省)が小説『コンタクト』にあつての問題となる箇所(『**ジ・イルミナタス・トリロジー**』よろしく[911 の予見文物]となっていることについて詳説を講じてきたところのキップ・ソーン『**ブラックホールと時空の歪み**』のまさしくもの[911 の予見性]に関わるころ、[**通過可能なワームホール思考実験**]と結びつきもする箇所)でも [**正五角形 12 枚重ねの正十二面体としてのゲート装置**]として登場を見ており、そちらゲート装置もまた(同文にくどくも申し述べるころとして)

[**トロイア(神話伝承が黄金の林檎にて滅したと伝えている古の都市)に引導を渡した木製の馬**]

と同『コンタクト』作中で結びつけられているとのことが「ある」とのことはその段階からして「できすぎであろう」と述べているのである — といった「できすぎ」の問題がそこにあるとのことについて偶然の賜物なのか、そうではなく、恣意によりて冷酷伶俐な計算に基づいて仕組まれているものなのか(であれば、その背景と意図は奈辺にあるのか)との問題を客観的に煮詰めるためにものしているのが本稿ともなる—)

「さらに、」である。同じくもの点については現実世界で執り行われているLHC実験が

【黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)の在所知るとヘラクレス関連の伝承が語り継ぐ巨人アトラス】

の名を冠する検出器 ——そして、トロイアとの接合性を本稿で細かくも解説してきたとのアトランティスの名を冠するイベント・ディスプレイ・ツールATLANTIS—— を用いながらブラックホール生成可能性が取り沙汰されてきた実験として世に出た (出典(Source)紹介の部 35から出典(Source)紹介の部 36(3)を包摂する解説部)とのことと[あまりにも平仄が合う]とのことでも問題となるものである(:小説『コンタクト』にての「粒子加速器とは明示的には結びつけられていない」との異文明よりの技術供与で建設されたとの巨大装置、機序さえ装置開発計画本部上級スタッフにすら把握されていないことが描写されている(上にての引用部にあるとおろそう描写されている)[十二面体構造体を呈するとの装置]が(先述のように「これ執拗にも」)[トロイアを滅ぼした木製の馬]と結びつけられていることと同じくものことは—黄金の林檎を介して— 話がつながる)。

以上、述べてきたうえでさらに不快な相関関係が成立していることの摘示にこれより注力するとし、さしあたり、ここ**[b]**と振っての段では直近にて引き合いに出した、

(直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)178 ページ、**[超統一理論]**の章よりの「再度の」原文引用をなすとして)

明けて<始動の日>、計画本部では上級スタッフを対象に、結果を予測するアンケートを行なった。<マシン>は動かず、何事も起らない、とする回答が大半を占めていた。少数ながら、相対性理論に反しようとうとうと、五人は瞬時にヴェガ系に移動するに違いない、と予測する回答もあった。その他、意見は多岐にわたっていた。<マシン>は太陽系探査機であるとするもの、史上最大級の浪費を狙ったいたずらだとするもの、その他、教室、タイムマシン、銀河世界の公衆電話など、いろいろな解釈が示された。ある科学者は、「五人は座席に坐ったまま徐々に緑の鱗と鋭い牙を持つ醜悪な姿に変わることだろう」と回答した。これは<トロイの木馬>に最も近い考え方だった。一人だけ、ずばり<終末機械>と記した者がいた。

(訳書よりの引用部はここまでとする)

との部(出典(Source)紹介の部 80(2))にて引用をなしたとの部)を巡る「加えての」相関関係明示をなすこととする。

その点、上の引用部が内包されている[章](Chapter)の題名となっているところの、

【Superunification】(邦訳版では[超統一理論]**)**

との語についてであるが、そちらスーパー・ユニフィケーション[超統一理論]が何を意味する語なのかも問題となる(と手前本稿筆者は判じている)。

同語 **【Superunification 超統一理論】** が現代物理学が探し求めている(とされる)究極の理論、

【万物の理論 (セオリー・オブ・エブリシング)】

というものの別称、**【加速器実験の大義の先にある究極の大義】**としてその発見と検証が模索されている ——しかも、その検証プロセスそれ自体にブラックホールの生成問題も関わるに至ったというかたちで模索されている—— というものの別称ともなっていることからして問題となると筆者は判じているのである(委細については続けて表記の出典(Source)紹介の部 81以降の解説部を参照されたい)。

要するにカール・セーガン小説作品『コンタクト』にあつての特定シーン、

[正十二面体構造 ——[アトランティス]に対する言及をなしていることでも著名なプラトン『ティマイオス』に見受けられる元素論(プラトニック・リゾーマタとされるプラトン流元素論)にて四大元素(火・水・土・気)を体現する構造体に加えての[宇宙そのもの]を指すとされもする正十二面体構造—— を取るマシーン]

[後に「予想外に」ブラックホールないしワームホールのゲート発生装置と「判明」したと作中にて描写されるマシーン]

をして印象深いかたちで

[[操縦者を爬虫類の如き存在に変換するとの懸念が表されての装置] / [トロイアを滅した木製の馬が如きものとしての懸念が表されての装置] / [終末機械と評されての装置]]

と描写しているシーンを内包するものとしての作中内章題にあつての [Superunification] (邦訳版 [超統一理論]) とは

[LHC「実験」のようなものがそもそも行われていることにまつわる大義とされているところの理論的追求]

と密接に結びつくものとなっているとすることが「ある」のである(続けての出典紹介部を参照されたい/尚、セーガンのやりようが問題になるのは 一さらにもって後述するところとして— その程度のことにとどまらない)。

それでは以下、表記章題(スーパー・ユニフィケーションこと[超統一理論])が科学界にていかような言われようをなされているものなのかについての典拠紹介をなすこととする。

出典(Source)紹介の部 81

SOURCE

81



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部81にあつては、

[カール・セーガン小説『コンタクト』にあつての特定の章の章題として持ち出されている [Superunification] (邦訳版では[超統一理論]) というものが科学界にての一大探求理論となっているものの呼称名称であり、そして、そちら[超統一理論]の探究がそもそももつての加速器実験の大義となつており、かつ、ブラックホール生成問題にあつての大義とも関わっている]

このことの典拠を挙げることにする。

(直下、和文ウィキペディア[万物の理論]項目の現行にあつての冒頭部記載内容よりの原文引用をなすとして)

万物の理論 (TOE; Theory of Everything) とは、自然界に存在する4つの力、すなわち電磁気力(電磁力とも言う)・弱い力・強い力・重力を統一的に記述する理論(統一場理論)の試みである。
このうち、電磁気力と弱い力はワインバーグ・サラム理論(電弱論)によって電弱力という形に統一されている。電弱力と強い力を統一的に記述する理論は大統一理論(理 GUT: Great Unification Theory)と呼ばれ、現在研究が進められている。最終的には重力も含めた全ての力を統一的に記述する理論が考えられ、これを万物の理論または超大統一理論(SUT: Super Unification Theory)という。

(引用部はここまでとする)

以上のように万物の理論のひとつの呼び方が超大統一理論(SUT: Super Unification Theory)となっていること、すなわち、カール・セーガンの問題となる章題と同一のものとなっていると言及したうえでのこととして、次の引用をなしておく。

(直下、NASA(アメリカ航空宇宙局)の科学紹介サイト(science.nasa.govとのドメイン名のサイト)にて掲載されている、[The Day the World Didn't End]との題名のページ(検索エンジン上でnasa, The Day the World Didn't Endと入力することで現行、捕捉・閲覧できるようになっているページ/作成日付はOctober 10, 2008となっているとのもの)よりの一部原文引用をなすとして)

Actually, once the LHC is running again and begins producing collisions, **physicists will be ecstatic if it creates a tiny black hole. It would be the first experimental evidence to support an elegant but unproven and controversial "theory of everything" called string theory.**

(拙訳として)

「実際、LHCが再度運転開始を見たらば(訳注:2008年9月10日にて一旦頓挫を見た後に運転開始を見たらば、との文脈であり、情報としては記事リリース時、LHCが滞りなく2012年まで運転開始する「前」のことである)、物理学者らは「極小のブラックホール」を作るかもしれないと「有頂天(エクスタティック)」になり気味である。それが証明されざるものにして物議を醸すひも理論と呼ばれる「万物の理論」を支持する初の実験的証拠となりうるものである(からである)」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上はどういうことか、と述べれば、[ひも理論]というものが

[自然界に存在する4つの力、すなわち電磁気力(電磁力とも言う)・弱い力・強い力・重力を統一的に記述する理論]

たる万物理論(TOE こと Theory of Everything)、すなわち、[超大統一理論]の候補となりもし、そのひも理論にまつわって

[2008年の(一旦の9月10日以降の中止後、再開を期されての)時点で「仮に」LHCがブラックホールを生成すれば、(ブラックホール生成それ自体をもってして)ひも理論にひとつの実験的証拠が与えられることになるだろうとの言いようがなされていた]

ということである。

(: ひも理論それ自体は1970年から提唱されていたわけであるが、1998年の理論的変転を受けて2001年よりその人為生成可能性が肯定されるようになった(先に典拠を挙げて詳述したようにそういう経緯で肯定されるようになった)ブラックホールがLHCで生成されたときには[余剰次元]が存在するとのことになり、そちら余剰次元の存在とのことが[ひも理論]の実証に近づくとの言いようの伝がなされているのである。 というのも、従前の[標準理論](Standard Model)というものではLHCではブラックホールが作られないとされている一方でひも理論ではそれ(ブラックホール生成)がなされうるとされているからである。

に対して表記のNASAのサイトでは上にて引用なした部に続いて(以下、引き続いてもの引用をなすとして)

“ In string theory, electrons, photons, quarks, and all the other fundamental particles are different vibrations of infinitesimal strings in 10 dimensions: 9 space dimensions and one time dimension. (The other 6 space dimensions are hidden by one explanation or another, for example by being "curled up" on an extremely small scale.) **Some physicists tout string theory's mathematical elegance and its ability to integrate gravity with the other forces of nature. The widely accepted Standard Model of particle physics does not include gravity, which is one reason why it does not predict that the LHC would create a gravitationally collapsed point — a black hole — while string theory does.** ”

(逐語訳に代えてもの要訳をなすとして)

「ひも理論にあっては電子、光子、その他全ての基本的粒子は10次元、すなわち、9つの空間次元と1つの時間軸の10次元にあっての無限長の紐にての異なる揺れとの形で存在しているものであるとされているわけだが、といったひも理論こそが重力とその他の力を統一する力を持っているものであると考える物理学者らがいる。他面、広くも素粒子物理学で認容されている標準理論(Standard Model)は重力をそこに含めない、そのため、ひも理論の方がその可能性を認める一方で[LHCがブラックホールを生成しうる]とは標準理論の方は予見していないとことがある(従ってLHCでブラックホールが生成されることは重力とその他の力を統一する統一理論の候補としてのひも理論の値打ちが増大することになる)」

と述べられているとのかたちとなっている。

その点、上とほぼ同じくものことを述べている和文で容易に確認できるソースとしては(記述内容に易変性が伴い、記載内容の残置を保証するところのものではないが)現行にての和文ウィキペディア[大統一理論]項目にて記載されているところとして

(以下、引用をなすとし)

“大統一理論(だいとういつりろん) (英: grand unification theory あるいは grand unified theory、GUT)とは、電磁相互作用、弱い相互作用と強い相互作用を統一する理論である。幾つかのモデルが作られているが、未完成の理論である。…(中略)…自然界は四つの基本的な力「電磁相互作用、弱い相互作用、強い相互作用、重力」で表される。宇宙の始まりに存在したのは唯一つの力だけで、その後これらの四つに分かれたという考え方から、これら四つの力を一つの形で表して統一しようとする理論の一つである。大統一理論はこれらのうちで重力を除いた前者三つを一つの形に統一しようとしている。大統一理論は重力については考えていない。重力までも統一する理論としては超弦理論などが研究されている”

(現行にてのウィキペディア[大統一理論]項目の記述よりの掻い摘まんでの引用はここまでとする)

との部が同じくものことを表しての部となる。

[大統一理論]に親和性が高いのが、そう、[大統一理論]に[重力との要素]が加味されて研究されているのが、(先にも解説しているように)[「超」大統一性理論](Super Unification Theory こと小説『コンタクト』の表題としても用いられている名称の理論)とされるわけだが(上にて既述の通りであり、すぐにオンライン上より裏取りできることでもある)、

[重力までも統一する理論としては超ひも理論などが研究されている]

との表記が和文ウィキペディア[大統一理論]項目にてもなされているところに関わるところとして超「弦」理論(スーパー・「ストリング」・セオリー)というものが上にて引用したNASAの解説サイトの申しように見るように、

[LHC 実験でのブラックホール生成でその理論的可能性が開けてくる可能性があるとされるひも理論(弦理論)の発展形となっている]

とのことがあるのである(:繰り返すが、“Some physicists tout string theory's mathematical elegance and its ability to integrate gravity with the other forces of nature. The widely accepted Standard Model of particle physics does not include gravity, which is one reason why it does not predict that the LHC would create a gravitationally collapsed point — a black hole — while string theory does.” (大要)「といったひも理論こそが重力とその他の力を統一する力を持っているものであると考える物理学者らがいる。他面、広くも素粒子物理学で認容されている標準理論(Standard Model)は重力をそこに含めない、そのため、ひも理論の方がその可能性を認める一方で[LHCがブラックホールを生成しうる]とは標準理論の方は予見していないとのことがある」と表記されている))。

(出典(Source)紹介の部 81 はここまでとする)

上にて述べてきたとのことがある、すなわち、

[LHC 実験で「1998年以降」の理論展開を受けて、「2001年より」ブラックホールが人為生成される可能性が取り沙汰されだした] (LHC 実験始動前にあっていかようにして中途よりブラックホール生成がなされうるとのことが現実視されるに

至ったかについては本稿の **出典 (Source) 紹介の部 1**, **出典 (Source) 紹介の部 2** に続いての部を参照されたい)

との中にあって

[ブラックホール生成(即時蒸発する「安全な」極微ブラックホールの生成)の確認こそが標準理論を越えての大統一性理論候補としての(超)ひも理論の検証につながる]

との観点が存在する

とのことが LHC 実験の「当初はその生成可能性自体が問題視されてなかった[安全な]ブラックホール生成問題までもが」実験の大義 ——それが[与えられた馬草を食らうことしか能がないとの家畜らに与えられた毒入り肥料か]どうか、あるいは、[悪魔の如き存在に由来する力学に自ら率先して魂を売り払うことを「選んで」他人(巨視的に見れば、人類そのもの)を犠牲にすることを継続的に「是」としている相応の人間らによる臭気を放つ欺瞞の産物か]どうかについて考えてみるといったことをなす・なさないといったことに関わらずもそこにあるとの実験大義—— に組み込まれているとの主たる理由となっているとのことがある (くどくも述べておくが、本稿は実験大義を支える[人間レベルの理論]が過てる科学にあって恣意的に構築された空中楼阁なのか、あるいは、ある程度至当性を有したものであるかについて頓着するもの「ではない」。我々を、特定の事物にまつわって皆殺しにする、との予告的言及が極めて昔よりなされていたとのこと、そして、それが LHC 実験が目指している方向に収束しているとのことを指摘、その意味性を問いもするが、建て前とされている科学理論の適否について論ずるとの識見は門外漢たるこの身には「ない」わけである(門外漢として科学理論の適否について云々している向きを読み手たる貴方が目にしたらばどう思うだろうか。そういう手合いは往々にして[出歯亀的異常者]あるいは[愚物]とだけ経験則に基づいて見なされもしようとのこと、想像するに難くはないことか、とは思う)。そうは述べるが、ただしもって、NASA の理論動向解説サイトで “ Actually, once the LHC is running again and begins producing collisions, physicists will be ecstatic if it creates a tiny black hole. It would be the first experimental evidence to support an elegant but unproven and controversial "theory of everything" called string theory. ” 「実際、LHC が再度運転開始を見たらば、物理学者らは極小のブラックホールを作るかもしれないと「有頂天に」なり気味である。それは証明されざるものにして物議を醸すひも理論と呼ばれる[万物の理論]を支持する初の実験的証拠となりうるものである」と記載されているとのところに、一群のユーフォリア(有頂天になりがちなる多幸症患者)の類を背面から手繰っての力学、その嗜虐的やりようの片鱗はみとめられるとのことまでは断ずるだけの事情があるとのそのことまでは指摘出来るし、実際に本稿はその指摘に注力なしているとのものであることも断っておく)。

その点、本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 2** の段でも引き合いに出したところの文書、オンライン上にて PDF 文書として流通しているそちら文書タイトルたる、

『LHC 加速器の現状と CERN の将来計画』

とのタイトルでもって検索することで現行捕捉できるようになっているとの日本の元 LHC 実験グループ代表者によってもものされた文書(公的責任をもってして公金投下されての身分で公務として作成されたものかと判じられもする文書)にあってその[166]および[167]との頁番号が付されたところで

(そこよりの「再度の」原文引用するところとして)

1998 年に提唱された ADD モデルでは余剰次元を導入することによってヒッグス粒子の質量の不安定性(階層性問題)を解決する。このとき重力は TeV 領域で強くなり、LHC での陽子衝突でブラックホールが生成され、ホーキング輻射のため 10^{-26} sec で蒸発すると予言された。これは理論屋にとって大変魅力ある新しい展開で、危険性などまでには考えが及んでいなかった

(再度の引用部はここまでとする)

といった申しよう——[ブラックホールが生成され、ホーキング輻射のため 10^{-26} sec で蒸発すると予言された。これは「理論屋にとって大変魅力ある新しい展開」で、危険性などまでには考えが及んでいなかった]といった申しよう—— がなされている「主たる」理由についてもここまでの記述内容でご理解いただけたことか、とは思う（：尚、上にては時期的先後関係につき誤解なされうる紛らわしい書かれようが表出しているとも受け取れる。その点、【1998年に提唱された ADD モデルでは[ブラックホール生成]が「予言」される】との引用文書内表記については(海外の実験機関発表文書および望見されるところの科学界論調より)【1998年に提唱された ADD モデルにまつわる 2001年より問題視された帰結では[ブラックホール生成]が「予言」される】と記述する方がより正確な書きようにとらえられるようになっている)。

(※1. 尚、本稿ここまでの内容をよくも把握されていないとの向きは首をかしげることもあるかもしれないと思うが、何故もってして、筆者が以上表記のようなことをくぐり細々と指摘できるのかと申し述べれば、本稿筆者が[岸壁としてそこに存在する問題事](と判ずるに至った諸事情)を数年前から捕捉するに至っており、それがために、この日本国内で LHC 関連訴訟を(本稿前半部にて一部、その点について筆を割いているように法的構成としてそれがなしがたくなっているところを)無理矢理法的問題に落とし込んで提訴、そうした挙すらも[本質的問題訴求のための一助・推進剤]としようとしたといったことをなしていた人間であるからである(であるから、背景となるところの情報収集に余念がないとのことでもある。につき、何もやらぬとの者達ばかりが目立つ中で却(かえ)って[なぜなのか側面から足を引っ張ってくるとの層のような者ら](私は[下らぬ手合い]と自身断じた類を[一個の人間]と見る程に優しくはない)のありようを望見しつつ、正面にて相対していた者達のその内実の[空虚さ]そのものに諦観ばかりを深めさせられた感があったわけが、とにかくものごととして、そこまでのことをなしていた)。ちなみに「実験」の詐欺的側面につき訴求すべくもの一つ的手段として[法律上の争訟]に落とし込める要素を選定して相応の国内実験参画機関とその代理の弁護士らと国内行政訴訟の法廷でやりあいもしてきた訴訟だが、第一審からして年にして2年以上も不毛な争いをなしていた——(余程、原告席の筆者を勝訴なさしめたくなかったのか、グローマー拒否といった法理論を引き合いに出しての逃げの主張がなされたかと思えば、関係者の組織的動きを個人のそれに韜晦(論点すり替え)・矮小化させての主張が打って代わってなされるなどといった下らぬ、詭弁に満ちた対応を被告席よりなされただけとの不毛な争いをなしていた)——とのそちら訴訟に関しては[何の意味もない挙である](一人相撲のように現実的改変能力がゼロであるとの挙である)、[(他罰的と事情知らぬ向きによっては見るかもしれないが)人の目を直視しないような輩らの御陰で台無しになりそうであるの風が強くもある]と現行見立てるに至っているとのところがありもする)

(※2. また、上にて解説してきたブラックホール生成をも望ましいとする実験大義につながるころ、

[標準理論(スタンダード・モデル)を「越えて」の生成だからこそブラックホール生成を歓迎するとの論調]

につき細かく把握している、真摯に細かく把握する必要があると感じている人間はこの国では門外漢(物理学界関係者から見ての門外漢)では(筆者を除けば)

[当該学問領域辺領域に関わっている学究ら、および、その予備軍と(科研費などの資金投下に対するモニタリングする役割を表面上、負っているとの)文部科学省の一部の役人]

ぐらいのものではないか？と[紙媒体・電子媒体上の言論動向]から見立てられてしまうようにもなっている、なって「しまっている」とのことも言及しておく(ちなみに、政治屋に関しては「加速器らの額面上の目的が何たるか」さえ深く理解しているかも怪しいとの式で自民党・民主党・共産党・公明党の議員ばらが大同一致して国内への巨大加速器設置構想(ILC構想)を[[科学にあっての大義]と[地元利益]の融合するすばらしき構想]として推進してきたとの経緯がある)。

それにつき、

[オンライン上で相応の印象論 — 普遍性がある正しい情報のみが世の中と我々を救うるとののだとすれば、プラスという意味では現実的変能力がなんら無いとの[言論]と言うより[ノイズ]、獣の獣声の如きもの—を発する程度の一群の者ら(あるいは人間未満の存在)]

「以上」に情動的感度が高い人間が集まっているなどと世間知らずには全くの「誤解」がなされがちであるとのマス・メディアの成員にあっては

[同じくものことを自力で理解する[能力]、または、そこまでの理解を世間標準にしようとの[意思][意志]が本質的に欠乏を見ているとの者達ら]

が相応しくも[人材]として集中的に配されているとの感があり、そのことはマス・メディアの経年「報道」動向を調べれば察しがつく、国立国会図書館などをを用いての加速器問題に対する経年の報道記録の確認 — 皮相をなぞるだけのことを「遅まきに」、かつ、「ときに不正確に」「頻度極めて少なくとも」報じているにすぎないとの記録の確認 — をなすなどとのやりかたで察しがつくようになってきている(などと述べても、この世界でまさしくもの当該の領域にあってそこまで調べようとする人間がいることだに筆者は何の期待も抱けないと考えるに至ってしまっているとのことがあるのだが、それは置く — 世間一般の検索エンジンでの検索動向データからして[加速器問題]について真剣に調べようとの人間が「世界的に全くいない」との記録が(広告出稿用データ取得との名分で検索エンジン会社より取得可能な統計データとして)取得できてしまえるようにもなっているとのことがありもするのが偽らざるの世間ありようである—)。

につき、欧米圏にあってシープルという羊と大衆の複合語があるところに見るような盲目の羊ら(屠所の羊かは各自判断いただきたい)の社会にあって[目][鼻][耳](情報収集機関)および[口](情報拡散機関)との[建て前]でやっているマスコミ業界に限って述べれば、戦前から偏向報道や業界人の体質から[ろくでなしの類の巣窟]と語られていたとの歴史があることは祖父母の代の口伝・回顧録にてよくも語られるところであるわけだが(ただし、戦後は自画自賛の兼ね合いで勘違いをなす人間も多いかともとれる)、同業界に属する者達の過半がいまもってなお、

「大人であるとのことは[強きに優しく弱きに厳しく]とのスタイルを貫くことであろう」

との指針を[業界の額面上の物言いと違背する行動指針]として行いの核たるところとし続けているとの節がある、如実にあるとのことはそうした種別の人間らの中の悪質な部類と関わった人間には「実にもってよく分かる」ことか、とも思う(強き者にばかり阿(おもね)り口と挙動が甚だしくも不一致を見ている者達を見れば、普通人であれば、内心、「なるほど、やくざな奴らだ」と思うところであろう)。

そうした業界の業界人らが[重要で本質的なこと]は多く「自主規制」(政治

屋から圧力があるといったことはほとんど虚偽、実体は多く[金の出所]や[自分達の属する機構を「用意」したシステムそれ自体への配慮]とワンセットになっている「入り口レベルの「自主」規制」であろうと受け取れる)して報じようしてこないとのことは[歴史]の問題にとどまらず[現在の社会的状況それそのもの]の問題であろうととらえられるようになってもいると申し述べるのである(たとえば、日本で[政教分離と政府組織の宗教勢力利用との齟齬の問題]を報じることはタブーとなっていることや[大規模宗教組織の反対者らに対する組織的通信記録取得やその他の行き過ぎた横断的統制行為]が頻繁になされていること、たかだかものその程度のことも[大きすぎる嘘]はばれないの式で一切報じられないようになっていように見受けられるわけだが、といった皮相なことにとどまらず、「偽りだらけ」というより「そも、偽りでもって構築構成されている節あり」とこの社会にてのよもって本質的なところに関わるところでは[鶴タブー]ならぬ[粒タブー]といった造語で形容できそうな粒子加速器に対する自主規制(あるいは思考停止)がマス・メディア関係者にあって強くも作用している、まるで、個々の糸繰り人形らを手繰る糸のそれのようなかたちで見えにくく、だが、強固にも作用しているように見受けられると筆者としては申し述べたい次第である)。

さらに「くどくも」要らぬことを述べれば、マスメディア業界が「実にもって性質が悪い」(ただしシステムにとっては遇すべき存在となる)のは、他面、「球遊び」の帰趨など、情緒的価値も情動的価値も本来ならばないであろうはずの当たり障りのないことをニュースとして報ずることこそが自分達の社会機構としての「存在意味」(「節を売ってのシステムの「広報員」としての存在意味)であるとよく「自己認識」しているような節がある、かつ、それでいて偽物の正義感や社会正義をとくに表面で振り回すにもやぶさかではないとの者達が多く配されているように見立てられるとのこともあるが、これ以上は[下らぬこと](筆者はそれが我々当代ないし我々の近き児孫の代の「当然に」ありうべきところの破滅に通ずると考えているわけだが、愚痴めかしているがために[下らぬこと]と述べている)に筆を割くのを止すことにする — そも、本来的には「この世界が詐欺の賜物ならば詐欺のお先棒担ぎするような類らが一体全体どこに集中的に配されるか考えてみべきである」とだけ述べるべきところを延々くたくたと要らぬことを書きすぎてしまったきらいもあったとのことで反省するところではある — ．閑話休題)

(※3 — うとうとしてしょうがないと自身認識するところながらも — 付け加えて述べれば、[ブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲート]が地球上に生成されるとのことが作品主軸に据えているとのカール・セーガンの手になる80年代小説『コンタクト』、[超統一理論]といった実にもってかぐわしき(先述の理由から相応の臭気を放っている)章題が振られての同『コンタクト』では **Doomsday Machine**[終末機械]との言葉も使用されており — (出典(Source)紹介の部80(2))にて抜粋している部に見るように『コンタクト』には「一人だけ、ずばり<終末機械>と記した者がいた」Another, but only one, read "Doomsday Machine."との記述が含まれている) — 、その終末機械との言葉、「後に」加速器の[ブラックホール生成問題]に対する批判論調の中で用いられるようになった言葉でもある。

具体的には[ウォルター・ワグナー]という人物が加速器におけるブラックホール生成可能性の有無につき問題視した余剰次元理論という理論を巡るあれやこれやとは「また別方向から」原初宇宙には極微ブラックホールが存在していたとのスティーヴン・ホーキング由来の理論があること、そして、粒子加速器が原初宇宙の状況を再現するとされているとのことから押し広げ

て『加速器によるブラックホール生成はありうることはないのか』と問題視しだしたとの 1999 年以降の経緯(そうもしたワグナーやりようについて [出典 \(Source\) 紹介の部 1](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 2](#) を参照のこと)を受けて、(日本の御同類よりは幾分ましかとも受け取れる)海外メディアによって一部加速器のことを指す語として、

[ドゥームズデイ・マシン]

という言葉が用いられるようになったとのことがあるのである —— (本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 1](#) でも概要紹介しつつ挙げている文書たる Case of the deadly strangelets、そちらをダウンロードの上で同文書の中の 19 と印字されたページ内容をご検討いただければ特定いただけるところとなるが、(以下、Case of the deadly strangelets より引用なすとして) “The word that the Brookhaven lab was risking planetary destruction in the name of science spread around the globe. **A technology reporter with ABC News labelled the collider "the Doomsday machine", condemned the lab for "playing at God" and said that a physicist had told him that RHIC's completion was "the most dangerous event in human history".**” (要訳として)「ブルックヘブン国立研究所が科学の名のもとに地球規模の災厄を引き起こしかねないことをやっていることにつきある ABC ニュース付きのある技術領域取り扱いレポーターは加速器をして [ドゥームズ・デー・マシーン] と看做したうえで研究機関を神のように振る舞っていると非難、ある物理学がそちらレポーターに「RHIC のやっていることは人類史上最も危険なことである」と述べたとも口にした」との言いようの伝で、である) ——。

それについては無論、マスコミ関係者がカール・セーガンの『コンタクト』から Doomsday Machine との言葉を借用することにしたとの可能性もあるわけだが、そも、Doomsday Machine との言葉は 1972 年の映画作品表題 Doomsday Machine (邦題『人類最終兵器 ドゥームズデイ・マシーン』/ 筆者は未視聴であるが、中国が世界破壊兵器を開発したとの類の映画らしい) のタイトルにも用いられていた、あるいはスタンリー・キューブリックの 1964 年の映画 Dr.Strangelove『博士の異常な愛情』劇中にも同じくもの言いまわしが出てくるところの [黙示録のその日を実現するマシン] との意味合いの言葉で、同語、カール・セーガン『コンタクト』以前より用いられてきたものとなる。

ゆえに、その伝にてカール・セーガンのやりよう、および、後の時代にての批判的論調 (1999 年以降の論調) に強くも相関関係は観念出来ない、セーガン小説が警告なすものとして機能している節はない、とも申し述べておく)

ここまでで

[カール・セーガン小説『コンタクト』にての [トロイアを滅ぼした木製の馬] と [マシーン] を印象深くも結びつける章の章題たる [Superunification] (邦訳版では [超統一理論]) の探究がそもその加速器実験の大義となっており、しかもそれがブラックホール生成の問題とも関わっている (関わるに至った)]

とのことにまつわる話を終えることとする。

以上、述べてきたことに関しては次のように考えられる向きもあるかもしれない。

『なんにせよ、カール・セーガンが後の加速器がブラックホール生成をなしうる破滅の子たることを予見して、[確信犯的警告] をなそうとしていたのではないか。であるから、1985 年初出のセーガン小説にあって [超大統一理論]、ブラックホール生成の大義名

分ともなるに至った同理論の名称使用がなされていたり、(本稿にて先述なしてきたところとして)[ブラックホール生成装置たる正十二面体構造の装置]と(加速器特性たる)[真空状態維持][超伝導状態維持]の結びつけがなされていたのではないか』

そうもしたこと、先にもそちら可能性の適否について取り上げたところの、

[カール・セーガンにあっての「属人的」なる先覚知に依拠しての警鐘を鳴らそうとの意図]

が介在していたとの可能性に対してはこの身は手持ちの情報から

「多分、というより、ほぼ確実に、というレベルでそれは妥当「ではない」見方である」

との判断をなしている(これまたカール・セーガンありように関して先だっても申し述べたことである)。

については(マリオネット仮説に対する直感的把握といったものに根差しての)「悪魔に魂を売り払い、偽物として脚光を浴びていたにすぎないといった按配の輩、たかだかもの下らぬ役者風情、[紐付き]に何の期待がなせるというのか」といった**[陰謀論者よろしくの実体的根拠を伴わぬ(であるから何の意もなさぬ、意をなすとの可能性が逆立ちしても絶無のものであろうとの)[感情論]]**のようなところに拠つてのことなどでは断じてなく、

[質的にそうであろうとの推し量れるところとしての確たる論拠ら]

を伴うものとして[カール・セーガンの良心]などにはなんら期待できないとの判断を下しているのである(ただもってして、理詰めでそうも述べる中でその理詰めで摘示しようとの行為それ自体の背後にイモーションナルなところがないかとは言え、筆者「にも」それはある。その点、感情論、赤裸々に吐露すれば、「輝かしい世界の立派な御仁に対する屈折したいわれ無き嫉視の論法(ルサンチマン依拠の視点とも)でありましょう」なぞといった[相応の面構え]の人間の反応を「的外れに」惹起ししようとのそうした感情論をきたす作用たりかねないイモーションナルなところとしては、である。[慷慨の情]として本稿筆者の心中をも[名状しがたいとの怒り](相応の存在に巻き添えにされるとの結論を思索の中で得るに至ってしまったがゆえの怒り)・[冥(くら)き諦観を常におしつけんとする失意の念]の入れ替わり立ち替わりの間欠的増大が筆者内面を腐食、絶えず蝕んとしてやまないといったこともあるにはある)。

その点もってして、

[属人的良心などで[執拗な予見的言及の束の实在]の問題が済まされるようなものではない]

とのことについては

[[偶然]と[恣意]と[恣意の性質]にまつわる確率論に依拠しての詳説 —(「大学レベル」(文系と総称して分類されての人間がそれを領分とするのならば、[判断の中立性]と[予断の可及的排除]が重視される市場予測の領域にての経営学修士なぞの大学院レベルないし計量経済学の一領域=ベイジアン計量経済学に限っての「大学レベル」)の確率論の話を生レベルに引き落としての詳説)—]

をも[付録と位置付けての説明]として本稿の後の段にてなす所存であるが、ここでは数式を用いずに自然言語のみに基づいてのこととしてそうした判断をなさざるをえない、カール・セーガンに**【加速器の本質】**について警鐘を鳴らそうとの良心など期待できないとの

[[「ひとつの」理由] ([「まだ他にもある」よりもって不快なる理由]の呈示に先駆けもして本稿こままでの内容からして呈示可能なる「ひとつの」理由)]

について以下、「まずもって」筆を割くこととする。

(「カール・セーガンにおける属人的善意介在に関しては希望的観測を抱けない」とのこと
で先にも似たようなところを論じてきたことについて、多少、内容を違えての再度の指摘
をなすとして)

カール・セーガンの先覚的言及 —[加速器および加速器実験に相通ずる特性を帯び
ての書きよう]と判じられる(とは述べてもそうしたことを説明抜きに理解出来もしようとい
うのは相当程度の科学的知識を具備した極々一部の人間に限られるとも受け取れるわ
けだが)ところでのブラックホール生成についての先覚的言及— が[セーガンの属人的
良心に依拠しての警告]などではありえないところの理由の第一。

確かにカール・セーガンが小説『コンタクト』を著した折には SSC (Superconducting
Super Collider こと超伝導超大型加速器)の建設計画が背面で進んでいたとの事情があ
るのだが(本稿の前半部でも多少ながら言及していることである)、[米国科学界を牽引
するオピニオン・リーダー]とも言うべき立ち位置にあったカール・セーガンがそれと明
示せずには加速器におけるブラックホール生成(表向きは予算との兼ね合いで中途放棄に
至った SSC のようなものによるブラックホール生成)にまつわっての警鐘を鳴らそうとして
いたのか否かについて判断する上で重くも意をなすところとして

[統一性理論の候補としてのひも理論に検証材料を与えることになる(出典
(Source) 紹介の部 81)との加速器によるブラックホール生成]

が現実的にありうることと考えられるようになったとのことについて

[1998年に提唱された余剰次元の理論的帰結を受けての理論深化によって
[テラエレクトロンボルト領域]でも重力が強くなりブラックホール生成が観念さ
れるようになった]

との事情がある(と専門家らが一様・異口同音に発表している)。

それ以前は、そう、1998年以前は人間が極小領域に一点集中投下できるエネルギー
規模として実現できるエネルギー —本稿にての 出典(Source) 紹介の部 21 および 出
典(Source) 紹介の部 21-2 を包摂する段で仔細に解説しているようにガソリタンクで
車を走らせるに等しきギガジュール単位のプランクエネルギー(Planck Energy)を極小
の陽子の領域に一点投下集中投下するとのやりようではなくにももの[たかだか蚊が飛ぶ
運動エネルギー(ナノジュール相当のエネルギー)]に等しいとのテラ・エレクトロン・ボル
ト単位のエネルギー——では加速器がブラックホールを生成する可能性は「全くない」
と考えられていたとされているとことがあるわけである(:同点については本稿本段より
そう遠くもない前の部にてブラックホール生成問題に関する理論的支持材料を与えた
との有力物理学学者リサ・ランドールが「一九九〇年代より前の時代には、実験室でブラッ
クホールが生成される可能性など、誰も考えていなかった」と述べていることを同女著作
(『宇宙の扉をノックする』)より引用したが(出典(Source) 紹介の部 76(5))、研究機関
の報告書レベルでもそのように「はきと」明言されている —※本稿で問題視してきたと
ころの米国法学者論稿 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST
THE END OF THE WORLD(論稿配布サーバー arXiv よりダウンロードできるのもの)
にても、先に引用したように、その 838 と振られたページにて研究者報告書内容を受
けてののところとして “ **In 1999, when questions floated in the media about accelerator-
produced black holes, physicists issued an assurance that no particle collider in the
foreseeable future would have enough power to accomplish such a feat.** Busza report,
which was done in anticipation of the commencement of RHIC operations. The report did
a rough analysis of the particle collisions that would occur at RHIC and the gravitational
effects that might result. The Busza team found that the forces created by the RHIC were
orders of magnitude too small to possibly create a black hole. ” (訳として)「1999年、加速

器製ブラックホールについての疑問がメディアに浮かんできた折、物理学者らはそのような業(わざ)をなしうるのに十分な力を有した「予見しうる未来にあつての加速器」は存在しないとの保証を發した。(加速器実験機関お抱え物理学者である) Busza の報告書は RHIC 運転開始を期してものされたものである。同報告書は RHIC で発生しうる粒子衝突および結果となる重力効果らについて「大よその」予測をなしたとのものであつた。Busza のチームは RHIC によって生成される力はブラックホールを生成するにはあまりに小さすぎると同定していた(以下略)」(引用部はここまでとする) とまとめられている通りである——)。

であるから、カール・セーガンの没年以前(1996 年以前)、況や、小説『コンタクト』が世に出た以前(1985 年以前)には加速器でブラックホールが生成される、それがリスクであるなどとは世界中の学者らは誰も主張していなかつたと判じられるとの状況が問題となるのである(筆者は一生懸命そうした申しようを否定できるだけの学者論稿といった理論動向としての反対証拠がないものか、探知探査活動に努めてきたのだが、残念ながら、寡聞で「はない」とのところを理論動向の問題として反対論拠となるところを全く発見できず、科学界関係筋の発表文通りの物言いが真なりと認めざるをえないことを確認させられている——(述べておくが、この問題をややこしくしていることには [加速器による世界崩壊のリスクに関しては[異常核物質の生成可能性](Bevalac にまつわるところとして 1970 年代中盤以降のやりとりを**出典(Source)紹介の部 11**で仔細に解説している) や [真空の相転移問題] (1983 年にマーチン・リースらによって解決策が提示されたそれとなり、については**出典(Source)紹介の部 12**にて解説している) といった加速器に伴つての破滅的リスクが取り沙汰されてきたとの従前経緯がありもする。だが、それら従前に取り沙汰されてきた加速器リスクはブラックホール生成とは異質のものであつた] とのこと「も」あるにはある。しかしながら、それら本稿の先の段にて仔細に解説している加速器リスクをカール・セーガンが小説『コンタクト』と批判材料にしていた「とも」考えられない。そも、カール・セーガンは「加速器およびその加速器に関して従前取り上げられてきた破滅的リスクとは無縁なるものとしての」「ブラックホール生成を問題としている」からである(**出典(Source)紹介の部 80(2)**および**出典(Source)紹介の部 80(3)**)——)。

カール・セーガンという男が良心の賜物として加速器にまつわる警告を自身の 80 年代小説『コンタクト』に入れ込んでいたとはおよそ考えられないと判じられるところの論拠の第二。

仮に研究機関の発表や科学界の有力者発表に諸共、虚偽が現出しており、2000 年前後の地殻変動に至る「前」からカール・セーガンが並々ならぬ見識でもつてして

[加速器によるブラックホール生成]

について想いを馳せることができ「た」(時制に強調を込めて「でき「た」」)のだとしてみよう。

とすると、何故、表立って、加速器がブラックホールを生成する可能性が全く問題視されなかつた、1999 年まで問題視されることがなかつたのか、ということが当然に問題になる(：本稿前半部にて記しているように 1999 年にてウォルター・ワグナーという人物が問題視をなした折には同男述べようが「ビッグバン直後にはブラックホールがあつたという。加速器はビッグバン直後の状況を再現するという。であるから、ブラックホールを生成するのではないか」というものであつたわけだが、そこには余剰次元に対する顧慮が全く欠けていた。といったなかで有力科学者らも加速器実験機関らも諸共、1999 年には加速器によるブラックホール生成可能性を否定、安全性をひたすらに強調しての公衆に対する宣撫をなしていたとの格好となつている——本稿の前半部にて細かくも論じたことである——)。

そこからして疑義呈したきところとなるうえ、加えて、セーガンは「余剰次元理論によるテブ (TeV.テラエレクトロン) 領域での重力の増大傾向を知らなかった」と当然に判断なせるところとなっている。というのも同じくもの理論が世に出たのは(先に論拠に基づいて詳述しているように)1998年からであるからである。のような中で、そう、「ブラックホール生成は人間の手の届く範囲の加速器のエネルギー規模では無理である」との帰結と共にあった往時の人間の限られた科学理解の枠組みの中で「何故もってして」[超統一性理論]と[ブラックホール生成装置]を結びつけることができたのか、ということ「にも」当然に疑義がある (：筆者はここで[残酷なマリオネット仮説]のことを「示唆」しているのである。だが、そちら[マリオネット仮説]を容れろということを強弁しているわけではない(それを容れろというのはカール・セーガンが「教育環境も整っていなかったところで」小学1年生の頃から偏微分方程式をすらすらと黒板に解いてみせていたといった存在であるとの映像記録が遺っている、そう、彼が重力波(重力波については後述することにするが、多世界解釈にあって他の世界に浸潤するとの言われようがなされている)などによって脳を完全にコントロールされているとの脳に電極が刺されて操られているグロテスクな実験の昆虫のようなものの動きとしてではないと説明がつかないとの動き方を見せていたことにまつわっての直接証拠が残っているとのケースだけだろう(カール・セーガンの脳が解剖されてコントロールの証跡が如実に発見された等々)。そして、無論、そうした直接証拠は呈示できるような環境とはなっていない)。につき、「自分で自分の足下を判断すれば、貴殿を殺そうとする銃座がどこにどう据えられているか、そして、それを巧妙に糊塗する力学——甘い見方(セーガンのような科学界・言論界を牽引した[偉人]が文字通りに人間としての偉人であったなどと強弁するが如きの甘い見方)でもってして我々人間存在をして破滅に向けて、たばかる力学でもいい——がある」との見方を側面から間接的材料呈示でもってして支えるに足りる論拠を本稿では呈示しているだけであり、「最後の」判断は読み手諸賢に委ねている——そのための判断材料として【「トロイア寓意」の多重的付与にまつわるセーガンやりようの悪質性】についてはきと問題となることをこれより後の段で「さらにもって」細やかに呈示していく所存でもある——)。

(ここで振り返りもするが、本稿の冒頭部にては下にて図示しているような[変節]動向が存在していることを取り上げている。すなわち、前世紀末にて「はじめて」ブラックホール生成と加速器の関係性が問題視された折にあって加速器実験機関(およびその意を受けての後にてのノーベル物理学賞受賞者クラスの物理学者ら)が「加速器によるブラックホール生成などありえない」と当初、強弁していたところが、間を経ず、「新規理論の登場によりブラックホール生成はありえると考えられるようになった」とのものへと変じたとの[変節]動向が存在しているとのことを取り上げている——詳しくは出典表記箇所を参照のこと——。対して、カール・セーガン小説『コンタクト』が刊行された折、1985年にあってはブラックホール生成が人為にてなさしめられるとの帰結を伴う新規理論(ADDモデル)は未だ登場を見ていなかった(から問題になる)と上にては解説している)

■前世紀末葉（1999 — ）から今世紀初頭にかけての科学界論調

加速器によるブラックホール生成の可能性が「リスク」となるのではないかと研究機関部外の間人よりの質問が寄せられる（その質問の背景にあった考えが「粒子加速器が原初宇宙の高エネルギー状態を再現するとされること」と「原初宇宙には極微ブラックホールがあったとされること」に対する専門外の間人よりの推論であったと一般に説明されていることも本稿では解説している）。対して、研究機関ら（ブルックヘブン国立研究所およびCERN）は「今後実現されうるありとあらゆる粒子加速器によるブラックホール生成はありえない」との報告書を出す（：本稿では1999年における報告書らの内容（ブルックヘブン国立研究所およびCERNの報告書の内容）の原文引用 および2000年（2001年）にてのノーベル平和賞をパグウォッシュ会議を代表して受賞した物理学者フランチェスコ・カロジェロらの公衆に対する訴求を兼ねての論稿での申しようの原文引用を「出典(Source)紹介の部1」「出典(Source)紹介の部5」にてなしている）。

■2001年以降の新規理論に対する分析を受けての科学界の論調

余剰次元理論（1998年提唱）の発展動向を受け、同年（2001年）より権威を伴った専門の物理学者らが「粒子加速器（LHC）によって「大量のマイクロ・ブラックホールの生成」の可能性が有る（生成されたブラックホールはホーキング輻射との現象で即時蒸発する）」との論稿を発表しだす（：本稿「出典(Source)紹介の部2」では表記のことにつき案件分析をなした米国法学者論稿よりの原文引用などをなしている）。

■2003年以降の安全報告書にあつての明確化しての方向性

CERNが余剰次元理論によるブラックホール生成の可能性が観念されだした件につき、「潜在的な脅威」と看做しつつも「生成ブラックホールは即時に蒸発するから安全である」と専らに主張する報告書を出す（：本稿「出典(Source)紹介の部3」では表記のことにつき2003年のCERN安全報告書よりの原文引用をなしている）。

■2004年以降の科学界の変節（を受けての事後の安全報告書に見る兆候）

生成ブラックホール蒸発の論拠となっている理論、ホーキング輻射に対して専門の科学者が疑義を呈しだし、ホーキング輻射の発現に広くも疑義がもたれるようになる（：本稿「出典(Source)紹介の部3」では案件の解説をなしているとの米国法学者論稿およびホーキング輻射権威（William Unruh）の変節が現われているところの同権威の手になる論文よりの抜粋をなしている）。それを受けて、加速器実験機関は従前、ストレンジレット生成問題といった問題に対する安全性論拠として報告書の中で言及していたものである「宇宙線（宇宙を飛び交う高エネルギー放射線）現象と比較しての申しよう」をブラックホール生成問題に関して「も」強くも前面に押し出すようになる。

[文獻的事実]の問題として摘示できるし、本稿にて実際に出典に依拠して呈示しているとの「変節」の流れ

（セーガンの良心に期待できることなどないとの「まずもつての」話を続けるとし）、また、セーガンが仮にもし、
[表向きの発表動向と異なるありよう]
を（どういった料簡でか）理解・把握していた向きであったとしても、である。彼セーガンが「密（ひそ）やかな警告」をなしていた、ということはおよそ考えがたいとのことがある（小説『コンタクト』ではブラックホール・ゲート発生装置といった塩梅で描かれる十二面体が（「トロイヤを滅ぼした木製」

の馬]と一時形容されていた中)結局は「人類に恩寵をもたらす贈り物」であったなどという帰結に落ち着く。そう、カール・セーガンは「異星人が提供した機序および用途が厳密な意味では不明なる装置にまつわる設計図を元に人類がマーベラスな世界と遭遇できる好ましいゲート装置を結果的に作り上げる」との内容の小説をものしているのであり、そこに批判的やりようは明示的には全く感じられない——小説『コンタクト』を手にとられて筋立てを追って見てみれば、すぐに理解いただけようことか、と思う(ちなみに我々人間が死ぬまで生きることを強いられるとこの世界では「マイナスはマイナスのままに、プラスはマイナスに」との変換規則でもあるのか、といった式での嗜虐的反語話法と解されるものが山とある(うち、一例はこれよりも本稿にて摘示していく)わけだが、についてはこの段では触れない——)。

さらに、である。カール・セーガンの先覚「的」言及について人間としての属人的良心を期待することなどできないと申し述べるところの理由の第三として重んじて然るべき点として、である。カール・セーガンが【褒め殺しのやりよう】をとるところとしての、

[臆病な警告者]

であった可能性を否定するように、セーガン小説『コンタクト』には

[極めて奇怪な側面]

が「そこに善意など介在していなかろうとのやりよう」にて多重的に顕在化を見ていると
のことがある。

ここに至るまで本稿で何を書いてきたのか、よくも見直していただきたいものであるが、それは「既に一例摘示した例を引けば」

[キップ・ソーン(セーガンに助言をなしたことが知られる物理学者)やりよう
と不快極まりないかたちで関わる側面]

[小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』ありようと不快極まりないかたちで関
わる側面]

にまつわっての話となる。

いいだろうか。

[キップ・ソーンやりよう]

および

[小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に見るやりよう]

は双方ともども、

[[奇怪]かつ[不快]な911の事件発生の[事前言及]にまつわるもの]

となっているとこのこととここに至るまで詳述に詳述を重ねてきたところである((([a]から[f]と分けての)[b]の段からして従前にての解説部典拠紹介番号を紹介しながらもの振り返り表記をなしていたところ、本稿にてのより遡っての委細解説部にては問題となる文物ら特定セクションより原文抜粋なして[文献的事実]としての遺漏無くもの呈示に努めてきたとのところ——オンライン上よりすべて後追い確認できるとの[文献的事実]として呈示しているとのところ——としてそういう側面が「冷厳と」存在しているとのことが[ある])のだが、カール・セーガンの小説『コンタクト』という作品はそうしたことら、「キップ・ソーンやりよう」および「小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に見るやりよう」と「複層的に関わる側面」——ブラックホール生成問題にまつわる寓意性も関わりとところとにあつて——接合する作品であると述べられるようになっている(筆者は同じくものことをして[人間の悲劇]そのものの顕在化事例であると見ている)。

上のことについてつい先程の段でも取り上げたことを言葉を多少換えて繰り返すが、次のような関係性が成立しているとのことがある。

カール・セーガン『コンタクト』 ↔ ([通過可能なワームホール]にまつ
わるやりとり) ↔ 物理学者キップ・ソーン ↔ キップ・ソーン著作

『ブラックホールと時空の歪み』 ↔ 『コンタクト』に関連するところで煮詰められた[通過可能なワームホール]についての思考実験の紹介部にて[双子のパラドクス]絡みの話を展開、奇怪なことに、その場にて「多重的に」911の予見が顕在化を見ているとのキップ・ソーン著作にみとめられるありよう ↔ [通過可能なワームホール] ↔ セーガン『コンタクト』(回帰) ↔ [黄金比の全面での体現存在たる正十二面体(正五角形を十二の面に配しているとの立体図形)をゲート装置となしての作中設定] ↔ [異空間とのゲートと黄金比体現存在たる正五角形の関連付け] ↔ 同様のもの(異次元妖怪を封じるとの魔符としての[正五角形]たるペンタゴン)を登場させている小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』 ↔ [911の事件への多重的事前言及と申し述べられるところを有しているとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』の内容] ↔ [キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にあつての同様の側面と結節] ↔ [キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』と通過可能なワームホールの関係性](回帰) ↔ カール・セーガン『コンタクト』(回帰) ↔ [[カー・ブラックホール][ワームホール]の生成が作中内の[ゲート装置]と関わっているとの『コンタクト』作中設定](回帰) ↔ [カー・ブラックホールやワームホールを生成する可能性が「後の日に」(2000年前後の余剰次元に伴う理論的地殻変動によって)取り沙汰されだした LHC 実験] ↔ [アトランティスと関わる命名規則を採用している実験(ブラックホール生成イベントをそれで観測する可能性が取り沙汰されている ATLAS 実験グループが用いるイベント・ディスプレイ・ツール ATLANTIS の使用)、なおかつ、トロイアと関わる命名規則を採用している実験(トロイアに木製の馬で引導を渡したオデュッセウスがカリュプソの島、アイザック・ニュートンなどがアトランティスと見ていた神話上の存在に漂着することになった契機となった渦潮の怪物カリュプデイスの名を冠するブラックホール・イベント・ジェネレーター CHARYBDIS の使用)としての —そして、巨人 ATLAS がその場を知るとされる黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)のことも想起させもするとの— LHC 実験] ↔ [アトランティスやトロイアと —黄金の林檎らを介しもし— 結びつき、そちらアトランティスやトロイアとの —黄金の林檎らを介しもし— 結びつきに [911の前言要素]と[黄金比]の多重的關係が現れているとの小説作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』(回帰)

以上のように「馬鹿げたこと」としか表しようがない —だが、それが現実に[はきと観察可能な現象]として表出を見ているがゆえに「悲劇的でもある」のだが— との円環状をなす相関關係が成立しているとのことが「まずもって」問題となる(尚、述べておくが、この世界には同じくものことに通底する關係性が他に山とあり、かつもって、それら[奇怪な關係性]が[極めてユニークな(特異な)要素]を共有しながらもお互いに結節しあっているとのこともある。そうした現実的状况(脳が正常に働いている人間ならば無視はしなかりうとの)具体的論拠の摘示をなしながら指し示すのに注力なしているのが本稿ともなる)。

[Hagbard's "golden" submarine, Leif Erickson]
of The Illuminatus! Trilogy

visit

connected

the ruin of Atlantis under the sea

[Nemo's submarine, Nautilus]
of Twenty Thousand Leagues Under the Sea

visit

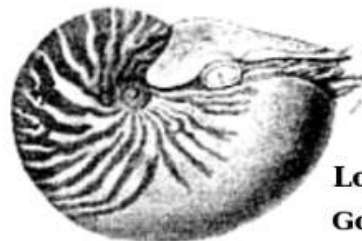
(quote)

"Hagbard, undoubtedly, had chosen this meeting place just because he liked the decor. Crazy bastard thinks he's Captain Nemo. Still, we've got to deal with him." — Illuminatus! Trilogy The Eye In The Pyramid

(Although The Illuminatus! Trilogy series seem to be no more than elaborated burlesques, it is possible to point out the series had characteristics as 911 foretelling works!)

ここまでにて俎上にあげている一次資料となる書籍それものに何が記載されているかの『文献的事実』の問題 (philological truthの問題)として原文引用なしながら指し示してきたように『ジ・イルミナタス・トリロジー』と『海底二万里』に登場する潜水艦らは相互に対応付けさせられていると指摘できる。第一、双方共にアトランティス遺構を探索した反体制アウトローの母艦となっている潜水艦であるとのことがある。第二、片方(『ジ・イルミナタス・トリロジー』の方)にてもう片方(『海底二万里』)の意識的模倣をなしているとの言及が作中にてなされているとのこともある(オンライン上より確認可能な原著引用文の通り)。

その点、といった話を意図して取り上げているのはここにて言及の作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』シリーズの方が「荒唐無稽喜劇小説」のように見えて、その実、性質の悪い「九一一の事件が発生することまつわる「多重的」予告小説」としての側面を「露骨に」帯びているとのことを指摘可能となっているとのことがある(：その不可解性につき「機序」との兼ね合いでいかな説明ができるのかの話は置いておいて、取りあえずも、「現象」に着目してそう述べられるようになっている)。



Nautilus

Logarithmic spiral

Golden spiral

(Setting for the novel) Hagbard = a member of Discordians

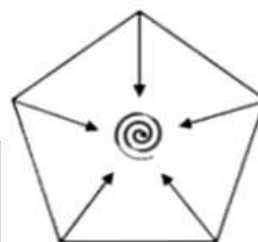
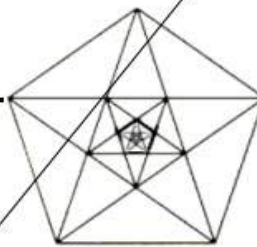


The Symbol of Discordianism
(seen in The Illuminatus! Trilogy)

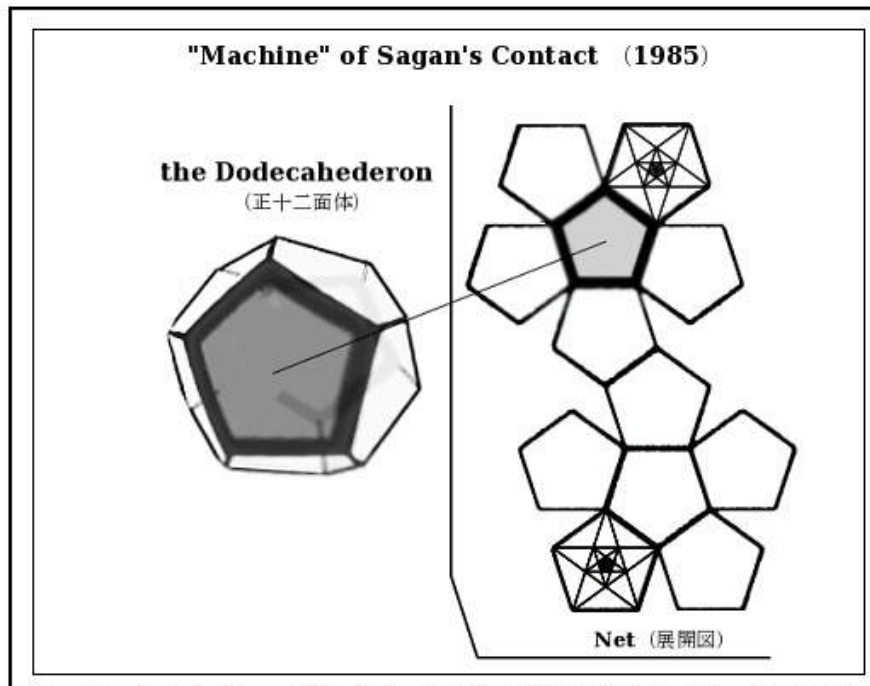
the Golden ratio
&
the mechanism

to infinitesimal
(infinitely small)

atom — atomic nucleus —
proton, neutron, etc. —
elementary particle



小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』レイフ・エリクソン号および小説『海底二万里』ノーチラス号には小説作品内それ自体で明言されているような明示的接合関係が存在するのであるが、うち、ノーチラス号のノーチラスはオウムガイの意となり、そのオウムガイ、対数螺旋構造と結びつくのこを本稿ここまでの段にて細かくも解説してきた存在である。その対数螺旋構造(うち、甚だしくは黄金螺旋構造)は黄金比と親和性高いものであり、また、無限小の領域への力学を体現する構造でもある(先述のとおりである)。他面、ノーチラス号と結びつけられているレイフ・エリクソン号の方の艦長、911の前言事象と「奇怪極まりないことに」結びついていると指摘できる作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』の主要級の人物ハグバード・セリーンはその作中、[ディスコルディア運動闘士]との設定が付与されているキャラクターだが、そこに見る[ディスコルディア運動]の(当該フィクションの中でも何度も図示されて登場してくる)シンボルは
 [黄金の林檎]と[(黄金螺旋と同様に)黄金比の体現物となり無限小の力学と結びつく五角形]を並置させてのもの
 であるとの「極めて独特なもの」となっているとことがある。



Kerr Black hole(カー・ブラックホール)として知られるブラックホールとも作中にて結びつけられているカール・セーガン小説『コンタクト』に見るゲート装置は正十二面体構造を呈する、要するに、黄金比の全身での体現存在として描写される。

(:「問題なのは、」従前妄言体系との兼ね合いもあつてであろう、黄金比と結びつく正五角形を魂を喰らう異次元侵入妖怪の類への封印手段として描いていたとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』という小説作品がただの荒唐無稽作品にとどまらず、その五角形(ゲート)を用いての異次元妖怪の封印の下りも関わるところとしての[911の予見小説]としての性質を帯びているとすることがあり——(「死活問題」に關係する[事実]を無視するのは相応の人間、有事にては生きるに値する能力を有していないとの類であり、はきと存在している[事実]を虚偽であると(反対論拠が何らなく)断言するは有事にあつての敵方の間諜あるいは唾棄すべき種族の裏切り者であろう)と述べつつものこととして——、そのことを[確たる文獻的事実]として容易に指し示せるようになって「しまっている」とのことがあることである([黄金比体現の五角形の異次元へのゲート]と[911の前言]が結びついていると申し述べられるようになってい)。そして、また、かてて加えて、「問題なのは、[黄金比体現存在たる正十二面体](五角形を12枚重ね合わせた図形)としてのゲート装置を前面に出している小説『コンタクト』が表記の911の事前言及作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』と同様同文に[911の前言作品]としての側面を奇怪極まりなくも帯びているとのキップ・ゾーン著作『ブラックホールと時空の歪み』という著作とも背景事情として密接に結びついているとことがあることである)。

さて、表記のような(何度も繰り返すも馬鹿馬鹿しさ・奇矯さ・途方もなさが際立つに際立つとの)関係性が成立している中でそのような関係性に確固として組み込まれている作品『コンタクト』につき、その作者カール・セーガンが

[褒め殺しのやりよう——ゲート装置を望ましいものとして描き、もって、誰も知らぬところであったが加速器問題を巡る危険性を訴求していたとのやりよ

う——]

をとっていたとの[臆病な警告者]と見るのは

「まったくもって妥当ではないものである」

と考えられるところとなろう (: [911 の事件が後の日にて起こることを予言していたような作品]「ら」と複合的かつ濃厚に、そして、奇怪に関わる —— 機序はともかくも関わるように「なってしまう」、でもいいが—— 作品およびその作者をしてどうして[善性を帯びた一個の人間]としての[臆病な警告者]と判じられようか?筆者としては[不自然な前言を「なさしめられて」いる、そういう機械よろしくの存在と濃厚に間接的証拠から疑われる存在] に対してそのような見立てをなすことは[最も愚劣な行為である]と当然に強調したいところである)。

その点、第三の理由に関わるところとしてはセーガンやりようにつきまとう【その他のおぞましい側面】、トロイアの比喩を化け物がかったかたちで、しかも、極めて嗜虐性を感じるのと式で自作『コンタクト』に込めているとの【その他のおぞましい側面】のこともあるのだが、その点については「後の段にてどういうことかについて詳解をなす」とだけ申し述べて、ここではそちら第三の点についての話に一端、一区切りをつける。

さてもってして、以上、ここまで呈示してきたところの三つの理由、すなわち、

第一. [カール・セーガンが小説『コンタクト』をものした時分(80年代)にあつてはブラックホール「人為」生成に関する現実的見立てが科学界にて何ら存在していなかったとされているとのことがある]

第二. [カール・セーガンが先覚知を有しており、それでもってして警鐘を鳴らさんとしていたと仮定してみても、同男がそれを「普通に見ていけば気付かぬ式で」隠喩的に、しかも、反語的方法にてなしていたとは考えづらいたとのことがある(小説『コンタクト』では異星人から送られてきたマシンの構築が人類に明るき未来を約束するものとして極めて肯定的に描かれているとのこともある)]

第三. [カール・セーガンの作品『コンタクト』は[911の事件の発生の事前言及]をなしている事物らと複合的に関わっており、その巧妙さに[嗜虐的やりよう]とワンセットになった「非人間的なる」恣意性が如実に感じられるとのことがある(そして、同様の話にはその他の意味で問題となる続きがある)]

との三つの理由からカール・セーガン、米国科学界を牽引する一級の知識人(卓抜した天文学者にして作家、そして、オピニオン・リーダーとして世間にて担がれてきた向き)として令名を馳せていたとの同男の『コンタクト』(1985)という作品に関しては

[1974年に現行のCERNの加速器LHCに対往時加速器に対する比率で200倍も出力が近いとのCEERN(CERNではなくCEERN)の加速器をその作中に「あまりにも奇怪に」登場させ、また、ブラックホールが生成されて惑星が呑まれるとの「他」作品との連結関係を呈しもしているとの小説作品](本稿の前半部にあつて出典(Source)紹介の部6から出典(Source)紹介の部10を包摂する解説部にてその問題性を専一に指摘しているとの Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W という作品)

と同文の[相応の性質を有した作品]であると判断できる、セーガン本人に【警告者としてのありよう】を見出すことなどできないようになっている、そのように述べたいのである。

[長くなるも、の脇に逸れての訴求事項として]

ここでは[b]から[c]に移行する幕間の部にあつて(長くなるも、の)訴求をなしておくこととする。

まずもつて述べるが、筆者は先の段、 $\alpha 1$ から $\alpha 8$ および β と振つてのことらのうち、

B. 「日本でも[五芒星]紋様が用いられてきたとのことがある。それは海女による[セーマン・ドーマン]と呼ばれる紋様の使用にまつわる話ともなる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用は[竜宮]に引き込まれないための呪いであるとの言い伝えがある(とされている)。さて、竜宮とはどういう場か。[時空間の乱れが発生した場]、[外側に対して時空間の進みが遅い場]と言い伝えにある場である。他面、重力の化け物、ブラックホールも時間の乱れが問題となるものである」

との部に関わるところとして The Lesser Key of Solomon (『ソロモンの小さな鍵』)との愚書・悪書の類 —— 近世欧州にあつての人間らが[魔術]と呼ばれる妄信体系に現(うつ)を抜かすべくも製作された魔術書(グリモア)の一種—— から直下再引用なすような原文引用を意図的になし、また、それに続けての段にてさらに下に再掲なすような図像を挙げていたとのことがある。

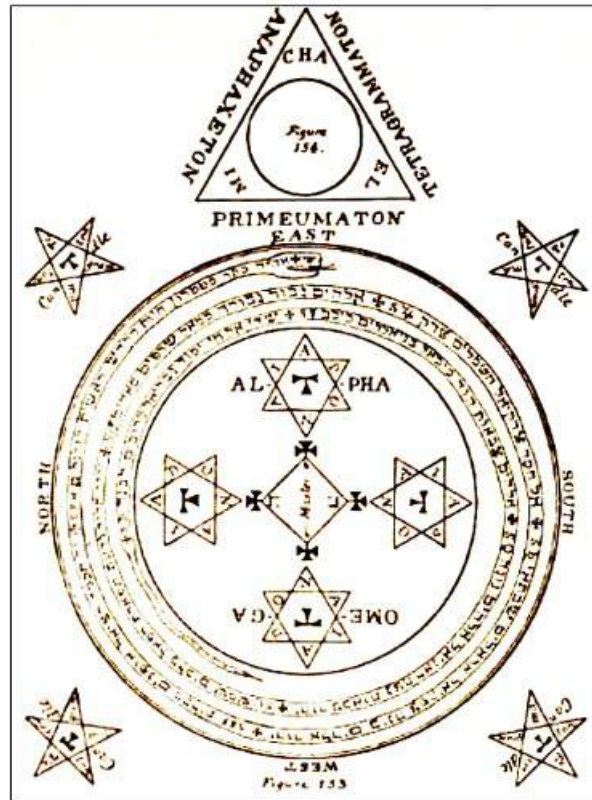
(直下、The Lesser Key of Solomon, Goetia (Freemason として知られる MacGregor Mathers が 1903 年に訳をなし、Lauron William de Laurence という人物の手になる 1916 年の版がインターネット・アーカイブ上にて流通しているとのもの)よりの再度の特定部原文引用をなすとして)

This is the Form of Pentagram of Solomon, the figure whereof is to be made in Sol or Luna (Gold or Silver), and worn upon thy breast ; having the Seal of the Spirit required upon the other side thereof. It is to preserve thee from danger, and also to command the Spirits by.

「これは [ソロモンの五芒星] の形態となり、ソル神(太陽体現神格/金)ないシルナ神(月体現神格/銀)にて形作られる構造にして、そして汝が胸にあつて帯びられるとのものとなり、汝の側ではない方にて求め乞われているとの霊の印を伴っているとのものとなる。[ソロモンの五芒星]は汝をして危難より守り、また、霊達(訳注:[ゴエティア]こと[ソロモンの小さな鍵]が取り扱っているとの[ソロモン 72 柱]の悪魔の如き悪しき霊)に命令を与えることができるとのものである」

(訳を付しての再度の引用部はここまでしておく)

(続けて直下、表記引用部に対応するところの図示として本稿にての**出典(Source)紹介の部 72**で持ち出していたところを再掲なすとして)



——上の図は著作権表示 Not In Copyright となっている Lauron William de Laurence という著者の編集になるところの 1916 年刊行 The Lesser Key of Solomon, Goetia に掲載の図像となり、[ソロモンの五芒星]と呼ばれるもの、そして、[ソロモンズ・シール(ソロモンの指輪)]と呼ばれる六芒星が悪魔よりの防御かつ悪魔の使役と結びつけられた魔符の構成要素として挙げられている——

直上、The Lesser Key of Solomon, Goetia 『ソロモンの小さな鍵』などという下らぬもの、妄信体系に眩惑された者達の中の相応の人間らがもっぱらに好んで読するとの性質の愚書・悪書 (an old book as a worthless rubbish) の類の内容を取り上げたうえで書くが、911 を事前言及しているが如く要素を複合的に具備しているとのことで問題視してきた作品、

『ジ・イルミナタス・トリロジー』 ([五角形に閉じ込められた、異なる銀河に由来する異次元経由で介入してくる怪物]との設定の存在が国防総省庁舎ペンタゴンが爆破されることで解放される —— **出典(Source)紹介の部 38-2** —— との筋立てを伴った作品)

にあっては次の如く描写もが含まれている。

(直下、幅広くも国内で流通している文庫版『イルミナティIピラミッドからのぞく目(下)』(集英社/欧米で70年代にヒットしたものが遅まきに2007年に刊行されたとの邦訳版)p.144より原文引用をなすとして)

「彼らのジョークを一つ教えようか」とサイモンはつけ加えた。「鷲の頭の上にダヴィデの星が見えるかい?彼らがそれを入れたのは——五芒星だらけのなかにひとつだけユダヤの六芒星を埋め合わせにだけ——右翼のイカレトンチキがそれを見つけて、シオン賢者が財務省と連邦準備金を支配している証拠だと主張

できるようになるんだ

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、オンライン上より確認できるところの同じくもの箇所原著原文表記は The Illuminatus! Trilogy The Eye In The Pyramid(Book Two: Zweitracht)、その THE FIFTH TRIP, OR GEBURAH の節にあつての “ And here's one of their jokes," Simon adds. "Over the eagle's head, do you dig that Star of David? They put that one in — one single six-pointed Jewish star, made up of all the five-pointed stars— just so some right-wing cranks could find it and proclaim it as proof that the Elders of Zion control the Treasury and the Federal Reserve.” との部となる——)

上にて引用の部は

[合衆国国璽] (ハクトウワシを描いての事実上の国家国章 ——直下にて呈示の図を参照のこと——)

にあつて

[五芒星と六芒星が同時に入れ込まれている]

とのそのことに対する荒唐無稽小説(正確には「表向きの」荒唐無稽小説であると評すべきであろうが)に見る「当て付け」(あるいは「当て付けと「とれる」)描写となる。



その点、悪い意味で「よくできている」と受け取れるのは上記小説抜粋部(『ジ・イルミナタス・トリロジー』よりの抜粋部)に見る記述 ——相応の類が反ユダヤ主義を不適切に鼓吹しやすくなっているとされることにまつわる記述—— に「一面での的を射ている」

と[とれる]ようなところが伴っていることである。

現実に相応の人間らが真実を眩ますようなかたちで上の抜粋部に認められるような論法をユダヤ系陰謀論と結びつけて前面に押し出しているとのことが見受けられるとのことがある (と把握している)。

イギリスの劇作家(にして間諜の類)のクリストファー・マーロウという男が

『マルタ島のユダヤ人』

という戯曲をものしているのだが、同作、

[シェイクスピア『ヴェニス商人』に見る悪徳な高利貸しシャイロックなど比肩すべくもない悪辣な人間、差別・逆差別の力学を自身の人格とまで同一化させて周囲を害してやまないとの相応の心性を有する至った「逆差別」のユダヤ系富豪を登場させているとのエリザベス朝時代(16世紀)成立の差別劇]

との色彩を呈しているとの同作に[一例]を見るような歴史的に根強いユダヤ系への差別・根強い偏見の問題、そして、根強い「逆」差別の問題は日本に住まっている限り想像し難いか、とは思う。

しかし、極東、[国内マイノリティの問題に類似事象を見出す]ことを除いてはユダヤ教徒に起因する歴史的問題が観念され難いとの極東にてのここ日本にあって「できえ」も確かに、

[[右翼的スタイルをとる人間] あるいは [全体主義を是とする人間ら] (あるいは [差別・逆差別をこととする勢力ないし力学の工作員のような相応の類] でもいい)]

が表記の小説、ジ・イルミナタス・トリロジーに見るような式 —— ((再引用するとして) “驚の頭の上にダヴィデの星が見えるかい?彼らがそれを入れたのは——五芒星だらけのなかにひとつだけユダヤの六芒星を埋め合わせにだけど——右翼のイカレトンチキがそれを見つけて、シオン賢者が財務省と連邦準備金を支配している証拠だと主張できるようになるんだ” (再引用部はここまでとする)との式) —— でもってして今日に至るまで目立って反ユダヤ主義の類を人心操作の具 (より本質的な側面に着目すれば[自分では何も考えることをせず食餌として与えられた出来合いの材料に何も考えずに噛み付くとの相応の魂ら]に生じようとの心中の掌握と操作の具) に利用してきたといったありようが観察されもする。

同じくものことの日本にての「利用」事例としては、である。戦前の[天皇教] —その信者には[自死]も強いていたとの教育勅語発布の前後よりますますもって[幼児洗脳]的特性が強まっていったとされる宗教— の信徒たる軍属 (例えば、四王天といった将官が反ユダヤ主義の輸入に尽力しているとの歴史的事実がある) から近年のオウム真理教やオウム真理教を「表面だけは」穏やかにし巨大にしたといった按配の[問責されざるのシステム]としての実にもって他罰的な巨大カルトに属する[相応の種別の全体主義的人間ら(あるいは全体的勝利に名を借りての小利のために他を没義道にも犠牲にする契約に諾としたような者たちとも評されよう人種ら)]がユダヤ系に起因する差別・逆差別の問題をどのように連綿として「不適切に」鼓吹してきたか、そして、鼓吹させられ続けているのかとのことまでこの身はよく把握している —— 筆者としてはその背景に国内にあっての群れなして動くマイノリティ、北朝鮮「系」の人間らに由来する[[北朝鮮]を[イラン]同様に迫害しているとみられているイスラエル]に対しての憎しみのようなものもある程度は作用しているかもしれないと一時期見ていたのだが、そして、筆者の前にも石を置いたようなシステムとしてのカルト成員らが自分たちに類する他罰的な、それでいて対して頭を働かせたくはないとの筋目の人間らに一種の刺激剤を投与でもしているのかと考えていた時期があったのだが、現在は「背面の本当のところにある「非」人間的事情」が全くもって異なるところから大きくも作用していると結論付けている(※) —— 。

(※英語ではオウム・ドゥームズデイ・カルトと相応しくも表記されるオウム真理教にあっては組織瓦解の前、麻原の指示で反フリーメーソン・反ユダヤ陰謀論の研究の指示が出されてカルト紐帯の強化に用いられたとの事情があることが知られており(いまや絶版本となっている『オウム帝国の正体』などにも記載されていたことか、と思う)、ある種、オウム紐帯と似たりよつたりの

[自分達(の都合)さえよければ他(の一般的道德律の問題)は無視しきってもいいとの狂った論法を[宗教的ドグマ]で希釈できている、思い込んでいる筋合いの「相応の」人間らが多く集まっての巨大カルト]

に属する特定の類らも反ユダヤ主義的主張の鼓吹に一役買っているとのことについては手前が情報収集の過程や相応のちよっかいをかけてきた者達に対する分析の中で把握するに至ったことである——複数の[具体名]まで挙げて不品行を問責できるが、良くて[純然たるロボット]、悪くて[ロボットと陋劣なる人間的心性の混交型]といった実の下らぬ者達とやりあうのが手前の目的などではないため、本稿ではのような相応の者達などのやりようには筆を割かない——。

につき、「彼ら」が如何程までに自己欺瞞に陥ってそういうことをやっているのかについては疑義があるのだが、そう、たとえば、

[仮想敵を作り出して組織基盤を盤石にする]

[自分達自身の悪しきありようにもっともらしい背景を取ってつける]

という建前や

[(外患誘致の工作員的な輩としての)不和を呼び込む]

といったその他のありうべき建前につき[相応の虚偽のベンダー]としての彼ら自身が(彼らの水準で)納得づくめでやっているのかは量りかねるのだが、表向きの皮相的なありうべき建前の問題から離れもし、日本でもそれ絡みの陰謀論や陰謀論未満のヘイト・スピーチを鼓吹しているとの[不快な動きを[効用]との観点で一歩離れたところで分析してみると、そこには「虚偽で」「隙間領域を充填して」人間社会をより硬直化させようとする(相互不和を煽って硬直化させようとする)という、

[非人間的なる悪意のようなもの]

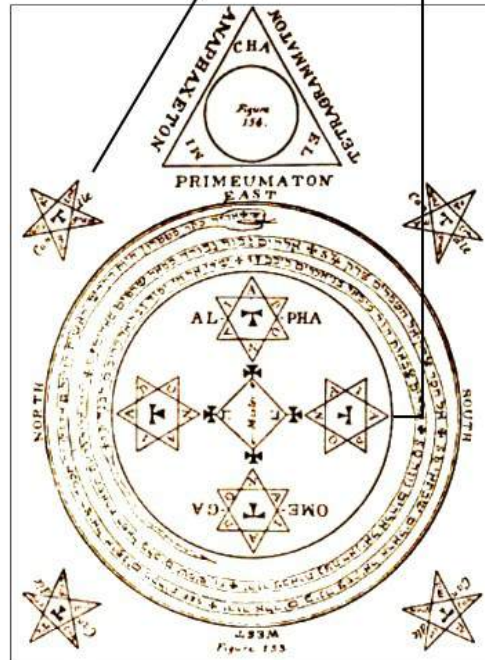
が「如実に」感じられるとのことがある)

以上のように判断する至った人間として述べるが、心ある向きにあってはそれ絡みのデータ・情報・事実に合致していないとの陰謀論や陰謀論「未満」のヘイト・スピーチをあたたら展開しているような者達を目にしたならば、その背面にどういう意図が介在しているのか、考えていただきたいものではある。

さて、筆者は断じて宗教的な人間でもなければ、オカルティストなどといった相応の種別の人間でもないが、[グリモア]と呼ばれる魔術書——非科学的オカルト関連の著作——の類(の近代にて再刊行されて流通している版)の中の『ソロモンの小さな鍵』にあって五芒星と六芒星が共に、

[退魔(悪魔を退ける)・役魔(悪魔を使役する)の象徴]

として引き合いに出されていることは合衆国国璽、五芒星と六芒星を結びつけているとの国章と記号論的かつ視覚的に結びつくのかたちともなっている(下の図を参照されたい)。



The Lesser Key of Solomon
(1916 edition)

Nonsense?

(Although I am neither an occultist nor a religious man, I don't think so.)

それにつき、

「グリモアの類の成立時期の方が「当然に」合衆国の成立および国章制定の流れに「先立つ」と解されるようになっている」（『ソロモンの小さな鍵』ことゴエティアというグリモアの様式は少なくとも16世紀後半から17世紀にかけて既に存在していたとされ、対し、合衆国の独立は18世紀後半(1776年)、また、国章の制定時期はそれからさらに時代を経てのことである ——英文 Wikipedia[Goetia]項目や同じくもの[Great Seal of the United States]項目に通俗的な解説がなされているところである——)

とのことを顧慮しての上でのこととして

[合衆国国璽にての五芒星と六芒星の一举体現方式]

に関して

(『ジ・イルミナタス・トリロジー』よりの再度に再度を重ねての引用をなすとして)「鷲の

頭の上にダヴィデの星が見えるかい？ 彼らがそれを入れたのは——五芒星だらけのなかにひとつだけユダヤの六芒星を埋め合わせにだけ——右翼のイカレトンチキがそれを見つけて、シオン賢者が財務省と連邦準備金を支配している証拠だと主張できるようになるんだ」

などとの言いようがなされるだけの相応の視覚的事実があることもまた「時期的先後関係の問題から」奇怪ではあるとのことになろうかと思われる（合衆国の国章が[五芒星・六芒星を併せて配置しているとの形式をとっていること]につき[より以前に遡る近世のオカルトの徒輩ないしはオカルト的錬金術書の類に見られるやりよう]をまるで露骨に踏襲しているような側面があると[受け取れる]からである）。

そうもしたことがあることについて荒唐無稽小説(正確には[荒唐無稽小説としての体裁を帯びての文物])の『ジ・イルミナタス・トリロジー』からして

[ペンタゴン(五芒星と相互内接関係を呈する[五角形]である)に封じられた異界の魂を喰らう存在が解放される]

とのオカルティックな筋立て(としか表しようがないもの)が採用されているとのことについて、

『そうした記述を含む小説内容(ペンタゴンに封印された魂を喰らう異次元介入存在の解法に向けて話が進んでいくとの内容)もまたそこにて茶化されている[イカレトンチキ](訳書よりの原文ママ)仕様の人間ら — 詐狂者とのことであれば、詐欺をなしつつ人を傷つけるとの輩、争いの根となるべくも使役されているとの相応の類ら—の論法と同文の、いや、よりもって取り合うに足らぬものである』

で話が済まされるのか。

に対しては、

[荒唐無稽小説で一面で鋭い揶揄がなされつつもオカルティストいいように[話のネタ]にしての滑稽話が展開されているにすぎない。それ以上でもそれ以下でもない]

と(話の筋立てを表層のみから追えば)とれもするわけだが、といったストーリー展開(ペンタゴン崩壊に伴う異界の魂を喰らう存在の解放)それ自体が

[911の事件の発生の「事前」言及が如きことと結びついている]

とのこととなると話が異なってくる。

すなわち、問題となる小説が、(くどくも繰り返すが)、

1. 「[ニューヨークのマンハッタンのオフィスビル爆破]より話がはじまり」(本稿の先の段、**出典(Source)紹介の部 37**を参照のこと)
2. 「クライマックスに向けて魔的封印を解くとの目的で「ペンタゴンの爆破・部分倒壊」が実演され」(本稿の先の段、**出典(Source)紹介の部 37-2**でオンライン上より確認できる全文確認できるようになっているとの原著および国内書店にて流通を見ているとの集英社刊行の文庫版訳書より引用なししているところである。尚、そこに見るペンタゴン爆破時間が時計にて911の指し示しをなすとの方向に近いとのことまでもがあることも先に解説している)
3. 「現実のブルース・イビズ容疑者(自殺した米軍軍属の細菌科学者)を巡る911以後の状況を事前に描くように「米軍科学者から漏出した炭疽菌改良株が大災厄をもたらしかねないとの状況に至った」ことが描かれ」(本稿の先の段、**出典(Source)紹介の部 37-2**でオンライン上より全文確認できるようになっているとの

原著および国内書店にて流通を見ているとの集英社刊行の文庫版訳書よりの引用なししているところである)、

4. 「そのスピンアウト・カードゲーム作品(スティーブ・ジャクソン・ゲームズ製[カードゲーム・イルミナティ])までもが[崩されるツインタワー][爆破されて粉塵をあげるペンタゴン]とのイラストの持ち出しから 911 の事前言及物であると問題視されているとのものとなり」(本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 37-4](#)を参照のこと)

5. [ペンタゴン体現物とされる五角形とニューヨーク体現物との分析結果が出てくる黄金の林檎を対面並置させての独特なるシンボリズム] を図示してまで作中にて頻出させている作品となっている」(本稿の先の段、[出典\(Source\)紹介の部 37-5](#)でオンライン上より全文確認できるようになっているとの原著および国内書店にて流通を見ているとの集英社刊行の文庫版訳書よりの引用なししているところである)

とのことが「現実に」あるため、ここでの話からして通り一通りの常識的目分量でもって軽んじていいようなものではないと述べるのである。

かてて加えて(よりもって性質悪きことに)、次のようなことまでもがあるために、筆者は[ソロモンの鍵]と[合衆国国璽]の類似性のことを持ち出している。

[本稿にあつての先の段で筆者は CERN から盗まれた反物質がバチカンを灰燼に帰すための手段に転用されるとの筋立ての小説『天使と悪魔』のことを取り上げていたが、同小説『天使と悪魔』とここにてその特質につき振り返りなししている『ジ・イルミナタス・トリロジー』の間に接合関係が存在していると指し示せるようになっている]

どういふことなのかについて解説をなす。

その点、まずもって述べるが、

[細かくもは先にての解説部(ここでの話と同文に「脇に逸れてのもの」として展開していたとの先行しての[布石]と明示しての解説部)の内容を振り返りいただきたい]

とのところとして筆者は以下の趣旨のことを——細々とした引用をなしながら——指摘していた。

(多少、先の段と順序をずらして先だつて解説を講じていたところの内容を振り返るとし)

I. [日本にあつての墓石隣の[板塔婆]はそも、[仏舎利(釈迦の遺灰／あるいは通俗化・様式化を経ての慣行と見れば、幅広くもの物故者の遺灰)を収めたものとしてのストゥーパ]という仏教建築物に端を発しており、そのストゥーパ(卒塔婆)が[五大元素]

と歴年結びつけられてきたとの背景がある、それゆえ、日本の[板塔婆]までもがサンスクリット(の表記のための悉曇(しったん)文字)にて[五大元素]のことが表記されているとの格好「とも」になっている。

そこにいう五大元素の同定方式、仏教本場の天竺ことインドに由来するとの

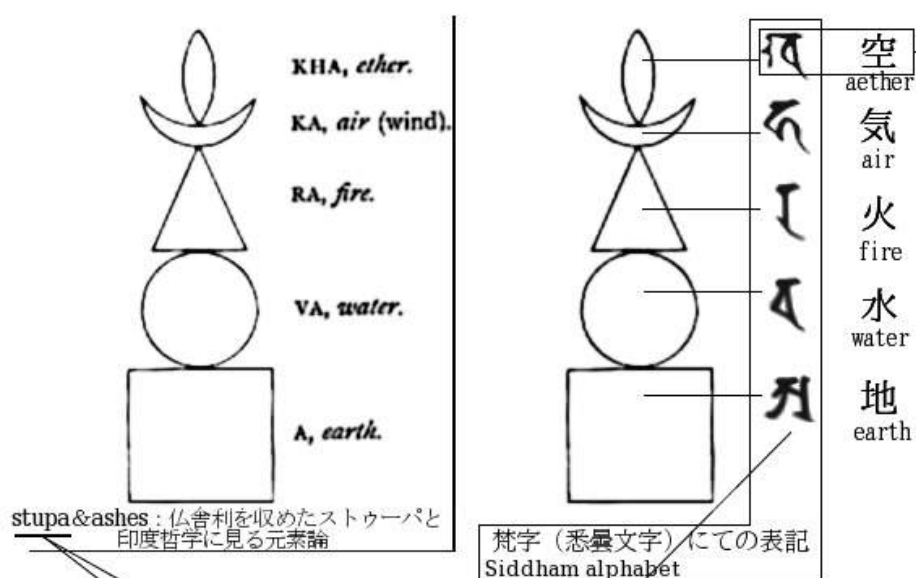
[空(虚空)] [気(大気)] [火] [水] [地]

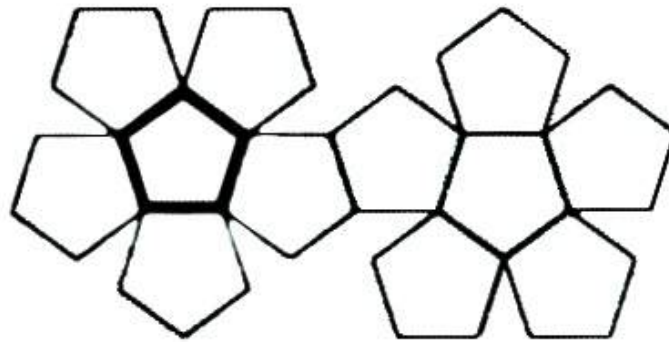
の同定方式というのは古代ギリシャの哲人プラトンに遡るギリシャ式のやりようとはほぼ同じくのものとなっている(プラトン・アリストテレスの創始した現実理解の方式に続く欧州歴年の見方ではこの世界の構成要素を四大元素として見、かつ、そこに加えもしての[第五元素](フィフス・エレメント)としての[地上界を越えての星の世界の構成物質エーテル]をとくに観念するとの見方がなされてきた。それがゆえ、ギリシャ・ローマの観点を受け継いでの欧州元素論:[気][火][水][地]+[空

としてのアイテル(エーテル)」、インドに由来し仏教体系に影響を与えてきた五大:[気][火][水][地]+[空としての虚空]とのかたちで近似性が見てとれるとこのことがある。につき、「欧州元素論とインドの五大は発生が異なる」などとも述べられたりするようだが(ただしアレクサンダー大王の印度への東征とそれに伴うヘレニズム文化の勃興との要素が影響を与えている素地はあるなどと常識人は言うかもしれない)、何にせよ、元素論元素の構成単位は同一のものとなっている。

さて、ここ日本にて人間の灰を収めたモニュメントたる墓地の板塔婆までもが[その天辺(てっぺん)に[空](虚空)を配しての五大元素論準拠型形式を(わざわざ悉曇文字と呼ばれるサンスクリットでの記述を伴いながらも)とっている]とのそのこと、そして、欧州におけるフィフス・エレメント(第五元素/プラトン・アリストテレス的世界観に立脚しての元素論では[正十二面体]と結びつけられてきたとのもの)で終息しているとのことに関しては、である。「高邁な古代人の哲学的観点の産物であろう」という薄っぺらい論理では説明がつかないような側面が付きまわっていると申し述べられるだけのことがある。

(再掲図. 図の細かき内容については先の段を参照されたい)





Is Regular Dodecahedron
the fifth elements?

Plato+Aristotle

プラトン・アリストテレスの師弟の系譜に連なる同文同様の元素を並びたてての元素論では「空」(星の世界の構成要素)、第五元素とでも表すべきものは正12面体で体現されるとの見方がある

II. [2000年に刊行された小説『天使と悪魔』ではCERNより盗まれた反物質がバチカンを灰燼に帰すための手段へと転用されるとの筋立てが描かれるのだが、そのプロセスはまた当該小説作品のなかで[枢機卿らの四大元素に基づいての殺害と結びつけられている]とのことがある。そのことは(より細分化させての)以下、II-1. からII-4. にての観点から不気味なものと判断できるところとなっている]

II-1. 「小説作品『天使と悪魔』で殺されていくとの枢機卿(カーディナル)は cardo、すなわち、門にあっての蝶番(ちょうつがい、ヒンジ)を語源とする職掌である。また、そもそもローマ教皇からしてその歴代の紋章に[鍵]を採用している存在となり、ローマ・カトリックが総本山として本拠としているサン・ピエトロ大聖堂——小説およびそれが後に映画化されての『天使と悪魔』では自作自演の反物質兵器テロの標的にされたとのまさにその場——それ自体が鳥瞰した場合に[巨大な鍵]を模しているといった按配の形態を有しているとのことがある(何故、そうもなっていると判じられるのか、と述べれば、ローマ教皇について言えば、その初代教皇(とされる)ペテロがキリストより天国の鍵を渡された存在であるとの言い伝えの伝が存する、新約聖書のマタイ福音書にも記述されているのかたちでそうした言い伝えの伝が存するからである)]

II-2. [ローマ教会・ローマ教皇を首班に、枢機卿らを幹部に戴くとの[ペテロの教会](ローマ・カトリック)については新約聖書(の中のゴスペル・オブ・マシュー、マタイ福音書)にて

[天国の鍵を受け持つ機関]

[地獄の門に対する蓋となる存在]

であるとの表記がなされているとの存在でもある(オンライン上よりも確認できるとのマタイ福音書16章18節から19節(Matthew 16:18-19)にて初代教皇と定置される使徒ペテロにまつわって次のような表記がなされているとのことがある→ “I tell you that you are Peter, and on this rock I will build my church, and the gates of Hell will not overcome it. I will give you the keys of the kingdom of heaven; whatever you bind on earth will be bound in heaven, and whatever you loose on earth will be loosed in heaven” 「(イエス曰くのこととして)我は汝に言う。汝はペテロ、我はこの[岩](ペテロという語句が[岩]とのニュアンスに近いことと通じている)の上に我が教会を打ち立てよう、そして、[地獄の門](ゲイツ・オブ・ヘル)はその教会に打ち破ることはできないであろう。我は汝ペテロに[天国への鍵]を授ける。汝が地上で束縛として課すこと

は天の国にても束縛として課されるであろうし、そして、汝が地上にて揺るめんとするが如くことは天の国にてもまたゆるめられるであろう」(英文表記に対する拙訳はここまでとしておく)。

従って、ローマ教会を暴力的に扉として取り除くとのことは【天国の扉】・【地獄の門】を開くことに等しいとも想起される、すなわち、小説『天使と悪魔』に伴う寓意 — 上述 — は〔(現世に対しての)冥界の門を開く寓意〕「とも」解せられるようになっている

II-3. [ローマ教会を CERN より略奪した反物質でもって破壊しようとする存在がいるというのが小説『天使と悪魔』の粗筋設定である(：そうした内容の小説『天使と悪魔』、黒幕たるカメルレンゴ、教皇の侍従長が教会の権威を高めるためにイルミナティの名を騙って一芝居を打ったなどという取って付けたような結末がどんでん返しとして付されているのだが、そういう二重人格的な悪役の存在による自作自演を描いての結末部を観念しようとしまいと当該作品にて通貫して取り上げられているのは「被害者である」との設定の CERN より略取された反物質でもってして「天国の鍵の保持者」にして「地獄の門に対する蓋」であると聖書に記載されているローマ教会を壊滅させようとの行為動態である)。教皇位を争う四人の〔扉の蝶番ちょうつがい〕に語源を持つ役職保持者である)枢機卿らを殺し、反物質で鍵に似姿が酷似している聖パウロの教会の総本山・聖ピエトロ大聖堂を中心とした一画を灰燼に帰せしめるとの作中悪役のプランが進行していると受け取られるようになっているとの粗筋展開を見せているわけであるが、その点、〔蝶番〕(カーディナル枢機卿と結びつくカルド)が外れた扉、地獄の門への蓋となる聖なる教会(と歴年、自称されてきたもの)が破壊されるとのことで述べれば、天国であれ、地獄であれ、そこからして CERN 由来のもので〔冥界との扉〕が開かれるとの寓意を観念することができる]

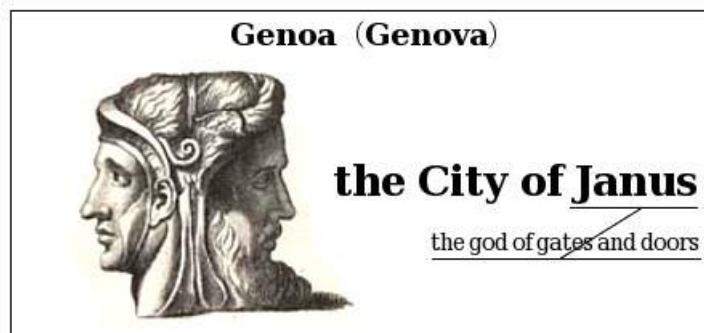
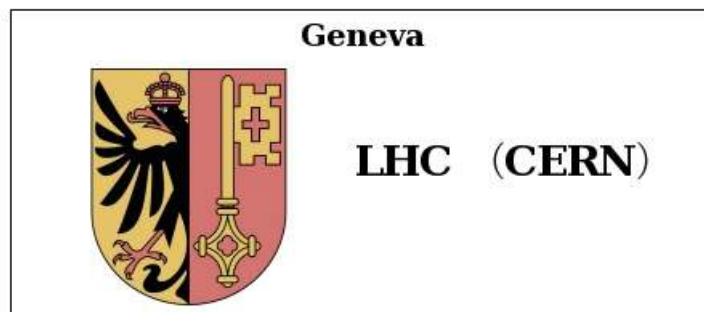
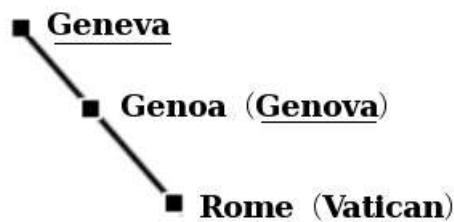
II-4. [『天使と悪魔』にはそれを指摘する人間がこの世界にあつては「どういわけなのか」絶無であることとして、高度に寓意的なやりようで地理的特質から「も」〔CERNに通ずる扉の寓意〕が含まれているとのことがある。具体的には明示的に一切『天使と悪魔』の中には言及されていないこと、そして、全く指摘されないようなことながらも次のようなことがある。

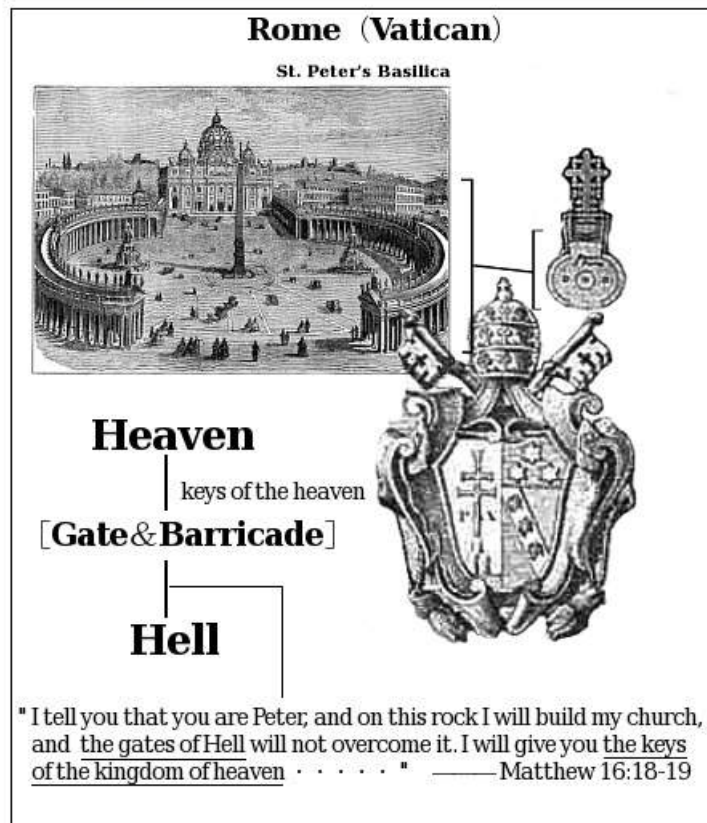
⇒

[地理上にみとめられる事実の問題として欧州にあつては〔ジュネーブ〕(現行、LHC 実験が運営されている CERN 本拠)・〔ジェノバ〕(英語では Genoa ジェノア/イタリア語に依拠しての綴りによっては英語のスイスの〔ジュネーブ〕表記 Geneva に非常に近いとの〔Genova〕と綴る都市)・〔バチカン〕が地図上にて一直線上に並んでいるとのことがある。あまりにもできすぎているところとして、それら一直線上につらなっているとのジュネーブ・ジェノバ・バチカンは意味論的に揃い踏みで小説『天使と悪魔』に〔扉〕〔門の神〕の寓意として結節している。まず、〔ジュネーブ〕だが、同地から盗まれた CERN の反物質がカトリック教会の破滅の筋立てに使われるとの式で『天使と悪魔』内容と結節しているわけだが、同地、ジュネーブの紋章は〔神聖ローマ帝国の鷲とローマ教会の「天国の鍵」のシンボルをそれぞれ左右に配しているのもの〕となっており、〔天国の鍵〕の文脈でも〔天国の鍵たる地〕〔天国の門たる地〕を破壊せんとしているとの『天使と悪魔』とのつながりが観念されるものである(帝国都市、ライヒシュタットとしての自治権を認められての立ち位置と司教座設置都市としての沿革から数百年前からそういう紋章が採用されているとされる)。次いで、〔ジェノバ〕だが、こちらは『天使と悪魔』という作品の中では何の重み付けも与えられていない都市ながらも、〔門・扉の神たるヤヌス〕に命名由来を持つとされる都市との来歴から二重人格が如く悪役をして〔ヤヌス〕(黒幕たる〔ヤヌス])と評していた『天使と悪魔』の粗筋との接合性が観念出来るものである(かてて加えて、ジュネーブとジェノバの綴りが近いこと、また、結節点となっている式ですべて〔扉〕の寓意と通じているとのこともある)。

最後に地理的にはローマ市に内包されるかたちで存在しているとの独立国家バチカンであるが、天国の鍵と結びつく同国家を灰燼に帰さしめるような陰謀があることを描く、蝶番(扉を開閉させ、なおかつ、扉を垂直に立たしめるヒンジ)と語源的に結びつくとのカーディナルら(枢機卿ら)を元素論に基づいて殺害していくとの筋立てでもってそうした陰謀を描くとの作品が『天使と悪魔』であったとのことがある。以上より、「地図上で」三点が一直線に並ぶ(扁平なる三角形の各点とはならず一直線に並ぶが如く様相を呈する)とのジュネーブ・ジェノバ・バチカンは『天使と悪魔』(に見る[扉]関連の寓意/そしてCERN 関連の粗筋設定)と濃厚に結びつくようになっている——再度繰り返すが、『天使と悪魔』をものしたダン・ブラウンという男は同男作品にそうした地理的寓意を込めたとは今日に至るまで吐露していない(英文サイトなどから筆者は分析している)、またもって、同じくもの寓意を指摘する者も目立ってみうけられない(ただしこれより程度の高低はともあれ同じくもの言い出す向きが目立って出てくるとのことは考えられる)、そして、『天使と悪魔』それ自体にあって三点直結の中間点たるジェノア(ジェノバ)が目立って言及されていることもないとの「ないない尽くし」なのだが、とにかくも、以上のような関係性が現実に摘示できるようになっている——]

straight line





(再掲図. 図の細かき内容については先の段を参照されたい) 以上のようなI. およびII. の側面(II. はII-1. からII-4. にさらに分割)を

[たかだか作家ダン・ブラウンの属人的やりようによる、凝った「隠れ」設定]

の問題で済ませられないとの要素、留め金となるところとなる小説が

[(直近にてペンタゴン崩壊が封印破壊と結びつけられているとのことを言及した) 小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』]

であると判じられるだけのことが「ある」のである。

その点について順序追っての解説をなしていく。

第一。

小説『天使と悪魔』にあつては

[元素論に基づいての連続殺人が計画的かつ儀式的に実行される]との筋立てが採用されているわけではあるが(: 英文 Wikipedia[Angels & Demons]項目より掻い摘まんでの「再度の」抜粋をなすとして “ Langdon finds one of the Preferiti murdered in a way thematically related to each location's related element. The first cardinal was branded with an Earth ambigram and had soil forced down his throat, suffocating him; the second was branded with an Air ambigram and had his lungs punctured; the third was branded with a Fire ambigram and was burned alive; and the fourth was branded with a Water ambigram and was wrapped in chains and left to drown at the bottom of a fountain. ” [ラングドンはそれによってプレフェリーティ(新教皇の最有力候補たる枢機卿ら)がテーマ性をもつのかたちにて各々、元素に関わるかたちで殺害されていることを発見することになる。最初の枢機卿は[アース](大地)とのアンビグラム(注記:再度記すが、アンビグラムとは上下反転して見て見たり、鏡に映して見たりと見方を変えても同様の単語が読み取れるように調整された特別の文字記述様式のことを指す)にて焼きごてを押されて、土を喉に無理矢理詰め込められ、それでもって窒息死させられていた。第二の枢機卿は[エア] (大気)とのアンビグラムの焼きごてが押されて肺

に穴を開けられて殺されていた。第三の枢機卿は[ファイア](火)とのアンビグラムの焼きごてが押されて生きたまま焼き殺されていた。そして、第四の枢機卿は[ウォーター](水)とのアンビグラムの焼きごてが押されて鎖で繋がれ溺れ死ぬようと噴水に放置されていた](引用部はここまでとする)との目につくところの記述を先に引いたとおりである)、小説『天使と悪魔』は、と同時に、

[イルミナティ(正確にはイルミナティの名を騙る存在)を悪役とする小説作品]

でもある (: 英文 Wikipedia [Angels & Demons] 項目よりの掻い摘まんでの抜粋として The plot follows Harvard symbologist Robert Langdon, as he tries to stop the Illuminati, a legendary secret society, from destroying Vatican City with the newly discovered power of antimatter. CERN director Maximilian Kohler discovers one of the facility's physicists, Leonardo Vetra, murdered. His chest is branded with an ambigram of the word "Illuminati". Kohler contacts Robert Langdon, an expert on the Illuminati, who determines that the ambigram is authentic. Kohler calls Vetra's adopted daughter Vittoria to the scene, and it is ascertained that the Illuminati have stolen a canister containing antimatter — a substance with destructive potential comparable to a nuclear weapon. 「『天使と悪魔』の粗筋はハーバードの象徴主義研究者ロバート・ラングドンが伝説上の秘密結社イルミナティがあたらしく発見された反物質の力でもってバチカンを破壊しようとしているのを阻止せんとしているとのその足跡を追うとのものである。(以降、具体的粗筋紹介の部として) CERN 役員マクシミアン・コーラーが同研究機関物理学者の一人レオナルド・ヴェトラが殺害されているのを発見した。その遺体胸部にはアンビグラム(訳注: アンビグラムとは上下反転して見て見たり、鏡に映して見たりと見方を変えても同様の単語が読み取れるように調整された特別の文字記述様式のことを指す)でもって Illuminati と焼きごてにて刻印されていた。コーラーはイルミナティに関する専門家であるロバート・ラングドンにコンタクトを取り、ラングドンはそのアンビグラムが真正のものであるとの判断を下した」(引用部はここまでとする)との目立つところにての表記にても容易に確認がとれるところである)。

他面、小説作品『天使と悪魔』に先行すること数十年とのかたちで刊行された小説 The Illuminatus! Trilogy『ジ・イルミナタス・トリロジー』の方についてもまた [イルミナティ] を悪役に据えての小説作品となっている (: 英文 Wikipedia [The Illuminatus! Trilogy] 項目にての内容よりの掻い摘まんでの抜粋として “ The prison is bombed and he is rescued by the Discordians, led by the enigmatic Hagbard Celine, captain of a golden submarine. Hagbard represents the Discordians in their eternal battle against the Illuminati, the conspiratorial organization that secretly controls the world. ” 「(主要登場人物の一人が囚われることになった) 牢獄が爆破され、彼は謎めいての神秘性を帯びていたハグバード・セリン、黄金の潜水艦の艦長であるとの同男に率いられたディスコルディア運動(訳注: 黄金の林檎とペンタゴンの並列紋様を表象シンボルとする運動)の闘士達に救われることになった。ハグバードはディスコルディア運動の闘士達に対して影より世界をコントロールしている陰謀団としてのイルミナティに対する彼らの終わりなき闘いを表明していた」などといった記述だけでも確認がとれるところである)。

たかだかもその程度の繋がり合いが後述するところの第二・第三の点との観点で意をなしてくる。

第二。

陰謀論 (Conspiracy theory) をこととする者達によって歴年イルミナティと結びつく存在であるとされてきたのがフリーメーソンであるとの言われようがなされている (: [それが真実であろうとなかろうと論理的には一向に問題にならない] Whether it is true or not, in this disgusting semi-zombies' world, it makes no difference. とのところとして英文 Wikipedia [Masonic conspiracy theories] 項目 ([メーソンにまつわる陰謀論] 項目) にての List of conspiracy theories associated with Freemasonry (メーソンに関する陰謀論の一

覧)の節にての(抜粋するところとしての)“ That Freemasonry overlaps with, or is controlled by, the Illuminati, especially in the higher degrees; Illuminati Freemasons secretly control many major aspects of society and government and are working to establish the New World Order. ”「フリーメーソンは殊に上位位階についてはイルミナティと同一となっているか、コントロールされているとの組織である(との陰謀論が存在している)。すなわち、イルミナティ系フリーメーソンは社会および政府の主要なる側面を秘密裡にコントロールし、そして、新世界秩序を構築するために働いているというのである」との表記などにもその程度のことにつわる[言論流通動向]は見てとれる。尚、本稿にての後の段にてもメーソン由来の書籍に基づいて訴求しておくが、メーソンはその基礎位階、エンタード・アプレンティス位階 the Entered Apprentice Degree のレベルで目隠し(blindfold)を外されて光を与えられる(illuminate enas)との儀式を成員が経験するとの組織として多数の成員および一部の批判者に知られている —— [目隠しを外す] ⇒ [イルミネイトする(啓蒙する; 蒙(もう)を啓(ひら)く)] ⇒ [イルミナティ] との関係性がその[基本的なところ]からして想起される(操作なす者ら由来の嗜虐的ユーモア demonic humor の賜物かとは思うのだが、とにかくも、である) ——)。

といったフリーメーソンにあつては、そう、存在自体が不可解かつ不快であろうと筆者のような人間には映るとの「自称」親睦団体に関しては、

Order of the Eastern Star[東方の星]

とのその会員の係累の女のみが参画を許可される外殻団体が存在する。

その[東方の星]の組織表象シンボルとして

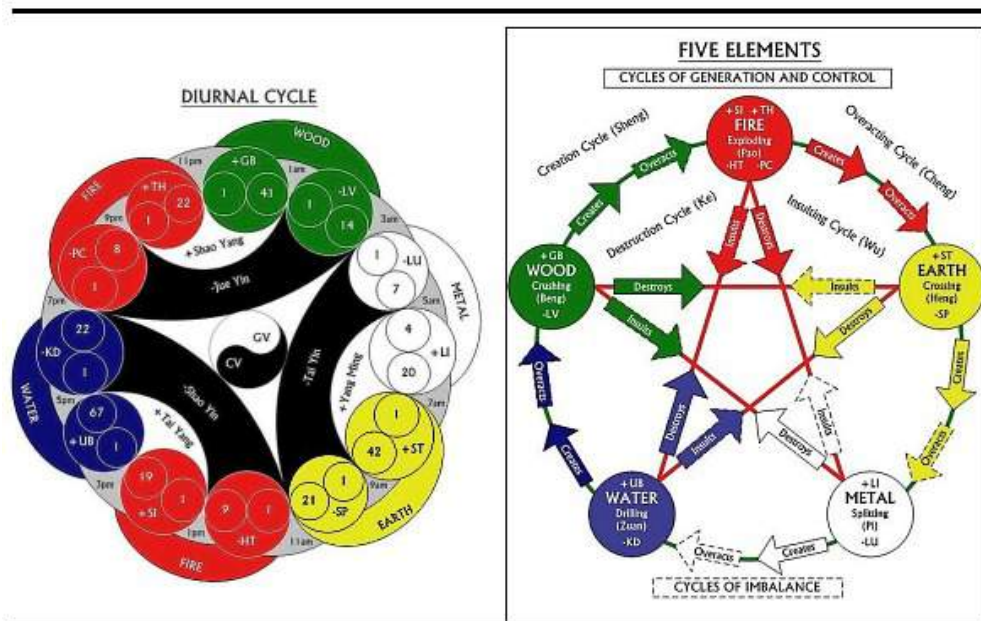
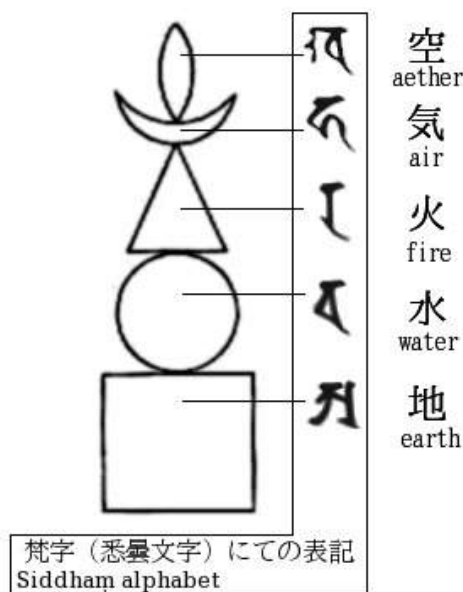
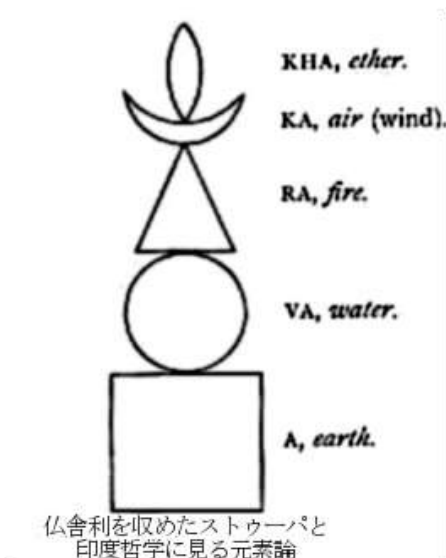
[赤・青・緑・黄色・白の五色を [五芒星] [五角形] と結びつけて配する独特な紋様]が採用されているとのことがあるのだが(Order of the Eastern Star との入力ですぐに特定できようとの組織シンボルを参照のこと/本稿にてそのイミテーションを続いで段にて表示する)、同シンボルに関しては次のことが述べられるようになっている。

[中国の陰陽五行論にあつては[五行]と結びつく色彩概念たる[五色]が存在する。その五色、 —— 合理的な人間(筆者もこれでも合理的人間であるつもりである)に『相応の人種がこととする非科学的な神秘的漫談であろう』との侮蔑を買おうとの下らぬ話をなしているようで厭なのではあるが——、木・火・土・金・水の中国由来の元素論に対応するところとして[青][赤][黄][白][黒]の各色と史的には対応付けさせられてきたとのことがある(: wood⇒blue, fire⇒red, earth⇒yellow, metal⇒white, water⇒black との各色が陰陽五行 —— 五行は中国語発音を意識してのところか、英文表記では Wu Xing と表するようである—— における五色の伝統的な割り当て方式である)。だが、そうしたトラディショナルな[五色]の観念に代替するところ、より自然界の色合いに合致しているとのもの見方に依拠しての代替するところを想定すると次のようなことになる。⇒ 「[赤]を[元素にての火の体現色]とし、[青]を[元素にての水の([黒]より至当なる)体現色]とし、[緑]を[元素にての木;植物の([青]より至当なる)体現色]とし、[黄]を[元素にての地;黄褐色呈する大地の体現色]とし、[白]を[元素にての金;光沢帯びての貴金属の体現色]とするのかたちで五行に見る五大元素を[赤]・[青]・[緑]・[黄]・[白]で体現する(方が自然なる知覚の問題に合致している)とのやりようが観念される」。そして、実際にそういう形態での図像化の式がとられることもあり、かつ、その図像化方式が「フリーメーソンの[東方の星]団と同様の表象形式を示すやりようとして」[五芒星と結ぶ付けて描写する様式]を伴いつつ目に付くところにあつて散見されたりするようになってもいるとのことがある」([五行]を[五芒星]と結びつけるやりようはここ数十年との近年か、あるいは前世紀末か、といった按配の歴史浅きやりようかもしれないとも見えるのだが、そういうありようが例えば英文 Wikipedia [Wu Xing] 項目(中国の五大元素にまつわる英文解説項目)などに見てとれるとのことが現実にある)。

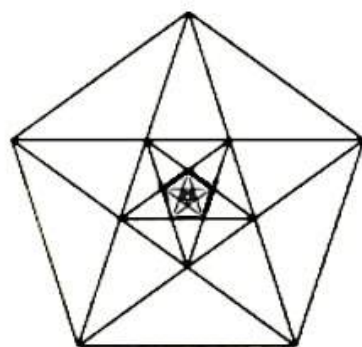
すなわち

[元素論とフリーメーソンの[東方の星]団のシンボルは —それが歴史的やりようか、伝統的なやりようかと問われれば、同じくものことにつき指摘する筆者として首をひねらざるをえないのだが— 結びつけられている、色彩・形状の面での際立つての結びつけられている]

とのことがありもするのである(直下、指し示すところの関係図を参照のこと)。



※陰陽五行の五行 (Wu Xing) の概念図に見る [五色] (five colors) 構図を通じて両者には相似形が見れる



infinitesimal (infinitely small)
 & the golden ratio

五芒星と正五角形の無限に続く内接・外接の構図。同構図は黄金比を無限に体現しつつ、極小の領域に向かうものでもある。



the shape of Order of the Eastern Star's logo (mimesis)

フリーメーソン関連団体
 [東方の星結社] 象徴の概観図

前掲図の最上段は先にも挙げたところのストウパと五大元素が結びつくこと、そして、それが日本にての墓地の卒塔婆のサンスクリット表記と結びつくことを示すものである——図のソースは Project Gutenberg にて公開されている A MANUAL OF THE HISTORICAL DEVELOPMENT OF ART (1876)との著作にみとめられる印度系のやりようと同じるペルシャ系の歴史的シンボル利用形態にまつわる解説部——。

前掲図の中段は英文 Wikipedia [Wu Xing] 項目 ([五行] 項目) にて記載されているところの図をそのままに挙げているとのものとなり、中国の五行思想の五行 (と関わるところの五色) を描いたものを挙げての図、より自然なる知覚を受けてのものに焼き直してのやりようが具現化しているとの図らとなる —— 尚、[中段部]の左の図は[陰陽五行]における[五行]が日周運動といったかたちで時の運行にも関連するとの東洋思想が当該英文ウィキペディア [Wu Xing] 項目にて紹介されているものとなる (確かに、[十二支] というものは陰陽五行と密接に結びつく体系で語られるものであるとの申しようが日本でもかなり細々となされているとのことがあり、また、[十二支]と結びつく[十二時辰]という時刻表期がアジア圏にての時刻認識様式となっていたとのことがあり、陰陽五行はその伝で時間の運行とも結びつけられているとの側面がある。本筋に関わらぬため、その点については割愛するが、とにかくも、のこととしてである) ——)。

前掲図下段にての図、その右側はフリーメーソンの[東方の星]団の流布されたシンボルをほぼ忠実に再現したとのものである。対して下段にての左側の図は[五角形と五芒星 (フリーメーソンの[東方の星]団のシンボルに採用されているとの五角形と五芒星である) のどこまでも続く内接関係]を示してのものとなり、本稿ここに至るまでにて五角形に伴う問題性との観点で問題視してきたものとなる。

お分かりかとは思いますが、上の図らからは[目立っての視覚的つながり]が容易に見出せるようになっている。

さて、五芒星・五角形と結びつく元素論とのことで述べれば、『天使と悪魔』という作品は、(繰り返すが)、

[元素論に基づいて枢機卿らを殺していく]

との粗筋の作品である。

従って、フリーメーソンとの結びつきが —その真偽はともあれ— 歴年、語られてきたところの組織、実体性あやふやかなイルミナティの暗躍を描く『天使と悪魔』を[フリーメーソン・シンボリズム分析型フィルタ]を介して見れば、同作は元素論の崩壊機序をもってして [五芒星・五角形を崩壊させる]

との粗筋の作品に化けるとのことがある (フリーメーソンの[東方の星]のシンボルが配色・形状両面で際立って東洋の陰陽五行における[五行]の模式図と対応するとの恰好となっているからである)。

につき、

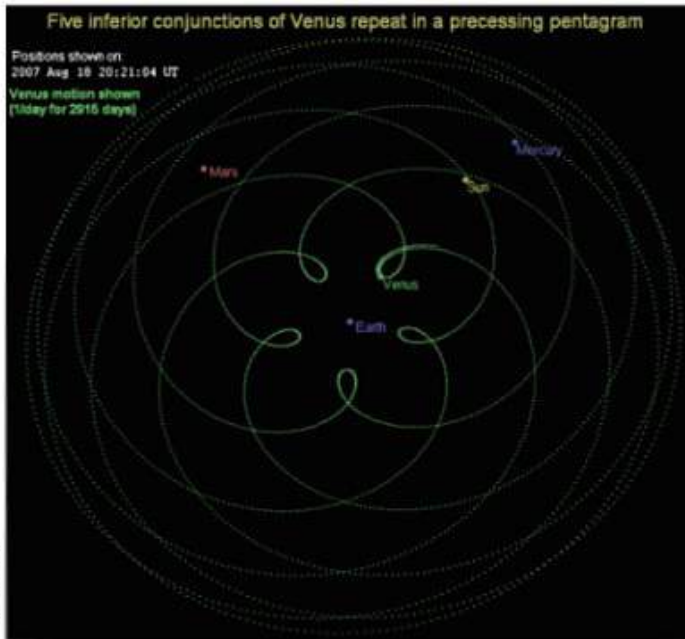
「極めて性質が悪い」

のは話はそれにとどまらぬところがあり、

[[五芒星・五角形を崩壊させる]という寓意は極小の領域に至る機序と結びつくところでの崩壊作用ともまたつながるとの申しようがなせるようになっており、そのことが原子核領域の暴力的改変作用を応用しての CERN やりよう —— 『天使と悪魔』にての反物質が都市破壊爆弾に利用されたとの粗筋 (科学的には不正確と表されることも多い粗筋) にも粗筋に影響を与えているとの CERN やりよう—— に通ずるようになっている (「なってしまう」と述べた方が至当か) とのことが複合的な側面から指摘出来るようになっている (本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 71](#) および [出典 \(Source\) 紹介の部 72](#) で既に解説を講じてきたこととして指摘出来るようになっている)]

とのことがあるとのことである (がゆえにここではこのような話を延々なしている)。

表記のことの(部分的)ありようとしては下の(従前の部にて挙げていた)再掲しての図を参照いただけたらば、と思う。



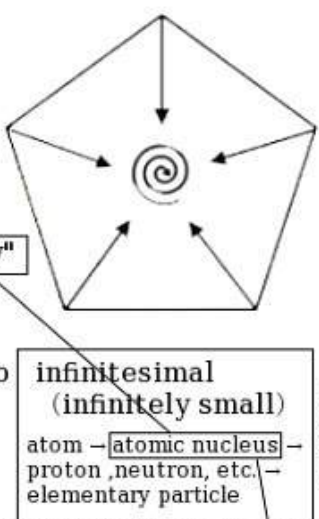
天文学における金星の会合(内合)周期は五芒星描画の問題と結びつけて長らくも語られてきたものとなる。

Successive inferior conjunctions of Venus occur about 1.6 Earth years & Pentagram

Pentagram & Pentagon & Golden Ratio

Nuclear fission

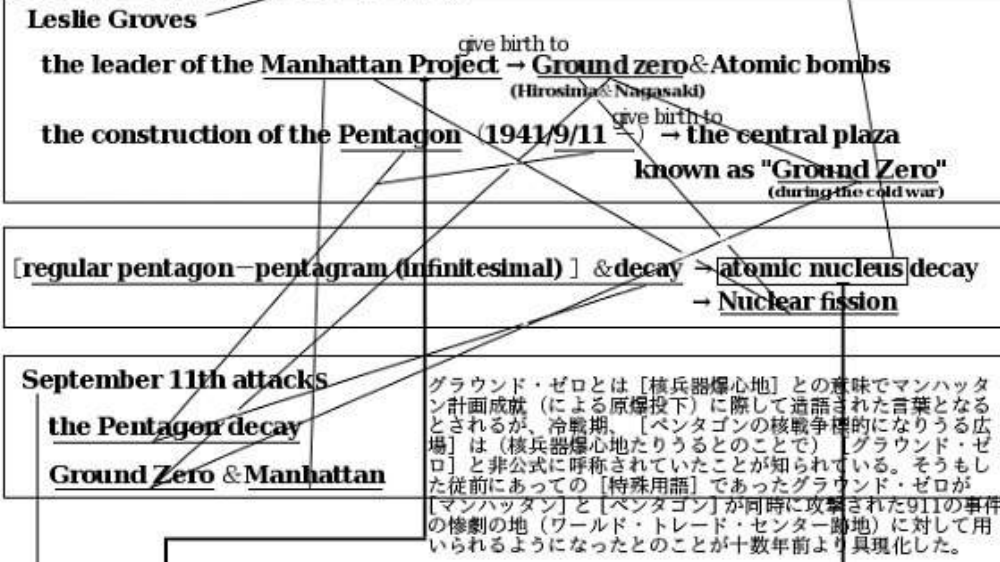
先述のように五芒星と正五角形(レギュラー・「ペンタゴン」)の無限に続く相互外接・内接関係は「原子」→「原子核」→「素粒子」との按配でスケールを小さくしていく「極小の領域」に向けての力学を体現するものでもある。さて、「極小の領域」に於ける原子核の破壊的変性プロセスこそが(先立って細かくも説明しているように)「マンハッタン計画」での原子爆弾の開発に利用された機序」となっているとのこと。一科学ありようにまつわたる常識的トピックとしてある。



"decay" to ∞

原子核崩壊の機序が核兵器を誕生させたとのことがある

マンハッタン計画を主導してきた軍人レスリー・グロウヴスはマンハッタン計画に先立つところとして1941年[9月11日]に建設着工を見たペンタゴン建造計画を主導していた者ともなる。かくのように「マンハッタン」計画と「ペンタゴン」は結びつくようになっている。



Brookhaven National Laboratory (1947-)
 CERN (1954-)
 Fermi National Accelerator Laboratory (1967-)

※本稿にて細かくも後述するところとしてマンハッタン計画関係者より、
 [ブラックホール生成問題で矢面に立たされ、なるべくして訴訟の被告になったとの研究機関ら]が設立されているとのことがある。
 また、マンハッタン計画にてその成果が利用されていたころの原子核領域の破壊作用は加速器「実験」(ブラックホールを生成するとされるに至った挙動)の基本となるところでもある。


particle physics experiments
 &
 accelerators (→LHC)

ATLAS

The Illuminatus I Trilogy & Golden Apple

911 prophecy
 ("extremely" odd)

regular pentagon
 as the Pentagon
 (USA)



(symbol in Discordianism)

細かくも先述のようにローマのVenus神(金星体現格)に比定されるギリシャのAphrodite(アフロディテ)神の誘惑、トロイア崩壊につながったパリスの審判にてその取得が争われた黄金の林檎にまつわるモチーフが多重的にLHC実験にあつての命名規則に用いられている(黄金の林檎の在処を知るとされる巨人ATLASの使用や黄金の林檎の園と同じくもの場と語られてきたATLANTISの使用などがそうである)。

Golden apple
 (=Judgement
 of Paris & Venus)

金星の英語表記Venusは美の女神アフロディテのローマ版呼称ウェヌス(ビーナス)に由来しているとのこととは半ばもの一般教養の問題である。

※荒唐無稽小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』では「マンハッタンビルが爆破され」「ペンタゴンが爆破され」「炭疽菌テロが問題になり」「ニューヨークとペンタゴンの並列化象徴(上掲のデイスコーディアニズム・シンボル)が作中、頻出し」ている。また、同作より派生したカード・ゲームにあつて「爆破投下するツインタワー」「粉塵を上げるペンタゴン」が描かれている」ことも知られている。要するに、複合的要素から、70年代米国にてヒットを見た当該小説作品には「ニューヨークのビルとペンタゴンが標的になり」「事件直後、炭疽菌テロが発生し」たとのかの911の事件に対する尋常一様ならざる先覚性が見てとれると述べてもいい(機序はともかくも[現象]の問題としてである)。

Lucifer

本稿では悪魔の王として知られるルシファー(サタン)とギリシャ神話のアフロディテ(ローマ名ヴィーナス)が複合的に結びつくこと、そして、アフロディテと関連づけられる黄金の林檎がエデンの園の禁断の果実と複合的に結びつくとの指し示しに注力してきた。

まとめればこうである。

1. [元素論の崩壊機序]を[イルミナティと結びつけられやすきフリーメーソンのシンボル体系のそれに露骨に通ずるところのシンボル体系(陰陽五行にまつわるシンボル体系)]から見れば、そこから[五角形・五芒星の崩壊の話]が出てくるとのことがある。
2. 直近言及の1. の点と結びつきながらも別個に申し述べられる(であるから問題である)とのこととして五角形・五芒星の相互内接関係が[極小の領域への力学]と結びつけられていると述べられるだけの背景が存在しており、については、マンハッタン計画とも通ずるところとしてのCERNの高エネルギー「実験」にての

原子核に暴力的改変を加えようとのやりよう ——『天使と悪魔』で非科学的に取り上げられた反物質生成もその領分に入る—— との結びつきが観念されるとのこともある。

以上、1. と2. が別個独立に申し述べられるところとなっている、だが、相互に強くも同一方向を指すとのことがあるために[ことの重大性]が(たかだかフィクションを俎上にのせているとのことであれ、その背景にある発想法との兼ね合いから)「さらにもって」問題になる。

第三。

『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあつて具現化している五角形(ペンタゴン)の崩壊それ自体からしてはなから911の事件の予見描写との尋常一様ならざるつながりを想起させるものであるため(本稿の従前の段でも部分的に解説しているところ、そして、後にての段でも解説するところとして小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』のペンタゴン爆破時刻は5時55分となっておりそれは時計時針にて[11]と[6]、[116]との[911]を180度回転させた数値列を指すものなのだが、その[116]をもってして[ツインタワー仮託物の炎上倒壊]などと結びつける臭気放つ他の作品らが何点もあるとのことがこの忌まわしき世界には[ある])、といったところと結節するここまで言及の関係性について「も」よりもってして[その存在自体の奇怪性]が想起され、ゆえに、そこからして

[執念深さとワンセットの恣意の問題]

が当然に観念されるところとなる ——バロック調(入り組んでグロテスクであるとのありようでもいい)の実に手の込んだものが幾重にも幾重にも重なっておれば、(バロックは元来は真珠や貝殻の歪な構造を指す自然界の悪戯を指す言の葉であったともされるわけだが)、そこに自然性を観念することはおよそ不可能、従って、(それを実行なさしめる力学は何か、機序がまともな話柄で説明できるものなのかは脇に置いておき)[恣意の賜物]であろうと推察できるとのことである——。

以上、便宜的に三点(第一・第二・第三)と分けもして

[(LHC 実験を執り行うことにもなった CERN 由来の反物質でもってバチカンを灰燼に帰そうとするとの建て前の計画が描かれているとの小説作品『天使と悪魔』にあつて)ゲート破壊をなそうとの執拗な寓意、それでいて普通に斜め読みするだけでは絶対に気づけなからうとの寓意がダン・ブラウンという一作家一胸中に由来する精巧なるギミック(仕掛け)として大衆小説にまぶされた程度の話では[こと]は済まされない(とのありようについて他の荒唐無稽小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』内容を通じての指摘がなせるようになっている)]

とのことについて訴求なそうとしてきたわけだが、そうしたこと全てが

[ブラックホール生成問題]

に結実してしまっているとも述べられるようになってしまっている、またもって述べられるようになって「しまっている」 ——『天使と悪魔』シナリオにての破滅の元凶が[ブラックホール生成実験とも評されるに至った実験を行っている CERN 加速器由来の反物質]とされていることが問題ならば、『ジ・イルミナタス・トリロジー』の[五角形(ゲート; 異界との垣根)の封印としての崩壊機序]がいかにブラックホール生成と結びつくかにつき([極小に至る力学にての崩壊機序]や[カール・セーガン『コンタクト』内容]や[黄金比と接合するカー・ブラックホール]との絡みで)解説してきたようなことがあるとのことも問題となる —— とのことに [より裾野の広い恣意の介在の問題] から一歩進んでの [根深い害意・悪意の所在の問題] が感じられるところとなっているとのこと「も」またあり、それがゆえにこそ、ここでの話をなしてきたとのことがある。

(話が長くなったが、(よりもって同一方向のことを煮詰めていくとの) [[a]から[f]と振っての一連の流れの中にあるの[b]と[c]と振っての段の合間・幕間に設けての訴求の部] はここまでとしておく)

(脇に逸れての段から本論に引き戻し([a]から[f]に分けてのカール・セーガン著作『コンタクト』から押し広げて何が述べられるかの話に戻し)、続いて、[c]と振ってのことを呈示することとする)

[c].

本稿にての先の補説 1 と銘打った段にあっての(出典(Source)紹介の部 66 を包摂する解説部にて)
[伏線となるようなところ]

として述べていたことともなるのだが、カール・セーガン著作『コンタクト』 — (既に細かくも解説してきたように[ブラックホール]・[911の事前言及文物(などという尋常一様ならざるもの)]・[黄金比と結びつくところへの固執]といった[他作品らの間に見受けられる属性]を一直線に接合させるとの奇怪な作品/表向きはハード・サイエンス・フィクションとして異例としてのベストセラーを記録した名作と認知されているものの、その実の奇怪な作品) — は他作家、[米国文壇寵児として君臨していた超が付くほど著名な作家]となっていたカート・ヴォネガット(同カート・ヴォネガットのカール・セーガンに比肩しようとの知名度・著名性については出典(Source)紹介の部 64 にて既に呈示している)という作家の手になる、

The Sirens of Titan 『タイタンの妖女』

という作品と接合関係を呈しているといった側面を伴っているものとなる — そちら『タイタンの妖女』と『コンタクト』の接合性については本稿の補説 1 と振っての先の段の掉尾の部(ほぼ書き納めの部)にあって[布石]として呈示したことでもある — 。

その点、(『そのことからして問題になる』との認識でもって細々としたことながら取り立てて問題視なしで「いた」ところとして)、

[著名作家(米国現代文学の旗手とされていたカート・ヴォネガット)の手になる著名作品『タイタンの妖女』ことザ・「サイレン」ズ・オブ・タイタンは「まったくもって意味不明に」ヘラクレス座の M13 に関する言及からはじまる本編から切り離されての序言部を含む — (M13 星雲につき表記した英文 Wikipedia [Messier 13] 項目にても「現行は」その旨の言及がなされているぐらいにインパクトあるやり方で Every passing hour brings the Solar System forty-three thousand miles closer to Globular Cluster M13 in Hercules . and still there are some misfits who insist that there is no such thing as progress. 「人類はヘラクレス座の M13 星雲に日々近づいているのにも関わらず、それであるのに進歩がないと述べる非順応者が絶えない」との巻頭にての序言部を小説作品『タイタンの妖女』は含む) — との作品となっているのに対して、カール・セーガン『コンタクト』は[サイレン]の寓意が — サイレンス沈黙という言葉の掛詞(かけことば)にしていると — いった段で — [ヘラクレス座に対する M13 への言及]と結びつけられているとの側面が伴っている作品となっている(ブラックホールないしワームホールによるゲートの装置設計図の受信プロセス、外宇宙の異星文明由来の電波受信プロセスと通じるところで

そうした側面が伴っている)]

とることがある(:片方(『タイタンの妖女』こと『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』)が表題に「サイレン」を掲げ、なおかつ、作品の冒頭部にて本編と直接的に関わりの無い「ヘラクレス座の M13」関連の序言を目立ってなしているとの作品であるのに対して、もう片方(カール・セーガン『コンタクト』)は「サイレン」という言葉を「ヘラクレス座 M13」と作中にて結びつけるような使用のなしかたを(執拗さが感じられる式で)なしている作品となっている。につき、カール・セーガン小説『コンタクト』ではギリシャ神話に登場する百眼巨人アーガスの名を冠するアーガス計画(後述)なるものの一環として宇宙よりの電波を探查するとのことがなされていた中、ヘラクレス座の M13 星雲を探知しても何も見つからなかった、しかし、その直後、(複合的にサイレンの比喻が持ち出されての中の直後)、人類が「琴座」方向からの電波を受信、その電波によって送られてきた暗号を解読し、結果的に異星文明との直接的コンタクトを実現するための装置だと後にて判明する十二面体構造のマシーンを建造するとの流れで話が進んでいく)。

区切つての再表記の部をここに設けておく。

本稿の先だつての段、**出典(Source)紹介の部 66**にあつては、

[小説『コンタクト』にあつては「ヘラクレス座 M13 方面の探查の直後、そのすぐ近傍の琴座方面より外宇宙生命体由来の通信を受信することになった(そして、後にその通信受信がブラックホールないしワームホールのゲート構築に繋がった)」とのことが描かれるとのまさにものその下りに関わるとの複数章の書き出し部(章はじめの題句の部)にあつてサイレンの声に対する言及が「不自然に」「執拗に」なされている]

とのことを原文引用にて示し、もつて、そのことが冒頭部よりヘラクレス座 M13 のことを殊更かつ意図不明瞭にもちだしている『タイタンの妖女』(原題:ザ・サイレンズ・オブ・タイタン)との繋がり合いを想起させるものであるとのことを示さんとしもしていた。

以下、その点に関わる当該小説(『コンタクト』)内記載内容の再度の呈示と、に対する、端的なる再度の解説をなしておくこととする。

表記のことについてはまずもつて下のような引用をなしていた。

(直下、『コンタクト(上)』(新潮「文庫」版 ——池央耿／高見浩訳——、重版重ねての第六刷版)にあつての p.70-p.72 よりの掻い摘まんでの「再度の」原文引用をなすとして)

第三章 白色雑音

耳にひびくメロディーは美しい。が、耳に聞こえぬメロディーはもっと美しい。

——ジョン・キーツ『ギリシャの壺の歌』

もっとも残酷な嘘は、しばしば沈黙のうちに語られる。

——ロバート・ルイス・スティーヴンスン『青年男女のために』

…(中略)…

デスク・ランプのスイッチをひねり、しばらく引出しの中をかきまわしてから、彼女は一對のイヤフォンをとりだした。デスクのわきの壁に貼られた、フランツ・カフカの『寓話』からの引用が、一瞬、ライトの光に浮かびあがった。

歌よりもおそろしいサイレンたちのもう一つの武器

それは沈黙……

彼女らの歌を逃れる者あろうとも

その沈黙から逃れうる者は
一人としていない

片手をふってライトを消すと、彼女は灰暗闇(ほのぐらやみ)をつつきって戸口にむかった。

制御室に入ると、万事異常ないことをすぐに確認して安心する。窓ごしに、ニューメキシコの砂漠上数十キロにわたって並んでいる百三十一個の電波望遠鏡の一部が見えた。いずれも、空に向かって語りかけている、奇妙な機械の花のように見える。

(国内で流通を見ている訳書よりの掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

上にての訳書よりの引用部に対してオンライン上より確認できるところの Contact (1985) の原著版テキストも再度挙げておくこととする。

(直下、カール・セーガン CONTACT 原著にあつての CHAPTER 3 White Noise 冒頭部よりの「再度の」引用をなすとして)

CHAPTER 3 White Noise

Heard melodies are sweet, but **those unheard** Are sweeter.

-JOHN KEATS "Ode on a Grecian Urn" (1820)

The cruelest lies are often told in **silence**.

-ROBERT LOUIS STEVENSON Virginibus Puerisque (1881)

[...]

Turning on a desk lamp, she rummaged through a drawer, finally producing a pair of earphones. Briefly illuminated on the wall beside her desk was a quotation from the Parables of Franz Kafka:

Now the **Sirens** have a still more fatal weapon than their song, namely their **silence**... Someone might possibly have escaped from their singing; but from their silence, certainly never.

Extinguishing the light with a wave of her hand, she made for the door in the semidarkness. In the control room she quickly reassured herself that all was in order. Through the window she could see a few of the 131 radio telescopes that stretched for tens of kilometers across the New Mexico scrub desert like some strange species of mechanical flower straining toward the sky.

(現行はオンライン上より確認なせるところの原著よりの引用部はここまでとしておく)

上にての訳書および原著(オンライン上よりその文言すべてを[文献的事実]として確認できるところの原著)より引いたところに見るように小説『コンタクト』では

[章(Chapter 表記の部)の冒頭にて作品に興味を添えるためになしているように(普通には)とらえられる他の文物よりの引用](具体的には英国詩人ジョン・キーツ作品および[ジキルとハイドの物語]でも有名なスコットランド小説家ロバート・ルイス・スティーヴンソン作品よりの引用)

がなされた後(うち、スティーヴンソンのそれは The cruelest lies are often told in silence.[もっとも残酷な嘘は、しばしば沈黙のうちに語られる]と silence サイレンスと結びつけられているとのものとなっている)、その直後、第三章中身に入って、の中で、

“ Now the **Sirens** have a still more fatal weapon than their song, namely their **silence**...” 「歌よりもおそろしいサイレンたちのもう一つの武器 それは沈黙……」

とのフランツ・カフカよりの引用がさらにもなされつつ([妖異サイレンズの武器は沈黙(サイレンス)なり]という引用がなされつつ)、それが『コンタクト』本編にて描かれる[外宇宙よりの電波探査計画]

と結節させられているとのコンテキストが現出を見ている(制御室に入ると、万事異常ないことをすぐに確認して安心する。窓越しに、ニューメキシコの砂漠上数十キロにわたって並んでいる百三十一個の電波望遠鏡の一部が見えた。いずれも、空に向かって語りかけている、奇妙な機械の花のように見えるとの上にての表記引用部テキストは『コンタクト』作中にて重きをなす[宇宙電波探査計画供用施設]に関する描写である)。

以上、言及したうえでのさらにもってしての「再度の」引用をなす。

(直下、邦訳版『コンタクト(上)』(新潮「文庫」版——池央耿／高見浩訳——、重版重ねての第六刷版)にあつての p.99—p.100、p.103—p.105 よりの掻い摘まんでの「再度の」原文引用をなすとして)

第四章 素数

月、このわれらが衰れな異教の星に、モラビア派信徒は一人もいないのだろうか、そこに文明を植えつけ、キリスト教を広める宣教師はただの一人も訪れていないのだろうか。

——ハーマン・メルヴィル『ホワイト・ジャケット』(一八五〇)

沈黙のみが偉大である。他のすべては弱点にすぎない。

——アルフレッド・ドヴィニー『狼の死』(一八六四)

…(中略)…

彼は管制室に入った。電波探査のプロセスをモニターしている十二のテレビ・スクリーンを、ひとわり見まわす。<アーガス>はヘルクレス座を調べ終えたばかりのところだった。地球から数億年も離れている、銀河系のはるか彼方にある広大な銀河の群、ヘルクレス銀河団の中心部をのぞいたのである。二万六千光年彼方の、銀河系をめぐる軌道に沿って移動している、重力的にかたまつた約三十万個の星の群れ、M-13にも照準をしばってみた。

…(中略)…

望遠鏡の何台かは、依然ヘルクレス座にむけられている。聞きのがしたデータがあつたら、拾い直すためだ。残りの望遠鏡はすべて、その隣の天空領域、ヘルクレス座の東の星座にむけられている。いまから数千年前、東地中海に住んでいた人々の目に、その星座は絃(げん)を張った楽器のように見えたらしく、ギリシャ人のカルチャー・ヒーロー、オルフェウスと結びつけられた。その星座は“こと座”と呼ばれている。

…(中略)…

声が急にうすれて制御台に目が吸いよせられた。突然、警告灯が眩く点滅しはじめたのだ。“強度 VS 周波数”と記されたディスプレイ上で、垂直の棒線が急上昇しつつあった。

「おい、見ろよ、単色信号だぜ」

“強度 VS 時間”と記された、別のディスプレイでは、ひとまとまりのパルスが左から右に流れてスクリーンから消えている。

「これは数字だな」ウィリーが、かすれた声で言った。

(国内で流通している訳書よりの掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

上記引用部に対するオンライン上より確認できるところの Contact (1985) の原著版テキストも再度もってして下に挙げておく。

(直下、カール・セーガン CONTACT 原著にあつての CHAPTER 4 Prime Numbers 冒頭部よりの「再度の」引用をなすとして)

CHAPTER 4 Prime Numbers

Are there no Moravians in the Moon, that not a missionary has yet visited this poor pagan planet of ours to civilize civilization and Christianize Christendom?

-HERMAN MELVILLE White Jacket (1850)

Silence alone is great; all else is weakness.

-ALFRED DEVIGNY La Mort du Loup (1864)

The duty officer entered the control area. He made a quick survey of dozens of television screens monitoring the progress of the radio search.

They had just finished examining the constellation Hercules. They had peered into the heart of a great swarm of galaxies far beyond the Milky Way, the Hercules Cluster--a hundred million light-years away; they had tuned in on M-13, a swarm of 300,000 stars, give or take a few, gravitationally bound together, moving in orbit around the Milky Way Galaxy 26,000 light-years away;

[...]

A few of the telescopes, the duty officer could see, were devoted to picking up some missed data in Hercules. The remainder were aiming, boresighted, at an adjacent patch of sky, the next constellation east of Hercules. To people in the eastern Mediterranean a few thousand years ago, it had resembled a stringed musical instrument and was associated with the Greek culture hero Orpheus.

It was a constellation named Lyra, the Lyre.

[...]

His voice trailed off as an alarm light flashed decorously on the console in front of them. On a display marked "Intensity vs. Frequency" a sharp vertical spike was rising. "Hey, look, it's a monochromatic signal."

Another display, labeled "Intensity vs. Time," showed a set of pulses moving left to right and then off the screen. "Those are numbers," Willie said faintly. "Somebody's broadcasting numbers."

(現行はオンライン上より確認なせるところの原著よりの引用部はここまでとしておく)

上にての掻い摘まんでの引用部(邦訳文庫版『コンタクト』上巻 99 ページから 100 ページ、103 ページから 105 ページより引用したところ)は先立って掻い摘まんでそこの引用なしたところ(邦訳文庫版『コンタクト』上巻 70 ページから 72 ページより引用したところ)と同文に[Silence]に対するこだわりが垣間見れるとの按配のものである(沈黙のみが偉大である。他のすべては弱点にすぎない。——アルフレッド・ドヴィニー『狼の死』(一八六四) Silence alone is great; all else is weakness.-ALFRED DEVIGNY La Mort du Loup (1864)と記載されていることにそのことが垣間見れるとの按配のものである)。

先立って引用なししているように[サイレンス]と[サイレン]の掛け詞をカール・セーガンが『コンタクト』にて目立つように持ち出している(章にての冒頭部にて The cruellest lies are often told in silence.[もっとも残酷な嘘は、しばしば沈黙のうちに語られる])と

の『ジキルとハイド』でも有名な作家 Robert Stevenson の言を引いたうえでのこととしてそうした掛け詞 —— “ Now the Sirens have a still more fatal weapon than their song, namely their silence... Someone might possibly have escaped from their singing; but from their silence, certainly never. ” 「歌よりもおそろしいサイレンたちのもう一つの武器. それは沈黙……彼女らの歌を逃れる者あろうともその沈黙から逃れうる者は一人としていない」とのフランツ・カフカ Franz Kafka 作品に由来する掛け詞——(を持ち出している)ことに鑑みて、同じくも題句にて持ち出されているとの Silence alone is great; all else is weakness. [沈黙のみが偉大である。他のすべては弱点にすぎない]要するに、そこにも[サイレン]へのこだわりがあると見える。

(これまた先だつての解説をそのままなぞるように続けるが) そうした部にて

[外宇宙よりの電波探査計画] (架空のアーガス計画というもの)

という小説『コンタクト』にて重きをなす計画が

「ヘラクレス座の M13 界限を調べて成果が得られなかった直後にその近傍の [琴座方面] (作中にて(再度の引用をなすところとして)残りの望遠鏡はすべて、その隣の天空領域、ヘラクレス座の東の星座にむけられている。いまから数千年前、東地中海に住んでいた人々の目に、その星座は絃(げん)を張った楽器のように見えたらしく、ギリシャ人のカルチャー・ヒーロー、オルフェウスと結びつけられた。その星座は"こと座"と呼ばれている(原著にては “ The remainder were aiming, boresighted, at an adjacent patch of sky, the next constellation east of Hercules. To people in the eastern Mediterranean a few thousand years ago, it had resembled a stringed musical instrument and was associated with the Greek culture hero Orpheus. It was a constellation named Lyra, the Lyre. ” と表記されているところ))
より電波を受信する」

とのかたちで急転直下の展開を見せだしたとのことが描かれているわけである。

(さらにもの再表記として:小さなことをくぐくぐと書くようだが、ここにて引用なししているのが章を隔てての[第三章]と[第四章]にあつての記載内容となることより

「離隔があるところから引用をなして、それがつながるように述べている. であるから、こじつけがましくもとれる」

と(一知半解といったかたちで)とらえる向きもあるかもしれない。

ゆえに書いておくが、[こじつけ]と見なされるような位置的離隔も内容的離隔もここでの関係性にまつわる話にはさして認められ「ない」とのことがある。

第一。小説 Contact『コンタクト』原著は計 24 章からなるが —— ちなみに邦訳されての『コンタクト』(新潮社)文庫版上下巻では全三部に分かたれ、第一部は計九章、第二部は計九章、第三部は計六章との訳書特有の章の割り振りが(章のタイトルは原著そのままに)なされている——、そうもして 24 章からなる『コンタクト』にあつての第 3 章と第 4 章の前半部描写とのことであれば、紙幅にあつての離隔はさしてないこと、お分かりいただけるだろう。

第二。内容上の離隔もさしてないということがある。すなわち、[それまでなしのつぶてであった宇宙探査計画にまつわる一連の描写である][サイレンスとサイレンの関係を想起させるやりようが連続して第三章および第四章でとられている]、そういう意味で内容上の隔たりもない(それがゆえにこじつけがましい話をなしているわけでもない)ということがある)

(再表記の部はここまでとする)

以上、紙幅にしてかなり前に遡りもするとの本稿の従前の段の内容を振り返りもしたうえで書くが、小説『コンタクト』(ブラックホールないしワームホールによるゲートの構築が作品主軸となっているとの作品)に先行するところとして世に出、

[[サイレン] と [ヘラクレス座 M13] の結びつき]

が想起される作品となっている — 繰り返すが、現行、英文ウィキペディアの[M13(星雲)]項目にてもM13 作品内言及作品として紹介されているように本編とはなんら関係ない、そして、意味不明ながらも印象深いとの式で “Every passing hour brings the Solar System forty-three thousand miles closer to Globular Cluster M13 in Hercules . and still there are some misfits who insist that there is no such thing as progress.” 「人類はヘラクレス座の M13 星雲に日々近づいているのにも関わらず、それであるのに進歩がないと述べる非順応者が絶えない」との冒頭部題句から話が始まる — との、

The Sirens of Titan 『タイタンの妖女』(原著 1959 年刊)

という小説 (米国にあっての著名作家による著名小説) については次のことが述べられるようになっている。

・『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』こと『タイタンの妖女』は「時期的に不可解なかたちで — 際立っての先覚性を呈してのかたちで —」ブラックホールの生成問題を想起させる「ような」ことに触れている作品となっている。

・上の点(・)に見るような『タイタンの妖女』ありようはその作者カート・ヴォネガットの他の作品「ら」からして「ブラックホール生成問題に対する先覚的言及作品としての要素」が見出せるために重みを伴っている。

・『タイタンの妖女』という作品は「同作と接合しての内容を有している作者カート・ヴォネガット他作品にての「911の事前言及」をなしているが如き側面」からそちら方面での奇怪性「もまた」観念されるとの作品となっている。

上記のことらについては本稿にてのかなり遡っての段 — 本稿 [出典\(Source\) 紹介の部 64](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 64\(10\)](#)、および、[出典\(Source\) 紹介の部 65\(3\)](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 65\(15\)](#) を包摂する解説部にて同じくものを詳説していたとの [補説 1] の部 — にて詳述を講じているので (把握未了であるとの向きにおかれては) そちら内容の検証を求めたい次第でもある。

またもってして、米国文壇を代表する著名作家との声望まで博するに至ったカート・ヴォネガットの初期の作品 『タイタンの妖女』については(これまた先立って解説しているところとして) 次のようなことが指摘させるようになってしまっているとのことがある。

(ほぼ先立っての表記をそのままに再述なすところとして)

カート・ヴォネガット The Sirens of Titan 『タイタンの妖女』(1959) という作品は、また、と同時に、アーサー・クラークの 2001: A Space Odyssey 『2001 年宇宙の旅』小説版 (1968) とも複合的類似要素でもって結びついている作品となる (1. 両作共々、「土星」界限を最終目的地点としているとの宇宙の旅が描かれる作品である(ただし「映画版の」『2001 年宇宙の旅』の方の目的地は木星となる) / 2. 両作品共々、ギリシャ叙事詩『オデュッセイア』(Ο Δ Υ Σ Σ Ε Ι Α) の顕著な影響下にある作品である / 3. 両作品共々「養殖されるように育てられた人類文明・造られた歴史の背後に控える目的意識」とのことを作中テーマしている作品である / 4. 両作品共々、「生身の人間から時間と空間を超越するに至った超人」が「外宇宙星系由来の存在」と協働している]

との「実にもって特異なる筋立て」をメインテーマとして含む作品であるの 1. から 4. の点を介しての結びつきについて先だって詳述してきたとの経緯がある（同じくもの点についてはよりもって細かくもの振り返り表記を下になしておく）。そして、アーサー・クラークの『2001 年宇宙の旅』の方については —物理学者のような識見蔵した向きの言い分を引いたところとして— その作中にある「スター・チャイルド（なるもの）へと選ばれた男が進化していくプロセス」がブラックホール Black Hole を想起させる描写と結びつけられているとの指摘を伴っているとの小説作品となっている（せんだってその委細については解説している）。だけではない。アーサー・クラークの『2001 年宇宙の旅』はそも [ブラックホールと相通ずるとの指摘がなされるが如く作品] となっていると指摘される（そちら典拠はポール・ハルパーン Paul Halpern という物理学者の手になる **Cosmic Wormholes: The Search for Interstellar Shortcuts** (邦題)『タイムマシン —ワームホールで時間旅行—』との書籍の記載内容を引用するとのかたちで挙げもしていたとのところである) のみならず [911 の予見的言及]「とも」通じている、作者アーサー・クラークやりようを介して [911 の予見的言及]「とも」通じているとの作品となっている（ [911 の予見的言及ありよう] にまつわっては「かなり後の段にて典拠を紹介する」と先に申し述べもしていたところだが、本段にあるはまだそちら典拠を挙げていない — であるから本稿の後半部の内容までを読み解いていただきたいものである — ）。

（先程の解説内容をほぼそのままに振り返るとして極めて著名なる 2001: A Space Odyssey 『2001 年宇宙の旅』(原著初出 1968 年) と刊行時期で同『2001 年宇宙の旅』に先行する The Sirens of Titan 『タイタンの妖女』(原著初出 1959 年) の間には 次のようなかたちでの目立つての結節点が存在する）

I. 『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン(タイタンの妖女)』および『2001 年宇宙の旅』の両作ともども「土星(英語表記 Saturn) 限界へのスペース・ミッション」が作品主題となっている。

(→1959 年初出の『タイタンの妖女』では主人公クラス的主要人物マラカイ・コンスタントと同マラカイ・コンスタントの息子クロノらが土星の衛星タイタンに逗留するサロ — 本稿の先立っての 出典(Source) 紹介の部 65(3)にて関連するところの記述を引いているように [黒ぼちひとつよりなる親書] の伝達ミッションの完遂のためだけに人類文明を育成してきたとの設定の異星系文明の使節——の元に宇宙船代替部品を届けに行くとの結末に向けて物語が進んでいく — ※同じくものことに関しては目立つところの英文 Wikipedia [The Sirens of Titan] 項目にあって現行、“ Rumfoord's encounter with the chrono-synclastic infundibulum, the following war with Mars, and Constant's exile to Titan were all manipulated via the Tralfamadorians' control of the UWTB. Stonehenge, the Great Wall of China and the Kremlin are all messages in the Tralfamadorian geometrical language, informing Salo of their progress. [. . .] As it turns out, the replacement part is a small metal strip, brought to Salo by Constant and his son Chrono (born of Rumfoord's ex-wife). ” (訳として)「時間等曲率漏斗(クロノ・シンクラスティック・インファンディブラム)とラムフォードの接触、そして、続く火星勢力との戦争、コンスタントのタイタンに向けての放浪は [UWTB (Universal Will to Become; そうなるべくしての万有意志)] の作用を用いてのトラルフアマドール人の制御による操作の結果であり、ストーンヘンジ、中国の万里の長城、クレムリンらは(土星の衛星タイタンにて足止めをくらっている)サロに進捗状況を報せるためのこれすべてトラルフアマドール人の地理的表現であつ

た。代替部品が小さな金属一片であると判明したところで(主要人物たるマラカイ・)コンスタントおよび彼の息子のクロノ(ラムフォードの前妻とマラカイ・コンスタントの間にできた子)が(タイタンに逗留する)サロの元に送られることになった」と記されているところとなる(尚、[Chrono クロノ]という[主要登場人物(マラカイ・コンスタント)の息子にして、かつ、タイタンのサロの元に部品を届けに行く役割を負った子供]の名前は Chronos クロノスという[ギリシャ神話の時の神]にして Titan(ゼウスに敗れたギリシャ神話上の古き神々タイタン)の代表者である Cronos クロノス(ローマ語表記サトルナスが転じてサターンこと土星となっているとの神格)のことを想起させる名でもある([タイタン・クロノス] と [時の神・クロノス] の関係性については本稿にての先行する段にて解説しているとおりである)のだから、[作品表題に付されての Titan(ギリシャのタイタン族に命名由来を持つ土星衛星) / Saturn(土星)にまつわっての堂に入っただけのやりよう]が感じられるところ「でも」ある——。他面、1968年初出の『2001年宇宙の旅』では(映画版にあつては[木星]Jupiterが最終目標地点であったところを)[土星 Saturn]が目標地点として設定してある——※同文に目立つところの英文 Wikipedia[2001: A Space Odyssey (novel)]項目より引けば “ The book leaps forward 18 months to 2001, to the Discovery **One mission to Saturn**. Dr. David Bowman and Dr. Francis Poole are the only conscious human beings aboard Discovery One spaceship. ” (訳として)「物語はそれから18ヶ月後の2001年、ディスカバリー・ワン号による土星への到達ミッションにまつわっての場へとうつる。デヴィッド・ボーマン博士とフランシス・プールのみが(冬眠ポットに入らずに)覚醒状態を維持しながらディスカバリー・ワン号にて活動している人間達だった」と端的に表記してあるとおりで——)

II. 両作『タイタンの妖女』『2001年宇宙の旅』ともホメロス古典『オデュッセイア』

(本稿にての先行するところの出典(出典(Source)紹介の部46)にあつて当該の古典そのものより文言引いて示しているように[トロイア攻囲戦で木製の馬の奸計を用いてギリシャ連合軍のトロイア勢に対する皆殺し伴っての勝利をもたらした武将オデュッセウス]が[サイレン Siren] [スキュラ Scylla] [カリュブデス Charybdis]ら怪物が控えている航海の難所をふりきらんとして船旅の同道者らを失いつつ [女神カリュブソの島(オーギュギアー島)]に漂着するといった苦難の旅を経験する、そして、故郷に帰郷するとの内容の叙事詩) と「濃厚に」結びついているとのことがある。

(→ [直上にての解説部]にても言及しているように『タイタンの妖女』原題たる The Sirens of Titan にあつての Sirens とは叙事詩『オデュッセイア』(ὈΔΥΣΣΕΙΑ)に登場を見る人面鳥身の魔声でもってして船を沈没に誘(いざな)う怪物となる。他面、これまた [上にての解説部]に言及しているように『2001年宇宙の旅』に登場を見ている人間のフリを難なくやり通せるだけの [強い AI] (Strong AI)の領域に入っただけの HAL9000 の似姿についても [サイクロプス Cyclops(オデュッセウスが叙事詩『オデュッセイア』の前半部で苦しめられた一つ目の巨人)のメタファーであろうとの識者分析](がなされるだけの背景)が介在していることが問題となりもし、かつもって、より直感的なところとして同 HAL9000 の似姿が [Siren (Alarm System)を想起させる明滅する Emergency vehicle lighting[緊急車輛敷設ランプ]状の外観]から[怪物サイレン]を想起させるとのこともある——英文 Wikipedia[Interpretations of 2001: A Space Odyssey] 項目(直訳すれば [2001年宇宙の旅に対する解釈(論)]項目)に(以下、引用なすとして) “ Homer's epic poem The Odyssey, which is signalled in the film's title. Wheat notes, for example, that the name "Bowman" may refer to Odysseus, whose story ends with a demonstration of his prowess as

an archer. He also follows earlier scholars in connecting the one-eyed HAL with the Cyclops, and notes that Bowman kills HAL by inserting a small key, just as Odysseus blinds the Cyclops with a stake.”との表記がなされるだけのことがありもする。そも、『2001年宇宙の旅』の英文原題 2001:スペース・オデッセイに見る【オデッセイ】Odysseyとは叙事詩『オディッセイア』の英文表記であり、それが一般名詞化して【壮大な物語】を意味する語に転化したものであるとのことがあるとの中で『2001年宇宙の旅』と叙事詩『オディッセイア』との関係がたとえばもってして『2001年宇宙の旅』作中登場人物(ボウマン; 射手との語感に通ずる名の主要登場人物)が【射手としての(叙事詩『オデュッセイア』主人公たる)オデュッセウス】に言及する作品ありようなどとして表出していることを(先述の作中登場人工知能 HAL がキー解除をもってしてボウマンに沈黙させられたことを [(オデュッセウスに尖った木片にて眼を潰された『オデュッセイア』登場の) 独眼巨人サイクロプスに仮託する式]などと共に) 問題視するとの欧米圏一部識者評論が存在している、それだけの背景がそこにあるわけである——)

III. 両作品共々、「土星の衛星に深くも通ずる人類操作にあつての遠大な目標」が作品主題となっているとのことがある。

(→本稿にての出典(出典(Source)紹介の部 65(3))にて解説のように小説『タイタンの妖女』にあつては[黒ぼち(single-dot)ひとつよりなる親書]を送達するとの使節としての役割のためだけにサロという存在、そして、同機械生命体サロの背後に控える高度異星文明が人間文明を永年に渡って育て上げたとの設定の作品となっている。他面、『2001年宇宙の旅』についても[モノリス](黒曜石状の石碑)らを宇宙に播種した先進文明が遠大な計画の一環として人類種を育て上げたとの作品ともなっている ——目につくところの英文 Wikipedia[2001: A Space Odyssey (novel)]項目冒頭にあつての Plot summary の部にて “ In the background to the story in the book, an ancient and unseen alien race uses a device with the appearance of a large crystalline monolith to investigate worlds all across the galaxy and, **if possible, to encourage the development of intelligent life.** The book shows one such monolith appearing in ancient Africa, 3 million years B.C. ” (大要訳として)「同書(『2001年宇宙の旅』)の物語の背景となるところとして古代の見えざる外宇宙種族が銀河系すべての世界を網羅的に探査するために[結晶のように透明なモノリス](訳注:小説ならぬ映画版では黒曜石状になっているが、小説版では透明なクリスタルのようなありようが強調されている)を伴つての機構を用い、そして、**可能ならば、知的文明の進歩を促進するとのやりようをとつた**との設定がなされている (といった設定に関わるところで『2001年 宇宙の旅』小説版では月でのモノリス発見・通信開始に呼応して土星の衛星ヤペタスへのミッションが開始されるとの筋立てが採用されてもいる)。同書はそうしたモノリスのうちの一柱が300万年前のアフリカに現われたと描いている」と解説してあるとおりである (尚、私見を述べておけば、以上のようなフィクション筋立てをして [[本当のことたりうる]と楽観的に真に受ける]のは多幸症気味、あるいは、半ば脳死状態の騙され人ならば大いにありそうなことであるとも見ている。につき、筆者としては本稿の先だつての段で解説してきた John Milton の Paradise Lost『失樂園』の設定、[[後発種族]に[罪]と[死]を進呈する結果に通ずるとの式で知恵(文明)を接受した](本稿にての出典

(出典 (Source) 紹介の部 55から出典 (出典 (Source) 紹介の部 55 (3))で[今日的な観点で見た場合のブラックホールに相通ずる描写]との絡みで原文引用なしたところの設定)とのことの方がよリモってありうる (more persuasive) ことであろうと見ているとも申し述べておく) ——)

IV. 『タイタンの妖女』『2001年宇宙の旅』両作品共々、「時空間の縛りを無視する能力を獲得するに至った超人」が作中にて重きをなし、また、彼ら「時を超越した」あからさまなる「超人」らが遠大な人類操作プラン —土星の衛星に関わるところの遠大な人類操作プラン— に重きをもって関わることになる (使喚(しそう;使役)されるとのかたち)に近しき式で関わることになる) とのありようが描かれている作品となっている。

(→『タイタンの妖女』では時空間曲率漏斗(なるもの)に入った主要登場人物のラムフォードが波動存在と化した後、土星の衛星タイタンに逗留するサロと交友を結んでの中でそれと知らずにサロのミッションの手助けをさせられることになるとの粗筋が具現化を見ている —— ※再度、ほぼ同じくものところから引けば、英文 Wikipedia[The Sirens of Titan]項目にあつて現行、“ **The chrono-synclastic infundibula are places where these "ways to be right" coexist. When they enter the infundibulum, Rumfoord and Kazak become "wave phenomena", somewhat akin to the probability waves encountered in quantum mechanics. They exist along a spiral stretching from the Sun to the star Betelgeuse. When a planet, such as the Earth, intersects their spiral, Rumfoord and Kazak materialize, temporarily, on that planet. [. . .] Rumfoord's encounter with the chrono-synclastic infundibulum, the following war with Mars, and Constant's exile to Titan were all manipulated via the Tralfamadorians' control of the UWTB.** ” (訳として)「時間等曲率漏斗(クロノ・シンクラスティック・インファンディブラム)はそうなるべくしてのことが併存するところの場であった。ラムフォードと(彼の愛犬である)カザックが時間等曲率漏斗(クロノ・シンクラスティック・インファンディブラム)に入った後、彼らは[波動存在](ウェイブ・フィノーミナ)、量子力学における確率波動の如き存在へと変じた。彼らは太陽からベテルギウスにかけての渦にかけて存在することとなったのだ。地球のような惑星が渦と交点をもった際、ラムフォードとカザックは一時的に惑星上に物質化するとの存在になったのである。…(中略)…時間等曲率漏斗(クロノ・シンクラスティック・インファンディブラム)とラムフォードの接触、そして、続く火星勢力との戦争、コンスタントのタイタンに向けての漂流は[UWTB (Universal Will to Become: そうなるべくしての万有意志)]の作用を用いてのト랄ファマドール人の制御による操作の結果であった」と記述されているとおりでである—— 。 他面、『2001年 宇宙の旅』では土星(映画版では木星)へのミッションに参加した後、期せずして宇宙に放り出された主要登場人物の宇宙飛行士デヴィッド・ボーマンが人間を越えたところにある存在 Star Childなるものに進化させられ、[時空間を超越する存在]として目的の一部をなすに至るさまが(後にてのシリーズもののありようにも関わる)ところとして描かれている —— ※英文 Wikipdia[2001: A Space Odyssey (novel)]項目にて “ Bowman is transported via the monolith to an unknown star system. During this journey, he goes through a large interstellar switching station, and sees other species' spaceships going on other routes; he dubs it the "Grand Central Station" of the galaxy. Bowman is given a wide variety of sights, from the wreckage of ancient civilizations to what appear to be life-forms, living on the surfaces of a binary star system's planet. He is brought to what appears to be a pleasant hotel suite, carefully constructed from monitored television transmissions, and designed to make him feel at ease. Bowman goes to sleep. **As he sleeps, his**

mind and memories are drained from his body, and he is made into a new immortal entity, a Star Child, that can live and travel in space.” (大要訳をなすとして)「(ディスカバリー号で唯一生き残った) ボーマン船長は(異星系文明に由来する黒曜石状の石柱である)モノリスの作用によって未知の星系に転移させられた。この旅の過程で彼は大規模な恒星間移動通路のありよう、そこを行き交う他の種族の宇宙船らを目にしながらいそ [グランド・セントラル・ステーション] に至った。ボーマンは恒星系にあっての往古文明の崩壊からうまれいずる生命の形態に至るまでの幅広くもの知識を与えられてホテルの一室にいるような快適環境(の幻影)を与えられながら眠りにつき、その眠りの中で彼の精神と記憶は肉体から抽出され、宇宙を旅することが可能なるスターチャイルドなる不死なる存在へと変ずることになった」と記載されているところでもある
—)

(ここまでもってして【911の予見事物としての特性】【ブラックホールと関わる特性】が問題になる作品である『2001年宇宙の旅』(1968)と同文に【911の予見事物としての特性】【ブラックホールと関わる特性】が問題になる作品である『タイタンの妖女』(1959)の類似性にまつわっての振り返り表記とする)

上にて延々再述の内容も加味してとらえれば、大体、述べたきことは理解いただけようかと思うが、

[カート・ヴォネガット『タイタンの妖女』とカール・セーガン『コンタクト』の両作品の接合関係(人によっては微々たる所ととらえるであろうもの、[[サイレン]と[ヘラクレス座のM13]]を通じての接点)]

について

[911(への予告的言及)との結節点]
[ブラックホール生成問題との結節点]

との兼ね合い「でも」問題になることであろうとの訴求をなしてきたのが本稿の従前内容である。

他面、カール・セーガンの『コンタクト』という作品がいかようにして小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』および科学読み物との体裁をとる『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の両文物物(に見る予見的言及)との結びつきを介して

[911(への予告的言及)との結節点]
[ブラックホール生成問題との結節点]

との特性を同文に複合的に帯びている作品であると述べられるか(正確には奇怪なことにそのように述べられるように「なってしまうのか)についてはつい先程の段に至るまでの本稿ここまでの段にて仔細に解説を講じてきたところである。

以上のこと、述べたうえで申し述べるが、カール・セーガン『コンタクト』と[ヘラクレス座のM13]および[サイレン]への意識誘導との観点で結びつくカート・ヴォネガット『タイタンの妖女』という作品、その原題ザ・サイレンズ・オブ・タイタンに見るサイレンズとは

[トロイアを木製の馬の計略で滅ぼしたオデュッセウスをその苦難の冒険の渦中にて惑わした人面鳥身の怪物サイレン(セイレーン)]

と通ずる語である(：そちら怪物サイレンの語句の使用 —[妖婦]とのニュアンスでのサイレンの使用 — を介して[トロイア崩壊の物語に引導の渡し手として登場してくる男](オデュッセウス)の物語と題名からして結びつく小説作品『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』がカール・セーガンの『コンタクト』と[ヘラク

レス座のM13]を介して結びついているとのことは(誤解を恐れずにはきと述べ)[奇怪なこと]かつ[危険なこと]であると言えるだけの事情がある)。

本稿こここれに至るまでの流れにて何度も述べているように

[トロイア崩壊]

は

[サイレン]の声に「後の日に」感ったオデュッセウスがその前日譚の中で考案したと描写される木製の馬の計略]

によってもたらされたと伝わるわけだが、そも、その崩壊、[住民らこぞっての外患誘致による内破(大量殺戮)]とのかたちでの崩壊の帰結につながった[トロイア攻囲戦]が発生した原因は[黄金の林檎]にあるとされるとのことがある(本稿の先の段——出典(Source)紹介の部 39——で詳しくも紹介していることである)。

その点に関しては、

[黄金の林檎]というものが[ヘラクレス第11功業]において巨人アトラスがその在処を知るものとして登場してきたもの——出典(Source)紹介の部 39——]となっていること(本稿でくどくも何度も指摘してきたとのこと)

との絡みで「さらにもって」問題になるとのことがある。

同じくもの伝での[黄金の林檎]の位置づけがカート・ヴォネガット『タイタンの妖女』(1959)およびカール・セーガン『コンタクト』(1985)の間の関係性——[サイレン(再述するが、トロイアに木製の馬の計略で引導を渡したオデュッセウスをギリシャ自領への帰路、苦しめた怪物)]と[ヘラクレス座M13]を介しての関係性——「とも」結合していると申し述べられるようになっているとのことが「ある」のである。

どういうことか。

その点については

[オデュッセウスが際会しめたサイレンによる災厄]というものからして[アトランティス](アトラスという名称と結びつく古の陸塊)および[黄金の林檎]と関わっている]

とのことが取り上げるべくこととしてある(ために、以降、その点について従前内容を振り返りながらも解説を講じていくこととする)。

[アトランティス]と[サイレンの災厄]の関係性についての解説として

オデュッセウスはトロイア攻めの帰途、妖異サイレン(の魔声による暗礁乗り上げ・一同遭難死の危難)に際会することになったのだが、サイレンの難所をなんとか越えた直後、[渦潮の怪物カリュブディス]と[美しい女と獰猛な犬らの混淆形の怪物スキュラ]による災厄に次いで遭遇、そして、結果的に渦潮の怪物カリュブディスにオデュッセウスを除いての船旅の同道者ら全員が呑み込まれて殺されることになるとの運びとなった(とオデュッセウスの苦難の旅を唄ったものであるホメロスの叙事詩『オデュッセイア』には記されている)。

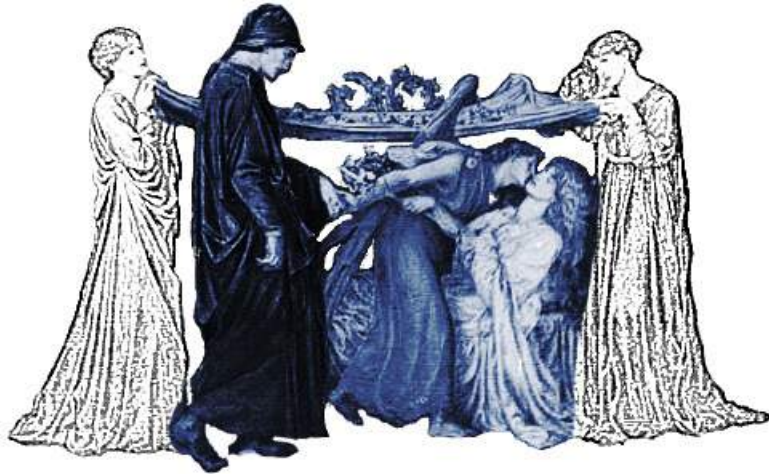
それら災厄、

[サイレンの災厄][渦潮の怪物カリュブディスの災厄][スキュラの災厄]

はワンセットのものといった按配となっている(下にての典拠紹介部を参照のこと)。

SOURCE

82



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 82 にあつては

[サイレンの災厄] [渦潮の怪物カリュブデイスの災厄] [スキュラの災厄]

がワンセットになっているとのこと(本稿の先だつての段でも取り扱っていたとのこと)について新たに付け加えての出典を挙げる(そして、それをもってして訴求の用とする)とのこと、なしておきたい。

その点、本稿にての出典(Source)紹介の部 65(2) では下の通りの引用をなしていた。

(直下、岩波文庫版『ギリシャ神話』(アポロドーロス著『ビブリオテーケー』の訳書)にあつてのオデュッセウスが魔女キルケーの元から出立してのすぐ後のことにまつわる言い伝えを解説しているとの部、p.205 から p.206 より「再度の」引用をなすとして)

キルケーの所に来て、彼女に送られて海に出て、セイレーンの島を通過した。セイレーンはアケローオスとムーサの一人たるメルポメネーの娘で、ペイシノエー、アグラオペー、テルクシエペイアであった。この中の一人は堅琴を断じ、一人は唄い、一人は笛を吹き、これによってそこを航し過ぎる船人を留まるように説かんとしたのである。太腿(ふともも)から下は彼女らは鳥の姿をしていた。これを過ぎる時、オデュッセウスはその歌を聞こうと欲して、キルケーの教えにより仲間の耳を蠟(ろう)で塞いだが、自分自身はマストに縛りつけるように命じた。そしてセイレーンたちによって留まるように説かれ、縛めを解いてくれるように頼んだが、仲間の者はなおさら彼を縛り、かくして航し過ぎた。セイレーンは、

もし船が航し過ぎることがあれば死ぬという予言があった。かくして彼女らは死んだ。

(引用部はここまでとする)

以上引用部の直後に続く流れとして(「付け加えても、」の同じくもの出典からの引用をなすとして)次のような事後経緯描写がギリシャ神話には認められる(とのことをここ出典紹介部初出のこととして挙げておく)。

(直下、岩波文庫版『ギリシャ神話』(アポロドーロス著)にてのオデュッセウスが魔女キルケーの元から出立してのすぐ後のことにまつわる言い伝えを解説しているとの p.206 よりの引用をなすとして)

(セイレーンは、もし船が航し過ぎることがあれば死ぬという予言があった。かくして彼女らは死んだ)。この後二つの道に来た。一方には漂い岩が一方には巨大な断崖があった。その中に一つに、クラタイイスとトリエーノスまたはポルコスポルコスの娘で、その顔と胸は女で、その脇腹より犬の六頭十二足が生えているスキュラスキュラがいた。一方の断崖にはカリュブデイスがいて、彼女は一日に三度水を吸い込み再び放出するのである。キルケーの教えにより「漂い」岩の航路を避けて、スキュラの断崖を過ぎて航して際に、艫(ろ)に武装して立った。しかしスキュラが現われ、六人の仲間を掠って彼らを食い尽くした。そこより太陽神(ヘーリオス)の島トリーナキアートリーナキアーに来た。そこで牡牛が草を食べていたが、彼は風に止められてそこに留まった。しかし仲間の者が食物に窮して牡牛の中の幾頭かを屠殺して宴を張った時に、太陽神(ヘーリオス)はこれをゼウスに知らせた。そしてゼウスは海に出た彼を雷霆で撃った。船が壊れ、オデュッセウスはマストにしがみついてカリュブデイスへと来た。カリュブデイスがマストを飲み込んだ時に、頭上に懸(かか)って生えていた野生の無花果をつかんで待っていた。そしてマストが再び投げ上げられたのを見た時に、この上に飛び降り、オーギュギアー島へ運ばれていった。そこでアトラーズの娘カリュプソーが彼を迎え入れ、床をともにして、一子ラティーノスを生んだ。

(引用部はここまでとする)

([出典\(Source\)紹介の部 82](#)はここまでとする)

上に見るように(途中に太陽神の島にて同道者、船旅のクルーらが神聖な牛を食したがゆえに神罰を食らったというプロセスが合間にあっただうえでも)[サイレン]と[スキュラ]と[カリュブデイス(渦潮)]の各存在に由来する災厄はホメロス叙事詩『オデュッセイア』に見るオデュッセウス流浪譚にて一貫通貫とした流れにて描かれる災厄となっている。

(:については本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 44-2](#)にあつて、Project Gutenberg のサイトにて公開されているホメロス叙事詩『オデュッセイア』の近代英訳版 THE ODYSSEY OF HOMER Translated by William Cowper (訳者の同 William Cowper は 18 世紀活躍の英国の文人となる)よりの第 12 巻の要約の部 — 表記の

英文テキスト入力誰でもオンライン上より特定できるところ— より既に引用なししていたところとして) “ BOOK XII ARGUMENT Ulysses, pursuing his narrative, relates his return from the shades to Circe’s island, the precautions given him by that Goddess, his escape from the Sirens, and from Scylla and Charybdis; his arrival in Sicily, where his companions, having slain and eaten the oxen of the Sun, are afterward shipwrecked and lost; and concludes the whole with an account of his arrival, alone, on the mast of his vessel, at the island of Calypso.” (補つても訳として)「[12 巻要約] ユリシーズは(パイアキス人に対して)彼の物語を続け、[影らの領域](注:第 11 巻の舞台となる影と化しての死者らの領域)から[魔女キルケの島]への帰還へとつなげ、さらに、(キルケによってなされた)事前警告、そして、[サイレンら]の魔手よりの逃亡、[スキュラ]および[カリュブディス]よりの逃亡、[シシリア島]に到達、そこで彼の船旅の同道者らが太陽神の牛を屠殺・食したがために(神罰によって)後に座礁・消失の憂き目を見たこと]へと話をつないでいき、そして、カリュブソの島に彼の船のマストにつかまってたった一人到達したことを結論として語った」との記述を引いていたところでもある)

さて、以上のような通貫した流れの中にあつて渦潮の怪物カリュブディスによってクルーを全て失ったオデュッセウスはカリュブソの島、オーギュギア島に漂着するのであるが、そのオーギュギア島、「これまた先述のように」かのアイザック・ニュートンらを含む欧州の識者層に

[アトランティス候補地]

とされてきたような場所である(：下にの振り返つての表記を参照のこと／尚、語るに足るとの向きにはお分かりいただけることか、と思うが、ここで問題としているのは実際にオーギュギア島なる地所がアトランティスと看做されるような実体を伴った存在であるかなどとのことではない、そのようなことはどうでもいいことである——元よりアトランティス自体が伝説上の存在、霞(かすみ)の中の茫漠とした幻のような存在であり、その実在問題について云々するのは好事家らの意味なき道楽上の話柄にすぎない(と筆者はとらえているし、世間でもそう見られているところであろうかと思う)——)。

(再度振り返つての表記として)

ここに[オーギュギア島](サイレンらに起因する一群の災厄に際会した後、オデュッセウスがいざなわれたとの島)が[アトラスの娘の島]にして[古の陸塊アトランティス]と考えられていたことの出典を(出典(Source)紹介の部 43)にて挙げたところと同文のこととして)再度引いておく。

(直下、現行の英文 Wikipedia にあつての[Isaac Newton's occult studies]([アイザック・ニュートンのオカルト研究])項目に見受けられるところの記載の再度の引用をなすとして)

Newton's Atlantis

Found within The Chronology of Ancient Kingdoms, are several passages that directly mention the mythical land of Atlantis. The first such passage is part of his Short Chronical which indicates his belief that **Homer's Ulysses left the island of Ogygia in 896 BC. In Greek mythology, Ogygia was home to Calypso, the daughter of Atlas (after whom Atlantis was named).** Some scholars have suggested that Ogygia and Atlantis are locationally connected, or possibly the same island.

(補つても訳として)

「ニュートンのアトランティス : ニュートンが遺した『古代王国年代記』に見

受けられるところとしていくつかの文章が直接的に神秘的存在としての大陸であるアトランティスの地への言及をなしているとのことがある。彼のそのような言及箇所にての最初のもの(ニュートン著作 The Chronology of Ancient Kingdoms『古代王国年代記』にあつての前半部に認められるとの) Short Chronical にあつて見受けられるところ、ホメロス叙事詩に見るユリシーズ (訳注:ユリシーズとはオデュッセウスのことを指すのだが、トロイアを木製の馬の計略で滅ぼしたオデュッセウスのラテン語:Ulixes(ウリクセス)あるいはラテン語:Ulysses(ウリュッセウス)との表記がそちら Ulysses へと転じているとのものである) が紀元前 896 年にオギューギアを去ったとの部の記述である。オギューギアは「アトランティスがそちら巨人より命名されたとのアトラスの娘たるカリプソ」が住んでいた島だった。 幾人かの学者らは (ニュートンがそのように見ていたように) オーギューギア島およびアトランティスは位置的に連続性がある、あるいは、ありうべきところとして同様の島であるとの提案をなしている

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上のようなことと対応するところとして Project Gutenberg にて公開されているアイザック・ニュートンの手になる The Chronology of Ancient Kingdoms それそのものの記載も再度引いておく

(直下、Project Gutenberg サイトよりダウンロードできるとの The Chronology of Ancient Kingdoms にあつての The Times are set down in years before Christ と付された節にてのニュートン流の編年史にあつての出来事総覧目録よりの再度の引用をなすとして)

896. Ulysses leaves Calypso in the Island Ogygie (perhaps Cadis or Cales.) She was the daughter of Atlas, according to Homer. **The ancients at length feigned that this Island, (which from Atlas they called Atlantis) had been as big as all Europe, Africa and Asia, but was sunk into the Sea.**

「紀元前 896 年 ユリシーズがオーギューギア島(カディスないしカレスでありうる)のカリプソのもとから去る。彼女カリプソはホメロスによれば、アトラスの娘ということになる。古代人らは詳細にまつわるところでこの島(アイランド・オーギューギア)をもってアトラスの名から彼らがアトランティスと呼称した島、「大きさにしてヨーロッパ・アフリカ・アジアをあわせたのに匹敵するも海に沈んだ島」であるように見せようとのことをなしていた」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上のような視点に連なるところとして英文 Wikipedia [Ogygia] 項目(カリプソの島 [オーギューギア島] にまつわる英文解説項目)には (現行にての記載内容を原文引用するところとして) “ W. Hamilton indicated the similarities of Plutarch's account on "the great continent" and Plato's location of Atlantis in Timaeus 24E — 25A. **Kepler in his Kepleri Astronomi Opera Omnia estimated that “the great continent” was America and attempted to locate Ogygia and the surrounding islands.** ” (拙訳として)「ウィリアム・ハミルトンはプルタルコスの[大いなる大陸]とプラトンの『ティマイオス』24E から 25A に認められるアトランティスの近似性を同定していた。ヨハネス・ケプラーは彼の Kepleri Astronomi Opera Omnia にて[大いなる大陸]とはアメリカのことを指すととらえ、オーギューギア島およびその周囲の島々をその場と一致させんとしていた」との表記がなされてもいる。

直近、振り返り・繰り返しての表記をなしたこと、

[オデュッセウスが渦潮の怪物カリュプデイスに呑まれた後に辿り着いた女神カリュプソの島が[アトランティス]と見られる素地があったとのこと]

に加えて、——同じくも本稿の先の段で問題視していたことだが——女神カリュプソ自体がアトランティスとの呼称と結びつく[巨人アトラスの娘]であるとのことともまたある。すなわち、カリュプソを含む巨人アトラスの一群の娘ら、言い換えれば、ヘラクレスの第11功業にて黄金の林檎の在処を知る巨人として登場してくる巨人アトラスの一群の娘らが[アトランティス(複数形は Atlantides)]との呼称と結びつく「広くも」言われてきたとのこともある(本稿にての[出典\(Source\) 紹介の部 41](#)を参照のこと)。

その[[アトラスの娘]としてのアトランティス]に[黄金の林檎]を管理管掌する[ヘスペリデスら]が含まれているとの言いようもまたもってなされ、さらには、そのヘスペリデスが管理管掌している西の果てにあるとの言い伝えの伝がなされている[黄金の林檎の園]そのものが[[古代に沈んだ陸塊]としてのアトランティス]と結びついているとの物言いがなされているとのこと「も」がある(本稿にての[出典\(Source\) 紹介の部 41](#)を包摂する解説部を参照のこと)。

整理すれば、である。

[ヘスペリデスの果樹園(黄金の林檎の園)] ↔ [アトランティス] ↔ [アトラスの娘たるカリュプソの島] ↔ [サイレンの災厄、それに続くスキュラとカリュプデイスの災厄との一気通貫とした流れを経てオデュッセウスが漂着した島]

との関係性が成立していることになる。

そして、そちら関係性については

[トロイアが滅することになったのは[黄金の林檎]が元凶であるとの言い伝えの伝が存すること]

[サイレンの災厄に際会したオデュッセウスが(黄金の林檎にてはじまったトロイア戦争にて)[木製の馬の計略]でトロイアに引導を渡した謀将であること]

らが重みを増さしめるように接合しているとのことがある(※)。

(※またもって述べれば、黄金の林檎にてはじまったトロイア戦争の開戦プロセスそれ自体にも(後にてトロイアに木製の馬の計略で引導を渡した、そして、叙事詩『オデュッセイア』にてサイレンらと際会しながらものその漂流・漂白の過程が延々語られるとの) 武将オデュッセウスが関与しているとのこともある。 については本稿の[出典\(Source\) 紹介の部 39](#)にて THE AGE OF FABLE(1世紀以上にわたって[米国人の神話理解のための標準書]となっていたとされるトマス・ブルフィンチ(日本でもその騎士道ロマンスにまつわる書籍らが岩波書店などから翻訳・刊行されているとの19世紀米国の代表的文人 Thomas Bulfinch)の手になる書)から引用したとの次の記述からも理解できるようになっている。

→(以下、THE AGE OF FABLE よりの再度の引用をなすとして)

“Minerva was the goddess of wisdom, but on one occasion she did a very foolish thing; she entered into competition with Juno and Venus for the prize of beauty. It happened thus: At the nuptials of Peleus and Thetis all the gods were invited with the exception of Eris, or Discord. Enraged at her exclusion, the goddess threw a golden apple among the guests, with the inscription, "For the fairest." Thereupon Juno, Venus, and Minerva each claimed the apple. Jupiter, not willing to decide in so delicate a matter, sent the goddesses to Mount Ida, where the beautiful shepherd Paris was tending his flocks, and to him was committed the decision. **The goddesses accordingly appeared before him. Juno promised him power and riches, Minerva glory and renown in war, and Venus the fairest of women for his wife, each attempting to bias his decision in her own favor. Paris decided in favor of Venus and gave her the**

golden apple, thus making the two other goddesses his enemies. Under the protection of Venus, Paris sailed to Greece, and was hospitably received by Menelaus, king of Sparta. Now Helen, the wife of Menelaus, was the very woman whom Venus had destined for Paris, the fairest of her sex. **She had been sought as a bride by numerous suitors, and before her decision was made known, they all, at the suggestion of Ulysses, one of their number, took an oath that they would defend her from all injury and avenge her cause if necessary. She chose Menelaus, and was living with him happily when Paris became their guest. Paris, aided by Venus, persuaded her to elope with him, and carried her to Troy.** ”

(上の再度の引用部に対する補ってもの拙訳として)

「ミネルバ(ギリシャの女神アテナのローマ呼称)は智恵の女神でもあったわけだが、ある機会にて彼女はユーノー(ギリシャの女神ヘラのローマ呼称)、そして、ヴィーナス(ギリシャの女神アフロディテのローマ呼称)との美人競争に参加するのとてつもない愚行をなした。

それはこのように起こったことである。

[ペレウスとテティスの婚礼の儀の折、その場には不和の女神たるエリス以外の全ての神々が招かれた。自身の排斥に激怒、不和の女神エリスは来賓らの間に「最も美しきものへ。」と記された[黄金の林檎]を投げ入れた。その挙を受け、ユーノー(ヘラ)、ヴィーナス(アフロディテ)、そして、ミネルヴァ(アテナ)は各々、林檎を我が物であると主張しだした。[ジュピター](訳注:ギリシャ主神のゼウスのローマ表記がこちら[ジュピター]となる)はそのようなデリケートな問題を決めるのに乗り気ではなく、それら三女神らを見目麗しきパリスが羊飼いとて羊の群れの世話をしていたとのイーデー山(訳注:マウント・イダないしマウント・イデは古のトロイア界限(Troad 一帯)にその名を冠する山が実在しているとの神話上の山である)へと送る、[誰が最も美しいかを決させしめるべくもの役割]を負わせてのパリスの元へと送ることとした。**女神らはそれがゆえにパリス面前に現われ、各々が勝利の熱情に駆られながらパリスにバイアスがかかった裁決を下させるべくも試み、ユーノー(ヘラ)はパリスに権力・富を(彼女を勝たせる対価に)与えると提案、ミネルバ(アテナ)は栄光と戦にての名声を与えると提案、そして、ヴィーナス(アフロディテ)は彼の妻に最も見目麗しき女を与えると提案した。**

パリスはヴィーナスを支持することにし、彼女に

[(美人コンテストの勝者の証となっていた)黄金の林檎]

を与えることにしたため、他の二柱の女神は彼パリスの[敵]へと変ずることになった。

女神ヴィーナス(アフロディテ)の庇護の下、パリスはギリシャに向けて船出し、そして、そこにてスパルタ王であったメネラオス王の歓待を受けることになった。その当時、メネラオス王の妻に収まっていたとのヘレンはその美に秀でての女ぶりよりヴィーナスがパリスのものになるとの運命を与えたまさにも女であった。(それに先立つところとして)彼女ヘレンは

[数多の婚約希望者に「花嫁に、」と求められていた存在]

となってもおり、のような中、**ヘレンが夫たる者を決する前に求婚者らはユリシーズ(ユリシーズはオデュッセウスの英語圏の呼称である)の提案で(ヘレンの夫となった人間と他の婚約希望者らとの後々の禍根を断つためもあって)[彼ら求婚者らは必要となれば、全ての暴力・彼女の歩んだ道に対する復讐からヘレンを守る]**との誓約をなしていた。といった中でヘレンは(スパルタ王の)メネラオスを選び、パリスが彼らの客としてその場を訪れるまで幸せに暮らしていた。ヴィーナス(アフロディテ)による助力を受けていたパリスはそのヘレンに彼と駆け落ちすることを説得しおおせ、彼女をトロイア(訳注:パリスが王子としての立ち位置にあった都市国家)に連れ出した —以下略— (といったことの後、オデュッセウスがギリシャ諸侯にヘレン絡みで取り交わすことを提案していた誓約に縛られていたためにギリシャ有力諸侯がこぞって参加してのヘレンの(元)夫たるメネラオスの兄アガメムノン王を盟主とする大量のギリシャ勢が[パ

リスを王族として戴くトロイア]に雲霞(うんか)の如く来襲することになったというのがトロイア戦争開戦を巡る顛末となる)」

(再度付しもしての訳はここまでとする)

上の引用部に見受けられるように [サイレンに苦しめられたとのオデュッセウス] は [木製の馬の提唱者] にとどまらず黄金の林檎を巡っての女神らの諍いが破滅に至る戦争へと通じたとのその契機になった [ギリシャ諸侯らの間の誓約の発案者] であったともされているのである)

以上でもって

[【アトランティス】(【黄金の林檎の園】と結びつけられての領域)と【サイレンの災厄】(オデュッセウスが【アトランティス】と同一視されもしていたカリュプソの島にいざなわれるまで遭遇した一連の災厄のひとつ)の関係性]

との絡みで何が述べられるか、(本稿の従前の内容を振り返りつつ)、一つのポイントたることを解説した。

それは

「オデュッセウスはサイレンの歌を聴きだしたことから始まった一連の船旅上の難所越えの果てに結局、[アトランティス候補地]とされる島に漂着した。そして、アトランティスの候補地としては、また、[黄金の林檎の園]も挙げられるが、それは[サイレン]と[黄金の林檎]とが結びついているとのこと「にも」相通ずる(そしてもってして黄金の林檎が[ヘラクレスの第11功業の目標物]であるところ、カール・セーガン『コンタクト』とカート・ヴォネガット『サイレンズ・オブ・タイタン』の双方ともがブラックホール生成問題 —(ブラックホール生成問題は先述なしてきたように【黄金の林檎】に通ずるようになっていて) — と関わるような側面を有している作品らとして【ヘラクレス座M13星雲】と【サイレン】と結びつくようになっていとも結節関係を観念させるところ「とも」なっている)」

とのことを解説したとのことでもある。

また、加えて、次のようなこともが —同文に本稿にてここまで指摘してきたことから導き出したことより述べられるところとして— 述べられることにも一応、筆を割いておく。

[(くどくも表記するところとして) サイレンに苦しめられることになったオデュッセウスは黄金の林檎が発端になって始まったトロイア攻囲戦に[木製の馬の計略]でピリオドを付けた謀将として極めてよく知られている存在だが、そこに見るトロイア戦争それ自体が[始点](黄金の林檎によるトロイア戦争の勃発)も[終点](ギリシャ勢の包囲の果てのトロイアの壊滅)も【アトランティス崩壊伝承】と通ずるところがある戦争である (以下、その点についての再述を直下続いての段にてなしておく)。そして、(またもってして先の内容を繰り返すところとして)、【アトランティス】とはオデュッセウスがサイレンの歌に惑った一連の難所越えの後、漂着したカリュプソの島にも結びつくとされる陸塊なのであるのだから、オデュッセウスのカリュプソの島の漂着に至るまでの流れ、いや、トロイア攻めをなしたオデュッセウスという存在およびその冒険を描いた『オデュッセイア』という代表的古典それ自体が —トロイア攻めの始点と終端に関わる存在(アトランティス)を介しもして— 【サイレン】や【ヘラクレス功業の目標物だった黄金の林檎】(巨人アトラスが在処を知るとされてきた果実にして、その在処そのものがアトランティスともされてきた果実)と密に関わっているものといえるとのことも(よりもってして突き詰めてみれば)「ある」]

直上表記のことに關してまずもってトロイア戦争[始点]たる[黄金の林檎(を巡っての三女神の闘争)が要因となつてのトロイア戦争の勃発]が[アトランティス]と結びついているとのことについては

「黄金の林檎の園」(ヘスペリデスの黄金の林檎の園)がアトランティスに仮託されているとのことを(くどくもの)再言なせば、十分であろう(同じくものは本稿にての**出典(Source)紹介の部 41**以降の部で典拠挙げているところである)。

他面、**「終端」としての「トロイアの末期」が「アトランティス」と結びつく**ということだが、それは[木製の馬の計略で住民を失ったトロイア]の「洪水」による崩壊伝承に関わるところとなる。本稿にてのかなり先立っての段にてその内容を紹介していたスミルナのクイントスの手になる Posthomerica こと『トロイア戦記』によれば、オデュッセウスが船旅の最中、渦潮の化け物に吞まれて同道者を失ったが如く水難はオデュッセウス同様にトロイア包囲に関わっていたとの全てのギリシャ軍に及んでいたとされ、それは、壊滅後のトロイアが[神罰(神の悪意とも表される)による地震、うち続く、洪水]に見舞われ、勝利の余韻に浸りきっていた攻囲勢諸共トロイアの遺構が海水に洗われて崩壊したとのありさまだったと伝わっている。

にまつわって述べれば、
[ギリシャ勢力との大合戦を演じて、結果、地震・洪水による最期を迎えた]
というのはまさに古のアトランティスを巡る顛末そのものでもある(：**出典(Source)紹介の部 44-4**)。だけではない。

イタリアのマイナーな地史(偽史としてのフローレンスことフィレンツェ地史)にトロイアとアトランティスとの結びつきがみとめられるとのこともまたある(**出典(Source)紹介の部 45**および同出典紹介部に続けての解説部を参照されたい)うえに、さらにもってして、[トロイアと(アトランティス伝承を想起させもする)洪水伝承]との兼ね合いでは(それ自体が重要なトピックに通じているとの認識で縷々(るる)詳解を加えてきたことなのだが)[黒海洪水伝承]を媒介にしての極めて根深い関係性もがそこにあるとのこと「も」がある(本稿にての**出典(Source)紹介の部 58(2)**以降の解説部をよくもご覧いただければ、といったことまでもがいかようにして【ブラックホール類似物の古典それそのものにあつての具現化】と結びつくようになっているのか、この忌まわしき世界にてそうもなっているのか、理解なしにいただけることか、とは思ふ)。

上のことより[トロイアが滅亡することに向かつての大戦争]の[始点]も[終点]も[アトランティス伝承]と通じていると申し述べているわけであるが、それがゆえ、(くどくもの感が如実にある中で書くところとして)、次のような言いようの伝がなせるようになってもいる。

[サイレンに苦しめられることになったオデュッセウスは黄金の林檎が発端になってはじまったトロイア攻囲戦に木製の馬の計略でピリオドを付けた謀将として極めてよく知られている存在ではあるも、そこに見るトロイア戦争、[始点](黄金の林檎による戦争の勃発)も[終点](ギリシャ勢の包囲の果ての壊滅)も【アトランティス崩壊伝承】と通ずるところがある戦争である。そして、【アトランティス】とはオデュッセウスが[サイレンの歌に惑った一連の難所]越えの後、漂着したカリュプソの島にも結びつくとされる解釈が呈されてきた陸塊なのであるのだから(直近にて再言及のことである)、オデュッセウスがサイレンに苦しむことになったとのカリュプソの島の漂着に至るまでの旅の流れ(さらに述べればトロイア攻めをなしたオデュッセウスという存在およびその冒険を描いた『オデュッセイア』という代表的古典それ自体)が発端と行き着く先の両面で【アトランティス】(およびアトランティスと結びつく黄金の林檎を巡る縁(えにし))と結びつくと述べられもする]

(以上申し述べたところで**「アトランティス」と「サイレンの災厄」の関係性**についての解説はここまでとする)

ここまで本稿の従前内容を振り返りながらも表記なしてきたこと — [アトランティス] と [サイレンの災厄] の関係性について表記なしてきたこと — よりこれまた

[カール・セーガン『コンタクト』とカート・ヴォネガット『サイレンズ・オブ・タイタン』(双方とも、ブラックホール生成問題と関わるような側面を有している作品)が [ヘラクレス座 M13 星雲] と [サイレン] を介して結びつくようになっていること]

が「意味性濃くも」強く想起されることになる。

くどくもあらためれば、[黄金の林檎の園]が

[巨人アトラス] [ヘラクレス第 11 功業] [アトランティス]

とワンセットで結合するとの関係性、そして、

[黄金の林檎] [アトランティス]

が

[サイレンの災厄と関わるオデュッセウスの物語]

とも通じているとの関係性(上の段にて既述のことである)、それら関係性が

[トロイア崩壊の戦争の始点・終点のアトランティスとの結びつき]

よりさらに際立ちもする、そこから、

[ヘラクレス ↔ 黄金の林檎の園に關係する存在 ↔ アトランティスと黄金の林檎の園]

[サイレン ↔ 黄金の林檎によってはじまって戦争の帰結としてのトロイア崩壊後、トロイアの木製の馬の考案者オデュッセウスがアトランティスとみなされる場に流れ着く前に遭遇した船旅上の一連の災厄の体現者]

との関係性がよりもって際立ちもすることになり、[ヘラクレス][サイレン]を介しての『コンタクト』および『サイレンズ・オブ・タイタン』の明示的結びつき、そこにあっての「意味性」が増すことになると述べもしたいのである。

[つい先ぞの段にて摘示しもしてきた関係性を振り返り整理しもするための部として]

現行、**補説 2**と振っての段にての[a]から[f]と分けての中での[c]の話をなしているわけだが、先の[b]の段で述べたことを繰り返すとして、カール・セーガン『コンタクト』については[トロイア滅亡の因としての黄金の林檎]を媒介項にしもしての次の関係性が成立して「しまっている」とのことがある。

(本稿にあって属人的主観など介在する余地が一切ないもの、具体的論拠を出典紹介部にて羅列しながら指し示してきたところの関係性として)

■カール・セーガン『コンタクト』 ↔ (通過可能なワームホールにまつわるセーガン「への」物理学者キップ・ソーン助言) ↔ 物理学者キップ・ソーン ↔ キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』 ↔ 『コンタクト』に関連するところで煮詰められた[通過可能なワームホール]についての思考実験の紹介部にて[双子のパラドックス]絡みの話を展開、奇怪なことに、その場にて「多重的に」911の予見的ありようが顕在化を見ているとのことがあ

ると本稿にて詳述の作品] ↔ [911の事件の発生の予見文物]

■カール・セーガン『コンタクト』 ↔ [黄金比の全面での体現存在たる正十二面体(正五角形を十二の面に配しているとの立体図形)をゲート装置となしての作中設定] ↔ [異空間とのゲートと黄金比体現存在たる正五角形] ↔ [同様のもの(異次元妖怪を封じるとの魔符としてのペンタゴン)を登場させている『ジ・イルミナタス・トリロジー』] ↔ [911の事件への多重的事前言及文物のそれと申し述べられる側面を有している作品にして[黄金の林檎]を副題に冠してもいるとの作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』の内容]

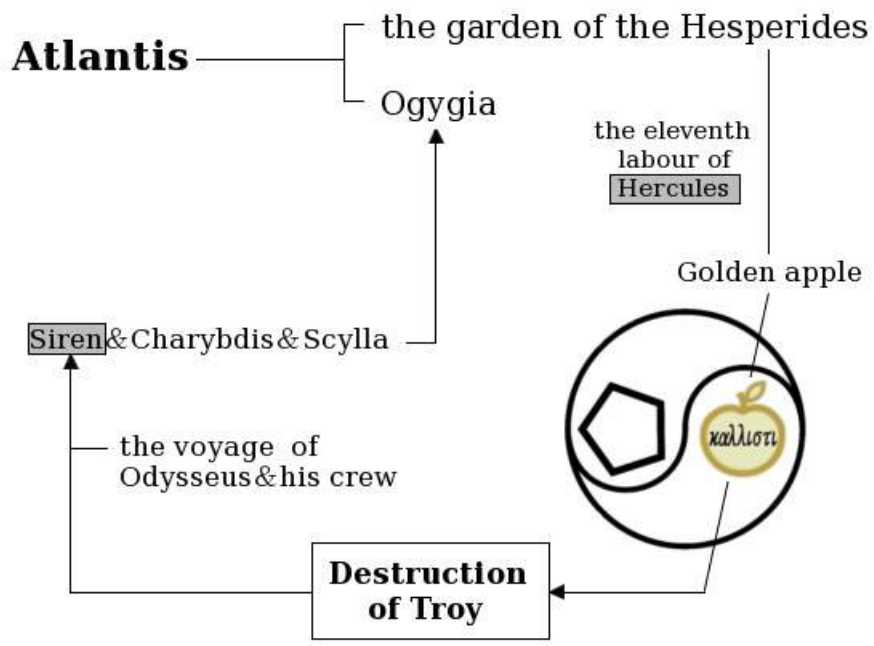
■カール・セーガン『コンタクト』 ↔ [[カー・ブラックホール][ワームホール]の生成が作中内の[ゲート装置]の機能として描かれているとの『コンタクト』作中設定] ↔ [カー・ブラックホールやワームホールを生成する可能性が(2000年前後の余剰次元に伴う理論的地殻変動によって)取り沙汰されだしたLHC実験] ↔ [[アトランティス]と関わる命名規則を採用している実験(ブラックホール生成イベントをそれで観測する可能性が取り沙汰されているATLAS実験グループが用いるイベント・ディスプレイ・ツールATLANTISの使用)、なおかつ、[トロイア]と関わる命名規則を採用している実験(トロイアに木製の馬で引導を渡したオデュッセウスがカリュプソの島、アイザック・ニュートンなどがアトランティスと見ていた神話上の存在に漂着することになった契機となった渦潮の怪物カリュプデイスの名を冠するブラックホール・イベント・ジェネレーターCHARYBDISの使用)としての 一巨人ATLASがその場を知るとされる黄金の林檎のこと「も」想起されるとの一 LHC実験] ↔ [黄金の林檎](回帰)

以上、ここまでの流れにて

[カール・セーガン『コンタクト』(1985)とカート・ヴォネガット『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』(1959)との接合関係]

の絡みで何が問題となるのか、[黄金の林檎]、そして、[アトランティス]([黄金の林檎「の園」]とも同一視されるサイレンの災厄に続く[木製の馬の考案者の漂着先]たるカリュプソの島との同一性が史的に論じられてきたとのこともある古の陸塊)および[トロイア](黄金の林檎に帰因する戦争にて滅んだと伝わる伝説上の古代都市)との絡みで何が問題となるのか多くを指摘してきたつもりである。

(枠内記述の関係性に関わるところの図解を続けての段でなすことにする)



Siren

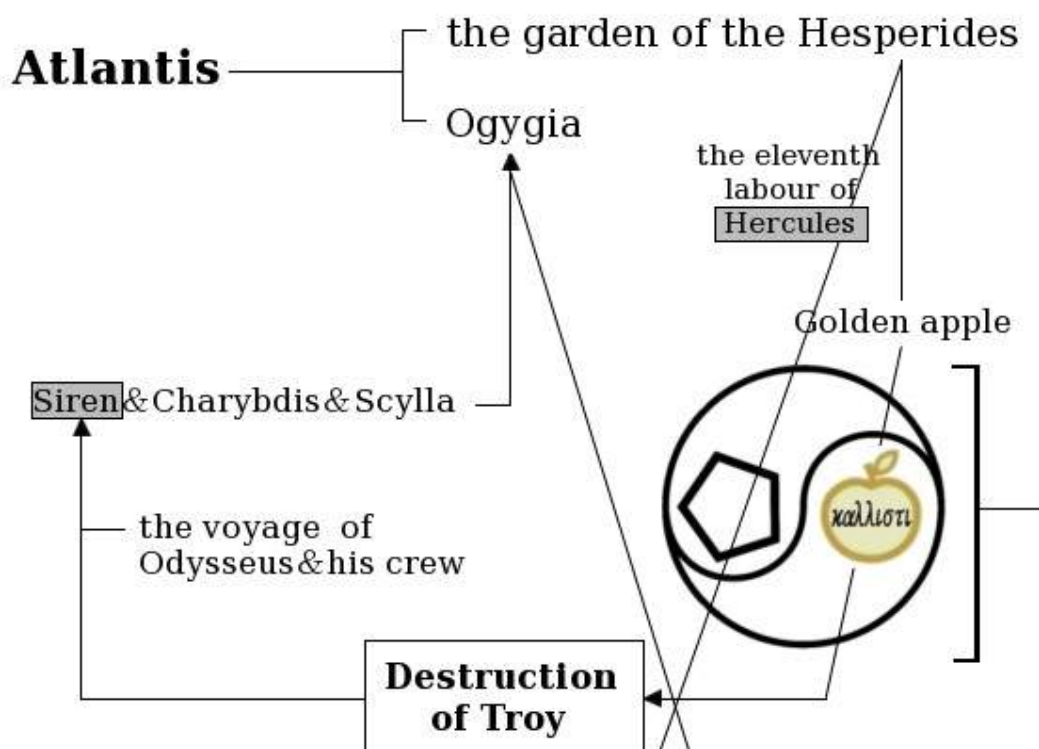


Scylla (& Charybdis)

Ogygia (Atlantis)

上にて呈示の図はトロイアを木製の馬の奸計で滅ぼした男オデュッセウスの難行がアトランティスに通じていることを描いた図となる(図にては[サイレン]をして古代人・中世人がどうとらえていたかを指し示す図を付したが、の出典は、先にも同一の図像らをそれら著作より挙げていたところとしての Project Gutenberg にて公開されている著作ら Myths of Greece and Rome および Curious Creatures in Zoology との著作となる(前者についてはサイレンの彫像の写真を抜粋、後者についてはヴェスビオ火山噴火による火砕流呑み込みにより市街がまるまる一個のタイムカプセルとなったポンペイ遺構出土品に見るサイレン画の再現図の抜粋となっている)。また、併せて、[スキュラ]というものがどういうイメージでもってとらえられている存在であるかを示す近代挿絵も付しておいたが、その出典は Project Gutenberg にて公開されている Tales of Troy and Greece (1907)との著作(にあっての 19 世紀活動の H.J.Ford という挿絵家の画)となる)。

また続けもして、本稿こここれに至れりの流れを視覚的に訴求すべくもの図解部を下に挙げておくこととする。



ATLANTISにはじまりATLANTISに終わる[トロイア崩壊伝承を間に介しての接合性問題]の一例として

カール・セーガン小説『コンタクト』が [[サイレン] と [ヘラクレス(座M13)] の近似箇所対応付け使用をなしている作品] としての特性をもってしてカート・ヴォネガット作品『サイレンズ・オブ・タイタン(邦題『タイタンの妖女』)』と近接していることの意味性を問題視しているのが本稿この段での話である。そのことに連なるところとして上図は[次のこと]らを訴求せんとするためのものである。

- ・[古のアトランティス]に関しては[ヘスぺリデスの園]及び[カリュブノのオーギュギア一島]に仮託されてきた(一部の人間によって史的に仮託されてきた)との特性が伴っている。
- ・[ヘスぺリデスの園]は[黄金の林檎の在処(ありか)]として、ヘラクレス11番目の功業、巨人アトラスとの折衝が描かれるその冒険に関わるところで伝承は登場を見ているものである。そして、[黄金の林檎]というのは[トロイアの破滅につながった戦争の元

・[ヘスペリデスの園]は[黄金の林檎の在処(ありか)]として、ヘラクレス11番目の功業、巨人アトラスとの折衝が描かれるその冒険に関わるところで伝承は登場を見ているものである。そして、[黄金の林檎]というのは[トロイアの破滅につながった戦争の元凶]として描かれるもの「でも」ある。

・トロイアの破滅に至る戦争で最終決着をもたらした計略は城門を内側から開くための兵員を内にまぎれこませた[木製の馬]を[神への捧げ物としてのモニュメント]と偽装してトロイア都市に運び込ませるとの計略となっているわけだが、その有名なトロイの木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスはトロイア戦争終結後、艱難辛苦の船旅を強いられることになる。その船旅を描いた叙事詩がアキレス死亡までのトロイア戦争一幕を描いた叙事詩『イリアス』と同様にホメロスの手になる作品であると伝わる叙事詩『オデュッセイア』となっているのだが、その『オデュッセイア』ではオデュッセウス船旅の道連れらが最終的に(オデュッセウスを除き)命を失うとの流れが描かれ、それは[サイレン及びカリュプティス及びスキュラ]の各怪物に際会した後の神罰による船の倒壊・カリュプティス(渦潮の怪物)による呑み込みを描いているとの下りとなる。といった難破でもオデュッセウスは生き残り、女神カリュプティスの島に漂着するわけであるが、その島がアトランティスと同一視されていること、先述の[オギューギア島]となっている。従って、[アトランティス]という存在がトロイア戦争の元凶にもトロイア戦争終端(トロイア戦争に決着をつけた男の行き先)にも純・記号論的に結びついていくとのことが想起させるようになっていく(尚、本稿の先行する段で仔細に解説しているようにアトランティスとトロイアのつながりはそうしたことに留まらない)。

・そのアトランティス、トロイア戦争を巡る時系列にての[そもその部][後日段にてのひとつの落ちのありよう]の双方に関わっているとも申し述べられる[アトランティス]とはブラックホールを生成するとされるに至ったLHC実験にて安全な(実験当事者および科学界主要関係者目くのごととして「安全な」)ブラックホールの生成イベントを観測するためのイベント・ディスプレイ・ツールの名称にその名が転用されているものとなる。

・以上の観点から見ると、たかだか、カール・セーガン『コンタクト』とカート・ヴォネガット『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』の関係性、[始まりと終わりのアトランティス]とでも表せようものを始点と終点に置いた上での関係図(矢印にて結節関係を描いての上掲関係図)にあつての[サイレン]と[ヘラクレス(座M13)]の都で結節しているとの両作の関係性として「できすぎている」ものと見立てられるものとなる。につき、セーガン『コンタクト』は[ATLANTISをイベント・ディスプレイ・ツールとしてのLHCのブラックホール観測挙動]よろしく[ブラックホール(近似物)の(結果的)生成]といったことがテーマに据えられている作品となる。他面、一九五九年というセーガンの小説『コンタクト』に先立つこと26年前に世に出ている『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』も複合的な意味でブラックホール生成との関係性を想起させる作品となっているとのことがある(本稿にての先の段で詳述してきたことである)。その意での多重的関係性から「できすぎている」と(取りあえずは)申し述べるのである。

・さらに問題となることがあり、それは関係性の輪に[黄金の林檎]が関わっていることである。同ゴールデン・アップルのことを作中主要要素として911の事件の予見描写をなしているこの作品があり、その奇怪性を本稿では訴求してきたとの背景がある(上掲図に付した[ディスコディアニズムのシンボル]もその関係性を巡る話と関わっているものである)。その機序の問題は奈辺にあるのか、そうしたことが具現化を見ていることが尋常一様ならざるものであることの問題性はどうなるのか、といったことは置き、とにかく、そういうことが暗示できるようになっていることを示すことに本稿では注力してきたわけである(聞く耳を有した者がいなければ、これほど愚劣で滑稽なことはなからうよと思われるようなところとしてである)。さて、そうしたことに加えて、この段で引き合いにだしている『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』からして、それを著した作家やりようから[911の事件の予見描写]といったものにつながる側面を帯びた側面を有した作品となっている(「なってしまう」。ここでの話にはアメリカその他複数国でサイレン(警報装置:語源を辿ればギリシャの妖異サイレンに行き着こうとの音響装置)を鳴らしながら駆けつけてくる緊急車両の呼び出し番号が911の事件の勃発前から911番であったこと、そして、アジアの極東たるここ日本でもサイレンを連呼してやってくる消防の呼び出し窓口番号が大正期より119番であるといった話もまた想起されるが、そうしたことは取りあえず置いておいて、の話である)。そのこと、ザ・サイレンズ・オブ・タイタンと911との関係性まで複合的な関係性の輪の中に入ってくるとのことにつき、「偶然である」「そんな話は聞きたくはない」と片付けるのは[相応の特性の人間](生き残るだけの努力を知性を動員してなす存在が人間をはじめとした(高等)生物であると考えるならば、人間「未満」生物「未満」の存在たる[ロボット]ともなろうか)だけであろうといった筋目の話がここでの話となる。

([a] から [f] と振っての一連の流れの中で [c] と振っての段はここまでとする)

さてもってして、これより「も」引き続き、小説作品『コンタクト』にまつわっての奇怪なる側面を解説・訴求していくとの流れを維持する所存なのであるが、ただしもって、あまりにも微に入っていることを申し述べもするとのことになるため、

[脇に逸れての話] ([a]から[f]と振っての一連の流れの中で[c]と振っての段を終えて[d]の段に入る前の脇に逸れての話)

との位置づけで[問題と定置されもするところ] (「目が見え、耳が聞こえるならばだが、」も問題と定置されもするところ)の解説をなしていくこととする。

以降、[c]と[d]と振っての段の合間の部にての「長くもなるも、」の問題提起をなすとして

こちら長くなるも、の問題提起の部には本頁 p.567 から p.621 を割くこととする (ただもってしてその合間にはいくつかの出典紹介部も内包させることとする)

唐突となるが、

「カール・セーガン小説『コンタクト』 (【加速器の機序に近いがそうだとは明示されていないものをブラックホール人為生成に通ずるところで登場させるとのやりよう】【加速器実験の聖杯とされるに至った超対称性理論のことが「後の理論動向変遷とそれを受け手の実験大義の変化に先駆けて」ブラックホール人為生成に通ずるところで名称使用されているとのありよう】といった意味「でも」異様な先覚性を帯びているとのこと、ここまで詳述をなしてきたとの作品) にあってはその後半部、異星圏高度先進文明から送られてきた設計図に基づき完成した「マシーン」がその使用によって「ゲート構築装置」であると判明したと描写され、直後、装置使用者らが送られたとされる先が「数多くの」ブラックホールないしワームホール利用型の同様のゲート装置らがひとところに集まる銀河にあってのターミナル的なる場である、いわば、「グランド・セントラル・ステーション」のような場であるとの描写がなされている」

との文献的事実が

[露骨な嗜虐的対話法]

とのからみで問題になるだけの側面が「ある」(につき、[キーワード]となるのは問題となる記述を含むセクションの章題でもあるグランド・セントラル・ステーションである)。

表記のこと、

「[数多くの]ブラックホールないしワームホール利用型の同様のゲート装置らがひとところに集まる銀河にあっての集散地がグランド・セントラル・ステーションと表されているところに対話法が問題になるところがある」

とのことについてこれより詳述なす。[第三者が容易に後追い確認できるとの典拠]に基づいてのみ話をなし、また、そちら典拠を逐次、懇切丁寧に指し示すとの本稿本義（何度も何度も本稿内にて申し述べているように、「証」して「示」す、[証示]にとにかくも努める、そうした式にて「確たる事実」が「自分達を死地に追い込むまさしくものそのやりよう」として眼前に突きつけられてなおもって何もやらぬ者達に「明日などあるわけがない」のことを訴求したい（そして、「[罪]の所在をつまびらやかにして[運命]の問題を確認しきりたい」）がゆえの本稿本義）に則りもしながら、である。

まずもって、

[カール・セーガンの小説『コンタクト』にあつてのブラックホールないしワームホール利用型の同様のゲート装置らの集う箇所が「グランド・セントラル・ステーション」と形容されている]

とのことが「文献的事実」であることを示すべくもの当該小説作品よりの引用を下になしておくこととする。

出典 (Source) 紹介の部 82 (2)

SOURCE

82(2)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 82 (2) にあつては、

[カール・セーガン小説『コンタクト』にあつてゲートの行き先が複数のブラックホールないしワームホールのゲート利用型装置らが行き交う「ターミナル」あるいは「グランド・セントラル・ステーション」のような場であると形容されている]

とのことの典拠を原文引用にて示しておくこととする。

(直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)208 ページから 209 ページ、[裸の特異点]の章よりの掻い摘まむに掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

トンネルは左右に大きく曲がりくねっていた。…(中略)…ふっと動揺がおさまった。見渡す限り、星または星だった。…(中略)…天空は光の氾濫だった。星間物質が大きく螺旋を描いているところもあった。形容を絶するばかりの巨大なブラックホールに宇宙塵が渦状に凝集しながら流れ込み、そこから夏の夜の熱雷にも似た放射が迸(ほとばし)っていた。…(中略)…十二面体から見下ろすその表面には、照明を浴びて数百、いや、数千の孔(あな)が口を開けていた。…(中略)…エリーはそれが宇宙船のドッキング・ポートであることを悟った。直径数メートルから数キロメートル、さらにはもっと大きなものまで、幾千もの形の違うドッキング・ポートが一カ所に集められているのであった。その一つ一つが、この十二面体と同じような星間宇宙船(マシーン)を受け入れるために建設されたものに相違なかった。体格の大きな人種の重厚なマシーンには大きなポート。地球人のように小柄な人種の華奢なマシーンには小さなポート。…(中略)…宇宙の雑多な人種が集まり散ずるこの場所は、まさに、グランド・セントラル・ステーションだ、と彼女は思った。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※ 尚、以上の原著 CONTACT にあつての Naked Singularity の章(訳書では章立て構成が原著とは異なるが、原著では Chapter19)での表記は、検索エンジンに表記の英文テキスト入力することで文献事実であることをオンライン上より特定できようところとして、“A few of the turns were quite steep now.[...] Abruptly they were on a straightaway, and then the sky was full of stars. [...] The sky was blazing with nearby suns. She could make out an immense spiraling cloud of dust, an accretion disc apparently flowing into a black hole of staggering proportions, out of which flashes of radiation were coming like heat lightning on a summer's night.[...] Now they were flying over it. On its surface were hundreds, perhaps thousands, of illuminated doorways, each a different shape. [...] She realized they were docking ports, thousands of different docking ports--some perhaps only meters in size, others clearly kilometers across, or larger. Every one of them, she decided, was the template of some interstellar machine like this one.[...], **but it implied a breathtaking diversity of beings and cultures. Talk about Grand Central Station! she thought.**”とのものとなる)

(続けて、直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版下巻(新潮社)216 ページから 219 ページ、[グランド・セントラル・ステーション]の章よりの掻い摘まむに掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

五人は潮溜りを囲んで腰を降ろした。穏やかな波の音を聞きながら、エリーは<アーガス計画>で宇宙の囁(ささや)きに耳を澄ませた過ごした数年のことを思い出した。

…(中略)…

「あらかた先方の仕事だね」ヴェイゲイは自分たちのこの体験についてエダと話し合ったことを他の三人に説明した。「こっちのプロジェクトがしたことと言えば、ただ、時空にあるかないかの小さな皺を寄せただけの話だよ。そこへ、向うはトンネルは繋げたんだ。多次元幾何学的空間を考えると、その時空の僅かな皺を見付けただけだって大仕事だよ。ましてや、そこへトンネルの口を開けるとなる

と、これは容易なことじゃない」「うん。つまりね。空間は位相幾何学的に複雑な形で連続しているわけなんだ。アポネバに言わせれば、これはあまり上手い譬(たと)えではないかもしれないけれども、片方に二次元の平面があると仮定しようか。これが先進文明の世界だよ。で、もう一つ、こっちに別の二次元平面がある。これは後進世界でね、二つの平面は迷路のような管で結ばれている。先進世界から限られた時間で後進世界へ行くには、その迷路を抜けるしかないんだ。ところで、先進世界の住人が先端に穴の開いた管を伸ばすとするね。その時、後進世界の方でそれに合わせて自分たちの平面にちょっと皺を寄せてやれば、そこへ管の先が届くであろう。これでトンネルが通じる」「つまり、先進世界はどうやって平面に皺を寄せるか、電波で情報を送って後進世界に指示を与えるわけね。でも、両方とも厳密に二次平面の世界だとしたら、皺を寄せるなんていうことができるかしら？」

…(中略)…

「問題は」エダが控え目に口を挟んだ。「そのトンネルがブラックホールだとすると、非常な矛盾が生じるということなんです。アインシュタインの場の方程式にR・P・カーが与えた解によれば、たしかにトンネルができて、これをカー・ブラックホールと言っていますが、このトンネルはとても不安定でしてね。ほんの少しの擾乱で、たちまちトンネルは塞がって特異点に変わってしまいますから。何物もそこを通り抜けることはできないんです。わたしは極めて技術的に水準の高い文明が、陥没星の内部構造を制御して、トンネルを安定に保っているのではないか、というふうに考えてみました。

…(中略)…

「おまけに」エダが引き取って続けた。「カー・ブラックホールでは、因果律がめちゃくちゃに破られてしまうんです。ほんの僅かに針路が狂っただけで、飛び出したところはまだ宇宙がはじまったばかりということになりかねないとも限りません。例えば、ビッグ・バンのピコセコンド後かもしれないんです。宇宙はまだ、まったくの無秩序ですよ」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、以上の原著 CONTACT にあつての Grand Central Station の章(訳書では章立て構成が原著とは異なるが、原著では Chapter20)での表記は、検索エンジンに表記の英文テキスト入力することで文献事実であることをオンライン上より特定できようところとして、“The five of them sat together by a little tide pool. The breaking of the surf generated a soft white noise that reminded her of Argus and her years of listening to cosmic static. [. . .] "We think they did almost all the work." Vaygay was explaining his and Eda's thinking on what the five of them had experienced. "All the project did was to make the faintest pucker in space-time, so they would have something to hook their tunnel onto. In all of that multidimensional geometry, it must be very difficult to detect a tiny pucker in space-time. Even harder to fit a nozzle onto it." "What are you saying? They changed the geometry of space?" "Yes. We're saying that space is topologically non-sim-ply connected. It's like —know Abonnema doesn't like this analogy— it's like a flat two-dimensional surface, the smart surface, connected by some maze of tubing with some other flat two-dimensional surface, the dumb surface. The only way you can get from the smart surface to the dumb surface in a reasonable time is through the tubes. Now imagine that the people on the smart surface lower a tube with a nozzle on it. They will make a tunnel between the two surfaces, provided the dumb ones cooperate by making a little pucker on

their surface, so the nozzle can attach itself. " **So the smart guys send a radio message and tell the dumb ones how to make a pucker. But if they're truly two-dimensional beings, how could they make a pucker on their surface?**" [. . .] "You see," Eda explained softly, "if the tunnels are black holes, there are real contradictions implied. There is an interior tunnel in the exact Kerr solution of the Einstein Field Equations, but it's unstable. The slightest perturbation would seal it off and convert the tunnel into a physical singularity through which nothing can pass. I have tried to imagine a superior civilization that would control the internal structure of a collapsing star to keep the interior tunnel stable. This is very difficult. The civilization would have to monitor and stabilize the tunnel forever. It would be especially difficult with something as large as the dodecahedron falling through." [. . .] "Ana finally," Eda continued, "a Kerr-type tunnel can lead to grotesque causality violations. With a modest change of trajectory inside the tunnel, one could emerge from the other end as early in the history of the universe as you might like--a picosecond after the Big Bang, for example. That would be a very disorderly universe. ”とのものとなる)

上にての一連の引用部に見るように、

[グランド・セントラル・ステーション]

との呼称で[ゲート装置](再述するが、小説『コンタクト』にあってのゲート装置はトラバーザブル・ワームホール、[通過可能なワームホール]にまつわっての科学考証の進歩・深化と表裏一体のものであるとのことが知られているものとなる)が行き着く先が形容されているとのことがある——再引用すれば、(邦訳版表記)“ その一つ一つが、この十二面体と同じような星間宇宙船(マシン)を受け入れるために建設されたものに相違なかった。体格の大きな人種の重厚なマシンには大きなポート。地球人のように小柄な人種の華奢なマシンには小さなポート。…(中略)…宇宙の雑多な人種が集まり散ずるこの場所は、まさに、グランド・セントラル・ステーションだ、と彼女は思った”(原著表記)“ She realized they were docking ports, thousands of different docking ports--some perhaps only meters in size, others clearly kilometers across, or larger. Every one of them, she decided, was the template of some interstellar machine like this one.[. . .] The diversity of ports suggested few social distinctions among the sundry civilizations, but it implied a breathtaking diversity of beings and cultures. Talk about Grand Central Station! she thought. ”との部がそうである——)

(出典(Source)紹介の部 82(2)はここまでとする)

次いで、問題視したきところとして、ではグランド・セントラル・ステーションとは何を由来とするところとして持ち出されている言葉なのか。

に関してはニューヨーク(カール・セーガンの故地でもある)にあっての「プラットホームの数で群を抜く世界最大級のターミナル駅」の呼称が

[グランド・セントラル・ターミナル]

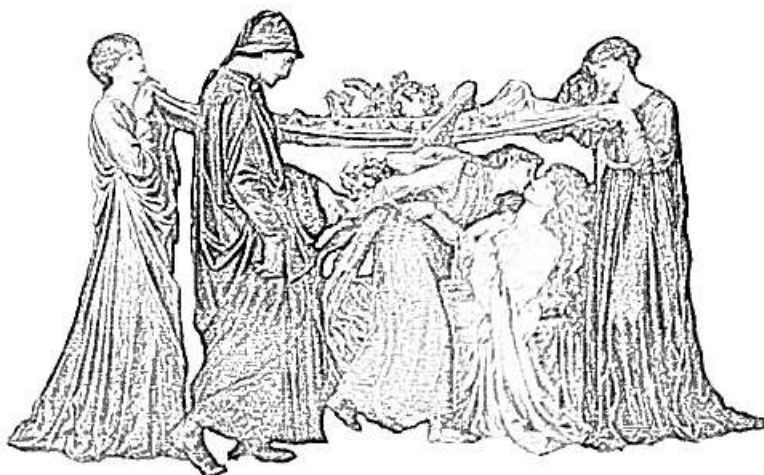
となっていることに起因すると伺い知れるようになっている。

直下、出典を参照されたい。

出典(Source)紹介の部 82(3)

SOURCE

82(3)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 82(3) には、

[グラウンド・セントラル・ターミナルないし[グラウンド・セントラル・ステーション]という鉄道駅がプラットホーム数で群を抜くものとしてニューヨークのマンハッタンに存在している]

このことの典拠を挙げておくこととする。

(直下、基本的なところとして英文 Wikipedia[Grand Central Terminal]項目にての現行記載内容よりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

Grand Central Terminal (GCT) is a commuter (and former intercity) railroad terminal at 42nd Street and Park Avenue in Midtown Manhattan in New York City, United States. **Built by and named for the New York Central Railroad in the heyday of American long-distance passenger rail travel, it is the largest such facility in the world by number of platforms.**

[...]

Although the terminal has been properly called “Grand Central Terminal” since 1913, it has “always been more colloquially and affectionately known as Grand Central Station”, the name of the previous rail station on the same site, and of the U.S. Post Office station next door, which is not part of the terminal.

(引用部に対する訳として)

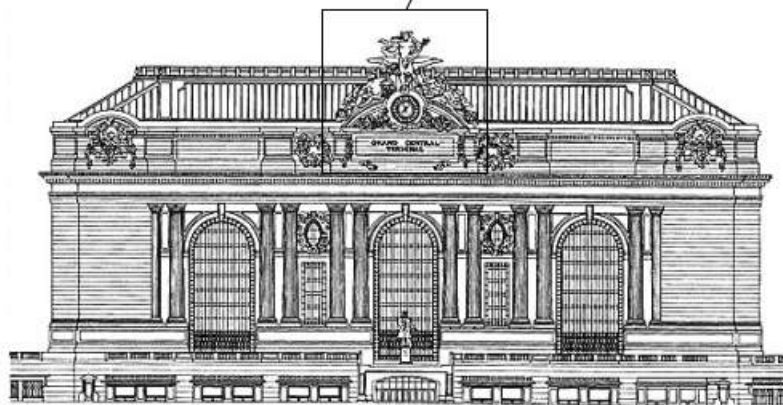
「グランド・セントラル・ターミナルは合衆国ニューヨーク市マンハッタンにてのミッドタウンにあつての 42 丁目とパーク・アヴェニューに存在する通勤者利用型 (そして従前は都市間を結ぶ) 鉄道駅となる。アメリカにての長距離電車旅行の絶頂期にあつてニューヨーク・セントラル鉄道社 (訳注:かつてアメリカの東海岸

一帯の路線を建設・運用していた鉄道会社で後に合併を経て消滅／ the Central などとの呼び名でも知られる) によって建設・命名された同駅はプラットホームの数にてはその種の鉄道施設として世界最大とのものである。

…(中略)…

同駅は1913年以降、正しくは「グランド・セントラル・ターミナル」との呼称をなされるものだが、同駅はまた常によりもって口語的に、かつ、愛着をもつての表現として「グランド・セントラル・ステーション」との名称——かつて同駅が置かれていた場所に存在していた駅の名にして駅の一部ではないものの隣に存在するとの合衆国郵便局の名となっているとの名称——で知られてきたものである」

(訳を付しての引用部はここまでとする)



**Grand Central Terminal
(Grand Central Station)**

上の図は英文 Wikipedia [Grand Central Terminal] にて公開されている [グランド・セントラル・ターミナル] こと [グランド・セントラル・ステーション] の入り口のひとつ (四二丁目側出入口) ありようを写し描いているとの写真および図葉 (双方ともに著作権放棄の表示を見ているとのもの) を挙げたものとなる。写真の方は 一前面に時代がかったのフォード T 型モデル自動車らが複数台横付けされていることより想像がつくとの向きもあろうかと見るが 一 20 世紀の初期の駅ありようを写した写真となる。他面、イラストレーションの方はグランド・セントラル・ステーションの正面ありようを描いた図となる。

小説『コンタクト』にての

(最前にての引用部表記より一文のみ再引用するとして)

“The diversity of ports suggested few social distinctions among the sundry civilizations, but it implied a breathtaking diversity of beings and cultures. Talk about Grand Central Station! she thought.” 「宇宙の雑多な種族が集まり散ずるこの場所は、まさに、グランド・セントラル・ステーションだ、と彼女は思った」

との記述に見る [グランド・セントラル・ステーション] の由来が

[世界最大級のターミナル駅と認知されているグランド・セントラル・ターミナル(グランド・セントラル・ステーション)というニューヨークの鉄道駅の名称]

にあると述べられるようになっている(現実世界でグランド・セントラル・ステーションといえばニューヨークのそちらの駅となっている)とのことの出典紹介を直上なしたとして、である。

次いで、現実世界のグランド・セントラル・ステーションにあつての目立つところに配されている象徴物というのが

[マーキュリー(ギリシャのヘルメス神が似姿・役割そのままにローマの神へと転用されたとの商業神)を目立つように配した特徴的な大時計]

となっているとのこと、そのことにつき、「以降の指し示しに関わってくることである」との観点でもって以下解説していく。

より具体的には、(現行、英文 Wikipedia[Grand Central Terminal]項目にても写真込みで記載されているところとして)、グランド・セントラル・ステーションの建物頭頂部にあつて

[ローマ商業神マーキュリーを極めて目立つように中央に配し、ミネルヴァ(ギリシャ神話のアテナ神のローマでの呼称)を正面から見た場合の右側に、ヘラクレスを左側に配しているとの Glory of Commerce との名称と結びついた巨大時計 —— Jules Coutan というフランス系著名彫刻家の手になる巨大時計——]

が建築物そのものを表象するアイコンとして存在していることの意味性を問題たることとして以下解説していくこととする(※)。

(※グランド・セントラル・ターミナル象徴物としてのマーキュリー像については Glory of Commerce、Jules Coutan、Mercury などと検索エンジンを入力すれば、分かり易い写真群がすぐに目に入ってこようことか、と思うが、同象徴物については英文 Wikipedia[Grand Central Terminal]項目にても現行、“Hercules, Minerva and Mercury, statuary by Jules-Felix Coutan, atop the terminal, with the MetLife Building behind.” 「メットライフ・ビルジングを背景にしての駅頭頂部にての Jules-Felix Coutan によるヘラクレス・ミネルヴァ・マーキュリーの像」と写真付されての解説がなされているところからもすぐに確認できるところとなっている ——その点、問題としている象徴物名称が Glory of Commerce [商いの栄光] となっているのはニューヨークが資本主義中枢としての役割を担っていることを「商業神」マーキュリーの作品への使用をなしつつも強くも押し出していることであろうと当然に考えられるところではある——)

追記：なお、こちらグランド・セントラル・ステーションを

「ブラックホール(ないしワームホール)ゲートの行き着く先」

として持ち出しているのはカール・セーガンがはじめてではない。

本書 p.207 から p.209 にて、

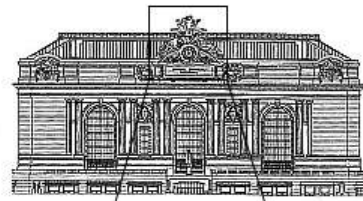
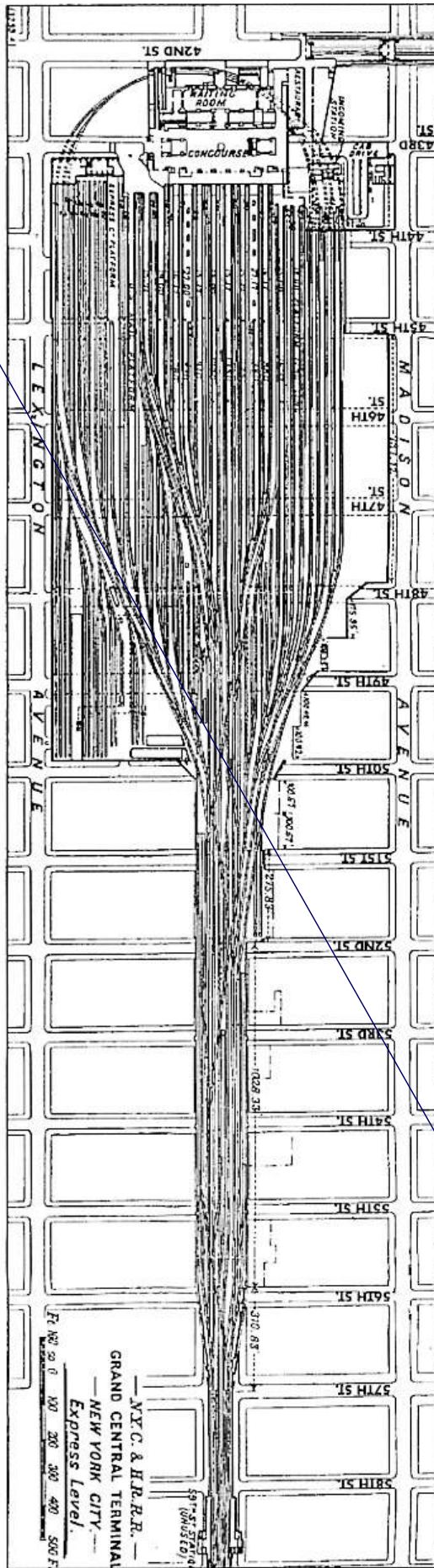
「当該作品にあってモリス(原始猿人に文明の啓発を与えたと描かれての石柱)にいざなわれてのスターゲート描写がブラックホールと結びつけられているとの旨が物理学者著作によって解説されている」

このことを紹介してのアーサー・クラーク 2001: A Space Odyssey 『2001年宇宙の旅』でも同様に、

「スターゲート(ブラックホール類似のものとして解説されてのスターゲート)の行き着く先」

がグランド・セントラル・ステーションと形容されていることがある。

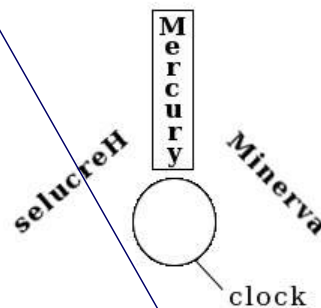
(:オンライン上よりも確認なせるとの小説『2001年宇宙の旅』原著よりの原文引用をなせば、VI - THROUGH THE STARGATE (6章スターゲートを越えて)の章にあっての "It was some kind of cosmic switching device, routing the traffic of the stars through unimaginable dimensions of space and time. →



Hercules

Minerva

Mercury



→ He was passing through a Grand Central Station of the galaxy." (土星の衛星ヤペタスで発見されたモリスに劇中登場人物デービッド・ボーマンが接触した際に開かれたスターゲートについて)「それは想像を絶する時間と空間と時間の次元より恒星間経路を調整するある種の交換機構であった。彼は銀河にあっての [グランド・セントラル・ステーション] を通過していたのだ」との記述を参照されたい)

そして、同じくものことは [カール・セーガン CONTACT (1985) とアーサー・クラーク 2001: A Space Odyssey (1968) の間の関係性] との絡みで重きをなすことでもある(このこと、続けての本書 p.604 よりの付記部にて解説する)。

[問題となることを訴求したき象徴物]の特性を示し、なおかつ、[グランド・セントラル・ステーション ——小説『コンタクト』にてブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲート構築装置が一斉に集まるところの名称としてその呼称が転用されていると

ころの現実世界でのターミナル駅——の結節ポイントとしての集積度合い]について強調すべくもの図像を挙げることにした。

上掲図左側は英文 Wikipedia にて Upper level (mainline) layout, showing a balloon loop と付されて掲載されているところのグランド・セントラル・ステーションのプラットホーム上階層概観図となる。同図でもってグランド・セントラル・ステーションにあつての路線結節集中度合いがいかようなものかはよくご理解いただけることか、と思う。

上掲図右側は[問題となるところ]として提示することとしたオブジェ、Glory of Commerce の概要を示すためのものである。

さて、グランド・セントラル・ステーションの象徴そのものとなっているオブジェ Glory of Commerce、その中枢にて最も目立つように屹立しているとの存在、[蛇が二重螺旋構造状に巻き付く杖](カドゥケウスないしケリュケイオンとしての固有名詞が知られているもの)および[羽根飾りが左右についた帽子]でその似姿がよく認知されているとのマーキュリー(ギリシャのヘルメスのローマ化神格)という存在については

[商業神] [盗人の神] [旅人の神] [魔術の神] [伝令使]

といったよく知られた特性以外に、

[魂の案内人] [百眼巨人を殺した存在]

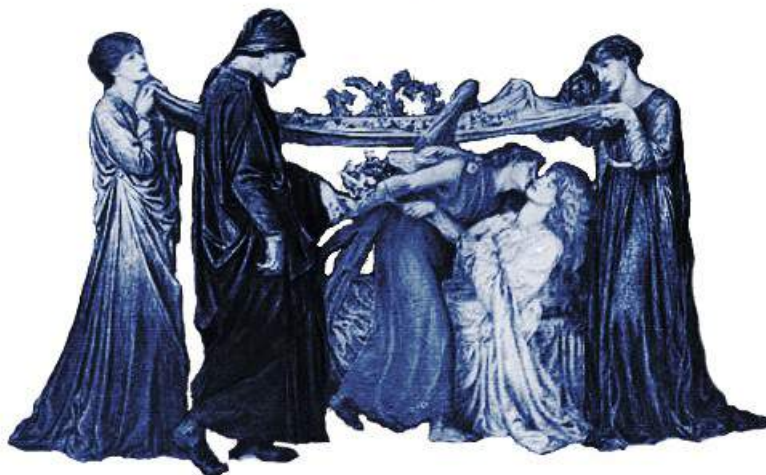
としての特性もが伴っていることは神話通にはよく知られている存在である。

ポイントは [百眼巨人を殺した存在] (としてのグランド・セントラル・駅の表象アイコンとなっているヘルメス・マーキュリーの特色) であると申し述べたうえでのこととして、以下、出典紹介部を参照されたい。

出典 (Source) 紹介の部 82 (4)

SOURCE

82(4)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 82(4) には、

[ヘルメスという存在(グランド・セントラル・ステーションにその象徴物が掲げられているローマ神マーキュリーと同一存在に比定されるギリシャ神話の神)がいかな存在か(なかならず、[百眼巨人を殺した存在]であると伝わっているとはどういったことか)]

このことにまつわる出典を挙げておく。

(直下、ギリシャ神話にあつてのメジャーな神に対する基本的なところとしてそこよりの引用をなせば十分であろうと判断、英文 Wikipedia[Hermes]項目よりの引用をなすとして)

Hermes (/ˈhɜrmiːz/; Greek: Ἑρμῆς) is an Olympian god in Greek religion and mythology, son of Zeus and the Pleiad Maia. He is second youngest of the Olympian gods. Hermes is a god of transitions and boundaries. He is quick and cunning, and moved freely between the worlds of the mortal and divine, as emissary and messenger of the gods, intercessor between mortals and the divine, and conductor of souls into the afterlife. He is protector and patron of travelers, herdsmen, thieves, orators and wit, literature and poets, athletics and sports, invention and trade. His attributes and symbols include the herma, the rooster and the tortoise, purse or pouch, winged sandals, winged cap, and his main symbol is the herald's staff, the Greek kerykeion or Latin caduceus which consisted of two snakes wrapped around a winged staff. In the Roman adaptation of the Greek pantheon (see interpretatio romana), Hermes is identified with the Roman god Mercury, who, though inherited from the Etruscans, developed many similar characteristics, such as being the patron of commerce.

[...]

[Epithets of Hermes]

[...]

Argeiphontes

Hermes's epithet Ἀργειφόντης Argeiphontes (Latin: Argicida), meaning "Argus-slayer", recalls his slaying of the hundred-eyed giant Argus Panoptes, who was watching over the heifer-nymph Io in the sanctuary of Queen Hera herself in Argos. Hermes placed a charm on Argus's eyes with the caduceus to cause the giant to sleep, after this he slew the giant. Argus' eyes were then put into the tail of the peacock, symbol of the goddess Hera.

(訳として)

「ヘルメスはギリシャにての宗教体系・神話にて登場するオリンポスの神の一柱であり、ゼウス神とプレアデス姉妹らのうちのマイアとの息子たる存在である。ヘルメスはオリンポスの神々の中で二番目に若いとの存在となる。同ヘルメスは往路移動と境界の神であり、素早くも奸知に長け、死せる運命の人間の世界と神々の世界の間を神々の密使・伝令として自由に行き交い、人間らと神々との仲介者、死後世界にての魂の案内人となっている存在でもある。同ヘルメスは旅人・羊飼い・盗人・演説者、そして、機知・文学・詩作の保護者にしてパトロンとなっているとの存在でもある。彼ヘルメスの特性・象徴を示すものとしてはヘルマ(ヘルメス石柱像)・雄鳥・亀・財布ないし小袋・羽の生えたサンダル・羽の生えた帽子、そして、主たるところの象徴はギリシャ語呼称でのケーリュケイオンといい、ラテン語呼称でカドゥケウスとなるとの[二匹の蛇が羽の生えた柄を包み込むように配されている権威の象徴としての杖]である。ヘルメスはローマ神マーキュリー、エルトリア人から特性受け継ぎ、商業の保護者であるといった同じくもの特性を発展・付与されてきたとの同神と同一存在とされる。…(中略)… [ヘルメス別名] …(中略)… アルゲイポントス:ヘルメスの通り名の一

つはアルゲイポンテース(ラテン語 Argicida)とのものでその意味するところは「アルゴス殺し」となり、それはヘルメス神がアルゴスにあっての女王ヘラ自身の聖域にあって雌牛と化していたイオの見張り番をしていた百眼巨人アルゴス(アルガス)を殺したとのことに因っている。ヘルメスはカドゥケウスの杖でもって百眼巨人アルゴスの目を幻惑して同巨人を眠りへと誘い、その後、同巨人を殺害した。アルガスの目はそれからクジャクの尾羽へと移植され、女神ヘラのシンボルになった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source) 紹介の部 82(4)**はここまでとする)

以上、ここまでにて

「カール・セーガン小説『コンタクト』では[グランド・セントラル・ステーション]の呼称を付された[(ブラックホールないしワームホールの穴で空間を貫通させるとの)マシンらが行き交う場所]に登場人物らが到達するとの筋立てがみとめられる(外宇宙文明とのコンタクトの帰結は[カー・ブラックホールないしワームホール利用マシンの行き交うグランド・セントラル・ステーション到達]であったとの粗筋がみとめられる、でもいい)」

「小説に見るグランド・セントラル・ステーションの由来はニューヨークはマンハッタンに存在するプラットホームの数では群を抜いているとの現実世界最大規模の鉄道駅グランド・セントラル・ターミナル(グランド・セントラル・ステーション)を指し示す固有名詞に由来すると自然に解されるようになっている」

「ニューヨークはマンハッタンの表記の鉄道駅グランド・セントラル・ターミナルの象徴とでも述べるべき巨大時計はマーキュリー(ヘルメス)と結びつくものとなっており、そちら蛇の杖で知られるマーキュリー(ヘルメス)は百眼巨人アルゴスを催眠術で眠らせ殺害した存在であると伝わっている神でもある」

とのことを順々に指し示していった。

ここからがカール・セーガンやりようの問題性に関わるところの話となるのだが、以上のようなことが摘示できるようにもなっている中、小説『コンタクト』にあってはその作中、

「百眼巨人アーガス(アルゴス)の名を冠する[アーガス計画]なる電波探査計画の結果、外宇宙からの電波受信をなし、その電波受信状況にて[マシン](それが完成・作動させられるまでどういった用途のものか遅れた人類文明には理解が及ばなかったとのマシン)の設計図が暗号として含まれていることに気付いた人類がマシンを構築、マシンが何たるかも理解出来ずにマシン搭乗員(たる人類の代表)をグランド・セントラル・ステーションに送り込む」

との設定を採用しているとのことがある。

とすれば、——余程注意深く物事を見、なおかつ、ニューヨークの地理的特性と細かい神話上のあれやこれやに通じているとの人間でなければ想像も及ばないことか、とは思うが(逆を述べれば、[一]小説『コンタクト』の内容を注意深く読み解いている[二]ギリシャ神話について詳しい[三]ニューヨークの地理的特性をある程度把握しているとの[一]から[三]との要件を具備していれば、気付くもすることとはなる(が、ただ、この世界では人類の過半、99%を優に越えてもなおもってあまりあり、小数点も何桁にも迫ろうとの比率の人間ら、満足に自律的思考作用を呈しているのかも疑わしいとの向きらはそう

したことに理解が及ぶだけの[注意力](視野角の広さに依存する能力)を何ら有して「いない」との節もあるにはある)—— カール・セーガンという男が世に出したベストセラー小説『コンタクト』については次のようなことが述べられるようになる。

[百眼巨人[アーガス]を殺したのが他ならぬマーキュリーであるとされているのが神話である。とすると、[殺される側の者の名を冠した計画](百眼巨人アーガスの名を冠するアーガス計画)を進めている人類が[殺す者の側にて表象される場所](百眼巨人アーガスを殺傷したことで知られるヘルメス・マーキュリーにて目立って表象されているグランド・セントラル・ステーション)の元へとのこのこと足を運ぶように仕向けられているとの一連の流れが当該小説では隠喩的に、だが、関連するところの知識さえ有していれば、露骨にと感じられる式にて描かれていると理解されることになる](：筆者が同族ながらも人間存在というものにほとんど失望しきったとの状況の一步手前にある理由は本稿にて摘示につとめているような一連の物事の部分的側面、の中の、ほんの一部にさえ満たないとのここで表記しているようなことだに指摘しようとの人間が「世界中で」誰一人として「いない」ことである(これより情報発信日付けなどを偽っての漢字二字の罵倒語が相応しいような相応の類による[説得力など欠片も無い、だからこそ、煙幕として撒布されている節ありといった紛い物]がそればかり目立ちやすいように登場を見出す可能性もあるか、とも思うが)。といったことがあることにつき、それが果たして世を憂えた「気になっている」とのパラノイド(体系妄想患者)の戯れ言で済むか、よくよくも本稿全体の内容を検証してもらいたいものでもある)

その点、以下、小説『コンタクト』(再三再四述べるが、それに伴う予見性を指摘してきたとの小説であり、その予見性がゆえに問題となるとの作品でもある) にあって[ゲート装置構築に結実した外宇宙由来の電波受信]につながったと描写される[外宇宙に向けての異星文明探査計画]が作中、[アーガス計画]という名に設定付けられているとのことについての典拠紹介を以下、なしておくこととする。

出典(Source)紹介の部 82(5)

SOURCE

82(5)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 82 (5) にあっては

[小説『コンタクト』にあっての外宇宙よりの電波受信に繋がった外宇宙電波受信計画がアーガス計画との名称を振られているものである]

このことの典拠を挙げておくこととする。

(まずもっては直下、英文 Wikipedia[Contact (novel)] 項目にての現行記載内容を抜粋するとして)

After graduating from Harvard, Ellie receives a doctorate from Caltech supervised by David Drumlin, a well known radio astronomer. **She eventually becomes the director of "Project Argus", a telescope array in New Mexico dedicated to the search for extraterrestrial intelligence (SETI).** This puts her at odds with most of the scientific community, including Drumlin who tries to have the funding to SETI reduced. **To his surprise, the project discovers a repeating series of 26 prime numbers coming from the Vega system 25 light years away.**

(訳として)

「ハーバードを卒業した後、エリー(小説『コンタクト』主人公)はデヴィッド・ドラムリン、(小説作中にての)著名な電波分析専門の天文学者に監督されることとしてカリフォルニア工科大学で博士号を取得した。彼女エリーは結果的に外宇宙生命体の探査をなすプロジェクト(SETIプロジェクト/SETIプロジェクト自体は実在している)に専心するとのニュー・メキシコにあってのアーガス計画、一群の望遠鏡(を用いての探査計画)の責任者となるに至った。そうした挙は彼女をしてエリーの師匠筋にあたるドラムリン、SETIプロジェクトの予算を削減するよう努めていたとの同男が含まれているところの[科学界主流筋に対するはみ出し者](扱いの立ち位置)に彼女を追いやることとなる。ドラムリンが驚嘆を呈したところとして、だが、同計画(アーガス計画)は25光年彼方のヴェガ星系からやってきたとの「26の一群の素数(と解されるところ)の繰り返し(を表象するところのシグナル)」を発見する運びとなった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上の内容に関わる小説内表記については本稿の先の段、[布石]となりもすることを示めさんとしてきたとの出典(Source)紹介の部 66 でも同じくもの点に関わることを原著および訳書の CONTACT より引用なししていたとの事前経緯があるのでその部よりの「再引用」とのかたちでの引用をなしておくこととする。

(直下、『コンタクト(上)』(新潮「文庫」版 ——池央耿/高見浩訳——、重版重ねての第六刷版)にあっての p.103-p.105 よりの掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

彼は管制室に入った。電波探査のプロセスをモニターしている十二のテレビ・スクリーンを、ひとわたり見まわす。<アーガス>はヘルクレス座を調べ終えたばかりのところだった。地球から数億年も離れている、銀河系のはるか彼方にある広大な銀河の群、ヘルクレス銀河団の中心部をのぞいたのである。二万六千光年彼方の、銀河系をめぐる軌道に沿って移動している、重力的にかたまった約三十万個の星の群れ、M-13 にも照準をしばってみた。

…(中略)…

望遠鏡の何台かは、依然ヘルクレス座にむけられている。聞きのがしたデータがあったら、拾い直すためだ。残りの望遠鏡はすべて、その隣の天空領域、ヘルクレス座の東の星座にむけられている。いまから数千年前、東地中海に住んでいた人々の目に、その星座は絃(げん)を張った楽器のように見えたらしく、ギリシャ人のカルチャー・ヒーロー、オルフェウスと結びつけられた。その星座は"こと座"と呼ばれている。

…(中略)…

声が急にうすれて制御台に目が吸いよせられた。突然、警告灯が眩く点滅しはじめたのだ。"強度 VS 周波数"と記されたディスプレイ上で、垂直の棒線が急上昇しつつあった。

「おい、見ろよ、単色信号だぜ」

"強度 VS 時間"と記された、別のディスプレイでは、ひとまとまりのパルスが左から右に流れてスクリーンから消えている。

「これは数字だな」ウィリーが、かすれた声で言った。

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※以上の原著 **CONTACT** にあつての Prime Numbers の章(原著での Chapter4)での表記は、検索エンジンに表記の英文テキスト入力することで文献事実であることをオンライン上より特定できようところとして、“The duty officer entered the control area. He made a quick survey of dozens of television screens monitoring the progress of the radio search. **They had just finished examining the constellation Hercules. They had peered into the heart of a great swarm of galaxies far beyond the Milky Way, the Hercules Cluster--a hundred million light-years away; they had tuned in on M-13, a swarm of 300,000 stars, give or take a few, gravitationally bound together, moving in orbit around the Milky Way Galaxy 26,000 light-years away; [. . .] A few of the telescopes, the duty officer could see, were devoted to picking up some missed data in Hercules. **The remainder were aiming, boresighted, at an adjacent patch of sky, the next constellation east of Hercules. To people in the eastern Mediterranean a few thousand years ago, it had resembled a stringed musical instrument and was associated with the Greek culture hero Orpheus. It was a constellation named Lyra, the Lyre. [. . .] His voice trailed off as an alarm light flashed decorously on the console in front of them. On a display marked "Intensity vs. Frequency" a sharp vertical spike was rising."Hey, look, it's a monochromatic signal." Another display, labeled "Intensity vs. Time," showed a set of pulses moving left to right and then off the screen. "Those are numbers," Willie said faintly. "Somebody's broadcasting numbers."****”とのものとなる)

(※2 またもってして記述するが、小説 Contact (1985) の Project Argus に名称由来をもつようにとれる計画として【SETI(地球外知的生命体探査)プロジェクト】というものの一環でアーガスの呼称を冠する望遠鏡群が探査活動に投入される予定のことが取り沙汰されているが(1990s、90年代よりそういうことが取り沙汰されているが)、Robert S. Dixon という名前のオハイオ州立大の科学者が関わっているそちら挙動と小説『コンタクト』登場時期(85年)について物事の先後関係を見誤らないように注意されたい)

(出典(Source)紹介の部 82(5)はここまでとする)



**Hermes
Psychopompos**

絵画、
Die Seelen des Acheron
に見るアケロン川（ギリシャ神話
にての冥府の川）の川辺で死せる
者達の魂を監督しているヘルメス
の似姿を抽出した。同ヘルメスのロ
ーマ版呼称が「マーキュリー」と
なり、（表面上の理屈では商いの神、
ハプスブルク家統治下のオーストリア
・ハンガリー二重帝国時代成立のこ
こにて呈示の絵画に見るような冥府の川
アケロンなどでの[魂の導き手]（サイ
コポンプス：Psychopompos）であ
るとの側面としてよりも[商業神]と
してのそのマーキュリーの性質が重
んじられているからであろうが）、同
[マーキュリー=ヘルメス]の彫像が
資本主義のひとつのメッカ、ニュー
ヨークのグランド・セントラル・ター
ミナル正面部の巨大時計と結びつけ
られていることの寓意性をここでは重
んじている。

**Hermes
Argeiphontes
(killer of Argus)**



**Hermes & Argus
(Mercury & Argos)**

マーキュリー=ヘルメスは
[百眼巨人アルガス（アーガス）を殺傷した者]
としてよく知られており、その意でのヘルメス称号が
[アルゲイポンテース]
となっている（尚、上にての図像はヘルメスがアルゲイポンテース [アルゴス
殺し] の称号を冠することになった百眼巨人アルゴス殺しの一幕を描いている遺物、
その模写をなしているといった按配のものでその出所はProject Gutenberg 経由で
公開されているとの著作、The Classic Myths in English Literature and in Art
based originally on Bulfinch's "Age of Fable" (にてのFIG.46と付された図）
である）

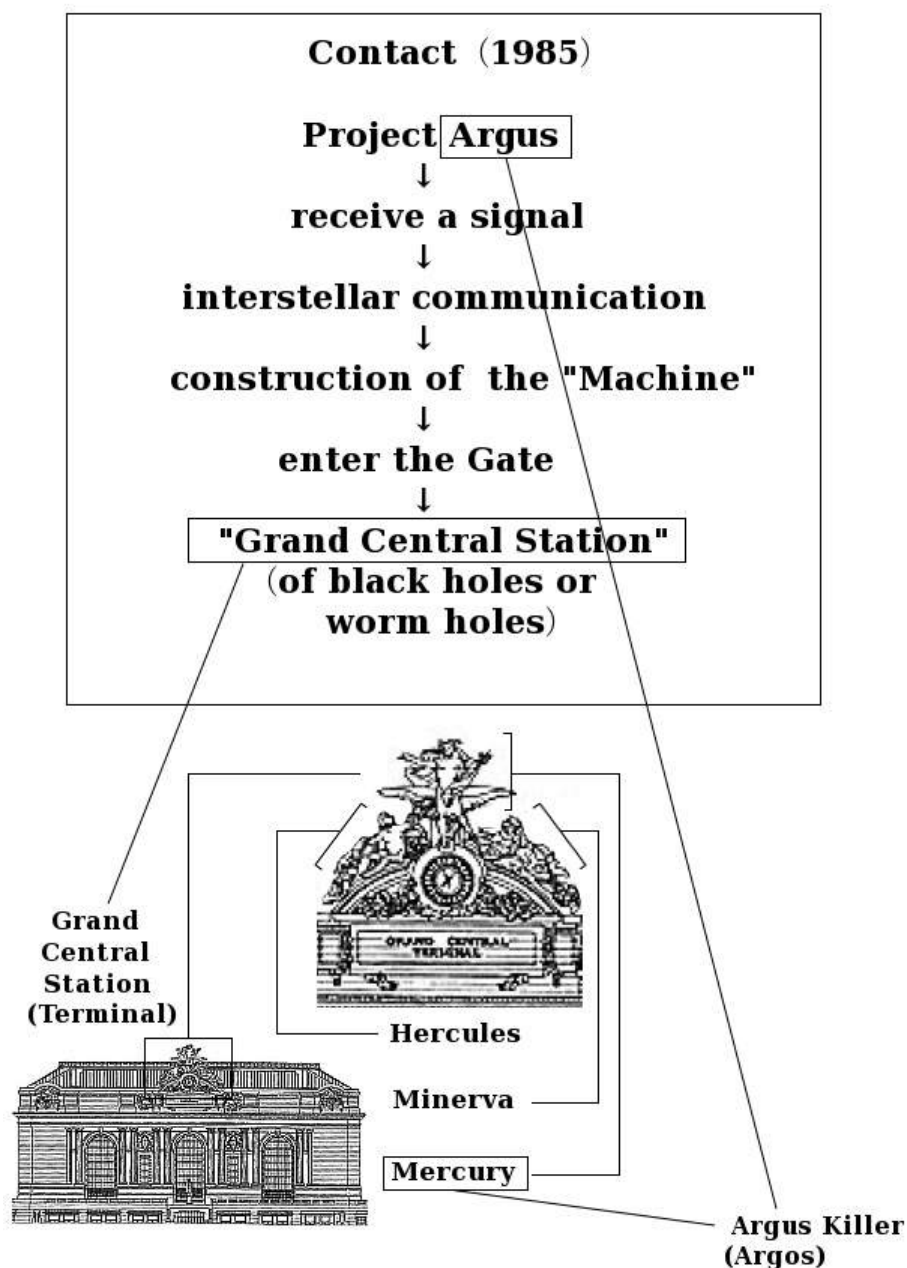
さて、個人主観など問題にならぬところの[文献的事実]の問題として

[[アーガス]を殺したのが他ならぬマーキュリーであるとされていることがあるのが神話である。とすると、[殺される者の名を冠する計画](アーガス計画)を進めている人類が[殺す者](グランド・セントラル・ステーションのマーキュリー)の元へこのこと足を運ぶための一連の流れが小説では隠喩的に描かれている]

とのことが述べられるようになっていくことにつき、

「問題なのは、」

そうした隠喩性が果たして[偶然の悪戯]で現出を見ているものなのか、仮にそれが[偶然の悪戯]ではない(と判断できるだけの事情がある)のならば、その具現化力学・意図は奈辺にあるのか、ということである(筆者がおかしなことを述べているのかどうかこのレベルからしてよく考えていただきたいものがある)。



ここで筆者がわざわざこのような微に入っている話をしていっている(世間一般から見れば、たかだかフィクションの細かい設定を延々云々するなど余程のその方面の好事家のやりよう、そうでなければ、愚人の拳と映ろうとのことを理解したうえでわざわざこの微に入っている話をしていっている)との理由に関わるものとして —もうすでにカール・セーガンとその「盟友」キップ・ソーンのやりようとの絡みで理由は十全

に訴求してきたつもりなのだが—— 次のことらについてさらなる訴求をなすべくもの話をなしていくこととする。

第一。[表記のような隠喩性が感じられる側面 — [人類の押し進める「アーガス」計画]の帰結が[神話にて百眼巨人「アーガス」を二匹の蛇が巻き付く杖にてメスマライズ(眩惑)なして殺したと伝わるマーキュリー(ヘルメス)と結びつくグランド・セントラル・ステーション(ブラックホール・ワームホールの類が用いられてのゲート装置の集散地たるグランド・セントラル・ステーション)への到達]となっているとのことにまつわる隠喩性が感じられる側面— が現出を見ていることについては「諸々の「他の」事情より偶然の悪戯では済まない」と述べられるようになっている(なっている)]

第二。[表記のような隠喩的側面が現出を見ていることについてはそれが[偶然の一致]でないと判じられる(上記第一の理由)一方で、だがしかし、『コンタクト』作者カール・セーガンの「個人レベルの」属人的やりようの問題]で済まされるものでもないであろうと述べられるよう「にも」なっている]

まずもって

第一。[表記のような隠喩性が感じられる側面 — [人類の押し進める「アーガス」計画]の帰結が[神話にて百眼巨人「アーガス」を二匹の蛇が巻き付く杖にてメスマライズ(眩惑)なして殺したと伝わるマーキュリー(ヘルメス)と結びつくグランド・セントラル・ステーション(ブラックホール・ワームホールの類が用いられてのゲート装置の集散地たるグランド・セントラル・ステーション)への到達]となっているとのことにまつわる隠喩性が感じられる側面— が現出を見ていることについては「諸々の「他の」事情より偶然の悪戯では済まない」と述べられるようになっている(なっている)]

とのこととの兼ね合いで何が指摘できるようになっているかについての話をなす。については、次の[1]から[3]のこと、それらが正しきところの申し分と客観的に示される際に「偶然」で物事が済まされるのか、よくよくも考えていただきたいものである。

(以下、これよりもってして委細となるところの典拠を指し示していくところとしての[1]から[3]として)

[1] 小説『コンタクト』(1985)にあっては
[ブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲートを開くものであると(使用によってはじめて)判明したマシーン]
の建設挙動が作中、
[トロイアを滅ぼした木製の馬の招き入れ]
に何度も仮託されている(先だつての段にあって原文引用にて示しているように『コンタクト』では正十二面体構造をとるマシーンが10回以上、[トロイアを滅した木製の馬]に仮託されている)。

そうした小説にあっての[マシーン]の建設につながったアーガス計画の名がそちらに由来する百眼巨人の名アルガス(アルゴス)だが、同じくもの名(アルガス・アルゴス)は

[百眼巨人を指すとの名詞]

以外のものとして古典に「まったく同じくものギリシャ語の綴りで」よくも登場を見ており、それは

[トロイアを滅ぼしたギリシャ勢の総称にして別称(アルゴス勢)]

[トロイアに引導を渡した木製の馬の計略を考案した男オデュッセウスの忠犬の名前]であったりする。

[トロイア]と[アルゴス](アーガス)との名称は古典で「極めて」親和性強くも結びつくようになっているのである。

そして、(繰り返すが)小説『コンタクト』では[トロイアを滅した木製の馬]に何度も仮託されているとの

[向こう側よりの指示でこちらより構築せねば、ゲート構築ができないとの時空の歪みを発生させる装置]

が登場を見ているとすることがある (直近の**出典(Source)紹介の部 82(2)**にて引用のように(以下、再度の抜粋なすとして) “うん。つまりね。空間は位相幾何学的に複雑な形で連続しているわけなんだ。アボネバに言わせれば、これはあまり上手い譬(たと)えではないかもしれないけれども、片方に二次元の平面があると仮定しようか。これが先進文明の世界だよ。で、もう一つ、こっちに別の二次元平面がある。これは後進世界でね、二つの平面は迷路のような管で結ばれている。先進世界から限られた時間で後進世界へ行くには、その迷路を抜けるしかないんだ。ところで、先進世界の住人が先端に穴の開いた管を伸ばすとするね。その時、後進世界の方でそれに合わせて自分たちの平面にちょっと皺を寄せてやれば、そこへ管の先が届くであろう。これでトンネルが通じる” 「つまり、先進世界はどうやって平面に皺を寄せるか、電波で情報を送って後進世界に指示を与えるわけね。でも、両方とも厳密に二次平面の世界だとしたら、皺を寄せるなんていうことができるかしら?” (右に対応する原著表記) “ "Yes. We're saying that space is topologically non-simply connected. It's like —know Abonnema doesn't like this analogy— it's like a flat two-dimensional surface, the smart surface, connected by some maze of tubing with some other flat two-dimensional surface, the dumb surface. The only way you can get from the smart surface to the dumb surface in a reasonable time is through the tubes. **Now imagine that the people on the smart surface lower a tube with a nozzle on it. They will make a tunnel between the two surfaces, provided the dumb ones cooperate by making a little pucker on their surface, so the nozzle can attach itself.**" "So the smart guys send a radio message and tell the dumb ones how to make a pucker. But if they're truly two-dimensional beings, how could they make a pucker on their surface?" ” (邦訳書および原著よりの引用部はここまでとする) との表記がなされている)。

[2] (上の[1]にて言及のように)トロイア崩壊力学とトロイア攻囲サイドのギリシャ勢総称(アルゴス勢)を通じても結びつく百眼巨人 Argus Panoptes アルガス(アルゴス)の名を冠してのゲート設計図受信につながった計画が描かれての小説『コンタクト』をものしたカール・セーガンという男、そのセーガン本人がトロイアを木製の馬で滅ぼしたオデュッセウスと結びつく(結びつけられている)人間となっている。カール・セーガンについてはオデュッセウス Ulysses の故郷たるイサカ(Ithaca) —— オデュッセウスがそこに帰り着くまで苦難の旅をなしていたとの故郷—— に依拠してその地名が付されたニューヨークの一地域[イサカ]と非常に深くも縁があるとの人物となっている。より具体的にはカール・セーガンはニューヨークのイサカ(オデュッセウスがそこを目指して旅したとされるその領地イタカ・イサカから命名されているとのことが地名由来としてあるとのニューヨーク一地域)に埋葬されることになっており、また、カール・セーガン事績を讃えるべくもの記念碑的一区画がニューヨークのそちらイサカに設けられているとのことがある。

[3] カール・セーガンが生前、関わったところの電波受信活動とワンセットになった外宇宙知性生命体探査計画たる SETI プロジェクト、その一貫としてサイクロプス計画というものが(フィクションならぬ)現実世界で計画されていたとのことがある。同計画は

結局は頓挫したとの70年代計画だが、そのサイクロプス(キュクロプス)計画、後続する小説『コンタクト』(1985)に見る架空のアーガス計画が「百目巨人の目による探査計画」となるものであるのに対して「一つ目巨人の目による探査計画」と言い換えられるようなものである。さて、アルゴスがあまねくも百の目でものを見る巨人であるのに対して、一点集中、一つ目でものを見るというサイクロプスという巨人(フィクションに見るアーガス計画に影響を与えたようであるサイクロプス計画名称由来となっている巨人)がどういった存在かと述べれば、[トロイアを木製の馬で滅ぼした男、オデュッセウスの冒険譚たる『オデュッセイア』に登場の「オデュッセウスに一つ目を潰された一つ目巨人」となっている。他面、アーガスとは(ここに至るまでの出典紹介部にて示したように)[ヘルメスに目を瞑(つむ)らされて殺された百目巨人]となっているとある。[(一つ目であれ百眼であれ)自慢の目を台無しにされた巨人関連の外宇宙電波探査計画][トロイア関連](サイクロプスとトロイアの破壊者オデュッセウスの接合/[1]で触れたところのアルゴスとの名称とトロイア破壊者アルゴス勢の接合)とのことで無論、話がつながる。のみならず、(余程の神話通でなければ考えも及ばないことかとは思うが)、オデュッセウス(サイクロプスの目を潰した木製の馬の計略の考案者)に関しては——カール・セーガン『コンタクト』のマシーン到達地点[グランド・セントラル・ステーション](の現実世界での比定地)と結びついているとのことにつき先述の[マーキュリー]と同一存在であるとされる——[ヘルメス](アーガスの目を瞑(つむ)らせた神)の血族であるとのこと語り継がれてきた男であるとのこと「も」またある。

表記のこた [1] から [3] の(解説未了であるところの)典拠を下に挙げる。

出典(Source)紹介の部 82(6)

SOURCE

82(6)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ**出典(Source)紹介の部8**にあつては長くもなるが、直上の段にて[1]から[3]と頭に振って呈示もしたことから(にあつての解説未了部)の典拠を順次挙げていくこととする。

まずもつては

[1]小説『コンタクト』(1985)にあつては
[ブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲートを開くものであると(使用によってはじめて)判明したマシーン]
の建設挙動が作中、
[トロイアを滅ぼした木製の馬]
に何度も仮託されている(先だつての段で原文引用にて示したように『コンタクト』では正十二面体構造をとるマシーンが10回以上、[トロイアを滅した木製の馬]に仮託されている)。
そうした小説にあつての[マシーン]の建設につながったアーガス計画の名がそちらに由来する百眼巨人の名アルガス(アルゴス)だが、同じくもの名(アルガス・アルゴス)は
[百眼巨人を指すとの名詞]
以外のものとして古典に「まったく同じくものギリシャ語の綴りで」よくも登場を見ており、それは
[トロイアを滅ぼしたギリシャ勢の総称にして別称(アルゴス勢)]
[トロイアに引導を渡した木製の馬の計略を考案した男オデュッセウスの忠犬の名前]
であつたりする。
[トロイア]と[アルゴス](アーガス)との名称は古典で「極めて」親和性強くも結びつくようになっているのである。
そして、(繰り返すが)小説『コンタクト』では**[トロイアを滅した木製の馬]**に何度も仮託されているとの
[向こう側よりの指示でこちらより構築せねば、ゲート構築ができないとの時空の歪みを発生させる装置]
が登場を見ているとのことがある

とのことにまつわる典拠を挙げることとする。

具体的には百眼巨人の名(Argos ないし Argus)が

[トロイアを滅ぼしたギリシャ勢の総称にして別称]

[トロイアに引導を渡した木製の馬の計略を考案した男オデュッセウスの忠犬の名前]

ともなっていることの典拠を挙げることとする。

最初に

[トロイアを滅ぼしたギリシャ勢の別称]

が百眼巨人アルガス(ギリシャ語綴り:Ἄργος)と同じくもの Argos(ギリシャ語綴り:Ἄργος)となつてのことについてからであるが、トロイア包囲に携わつたギリシャ軍の総大将がアガメムノンという男となつており、そのアガメムノンがギリシャの都市国家アルゴス ー百眼巨人アルゴスが牛に変じたゼウスの愛人を見張っていた場と親和性高い地ーの王となつていたことから指摘する必要があるかと思う(：より本質的なところとしてはトロイア戦争にて[Achaean アカイア勢]とも呼ばれていたギリシャ勢の多くが[Argolis]と呼ばれる古代の特定領域(都市国家アルゴスを包摂する領域)にての産であつたために[アルゴス勢](英語表記では[Argives]とも)と呼ばれていたことがあるとされるのだが、アガメムノンがアルゴス王となつていたことに的を絞つてまずもつての摘示をなしておくこととする)。

アガメムノン、トロイア攻めをなしたギリシャ軍の総大将が【アルゴスの王】となっていることについては Project Gutenberg にあつて全文ダウンロードできるとの、

Carleton's Condensed Classical Dictionary (1882)

にあつての[Agamemnon]項目にあつて

“ king of Mycena and Argos, was brother to Menelaus, and son of Plisthenes, the son of Atreus. He married Clytemnestra, and Menelaus Helen, both daughters of Tyndarus, king of Sparta. When Helen eloped with Paris, Agamemnon was elected commander-in-chief of the Grecian forces invading Troy.” (アガメムノンは)ミケーネ・アルゴスの王であり、メラネラーオスの兄にして、プリステネスの子ないしアトレウスの子である。彼アガメムノンはクリュタイムネストラと婚儀を交わし、そして、アガメムノン弟のメラネーオスは同文にスパルタ王ティンダレーオスの娘であるヘレンと婚儀を交わした。ヘレンが(トロイアの皇子たる)パリスと駆け落ちしたとき、アガメムノンはトロイア侵略をなすギリシャ軍の総大将に選出された」(引用部訳はここまでとする)

と記載されているとおりである(：別段、蒼古とした 19 世紀の古典知識揺籃書籍からの引用をなす必要もなかったのだが、「いくらその伝では誤謬がないと確認している」と強調しても、ウィキペディア程度のような媒体から頻繁に引用していると相応の権威主義的な者達 —「大学教育の現場ではウィキペディアを引用する学生は望ましくはないとみなされる」といった部分的に至当なることを「赤信号で道を渡るのはよろしくはない」などと車が全く通っていない閑散としたところにて、しかも、範を示すべくもの年端もいかぬ子供の目もないところで往来で転倒する可能性などない頑健な者に対してほざくような式でやたらと強調したがるような向き— に軽侮を買うこともあろうかと見、敢えてここでは(ウィキペディアのような誤記を多く含み、また、内容も易変するとの媒体ではなく)内容不変なる誰でも確認可能な古書に見る記述からの抜粋をなすこととした)。

その点、都市国家アルゴスにまつわるものとして和文ウィキペディア[アルゴス (ギリシャ)]項目にてはかなりもつての講学的かつ専門的な解説として下のような記述が現行にあつてはなされてい(のでそちら「も」引いておくこととする)。

(直下、和文ウィキペディア[アルゴス (ギリシャ)]項目よりの引用をなすとして)

アルゴスからミケーネに向かって 45 スタディア(約 8.3km)のところに、新石器時代の居住区があり、その近くにアルゴリア地方の中央聖域がある。この聖域は ヘーラー (Argivian Hera) を祀ったもので、この神殿(寺院)の主な祭は ヘクトンベー (100 匹の牛を生贄に捧げること) だった。ヴァルター・ブルケルトはその著書 Homo Necans の中でこの祭をヘルメースによる百眼の巨人アルゴス暗殺の神話と結びつけているが、かつては、ヘルメースの異名「アルゲイポンテース (Argeiphontes)」(早い時期から「アルゴスを殺した者」として理解されていた)という言葉は、実際には、インド・ヨーロッパ祖語の arg-(*arǵ-、転じて argyros は銀の意味)を語源とする形容詞の argos (ちらちら光る、動きの速い)で、「明るく輝く」またはそれに類似する意味を持ち、地名や百眼の巨人アルゴスとの関係は二次的なものに過ぎないという推論があった。

(引用部はここまでとする —※—)

※上引用部に見るドイツのギリシャ学者 Walter Burkert ヴァルター・ブルケルトの Homo Necans (邦題『ホモ・ネカーンス 古代ギリシャの犠牲儀礼と神話』(法政大学出版局)) — Homo Necans とは[殺す者]を意味するラテン語である— については

[アルゴス号にて黒海を旅した英雄らの物語] (ギリシャ神話にあつての諸種英雄譚の英雄が一同に集まり活躍するとのギリシャ伝承にあつてのクロスオーバー的作品である『アルゴナウティカ』)

との関係性との絡みでかねてより思うところがあつたこともあり表記のようなウィキペディア記述を参照したことで知的好奇心がいざなうまにまに読了をなしているとのことがあるのだが、同著にては確かに

「アルゴスからミケーネに向かつて 45 スタディア (約 8.3km) のところに、新石器時代の居住区があり、その近くにアルゴリア地方の中央聖域がある。この聖域はヘーラー (Argivian Hera) を祀つたもので、この神殿 (寺院) の主な祭はヘカトンペー (100 匹の牛を生贄に捧げること) だつた。ヴァルター・ブルケルトはその著書 Homo Necans の中でこの祭をヘルメースによる百眼の巨人アルゴス暗殺の神話と結びつけている」

との趣旨の記載がなされている。そちら[アルゴス(トロイア戦争時のギリシャ軍総称とも結びついている地)]と[百眼巨人アーガス(アルゴス)]のつながりにまつわるところの引用をも下になしておく。

(直下、訳書『ホモ・ネカーンス 古代ギリシャの犠牲儀礼と神話』(法政大学出版局刊行)[第三章 解体と新年祭](2 アルゴースと"アルゴスを殺す者"(アルゲイフォンテース))の下り、p.163 から p.166 にての内容を「掻い摘まんで」引用なすところとして)

「アルゴスの町はギリシア史では、近隣のスパルタに圧倒されて副次的な役割しか果たせなくなつてしまつた。また文化的にもアテーナイの影に隠れてしまつている。したがつて、幾何学的様式からアルカイック期に至るまでのアルゴスの力強い展開は、歴史時代に入つてからの停滞と恒常化した危機的状況と対照的である。ホメーロス叙事詩ではギリシア人は単純に"アルゴス人"または"ダナオス人"と呼ばれ、ギリシャ神話は特別の密度でアルゴス地方(アルゴリス)に集中している。この地方にはミュケーネ時代の王城が肩を並べて屹立してゐた…(中略)…アルゴスの町から四十五スタディオンの…(中略)…この聖域での主祭礼は同時にまたアルゴス市の大祭にも当たるわけだが、"ヘカトンパイア祭"とも、"ヘーライア祭"とも呼ばれている。…(中略)…ヘーライア祭が新年祭だとすれば、"解体"の祭り、おそらくは牡牛の供儀がそれに先行しなければならなかつたはずである。パウサニアスはヘーラー女神の聖域に至る途上にあつた、"エレウテリオンの水辺"について記している。女祭司たちはその水を「浄化のための供儀、そして供儀の中でもとりわけて秘められた犠牲奉獻のために用いた」。つまり、"名状しがたい"犠牲はたしかに存在し、そのためにこの決められた泉から水が汲まれたのである。…(中略)…アルゴスの神話もまた犯罪を知つてゐたが、こちらは神々の間で起こつた最初の殺人事件である。それはヘルメース神によるアルゴスの殺害だつた。アルゴスはゼウス神の恋するイーオーが変身させられてしまつたのでヘーラー女神の聖域でその牛の番をしてゐた。つまり画期となつたこの暴力行為はヘーライオンの欠かせない一契機であつたといふことになる」

(訳書よりの掻い摘まんでの引用部はここまでとする)

(:多少補いつつも要約して上の引用部の趣旨を示せばこういうことである。

⇒

「ホメロスが全ギリシャ人にその名を冠せしめたとの都市アルゴスの領域にあっては女神ヘーラーを祭る祭り(ヘーライオン)が執り行われていた。その祭りヘーライオンには古代の文人パウサニアースの手になる古典それそのものの記載から「100匹の」牛の生贄供儀が影響していると考えられるが、ギリシャ伝承にあっては妻ある身でありながらゼウスの恋慕した女人イーオーをゼウスの妻たる女神ヘーラーが牛に変身させたとの有名なエピソードが存在しており、そのイーオーが変じての牛を番をする存在としての百眼巨人アルゴスが登場を見ている。その百眼巨人アルゴスをヘルメスが殺害しているとのことがあるわけだが、といった神による原初的殺害行為に関する言い伝えの伝がアルゴスの地での100匹の牛の奉獻とも関わる直上にて言及のヘーライオン(ヘーラーの祭り)の一契機となっていると考えられる」

以上のようなことをドイツ——現在でもその一部ギムナジウムでギリシャ古典の学習が強いられているようなお国柄、(それが虚偽の歴史の上に構築された偽物であろうとなかろうと)欧州のルーツを重んじているとの国家ドイツ——のギリシャ専門家ヴァルター・ブルケルトは述べているのである)

さらにもってして

[トロイア包囲サイドを(百眼巨人アルゴス・アーガスと同一の語句となる)アルゴスを冠してのアルゴス勢と呼び慣わすとの慣行がある]

とのことについての他の典拠を挙げておくこととする。

その点、[トロイアに対する攻撃サイド]がアルゴスとの名称と結びつくことについては英文 Wikipedia[Achaeans (Homer)]項目([アカイア勢(ホメロス)]項目)にての現行記述では「ホメロス叙事詩『イリアス』にあっては攻め手ギリシャ勢を指す呼称としての Achaeans[アカイア勢]との言葉が 598 回、Argives[アルゴス勢]——それにつき Argives が inhabitant of the city of Argos[アルゴスの住人][古代ギリシャ人]といった意味合いの言葉であると[辞書などにて記載されている]ことはオンライン上より労せずを確認いただけることか、と思う——との言葉が 182 回用いられている」との趣旨の表記がなされている(:同項目,英文 Wikipedia[Achaeans (Homer)]項目より引用なせば “The Achaeans (/əˈkiːənz/; Ancient Greek: Ἀχαιοί Akhaioi) constitute one of the collective names for the Greeks in Homer's Iliad (used 598 times) and Odyssey. The other common names are Danaans (/ˈdæneɪ.ənz/; Δαναοί Danaoi used 138 times in the Iliad) and **Argives (/ˈɑrɡaɪvz/; Ἀργεῖοι Argeioi used 182 times in the Iliad)** while Panhellenes (Πανέλληνες Panhellenes) and Hellenes (/heˈliːnz/; Ἕλληνες Hellenes) both appear only once;” との部がそちら該当部となる)。

手前自身が直に数えて確認したわけではないために表記の部の正確さについては保証しかねるが、そういう数的按配でホメロスの叙事詩『イリアス』ではトロイアに対する攻め手側のギリシャ勢がアルゴス勢との言葉——アルジャイブスこと Argives (あるいは Aregeioi)、すなわち、inhabitant of the city of Argos[アルゴスの住人との語句]——と頻繁に結びつけられていると指摘されている、とにかくも、指摘されているわけである。

またもって述べておくも、ホメロス叙事詩『イリアス』にあってギリシャ勢を[アルゴス勢]と表記する箇所が頻出を見ていることについては国内で幅広くも流通を見ている『イリアス』の訳本でも容易に確認できるところである。

一例として、岩波文庫版の上下巻に分かたれての故・松平千秋京大教授の手になる訳本『イリアス

(上)』より原文引用なせば、およそ次のような格好となっている。

(以下、岩波文庫版『イリアス(上)』(松平千秋京大教授訳の版)にての Iliad 第二歌を収めた p.58 よりの原文引用をなすとして)

アイギス持つゼウスのなされた約束が偽りかどうかを確かめる前に、アルゴスへ引き上げようなどと、アカイア軍の方針に背いて企む奴らは——その数はたかだか一人か二人、またそのような目論見が実現するはずもないが——そういう奴ばらは勝手にあの世へ行かせるがよい。ここではつきりいっておくが、アルゴス勢がトロイエ人に死と殺戮を運びつつ、海渡る快速の軍船に乗り込んだかの日、権勢類いなきクロノスの御子は、右手の方に稲妻を走らせて幸先(さいさき)よき前兆を指し示し給い、われらの企ての成就を確かに約束して下さったのだ(以下略)

(引用部はここまでとする —非本質的なことであるが、引用部はギリシャ勢を激励鼓舞すべくもギリシャ方の老将ネストルが「我らにはクロノスの御子(ゼウスのこと)の加護が及んでいる」と一席ぶっている場の描写である—)

次いで、トロイアを滅ぼした木製の馬の計略を考案したオデュッセウスの犬が[アルゴス]と呼ばれているとのことについての出典紹介をなす。

(直下、それで十分かと判断の下、英文 Wikipedia[Argos (dog)]項目にての現行記載内容よりの引用をなすとして)

In Homer's Odyssey, Argos (/ˈɑːrɡɒs, -ɡəs/; Greek: Ἄργος) is Odysseus' faithful dog. After twenty years struggling to get home to Ithaca, Odysseus finally arrives at his homeland. In his absence, reckless suitors have taken over his house in hopes of marrying his wife Penelope. In order to secretly re-enter his house to ultimately spring a surprise attack on the suitors, Odysseus disguises himself as a beggar, and only his son Telemachus is told of his true identity. As Odysseus approaches his home, he finds Argos lying neglected on a pile of cow manure, infested with lice, old and very tired. This is a sharp contrast to the dog Odysseus left behind; Argos used to be known for his speed and strength and his superior tracking skills. Unlike everyone else, including Eumaeus, a lifelong friend, Argos recognizes Odysseus at once and he has just enough strength to drop his ears and wag his tail but cannot get up to greet his master. Unable to greet his beloved dog, as this would betray who he really was, Odysseus passes by (but not without shedding a tear) and enters his hall, and Argos dies.

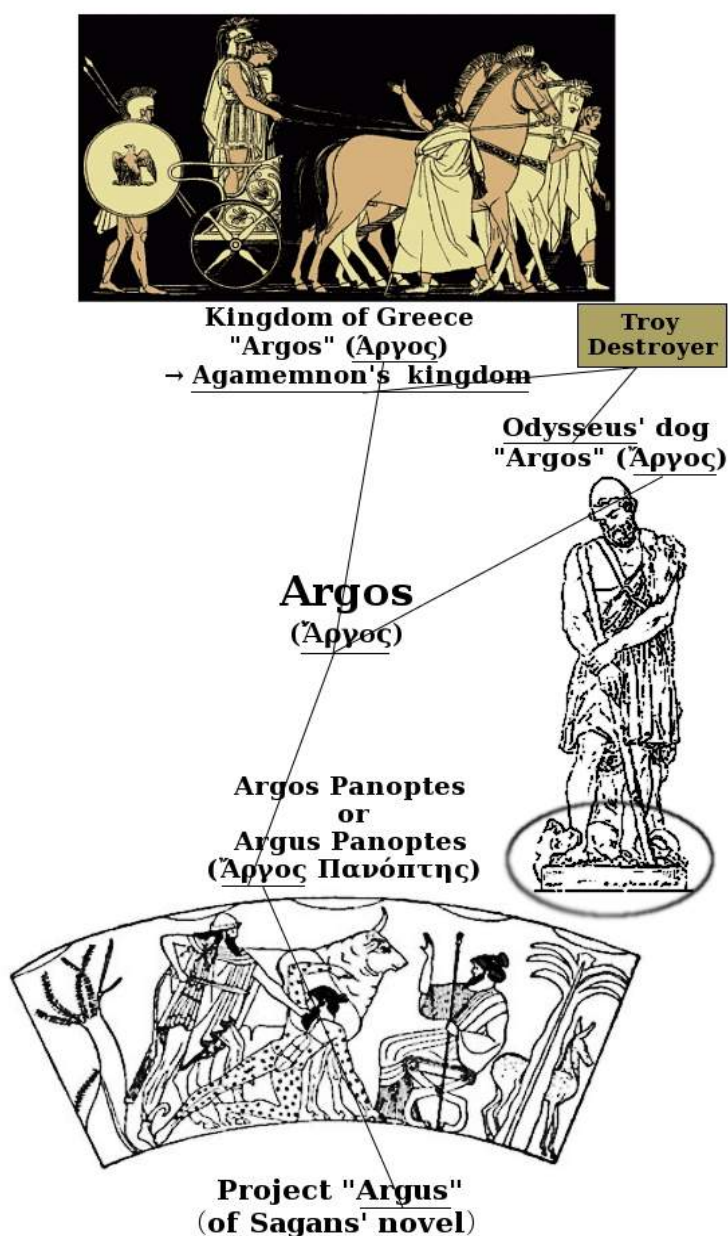
(拙訳として)

「ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』(トロイア攻めを扱っているホメロス叙事詩『イリアス』の後日譚を扱っているとの叙事詩)にあつてアルゴスとはオデュッセウスの忠実なる犬のことを指す。イサカに帰郷するための20年の労苦の後、オデュッセウスは遂に彼の故地に辿り着いた。彼の不在の間、向こう見ず・無遠慮な求婚者らが彼オデュッセウスの妻ペネロペと結婚しようとの望みを抱いて彼の屋敷を占有していた。最終目的としてそれら求婚者に奇襲を浴びせるために秘密裡に自身の屋敷に入り込もうとするなかでオデュッセウスは物乞いの扮装をなすこととし、彼の息子であるテレマコスのみが彼の正体を知らされることになった。オデュッセウスが彼の家に接近を試みているとき、彼オデュッセウスは無視されきっているとの格好で家畜飼料の山にあつて寝そべっており、シラミにたかれ、年老い、とても疲れきっているとの按配の自身の犬アルゴスを見出した。

といったさまはトロイア出陣の前にオデュッセウスが残っていたありし日のアルゴスと明瞭なるコントラストを呈していた。アルゴスはその俊敏さ・頑強さ・卓抜した追跡能力にて良く知られていたのである。長年の友人であったとのエウマエウスも含めて他の誰もがオデュッセウス正体に気づけなかったのに対して、老犬アルゴスは即座にオデュッセウスのことを認知し、耳を下に曲げ、その尾を振りだしたが、主人に対して挨拶をしに行くだけの余力は最早無かった。自身が誰であるかを偽っているなかで自身の愛する犬に挨拶もしに行けずにオデュッセウスは通り過ぎ(しかし涙を禁じ得なかった)、自身の屋敷の広間へと入り込んだ。そして、その時、アルゴスは衰弱死した」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上、ここまで指し示し事項呈示のための引用をなしたところで書いておくが、[百眼巨人アルゴス(アーガス)]のギリシャ語表記、[トロイア攻めの折のギリシャ勢の総称となっている[アルゴス勢]の由来とも通ずるギリシャ都市国家アルゴス]のギリシャ語表記、そして、[トロイア攻めにあってギリシャ勢の要として木製の馬の計略を考案した将軍オデュッセウスの犬たるアルゴス]のギリシャ語表記がそれぞれ全て同じくもの「Ἄργος」となっているとのことについては英文 Wikipedia「Argus Panoptes」「Argos」「Argos (dog)」の各項目にあっての冒頭部、ギリシャ語表記紹介部程度のものからも確認なせるようになっている。



これにて

[1] 小説『コンタクト』(1985)にあつては
[ブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲートを開くものであると(使用によつてはじめて)判明したマシーン]

の建設挙動が作中、

[トロイアを滅ぼした木製の馬]

に何度も仮託されている(先だつての段にて原文引用にて示したように『コンタクト』では正十二面体構造をとるマシーンが10回以上、[トロイアを滅した木製の馬]に仮託されている)。

そうした小説にあつての[マシーン]の建設につながつたアーガス計画の名がそちらに由来する百眼巨人の名アルガス(アルゴス)だが、同じくもの名(アルガス・アルゴス)は

[百眼巨人を指すとの名詞]

以外のものとして古典に「まったく同じくものギリシャ語の綴りで」よくも登場を見ており、それは

[トロイアを滅ぼしたギリシャ勢の総称にして別称(アルゴス勢)]

[トロイアに引導を渡した木製の馬の計略を考案した男オデュッセウスの忠犬の名前]
であつたりする。

[トロイア]と[アルゴス](アーガス)との名称は古典で「極めて」親和性強くも結びつくようになっているのである。

そして、(繰り返すが)小説『コンタクト』では**[トロイアを滅した木製の馬]**に何度も仮託されているとの

[向こう側よりの指示でこちらより構築せねば、ゲート構築ができないとの時空の歪みを発生させる装置]

が登場を見ているとのことがある。

とのことの典拠を必要な分だけ挙げた(と述べても差し障りなからうと判じている)。

次いで、

[2] (上の[1]にて言及のように)トロイア崩壊力学とトロイア攻囲サイドのギリシャ勢総称(アルゴス勢)を通じて結びつく百眼巨人 Argus Panoptes アルガス(アルゴス)の名を冠してのゲート設計図受信につながつた計画が描かれての小説『コンタクト』をものしたカール・セーガンという男、そのセーガン本人がトロイアを木製の馬で滅ぼしたオデュッセウスと結びつく(結びつけられている)人間となつている。カール・セーガンについてはオデュッセウス Ulysses の故郷たるイサカ(Ithaca)——オデュッセウスがそこに帰り着くまで苦難の旅をなしていたとの故郷——に依拠してその地名が付されたニューヨークの一地域[イサカ]と非常に深くも縁があるとの人物となつている。より具体的にはカール・セーガンはニューヨークのイサカ(オデュッセウスがそこを目指して旅したとされるその領地イタカ・イサカから命名されているとのことが地名由来としてあるとのニューヨーク一地域)に埋葬されることになっており、また、カール・セーガン事績を讃えるべくもの記念碑的一区画がニューヨークのそちらイサカに設けられているとのことがある。

とのことの典拠を挙げる。

まずもつてトロイアを木製の馬で滅ぼしたとのオデュッセウスの故郷は[イサカ](イタカないしイタケー

とも発音)という地であるとのことだが、よく知られた基本的なることであるとのことで、同点については、次の記述を引くだけで十分か、と思う。

(直下、英文 Wikipedia[Odysseus]項目にての現行記載内容よりの抜粋として)

Odysseus (/oʊˈdɪsiəs/ or /oʊˈdɪsjuːs/; Greek: Ὀδυσσεύς [odysˈsews]), also known by the Roman name Ulysses (/juːˈlɪsiːz/; Latin: Ulyssēs, Ulixēs), was a legendary Greek king of Ithaca and a hero of Homer's epic poem the Odyssey.

「オデュッセウス、ローマ名でのユリシーズでも知られている同人物は伝説上のイサカ(Ithaca)の王であり、ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』の主演である」

(引用部はここまでとする)

続けて、ニューヨークにイサカという町が存在しており、いわゆる大学街(College town)であるとのそのイサカの命名由来がオデュッセウス故地のイサカであるとされることを紹介しておく。

(直下、英文 Wikipedia[Ithaca, New York]項目にての現行記載内容よりワンセンテンス抽出をなすとして)

The city of Ithaca sits on the southern shore of Cayuga Lake, in Central New York. **It is named for the Greek island of Ithaca.**

「ニューヨーク州中部、カユガ湖南端の沖合にイサカ市は存する。同市はギリシャの島イサカから命名されたものである」

(引用部はここまでとする —※—)

(※尚、和文 Wikipedia[イサカ(ニューヨーク)]項目にあつては同じくもの点について

(直下、引用なすとして)

“ 翌 1790 年には、中部ニューヨーク・ミリタリー・トラクト(Central New York Military Tract)という入植計画の下、独立戦争に参加した兵士への褒美として土地が与えられていった。その後 1 年以内にほとんどの土地はこうした形で与えられ、非公式ではあったがこの地への入植が始まった。こうした入植の過程において、この地はサイモン・デウィット(Simeon DeWitt)による調査が進められていた。デウィットの秘書を務めていたロバート・ハーパー(Robert Harpur)が古代ギリシア・ローマの歴史やイギリスの小説家・哲学者に強い関心を寄せていたため、この計画の下でつくられたタウンシップには古代ギリシア・ローマの名前や、イギリスの文学者にちなんだ名前が多くつけられた。のちにイサカとなるこの地のタウンシップは、オデュッセウスのラテン名ウリュッセウス(Ulysseus)にちなんでユリシーズ(Ulysses)と名付けられた。その数年後にデウィットがイサカに移住すると、町そのものにもユリシーズという名をつけた。なお、このユリシーズという名はイサカが属しているトンプキンス郡の町の名として現在も残っている ”

(引用部はここまでとする)

と表記されている)

表記のようにニューヨークのイサカ市はオデュッセウス故地(およびオデュッセウスそのものたるユリ

シーズとの地名)と結びつくわけであるが、同市はカール・セーガンが拠点に定めた場所、カール・セーガンが埋葬された場所、カール・セーガンの記念碑が存在している場「とも」なる。については下を参照されたい。

(直下、英文 Wikipedia[Carl Sagan]項目にての[death] (死没)の部にての記述よりの引用をなすとして)

After suffering from myelodysplasia, and receiving three bone marrow transplants, Sagan died of pneumonia at the age of 62 at the Fred Hutchinson Cancer Research Center in Seattle, Washington, on December 20, 1996. He was buried at Lakeview Cemetery in Ithaca, New York. [. . .] **In 1997 the Sagan Planet Walk was opened in Ithaca, New York. It is a walking-scale model of the Solar System, extending 1.2 km from the center of The Commons in downtown Ithaca to the Sciencenter, a hands-on museum. The exhibition was created in memory of Carl Sagan, who was an Ithaca resident and Cornell Professor. Professor Sagan had been a founding member of the museum's advisory board.**

(訳として)

「骨髄異形成症候群に苦しみ、三回の骨髄移植を受けた後、セーガンは(直接的死因)肺炎にて1996年12月20日、ワシントン州シアトルのフレッド・ハッチンソン癌研究センターにて62年の生涯を終えた。彼はニューヨークの[イサカ](Ithaca)にあつてのレイクビュー霊園に埋葬されることになった。…(中略)…1997年、[セーガン・プラネット・ウォーク]がニューヨークの[イサカ](Ithaca)にてオープンを見た。同モニュメントは太陽系スケールの世界を歩くことで実感できるものとなっており、イサカ下町の公衆広場中心からサイエンス・センター、実際は博物館であるとのそこに向けて1.2キロの広がりを持っているものとなる。同展示作はイサカ市民であり、また、イサカにあるコーネル大学の教授であったとのカール・セーガンを記念して造られたものとなっている。セーガン教授は同博物館(セーガン・プラネット・ウォークの終着点の科学博物館)運営顧問委員会の創設メンバーの一人であった」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

以上もってして

[2](上の[1]にて言及のように)トロイア崩壊力学とトロイア攻囲サイドのギリシャ勢総称(アルゴス勢)を通じて結びつく百眼巨人 Argus Panoptes アルガス(アルゴス)の名を冠してのゲート設計図受信につながった計画が描かれての小説『コンタクト』をものしたカール・セーガンという男、そのセーガン本人がトロイアを木製の馬で滅ぼしたオデュッセウスと結びつく(結びつけられている)人間となっている。カール・セーガンについてはオデュッセウス Ulysses の故郷たるイサカ(Ithaca) ——オデュッセウスがそこに帰り着くまで苦難の旅をなしていたとの故郷—— に依拠してその地名が付されたニューヨークの一地域[イサカ]と非常に深くも縁があるとの人物となっている。より具体的にはカール・セーガンはニューヨークのイサカ(オデュッセウスがそこを目指して旅したとされるその領地イタカ・イサカから命名されているとのことが地名由来であるとのニューヨーク一地域)に埋葬されることになっており、また、カール・セーガン 事績を讃えるべくもの記念碑的一区画がニューヨークのそちらイサカに設けられているとのことがある。

このことの出典紹介を終える。

さらに続けまして、

[3] カール・セーガンが生前、関わったところの電波受信活動とワンセットになった外宇宙知性生命体探査計画たる SETI プロジェクト、その一貫としてサイクロプス計画というものが(フィクションならぬ)現実世界で計画されていたとこのことがある。同計画は結局は頓挫したとの 70 年代計画だが、そのサイクロプス(キュクロプス)計画、後続する小説『コンタクト』(1985)に見る架空のアーガス計画が「百目巨人の目による探査計画」となるものであるのに対して「一つ目巨人の目による探査計画」と言い換えられるようなものである。さて、アルゴスがあまねくも百の目でものを見る巨人であるのに対して、一点集中、一つ目でものを見るというサイクロプスという巨人(フィクションに見るアーガス計画に影響を与えたようであるサイクロプス計画名称由来となっている巨人)がどういった存在かと述べれば、「トロイアを木製の馬で滅ぼした男、オデュッセウスの冒険譚たる『オデュッセイア』に登場の「オデュッセウスに一つ目を潰された一つ目巨人」となっている。他面、アーガスとは(ここに至るまでの出典紹介部にて示したように)「ヘルメスに目潰しされて殺された百目巨人」となっているとこのことがある。【(一つ目であれ百眼であれ)自慢の目を台無しにされた巨人関連の外宇宙電波探査計画】【トロイア関連】(サイクロプスとトロイアの破壊者オデュッセウスの接合／[1]で触れたところのアルゴスとの名称とトロイア破壊者アルゴス勢の接合)とのことで無論、話がつながる。のみならず、(余程の神話通でなければ考えも及ばないことかとは思いますが)、オデュッセウス(サイクロプスの目を潰した木製の馬の計略の考案者)に関しては——カール・セーガン『コンタクト』のマシーン到達地点[グランド・セントラル・ステーション](の現実世界での比定地)と結びついているとのことにつき先述の「マーキュリー」と同一存在であるとされる——「ヘルメス」(アーガスの目を瞑(つむ)らせた神)の血族であるとのことが語り継がれてきた男であるとのこともまたある。

このことの出典を挙げることとする。

最初に、そも、サイクロプス計画とは何かの出典を挙げる。

(直下、和文 Wikipedia「地球外知的生命体探査計画」項目にあつての現行記載内容よりの抜粋をなすとして)

地球外知的生命体探査 (Search for Extra-Terrestrial Intelligence) とは、地球外知的生命体による宇宙文明を発見するプロジェクトの総称。頭文字を取って「SETI(セティ、セチ)」と称される。アクティブ SETI(能動的 SETI) に対して、パッシブ(受動的) SETI とも呼ばれる。現在世界では多くの SETI プロジェクトが進行している。

…(中略)…

歴史・主な計画

1959 年、科学雑誌『Nature』上にジュゼッペ・コッコーニとフィリップ・モリソンが初めて地球外生命体に言及する論文を発表。その論文で「地球外に文明社会が存在すれば、我々は既にその文明と通信するだけの技術的能力を持っている」と指摘した。またその通信は電波を通して行われるだろうと推論し、当時の学界に衝撃を与え、これを契機として地球外文明の探査が始まった。

…(中略)…

1960年、世界初の電波による地球外知的生命体探査であるオズマ計画が行われた。この計画はアメリカの天文学者フランク・ドレイクによって提案されたもので、ウェストバージニア州グリーンバンクにあるアメリカ国立電波天文台の18フィート望遠鏡にて実施された。オズマ計画では生命を宿すような惑星を持つのに相応しい大きさの恒星のうち、地球から近いものとして2つの恒星を選びこれを対象とした。選ばれたのはくじら座タウ星(12光年)およびエリダヌス座イブシロン星(11光年)である。ドレイクらはこれらの星に電波望遠鏡を向け、1,420MHzの電波(宇宙でもっとも多く存在する水素の出す電波)で地球に向けて呼びかけの信号が送られていないかどうかを調べた。電波は30日間(実際に受信を試みたのは150時間)にわたり観測されたが、文明の痕跡とみなされる信号は得られなかった。

…(中略)…

1971年には1,000基の電波望遠鏡を連携させることで、地球外からの電波信号探査を行うという「サイクロプス計画」(サイクロプスとはギリシャ神話に登場する一つ目の巨人である)がNASAによって計画されたが、資金の目処が立たず頓挫した。

(引用部はここまでとする)

上に見るように現実世界で頓挫を見たサイクロプス計画とは
[1000基の電波望遠鏡を連携させることで地球外からの電波信号を探る]

との試みを指すわけだが、それはカール・セーガン小説『CONTACT』(1985)に登場してきた Project Argusも多数の望遠鏡——こちらは100基超の電波望遠鏡——を並べて電波探査をなすとのものであったことと好対照をなす。その点、プロジェクト・アーガスがいかようなものと描写されているのかの抜粋も原著 CONTACT からなしておくこととする。

(直下、訳書、新潮社より出されている文庫版『CONTACT(上)』にあつてのその p.75 より引用をなすとして)

[<アーガス計画>の百三十一の望遠鏡は、すべてコンピューターで制御されている。システムは自発的にゆっくりと大空を探査し、機械や電子関係の故障の有無をチェックしたり、配列された各望遠鏡から送られてくる種々のデータを比較したりする]

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、原著 Contact にあつての同じくもの箇所表記(グーグル検索エンジンに引用英文テキストを入力・検索することで[文献事実]であることをオンライン上より特定できるようになっているとの同じくもの箇所の原著表記)は Chapter3 White Noise の章にての “ All 131 telescopes of Project Argus were controlled by computers. The system slowly scanned the sky on its own, checking that there were no mechanical or electronic breakdowns, comparing the data from different elements of the array of telescopes. ” との部が該当するところとなる)

次いで、頓挫したサイクロプス計画を包摂する SETI プロジェクトにセーガンが率先して関わっていたとの出典を挙げる。

(直下、和文 Wikipedia[カール・セーガン]項目にあつての現行記載内容 —日本にでも刊行されているセーガン関連の諸種文献にきちんと準拠していること、察せられるようになっていくとの記載内容— の抜粋として)

カール・エドワード・セーガン(Carl Edward Sagan, 1934年11月9日 — 1996年12月20日)は、アメリカの天文学者、作家、SF作家。元コーネル大学教授、同大学惑星研究所所長。NASAにおける惑星探査の指導者。惑星協会の設立に尽力。核戦争というもの地球規模の氷河期を引き起こすと指摘する「核の冬」や、遺伝子工学を用いて人間が居住可能になるよう他惑星の環境を変化させる「テラ・フォーミング」、ビッグバンから始まった宇宙の歴史を”1年という尺度”に置き換えた「宇宙カレンダー」などの持論で知られる。

…(中略)…

1960年から1962年まではカリフォルニア大学バークレー校でミラー研究員となった。1962年から1968年までスミソニアン天体物理観測所で研究員を務め、ハーバード大学で教鞭をとった。それからコーネル大学へと移り、1971年には正教授になり、以降惑星科学の研究室を率いた。

圏外生物学(宇宙生物学、天体生物学)の開拓者で、一般に地球外知的生命体探索計画の SETI と科学を押し進めたとされる。このように彼の業績には生命科学とのつながりが深いものが多く、惑星探査機、マリナー、バイキング、ボイジャー、ガリレオの実験計画の企画などに携わる。最初の妻は細胞内共生説を提唱した生物学者、リン・マーギュリスであった。

…(中略)…

科学啓蒙書や SF 小説の執筆でも知られる。代表作にはテレビシリーズにもなった『コスモス』、その続編『惑星へ』、映画化されたハード SF 小説『コンタクト』や、ピューリッツァー賞を受賞した『エデンの恐竜 - 知能の源流をたずねて』などがある。3人目の妻アン・ドルーヤンとの共著も多い。

…(中略)…

闘病中にはセント・ジョン大聖堂、ガンジス川の川辺にてヒンドゥー教徒が、北アメリカのイスラム指導者が回復祈願の祈りを願った。病人である当人は懷疑主義者で宗教にも輪廻転生にも懐疑的であったが、このような多くの善意ある振る舞いに勇気づけられたと感謝の言葉を贈っている。

(引用部はここまでとする —以上、「現行にての」和文ウィキペディアよりの引用部とした—)

(さらに直下、英文 Wikipedia[SETI]項目の現行にての記載内容よりのワンセンテンス抜粋として)

The first SETI conference took place at Green Bank, West Virginia in November 1961. The ten attendees were conference organiser Peter Pearman, Frank Drake, Philip Morrison, businessman and radio amateur Dana Atchley, chemist Melvin Calvin, astronomer Su-Shu Huang, neuroscientist John C. Lilly, inventor Barney Oliver, **astronomer Carl Sagan** and radio astronomer Otto Struve.

(訳として)

「最初の SETI 会議はウェストバージニアのグリーンバンクにて1961年11月に開催された。十名の出席者はカンファレンス主催者の Peter Pearman、続いて、Frank Drake、Philip Morrison、ビジネス関係者にしてアマチュア無線家の Dana Atchley、化学者の Melvin Calvin、天文学者の Su-Shu Huang、神経科

学者の John C. Lilly、発明家の Barney Oliver、天文学者の Carl Sagan、そして、電波天文学者の Otto Struve である」

(引用部訳はここまでとしておく。NASA による Project Cyclops が頓挫を見たのは 1971 年であると先の Wikipedia[地球外知的生命体探査計画]項目には記載されているわけだが、サイクロプス計画を包摂する SETI の 1961 年の初の会合からしてカール・セーガンはそこにコミットしていたとのことが以上抜粋部には表記されている)

ここまでにてカール・セーガンがサイクロプス計画を包摂する[地球外知的生命体探査計画](SETI)の主たる推進者であったとのことの典拠を挙げたとして、続いて、サイクロプス計画にその名称が使用されているところのサイクロプス(キュクロプス)がオデュッセウスに独眼を潰された一つ目巨人であるとのよく知られたことにまつわっての説明のなされようを下に引いておく。

(直下、和文ウィキペディア[ポリュペーモス]項目にての現行記載内容よりの抜粋として)

ポセイドンとネーレイデスのトオーサの息子。キュクロプスのひとりとされる。ホメロス叙事詩『オデュッセイアー』第9書で、オデュッセウスが語る航海譚に登場する。ポリュペーモスはキュクロプスたちの中でも最も大きい体を持ち、キュクロプスたちの島の洞窟に住んでいた。オデュッセウスがトロイア戦争からの帰途、この島に立ち寄った際、12人の部下とともにポリュペーモスの洞窟に閉じ込められた。部下たちが2人ずつ食べられていくうち、オデュッセウスは持っていたワインをポリュペーモスに飲ませて機嫌を取った。これに気をよくしたポリュペーモスは、オデュッセウスの名前を尋ね、オデュッセウスが「ウーティス」(ギリシア語で「誰でもない」の意)と名乗ると、ポリュペーモスは「おまえを最後に食べてやろう」といった。ポリュペーモスが酔いつぶれて眠り込んだところ、オデュッセウスは部下たちと協力して巨人の眼を潰した。ポリュペーモスは大きな悲鳴を上げ、それを聞いた仲間のキュクロプスたちが集まってきたが、だれにやられたと聞かれてポリュペーモスが「ウーティス(誰でもない)」と答えるばかりであったため、キュクロプスたちはみな帰ってしまった。

(引用部はここまでとする。尚、上は叙事詩『オデュッセウス』にあつてオデュッセウスらがキルケという魔女の島に辿り着く前の話、さらに述べれば、キルケの島に到達した後、一悶着あつたうえでサイレン・スキュラ・カリュブデイスの怪物らが控える難所に挑む前のパートにあつての筋立てとなる)

さらに続けて、

[奸知に長けた知将と称されるオデュッセウス(サイクロプスに食い殺されそうになったところを策略で相手の目つぶしをなしつつも逃げおおせましたとのオデュッセウス)が同様に奸知に長けたヘルメス(最前、先述のように百眼巨人アルゴスを殺してアルゲイポントスの異称を冠することとなったギリシャ神話の神にしてローマの商業神マーキュリーと習合しているとの神)の血を受け継ぐ者である]

との伝承にまつわる申しようがなされていることを紹介しておく。

(直下、英文 Wikipedia[Odysseus]項目の[Genealogy]の現行にあつての節の記載内容より

Relatively little is known of Odysseus's background other than that his paternal grandfather (or step-grandfather) is Arcesius, son of Cephalus and grandson of Aeolus, whilst his maternal grandfather is the thief Autolycus, son of Hermes and Chione. Hence, **Odysseus was the great-grandson of the Olympian god Hermes.** According to the Iliad and Odyssey, his father is Laertes and his mother Anticlea, although there was a non-Homeric tradition that Sisyphus was his true father.

(補ってもの訳として)「相対的に見て、オデュッセウスの血縁的バックグラウンドについては彼の父方の祖父(あるいは父方の義理の祖父)がアイオロスの孫でありケパロスの子であるとのアルケイシウスであり、他面、彼の母方の祖父が盗賊のアウトリュコス、ヘルメスとキオネーの間に出来たその男であること以上には知られていない。またもってしてオデュッセウスはオリンポスの神ヘルメスの曾孫であった。ホメロス由来ではないところの伝承としてシューシュポスが彼の本当の父となるとの申しようがなされているが、(ホメロスの手になる)『イリアス』と『オデュッセイア』によると、彼の父はラーエルテースとなり、そして、彼の母はアンティクレイアとなる」

(引用部はここまでとする)

以上、区分けしながら指し示してきたことをもってして、

[3] カール・セーガンが生前、関わったところの電波受信活動とワンセットになった外宇宙知性生命体探査計画たる SETI プロジェクト、その一貫としてサイクロプス計画というものが(フィクションならぬ)現実世界で計画されていたとのことがある。同計画は結局は頓挫したとの70年代計画だが、そのサイクロプス(キュクロプス)計画、後続する小説『コンタクト』(1985)に見る架空のアーガス計画が「百目巨人の目による探査計画」となろうものであるのに対して「一つ目巨人の目による探査計画」と言い換えられるようなものである。さて、アルゴスがあまねくも百の目でものを見る巨人であるのに対して、一点集中、一つ目でものを見るというサイクロプスという巨人(フィクションに見るアーガス計画に影響を与えたようであるサイクロプス計画名称由来となっている巨人)がどういった存在かと述べれば、「トロイアを木製の馬で滅ぼした男、オデュッセウスの冒険譚たる『オデュッセイア』に登場の[オデュッセウスに一つ目を潰された一つ目巨人]となっている。他面、アーガスとは(ここに至るまでの出典紹介部にて示したように)「ヘルメスに目潰しされて殺された百目巨人」となっているとのことがある。〔一つ目であれ百眼であれ〕自慢の目を台無しにされた巨人関連の外宇宙電波探査計画〔トロイア関連〕(サイクロプスとトロイアの破壊者オデュッセウスの接合/[1]で触れたところのアルゴスとの名称とトロイア破壊者アルゴス勢の接合)とのことで無論、話がつながる。のみならず、(余程の神話通でなければ考えも及ばないことかとは思いますが)、オデュッセウス(サイクロプスの目を潰した木製の馬の計略の考案者)に関しては——カール・セーガン『コンタクト』のマシン到達地点[グランド・セントラル・ステーション](の現実世界での比定地)と結びついているとのことにつき先述の[マーキュリー]と同一存在であるとされる——「ヘルメス」(アーガスの目を瞑(つむ)らせた神)の血族であるとのことが語り継がれてきた男であるとのこともまたある。

とのことが述べられるだけの典拠を呈示した。

実にもって長くもなったものの、これにて、[1]から[3]と振ってのこら、繰り返せば、

[1] 小説『コンタクト』(1985)にあっては

[ブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲートを開くものであると(使用によってはじめて)判明したマシン]

の建設挙動が作中、

[トロイアを滅ぼした木製の馬]

に何度も仮託されている(先だつての段にて原文引用にて示したように『コンタクト』では正十二面体構造をとるマシンが10回以上、[トロイアを滅した木製の馬]に仮託されている)。

そうした小説にあっての[マシン]の建設につながったアーガス計画の名がそちらに由来する百眼巨人の名アルガス(アルゴス)だが、同じくもの名(アルガス・アルゴス)は

[百眼巨人を指すとの名詞]

以外のものとして古典に「まったく同じくものギリシャ語の綴りで」よくも登場を見ており、それは

[トロイアを滅ぼしたギリシャ勢の総称にして別称(アルゴス勢)]

[トロイアに引導を渡した木製の馬の計略を考案した男オデュッセウスの忠犬の名前]

であったりする。

[トロイア]と[アルゴス](アーガス)との名称は古典で「極めて」親和性強くも結びつくようになっているのである。

そして、(繰り返すが)小説『コンタクト』では**[トロイアを滅した木製の馬]**に何度も仮託されているとの

[向こう側よりの指示でこちらより構築せねば、ゲート構築ができないとの時空の歪みを発生させる装置]

が登場を見ているとのことがある。

[2] (上の[1]にて言及のように)トロイア崩壊力学とトロイア攻囲サイドのギリシャ勢総称(アルゴス勢)を通じても結びつく百眼巨人 Argus Panoptes アルガス(アルゴス)の名を冠してのゲート設計図受信につながった計画が描かれての小説『コンタクト』をものしたカール・セーガンという男、そのセーガン本人がトロイアを木製の馬で滅ぼしたオデュッセウスと結びつく(結びつけられている)人間となっている。カール・セーガンについてはオデュッセウス Ulysses の故郷たるイサカ(Ithaca)——オデュッセウスがそこに帰着くまで苦難の旅をなしていたとの故郷——に依拠してその地名が付されたニューヨークの一地域[イサカ]と非常に深くも縁があるとの人となっている。より具体的にはカール・セーガンはニューヨークのイサカ(オデュッセウスがそこを目指して旅したとされるその領地イタカ・イサカから命名されているとのことが地名由来としてあるとのニューヨーク一地域)に埋葬されることになっており、また、カール・セーガン業績を讃えるべくもの記念碑的一区画がニューヨークのそちらイサカに設けられているとのことがある。

[3] カール・セーガンが生前、関わったところの電波受信活動とワンセットになった外宇宙知性生命体探査計画たる SETI プロジェクト、その一貫としてサイクロプス計画というものが(フィクションならぬ)現実世界で計画されていたとのことがある。同計画は結局は頓挫したとの70年代計画だが、そのサイクロプス(キュクロプス)計画、後続する小説『コンタクト』(1985)に見る架空のアーガス計画が**[百目巨人の目による探査計画]**となろうものであるのに対して**[一つ目巨人の目による探査計画]**と言い換えられるようなものである。さて、アルゴスがあまねくも百の目でものを見る巨人であるのに対して、一点集中、一つ目でものを見るというサイクロプスという巨人(フィクションに見るアーガス計画に影響を与えたようであるサイクロプス計画名称由来となっている巨人)がどういった存在かと述べれば、**[トロイアを木製の馬で滅ぼした男、オデュッセウスの**

冒険譚たる『オデュッセイア』に登場の[オデュッセウスに一つ目を潰された一つ目巨人]となっている。他面、アーガスとは(ここに至るまでの出典紹介部にて示したように)[ヘルメスに目潰しされて殺された百目巨人]となっているとのことがある。[(一つ目であれ百眼であれ)自慢の目を台無しにされた巨人関連の外宇宙電波探査計画][トロイア関連](サイクロプスとトロイアの破壊者オデュッセウスの接合/[1]で触れたところのアルゴスとの名称とトロイア破壊者アルゴス勢の接合)とのことで無論、話がつながる。のみならず、(余程の神話通でなければ考えも及ばないことかとは思うが)、オデュッセウス(サイクロプスの目を潰した木製の馬の計略の考案者)に関しては——カール・セーガン『コンタクト』のマシーン到達地点[グランド・セントラル・ステーション](の現実世界での比定地)と結びついているとのことにつき先述の[マーキュリー]と同一存在であるとされる——[ヘルメス](アーガスの目を瞑(つむ)らせた神)の血族であるとのこと語り継がれてきた男であるとのことともまたある。

との各点についての出典紹介を終えることとする。

(出典(Source)紹介の部 82(6)はここまでとする)

さて、先立っての段では

「カール・セーガン小説『コンタクト』(異常異様なる先覚性についてここに至るまで詳述をなしてきたとの作品)にあっては後半部、異星圏高度先進文明から送られてきた設計図に基づき完成した[マシーン]がその使用によって[ゲート構築装置]であると判明したと描写され、直後、装置使用者らが送られたとされる先が「数多くの」ブラックホールないしワームホール利用型の同様のゲート装置らがひとところに集まる銀河にあってのターミナル的なる場である、いわば、[グランド・セントラル・ステーション]のような場であるとの描写がなされている」

とのありようが

[露骨な嗜虐的対話法]

とのからみで何故、いかようにして問題になるのか、その理由たるところを根拠と共に詳述した(：ひとことで述べれば、「現実世界の」グランド・セントラル・ステーションに極めて目立っての象徴的アイコンとして配されたオブジェのありようからセーガン『コンタクト』に見る【ブラックホール・ワームホール・ゲートの集散地】への旅が【殺される存在】が【殺す方】へのいざなわれるプロセスに露骨に仮託されていると判じられるようになっていく」とのことが問題になる、ということである)。

実にくどくもながら振り返ろう。直近直上、

[1] 小説『コンタクト』(1985)にあっては
[ブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲートを開くものであると(使用によってはじめて)判明したマシーン]
の建設挙動が作中、
[トロイアを滅ぼした木製の馬]
に何度も仮託されている(先だつての段にて原文引用にて示したように『コンタクト』では正十二面体構造をとるマシーンが10回以上、[トロイアを滅した木製の馬]に仮託

されている)。

そうした小説にあつての[マシーン]の建設につながったアーガス計画の名がそちらに由来する百眼巨人の名アルガス(アルゴス)だが、同じくもの名(アルガス・アルゴス)は

[百眼巨人を指すとの名詞]

以外のものとして古典に「まったく同じくものギリシャ語の綴りで」よくも登場を見ており、それは

[トロイアを滅ぼしたギリシャ勢の総称にして別称(アルゴス勢)]

[トロイアに引導を渡した木製の馬の計略を考案した男オデュッセウスの忠犬の名前]であつたりする。

[トロイア]と[アルゴス](アーガス)との名称は古典で「極めて」親和性強くも結びつくようになっているのである。

そして、(繰り返すが)小説『コンタクト』では**[トロイアを滅した木製の馬]**に何度も仮託されているとの

[向こう側よりの指示でこちらより構築せねば、ゲート構築ができないとの時空の歪みを発生させる装置]

が登場を見ているとのことがある。

[2] (上の[1]にて言及のように)トロイア崩壊力学とトロイア攻囲サイドのギリシャ勢総称(アルゴス勢)を通じて結びつく百眼巨人 Argus Panoptes アルガス(アルゴス)の名を冠してのゲート設計図受信につながった計画が描かれての小説『コンタクト』をものしたカール・セーガンという男、そのセーガン本人がトロイアを木製の馬で滅ぼしたオデュッセウスと結びつく(結びつけられている)人間となっている。カール・セーガンについてはオデュッセウス Ulysses の故郷たるイサカ(Ithaca)——オデュッセウスがそこに帰り着くまで苦難の旅をなしていたとの故郷——に依拠してその地名が付されたニューヨークの一地域[イサカ]と非常に深くも縁があるとの人となっている。より具体的にはカール・セーガンはニューヨークのイサカ(オデュッセウスがそこを目指して旅したとされるその領地イタカ・イサカから命名されているとのことが地名由来としてあるとのニューヨーク一地域)に埋葬されることになっており、また、カール・セーガン業績を讃えるべくもの記念碑的一区画がニューヨークのそちらイサカに設けられているとのことがある。

[3] カール・セーガンが生前、関わったところの電波受信活動とワンセットになった外宇宙知性生命体探査計画たる SETI プロジェクト、その一貫としてサイクロプス計画というものが(フィクションならぬ)現実世界で計画されていたとのことがある。同計画は結局は頓挫したとの70年代計画だが、そのサイクロプス(キュクロプス)計画、後続する小説『コンタクト』(1985)に見る架空のアーガス計画が**[百目巨人の目による探査計画]**となろうものであるのに対して**[一つ目巨人の目による探査計画]**と**言い換えられるようなものである**。さて、アルゴスがあまねくも百の目でものを見る巨人であるのに対して、一点集中、一つ目でものを見るというサイクロプスという巨人(フィクションに見るアーガス計画に影響を与えたようであるサイクロプス計画名称由来となっている巨人)がどういった存在かと述べれば、**[トロイアを木製の馬で滅ぼした男、オデュッセウスの冒険譚たる『オデュッセイア』に登場の[オデュッセウスに一つ目を潰された一つ目巨人]**となっている。他面、アーガスとは(ここに至るまでの出典紹介部にて示したように)**[ヘルメスに目潰しされて殺された百目巨人]**となっているとのことがある。**[(一つ目であれ百眼であれ)自慢の目を台無しにされた巨人関連の外宇宙電波探査計画]****[トロイア関連]**(サイクロプスとトロイアの破壊者オデュッセウスの接合/[1]で触れたところのアルゴスとの名称とトロイア破壊者アルゴス勢の接合)とのことで無論、話がつながる。のみならず、(余程の神話通でなければ考えも及ばないことかとは思ふが)、

追記：本書で幾度となくすでに言及しているとの作品、アーサー・クラークによる著名作品 2001: A Space Odyssey (1968) にあっても

「グランド・セントラル・ステーション」

との話が
[「ブラックホールに比定されるフィクション上のモチーフである」と学者に解説されているとの] スターゲート]

と結びつけられて登場を見ていることがある。そのことは先の本書 p.575 にて付記していることだが、ここでは同文に「グランド・セントラル・ステーション」を「ブラックホールないしワームホールの行き着く先」と結びつけているカーン・セーガン作品『コンタクト』がいかにトロイア崩壊がらみのギリシャ古典『オデュッセイア』と「怪物じみたかたちで」結びついているのかの解説をなしている。

さて、ギリシャ古典『オデュッセイア』(オデュッセイ)が直上に言及の『2001年宇宙の旅』とも濃厚に結びついているのは本書 p.549 にて多少言及していることとなる(：『2001年宇宙の旅』の原題 2001: A Space Odyssey に見る Odyssey オデュッセイとはギリシャ古典『オデュッセイア』そのものことでも → (左側へ)

オデュッセウス(サイクロプスの目を潰した木製の馬の計略の考案者)に関しては —
—カーン・セーガン『コンタクト』のマシン到達地点[グランド・セントラル・ステーション](の現実世界での比定地)と結びついているとのことにつき先述の「マーキュリー」と同一存在であるとされる—— 「ヘルメス」(アーガスの目を瞑(つむ)らせた神)の血族であるとのことが語り継がれてきた男であるとのこともまたある。

とのことら論拠を示したわけではあるが、そうして表記の[1]から[3]のことらがあるがゆえ、

[[百眼巨人アーガス]を殺したのはヘルメス(ニューヨークの世界最大級のターミナル駅、グランド・セントラル駅を表象するアイコンとなっているローマ神のマーキュリーと習合同一化したとの存在)であるとされていることがあるのが神話である。とすると、百眼巨人アーガスの名を冠する外宇宙電波探査計画(アーガス計画)によって受信された外宇宙電波を元にゲート装置(使用後、結果的にゲート装置と判明したもの)が建造されて、それでもってして人類の代表者がカーン・ブラックホールないしワームホールのゲートを通してグランド・セントラル・ステーションと表される同種の装置の集散地にいざなわれるとの小説『コンタクト』の筋立ては「殺される者の計画」(アーガス計画)を進めている人類が「殺す者」(グランド・セントラル・ステーションのマーキュリー)の元たるグランド・セントラル・ステーションへのこのこと足を運ぶための一連の流れが隠喩的に描かれているように解される]

とのことらがあるのが
(「第一に、」のこととして)

「表記のような隠喩的側面がカーン・セーガン作品『コンタクト』にて現出を見ていることについてはたかだか『偶然の悪戯の問題』では済まないものである」と述べられるようになっている]

と強調なせるものとなりもしているというわけである。

(上にて「述べられるようになっている」とするところの理由の問題について、(人によってはあまりにもくどく響くところかとは思いますが)、噛み砕けば、次のようなかたちとなる。
⇒

「表記の [1] に関するところとして」：トロイアを滅ぼした木製の馬に作中、10回以上も仮託されているとの『コンタクト』登場の「マシン」が「百眼巨人アーガス(アルゴス)」の名を冠するアーガス計画の成果(としての外宇宙電波受信)によって構築されたと描写される中で「木製の馬でトロイアを滅亡させたギリシャ勢」がそちら百眼巨人アルゴス(アーガス)と同様の名、(属地的な連続性あつてのこととしてであろう)「アルゴス勢」との名でもってホメロス古典にて呼び慣わされているとのことがある。ゆえに、まずもってそこからして「わざと」の臭いがする。

「表記の [2] に関するところとして」：百眼巨人アーガス(現実世界のニューヨークのグランド・セントラル・ステーションにあつての表象アイコンとなっているマーキュリー(ヘルメス)に眼を催眠作用で自慢の百眼を閉じさせられて殺された百眼巨人)の名を冠するアーガス計画の帰結としてのゲート装置の構築(とそれに続くグランド・セントラル・ステーションと表される銀河系のワームホールないしブラックホール利用ゲート装置の集散地への到達)を主たる筋立てとする『コンタクト』を記したカーン・セーガンという男自身が「トロイア攻め伝承で木製の馬の計略を用いたギリシャの謀将オデュッセウス」、すなわち、「アルゴス勢」と総称されるトロイア滅亡をもたらしたギリシャ勢随一の知将ともされ、かつもって、「アルゴス」との忠犬を飼っていたと伝わる存在」と濃厚に結びつく言論人であったとのことがある、オデュッセウス故郷にしてオデュッセウスがトロイア崩壊後、そこを目指して長期に渡る苦難の旅を強いられた(とホメロス古典にて描かれる)

→ ある。また、『2001年宇宙の旅』がいかに多重的にトロイア崩壊の物語・オデュッセイアと結びついているのかについてはそれ専門の著作(Kubrick's 2001: A Triple Allegory との著作)も出ているし、The Making of Kubrick's 2001 (1970) との著作に解説されているように『2001年宇宙の旅』映画監督スタンリー・キューブリック彼自身が当該作がギリシャ古典オデュッセイアよりインスピレーションを受けていると言及していることもまたある —※筆者自身参照している和訳されてのソースとしては The Lost Worlds of 2001 (邦題)『失われた宇宙の旅 2001』文庫版(早川書房)との書籍 60 ページ、400 から 401 ページに同じくものことに通じる記述がみとめられるとのことがある—)。

であるから、アーサー・クラーク『2001年宇宙の旅』とカーン・セーガン『コンタクト』は「ブラックホールと結びつくグランド・セントラル・ステーション」[トロイア崩壊関連古典オデュッセイア]を介して接続しているわけである(それについてはアーサー・クラークの『2001年宇宙の旅』の導き手 HAL9000 が本書 p.550 にて言及のように「目つぶしされた巨人サイ」 → (次頁へ)

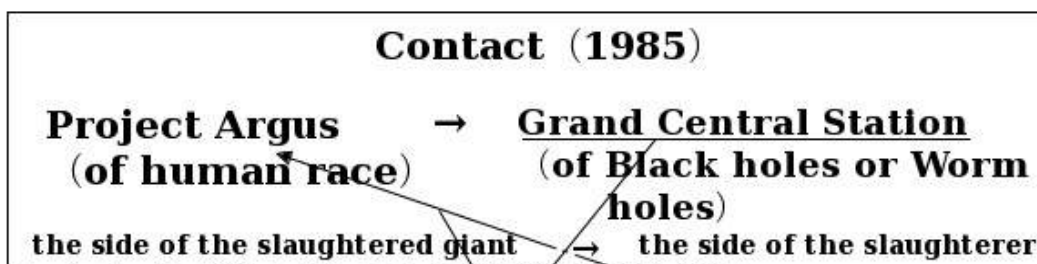
→クロプスと結びつけられる傾向がある、その一つ目巨人サイクロプスが（本書 p.603 下段より言及のように）カール・セーガン小説『コンタクト』におけるゲート構築マシン設計図受信と通じているとのこともある。すなわち、セーガン小説におけるゲート受信に通じたアーガス計画のアーガスという100眼巨人の名前（にかこつけられてのアンテナ群）が、既述のように、現実世界での頓挫計画、サイクロプス計画に由来しているとのことがあり、そのため、アーサー・クラーク『2001年宇宙の旅』の船頭役人工知能 HAL9000 がサイクロプスとつながられているとのことはその伝でもセーガンの『コンタクト』との絡みでも意をなすことになる。

そうもして明瞭に『2001年宇宙の旅』と『コンタクト』は結びつくように「なっている」のであるが、ここで着目すべきだと指摘することとして以下のようなことがある。

・アーサー・クラーク『2001年宇宙の旅』は「モノリスが開くスターゲートの領域に人類が人工知能 HAL9000 の助けをいざなわれていく作品」ではあるが、そこに見るモノリス開閉ゲートがブラックホールに比定されることがある（既述）のに加えて、である。HAL9000 開発者として作中設定されて→（左側へ）

イサカの地と密接に結びつく人間となっているがゆえにそうも述べられるようになっていくことがある（「カール・セーガン廟」とも表すべき大がかりな記念碑的モニュメントがニューヨークのイサカ、すなわち、オデュッセウスの目的地にして故地だったイサカ（イタケ）から命名されての同地に存在しているとのこと、先述もしている）。とすれば、アーガス計画（トロイアの木製の馬を用いたギリシャ勢の別称「でも」あるアーガス・アルゴス（ギリシャ語綴りは等しくも Ἄργος）を名称に冠しての計画）でもってして生まれ落ちた作中、何度もトロイアの木製の馬にかこつけられている装置の利用で人類がグランド・セントラル・ステーションにいざなわれているとの筋立てによりもってして「わざと」の臭いが感じられるとのことになる。

【表記の「3」に関するところとして】：『コンタクト』作者カール・セーガンが現実世界で関わった地球外文明探査計画にあつての[サイクロプス計画]は[オデュッセウスに目潰しされた一つ目巨人サイクロプス]から名前をとられたものであるが、そちら頓挫した[サイクロプス計画]を少なからず意識しているといった按配の小説『コンタクト』に見る架空の[アーガス計画]とは[(オデュッセウスがその血を引くとの話が伴っている)ヘルメス神に自慢の目を瞑(つぶ)らされて殺された百眼巨人]から名前をとられてのものである。とすれば、[自慢の眼を台無しにされて退治された「トロイア崩壊伝承と接点を有する」巨人「達」]との共通属性が現実とフィクションのそれぞれの宇宙探査計画の対応関係から導き出せるようになっていくとの伝で [(作中にて何度もトロイアの木製の馬にかこつけられている)装置の利用]で人類がグランド・セントラル・ステーションにいざなわれているとの筋立てによりもってして「わざと」の臭いが[さらに]に[さらに]を加えて感じられるとのことになりもする。だけではない。[百眼巨人アーガス]の眼を催眠作用で瞑(つぶ)らせて殺したと伝わるヘルメス（現実世界の世界最大級のターミナル駅で、小説『コンタクト』でもその名が比喩的表現として用いられているとのグランド・セントラル・ステーションを表象するマーキュリー神と同一の存在）が「一つ目巨人サイクロプス」(アーガス計画を巡る顛末を描く『コンタクト』の執筆者カール・セーガンが現実世界で関わった外宇宙電波探査活動 (SETI) の一貫として考案されていた計画にもその名が振られての一つ目巨人) を目潰しして斥けたと伝わるオデュッセウス (トロイアに木製の馬で引導を渡したとの武将) と血縁関係にある、すなわち、オデュッセウスはオリュンポスのヘルメスの血を継ぐ存在であるなどと伝わっているのであるから、[アーガス計画 (フィクション) ↔ サイクロプス計画 (現実世界)] を通じてのセーガンやりようにおけるトロイアと結びつくとの側面がよりもって臭気を帯びてくるとのこともある)



カール・セーガン小説『コンタクト』では[アーガス計画]の結果、宇宙にてブラックホール・ゲートないしワームホール・アードが集まるとのグランド・セントラル・ステーション行きが「[人類の進歩に好ましいこと]として実現を見る。が、そこに見る[アーガス計画]の由来となった百眼巨人アーガスが現実世界にあつてのグランド・セントラル・ステーションの代表的アイコンとなっているマーキュリーの同等物ヘルメスに眠りこまされ殺された存在であるとの神話的・地理的な理解がなせるため、[殺される存在の名を冠した計画]が[殺す存在を象徴とする場]への導きをなしているとのことになる。すなわち、[反対話法]の臭いが如実に伴っている。

Hermes Argeiphontes

ヘルメス・アルゲイフォンテース、すなわち、アルゴス殺しのヘルメスとの通り名を有するヘルメスは、その名の由来するところとして眠りこけさせるとのかたちで



→いる架空の科学者シヴァサブラマニアン・チャンドラセガランピライの名が[ブラックホール理論開拓者]として認知されている現実の物理学者スブラマニアン・チャンドラセカールの名前より命名されているとのことがある（同フィクションの Sivasubramanian Chandrasegarampillai の由来が現実世界の科学者 Subrahmanyan Chandrasekhar に求められることについてはウィキペディアなどにも広く解説されていることとなり、他面、現実世界の Subrahmanyan Chandrasekhar の方が[ブラックホール理論の開拓者]になっていることは本稿の続く巻 (vol.3) で詳述することになる。したがって、アーサー・クラーク『2001年宇宙の旅』は

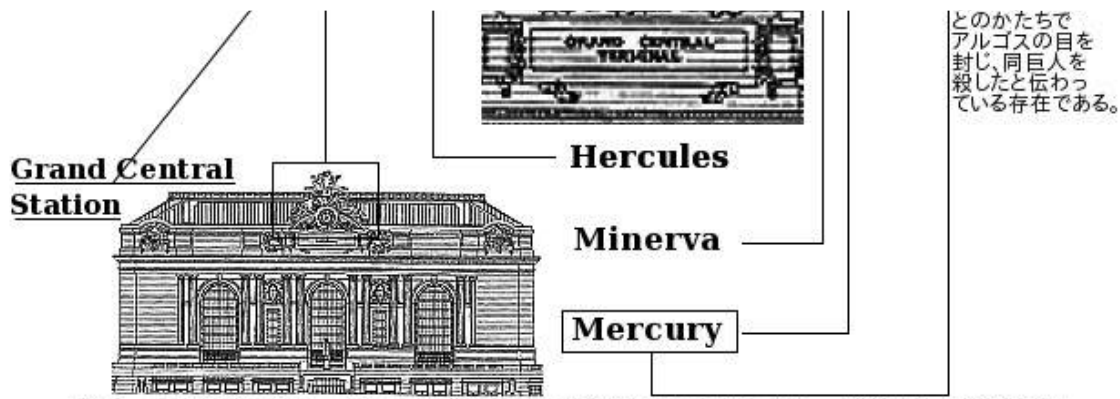
【ブラックホールゲートに比定されるもの (モノリス・ゲート) にブラックホール理論開拓者の名から命名されての架空の科学者の手仕事とされての人工知能 (HAL9000) にいざなれていく作品】

とも言い換えられるように「なっている」。

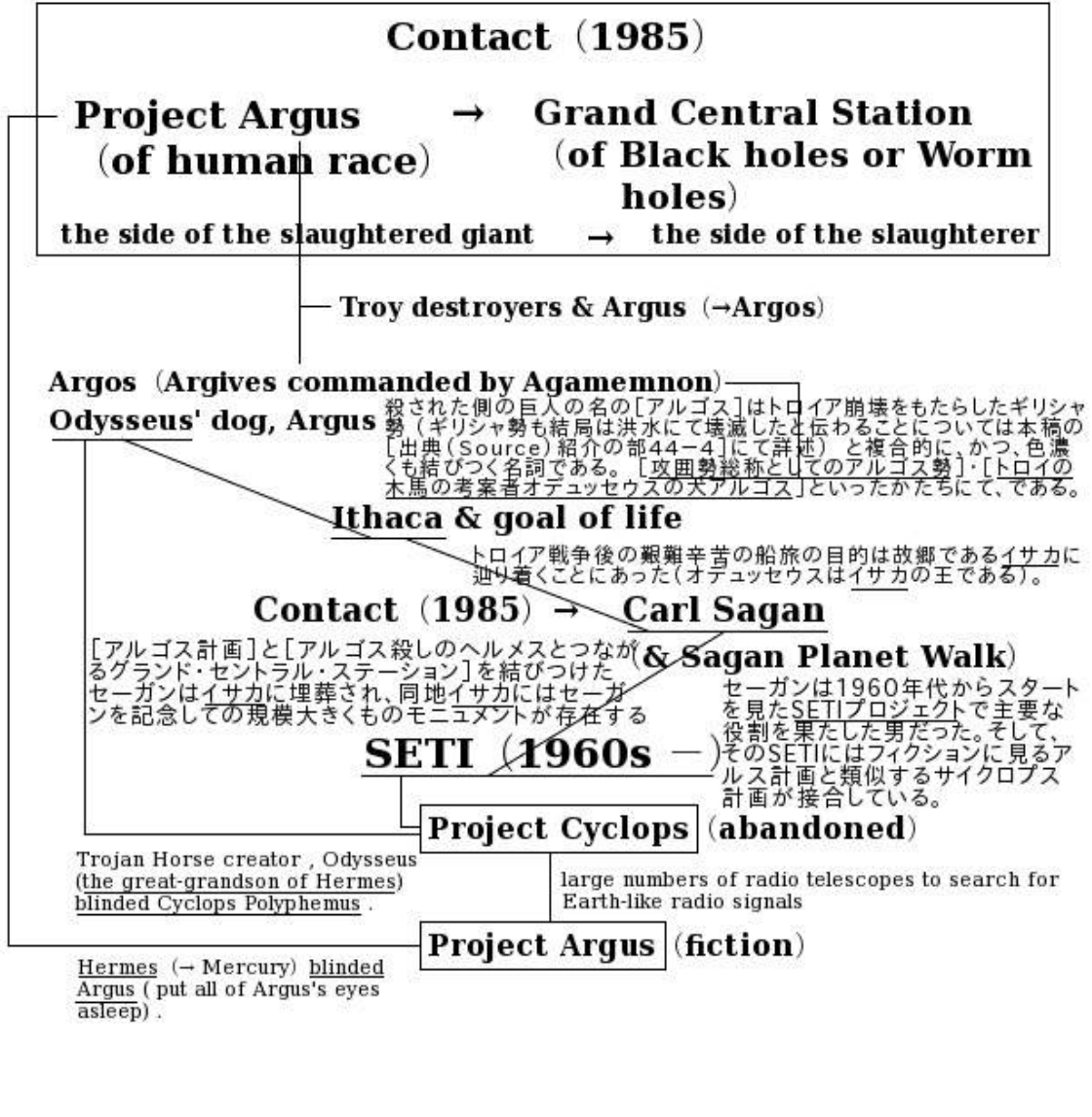
・アーサー・クラーク『2001年宇宙の旅』が直上言及の点(・)に見るように[ブラックホールへのいざなわない]と(そのことをどういふわけなのかまったく誰も指摘しない中ながら)濃厚に結びつ→ (次頁へ)

→つくようになって
 いるわけだが、
 そうもした同作
 『2001年宇宙の
 旅』、同じくも
 ブラックホール（そ
 して加速器による
 ブラックホール人
 為生成の先覚的
 言及）との絡みで
 問題になる作家・
 作家作品としての
 著名作家カー
 ヴォネガットによる
 手仕事 The
 Sirens of Titan
 『タイタンの妖女』
 （1959）と —こ
 れまたトロイア関
 連古典『オデュ
 セイア』をも共通
 項としていると
 いったかたちで一
 つ結びついている
 （意図して本書
 p.547 から p.552
 にて既に解説して
 いることである）。
 そして、そこに見
 る先に言及なして
 の『タイタンの妖
 女』との著名作品
 は（これまた本書
 p.541 から p.547
 にて既に解説して
 いるように）カー
 ル・セーガン『コ
 ンタクト』とも結び
 ついている。

おわかりかとは
 思うのだが、著名
 作家ら著名文物
 ら（『タイタンの
 妖女』（1959）、
 『2001年宇宙の
 旅』（1968）、『コ
 ンタクト』（1985））
 が「トロイア崩壊
 関連古典『オ
 デュセイア』」
 「ブラックホール」
 を →（左側へ）



ビッグ・アップルことマンハッタン、同地の世界的に群を抜いているプラットホーム数を誇ってのグランド・セントラル・ターミナル（別称グランド・セントラル・ステーション）には Glory of Commerceとの名称を持つ、商業神マーキュリー（錬金術の神でありヘルメスの同等物たるローマ神）とワンセットになった巨大時計のオブジェが駅それ自体を象徴するものとして存在している。



共通項として「執
 拗に」円環なす
 ありようで結びつ
 いているとのこと
 がこの世界にはあ
 る、そのことが
 【客観的現象】と
 して愚にもつかぬ
 属人的印象論な
 どは無縁なる式
 で指し示せるよう
 になっている。

そして、である。
 「ブラックホール」
 を生成する可能
 性が近年問題視
 されるように「な
 った」他ならぬ LHC
 実験それ自体がト
 ロイアと結びつ
 いているとのことも
 がこの世界にはあ
 る（本稿にてくども
 指摘していること
 である）。

以上のことは問
 題視している事柄
 らの片鱗にしか当
 たらぬことだが、
 たかだかものそう
 もしたことからして
 何が問題になる
 か想像に難くもな
 かるうとのかたち
 での詳述に努め
 ているつもりでは
 ある（一つに問題
 になるのは加速
 器によるブラック
 ホール生成が科
 学界で現実視さ
 れるようになった
 と異口同音に発表
 されているのがこ
 こ最近であるにも
 関わらず、カー
 ル・セーガンの『コ
 ンタクト』（1985）
 の発表時期です
 らそれに先立つと
 のことがあること
 である）。

かてて加えて(より性質悪きことに)、「第二に、」問題となるところとし、

「偶然の悪戯の問題で済まないうえに「表記のような隠喩性が現出を見ていることにつ
 いてはカール・セーガン個人の属人的な領分に留まっの恣意的やりようで済まされる
 ものでもない」と述べられるようになっている (なってしまう)」

とのことがあるのをこれ以降、問題視することとする。

その点もってして奇怪極まりないことにすべて確とした事実の山によって指し示せるところとして(そし

て、実際に本稿で典拠をすべて指し示してきたところとして)、

[以下の関係性]

が[この本質]がカール・セーガンの属人的主観の問題などでは済まされないとのことを示すものとして横たわっていること、申し述べておく。

(本稿にあって属人的主観など介在する余地が一切ないもの、具体的論拠を出典紹介部にて羅列しながら指し示してきたところの関係性として)

カール・セーガン『コンタクト』 ↔ ([通過可能なワームホール]にまつわるやりとり) ↔ 物理学者キップ・ソーン ↔ キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』 ↔ 『コンタクト』に関連するところで煮詰められた[通過可能なワームホール]についての思考実験の紹介部にて[双子のパラドックス]絡みの話を展開、奇怪なことに、その場にて「多重的に911の予見が顕在化を見ているとのキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にみとめられるありよう」 ↔ [通過可能なワームホール] ↔ セーガン『コンタクト』(回帰) ↔ [黄金比の全面での体現存在たる正十二面体(正五角形を十二の面に配しているとの立体図形)をゲート装置となしての作中設定] ↔ [異空間とのゲートと黄金比体現存在たる正五角形の関連付け] ↔ 同様のもの(異次元妖怪を封じるとの魔符としての[正五角形]たるペンタゴン)を登場させている小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』 ↔ [911の事件への多重予見的言及と申し述べられる特性を有しているとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』の内容] ↔ [キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にあっての同様の側面(911の多重予言的言及との特質)と結節] ↔ [キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』と通過可能なワームホールの関係性](回帰) ↔ カール・セーガン『コンタクト』(回帰) ↔ [[カー・ブラックホール][ワームホール]の生成が作中内の[ゲート装置]と関わっているとの『コンタクト』作中設定](回帰) ↔ [カー・ブラックホールやワームホールを生成する可能性が「後の日に」(2000年前後の余剰次元に伴う理論的地殻変動によって)取り沙汰されだしたLHC実験] ↔ [アトランティスと関わる命名規則を採用している実験(ブラックホール生成イベントをそれで観測する可能性が取り沙汰されているATLAS実験グループが用いるイベント・ディスプレイ・ツールATLANTISの使用)、なおかつ、トロイアと関わる命名規則を採用している実験(トロイアに木製の馬で引導を渡したオデュッセウスがカリュプソの島、アイザック・ニュートンなどがアトランティスと見ていた神話上の存在に漂着することになった契機となった渦潮の怪物カリュプデイスの名を冠するブラックホール・イベント・ジェネレーターCHARYBDISの使用)としての —そして、巨人ATLASがその場を知るとされる黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)のことも想起させもするとの — LHC実験] ↔ [アトランティスやトロイアと —黄金の林檎らを介しもし— 結びつき、そちらアトランティスやトロイアとの —黄金の林檎らを介しもし— 結びつきに[911の前言要素]と[黄金比]の多重関係が現れているとの小説作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』(回帰)]

→ いる (p.605にての脇にての追記部らを参照のこと)。そうもした『2001年宇宙の旅』特性に見るモノリス(映画版冒頭部にて猿らに啓蒙を与える黒曜石碑状の物体として印象深くも描かれている存在)とは語源に着目すれば【アインシュタイン】そのものを指す語となる。その点、モノリス mono-lithとは語源の問題として【one stone】であると一般に解説されている(目につくWikipediaにての[Monolith]項目にあって"The word derives, via the Latin monolithus, from the Ancient Greek word μονόλιθος (monolithos), from μόνος ("one" or "single") and λίθος ("stone")."「モノリスとの語は古代ギリシャ語における[一つの石]を指す μονόλιθοςに通ずるラテン語 monolithusに由来する」と解説されているところもある)。対して、アインシュタインとはドイツ語の ein (一つの) stein (石)の合成語である。モノリスが【一つの石】ならば、アインシュタインも one stone とのことと両者は通じ合っている。ブラックホールを巡る関係性との兼ね合いで筆者が何を問題視しているのか、多少なりともご理解いただけることか、とは思う。

追記：こちらキップ・ソーン著作『911の予見的文物』としての側面を帯びていることを本稿で問題部原文引用にて指摘した著作)の全文タイトルはBLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』となる。ここで当該の著作タイトルに見るアインシュタインズ・アウトレイジャス・レガシー「アインシュタインのとんでもない遺産」とされているのはブラックホールやワームホールといった「不可思議も極まりないもの」がアインシュタインの理論の登場の背面で世に登場することになったことを指す(本稿本巻p.107から108にての引用部に見るように当初ブラックホールに通ずる解はアインシュタインらにすら好かれていなかった、とんでもないものとして科学界にて総好かんを食らっていた)。ここで書くが、本書ではここに至る追記部にて『2001年宇宙の旅』の【ブラックホールゲートに比定されるもの(モノリス・ゲート)にブラックホール理論開拓者の名から命名されたの架空の科学者の手仕事とされたの人工知能(HAL9000)に似ていくなれど作品」との側面を問題視して→(左側へ)

以上のような関係性 —先だって申し述べもしたこと、そして、何度も何度も繰り返したいところとして「奇矯さが際立っての途方もないものだが、現実にもそこに存在していると明朗に指し示されるところのものである」との関係性— が存在している(存在してしまっているとした方が至当であろうが)とのこと

に加えてカール・セーガン『コンタクト』にはこれ以降、続いてさらに指し示していくような不快事が伴っているため、

[偶然の悪戯の問題で済まないうえに「表記のような隠喩性が現出を見ていることについてはカール・セーガンという男の属人的主観の問題で済まされるものではない」と述べられるようになっている (なってしまう)]

と強調するのである (そも、カール・セーガンが属人的思惑の問題として確信犯的に911の事件の事前言及作品に通ずる寓意などを作品の中にて織り込んでいた、たかだか、セーガン一個の思惑の問題として織り込んでいたとはおよそ考えられないところであろうとのこともある(これまた先に述べていたこととしてそういうこともある)のだが、にまつわっての煮詰めての説明はより後の段、本稿の[d]以降の段でなしていくこととする)。

ここで

[(グランド・セントラル駅にまつわっての多重的關係性の具現化に関してはそれが [偶然の一致] ではないと露骨に映るうえでも) セーガン個人の属人的な恣意の賜物でもない (よりもって大なるところの思惑が問題になる)]

とのことについて「加えて」問題視したいとの事柄(ここで取り上げることとするとの事柄)としては以下のことが挙げられる。

[ニューヨークのグランド・セントラル・ターミナル (古くから続く愛称としてグランド・セントラル・ステーションと呼ばれてきた世界最大級の鉄道ターミナル駅) にあつての建物頭頂部に設置されているのは **Glory of Commerce** との名称を与えられてのオブジェ — グランド・セントラル駅とくれば、そちら像が駅の象徴アイコンとなっていると按配で目立って配されているオブジェ — となり、同オブジェにてメイン・モチーフとされているのは

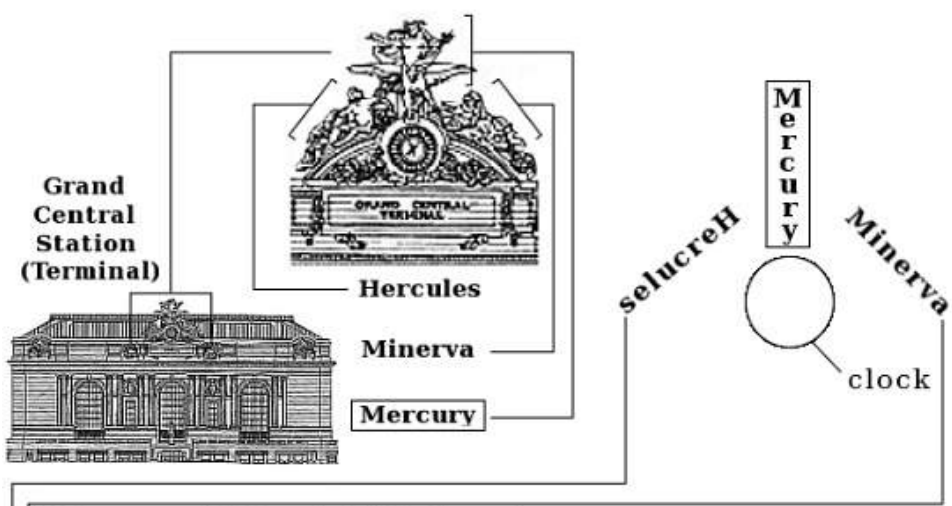
【マーキュリー神】 (ギリシャのヘルメスのローマ化神格)

だが、そのマーキュリー以外の同じくものオブジェにあつての両脇に配された彫像らの特性も問題となる。

オブジェ **Glory of Commerce** にあつては中央の目立ってやまないとの [マーキュリー] と並び、[ヘラクレス] と [ミネルヴァ] の彫像が左右に据え置かれて「も」いる (：せんだって “ **Hercules, Minerva and Mercury, statuary by Jules-Felix Coutan, atop the terminal, with the MetLife Building behind** ” との英文 Wikipedia [**Grand Central Terminal**] 項目にての「現行の」オブジェ解説記載内容を先に抜粋したとおりである)。

そこに見る、ヘラクレスとミネルヴァの両存在を通じて「も」[ブラックホール生成問題]に通ずる相関関係が示せるようになっているとのことが —カール・セーガンがグランド・セントラル・ステーションをブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲートの終着点として持ち出しているとのことの兼ね合いで— 呈示できるようになっている(であるから、やりようがあまりにも堂に入っており、カール・セーガン「個人」の意趣の問題では[こと]は済まされない) 」

表記のことについては続けての図をご覧ください。



Minerva (&Aegls&Medusa)



Octavius



Hercules



great-grandchild



Perseus & Medusa

great-grandfather

最上段の図についてはここまでの流れから解説不要であろうと述べるに留め、中段の図らについてであるが、それらは【ミネルヴァ(ギリシャ神話のアテナのローマ語呼称)】

及び【ミネルヴァ(アテナ)と結びつけられてよく図像化されるアイギスという神器】の似姿を挙げたものとなる。より具体的にはそれぞれ【合衆国の画家エリユー・ヴェッダー(Elihu Vedder)の手になるアメリカ議会図書館存在のモザイク画『ミネルヴァ』】(左) と【神器アイギスをまとった姿で描かれるローマ初代皇帝アウグストゥス(オクタウィアヌス)のローマ期作成のものとしてされるカメオ — Blacas Cameo との呼称で知られるもの— 】(右)とを挙げたものが上掲図解剖中段の図像らである。 — その点、図にてそのありようを示している神器アイギスについては本稿にての**出典** (Source) 紹介の部 63 (4) で既にその特性につき一言言及しており、(そこにて引いていたところの和文ウィキペディア[アイギス]項目の記述を再度、挙げるとして) “ペルセウスはメドゥーサの首を持ち帰る際、いくつかの局面(巨神アトラスに会った時、ケーペウス王の娘アンドロメダーを救出するために怪物を倒す時、アンドロメダーとの結婚の祝宴中に乱闘が発生した時など、ただしこれらについては諸説ある)においてメドゥーサの首を使って相手を石化させている。アテーナーはその首をアイギスに取り付けることで、アイギスをより優れた防具にしたという” (引用部はここまでとする) といった解説がなされる楯ないし胸当てとしての神器のことを指す——。

前掲図解剖にあつての下段にあつては【爬虫類の眷族を退治したと伝わる存在としてのヘラクレス特色を体現してのヘラクレスを主軸に据えての版画】および【(ヘラクレス曾祖父の)ペルセウスの想像上のありようを象(かたど)っているとの彫像】ら、同じくもの時代、同じくもの領域、16世紀イタリア・ルネサンス期の作品らを挙げている。より具体的には【Giorgio Ghisi との 16世紀芸術家に描かれたヘラクレス版画(16世紀著名芸術家に作成されたオールド・マスター・プリントとされる一群の版画の中のひとつで1558年作成のものが英文 Wikipedia に公開されているとのもの)】(左) および【ベンヴェヌート・チェッリーニ(Benvenuto Cellini)の手になる1554年作と伝わるペルセウス彫像】(右)となる。 — 極めて著名なペルセウス像については本稿にての**出典** (Source) 紹介の部 63 (4) でも同じくものものを著作権のしぼりなき著作からの抽出をなしていた——。

以上、そこにて呈示の図らの由来を一言表記した関係図についてだが、一目して分かるかと思うところとして、図中にてメデューサを通じての対応関係を訴求してもいる。すなわち、アテナやアウグストゥスが身に帯びているとの神器アイギスに組み込まれたメデューサがペルセウスに首を狩られた存在であることを図らを通じて訴求している。

そうした図にての訴求をなしたのはひとつにヘラクレスが蛇の眷族退治の存在にしてメデューサ退治のペルセウスの子孫となっていることに物事の本質を読み解く一つの鍵があると筆者が見立てるに至ったからである(本稿にてのここまでの段でも十全に訴求してきたところとして【粒子加速器にまつわる予言じみたありよう】・【911の事件の発生にまつわる予言じみたありよう】の双方に【ヘラクレスの物語】および【爬虫類絡みの存在】が関わっているとのことが揃い踏みで認められる — 機械のような者達は事実と相対し、事実を直視することさえ拒否するか、ともとらえているのだが、そういうことが表出を見ている力学が問題となるところとしてそういう事実が確たる証跡の問題として具現化しているとのことが認められる— のがこの世界である)。

さて、直上、本稿従前内容の振り返りをなしもしながら図に言い添えたところに通ずるところのものとて、次の図をご覧頂けたらば、と思う。

the 11th labour of Hercules

Minerva

→ Atlas & Golden Apple

ヘラクレスの11番目の功業は「巨人アトラス」と「ヘスペリデスの黄金の林檎の園」が登場するものとして有名である。

ローマ神話ミネルヴァのギリシャ神話版の存在たる女神アテナは——黄金の林檎を獲得しそこなったことで遺恨を抱き——トロイア戦争の折にあってトロイア破壊を促進した存在であると語られている存在である。

Atlantis

deluge

promote

トロイア崩壊
destruction
of Troy

Golden Apple

Odysseus

the garden of Hesperides

アトラスという名の者が王として君臨していたとプラトン古典が語るアトランティスの等価物として「ヘスペリデスの黄金の林檎の園」と女神カリュプソの島が挙げられる。その両者共々、トロイ戦争との結びつきが観念されるものである(出典は下に紹介)

the island of Calypso

phase1. Wooden Horse & massacre
(phase2. Deluge of water)

" The sea Dashed o'er it, and the roaring torrents still rushed on it, swollen by the rains of Zeus; And the dark surge of the wide-moaning sea still hurled them back from mingling with the deep, Till all the Danaan walls were blotted out beneath their desolating flood. Then earth was by Poseidon chasm-cleft: up rushed Deluge of water, slime and sand, while quaked Sigeum with the mighty shock, and roared the beach and the foundations of the land Dardanian. So vanished, whelmed from sight, That mighty rampart. Earth asunder yawned, And all sank down, and only sand was seen, When back the sea rolled, o'er the beach outspread far down the heavy-booming shore. All this The Immortals' anger wrought. " —— Smyrnaeus Quintus (The Fall of Troy)

[トロイアとアトランティスの結びつき(1)]

トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる ([出典(Source) 紹介の部39])。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたとある ([出典(Source) 紹介の部41])。

また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完遂したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では

[カリュプソの島]
というものが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた (e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど)とある ([出典(Source) 紹介の部43])。

[トロイアとアトランティスの結びつき(2)]

黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』(英文タイトル the fall of Troy)に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬で内側から破壊させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである ([出典(Source) 紹介の部44-3])。その点 [ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破壊] とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである ([出典(Source) 紹介の部44-4]に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと)。

大体のことは図解部にて書き込んだ関係性のパスを目で追うことでお分かりいただけるものか、とも思うのであるが、(グランド・セントラル・ステーションに目立ってのマーキュリーの左右をかためるとの) [女神ミネルヴァ(女神アテナのローマ化存在)] および [ヘラクレス] の双方が [共通の要素] をもってして [トロイア崩壊を巡るプロセス] と結びつく存在「でも」ある とのことを上図解部では訴求せんとして

いる。

具体的には

[黄金の林檎]

をもってして両存在（カール・セーガンの小説にてゴールとされたグランド・セントラル・ステーション、その現実世界の比定地たる世界最大のターミナル駅たるニューヨークのグランド・セントラル・ステーションにあってのマーキュリーの左右をかためるとのミネルヴァ像およびヘラクレス像）はトロイアとも結びつくようになっており、それは

[トロイア崩壊は黄金の林檎を求める女神らの美人投票での争いに起因している]

[[巨人アトラス]と[黄金の林檎]の双方に関わるのがヘラクレスの第11功業である]

[[黄金の林檎]を巡る闘争に敗れたアテネ神がそのことを遺恨をもってオデュッセウスの奸策に至るトロイアの崩壊プロセスを側面支援していると伝承は語っている]

との式で指し示せることとなっている（以上は本稿**出典 (Source) 紹介の部 39**にて細かくも出典を挙げているとのことである）。

そして、そうした

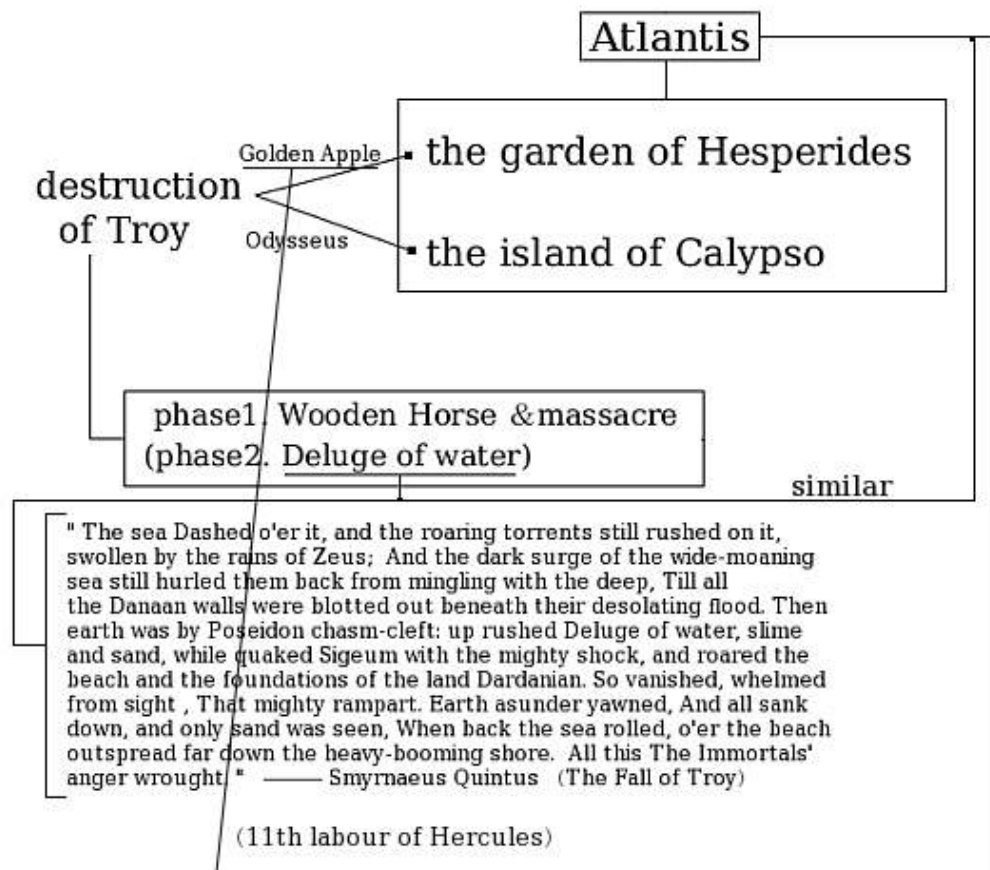
[黄金の林檎とトロイアとの結びつき]

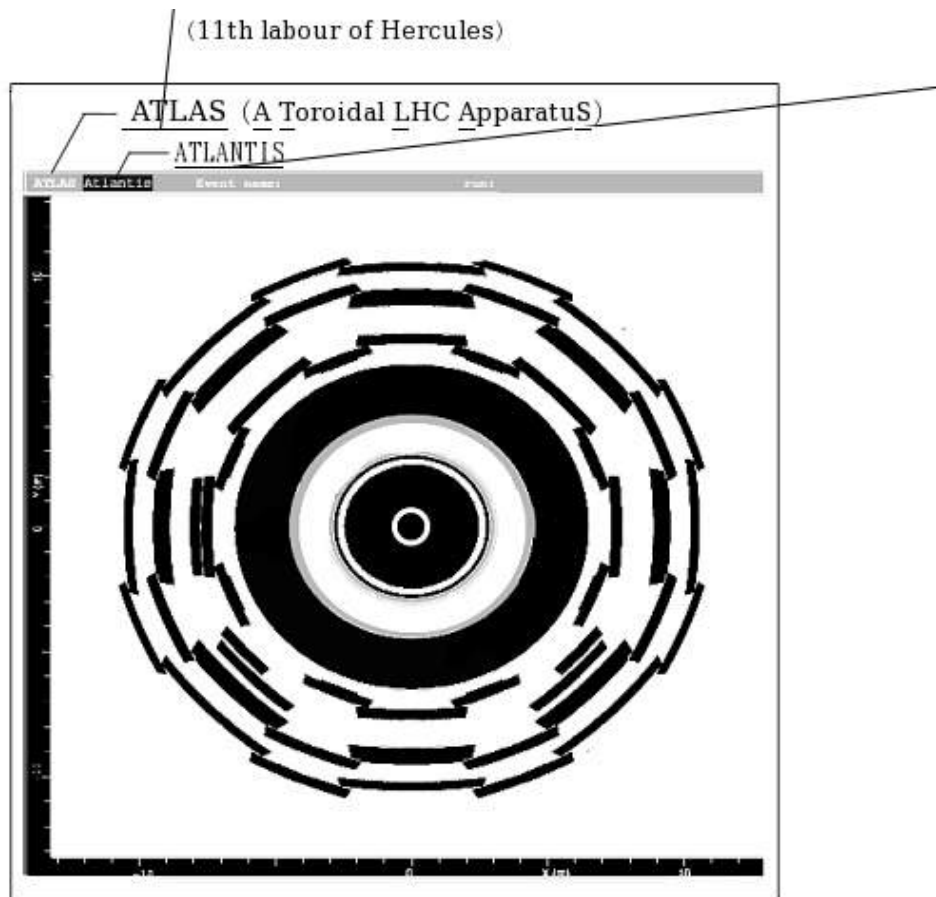
は（プラトン古典に見る大洋の海底に沈んだと伝わる）古の陸塊アトランティスと接合するものとなり、また、「であるから、問題となる」ところとして

[加速器によるブラックホール生成トピック]

と色濃くも接合するものでもある。

につき、アトランティスとの接合性については上掲図解剖、それ自体に付属させての記述部でも言及しているが（アトランティスと同一視されてきた場が**[黄金の林檎の園と結びつく場]****[トロイアを木製の馬で滅ぼしたオデュッセウスの苦難の航海での漂着先たる女神の島]**ともなっているといったことがそうである）、**[黄金の林檎とトロイアとの結びつき]**と**[加速器によるブラックホール生成問題]**の間の接合性とはいかなることか。それもまた本稿をまじめに読み解いているとの読み手に厭気を引き起こす程に「度々も強調してきた」ところなのであるが、およそ次のようなかたちで図示できるところの接合性となる。





[micro black hole generating event] detection

[ヘラクレス11番目の冒険に登場する黄金の林檎(トロイア崩壊の元凶でもある)および巨人アトラス][古のアトランティス][木製の馬によって滅ぼされたトロイア]の全ての要素と多重的に結合するとの命名規則が「事実の問題として」採用されているのがブラックホール生成をなしようと主張されているLHC実験である(：LHC実験とはATLAS検出器で[科学の進歩に資する([出典(Source)紹介の部81])との「安全な」ブラックホール]を生成・検出しようと関係者らが「胸を張っている」との[実験]となり、また、その際のありうべきブラックホール生成イベントをディスプレイ上に現出するのがATLANTISと命名されたEvent Display Toolともなっている[実験]でもある([出典(Source)紹介の部35]から[出典(Source)紹介の部36(3)]を包摂する解説部を参照のこと)。また、同LHC[実験]、CHARYBDIS——トロイア崩壊をもたらしたオデュッセウスが飲み込まれた「渦潮の」怪物——の名を冠するブラックホール生成シミュレーションツールが供されている([出典(Source)紹介の部46])とのもの「とも」なる)

出典紹介部参照先(の言及)を内包するところの上図解部、CERNのブラックホール・イベントを観測する可能性のある[ATLANTIS]や同[ATLANTIS]にデータを供給する観測装置にして実験グループの[ATLAS(グループ)]について言及しているとの上図の検討をもってして多くを理解いただけることかと思う(尚、LHCのディテクター(観測装置)名称となっているATLASとはヘラクレスの第11番目の功業にて黄金の林檎を知る巨人として登場を見ているとのことの意味性を本稿にて問題視してきた巨人の名でもある)。

以上が

[(グランド・セントラル駅にあって目立つマーキュリーの左右をかためるとの)【女神ミネルヴァ(女神アテナのローマ化存在)】および【ヘラクレス】の双方が[共通の要素]をもってして【トロイア崩壊を巡るプロセス】と結びつく、のみならず、【加速器によるブラックホール問題】とも接合する]

との意味合いについての(従前内容に依拠しての)説明となる。

世間人並みの理解力([意志]の力に支えられた理解力)を有しているとの人間がまじめに本稿を読み解かんとしているのであれば、そうしたことがカール・セーガンの『コンタクト』にまつわるここまで述べてきた内容といかように結びつくかもご理解いただけることか、と思う。

述べるまでもないことか、とも思うのだが、それはこういうことである。

「カール・セーガン『コンタクト』は [トロイア崩壊(なかんずく、トロイアを木製の馬で滅した男、オデュッセウスの道程)] とも多重的多層的に結びついている — そうした多重的多層的結びつきが[偶然の賜物]なのか、ではないと判じられるのなら、[どのレベルでの恣意]が問題になるのか、との観点での突き詰めの分析をなしているのがここ本段となるわけであるが、とにかくも、『コンタクト』はトロイア崩壊と多重的多層的に結びついている。そして、カール・セーガン『コンタクト』はブラックホール生成問題との兼ね合いでそうした特質を有した作品であるがゆえに問題となるとの訴求をなしてきた。

具体的には

[グランド・セントラル・ステーションのアイコン(象徴)となっている[マーキュリー＝ヘルメス]による百眼巨人アルゴス(アーガス)殺し]

と

[ブラックホール・ゲートないしワームホール・ゲート生成装置が向かう先たるグランド・セントラル・ステーションに主人公らをいざなったプロジェクト・アーガス]

との結びつきに

[トロイア攻囲勢たるギリシャ連合軍の別称たるアルゴス勢]

や

[(トロイアに引導を渡した男である) オデュッセウスのサイクロプス殺しの物語]

や

[カール・セーガンという男のオデュッセウスの歩みと結びつく属人的来したし・来歴]

がいかに関わっているかを指し示さんとしてきた話を通じもじて同じくもの点、トロイア崩壊にまつわるエピソードがブラックホール生成と小説作品『コンタクト』で巧妙に(としか述べようがないとの式で)結びついているがゆえに問題となるこのことについての訴求をなしてきた。

その点、オデュッセウスとはトロイアに木製の馬で引導を渡した男だが、同オデュッセウスのサイクロプスの目潰しによる撃退がカール・セーガン小説『コンタクト』に認められるプロジェクト・アーガスに名を転用されての百眼巨人の目潰し(百眼巨人の百眼を蛇の杖でメスマライズ、催眠作用を及ぼして瞑(つぶ)らせたとのやりよう — 目立つところでは(現行の)英文 Wikipedia[Hermes] 項目にて “Greek History and the Gods. Grand Valley State University (Michigan). Retrieved 2012 との出典を元にして(引用なすところとして) Hermes placed a charm on Argus's eyes with the caduceus to cause the giant to sleep, after this he slew the giant.” 「ヘルメスは巨人アーガス(アルゴス)を眠らせるためにカドゥケウス(蛇の杖 Caduceus)をもってしてアーガスの眼にまじないを施し、その後、巨人を殺傷した」と表記されているところともなる —) とグランド・セントラル・ステーション配置のマーキュリー像を介して結びついているとのこと、ここまで詳説をなしてきたとのそのことは同じくものグランド・セントラル・ステーションのアイコン(象徴記号的存在)としてマーキュリーの左右を固めるかたちで存在しているとの[ミネルヴァ]および[ヘラクレス]にまつわるところでも、

[トロイア崩壊を巡るプロセス — 百眼巨人アルゴス(アーガス)と同じくものアルゴスの名を帯びていたギリシャ勢(アルゴス勢)に滅ぼされた都市の崩壊のプロセス/アルゴスという名の有名な飼犬と結びつけられ、また、イサカとの地にまつ

わる特色からカール・セーガンと結びつくオデュッセウスの木製の馬の計略で滅ぼされた都市の崩壊のプロセス——]

[加速器によるブラックホール問題]

が [黄金の林檎] との絡みで表出を見ていることとの絡みで [あまりにも平仄が合う] とのかたちで結びつくようになってしまっている(わけである)

尚、筆者は常識的な線でも予見性との絡みでカール・セーガンが「同男個人の意図として」ブラックホール生成問題を予見・訴求していたわけでないと考えられる理由(「出来る」「出来ない」の「出来ない」との方向に関わるところとしてそも考えざるをえない理由)を指し示さんとしてきた。

直下、再述するようなかたちにて、である。

(先の段の内容の(多く文言そのままのもの)再述として)

確かにカール・セーガンが小説『コンタクト』を著した折には SSC (Superconducting Super Collider こと超伝導超大型加速器) の建設計画が背面で進んでいたとの事情があるのだが(本稿の前半部でも多少ながら言及していることである)、[米国科学界を牽引するオピニオン・リーダー] とでも言うべき立ち位置にあったカール・セーガンがそれと明示せずに加速器におけるブラックホール生成(表向きは予算との兼ね合いで中途放棄に至った SSC のようなものによるブラックホール生成)にまつわっての警鐘を鳴らそうとしていたのか否かについて判断する上で決定的に重要なのは

[統一性理論の候補としてのひも理論に検証材料を与えることになる(出典(Source)紹介の部 81) との加速器によるブラックホール生成]

のことが現実的にありうることと考えられるようになった背景には

[1998 年に提唱された余剰次元の理論的帰結を受けての理論深化によって [テラエレクトロンボルト領域] でも重力が強くなりブラックホール生成が観念されるようになった]

との事情がある(と専門家らが一様・異口同音に発表している) ことである。

それ以前は、そう、1998 年以前は人間が極小領域に一点集中投下できるエネルギー規模として実現できるエネルギー —— (本稿にての **出典(Source)紹介の部 21** および **出典(Source)紹介の部 21-2** を包摂する段で仔細に解説しているようにガソリンタンクで車を走らせるに等しきギガジュール単位のプランクエネルギー (Planck Energy) を極小の陽子の領域に一点投下集中投下するとのやりようではなくにもの [たかだか蚊が飛ぶ運動エネルギー(ナノジュール相当のエネルギー)] に等しいとのテラ・エレクトロン・ボルト単位のエネルギー) —— では加速器がブラックホールを生成する可能性は「全くない」と考えられていたとされているとがある(: 同点については本稿本段よりそう遠くない前の部にもブラックホール生成問題に関する理論的支持材料を与えたとの有力物理学者リサ・ランドールが「一九九〇年代より前の時代には、実験室でブラックホールが生成される可能性など、誰も考えていなかった」と述べていることを同女著作(『宇宙の扉をノックする』)より引用したが(**出典(Source)紹介の部 76(5)**)、研究機関の報告書レベルでもそのように「はきと」明言されている —— ※本稿で問題視してきたところの米国家学者論稿 THE BLACK HOLE CASE: THE INJUNCTION AGAINST THE END OF THE WORLD (論稿配布サーバー arXiv よりダウンロードできるのもの) にても、先に引用したように、その 838 と振られたページにて研究者報告書内容を受けてのところとして “ In 1999,

※【(再度もって
しての)文書具体
的内容から離れ
もしての外挿表
記としまして】:こ
こでのそれよう
に本稿では「頻
繁に」文字色と
背景色を変えて
の【出典紹介部】
表示のための表
記をなしています。
本稿全体の指し
示し内容の重大
性を顧慮して【後
追い可能な典
拠】の細部に至る
までの表示からし
て必須事項ととら
えているからでは
ありませんが、無
論にして、後追
い「可能」である
だけではなく後追
い「容易」である
必要もあるとの認
識が書き手この身
にはございます。
にまつわって後
追い「容易」性
の方をもちます方
式、すなわち、
【都度、即応的に
すべての出典紹
介部の内容を即時
確認するための
方式】を本稿
にあっての冒頭
p.2 で細かく紹介
しておりますので
【頻繁に本稿の
典拠内容の確認
をなす必要】を
感じておられると
の方々におかれ
ましてはそちら本
稿 p.2 で案内さ
せていただいて
おります方式を採
択いただければ
と考えます(典拠
内容確認を容易・
即応的になすと
のその紹介方式
とは本稿を収め
た PDF 文書を別
名保存で二ファ
イル用意し、うち、
片方を閲覧用、も
う片方を(巻末数
ページの出典紹
介部一覧表記部
「だけ」を印刷し
て役立てつつ)出
典確認用電子文
書として活用いた
だくとの方式とな
ります)

when questions floated in the media about accelerator-produced black holes, physicists issued an assurance that no particle collider in the foreseeable future would have enough power to accomplish such a feat. Busza report, which was done in anticipation of the commencement of RHIC operations. The report did a rough analysis of the particle collisions that would occur at RHIC and the gravitational effects that might result. The Busza team found that the forces created by the RHIC were orders of magnitude too small to possibly create a black hole.” (訳として)「1999年、加速器製ブラックホールについての疑問がメディアに浮かんできた折、物理学者らはそのような業(わざ)をなしうるのに十分な力を有した[予見しうる未来にあつての加速器]は存在しないとの保証を發した。(加速器実験機関お抱え物理学者である)Buszaの報告書はRHIC運転開始を期してもものされたものである。同報告書はRHICで發生しうる粒子衝突および結果となる重力効果らについて「大よその」予測をなしたとのものであつた。BuszaのチームはRHICによって生成される力はブラックホールを生成するにはあまりに小さすぎると同定していた(以下略)」(引用部はここまでとする)とまとめられている通りである——)。

であるから、カール・セーガンの没年以前(1996年以前)、況や、小説『コンタクト』が世に出た以前(1985年以前)には加速器でブラックホールが生成される、それがリスクであるなどとは世界中の学者らは誰も主張していなかつたと判じられるとの状況が問題となる(筆者は一生懸命そうした申しようを否定できるだけの学者論稿といった理論動向としての反対証拠がないものか、探知探査活動に努めてきたのだが、残念ながら、寡聞で「はない」とのところを理論動向の問題として反対論拠となるところを全く發見できず、科学界関係筋の發表文通りの物言いが真なりと認めざるをえないことを確認させられている——(述べておくが、この問題をややこしくしていることには[加速器による世界崩壊のリスクに関しては[異常核物質の生成可能性](Bevalacにまつわるところとして1970年代中盤以降のやりとりを**出典(Source)紹介の部11**で仔細に解説している)や[真空の相転移問題](1983年にマーチン・リースらによって解決策が提示されたそれとなり、については**出典(Source)紹介の部12**にて解説している)といった加速器に伴つての破滅的リスクが取り沙汰されてきたとの従前経緯がありもする。だが、それら従前に取り沙汰されてきた加速器リスクはブラックホール生成とは異質のものであつた]とのこともあるにはある。しかしながら、それら本稿の先の段にて仔細に解説している加速器リスクをカール・セーガンが小説『コンタクト』と批判材料にしていた「とも」考えられない。そも、カール・セーガンは「加速器およびその加速器に関して従前取り上げられてきた破滅的リスクとは無縁なるものとしての」「ブラックホール生成を問題としている」からである(**出典(Source)紹介の部80(2)**および**出典(Source)紹介の部80(3)**)——)。

(以上、本稿の先立つ段の流れを繰り返しての話とした)

表記の常識の線から見たうえでの不可解さをおもんぱかつて(「偶然ではない、恣意的なやりようであるとしても、[ことの本質]がカール・セーガンという男の属人的恣意の問題で済まされるようなものではない」とのここでの話にあつて記すべきと判じたことについて)書くとして、カール・セーガンは[予言者]か何かかともいうのか。その点、カール・セーガンのそうした側面(予言者がかつた側面)について——現行はブラックホール生成問題とは一切関係ない式でだが——数学理論を交えて取り上げているような向きの見解が英語圏の数学なぞに識見深くもある者達が出入りしているようであるとのフォーラム・ページなどにて見受けられる(とのこと、本稿筆者は捕捉している)。

英語圏でのカール・セーガンやりように関する指摘などは(有識者らが発言している英語フォーラム・

サイトなどに見受けられる言い方を整理・要約して示すとして)曰く、

「カール・セーガンはアーガス計画にての電波受信にて正十二面体のゲート装置の設計構図が送られてきたと自作品『コンタクト』にて描写しているが、それは 1985 年のこと。他面、ポアンカレ型構造体としての正十二面体構造で宇宙像そのものを見ようとの見解が電波(宇宙背景マイクロ波)受信プロジェクト 一本稿にての先行する段、**出典 (Source) 紹介の部 77(3)**にて取り上げた [宇宙の構造が 12 面体構造を取るのではないかと **WMAP**(ウィルキンソン・マイクロ波異方正探査機)が収集したデータに基づいて考えられるようになった] との話である— の結果、提唱されだしたのは「そのよりもつて後」のことである」(だから、「すごいね」、とのことなのだろうが、それ以上の申しようはなすべきではないとの判断があるのか、ものを考える人間「にも」自由度がないからなのか、背景にあること、ありうることについてのそれ以上の物言いがなされている様を現行は一向に見受けない — これより頭の具合のよろしくはないといった紛い物らが偽物の日付け偽装媒体などで取り合うに足りぬ愚論に混ぜて真実を毀損するために相応のものをばらまく可能性も否定しないが、筆者が観測するところでは現況はそうなっている—)

といったものとなっている。

確かに **WMAP** にまつわる正十二面体絡みの話からして [ここ 10 数年で問題となった学者らの新規の論調が存在している] こと自体は同意できる(というより同意せざるをえない)とのことがあり(本稿の **出典 (Source) 紹介の部 77(3)**にて [**WMAP** が宇宙構造を正十二面体構造をとるとの材料を提供したとのことが問題視されているとの事実]を紹介している)、カール・セーガンが宇宙から送られてきた電波の類を 1985 年に正十二面体構造と結びつけていたとのことがある一方で、何故、「できすぎた」ところとして時期的先後関係が入れ替わっているように後の宇宙論にては宇宙を正十二面体でとらえるとの観点が — 仮説なりといえども — 宇宙マイクロ波背景放射(こちらでも電磁波の類)の探査プロジェクト(2001 年以降の **WMAP** ウィルキンソン・マイクロ波異方正探査機を用いての探査プロジェクト)の観測結果に基づいてもたらされたといったことがあるのか(宇宙を正十二面体と見る仮説が仮説以上のものとなるかは別として[電波探査活動と正十二面体にまつわる贈り物]で話がつながる)、そういう疑念・疑義は別に宇宙論の専門家などではないとの人間にも確かに普通に生じて然るべきところであろうと見えるようになっている(：宗教の徒輩ならば、「カール・セーガンが「偉大なる」神のお告げを聞いていたから先覚性を感じさせる言及をなせたのだ」なぞとの愚劣な申しようをなそうところか、とも思うのだが、筆者はそのようなロマンチックな、いや、グロテスクな申しようはなさない。その点、[没義道]の極みといったところが具現化してのやりようにまつわる可能性論の話、[多面世界を浸潤するとの重力波の機序]などを用いての人間の脳機序に対するコントロールの可能性は後の段で — 「本稿の本筋をなす話ではない憶説がかったものである」と断りつつも — 多少細かくもなす所存ではあるが、筆者は憶測・推測のきらい強き話をなすときでも[可能性論]に代えての物言い、都合良くもの「宗教的」視点での話をなさないように努めている(宗教とは自己のあやふやな主観あるいは脳内の状況に基づいて物事の是非を決めようとの実に愚劣な体系であると考えている)。ちなみにカール・セーガンが宗教の徒輩らがそうして称したがるような [祝福された予言者] (あるいは[オチャクラ人間]でもいいが)なる種別の人間でなく、また、筆者が [観察「現象」] との兼ね合いでありうべきことであると見立てている紐付き、マリオネット仮説のマリオネットのようなものではないとすれば、Carl Sagan が天文物理学の諸種理論を総覧して見れる立ち位置にあった天文学者であった(ここまでは異論はない)だけではなく、[宇宙の十二面体説を 2003 年にて Jean-Pierre Luminet らが (**出典 (Source) 紹介の部 77(3)**)にて言及したように] 提唱した] とのそのこと以前にそうした正十二面体構造に向かうかたちで宇宙構造理論が宇宙背景放射探索にて煮詰められていく予想を立てていたとのことになるとの話になるのか、とは思うのだが、そちらの常識的可能性論を補強する話を筆者は特定できていない(これよりそうした物言いをなす向きが出てくる可能性も否定しないが、現行にては捕捉できていない)。また、仮にその

方向でカール・セーガンの「人間性」「人間らしさ」というものについて「より強くもの期待」を持てるようになって、ここでの話にはその他に問題となるところが——先述してきたところも含めて——数多伴っていることに相違はなく、問題の本質にはなんら変化はない。

ここまでにて詳述してきた「トロイア」に相通ずる関係性について小説『コンタクト』にて具現化を見ているところからしてカール・セーガンの属人的良心によって説明できるものなのかとの観点で取り上げもしたカール・セーガンの予言者「的なる」特性——普通の間人が「収集した証拠」に基づき、理論的・客観的に物事を考えるところを、証拠もなきところで、非理論的・主観的に物事を論じ、また、それがたとえ斜め上に行くかたちでも部分的に至当であるとの特質を帯びているといったことを「どういうわけなのか」具備しているとの特性——の話は以上として、また、次のようなこと「も」——つい先だつての段とすら幾分重複記載を含むとのところとなるが——取り上げておくこととする。

直近、セーガンが「ゲート装置」の行き先として設けていた場であるグランド・セントラル・ステーションの現実世界のモデルとなった該当駅にあつて「ヘラクレス」と「ミネルヴァ(アテナ)」の像らもが据え置かれているとの事実を指摘した。

その両者、ヘラクレスとミネルヴァは(解説なしてきたように)「メデューサ」「多頭の蛇の眷族」に双方共々関わる存在であるが、そうした爬虫類関連の存在がやたらと同一事象・関連事象に関わっているとのことを本稿では【それなりの事情】があつて「故(ゆえ)あつてそうなっているのであろう」との観点で問題視している。

たとえば、アルゴス殺しのヘルメスあるいはマーキュリーについてであるが、彼らの極めてよく知られた象徴は「蛇の杖(カドゥケウス)」であるわけだが、といった「蛇の杖」を持つヘルメスのこと以前によりもつて多くのことを結節させる核となつているところとして、

【黄金の林檎】

という神話上のその象徴物自体が

【エデンにて「蛇」に食すことを唆された誘惑の果実】

と結びつくとの要素を伴っていることが「根本的にも見えるところ」として問題になるとは何度も何度も今まで本稿にて強調なしてきたところである——「エデンの禁断の果実」が「黄金の林檎」と結びつくことを摘示し(出典(Source)紹介の部 50, 出典(Source)紹介の部 51)、それがトロイア関連のエピソードや「どういうわけなのか」ブラックホールのようなものを奇怪無比に先覚描写しているとの著名古典ら(ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』)といかように結びつくかことがいかなうなかたちで問題になるか(出典(Source)紹介の部 55から出典(Source)紹介の部 63(4))、といったことにつき本稿では委曲尽くしての指し示しを試みてきたとの従前経緯がある——。

また、よりミクロの領域の話としては

【加速器問題に通ずる言及をなしている文物】にして、なおかつ、【蛇の異種族】のことをモチーフに取り込んでいる作品の内容】

をこれはこうでこうだとのかたちで具体的に問題視なしてきたとのことがある。その点もつてして本稿の従前の段では次の各作品の相応の特性を問題視していたとのことある。

『フェッセンデンの宇宙』(ワームホールの安定化につながるとの見解が1980年代より理論的に煮詰められ出した負の質量の物質について負の質量の特定化につながった実験(「1948年」実施のカシミール効果測定実験)に類似のものを「1937年」に持ち出していた作品)

／ 加速器実験がビッグバンを再現するものであると現行言及されだしている中で宇宙創成の状況を再現しようとする実験が描かれているとの作品 一本稿**出典 (Source) 紹介の部 22**から**出典 (Source) 紹介の部 25**を包摂する解説部にてその特性を扱っているとの作品—)

『スキズマトリックス』(1985年初出の作品で前半部の終わりのところでローンチリングという円形加速器に機序近しき装置を背景にしての死闘が繰り広げられる作品 ——本稿**出典 (Source) 紹介の部 26**から**出典 (Source) 紹介の部 26-3**を包摂する解説部にてその特性を扱っているとの作品——)

『リアンの剣』(「1949年別タイトルにて初出、1953年『リアンの魔剣』タイトルで刊行」の作品でブラックホールないしワームホールを想起させるゲート装置をかなり非科学的・空想的に登場させているとの作品にして、そのブラックホールないしワームホール関連描写が何十年も後にブラックホールを人為生成する手段となるとの可能性がある」と取り沙汰された陽子ビームと接合するもの(ゲート装置に放り込まれる主人公が手にもっているプロトン・ガンなるもの)と結びつけられている作品／同作をものした作家ライ・ブラケットが上記『フェッセンデンの宇宙』をものしたとの作家エドモンド・ハミルトンの妻である女流作家であったとの作品 ——本稿**出典 (Source) 紹介の部 65 (5)**から**出典 (Source) 紹介の部 65 (9)**を包摂する解説部にてその特性を扱っているとの作品——)

以上の作品らにつき、——話柄選択以外に筆者主観など問題とはならず、また、文献的事実のありようにつき該当部原文引用とのかたちで仔細に提示してきたとの堅い話にあつての問題として——カシミール効果測定実験([通過可能なワームホールの材料]とも後の80年代に見られるようになったとの[負のエネルギー]のことを40年代にはじめた特定したヘンドリック・カシミール実施の実験)について予言的言及をなしている(というのも[重ね合わせた二枚の金属プレートの間の重力中和作用]といった現実の実験結果と近似しての描いているからである)といったものと解されるようになっている『フェッセンデンの宇宙』にあつては**出典 (Source) 紹介の部 25**にて原文抜粋して示している通り、[人造宇宙で二つの惑星が人為的にくっつけられた結果、地球人によく似た種族が爬虫類の種族に皆殺しにされる]との描写がなされ、『スキズマトリックス』では**出典 (Source) 紹介の部 26-3**にて原文抜粋して示している通り、加速器機序に通ずるものであるローンチリングでの死闘が繰り広げられた後、恐竜のような格好の外宇宙星系由来の通商種族がやってきたとのストーリー展開を見せており(同作、『スキズマトリックス』それ自体は予言的作品ではないが、加速器と爬虫類の異種族のことを挙げている作品としてここに持ち出していた)、『リアンの剣』では**出典 (Source) 紹介の部 65 (5)**から**出典 (Source) 紹介の部 65 (9)**にて原文抜粋して示している通り、[リアンの遺産]と作中表記されているブラックホールないしワームホールのものを用いての装置に放り込まれて過去の火星に(加速器のプロトン・ビームのことを想起させるプロトン・ガンを身に帯びながら)予想外に旅立つこととなった主人公がゲートに落ち込んだ後、プロトン・ガンで壁を破壊することで何とか外界に出たとの同・異世界にて大国を影から支配している蛇の亜人種族、[リアンの遺産]を探り当て、それでもって、人間を間接統治の道具としてお払い箱にする道を模索しているとの蛇の亜人種族の支配に抗うとの方向に話が進んでいく、との流れが垣間見える(各作共々揃い踏みで[[加速器問題に通ずる言及をなして

いる文物]にして、なおかつ、[蛇の異種族]のことをモチーフに取り込んでいる作品]となる)。

上記の通りのことを摘示してきた一方で、本稿にあつては、他面、[911の事件の発生の予言的事前言及]をなしている文物らにして、なおかつもって、[爬虫類関連の存在と際立って結びつくとの作品]らとして

『ジ・イルミナタス・トリロジー』(本稿出典(Source)紹介の部 37 から出典(Source)紹介の部 37-5 にて同作がいかように多重的に 911 の前言をなしている作品となっているかを取り上げてきたとの額面上は荒唐無稽小説との体裁を取る作品)

『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』(本稿出典(Source)紹介の部 27 にて同作が 911 の事前言及「的」描写を含む作品にしてそのモチーフとなるものが他世界間をつなぐワームホールのようなものであると解されることについて言及しているとの(額面上にあつてはの)荒唐無稽映画)

のことを問題視なしもしていた。

につき、[黄金の林檎]を重要なモチーフとする(より具体的には[黄金の林檎]と[現代アメリカ国防総省および過去のアトランティスにてのペンタゴンと結びつく正五角形]の並列描写シンボルを重要なモチーフとする)との『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあつては太古のアトランティスの侵略が蛇の人造人間らを用いてなされたとの話の筋立てが展開する。そして、そこではペンタゴンが崩されて異次元介入存在(別銀河由来の、異次元経由で魂を喰らうとの「設定」の存在)が解放されるとの筋立てが反映されている——出典(Source)紹介の部 38, 出典(Source)紹介の部 38-2 にて抜粋——。他面、『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』にあつては[隕石衝突によってこの世界と分かれた世界にあつての恐竜人ら]がこの世界との次元接合をなそうとしているとのありようが描かれている——出典(Source)紹介の部 27 にて言及のとおりである——。

要するに、[911の事件の予言的作品]にして[爬虫類の異種族の侵攻を描いた作品]であるとの表記作品ら(『ジ・イルミナタス・トリロジー』『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』ら)は、と同時に、[異なる世界間を橋渡ししうるとされるカー・ブラックホールやワームホール性質]に相通ずる側面をも帯びているとのことであるが、とくれば、ここつい最近よりブラックホールやワームホールの類を生成する可能性が取り沙汰されることになったとの加速器との繋がりあい、また、加速器によるブラックホール・ワームホールの類の生成可能性が科学界にて取り沙汰される前からブラックホールないしワームホールによるゲートの構築を描いていた小説『コンタクト』との繋がりもがそこにて顧慮されるとのこととあいなる(:同じくものことに関してはそうしたことが皮相的な話に留まらず、[黄金比と結びつくゲート(正五角形・五芒星)]との特徴的な要素を媒介にして「も」結びついているとのことを解説してきた——カール・セーガン『コンタクト』に登場するゲート装置が正五角形を十二枚重ねての正十二面体であるとのこともその範疇に入る——)のがここ本段を包摂する補説 2 と振っての一連のパートとなるわけであるが、その点からして整理できていないとの向きにあつてはここに至るまでの内容を読み直していただきたいものである)。そして、そこには直近言及した『フェッセンデンの宇宙』『スキズマトリックス』『リアンの剣』らにあつての【加速器関連事物——ブラックホールやワームホールとも通じうるもの——を(ときに予言的に)取り上げもし、そこに爬虫類の種族の侵出の問題が絡められているとの筋立て】と通底するところがある。

以上のこと、全て顧慮のうえで見たうえでその関係性の多重性・多層性より

「[マーキュリー (商業の神にして錬金術体系などにてそのシンボル —蛇が巻き付いた杖— が多数用いられているとの神) の彫像が据え置かれたマンハッタンのグランド・セントラル・ステーション] を引き合いにしてもカール・セーガン『コンタクト』に関しては不快な相関関係のことを呈示できる」

との点に関して

[偶然の悪戯の問題で済まない上に「表記のような隠喩性が現出を見ていることについてはカール・セーガンという男の属人的主観の問題で済まされるものではないと判じられる (より大きな思惑の介在が当然に想起される)]

と申し述べるわけである —グランド・セントラル・ステーションの象徴物には【マーキュリー (アルゴスを殺した蛇の杖の持ち主)】の他に【ヘラクレス (11 番目の功業にて黄金の林檎を取得した多頭の蛇と結びつく冒険の英雄)】および【ミネルヴァ・アテナ (黄金の林檎で滅亡することになったトロイアの崩壊を促進した「メデューサ」と通ずる女神)】が鎮座しているとのことを意味性を重んじつつ、である—。

実にもって話が長くなったが、これにて

「[マーキュリー (商業の神にして錬金術体系にてそのシンボルが多数用いられているとの神) の彫像が据え置かれたマンハッタンのグランド・セントラル・ステーション] を引き合いにしてもカール・セーガン『コンタクト』に関しては不快な相関関係のことを呈示できる」

とのことに関して

[現象としてそれはどういうことなのか]

[そういうことがあるのが偶然で済むと考えられるか]

[偶然ではないとするのならカール・セーガン本人の恣意の問題 (e.g. 加速器によるブラックホール生成にまつわっての警告を (それがなせたとは時期的に考えがたい折柄のことながらも) セーガンが個人として隠喩的かつ反語的手法でなさんとしていたといった問題) で済むのか]

との各点について順を追って論じてきたとの本セクション、出だしの部からして「([a] から [f] と振っての一連の話にあつての) [[c] と [d] と振っての段の合間の部にての問題提起をなすためのパートである」と明示して書き進めてきたとの本セクションに一区切りをつけることとする。

せんだつても申し添えたところではあるも、こちら幕間の部にては本書 p.567 から p.621 を割いたとのかたちとなっている

[c] と [d] と振っての段の合間の部にての「長くもなるも、」の問題提起の部はここまでとする

[d].

(ここまで [a] から [c] との段で集中して掘り下げるとのかたちで問題視をなしてきた作品たる) カー

ル・セーガン『コンタクト』にあつては

[ナチスの1936年のベルリン・オリンピックの映像(エポックメイキングにテレビ「中継」放送された映像)が異星文明の地球に対するゲート装置の設計図を送信する上での媒質として使われた]

との設定が採用されているとのことがある。

小説に遅れること12年してから実写化、封切られることとなった映画版『コンタクト』(1997初出/こちら映画版のDVDコンテンツ(日本語版)にあつては後付けで付されての付録コンテンツが原作小説には見受けられ「ない」ところとして加速器のことを文字情報として持ち出しているとのことを先述しているとのもの「とも」なる)、多少原作に改変が加えられているとの映画版『コンタクト』をレンタルするなり何なりしてご覧いただくこと「でも」よくご理解いただけることか、とは思うのだが、

[テレビ電波は宇宙に漏れ出ている。そちらを傍受した外宇宙の他文明が史上初のテレビ映像、その場に登場しているアドルフ・ヒトラーのオリンピック開会宣言の映像(その映像を流したベルリン・オリンピックは史上初の定性的な中継放送を行ったイベントとして知られる)を外宇宙文明(作中設定ではヴェガ星系の異文明)が受信したうえでそちらを地球に送り返し、その電波が『コンタクト』作中の宇宙電波探査計画たるアーガス計画で受信された。その受信映像の中に[12面体のゲート装置の設計図]がコードとして隠されていた]

という実に凝った作中設定が『コンタクト』という作品には見受けられるようになっている。

以上のことについて小説『コンタクト』より原文抜粋しての指し示しをなしもし、そのうえで、同じくものことから何が問題になるのか、の話をなす。

出典(Source)紹介の部 83

SOURCE

83



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部83にあつては、

[小説『コンタクト』で[ナチスのオリンピック開会宣言]が異星よりの返送電波として用いられているとの設定が採用されていること]

の出典を挙げることにする。

(直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版上巻(新潮社)131 ページから132 ページ、[数列の解説]の章よりの原文引用をなすとして)

<アーガス>の電波天文学者たちは、この数日間に少なからぬ成果をあげていた。ヴェガは既知の運動をしている——地球に接近、もしくは離れる速度にしても、あるいは天空を斜めに横切ってもっと遠方の星の方角に移動する速度にしても、すでに解明されている。その事実をもとに、<アーガス>の電波望遠鏡はウェストヴァージニアとオーストラリアの電波天文台との連携によって、問題の電波源がヴェガと運動しているという事実を確認したのである。可能な限り厳密に計算したところ、信号はヴェガのある天空領域から送信されており、ヴェガ特有の特徴的な動きをなぞっていたのだ。

(以上、国内にて流通している訳書よりの引用部とする —※—)

(※尚、原著 **CONTACT** にあつての該当部表記はその Decryption Algorithm の章にあつての ——オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして—— “ The Argus radio astronomers had made progress in the last few days. Vega had a known motion--a known component of its velocity toward or away from the Earth, and a known component laterally, across the sky, against the background of more distant stars. The Argus telescopes, working together with radio observatories in West Virginia and Australia, had determined that the source was moving with Vega. Not only was the signal coming, as carefully as they could measure, from where Vega was in the sky; but the signal also shared the peculiar and characteristic motions of Vega. ” とのものとなっている)

(続けて直下、邦訳版カール・セーガン『コンタクト』文庫版上巻(新潮社)155 ページから156 ページ、[重ね書きの羊皮紙]の章よりの原文引用をなすとして)

「こういうふうにお考えください。このたびヴェガから送信されてきた数分間のテレビ画像は、一九三六年、ベルリン・オリンピックが開催されたときに放送されたものなのです。当時はドイツ国内でしか放送されなかったとはいえ、それはある程度の完成度をもって実現された、地上最初のテレビ中継放送でした。ラジオ放送とちがって、テレビ電波は地球をとりまく電離層を突破して宇宙にこぼれるのです。あのときドイツ国内で放送された内容を目下調査中ですが、結果がでるまでにはもう少々時間を要するでしょう。たぶん、ヒットラーのあの開会宣言は、ヴェガでとらえられた放送内容のほんの一部分なのかもしれません。

(以上、国内にて流通している訳書よりの引用部とする —※—)

(※1 尚、原著 **CONTACT** にあつての該当部表記はその Palimpsest の章にあつての ——オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで

特定できようところとして—— “Look at it this way: **Those few minutes of television from Vega were originally broadcast in 1936, at the opening of the Olympic Games in Berlin.** Even though it was only shown in Germany, it was the first television transmission on Earth with even moderate power. Unlike the ordinary radio transmission in the thirties, those TV signals got through our ionosphere and trickled out into space. We're trying to find out exactly what was transmitted back then, but it'll probably take some time. Maybe that welcome from Hitler is the only fragment of the transmission they were able to pick up on Vega.” とのものとなっている)

(※2 ここまで引用なしてきたことに関わるところとして小説『コンタクト』にあっては地球電離層を突破してのナチスの史上初のテレビ番組画像データをはじめ諸種の人類由来の情報が[26の素数の形態]をとって外宇宙より返送形式で送られてきたと描写されている。そして、同小説では[ナチスによるテレビ画像を含む素数データが全部ひっくるめてマシンの設計図になっている]とのことが後に判明したとの展開を見ることになる——それについては英文 Wikipedia[Contact (novel)]にあっての表記を引けば、(以下、現行記載を引用するところとして) “To his surprise, the project discovers a repeating series of 26 prime numbers coming from the Vega system 25 light years away. **Further analysis reveals information in the polarization modulation of the signal. This message is a retransmission of Adolf Hitler's opening speech at the 1936 Summer Olympics in Berlin; the first television signal powerful enough to escape Earth's ionosphere.** The President of the United States meets with Ellie to discuss the implications of the first confirmed communication from extraterrestrial beings. Ellie begins a relationship with her science advisor Ken der Heer. With the help of her Russian colleague Vaygay Lunacharsky, Ellie is able to set up redundant monitoring of the signal so that a telescope remains pointed at Vega at all times. A third message is discovered describing plans for an advanced machine. With no way of decoding the 30,000 pages, SETI scientists surmise that there must be a primer that they have missed.” (逐語訳に代えて大要をなすとして)「地球より 25 光年離れたヴェガ星系より 26 の素数よりなる反復するメッセージが受信されるとの運びとなった。さらなる調査の結果、それらが系統だつての信号としての形態をとることが判明、そして、それらメッセージは 1936 年のベルリン夏季オリンピックにてのアドルフ・ヒトラーの開会演説が(地球電離層の外に出るのに十分な送信出力を有していた初のテレビ映像として)再送信されてきた(ものだと明らかになった)。(大統領と小説『コンタクト』主人公エレノア・アロウェイとのやりとりやエレノア・アロウェイと他の科学者らの交流に続いての) 三回目のメッセージ受信にてメッセージが先進的なる機械の設計図案を表しているものであると判明した」(引用部に対する大要紹介はここまでとする)との部が該当するところとなる——)

(出典(Source)紹介の部 83 はここまでとする)

さて、小説『コンタクト』では直上、出典紹介部にて解説したように

[ナチスのオリンピック映像に埋め込まれてゲート装置の設計図が送信されてきた]

との筋立てが見てとれもする。

そうした小説たる『コンタクト』のゲート生成装置（正五角形を十二枚つなぎあわせての十二面体構造をとる装置）が

「ブラックホール（なかんづくカー・ブラックホール）ないしワームホールと親和性高きもの（作中、はきとブラックホール生成装置であろうことを臭わせている登場人物の見立てが明言されているもの）にして」（[出典\(Source\) 紹介の部 80](#)）

「加速器におけるブラックホール生成問題がその検証と後に結びつけられるに至った超統一理論といった言葉と結びつけられて用いられている」（[出典\(Source\) 紹介の部 81](#)）

とのこと、そして、そのことが —— [加速器] は（ゲート装置と結びつけるかたちでは）一切登場させていない作品ながらも —— ブラックホール生成をなしうると後に、小説の刊行後 10 年以上を経て看做されるに至った加速器実験のことを露骨に想起させるようになっていくことは先述のことである（現行、[d]と振っての段で筆を進めているのだが、先立つところの[b]の段ではそのことにつき専心して指摘しもしている）。

以上のこと —— フィクション『コンタクト』ゲート装置と現実世界の加速器によるブラックホール生成議論につながりが存すると指摘可能となっていること —— と複合顧慮して然るべきであろうこととして次のようなことが「ある」。

ナチスのユダヤ人に対する迫害、そして、そのナチス・ドイツの征戦を勝利のうちに完遂させる可能性があったナチスドイツの原始爆弾開発可能性。そうした状況に生存上の危惧を感じたユダヤ人科学者らが大同団結して開始を促したとの言われようが現代史にまつわるところでなされているマンハッタン計画 ——（本稿の先の段にて既述のように）グラウンド・ゼロとの言葉を生みだした計画 —— については

[後に LHC に進化するに至った円形加速器、その円形加速器の[真の発明者]とされる人間(レオ・シラード)がそもそもの計画のプロモーター(推進者)となっていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)が初期段階にてとりまとめ役として重要な役割を果たしていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)に計画に招聘された人間たるロバート・オッペンハイマーが[ブラックホール(とかなり後になって呼ばれるようになった[縮退星]というもの)の研究で既に業績を挙げていた科学者]として科学者陣を率いることになりもしていた計画]

[戦後影響力を増した同計画関係科学者によってブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)らを設定させることになった計画]

としての特性が伴っている。

要するに、である。[ナチスによる迫害][ナチスによる原爆開発に対する危惧]が原因となってスタートを見たとのマンハッタン計画については次のことが指摘できるようになっているのである。

[(ナチス・ドイツとヒトラーの躍進に対するカウンター・アクションとしてスタートを見た)

マンハッタン計画とはブラックホール生成装置たりうると「後の日に(ここつい最近)」判じられるに至った円形加速器の発明者「ら」(レオ・シラードとアーネスト・ローレンス)によって提案・推進されるに至った計画であり、といった同計画の現場指揮を後になすに至ったのは(ブラックホールという言葉それ自体はまだなかった折ながらも)ブラックホール理論の開拓者となっていた男(ロバート・オッペンハイマー)であり、影響力を増した同計画関係者らによって戦後、[後にブラックホール生成問題で主としてその挙動を問題視されるに至った研究実験機関ら](フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERNら)が揃い踏みで誕生を見ている]

以上のことの出典は続く段で挙げていくとして、この身がここまでで何が述べたいのか理解力を有した人間には理解できるか、と思う。

そう、

「カール・セーガンが[ブラックホールや通過可能なワームホールと結びつくゲート構築装置の設計図]をして[ナチス躍進の象徴になっているもの(1936年ベルリンオリンピックのヒトラーの開会宣言映像)と共に送信されてきたもの]などと描写していることは[(ブラックホール生成装置と後に呼ばれる円形加速器実験の発明者とされる科学者に旗振りされて推進を見た)ナチスに対するカウンター・アクションとしてのマンハッタン計画からブラックホール生成をなしうると考えられるに至った実験担い手機関らが派生していったこと]とあまりにも平仄が合いすぎる」

と述べたいのである(おかしなことを述べていると思われるだろうか?)。

さて、常人ならば、以上のようなことにつき気づいたうえでも、次のようなことで自己納得するように思われる。

『ユダヤ系であったカール・セーガンが自己の属する民族が歩んできた苦難の歴史から引き直して見もし、加速器実験機関の誕生経緯 —それらがマンハッタン計画より生まれ落ちたとの誕生経緯— およびその帰結に認められる危険性を暗にほのめかしていたのではないか』

だが、上のような物言いで状況を楽観視できる余地はない、残念ながら、多幸症患者(ユーフォリア)あるいは屠所の羊との状況に甘んじきっているようであればなせぬような事情があることを問題視しているのが本稿であり、カール・セーガンやりようとの絡みでも何が[属人的観点](セーガン個人の思惑)では済まされないとのことの典拠になるかについてここまでにあっても細かくも論じてきたつもりではある。

につき、本稿の内容を理解している向きにあっては、お分かりだろうが、

[カール・セーガンが自分の意思で物事を言っていなかった、彼の背後には[紐がついていた]とのこととなると[その結果はあまりに危険である]と訴求できる、というより、訴求せざるをえなくなるということがある]

ことが同じくものことにまつわって非常に問題になる(：そういうことがあるとの状況にあって現状を変えることの出来ぬ、変えることすら出来ぬ種族ならば、人類は滅ぼされるだけであろう、と手前は考えている。であるからこそ、[そういう種族ではないようにすべくもの一助にも、のの営為]に卑小非力な身ながらも注力したい、そして、そういう種族ではないことの「確認」を余生(筆者は自分ではまだまだ若いつもりだが、敢えても[余生]との言葉を使っている)にて注力したいとの観点で本稿をものしている)。

ここまできたところで上にて「出典は続く段にて挙げる」と申し述べていた、

ナチスのユダヤ人に対する迫害、そして、そのナチス・ドイツの征戦を勝利のうちに完遂させる可能性があったナチスドイツの原始爆弾開発可能性。そうした状況に生存上の危惧を感じたユダヤ人科学者らが大同団結して開始を促したとの言われようが現代史にまつわるところでなされているマンハッタン計画 —(本稿の先の段にて既述のように)グラウンド・ゼロとの言葉を生みだした計画— については

[後にLHCに進化するに至った円形加速器、その円形加速器の「真の発明者」とされる人間(レオ・シラード)がそもそもの計画のプロモーター(推進者)となっていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)が初期段階にてとりまとめ役として重要な役割を果たしていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)に計画に招聘された人間たるロバート・オッペンハイマーが「ブラックホール(とかなり後になって呼ばれるようになった「縮退星」というもの)の研究で既に業績を挙げていた科学者」として科学者陣を率いることになりもしていた計画]

[戦後影響力を増した同計画関係科学者によってブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)らを設定せしめることになった計画]

となっているとのことがある。

との点についての出典らを以降、挙げていく(そして、そちら出典紹介をなしたところでさらに問題となろうというところについて解説していくこととする)。

■ 外挿付記としまして：ここ【典拠紹介部 84】には「長くもの」p.627 から p.643 との頁数を割いているため、以降【典拠紹介部】(従たるところ)と【指示しの主軸たるところ】の関係について惑われぬよう、何卒ご注意いただければ、と述べさせていただきます。また、「お勧めはいたしません」典拠委細読み飛ばしのうえで内容把握なそうとの向きにおかれましては(歩を進めていただきもし)本書 p.643 から読解いただければ、と考えています。

出典(Source)紹介の部 84

SOURCE

84



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

(※本出典紹介部にあつての[【通史】として世間的によく知られたところを言及しての箇所]に関してはネット上で目立つところとなっているウィキペディア程度の媒体からの引用を多用することとなっていること、断っておく。その点、ウィキペディアは確認が(内容変転を見ていなければ)なしやすいとの側面を持つ一方、誤記・誤謬も数多見られること、よく知られている——そのため、大学の課程でもそれを引用元とするなど論外とされがちである——のだが、ここで取り上げている[【通史】となるところ]については誤謬無いこと、その他のソースらからも本稿筆者手ずから後追いしているところだけを抜粋していると申し述べておく)

ここ出典(Source)紹介の部84にあつては、

ナチスのユダヤ人に対する迫害、そして、そのナチス・ドイツの征戦を勝利のうちに完遂させる可能性があつたナチスドイツの原始爆弾開発可能性。そうした状況に生存上の危惧を感じたユダヤ人科学者らが大同団結して開始を促したとの言われようが現代史にまつわるところでなされているマンハッタン計画 — (本稿の先の段にて既述のように)グラウンド・ゼロとの言葉を生みだした計画— については

1. [後にLHCに進化するに至った円形加速器、その円形加速器の[真の発明者]とされる人間(レオ・シラード)がそもそもの計画のプロモーター(推進者)となっていた計画]
2. [公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)が初期段階にてとりまとめ役として重要な役割を果

たしていた計画]

3. [公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)に計画に招聘された人間たるロバート・オッペンハイマーが[ブラックホール(とかなり後になって呼ばれるようになった[縮退星]というもの)の研究で既に業績を挙げている科学者]として科学者陣を率いることになりもしていた計画]

4. [戦後影響力を増した同計画関係科学者によってブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)らが設立なされられることになったとの計画]

となっているとのことがある

との点についての典拠となるところを順々に紹介していく。

まずもっては、

1. [マンハッタン計画は後に LHC に進化するに至った円形加速器、その円形加速器の[真の発明者]とされる人間(レオ・シラード)がそもそもの計画のプロモーター(推進者)となっていた計画である]

とのことの典拠を挙げることにする。

(直下、容易に確認可能な史実であるがゆえにそれで十分と判断、目に付くところとして誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとしての和文ウィキペディア[レオ・シラード]項目の現行の記述よりの([中略]なし)部分的抜粋をなすとして)

レオ・シラード…(中略)…は、原子爆弾開発などに関わったハンガリー生まれのアメリカのユダヤ系物理学者・分子生物学者である。…(中略)…シラードはアインシュタインを通じたルーズベルト大統領への進言によって原子爆弾開発のきっかけを作った人物として知られる。…(中略)…これより前に、線形加速器さらにはサイクロトロン、ベータトロンに関する特許を相次いで出願している。サイクロトロンの特許出願はローレンスがそれを思いついた時期に数か月先立ち、やはりその実現の4年前であった。

(引用部はここまでとする)

(直下、容易に確認可能な事実関係に争いなき史実であるがゆえにそれで十分と判断、目に付くところとして誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとしての和文ウィキペディア[マンハッタン計画]項目の計画端緒にまつわる現行記述よりの一部抜粋をなすとして)

ナチス・ドイツが先に核兵器を保有することを恐れた亡命ユダヤ人物理学レオ・シラードらが、1939年、同じ亡命ユダヤ人のアインシュタインの署名を借りてルーズベルト大統領に信書を送ったことがアメリカ政府の核開発への動きをうながす最初のものとなった。この「進言」では核連鎖反応が軍事目的のため

に使用される可能性があることが述べられ、核によって被害を受ける可能性も示唆された。

(引用部はここまでとする。尚、同点についてのより細かい経緯については同じくものウィキペディアにあっては[[アインシュタイン＝シラードの手紙](#)]項目に記載されているところとなる)

ここまでにて

1. [マンハッタン計画は後に LHC に進化するに至った円形加速器、その円形加速器の[真の発明者]とされる人間(レオ・シラード)がそもそもの計画のプロモーター(推進者)となっていた計画である]

このことについての目に付くところの世間的説明のなされようを引いたとして、次いで、

2. [マンハッタン計画は後に LHC に進化するに至った円形加速器、その円形加速器(初期型円形加速器:サイクロトロン)の[表立っての発明者]としてノーベル物理学賞を受賞している科学者(アーネスト・ローレンス)が初期、枢要な役割を果たしていた計画となっている]

このことについて最も目立つところでいかな関連情報が目に入るようになっているのかについての紹介をなしておくこととする。

(直下、容易に確認可能な史実であるがゆえにそれで十分と判断、目に付くところとして誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとしての和文ウィキペディア[[アーネスト・ローレンス](#)]項目の現行の記述よりの(中略なしつもの)部分的抜粋をなすとして)

アーネスト・ローレンス…(中略)…は、アメリカ合衆国の物理学者。…(中略)…**原子物理学や素粒子物理学で標準的に使用されるサイクロトロンを発明したことで知られる。**…(中略)…第二次世界大戦中はマンハッタン計画に参加し、質量分析法によるウラン 235 の工業的分離に成功した。戦後も加速器の改良に力を注ぎ、バークレーにベヴァトロン(Bevatron)と名付けられた当時世界最大のシンクロトロンを建設した。セグレとチェンバレンらによる反陽子の発見もベヴァトロンによるものである。**1939年、「サイクロトロンの開発および人工放射性元素の研究」によりノーベル物理学賞を受賞した。**

(引用部はここまでとする。尚、アーネスト・ローレンスはその遺産としたベヴァトロン Bevatron が後に SuperHILAC という他加速器とドッキングさせられて、加速器ベバラック Bevalac となつて[[「ローレンス」・バークレー研究所](#)]にあって運用された折にどういったことが取り沙汰されたかについては本稿にての[出典\(Source\)紹介の部 11](#)で仔細に紹介しているところとなる)

(直下、容易に確認可能な史実であるがゆえにそれで十分と判断、目に付くところとして誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとしての英文 Wikipedia[[Ernest Lawrence](#)]項目の現行の記述よりの部分的抜粋をなすとして)

During World War II, Lawrence eagerly helped to ramp up the American investigation of the possibility of a weapon utilizing nuclear fission. **His**

Radiation Laboratory (known as the Rad Lab), became one of the major centers for wartime nuclear research, and it was Lawrence who first introduced J. Robert Oppenheimer into what would soon become the Manhattan Project.

(訳として)「第二次世界大戦中、アーネスト・ローレンスは核融合技術を利用した兵器の実現可能性の米国調査を増大させることに助力した。彼の放射線研究所(通称:ラド・ラボ)は戦時下、核兵器調査の主たる中心地となり、そして、彼ローレンスこそが間を経ずにマンハッタン計画となるのところにロバート・オッペンハイマーを招聘もした人間となっている」

(引用部はここまでとする —※—)

(※注: 上の引用部にて記載のサイクロトロンとは「円形加速器の初期タイプ」のことを指し、それがシンクロトロンというものに進化、後にブラックホール生成装置としての LHC に発展していったということが幅広く知られているところとしてある(※下にての一応、付したところのオンライン上にての解説のありようを参照されたい)。

(直下、和文ウィキペディア[加速器]項目にての装置概要記載の部、[古典的なサイクロトロン]と付されての部にあつての現行記載内容より引用なすところとして)

以上は理想的なサイクロトロンに関する記述であるが、実際にはいくつかの制限がある。まず粒子の散逸を防ぎ安定した加速を実現するために粒子を収束(フォーカシング)する必要があり、そのためには磁場を一様な状態からずらさなければならぬということである。もうひとつは、粒子が相対論的速度(光速に近い速度)まで加速されるとはや上記の等時性は成り立たず加速を継続することが出来なくなるという点である。これらの問題点を解消するために歴史的には様々な工夫がなされてきたが、エネルギーフロンティアの開拓はシンクロトロンに道を譲ることとなった。現代のサイクロトロンはセクター型にすることにより上記の問題を部分的に解決し、大強度重イオン加速器として原子核物理学の発展に寄与している。

(引用部はここまでとする)

これにて

2. [マンハッタン計画は後に LHC に進化するに至った円形加速器、その円形加速器(初期型円形加速器:サイクロトロン)の[表立っての発明者]としてノーベル物理学賞を受賞している科学者(アーネスト・ローレンス)が初期、枢要な役割を果たしていた計画となっている]

とのことに関連しての言及が目立つところでいかようになされているのかについての紹介を終える。

尚、直上、初期円形加速器、シンクロトロンに道を譲ったとのサイクロトロンについて上の和文ウィキペディアの引用部にてはレオ・シラードの特許出願がアーネスト・ローレンス(サイクロトロン発明にてノーベル賞を 1939 年に受賞したとのことが上にての引用部に記載されているとの科学者)のそれに数か月先立ち、レオ・シラードがサイクロトロン開発者であるように表記されているとのことがある(抽出して再引

用なせば、これより前に、線形加速器さらにはサイクロトロン、ベータトロンに関する特許を相次いで出願している。サイクロトロンの特許出願はローレンスがそれを思いついた時期に数か月先立ち、やはりその実現の4年前であったと記載されているとのことがある。

が、他書籍ではシラードの特許は有効に受理されていないような記載がなされ、アーネスト・ローレンスこそが特許関連で円形加速器の発明者として認知されているとの書きようが往々にしてなされてもいる(そして、レオ・シラードと同文に初期マンハッタン計画にて重要な役割を果たしたアーネスト・ローレンスは円形加速器開発の功績でノーベル物理学賞を受賞しているとのことがある)。

そこだけは疑義があるため、ウィキペディアに加えての他媒体より内容引いての紹介をなしておくが、レオ・シラードの方が円形加速器の真の発明者であるとされることについて COLLIDER『神の素粒子—宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』(ポール・ハルパーン著、訳書の刊行元は日経ジオグラフィック/本稿で何度かその内容を問題視したとの加速器実験担ぎ上げ書籍)の邦訳版には以下のような記述が含まれている。

(直下、COLLIDER『神の素粒子—宇宙創成の謎に迫る究極の加速器—』p.116—117にあつてはよりの引用を引用なすところとして)

なぜかシラードはこの設計を実施には移さなかった。彼はほかにも二つの加速器の特許申請をしたが、どちらもそこまでだった。彼の申請が受理されたかどうか記録はない

(引用部はここまでとする)

上の記載内容は和文ウィキペディアのレオ・シラードの特許がアーネスト・ローレンスに先立つとの現行にての書かれようと平仄が合わぬようにもとれる。

他面、ピューリッツァー賞を受賞、海外で広くも流通を見ている節ありの The Making of the Atomic Bomb との書籍の訳書『原子爆弾の誕生』(上巻、紀伊国屋普及版)にあつては以下のような記載がなされている。

(直下、The Making of the Atomic Bomb『原子爆弾の誕生』p.17、レオ・シラード事績にまつわるパートよりの引用をなすとして)

もう一つ、同じように特許が与えられた奇妙な発明がある。こちらのほうは、もし彼が特許をとるだけでは満足せず、それ以上の努力を傾注して本気でアイデアを推し進めていたら、世界的な評価を勝ちうることはできたであろうと思われる発明である。それは、アメリカの実験物理学者、アーネスト・O・ローレンスの発明によってサイクロトロンと呼ばれるようになった装置に関するものであった。この装置の設計方法を、シラードはローレンスとは別に、彼より三カ月早く構想している。サイクロトロンとは、原子核の構成粒子を円形の磁場で加速する一種のポンプである。シラードはこの装置の特許を一九二九年の一月五日に申請している。ローレンスがサイクロトロンを考えたのは同じ年の四月一日ごろであり、実際に稼働する小型のモデルを作製したのは一年後であった

(引用部はここまでとする)

以上のように特許を巡る経緯については「書籍・媒体によって言及内容に若干の齟齬が見受けられ

るようなことがあり」判然としないところが少なからずあるのだが、円形加速器(後にLHCにまで進化した円形加速器の初期形態としてのサイクロトロン)の発明者が「双方」、マンハッタン計画の推進・遂行で主要な役割を果たしたレオ・シラード —アインシュタインに助力を求めつつマンハッタン計画の元となる計画の策定を大統領(フランクリン・ルーズヴェルト)に進言したとの科学者— および(シラードの後に続くかたちで同加速器を具現化させた)アーネスト・ローレンス —マンハッタン計画の初期段階で主導的役割を果たし、ロバート・オッペンハイマーを計画に引き入れたとの科学者— であるということが[史実]として認知されていることに相違はない。

ちなみに、国内より出されている加速器実験の成果にまつわる最近の大衆向け解説書 —具体的書名は挙げない— にあってなどでは(長期化した行政訴訟でこの身が[ブラックホール生成実験にまつわる国内実験関係者やりよう]との絡みでその記述内容を問題視したとの著作ともなるのだが)その著者となる東大の物理学系の教職員が —誤字などといったそういったレベルの誤記ではなく— 本質的なところで

「円形加速器の開発者はローレンツ力を世に呈示したヘンドリック・ローレンツである」などとの[全くもって事実と異なること]を(校訂など編集過程に問題があったのか、著者本人が余裕がなかったとのことでの加速器に活かされているローレンツ力に過度の重みづけを与えての汎ミスなのか知らないが)書いているのであるも、そういう誤表記に(といった向きがいれば、だが)当該問題をこれより煮詰めようとする事とした向きが感わらないでもらいたいものである。

次いで、

3. [マンハッタン計画を主導したのが「既に」ブラックホール理論の立役者として知られていたロバート・オッペンハイマーであった]

とのことについての目に付くところでの解説のなされようを紹介しておくこととする。

(直下、容易に確認可能な史実であるがゆえにそれで十分と判断、目に付くところとして誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとしての和文ウィキペディア[ロバート・オッペンハイマー]項目の現行の記述よりの(中略なしつつもの)部分的抜粋をなすとして)

J・ロバート・オッペンハイマー …(中略)…は、ユダヤ系アメリカ人の物理学者である。理論物理学の広範な領域にわたって国際的な業績をあげたが、第二次世界大戦当時ロスアラモス国立研究所の所長としてマンハッタン計画を主導。卓抜なリーダーシップで原子爆弾開発プロジェクトの指導的役割を果たしたため「原爆の父」として知られた。…(中略)… 1930年代末には宇宙物理学の領域で、中性子星や今日でいうブラックホールを巡る極めて先駆的な研究を行っていたが、第二次世界大戦が勃発すると、1942年には原子爆弾開発を目指すマンハッタン計画が開始される。オッペンハイマーは1943年ロスアラモス国立研究所の初代所長に任命され、原爆製造研究チームを主導した。彼らのグループは世界で最初の原爆を開発し、ニューメキシコでの核実験(『トリニティ実験』と呼ばれている)の後、日本の広島、長崎に落とされることになった …(中略)… 中性子の研究にからんで、星の質量がある限度を超えれば、中性子にまで縮退した星がさらに圧潰する可能性を一般相対性理論の帰結として予測し、ブラックホール生成の研究の端緒を開いた(トルマン・オッペンハイマー・ヴォルコフ限界)。しかし、彼のブラックホール研究は、マンハッタン計画への参画によって中断した。陽電子の予知、トンネル効果の発見も重要な業績である。

(引用部はここまでとする —※—)

(※1942年に開始されたマンハッタン計画に先駆けて1930年代末にはオッペンハイマーが「今日でいうブラックホール」を巡る先駆的研究を行っていたと言及されていることがここ本段にて問題視していることとなる。尚、同様のことについて目立つところでは例えば、英文 Wikipedia [Tolman – Oppenheimer – Volkoff limit] 項目にての “ The form of the equation given here was derived by J. Robert Oppenheimer and George Volkoff in their 1939 paper, "On Massive Neutron Cores"[. . .] In a neutron star less massive than the limit, the weight of the star is balanced by short-range repulsive neutron-neutron interactions mediated by the strong force and also by the quantum degeneracy pressure of neutrons, preventing collapse. **If its mass is above the limit, the star will collapse to some denser form. It could form a black hole, or change composition and be supported in some other way (for example, by quark degeneracy pressure if it becomes a quark star)** . ” (逐語訳ではなく大要紹介にとどめるとして)「トルマン・オッペンハイマー・ヴォルコフ方程式はロバート・オッペンハイマーそしてジョージ・ヴォルコフとの連名で1939年論稿『中性子星のコアにあつて』にて呈示されたものである。(同式によって)重力崩壊を起こした際に質量上の限界線を越えるかで中性子星にとどまるか、ブラックホールのようなよりもって密度高きものにまで崩壊するかが決まる」との記述などからも確認できるようになっているが、オッペンハイマーがいかようにしてブラックホール関連の領域に食指を伸ばしたのか、といったことについては Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes (邦題)『ブラックホールを見つけた男』(原著2005年刊、邦訳版2009年刊。邦訳版版元は草思社)といったブラックホール理論史にまつわる解説書を検討されてみるとよく分かるようになってい — 本稿にての後の段にあつては同書、Empire of the Stars Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes (邦題)『ブラックホールを見つけた男』から同じくものこと、オッペンハイマーの初期的ブラックホール研究に扱った段の記述も引くこととする — 。さらに補っても述べれば、重力崩壊した恒星の末路としてのブラックホールについては当初、ブラックホールという呼び名ではなく、縮退星であるとかそういう呼ばれ方をされていた。そうしたものに対してブラックホールという名称が生み出され利用されだしたのは(本稿出典(Source)紹介の部65(10)などにて示しているように)1967年からであると現代科学史では定置されている)

以上引いたことに

3. [マンハッタン計画を主導したのが「既に」ブラックホール理論の立役者として知られていたロバート・オッペンハイマーであった]

このことの紹介は留めておく。

さらに続けまして、

4. [マンハッタン計画とは後の加速器実験を推進することとなった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)が戦後影響力を増した同計画関係科学者によって設立なさしめられることになったとの計画である]

とのことの典拠を示しておく。

まずは[ブルックヘブン国立研究所]および[CERN] ——[ブルックヘブン国立研究所]も[CERN]も本稿の冒頭部(の**出典(Source)紹介の部 1**)よりその発表文書の内容を問題視しながら指し示していることとして[粒子加速器によるブラックホール生成問題]で批判の矢面にさらされることとなった組織である——がマンハッタン計画に参加した科学者イシドール・ラビ(イ「ジ」ドール・ラビとも)によって設立後押しされているとのことについての説明のなされようを紹介しておく。

(直下、誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとしての和文ウィキペディア[イシドール・イサーク・ラビ]項目の現行の記述よりの(中略なしつつもの)部分的抜粋をなすとして)

イシドール・イザーク・ラービはアメリカ合衆国の物理学者。…(中略)…共鳴法による原子核の磁気モーメントの測定法の発見により、1944年、ノーベル物理学賞を受賞した。…(中略)…**1940年にはマサチューセッツ工科大学の放射線研究所の副所長となり、ロスアラモス国立研究所でアメリカの原爆開発に関わった。第二次世界大戦後は、ブルックヘブン国立研究所や欧州原子核研究機構の創設者のひとりとなった。**

(引用部はここまでとする —※—)

(※尚、現行英文 Wikipedia[Isidor Isaac Rabi]項目には “ A legacy of the Manhattan Project was the network of national laboratories, but none was located on the East Coast. **Rabi and Ramsey assembled a group of universities in the New York area to lobby for their own national laboratory.** When Zacharias, who was now at MIT, heard about it, he set up a rival group at MIT and Harvard. Rabi had discussions with Groves, who was willing to go along with a new national laboratory, but only one. Moreover, while the Manhattan Project still had funds, the wartime organization was expected to be phased out when a new authority came into existence. **After some bargaining and lobbying by Rabi and others, the two groups came together in January 1946. Eventually nine universities (Columbia, Cornell, Harvard, Johns Hopkins, MIT, Princeton, Pennsylvania, Rochester and Yale) came together, and on 31 January 1947, a contract was signed with the Atomic Energy Commission (AEC), which had replaced the Manhattan Project, that established the Brookhaven National Laboratory.** ” (補つてもの訳として)「マンハッタン計画の遺産は国立研究所らのネットワークであったわけだが、それらのどれもが東海岸とは(マンハッタン計画が名前にそぐわず米国の東海岸地方から離れて推進されていたとの経緯があり)無縁なところであった。イシドール・ラビおよびノーマン・ラムゼー(ラビの同僚の有力物理学者、後にノーベル賞受賞)は自分たち自身の国立研究所を設立させるべくものロビー活動を行うべく(東海岸の)ニューヨーク地域の大学らからなるグループを組織した。その折、マサチューセッツ工科大学に所属していたザカリアス(物理学者 Jerrold R. Zacharias)がそうした流れを聞き及び、「我こそは」と競うグループをマサチューセッツ工科大学およびハーヴァードに組織することになった。イシドール・ラビは国に新しい国立研究所を創設するとのことに対し積極的に賛意を表していたグローヴス(マンハッタン計画を主導した米国軍人 レズリー・グローヴズ)と議論を交わしたが、新国立研究所創設に賛意を表するのはグローヴス唯一人とどまった。往時はマンハッタン計画が未だ予算を保持しての折ながらも、新しい関連行政機関が登場を見るに至っていたとの

折ともなり、戦時中の組織は段階的に縮小消滅していくことが期されていた。といった中、イシドール・ラビおよびその他の同調者による交渉・ロビー活動の後、二つのグループ(文脈上、ラビらのロビー集団とマサチューセッツでザカリアスが組織化したロビー集団の二つのグループ)は1946年1月に統合を見るに至り、そして、1947年1月31日、コロンビア大、コーネル大、ハーヴァード大、ジョン・ホプキンス大、マサチューセッツ工科大、プリンストン大、ペンシルヴァニア大、ロチェスター大、イェール大の(東海岸の)9大学が大団結なして合意、マンハッタン計画関連組織を継承・代替するかたちとなっていた[原子力委員会](マンハッタン計画関係者が中心になって設立した戦後の原子力関連技術管理組織で原子力技術の民生移管を名分としていた)との間に[ブルックヘブン国立研究所]を設立するとの合意をなした(引用部に対する補ってもの訳はここまでとする)とより細かき経緯が(John S. Rigden という物理学者としての著者の手になる Rabi, Scientist and Citizen という書を出典として)記載されてもいる)

それにつきマンハッタン計画関与科学者であるイシドール・ラビについては **CERN(現行、LHC「実験」を主催している欧州原子核研究機構)**の創設旗振り役ともなっていることがよくも知られている人間となり、オンライン上で目立つところとしてそのことが明言されているウィキペディア記載をここでは下に引いておくこととする。

(直下、誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとして英文 Wikipedia[Isidor Isaac Rabi]項目の現行の記述よりの部分的抜粋をなすとして)

Rabi suggested to Edoardo Amaldi that Brookhaven might be a model that Europeans could emulate. Rabi saw science as a way of inspiring and uniting a Europe that was still recovering from the war. An opportunity came in 1950 when he was named the United States Delegate to the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO). **At a UNESCO meeting at the Palazzo Vecchio in Florence in June 1950, he called for the establishment of regional laboratories. These efforts bore fruit; in 1952, representatives of eleven countries came together to create the Conseil Europe'en pour la Recherche Nucle'aire (CERN).**

「(訳として)ラビはエドアルド・アマルディにブルックヘブン国立加速器研究所は欧州人の模範となるものであるべしと訴えていた。同イシドール・ラビは科学をもってして戦傷が癒えぬ欧州を刺激・統一させるひとつの手段と看做していた。彼が合衆国によってユネスコの代表として指名された1950年に好機が巡ってきた。フィレンツェのヴェッキオ宮殿でのユネスコの会議にてラビは域内研究機関の設立を求めることになった。これら努力は実ることになり、1952年、11カ国の代表らが欧州原子核研究機構(CERN)の創設の合意に至った」

(訳を付しての引用部はここまでとする。尚、上記のことについては John S. Rigden という物理学者としての著者の手になる Rabi, Scientist and Citizen という書を出典としているとの表記が現行、Wikipedia には見てとれる)

以上、

[ブルックヘブン国立研究所] (本稿の冒頭部、**出典(Source)紹介の部 1**からしてその発表資料 Review of Speculative "Disaster Scenarios" at RHIC を挙げて、加速器

RHIC に伴うブラックホール生成可能性を問題視されだした機関であるとのことを詳説した米国の主要加速器運営組織の内のひとつ) および [CERN]

らがマンハッタン計画関係者の手により、マンハッタン計画の衣鉢を継ぐとの組織・人脈らの関与で世に生まれ落ちたとのこと、その[通史として語られるところ]につき紹介した。

さらに、

[主要加速器実験機関のうち、フェルミ国立研究所がマンハッタン計画関係者の手により設立を見たことについて]

とのことの出典を(とりあえずも端的に)挙げておく。

(直下、誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとしての和文ウィキペディア[ロバート・ラスパン・ウィルソン]項目の現行の記述よりの(中略なしつつもの)部分的抜粋をなすとして)

[ロバート・ラスパン・ウィルソン …(中略)… はアメリカ合衆国の物理学者。マンハッタン計画でグループリーダーを務め、フェルミ国立加速器研究を企画、建設した。1967年から1978年まで初代の所長を務めた]

(引用部はここまでとしておく)

以上、オンライン上より即時即座に確認できるところより抜粋して示さんとしているようにマンハッタン計画の関係者たるイシドール・ラビとロバート・ウィルソンらが

[ブルックヘブン国立研究所] [欧州原子核研究機関(CERN)] [フェルミ国立研究所]

の設立に尽力、それら設立後の主導者になったということがそれら科学者にまつわるウィキペディア解説項目程度のところにも見受けられる[史実]として世に知れ渡っているとのことがある。

そして、そうして建立を見た加速器実験機関らについては[その力(影響力)の源泉]がマンハッタン計画にあるとの申しようが当の実験機関当事者 —フェルミ国立研究所二代目所長— によって「も」言及されたりしている。

ここではその典拠としてロバート・ウィルソンが設立に尽力なした加速器研究機関フェルミ国立研究所の二代目所長となったレオン・レーダーマン(Leon Lederman)という男、1988年にノーベル物理学賞を受賞している同男が著した、THE GOD PARTICLE(邦題)『神がつくった素粒子(下)』(邦訳版版元は草思社)よりの引用をなしておくこととする。

(直下、THE GOD PARTICLE(邦題)『神がつくった素粒子(下)』にあつての48ページより原文引用をなすところとして)

「第二次世界大戦の前と後では、科学研究は決定的に変化した(こんな物議をかもしような発言をしていいのかな?)アトムの探究においても新しい局面を迎えることになった。そのいくつかを見ていこう。第二次大戦は科学技術の飛躍的發展をもたらした。その多くはアメリカから起こった。ヨーロッパのように、すぐそばで爆弾が炸裂して轟音にじゃまされることはなかった。戦時下におけるレーダー、エレクトロニクス、核爆弾(正しい名で呼ぶなら)の開発は、科学と

工業技術が協力すればいかなることが可能になるかをよく示している——ただし、予算の制限を受けないかぎり。…(中略)…以来、米政府は科学の基礎研究を支援することになった。基礎研究および応用研究にたいする援助額はうなぎのぼりに増加し、一九三〇年代の初めにE・O・ローレンスが苦勞して手にした助成金の一〇〇〇ドルなど、笑い草になってしまった。この金額は、一九九〇年の連邦予算の基礎研究助成金——総額約一二〇億ドル！——にくらべると、インフレ率を顧慮しても、影が薄い」

(引用部はここまでとしておく)

(続けて直下、上と同じくもの **THE GOD PARTICLE** (邦題)『神がつくった素粒子(下)』にあつての 50 ページより原文引用をなすところとして)

「卓上の研究から発展して、周囲数マイルの加速器を使用する研究にいたる過程を監督していたのは、アメリカ政府だ。第二次大戦時の爆弾計画がもとになって、原子力委員会(AEC)が生まれた。これは核兵器の研究、生産、貯蔵を監督する文民機関である。また、原子物理学、その後身である素粒子物理学の分野での基礎研究に予算を配分し、監督する役目も国家から委託されている」

(引用部はここまでとする。なおもつてして、米国の[原子力委員会(AEC)]は先にイシドール・ラビのブルックヘブン国立研究所設立を巡る経緯の通史的解説の紹介部で先述したように[加速器実験機関設立の認可・決定機関]ともなっていた —— Wikipedia にて “ a contract was signed with the Atomic Energy Commission (AEC), which had replaced the Manhattan Project, that established the Brookhaven National Laboratory. ” と表記されているような機構となっている——)

上の **THE GOD PARTICLE** (邦題)『神がつくった素粒子(下)』よりの引用部に見るようにマンハッタン計画に淵源を持つとのことが明示されている、

[原子力委員会] (民生化されての原発産業とは異なる観点での原子力利用、核兵器の管理・監督と粒子加速器実験実施機関らの管理・監督を行ってきた米国国営機関)

転じての

[アメリカ合衆国エネルギー省](DOE)

が後に米国にて提訴された[LHC 実験差し止め訴訟]にあつての被告の一たる国家機関、レオン・レーダーマンというここにて引用なしている著作をものした男が二代目所長を勤めていた[フェルミ国立研究所]と並んでの[LHC 実験差し止め訴訟]の被告の一たる国家機関となっているとのことが(下にて出典呈示するとのこととして)現実にある。そのようになっているのはマンハッタン計画の「後」に設立されたそれら政府機関が[窓口]として加速器実験に多額のマネーを誘導、また、加速器実験を監督してきたとの経緯がある —— 上にてレーダーマン著作より引用なしているような経緯がある—— からである (政府機関に寄生する加速器マフィアと核兵器マフィアは「史的には」[大元でひとつであった]とも述べられ、それは[なるべくものナチスに対するカウンターアクション](マンハッタン計画)に端を発して集合した科学者らのその後のありようが基礎たるところとしてあるがゆえであるとのかたちとなっている)。

ここまででもつてして、

[マンハッタン計画とは後の加速器実験を推進することとなった研究機関らの主要なもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)が戦後影響力を増した同計画関係科学者によって設立なされられることになったとの計画である]

とのことの典拠(その気があるのならば、オンライン上よりすぐに確認・裏取りできもしよとの典拠)を充分と判じた分だけ挙げた。

次いで、以下、

4. [戦後影響力を増した同計画関係科学者によってブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)らが設立なされられることになった計画]

との側面にあつてのもう半分の要素、[(問題となるマンハッタン計画派生の研究機関らが)ブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった]とのことにまつての出典を挙げておく。

まずは

[(マンハッタン計画の産である)ブルックヘブン加速器研究所がブラックホール生成問題に関して矢面に立たされた研究機関であることについての出典]

を挙げることとする。

(直下、本稿の前半部 [出典\(Source\) 紹介の部 1](#) にてもそこよりの引用をなしたとの Case of the deadly strangelets と題されたオンライン上流通文書 ——物理学系専門誌の特定記事の転写物/検索エンジン上での表記のタイトル入力で現行、特定・ダウンロード可能な文書—— にての 19 と脇に振られての頁よりの「再度の」原文引用をなすとして)

The trouble began a few months earlier, when Scientific American ran an article about RHIC (March 1999 pp65-70). Its title, "A little big bang", referred to the machine's ambition to study forms of matter that existed in the very early universe. Walter Wagner, the founder of a botanical garden in Hawaii, wrote a letter in response to that article. Citing Stephen Hawking's hypothesis that miniature black holes would have existed moments after the big bang, Wagner asked whether scientists knew "for certain" that RHIC would not create a black hole.

Scientific American printed Wagner's letter in its July issue, along with a response from Frank Wilczek of the Institute for Advanced Study in Princeton. Physicists hesitate to use the word "impossible", usually reserving it for things that violate relativity or quantum mechanics, and Wilczek called RHIC's ability to create black holes and other such Doomsday ideas "incredible scenarios". Amazingly, however, he then went on to mention another Doomsday scenario that was more likely than black holes. It involved the possibility that RHIC would create a "strangelet" that could swallow ordinary matter. But not to worry, Wilczek concluded, this scenario was "not plausible".

It was the July 1999 issue of Scientific American containing the Wagner-Wilczek exchange that then inspired the Sunday Times article in mid-July. This was followed by much more press coverage, and the filing of a lawsuit, by Wagner himself, to stop the machine from operating.

Shortly before the July issue of Scientific American was published, **Brookhaven's director John Marburger learned of the letters, and**

appointed a committee of eminent physicists (including Wilczek) to evaluate the possibility that RHIC could cause a Doomsday scenario. After the Sunday Times article appeared, CERN's director-general Luciano Maiani – fearing a similar reaction to the Large Hadron Collider that was then in the planning stages - did likewise.

(上の引用部に対する拙訳として)

「問題はサイエンティフィック・アメリカン誌が加速器 RHIC についての記事 (1999 年 3 月号 65–70 ページ) を掲載した時より数か月前に遡る。『小さなビッグバン』とタイトルが付されていた同記事は [極めて早期の宇宙にて存在していた物質の組成を研究する装置の野心的側面に言及していた] とのものだった。ハワイの菜園の創立者となっていたウォルター・ワグナーがその記事に対してのものとしての手紙を書いてよこしてきた。[ビッグバン直後、ミニブラックホールが存在していた] とのステイブン・ホーキングの仮説を引用しながら、ワグナーは「科学者らは加速器 RHIC (訳注: 『小さなビッグバン』と題されての記事にて取り上げられていた加速器) はブラックホールを生成することがないとはきと分かっているのか」と訊ねてきた。

サイエンティフィック・アメリカンは 7 月発行版にプリンストン高等研究所のランク・ウィルチェックよりの応答を脇に添えてワグナーよりの投書を書かせた。物理学者というものは通例、相対性理論や量子力学の法則を侵すものに言及するとき、「不可能である」との言葉を使うのに躊躇するきらいがあり、ウィルチェックは RHIC によるブラックホール生成能力、および、その他に [黙示録のその日] に通ずる観念につき [信じられるものではない] と表した。

だがしかしながら、驚くべきことに、彼 (ウィルチェック) はブラックホールよりさらにありえやすくもある黙示録のその日の現出的状況 (ドゥームズ・デイ・シナリオ) に言及することまでなした。それは RHIC が通常の物質を呑みこみうるストレンジレットを生成する可能性を指し示して見せた、とのものであった。しかし、「心配することなかれ」とし、ウィルチェックは「このシナリオは plausible ではない」(「ありえることではない」あるいは「もっともらしくは見えない」) と結論付けた。

後の 7 月中旬のサンデー・タイムズ紙の記事に影響を与えたのは 1999 年 7 月のサイエンティフィック・アメリカン誌のワグナー・ウィルチェック書簡を含む版である。これがより多くの紙誌における取扱い、そして、稼働中のマシンを止めるためのワグナー彼自身のものにもよる訴訟の提訴によって後追いされることになった。

サイエンティフィック・アメリカン誌の 6 月発行より少し前、ブルックヘブン国立研究所の所長ジョン・マクバーガーは書簡をめぐる状況を知り、RHIC が [黙示録のその日の現出的状況] を引き起こしうるかの可能性について見極めさせるためのウィルチェックを含む令名馳せていた物理学者らによる委員会を設立していた。サンデー・タイムズの記事が世に出た時には計画推進段階にあったラージ・ハドロン・コライダーにつき同じくもの反応が出てくることを危惧した CERN の所長ルチアーノ・マイアニも同様のことをなした」

(訳を付しての引用部はここまでとする ー※ー)

(※上にては 1999 年当初、ブルックヘブン国立加速器研究所 (マンハッタン計画関係者が設立した研究機関と上にて指し示しなした研究機関) が運営する加速器 RHIC がブラックホール生成問題につき最初に取り上げられることになったことが明示されている)

以上、ブルックヘブン国立研究所 — つい先立っての段でマンハッタン計画参画者のインドル・ラビが設立したとのことを指摘したとの研究機関 — がブラックホール生成問題につき、一番最初に矢面に立たされることになった研究機関であることを紹介したとして、次いで、

[アメリカ合衆国エネルギー省(DOE)、フェルミ国立加速器研究所、CERNらマンハッタン計画の子供らがブラックホール生成問題のリスクを問われるかたちで合衆国法廷に引きづり出されている]

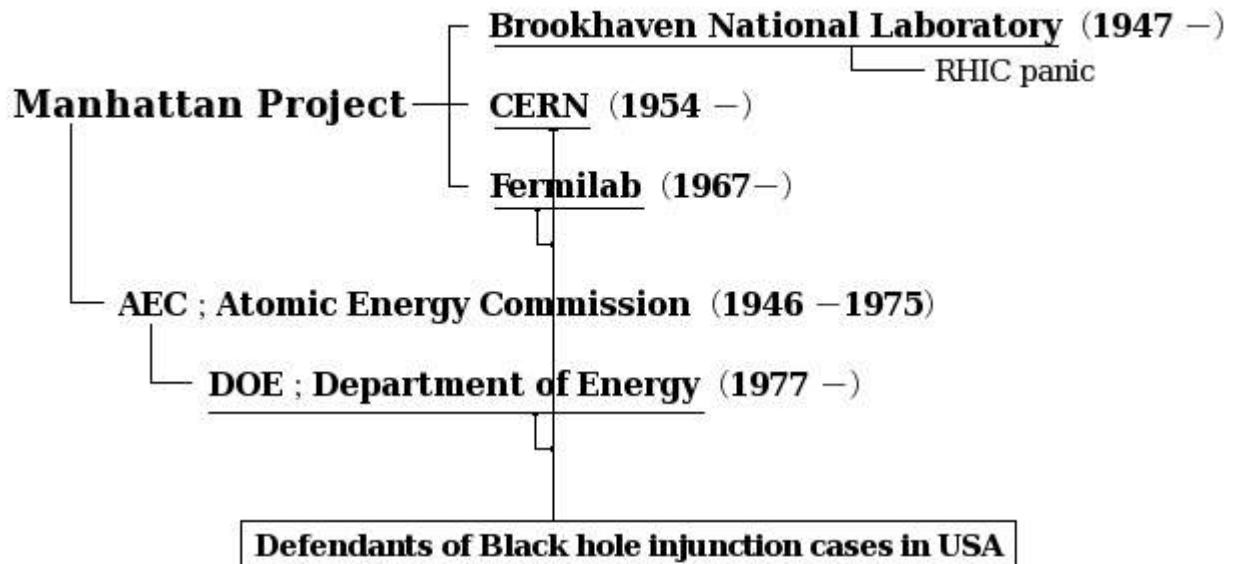
とのことの出典を挙げる。

(直下、誰でもオンライン上より即時即座に確認可能なところとして英文 Wikipedia [Safety of high-energy particle collision experiments] 項目の Legal challenges と題されての部に見る「現行の」記述よりの抜粋をなすとして)

On 21 March 2008, a complaint requesting an injunction to halt the LHC's startup was filed by Walter L. Wagner and Luis Sancho against CERN and its American collaborators, the US Department of Energy, the National Science Foundation and the Fermi National Accelerator Laboratory, 「2008年3月21日をもってしてLHC実験の開始を停止する差止めを求めているの申し立てが[CERN]およびアメリカのその協働機関たる[アメリカ合衆国エネルギー省]、[アメリカ国立科学財団]、[フェルミ研究所]らに対してウォルター・ワグナー、ルイス・サンチョらによって提訴された」

(訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※上にては加速器実験機関関係者がブラックホール生成可能性につきなんら言及していなかったとの時点で[ブルックヘブン国立研究所]のブラックホール生成可能性につき疑義発したとの人物、ウォルター・ワグナーが後に[CERN(マンハッタン計画関係者インドル・ラビが設立にての旗振り役を果たしたと先に指し示した研究機関)]、[フェルミ研究所(マンハッタン計画関係者ロバート・ウィルソンが設立したと先に指し示した研究機関)]、[アメリカ合衆国エネルギー省(元・原子力委員会としてマンハッタン計画関係者が大元となっている合衆国省庁)]らをLHC実験の差し止め訴訟にての被告として訴えていることが記されているわけである — ブラックホール生成実験に資金援助しているか、そこに直接的にコミットしているとの組織の行為の差し止めを求めるとのかたちにて、である — 。尚、ワグナーら関わった訴訟案件 — Sancho v. U.S. Department of Energy (CIVIL NO. 08-00136 HG KSC) とのケース名の訴訟 — についてはそちら訴訟内容について原告文書と判決書より原文引用をなしながら本稿の先の段で多少ながらも微に入っの解説をなしている(出典(Source)紹介の部 17 から出典(Source)紹介の部 17-4 を包摂する段)。同訴訟案件につきより細かくもの検討をなしたいとの向きらで英文の訴訟資料を読み解くぐらいの見識を有しているか、あるいは、見識欠如を補うだけの意欲を有しているとの向きらが検討なしたいとのことであれば、Sancho v. U.S. Department of Energy (CIVIL NO. 08-00136 HG KSC) との入力で当該訴訟 PDF 化文書((筆者も当然に検証しているとの文書)が特定・ダウンロード可能となっているので、そちら目を通してみるのもよからうか、と思ふ)



マンハッタン計画と人脈的・組織的に接合する存在として [アメリカ原子力委員会] 転じての [合衆国エネルギー省] [ブルックヘブン国立加速器研究所] [CERN] [フェルミ国立加速器研究所] が産み落とされたとのことが史実としてあるわけであるが、それら [合衆国エネルギー省] [ブルックヘブン国立加速器研究所] [CERN] [フェルミ国立加速器研究所] がブラックホール生成問題で主として矢面に立たされた組織体となっている、アメリカにて同一人(ウォルター・ワグナー)によって提訴された一群の訴訟——ブラックホール生成可能性を顧慮しての差し止め要求訴訟; ブラックホール・インジャンクション・ケースとでも形容されるところの一群の訴訟——の被告となりもしているとの組織体となる。権利関係の存否を争う [法律上の争訟] というものにあつて [差し止め] を求めるだけのリスクがある / 差し止めを求めるだけの法源がある (適用可能法規が存在している、法的根拠がある) とのことによつてワグナーの訴訟での主張内容が正しい正しくないとの問題は抜きにして、裁判の被告席に立つことを強いられただけの沿革・役割上の特性を (揃いも揃ってマンハッタン計画の直系の子らであるとの) それら機関が具備しているとのことには着目している。

ここまでにて

[マンハッタン計画とはブラックホール生成問題で批判の矢面に立たされることになつた研究機関の設立をもたらした計画でもある]

とのことの典拠を紹介したことになる。

以上をもってして「順次段階的に、」との式で

ナチスのユダヤ人に対する迫害、そして、そのナチス・ドイツの征戦を勝利のうちに完遂させる可能性があつたナチスドイツの原始爆弾開発可能性。そうした状況に生存上の危惧を感じたユダヤ人科学者らが大同団結して開始を促したとの言われようが現代史にまつるところでなされているマンハッタン計画 — (本稿の先の段にて既述のように) グラウンド・ゼロとの言葉を生みだした計画 — については

1. [後に LHC に進化するに至つた円形加速器、その円形加速器の [真の発明者] とされる人間 (レオ・シラード) がそもそもの計画のプロモーター (推進者) となつていた計画]
2. [公式上の円形加速器の発明者とされる人間 (アーネスト・ローレンス) が初期段階にてとりまとめ役として重要な役割を果

たしていた計画]

3. [公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)に計画に招聘された人間たるロバート・オッペンハイマーが[ブラックホール(とかなり後になって呼ばれるようになった[縮退星]というもの)の研究で既に業績を挙げている科学者]として科学者陣を率いることになりもしていた計画]

4. [戦後影響力を増した同計画関係科学者によってブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らの主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)らが設立なされられることになったとの計画]

となっているとのことがある。

この点についての出典紹介をなしたとの格好となる。

(出典(Source)紹介の部 84 はここまでとする)

(「行き過ぎている話、の中にあつて、輪をかけて行き過ぎたもの」と映るかとも見もしながらも訴求すべきかと判じたことを扱うこととした付記の部として)

ここでは多少、行き過ぎたものであるが、訴求すべくかと判じた点についての図解部を設けておく。

ウィキペディア程度の媒体より引くことにしたとの[以下の記載内容 ——世間一般の人間に対して常識論上のこととして理解されていることにまつわるオンライン上での目立つ記載内容——]をご覧ください。うえでさらに下に呈示の図らの意味合いについて ——[種族の未来を否定する力学]に抗し、宗教的作用をきたし、愚劣な、自己思考しない人間らを大量生産してきたとの[幻影投影の力学]にも抗おうとの気概・精神の自由度を有した向きにあつては—— 考えて頂きたい次第である。

(直下、極めて常識的なことが記載されているとの和文ウィキペディア[大恐慌]項目よりの抜粋として)

1929年のウォール街の暴落は米国経済に大きな打撃を与えた。しかし当時は株式市場の役割が小さかったために被害の多くはアメリカ国内にとどまっておろ、当時の米国経済は循環的不況に耐えてきた実績もあった。不況が世界恐慌に繋がったのは、その後銀行倒産の連続による金融システムの停止に、FRB(アメリカ連邦準備制度理事会)の金融政策の誤りが重なったためであった。暴落の後、米国には金が流入していたが、FRBはこれを不胎化させ、国内のマネーストックの増大とは結び付けようとしなかった。これにより米国では金が流入しているにも関わらずマネーストックが減少し続けた。その為金本位制をとる各国は金

の流出に対し、金融政策を米国のそれと順応させるを得ず(各国は金の流出を抑えるために金利を引き上げざるを得なかった)、不況は国際的に伝播していった。特に金本位制を取っていたドイツやオーストリアや東欧諸国は十分な金準備を持たず、また第一次世界大戦とその後のインフレにより金融システムが極めて脆弱な状態であった。その為、米国やフランスへの金流出により金準備が底をついてしまい、金融危機が発生した。

…(中略)…

当時の米国大統領、ハーバート・フーヴァーの「株価暴落は経済のしっぽであり、ファンダメンタルズが健全で生産活動がしっかり行われている(ので大丈夫)」という発言は末永く戒めとして記憶されることになった(当時の大経済学者アーヴィング・フィッシャーエール大学教授の所論でもあった)。金本位制の元で、経済危機はそのまま経済の根幹を受け持つ正貨(金)の流出につながる。7月のドイツからの流出は10億マルク、イギリスからの流出は3000万ポンドだった。さらに数千万ポンドを失ったイングランド銀行は1931年9月11日金本位制を停止し、第一次世界大戦後の復興でやっと金本位制に復帰したばかりの各国に衝撃を与えた。イギリスは自国産業保護のため輸入関税を引き上げ、チープマネー政策を採用した。ポンド相場は\$4.86から\$3.49に引き下げられた。ブロック経済政策は世界中に波及し、第二次世界大戦の素地を作った。

…(中略)…

ドイツは第一次世界大戦の敗戦で連合国から巨額の賠償金を請求され、フランスのルール占領にともなうハイパーインフレーションにより、従来の賠償金徴収体制が崩壊したことは明らかとなった。このためアメリカを賠償金支払いプロセスに参加させることで円滑な支払いが可能になり、またアメリカをはじめとする外国資本がドイツに導入され、ドイツ経済は回復傾向が続いていた。しかし大恐慌によってドイツ経済は深刻な状態へ陥った。アメリカ資本は次々と撤退し、復興しかけていた経済は一気にどん底に突き落とされた。失業率は40パーセント以上に達し銀行や有力企業が次々倒産、大量の失業者が街に溢れ国内経済は破綻状態となる。さらに1931年3月23日に、ドイツがオーストリアと締結した関税同盟をヴェルサイユ条約違反だと非難したフランスが、制裁としてオーストリアから資本を引き揚げたことがきっかけとなりオーストリア最大の銀行クレジット・アンシュタットが破綻したことは欧州全体に深刻な金融危機をもたらした。さらに賠償問題を解決するため、新たに検討されたヤング案に対する反発は、国家社会主義ドイツ労働者党(ナチス)の躍進をもたらした。

(引用部はここまでとする。上はアメリカの **FRB** による金融政策上の失策(但し意図的に世界経済破綻をきたすうえではの上策ともとれるが)がナチス台頭、ひいては第二次世界大戦勃発をもたらしたとのかのグレート・ディプレッション、[世界大恐慌]を引き起こしたとのことにまつわっての「一般的」歴史的分析がなされている部よりの抜粋となる)

(表記引用部にまつわっての図解をこれよりなすこととする)



(The Hoover Cabinet)

アメリカの中央銀行、FRBの象徴。

(e.g. the passing of Smoot-Hawley Tariff Act)

上は1929年、ハーバート・フーヴァー政権成立直後に描かれた政治諷刺画としてウィキペディアに記載されている画よりの抜粋だが、同画に描かれる米国大統領としてのフーヴァーの無策あるいは百害あって一利無し政策がフーヴァー政権成立後に発生した世界大恐慌に起因する災厄を増大させるに一役買ったとの言われようがよくなされる。

通貨供給量の経済への影響度合いを重要視するマネタリズムを信奉する学者らの申しようではFRBの不適切な金融政策が世界恐慌の長期化を招いたにとどまらず、否、むしろ、大恐慌を引き起こしたのはその引き締め政策であったのだとのことになっている。

worsen

(or "cause"
— according to monetarists' view)



The Great Depression

The Rise of



Carl Sagan's
Contact (1985)
&
Nazi Germany

Persecution & Invasion

1934年にドイツの権力装置を名実ともに掌握することとなったナチス・ドイツのヒトラー政権はユダヤ人の迫害と周辺地域への侵略準備・実行の道を通った(世界大戦の勃発は1939年)。そのプロセスがナチスの原爆開発によって成功裡に終わるのではないかと危機感を抱いたユダヤ民族系統の科学者らがマンハッタン計画の元となる計画を提言、後にそれが具現化を見ての原爆開発となった(よく知られた史実の問題である)。

Manhattan Project

「ハーバート・フーパー政権の大恐慌に対する「悪政これ極まれり」と後世にて評されるような対処策、それが性質上、大恐慌を長引かせ、海外資本をドイツから撤退させるが如くものであったため、ナチスが躍進できたのである・・・」。そういう歴史的観点がよくも知られ、また、語られるところのものである(例示されるところとしては輸入品に高関税をかけて報復政策連鎖とブロック経済化、互恵とは程遠き各国孤立経済化の促進を産んだスムート・ホーリ法制定など)。大恐慌前に発生・取捨の傾向を見ていたハイパーインフレに起因する混乱だけでは決定的な力を持ち得なかったと語られるナチスの権力掌握の土壌がいよいよ整えていったのはアメリカに端を発する大恐慌であり、大恐慌へのアメリカの相応の対処であったとの総括なされようがよくもなされるのである(明日をも知れぬ大量の失業者があふれかえることになったドイツにて手っ取り早い表層上の敵に対するヒトラーの宣伝が世情混乱のおかげでよりもって奏功しやすくなり、また、同ヒトラーの生活の安定を約束するとの口上でもっての、恒産なく恒心もなく、倫理観も乏しく、移ろいやすいとの社会全体に広まった下層階級をターゲットに絞っての申しようが大恐慌にて支持を得られやすくなっており、結果、ナチ党が権力を完全掌握なしえたとはよく言われることである。——例えば、信用に値しない媒体ながらもウィキペディア(untrustworthy wikipedia)からの抜粋としてながらも英文Wikipedia [NaziParty] 項目などにてても Despite these strengths, the Nazi Party might never have come to power had it not been for the Great Depression and its effects on Germany. 「(ナチ党の勢力伸長に貢献した)それら強みとなる材料があったにも関わらず、ナチスは世界大恐慌および同・世界大恐慌に起因するドイツへの影響がなければ、決して権力を掌握できていなかったろう」といった申しよう(opinion)が呈示されるだけの背景がある)。そうした相応の人間でも手繰れるし相応の人間であればこそいやむしろ手繰ろうとの教科書的な説明の背面で問題になることを問題視しているのが本稿である。それにつき、ここでの話では視覚的に際立つての類似性を呈する[鷲(Eagle)]を揃い踏みで団体表象シンボルとしてきた諸種組織体が相互作用を呈して促進されることになったのがマンハッタン計画であり、同マンハッタン計画の三人の息子が[核兵器][原子炉][規模拡大の一途を辿る]粒子加速器実験)となっているなかで、うち、二人の息子の不品行のみしか世間一般の目に入らないようになっているとのことの意味性について問題視せんとしている(尚、原子炉がマンハッタン計画のために生まれたというのはシカゴ・パイル1号(Chicago Pile-1)という世界初の原子炉がマンハッタン計画供用のためのプルトニウム239の生成のためにエンリコ・フェルミら研究チームによって構築されたことをもってしてそのように申し述べている)。

上図解剖にあつての内容に関わるとのことで申し述べるが、鳥類のワシは[欧米の権力機構の象徴]として長らくも用いられてきたものである。下を参照されたい。

(直下、極めて常識的なことが記載されているとの和文ウィキペディア[鷲(紋章)]項目よりの抜粋として)

鷲(英語: Eagle、ドイツ語: Adler)は、鷲を用いた紋章の一つ。鷲の図案は紋章の中で、チャージ、サポーター、クレストなどとして使われている。また頭部、羽、足など鷲の一部が使われる場合もある。鷲は、強さ、勇気、遠眼、不死などの象徴として使われ、空の王者や最高神の使者とも考えられた。神話では、ギリシャ神話ではゼウス、ローマ神話ではユーピテル、ゲルマン部族ではオーディン、ユダヤ教やキリスト教の聖書では神、キリスト教芸術では福音記者ヨハネなどに関連して使われた。古くはローマ帝国の国章とされ、ヨーロッパを中心として関連した帝国、王国、貴族、都市、教会などで使用された。現在のドイツ、アメリカ合衆国、ロシア連邦、エジプトなどの国章にも使われている。

(引用部はここまでとする)

さて、上にては鷲は(ローマの象徴 Imperial Eagle などの沿革もある一方で)[ゼウス神の象徴]であるなどと掲載されているが、

(わざとそういう飛躍性が鼻につこうとの話柄をとるとして)

[鷲に変じてのゼウス]

が目立っても登場してくるのは

[トロイア ——後に黄金の林檎を巡る諍(いさか)いから滅亡の道を歩むことになった古の都市トロイア—— の皇子ガニメデをゼウスが略取したとの伝承]

にまつわるところである。ゼウスが神々に不死を約束するネクターの給仕係として見目麗しきガニメデを欲したとされる、であるから、ゼウスが鷲に変じてトロイア皇子を不死の飲料(ネクター)の給仕係として略取したとの式にて、である(:和文ウィキペディア[ガニメデス]にてガニメデースは、ギリシア神話の登場人物である。イーリオス(トロイア)の王子で美少年だったといわれる。オリュムポス十二神に**不死の酒ネクター**を給仕するとも、ゼウスの杯を奉げ持つともいわれる…(中略)…ガニメデースの誘拐には諸説がある。まずガニメデースをさらったのは誰かについて異伝があり、神々たち、**ゼウス自身、ゼウスの使いの鷲、ゼウスが鷲の姿に変じてさらったなどの説がある**。一方で、タンタロス、またはミーノース、エーオースがさらったという伝承もある。また、ガニメデースがさらわれた場所は、一般にトロアスのイーデー山(ラテン語名イーダー山)であるとホメロス他ではいわれる(引用部はここまでとする)と記載してあるとおりでである。

他面、北欧神話では

[神々に永遠の若さと不死を約束するとの神話的設定を伴っての**黄金の林檎**](**ガニメデ**がその給仕係となった[ネクター]よろしくの神に不死を約束するとの**北欧神話版**の方の**黄金の林檎**)

の略取の物語が(ギリシャ神話と同文に)鷲と結びつけられて登場してくる。鷲に変じた巨人(スィアチ)が黄金の林檎の管理者たる女神イズンを略取するとの筋立てが北欧神話では具現化を見ているのである(:同文にオンライン上にあつて目につきやすきところとして和文ウィキペディア[スィアチ]項目にて『スノツリのエッタ』第二部『詩語法』で、彼がアース神族の女神の**一柱イズン**を、神々に永遠の若さをもたらす**リンゴ**もろとも略奪する経緯が紹介されている…(中略)…ロキは「永遠の若さをもたらすリンゴによく似たリンゴを見つけた。あなたのリンゴと見比べてみないか」などと言って、リンゴを持たせたイズンをアースガルズの外へ連れ出す。**鷲に変身したスィアチが素早く彼女をさらってしまった。リンゴを食べられなくなった神々はたちまち老い始めた**](引用部はここまでとする)と記載してあるとおりでである。尚、たかだかウィキペディア程度の出典ではなく、よりもって高度な出典を出せとご所望の向きもあらわれるかもしれないから書いておくが同じくものことについては本稿にての先の段、**出典**

(Source)紹介の部 63 (3)に接合するとの部にてオンライン上より誰でも確認可能であるとの Project Gutenberg 公開の著作、スウェーデン人著述家 Viktor Rydberg の手になる Teutonic Mythology (『チュートン人の神話』)の記述内容として “ **Thjasse was known as the storm-giant who having been born in deformity was ever seeking golden apples from Idun to cure his ugliness.** Upon one occasion assuming the form of an eagle he interrupted a feast of Odin, Honer and Loke and when the latter attempted to strike the voracious bird with a stake found himself fastened to both stake and eagle and was borne away shrieking for mercy. Thjasse promised to release Loke if he would bring to him Idun and her golden apples.[. . .] Idun, who possesses "the Asas' remedy against old age," and keeps the apples which symbolise the ever-renewing and rejuvenating force of nature, is carried away by Thjasse to a part of the world inaccessible to the gods. The gods grow old, and winter extends its power more and more beyond the limits prescribed for it in creation. ” (訳として)「スィアチはゆがみをもったかたちで生まれ落ちたとの嵐の巨人となり、**彼は自身の醜さを取り除くためにイドゥンから黄金の林檎を求めようとしたとの存在となる**。ある機会にてそのスィアチがオーディン・ヘーニル・ロキらの供宴を鷲の姿にて遮らんとした折、三者の内のロキがその食欲なる(鷲の姿に変じたスィアチであったとの)鳥を棒にて打ち払おうとした際、その棒諸共、鷲にく

くりつけられるかたちで連れ去られる格好となりもし、(空中にて)金切り声にて慈悲を請うことになった。スィアチはもしロキが彼の元にイドゥンおよび彼女の黄金の林檎を持ってくれば、解放してやろうと請け合った…(中略)…イドゥン、[アサ神族(アース神族)の老いに抗する対処策]を保持し自然にての絶えず生まれ変わる力・若返る力を象徴しての林檎を管理していたとの彼女がスィアチによって神々の到達不可能なる世界へと略取されることになる。神々は老いはじめ、自然創造の理にて規定されていた上限を超えて冬がその勢威を強めていくことになる」(引用部に付しての拙訳はここまでとする)との記載を引いていたところでもある)。

そうしたことから、[鷲に変じてのゼウスによるガニメデの略取]と[鷲に変じての巨人スィアチによる(北欧神話神格ロキを利用しつつもの)イドゥンの略取]とのことは[不死の飲食物の給仕係ないし管理者の鷲に変じた存在による略取]とのことで話がつながるわけだが、そちらと関わる黄金の林檎に伴う不快極まりない寓意を[核たるところのうちの一つ]として問題視しているのが本稿となる。



Iðunn & Þjazi
(Tjasse)

Golden Apple

Nectar

eternal youth
&
immortality

Ganymede & Zeus



上掲図上段にては[女神イドゥンを象(かたど)った彫刻](左)と[女神イドゥン(および彼女が管掌する黄金の林檎)を捕まえて略取しているとの鷲に変じた嵐の巨

人スピアチの似姿を描いた画](右)とを並列して挙げた(イドウンを象った彫刻は Herman Wilhelm Bissen という彫刻家の作となり、スピアチを描いた画は 20 世紀前半部、1920 年代に描かれたものとして英語版ウィキペディアに掲載されているものとなる)。対して上掲図下段。[ガニメデと鷲に変じたゼウスが並列して描かれる彫刻](左)と[ゼウスのガニメデ略取の場面を描いた画](右)とを並列して挙げた(ガニメデと鷲に変じたゼウスの双方を描く彫刻は Project Gutenberg のサイトにて公開されているおよそ 100 年程前の Myths of Greece and Rome との著作(著者は H  l  ne Adeline Guerber という歴史家)にて掲載されている写真、往時、ナポリの美術館に収蔵されていたとの一品を元にしたものとなり、他面、ガニメデ略取を描いているとの画は Eustache Le Sueur という 17 世紀フランスの有力画家の手になる作となる)

上のようなアナロジー(類似性)の問題をわざわざもってして取り上げているとの背景としては次のようなことがある。

「特定伝承では「リングの類」「とも」結びつく「黄金の林檎」であるが(:「黄金の林檎」が「リングの類」と結びつくとの伝承があることについては本稿にての 出典(Source) 紹介の部 60(3)で Project Gutenberg サイトで公開されており、その気があれば誰でも入手できるとの H  l  ne Adeline Guerber という前世紀前半まで活動の英国人史家の手になる Myths of the Norsemen From the Eddas and Sagas、『エッダからサガに至るまでの北欧人種の神話』とでも訳せよう同著作にての The Wooing of Gerda との節にあつての『スキールニルの歌』というエッダ収録詩にての解説部より内容を引いていた。(再度、引用するところとして) “ To induce the fair maiden to lend a favourable ear to his master’s proposals, Skirnir showed her the stolen portrait, and proffered the golden apples and magic ring, which, however, she haughtily refused to accept, declaring that her father had gold enough and to spare. ” 「(スキールニルが自身が北欧の神フレイの恋の仲介役を演じることになったとのその相手方の巨人族の乙女ゲルズの説得に際し)輝く金髪の乙女の耳をば自らの主人の求婚の提案へと傾けさせるため、スキールニルは主人の肖像を見せ、そのうえで、「黄金の林檎」と「魔法のリング」を(彼女がフレイ神と結ばれる対価に、と)提示したが、彼女は「彼女の父は十分にして余りあるほどの黄金を持っている」とたからかに述べ、その申し出を容れることを拒んだ」(拙訳付しての引用部はここまでとする)との記述を引き、「黄金の林檎」と「リング」が結びついていることを指し示さんとしてきた ——ちなみに直近引用部にて magic ring [魔法のリング]とされているのは Draupnir ドラウプニルという固有名詞が与えられているものとなることも先に摘示せんとしてきた。北欧神話にあつての同ドラウプニルについては日本では「アームブレスレット」(腕輪)と表されもすることがあるものだが、「オーディンの金の「リング」」であると表現されることが英語圏では多いものとなり、たとえば、英文 Wikipedia [Draupnir] 項目などには “ In Norse mythology, Draupnir is a gold ring possessed by the god Odin with the ability to multiply itself: Every ninth night eight new rings 'drip' from Draupnir, each one of the same size and weight as the original.[. . .] It was offered as a gift by Freyr's servant Skirnir in the wooing of Gerdr, which is described in the poem Skirnismal. ” 「北欧神話における「ドラウプニル」とはオーディンに保有されている「増殖能力を帯びての黄金の「指輪」 a gold ring」となる。9 夜毎に元となったものと同じサイズ・同じ重量の新たなドラウプニルがドラウプニルからドリップ、滴り落ちてくる…(中略)…同リングは『スキールニルの歌』にて表されるところ、ゲルズへの求婚に際してフレイ神の従僕スキールニルより贈り物とし

て呈示されたものとなっていた」との記載が見受けられるところとなっている――)、ギリシャ神話では「最高の美神の証(あかし)」ともなっているそちら「黄金の林檎」の取得を企図しての女神らの争いがトロイア破滅をもたらしたとの故事が「あまりにも」現況の「リング(粒子加速器)にまつわるブラックホール生成問題の背面にある事柄ら」と接合すると述べられるだけの事情・要素があるとのことが本稿にての訴求事項となっている

などと述べても、ここでの話「単体」だけ読まれれば、無論、

『(黄金の林檎との多重的關係性について先だってからより問題視をなしてきたとの作品たる)カール・セーガン小説『コンタクト』に見るマンハッタン計画にまつわる内容を[(上にての図示部にて取り上げているとの)驚と背面でよくもつながるとのマンハッタン計画に至るまでの流れ]とつなげるべくもの[極めて牽強付会なる物言い]([極めてこじつけがましきことを前面に押し出している物言い])をなしているにすぎない』

そのように当然に思われるところか、とも思う。「が、現実にはそうではない」ということは本稿の内容をよく検討頂ければ、お分かりいただけることか、と思う(弱者を強者が食らうとの自然界のピラミッド構造、食物連鎖の頂点に立つ鳥類の驚とても相応の寓意付けに用いられているとの側面がこの世界にはある、そういうことと共に分かりいただけることか、と思う)。

(多少、行き過ぎたものとの感ありの話ながらも、訴求すべきかと見たことを扱っての図解部は以上とする)

さて、ここまでにあって

[ナチスに対するカウンター・アクションが昂じてのマンハッタン計画と加速器実験の関わり]

についての話をなすことでもってしてマンハッタン計画というものが

[後に LHC に進化するに至った円形加速器、その円形加速器の[真の発明者]とされる人間(レオ・シラード)がそもそもの計画のプロモーター(推進者)となっていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)が初期段階にてとりまとめ役として重要な役割を果たしていた計画]

[公式上の円形加速器の発明者とされる人間(アーネスト・ローレンス)に計画に招聘された人間たるロバート・オッペンハイマーが [ブラックホール(とかなり後になって呼ばれるようになった[縮退星]というもの)の研究で既に業績を挙げもしていた科学者]として科学者陣を率いることになった計画]

[戦後影響力を増した同計画関係科学者によってブラックホール生成問題で矢面に立たされることになった研究機関らのうち、主要なるもの(フェルミ国立研究所/ブルックヘブン国立研究所/CERN)らが設立されることになったとの計画]

との観点で [加速器実験] と結びつくことを示し、もってして、

[(ナチスがベルリン・オリンピックで流したテレビ映像が異星系より送られてきて、その中にブラックホールないし通過可能なワームホールを用いてのゲート装置の設計図が紛れ込まされていたとの凝った粗筋を有しているとの)カール・セーガン『コンタクト』に

あつての不快なる側面を示す]

との訴求をなせるとのことになる。

そして、問題はそういうことがあるのが 一くどくも繰り返すところとして— [『コンタクト』作者セーガンが自らのユダヤ系としての出自・歴史を振り返って加速器実験のありようについての思いの丈を示さんとしていた] との筋の話ではなんら説明がつか「ない」とのことである。小説『コンタクト』および『コンタクト』作者たるカール・セーガンやりようにあつての臭気を放ってやまないとの側面（既に幾頁も割いて指し示してきたところの [加速器によるブラックホール生成問題にまつわつての異常異様なる先覚的言及をなしているとの側面] および [(先覚性が問題となるところで) 嗜虐的反対話法が用いられているとの側面]) とを複合顧慮したうえでそれも判じざるを得ぬとのことがあるがゆえに危険であると申し述べるのである。

(今しばらくも [d] と振つての段の話の話を続けるとして)

次いで、小説『コンタクト』(『コンタクト』はハード SF に分類される作品としては異例なことにリリース後 2 年で 175 万部が供給されたとの世界的ミリオンセラー記録作 — 先にもそちら記載を引いたところだが、英文 Wikipedia [Contact (novel)] 項目にての Publication history の節にて “ The first printing was 265,000 copies. In the first two years it sold 1,700,000 copies. It was a main selection of Book-of-the-Month-Club. ” (「初版」26 万 5000 部、刊行後最初の 2 年で 170 万部を売り上げた) と記載されているところである— との作品にして、かつもつて、[米国科学界のオピニオン・リーダーとなっていた天文学者カール・セーガンが満を持して放った力作] であるとの売り口上の作品) にあつてのゲート構築 — ブラックホールないしワームホールの人為生成と結びつけられてのゲート装置 — の構築のプロセスが『ギルガメシュ叙事詩』(における英雄ギルガメシュの不死の探求) 「とも」結びつけられているとの点について取り上げることとする。

同じくものこと、小説『コンタクト』(に見るゲート装置構築のプロセス) と『ギルガメシュ叙事詩』(における英雄ギルガメシュの不死の探求) との結びつきもまた

[現行執り行われている加速器実験における黄金の林檎と関わる側面]

[ブラックホールやワームホールとの接点および 911 の事件の発生の事前予告との二つの側面を具備した文物らにおける黄金の林檎と関わるとの側面]

と同文に [黄金の林檎] (既に本稿にて詳しくも解説しているようにエデンの園での禁断の果実「とも」複合的多重的に結びつくようになっているとの神話上の果実) との接合点となるからである。

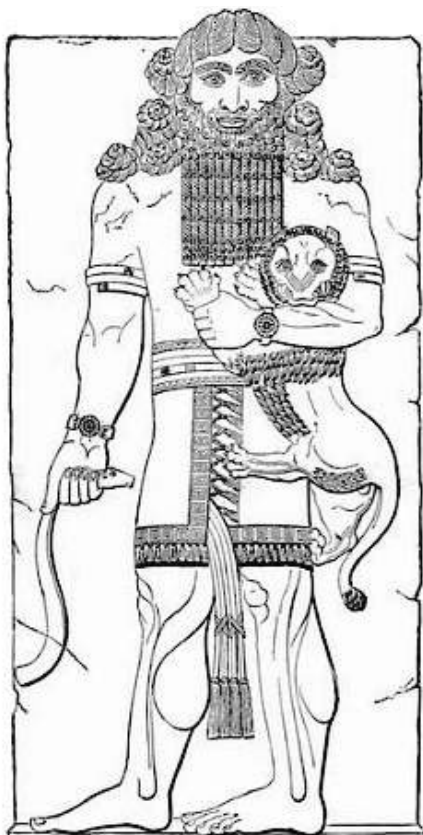
以下のこと、参照されたい。

[小説『コンタクト』に関してはナチスによるテレビ放送に紛れ込まれるかたちで外宇宙より送信されてきたマシンの建設計画に対して建設資金を提供し、日本の北海道にそれを最終的に完成させたのは技術的優良企業の経営で財をなしたとの作中設定の大富豪(ハッデンという作中人物)であったとの粗筋が採用されているのだが、そこに見る[ブラックホールないしワームホール生成ゲート構築の資金的後押しをなした大富豪]との設定のハッデンなる登場人物、(ギルガメシュ叙事詩に見る)[ギルガメシュ]を自らの存在、そして、行く末と重ねているといった按配のバビロン懐古趣味の人間として描かれている。そして、同人物、(ゲート装置設計の後押しをなしたのもそのためと描写される中で)「不死を願って」[冷凍睡眠状態にしつつもの自らの肉体]を宇宙に放流しそれを(不死化技術を擁した)地球外先進文明が回収してくれることを祈念、物語の終盤部にて[ギルガメシュ](不死を求めての旅に出たとの英雄)の名を冠するスペースカプセルに入り込んだとの設定の人物ともなっている]

[さて、(ゲート建設計画が一端は暗礁に乗り上げた折に助け船を出したとの『コンタクト』

登場の架空の大富豪ハッデンがそちらと作中結びつけられているとの)「ギルガメシュの不死を求めての旅の物語」と言えば、である。それが「黄金の林檎の物語であるヘラクレス第11功業」と高度に記号論的な質的同一性を帯びているとを (ギルガメシュ叙事詩の内容を知る由もなかったであろうとの17世紀文豪ジョン・ミルトンの手になる『失樂園』のブラックホールに相通ずる描写が「ギルガメシュの不死の旅と繋がっている洪水伝承および蛇による不死の略奪」をなぞるが如くものとなっており、そのことと黄金の林檎との結節点について訴求するとの観点から) **本稿にて従前、問題視してきたとの物語でもある** (ギルガメシュの不死を求めての物語とヘラクレス第11功業の「黄金の林檎」[洪水伝承]を介しての顕著なる接合性については本稿にての**出典(Source)紹介の部63**から**出典(Source)紹介の部63(3)**を包摂する解説部を参照のこと)

(直上表記のことに基づいての従前図解部の再掲として)



Gilgamesh



Heracles

- demigods
- lion hunters (& lion's pelt wearers) source53 (Norse mythology & Iðunn)

<ul style="list-style-type: none"> • targets of <u>voyages</u> & immortality ⇒ Plant of immortality & Golden Apple • targets of <u>voyages</u> ⇒ Plant of immortality & [Golden Apple → Forbidden fruit] ; loss of immortality & surpent's trick • destinations of <u>voyages</u> related with deluge myths ⇒ (Utnapishtim legend, Garden of Hesperides ⇒ [Atlantis])
--

Gilgamesh

Heracles

• demigods

• lion hunters (& ^{source53}lion's pelt wearers)

(Norse mythology & Iðunn)

- targets of voyages & immortality
= Plant of immortality & Golden Apple
- targets of voyages
= Plant of immortality & [Golden Apple → Forbidden fruit]
; loss of immortality & serpent's trick
- destinations of voyages related with deluge myths
= (Utnapishtim legend, Garden of Hesperides = [Atlantis])

- "The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods: it was another Eden."
— Alexander Muray
- [Paris = Aphrodite; Venus] → [Adam = Satan (personification of the planet Venus)] "Fall" connection
femme fatale (Helen) & Golden apple
Francis Bacon's New Atlantis
- [the garden of Hesperides = Atlantis = America] → [Qutzacoatl (divine personification of the planet Venus) & betrayal] → [Satan] "Fall" connection

"Adam was told he might eat freely of every tree in the garden, excepting only the Tree of Knowledge; we may, therefore, suppose that he would be sure to partake of the fruit of the Tree of Life, which, from its prominent position "in the midst of the garden," would naturally attract his attention." — Plant lore, legends, and lyrics (1884)

- ここでの関係図で伝えんとしていることは
 [ギルガメシュとヘラクレスの両雄] (半分、神の血を受け継ぐ半神との設定の存在ら) については次のような類似性が成立しているとのことである。
- 両雄共々、獅子を屠った英雄として偶像化されている。
 - 両雄共々、獅子の皮を被った英雄との話が伴っている。
 - 両雄共々、[世界の果てに向けての旅] をなし、その目的物が不死伝承と結びついているとの存在である (かたや不死を約する薬草ないし珊瑚、かたや黄金の林檎)。
 - 同じくもの [世界の果てに向けての旅] にあつての目的物が [蛇による不死略取] の物語と接合するとの側面を有している (Edenとの接合性を媒介とする)。
 - 同じくもの [世界の果てに向けての旅] にあつての目標地点が [洪水伝承] と結びついているとのことがある (Atlantis伝承との接合性を媒介にする)。

(本稿の先行するところにて挙げた図解部、その再掲セクションはここまでとする)

[とすると、小説『コンタクト』は【ギルガメシュ】⇒【ヘラクレス第11功業と「黄金の林檎」を介して記号論的に接合する不死を求めての旅に出たとの英雄】に自らを仮託していた不死を焦がれ望んだ男の援助でゲート装置が構築された作品とも「記号論的に」言い換えられるわけであるが、[ギルガメシュとヘラクレスの記号論的連結に黄金の林檎が関わっていること] は本稿にてのこれまでの段にて述べてきたことら、【トロイアとトロイア崩壊の原因としての黄金の林檎の接合性】、【カール・セーガン小説『コンタクト』にあっての複合的にトロイアと結びつくとの側面】(グランド・セントラル・ステーションのことを

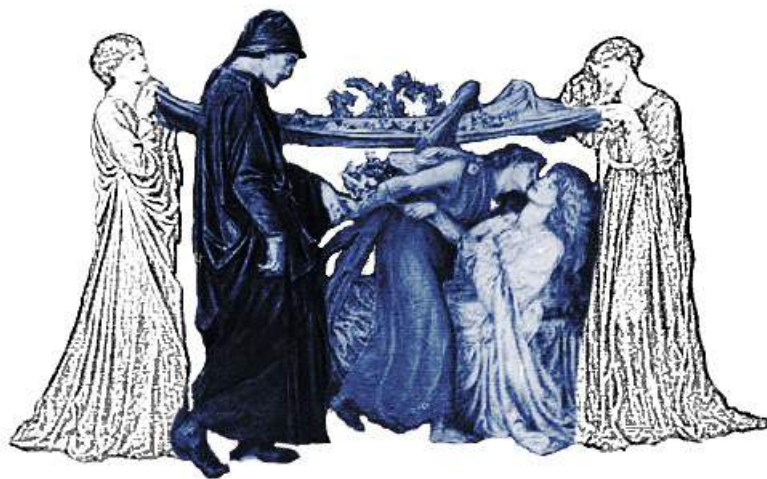
念頭に先述の点)、そして、【アトランティスと黄金の林檎の園の接合性と昨今のLHCによるブラックホール生成問題の関係性】——たとえば、1992年(『コンタクト』出版後7年の後)よりLHC参画の実験グループ、未だブラックホール生成の可能性だに観念されていなかった折にその命名がなされたとの実験グループの名はATLASグループと決せられているわけだが(出典(Source)紹介の部36(2)、出典(Source)紹介の部36(3))、そも、[アトラス]とは[黄金の林檎の在処を知る巨人]としてヘラクレスの11番目の功業にまつわる神話にお目見えする巨人となっているとのことがありもし(出典(Source)紹介の部39)、その巨人アトラスの名前を帯びたアトラスグループの検出器ATLASがブラックホール生成をとらえた際にその画面ディスプレイを実現するイベント・ディスプレイ・ツールが[黄金の林檎の園;大洋の彼方にあると伝わるアトラスの娘の果樹園]と同一視されもしていた伝説上のアトランティスの名を冠してのATLANTISとなっている、そういったことらに見る関係性——に鑑(かんが)みて、[偶然]の問題としては(「またもや、」のこととして)できすぎている側面がある]

表記の申しようを支えるところとして小説『コンタクト』に見るゲート装置構築挙動にギルガメシュ(の不死の探求)のモチーフが色濃くも関わっているとのことの出典を下に挙げておくこととする。

出典(Source)紹介の部85

SOURCE

85



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部85にあつては、

[小説『コンタクト』に関してはナチスによるテレビ放送に紛れ込まされるかたちで外宇宙より送信されてきたマシンの建設計画に対して建設資金を提供し、日本の北海道に

マシンを最終的に完成させたのは技術的優良企業の経営で財をなしたとの作中設定の大富豪(ハッデンという作中人物)であったとの粗筋が採用されているのだが、その大富豪ハッデン、[ギルガメシュ]を自らの存在、そして、行く末と重ねているといった按配のバビロン懐古趣味の人間として描かれている。そして、同人物、自らを冷凍睡眠状態にしつつもの肉体を宇宙に放流しそれを先進文明が回収してくれることを祈念、物語の終盤部にて[ギルガメシュ]の名を冠するスペースカプセルに入り込んだとの設定の人物となっている]

とのことが **Philological Truth**[文献的事実]であることを示すべくもの出典を原文引用との式で挙げておくこととする。

まずもっては

[富豪ハッデンらの企業が建設に関わっていた[送信されてきた設計図に基づくマシン設計計画]が一端は爆破テロによって水泡に帰した後、ハッデンおよびそのビジネスパートナーの山岸という人物が北海道に造っていた同一マシンが正式に認可されるようにすべしとの暗流としてのやりとりがなされ、結果的に、マシン計画がその方向で実現を見たとの作中設定が採用されている]

とのことから[文献的事実]であることを示しておくこととする。

(直下、『コンタクト(下)』(新潮「文庫」版——池央耿／高見浩訳——、重版重ねての第六刷版)にあつての[エルビウムの車知]の章、87 ページより[最初期、マシンの建造を引き受けていたのは富豪ハッデンの経営する企業であった]との記載内容につき掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

アメリカにおける<マシン>建造の元請けはハッデン産業だった。ソル・ハッデンは、<メッセージ>に指示されいかなる検査も実施するべきではないと強く主張し、また、コンポーネントの一部を仮に組み立てることに反対した。<メッセージ>の指示は厳守されなくてはならず、一字一句たりともおろそかにしてはならない、というのが彼の方針だった。

(国内にて流通している訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 CONTACT にあつての Erbium Dowel の章にあつての表記は——オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして——“ Hadden Industries was the American prime contractor for Machine construction. Sol Hadden had insisted on no unauthorized testing or even mounting of components intended for eventual assembly into the Machine. The instructions, he ordered, were to be followed to the bit, there being no letters perse in the Message. ” とのものとなる)

(直下、『コンタクト(下)』(新潮「文庫」版重版)にあつての[オゾンの長老たち]の章、125 ページより[大富豪ハッデンが主人公に対してマシンの開発計画の再開可能性について示唆している]との記載内容につき掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

「しかし、このわたしが<マシン>のことを諦めていないのですから」ハッデンは言葉を続けた。「あなたが悲観的になることはないでしょう。察するところ、あ

あなたは、もう<マシン>は完成しないのではないか、計画の挫折を願っている人間がこう多くては、この先あまり希望を持ってないのではないかと心配しておいでですね。大統領も同じ気持ちと見受けました。

(国内にて流通している訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 CONTACT にあつての The Elders of Ozone の章にあつての表記は —オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして— “ **"If I'm not disheartened about the Machine," he went on, "I don't see why you should be. You're probably worried that there never will be an American Machine, that there are too many people who want it to fail. The President's worried about the same thing."** ”とのものとなる)

(直下、『コンタクト(下)』(新潮「文庫」版)にあつての[オゾンの長老たち]の章、135 ページから 136 ページより[富豪ハッデンとその日本でのビジネスパートナーの山岸なる人物が一端破壊されたマシンを北海道で完全再現させる用意があることにつき明示した]との記載内容につき掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

「じゃあ、同じ<マシン>がもう一基、日本で密かに建造されている、ということですか？」

「いや、必ずしも秘密というわけではありません。これまでコンポーネントを個々に試験して来ましたが、それ以外の試験方法を探ってはならないという法はないでしょう。それで、山岸さんとわたしはこんなことを考えているのです。北海道で進めている試験の予定を変更して、この段階でひとまず全体を組み立ててみるのですよ(略)」

…(中略)…

気にするふうもなく、ハッデンはエリーに向き直った。「コンポーネントの中には試験で撥ねられるものも出て来るでしょう。あるいは、輸送の途中で各種の衝撃を受けているものもあるかもしれません。が、いずれにせよ、最終的にはすべて<メッセージ>の基準に合格しなくてはならないわけで、まず全体を組み立てること自体が一種のテストと言えます(以下略)」

(国内にて流通している訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 CONTACT にあつての The Elders of Ozone の章にあつての表記は —オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして— “ **"You mean you've been secretly assembling an identical copy of the Machine in Japan?" "Well, it's not exactly a secret. We're testing out the individual components. Nobody said we can test them one at a time. So here's what Yamagishi-san and I propose: We change the schedule on the experiments in Hokkaido. We do full-up systems integration now, and if nothing works we'll do the component-by-component testing later. The money's all been allocated anyway.[. . .] Unperturbed, adden continued. "Now some of the components will have been spun or dropped or something. But in any case they'll have to pass the prescribed tests."** ”とのものとなる)

(直下、『コンタクト(下)』(新潮「文庫」版)にあつての[蟻の夢]の章、148 ページより[富豪

ハッデンらの手でマシンの複製が製造され、それが正式に認可されることとなった]との
記載内容につき掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

いつものことながら、記者団の質問は月並だった。国柄や風土の違いは多少認められるにしても、<マシン>に対する報道陣の姿勢は、基本的に世界中どこも同じだった。アメリカとソ連の挫折の後、日本で<マシン>が建造される運びになったことを評価しますか?北海道の生活で、隔絶感を味わうことはありませんか?…(中略)…十二面体を三層のベンゼルが覆う<マシン>の構造をどう説明しますか?もちろん、誰にもわからないことを承知の上で、アロウェイ博士個人の解釈をお訊きしたい。エリーはそれに答えて、判断の材料がないところで何かを解釈しようとする愚かしさを説いた。

(国内にて流通している訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※以上の原著 CONTACT にあつての The Dream of the Ants の章にあつての表記は ——オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして—— “ As always, the questions were familiar. Reporters all over the world had nearly the same approach to the Machine, if you made a few allowances for local idiosyncrasies. **Was she pleased that, after the American and Soviet "disappointments," a Machine was being built in Japan? Did she feel isolated in the northern island of Hokkaido?** Was she concerned because the Machine components being used in Hokkaido had been tested beyond the strictures of the Message? Before 1945, this district of the city had been owned by the Imperial Navy, and indeed, immediately adjacent she could see the roof of the Naval Observatory, its two silver domes housing telescopes still used for timekeeping and calendrical functions. They were gleaming in the noonday Sun. Why did the Machine include a dodecahedron and the three spherical shells called benzels? Yes, the reporters understood that she didn't know. But what did she think? She explained that on an issue of this sort it was foolish to have an opinion in the absence of evidence. ” とのものとなる)

ここまでにて

[(小説『コンタクト』では) 富豪ハッデンらの企業が建設に関わっていた[送信されてきた設計図に基づくマシン設計計画]が一端は爆破テロによって水泡に帰した後、ハッデンおよびそのビジネスパートナーの山岸という人物が北海道に造っていた同一マシンが正式に認可されるようにすべしとの暗流としてのやりとりがなされ、結果的に、マシン計画がその方向で実現を見たとの作中設定が採用されている]

とのこと ——同じくもの部は現行にあつての和文ウィキペディア[コンタクト(映画)]項目に(以下、引用なすとして) “ ハッデンの助言によりエリーはメッセージの解読に成功。メッセージに含まれる設計図をもとにヴェガへの移動装置が建設される。エリーは乗組員に志願するが、審議会でパーマーに「神の存在を信じるか」と問われ、実証主義の立場から否定する。結果、神を信じる多くの人々を思い込みだと思っていることを理由にエリーは落選し、表向きに神の存在を認めたドラムリンが乗組員に選ばれてしまう。しかし動作テストの日、カルト宗教家の自爆テロによりマシンは破壊され、ドラムリンも死亡する。失意のエリーのもとに、ハッデンから北海道で極秘に建造されていたマシン2号機の存在が知らされ、乗組員として誘われる。エリーが乗り込むと、ワームホールを経由しヴェガにたどり着く。エリーはそこで父親を見つけるが、ただ父親の容姿をした異星人であることに気づく。彼らはそこで何億年もの間知的生命体とコンタクトを取っているのだといい、エリーは地球に送り戻される” (引用部はここまでとする)と記述されているようにハリウッド女優ジュディ・フォスター主演の映画版『コンタクト』にも採用され

ているとの筋立てとなる—— の出典紹介を原著及び訳書よりの原文引用との式でなしたところで、次いで、

[冷凍保存の可能性を模索していた人間としてハッデンがギルガメシュと名付けられた小型スペースシップで太陽系外に冷凍睡眠状態になりながら旅立つとの作中設定が採用されている]

この出典を示しておく。

(直下、『CONTACT(下)』(新潮「文庫」版)にあつての[ギルガメシュ]の章、296 ページより 298 ページにあつての[富豪ハッデンがその肉体に冷凍化処置を施して宇宙に放出なさせ、ギルガメシュと名が付いたスペースシップが他の先進文明に回収されることを願つての冒険に出た]との記載内容につき掻い摘まんでの原文引用をなすとして)

考えてみれば、死の直前ということにこだわる理由もないではないか。余命僅か一、二年とわかったら、それ以上肉体が衰えないうちに、直ちに冷凍人間になってしまった方が賢明ではなからうか。それにしても……。ハッデンは溜息を吐いて思案した。肉体を蝕んでいる病気がどのような性質のものであれ、それをそのままにしては、蘇生の後も病勢は悪化するのではなからうか。何世紀にもわたる冷凍睡眠から目覚めた途端に、異星人にはまるで馴染みのない黒腫や心筋梗塞で死んでしまつては意味がない。ハッデンは結論した。彼の理想を実現する方法はただ一つ。頑健な肉体をもつて星間宇宙へ片道旅行に出るしかない。病苦に悩み、老醜をさらすことを免れるという点でも、この方法は願つてもない。太陽系の内惑星を遠く離れれば平衡体温は絶対温度で僅か数度に下がるであろうから、冷凍を持続する必要もない。温度は自然が管理してくれる。しかも、経費はかからない。この論法で、ハッデンは計画を煮詰めた。…(中略)…彼は望み得る限り最良の健康状態だった。＜マシーン＞の始動から九時間後、新年の鐘を合図に＜メセラ＞の腹に抱かれた大型補助宇宙船のロケット・エンジンが点火した。宇宙船を見る間に加速して地球圏脱出速度に達した。ハッデンはこの宇宙船を＜ギルガメシュ＞と名付けていた

(国内にて流通している訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※以上の原著 CONTACT にあつての Gilgamesh の章にあつての表記は —— オンライン上にて検索エンジンに表記のテキスト入力することで特定できようところとして—— “ Suppose you knew you had only a year or two to live. Wouldn't it be better to be frozen immediately, Hadden mused--before the meat goes bad? Even then--he sighed--**no matter what the nature of the deteriorating illness, it might still be irremediable after you were revived; you would be frozen for a geological age, and then awakened only to die promptly from a melanoma or a cardiac infarction about which the extraterrestrials might know nothing. No, he concluded, there was only one perfect realization of this idea: Someone in robust health would have to be launched on a one-way journey to the stars. As an incidental benefit, you would be spared the humiliation of disease and old age. Far from the inner solar system, your equilibrium temperature would fall to only a few degrees above absolute zero. No further refrigeration would be necessary. Perpetual care provided.** Free. By this logic he came to the final step of the argument: If it requires a few years to get to the interstellar cold, you might as well stay awake for the show, and get quick-frozen only when you leave the solar system. It would

also minimize overdependence on the cryogenics. [. . .] Instead, on the stroke of the New Year, nine hours after the Machine had been activated, the rocket engines flamed on a sizable auxiliary vehicle docked to Methuselah. **It rapidly achieved escape velocity from the Earth-Moon system. He called it Gilgamesh.**” とのものとなる)

以上でもって、

[小説『コンタクト』に関してはナチスによるテレビ放送に紛れ込まれるかたちで外宇宙より送信されてきたマシンの建設計画に対して建設資金を提供し、日本の北海道にマシンを最終的に完成させたのは技術的優良企業の経営で財をなしたとの作中設定の大富豪(ハッデンという作中人物)であったとの粗筋が採用されているのだが、その大富豪ハッデン、[ギルガメシュ]を自らの存在、そして、行く末と重ねているといった按配のバビロン懐古趣味の人間として描かれている。そして、同人物、自らを冷凍睡眠状態にしつつもの肉体を宇宙に放流しそれを先進文明が回収してくれることを祈念、物語の終盤部にて[ギルガメシュ]の名を冠するスペースカプセルに入り込んだとの設定の人物となっている]

とのことの出典とした。

([出典\(Source\)紹介の部 85](#) はここまでとする)

以上、出典紹介なしたうえで、次のこと、強調しておく。

「何故、ギルガメシュ伝承が [ヘラクレス伝承] と [黄金の林檎] を結節点に結びつのか、また、そのことがいかにしてブラックホールにまつわる問題と接合しており、それが危険であると申し述べられるかについては本稿にあっての[補説 1](#)と銘打つての部(現行は[補説 2](#)と銘打つての段にて筆を進めている)に入る前に[既に詳述に詳述を重ねて指し示してきたこと]をよく検討いただければ、お分かりいただけるであろう」

それではここまできたところで [d] と振つての段の表記は終えることとする。尚、さらに後に続けての [e] と振つての段以降にては

「[a] から [f] と振つて展開していく」

と事前に述べていた一連の部の中で [d] の段に至るまで一貫してその内容を問題視していたとの小説『コンタクト』から「ひとまず」離れての指し示しをなすこととする。

[e].

ここまでの [d] と振つての段までは米国科学界のオピニオン・リーダーという立ち位置にいたカール・

セーガンが(天文学者兼コメンテーターとの本業の傍ら)満を持して世に放ちもし世界的ベストセラーとなったハード SF 小説、CONTACT『コンタクト』(1985)の[作品としての内容]それ自体を — [嗜虐性もが感じられる反語的話柄の使用]然り、[異常異様な先覚性の具現化]然りとの観点にて— 問題視してきたわけだが、ここ[e]と振っての部以降は『コンタクト』それ自体から離れて、だが、同作と関連するところにて問題となるとのことを指摘をなしていくこととする。

さて、本稿の先立っての段では次のことらを「意図して」各別に問題視していた。

[自転するカール・ブラックホール(の相の変化)が[黄金比]と結びついているとの指摘が存する(出典(Source)紹介の部 73)]

[[正五角形と[黄金比]の関係]を想起させるように[正五角形(ペンタゴン)と「黄金の」林檎を並べてのシンボル]を頻出させている小説作品にして、なおかつ、[正五角形・黄金の林檎]にまつわるところを含め 911 の予見的言及文物としての要素を「奇怪なことに」多重的に伴っている作品ともなっているというのが 70 年代ヒット小説、『ジ・イルミナタス・トリロジー』となるのだが、同作はその作中、明示的にジュール・ヴェルヌ『海底二万里』と対応付けさせられているとの作品ともなっている。すなわち、小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に登場する「[黄金の]潜水艦」([正五角形(ペンタゴン)と「黄金の」林檎を並べてのシンボル]にて組織を表象させているとの設定の圧政抵抗組織の旗艦)と小説『海底二万里』に登場する[ノーチラス号](ログリズミック・カーブこと対数螺旋構造と結びつく外殻を持ち、時に、その外殻構造が(実態はともあれ)黄金比を体現してのゴールデン・スパイラルこと黄金螺旋構造とも「俗説上で」結びつけられるとのことを詳述したオウムガイの名を冠する潜水艦)の間に明示的対応付けがなされているとのことがありもする — 『ジ・イルミナタス・トリロジー』の中で黄金の潜水艦を駆る主人公格の人物が同作作中にて『海底二万里』にあつてのノーチラス号を駆るネモ船長をモデルにしている人物であるとの明示的言及がなされている — (出典(Source)紹介の部 78 から出典(Source)紹介の部 79(2)を包摂する部位にて解説を参照のこと)

それらだけを一見する限り、なんら関係なくも映る(強いて述べれば、双方共に[黄金比]に相通ずるとの共通項しかない)との表記のことらが何故もってして

[911 にまつわる「予見的」言及]
[ブラックホールとも結びつくゲート(としての特性)]
[トロイア崩壊譚]
[アトランティス]

との「ユニークな」(述べるまでもないがこの場合の「ユニークな」というのは「特異な」との意である)要素らを媒介項に結びつくのかとのことは本稿の先だつての段での解説に譲るとして、である。ここではそれら本稿の先の段にて各別に挙げもしてきたことら、いささか簡略化して繰り返せば、

[自転するカール・ブラックホール(の相の変化)が[黄金比]と結びついているとの指摘が存する]

[[正五角形と[黄金比]の関係]を想起させるように[正五角形(ペンタゴン)と「黄金の」林檎を並べてのシンボル]を頻出させている小説作品にして、なおかつ、[正五角形・黄金の林檎]にまつわるところを含め 911 の予見的言及文物と

しての要素を「奇怪なことに」多重的に伴っている作品ともなっているのが 70 年代ヒット小説、『ジ・イルミナタス・トリロジー』となるのだが、同作はその作中、明示的にジュール・ヴェルヌ『海底二万里』と対応付けさせられているとの作品ともなっている。すなわち、小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に登場する[「黄金の」潜水艦]と小説『海底二万里』に登場する[ノーチラス号] (ゴールデン・スパイラルこと黄金螺旋構造とも「俗説上で」結びつけられるとのことを詳述したオウムガイの名を冠する潜水艦) の間に明示的対応付けがなされているとのことがある]

とのことから (本稿従前内容までを顧慮することで「[黄金比「でも」結びつくブラックホールと予見的作品らの接合性]に関わるものである」と形容できもしようとのことからでもいい) より押し広げて、[ブラックホール生成挙動と評されもしてきた「実験」]との絡みで何が述べられるのか、よりもって煮詰めもしてのことを摘示していくこととする。

まずもってそこより申し述べるが、『海底二万里』(1870年初出)のノーチラス号の末路は

[一端呑み込まればそこよりは鯨でさえ逃れ得ぬとの渦動(かどう)の力・吸引力を伴った存在と描写されての大渦、ノルウェーの大渦巻たるメールストローム(モスケンの大渦)に呑まれての末期だった]

と『海底二万里』作中には[文献敵事実]の問題として表記されているとのことがある (:少なくとも[取って付けたような続編]にして[パラレルワールドの出来事を扱っているような作品]との評されようの『海底二万里』続編の『神秘の島』(1874年初出)でネモ船長が生き長らえて潜水艦と一緒に孤島に落ちのび、そこで隠棲生活を送っていると描かれるまではネモ船長もノーチラス号もメールストロームに呑まれて[ほぼ間違いなくもの一貫の終わり]になったように描写されていた)。

そのような最期、ノーチラスのノルウェーの大渦(モスケンの大渦)に呑まれての最期は仏語原著版ではない『海底二万里』英訳版の描写に手前、本稿筆者が接する限り、[ブラックホールに呑まれて消えゆくものの最期]を臭わせるようなもの「でも」ある——「帰還不能点を持つ」「渦を巻く」「底無しの大渦」に呑まれて大破・滅尽を見たように描写されている——とのことがある。

それ単体ではたとえ原著よりの引用をこれはこれでこうだとかたちで指し示しても「ただの偶然の一致性の問題であろう」とされようところながらも、とにかくも、「そうになっている」とのことを以下に出典を挙げつつ示しておく(何故、そうもしたことを問題視なしているのかと言え、一よりもって後の段で解説しもするところとして— [ノルウェイの大渦]絡みの怪奇現象が LHC 実験とどういう料簡でなのか、相応の類らに結びつけられているとのことがあること、その背面で真に問題となるように解されることを本稿筆者が捕捉・特定しているからである)。

SOURCE

86



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部86にあつては

[潜水艦ノーチラス号の最期が凄まじい吸引力を呈してのノルウェイの大渦(モスケンスラウマンあるいはメールストロム)に呑まれてのものであったとの作中表記が『海底二万里』にみとめられる]

このことの典拠を示しておく。

(直下、オンライン上のアーカイブサイト(Internet Archive)より全文ダウンロードできるとの著作権切れての英訳されての『海底二万里』、TWENTY THOUSAND LEAGUES UNDER THE SEA (出版社表記 WARD, LOCK & CO., LIMITED の版)の後半部 —— ノーチラスがノルフェーのメールストロームの領域に突入、主人公らが登場する接舷ボートが切り離されるまでに艦が渦巻きに破壊されていくさまの描写をなしているとの後半部—— よりの引用をなすとして)

" The Maelstrom ! the Maelstrom !" they were crying.
The Maelstrom ! Could a more frightful word in a more frightful situation have sounded in our ears? Were we then on the most dangerous part of the Norwegian shore ? Was the Nautilus being dragged into a gulf at the very moment our boat was preparing to leave its side ?
It is well known that at the tide the pent-up waters between the Feroe and Loffoden Islands rush out with irresistible violence. **They form a whirlpool from which no ship could ever escape. From every point of the horizon rush monstrous and irresistible waves. They form the gulf justly called " Navel of the Ocean," of which the power of attraction extends for a distance of ten miles.** There not only vessels but whales are sucked up. It was there that the Nautilus had been purposely, or by mistake run by its

captain. It was describing a spiral, the circumference of which was lessening by degrees.

[...]

The Nautilus defended itself like a human being. Its steel muscles cracked. Sometimes it stood upright, and we with it! "We must hold on and screw down the bolts again," said Ned Land. "We may still be saved by keeping to the Nautilus." He had not finished speaking when a crash took place. The screws were torn out, and the boat, torn from its groove, sprang like a stone from a sling into the midst of the whirlpool.

My head struck on its iron framework, and with the violent shock I lost all consciousness.

CONCLUSION

So ended this voyage under the sea. What happened during that night, how the boat escaped the formidable eddies of the Maelstrom, how Ned Land, Conseil, and I got out of the gulf, I have no idea. But when I came to myself I was lying in the hut of a fisherman of the Loffoden Isles. My two companions, safe and sound, were by my side pressing my hands. (即席のものとしてながらも拙訳として)

「メールストロームだ！メールストローム！」

彼らは叫んでいた。メールストローム！我々の耳に今以上に恐ろしい状況にあつてのそれ以上恐ろしくも響く言葉があつたろうか？我々は最も危険なるノルウェー沖の領域に突入してしまったということなのか？そこより脱出すべくものボートが用意されているまさにそのときにノーチラスは深淵（訳注：この場合、名詞ガルフは[湾]としてではなく[深淵]との意味で訳すべきだろう）に引きづり込まれようとしていたとの感があつた。

フェローとロフォーテン諸島の間にて滞留した水流、そちらが急流化を見ての折、[抗しがたき暴威]をもって押し寄せてくることはよく知られてもいる。

それら急流化した水流が

[いかなる船も逃れえぬとの渦巻き]

を形成し、

[境界線上の全ポイント]

から[途方もなく、そして、抗しがたき波]が押し寄せてくるのである。

それら急流はまさしく、

[大洋にあつての臍(へソ)と表される深淵]

を形成しているのであつて、その吸引力は数十マイルの距離に及ぶ。

そこでは船のみならず鯨さえ吸い込まれていく。

意図的なのか、はたまた船長の過る操舵によってなのか、ノーチラスがいたのはまさにその場なのであつた。そこは字義どおり渦巻きであり、間隔が段々と小さくなっているとのさまであつた。

…(中略)…

ノーチラスは一個の人間がそうあるようにそれ自体を守らんとしていた。そのスチール製の筋組織にひびが入り、時折、垂直に上方を向き、そこには我々もいたのだ！

「我々は持ちこたえ、また、推進力を下げなければならない」

とネッド・ランドは言った。

「ノーチラスにしがみついている限り、まだ安全でいられるだろう」。

衝撃が発生した際に彼らはいまだ話し終えていなかった。スクリューは分解し、そして、(語り手らが搭乗している)ノーチラス接舷ボートはその係留箇所より引き離され、まるで投石機から石の球が渦の中へ向けて放たれるようにノー

チラスより離れていった。

【結末】

海中にあっての旅はかくして終りを迎えた。その夜、何が起こったのか、いかようにボートがメールストロムの恐ろしき渦巻きを逃れえたのか、いかようにネッド・ランド、コンセイユ、そして、この私が深淵を抜け出ることができたのか、私自身にも見当がつくところではないのだ。しかし、意識を取り戻した時、私はロフォーテン諸島の漁師の小屋に横たわり、二人の同輩も無事かつ五体満足で私の隣にて我が両の腕を押しつぶすかのような態で横たわっていた(以下略)

(拙訳を付しての引用部はここまでとする)

Carta marina (1527-1537)



Moskenstraumen
(Maelström)
&
Charybdis

図は歴史的に貴重な北欧近辺海図として今日に伝わっているカルタ・マリナ (Carta Marina / スウェーデンの文人オラウス・マグヌスに16世紀、1527年から1537年にか

けて作成された北欧近辺の海図)に見る、メールストロームこと [モスケンスラウメン] の描かれようを挙げたものとなる。北欧界隈の詳細なる記載を嚆矢的になしているがゆえに価値ある歴史的な海図であるとされる『カルタ・マリナ』にあっては「ノルウェーのメールストローム」がオデュッセウスら一行を飲み込んだ「大渦の化け物カリュブディス」(Charybdis) に仮託されているのが分かるようになっている (図の拡大部を参照のこと。につき、余談であるが、筆者が古地図カルタ・マリナのことなどを知ったのは、そして、同航海図にあって [メールストローム(モスケンの大渦)] が [オデュッセウスら一行を飲み込んだカリュブディス] に仮託されていると知ったのは現時未読なれども欧米圏識者層には比較的知られた神話分析著作、[ヨーロッパおよび世界各地にあっての世界の底流をなす大渦ないし渦動(かどう)の力学にまつわる伝承の尋常一様ならざる一致性を伴っての伝存] (e.g.グロッチェ曰と呼ばれるものにまつわる渦の発生淵源にまつわる伝承伝存等等) のことを主要テーマのひとつとして扱っている洋著 Hamlet's Mill (『ハムレットの臼』の CHAPTER VI Amlodhi's Quern 『アムロディの臼』にあっての図像紹介部を参照したことにあつた——)。

以上、古地図にあって誇張されて描かれるようなモスケンの大渦にネモ船長母艦ノーチラス号が巻き込まれる局面を末尾にて描いたのがジュール・ヴェルヌの『海底二万里』となっていることをここ本稿では —これより後述するところの事情あつて— 問題視している。

尚、ここでの話はオデュッセウスら一行を飲み込んだ渦潮の怪物カリュブディスのその名称がブラックホール生成実験とも (理論変転より) 中途より考えられるに至った加速器実験に供されている、

「安全なる」生成ブラックホールのシュミレーション・ツール」(ブラックホール・イベント・ジェネレーター / CHARYBDIS などの名称が振られているジェネレーター; 出典 (Source) 紹介の部 46 を参照のこと)

の名称にも転用されている等等といった事情がある中で加速器実験とも —関係性の多重的結合度合いより「恣意性が問題となる」ような式で— 複合結線するところとなっている。

(出典 (Source) 紹介の部 86 はここまでとする)

さて、上の引用部に見るとおりの記述がなされた後、ノーチラスが完全破壊から免れたのか、そして、ノーチラスを駆って反体制運動のための冒険を繰り広げていたネモ船長が生き残ったのか、真偽不明であるとして『海底二万里』という小説は幕を閉じるわけだが、「まずもって」問題としたきは、である。上にての訳出部に依拠してからして次のことが述べられることである。

「メールストロームの渦潮が海原にあっての
[一端そこに入れば脱出不能となる、吸引能力が甚大なる大渦領域]
となっているとの
[大穴] (大洋にあっての臍へソ)

として描写されており (再度の該当部抽出をなすが、フランス語版原著からおよそ 100 年近く前にであろう、英訳されての版である WARD, LOCK & CO., LIMITED から刊行されている TWENTY THOUSAND LEAGUES UNDER THE SEA にあって It is well known that at the tide the pent-up waters between the Feroe and Loffoden Islands rush out with irresistible violence. They form a whirlpool from which no ship could ever escape. From every point of the horizon rush monstrous and irresistible waves. They form the gulf justly called " Navel of the Ocean," of which the power of

attraction extends for a distance of ten miles. There not only vessels but whales are sucked up.「フェローとロフォーテン諸島の間に滞留した水流、そちらが急流化を見ての折、[抗しがたき暴威]をもって押し寄せてくるとのことはよく知られている。それらが[いかなる船も逃れえぬとの渦巻き]を形成し、[境界線上の全ポイント]から途方もなく、そして、抗しがたき波が押し寄せてくるのである。それら急流はまさしく、[大洋にあつての臍(へソ)と表される深淵]を形成しているのであって、その吸引力は数十マイルの距離に及ぶ。そこでは船のみならず鯨さえ吸い込まれていく」と描写されており、[ノーチラスの最期]はそうした化け物染みた吸引力の中核にあるもの(モスケンの大渦)に吞まれてのことであると描写されている——すくなくとも船体にひびが入り、スクリューが分解していると描写されていることからそうとれる(※)——。

※補足として1:

繰り返すが、『海底二万里』(1870)の時点では上記のように、[メールストロームは不帰の周辺領域に囲まれての大洋に開いた穴のようなものである]と描写されているわけだが、ジュール・ヴェルヌが描いた続編、パラレルワールド的な世界観を有しているともとれる **The Mysterious Island 『神秘の島』(1874)** ではノーチラス号もネモ船長も孤島で生存しているとの描写がなされている(のようなことはウィキペディア[神秘の島]項目といったものから容易に確認できる)。

また、現実のモスケンの大渦ことメールストロームとフィクションの描写にはかなりの差分があるとのことについても言及しておく。

エドガー・アラン・ポー、[双子の兄妹の不気味な確執が泥沼への彼ら屋敷の引きずり込みをもたらした]との筋立ての「どうしてこのような粗筋が?」と首をかしげたくなるような小説『アッシャー家の崩壊』などでも有名なかのエドガー・アラン・ポーの著名作『メエルシュトレエムに吞まれて』(1841年初出)の際立っての誇張を伴ったメールストローム描写のこともあってか、モスケンの大渦に対してジュール・ヴェルヌのような後続する19世紀後半の文人らが過剰描写をなしてきた、すなわち、

『周囲のありとあらゆるものを飲み込んでやまない怪物染みた渦巻きとのステレオタイプ』

に基づいての描写をなしていたとのかたちで[文学作品らに踏襲されての誇張の伝統]の指摘も存在しているのである——手短かに即時、確認できる場所としては和文ウィキペディア[メールストローム]項目にあつての現行内容、その[概要]の節にて(引用するところとして)“伝説の怪物クラーケンがこの渦巻を起こすといわれる。ジュール・ヴェルヌやエドガー・アラン・ポーといった作家により、誇張して描かれ、船や人を呑み込むとされた。ヴェルヌの小説『海底二万里』では、潜水艦ノーチラス号が渦巻の中に消えていく結末が知られる。ポーの小説『メエルシュトレエムに吞まれて』は、その描写が事実に基づくものと誤解され、一部が百科事典に流用された”(引用部表記はここまでとしておく)との記載されているとのことがある。同じくものことについてさらに述べれば、『海底二万里』英訳古書—著作権切れのものとしてオンライン上にて公開されているもの—よりの訳出部ではメールストロームの大渦が[数十マイルの距離に渡って吸引力を及ぼす大洋にあつての穴]と描写されるが、といった描写、「誇張描写こここれに極まれり」との指摘に相応しいものであると解されるようになっており、に関しては、英文 Wikipedia[Maelstrom]項目にて“The fictional depictions of the Maelstrom by Edgar Allan Poe and Jules Verne describe it as a gigantic circular vortex that reaches the bottom of the ocean, when in fact it is a set of currents and crosscurrents with a rate of 18 km/h.”「エドガー・アラン・ポーとジュール・ヴェルヌのフィクション上にあつてのメールストロームの描写は[海底に至る巨大なる円形の渦巻き]とあいながっているが、現実のそれは時

速 18 キロメートルの潮流および逆潮流の一連の混淆物となっている(にすぎない)」と表記されているところからもそのことは推し量れる——)

※補足として2:

またもってして述べておくが、上にて紹介したように
[誇張描写されての『海底二万里』のメールストロム]
の大元とされるものであるとのエドガー・アラン・ポーの著名なる短編『メエルシュトレエムに吞まれて』に登場するメールストロム「も」また誇張表現原型としてなのか、『海底二万里』のそれと字面として極めて似通った描写、すなわち、

帰還不能点といったかたちの
[いかなる船も逃れえぬとの渦巻き]
を形成し、
[境界線上の全ポイント]
から[途方もなく、そして、抗しがたいとの波]が押し寄せてくるものである

といった描写 — 凄まじい渦動・吸引の力が[逃れ得ぬとの定めを負ったありとあらゆるもの]を破壊し尽くすといった描写— を字面としてなされているとのものとなる。そして、そこ(エドガー・アラン・ポー短編に見る描写)にはまた現行の加速器実験にてそれが生成されうるとされるブラックホールのことを想起させるような色彩が伴っているとのことがある(のでわざわざもってここにて引き合いに出した)。

その点については以下引用部、および、そちら引用部とセットにしてのさらに続けもしての筆者注釈を参照されたい。

(直下、メールストロムが[時間の領域と永劫とを結ぶ通路]と結びつけられていもするエドガー・アラン・ポー短編 A DESCENT INTO THE MAELSTRÖM『メエルシュトレエムに吞まれて』(Project Gutenberg を通じて全文公開されている THE WORKS OF EDGAR ALLEN POE VOLUME II The Raven Edition にて収録の版)よりの原文引用をなすとして)

Suddenly — very suddenly — this assumed a distinct and definite existence, in a circle of more than a mile in diameter. **The edge of the whirl was represented by a broad belt of gleaming spray; but no particle of this slipped into the mouth of the terrific funnel, whose interior, as far as the eye could fathom it, was a smooth, shining, and jet-black wall of water, inclined to the horizon at an angle of some forty-five degrees, speeding dizzily round and round with a swaying and sweltering motion, and sending forth to the winds an appalling voice, half shriek, half roar, such as not even the mighty cataract of Niagara ever lifts up in its agony to Heaven.**

[. . .]

"So it is sometimes termed," said he. "We Norwegians call it the Moskoe-strom, from the island of Moskoe in the midway."

[. . .]

"Between Lofoden and Moskoe," he says, "the depth of the water is between thirty-six and forty fathoms; but on the other side, toward Ver (Vurrgh) this depth decreases so as not to afford a convenient passage for a vessel, without the risk of splitting on the rocks, which happens even in the calmest weather. When it is flood, the stream runs up the country between Lofoden and Moskoe with a boisterous rapidity; but the roar of its impetuous ebb to the sea is scarce equalled by the loudest and most dreadful cataracts; the noise being heard several leagues off, and the vortices or pits are of such an extent

and depth, that if a ship comes within its attraction, it is inevitably absorbed and carried down to the bottom, and there beat to pieces against the rocks; and when the water relaxes, the fragments thereof are thrown up again.

[. . .]

I could not help smiling at the simplicity with which the honest Jonas Ramus records, as a matter difficult of belief, the anecdotes of the whales and the bears; for it appeared to me, in fact, a self-evident thing, that the largest ship of the line in existence, coming within the influence of that deadly attraction, could resist it as little as a feather the hurricane, and must disappear bodily and at once.

[. . .]

My brother was at the stern, holding on to a small empty water-cask which had been securely lashed under the coop of the counter, and was the only thing on deck that had not been swept overboard when the gale first took us. As we approached the brink of the pit he let go his hold upon this, and made for the ring, from which, in the agony of his terror, he endeavored to force my hands, as it was not large enough to afford us both a secure grasp. I never felt deeper grief than when I saw him attempt this act — although I knew he was a madman when he did it — a raving maniac through sheer fright. I did not care, however, to contest the point with him. I knew it could make no difference whether either of us held on at all; so I let him have the bolt, and went astern to the cask. This there was no great difficulty in doing; for the smack flew round steadily enough, and upon an even keel?only swaying to and fro, with the immense sweeps and swelters of the whirl. Scarcely had I secured myself in my new position, when we gave a wild lurch to starboard, and rushed headlong into the abyss. I muttered a hurried prayer to God, and thought all was over.

[. . .]

"Never shall I forget the sensations of awe, horror, and admiration with which I gazed about me. The boat appeared to be hanging, as if by magic, midway down, upon the interior surface of a funnel vast in circumference, prodigious in depth, and whose perfectly smooth sides might have been mistaken for ebony, but for the bewildering rapidity with which they spun around, and for the gleaming and ghastly radiance they shot forth, as the rays of the full moon, from that circular rift amid the clouds which I have already described, streamed in a flood of golden glory along the black walls, and far away down into the inmost recesses of the abyss.

[. . .]

"The rays of the moon seemed to search the very bottom of the profound gulf; but still I could make out nothing distinctly, on account of a thick mist in which everything there was enveloped, and over which there hung a magnificent rainbow, like that narrow and tottering bridge which Mussulmen say is the only pathway between Time and Eternity. This mist, or spray, was no doubt occasioned by the clashing of the great walls of the funnel, as they all met together at the bottom?but the yell that went up to the Heavens from out of that mist, I dare not attempt to describe.

(オンライン上より全文確認可能なる原著よりの引用部はここまでとしておく)

(さらに続けて直下、[上の原著よりの原文引用部にそのままに対応するところ]を青空文庫公開の(戦前期翻訳家である)佐々木直次郎の訳になる版『メールストロムの旋渦』より引用をなすとして)

いったん鎮まった渦巻の旋回運動をふたたび始め、さらに巨大な渦巻の萌

芽を形づくろうとしているようであった。とつぜん——まったくとつぜんに——これがはっきり定まった形をとり、直径一マイル以上もある円をなした。その渦巻の縁は、白く光っている飛沫(しぶき)の幅の広い帯となっている。しかしその飛沫の一滴さえもこの恐ろしい漏斗(じょうご)の口のなかへ落ちこまない。その漏斗の内側は、眼のとどくかぎり、なめらかな、きらきら輝いている黒玉(こくぎょく)のように黒い水の壁であって、水平線にたいして約四十五度の角度で傾斜し、揺らぎながら恐ろしい速さで目まぐるしくぐるぐるまわり、なかば号叫し、なかば咆哮し、かのナイヤガラの大瀑布が天に向ってあげる苦悶の声さえかなわないような、すさまじい声を風に向ってあげているのだ。

…(中略)…

「ときには、そうも言いますが」と彼は言った。「私どもノルウェー人は、あの真ん中にあるモスケー島の名をとって、モスケー・ストロムと言っております」

…(中略)…

彼はこう書いている。「ロフォーデンとモスケーとのあいだにおいては、水深三十五尋(ひろ)ないし四十尋なり。されど他の側においては、ヴェル(ヴァール)に向いてこの深さはしだいに減り、船舶の航行に不便にして、静穏な天候のおりにもしばしば岩礁のために難破するの危険あり。満潮時には潮流は猛烈なる速度をもってロフォーデンとモスケーとのあいだを陸に向って奔流す。されどその激烈なる退潮時の咆哮にいたりては、もっとも恐ろしき轟々(ごうごう)たる大瀑布も及ぶところにあらず、——その響きは数リーグの遠きに達す。しかしその渦巻すなわち凹(くぼ)みは広くかつ深くして、もし船舶にしてその吸引力圏内に入るときは、かならず吸いこまれ海底に運び去られて岩礁に打ちくだかれ、水力衰うるに及び、その破片ふたたび水面に投げ出されるなり。

…(中略)…

私は鯨や熊の話をも信じがたい事がらのように書いているかの善良なヨナス・ラムス先生の単純さに微笑せずにはいられなかった。というのは、現存の最大の戦闘艦でさえ、この恐ろしい吸引力のおよぶ範囲内に来れば、一片の羽毛が台風に吹きまかれるようになんの抵抗もできずに、たちまちその姿をなくしてしまうことは、実にわかりきったことに思われたからである。

…(中略)…

兄は艫(とも)の方にいて、船尾張出部の籠の下にしっかり結びつけてあった、小さな空になった水樽につかまっていました。それは甲板にあるもので疾風が最初におそってきたとき海のなかへ吹きとばされなかったただ一つの物です。船が深淵の縁へ近づいてきたとき、兄はつかまっていたその樽から手を放し、環[リング]のほうへやってきて、恐怖のあまりに私の手を環[リング]からひき放そうとしました。その環[リング]は二人とも安全につかまっていられるくらい大きくはないのです。私は兄がこんなことをしようとするのを見たときほど悲しい思いをしたことはありません、——兄はそのとき正気を失っていたのだ——あまりの恐ろしさのため乱暴な狂人になっていたのだ、とは承知していましたが。しかし私はその場所を兄と争おうとは思いませんでした。私ども二人のどちらがつかまったところでなんの違いもないことを知っていましたので、私は兄に螺釘を持たせて、艫の樽の方へ行きました。そうするのはべつに大してむずかしいことではありませんでした。というのは船は非常にしっかりと、そして水平になったまま、ぐるぐる飛ぶようにまわっていて、ただ渦巻がはげしくうねり湧き立っているために前後に揺れるだけでしたから。その新しい位置にうまく落ちついたかと思うとすぐ、船は右舷の方へぐっと傾き、深淵をめがけてまっしぐらに突き進みました。私はあわただ

しい神さまへの祈りを口にし、もういよいよおしまいだと思いました。

…(中略)…

自分のまわりを眺めたときのあの、畏懼(いく)と、恐怖と、嘆美との感じを、私は決して忘れることはありませんまい。船は円周の広々とした、深さも巨大な、漏斗(じょうご)の内側の表面に、まるで魔法にでもかかったように、なかほどにかかっているように見え、その漏斗のまったくなめらかな面は、眼が眩むほどぐるぐるまわっていなかったなら、そしてまた、満月の光を反射して閃くもの凄(せい)い輝きを発していなかったら、黒檀(こくたん)とも見まがうほどでした。そして月の光は、さっきお話ししました雲のあいだの円い切れ目から、黒い水の壁に沿うて漲(みなぎ)りあふれる金色の輝きとなって流れ出し、ずっと下の深淵のいちばん深い奥底までも射しているのです。

…(中略)…

月の光は深い渦巻の底までも射しているようでした。しかしそれでも、そのあらゆるものを立ちこめている濃い霧のために、なにもはっきりと見分けることができませんでした。その霧の上には、マホメット教徒が現世から永劫の国へゆく唯一の通路だという、あのせまいゆらゆらする橋のような、壮麗な虹がかかっていました。この霧あるいは飛沫は、疑いもなく漏斗の大きな水壁が底で合って互いに衝突するために生ずるものでした。——がその霧のなかから天に向って湧き上がる大叫喚は、お話ししようとしたって、とてもできるものではありません。

(オンライン上より全文確認できるとの青空文庫公開版たる訳書よりの引用はここまでとする)

以上引用部をもってしてジュール・ヴェルヌ『海底二万里』がその表現を踏襲しているとされているエドガー・アラン・ポーのかの『メエルシュトレエムに吞まれて』からしてノルウェーのモスケンの大渦を、

帰還不能点といったかたちの、
[いかなる船も逃れえぬとの渦巻き]
を形成し、
[境界線上の全ポイント]
から[途方もなく、そして、抗しがたいとの波]が押し寄せてくるものである

と描写していること、お分かりいただけるであろう。

■上引用部に対する[注意喚起]を期しての「補足内重畳表記」としての付記 [1]

『メエルシュトレエムに吞まれて』原著にては[月光が射してのメールシュトロムに刹那、具現化した虹 rainbow(水滴がプリズムとして機能、アイザック・ニュートンがそのように唱えたように光の波長を分断投影したその光の似姿)]をして

like that narrow and tottering bridge which Mussulmen say is the only pathway between Time and Eternity、

すなわち、

[[時間](あるいは[時間的有限]、訳書では[現世]などと訳されている)と[無限]の間を繋ぐせまくおぼつかなき唯一の橋とムスリム(イスラム教徒)らが見ているところの天国への道(のよ

うなもの]]

と形容している部が目につくが、ブラックホールもまた

[[有限なる時間の領域] と [時間の止まった無限なる領域]
とを結びつける存在]

ともなる (: 本稿の先だつての内容とこれよりすぐ後に続けて引きもする
書籍引用部をご覧いただければ、お分かりいただけることか、と思う)。

またもって述べておけば、文士エドガー・アラン・ポーは彼が [ありとあ
らゆるものを呑み込み破壊する凄まじい吸引力を持つ存在] などと誇張
の限りを尽くして描写しているメールストロムをして (ブラックホールを想
起させるような式で) [時間の流れる有限の領域と無限の境目 (たる光の
分光; 虹) が具現化している領域] など「とも」描写していることですが
「洒落にならぬ」との側面が [ノルウェイの大渦] というものにはあることを
これより (ポー作品から離れもして) 解説していく。

■上引用部に対する[注意喚起]を期しての「補足内重畳表記」として
の付記 [2]

エドガー・アラン・ポーの短編『メエルシュトレエムに吞まれて』ではリン
グと形容される浮き輪がメールシュトロムに取り込まれた兄弟の初期の
命綱であるかのように描写されているが、現実世界ではリングと表される
ような加速器にてブラックホールが生成されうるとされているとがある
。そのように書くと、持論誘導のやりよう、しかも馬鹿げて響きもしてそ
うだと見る向きもいようが (当然であろう)、メールストロムことモスケンの大
渦がなぜもってして LHC との兼ね合いで問題になるのかのさらに後に
ての続いての段の表記を参照したうえでもそうもして判じられるのか、
よくよく考えていただきたいものである。

■上引用部に対する[注意喚起]を期しての「補足内重畳表記」として
の付記 [3]

エドガー・アラン・ポーの短編『メエルシュトレエムに吞まれて』は

The ways of God in Nature, as in Providence, are not as our
ways; nor are the models that we frame any way commensurate
to the vastness, profundity, and unsearchableness of His works,
which have a depth in them greater than the well of Democritus.
(青空文庫を介して公開されている戦前期翻訳家の佐々木直
次郎の手になる無償版『メールストロムの旋渦』での訳は自然
における神の道は、摂理におけると同様に、われら人間の道と
異なっている。また、われらの造る模型は、廣大深玄であって
測り知れない神の業にはとうていかなわぬ。まったく神の業
はデモクリタスの井戸よりも深い)

との[題句] (エピグラフ) が付されてのものとなる。そちら題句に見る
[デモクリタスの井戸] にあつてのデモクリタスとは今日の科学理解にあつ
ての[原子論]に通ずることを古代ギリシャにて唱えたことで知られてい
る哲人デモクリタスのことである (: その [原子] (アトム) との言葉の由来も
[原子「論」] (アトミズム) との言葉も (半ばもの一般教養の問題として) デ
モクリタスの想起それ自体に由来しているとのことが知られており、につ
いては、英文 Wikipedia [Atomism] 項目なぞにても In the 5th century

BC, Leucippus and his pupil Democritus proposed that all matter was composed of small indivisible particles called atoms, in order to reconcile two conflicting schools of thought on the nature of reality.「紀元前5世紀、レウキッポスおよび彼の学徒たるデモクリトスは(現実の本然的ありようについての思索にまつわっての対立する二大学派に調和をもたらすべくも)すべての物質は[原子(アトム)]と呼ばれる不可視の小さき粒にて構成されているとのことを提唱した」と表記されているところとなる。

となれば、である。[デモクリトスの井戸]とは[今日の原子論に通ずる主張をなした哲人の井戸]と置き換えられもするものである。

そうしたもの([今日の原子論に通ずる主張をなした哲人の井戸]なるもの)を作品冒頭にあつての題句に用いてポーが[メールストロムの暴威]を(現実の渦巻きメールストロムの迫力の欠如を誇張に誇張を重ねて脚色しながらも)描いていることもまた問題になると見受けられる。というのも、(デモクリトスが原子の概念を導入してそれを想起したとの)[極小領域]での破壊的機序、すなわち、原子核破壊機序を応用してブラックホール生成をなしうると言われるに至ったのが今日の加速器実験であるとのことがあるからである(せんだって解説のことである)。

■エドガー・アラン・ポー短編『メエルシュトレエムに吞まれて』それ自体にまつわる[注意喚起]を期しての補足内重畳表記として

上にての引用部から離れもして作品それ自体にまつわる注意喚起のための付記「をも」なしておく。

エドガー・アラン・ポーの短編『メエルシュトレエムに吞まれて』にあつては大渦が[アビス(深淵)への道]とも作中にて表現されている(e.g.それにつき“rushed headlong into the abyss”であるとか“the black walls, and far away down into the inmost recesses of the abyss”であるとかそういった表現の箇所が該当部となる)。本稿の先だつての段では17世紀古典『失樂園』にまつわり[ブラックホールとの質的近似性が問題になる横断路]との兼ね合いで問題視・詳述なしてきたとのまさにその[アビス(深淵)への道]といった表されようの渦にからめとられてしまった漁師兄弟の弟が「渦に呑み込まれるのは体積が大きい物・球形の物からであつて、小さい物・円柱状の物は呑み込まれるのに時間がかかる」とのことに気づいて円柱状のものにしがみついて渦が干満交代の折に一時弱化する状況までもちこたえ、そして、事なきを得たとの筋立てが具現化しているのだが(和文ウィキペディア[メエルシュトレエムに吞まれて]項目にて(引用するとして)“漁師は観念して渦の様子を見守る。渦の漏斗には船の破片など様々なものが飲み込まれて行っている。その様子を観察しているうちに、彼はやがて、体積の大きいもの、球状のものは早く渦の中心に落下して行くのに対して、円柱状のものは飲み込まれるのに時間がかかっていることに気付く”(引用部はここまでとする)と表記されているとおりである)、[大きさが小さいものが凄まじい力から逃れやすい]というのはブラックホールについて「も」当てはまることである(とされている)。ブラックホールにあつての何物をも逃さぬ[潮汐力]や[放射線]が吸引者に容赦なくも襲いかかってくる(とされる)が、それらを極小存在、ナノマシンの如き極小機械ならばやりぬけられる可能性がある、であるから、[ブラックホールやワームホールを介して異世界に文明再建の種子を送る]との上ではナノマシン(ないしはよりもって小さいフェムトマシンか)が要る(とされている)とのことは本稿にて引用なしてきた科学読み本に記載されているところともなっている。

何故、ここでそうした話までをわざわざなしているのかについては本稿全体の内容よりご判断いただきたい次第でもあるのだが、ここでそのような話を勿体めかしてなすと筆者のことを[牽強付会(こじつけがましき)もの論理展開の徒]と後ろ指さしたくもなるとの筋目の向きらが嬉々として批判したくもなるか「とも」承知のうえではある。

だが、[メールストロム]それ自体をしてブラックホールと結びつけるが如く専門家もいるにはいる。クリフォード・ピックオーバー、それ専門の物理学者ではないものの、複数の科学解説本の著者となっている見識深き同科学者が本稿の[出典\(Source\)紹介の部 55](#)にてもその言い様を引いているとの1996年初出の著作 *Black Holes: A Traveler's Guide* (邦題『ブラックホールへようこそ』)との科学読み本にてのその題句 (Epigraph)の部にあつて — (同ピックオーバーははきと意図明示していないが) — ポーの[メールストロム]のことを引き合いに出しているとのことがあるなどとの式で、である(:疑わしきにおかれては *Black Holes: A Traveler's Guide* (の訳書『ブラックホールへようこそ』との実にもって厭なタイトルの訳書)を手にとって確認してみるとよかろう — 尚、クリフォード・ピックオーバーの表記著作についてはブラックホールまわりのトピックをスティーブン・ホーキングに倣うとの式でダンテ『地獄篇』に仮託しているとの著作「でも」あることを本稿の[出典\(Source\)紹介の部 55](#)では先述してきたとの経緯がある—)。

また、さらにもって申し述べれば、エドガー・アラン・ポー作品に関してはその他にも興味深いものがたくさんあると筆者手前は個人的に見ており、たとえば、『赤死病の仮面』との作品もその例となる(エドガー・アランポーの末期の作品であった *EUREKA: A PROSE POEM*『ユリイカ』(1848)などはその予言的側面がよくも知られているし筆者もまた興味深いとみているものだが、ここでは敢えても『赤死病の仮面』という作品のことを引き合いに出す)。同作、『赤死病の仮面』ではシェイクスピア円熟期の作品たるかの『テンペスト』(あるいは『嵐』)の主人公たるプロスペローの名を冠する王がその居城に引きこもり、国土を荒廃させて民草を殺し尽くした疫病の猖獗(しょうけつ)から目を背けながらもその籠城体制で同輩である周囲貴顕らと共に絢爛たる享樂にひたすらに耽(ふけ)るとのありさまが描かれるのだが、そちら『赤死病の仮面』、時計の針がゼロ(12時)を打ったのを境に[疫病で死亡した者特有の死後硬直と流血の斑点を模した仮面]を身に帯びた不気味なる存在(実体は疫病と死の体現存在としての実体なきもの)が享樂の巷(ちまた)たる仮面舞踏会に入り込んでいることが判明、激昂してその存在を追うに至ったプロスペロー王が同存在の超常的な力で殺され、そこより疫病が例外もなくもの全ての者を殺したとの描写がなされる。まどろっこしくもある話の中で、さらに、の中での例示の話の枕が長くもなつてはなんではあるが、そうしたある種、幻想的な作品であるエドガー・アラン・ポー『赤死病の仮面』に見る筋立てが問題となるのは

[時計ゼロ時時針と結びつけられた暗黒空間(たる真つ暗闇の部屋)にて赤い光が満ちている部屋]

に伴う特性である。疫病から目を背けて自分達だけ避難所に逃げ込んだ者達の居城の最奥部には[暗闇に赤いステンドグラスとの内装で赤い光が入り込んでくる部屋]が設けられていると「なぜなのか」極めて寓意的に描写されるのだが、そして、そこにての黒檀のいかめしい時計がゼロ時を打った時に[終わりの始まり]が訪れるなどとの設定付けがなされ

ているのだが、[暗黒空間にて赤い光が満ちている]との特異なる描写はブラックホールのような重力の怪物の周囲で光の波長が歪んで赤くも変化することがよく知られる[赤方偏移(レッド・シフト)]のことを想起させるものである。これまたもってしての[牽強付会なる(こじつけがしいところである)申しよう]と思われるところだろうが、そうもしたポーの『赤色死の仮面』に見る[死と結びついた暗黒空間に赤い光が満ちた最奥の空間]よりそうもした赤方偏移現象のことを連想するといったことは筆者の独創ではなく、実際にマスク・オブ・レッドシフト **Masque of the Red Shift** 『赤方偏移の仮面』(1965)とのマスク・オブ・レッドデス『赤死病の仮面』(ブラックデスこと黒死病のことを連想させる架空の病を主題に据えてのエドガー・アラン・ポー作品)のことを露骨にもじった題名のSF作品が(荒唐無稽なるものなれども)刊行を見ている、ベルセルク・シリーズないしバーサーカー・シリーズ(**Berserker series**)とのシリーズものに連なるところでフレッド・セイバーヘーゲンという作家の手になる短編作として世に出ているとのことがある(内容を検討したことがある身として申し述べるが、同短編小説それ自体は娯楽性ばかりが目につくシリーズものの一作品にすぎないが、タイトルそれ自体が問題である。尚、何故もってして筆者が[「ベルセルク」(バーサーカー)・シリーズ]との兼ね合いでそうした赤方偏移の話をしていっているのかまでおもんばかっていただけでもする読者がまったくもってしていなければ、こうした話をなすのも無為かとは思うのだが、一応の指摘をなしているとのこと、断っておく)。

以上、本稿にあつての前後する内容に目を向けずそれ単体で見るとは行き過ぎたものにすぎないと当然にとらえられるだけだろうとの補足たることらを延々細々と書き記したうえで申し述べておが、何にせよ、エドガー・アラン・ポーおよびジュール・ヴェルヌが「不帰(絶対脱出不能)の破壊の大渦の領域」と描写している、誇張表現の限りを尽くして描写している「ノルウェイの大渦」たるメールストロムというものが古地図 Carta Marina『カルタ・マリナ』ではオデュッセウスら一行を呑み込んだ Charybdis「カリュブデイス」に明示的に仮託されて地図記載されているとのことがあり(上にて図示までして先述のことである)、LHC 実験にてブラックホールが生成された場合のブラックホール挙動をシミュレートする Event Generator とのツールに同じくもの大渦の怪物 CHARBDIS との名称が振られている(出典(Source)紹介の部 46)とのことに見るようにブラックホール生成挙動と「大渦」のことが結びつけられているとのことが確かにありもするとのことになら異動はない(：問題はそうしたことがあるのがただ単純に「こじつけがましき論法上の話」(far-fetched なる話)で済むのかとのことにあるとしつつも、である——その点、実にもってくどくも口を尖らせて述べれば、「それ単体ではこじつけがましき話であることは論を俟たないが、残念ながら、そうもした結びつきまでもが複合顧慮すべき他事(そして「多事」)を顧慮することで[我々を殺す銃座の方向を示す要素]に変ずるとのことを指摘するのが本稿本義となっている)——)。

(補足表記および、それに付しての重疊的付記の部はここまでとする)

ここでブラックホールが

[その境界線上(イベント・ホライズンこと事象の地平線)に入り込んだものが絶対に帰還できぬとの(渦を巻く)深淵の如きもの]

とも表せられることと『海底二万里』(および先行するポー小説『メエルシュトレエムに吞まれて』)に登場を見ているメールストロームにまつわっての描写——繰り返し表記するが、TWENTY THOUSAND LEAGUES UNDER THE SEA『海底二万里』にあつての“ It is well known that at the tide the pent-up waters between the Feroe and Loffoden Islands rush out with irresistible violence. They form a whirlpool from which no ship could ever escape. **From every point of the horizon rush monstrous and irresistible waves.** They form the gulf justly called " Navel of the Ocean," of which the power of attraction extends for a distance of ten miles. ” [フェローとロフォーテン諸島の間にて滞留した水流が激化の折、[抗しがたき暴威]をもってして押し寄せてくるとのことはよく知られている。それらが[いかなる船も逃れえぬとの渦巻き]を形成し、[境界線上の全ポイント]から途方もなく、そして、抗しがたき波が押し寄せてくる。それらはまさしく、[大洋にあつての臍(へソ)と表される深淵]を形成している]との描写(や A DESCENT INTO THE MAELSTRÖM『メエルシュトレエムに吞まれて』にあつての“ **if a ship comes within its attraction, it is inevitably absorbed and carried down to the bottom, and there beat to pieces against the rocks** ” [もし船舶にしてその吸引力圏内に入るときは、かならず吸いこまれ海底に運び去られて岩礁に打ちくだかれ]との描写)—— の間に[近接性]が存することについて[よりもって問題となること]を指摘する上での前段階として以下のことの言及をなしておく(：それ単体ではたまたまそうになっていたところの一致性の問題で片付けられるところとなろうも、「その他の事情より」問題になるとのことがあるがゆえにそちらのことにまつわっての言及をなしておく)。

下の(書籍より引用なしつつもの)解説部を参照頂きたい。

ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』にあつてノーチラスの末期と結びつけられている、そして、エドガー・アラン・ポー『メエルシュトレエムに吞まれて』にてその元となった描写がなされているとのメールストロームに見る、

[大洋のへソに向けての渦を巻く流れ]

[(渦動(かどう)の力が極まったの)何物も逃れ得ぬとの帰還不能領域]

[逃れ得ぬ必定としての死・破滅]

との三点描写がブラックホール「的」なる描写とつながる]とのことがある、そのことについては本稿にて何度かその内容を挙げてきたとのレオナルド・サスキンドという物理学者(ひも理論の大家として知られる物理学者)の手になる書、**The Black Hole War: My battle with Stephen Hawking to make the world safe for quantum mechanics** (邦題)『ブラックホール戦争』(早川書房ハードカバー版)にあつての次の記載を引いておくこととする。

(直下、『ブラックホール戦争』にての第二章[暗黒星]の[ブラックホール被吸引者の末路]を[排水管に吸い込まれるオタマジャクシ]に仮託して説明している部、49 ページから 50 ページよりの引用をなすとして)

水の中に漂うオタマジャクシは、自分たちのまわりのことしかわからないので、自分たちがどれくらい速く進んでいるのかわからない。オタマジャクシの近くにあるものはすべて同じ速度で一緒に動く。非常に危険なこととは、排水管へ吸いこまれて鋭い岩で砕かれることだ。実際、中心に向かって吸い込まれてゆく速度が音速を超える地点を越えてしまったオタマジャクシは、破滅するしかない。帰還不能点を超えたら、彼は流れより速く泳ぐこともできないし、安全な領域にいるものに警告を発することもできない(どん

な音響信号も音速より速く水の中を進めないからだ)。アンラーは排水の穴とその帰還不能点を沈黙の穴と呼ぶ。音がしないという意味の沈黙だ。…(中略)…自由に漂う一匹のオタマジャクシがいる。彼女をアリスと呼ぶことにする。彼女は排水管の方に向かって浮かんでいて、ずっと遠くにいる友人のボブに向かって歌を歌う。…(中略)…しかしアリスは速度を速め、アリスの歌声は少なくともボブの耳には低く聞こえる。ハ音はロ音になり、それからイ音に変わる。原因はよく知られているドップラー偏位だ。高速で走る列車が警笛を鳴らしながら通過するときに、ドップラー偏位の音を聞くことができる。列車が近づくにつれて、警笛はあなたの耳には列車に乗っている乗務員が聞く音より高く聞こえる。それから警笛が通過し遠ざかるにつれて、音は低くなる。…アリスが帰還不能点の方へ漂っていくとき、同じことが彼女の歌声に起こる。…(中略)…ここまで話せば、帰還不能点がブラックホールの地平線のたとえだと見当がついたと思う。音を光に置き換えて、何ものも光速を越えることができないことを思い出してほしい。そうすると、シュワルツシルト・ブラックホールの性質をかなり正確に思い描くことができる。排水の穴の場合と同じように、地平線を通過するものは何も脱出することができないし、静止していることもできない。ブラックホールでは、危険はとがった岩ではなく中心にある特異点だ。地平線の内側にある物質はすべて特異点の方に引っ張られ、そこでは物質は押しつぶされて圧力と密度が無限大になる。

(引用部はここまでとする)

またもってして

[ブラックホールに落ち込んだものが時間有限の領域から時間無限の領域(といった按配の時が止まったように時空間の法則が破綻した領域)へと落ち込んでいく]

とのことも本稿の先だつての段で取り上げた書籍よりの再引用にて示しておくこととする(エドガー・アラン・ポー小説、ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』大元となっている『メエルシュトレームに吞まれて』が[時間(有限)の領域と無限の領域の垣根]と結びつけられているとの先だつての補足部にて述べたことの典拠を呈示しておくべきかと判じたために、である)。

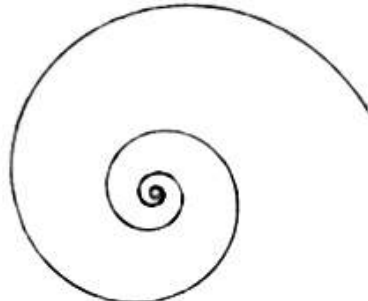
(直下、『ホーキングの最新宇宙論 ブラックホールからベビーユニバースへ』(日本放送出版協会(現社名:株式会社NHK出版))との国内にて多数流通した書籍にての108ページから109ページよりの「再度の」引用をなすとして)

このように、崩壊してブラックホールになっていく星を遠くから見ている人は、星が実際に消え去るところを見ることはできません。その代わりその星は、実質的に見えなくなるまで、どんどんぼんやりと、赤くなっていくだけでしょう。向こう見ずな宇宙飛行士が、ブラックホールに飛び込むのを見ていると、同じようなことが起きるはずです。たとえば、彼の時計で十一時〇〇分にブラックホールに入るとします。そこは光線ばかりか、何ものも脱出不可能な領域です。ブラックホールの外にいる人は、どんなに長い間待っても、宇宙飛行士の時計が十一時〇〇分を指すのを見ることはできません。その代わり、宇宙飛行士の時計の一秒一秒がどんどん長くなって、ついに十一時〇〇分の前の最後の一秒が、永遠に続くのを見ることになるでしょう。このように、ブラックホールに飛び込むことで、少なくとも外にいる人に対しては、自分の姿が永遠に残るということは確信できます。けれど、その

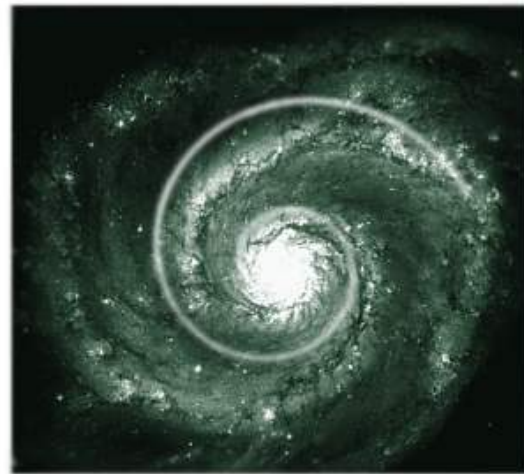
像は急速に薄れ、誰にも見えなくなるくらい、ぼんやりとかすんでいくでしょう。

(引用部はここまでとする)

Logarithmic spiral



to infinitesimal
(infinitely small)



M51



Nautilus

Logarithmic spiral

Golden spiral

Nemo's Submarine



Moskstraumen

上掲図解部は本稿の先の段にて問題視してきたところの、
[[無限小への力学]とも結びつく)対数螺旋構造(ログリズミック・カーブ)構造とノー
チラスの関係性]
のことを顧慮しつつも整理のために挙げたものとなる。

最上段。対数螺旋構造ありようと(中央に大規模ブラックホールがあるとされる)対数螺旋構造を呈する渦巻き銀河を再掲してのものとなる。

中段。対数螺旋構造を呈する(甚だしくは黄金比と濃厚に結びつく黄金螺旋構造を呈するとの話もある)オウムガイことノーチラスの似姿を挙げてのものとなる。

下段。対数螺旋構造を呈する(甚だしくは黄金比と濃厚に結びつく黄金螺旋構造を呈するとの話もある)オウムガイことノーチラスの名を冠する潜水艦、ノーチラス号が対数螺旋構造を想起させる渦巻き、モスケンの大渦に吸い込まれていくとのジュール・ヴェルヌ小説『海底二万里』の内容を受けての図となる。

ここまでにて前段階としての

【特定文物に見る、潜水艦(ノーチラス)を呑み込んだノルウェイの大渦】

にまつわっての解説を終えたとして、である。次いで、本稿の従前の段にていかような関係性について訴求なしていたのか、その振り返り表記をもなしておくこととする。

以下続けての枠内表記部の内容を確認いただきたい。

(振り返っての表記として)

ここで本稿従前内容を批判的視座でもってしても検討されており、筆者が述べていることを(あまりにも無情なる結論に同意するかはともかくも)理解できるとの向きのことを強くも念頭に振り返り表記をなしておくが、『海底二万里』登場のノーチラス号については、である。[黄金比][無限小への力学の体現構造]との兼ね合いで

【911の事件発生への予見的言及作品】としての特性を帯びての小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』に登場してくる[ディスコルディア運動勢力の「黄金の」潜水艦】

と結びついている——個人主観など問題にならぬとの文献的事実の問題として結びついている——とのことを委曲尽くして問題視してきたとの本稿にあっての事前経緯がありもする。

そして、同じくもの関係性、[ノーチラス号 ⇔ 黄金の潜水艦]にまつわっての関係性の摘示の段では

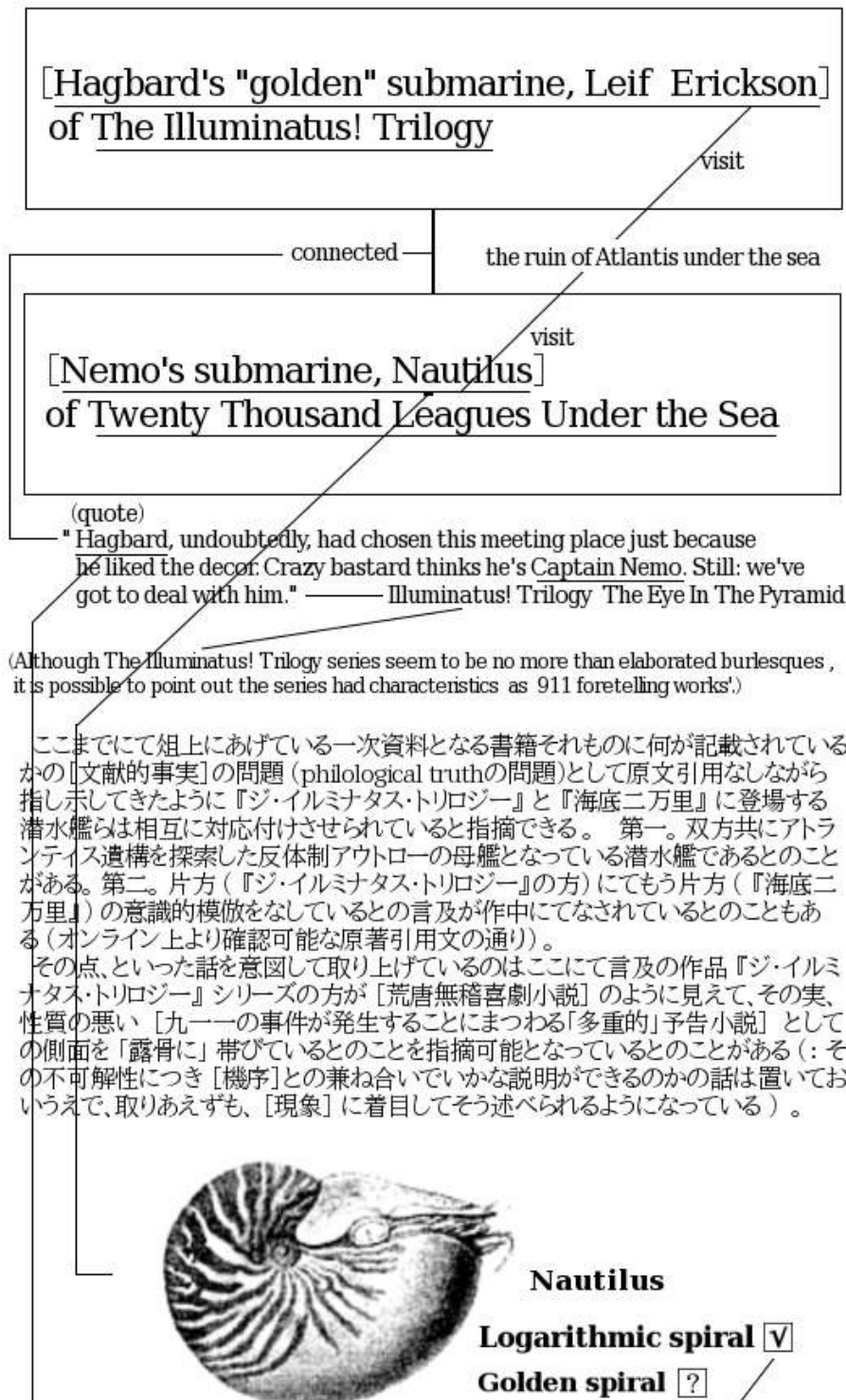
「911の事件発生への予見的言及(問題がそれが[偶然]なのか[否定しがたい恣意]ゆえにのものことなのかとのことにある予見的言及)との要素を帯びた作品としての小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』は[黄金比とも結びつく五角形構造を取るゲート・関門][911への予見性]との兼ね合いで他の小説作品、カール・セーガン『コンタクト』と接続しているとのことの指摘にも努めてきた」

とのことがありもし、かつもって、

「ことの次第がLHC実験とも[アトランティス][ブラックホール生成]

[トロイアにまつわる寓意]との兼ね合いで多重的に接合するとの指し示し「をも」なしてきた」

とのことがある（:カール・セーガン小説作品『コンタクト』は([アトランティス]や[トロイア]関連の命名規則を伴ってのLHCでそれがなされうると目されるようになった)
 [カー・ブラックホール生成ないしワームホール生成]と結びつき、またもってして、[トロイア崩壊関連の寓意]が多層的多重的に含まれている作品にして、そして、[911の予見文物]（キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』）と密接に結びついている作品でもある。他面、小説作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』は[911の予見文物]にして[トロイアを崩壊の元凶になった黄金の林檎]を副題に冠する作品にして（同作と同作中内にて明示的に結びつけられている『海底二万里』からしてそうなのだが）[アトランティス海中遺構探索]と結びつけられている作品「でも」ある）。





Logarithmic spiral

Golden spiral

(Setting for the novel) Hagbard = a member of Discordians

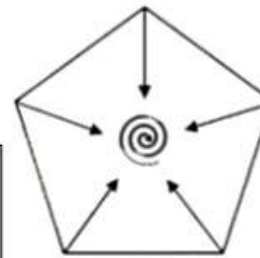
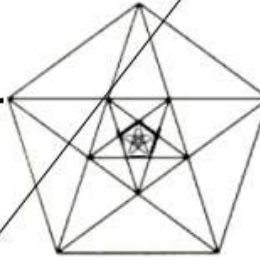


The Symbol of Discordianism
(seen in The Illuminatus! Trilogy)

the Golden ratio
&
the mechanism

to infinitesimal
(infinitely small)

atom - atomic nucleus -
proton, neutron, etc. -
elementary particle

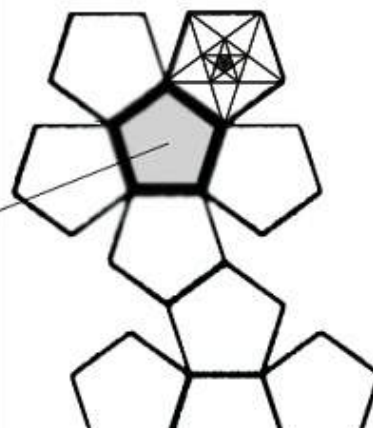


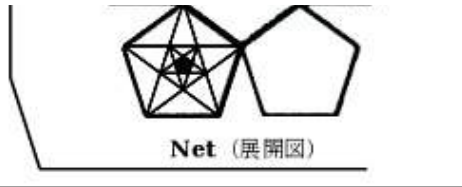
小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』レイフ・エリクソン号および小説『海底二万里』ノーチラス号には小説作品内それ自体で明言されているような明示的接合関係が存在するのであるが、うち、ノーチラス号のノーチラスはオウムガイの意となり、そのオウムガイ、対数螺旋構造と結びつくのこを本稿ここまでの段にて細かくも解説してきた存在である。その対数螺旋構造(うち、甚だしくは黄金螺旋構造)は黄金比と親和性高いものであり、また、無限小の領域への力学を体現する構造でもある(先述のとおりである)。他面、ノーチラス号と結びつけられているレイフ・エリクソン号の方の艦長、911の前言事象と「奇怪極まりないことに」結びついていると指摘できる作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』の主役級の人物ハグバード・セリーンはその作中、[ディスコルディア運動闘士]との設定が付与されているキャラクターだが、そこに見る[ディスコルディア運動]の(当該フィクションの中でも何度も図示されて登場してくる)シンボルは
[[黄金の林檎]と[(黄金螺旋と同様に)黄金比の体現物となり無限小の力学と結びつく五角形]を並置させてのもの]
であるとの「極めて独特なもの」となっているとのことがある。

"Machine" of Sagan's Contact (1985)

the Dodecahedron

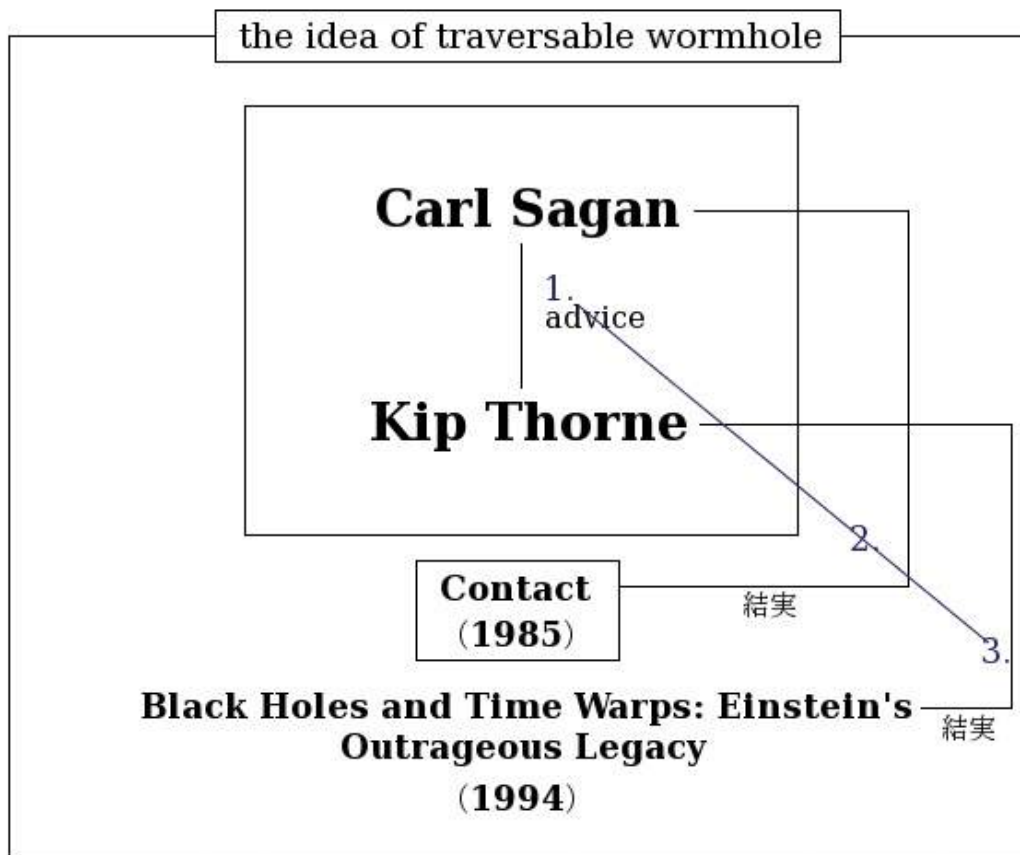
(正十二面体)





Kerr Black hole(カー・ブラックホール)として知られるブラックホールとも作中にて結びつけられているカー・セーガン小説『コンタクト』に見るゲート装置は正十二面体構造を呈する、要するに、黄金比の全身での体現存在として描写される。

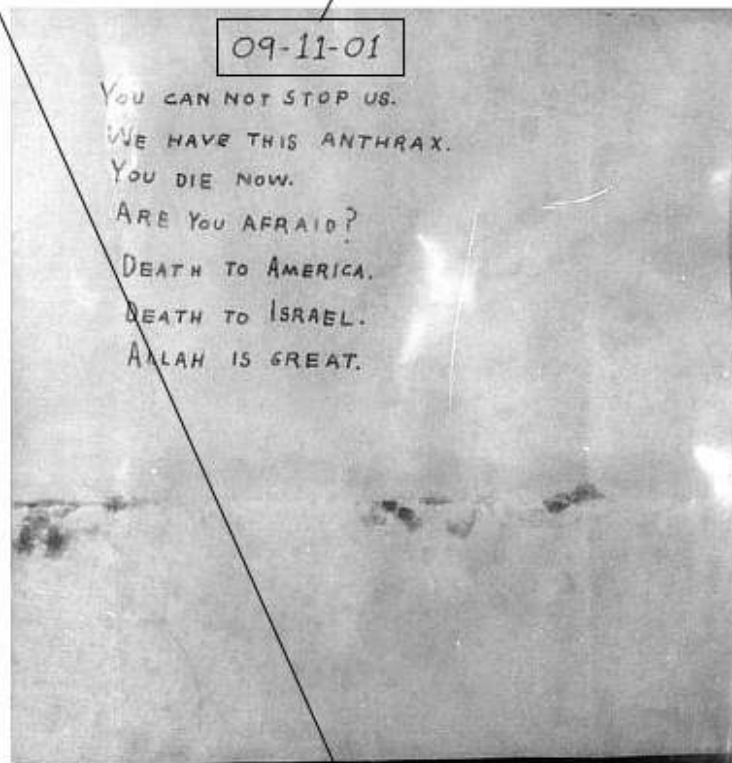
(:「問題なのは、」従前妄言体系との兼ね合いもあってであろう、黄金比と結びつく正五角形を魂を喰らう異次元侵出妖怪の類への封印手段として描いていたとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』という小説作品がただの荒唐無稽作品にとどまらず、その五角形(ゲート)を用いての異次元妖怪の封印の下りも関わるところとしてかの[911の予見小説]としての性質を帯びているとのことがあり——(「死活問題に関係する[事実]を無視するのは相応の人間、有事にては生きるに値する能力を有していないとの類であり、はきと存在している[事実]を虚偽であると(反対論拠が何らないところで)断言するは有事にあっての敵方の間諜あるいは唾棄すべき種族の裏切り者であろう」と述べつつものごととして——、そのことを[確たる文献的事実]として容易に指し示せるようになって「しまっている」とのことがあることである(「黄金比体現の五角形の異次元へのゲート」と[911の前言]が結びついていると申し述べられるようになって)。そして、また、かてて加えて、「問題なのは」、[黄金比体現存在たる正十二面体](五角形を12枚重ね合わせた図形)としてのゲート装置を前面に出している小説『コンタクト』が表記の911の事前言及作品『ジ・イルミナタス・トリロジー』と同様同文に[911の前言作品]としての側面を奇怪極まりなくも帯びているとのキップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』という著作とも背景事情として密接に結びついているとのことがあることである)。



1985年以前に遡る[物理学者キップ・ソーンと天体物理学者にしてメディア露出型の万能型言論人であったカー・セーガンのやりとり]から[通過可能なワームホール]のアイデアが科学的に煮詰められ出したとの経緯がある。

[原著は1994年に刊行を見、邦訳版は1997年に刊行を見たとのキップ・ソーン著書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』（邦訳版版元は白揚社）という著作にあっては〔仮説〕を支えるための〔机上のシミュレーション（思考実験）〕が「目立って911の事件とつながるような数値および意味上の規則を伴って」持ち出されているとのことがある。につき、まずもって述べれば、物理学者キップ・ソーンとその妻が「郵便番号91101」（こちら91101という数値は20「01」年「9」月「11」日を米国にてのIDカード日付表示などにて911/01とのかたちで指し示す日付表記たりうるものでもある ——（英文Wikipedia〔Calendar date〕項目にて9「月」11「日」（20）01「年」表記に通ずる Gregorian, month-day-year〔グレゴリウス方式：月：日：年〕とのフォーマットについて This sequence is used primarily in the United States.「こちら（〔月〕〔日〕〔年〕の順番での）日付表記法は主として合衆国にて用いられるものである」と記載されているようなところとしてそうもなっている——）、すなわち、米国郵便番号に該当するZIPコードが91101ではじまる地域で〔「双子のパラドックス」に依拠したワームホール型タイムマシン生成挙動〕を開始したとの思考実験（現時点での人類文明にあっての実現不可能技術を前提にしての思考実験）が同著にあって登場を見ているとのことがある。そちら思考実験につき、問題と見えるポイントは〔双子〕との言葉を含む〔双子のパラドックス〕と結びつく思考実験を〔91101〕というかの事件、〔双子の塔が崩壊させられたかの事件〕を想起させる郵便番号の地番ではじまる地域（英語圏表記で01年9月11日の略記数値列でもある91101で郵便番号がはじまるパサデナ）を「始発点として」実施しているとのことである]

Second anthrax note



(From Wikimedia Commons)

炭疽菌テロの容疑者 (suspect) としてのBruce Ivins 容疑者が書いたとされる犯行声明書（英文 Wikipedia掲載のものよりの転載）。同犯行声明文については（本稿の後半部にて意図して）後にも問題視する所存だが、ここで注目いただきたいのは犯行声明文に見る「91101」というナンバー、米国記述式で2001年9月11日を指すものとして用いられているとの同ナンバーがパサデナという地区のジップコード（郵便番号）の開始番号となっていることに「こだわらざるをえぬ」との奇怪な相関関係が現出していることである。

[上にて表記の BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』に認められる〔ソーンが郵便番号91101ではじまる一面（Pasadena）にてなしはじめたとの設定のシミュレーション（思考実験）〕にあってその原理が利用されている〔双子の〕パラドックスというものだが、その提唱年は前世紀初頭1「911」年であると一般に認知されている（出典も無論、先に挙げている）。それにつき「問題となるのは、」（「それなくしてはキップ・ソーン著作に見る表記の思考実験、すなわち、〔ソーンが郵便番号91101ではじまる一面にてなしはじめたとのシミュレーション（思考実験）〕が語れないとの按配になっている）そちら〔「双子の」パラドックス〕の提唱年が1「911」年であることより「双子の」塔が崩された日付（9月11日という日付）が想起されもするということである]

[ソーンは自著『ブラックホールと時空の歪み』にて[「双子の」パラドックス]にまつわるシミュレーション、[パサデナにて「空間軸上の」始点を置くワームホールタイムマシン生成挙動]たるシミュレーションに言及する前に「また別の」思考実験、[パサデナを走行する自動車の上で爆竹を順次爆発させるとの設定の思考実験]を——双子のパラドックス(上述のように1911年に提唱された概念)に通ずる時間の相対性の説明との絡みで——引き合いに出すとのことをなしている。そこにいう他の思考実験にあって「も」認められる[パサデナ]とは(繰り返すが)郵便番号「91101」が最も若い番号(地区にての筆頭郵便番号)として割り振られている一画となる。であるから、[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験の議論の前提として持ち出されている思考実験からして[「双子の」パラドックス(1「911」年提唱)]、[パサデナ(空間軸上の開始ポイントで郵便番号にして91101から地番表記されているとの一画)]、[(車上)爆竹の「順次」起爆 firecrackers detonation]との観点で二〇〇一年九月一日に起こったツインタワー崩落事件(「時間差を呈して」崩落したツインタワー以外に計七棟のビル群がワールド・トレード・センターにて崩れ去った事件)のことを想起させるとのことがある]

[先述のように(ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』にあっての)パサデナを始点とする——郵便番号91101ではじまる地域区画を始点とする——シミュレーション(思考実験)は[双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動]として言及されているものであるが、同じくものソーン著作(原著1994年刊行)ではその思考実験開始年次につき[2000年1月1日午前9時]との明示がなされている(：ややこしいところだろうが、1994年に刊行の書籍の中で双子のパラドックス(1911年提唱)を応用しての思考実験がパサデナ(地番91101ではじまる地区)を「空間軸上の」始発点にし、なおかつ、2000年1月1日9時を「時間軸上の」始発点として開始されたとの設定が採用されているわけである)。その開始年次、2000年1月1日午前9時につき時間の単位として若い順番、[時刻→日付→年次]との順番で配置するとの一般的で「はない」方法で並べかえすと「9」「1」「1」「2000」とのかたちとあいなるものである。かの911の事件の発生時(「9」「1」「1」「2000」と差分が1年しかない日付け表記を意識させる数値が出てくる——それ単体だけについて述べれば、牽強付会(こじつけがましき論法)と見做されかねないだろうが、ソーン著書の兼ね合いでは[パサデナ郵便番号問題][双子のパラドックスにまつわる意味的問題]が全く同じところで問題となっていることに留意すべきである——]

[直近にて言及のようにソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』にて取り上げられる[双子のパラドックスを応用したワームホール型タイムマシン生成挙動]の開始時期は2000年「1月1日午前9時」であるとされているわけだが、2000年という時期は[2000年紀のはじまり](ニュー・ミレニアムの開始時期)として[2001年]と混同されるとの一般的理解が存し、その点について扱った科学読み本——チャールズ・サイフェ Zero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』——よりの引用も本稿の先の段でなしているとのことがある。そして、その2000年に原著が刊行されたその問題となる他著作、2000年と2001年という年度が[どちらがニュー・ミレニアムの始点か]との観点で混同されているとのことに言及しているとの著作——チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ』——からして911の事件が発生する前よりブラックホールとの言葉を[グランド・ゼロ]と結びつけているとのことをなしているとの著作となり、また、キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み』に挿絵提供しているのと同様のイラストレーターの手になる独特な画風のイラストレーションを[通過可能なワームホール絡みの図像]として挙げているとの著作とすらなっている(であるからあまりにもできすぎている)。その点も加味して、キップ・ソーン著作『ブラックホールと時空の歪み』の時間の単位を若い順に挙げての「9」「1」「1」「2000」とのワームホール・ゲート構築開始時期は「9」「1」「1」「2001」と混同されるものとしての重み付けをなすべきである——片方で「9」「1」「1」「2000」と結びつく日付け表示がなされているかと思えば、それと同じイラストレーターの手による挿絵を[同じくものトピック]にまつわる挿絵(通過可能なワームホールにまつわる挿絵)として採用しているとのもう一方の他の著作が「2000年と2001年のニュー・ミレニアム始点としての差分は曖昧模糊としている」とのことを述べている著作であるとのこと、その意味を重んずべきである——]

振り返りそれ自体がくどくなっているか、と本稿筆者としては考えているのだが、簡易・簡潔な式にまともして「一例摘示」なせば次の如しとの関係性を問題視してきたとの事前経緯がある。

ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』

⇔

([ノーチラス号]と[ノーチラス号に仮託されているものであるとはきとそちら別作品にての作中で言明されている黄金の潜水艦]を介しての対応関係)

⇔

『ジ・イルミナタス・トリロジー』

⇔

(正五角形と結びつけられての異界の垣根／トロイアの寓意／911への予見的要素との接合)

⇔

カール・セーガン『コンタクト』(ブラックホールないしワームホールのゲート装置を中心に話が展開するとの小説)

カール・セーガン『コンタクト』

⇔

トロイア関連の執拗なまでの寓意性(『コンタクト』作中、10回以上、[トロイアを滅ぼした木製の馬]に仮託されているとのゲート装置／小説『コンタクト』作中、ゲート装置構築につながった計画として引き合いに出されている[アーガス(=百眼巨人「アルゴス」)計画]と[トロイア攻めをなしたギリシャ軍別称たる「アルゴス」勢]および[木製の馬の考案者オデュッセウスの飼い犬「アルゴス」]とのギリシャ語としての連続性／作者カール・セーガンのオデュッセウス故地[イタカ]とのつながりから想起される木製の馬との関連性／オデュッセウスを苦しめたサイレンの災厄と小説『コンタクト』を結びつける『ザ・サイレンズ・オブ・タイタン』との関連性)

⇔

トロイア

⇔

黄金の林檎によって崩壊を見た都市

⇔

大洋の彼方の黄金の林檎の園

⇔

(伝説に依拠して[同等物]と見做す見解の存在)

⇔

アトランティス

⇔

[黄金の林檎を把握する巨人アトラス]や[伝説上の陸塊たるアトランティス]を命名規則の問題として用いているとのLHC実験

LHC実験に伴って取り沙汰されるに至った可能性

⇔

ブラックホールないしワームホールの生成可能性の取り沙汰

⇔

正十二面体構造を呈するゲート装置によるブラックホールないしワームホールの生成

⇔

カール・セーガン『コンタクト』

カール・セーガン『コンタクト』

⇔

正十二面体構造を呈するゲート装置

⇔

アトランティス伝承に言及している古典としてよく知られているプラトン『ティマイオス』にみとめられる正十二面体構造／それを十二枚重ねると正十二面体となる正五角形を異界との扉(境目)といったニュアンスで描いているとの作品にしてアトランティスにおける正五角形崩壊と異界よりの介入存在の解放を描いているとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』

⇔(回帰)

アトランティス海底遺構の探索や作中内にての明示的な(黄金の潜水艦⇔ノーチラスとの)対応付け記述の介入

⇔(回帰)

ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』

(振り返っての表記はここまでとする)

さて、何故、『海底二万里』それ自体の字面 —渦潮たるメールストロムにまつわっての字面— にブラックホールとのアナロジー(類似性)を観念できるものが現出しているとのことが意をなすかと述べれば、である。本稿にあってここに至るまで摘示してきた[黄金比]をキーとする関係性との絡みだけではなく、そこに以降の[f]にて記述のようなことがあるからである(：ここで[e]の段は終え、[f]の段に入る)。

[f].

先述のように[ノルウェーのモスケンの大渦](メールストローム)に呑まれて『海底二万里』のノーチラス号(渦状の外殻を持つオウムガイに名称由来を持つ潜水艦/[911の前言]をなしているとの奇怪な小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』の黄金の潜水艦レイフ・エリクソン号のモデルとなっている潜水艦)はその最期を迎えたように描写されている。

ここで顧慮すべきこととしてそこに注意を向けたいのは

[ノルウェーの大渦](メールストローム)

との言葉で想起される出来事として2009年、

[ノルウェーの夜空に[奇怪な渦巻き紋様]が現出したとの事件 —英語表記では[ノーウィジャン・スパイラル・アノマリー]として知られる事件—]

が発生していることである(：同じくものこと、英語で Norwegian spiral anomaly と呼称される出来事は陰謀論者ら(Conspiracy Theorists)の話柄にて好んで引き合いに出されることであるが、記録映像が公開されており、また、(直下、指し示していくように)主流メディアでさえ報じていたとの出来事となっている)。

SOURCE

87



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 87 にあつては、

[ノルウェーの夜空に [奇怪な渦巻き紋様] が 2009 年 12 月 9 日に現出したとの事件 —英語表記では [ノーウィジアン・スパイラル・アノマリー] として知られる事件—]

に対して欧米メインストリート、衆目の触れるところでどのような総括がなされているのかについて紹介しておく。

その点、「中空に渦を巻く光が現出した」などとなると、[実態を伴わぬ幻影] のようなものではあるととらえられやすきところとは見るが、そう、[未確認飛行物体] なぞと表されるような類の幻影が幻覚物質 (Entheogon) を摂ったがごとく人間、そう、スカスカの目をした者達に酩酊状態で「歴史的に」見出されてきたとのことも指摘なせる (本稿を公開しているサイトの一でも西洋の歴史的記録に認められるといったものと日本の『太平記』の記述に認められるといったものとの類似性のことなどを問題視しているとのことがある) ような中でそうもとらえられやすきところとは見るが、

「筆者は下らぬ未確認飛行物体陰謀論者として話をしているのではない」 (**I am not a UFO conspiracy theorist.**)

と断りつつも述べるどころとして、

[ノルウェイジアン(ノーウィジアン)・スパイラル・アノマリー]

とはその現象態様および想定される機序につき、次のような説明がなされている事件となる。

The Norwegian spiral anomaly of 2009 appeared in the night sky over Norway on 9 December 2009. It was visible from, and photographed from, northern Norway and Sweden. The spiral consisted of a blue beam of light with a greyish spiral emanating from one end of it.

[...]

A similar, though less spectacular event had also occurred in Norway the month before. **Both events had the expected visual features of failed flights of Russian SLBM RSM-56 Bulava missiles, and the Russian Defence Ministry acknowledged shortly after that such an event had taken place on 9 December.**

[...]

Hundreds of calls flooded the Norwegian Meteorological Institute as residents wanted to know what they were seeing. Norwegian celebrity astronomer Knut Jorgen Roed Odegaard commented that he first speculated that it was a fireball meteor, but rejected that possibility because the light lasted too long.

[...]

UFO enthusiasts immediately began speculating whether the aerial light display could be evidence of extraterrestrial intelligence proposing among other things that it could be a wormhole opening up, or somehow was linked to the recent high-energy experiments undertaken at the Large Hadron Collider in Switzerland.

[...]

Russian defence analyst Pavel Felgenhauer stated to AFP that "such lights and clouds appear from time to time when a missile fails in the upper layers of the atmosphere and have been reported before ... At least this failed test made some nice fireworks for the Norwegians."

(訳として)

「[ノルウェイ渦巻き光異常現象](中空に渦巻き状の光源が現れたとの現象)は2009年12月9日、ノルウェイの夜空に現れたものとなる。同現象は北部ノルウェーからスウェーデンにかけて目視可能とのありようで撮影されたものともなっている。[渦巻き]は灰色状を呈した渦巻き部とその片端から発せられているとの青色光線の部よりなっていた。

…(中略)…

同様の、しかし、目を見張るとの意味では劣っていたとの出来事がノルウェーにて一か月前に発生していた。両方の出来事もロシア軍のSLBM(S「サ」ブマリ
ン・L「ラ」ーンチド・B「バ」リスティック・M「ミ」サイル/[潜水艦]発射弾道ミサイ
ル)たるRSM-56(Bulava)が発射後、予定外の過る軌道に突入したことにより
視覚化したものであると予測されており、ロシア国防省も事件の発生した12月
9日より後、の旨、認容している。

…(中略)…

住民らが彼らが一体全体何を見ているのか知りたがっていたとの折柄、何百もの電話がノルウェーの気象関連機関に殺到した。ノルウェーの名士としても知名度高き天文学者 Knut Jorgen Roed Odegaard は当初、「火球と化した隕石であると推察している」と述べていたが、後に光があまりにも長く続いたので彼はその可能性を否定することになった。

…(中略)…

未確認飛行物体の熱烈な愛好家らは同じくもの空中の光をして「それ自体がまさに開こうとしているワームホールなのかもしれない」といったことや「最近ス

イスで執り行われたラージ・ハドロン・コライダーにての高エネルギー実験と関係性をもっていることなのかもしれない」といった他のことらについても言及しながら、外宇宙生命体の存在の証拠なのではないかと推測しだした。

…(中略)…

ロシアの防衛アナリスト、Pavel Felgenhauer は AFP 通信に「ミサイルが大気の上層にて誤軌道を描いたときにそうした光や雲霞(うんか)が現れ報告されることになったことが以前にもある。少なくともこの失敗に終わった試射はノルウェーの人々にとって気の利いた花火作品を残してくれた」と語った

(ここまでを拙訳付しての引用部とする)

以上のような現行の英文ウィキペディアに認められるまとめは常識的で権威あるところと見られる科学情報誌『ニュー・サイエンティスト』(英国の週刊科学雑誌)のオンライン上媒体 newscientist.com「でも」なされており(ウィキペディアからそこに向けてリンクが貼られている)、

[Strange 'Norway spiral' was an out-of-control missile というタイトル名のページ] (表記のタイトルと newscientist.com の検索エンジン上での入力で確実に行きつけようとのページ)

にては次のような総括がなされている。

(直下、表記のニューサイエンティスト誌 —歴史ある英国の科学誌— サイトにあつての現行記載内容より原文引用をなすとして)

It looked like a time-travelling vortex fit for Doctor Who, but a strange spiral observed in the skies above Norway on Wednesday morning was actually a failed Russian missile launch, says a Harvard astrophysicist who monitors space launches.

[...]

"It consisted initially of a green beam of light similar in colour to the aurora with a mysterious rotating spiral at one end," eye witness Nick Banbury of Harstad said, according to Spaceweather.com.

Speculation that it was a bright meteor was quickly dismissed -- in part because the apparition lasted for too long to be an incoming space rock. Suspicion then turned to an out-of-control missile.

That is exactly what it was, says Jonathan McDowell, an astrophysicist at the Harvard-Smithsonian Center for Astrophysics in Cambridge, Massachusetts, and author of Jonathan's Space Report, a fortnightly email newsletter about space launches. "It's definitely a missile launch failure," he told New Scientist.

"We know that the Russian Navy submarine Dmitry Donskoy is in the White Sea and was preparing for the 12th test launch of the Bulava missile, which has had numerous failures," he says.

[...]

Of the missile's 11 previous launches since 2005, six have been failures, a track record that might explain why Russia has reportedly denied a Wednesday launch, McDowell says: "This could be because another Bulava failure is a huge and embarrassing setback for their programme."

(訳として)

「ノルウェー中空に登場した渦巻きは『ドクター・フー』(訳注:60年代から英国にて放送されている SF テレビドラマシリーズ)に見受けられる [タイムトラベル・ヴォルテックス](時空旅行供用渦巻)に丁度似たようなものに見えるが、宇宙ロケット射出を監査しているハーヴァードの天文学者によるところ、それは現実

にはロシアのミサイルの誤射であるとのことである。

…(中略)…

Spaceweather.comによるとハーシュタ(ノルウェー・トロンムス県都市)の目撃者 Nick Banbury は「奇怪な回転する渦巻きにての片方の端にあつてはオーロラのそれに似た色合いの緑色の光線の光があつた」と語っているという(訳注:オンライン上にて公開されている録画映像を見ると青色の光が渦巻きの脇から投射されているように見える。その青色の光については[緑色]に近い視覚的特徴を有していたと主張する向きらのいいようがオンライン上英文媒体で目立ち、また、欧米圏ニュースメディアもそれを受けての基調での報道をなしているとのことがある——但し、画像データは動画なりといえどもワンタッチ処理で特定の色調を変化させることも可能だから、注意が必要であろうとも筆者個人は見ている——)。

外宇宙よりの岩の塊がやってきたにしては具現化が長くも続きもしすぎた、部分的にはといったことのために同渦巻きが光り輝く隕石であるとの憶測はすぐに斥けられた。それゆえ、疑義は[コントロールを失ったミサイル]の話に向かった。

マサチューセッツ州ケンブリッジ地区のハーバード・スミソニアン天体物理学学センターの天体物理学者たる Jonathan McDowell が述べるところ、それはまさしくもの[コントロールを失ったミサイル]ということである。本誌(New Scientist)に対して彼は「それは明らかに射出時に失敗を見たミサイルである」と述べた。「我々はロシア海軍潜水艦ドミトリー・ドンスコイが白海(ロシア北西部バレンツ海の特定期域)に逗留しており、いままで何度も何度も失敗を見てきたとの Bulava ミサイルの 12 回目のテストの準備をしていたことを把握している」と述べた。

…(中略)…

2005 年以降の計 11 回の従前のミサイル射出のうち、6 回は失敗に終わっており、その足跡記録が水曜(ノルウェー・スパイラル・アノマリーの発生した 2009 年 12 月 9 日水曜)の発射につき報告上、ロシアが否認申しようをなしているとのことの説明をつけるところとして、彼、ハーバード・スミソニアン天体物理学学センターの天体物理学者たる Jonathan McDowell は「今回の Bulava ミサイルの打ち上げ失敗は彼ら計画にとって大きく、なおかつ、困惑を呈さざるをえない[つまづき]たりうるからであろうと思われる」と述べた(訳注:ウィキペディア上の「現行の」記載ではロシアもその失敗によって渦巻き現象が生じたようにコメントしていることが記載されているわけだが、そうした(時々刻々と変化し続ける)時事情報の錯綜度合いから真実の程が奈辺にあるのか判じにくくなっているとも述べられるようなところがある) 」

(『ニューサイエンティスト』誌サイトにて社員ないし契約記者にて書かれているところの記載内容よりの引用、その訳はここまでとしておく)

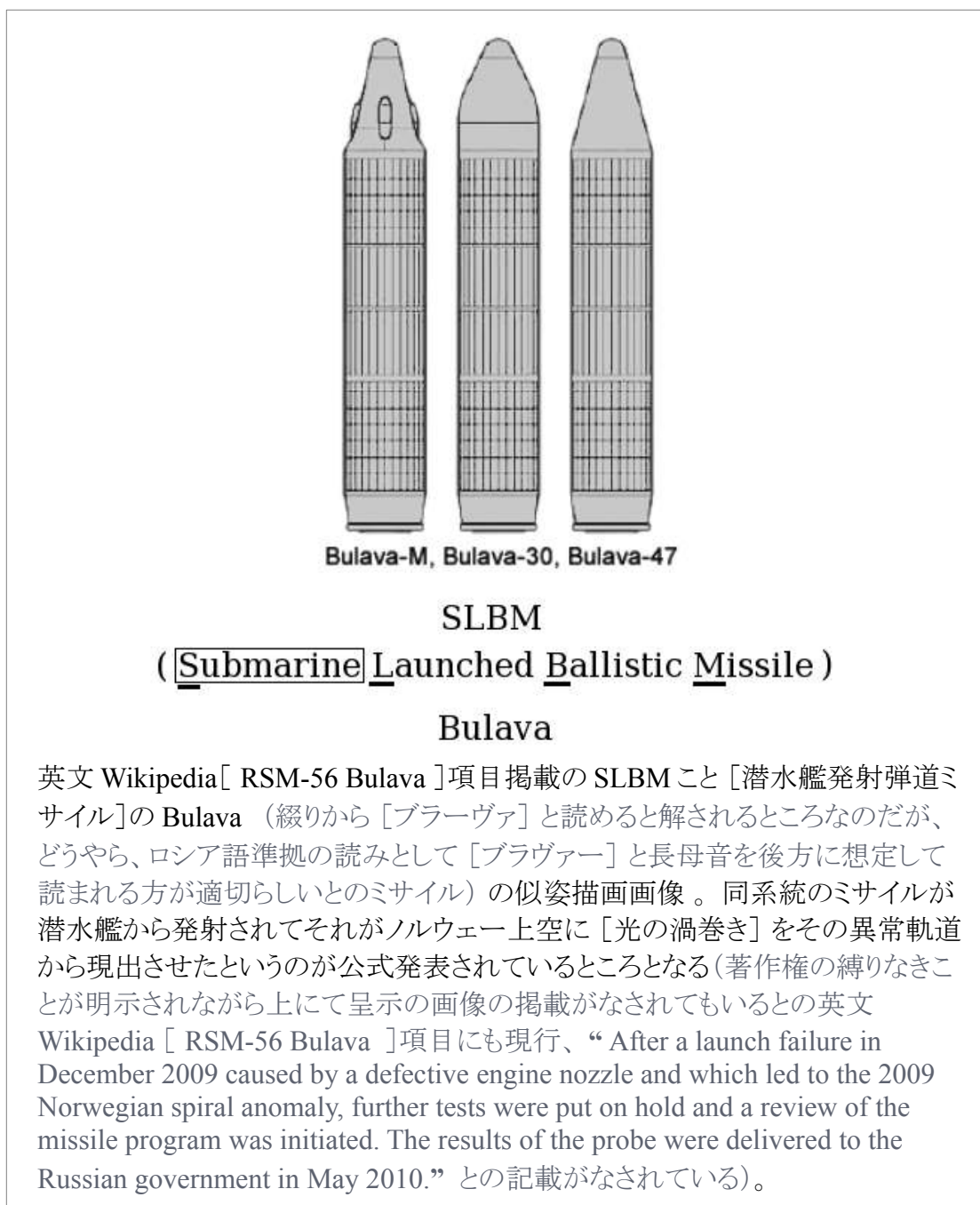
以上、科学誌『ニューサイエンティスト』誌公式サイト newscientist.com にて表記引用のようなまとめようがなされているようなことについてはそのまた他の媒体を介して

[渦巻き光に伴って [青色] (ないし目撃者によってはオーロラ状の [緑色]) の光線状の光が端から射していたこと]

も含めて「こういう説明のされようか。」と納得させられるような、

[シュミレーション画像]

もオンライン上に流通を見ている（:英国のタブロイド系日刊新聞 Daily Mail に由来するものとして渦巻きをミサイルが描きつつ、同ミサイルが青色の科学物質 —後述するように塩化銅との見立てがある— を放出する様子をシュミレーションで示すとの(英国のアニメーターが作成に関与しての)コンピューター・グラフィックス画像が流通を見ている）。



(さらに引用を続けるとして)

渦巻きに伴っての青色の光の出所については技術系情報を商業的に配信することを生業としている欧米圏で比較的知られたオンライン上の商業媒体、Daily Tech の特定ページにあって次のような言いようもなされている。

(直下、DailyTech - Russia Claims Huge Spiral Over Norway Was Due to Failed Missile Launch とのタイトルのページ](表記のタイトル名入力と daillytech. com とのドメイン名のオン

There are still unexplained details about the event that are sure to excite conspiracy theorists. First of all the blue-green light would suggest the presence of copper(II) chloride in the rocket flame. However, copper chloride, while commonly used in pyrotechnics, isn't hasn't traditionally been used in rocket fuel (though it has been reportedly investigated as a catalyst in propellant reactions). Also strange is that a similar spiral and explosion occurred over China last year, according to the Daily Mail. If it was indeed the third stage that caused the scene over Norway, and no previous launch had made it past the first stage, it's unclear what might have caused the similar scene in China.

(訳として)

「陰謀論者らを確かに興奮させようとのノルウェーの渦巻きについては未だ説明されざるところの込み入ったこと (ディーテール) が存在する。第一にブルー・グリーン(青緑色)の光線はロケットの炎にて [塩化第二銅](カッパー II・クロライド) が作用してのことであるとの考えが呈される場所だろうが、塩化銅というものは一般に花火で用いられる一方で、伝統的にロケット燃料の類には(推進作用触媒になるよう調査されていることは報告されているが)用いられてこなかったとのことがある。また、イギリス日刊紙デイリー・メール紙によると同様に渦巻き状を呈し、また、爆発したとの奇妙なるものが昨年中国にて生じたとのことである (注:ここにて引用をなしている Daily Tech の特定ページでは他媒体 Daily Mail に由来するところとしての 3D simulation suggesting a rocket could have at least caused the smoky spiral effect とのこと、すなわち、ノルウェー・スパイラルにつき [青色の光の部] も含めて視覚的に説明しようとの趣旨の英国人アニメーターが関与してのシュミレーション画像に対する言及もなされている一方で英国デイリー・メール紙に由来する中国にてのより以前の同じくもの現象に対する言及がなされている)。

もし仮にノルウェーにてのありようを現出したとの第三段階の話が真正のものであり、そして、従前の発射で同様の事象の第一段階のそれが現出したことがないというのならば、中国にて同様のありようを何が発生させたのかということについては不分明ということになろう」

(ここまでを拙訳を付しての引用部とする —※—)

(※以上、青色の光についてはオーロラに似ているとされるそれも含めてのシュミレーション画像、潜水艦射出型ミサイルの誤射軌道の問題で説明しようというシュミレーション画像も流布されているのだが、塩化銅での作用でそれを説明できるのか、ということについて疑義呈する声があることも上にて紹介した。尚、『高等学校で用いられていた[化学]の科目の教科書などにもカラー写真で出ていなかったらうか』と自身経験にあつてうろ覚えのところなのであるも、塩化銅については[炎色反応]にて花火でそういう色が現れるように青緑色の炎を具現化するものであることが常識の話としてよく知られているといったことが上の話に影響している (ただ、ノルウェー・スパイラルの青色光源については目撃者らが偽りをなしており、また、流通画像の特定色彩変更加工がなされている可能性とて否定できないと筆者は見ている))

(出典(Source)紹介の部 87)はここまでとする)

そもそももってして、なぜ、ノルウェイ・スパイラルのことが問題になるのか、重要と判じられることを指摘するその前に[余事記載]を（『それとて有為たりうるか』との観点にて）以降なすこととする

ここまとめ
ての一連
の段には
【重力波】
関連ピック
クのことを
中心に本
書本頁
(p.692)
から本書
p.766まで
の紙幅を
割く

責任感・誠実性もなければ、知性知能もないとの凡百の陰謀論者ら由来の領域の話、「いかにもそう
でござい」といったそれ相応のにおいを醸し出している者達に由来する[眉に唾したうえで[裏取り]す
るのが最善であろう]といったところではなく、上記出典(Source)紹介の部 87にて取り上げたようなこと
がメインストリートの情報媒体にあっても問題視されているとのノルウェイジャン・スパイラル・アノマリー
について

『[行き過ぎたもの] far-fetched ではあるが、可能性としてはゼロではないのではない
か』

との見立て・目分量に関する補足表記をこれ以降なすこととする ——ノルウェイジャン・スパイラル・アノマ
リー具現化事由については[ロシア SLBM 理解]ではいまひとつ不分明さ・不透明さが残ると「される」
(ただしその通りである可能性が最も高くも見える) との中で、また、長くもなっているとの本稿本義が
[現象機序;現象具現化原理の不確かなる推論]ではなく[明朗明白なる具現化している現象の存
在それ自体にまつわる他事との不快なる関係性の異論など差し挟まれるところがない呈示]にこそあ
る(でなければ、そも、長文をしたための(潜在的)意味・意義がない) との中でノルウェイジャン・
スパイラル・アノマリーに関して[ありうべき「かもしれない」こと]についての補足表記を(余事ながら)
敢えてもこれ以降なすこととする——。

さて、当然に、読み手は[オーロラ]というものについては知っていることか、と思う。

そのオーロラ、いかにして具現化すると説明されているか、ご存知だろうか。

北欧神話では[来るべき神々の戦争に備え勇士らの魂を収集しているとされる神人たるヴァルキリー
の鎧の煌(きらめ)きがオーロラである]などと説明される(以上の未開時代の神話的説明法について
はオンライン上にて即時即座に確認可能などところとして和文ウィキペディア[オーロラ]項目程度のもの
にも、(現行現時点では)、言及がある)との[オーロラ]というものについては科学的には

[大気粒子の励起現象]

で説明がつけられている(:オンライン上より即時即座に確認できるところとして和文ウィキペディア
[オーロラ]項目などにそのとおりの記載がなされているのか見ていただきたい)。

行き過ぎた物言いであろうと違和感・疑義・軽侮を招こうところか、とも思うのだが、ノルウェースパイ
ラルに関してはそこにいう、

[励起状態]

というものが

[「公式発表とは異なるトリッキーな形態で」発現している]

可能性について —ありうべきところの[塩化銅の炎色反応]にまつわる不審性伴っての話に代わっ
て— 問題視すべきところがあるのではないかと手前などは —同様にそうとらえている人間は他にも
たくさんいるかと思うが— 考えたりもしている。

その点、

「現代科学では物質の系にあってのエネルギーにて最低エネルギー状態を[基底状
態](グラウンド・ステイト)と表し、それを超えた状況を励起(れいき)状態 —英語では
エキサイテッド・ステイト— と呼びならわすとのことがあり」([出典表記に準じるところと

して]:以上のことはオンライン上にては和文ウィキペディア[基底状態]項目などの短き記述ですら確認可能なことである —疑わしきはそちら記述内容と続いて表記の基本的なる話の照応をされたい—)

「光・熱・電場・地場などの外側の状況によって引き起こされる電子・陽子・中性子・分子などのその励起状態 —基底状態のエネルギーを超えてのエキサイテッド・ステート— にて[発光現象]が生じるケース、[オーロラ]現象、[生物発光]現象、[チェレンコフ放射]現象、そして、よもって日常的なところとして[蛍光灯発光現象]などの発光現象らが生じると一般に知られている」

とのことがある。

[上記のこの出典表記に準じるところとして]

以上基本的なところについてはすぐにでも目に付くところの解説媒体であるウィキペディアにての[励起]項目、[オーロラ]項目、[チェレンコフ]項目、[ルシフェラーゼ]項目程度のものからして現行、オンライン上にて当然に確認できるところとなっている(のであるから言論動向に対する説明にて言及なしている)。

につき、端的な内容紹介をなしておくが、オンライン上の和文ウィキペディア[オーロラ]項目には

「太陽に由来するプラズマ粒子が太陽風との形で地球磁場と相互作用し、大気粒子の励起を引き起こしオーロラという現象が起こる」

との趣旨の記載がなされ(この段階では一般の科学現象理解にまつわることである)、同じくものウィキペディア上の[ルシフェラーゼ](高等学校で[生物]の科目を受験に使うのならば生物発光をなさしめる物質の名、ルシフェリンは暗記必須事項だが、そのルシフェリンに至る酸化プロセスに係る物質が[ルシフェラーゼ]である)に関する項目にあつては

「生物発光の仕組みは基本的に化学発光と変わりなくバクテリアルシフェラーゼの作用でペルオキシド中間体(というもの)が生成され、それが直鎖状アルデヒド(というもの)と同ペルオキシド中間体の作用でペルオキシヘミアセタール(というもの)が生成され、同ペルオキシヘミアセタールの分解過程で[励起分子]が生成され、その[励起分子]の蛍光波長が生物発光のそれと一致する」

との趣旨の記載がなされている。

また、ウィキペディア[チェレンコフ放射]項目にあつては、大要とし、

「チェレンコフ放射とは荷電粒子が光速よりも早く動く際に光が発せられる現象のことを指す。アインシュタインの相対性理論では光速がいかな場合でも不変であることを想定しているが、物質中を移動する光の速度は遅延化を呈しえ、たとえば水の中ではそのような状況になりえ、粒子が核反応や粒子加速器によって加速されるとそちら遅延化された光の速度を超えることとなりえ、絶縁体の中をといった荷電粒子が通過するときにチェレンコフ光 —原子炉臨界事故では[青色の光]として具現化する— が発する」

と基本的なところが解説されている。[蛍光灯の発光]については和文ウィキペディア[電弧]項目にて蛍光灯に用いられるアーク放電にまつわる機序でいかに励起と呼ばれる状態のことが取り沙汰されているか、チェックされてみるとよい。

上のような励起、生物発光から蛍光灯発光に至るまで発光現象にもろとも関わるところの励起 —繰り返しなすが、熱・電場・磁場なぞの外側よりの力によって[基底状態](極小の世界を領分とするとこ

ろの量子力学が対象とする極小の世界にあっての最も低きにあってのエネルギー状態)よりも高いエネルギーを持った状態(英文 Wikipedia にて “ Excitation is an elevation in energy level above an arbitrary baseline energy state ” と端的に定義づけられている状態)—— については、(自身手習いしなおしたこととはいえ基本的な話を延々なすようで苦痛なのであるが)、ノルウェーの中空にて生じた怪奇光現象が主流メディアや政府筋が異口同音にそうであると述べているように [ロシア軍の SLBM が原因のものであった] として「も」[光]というものの具現化状態と関わっているものであるとも述べられる。それについては化学物質による発光現象、たとえば、花火で青色をもたらす [塩化第二銅] (銅 Cu^{2+} ・クロライド、これがブルーヴァミサイルで青色をもたらしたのものなのかという疑義が呈されていることは上にて言及している) による、

[炎色反応]

というものの機序もまた「励起」によるとされているとのこと、述べれば、十分であろう (:であるから、ここでは主流なるものの見方を「オーソドックスな」励起の作用と定置し、SLBMとは異なるものでは?とする見解を「トリッキーな」励起の作用と表すことにしている)。

[上記のこの出典表記に準じる場所として]

和文ウィキペディア[炎色反応]項目にて(原文引用する場所として) “ 高温の炎中にある種の金属粉末や金属化合物を置くと、試料が熱エネルギーによって解離し原子化される。それぞれの原子は熱エネルギーによって電子が励起し、外側の電子軌道に移動する。励起した電子はエネルギーを光として放出することで基底状態に戻り、この際に元素に特徴的な輝線スペクトルを示す。したがって、比較的低温で熱励起され、発光波長が可視領域にある元素が、微粉末や塩化物のような原子化されやすい状態になっているときにのみ、炎色反応が観察される ” (引用部はここまでとする) と解説されているところである。

問題は励起が通常のかたち、炎色反応とは全く異なるようなかたち、トリッキーな、

[尋常一様ならざる機序にて発生した「プラズマ」状態]

に関わるものとして具現化していること、ノルウェー中空の渦巻き現象に作用しているのではないかと比較的高等なやり方で疑義を呈する向き —— だが、陰謀論扱いされるやり方で疑義を呈する向き —— が海外にいる(国内で馬鹿なことを述べている唾棄すべき者達ではない)とのことであり、その話には「ある程度、可能性としてありうる」との心証が抱けてしまうとのことである(ここで比較的高等、としているが、そうではないやり方は市中の狂った、ないし、あまりにも無責任との意味でタブロイド的な(としか表しようがない)科学精神とは無縁なる陰謀論者やりようともなるとも申し述べておく)。

その点、直上にて [プラズマ] との言葉を一言用いたが、その [プラズマ]、簡略化してその性質につき述べれば、

「高いエネルギーを与えられて原子が [気体] の状態以上に激しく運動している状況」

とよくも世間では解説されるものである。

[上記のこの出典表記に準じる場所として]

与えられるエネルギーに応じて原子が安定している順から固体・液体・気体となっているところにさらに高エネルギーが与えられて原子の動きを急激化させた状態がプラズマの状況である、そういう簡明な解説の仕方は和文オンライン上の解説媒体「でも」すぐに見つかるはずである —— 尚、目に付く場所として和

文ウィキペディア[プラズマ]項目の現行にての記載内容より抜粋すれば、“プラズマは、気体を構成する分子が部分的に、または完全に電離し、陽イオンと電子に別れて自由に運動している状態である…(中略)…プラズマは物質の三態、すなわち固体、液体、気体とは異なった、物質の第四態といわれる”(現行のウィキペディア程度の媒体にあつての概括説明よりの引用はここまでとする)と表記され、また、同じくものその場(和文ウィキペディア[プラズマ]項目)にては固体・液体・気体に続くものとしての[プラズム]の図が(少なくとも現行にあつては)掲載されている——)。

その[プラズマ]の状況では([電離]および[励起](既述)によってそれがもたらされるとの)[発光現象]が伴う。

[ウィル・オー・ウィスプ](人魂)から果ては[未確認飛行物体]の類までをプラズマで説明しようというのもそれなりに理に適ったことで、(調べればすぐに裏取りできようところとして)、

「太陽はプラズマの凝集体でありオーロラもプラズマ、蛍光灯の発光機序もプラズマにある」

というのが現代科学の基本的理解というものである(筆者は理学系の[学者]なぞではないので「およそその任には耐えず」との認識もあるが、それにつき世間一般で講学的に述べられているところでは「プラズマ状況下では電子衝突反応によって励起(ないしは電離)がもたらされ、励起された原子が元の原子に戻る過程で光がエネルギーとして放出される」といった説明のされようがなされているところである——上にてその記述を引いた和文ウィキペディア[プラズマ]項目にては現行、(引用するところとして)“**プラズマボール。繊維状の構造はプラズマの複雑性を表している。電子が励起状態から低いエネルギー準位に緩和するとき、エネルギーの差に対応した光が放出される**”(引用部はここまでとする)との表記がなされているところでもある——)。

ここまで書き進めたうえで述べるが、海外の一部にあつてはプラズマ的状况(による潜水艦ミサイルに伴つての[炎色反応]なぞとは異なるかたちでの通常と違う[励起]の発露の仕方)がノルウェー・スパイラルの発現原因ではないのか、という申しようが一部でなされているのである——筆者はその適否についてまでおよそ断じられないし、また、断じる必要などないと考えているのだが、とにかくもそういう申しようがなされている(：ここで「そちら申しよう適否については断じることも出来ないし断じる必要もない」と書いているわけだが、それは「ここでの話は余事記載である」と先だつて申し述べもしたことと表裏一体のこと、はなから断りもしての不確実なことを扱っているがゆえにものことでもある。さらに述べておけば、(ここでの話とは分けても)本稿本段主要部でそれさえ訴求すればよい、それさえ理解させれば、[行動]をなさないことは[逃げ]の選択肢(それが悪いとは言わないが、死線を前にしての逃げの選択肢)と同じともなろうとの[種族の今後にまつわる主要摘示事項]を異論など生じようもなかつたの「堅い」線でカバーしきれているとの認識が筆者にはあり、それがためにこそ、自身の限られた時間を割いてわざわざもって長大なる本稿を作成しているとのことがありもする)——)。

につき、通常と違う式(通常と異なる[励起]の発露の仕方)がノルウェー・スパイラルの発現原因ではないのと意見呈示する者達として、

『人工的に[発光を伴うプラズマ]を中空にて生成した(アーティフィシャル・プラズマを作り出した)者達がいるのではないか』

と指摘している向きらが海外にはおり、それは具体的証拠がないがゆえにの陰謀「論」に留まっているとされるものの、ある程度説得力がある、ないし、ありえると思えるとのことがある(というのも[ノルウェー・スパイラルの人工プラズマ説]を唱える向きらが呈示している人工プラズマの発現形態の写真

は確かに「渦を巻くが如くのプラズマ発光体」が含まれているからである。

同じくもの人工プラズマ状態介在をして「陰謀論」(Conspiracy Theory)がかつて鼓吹する向きには

[特定の間人社会にあつての装置運営機関がそういうことに関与することになっている] (:具体的な Conspiracy Theory[陰謀「論」]の中身としては EISCAT ——(ノルウェーにてその拠点を設けているとの国際的研究機関/「類似の」ハープ計画(高周波活性オーロラ調査プログラム [H]igh Frequency [A]ctive [A]uroral [R]esearch [P]rogram ことハープの略称で知られるアラスカにて米軍・国防高等研究計画局・アラスカ大学が関与しての大気圏電離層の機序を電波送信で探ろうという名目の計画)とは別建ての [オーロラ・オゾンの研究]を建て前にしての電離層ヒーターと呼称される地球電離層(大気上層)に向けての電波送信アンテナ群を伴った施設・計画を運営しているとの国際研究機関 the [E]uropean [I]ncoherent [Scat]ter Scientific Association 欧州非干渉散乱科学協会)—— が電離層に擬似発光プラズマをきたすだけのエネルギー照射を独特なやり方でなしたがためにノルウェー・スパイラルが演出された)

との主張をなしているのであるが、この身はそういった[ステレオ・タイプの陰謀論]にこだわらないものの、**EISCAT** にこ固執しない式でもより根本的な機序のところを考えれば、[あつてもおかしくはないのではないか] とのことまつわる心証を —いろいろと調べてみて— 抱いている(尚、それら **EISCAT** について国内では目立って下らぬことを述べているとの漢字二字で表されるようなやりようをなしている(失敬)との人間ら ——本稿を公開しているサイトにもそれ相応の臭いをつけんとしている挙を観察してきたとの我々人類の進歩進化の可能性を[知性レベル低き煙幕の撒布]で否定しようとするが如くの手合いら—— は現行、見受けられないが、日付け偽装などでこれより相応の塵(ゴミ)の如くものがそちら系統の間人ら(スカスカの内面しか有しておらぬとの相応の類)によってこれより撒かれる可能性があるのとらえるので、検証するのならば、英文サイトを梯子しつつ、それ絡みの欧文資料に当たるのがよいか、と思う)。

「こう言つては当然誤解を招こうが、」

「ここでの話は本稿にての本筋の具体的かつ客観的な話に対して余事記載としての憶測がかったことを取り上げてのものにとどまるのだが、」

と前置きしながらも述べたきところであるのであるも、

「人工プラズマが具現化していたとしてもそれが必ずしも [常識的な発現の仕方](非常識な話の中にあつてながらも常識の発現の仕方)をしているとは限らない」

(そも、そういうことを人間レベルの組織体関与の下でなすだけの十二分な[動機]もなければ、それが [他の現象(例えば、ロシアの **SLBM** の異常軌道現出)に原因を求めての説明]で隠し通せなかった場合の [リスク] の問題もある)。

手前は上のようにも考えているのである。

につき、(二重の不確かな仮定を差しはさんでいる、[第一に「人為」プラズマの発現であるとの仮定、および、第二にそれが **EISCAT** のような人間レベルのものによる光の具現化ではない可能性もあるとの仮定を差しはさんでいる] とのこと [雲上の上に楼閣を築かん] とするとりとめもない話 ——であるから、本稿本筋と分けていただきたい脇に逸れてのそういう性質のものとして先に断つて話でもある—— とはなるのだが)、[ありうるかもしれない]とらえられるところに関わるところとして [多世界解釈]

というものがいろいろな重種思索を伴うものとして存在しているとのことがある(いいだろうか。[宇宙人信仰の畸形(フリーク)]的話柄に固執しているわけではなくそういう解釈があるとの解釈論の存在を一步離れて紹介しているのである)。

端的に述べれば、

「我々の世界と似た別世界が存在している」

とのサイエンス・フィクションがかった発想法がそれであるが、主流の物理学者もそうした可能性を頭ごなしに否定していない。のみならず、その存在(我々のそれとは異なる(多世界解釈における)他世界の存在)を念頭に[ありうべき技術]と[文明の進化の可能性]について論じたりもする学究もがいる。

たとえば、である。本稿でここまでその内容を何度か問題視してきた書籍、

Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos 『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』(同著邦訳版の版元はNHK 出版)

にあつてはその著者ミチオ・カク(ハーヴァード卒、名門研究機関として認知されているローレンス・バークレー国立研究所より博士号を授与されたとの米国日系人科学者でメディアに露出するいわゆるカリスマ物理学者)が同著『パラレルワールド』より原文引用するところとして ——オンライン上にての該当文入力にてその通りの記載が原著にて確認できるかたちにての原文引用をなすところとして——次のように述べているとのことがある。

(直下、Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos にての p.330 よりの原文引用をなすとして)

As I mentioned earlier, our universe may be a membrane with a parallel universe just a millimeter from ours, floating in hyperspace. If so, then the Large Hadron Collider may detect it within the next several years. By the time we advance to a type I civilization, we might even have the technology to explore the nature of this neighboring universe. **So the concept of making contact with a parallel universe may not be such a farfetched idea.**

(拙訳として)

「先に言及したように我々の宇宙は我々の側からミリメートル単位で離れたにすぎぬとの並行宇宙を持った、超空間の上に漂うメンブレン(膜状のもの)のものでありうる。もしそうであれば、ラージ・ハドロン・コライダーがきたる数年の間にて(多世界解釈における)他世界を検知しうる。その折までに我々がタイプ I 分類の文明(訳注:ニコライ・カルダシェフという物理学者が提唱した文明分類体系にあつて惑星の全リソースを利用可能との文明)に発展を見ているのであるならば、我々はこの近傍の宇宙の性質を探索するためのテクノロジーをも手中に収めている可能性がある。**となれば、並行宇宙とコンタクトをとることもこじつけがましきアイデアとはならないだろう**」

(拙訳を付しての引用部はここまでとする —※—)

(※上のように述べるミチオ・カクだが、引用なしでの『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』の邦訳版を直に手にとってご覧いただければお分かりいただようこととして彼ミチオ・カクはラージ・ハドロン・コライダーにつき[マーベラスな何かの偵知のためのもの]以上には述べておらず、同装置それ自体がゲートになる可能性、人間を諸共、滅ぼしてのゲートになる可能性を論じていないとの向きとはなる ——そのような可能性につき述べれば、現代の主たる物理学者らが総結集して邁進しているとの営為に否定をしたとのことで科学界よりの追放もあるとでもいうのか、あるいは、同男からして相応の者なのか、ミチオ・カクとは積極的に LHC を[探索装置]とだけ評価するとのことまでをなしているような手合いである——)

(さらに直下、Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future

of the Cosmos にての p.392 の GLOSSARY [用語集] の部よりの原文引用をもなすところとして)

Kerr black hole

An exact solution of Einstein's equations which represents a spinning black hole. The black hole collapses into a ring singularity. Objects falling into the ring experience only a finite force of gravity and may, in principle, fall through to a parallel universe. There are an infinite number of these parallel universes for a Kerr black hole, but you cannot return once you enter one of them. It is still not known how stable the wormhole is at the center of a Kerr black hole. There are severe theoretical and practical problems trying to navigate through a Kerr black hole.

(拙訳として)

「カー・ブラックホール: 自転するブラックホールを表すアインシュタイン方程式の適切なる解答。同カー・ブラックホールはリング型特異点に崩壊を見る。そのリングに落ち込んだものは重力の無限大の圧力を受け、原理上は平行・ユニヴァース(他宇宙)に落ち込む。カー・ブラックホールによって到達可能な平行・ユニヴァースは無数の数存在しているが、それらの中に入り込んだらば貴方は戻ってこれない。未だに安定したワームホールがどのようにカー・ブラックホールの中枢に存在するか知られていないカー・ブラックホールを通じての航海を成し遂げようとのことにはきわめてシビアな理論上および実地的な意味での問題らが伴う」

(拙訳を付しての引用部はここまでとする)

上引用部にてミチオ・カクは

「タイプ I の文明に我々の文明が進化こそしていれば、他世界 —— 続けての引用部ではカー・ブラックホールの行き先ともされるそれ —— とのコンタクトも可能たりうる」

としているが、その申しようには筆者のような素人でも「おそらくそういうことを述べているのではないか」と考えが及ぼうところとして

[[重力波] を活用するテクノロジー]

のようなものが包含されていると考えられる(ようになっている)。

というのも [重力波] というものについては —「ブラックホール人為生成問題にまつわる理論動向と関わる」とのことのでこの身からして睨んで数年来、着目してきたことなのであるが— [膜世界解釈] で複数の世界をペネトレイト、突貫する性質を有していると「される」からであり、さらに述べれば、その重力波を [通信リソース] に使う構想も我々人間世界のレベルの問題としてさも当然であるかのように存在しているとのことが(これより典拠示すような式)であるからである (: 「我々人間世界のレベルでも存在している」と申し述べているが、ここでは我々人間の世界に押しつけられた科学体系・技術体系が諸共とはいわぬまでも大部分が [モンキー・モデル] (軍事戦略・軍事兵器にまつわる用語だが、意味は各自調べればよい) の如きものである、あるいはよりもって突き抜けて、「この世界は愚劣な偽物だらけの傀儡(くぐつ)の舞台だろう」といった善男善女ならば、にまつわっての心証を正直に口にも出そうとのところに通ずる話は敢えて脇に置いての話をしている) 。

さて、これよりはそちら [重力波] というものについていかなうことが問題となるのかについて、「多少」、というより、「かなり長くもなる」とのかたちで紙幅を割いて論じていきたいと思う —— 本筋となるところの [対数螺旋構造、[渦巻き] 状を呈してのノルウェイ・スパイラル] との絡みでそれがどうして問題になりうるのか、とのことにも部分的には通ずるところとして、だが、かなり脇に逸れてものことも含んでのかたちで [重力波] というものに関して問題点となりうることを長々と呈示していくこととする—— 。

以降、[重力波]というものについて[問題となりうるとらえること]につき ——極めて長くもなってしまうが—— 「それなりの(訴求上の)思惑があって」紙幅を割いておくこととし、まずもって、

[[重力波] は [異なる膜世界] (ここまでその内容を問題視してきた洋書『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』に基づけば、[異世界]ともある種、なるもの) を突貫する性質を具備している]

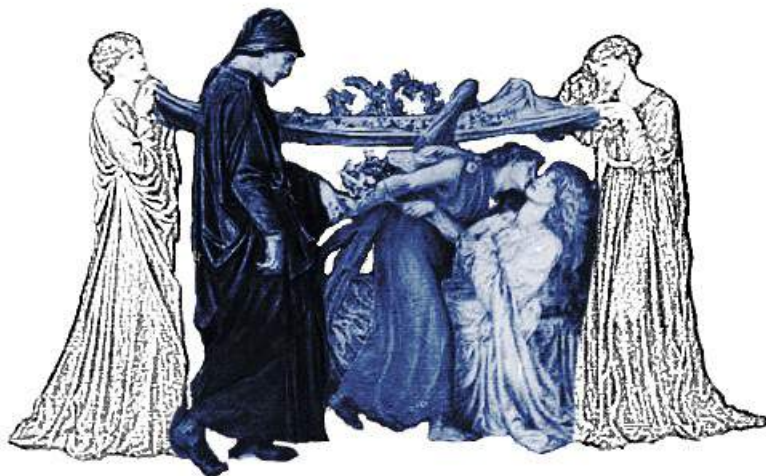
[[重力波] は現行 (本稿執筆時現在)、人類の技術ではまったくもって検知できないものであるとされている]

とのことにまつわる典拠を挙げることから始める。

出典 (Source) 紹介の部 87 (2)

SOURCE

87(2)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 87 (2) にあつては、

[[重力波] は [異なる膜世界] (ここまでその内容を問題視してきた洋書『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』に基づけば、[異世界]ともある種、なるもの) を突貫する性質を具備しているとされている]

[[重力波] は現行 (本稿執筆時 2014 年現在)、未だもって人類の技術では検知すらできないものであるとされている]

とのことにまつわる典拠を通俗的な解説媒体よりの引用とのかたちで示しておくこととする。

そこよりの引用をわざわざもってなすのが果たして妥当なことか、と思われるところなのでもあるが、まずもってして

和文ウィキペディア [ブレンワールド] 項目 (先に引用なししている洋書『パラレルワールド ——11次元の宇宙から超空間へ』で “As I mentioned earlier, our universe may be a membrane with a parallel universe just a millimeter from ours, floating in hyperspace.” 「先に言及したように我々の宇宙は我々の側からミリメートル単位で離れたにすぎぬとの並行宇宙を持った、超空間の上に漂うメンブレン(膜状のもの)のものでありうる」と取り上げられているところの [膜世界(ブレンワールド)解釈] に関わるところのウィキペディア項目)

にあつての現行にての記載内容よりの引用をなしておくこととする。

(直下、和文ウィキペディア[ブレンワールド]項目にあつての現行にての記載内容よりの引用をなすとして)

[ブレンワールド(膜宇宙)またはブレン宇宙論とは、『我々の認識している4次元時空(3次元空間+時間)の宇宙は、さらに高次元の時空(バルク)に埋め込まれた膜(ブレン)のような時空なのではないか』と考える宇宙モデルである。低エネルギーでは(我々自身を含む)標準模型の素粒子の相互作用が4次元世界面(ブレン)上に閉じ込められ、**重力だけが余剰次元(5次元目以降の次元)方向に伝播できる**、とする]

(ここまでを引用部とする)

上にては

「ブレンワールドの世界解釈に基づけば、重力だけが別次元に伝播する」

との表記がなされている(：尚、上にての引用部における[余剰次元]の意味合いとしては[神秘家がやたらと鼓吹する高次元の世界]といった意味合いのものではない。そちら余剰次元は[我々の住む空間の脇にコンパクトに織り込まれた別次元があるのではないか]との意味合いでの「余剰なる」次元にまつわるものとなっている ——そちら [余剰次元] を提唱しての理論が LHC 実験におけるブラックホール生成の論拠になっていることについては典拠挙げながらも先述してきたし、また、同文に典拠挙げながら本稿これより後の部でも取り上げていく——)。

次いで、(日本でもかなり好調な売れ行きを呈していた著作であるようにもとらえられるのだが)、物理学者リサ・ランドール著作 **Warped Passages Unraveling the Mysteries of the Universe's Hidden Dimensions** 『ワープする宇宙 五次元時空の謎を解く』(日本放送出版協会(現NHK出版)刊)よりのワンセンテンス引用を下になしておくこととする。

(直下、リサ・ランドール著『ワープする宇宙 五次元時空の謎を解く』第3章[閉鎖的なパッセージブレン、ブレンワールド、バルク]にあつての p.94、そこにての図に付されての解説部よりの原文引用をなすとして)

「宇宙のなかには、重力だけを通じて相互作用をする、あるいは相互作用をまったくしない複数のブレンがあるのかもしれない。そのような状況を「マル

チバース」と呼ぶことがある」

(引用部はここまでとする ——直上引用部ではマルチバース Multiverse、すなわち、多元宇宙解釈における多数世界にあって重力が相互作用するとの書きようがなされている——)

(続いて、直下、同じくもの著作『ワープする宇宙 五次元時空の謎を解く』第3章 [閉鎖的なパッセージブレン、ブレンワールド、バルク] にあつての p.95 よりの原文引用をなすとして)

「あるブレンは私たちのブレンと平行になっていて、パラレルワールド(並行世界)を内包しているかもしれない。しかし、それとは違った別のブレンワールドがたくさん存在している可能性もある。ブレンとブレンが交差して、その交差点に粒子がとらわれていることだって考えられる。ブレンによって次元の数も違うだろう。湾曲したブレン、動くブレン、目に見えない次元を取り巻いているブレンもあるかもしれない」

(引用部はここまでとする)

さらに、その [不品行] として問題視して然るべきことにつき、本稿の [出典\(Source\) 紹介の部 76\(5\)](#) にて詳しく解説したところのカリスマ物理学者リサ・ランドールの著作『宇宙の扉をノックする』(NHK出版)よりの引用を下になしておく。

(直下、『宇宙の扉をノックする』第17章 [世界の次のトップモデル] にあつての p.442 から p.443 よりの原文引用をなすとして)

おそらく余剰次元での重力は、思っているよりずっと強いのだろう。だが、それが私たちの四次元(三次元+一次元)時空では、とても弱くしか測定されない。なぜなら重力は、私たちの目に見えないすべての次元に広がっているため、薄められているからだ。この彼らの仮説では、余剰次元宇宙で重力が強くなる質量スケールが、まさにウィークスケールだとされている。その場合、私たちの測定する重力がとても弱い理由は、重力が基本的に弱いからではなく、目に見えない大きな次元に重力が広がっているからだということになる。

(引用部はここまでとする)

上もてお分かりのことか、とは思うのだが、(引用部だけの内容に準拠して述べられるところとして)、

「我々の住まう四次元時空以外のところで [余剰次元] [マルチバース] (パラレル・ワールドを包摂しうる複数の膜世界) の存在を観念した場合、それらの間に滲透・相互作用をきたすのは重力ないしグラヴィトン(重力子)のようなものだけであるとのことが考えられ、そうして重力があまねくも滲透しているために重力が弱いものとしてしか検出されない論拠となつていうる」

とも解せられる(ただしその適切性についてはなんら請け合えない) ことが権威筋の物理学者リサ・ランドールによって口の端にのせられている ——と述べても、カリスマ物理学者として認知される同リサ・ランドールの [我々全員の死につながりうる欺瞞] については本稿にての先だつての段でも具体

的証拠に基づいてそちら問題性を摘示しているとおりであり、筆者は権威申しようを引きはしこそすれ、そこに全幅の信を置くべきであると述べているわけではない――。

ここまでで重力波が複数の世界(パラレルワールドとの発想法にもつながりうる複数の膜世界)を貫通する性質を有しているとされることについて典拠紹介なしたとして、次いで、

[[重力波]は(本稿本段執筆時現在)未だもって人類の技術では検知できないものとされている]

とのことの典拠を挙げておくこととする。

(直下、[重力波通信]の可能性について論じたオンライン上よりダウンロード可能な論稿、**The Utilization of High-Frequency Gravitational Waves for Global Communications**(『地球規模の通信のための高周波重力波の活用について』とでも訳すべき論稿で著者は元米空軍教官で現・米軍コンサルタントとのことである Robert M. L. Baker, Jr という人物)の冒頭頁、Abstract(梗概)の部よりの引用をなすとして)

For over 1000 years electromagnetic radiation has been utilized for long-distance communication, heliographs, telegraphs, telephones and radio have all served our previous communication needs. Nevertheless, electromagnetic radiation has one major difficulty: it is easily absorbed. In this paper we consider a totally different radiation, a radiation that is not easily absorbed: gravitational radiation. Such radiation, like gravity itself, is not absorbed by earth, water or any material substance. **In particular we discuss herein means to generate and detect high-frequency gravitational waves or HFGWs, and how they can be utilized for communication. There are two barriers to their practical utilization: they are extremely difficult to generate (a large power required to generate very weak GWs) and it is extremely difficult to detect weak Gws.**

(補ってもの拙訳として)

「1000年以上、電磁放射は遠隔地コミュニケーションに利用されてきた、すなわち、日光反射信号・電信・ラジオらが我々の従前の通信需要を満たしてきた。にも関わらず、電磁場は重大な難点をひとつ有しており、それは容易に吸収されてしまうということである(訳注:この時点で知識無き向きは電磁場が発見されたのは近代以降ではないのか、なぞとの誤解をなしてしまうとも思うのだが、「光も電磁波の一種である」というのは理系の人間には常識であり、引用元論稿ではそれを示唆するように「鏡面を用いての heliographs 日光反射信号」のことが続く段で挙げられている)。本稿で我々は全体的に異なるとの放射、容易に吸収されないとの放射について顧慮する。そのような放射は重力それそのものように大地によって吸収されることもなく、水やその他いかなるものにも吸収されないとのものである。殊に我々は高周波帯の重力波すなわち **HFGWs (high-frequency gravitational waves)** を生成・検知する方法らにつき論じ、そして、いかようにしてそれらがコミュニケーションに利用されうるかについて論じるものとする。重力波通信の実用化には二つの大きな障害があり、生成するのが難解であること(非常に弱い重力波を生成するのにも多大な力が必要とされる)、そして、弱い重力波を検知するのは困難性を伴うことである」

(拙訳付しての引用部はここまでとする)

以上の引用部にみとめられるように、

“ they are extremely difficult to generate (a large power required to generate very weak GWs) and it is extremely difficult to detect weak GWs.” 「重力波を通信の媒質(メディウム)として用いる際には障害物に吸収されずに貫通していくとのメリットがある一方で弱い重力波を検知するのは困難性を伴うことである」

との言われようがなされている。

ここでひとつに問題視したいのは

[重力波の検知困難性(現行技術での傍受不可能性)]

であるとして話を続ける。

その点、[重力波]というものについては

[それ(重力波)を電磁場に変換するやりよう・機序]

までが科学者申しようとして提唱されているとのことまでもがある。

すなわち、——(まさにそれこそが[語られ聞かれるところといえ、愚に付かぬ人間らの戯言ばかり、あべこべのことばかりのこのどうしようもない世界]にて[宗教的な向きらが崇め奉る偽りの神]が造り出され、またもってして、[精神性が希薄で内面まで卑屈に成り下がった相応の「魂の家畜」ら]が産みだされ、[人間が[運命]そのものを自身のものに出来ぬとのそもその機序]に関わっている「可能性」がある(当たり前だが、検証できぬこと、それゆえ、「可能性論」としてしか論じられない)とまで「手前個人としては」睨んでいるとのものなのだが)—— 直近既述のように(多世界解釈における)他世界を浸潤するとされる[重力波]というものについてはそれが検知困難であるなかでそれをして

[電磁場に変換するやりよう・機序]

が我々人間レベルの観点でも発想・考案・提唱されていもする ——それが人類文明に許された領分かは別として発想・考案・提唱されている—— とのことさえもがある(：英文で論文タイトル名としての **Superconductors as quantum transducers and antennas for gravitational and electromagnetic radiation** (『重力波および電磁波に対する量子的変換装置兼アンテナとしての超伝導体』と表題を訳すべき論文)と試みに検索されるとよい。そうして論文配布ページ arXiv 経由で特定できよう論文、カリフォルニア大にて研究をなしている権威筋の物理学者 Raymond Y. Chiao という中国系らしいアメリカ人物理学者による 2002 年の論文にあってはその冒頭部より “ Superconductors will be considered as macroscopic quantum gravitational antennas and transducers, which can directly convert upon reflection a beam of quadrupolar electromagnetic radiation into gravitational radiation, and vice versa, and thus serve as practical laboratory sources and receivers of microwave and other radio-frequency gravitational waves. ” (大要として)「超伝導体は巨視的な[量子重力アンテナ兼変換装置]、電磁放射としての光を重力放射としてのそれに直接変換可能、また、その逆も可能との[量子重力アンテナ兼変換装置]になるとも考えられ、そして、それは実用的な研究所資源にしてマイクロ波および異なる周波数帯の重力波のレーザーとして用いられるものとなりうる」と記されており、[重力波と電磁波を変換する]ことも可能であるとの心証を覚えさせる理論が呈示されもしている)。

といったことがある、重力波を電磁波に変換するやりようまで相当程度事細やかに論じられるに至っているのにも関わらず、我々人類は現段階では[重力波]を検知する実験にすら悉(ことごとく)現行は失敗している(少なくとも本稿本段執筆時現段階の 2014 年現時点では悉く失敗している)。

重力波検知のために LIGO といったプロジェクトを実施してきたものの、我々人類は ——本稿本段執筆現時点にあっては—— 重力波を検知できていないのである(以下に引用なすようなことが現実によく知られている)。

(直下、英文 Wikipedia[LIGO]項目についての現行記載内容よりの引用をなすとして)

Observations at LIGO began in 2002 and ended in 2010; no unambiguous detections of gravitational waves have been reported. The original detectors were disassembled and are currently being replaced by improved versions known as "Advanced LIGO", scheduled to be operational by 2014.

(大要)「**LIGO**にての観測は2002年にはじまり2012年に終わった。曖昧な余地なき重力波の検知がなされたとの報告はなかった。元あった検出器は解体され、現行、2014年に運転開始予定のアドヴァンスト **LIGO** として知られる改良バージョンに取って代える作業が進行中である」

(引用部はここまでとする)

以上のように重力波の検出の試みは「現行は」何ら成果を出していないのである(但し、LIGOプロジェクトへの力の入れように鑑みるに、近々、検知がなされる可能性はある)。

(門外漢ながら多数の資料を時間の許す限り読み漁ってきた筆者などは『それ以上の発展は「端から予定されていない」可能性がある』と考えるに至ってもいるのだが、[重力波]についてはその存在自体が検知され難いとの特質を有望視されて[盗聴]困難性から「通信用途に重力波を、」との発想もあって米軍などで検討されてきたとの沿革がある(といったことがあるからこそ[上にて引用の重力波通信の可能性を模索しているとの元米軍関係者の手になる論稿]がそうしたものであると明示されてものされているとのことがある)。

ちなみに、重力波が検出されていないことについて1988年にものされた著作、異色の物理学者にして米軍コンサルタントとしての顔を持っていたとのロバート・ラル・フォワード (Robert Lull Forward / 同人物ロバート・フォワードについては和文ウィキペディア[ロバート・L・フォワード]項目にあって現行、(以下、掻い摘まんでの引用をなすとして) “ロバート・ラル・フォワード (Robert Lull Forward, 1932年8月15日 - 2002年9月21日)は、米国のSF作家、物理学者。重力工学を専攻。…(中略)…その後ヒューズ航空研究所に勤務し、「フォワード質量探知機」と呼ばれる航空機搭載用異常重力探知機などを発明し、18件の特許を取得した。1987年には、創作活動と、NASA やアメリカ空軍といったクライアントへのコンサルタント業務に集中するために早期退職した。…(中略)…その後ヒューズ航空研究所に勤務し、「フォワード質量探知機」と呼ばれる航空機搭載用異常重力探知機などを発明し、18件の特許を取得した。1987年には、創作活動と、NASA やアメリカ空軍といったクライアントへのコンサルタント業務に集中するために早期退職した”(引用部はここまでとする)との記載がなされているとの科学者となりもし、同人物が開発したとの重力(波)検出器、フォワード探査機 (Forward Mass Detector) には握りこぶし大の重力の歪みならば特定できるとされる、それが月面の重力分布の探査に用立てられてきたとされるの経緯がある)、同ロバート・フォワードが執筆者になっているとの

Future Magic HOW TODAY'S SCIENCE FICTION WILL BECOME

TOMORROW'S REALITY (邦題)『SFはどこまで実現するか 重力通信からブラックホール工学まで』(講談社ブルーバックス)

にあっての筆者が検討なした邦訳版では

(その28ページより引用なすところとして)

“重力放射検出器をつくる研究はもう何十年も続いているが、電磁放射の検出器

細かき内容については銘々各自報道動向(の記録)で確認いただきたい次第ではあるが、「一三光年先の遙か外宇宙にてのブラックホールの衝突挙動の残滓と考えられるもの」としての「重力波」検知が遂になされたカリフォルニア工科大およびマサチューセッツ工科大の科学者グループによって発表されたことが耳目をさらうに至った。 — ※重力波の検知 —

【後日にての追記】として:そちら(新発の)発表結果が「誤検知かもしれない」と覆る可能性も絶無ではないかもしれないと見るところながらも、ここに記述していることが部分的に時代遅れとなった。すなわち、極々微々たる証跡ながらも重力波(とされるもの)がLIGO(既述)にて検出されるとの発表が二〇一六年二月十一日にてなされるに至った。

に比べるとまだひどく未完成である。例えばパー・アンテナの損失も大きい。重力波がアンテナを通過して、エネルギーをアンテナに与えると、そのエネルギーはアンテナの振動として現れる。棒の金属の損失は非常に小さいので、棒の振動は何分も続いてから熱に変わる。金属の損失がまったくなく、損失機構が振動による重力波の放射だけだったら、検出器の性能はもっと高いはずだ。ラジオやテレビのアンテナはそうなっているのだが、**重力検出器はこのゴールにまだ一〇の三十乗倍ほど足りない。要するに現在のパー・アンテナで重力波を検出しようとするのは、カーボンの棒さをテレビの受信アンテナにして彼方のテレビ局を受信するようなものだ”**

(引用部はここまでとする)
との記述がなされてもいるところとなる)

検出が初めて人類にてなされた事例として耳目を集めているイベントともなる(ゆえに「重力波がなんら検知されていない」と書き記していた本稿ここでの内容も一部時代遅れとなった)。が、ただもって、2014年の本稿本文記述時点といずれにせよ事情変転を見て「いない」とし、【重力波がまったくもって検知されないようになっている】との現状に変化変転はない。遙か外宇宙のブラックホール衝突イベント(とされているもの)の残滓たる極々僅かな重力波(とされるもの)が検出されたうえで[人類の進歩]として報道されていることそれ自体もその傍証事例となろうと考えられるところではある——。

ここまでをもってして

[[重力波]は[異なる膜世界](ここまでその内容を問題視してきた洋書『パラレルワールド — 11次元の宇宙から超空間へ』に基づけば、[異世界]ともある種、なるもの)を突貫する性質を具備しているとされている]
[[重力波]は現行(本稿執筆時現在)、未だもって人類の技術では検知すらできないものであるとされている]

とのことについての目につくところの典拠を挙げておいた。

(出典(Source)紹介の部 87(2)はここまでとする)

ここで唐突ながら、確信犯的に「さらにもってしての」サイエンス・フィクションがかったの話をなすこととする(：具体的立証をただひたすらに重んじてのものと明示して、そのようなものとして書き綴ってきた(確認されたい)との本稿、並々ならぬ労苦を割いてもものしているとの長大な本稿にあって敢えても瑕疵(かし)たりうるところとしての「行き過ぎたもの」としてのそうした話をなすこととしたのは——(「長くもなつての半ばもの余事記載の部に入る」と事前に断って書き連ねてきた本段にての[本筋から離れて行き過ぎた話をなしやすい]との論理展開上の構築環境に甘えようといったことでは無論なく—— そうもしたことを指摘することだに、「極めて重要なことであろう」との認識が筆者意中にあるからである)。

その点、次のような[仮定]がなせそうであると述べたらばどうか。

「仮にもし(多世界解釈における)他世界を浸潤する[重力波]を(ブラックホール制御技術などと合わせて)意のままに出来る(そして、そうしたコントロールされての重力波を先述したところの人間レベルでも可能と主唱されての[重力波を電磁波に変換するとの方式]などで特定の座標に現出させることも出来る)テクノロジーを有した「他」世界の先進文明が存在していれば、どうか。

また、それでもってして人間社会にも[ブレイン・マシン・インターフェース開発史]とのかたちで表出してきた「電気刺激で生物の脳機能をかなり正確にコントロールすることに奏功しての実験結果」よろしく生物の脳機能やホルモンバランス——要するに、世界の見え方・世界の感じ方——を自儘(じまま)に操ることがなされえるのだとすればどうか」(※)

(※以上のような[仮定]をなしていることについては

「あまり門外漢として無責任なことを言えないところなのだが、しかし、ここでは敢えても例外のひとつとしての行き過ぎた話をなしている」

「本稿の本義は —— 筆者のやろうとしていることの前に色を付けようとするなどして石を置かんとするような者達、あるいはそういう力学の彙籠中の者らはそうはとらえないだろうが—— ここでの話が例外的にそうもなっているような[FRINGE・サイエンス]([反復検証された実験結果]に裏打ちされていないにもかかわらず[科学]の外表がときに相応の向きによって被せられることもある[境界科学])の問題にまつわる話をなすことにはなく、[それで何かを変ええないというのなら、絶対に何かを変えうることはないだろうとの式で[堅い具体的証拠の山(文献的事実そのものの集積)]および[誰でもそれが導き出せようとの堅い因果関係ら]の摘示より重要な問題の存在を白日の下にさらす]とのことにある」

との観点がこの身、筆者にあること、強くも断っておく)

以上の[仮定]、端的なかたちで繰り返せば、

[(多世界解釈における) 他世界を浸潤する機序(それは重力波のようなもの「かもしれない」) が用いられて生物が「機械的に」操られうる]

との側面、そこに関わるところとしての、

[現実の人間世界で部分的に発見・発明・応用されてきた脳と機械との結節技術(ブレイン・マシン・インターフェース)]

についてこれ以降、[多世界を浸潤するもの]との兼ね合いで筆を割きたいと思う(：本筋に関わる(と申し述べられるだけの解説未了の事情があってもちだした)[ノルウェイ・スパイラル]との兼ね合いで「それなりの理由あって」ここ「脇に逸れての話」の中で問題視しているとの「重力波」にまつわる大枠としての言い分がある中でそれにネスト、入れ子構造として重畳的に含めるようなかたちで「脳と機械との結節技術」にまつわる話を —— そこからして長くもなってしまうのだが—— これ以降なしたいと思う)。

[[ブレイン・マシン・インターフェースの応用可能性] および [ありうべき媒質] にまつわる話として]

まずもって書くが、本稿を公開することにしたサイトの一にて公開している自著にでも述べているように人間の、いや、[生物の脳]とは一般論として電氣的に作用しているとのことがある。

そも、[電気]とは何か、から考える必要があるともとらえるのだが、それについては割愛しつつ話を単純化させて述べれば、世間一般の理解に基づいての[電気信号]によって脳は筋肉をコントロールし(身体を動かす)、聴覚・視覚より得られた外界情報を電気信号として情報処理しているとのことが幅広くも知られている(：いいだろうか。ここでの行き過ぎた話を扱っているとの段に留まらず責任をもって書き進めているとの本稿全体に当てはまるどころとして、筆者は自身のきちんとした論拠なきところで主観を先行させての物言いをなさんとしているのではない)。

人間の脳が電氣的に身体をコントロール、また、外界情報を電氣的に情報処理している

【重力波】関連トピックのことを中心にしての一連の段 (p.692 から本書 p.766 までの紙幅を割いての段) に重畳的に内包させてのここブレイン・マシン・インターフェース(というものを)を取り扱っての部には本書 p.706 から p.733 を割く。

とのことについては ——容易に確認できるとの基本的なところであるためそれで十分ととらえるからそうするのだが—— 和文ウィキペディア[神経細胞(ニューロン)]項目やそれと付随する脳機能にまつわる現行にての記載内容より一文を引くこととする。

(直下、和文ウィキペディア[神経細胞(ニューロン)]項目より原文引用なすところとして)

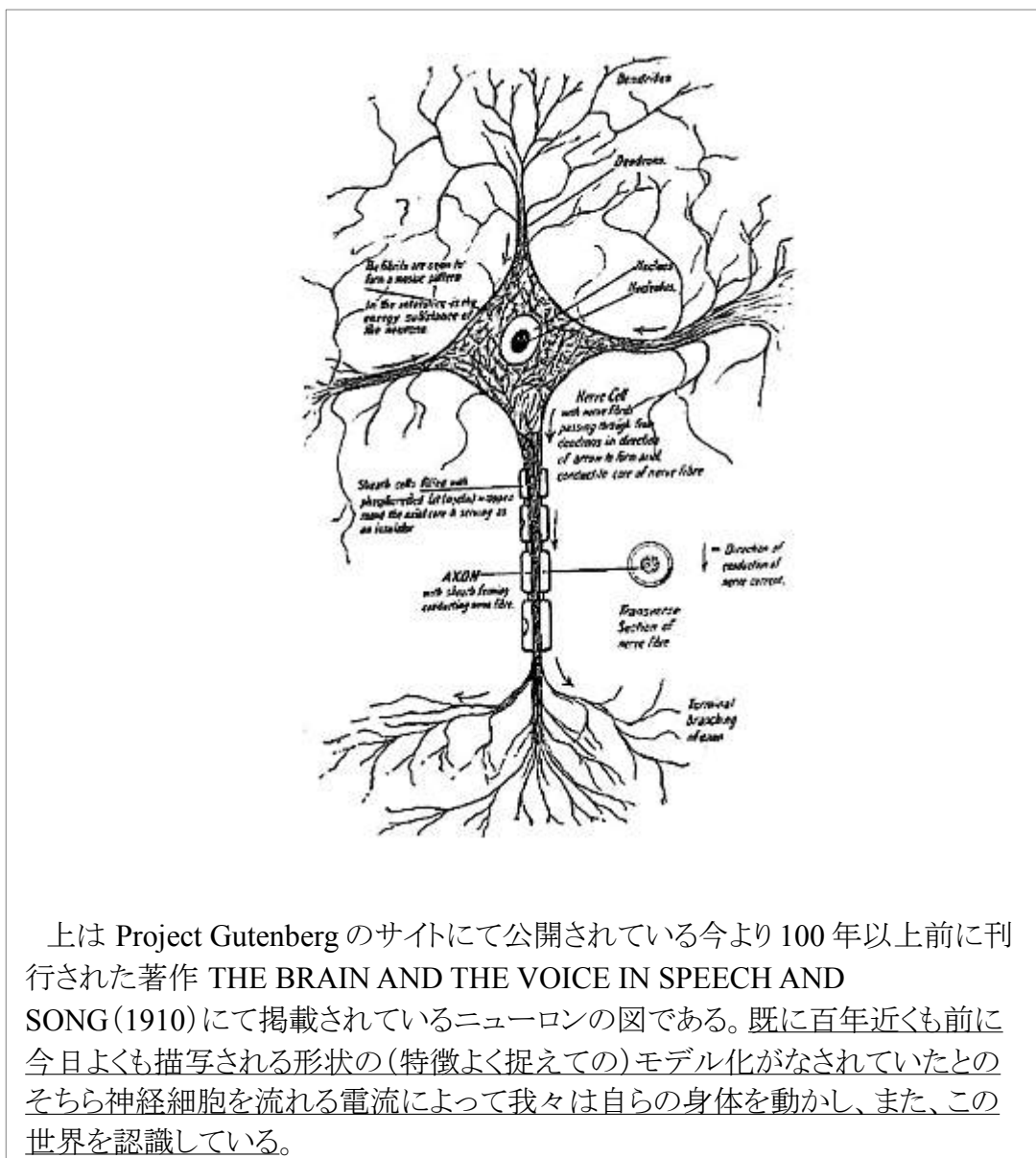
神経細胞の基本的な機能は、神経細胞へ入力刺激が入ってきた場合に、活動電位を発生させ、他の細胞に情報を伝達することである。ひとつの神経細胞に複数の細胞から入力したり、活動電位がおきる閾値を変化させたりすることにより、情報の修飾が行われる。

(引用部はここまでとしておく)

(直下、和文ウィキペディア[脳波]項目より原文引用なすところとして)

脳波とは、ヒト・動物の脳から生じる電気活動を、頭皮上、蝶形骨底、鼓膜、脳表、脳深部などに置いた電極で記録したものであるとのものである。…(中略)…個々の神経細胞の発火を観察する単一細胞電極とは異なり、電極近傍あるいは遠隔部の神経細胞集団の電気活動の総和を観察する(少数の例外を除く)。近縁のものに、神経細胞の電気活動に伴って生じる磁場を観察する脳磁図(のうじず、Magnetoencephalogram:MEG)がある。

(引用部はここまでとする)



上は Project Gutenberg のサイトにて公開されている今より 100 年以上前に刊行された著作 THE BRAIN AND THE VOICE IN SPEECH AND SONG (1910) にて掲載されているニューロンの図である。既に百年近くも前に今日よくも描写される形状の(特徴よく捉えての)モデル化がなされていたとのそちら神経細胞を流れる電流によって我々は自らの身体を動かし、また、この世界を認識している。

直上にて引用のようなどころからさらに進んで、

「人間の脳が電氣的刺激によって情報を処理しているとのことは同様の電氣的刺激によって[そこにはないもの]を見、[そこにはないもの]を聞かされる可能性がある、そして、望まぬ諸種の運動をもたらされかねないのが人間の脳であるとの物言いにも相通ずるところがある」

とのこととなること「も」ある。実際にある。

(:ここでの話柄が

[オンライン上にて「どういう意図でなのか」被害妄想的な言辭を前面に押し出している——俗な言葉で言えば、誰が見ても[毒「電波」]と評されるようなもの、知的にも人格的にも陋劣さが窺えるとの式で「どういう意図でなのか」被害妄想的な言辭を前面に押し出している——者達のそれと紙一重のもの]

となつていているとのことは重々承知のうえであるが、

「(上のようなことが)実際にあると述べられるようになってい

と申し述べ、これより、その論拠(ソース)となるところを

[基本的なところ]

から

[相当程度微に入つての科学文書]

に至るまでの原文引用をなすのかたちで挙げていく——尚、関連するところ、[電氣的刺激によって人間が【幻覚・幻影の類】を押しつけられうる]とのことについては[知能の欠片もないといった話]をそればかりがウェブ上を占有するように撒布している者達が現行、目につくとのことがある(すくなくとも筆者が日本語のウェブをざっと望見した限りはそうもなつてい

との心証を抱いている)。についてネット上にて目につく同じくものことに関わる妄言ありようが「目立って」[特定宗教団体の不品行(密行性・浸潤性・狂信性から悪質性を知る者も少なくなく、横断閥のやりようから少なからずの人間が尊嚴を侵害されてきたとも見える漢字四字の仏教系新興宗教の彼らコロニーなどでの不品行)]と「程度低くも」結びつけられているとのことがあるために、筆者などはその多くをして『宗教の徒輩が如き輩が「自分達を動かす機序に対する分析をその程度の品質のものに矮小化させるべくも」「[作員]」(との俗な言葉で表されるありよう)として馬鹿げた妄言を確信犯的に書き込んでいるのではないか?』と見立ててもいる(『悪質な詐狂者(真つ当な言論を「彼ら」を動かす水準に貶めたいが如く動かされている手合い)ではないのならば[本当に狂つてい人間]が書いているのかもしれないな』と見えるケースも数多あるのだが、妄言のありようが教育水準・知的水準の低い者らにマニュアルでも見させて手習い記述でもさせているのかといった式で[様式化なされすぎている]からそのように見立てている)——)

同じくものこと、「人間の脳が電氣的刺激によって情報を処理しているとのことは同様の電氣的刺激によってそこにはないものを見、そこにはないものを聞かされる可能性がある、そして、望まぬ諸種の運動をもたらされかねないのが人間の脳である」との物言いにも相通ずるところがあるとのことについてまずもって(「せいぜい」「たかだか」と枕詞が付されもしよう媒体であるが)目に付きやすきところの媒体でもあるウィキペディアの[ブレイン・マシン・インターフェース]項目よりの引用をなすことからはじめる。

(直下、和文ウィキペディア[ブレイン・マシン・インターフェース]項目よりの抜粋をなすとして)

ブレイン・マシン・インターフェースとは、脳の神経ネットワークに流れる微弱な電流から出る脳波を計測機器によって感知し、これを解析する事によって人の思念を読み取り、電気信号に変換する事で機器との間で情報伝達を仲介する。情報の流れが一方通行の片方向インターフェースと、相互疎通が可能な双方向インターフェースが想定されているが、現在実現しつつあるのは一方通行の片方向インターフェース技術のみである。

…(中略)…

片方向インターフェースでは一方通行の情報伝達を行い、脳から命令をコンピュータが受ける電気信号に変換するか、コンピュータからの電気信号を脳波に変換する。SF等で想定されている双方向インターフェースでは、脳と外部機器との間で情報を交換・共有するため、人または動物と機械が一体化することになるが、現実には動物実験・人体実験とも移植は成功していない。ここでいう脳とは心や精神ではなく、物質として存在する有機生命の神経系(もしくは神経系のモデル)そのものを指す。実際にBCIをはじめとするマンマシンインターフェースの研究が始まったのは1970年代頃で、実際に人体に外部機器が移植されたのは1990年代中頃になってからである。21世紀に入り、機能としては不十分ながら視覚や聴覚を補助する人工感覚機器や、モーターによって動作する義手・義足といったBMI機器の人間への移植事例が既に存在する

(引用部はここまでとする)

以上はブレイン・マシン・インターフェース(英語では Brain Computer Interface との呼称の方がメジャーであろうとのもの)、すなわち、

[脳波 → (脳波捕捉のうえで機械制御の電氣的作用に変換) → 機械との互換作用 (ここではその逆のプロセスの可能性を問題視しているわけだが)にて機械を制御する機器]

にまつわる解説のされよう、現行、研究が盛んになされているとの種類の機器群についての目立つところの解説のされようである (尚、表記引用部に認められるブレイン・マシン・インターフェース技術については続いて解説するところの科学者ホセ・デルガドの60年代に遡る初期的研究のことも含めて、2011年に刊行、同年に訳書も早川書房より刊行されているとのブレイン・マシン・インターフェース技術の最新動向解説本である **BEYOND BOUNDARIES The New Neuroscience of Connecting Brains with Machines— and How It Will Change Our Lives** (邦題)『越境する脳 ブレイン・マシン・インターフェースの最前線』に詳しい —無論、筆者もつい最近、2011年に刊行されたとのその訳書を深くも検証しているとのことがある人間である—)

話の方向性を慮(おもんばか)ってのうえのこととして、ここでの筆者の筆の運びぶりについて

『馬鹿げている』

と当然に思われる向きもあるかもしれない(『この者は人間がたかが電気刺激によってラジコン化させられうるとでも述べたいのか. 狂ったカルト宗教(の頭の具合のよろしくはない作業員)のような物言いだな』などとの観点で「馬鹿げている」と思われるかもしれない)。

だが、脳が電氣的作用の影響を受け、また、電氣的作用を活用しながら情報を処理し身体をコントロールするとの機序 —ニューロンの活動電位によって身体の動きが決まるとの機序でもいい— を利用しているとの式でホセ・デルガドといった科学者は牛なぞの比較的高等な動物の脳に電極を差し込んでそれらデバイス埋め込みをなされた動物を [自儘(じま)に動かす]

との[マインド・コントロール]というよりも「フィジカル・コントロール」(物質的コントロール)

に近いやりようがすでに「60年代に」実演してみせられていたとのが現実にある。

それについて直下続けての段で漸次細かくも解説していくが、英文 Wikipedia[Jose Manuel Rodriguez Delgado]項目に

“ In 1963, New York Times featured his experiments on their front page. Delgado had implanted a stimoeiver in the caudate nucleus of a fighting bull. He could stop the animal mid-way that would come running towards a waving red flag. ”

「1963年、ニューヨークタイムズ紙はデルガドの実験を第一面にて取り上げた。デルガドはスティモシーバーを闘牛の神経核の末尾に埋め込んでいた。デルガドはそちら闘牛が振られている赤い旗に突進している折に同闘牛をストップさせてみせた」

と端的に掲載されているとおりのことが科学史の一断面として具現化を見ているとのがある（それ絡みの画像——闘牛士デルガドなどと評されてのデルガドがコントローラーを持って闘牛を操る様——も Jose Delgado の名で検索すれば、すぐに目に入ってくるようになってる）。

先に基本的内容のウィキペディアの解説のされようを引いた、

[ブレイン・マシン・インターフェース]（[脳]の神経ネットワークに流れる微弱な電流から出る脳波を計測機器によって感知し、これを解析する事によって人の思念を読み取り、電気信号に変換する事で機器との間で情報伝達を仲介する機器]とまとめられもしている機器)

の原始的かつ本質的なレベルでの実施例とも直近引用なしたホセ・デルガドという科学者のやりよう、牛をラジコン操作した男のやりようは関わるどころとなっている、すなわち、脳とワンセットにしてその機能拡張あるいは機能補助を行うとの機器類の話が上の英文ウィキペディアにてなされているわけだが、同デルガドが何をなしていたのかについてより微に入っての解説がなされている書籍よりの引用をなす。

早川書房より訳書が出されているブレイン・マシン・インターフェース技術解説書籍たる、

BEYOND BOUNDARIES The New Neuroscience of Connecting Brains with Machines— and How It Will Change Our Lives (邦題)『越境する脳 ブレイン・マシン・インターフェースの最前線』

にての訳書 294 頁にあっては次のような表記がなされている。

(以下、BEYOND BOUNDARIES The New Neuroscience of Connecting Brains with Machines— and How It Will Change Our Lives (邦題)『越境する脳 ブレイン・マシン・インターフェースの最前線』(二九四頁)よりの引用をなすとして)

デルガドはエール大学の研究室で、自由に行動する動物やヒトを対象にした永続的脳埋込装置(インプラント)の時代をほぼ独力で切り拓いた人物である。一九六九年の実験でデルガドは、史上初の双方向 BMBI の自動稼働をやった。実験にはパディーという名のメスのアカゲザルと、自身の発明による、自由に行動する被験体の脳と機械間で電気信号を無線通信する「スティモシーバー」なる小型装置を使った。

この装置は小型だったために同時に複数埋め込むことが可能で、別個の脳領域を同時に刺激し記録できた。デルガドは実験には恒久的脳波記録電極を用い、情動にかかわると考えられており、アーモンドほどの大きさをもつ扁桃体と呼ばれる深部脳構造内のニューロンの電氣的活動をサンプルした。スティモシーバーは

扁桃体の生の脳信号を、デルガドの研究室に隣接した部屋に設置されたアナログコンピューターに送った

(引用部はここまでとする —※—)

(※尚、筆者が検証した BEYOND BOUNDARIES The New Neuroscience of Connecting Brains with Machines— and How It Will Change Our Lives の訳書 (早川書房刊行のもの)の方では実験個体が[アカゲザル]のパディーと表記されているが、オンライン上に流通しているデルガドのそれ絡みの実験結果報告英文論稿(後に本稿でも部分引用なす文書)の方では[(アカゲザルではなく)チンパンジーの Paddy]と記載されていること、一応、断っておく)

振り返る。ここまででは、(同じくものことについては同分野にて嚆矢となる研究を実施したエール大医学者の流通研究文書よりの引用もこれよりなす所存だが)、差しあたり、

[人間の脳は電氣的に作用している —電気信号に基づいて肉体をコントロールし外界情報を処理している—](ミクロのニューロンにまつわる解説のされよう、また、マクロの脳波・脳磁図にまつわる世間一般での解説のされようも先に引いている)

[電氣的に作用している人間の脳の特性を機械的に拡張・応用しようという機器がブレイン・マシン・インターフェースとなり、によって、一部だが、ヒトの視覚や聴覚の補助が可能となっている](正確にはマシン・ブレイン・インターフェースとでも表すべきかとは思うのだが、その初期の実用例としてホセ・デルガドという科学者の動物の脳に対するモニタリングや脳操作の結果による身体挙動操作のことが挙げられることもある)

とのことが申し述べられるとのことにまつわる基本的なる出典よりの引用をなした。

以上、振り返ったうえで述べるが、

[常識よりの逸脱性が際立ってもの話]

をまずもって「そうしたものである」(常識より際立って逸脱している)と事前に明示したうえで、以下、 — 誤解を恐れずに — なすこととしたい。

さて、「仮に」付きで述べるどころとして以下のような問題提起をなしたいと思う。

ブレイン・マシン・インターフェースと今日呼ばれているような機器(人間の脳・脳作用動態に機械の方から能動的に作用を及ぼすことがあるのだとすれば、それはマシン・ブレイン・インターフェースとでも表すべきかもしれないが)と同様の作用を

[人間 ⇒ (操作) ⇒ 機械]

との方向性ではなく、

[機械 ⇒ (作用機序の改変) ⇒ 人間]

とのかたちで非侵襲式、すなわち、[生体組織にメスを一切入れないとかたちで]手繰(たぐ)れるとの先進文明が「別」宇宙「別」世界に存在していると仮定してみればどうか — 既に引用をなしたところを繰り返すところとして科学読み本 Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos (邦題)『パラレルワールド — 11次元の宇宙から超空間へ』にあつて “ As I mentioned earlier, our universe may be a membrane

with a parallel universe just a millimeter from ours, floating in hyperspace. If so, then the Large Hadron Collider may detect it within the next several years. By the time we advance to a type I civilization, we might even have the technology to explore the nature of this neighboring universe. So the concept of making contact with a parallel universe may not be such a farfetched idea. ” (拙訳)

「先に言及したように我々の宇宙は我々の側からミリメートル単位で離れたにすぎぬとの並行宇宙を持った、超空間の上に漂うメンブレン(膜状のもの)のものでありうる。もしそうであれば、ラージ・ハドロン・コライダーがきたる数年の間にて他世界を検知しうる。その折までに我々がタイプ I 分類の文明(訳注:ニコライ・カルダシェフという物理学者が提唱した文明分類体系にあって惑星の全リソースを利用可能との文明)に発展を見ているのであるならば、我々はこの近傍の宇宙の性質を探索するためのテクノロジーをも手中に収めている可能性がある。となれば、並行宇宙とコンタクトをとることもこじつけがましきアイデアとはならないだろう」(再度の引用部はここまでとする)とのかたちで提唱される「別の」膜世界といったものが存在していると仮定してみればどうか――。

よりもって具体的なところを想起して、そう、人間の世界での[原始的なもの]ながらも商業製品(非侵襲式のヘッドセット装置で[脳波]、すなわち、脳の「電氣的」活動を測定したものをを用いて機械を操る技術)をオーストリアのエモティブ・システムズ社が開発していることが知られるようなもの(詳しくはエモティブ・システムズにまつわる資料を色々とお調べいただきたい)を「反対方向から」極めて精妙にしたようなものをを用いている(用いてきた)との「他」世界先進文明の介入を想定すれば、どうか。

その点もってして、筆者は[リアリスト]として科学者らが仮説として呈示することから一歩先に進んで問題提起した上にて表記のこたらが最悪の可能性を伴って真を穿っている、それが神秘主義者・宗教的人種が臆面もなく馬鹿げた話柄で口にする、

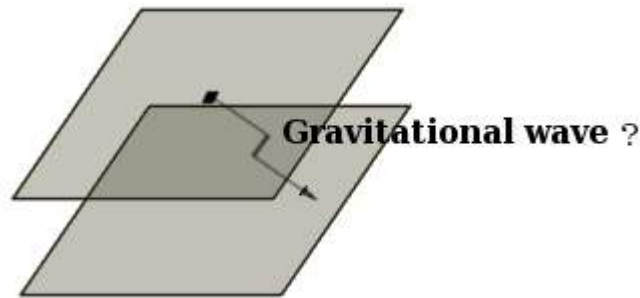
[神の声] [神の指示]

といったものの[正体]であっても[なんらおかしくはない]と考えている(：そも、宗教の徒輩が個別ばらばらに「自分に語りかけてくる」との内面の声として聞くことがあるようであるとの[神の声][教祖の声]――たとえば、(和文ウィキペディア[クエーカー]にての現行記載内容よりの引用をなすとして)“友会は良く「神は全ての人に現れる」、「内なる光」、「内なるキリスト」、「内なるキリストの聖霊」などの多くの言葉で言い表してきた。友会は皆が「神の具現」を拒んでいると信じているから、クエーカーの道の多くは、内なる指導が語ることを聞くことに重点が置かれている。アイザック・ペニントンは1670年に記している。「キリストの声を聞き、書いたものを読んでも十分ではないが、私の根本、生活、起源をキリストに感じるには、十分である”(引用部はここまでとする)などと説明されるもの――の類が宗教の徒の妄覚・妄言に留まらないものとして[実体]として存在しているのであると仮定すれば、そうしたものに他にどうした説明が([集団精神病理]以外の点として)つけられるというのか聞きたいぐらいであると考えている)。

であれば、たとえば、検知不能性を伴う[重力波]のようなものが[神]のフリなどしつつも騙されやすい人間らを操っている、あるいは、強者に媚びることを第一義とする陋劣な人間ら(あるいは元来そうではなかったところを陋劣にしつらえられたとの人間ら)に対して[勘違いのうえなどでの盲従の契機]を与えてきた、相応の特性を帯びた操作をなす[存在](ないしその操作をなす[存在]が用いている[極めて計算能力が高いとの人工頭脳])が利用しているとの傀儡(くぐつ)となっていてもおかしくはない、それこそが

[人間存在に縦軸の歴史、横軸の社会を造り出させてきたうえでの重要な背面力学]となっていないのではないか、と本稿筆者は睨んでいるのである(：多くの人間が馬鹿げて

いると思うところか、とも思うのだが、続けての段をご一読いただきたいものである ——それが(間接証拠・傍証事例もあって)実際に馬鹿げていないとのことがあった場合、どういう現実的懸念がそこに観念されるのかとの視点にて続けての段をご一読いただきたいものである ——)。



本稿のために(促成のものなれども)作成した複数階層を貫通するとの重力波のイメージ。

直近にての**出典(Source)紹介の部 87(2)**で取り上げたように「重力波は(その多世界への浸潤性にも関わるところとして)非常に弱い力である。であるから、(本稿執筆時 2014 年現行現時点にては)検出されない」との物言いもなされるとのものである(:ちなみに重力波の検出が困難を極めることについては SF 作家にアイデアを提供していたことでも知られる物理学者(にして米軍のコンサルタント)ロバート・ラル・フォワードがその著書 **Future Magic HOW TODAY'S SCIENCE FICTION WILL BECOME TOMORROW'S REALITY** (邦題)『SF はどこまで実現するか 重力通信からブラックホール工学まで』(講談社ブルーバックス)にて(以下引用なすとして)“重力放射検出器をつくる研究はもう何十年も続いているが、電磁放射の検出器に比べるとまだひどく未完成である。例えばパー・アンテナの損失も大きい。重力波がアンテナを通過して、エネルギーをアンテナに与えると、そのエネルギーはアンテナの振動として現れる。棒の金属の損失は非常に小さいので、棒の振動は何分も続いてから熱に変わる。金属の損失がまったくなく、損失機構が振動による重力波の放射だけだったら、検出器の性能はもっと高いはずだ。ラジオやテレビのアンテナはそうなっているのだが、重力検出器はこのゴールにまだ一〇の三十乗倍ほど足りない。要するに現在のパー・アンテナで重力波を検出しようとするのは、カーボンの棒きれをテレビの受信アンテナにして彼方のテレビ局を受信するようなものだ”(引用部はここまでとする)との表記がなされているというのは先述のことである)。

そうしたもの、我々人類にはいまだもって検出もままならないとの重力波が

[人間を[機械](超高度な人工知能でもいい)に結節させての[ロボット]とするために用いられている]

などと述べれば、

「馬鹿げている。正気の沙汰の物言いではない」

と[相応の類]からは即時に野次を浴びせられることになるかとも思う。

しかし、現実問題の話として[重力波でロケットを動かす]とのアイデアまでもが専門

家らから出されているといった経緯もまたある。

その点、これぞ[権威に訴える論証] (ad verecundiam / 「偉い学者がかくかくしかじかと (実験結果もないところで) 述べたからそうだととれる」方式での 詭弁術の一典型) とのかたちで不適切、科学的に問題があると指摘されうるとの不適切なる引用をなしているといったところとなりうるかもしれないと断つてなしたい話なのだが、コーネル大の運用する論稿配布サーバー、arXiv のサイトより誰でもダウンロードできるところのものとして

[**The gravitational wave rocket** との題名が付された論稿] (そのものずばりで 『重力波ロケット』 との題名の論稿 / 執筆者はロンドン大学クィーン・メアリー・カレッジ所属の **W.B.Bonnor** との向きと **M.S.Piper** との向きとなるとの論稿)

が公開されており、同論稿ではその冒頭部、Abstract (梗概) の部より引用するところとして、

“ Einstein’s equations admit solutions corresponding to photon rockets. In these a massive particle recoils because of the anisotropic emission of photons. In this paper we ask whether rocket motion can be powered only by the emission of gravitational waves. We use the double series approximation method and show that this is possible. ” 「アインシュタインの方程式は光子推進ロケットと合致する解を認容するとのものである。これらにあっては大量の粒子が光子らの異方性の放射に因るところとして跳ね返りを呈する。この論文では我々はロケット運動挙動が重力波放射から「のみ」によっての可能かどうか問うとのことをなす。我々はダブル・シリーズ近似方式を使用、これが可能であると示すものである」

との表記がなされているようなことがある (: 尚、[重力波でロケットを飛ばす] にしてもそれは推力として極めて弱いものであるとの物言いもそれ専門の研究をなしている向きらになされている。オンライン上にてその **PDF** 版論稿が誰でも閲覧できるところとして公開されているところの **Military Applications of High-Frequency Gravitational Waves** 『高周波重力波の軍事的応用』 —— 本稿にてのここでの話を包摂する **出典 (Source) 紹介の部 87(2)** でも先に引用したところの論稿 **The Utilization of High-Frequency Gravitational Waves for Global Communications** をものした元・米国空軍教官で現・米軍コンサルタントとの **Robert M. L. Baker, Jr** という人物との向きに作成されているとの論稿 —— にあっては “ **Bonnor and Piper (1997)** performed a rigorous analysis for their study of gravitational wave rockets. They obtained the gravitational wave rocket equations of motion directly by solving the Einstein general relativistic field equation in a vacuum using the spacetime metric of a photon rocket as a model. [. . .] But such rockets also have extremely low thrust, and so would be more applicable for interstellar missions rather than interplanetary missions within our solar system. ” (訳として) 「**Bonnor** および **Piper** らの 1997 年論稿 (註: 直上にてその内容を引いている **The gravitational wave rocket** と題されての論稿のこと) は重力波推進式ロケットの研究にあっての厳密なる分析がなされている。彼らは 光子型ロケットの時空にまつわる測量基準をモデルとして用いながら真空にあってのアインシュタインの相対性理論と親和性が高いとの場の方程式を解くことで直に重力波推進ロケットの振舞いの数式を得た。… (中略) …しかし、そのようなロケットらの推進力は凄まじく弱いとのものであり、(超長期運用を念頭に) 我々の太陽系内でのミッションで、というよりも、恒星間のミッションらでより応用されうるとのものである」 (引用部はここまでとする) との表記がなされているところである)。

さて、表記のようなこと、[重力波] というもの、[弱すぎて人類には検知もままならない] (先程、そちらを引いたりサ・ランドールのような科学者に由来する別のいいようでは空間にできたさざ波のようなものであるため、「性質上」、検知できない) とのそれを [ロケット推力] に使うとの発想があると紹介したうえで、である。

恒星間運用ロケットの「推力」としての役割すらも期されている重力波を自在に手繰れるとの程度の文明が

[こちら側ではない世界]

に「先進文明」として存在していればどうか（: そうした「こちら側ではない世界の先進文明」が人工知能の類を用いて非人道的ブレイン・マシン・インターフェースを我々人類に相応の結末をもたらすべくものオペレーションを長期的展望に立って実行しているとの話は、にまつわっての指示材料が何らない、存在していないのであれば、その可能性について云々する意味もないわけだが、残念ながら合理主義者をもって任じている（つもりである）筆者のような人間でさえ長大な本稿を訴求そのための膨大な時間を割いて作成することにしただけの事由があること、ただ追い詰められて殺されるだけの屠所の羊ではない、ありたくはないとの向きには理解いただきたいものである）。

そう、たとえば、重力の怪物、ブラックホールの類すらも「縮退炉」（同「縮退炉」についてはブラックホール生成実験たりうると見られるに至った実験にドイツ加速器研究機関を代表して関わっているとの向きの問題ある言辞の紹介も兼ねて、にまつわっての解説を後になす）といった動力源に用立てて活用できるとの重力波を自由自在に操れる程度の先進文明が「こちら側ではない世界」に存在していればどうか。そして、そうした（技術の）先進文明に人間操作をなすだけのモチベーションがあればどうか。

その点、つい先だって「重力波の検知困難性」との絡みで引き合いに出したとの著作、

Future Magic HOW TODAY'S SCIENCE FICTION WILL BECOME

TOMORROW'S REALITY (邦題)『SF はどこまで実現するか 重力通信からブラックホール工学まで』（講談社ブルーバックス／再述するが、異色の物理学者にして米軍コンサルタントとしての顔を持っていたとのロバート・ラル・フォワード (Robert Lull Foward) が執筆者になっているとの著作)

にあっては

[ブラックホール・テクノロジー Black Hole Technology あるいはそれに代替するテクノロジーを用いての重力波通信の可能性]

として次のような記述がなされているとする。

(以下、訳書『SF はどこまで実現するか 重力通信からブラックホール工学まで』（講談社ブルーバックス）にての 29 ページから 30 ページの内容を原文引用するとして)

重力通信にも同じような魔法の物質が必要だ。光速近くで動かせる質量が高密度に詰まった「質量伝導体」が必要なのだ。残念ながら普通の物質は密度がそう高くない。というのも原子は大部分が空で、質量のほとんどが原子中央の小さく高密度な原子核にあるからである。そして原子の外郭を成す弾性のある電子の雲が原子の運動速度を音速に制限している。ミニ・ブラックホールを発見し、制御することさえできれば、その強力な重力場の小さな源を振動もしくは回転させて、大量の重力放射を発生できるようになるかもしれない。リチャード・メツナーらの指摘によると、帯電したミニ・ブラック・ホールは、電磁波を重力波に変換する方法の一つかもしれない。電磁波はブラック・ホールの電荷と相互作用するし、重力波はブラックホールの質量と強く結びついているので、この電荷と質量相互の結びつきを介して、電磁場を重力場と結びつけられる。メツナーは断面を計算し、予想通りそれがきわめて小さいことを発見した。しかし興味深いことに、電磁波と重力波の波長がミニ・ブラック・ホールのサイズ(これは原子よりもさらに小さい)よりかなり大きい場合、ブラック・ホールの細部には関係がないことがわかった。つまりブラック・ホールであろうがなかろうが関係ないのだ。したがってブラック・ホール以外の

物体、電子や陽子のように電荷だけでなく質量も持つものも、電磁放射を重力放射に相互変換できるのだ。もし多数の電子が全部いっばいに動けば、変換効率は電子の数の二乗に比例する。

(以上、日本国内にて広くも流通している訳書よりの引用部はここまでとする)

上の引用部後半部にあっては

「別段、ブラックホールを用いずとも重力波通信を実現するのに必要な分だけの重力波を生み出せるかもしれない」

との趣旨の記載「も」がなされているわけだが、ここで何故もってして、

[[重力波通信]と[重力波を無尽蔵に生み出しうるブラックホール(ケージに捉えての帯電してのミニ・ブラックホールの類)]にまつわっての科学予測]

の類のことなどを延々細々と引き合いに出しているかと述べれば、——ここまでの流れを振り返って補いながらも言い換えると、電氣的に外界情報を処理している生体の脳に対してこれまた電氣的に外力を及ぼしてそちら脳の機能を拡張するとのブレイン・マシン・インターフェースを「非侵襲的に」(メスを使わない式で)作用させるうえで「先進文明(技術の先進文明)がありうべきところとして用いている[媒質]」の問題、および、その「媒質」と重力波との関係性についての表記を「半ばもの余事記載の中のさらにもってしての脇に逸れての話」であると断りもしてなしている中でそうしたことを延々細々と引き合いに出しているかと述べれば——、重力の怪物、ブラックホールの類すらも**[縮退炉]**といった動力源に用立てて活用できるとの重力波を自由自在に操れる程度の先進文明が「こちら側ではない世界」に存在している、そして、そうした(技術の)先進文明に人間操作をなすだけのモチベーションがあれば、との仮説(の支持材料)に関わるところとして、

「[重力波通信]を主たる作中モチーフとしているとの特定の作品が「ブラックホールに関わるところで重要な(我々全員を殺しうるとの方向に関わるとの意で重要な)予見的言及に通じているとの情報把握を本稿筆者がなしているとのことがある」

からである —それについては無論、(聞く耳を持った人間がいなければまったくもってしての無為なのだろうが)、これよりの段にて訴求することになる— (につき、予言的作品としての性質を本稿にて延々と細々と論じてきたSF作品、The Hole Manにまつわるところの話は後にさらになす)。

以上のような(先にも引き合いに出した[仮定]を繰り返しながらもの)話を耳にすれば、——くどくものおもんばかりとして—— これまた馬鹿げた妄言の徒の言いようと響くことであろうとは「当然に」思う(※)。

※但し付きの「長くもなつての」話として

世阿弥の『風姿花伝』には
「上手は目利かずの心に相叶ふことかたし、下手は目利きの眼に合うことなし」との書かれようがなされているようだが(「適正なところは道に暗きものには価値理解されることもなく、適正なところの欠如は道に通じたものの鑑賞に堪えるものではない」との書かれよう、要するに、適正さを求めても理解するは道に通じた者だけであるとの書かれようがなされているようだが)、殊に「目利かず」の類、物事の実質・本質に通ずるところについて自分で考えないとの性質を伴っているとの向きには『意味が分からない』とされるのがここまでの話か、とは

思う。そう、ここまでの話は物事の理(ことわり)を解する気力すらない、そこに知の力を割くと余力すらないの日常(にあつての「毎朝通勤毎夕帰宅. 日々、これ経済生活」との現状維持にまつわつての凄まじい慣性の力)の隷従者らには[漢字二字ないし漢字二字と平仮名「い」付きの罵倒語が相応しいとの相応の類]由来の下らぬ物言い]

と一味同仁に見られかねないことか、とは思う。

他面、ここまでの話は[目利き]を気取る人間ら、彼らが世阿弥『風姿花伝』なぞに見る[上手]筋と本当に言えるかどうかは別にして(彼らとて役者の演じる芝居の観賞者にすら満たない存在、むしろ舞台上の存在とも形容できるなかで[主体的に演目演じる役者]にすら満たず、[ただただ演じさせられているだけの猿芝居の猿]の如きものかもしれないとのことは別として)、[目利き]を気取る人間ら(具体的には学者ら[専門家]筋の類)には『門外漢が下手な話を云々してからに。』

と軽侮買うような領域に踏み込んでいることか、と自分でも見ている——[目利かず]であろうと[目利き(をスタイルとする筋目の者達)]であろうと[人間「未満」の機械のような存在の薬籠中の存在](演じてさせられているだけの存在)であるのならば[徹底「無視」]という名の[相応の反応]しかなされまい、との領域に通ずるところの話がここでの話であろう「とも」考えているところなのであるのだが、反応がなされた場合のありようを顧慮して述べれば、である——。

だが、仮に無視なされずとも[馬鹿げたもの][正気の領分から飛び出ているもの]と見做されやすいとの領分のことであれ、

[人間のコントロール]

については可能性論云々以前にその具体的顕在化の片鱗が、そう、

[[現象]としての示唆材料]

が歴史的に「あまりにも数多」とのかたちで残っていると申し述べられもするところである(「【他殺体】が数多発見されているなかであとはその【殺され方】が問題になっているにすぎない状況である」としてもいい)。

それについては、そう、人間コントロール顕在化示唆材料が歴史上に数多残っているとのことについてはこの身、筆者が本稿公開に先立ってものしていた著作——大手出版社出入りの相応の人間に愚書・悪書としての色合いを付されそうになったがために当初の商業出版に代替するところとしての無償流布を試みだしたとの著作——からして何を申し述べているのか、同著作にあつてからして「まずはそこから指摘すべきである」との観点より何を申し述べているのかについての話を(但し書きとして付しているこの部にて)なしておくこととする。

その点、(今現時点から見れば、即席でものした著作として、また、楽観的であり未熟でもあつたとの往時の筆者の人間としての限界の問題もあり、「欠陥があまりにも多かつた」と省みるところが大なる著作でもあるのだが)、筆者著作『人類と操作』を通じてこの身、筆者は

[「ローマ帝国の時代」に遡ることとして人間の歴史にはできすぎた、かつ、「機械的」でありすぎるとの「反復要素」「共通要素」が具体的データ(特定ソースに基づく「記録的事実」の問題)として現われている]

との[現象]の[意味合い]について強くも訴求しようとしたとのことがある(ロシアにて100万部超を売り上げたモスクワ大学学究の著作の一つの話柄をまずもってとっかかりとして引き合いに出すとの式で強くもそうしたことを訴求ししているとのことがある)。

拙速に傾きすぎ、巧遅を軽んじすぎたとの側面もあったかと(くどくも)反省の弁を表したき手仕事にあってのことなのだが、といった拙著にても呈示しているデータの問題、人間の歴史の[「機械的」反復要素・共通要素]にまつわるデータの問題が

[どういふ帰結とつながるのか]

と[検証]を通じて考えていただきたいのである。

その点、欧州歴史にて具現化している[歴史的記録に見る[反復]の具現化の問題]についてはそれにまつわることを際立って主唱している欧米学者らも「中世識者階級であった修道士らによって修道院で好き勝手に歴史記録が贗造されてきたから贗造物らしくも歴史がそういうことになっているのであろう」と述べるに留めているところとなるのだが、そして、学者やりようにはどの[史料]を重んじるかで反復・連続性それ自体の話にも異動が多少出てくるとの申しようをなすとの式が色濃くも表れているかとも見えるのだが(自著にても紹介したことである)、異端視されている大学奉職の研究者サイドの反復現象にまつわる史料・資料ら選択に多少問題があろうとなかろうと何れにせよ、[記録的事実]の問題として[帝政期以降前の共和制ローマ]に遡ることとして欧州の歴史は[異常・異様な計数的繰り返しの側面]で満ちているとのことがある(：ローマを巡る話ではデータとして為政者らの統治年数・統治時挙動の一致性が「一定期間のローマ皇帝ら事績と別の期間のローマ皇帝ら事績の間」にて「連続して」具現化しているといったことが確かに一面一部でみとめられるようになっている)。

に対して、(但し書きとして分別、分けてもの話をなしている中でも延々と[脇に逸れての話]をするようでなんなのではあるが)、似たような有名どころの話として日本にも関わるところとして

[【日本の記紀神話】(古事記・日本書紀に認められる一連の物語)と【旧約聖書】の間に際立っての類似性が認められるとのこと]

などもまたもってしてあり、についても、直上言及の自著にて批判的検証をなしながら取り上げているところとなる(：そちら記紀神話と旧約聖書の類似性問題もまた[往古の伝説上の出来事]と[さらにもって先行する伝説上の出来事]の繰り返し類型に入ろうか、とのところのものなのだが、そういうことがあることにつき相応の人間らは「日本人と往古ユダヤ系にはつながりがあったから、たとえば、日本人の祖に彷徨えるユダヤ民族の血が混入しているから記紀神話と旧約聖書の物語に類似性が認められるのであろう」などと片付けたがるとのことがある(相応の人間らの中の殊に愚劣な類は[まったくの出鱈目]をそうした一致性問題の中に組み込みもし、問題が存在していることそれ自体を(諸種理論シンパを装いつつも)[馬鹿げた戯れ言]にすり替えることまでをやるとのこともあるように見ているのだが、といった者達のやりくちのことはここでは脇に置く)。

そうしたことについて相応の者達が好むとの「往古日本人とセム系のユダヤ民族に文化的接合性があった」なぞという文化伝播の可能性論を切り捨てれば(そして、残念なこと[文化伝播]の問題は切り捨てて当然といった「別の」諸種要素が存在しているとのことがあることをも筆者は2009年の拙著(今考えれば問題が多かったと振り返るところのものながらも2009年の拙著)で執拗に指摘している)、残る説明のありよう・なしようは[次のようなところ]へと収斂していかざるをえない(とここでは委細割愛の上ながらも申し述べたい)。

[元来からして見受けられる繰り返しは(冷酷なまでに)[計数的]かつ[機械的]なものである(たとえば、ローマ帝国為政者ら具体的記録と聖書に見る古代ユダヤ王朝為政者の記録にすら類似性があり、またもってして、古代ユダヤ民族指導者ら記録と日本の記紀神話に見る神代の天皇家開

祖事績に記号論的に相通ずるとのことがありもするのならば、機械的なありようが顧慮されるところであろう)。しかも伝承伝播による一致性や歴史改ざんも観念しがたいところでそうもなっている。従って、現実には[機械]ないし[機械的やりようをとる存在]が[人間]に[人形]としての役割を歴年、ずっと与え続けてきた、そう、ローマ皇帝とていかように生き、いかように死ぬのか、そういった生き死に込みにしての[機械的一致性・規則性を伴っての繰り返し挙動]を演じさせられ続けてきた... (馬鹿げた歴史的記録(なるもの)を史家などと呼称される筋目の者達に構築させながらも、である)。それが[人間の世界・人間の歴史の真なる実体]であると解される」 (:ローマの初代皇帝アウグストゥス Augustus、ユリウス朝を継ぐべくもの彼の子孫が悉(ことごと)くうち続く帝国内の内訌のなか、非業のうちに殺されていったと伝わるそのアウグストゥスは【西洋史の根底をなす権力機構「確立」者(ローマ帝国初代皇帝)としての最期の日】にあって「私は舞台上の役を演じ通したと思えぬかな。もし、芝居が及第点とのことでお気に召したならば【役者】冥利につきる、そういう按配の拍手喝采をばいいただきたいものだ」などと(今際の際にて)知人に向かって述べもしていたなどともローマ期文物由来のこととして伝わっているが(具体的には Project Gutenberg にてダウンロード・確認可能であるとのローマ期の文人、スエトニウスの著作 The Lives of the Twelve Caesars 『皇帝伝』に記されている Augustus のその末期(まつご)の申しようとして “ Upon the day of his death, he now and then enquired, if there was any disturbance in the town on his account; and calling for a mirror, he ordered his hair to be combed, and his shrunk cheeks to be adjusted. Then asking his friends who were admitted into the room, "Do ye think that I have acted my part on the stage of life well?" he immediately subjoined, "Ei de pan echei kalos, to paignio Dote kroton, kai pantas umeis meta charas ktupaesate" (If all be right, with joy your voices raise, In loud applauses to the actor's praise. ”との言い様が伝わっているとされるが)、歴史が語り継ぐ権力の頂点に立つ者として[細かく指示された通り]にだけやってみせているだけ、また、[生き様、そして、生き死にの時期さえ自分で決められないとの機械的存在に甚だしくも「ただただ操られるだけ」の存在]であるならば、のようなことの証跡が(誰も率先して語ろうとしない、正視さえしないところながら)そこかしこに見受けられるのならば、人間の歴史とは糸が透けて見える[人形劇]に過ぎぬと述べても差し障りないだろう)

そうもして、

『「人間の世界・人間の歴史とは、」[機械的に演出されてきた生き死にさえ自由にならぬとの相応の手合いらを用いての役者芝居にも満たない猿芝居(糸繰り人形劇)]である』

と考えたほうがしっくりくるようにできあがっている、何重にも何重にも根拠が挙げられるようになっていくところとしてできあがっているのことが[摘示]できるように「なってしまう」のがこの忌まわしき世界である(その検証を求めたい)。

さて、といったことをここ但し書きの部にて何故、細々と書いているか、と述べれば、

「人形劇芝居の目的は芝居(の鑑賞)= 講演それものにはなく、【[機械](超高度人工知能でもいい)に主として演出させてきた猿芝居の如き演目が向かう先】から得られる【効用】そのものである節が如実にある」

との帰結を手前は導きだしてしまい、その帰結の訴求にあたり、一人でも多くの

人間に「それでいいのか」との確認をなす必要がある、一切の虚飾を排しての赤裸々なる話をなしながらも確認を必要があると考えているがゆえである。

(〔人間操作のありうべき手管にまつわるものとして引き合いに出した(先述の) 仮定〕を「馬鹿げたもの」と一笑しようとの者らに対して反論として呈したきところである、そうしたものとしての「但し付きの話」はここまでとしておく)

直上にての脇に逸れての話が長くなりもしたが、先に呈示した仮定、そう、

重力の怪物、ブラックホールの類すらも【縮退炉】(こちら【縮退炉】については ブラックホール生成実験たりうると見られるに至った実験にドイツ加速器研究機関を代表して関わっているとの向きらの問題ある言辞の紹介も兼ねて、にまつての解説を後になす) といった動力源に用立てて活用できるとの重力波を自由自在に操れる程度の先進文明が【こちら側ではない世界】に存在していればどうか。そして、そうした(技術の)先進文明に人間操作をなすだけのモチベーションがあるとすればどうか

との仮定、

[オンライン上に流布されている相応の手合いら(俗めいた言葉で述べれば、(言論劣化工作のための) 作業員のような手合いら)とは異なつての世間人並み以上の水準の者が目にすれば呆れかえろうとの妄言]

と見紛うものであるとくどくも断りたいとのものである(ただしそれでは済まされないだけの材料もあると他面では述べたいところでもある)とのものとしての仮定が、

[人間に偽りの歴史を与えてきたとのありうべき機序としての重力波(のようなもの)]

に関わるどころとなって「いうる」と筆者は考えているわけである(その【いうる】はモスト・プロバブル、最もありうるところといったレベルに準じてのものと現行にては見ているぐらいのところとなる)。

ここで(〔【ブレイン・マシン・インターフェースの応用可能性】および【多世界解釈にあつての「他」世界へと突貫しうる重力絡みのありうべき媒質】にまつわる話〕としての本段にあつての主たる流れに引き戻しつつ)述べれば、

[操作のありうべきところの一手段]

になつていうると手前が見ているところとしての(それがゆえに馬鹿げた人形劇も現出し、かつもつて、馬鹿げた予言的言及も現しようとの)脳機序操作、人間社会にて表出を見ていたテクノロジーの応用でもって猿などの動物の脳に電極を指して動物を操るとのこことをやったことで知られる科学者、先にての引用文書(BEYOND BOUNDARIES The New Neuroscience of Connecting Brains with Machines— and How It Will Change Our Lives (邦題)『越境する脳 ブレイン・マシン・インターフェースの最前線』)にてその名が見受けられるとのエール大学科学者ホセ・デルガドの手になる論稿たる、

Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society (1969)

の内容を問題とすることもなしておきたい(本当はそうしたことをなすのは厭なのであるが、碌でもない者達「ではない」との向きらにきちんと話の典拠を示しておくのもまた必要か、との判断にて表記の英文論稿の内容を問題視することまでなしておきたい)。

PDF 文書版も現行、オンライン上に容易に確認可能なところとして現行、流通を見ている(下らぬ陰謀論者がこさえたものではない一次資料としての論稿が流通を見ている —ただし、そうした状況が異動を見ない保証はない— がゆえに容易に裏取りができる)との同論稿、Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society (1969)の内容、

[目を覆いたくなるようなあまりにも非人道的な内容]

ゆえにそこよりの引用は避けたいところではあったのだが —ただし、非人道的でも検証すべきものは検証すべきと筆者は考えている— 、といった同著の中では、制御装置を頭蓋に取り付けられた実験用の猿に対する操作を通じて

[脳に対する電気刺激による精神的働き(メンタル・ファンクション)の操作]

すらもが容易であるとの記載が実例写真付きでなされているのでそこにての記載を以下、引くこととする(問題はそこに具現化を見ている[機序]とその[応用可能性]のことでありとまずもって申し述べつつも、である)。

出典(Source)紹介の部 87(3)

SOURCE

87(3)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 87(3)にあつては

[脳に対する電気刺激による精神的働き(メンタル・ファンクション)の操作が 60 年代からいかに人間世界に具現化していたのか]

とのことにまつわたりの典拠紹介をなすこととする。

さて、オンライン上より現行、誰でもダウンロード可能となっているとの表記の著作 Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society (1969)には次のようなことが[実験時の写真]付きで紹介されている。

(直下、Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society (1969)にての Chapter 13 Motor Responses にあつての[電極を刺した猿に何をなさしめられるのか]にまつわる部よりの引用をなすところとして)

With the present state of the art, it is very unlikely that we could electrically direct an animal to carry out predetermined activities such as opening a gate or performing an instrumental response. **We can induce pleasure or punishment and therefore the motivation to press a lever, but we cannot control the sequence of movements necessary for this act in the absence of the animal's own desire to do so.** As will be discussed later, **we can evoke emotional states which may motivate an animal to attack another.**

(訳として)

「現在の技術水準にあつては我々が電氣的にそこにはなから決定づけ要因がなかったとの挙動、ドアを開けるであるとか、器質的応対を実演するであるとか、そういうことを実行なさしめることはとてもありそうにないことである。我々は(猿などへの脳へ電極を刺しての電氣的刺激によって)[喜び]あるいは[懲罰]の因となることを引き起こすことは出来、もって、(猿を電氣的に操ったうえで)レバーを押すとの要因となるものを引き起こすとのことはできるのだが、そうするべくもの[動物個体それ自体の欲望の欠乏]があるところではこの方面の行動のために必要との順序をコントロールすることができない。後の段にて論じるように、ただしもって、我々は(Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society が世に出た 60 年代の人間レベルのテクノロジーの問題として)動物に[他を攻撃する誘因]を与えるとの感情作用を引き起こすことはできる」

(拙訳を付しての引用部はここまでとする)

また、同じくもの著作には

『なるほど、そういうやりよう「も」なせるのか』

と見たところとして母猿(頭に電極を刺されたありようが写真に収められている母猿)・子猿を用いての実験例として次のようなことが紹介されている

(直下、同様に Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society (1969)の Chapter 16 Inhibitory Effects in Animals and Man にての[電極を刺した猿に何をなさしめられるのか]にまつわる部よりの引用をなすところとして)

Above, maternal behavior is tenderly expressed by both mother monkeys, Rose and Olga, who hug, groom, and nurse their babies, Roo and Ole. **Below, radio stimulation of Rose for ten seconds in the mesencephalon evoked a rage response expressed by self-biting and abandoning her baby, Roo. For the next ten minutes Rose has lost all her maternal interest (above), ignoring the appealing calls of Roo who seeks refuge with the other mother.** Below, Rose is sucking her foot and still ignoring her baby.

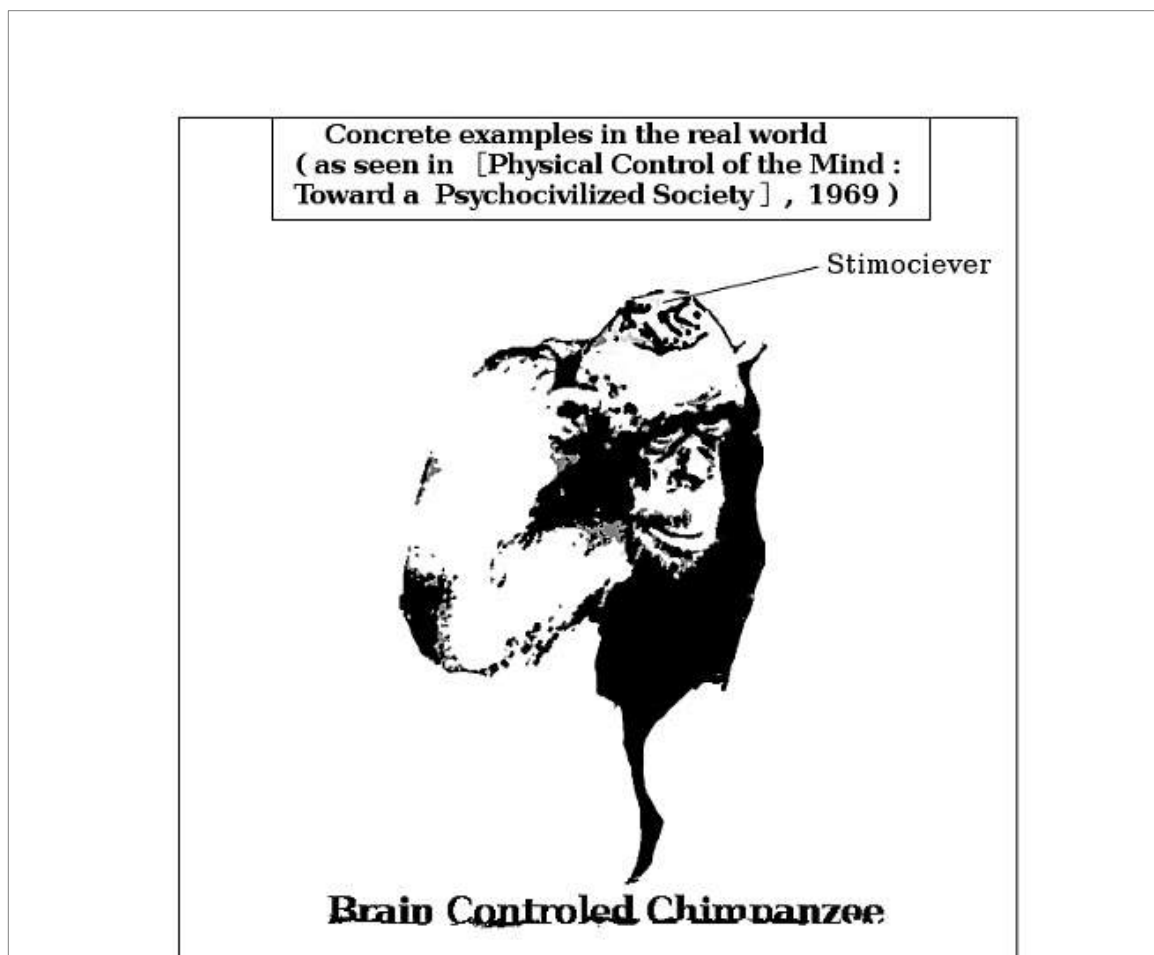
(訳として)

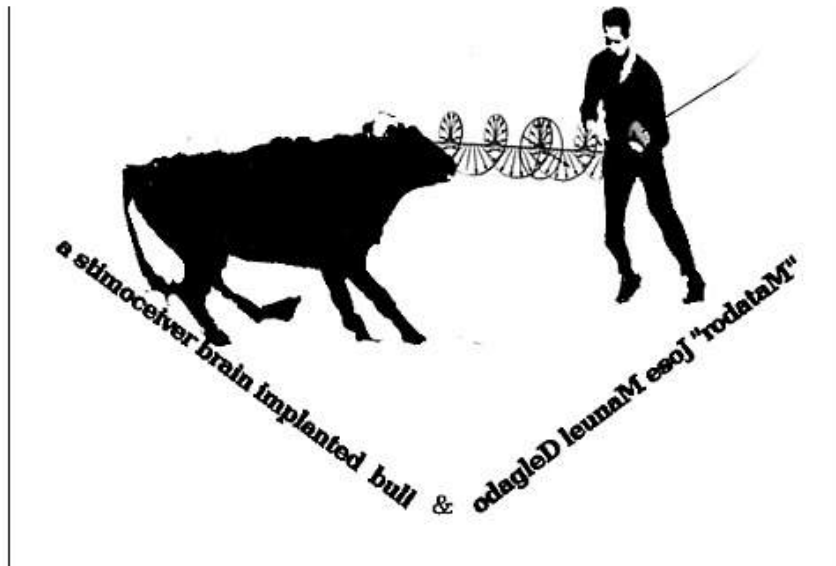
「上 (Figure 25 と振られた部にての特定の写真) は二匹の母猿、彼女らの赤ん坊 (ローとオレーと名前が振られての赤ん坊ら) を毛繕いし、そして、授乳なしでいたとのローズとオルガらの [優しい調子で表されている母親としての挙動] である。下 (の写真) は中脳部に対する 10 秒間のローズに対する電氣的刺激によってローズに [怒り] の反応を引き起こし、彼女自分自身を噛ませるとのことをなさしめ、また、赤ん坊ローを放棄させることをもたらしたとのありようをとらえたものである。 (その 10 秒の刺激にて) ローズは母親としての関心を 10 分間だけ喪失させ (上にて呈示の写真)、結果的に他の母猿によりどころを求めるに至ったとの自分の赤子ローの母への求めを無視なさしめるものとなったものである。 下 (の写真) にてローズは自分の足をしゃぶるに注力し、彼女の息子を無視し続けている」

(拙訳付しての引用部はここまでとする)

(出典 (Source) 紹介の部 87 (3) はここまでとする)

ここまで述べてきた内容を踏まえたうえでここまで呈示しておくこととするが、[心ある向き] にはいくつかの図解部ら —— フィジカル・コントロール (脳の物理的コントロール) がいかようなものかにまつわる図解部ら —— を含んでの続いての内容をも把握いただければ、と考えている。





ホセ・デルガド著作 *Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society* に掲載されている写真を元に(大要だけとらえてのラフ画として)作成した実験実施例再現図。

一番目の図は脳内に電氣的刺激を送信するための器具を外科手術で取り付けられたチンパンジーのありさまを挙げたものとなる——オンライン上より現行、PDF版がダウンロード出来るようになってきているところの *Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society* の Figure 3 と銘打たれてのところにその痛々しくもある実写版が掲載されている——。

デルガドは同じくもの著作で図にみるような外科手術を施したチンパンジーや猿の類の写真を幾例も挙げている(※)。

(※ちなみに以上はチンパンジーを機械を用いて制御するためのものではあるが、昨今の技術体系ではその逆に
[脳に機械を結線させた猿にそちら猿の側から脳波で外側の機械(機械式義手、筋電義手といったものよりも無骨な自然にそぐわぬ機械の類)を遠隔制御「させる」]
 ことまでができるようになってもいる。

先にもその書名を挙げているとの著作 *BEYOND BOUNDARIES The New Neuroscience of Connecting Brains with Machines— and How It Will Change Our Lives* (邦題)『越境する脳 ブレイン・マシン・インターフェースの最前線』(同著著者はデューク大学で同部門研究の最先端の研究を行っているとの外科医にして神経学者、ブレイン・マシン・インターフェース研究の世界的牽引者として知られ、英文ウィキペディアにも一項目設けられている Miguel Nicolelis ミゲル・ニコレリス)にあっては

(早川書房より出されているハードカバー版邦訳版その序章、[プロローグ 音楽の導くままに]と題された部にての16ページより原文引用するところとして) “私がそのような世界をある程度自信をもって想像できるのは、私たちがブレイン・マシン・インターフェース(BMI)と名づけた革命的な神経生理学パラダイムを、わが研究室でサルに使わせた実体験があるからだ。BMIを使えば、サルは自分のすぐ近くやかなり遠隔地にあるロボットアームやロボットレッグなどの外部人工装置を、脳の電氣的活動のみによって自分の意図どおりに動かせることを私たちは実証した…(中略)…BMIのさまざまなバージョンを検証するため、

私たちは神経回路を構成する数百個のニューロンが発生する電気信号を、直接かつ同時に読み取るという新たな実験的アプローチに着手した。このテクノロジーはもともと脳機能分散論者の見解を検証するために開発された…(中略)…しかし脳が奏でる運動ニューロンのシンフォニーに耳を傾ける手法を発見してからというもの、私たちはさらなる一歩を踏み出そうと決意した。霊長類の皮質によって形成される運動思考を記録、解読し、地球の反対側までも送信しようというのだ。こうして私たちは、思考をデジタル指令に変換し、もともと人間らしい動きをするように設計されていない機械に人間のような動きをさせることができた” (引用部はここまでとする)
と掲載されているように、である。

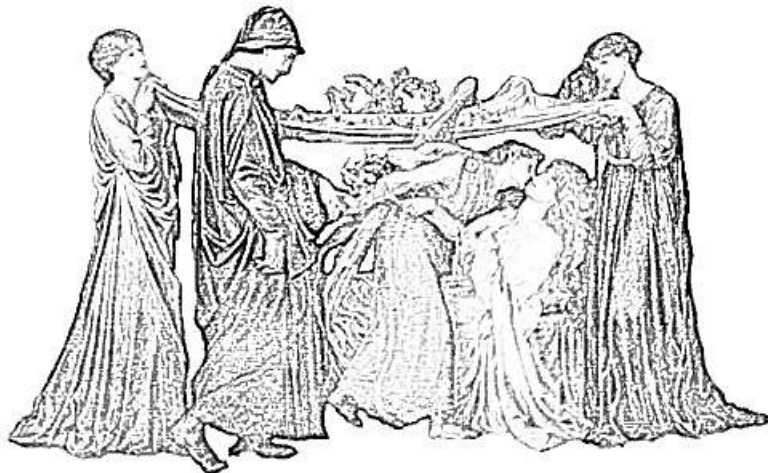
上掲図二番目の図。デルガドが「闘牛士デルガド」などと呼ばれているところにも関わるところとして[スティモシーバー]と呼ばれる操作装置を介しての脳に対する電氣的刺激でもってして「自身に突撃してくる牛の動きをラジコン制御でストップさせた」といったやりようのパフォーマンスの実験ありようを挙げたものとなる——オンライン上より現行、PDF版がダウンロード出来るようになってきているところの *Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society* の Figure 24 と銘打たれてのところにその実写版が掲載されている——(尚、図には電磁場放射形態のよく知られた模式図イメージを(電気刺激によるコントロールのことをイメージしやすくもするために)付した)。

ホセ・デルガドが60年代に実演してみせたやりようにはコントロールされた個体の裁量・個別的特性が介在している、いわば、間接的コントロールとしての側面が強くも現われていることにまつわる情報(オンライン上からダウンロードできもする著作の検討にて確認できるとの情報)も下に挙げておく。

出典(Source)紹介の部 87(4)

SOURCE

87(4)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 87(4) にあっては、

[60年代にて人間社会に具現化なさしめられていた[脳機序の機械的操作]でいかほどまでのことがなされていたのかにまつわっての言われよう]

の紹介をなしておく。

まず最初に以下、(図解式で)視覚的に整理しての引用部内容をご覧いただきたい。

direct control of body 直接的コントロール

⇒

"robots" (unconscious "robot") making process

意識を奪い去り、代替する機械的プログラム通りに対象を複雑に動かすブレイン・ジャックとも表せよう、生物ロボット化のやりよう (:人間の技術では無理であると評価されている操作)

indirect control 間接的コントロール

⇒ (脳に対する原始的インプラントを用いての霊長類実験で60年代から有効性確認されているやりようとして)

"dazzled fools" making process

対象の意識と両立しているところで [対象の脳に対する電流「など」による機械的刺激] を加えることによる操作のやりよう (:技術予測なせば、脳下垂体の刺激による感情誘発ホルモン分泌促進といった方式による対象の意識作用を保持させたままの行動「誘導」プロセスかもしれないし、より高度な技術が用いられての遠未来技術予測をなせば、[機械的働きかけ(幻の声でもいい)を高度になす] といった式と連動させ対象に褒美と罰にまつわる確信(誤信)を与え行動をコントロールする、そういう意識的作用の保持をむしろ逆利用してのプロセスも考えられもする。対象が特定行動に出るように誘導する——対象を眩惑、対象固有の属性からこそその「間接的」操作と目立って矛盾しないところで特定反応の誘導をする——

With the present state of the art, it is very unlikely that we could electrically direct an animal to carry out predetermined activities such as opening a gate or performing an instrumental response. We can induce pleasure or punishment and therefore the motivation to press a lever, but we cannot control the sequence of movements necessary for this act in the absence of the animal's own desire to do so. As will be discussed later, we can evoke emotional states which may motivate an animal to attack another.「現在の技術水準にあっては我々が電氣的にそこにはなから決定づけ要因がなかったとの挙動、ドアを開けるであるとか、器質的応対を実演するであるとかそういうことを実行なさしめることはとてもありそうにないことである。我々は(電氣的刺激によって)喜びあるいは罰となることを引き起こすことは出来、もって、レバーを押すとの要因となるものを引き起こすとのことはできるのだが、そうするべくもの動物個体それ自体の欲望の欠乏があるところではこの方面の行動のために必要との順序をコントロールすることができない。後の段にて論じるように、我々は (Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Societyが世に出た1960年代の人間社会に表出を見ていたテクノロジーの応用の問題として) 動物に他を攻撃する誘因を与えるとの感情作用を引き起こすことはできる」

([およそ50年前の技術水準にての実施例] : 六〇年代に刊行された著作Physical Control of the Mindに見る、エール大の生理学者、牛を [ラジオ・コントロール] したとの実験で有名な医学博士ホセ・デルガド (José Manuel Rodríguez Delgado) の実験結果解説)

more primitive method?

Operant conditioning

※上にてそよりの引用をなしているとのホセ・デルガドの著作、
Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society (1969)
にあつては、(上にて引用なしているところと同じくものを扱っているところとして)、
The stimulated animal started prowling around looking for fights with other subordinate animals, but avoided the most powerful cat in the group. It was evident that brain stimulation had created a state of increased aggressiveness, but it was also clear that the cat directed its hostility intelligently, choosing the enemy and the moment of attack, changing tactics, and adapting its movements to the motor reaction of its opponents
brain stimulation determined the affective state of hostility, but behavioral performance depended on the individual characteristics of the stimulated animal, including learned skills and previous experiences. 「(脳内に外科手術混入された装置を介しての)電気刺激を受けた動物個体はより従属的な個体らとの闘いを求めて周囲を徘徊したが、猫のグループにあつてもっとも強力な個体は避けていた。脳内刺激が攻撃性の増大をもたらしているとのことは明らかであるが、と同時に猫が激意を知的に(自己)管理していること「も」明らかであり、対抗筋の(器械的)脳刺激に対する運動反応に応じての攻撃対象・攻撃時期の選別、攻撃戦術の変更・行動の採用選別は、(行動ありようを除き)、学習能力・従前経験を含んでの[刺激を受けた動物の特性]に依存するところのものであつた」(引用部訳はここまでとする)
との実験結果にまつる記載もなされている(操られた動物として自己の意識が働き、脳内機序を操作された際に適当な攻撃の代替的对象を見つけるとも)。

以上は脳に物理的の刺激を与え、対象実質(魂でもいい)を維持したまま、特定行動にいざなうとの[間接的コントロール]の一例となるところである(それをより自然に即したレベルで実施したのが、かのパブロフの犬の実験とも解せる)。といったことは心理学・動物生理学の分野にて用いられる[オペラント条件付け]との概念、快・不快の刺激の習慣的増大で生物の行動に改変を加える「調教をなす」の発想法と通底するものであるように見受けられる。

他面、他罰的攻撃性向を前面に押し出してやまないとの人種、たとえば度を越えた宗教的狂人や思想的狂人ないし文明社会の道理を弁えていないとの破滅的ないし粗暴犯的人間ではないとの本来的・日常的に真つ当な人間がその人間の性質から見ればあり得ないほどに唐突におかしな挙動、常軌を逸して悪質な挙動に二重人格的に出る(例えば、往來で非理性的に無差別に周囲に喧嘩を売り出す)とのことがあれはどうか。といったケースがコントロールされてのものなれば、そこに[デルガド「以上」のメカニズム]が $+a$ として働いていてもおかしくはない、との発想も出てくる(そも、本稿にて書き記しているような[尋常一様ならざる先覚的言及](911の予言の如くものら/ブラックホール生成挙動に対する化け物がかつた先覚的言及の類)の多くが「意識的に」現出している「わけではない」と考えられるから問題ともなる発想法である)。

Ridiculous?

さて、上にての視覚的に整理しての引用部にあつてその記述を引いているとのデルガド著作 Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society にあつては

(そこだけ切り分けるところとして)

“ it is very unlikely that we could electrically direct an animal to carry out predetermined activities such as opening a gate or performing an instrumental response. We can induce pleasure or punishment and therefore the motivation to press a lever, but we cannot control the sequence of movements necessary for this act in the absence of the animal's own desire to do so.” 「我々は(電氣的刺激によって)喜びあるいは罰となることを引き起こすことは出来、もつて、レバーを押すとの要因となるものを引き起こすとのことはできるのだが、そうするべくもの動物個体それ自体の欲望の欠乏があるところではこの方面の行動のために必要との[順序]をコントロールすることができない」

との記載がなされてはいるが、デルガドは

[コントロールされている動物の意に目立って矛盾しない(コントロールされる個体の内面の実質にさして負荷をかけない)との複雑なプロセスを要しない単純挙動]

であるのならば、

[ある程度の所作の原始的かつ機械的コントロール] (突進してくる牛をストップさせる／猿の表情や所作を細かくもコントロールするが如くの機械的コントロール)

をも実現させており、たとえば、Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society には以下の如しの記述がなされている。

(直下、オンライン上に流通しているとの Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society (1969) にあつての Chapter 13 Motor Responses の節よりの引用をなすとして)

Simultaneous stimulation of two cerebral points with opposite effects could establish a dynamic balance without any visible effect. For example, if excitation of one point produced turning of the head to the right and another one produced turning to the left, the monkey did not move his head at all when both points were stimulated. This equilibrium could be maintained at different intensity levels of simultaneous stimulation. **Brain stimulation of different areas has elicited most of the simple movements observed in spontaneous behavior, including frowning, opening and closing the eyes, opening, closing, and deviation of the mouth, movements of the tongue, chewing, contraction of the face, movements of the ears, turns, twists, flexions, and extensions of the head and body, and movements of the arms, legs, and fingers.**

(訳として)

「反対の効果を伴うところのものでもある脳の二点の同時刺激(電気刺激)は[可視的な効果]をなんら見せることなしに力学上のバランスを確立してみせた。例として、[脳の特定点への刺激が頭を右にまわすとのことをきたす]ものであり、他のそれは[左にまわすとのことをきたす]ものである場合に、両地点が刺激された折、(電極操作装置が埋め込まれた)猿は頭を動かすことが何らなかった。この平衡状態は同時刺激の異なる程度にあつても維持され得たものである。「自然発生的な」(訳注:この場合、spontaneous は「自発的な」というより「自然発生的な」と訳すべきところか、と見える)行動として観察されるどころの「単純なる」挙動、[眉をひそめる][目を開けたり閉じたする][口を開閉しゆがめる][舌を動かす][噛む姿勢をとる][耳を動かす][頭および胴体を回転する・反らせる・延び縮みする][腕・脚・指らを動かす]といったことを含んでの「単純なる」挙動は[異なる方面での脳への電氣的刺激]によって具現化なさしめることができるものである」

(拙訳を付しての引用部はここまでとする)

上にあつては[60年代から具現化していたテクノロジー]で[猿など高度な脊椎動物の挙止挙動のラジコン操作]が可能ならしめられていたとのこと、記載されているわけである。

(**出典(Source)紹介の部 87(4)**はここまでとする)

ここまで引用なしてきたが如く文書の内容から判ずるに、対象の[フィジカル・コントロール] (対象の器質的コントロール) が実施されるのならば、それについてはたとえば、

[脳の特定点をダイレクトに操作する]

[脳内ホルモンの分泌 —— [エンドルフィン endorphin] から [オキシトシン Oxytocin] のような[高揚]と[恍惚]に関わるホルモン（[エンドルフィン]がいかようなものか多くの人間が知っているであろうが、[オキシトシン]については各自お調べいただきたいものである）から攻撃性に関わるホルモン—— をバルブをいじるような刺激添加によって間接的に調整する]

との式でのやりようが [非侵襲性(non-invasiveなる方式、without surgical knife とのメスを入れない式)のブレイン・マシン・インターフェース] でとられるのだろうと考えられもする（:実際に人間レベルで具現化見ているテクノロジーの問題でも「鬱病治療」のためなどと銘打っての脳内インプラントが「活用」されているといったことがある —— 目立つところでは英文 Wikipedia[Brain implant]項目にて “ Neural-implants such as deep brain stimulation and Vagus nerve stimulation are increasingly becoming routine for patients with Parkinson's disease and clinical depression respectively, proving themselves as a boon for people with diseases which were previously regarded as incurable. ” との記述内容がといった現状を端的に示す—— ）。

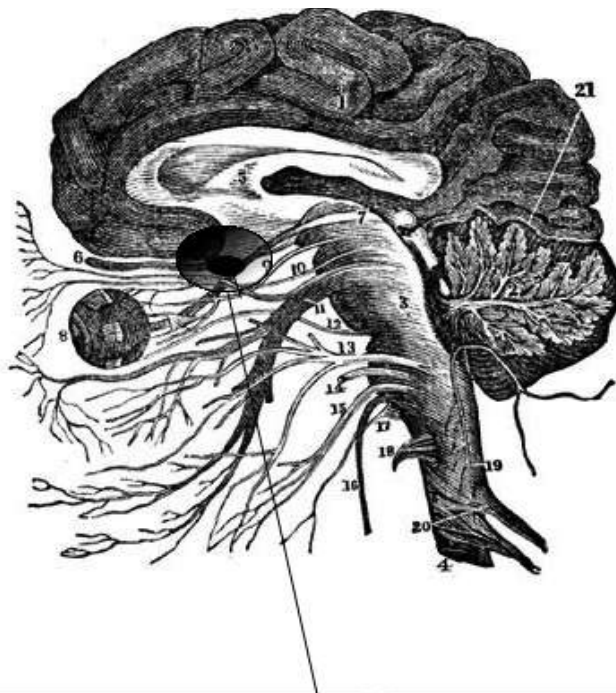
さらに突き進めて述べ、といったことが仮に

[極めて洗練かつ高度な技術体系]

でもって実施を見るのだとすれば、

[意志の力なき者ら(意志薄弱なる者達)]・[機械的作用を自己認識できるだけの柔軟性・思考の深度の欠乏を見ている者達]

をして [ごろつきに麻薬漬けにされた娼婦] のように、あるいは、[詐欺師に担がれて宙を飛んだ気分になっているとの被害者] のように、あるいは、[突然凶暴性・攻撃性を倍化させる気変わり甚だしくもの暴君] のようにと気の向くままコントロールできるだろうと考えられもする（:[そういう話]と通ずることをホセ・デルガドは[猿に対する実験]で 60 年代のエル大での一群の実験で実現したと彼の自著にて細かくも解説しているのである）。



[The possibility that highly civilized "interferers" can control the function of brain mechanically, minutely and non-invasively (without knife cutting)]

almost equals to

[The possibility that unconscious or weak minded men's mind state could be controlled easily] .

[The possibility that highly civilized "interferers" can control the function of brain mechanically, minutely and non-invasively (without knife cutting)]

almost equals to

[The possibility that unconscious or weak minded men's mind state could be controlled easily] .

(e.g. [Ideological or religious fanatics making process])

"Mantra" input (switching)

→

β endorphine release

→

activated state (satisfied state))

Nonsense ? I don't think so.

もう何十年も前に医学界その他で一時期物議を醸したホセ・デルガド(José Delgado)のやりようのことを念頭にも述べるが、

[脳の機序を[事細かに][メスを使わぬ非侵襲方式で]機械的にコントロールできる高度先進文明の介入者を[想定]する]

とのことは

[人間、なかんずく、自身がコントロールされているなどとの考えに及ぶことがなく、また、意志も弱いといった類の[思考様式](思想・信条)までをもコントロールするのは易いと[想定]する]

とのこととほぼ同義同文になると述べても差し障りなからう。

「人の思想・思考は自由意思によるものだ、コントロールされるはずがない」

などと述べる向きもあるかもしれないが、[意志の力] (神秘主義的に表せば[魂]に近いところでもなるのかもしれない) あるいは[理性を感情に優先させて自身を客観的に統御する力]を有して「いない」との人間ら、事大主義的で物事を深くも考えず(あるいは考えても自身の内発的感情をコントロールする術を知らない)との人間、そういう人間らが

[インプットとなる類型化しての入力刺激] (たとえば、マジックワード、アブラカダブラでもいい、仏教その他の諸種、無意味なるフレーズでもいい、特定の定型化された語句を口に出す(罵倒語・卑語・猥語といった本来的に刺激的であるものではないものの何らかの反応をきたすよう人工的に調整された語句を口に出す)、あるいは、同種の被操作個体らとある一定以上の距離に近付いた場合などの特定条件充足型の状況に置かれる等等)

に曝(さら)された場合に下垂体前葉部より β エンドルフィンを機械的に発生させ「られる」との継続的処置にさらされるとのことがあればどうか(いいだろうか。何らかのやりよう —それが妥当な仮定かどうかは置き、現行の文明に近い視点で無理にでも見れば、fMRIによる脳機能スキャン技術の高度応用とそのアウトプットの超高性能コンピューターによる管理処理といったところかもしれない— で生体組織にメスを入れぬ非侵襲的処置をなして、である)。それにつき、

[不幸なことに物事を自分で考えぬとの類] (あるいは個でいるよりも「精神性ないところで」群れることを好む、アイドルの類を失禁せんといった勢いで崇拝せんとする娘らと同程度のありようで特定のドグマ・教祖の類に群がる事大主義者でもいい)

は人為的な機械的処置で自身が「自然現象に見えるかたちでだが、人工的に」ハイテンションになっていることに気付かず、況や、説明もつけられなく(そも、知識および思考力・内省的精神が欠損を見ているところで自分の頭の中で脳内麻薬が分泌させうる後天的・人工的機序がありうるというなどは考えも及ぶまい?)、結果的に、いわば[鯛(いわし)の頭]のようなもの、そう、本来的に理性で考えれば、そのようなものを信ずるのが馬鹿げていると分かるうとのものを「実に尊きもの」と不合理無比に、自然の理に何ら合致しないとの式で尊崇視することになっているとのこととて考えられると述べているのである(いいだろうか。再度繰り返すが、ここでは人間の脳機序をメスを入れずに薬籠中のものにできるテクノロジーおよびそれを扱えるとの存在の[介入]を仮定、そういうことがあれば、何がなされるのか、の話をしている)。

シェイクスピアの戯曲『真夏の夜』では妖精の女王が驢馬(ロバ)の頭をかぶった道化役のこれぞ間抜けといった輩に[魔法の作用]で惚れ込んだとの粗筋が具現化を見ているが、それと似たようなことが魔法などでなく、科学的に具現化できる、そう、[脳内のエンドルフィン —— ちなみにエンドルフィンとは(たかだか和文ウィキペディア程度のものよりの記述を引くにとどめるが、そこより引用なすところとして) [内在性オピオイド(アヘン類縁物質)であり、モルヒネ同様の作用を示す。特に、脳内の報酬系に多く分布する。内在性鎮痛系にかかわり、また多幸感をもたらすと考えられている。そのため脳内麻薬と呼ばれることもある] (引用部はここまでとする)となる——]なぞが

[特定行為動態(マントラの復唱でもいい)に対応する報酬系]として「機械的」分泌なされることで自在自儘に「意思薄弱・事大主義的・客観的に自身を見ることさえ出来ぬ手合いら」、あるいは不幸なことにそういう類へと養成されていった手合いらを「イデオロギー的狂人」ないし「宗教的狂人」といったものに(「本人はそうされていることを認知できぬやりかた」で)変質させる、「無意識的パブロフの犬」にしつらえるとのかたちで科学的に具現化なしうるといのがここでの話である(「ちなみにホセ・デルガドはより原始的かつ大雑把なやりようでの[対象思考特性と大きく矛盾しないところで対象の行動形式を器械的刺激で改変する]とのことに成功しており、その細かい解説も公になされている)。

仮にもしそういうことがあるのだとすれば(人間を意識的にも非意識的にもコントロール可能な機序がそこに存在しているのだとするのなら)、そうした場合にこの身が救せないと思うことがある。

それは「宗教は人を幸せにするものだ」「信仰に命を賭けることは尊いことだ」なぞ述べるような手合いがこの世界に依然として存在している中で、仮にもってそうした個体らが「コントロール個体」(本当の意味では人間「未満」の無意識的に機械に操られての個体であるのに、といったことを認識さえ出来ていないとの個体)であるのなら、そう、「愚劣でグロテスクなパブロフの犬」のようなものであるのなら、といった個体(自分で自分が「犬」風情に嗜虐的にあつらえられたことにさえ気づけぬとの個体)らに、「宗教が人を幸せにする」「信仰に命を賭けることは尊いことだ」なぞと言わしめるだけの機序をこさえた存在は極めて悪質で、また、そういう愚劣な状況に置かれた人類に望ましき明日は用意していないとのことを明示している存在であると自然に想起できるとのことである(それをもってして手前は赦しがたいと見ている)。

上のことより筆者 —— 相応の宗教的狂人でもイデオロギー的狂人でもなく、ただ単に自身および自身の属する種族の生存と望ましき明日の確保を欲しているにすぎぬとの人間—— が何が述べたいのかお分かりいただきたいものである。

尚、筆者は人間のレベルの技術では(「その微弱さゆえに、」と説明されるところとして) 検知がままならないとの[重力波]の話も先にしている。それとて筆者なりの意図があつて言及なしていることとなる。

同様のことについて、「行き過ぎての感あり」と承知のうえでの話をさらになせば、である。重力波のようなもの、浸潤機序を帯び、また、人間に検知もままならぬものを媒質としつつ、

[「超」高性能のマシン] (ホセ・デルガドが実験動物に結線させたのは 60 年代のエル大のアナログ・コンピューターであったと先に引用なした BEYOND BOUNDARIES The New Neuroscience of Connecting Brains with Machines— and How It Will Change Our Lives には表記されているわけだが(BEYOND BOUNDARIES The New Neuroscience of Connecting Brains with Machines— and How It Will Change Our Lives 邦訳書『越境する脳 ブレイン・マシン・インターフェースの最前線』にての 294 ページよりの再度の引用をなせば、“デルガドはエル大学の研究室で、自由に行動する動物やヒトを対象にした永続的脳埋込装置(インプラント)の時代をほぼ独力で切り拓いた人物である。一九六九年の実験でデルガドは、史上初の双方向 BMBI の自動稼働をやつてのけた。…(中略)…この装置は小型だったために同時に複数埋め込むことが可能で、別個の脳領域を同時に刺激し記録できた。デルガドは実験には恒久的脳波記録電極を用い、情動にかかわると考えられており、アーモンドほどの大きさをもつ扁桃体と呼ばれる深部脳構造内のニューロンの電氣的活動をサンプルした。ステイモシーバーは扁桃体の生の脳信号を、デルガドの研究室に隣接した部屋に設置されたアナログコンピューターに送った”(引用部はここまでとする)との表記されているわけだが)、原始的ブレイ

ン・マシン・インターフェースで用いられたコンピューターなどとは比較にならないとの「超」高性能のマシン)

が人間に結節されもしているとのことも想起されてしまう。

サイエンス・フィクションなどで[ブラックホール制御技術]としてよく引き合いに出されるところの動力源、本稿にての続けての段で「ゆえあって」問題視することになるとの、

[縮退炉] (あるいは未来予測家の類により現実視されるようなところの反物質を用いての [対消滅機関])

のようなもの、そうした [膨大な電力供給を約束するパワープラント] を用いてのエネルギー供給が実現できれば、そして、あわせて、[半導体集積率の限界 —— 半導体の集積率はムーアの法則というものが提唱されているように数年単位で指数関数的に上昇を見てきたのだが、それは回路の網が小さくなりすぎると電子がトンネル効果というものに基づいて漏出してしまうという限界に遠からず直面するとされている——] を量子コンピューティングのような技術でもって克服したようなハイパーコンピューターの制御・運用技術が実現なされていけば、そして、重力波などを媒質にしつつ他世界のデカルト座標空間(xyz 座標)に意図しての状況を及ぼす力がある文明であるのならば、一人一人の人間に対して、

[現行のスーパーコンピューターを何桁も何桁も上回るような性能の人工知能が演じての [偽の神]] (ルネサンス期の代表的彫刻作品『聖テレサの法悦』でも有名な [アヴィラのテレサ] という聖女がそれを呈したと知られているとの [エクスタシー] (和文ウィキペディア [アビラのテレサ] にて麻薬体験のそれ、ないし、性的体験のまさしくものそれそのものとかたちで紹介されているようなもの) をエンドルフィンやオキシトシンの分泌の促進などでもたらすことさえ出来るような存在、あるいは、ときに対象のことを何でも知っている高度な助言者のように振る舞う存在かもしれない [魂なきもの] としての [偽の神])

がさして負担少なくも用意されることになることとて想像に難くない、と考えることさえ出来てしまう、そのように筆者は見ている (: アブラカダブラ、ここでの話はなかならず識見に乏しい向きにあっては何を述べているのか、理解に窮するとのことがあるものとも思う(当然ではある)。が、といったなかでも自身や自身に押しつけられた [運命] というものについて真摯に考えたいとの向きに対しては、例えば、ダン・シモンズという SF 作家に由来する SF 作品『イリウム』という作品にあって [一人一人の人間が [不死者] となっている世界にて同じくもの一人一人の人間に対してブラックホールを電力源にしての縮退炉(と表すべきもの)によるバックアップ装置が付いている] との作中設定が採用されている、そういった思索もなされているとのことを確認などされつつ、本稿にての続いての [縮退炉] にまつわる解説を検討されてみるなどし、ここでの話についてもよくよく考えていただきたいと申し述べておきたい —— そこまで伝えたいので「検討する必要などない」と [機械的反応] しか出てこない者に関しては噛んで含んで聞かせるが如くことをなしても無為無駄であろう、との観点もあるのではあるも、(さして期待もなせず・なさずに) 理想的読み手というものを想定しての話をなしてのこととして、である——)。

その点、

「 [明らかな他殺体(人為的にむごたらしくも具現化させられたものであることが明々白々なる死体) がそこにある. であるから [事件性] が問題になる] との式の話を展開しているのが本稿であって [むごたらしくも損壊を見ている他殺体] がいかように具現化させられているかは「本来的には」問題視する必要とてない」

とのたとえば先にも持ち出している（「いずれにせよ[対処して然るべき問題視すべきところ]がそこにあることに異動はないと証示するのが本稿本義である」とのこと、強調すべくも同じくものたとえを先にも持ち出している）。

そこを半ばもの余事記載であるとあらかじめ明示しての一連の部、そして、さらにそうした部の中にてですらよりもって奥まつの支流としか位置付けていないとのことまで明示しての箇所であることを念頭に悲劇現出のプロセスの機序(作用原理)についてくどくもの話をなせば、である。[脳機序の操作]と[膨大な電力の供給]と[高い計算リソース(高度な人工知能の構築)]を実現できる先進文明がそれを意図あって人間に対して悪用していると「仮定」すれば、そうした存在ならば、人間存在一般を実に下らぬ、

[恍惚状態にて神に善導されていると「誤信」しての家畜の群れ]

のようなものへと成り下がらせしめることもできるようになると推察可能だと述もしているのが本段ではある——またサイエンス・フィクションがかったの話をなせば、といったありうべきやりように「加えて」[超光速通信]に通ずる機序が用いられていたらばどうかのことも問題になり得る。超光速通信、すなわち、光の速さを超える通信が可能となれば、著名フィクションたるスーパーマン・シリーズにあってスーパーマンが「どういうわけなのか」地球の周辺を高速で回ること地球の状況を過去に戻したが如くもの式をより現実的にした格好にて時間の流れを越えての過去への通信も可能となることになるとされるが(タキオンなどの仮説上の粒子を媒質に用いての超光速通信が実現できれば、因果律が破られることになるとはよく言われるところである)、すなわち、[[過去]が[現在(の特定領域)]によって改変されている]、そういうことさえ実現されることになりうるが、人間存在が[超光速通信]に通ずる機序がビルト・インされての偽の神(ハイパー・コンピューター)の命令に服従しているのだとすれば、そして、生け垣で囲われたような行動範囲内で行いを制御されているのならば、人間存在一般が多くを知ったうえで抗わぬ限り、人間存在は[結果]にして[原因]として自分自身の人生・生き方というものを死ぬまで確保できない[運命(にさえ満たない可変的プログラム)の奴隷]のままその存在を喪っていただけであると手前はとらえている——。

重力波にまつわっての半ばもの余事記載の部(ノルウェイ・スパイラルのことを本筋として問題視している中で[多世界解釈にあっての「他」世界へと突貫・浸潤しうるとされる重力]にまつわって「強くも仮定の類を前面に押し出して」のものながら「意図あって」書き進めているとの半ばもの余事記載の部)の中にあつて明示してさらに脇に逸れもしての話、ブレイン・マシン・インターフェースの話を長くもなしすぎた感がある。

であるからブレイン・マシン・インターフェースについての話から離れる(そして、重力波についてそれを何故、問題としたのか、より具象的な訴求に入ることとする)。

(直上直近の段にあっては特にもって行き過ぎた話をなしてしまつたが、ここまでもつてして[重力波]にまつわる話の中にあつて重疊的に入れ込むように展開してきたとの[ブレイン・マシン・インターフェースの応用可能性]および[ありうべき媒質]にまつわる話

に一区切りを付けることとする)

さて、重力波「のような」ものを高度に局所的に集中的に用いる——重力波についてはそれが宇宙探査ロケットの動力に用いられうるとの可能性さえ「人間世界の常識的世界の科学者のレベルで」呈示されていることにつき先に言及したが、そうしたやり方を遙かに陵駕する高度なやり方で局所的に

本書
p.706 から p.733
を割いて
のブレイン・マシン・インター
フェース
に関して
の話に一
区切りを
付けたう
えで(ノル
ウェイ・ス
パイラル
にまつわ
る問題点
を指摘す
る前に説
明することとした)
【重力波】
のことを
中心にし
ての科学
概念の説
明部(本
書 p.692
から本書
p.766 ま
でを割い
ての一連
の段)に
立ち戻る
こととする

集中的に用いる——とのテクノロジーを有した存在を仮定するならば、である。

といった存在が先だって論じてきたように

[ロボット(あるいはロボット人間の脳)を動かす機序]

にそれを応用できる可能性があるかと解されもする(先に *Physical Control of the Mind: Toward a Psychocivilized Society* との既に前世紀 60 年代に具現化を見ていた生物ロボット化技術を扱った論稿の内容を引いたが、ここではロボットとは[機械を操るとの式ではなく反対に機械に操られるとの式で動きもするとの生体機械と化した一群の者達]のことを指して述べているのである) ばかりではなく、

[同じくものやりようでもって(想像も絶するようなところから)異常な光の妙技 ——ノルウェイ・スパイラルのことだ——を中空に現出させることさえも実現しかねない] (気流の乱れは調整して具現化なさしめた SLBM に由来するものでも青白い光もたらしての励起作用は別建てにてもたらしてそういうことを実現しかねない)

と申し述べても何の行き過ぎにならぬと判じている (ここで述べておくが、筆者はノルウェイ・スパイラルが [SLBM ——潜水艦発射型大陸間弾道ミサイル——] の弾道学的な失敗によって現出したとの公式発表を[否定]しているわけではない。また、上のような自身で取り上げているような[仮説]が門外漢ゆえの馬鹿げているものであることを意固地に[否定]せんとするものでもない)。

といった申しようをもってして「これまた」に「これまた」が続いての滑稽なる見方であると思われるだろうか。

だが、我々人類が検知もままならないでいるとの重力波を[そういうこと]に利用できるのかもしれないと受け取れもする論文は —ただしどれが本当にそうしたものであるかは浅見さがゆえに太鼓判を押すことはできない— すぐに見つかる。

実にもって不適切なる例示か It is inappropriate as an example「とも」思うのだが、

CHERENKOV RADIATION IN A GRAVITATIONAL WAVE BACKGROUND 『重力波を背景とするチェレンコフ放射』

といった論考が諸国物理学者連名のものとしてオンライン上の論稿配布サーバー arXiv にてまじめなものとして公開されており、にあつては、[チェレンコフ放射] (チェレンコフ・ラディエーションとは荷電粒子が光速よりも早く動く際に光が発せられる現象のことを指す(そして、その独特なる光の色調はノルウェー・スパイラルの映像記録に見る色調に実にもってしてよく似ている)。その点、アインシュタインの相対性理論では光速がいかな場合でも不変であることを想定しているが、物質中を移動する光の速度は遅延化を呈しえ、たとえば水の中ではそのような状況になりえ、粒子が核反応や粒子加速器によって加速されるとそちら遅延化された光の速度を超えることとなりえ、絶縁体の中をといった荷電粒子が通過するときにチェレンコフ光が発生(原子炉臨界事故では[青色の光]として具現化)するとのことが知られている)、そちら [チェレンコフ放射] が [重力波] を背景に具現化するかといった可能性論について論じられている。

につき、筆者は[重力波]について云々できるだけ専門知識を有している人間「ではない」(:その点、本稿にて先述しているように本稿筆者は[重力]の怪物、ブラックホール生成問題にまつわる国際実験に国際加速器マフィアの一翼を担うかたちで関わっている権威の首府としての研究機関を相手どつての「訴求のためだけの」行政訴訟で一審からして二年間の訴求をなすなどとのこともなしているが、といった長らくもの非を鳴らすべくものやりようは[公的に問題にするなど無意味なる専門家以外には理解なせない専門知識・専門理論の当否]をもって実現したわけではない。[ある程度の知能水準さえ有していれば、門外漢にも理解出来ようとの[欺瞞]の構造]を法的争訟の争いの適否にまつわるところの事実の問題として摘示し続けてきたから相手方に法廷で長らくも非を鳴らしたのである)。

であるから、そう、専門家でもない(真に専門的なる知識にいまひとつ欠けることがある)にも関わらず踏み込みすぎのきらいあるものであるから、ここでの話については何度も何度も本段での話が「行き

過ぎたものである」と断っている。

また、筆者が——[人間の科学体系]それ自体が[都合が悪いところに多く目が行かないとのかたちで構築されてきた紛い物]である可能性があればそのような仮定を差し挟むだにナンセンスなことか、とも思うのだが——「仮に」付きで、その方面の専門家であっても、重力波を容疑者として論じたてる話を十分に云々することはできないことか、とも思う。望見する限り、物理学などの分野にては相互に背反するように受け取れる主張が専門家筋らしいところより出されているとのことがよくも見受けられ(たとえば、重力波については[それが弱すぎて検知できない]とする見方がある一方で[そもそも重力波とされるものの性質が検知に不向きであるからである]との申しようもある)、といったところでは専門家の申しようさえ全幅の信を寄せるに足りない、換言すれば、専門家であったとしてもそうだと強弁などは(システムにとって不都合なところであれば歴史家といった人種が異常なる記録的事実らを諸共無視する、そうしたことにも通底する環境下にて)できないようになっているとも考えている。

以上踏まえて、再三再四、強調しておくが、重力波についてそれを(先述なしたところの)[ノルウェイ・スパイラル](の如きこと)の容疑者ないし容疑者に近しきところの[犯行凶器]として指弾することが適切なことなのか何ら請け合うことができない(繰り返すも、[渦巻き]はロシア軍 SLBM の産物、[青色の光]はそちら SLBM 異常軌道に伴っての副産物、[塩化銅の炎色反応]であるとの公式見解通りである可能性を筆者は何ら否定しようとも思っていないし、筆者にはその否定をなすだけの資格もない)。

ではなぜもってして「マルチバースを貫通するとも考えられている重力波」のことなどを(ノルウェイ・スパイラルともども)わざわざもってして取り上げたのか。

に関して第一には、である。

[マルチバース突破がテーマとなっているカナダ人作家の特定小説作品がノルウェイ・スパイラルそのものの現象(中空にて渦巻き光が現出するとの現象)をノルウェイ・スパイラルが起こる前に——いいだろうか、ノルウェイ・スパイラルが起こる「前に」、である——【異様に予見的なる式】で持ち出しているとのことがあり、また、同作家のそれに先立つ小説作品が LHC によるありうべき結果を嗜虐的反対話法で茶化しているが如く側面を有している]

とのことを文献的事実——当該小説原文引用のみから自然にそうだと判じられるところの文献的事実——の問題として手前が情報把握するに至ったとのことがあるからである(その点についてはノルウェイ・スパイラルのことを取り上げもしているところのそもそもの理由としてよりもって後の段にて詳説を講ずる)。

そして、第二には、である。

[[重力波通信]を作中モチーフとする別の小説作品が今日の LHC 実験にまつわっての際立っての 70 年代に遡っての【異様な先覚的言及】と結びついている]

とのことにまつわっての文献的事実の捕捉をもこの身がなしているとのことがあるからである(こちらの点については間を経ずに解説する)。

表記のこらについてこれより順次もってしての解説をなすこととする。

上にて挙げた第一・第二の事由にあつてノルウェイ・スパイラルのことをそも、取り上げているとの本筋に関わるところの第一の事由については半ばもの余事記載の部から本筋に立ち戻ってから解説する(多少もって後回しにする)として、ここでは第二の事由についてより解説することとする。

第二の事由にあつて言及なしている、

[重力波通信を作中の主要なるモチーフに据えた作品にして、かつもって、LHC 実験のようなもののブラックホール生成問題についての先覚的言及をなしている作品]

とは本稿にあっての前半部にてもその問題性を取り上げているとの、

The Hole Man (1974年初出の短編で1975年ヒューゴ賞という著名なSF作品賞を授与されている作品にして極微ブラックホールが暴走、それが惑星を食らうに至るとの内容を有した作品／本稿前半部にあっての**出典(Source)紹介の部7**にて取り上げた作品)

となる。

そちら小説作品 **The Hole Man** 『ホール・マン』 にあっては次のような粗筋が具現化を見ている。

(直下、英文 Wikipedia [**The Hole Man**] 解説項目にあっての現行の記載内容を引用する
ところとして)

"The Hole Man" is a short story by American writer Larry Niven. It won the Hugo Award for Best Short Story in 1975.[. . .] One scientist believes that at the center of the device is a tiny black hole, but his superior does not believe him. During a heated argument with his superior, the scientist turns off the containment field, releasing the black hole.

「『ホール・マン』は米国人作家ラリー・ニーヴンによる短編小説である。同作は1975年、ヒューゴ賞短編賞を受賞している。…(中略)…(同作のあらすじは)その上役は信じていないことだったが、ある科学者が(火星での異星人遺構にて発見された)装置の中核に極微ブラックホールが収納されていると信じていた。上役との議論が極まっての折、同科学者はその装置の防護壁を無効化、ブラックホールを開放してしまう(とのものである)」

(訳を付しての引用部はここまでしておく)

大要として以上のような一言での粗筋まとめられようがなされもする小説作品たる『ホール・マン』は
[「重力波」通信装置より漏れ出たブラックホールが惑星を飲み込む作品]

とも言い換えられるものとなっている。

にまつわるところの本稿従前引用部を下に再掲しておくこととする。

(直下、**出典(Source)紹介の部7**にて取り上げたところの『世界SF大賞傑作選8』p.262—
p.263、『ホール・マン』掲載部よりの再度の原文引用をなすとして)

彼は重力波通信機を蔽っている防護パネルをはずし終えたところだった。中から現れたものは、ある点ではコンピューターの一部のように見えるが、だいたいのところは電磁コイルによく似ており、異星人のタイプライターとおぼしいボタンの四角い列があった。リアは電磁誘導センサーを使って、絶縁をはがさずに配線をたどろうとしていた。

…(中略)…

「リア、あんたはその中に、量子ブラックホールがあるっていったね。量子ブラックホールって何だい？」

…(中略)…

「縮潰した恒星はブラックホールを残す」とリア。「銀河系全体が縮潰すれば、もっと大きなブラックホールができるだろう。だが、現在では、ブラックホールのできかたは、これだけしかない」

「というど？」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、原著 **The Hole Man** にあっての記載では “ **He'd almost finished** ”

dismantling the protective panels around the gravity wave communicator.

What showed inside looked like parts of a computer in one spot, electromagnetic coils in most places, and a square array of pushbuttons that might have been the aliens' idea of a typewriter. / [. . .] / "Lear, you mentioned quantum black holes back there. What's a quantum black hole?" / [. . .] / "A collapsing star can leave a black hole," said Lear. "There may be bigger black holes, whole galaxies that have fallen into themselves. But there's no other way a black hole can form, now." / "So?" ”との箇所が引用なしとしたところの原著該当表記部となる)

(直下、**出典(Source)紹介の部7**にて取り上げたところの『世界SF大賞傑作選8』p.264 — p.265、『ホール・マン』掲載部よりの再度の原文引用をなすとして)

「ある時期には、あらゆるサイズのブラックホールが形成され得たことがあるんだ。膨張宇宙がはじまる『大爆誕(ビッグ・バン)』のときさ、その爆発の力で、局所的な物質の小さな渦が、シュワルツシルド半径をこえて圧縮された。そこでできたもの——とにかく、中でもとくに小さいやつ——を、量子ブラックホールというんだ」

…(中略)…

「そいつの大きさはどのくらいなんだ?つまみあげて、あんたに投げつけられるくらいかね?」

「あんたのほうのみこまれちまうだろうよ」ときびしい口調で、リアは答えた。「地球ほどの質量をもったブラックホールは、さしわたし一センチかそこらだ。いや、いま話していたのは、十のマイナス五乗センチメートルくらいからのやつさ。太陽の中にも、ひとつくらいあるかも——」

…(中略)…

「そう、質量十の十七乗グラム、直径十のマイナス十一乗センチくらいかな。それだと、一日に数個の原子をのみこみことになる」

…(中略)…

「小惑星の内部にも、量子ブラックホールがあるかもしれない。小型の小惑星でも、とくに量子ブラックホールが帯電していれば、容易にとらえることができる。ごぞんじのとおり、ブラックホールは、電気を帯びる場合が——」

…(中略)…

「もし帯電していなかった帯電させて、電磁場で操作するんだ。振動させれば重力放射をつくりだせる。この中にも、ひとつあるはずなんだ」異星人の通信機をたたいてみせながら、彼はいった。

…(中略)…

一週間のうちに、基地の全員が、リアのことを「ホール・マン」とよぶようになった。頭の中にブラックホールのある「穴男(ホール・マン)」というわけだ。

(訳書よりの引用部はこことまでとする —※—)

(※1 尚、原著 The Hole Man にあつては “ There was a time when black holes of all sizes could form. That was during the Big Bang, the explosion that started the expanding universe. The forces in that blast could have compressed little local vortices of matter past the Swarzschild radius. What that left behind -- the smallest ones, anyway -- we call quantum black holes.” / [. . .] / He called, "Just how big a thing are you talking about? Could I pick one up and throw it at you?" / "You'd disappear into one that size," Lear said seriously. "A black hole the mass of the Earth would only be a centimeter across. No, I'm talking about

things from 10^{-5} grams on up. There could be one at the center of the Sun -- "[...] / "Say, 10^{17} grams in mass and 10^{-11} centimeters across. It would be swallowing a few atoms a day." / [...] / "There could be quantum black holes in asteroids. A small asteroid could capture a quantum black hole easily enough, especially if it was charged; a black hole can hold a charge, you know -- "[...] / **"You put a charge on it, if it hasn't got one already, and then you manipulate it with electromagnetic fields. You can vibrate it to make gravity radiation. I think I've got one in here," he said, patting the alien communicator.** / [...] / Within a week the whole base was referring to Lear as " the Hole Man," the man with the black hole between his ears. ”との箇所が引用なしたところの原著該当表記部となる)

(※2: 筆者自身にも過てる予断を一時期惹起させたところとして上にあつては「地球ほどの質量をもったブラックホールは、さしわたし一センチかそこらだ。いや、いま話していたのは、十のマイナス五乗センチメートルくらいからのやつさ。太陽の中にも、ひとつくらいあるかも——」 “ A black hole the mass of the Earth would only be a centimeter across. No, I'm talking about things from 10^{-5} grams on up. There could be one at the center of the Sun -- ”との表記がなされている。が、については地球は「さしわたし(直径)1cm」以下というより「半径0.9cm」以下に圧縮する(シュヴァルツシルト半径が0.9センチとなる質量の天体として「半径: Radius」0.9cm以下に圧縮する)とブラックホールになるとのところがより正確な表現であろうと受けとれる ——地球をブラックホールにするとどれくらいのブラックホールになると想定されるか、とのことについての言われようの紹介は本稿の先の段、**出典(Source) 紹介の部 65(3)**にてもなしている ——)

(直下、**出典(Source) 紹介の部 7**にて取り上げたところの『世界 SF 大賞傑作選 8』p.270—p.273、『ホール・マン』掲載部よりの「同様に、」もの再度の原文引用をなすとして)

「ぼくのミスだ」査問が開かれたとき、リアは語った。「あのボタンにふれちゃいけないかったんだ。あれで、質点をささえている場のスイッチが切れたのにちがいない。で、それは落下した。その下に、チルドレイ船長がいたというわけだ」
…(中略)…

「いや。正確にはそうじゃない」とリア。「ぼくの推測だが、あの質量は十の十四乗グラムくらいだ。とすると、直径は、十のマイナス六乗オングストローム、原子よりずっと小さい。吸収はたいしたことはない。チルドレイを殺したのは、その質量が通りぬけたときの潮汐作用なんだ。床の物質が粉になって穴につまっていたね」
…(中略)…

リアは肩をすくめ、首をふった。「何による殺人だい?あの中にブラックホールがあるなんて、チルドレイは信じてもいなかった。あんたたちも、似たようなもんだ」唐突に、にやりと笑った。「裁判がどんなものになるか、考えてみろよ。検事が陪審団に、ことの次第に関する自分の考えを説明するところを想像するんだ。それにはまず、ブラックホールについて話さなきゃならない。つぎに量子ブラックホール。それから、兇器が発見できない理由、それが火星の中をつきぬけて動きまわっていることを、説明しなくちゃならないんだぜ!そこへいくまでに、笑い飛ばされて法廷からおん出されずにすんだとしても、その上さらに、原子よりも小さなそんなものがどうして人を殺せるのかということ、説明しなくちゃならないんだ!」

…(中略)…

それでおしまいだった。裁判が成立するみこみはない。並みの裁判官や陪審団に、検事側の話を理解させることなど、できっこないからだ。このまま明るみに出ずに終わる事実も、二、三あることだろう。

…(中略)…

いま、ブラックホールは、もうあの中にはない。通信機の質量を測ればブラックホールの質量が得られる

「ああそうか」

「それから、あの機械を切りひらけば、中がどうなっているかがわかる。どうやって操作したのかもね。ちえっ、ぼくがいま六つの子供だったらなあ」

「え?どうして?」

「いや……おしまいまで見とどけたいんだよ。数字など、あてにはならん。数年後か、数世紀後かわからないが、地球と木星のあいだにブラックホールができる。こいつは大きいから研究は容易だ。まあ、あと四〇年といったところか」

そのことばの意味に気づいたとき、ぼくは笑ったらしいのか叫んだらしいのかわからなかった。

…(中略)…

食えば食うほど大きくなり、体積は質量の三乗に比例してふえる。おそかれ早かれ、あいつは火星をのみこんでしまうんだ。そのときには、直径一ミリメートル弱ぐらいに成長しているだろう。肉眼でみえるぐらいの大きさだ」

(訳書よりの引用部はこことまでとする —※—)

(※尚、原著 The Hole Man にあつては “I made a mistake,” Lear told the rest of us at the inquest. “I should never have touched that particular button. It must have switched off the fields that held the mass in place. It just dropped. Captain Childrey was underneath.” / [. . .] / “No, not quite,” said Lear. “I’d guess it massed about 10^{14} grams. That only makes it 10^{-6} Angstrom across, much smaller than an atom. It wouldn’t have absorbed much. The damage was done to Childrey by tidal effects as it passed through him. You saw how it pulverized the material of the floor.” / Lear shrugged it off. “Murder with what? Childrey didn’t believe there was a black hole in there at all. Neither did many of you.” He smiled suddenly. “Can you imagine what the trial would be like? Imagine the prosecuting attorney trying to tell a jury what he thinks happened. First he’s got to tell them what a black hole is. Then a quantum black hole. Then he’s got to explain why he doesn’t have the murder weapon, and where he left it, freely falling through Mars! And if he gets that far without being laughed out of court, he’s still got to explain how a thing smaller than an atom could hurt anyone!” / [. . .] / Obviously there would be no trial. No ordinary judge or jury could be expected to understand what the attorneys would be talking about. A couple of things never did get mentioned. / [. . .] / **Now the black hole isn’t in there anymore. I can get the mass of the black hole by taking the mass of the communicator alone.** “Oh.” “And I can cut the machine open, see what’s inside. How they controlled it. Damn it, I wish I were six years old.” “What? Why?” “Well ... I don’t have the times straightened out. The math is chancy. Either a few years from now, or a few centuries, there’s going to be a black hole between Earth and Jupiter. It’ll be big enough to study. I think about forty years.” When I realized what he was implying, I didn’t know whether to laugh or scream. [. . .] “Well, remember that it absorbs everything it comes near. A nucleus here, an electron there ... and it’s not just waiting for atoms to fall into it. Its gravity is ferocious, and it’s falling back and forth through the center of

the planet, sweeping up matter. The more it eats, the bigger it gets, with its volume going up as the cube of the mass. Sooner or later, yes, it'll absorb Mars. By then it'll be just less than a millimeter across. Big enough to see." ”との箇所が引用なしたところが該当表記部となる)

以上、再掲としての引用をなしてきたのは

[『ホール・マン』という作品にあって[火星で発見された異星人重力波通信機]に[動力源]として閉じ込められていた[ミニ・ブラックホール]が火星探査の科学者 — 上役と揉めていたリアとキャラクター名振られての登場人物— に解放され、解放されたそちらブラックホールが科学者上役を銃弾のように殺す凶器となりもしたとのたこと(そして、その漏出ブラックホールによる殺害は凶器不分明ゆえに裁判にもならないとのこと)、またもってして、ブラックホールが成長して地球と木星の間にブラックホールができあがるのが臭わされているとのこと]

が書き記されているとの部となる (:先だって引用なした英文 Wikipedia [Hole Man] 項目の表記、 “ One scientist believes that at the center of the device is a tiny black hole, but his superior does not believe him. During a heated argument with his superior, the scientist turns off the containment field, releasing the black hole. ” 「(同作『ホール・マン』のあらすじは)その上役は信じていないことだったが、ある科学者が(火星での異星人遺構にて発見された)装置の中枢に極微ブラックホールが収納されていると信じていた。上役との議論が極まっての折、同科学者はその装置の防護壁を無効化、ブラックホールを開放してしまう(とのものである)」とのところの細かい内容となる)。

そうもした粗筋に見る、

[(小説『ホール・マン』にあって主軸をなす) [ブラックホールを用いての重力波通信機]]

とはそれ専門の科学者(重力波探査に力を入れてきたとの科学者である Robert L Forward)の言い様を踏襲してなされているといった筋目のものともなる (:本稿にての先だっての段でロバート・フォワードの著述 **Future Magic HOW TODAY'S SCIENCE FICTION WILL BECOME TOMORROW'S REALITY** (邦題)『SF はどこまで実現するか 重力通信からブラックホール工学まで』(講談社ブルーバックス)より(その 29 ページから 30 ページの内容を再引用するとして) “ 重力通信にも同じような魔法の物質が必要だ。光速近くで動かせる質量が高密度に詰まった「質量伝導体」が必要なのだ。残念ながら普通の物質は密度がそう高くない。というのも原子は大部分が空で、質量のほとんどが原子中央の小さく高密度な原子核にあるからである。そして原子の外郭を成す弾性のある電子の雲が原子の運動速度を音速に制限している。ミニ・ブラックホールを発見し、制御することさえできれば、その強力な重力場の小さな源を振動もしくは回転させて、大量の重力放射を発生できるようになるかもしれない。リチャード・メツナーらの指摘によると、帯電したミニ・ブラック・ホールは、電磁波を重力波に変換する方法の一つかもしれない。電磁波はブラック・ホールの電荷と相互作用するし、重力波はブラックホールの質量と強く結びついているので、この電荷と質量相互の結びつきを介して、電磁場を重力場と結びつけられる。メツナーは断面を計算し、予想通りそれがきわめて小さいことを発見した。しかし興味深いことに、電磁波と重力波の波長がミニ・ブラック・ホールのサイズ(これは原子よりもさらに小さい)よりかなり大きい場合、ブラック・ホールの細部には関係がないことがわかった。つまりブラック・ホールであろうがなかろうが関係ないのだ。したがってブラック・ホール以外の物体、電子や陽子のように電荷だけでなく質量も持つものも、電磁放射を重力放射に相互変換できるのだ。もし多数の電子が全部いっばいに動けば、変換効率は電子の数の二乗に比例する” (ここまでを再引用部とする)との記述を引いたとの部に関わるところのものである)。

細かい内容のことは以上として問題なのは [ブラックホールを用いての重力波通信機] を登場させているとの同『ホール・マン』が

[加速器 LHC におけるブラックホール生成の異様な式での予見的言及に関わりもするようになっている]

とのことである。については以下、本稿前半部の内容を振り返っての表記を参照されたい。

本稿前半部にあつて [事実 A] から [事実 F] と分類してそれらの記録的事実としての実在の証示に努めてきたことら、うち、小説『ホールマン』の予見的側面に関わるところの [事実 F] から [事実 J] (と振つてのことら) の再掲をなすとして

[事実 F]

1974 年に初出を見た極めて長きタイトルの SF 小説作品として、

Adrift Just off the Islets of Langerhans:Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W
(邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』

という作品が存在している。

同作、1975 年、米国の権威あるサイエンス・フィクション分野の賞として認知されているヒューゴ賞 Hugo Award を(同賞が長編・中長編(ノベラ)・中編(ノベレット)・短編と受賞分野が語数によって分たれている中で)[中編 Novelette 分野]にて受賞した作品となっている。

その小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は作中、

[15 兆電子ボルトの CEERN(CERN ならぬ CEERN)の粒子加速器]
なるものを登場させている、とのものである。

**Adrift Just off the Islets of
Langerhans:Latitude 38°54'N,
Longitude 77°00'13W**
(1974)

(邦題 『北緯38度54分、西経77度0分
13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)

[事実 G]

上の[事実 F]にて挙げた小説『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[SF 小説大賞ヒューゴ賞を受賞した作品を収めた傑作撰集](英文 Wikipedia にて The Hugo Winners とのその傑作撰集のためだけの項目が設けられているその方面—サイエンス・フィクションの分野に志向性ある向き—では著名な傑作選)にて

The Hole Man 『ホール・マン』(という 1974 年初出の作品)

という作品と(原著・和訳版版双方ともに)[連続掲載]されているとの作品となる(:中

編分野のヒューゴ賞受賞作品と短編分野のヒューゴ賞受賞作品が連続掲載されるようになってきているとの式で(定例化してのかたちで)当該傑作撰体裁が定められているために、である)。

ここ([事実G]に対する言及部)にて挙げている The Hole Man『ホール・マン』という小説作品は 一同文に文献的事実の問題として—

[極微ブラックホールのケージ(容器)より漏れ出しての暴発を描く小説]
となっている。

[事実H]

上の[事実F]と[事実G]の摘示(容易に後追いできるとの該当部引用による摘示)によって

[15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の粒子加速器を登場させている小説] ([事実F]の言及部にて挙げた小説)
[極微ブラックホールの暴発を描く小説] ([事実G]の言及部にて挙げた小説)

が著名な米国SF賞を受賞したSF傑作選の中で(そうなるべくも定例化しての当該傑作撰体裁が定められているため)連結させられていると示すことができるようになってい
るわけであるが、取り上げての小説の間には
[「配置面」([連続掲載]との配置面)以外の連結関係]
が成立しもしている。

その点、[事実F]に対する言及部に挙げた小説(『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』)の主人公は作中、ラリー「Larry」との愛称(通称)で頻繁に呼称され、その主人公の正式の姓はローレンス(Lawrence)であるとの設定が採用されている。

他面、[事実G]の言及部にて問題視した小説(『ホール・マン』)の作者たるSF作家の愛称(通称)はラリー「Larry」であり、その正式名称はローレンス(Laurence)であるとのことが存する。

**Adrift Just off the Islets of
Langerhans:Latitude 38°54'N,
Longitude 77°00'13W
(1974)**
| The Hugo Winners Volume 3
**The Hole Man
(1974)**

[事実I]

[事実F]の部にてその名を挙げた小説 Adrift Just off the Islets of Langerhans :

Latitude 38°54'N,Longitude77°00'13W(邦題)『北緯 38 度 54 分、西経 77 度 0 分 13 秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』は

[欧州の加速器運営機関(CERNならぬCEERNなどと呼称される 15TeV 加速器を運用する機関)のビーム照射装置でもって[自らを縮退させての極小の分身]をホログラム上に造り出した主人公がそちら分身を己の[「底無し」「黒々とした」「渦を巻く」へそ]に落とし込み、もって、己の魂に引導を渡させるとの粗筋の作品]

「とも」になっている。

1974年刊行作品らに認められる "文献的事実" の問題

[15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の粒子加速器を運用する機関によるビーム照射によって主人公をホログラム上に投影された超マイクロサイズの分身へと圧縮して、その分身を黒々と渦を巻く底無しの穴に放り込むとの筋立ての小説]の 実在 (: 本稿にあっての [出典(Source) 紹介の部6] および [出典(Source) 紹介の部9] にての原著および訳書よりの引用で摘示)

七〇年代の賞の受賞態様に起因する七〇年代初出の撰集にての該当作品ら連続掲載 / 一方の小説作品の作中明示されている主人公のファースト・ネーム正式呼称と愛称がもう一方の作品の作者のファースト・ネームの正式呼称・愛称と同一となっているとの関係性の存在 (: 本稿にての [出典(Source) 紹介の部8] で解説)

[加速器の類は一切登場「しない」ものの、ケージ (容器) より漏れ出た極微ブラックホールが惑星を呑み込むとの筋立ての (上記小説作品とは別の他作家由来) 小説]の 実在 (: 本稿にあっての [出典(Source) 紹介の部7] にての原著および訳書よりの引用で摘示)

■前世紀末葉（1999 — ）から今世紀初頭にかけての科学界論調

加速器によるブラックホール生成の可能性が「リスク」となるのではないかと研究機関部外の間人よりの質問が寄せられる（その質問の背景にあった考えが「粒子加速器が原初宇宙の高エネルギー状態を再現するとされること」と「原初宇宙には極微ブラックホールがあったとされること」に対する専門外の間人よりの推論であったと一般に説明されていることも本稿では解説している）。対して、研究機関ら（ブルックヘブン国立研究所およびCERN）は「今後実現されうるありとあらゆる粒子加速器によるブラックホール生成はありえない」との報告書を出す（：本稿では1999年における報告書らの内容（ブルックヘブン国立研究所およびCERNの報告書の内容）の原文引用 および2000年（2001年）にてのノーベル平和賞をバグウォッシュ会議を代表して受賞した物理学者フランチェスコ・カロジェロらの公衆に対する訴求を兼ねての論稿での申しようの原文引用を「出典(Source)紹介の部1」「出典(Source)紹介の部5」にてなしている）。

■2001年以降の新規理論に対する分析を受けての科学界の論調

余剰次元理論（1998年提唱）の発展動向を受け、同年（2001年）より権威を伴っての専門の物理学者らが「粒子加速器（LHC）による「年にして千万個単位のマイクロ・ブラックホールの生成」の可能性もある（生成されたブラックホールはホーキング輻射との現象で即時蒸発する）」との論稿を発表しだす（：本稿「出典(Source)紹介の部2」では表記のことにつき案件分析をなした米国法学者論稿よりの原文引用をなしている）。

■2003年以降の安全報告書にあつての明確化しての方向性

CERNが余剰次元理論によるブラックホール生成の可能性が観念されだした件につき、「潜在的な脅威」と看做しつつも「生成ブラックホールは即時に蒸発するから安全である」と専らに主張する報告書を出す（：本稿「出典(Source)紹介の部3」では表記のことにつき2003年のCERN安全報告書よりの原文引用をなしている）。

■2004年以降の科学界の変節（を受けての事後の安全報告書に見る兆候）

生成ブラックホール蒸発の論拠となっている理論、ホーキング輻射に対して専門の科学者が疑義を呈しだし、ホーキング輻射の発現に広くも疑義がもたれるようになる（：本稿「出典(Source)紹介の部3」では案件の解説をなしているとの米国法学者論稿およびホーキング輻射権威（William Unruh）の変節が現われているところの同権威の手になる論文よりの抜粋をなしている）。それを受けて、加速器実験機関は従前、ストレンジレット生成問題といった問題に対する安全性論拠として報告書の中で言及していたものである「宇宙線（宇宙を飛び交う高エネルギー放射線）現象と比較しての申しよう」をブラックホール生成問題に関して「も」強くも前面に押し出すようになる。

「文献的事実」の問題として摘示できるし、本稿にて実際に出典に依拠して呈示しているとの「変節」の流れ

「背景」が問題になるとの時期的不一致のありようが垣間見れる。

1974年刊行作品らに認められる「文献的事実」の問題

「15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の

1974年刊行作品らに認められる"文献的事実"
の問題

[15兆電子ボルトのCEERN(CERNならぬCEERN)の
粒子加速器を運用する機関によるビーム照射によって主
人公をホログラム上に投影された超マイクロサイズの分身へ
と圧縮して、その分身を黒々と渦を巻く底無しの穴に放り
込むとの筋立ての小説]の 実在 (: 本稿にあっての
[出典(Source) 紹介の部6] および [出典(Source)
紹介の部9] にての原著および訳書よりの引用で摘示)

七〇年代の賞の受賞態様に起因する七〇年
代初出の撰集にての該当作品ら連続掲載
／ 一方の小説作品の作中明示されてい
る主人公のファースト・ネーム正式呼称と
愛称がもう一方の作品の作者のファースト・
ネームの正式呼称・愛称と同一となってい
るとの関係性の存在 (: 本稿にての [出典
(Source) 紹介の部8] で解説)

[加速器の類は一切登場「しない」ものの、ケージ (容器)
より漏れ出た極微ブラックホールが惑星を呑み込むとの
筋立ての (上記小説作品とは別の他作家由来) 小説]
の 実在 (: 本稿にあっての [出典(Source) 紹介の部7]
にての原著および訳書よりの引用で摘示)

[事実 J]

・ [1974年に初出の小説の中に登場する架空のCEERNの15兆電子ボルト (fifteen trillion electron volts) 加速器] は [現実世界でCERNが当時(1974年)にあって運用していた加速器 (ISRと呼ばれるハドロン加速器)] よりも 200倍超の規模のエネルギーを実現するとの [設定] のものであった。

・ [1974年初出小説に見る15兆電子ボルト加速器] のような「兆」の単位に突入しての一兆電子ボルトを超える加速器の建設構想計画が [青写真] として実験機関関係者意中に持ち上がったのは (小説刊行の1年後との) 1975年以降である (との加速器実験機関由来の内部資料が存在している)。

・ [現在CERNが運用するLHC] が実現しうる最大出力は [(重心衝突系エネルギー) 14兆電子ボルト] となっており、それに比して、[1974年に初出の小説に登場する (架空の) CERNならぬCEERNの15兆電子ボルト加速器] はたかだかも 1.07倍程度しか強力なものにすぎない (⇒ 15TeV:14TeV=1.07(...):1.00)。 そうしたかた

ちで1974年初出の加速器は出力との性能で見てもあまりにも今日のLHCに近似している(尚、兆単位の加速器の実現可能性さえ取り沙汰されなかった往時(74年)にはLHC計画は当然に策定さえされていなかった)。

要するに、Adrift Just off the Islets of Langerhans : Latitude 38°54'N, Longitude 77°00'13W(邦題)『北緯38度54分、西経77度0分13秒 ランゲルハンス島沖を漂流中』という作品は

[往時70年代のCERN運営加速器(ISR)に比して200倍超も強力なるCEERN加速器なるもの](それは小説刊行時、構想だにされていなかった規模の加速器であると研究機関文書にて記載されている兆単位の電子ボルト加速器ともなる)

を登場させており、かつもって、その架空のCEERN加速器なるものは

[(指数関数的に出力を増大させてきたとの加速器進化動向にあつて)今日のLHCに比しては小数点2桁、数パーセントの誤差ぐらいしかないほどに出力が近似しているとのもの]

ともなっているとのことがある。

以上、振り返つての内容 —文献的事実としての論拠を本稿にあつての(出典(Source)紹介の部1から出典(Source)紹介の部5に続いての)出典(Source)紹介の部6から出典(Source)紹介の部10にて一次資料原文引用のみからひたすらに指し示しているとの内容— を顧慮いただければ、何が具体的にどう、

[重力波通信を作中にて主軸として据えている小説作品『ホール・マン』]

が[奇怪なる予見「的」言及]の問題にこれ客観的に相通ずるところとなっているのか、ご理解いただくことか、とは思う(付記として:直訳すれば、(安部公房の小説『箱男』ではないが)、『穴男』ともなろう同小説作品 The Hole Man、綴り・響きの面では[全人類](The "Whole" Man)とも題名見紛いもしよう作品ではある。といった響きの問題に関して述べておけば、『ホールマン』作者(ラリー・ニーヴンという作家)はその作品にダブル・ミーニング(Double Meaning)をよくも込める作家と語られているとの作家ともなる。和文ウィキペディア[ラリー・ニーヴン]項目より引用なせば、(以下、そちら「現行にての」記載内容よりの引用なすとして)“ニーヴンは作品の題名に二重の意味(ダブル・ミーニング)を持たせることが多いが、日本語訳するとそれがなかなか伝わりにくいこともある。例えば短編「銀河の<核>へ」は原題が"At the Core"であり、決して"To the Core"ではない。その意味は最後の一文で判明する。『インテグラル・ツリー』には積分法の記号(インテグラル)によく似た形状の木が出てくるが、その木は同時にそこに住む生き物にとって「不可欠(integral)」なものでもある”(現行にてのウィキペディア記載よりの引用部はここまでとする)といった具合に、である。だが、だからと言って、筆者としては作家ラリー・ニーヴン個人に[全人類(ホール・マン)の行く末・末路]について「予見的言及と繋がりもする」との『ホール・マン』というダブル・ミーニング臭あるタイトルの作品の描写でもってして警鐘を鳴らそうとしたとの意図があつたとは考えていない。露も考えていない。であれば、ラリー・ニーヴンはLHCに反対運動のピケでも張っているところであろう?だが、ニーヴンはそんなことはしていない(筆者が現行にあつての情報から把握する限りは、である)。彼ニーヴンはテロにまつわって米国政府に助言するアドバイザー・ボードに加わっているともされるわけだが、加速器については何の非も鳴らしていない(と

見受けられるようになってきている)。いや、にとどまらず、この世界では[LHCに対する反対運動]をやろうとの人間がまったく見受けられない。海外ではウォルター・ワグナーとルイス・サンチョら、あるいはオートー・レスラーといった向き(以上の向き挙動については訴訟動向との兼ね合いで本稿の前半部にて多少なりとも解説している)、そして、海外小規模団体が同じくこのことをやろうとして何の相手にもされていないとのさまが見受けられる「のみ」であり、インターネットの検索動向ひとつとってもLHCのブラックホール生成問題について精査しようとの向きはマス(総量)としての統計データとして「ほとんどいない」とのことを特定している(であるから、(行政訴訟など自身が従前、実行した挙に対する反応も込みにして)、筆者も自身のやろうとしていることに建設的反応が得られるなどとのことについて何の希望的観測も抱いていない。が、そうしたある種、[希望の喪失状況に近い墜落直前の飛行機低空飛行の如き心境]にての動きをなしてきた中でも怒りに打ち震えるとの(悪い意味での)感情のたかまりはこの身からして何度もおぼえている。加速器の問題につきまとう欺瞞性に非を鳴らさんとしてきた中で詐欺師や宗教の手合い、そういう輩らからふざけたボールを思い出したように投げかけられてきたことが何度かあるのである。そうした陋劣な手合いらに由来する[人を食った態度(詐欺師といった相応の人種がカモにする相手のつけいりやすさの程を計るためにまずもって意図的に投げるというやんわりとした死球が如くふざけた態度)]を伴った相応のアクション—褒め殺しなど諸種妨害挙動のことがありありと観念される動き—をこの身がなされもした折には流石に[内心を蝕む怒り]で身を御しかねそうになったわけだが(汚い言葉であれだが、「こいつら、何がしたい、何をやろうというんだ!」との内心の怒りをこの身からして御しかねたとのことはあったわけだが)、愚痴めかした話ともなるのでこれ以上は書かない)。

ここで申し述べるが、先だってもその特質について解説してきたように重力(波)とは「(多世界解釈における)他世界間を浸潤する」とされるものである。

そうした重力(波)の如きもの、[LHCにおけるブラックホール生成問題に相通ずる奇怪なる予見的言及]に特定小説作品らを介して相通ずるようになってきているとの重力波の如きものが、である。[帯電したブラックホールを捉え、かつもってして、それを[縮退炉](こちら縮退炉については下にその特性について解説する)のようなものとして利用できるとの水準の「ここではない世界の」文明]によって自儘(じま)に利用されていたらば、どうか。

(先行するところの本稿内容を押さえていない向きらには専門用語だらけの意味不明な申し分と聞こえるにとどまることか、とおもんばかりなしつつもそこを敢えて「委細端折っての式で」再言及するところとして) LHC 実験にあっては

[余剰次元 —この場合の余剰次元とは(下にて再度もの解説をなすように)空間の脇にコンパクトに入れ込まれた極小のポケットのようなものであるとの文脈のものであるとされ、普通人が想起するような別次元のことを指すの「ではない」— の理論]

のために従前、プランク・エネルギーを極小領域に投下しなければブラックホール生成はありえないとされてきた、それがブラックホール生成はテラ・エレクトロン・ボルト単位のエネルギーの極小領域投下によっても「重力が強くなって」実現できるようになるとここ十数年で考えられるに至ったとされるわけだが(先だっても詳述なしてきたことである)、そうした理論動向の機微の問題とは圧倒的に意味合いの異なるところとして、こことは異なる世界から針が刺されるように重力が投下されてきて(それは人間存在一般をして[予言的言及をも知らずになそうとの愚劣な糸繰り人形][偽物ばかりにしか目を向けぬ、存在自体が紛い物であるとの糸繰り人形]にしつらえるのに歴年、用いられてきた機序「たりうる」との仮定について先述してきた複数世界を貫通する重力の投下でもある)、隠れた別世界よりの作用さなければ無害であったLHCが我々全員を皆殺しにする木製の馬に化けるとのことになりうる、そうしたことをここでは申し述べているのである。

とにかくも、である。上の重力波通信にまつわっての予見的言及の問題の再掲部をもってして半面にて、でもお分かりいただけるかとは思。何故もって手前、本稿筆者が脇に逸れての半ばもの余事記載と表しつつも重力波のことなどを延々取り上げてきたのか、を。

次いで、

[いくつか注記したいこと]（[縮退炉にまつわる加速器実験関係者申しよう] および [余剰次元理論にまつわっての機微] について注記したいこと）

を下に取り上げたうえで、[さらにもってしての訴求]を返す刀でなし、「複数世界を貫通するとされる」重力波について長々と取り上げてきたとの[半ばもの余事記載]（と明示しての部）を終えたい。そして、何故もってしてノルウェイ・スパイラルのことを取り上げたのか、そちらノルウェイ・スパイラルにまつわる奇態なる先覚的言及文物 —[パラレル・ワールド]のことを扱っている文物— が[LHCに通ずる嗜虐的反对話法を帯びている節ある著名作（米国発でテレビドラマ化されもしている著名作）をものしている作家の手仕事]でもあるとのことを解説に入りたい。

[現代社会で取り沙汰されている【縮退炉】という科学概念についての補足として]

ここでは[縮退炉]（と日本語で訳が振られているブラックホールを用いてのものとして考案されているエネルギー・プラント）および[余剰次元理論]の両概念について遺漏なくもの理解を促すうえでの補足説明を（筆者この身の浅見さが足を引っ張らぬようにそれ専門の専門家言い様を重点的に引いていくとの式で）なしておくこととする。

まずもって[縮退炉]（と日本語で訳が振られているブラックホールを用いてのものとして考案されているエネルギー・プラント）についてから解説なしておく。

それにつき、先だつての段で

（再度の引用をなすとして）

“重力通信にも同じような魔法の物質が必要だ。光速近くで動かせる質量が高密度に詰まった「質量伝導体」が必要なのだ。残念ながら普通の物質は密度がそう高くない。というのも原子は大部分が空で、質量のほとんどが原子中央の小さく高密度な原子核にあるからである。そして原子の外郭を成す弾性のある電子の雲が原子の運動速度を音速に制限している。ミニ・ブラックホールを発見し、制御することさえできれば、その強力な重力場の小さな源を振動もしくは回転させて、大量の重力放射を発生できるようになるかもしれない”

との記述を **Future Magic HOW TODAY'S SCIENCE FICTION WILL BECOME**

TOMORROW'S REALITY (邦題)『SF ほどこまで実現するか 重力通信からブラックホール工学まで』(講談社ブルーバックス)との著作より引いているようにブラックホールを捕獲して、(重力波通信などに用いっつも)無尽蔵の電力を得ようとの発想法があり、それが詰るところ、[縮退炉]にまつわっての発想法となる。

その[縮退炉]が「相応の」加速器実験実験関係者 —海外公的研究機関の長に値する研究者ら— によって

[LHCによって安定性を伴ったブラックホール残滓(ブラックホール・レムナンツ)が得られるかもしれない。それをして電力供給源に用いることで無限の電力が約束されることになるかもしれない]

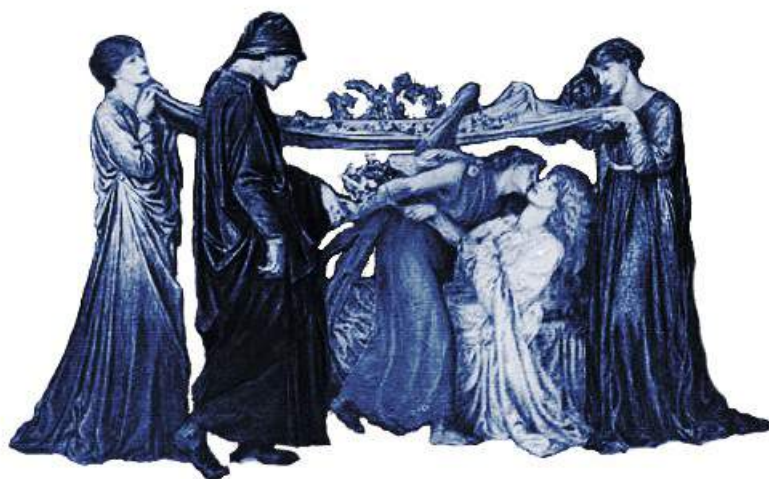
とのかたちで引き合いに出されているとのことが「ある」（:色々と資料収集していた筆者も門外漢ながらも「この者達、本当に正気なのか?」と思ったのだが、そして、見受けられるところの異常性・無責任性より筆者が関わった国内 LHC 関連行政訴訟 —国際的加速器マフィアの重要な国内にあつての国際的研究機関(大学付属機関)を被告と狙い定めての訴訟にして本稿筆者が原告として一審からして2年以上またいでかかずらわされてきた(そしてその訴求補助行為としての[効力のなさ]に心底厭気

がさした訴訟—でも(無駄・無為な感があったわけだが)そのことを扱った論稿の内容を[安定したブラックホールの生成可能性]との兼ね合いで書証として法廷に供したとのこともあるのだが、そういう言い様が本当になされている)。

同じくものことについて以下、出典紹介部を参照されたい。

出典(Source)紹介の部 87(5)

SOURCE 87(5)



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部 87(5)にあつては用語にまつわたの補足説明として

[「縮退炉」(といった呼称がなされるブラックホールを用いてのエネルギー供給機構)にまつわる専門家による言及のなされよう]

について紹介しておくこととする。

その点、[重力波通信機]なるものの技術的可能性それ自体についてはオンライン上の所々に公開されている論稿(本稿でも先立っての段で抜粋した The Utilization of High-Frequency Gravitational Waves for Global Communications との米軍関係者論稿など)に示されていることが【どこまで実現できるのか】についてさえ理解が及ばぬとの筆者が云々するようなことではないか、と思う。だが、[重力波通信機]にブラックホールがビルトインされ、それが通信機の動力源となっているというアイデアについては、そう、[縮退炉]というものに通ずるとのアイデアについては無理を承知のうえで論ずべくところがある、粒子加速器実験機関関係者やりよとの絡みで、そして、類似のものが極めて奇怪なる予見小説(『ホール・マン』)にあつて具現化しているものであるとの絡みで論ずべくところがあるのとらえるのでその点についてここ出典紹介部にて取り上げておくこととする。

まず、前提として[縮退炉]というものが[仮説上の発電機構]として一部の未来予測家にいかよう

り上げられているのか、その世間的説明のなされようを紹介することからはじめる。

(直下、和文ウィキペディア[縮退炉]項目の現行記述よりの原文引用をなすとして)

縮退炉とはサイエンス・フィクション作品に登場する、縮退した物質を利用してエネルギーを発生させる架空の装置である。ブラックホールエンジンなどもこれに類するものであると思われる。

(中略)

ブラックホールは周囲の質量を吸収することによって成長する一方、ホーキング放射によって質量をエネルギーに変換しながら蒸発しており、ブラックホールの質量が小さければ小さいほど蒸発速度＝エネルギーの放出速度は大きくなる。したがって極小のブラックホールに適切な量の質量を投入し続ければ、ブラックホールの成長と蒸発が平衡状態になり、ブラックホールを一定の大きさに維持することができる。ブラックホールの生成(および保持)に必要なエネルギーをブラックホールが蒸発するときに放出されるエネルギーよりも小さくすることができれば、極短時間で直接的に質量をエネルギーへと変換する極めて効率の高い動力源として利用することができる。しかも、理論的には投入された質量が100%エネルギーになり、核分裂や核融合と違って廃棄物が全く残らない上に質量さえあれば何でも燃料にできるというメリットがある。

(引用部はここまでとする)

以上、世間的説明のなされよう、和文ウィキペディアにあつての現行の記述を引用したところで LHC 実験関係者による論稿、

Stable TeV - Black Hole Remnants at the LHC: Discovery through Di-Jet Suppression, Mono-Jet Emission and a Supersonic Boom in the Quark-Gluon Plasma (『LHC にての安定的な TeV 領域ブラックホールの残滓:クォーク・グルーオン・プラズマにての Di ジェット圧力およびモノジェット放出および超衝撃波を通じての発見』とでもタイトル訳すべき論文でオンライン上の論稿配布サーバー arXiv より配布されており、表記タイトルを検索エンジンに入力することで容易に捕捉・ダウンロードできるとの論稿)

よりの原文引用を下になすこととする。

(直下、Stable TeV - Black Hole Remnants at the LHC: Discovery through Di-Jet Suppression, Mono-Jet Emission and a Supersonic Boom in the Quark-Gluon Plasma にての9と振られた頁よりの原文引用をなすとして)

If BHRs (Stable Remnants) are made available by the LHC or the NLC and can be used to convert mass in energy, then the total 2050 yearly world energy consumption of roughly 10^{21} Joule can be covered by just ~ 10 tons of arbitrary material, converted to radiation by the Hawking process via $m = E/c^2 = 10^{21} \text{ J} / (3 \cdot 10^8 \text{ m/s})^2 = 10^4 \text{ kg}$

(補つてももの拙訳として)

「仮に BHRs (Black Hole Remnants / 「蒸発しなかった」場合の安定化してのブラックホール残滓) が LHC ないし NLC (訳注:新規加速器こと New Linear

Collider の略称/ILC 構想として筆者も動向を望見してきた国内加速器推進勢力の「活躍」もあって日本国内に敷設予定もあるところの国際次世代加速器) によって生成されて利用可能なものとなり、そして、その質量をエネルギーに変換できるようになるとすれば、それはおおよそ[10の21乗]ジュールとなるだろうとの概算にての2050年における通年全世界使用エネルギー消費量を

[ホーキングプロセスによっての放射へと(かの $E=mc^2$ を多少変形させての) $[m(\text{質量}) = E/c^2 = 10^{21} \text{ J} / (3 \cdot 10^8 \text{ m/s})^2 = 10^4 \text{ kg}]$ の式を通じて変換可能なほんの10トン単位の任意抽出の物質]

によってまかなえるものとなるだろう ——(訳注:引用部に見てとれる2050年度の全世界エネルギー需要[10の21乗]ジュールについてであるが、英文 Wikipedia[World energy consumption]項目などにて[2008年時点での全世界のエネルギー消費量]が[474エクサジュール]と表記されている(In 2008, total worldwide energy consumption was 474 exajoules (132,000 TWh)と表記されている)、すなわち、2008年のエネルギー消費量が[[10の20乗]×4.74]ジュールとされている中でそれをおおよそ2倍にしての熱量である[10の21乗]ジュールを2050年の通年ベースでの全世界消費エネルギーと見積もっているのだと普通には想起されるところである)——」

(補つても拙訳付しての引用部はここまでとする —※—)

(※尚、表記の引用部では「僅か10トンの物質から2050年度にあつての通年世界消費エネルギーがまかなえるのが縮退炉である」と表記されていることをもってして(筆者の誤訳含めての)「何かの間違いであろう」と思われる向きもあるかもしれないが、然にあらざるとのことがある。につき、アインシュタインの相対性理論の式 $E=MC^2$ というのは「絶大なエネルギーを僅かな物質から導出する式」(逆を述べれば)「絶大なエネルギーを用いても僅かな物質しか[物質精製]はなせない」とのことを意味する式ともなっている。などと述べても、『一知半解の人間が過てる科学理解に基づいて妙ちくりんなことを鼓吹しているのだ』と思われる向きもあるかもしれないと考えるから(この国には殊にそういう偏見を助長しているといった式の[オンライン上にての「発言」する狂人ないし詐狂者]が多いからそうも考える)、そこからしてこの身申しようには典拠がある(筆者は確たる典拠なきところで頭の具合のよろしくはないことを述べるとの種別の人間では断じてない)とのことを示すべくもの引用をなしておくこととする。(以下、アイザック・アシモフ、元々、化学の分野で博士号を取ったとの同男が勉強して門外漢向けの核物理学入門書をその筆業の一貫として出していたとのことである「実にもって分かり易き」著作 **Inside the Atom**『原子の内幕—百万人の核物理学入門』(原著1956年刊/訳書の版元は学習研究社)にての69ページから70ページよりの引用をなすとして) “アインシュタインによれば、物質がエネルギーに変わるときは、作りだされるエネルギーの量は、こわされる物質の量に光の速度の2乗をかけあわせたものにひとしいという。光速度はひじょうに大きい数値であるから、ごく少量の物質もばく大な量のエネルギーをうみだすことになる。この逆もまたなりたつ。つまり、ひじょうに大きな量のエネルギーは、ひじょうに小さな量の物質に変わる。たとえば、6,000万キログラムのガソリンを燃やしてできるエネルギーは、1キログラムの物質の数分の1しか作りだすことができない” (引用部はここまでとする)。以上のように物質を無より生成するのは膨大なエネルギーを要するのに対して物質を破壊してエネルギーにする分には逆のことが成り立つ。ただし、破壊の仕方が問

題になる。それを「最も効率的に」なす] のがサイズを一定サイズに留めてのブラックホールを用いての[縮退炉]であるとされており、については(和文ウィキペディア[縮退炉]項目より「再度の」引用をなすとして)“ブラックホールの生成(および保持)に必要なエネルギーをブラックホールが蒸発するときに放出されるエネルギーよりも小さくすることができれば、極短時間で直接的に質量をエネルギーへと変換する極めて効率の高い動力源として利用することができる”(引用部はここまでとする)とされているわけである)

(出典(Source) 紹介の部 87(5) はここまでとする)

上の表記のタイトル(Stable TeV - Black Hole Remnants at the LHC: Discovery through Di-Jet Suppression, Mono-Jet Emission and a Supersonic Boom in the Quark-Gluon Plasma)から誰でも特定可能・ダウンロード可能との論稿はまさしくもの、

[縮退炉 (ブラックホールを安定化させることで歴大なエネルギーを効率よく取得しようとするもの)]

そのものの可能性を ——こともあろうに[LHC で生成されたブラックホールのありうべき残余物(レムナント)]を具にして—— LHC 実験関係者が論じているとのものであることが問題となる (この世界のありとあらゆるところで[生に満たぬ生]を生きているとの(半ばもの)脳死状態の人間にはいかに [自明なるところ] であっても【何が問題になるか】理解できないかもしれないが)。

それにつき、LHC 実験関係者が LHC で即時蒸発するブラックホールなどではなく、[縮退炉に利用出来るようなブラックホール] が生成されうるとしていること自体も当然に問題と映るのだが、よりもって問題なのは、である。そうした内容を有している論稿が粒子加速器実験にかかざらわっている関係者の中でも大物、しかも、「後に」(上の 2006 年の論稿が出た「後に」)LHC 実験の安全性を強調しての流布論稿 (権威サイドのものとして重んじられるもので[仮にブラックホールがホーキング輻射で蒸発しないものとして生成されてもそれは結局は安全である]との内容を有しているもの) を出しているとのドイツの大物物理学者 —ホルスト・シュテッカという学者/下の記述を参照されたい— に由来するものとなっているとのことである。

この身が無為なる争いが延々続くことになった (そして(仮借なくも述べ)「[相応の馬鹿ども]ないし[人間としての実質すら疑われるとの者達]のせいでは意義が減殺というより絶無の領域に突き落とされつつある」) 国内にて実行しての長期化して行政訴訟、ためにしての方策らの一として提訴していた行政訴訟で

「こういう申しようが貴殿らご同類の海外実験関係者より呈示されているのに貴殿らは全く LHC 実験グループ代表者間にてのリスクやりとり記録が残っていないというのか、ブラックホール生成による安全性はそこまで無謬なるものともいうのか！」

といった按配で国内の一部の実験関係者 ——平然と偽りをなすその体質についても(施設ディレクターとの電話でのやりとり記録の問題などを挙げ連ね) 訴訟で当方が指摘を証拠のみに基づいてなした者達でもある—— に対して法廷および法廷提出書面にて怒気帯びての書きようをなしていたにも関わることなのだが、上の [縮退炉] 実現の可能性を論じている(繰り返すが、「LHC で生成された安定化してのブラックホール残滓を用いることで 10トンの質量にて 2050 年の世界エネルギー需要と想定される[10 の 21 乗]ジュールをまかなうことができると考えられる」などとの主張をなしている)との arXiv のサーバー(コーネル大の運営する論稿配布サーバー)より誰でもダウンロード可能な論稿、

Stable TeV - Black Hole Remnants at the LHC: Discovery through Di-Jet Suppression, Mono-Jet Emission and a Supersonic Boom in the Quark-Gluon Plasma

の著者は

[加速器安全性を [安定化ブラックホールが生成されたケース] に対応して論じている
との論稿]

をも連名で世に出している者にして粒子加速器実験推進勢力の大物たる人間ともなっているのである。

具体的には(大学名称からして「ふさわしくもか」とも思えるのだが)ドイツのフランクフルトに在する学生数ドイツ最大のヨハン・ヴォルフガング・「ゲーテ」大学フランクフルト・アム・マイン(略称「ゲーテ」大学)に奉職する学究のホルスト・シュテッカーという人物、ドイツの高エネルギー物理学関連の加速器運営機関、[重イオン研究所](Gesellschaft für Schwerionenforschung)の所長を勤めている —— 英文 Wikipedia[Horst Stöcker]項目にも Horst Stöcker is the scientific chairman and CEO (director general) at the GSI Helmholtzzentrum für Schwerionenforschung とある通りである—— というドイツ人学究、国内裁判でその国内の出先の中枢がこの身筆者の相手方となった[加速器マフィア](「加速器で食っている」といった筋目の者達)の重鎮でもあるといった按配の人間が上論稿の著者である。

同ホルスト・シュテッカー(Horst Stöcker)は

Exclusion of black hole disaster scenarios at the LHC 『LHC によるブラックホールによる破局の排除』

というまた別の論稿(長期化した裁判の第一審で第5準備書面と銘打つての文書に付して筆者が関与しての裁判の法廷に提出したものである)を三名(その三名のうち、二名はドイツはヨハン・ヴォルフガング・「ゲーテ」大学の学究ら)の連名者の一人として世に出しており、オンライン上より誰でも同定できる(グーグル検索エンジン上にて論稿表題、**Exclusion of black hole disaster scenarios at the LHC** を入力・検索することで論稿配布サーバー arXiv より誰でもダウンロードできる)ところの同論文の中では

「生成ブラックホールは [安定化したもの] でも結局は安全である」

との論理が強くも前面に出されている。

表記の **Exclusion of black hole disaster scenarios at the LHC** との論稿にあつての 3 Possible black hole evolution paths [ありうべきブラックホール発展の経路] と記されている節の中の p.5 の表にて記されていることだが、ホーキング輻射発動ケース(そちらホーキング輻射がブラックホール生成の安全性主張の動向といかに関わるかについては本稿の前半部、[出典\(Source\)紹介の部1](#) から [出典\(Source\)紹介の部4](#) で属人的主観など問題にならぬかたちで入念なる指し示しに注力してきたとのものである)について以下のように大別されるうえでホーキング輻射が発現「しない」ケースでも結局は安全であるとの強調がなされている。

(オンラインダウンロード可能論稿 Exclusion of black hole disaster scenarios at the LHC『LHC によるブラックホールによる破局の排除』の p.5 にあつての LHC 実験で生成されうるブラックホールにつきそれを蒸発させしめるホーキング輻射発現の分類事項表記として)

[取るに足らぬほどの僅かな蒸発しかないケース](Negligible radiation)

— 電氣的に中性となっている(Neutralization)

— 中性となっていない(No neutralization)

[弱い蒸発を呈するケース](Weak radiation)

— より高いエネルギーを放射するケース(higher emission energy)

— 低いエネルギーを放射するケース(low emission energy)

[強い蒸発があるケース](Strong radiation)

以上の各別場合分けなししているケースあつて論稿 Exclusion of black hole disaster scenarios at the

LHC では "Negligible radiation" との [ホーキング放射がほとんど作用しないケース] (シュテッカ別論稿曰くの「ホーキング放射を利用しての」縮退炉の実用化を期待できないとの場合と親和性高きケースととれる) でも「結局は、」

「高エネルギーの宇宙線 (high-energetic-cosmic-ray) でブラックホールは生成されていないから安全である」

との申しようがなされている —— 論稿の 5 と振られてのページより引くとして “ As discussed in (D1-A) mini black holes with this property are ruled out by high energetic cosmic ray observations. One could further assume that the acquired net charge is radiated away without losing a significant amount of energy. This case is discussed in (D1-B) for two complementary scenarios which both show that high energy cosmic ray observations rule out any danger from such mini black holes. ” (前段表記を受けながらも極々単純化させての大要訳として) 「 [D1-A と分類されてのケース:ホーキング放射がまったくもって発現せずに生成されるブラックホールが電氣的に中性となっていないとのケース] では先述のようにこうした属性のミニ・ブラックホールは高エネルギー宇宙線にての観測状況から除外される (から問題ない)。さらに [D1-B と分類されてのケース:ホーキング放射がまったくもって発現せずに、かつ、ブラックホールの電荷が中性になっていると論じられてのケース] でもそのようなブラックホールに起因するいかような危険も高エネルギー宇宙線にての観測から除外される」との申しようがなされている —— (:同じくものことについては論稿原文それ自体を仔細に検討せずとも英文 Wikipedia [Safety of high-energy particle collision experiments] の現行にての記載内容 “ On 9 February 2009, a paper titled "Exclusion of black hole disaster scenarios at the LHC" was published in the journal Physics Letters B. The article, which summarizes proofs aimed at ruling out any possible black hole disaster at the LHC, relies on a number of new safety arguments as well as certain arguments already present in Giddings' and Mangano's paper "Astrophysical implications of hypothetical stable TeV-scale black holes". ” (大要)「2009年2月9日、Exclusion of black hole disaster scenarios at the LHC と題された論文(上にて抜粋のシュテッカから論文)が論文誌 Physics Letters B にて刊行を見、同論文は新発の多くの安全性論拠、ギディングスとマンガノの論稿 Astrophysical implications of hypothetical stable TeV-scale black holes にてすでに呈示されてのものを含んでの新発の多くの安全性論拠らを受けて LHC のブラックホールに起因の危険性を排除する論理を要約しているとのものであった」(英文ウィキペディアよりの引用部はここまでとする)から推し量れるようになっている —— なお、微少的なることながらも一応、言及しておくが、直上にて引用している現行にての英文 Wikipedia 表記では Exclusion of black hole disaster scenarios at the LHC との論稿の学会誌にての掲載時期が 2009年2月9日にあるとされているものの、arXiv のサイトより PDF 形式でダウンロードできるそちら同じくもの論稿の PDF 文書内発行時期表記は(差分が出てもおかしくはないところとして)2008年9月27日にての preprint(正式刊行「前」掲載)表記となっている ——)。

そうした LHC 安全性強調に使われている「2008年発の」論稿を著したとの権威筋 (ドイツの高エネルギー物理学関連の加速器運営機関、[重イオン研究所]の所長にしてゲーテ大学学究のホルスト・シュテッカー) に同じくも由来するとの他の論稿、先程問題視した縮退炉の可能性について言及しているとの論稿 (Stable TeV - Black Hole Remnants at the LHC: Discovery through Di-Jet Suppression, Mono-Jet Emission and a Supersonic Boom in the Quark-Gluon Plasma) にあって

(簡略化しつつ再表記・再引用するところとして)

「仮に BHRs(ブラックホール・レムナンツ/「蒸発しなかった」ブラックホール残滓)が LHC ないし NLC によって生成されてそれが利用可能ともなり、そして、その質量をエネルギーに変換できるようになるのだとすれば、それはおおよそ[10の21乗]ジュールとなるであろう 2050年の全世界使用エネルギーを[10トンのホーキング放射にて蒸発し続けるブラックホールに投下されるものの消費量]でまかなえるとのものとなるだろう」 (“ If BHRs (Stable Remnants) are made available by the LHC or the NLC and

can be used to convert mass in energy, then the total 2050 yearly world energy consumption of roughly 10^{21} Joule can be covered by just ~ 10 tons of arbitrary material, converted to radiation by the Hawking process via $m = E/c^2 = 10^{21} \text{ J} / (3 \cdot 10^8 \text{ m/s})^2 = 10^4 \text{ kg.}$ ”)

などとの記載がよりもって先行するところの 2006 年になされているのである。

上のような [縮退炉メカニズム] に通ずるところ、[ブラックホールを入れ込んでそれを作動因としての通信を行おうという発想法] に通ずるところのものが

[小説『ホール・マン』に登場する重力波通信機]

であると受け取れるようになっていて、そして、嗜虐的かつ露骨な予見的言及がそこに関わっていると受け取れるようになっていて (上にての振り返っての内容を参照のこと) のがこの世界である。同じくものことに【重力波の他世界浸潤可能性とありうべき [これまでの操作] と [これよりの破滅] の媒質としての側面】に悪魔的かつ嗜虐的なジョークの表出を見るような心境をこの身なぞは抱いている (: というのも『ホール・マン』という作品は — 繰り返すも — 「ホーキング輻射でブラックホールが仮に生成されても安全である」などという主張が目立って 2001 年以降になされた加速実験 (論稿抜粋したホルスト・シュテッカーのような類が [そこより縮退炉の可能性も開けるかもしれない] などと述べつつ推進してきた加速実験) について「時期的に奇怪な折に」ブラックホール生成なすとのことを「[予告出力精度 200 倍] とのかたちで」言及しているような作品と接合しているとのことがあるからである — ここだけ読む限りには意味不明な話となるのか、と当然に思うので、把握されていないとのことであれば、本稿の前半部、[出典\(Source\)紹介の部 6](#)から[出典\(Source\)紹介の部 10](#)を包摂する解説部をご覧いただきたいものである —)

[縮退炉] (と呼称されるブラックホール利用型エネルギー供給機構)の話はここまでとして、次いで、[余剰次元理論]にまつわっての解説、[余剰次元理論]とはそもそもどういうものなのかについての解説をなしておくこととする。

以下、

[1998 年から提唱されるに至った新規理論 — (空間の脇にコンパクトに織り込まれた余剰次元が存在することを予測する、との余剰次元にまつわる理論) — の帰結として逆二乗の法則「の破綻」の可能性が「つい最近より」観念されるようになったことが ブラックホール人為生成問題となるべくして結びついていること]

を指し示す出典として和書『「余剰次元」と逆二乗の破れ』(講談社刊行 / 著者は国内私学准教授の物理学者)よりの原文引用をなすこととする。

(直下、和書『「余剰次元」と逆二乗の破れ』(講談社ブルーバックス)p.146 から p.147 よりの原文引用をなすとして)

1998 年にアルカニハメド、ディモプロス、ドバリの 3 人が提案した模型、彼らの頭文字をつなげて呼ばれる通称 ADD 模型は、まさにコロンブスの卵であった。その内容は要約すると次の通りである。

1. 空間が三次元であるという日常感覚的な固定概念を捨てる。
2. 四次元目以上の「余剰次元」が存在する。その広がり「プランク長」と呼ばれる非常に小さな長さ程度であるという物理屋にとっての常識を捨てる。
3. 重力場は高次元空間方向にも伝播できるが、他の三つの相互作用、物質粒子は、三次元の「ブレーン」と呼ばれる膜に何らかの機構で閉じ込められると考える。
4. これらを仮定するだけで、三次元膜に住む我々にとって、重力だけが極端に

弱い理由を幾何学的に自然に説明できる。

(引用部はここまでとする)

(直下、上と同じくも和書『「余剰次元」と逆二乗の破れ』(講談社ブルーボックス)p.166よりの原文引用をなすとして)

さて、前節で見たように、ADD 模型とは、高次元でのプランクエネルギーが 1 テラ電子ボルト程度と仮定することでプランク長が高次元で変更される、という模型だった。すなわち、ADD 模型をそのまま受け取れば、1 テラ電子ボルトのエネルギーを集中させるとブラックホールが形成されるという結論になる。つまり、プランクエネルギーが修正されるという考えは、そのままブラックホールが形成されるエネルギーを修正する、という主張と組み替えることができる。よって、ADD 模型によれば高エネルギー衝突でブラックホールが形成されることは、計算するまでもなく当たり前のことなのだ。

(引用部はここまでとする)

以上、日本で流通している和書『「余剰次元」と逆二乗の破れ』の原文引用を通じて、

「(1998 年に呈示された)ADD 模型とは高次元でのプランクエネルギーが 1 テラ電子ボルト程度と仮定することでプランク長が高次元で変更される、という理論となっており、ADD 模型をそのまま受け取れば、1 テラ電子ボルトのエネルギーを集中させるとブラックホールが形成されるという結論になる。つまり、プランクエネルギーが修正されるという考えは、そのままブラックホールが形成されるエネルギーを修正する、という主張と組み替えることができる。よって、ADD 模型によれば高エネルギー衝突でブラックホールが形成されることは、計算するまでもなく当たり前のことなのだ」

とのことが国内の学者によって述べられていることを示した(※)。

(※上に原文引用したような申しよう——プランクエネルギー(本稿の先の段、**出典**(Source)紹介の部 21 から**出典**(Source)紹介の部 21-5(2))を包摂する解説部でも加速器によるブラックホール生成問題の始期との絡みでその特性につき言及済みのもの)によってのみしかブラックホール生成がなされえないとの従前観点が「1998 年の」ADD 模型呈示で「曲がった」との申しよう——がなされている件についての[付記]として

上の引用部では

「ADD 模型によれば高エネルギー衝突でブラックホールが形成されることは、計算するまでもなく当たり前のことなのだ」(p.166)

とのことが述べられているわけだが、同じくもの和書『「余剰次元」と逆二乗の破れ』(講談社ブルーボックス)では

「1999 年にてブルックヘブン国立加速器研究所やりように関してその 1999 年からしてブルックヘブン国立加速器研究所に奉職していた若手の間で余剰次元との絡みでブラックホール生成の噂が取り沙汰されていた」(『「余剰次元」と逆二乗の破れ』p.163—p.164)

との書きよう「も」またなされているとのことがある(上著作著者がまさしくものその往時、ブルックヘブン国立加速器研究所に在籍していたとの経緯が同じくもの書にて言及されたうえでそのように記載されている。なお、本稿の先の段でも言及文書を挙げて指し示しなしているように現実にブルックヘブン国立加速器研究所は1999年よりウォルター・ワグナーという人物によってブラックホール生成可能性が問題視されだした粒子加速器 RHIC 運営の研究機関となっている)。

しかし、国内のみで流通している国内学究によるそうした書かれよう、

「1999年にてブルックヘブン国立加速器研究所やりように関してその1999年からしてブルックヘブン国立加速器研究所に奉職していた若手の間で余剰次元との絡みでブラックホール生成の噂が取り沙汰されていた」

がなされていることにつき述べておけば、実験機関部外の人間ら・諸所組織体に対して[公式発表文書]で伝達されているところでは、

「1999年の段階では、」

「ブラックホール生成の可能性だに考えられていなかった」

と発表されていたとの経緯がある(：本稿前半部、[出典\(Source\)紹介の部1](#)を包摂する解説部では公式発表文書(ブルックヘブン国立加速器研究所)そのものよりの原文引用、そして、それら公式発表文書に対する米国法学者による解説論稿などよりの原文引用をなして、主観なぞ介在すべくもなくの[文献的事実]としてその通りとなっていること、指し示している)。

そうした1999年段階の論調が2001年に登場したエポックメイキングな論稿——**High energy colliders as black hole factories: The end of short distance physics** (カリフォルニア大学サンタバーバラ校所属の物理学者、スティーブン・ギイディングスらの手になる論稿)および**Black Holes at the Large Hadron Collider** (スタンフォード大の Savas Dimopoulos とブラウン大の Greg Landsberg らの手になる論稿)—— によって

「余剰次元まで顧慮するとブラックホール生成は大量になされうる」

との方向に「曲がった」ということ、そういう物言いが実験当事者機関および当該案件を分析している米国法律家によってなされていることを本稿前半部では指摘している([出典\(Source\)紹介の部2](#))。

にも関わらず、

「1999年にてブルックヘブン国立加速器研究所やりように関してその1999年からしてブルックヘブン国立加速器研究所に奉職していた若手の間で余剰次元 —1998年に提唱された余剰次元理論— との絡みでブラックホール生成の噂が取り沙汰されていた」

との物言いがブルックヘブン国立加速器研究所にて往時、研究をなしていたとのことである日本の物理学者に(同人物著書の『「余剰次元」と逆二乗の破れ』(講談社ブルーバックス)によって) なされているとのことがある——著者名を挙げていないのは[個人攻撃となりかねない]という下らぬこと(取り合うに足らぬ手合いらお得意の領分であろう、とのもの)をなすのが本稿の目的ではないので国内流通書籍の内容にて(校訂上のミスや著者の誤記・錯簡の類など)なにがしかの問題があるかもしれない場合を想定、わざと同書籍著者名を挙げていないとのことがある——。

海外研究機関の公式発表上の申しようと国内若手研究者としての著述者のそれに見る体験記録の間には齟齬・矛盾との関係(どちらか一方しか正しくはないとの関係)があるのである——くどくも申し述べるが、そこに傍からもってしての解説をなしちえる本稿筆者の主観は一切介在していない。広くも検討されてきた研究機関発表文書らに見る[文献的事実]の問題からそうした二律背反の帰結が導き出せる——。

であるから述べておが、

「本稿では先に問題視した論稿、パグウォッシュ会議を代表してノーベル物理学賞を受賞したフランチェスコ・カロジェロの論稿(Might a Laboratory Experiment Destroy Planet Earth?)に見る申しよう——本稿にての**出典(Source)紹介の部5**で長々と引いているとの申しよう——を含めて斯界の権威筋や実験機関が諸共、同じくもの申し分に集約するところの[2001年よりブラックホール生成がなされると考えられるようになった]との発表動向(1998年を境目にしてブラックホール生成がなされると目されるに至ったとの国内実験関係者の書籍に見る言と背馳・矛盾する発表動向)が正しいとの前提での話をなしている。

であるが、その申しように国内物理学者が申し述べているような側面で虚偽、研究機関の外の間人をたばかる悪質な構造的虚偽が働いている可能性も否定するものでもない」

以上、本稿——世間に容れられているところの常識的な話と世間では目立って取り上げられない「非」常識的な話を唯、堅い論拠(すべて出典明示に勤めてのもの)によってのみ橋渡しすることを念頭にもっているとの本稿——の基本的スタンスにつき申し述べたうえで「さらに、」書いておが、

「本稿筆者は権威由来の文書を文献的事実に関わるところとして原文引用するが、権威の嘘に知悉している、知悉させられることとなった人間として権威の申しようを首肯(頭から肯定)しているわけではない」。

(長くもなったが、ここまでをもってして ADD モデル——余剰次元モデル——に基づいての理論動向の変節に関しての表記とする)

(余剰次元理論にまつわる理論動向変転に関する込み入ったの解説からより包括的なところに戻るとして)

さて、

“ (1998年に呈示された)ADD模型とは高次元でのプランクエネルギーが1テラ電子ボルト程度と仮定することでプランク長が高次元で変更される、という模型となっており、ADD模型をそのまま受け取れば、1テラ電子ボルトのエネルギーを集中させるとブラックホールが形成されるという結論になる。つまり、プランクエネルギーが修正されるという考えは、そのままブラックホールが形成されるエネルギーを修正する、という主張と組み替えることができる。よって、ADD模型によれば高エネルギー衝突でブラックホールが形成されることは、計算するまでもなく当たり前のことなのだ ” (『「余剰次元」と逆二乗の破れ』p.166)

とのことが述べられているとのことは、換言すれば、

[1998年の段階より出始めた新規理論の帰結に則れば、(従前そうであったと見られて

いた)プランクエネルギーの領域に至らぬとも兆電子ボルト(テラエレクトロンボルト)にまでエネルギーを集中させた段階で(高次元にてのプランクエネルギーの修正を見て)「重力が強くなり」ブラックホールが生成されることになる]

とのことである。

に関しては日本の LHC 実験参画グループ元代表者に由来する文書となる、

『LHC 加速器の現状と CERN の将来計画』と題されての文書 (オンライン上にあってのそのままの文書タイトル名入力で現行捕捉、全文ダウンロードできるとの文書)

にても(本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 2](#)でも引用なしたところの同文書にての[166]および[167]との頁番号が付されたところよりの再度の引用をなすとして)

“1998年に提唱された ADD モデルでは余剰次元を導入することによってヒッグス粒子の質量の不安定性(階層性問題)を解決する。

このとき重力は TeV 領域で強くなり、

LHC での陽子衝突でブラックホールが生成され、ホーキング輻射のため 10^{-26} sec で蒸発すると予言された。これは理論屋にとって大変魅力ある新しい展開で、危険性などまでには考えが及んでいなかった”

との表記がなされているところである (尚、上の引用部「でも」海外実験機関発表動向に由来する変節——1999年時点で[加速器によるブラックホール生成などということはまずもって観念できない]と強弁されていたところが 2001年時点で[1998年にあるの初出の理論の発展を受けて加速器によって(蒸発する安全な)ブラックホールが生成される]と主張されるに至ったとの変節——を無視するような書かれようがなされていることは本稿の先の段で取り上げている)。

ここまでの余剰次元理論にまつわる言われようより考えるべきは

「重力波の類が——縮退炉などにも通ずるところのテクノロジーを用いたもやりようも顧慮されるどころとして——我々人間に由来せざるところの他世界(多世界解釈における他世界/先だっても申し述べたが、空間の脇にコンパクトに織り込まれた余剰次元理論の余剰次元とはまた違った意味合いのものとしてのそれ)より浸潤してくれば」
「予想外に安定したブラックホールの生成が後押しされる可能性もある」

ということが懸念の対象となりえるとのことである (:その手の質問を自身の設立した出版社の名前で取材をなした学究に私はわざと質問してみて、「(前提はどうか別として)そういうことを考えるのはおかしいこと「ではない」ですね」などとの申しようがなされたと記憶している)。

のような言い様は無論、「おかしなことではない」かもしれないが、「常識的な」人間が取り上げるようなことでもないと受け取れもする。

それにつき、例えるのならば、——「何でもあり」の発想法とは述べぬが——

「異界(ミチオ・カク流に述べられているところの[別の膜世界]でもいい)よりの重力波が悪さをして原子炉事故を誘発するようなことが起こった」 (あるいは — [出典\(Source\) 紹介の部 87\(2\)](#)にて指摘しているところとも通底する点として— ホセ・デルガドという科学者が実演した原始的な方式をメスを入れない非侵襲式の高度なものに切り替えてのブレイン・マシン・インターフェースのようなもので人工知能に結線されているゾンビ人間(浸潤する重力波あるいはそれを変換させての電気信号にて脳の作用機序を操作、高揚感を覚えさせられたり、感情的暴発をなさしめられたり、非自発的所作をなさしめられているといった類のゾンビ人間)のようなものが造り出されている)

と述べるのと同程度に [ナンセンスなこと] と向きによっては看做しかねないことでもあるからである。

だが、最前もそれについて取り上げているように、

奇怪なる予言小説との性質も帯びている『ホール・マン』という小説作品では 1970 年代 — (そこに見る予言的性質とは先だって詳述しているように実験関係機関および関係者が公式発表その他の公衆への情報伝達の中で「ブラックホール人為生成が「予想外に」可能になると考えられるようになった」と述べ出すことになった折から見ると、数十年も前に [LHC とあまりにも近いものとブラックホール生成が結びつけられている] とのものである) — にて

[重力波通信機]

より [極微ブラックホール] が漏れ出し、それが惑星を飲み込むとの粗筋が採用されている

とのことが「ある」のは事実である。それは忘れてはならないところであるべきはずなのである (忘れる・忘れない以前に大概大多数の人間はそのようなことがあることだに情報処理していないし、これより情報処理する可能性もないように受け取れるのではあるが、そこを敢えても申し述べれば、である)。

終端部にあつて本稿筆者が同定・捕捉している問題事 — 「どういわけなのか」現実世界でなんら顧みられていないとの問題事 — に話を回帰させましたうえでここ 【縮退炉】という科学概念にまつわつての補足の部] を終えることとする。

直上直前の段にて [縮退炉] などにまつわつての問題に関して多少込み入つての解説をなしたところで、である。あらかじめもつてして「半ばもの余事記載の部である」と明示した上で本筋となるところから脇に逸れての部として書き進めてきた [重力波] を主軸に据えての話に対して最後に次のような訴求をなして一区切りつけたい、と思う。

つい最前にてもその予言的側面 — prophetic aspects — について解説してきたとの [重力波通信機] (縮退炉とも通ずるブラックホール機構を用いての装置) を主軸と据えている作品『ホール・マン』では異星人由来の通信機から漏れ出たブラックホールが瞬時に一個人を殺し、またもつてして、これより拡大していくとのことが臭わされている部について以下のような表記がなされている。

(直下、**出典 (Source) 紹介の部 7** にて取り上げたところの『世界 SF 大賞傑作選 8』p.270—p.273、『ホール・マン』掲載部よりの「再三再四もの」原文引用をなすとして)

「ぼくのミスだ」査問が開かれたとき、リアは語った。「あのボタンにふれちゃいけなかったんだ。あれで、質点をささえている場のスイッチが切れたのにちがいない。で、それは落下した。その下に、チルドレイ船長がいたというわけだ」

…(中略)…

「いや。正確にはそうじゃない」とリア。「ぼくの推測だが、あの質量は十の十四乗グラムくらいだ。とすると、直径は、十のマイナス六乗オングストローム、原子よりずっと小さい。吸収はたいしたことはない。チルドレイを殺したのは、その質量が通りぬけたときの潮汐作用なんだ。床の物質が粉になって穴につまっていたね」

…(中略)…

リアは肩をすくめ、首をふった。「何による殺人だい?あの中にブラックホールがあるなんて、チルドレイは信じてもいなかった。あんたたちも、似たようなもんだ」唐突に、にやりと笑った。「裁判がどんなものになるか、考えてみるよ。検事が陪審団に、この次第に関する自分の考えを説明するところを想像するんだ。それにはまず、ブラックホールについて話さなきゃならない。つぎに量子ブラックホール。それから、兇器が発見できない理由、それが火星の中をつきぬけて動きまわっていることを、説明しなくちゃならないんだぜ!そこへいくまでに、笑い飛ばされて法廷からおん出されずにすんだとしても、その上さらに、原子よりも小さなそんなものがどうして人を殺せるのかということ、説明しなくちゃならないんだ!」

…(中略)…

それでおしまいだった。裁判が成立するみこみはない。並みの裁判官や陪審団に、検事側の話を理解させることなど、できっこないからだ。このまま明るみに出ずに終わる事実も、二、三あることだろう。

…(中略)…

いま、ブラックホールは、もうあの中にはない。通信機の質量を測ればブラックホールの質量が得られる」

「ああそうか」

「それから、あの機械を切りひらけば、中がどうなっているかがわかる。どうやって操作したのかもね。ちえっ、ぼくがいま六つの子供だったらなあ」

「え?どうして?」

「いや……おしまいまで見とどけたいんだよ。数字など、あてにはならん。数年後か、数世紀後かわからないが、地球と木星のあいだにブラックホールができる。こいつは大きいから研究は容易だ。まあ、あと四〇年といったところか」

そのことばの意味に気づいたとき、ぼくは笑ったらしいのか叫んだらしいのかわからなかった。

…(中略)…

食えば食うほど大きくなり、体積は質量の三乗に比例してふえる。おそかれ早かれ、あいつは火星をのみこんでしまうんだ。そのときには、直径一ミリメートル弱ぐらいに成長しているだろう。肉眼でみえるぐらいの大きさだ」

(訳書よりの引用部はここまでとする —※—)

(※尚、原著 The Hole Man にあつては "I made a mistake," Lear told the rest of us at the inquest. "I should never have touched that particular button. It must have switched off the fields that held the mass in place. It just dropped. Captain Childrey was underneath." / [. . .] / "No, not quite," said Lear. "I'd guess it massed about 10^{14} grams. That only makes it 10^{-6} Angstrom across, much smaller than an atom. It wouldn't have absorbed much. The damage was done to Childrey by tidal effects as it passed through him. You saw how it pulverized the material of the floor." / Lear shrugged it off. "Murder with what? Childrey didn't believe there was a black hole in there at all. Neither did many of you." He smiled suddenly. "Can you imagine what the trial would be like? **Imagine the prosecuting attorney trying to tell a jury what he thinks happened. First he's got to tell them what a black hole is. Then a quantum black hole. Then he's got to explain why he doesn't have the murder weapon, and where he left it, freely falling through Mars! And if he gets that far**

without being laughed out of court, he's still got to explain how a thing smaller than an atom could hurt anyone!" / [. . .] / Obviously there would be no trial. No ordinary judge or jury could be expected to understand what the attorneys would be talking about. A couple of things never did get mentioned. / [. . .] / Now the black hole isn't in there anymore. I can get the mass of the black hole by taking the mass of the communicator alone." "Oh." "And I can cut the machine open, see what's inside. How they controlled it. Damn it, I wish I were six years old." "What? Why?" "Wel ... I don't have the times straightened out. The math is chancy. Either a few years from now, or a few centuries, there's going to be a black hole between Earth and Jupiter. It'll be big enough to study. I think about forty years." When I realized what he was implying, I didn't know whether to laugh or scream. / [. . .] / "Well, remember that it absorbs everything it comes near. A nucleus here, an electron there ... and it's not just waiting for atoms to fall into it. Its gravity is ferocious, and it's falling back and forth through the center of the planet, sweeping up matter. The more it eats, the bigger it gets, with its volume going up as the cube of the mass. Sooner or later, yes, it'll absorb Mars. By then it'll be just less than a millimeter across. Big enough to see."との箇所が引用なしたところが引用なしたところの該当表記部となる)

以上、再度引きもした[異様なる先覚的言及(その CERN ならぬ CEERN 加速器なるものと結びついているとの具体的中身については再言しない)と結節しているとの小説]内の記述は

[ブラックホールに起因する災厄は社会・司直の無知がゆえに裁判になりようがない]とのものとなっている(筆者この身も国内の有力物理学者、具体名を出さないが、[裁判の契機]をこの身に悪い意味で与えてくれた物理学者に同じくもの言われよう、「あなたのやりようではね。いくら息巻いても裁判なんかになりませんよ」との趣旨のことを架電している際になされたとのことがあるが、同じくものことは具体名も出さぬようでは同意など得られようもないところだろうから、放念いただいても構わない(ちなみに筆者は個人攻撃など下らぬ人間がやることだと思っている))。

他面、本稿にあつての前半部、海外ブラックホール関連訴訟にての解説をなしていたとの部にての **出典(Source)紹介の部 17-4** に後続するところの解説部(当該の出典紹介部それそのものではなくそれに後続する解説部)でもその内容を引いたとの文書、

"HONEY I BLEW UP THE WORLD!": ONE SMALL STEP TOWARDS FILLING THE REGULATORY "BLACK HOLE" AT THE INTERSECTION OF HIGH-ENERGY PARTICLE COLLIDERS AND INTERNATIONAL LAW (ジョージア大ロースクールで法学博士の資格をとっているとのことであるサミュエル・アダムス(Samuel Adams)という人物の手になる文書)

では以下、再引用するところの[本質を穿っているようにとれるとの記載]がなされている。

(直下、"HONEY I BLEW UP THE WORLD!": ONE SMALL STEP TOWARDS FILLING THE REGULATORY "BLACK HOLE" AT THE INTERSECTION OF HIGH-ENERGY PARTICLE COLLIDERS AND INTERNATIONAL LAW にあつて

の 153 と振られてのページよりの引用をなすとして)

First, as seen in the RHIC case, it is difficult for a plaintiff to prove that there is a danger when relying solely on theoretical physics.

(訳をなすとして)

「一義的に(かつてワグナーらが 1999 年の騒動の後、加速器 RHIC にて提訴した訴訟に見られるように)原告にとって理論物理学にのみ依拠していることが問題となっている時点で実験が「危険」があると立証することが困難である」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上もて筆者が何を述べたいのか、ご理解いただけることか、とは思う。

だが、LHC 実験、そう、ノーベル賞級の物理学者らに諸共賛意を表されもし、また、永世中立国スイス(とフランスをまたいでの領域)で執り行なわれ、批判をなす者をことごとく(と述べても批判者自体が僅少なのであるから「ことごとく」に替えて「すべからく」との(多寡が問題にならぬ)副詞の方を使用する方が語法として妥当かもしれないが)斥けてきたとの同 LHC 実験に弱点がないのか、と述べれば、それは [あまりにも露骨なかたち] でそこにある(まるでやれるものならばやってみろ、と嘲笑うように露骨なかたちでそこにある)。

「問題は、」それを攻めるのには [本質的な勇氣] と [物事を(陰謀論者由来のできあがった駄法螺ではなく)客観的に訴求するだけの最低限の知の力] が要されるとのことだが、とにかくも、弱点はあるのである。

その弱点とはつまるところ、絶対に人間存在には出来ない、だが、人間存在が傀儡(くぐつ)として操られているとの側面があることを容れれば、またもってして、他の向きらにも広くそのことを容れさせもすることができれば攻める方策が生まれえるとの弱点、

[露骨かつ嗜虐的な予告的言及が(機序を問題とせずとも)相応の予見的傀儡らを[間接正犯の道具](犯行の純然たる手足としての道具)にして諸所にてなされているとのことがある]

とのことである(人間を愚弄すべくもそうになっているのか、不可思議にもそうになっているわけだが、人間に[存続に足りる力]があるのならば、それは弱点に変じうる)。

そして、それら露骨かつ嗜虐的なものとしてそこにある予告的言及らが相互に結節しあいながらより巨視的な関係の環に組み込まれている、そのありようがそこかしこに透けて見えるようになっているとのこと「も」がこの世界にはまたあり、それら不快なる存在が[LHC 実験、あるいは、そのありうるかもしれないネクスト・ステージの HE-LHC や VLHC などの弱点たるところ]のものとなっているとのことがある(本稿のこれまでの内容、そして、これよりの内容をお読みいただければ、多数の物事らが[世間でほとんど無視されている一方向]を諸共指し示すかたちとなっているとの式で何故もってしてそうしたものとなっているのか理解いただけるであろう。「実に残念ながら」体系妄想患者(パラノイド)の戯れ言の類で済まされぬところとして、である)。

ただ、その弱点を攻め、かつもってして、それが効力を発揮することになるのは「おそろしく難度が高い」、多分、不可能との自負が犯行主体にあるぐらいのレベルで難度が高いとも受け取れるところではある(であるから、そうもなっているとも見える)。

すなわち、人間一般、それができなければ、影響力ある人間にこの世界のそうもした

側面での虚偽性を理解・認容させ、団結なさしめての実効性あるかたちで抗意を表させしめる、抗意を高エネルギー領域探索挙動(と銘打たれての不自然なる一群の挙)をストップさせるとの式でなさしめさせるとのことが要されるとのことが方策有効化のありようとなるのだが(おかしいことを言っていないだろう?)、[たかだかもその程度のこと]さえも[ヒトから最低限の自由を奪い、神仏の世界(と設定付けられてのもの)の論法を人間のそれに重ね合わせるとの[宗教]の虚偽]すらも克服出来ず、政治も本来はただの役者の所業にすぎず、すかさずの目にすかさずの内面を帯びた相応の手合いらが社会の上下・貧富を問わずにも充滿しているとのこの世界で求めるのにあまりにも難度が高いと映るようになっている(ここは同意しないでもらっても構わないが(ただし「だったら、私以上のパフォーマンスで反証をかたちにして欲しい」ものではある)、社会をよく見てきた、そして、人間一般の挙動・ありようを傍から常日頃観察してきた人間としてとにかくもそうも述べる)。

もし、そうした弱点たるところ・アキレス腱たるところの存在を勇気をもって直視し、かつ、直視したうえでなにがしかの建設的かつ具体的行動がなせる、そういう向きらを多数包含している種族であれば、そう、機械的思考の押しつけてくる紛い物の思考と自分自身の思考の別をつけられ、かつ、抗うとの向きを多く含む種族ならば、人類という種は滅ぶまい。私はそのように考えている。だが、逆を述べれば、である。人間が、世の中が、大勢・趨勢として、忌まわしき偽りで満ちている世界にあつての最も重要なところに異を呈すべくも、

[現実「認識」]→[現実「認容」]→[現実改変「行動」開始]

との生き残るに必須であろうとのプロセス、より端的に言えば、

[認識]→[認容]→[行動]

のプロセス(機械でも神でも専制的上役でもいいが、どこからか言われたとおりに動く者らに[認識]→[認容]のプロセスは介在していないこともあるであろう)でもってして主体的に動かねば、(筆者自身が属する種族について他人行儀に言いたくは無いのだが)人間という種族に明日の日はない、当然・必定としてない、と考えている(遅いか早いかの問題にすぎないが、[もう時間はほとんどない]と判じられるだけの論拠を長大なる本稿での続いての段でよりもって示していく)。

そして、そういう認識がありもする中で筆者は非力なる身ながらも(この身にしてから非力なることは[社会ありようの反射効]でもあるとらえているわけだが)ありとあらゆる策を講じてLHC実験に非を鳴らさんとしてきたし、あとどれくらいそれが許されているか分からないが、息の続く限り、目の黒い限り、そのための活動に注力しようとも考えている(：「たとえばゾンビウォークという海外イベントを見るがいい。人間は過半、愚劣な糸繰り人形にすぎないのだ」といった自身内面の中の冥(くら)くもある見方、そして、取り合うに値せぬ屑のような者達の石を置かんとするが如き挙げばかりを目にしてきたとのありよう、その他の向きらの[無関心・無気力・無知]の極まるところについて思い知らされたとのありようが混合しながら失望・絶望の念を絶えず醸成しもして、常日頃、そうもした自身の決意、無謀無意味としか理性的にはとらえられぬとの決意を萎えさせようとするのだが、そう、[認識]→[認容]→[行動]の三ステップの[認識]させるの段階でやりようを無為にさせるが如くばかりの力学が目につく中で胸中そうもなっているのだが、とにかくも、現行はまだ生ある限り歩みを止めまいと考えている。対岸にあるのが[自身と親類縁者・知己の死][種族の破滅]そのものであると結論付けざるをえない、そのように判じるに至っているからである)。

につき、述べておくが、何がしかの[こと]をなさんとする[行為者]に内面としての人間性があり、またもってして、制約を斥けるだけの本当の勇気があるのならば、有効性の有無はともかくも、[人間存在一般に最後の意思確認をなす]ための策(「それで駄目ならば諦めた方がいいかもしれない」との策(て))はいくつもある。

筆者などは先だって手持ちのリソースではそれが有効たりうるのではないのかと判じたところとして法律上の争訟に追い込み、本質的な意味で問題となることを間接的に攻めてみるとのやりよう「をも」採ったわけだが(訴訟それ自体は国際加速器マフィアの国内の分局が国内法規を無視した、それは違法であろうとの構成をとらざるをえなかったわけであるが、そういう卑小なる争いに本質論をまぶしての訴求をなさんとしもしてきた)、打つべき策(て)、実験に具体的に異を唱え、またもってして、それでもってして人間存在一般に意思確認をなすとの[よりもって有効性を発揮しようとの策(て)]はいくらでもある(言っておくが、デモの類は、それができるだけマン・パワーが得られるとは思わぬのだが、そうした策(て)のうちに入らない、何の意味も無いものと見立てている(今までの手前の行為がそうした領域に落ち込んだように、そして、本稿の配布行為もが下手をするとそうなるように無為なだけの自己満足に等しき拳に終わるであろうと察せられる)。自身、霞ヶ関の裁判所に足を運んでいた折、座り込みをして彼ら自身の裁判案件にあっての主張の横断幕を掲げている[一群の虚ろなる者達]を目にしてきたわけだが、虚ろなる者の虚ろなる主張などこの虚ろなる世界の世間というものは「自分達には関係ない」と冷淡にあしらい、かつ、虚ろなる社会機構はそうしたものを易々と無視するとのことは裁判の効力を見極める前からこの身からして知っており、「なんでこの者達はこのような無為なことをやっているのか。いや、やらされているだけか」と裁判所前の横断幕の他案件の者達について思ったものだが、とにかくも、ゾンビのような虚ろなる者らが一定数以上行進しても[ノーベル賞級の物理学者を斥ける]ことなどではしないのは言うまでもなく、[無関心・無気力・無責任に換えての]無知;三無主義]と[日常にあっての慣性(現状維持力学)]の隷従者にしてこの世界のありようが本質的に何なのか半ばよく知っていて知らんぷりをしているとの人間存在一般に[待ったなしの確認]をなさしめることにもデモなど何の役にも立たない(それこそ筆者が吐き気を覚えそうになる海外のゾンビ・ウォークのような[イベント]と変わらないと見立てている)。

繰り返すが、この世界では少し考えれば、すくなくとも[確認をなさしめるとのところまでは有効であろうとの即効性ある策(て)ら]がある、にもかかわらず、それらがなんら打たれていない。先だっても文中にまぎれこませるとのかたちで申し述べたことだが、その理由としては部分的には[同じくものことに対する情報・危機認識の圧倒的欠如]がそこにある、そして、より大なるところでは[人間一般に自由度・勇気というものが根本的に「欠」を見ているからである]との心証を手前は抱きもしているわけであるも、力を持った者がある程度のリソースさえ自在にできれば、最終確認をなさしめるだけのやりようはとにかくもってして数オプションあると考えている(無論、敵手に言い訳を与えるだけの暴力的方式ではない、[科学における偽りの殉教者]など出さぬ式でのやりようとして数オプションあるということである。筆者個人の問題としてはそれをなすうえでの諸種リソースが圧倒的に不足を見ており、それがなせぬとのことがあるわけであるも、それは置く)。

話が必要以上に長く、かつ、「ひたすらに証示に努める」との本稿の趣意からそれて生々しくなりもしすぎた。これ以上、生々しい話をなすのも何であるのでここで一区切りをつけるが、もし本稿読み手に 一本当に語るに値する[内面として人間である]との自負があり自分自身の種族のために動く向きがいれば、であるが— ここでの話のようなものからしてなにがしかのことを得てほしいと思っている。

以上、訴求なしたところで[重力波] についての問題提起を主になしての一連の(極めて長くもなつての)話を終えることとする。

そもそももってして、なぜ、ノルウェイ・スパイラルのことが問題になるのか、重要と判じられることを指摘するその前に [半ばもの余事記載] として (『それとて有為たりうるか』との観点にて) [重力波] らについて記述してきたとの部はここまでとする

(ここに至るまでの一連の段には本書 p.692 から本頁 p.766 までの紙幅を割くこともなった)

さてもってして、

[何故、半ばもの余事記載の部にて【重力波】のことを強くも問題視してきたのか]

とのことについては 一先だつての段でも全く同じくものに言及していたように— 次のことらがあるからである。

第一に、

[マルチバースの突破がテーマとなっているカナダ人作家の特定小説作品がノルウェイ・スパイラルそのものの現象 (中空にて渦巻き光が現出するとの現象) をノルウェイ・スパイラルが起こる前に 一いいだろうか、ノルウェイ・スパイラルが起こる前に、である— 異様な式で予見的に持ち出しているとのことがあり、またもってして、同作家のそれに先立つ小説作品が LHC によるありうべき結果を嗜虐的反対話法で茶化しているが如く側面を有している]

とのことを文献的事実 一当該の小説の原文引用のみから自然にそうだと判じられるところの文献的事実— の問題として手前が情報把握するに至ったとのことがある(ためにマルチバースを貫通するものとも言われる重力波のことを問題視すべきかと考えた)。

第二に、

[【重力波通信】を作中モチーフとする別の小説作品が今日の LHC 実験にまつわつての際立つての 70 年代に遡つての異様な先覚的言及と結びついている]

とのことにまつわつての文献的事実の捕捉をもこの身がなしているとのことがある(ために重力波のことを問題視すべきかと考えた)。

表記のことらにあつての (第一の事由に先んじての) 第二の事由については最前の段にあつてまでにて解説なし終えたわけだが、第一の事由、そもそももってしてノルウェイ・スパイラルのことを何故、問題視することになったのかに関わりもするそちら第一の事由については (重力波にまつわるあれやこれやを問題視してきたとの直上までの半ばもの余事記載の部を含めてのこととして) いまだ解説未了となっている。そこをこれより解説していくこととする。

その点、

第一に、

[マルチバースの突破がテーマとなっているカナダ人作家の特定小説作品がノルウェイ・スパイラルそのものの現象(中空にて渦巻き光が現出するとの現象)をノルウェイ・スパイラルが起こる前に — いいだろうか。ノルウェイ・スパイラルが起こる前に、である— 予見的に持ち出しているとのことがあり、またもってして、同作家のそれに先立つ小説作品がLHCによる結果を嗜虐的反対話法で茶化しているが如く側面を有している]

とのことを文献的事実 — 当該の小説の原文引用のみから自然にそうだと判じられるところの文献的事実 — の問題として手前が情報把握するに至ったとのことがある

とのことであっての、

[ノルウェイ・スパイラルの予見的言及をなしている小説]

とはFlashforward『フラッシュ・フォワード』(後にて作品概要と問題点を解説するテレビドラマ化もされているとの作品)という小説作品の作者としても知られるロバート・ソウヤーという作家の手になる、

[ネアンデルタール・パララックス・シリーズ (にあつての原文引用をなすことにしたとの **Humans** 『ヒューマン —人類— 』(2003年初出)]

という作品となる。

いかようにしてそちら『ネアンデルタール・パララックス・シリーズ』にノルウェイ・スパイラル現象そのものにまつわつての予見的言及がなされているのかについてこれより解説をなす。

さて、1999年にあつて

[CERN(の2009年実施のLHC実験)をモチーフにしている作品]

としてのFlashforward『フラッシュ・フォワード』(テレビドラマ版と小説版の内容に大きくも異動がある同作の内容についてはよりもつて後の段にて細かくも後述する)という作品を世に出しているカナダ人作家ロバート・ソウヤーは、の後、直上、「それこそが問題である」と名指しした、

[ネアンデルタール・パララックス・シリーズ]

と呼称される一群の作品らを「2002年から2003年にかけて」世に出している(英文Wikipedia [The Neanderthal Parallax] 項目にて“ The Neanderthal Parallax is a trilogy of novels by Robert J. Sawyer published by Tor. It depicts the effects of the opening of a connection between two versions of Earth in different parallel universes: the world familiar to the reader, and another where Neanderthals became the dominant intelligent hominid. The societal, spiritual and technological differences between the two worlds form the focus of the story. **The trilogy's volumes are titled Hominids(published 2002), Humans(2003), and Hybrids(2003).** Hominids first appeared as a serial in Analog Science Fiction, won the 2003 Hugo Award for Best Novel, and was nominated for the John W. Campbell Award the same year; Humans was a 2004 Hugo Award finalist.” (大要として)「ネアンデルタール・パララックス・シリーズはロバート・ソウヤーによつてもものされた小説となり、我々によく知られた地球とパラレル・ユニヴァースのネアンデルタールが進化しての地球の結合を描くものとなっている。同作は『ホミニッド —原人— 』(2002年刊)、『ヒューマン —人類— 』(2003年刊)、『ハイブリッド —新種— 』(2003年刊)よりなり、

2003年に(サイエンス・フィクション分野の賞たる)ヒューゴ賞を受賞している」と表記されているとおりである)。

そちらネアンデルタール・パララックス・シリーズが世に出たのは2002年から2003年にかけてのこと、であるから、それら作品は先述のように2009年12月9日に発生したとの「ノルウェイ・スパイラル」(公式見解上はロシア軍SLBMの異常軌道によって現出したとされている青色から緑色の光を伴った渦巻き; The Norwegian spiral anomaly)に先駆けての作品らとなる。

であるのにも関わらず、それらネアンデルタール・パララックス・シリーズの中では

「緑色のオーロラが中空にて渦を巻いて消える」

との不自然なる描写をなされているとのことが「ある」(：冗談のように聞こえるかもしれないが、多くの人間が知らぬのか、それとも知っていて無視しているのか誰も取り上げようとしないそうしたことが「文献的事実」(特定文物にあって字面でもって容易に確認できるようになっているとのその記述内容にまつわる事実)の問題として摘示できるようになっている)。

以上のことについて引用で示すべくも邦訳されてもいるロバート・ソウヤーの手になるHumans『ヒューマン 一人類一』(原著2003年刊、訳書2005年刊)の内容を下に引いておくこととする。

(直下、手前手元にあるハヤカワ文庫版Humans『ヒューマン 一人類一』28ページから29ページよりの掻い摘まんでの引用をなすとして)

オーロラのカーテンが中央からふたつに裂けようとしていた。薄緑色のティッシュが見えない手で引き裂かれていくかのようだ。裂け目はどんどん長く、ひろくなり、てっぺんから地平線へと伸びていく。メアリがはじめてオーロラを見た夜には、こんなことはなかった。紅海がモーゼの目の前でふたつに割れたように、空のカーテンはとうとう二枚に切り離された。…(中略)…閃光がひらめき、色とりどりの光が爆発して、その部分のオーロラが消え失せた。いまや、残った光のカーテンは、天空の排水口へ吸い込まれていくかのように渦を巻いていた。渦の回転がぐんぐん速まるにつれて、冷たい緑色の炎がつぎつぎとほとぼした夜空の回転花火だ。メアリの目は釘付けだった。…(中略)…渦は収縮をつづけ、それにつれて輝きを増して、ついには——あれはほんとうに聞こえたのだろうか?——ポンという音とともに消え失せた。

(以上、ノルウェイスパイラル(The Norwegian spiral anomaly of 2009)が発生した2009年から見てかなり前に遡る、そう、「2003年初出の」作家Robert James Sawyerの手になる(The Neanderthal Parallax『ネアンデルタール三部作』の一篇たる)Humansの二〇〇五年刊行の邦訳文庫版よりの抜粋とした)

以上、引用部(筆者としてはThe Norwegian spiral anomalyの動画流布されている映像記録らと比較検討していただきたいとの描写でもある)に対してノルウェイ・スパイラルとは再度の引用をなすとして次のような現象となっている。

(直下、表記のニューサイエンティスト誌「歴史ある英国の科学誌」サイトにあっての現行記載内容より「再度の」原文引用をなすとして)

It looked like a time-travelling vortex fit for Doctor Who, but a strange spiral observed in the skies above Norway on Wednesday morning was actually a failed Russian missile launch, says a Harvard astrophysicist who monitors space launches.

[...]

"It consisted initially of a green beam of light similar in colour to the aurora with a mysterious rotating spiral at one end," eye witness Nick Banbury of Harstad said, according to Spaceweather .com.

Speculation that it was a bright meteor was quickly dismissed -- in part because the apparition lasted for too long to be an incoming space rock. Suspicion then turned to an out-of-control missile.

That is exactly what it was, says Jonathan McDowell, an astrophysicist at the Harvard-Smithsonian Center for Astrophysics in Cambridge, Massachusetts, and author of Jonathan's Space Report, a fortnightly email newsletter about space launches. "It's definitely a missile launch failure," he told New Scientist.

"We know that the Russian Navy submarine Dmitry Donskoy is in the White Sea and was preparing for the 12th test launch of the Bulava missile, which has had numerous failures," he says.

[...]

Of the missile's 11 previous launches since 2005, six have been failures, a track record that might explain why Russia has reportedly denied a Wednesday launch, McDowell says: "This could be because another Bulava failure is a huge and embarrassing setback for their programme."

(訳として)

「ノルウェー中空に登場した渦巻きは『ドクター・フー』(訳注:60年代から英国にて放送されているSFテレビドラマシリーズ)に見受けられる「タイムトラベル・ヴォルテックス」(時空旅行供用渦巻)に丁度似たようなものに見えるが、宇宙ロケット射出を監査しているハーヴァードの天文学者によると、それは現実にはロシアのミサイルの誤射であるとのことである。

…(中略)…

Spaceweather. comによるとハーシュタ(ノルウェー・トロムス県都市)の目撃者 Nick Banbury は「奇怪な回転する渦巻きにての片方の端にあってはオーロラのそれに似た色合いの緑色の光線の光があった」と語っているという(訳注:オンライン上にて公開されている録画映像を見ると青色の光が渦巻きの脇から投射されているように見える。その青色の光については緑色に近い視覚的特徴を有していたと主張する向きらのいいようがオンライン上英文媒体で目立ち、また、欧米圏ニュースメディアもそれを受けての基調での報道をなしているとのことがある——但し、画像データは動画なりといえどもワンタッチ処理で特定の色調を変化させることも可能だから、注意が必要であろうとも筆者個人は見ている——)。

外宇宙よりの岩の塊がやってきたにしては具現化が長くも続きもしすぎた、部分的にはといったことのために同渦巻きが光り輝く隕石であるとの憶測はすぐに斥けられた。それゆえ、疑義は[コントロールを失ったミサイル]の話に向かった。

マサチューセッツ州ケンブリッジ地区のハーバード・スミソニアン天体物理学センターの天体物理学者たる Jonathan McDowell が述べるところ、それはまさしくもの[コントロールを失ったミサイル]ということである。本誌(New Scientist)に対して彼は「それは明らかに射出時に失敗を見たミサイルである」と述べた。「我々はロシア海軍潜水艦ドミトリー・ドンスコイが白海(ロシア北西部バレンツ海の特定期領域)に逗留しており、いままで何度も何度も失敗を見てきたとのBulava ミサイルの12回目のテストの準備をしていたことを把握している」と述べた。

…(中略)…

2005年以降の計11回の従前のミサイル射出のうち、6回は失敗に終わっており、その足跡記録が水曜(ノルウェー・スパイラル・アノマリーの発生した2009

年 12 月 9 日水曜)の発射につき報告上、ロシアが否認の申しようをなしているとのことの説明をつけるものたりうるところ、彼、ハーバード・スミソニアン天体物理学学センターの天体物理学者たる Jonathan McDowell は「今回の Bulava ミサイルの打ち上げ失敗は彼ら計画にとって大きく、なおかつ、困惑を呈さざるをえない[つまづき]たりうるところからであろうと思われる」と述べた(訳注:ウィキペディア上の「現行の」記載ではロシアもその失敗によって渦巻き現象が生じたようにコメントしていることが記載されているわけだが、そうした(時々刻々と変化し続ける)時事情報の錯綜度合いから真実の程が奈辺にあるのか判じにくくなっているとも述べられるようなところがある)」

(『ニューサイエンティスト』誌サイトにて社員ないし契約記者にて書かれているところの記載内容よりの引用、その訳はここまでとしておく)

読み手が[脳死状態]にないのならば、Philological Truth[文献的事実]となっていてところの上に見る相互一致性を確認した時点で(当該著作文庫版を購入するなりなんなりすればすぐに確認がなせるところである)、

[予見的言及]

が何なのかについて理解いただけるはずである。

ここで申し述べるが、ロバート・ソウヤーという作家が「1999 年に世に出した」との Flashforward 『フラッシュフォワード』という作品 —それはそれで終盤は興味深い展開を辿りもする米国発のテレビドラマ版(日本でも放映されているテレビドラマ版)の方とは随分もってして内容の異なる 1999 年発の小説版— では物議を醸す式でノルウェイ・スパイラルが発生した年でもある「2009 年にあるの」LHC 実験(による全人類のおよそ 2 分間だけの意識喪失と未来観察の blacks out ブラックアウト現象がテーマとなっている。

にまつわっては下にて引用するとおりのことがある。

(直下、現行にての和文ウィキペディア[フラッシュフォワード]項目より原文引用するところとして)

『フラッシュフォワード』(FlashForward) は、カナダの SF 作家ロバート・J・ソウヤーの SF 小説。および、それを原作とするテレビドラマ。 …(中略)… 1999 年発表。…(中略)… 2009 年 4 月 21 日(刊行の 10 年後)、ジュネーヴ郊外にあるヨーロッパ素粒子研究所(CERN)の量子物理学者ロイド・シムコーとテオドシオス(テオ)・プロコピデスは、大型ハドロン衝突型加速器(LHC)を用いてビッグバンから十億分の一秒後の状態を再現することにより、ヒッグス粒子を発見するための実験を行おうとしていた。ところが加速器の中で二つの原子核が衝突した瞬間、世界中の人々が 21 年後の未来である 2030 年 10 月 23 日の自分自身を体験する。1 分 43 秒のフラッシュフォワードの間に起きた事故や手術の中断などで多くの命が失われた。CERN で働くエンジニアのミチコ・コムラが前夫との間にもうけた幼い娘もその一人だった。ロイドはミチコと婚約しているが、未来のビジョンでは違う女性と結婚していた。彼は未来は確定していて変えられないという持論と、両親が離婚した時の辛い記憶から、どうせうまく行かないのなら婚約を取り消した方がいいのではないかと悩む。一方テオはビジョンを見なかったが、後に自分が 2030 年 10 月 21 日に誰かに殺されることを知らされ、何とかそれを防ごうとする。

(以上、和文ウィキペディアにてのフラッシュフォワード小説版の粗筋にまつわっての現行記

(続けて、直下、英文 Wikipedia [Flashforward (novel)] 項目より引用するところとして)

Flashforward is a science fiction novel by Canadian author Robert J. Sawyer first published in 1999. The novel is set in 2009. At CERN, the Large Hadron Collider accelerator is performing a run to search for the Higgs boson. The experiment has a unique side effect; the entire human race loses consciousness for about two minutes. During that time, nearly everyone sees themselves roughly twenty-one years and six months in the future. Each individual experiences the future through the senses of his or her future self. [. . .] Soon after this discovery, the riddle of the flashforward is solved. At the same time as the LHC was running, a pulse of neutrinos arrived from the remnant of supernova 1987A. The remnant is not a neutron star, but a quark star, a superdense body of strange matter. Starquakes cause it to emit a neutrino pulse at unpredictable intervals.[. . .] The intent is to run the LHC again and create another flashforward.[. . .] **Twenty-one years after the original flashforward, the satellite sends an alert to Earth; another neutrino burst is approaching. [. . .] It turns out that the neutrino pulse arrives on the exact day which everyone flashed forward to, at the exact time. The world stops and rests at the appointed hour, and exactly as predicted, everyone blacks out. However, this time around the blackout is for approximately one hour, and it is reported that no one experienced any vision at all.**

(補いもしての訳として)

「『フラッシュフォワード』は1999年に敢行されたロバート・ソウヤーによる小説作品である。小説『フラッシュフォワード』の作品舞台は(小説刊行後10年後の)2009年に据えられおり、にあつてはCERNにてラージ・ハドロン・コライダーがヒッグス・ボソンの探索をなすために駆動をなしている(訳注:現実世界ではLHCが計画策定・建設段階を経て駆動開始したのは2008年9月10日となるが、直後、同LHCはヘリウム漏出事故によって14ヶ月の長期停止を見ることになっている —英文 Wikipedia [Large Hadron Collider] 項目にて(引用なすところとして) “The LHC went live on 10 September 2008, with proton beams successfully circulated in the main ring of the LHC for the first time, but nine days later a faulty electrical connection led to the rupture of a liquid helium enclosure, causing both a magnet quench and several tons of helium gas escaping with explosive force. The incident resulted in damage to over 50 superconducting magnets and their mountings, and contamination of the vacuum pipe, and delayed further operations by 14 months. On November 20, 2009 proton beams were successfully circulated again, with the first recorded proton — proton collisions occurring three days later at the injection energy of 450 GeV per beam.” (引用部はここまでとする)と記載されているとおりである)。同実験は(フィクション『フラッシュフォワード』の中では)特徴的な副次的な効果を伴っていた、すなわち、全人類が二分間だけ見当識を失った(意識喪失状態になった)のである。その間、ほぼ全ての向きらがおおよそ21年と6ヶ月後の未来の自身のありようを目にした。各個人とも彼ないし彼女自身の知覚を通じて未来を経験したのである。…(中略)…その後、すぐにフラッシュフォワード現象の謎は解明された。LHCが稼働しているとのその折、1987年超新星A(マゼラン星雲に存在する超新星)からやってきたニュートリノのパルスが到達していたのだ。1987年超新星Aの残滓は中性子星ではなくストレンジ・マターの凝集体であるとのクォーク星であった。それに由来する星の揺れが予測不能性を伴ったニュートリノ・パルスの放射をもたらしていた(それが人々にLHCとの相

相互作用から未来を見せたというのだ)。…(中略)…LHCを再び動かしても、そして、また別のフラッシュフォワードを起こそうとの意図があった…(中略)…最初のフラッシュフォワード現象の発生から21年後、衛星からまた別のニュートリノ・バーストが地球に迫っているとの報告がきた。…(中略)…全人類が正確な特定時にあって「フラッシュフォワード」の状況に至ったとのその日時においてニュートリノのパルスが(宇宙より)到達していたとのことが判明することになる(しかし、フラッシュフォワード現象の再現を見なかった)。世界は活動を止め、定められた特定時に備えて休止状態になっていたのだが、正確に予測されたところとして、全員が「ブラックアウト」(見当識喪失)に至った。しかしながら、その折のブラックアウト、ほぼ一時間も続いたとのものだったが、誰も未来ビジョンを経験することがなかったと報告されるものとなった(訳注:小説の中ではこの字義通りの「ブラックアウト」に対してあまりにも遠未来の出来事であり、誰も未来を垣間見れなかった、ただし、希少な知的エリートとして「極秘の延命化措置」を施された一部の物理学者は未来を見れたなどとの「オチ」、実情につきおもんばかれば、これほど人間を嘲笑っているものはなかろうとの「オチ」がつけられている)

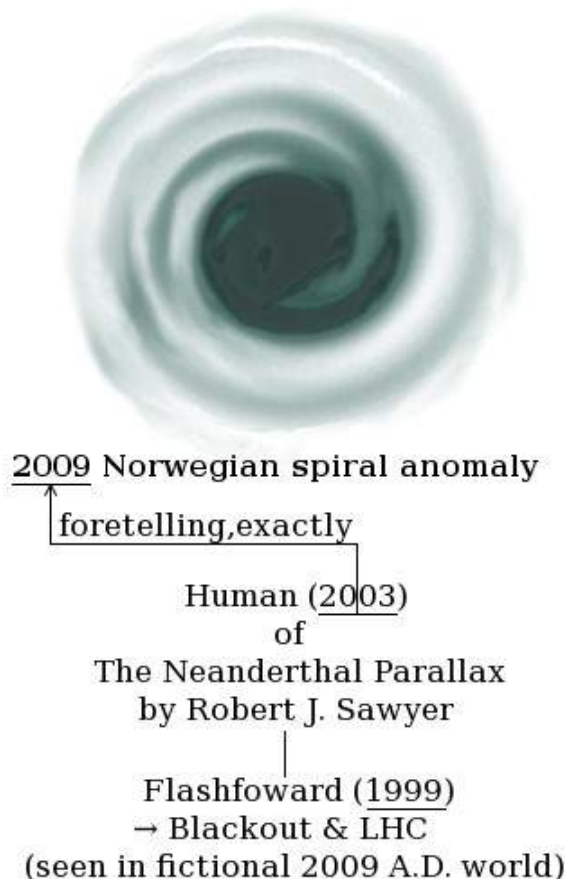
(訳を付しての引用部はここまでとしておく —※—)

(※注記1:小説作品『フラッシュフォワード』はニュートリノ neutrino の超光速(faster than light; FTL)を帯びての性質が人間の未来視と結びつけられているとの「1999年発の」小説作品だが、それは現実世界において(LHCの運営元である)CERNが「ニュートリノの作用に着目しての超光速実験(OPERA実験)」を実施してきたこと、そして、同実験が2011年にニュートリノによる超高速の作用を発見したと報じられて物議を醸した(ただしもってして、その結果は完全に否定もされている)ことと平仄が合うようなところがある(同じくものことについては英文 Wikipedia「OPERA experiment」項目に“The Oscillation Project with Emulsion-tRacking Apparatus (OPERA) is an instrument used in a scientific experiment for detecting tau neutrinos from muon neutrino oscillations. The experiment is a collaboration between CERN in Geneva, Switzerland, and the Laboratori Nazionali del Gran Sasso (LNGS) in Gran Sasso, Italy and uses the CERN Neutrinos to Gran Sasso (CNLS) neutrino beam. [. . .] In September 2011, OPERA researchers observed muon neutrinos apparently traveling faster than the speed of light. [. . .] Finally in July 2012, the OPERA collaboration updated their results. After the instrumental effects mentioned above were taken into account, it was shown that the speed of neutrinos is consistent with the speed of light. This was confirmed by a new, improved set of measurements in May 2013.” (訳として)「OPERA こと The Oscillation Project with Emulsion-tRacking Apparatus (日本語呼称はニュートリノ振動検証プロジェクト)はタウ・ニュートリノの検知をミューオン・ニュートリオン振動から捕捉しようとの科学実験となる。同実験はスイスはジュネーブの CERN、そして、イタリアはグランサッソのグランサッソ国立研究所(LNGS)のコラボレーション・プロジェクトとなり、CERN サイドのニュートリノからグランサッソサイドのニュートリノ・ビームが用いられた。2011年9月、OPERA 実験関与の研究者が明らかなるものとしてのミューオン・ニュートリノの光よりも速くもの移動証跡を捉えた(とした)。が、最終的に2012年7月にて OPERA コラボレーショングループは彼らのそうした結果を更改した。上述のような機器類に起因する効果(注:光ケーブルの問題)を顧慮しての結果、ニュートリノの速度は光速と一致していた(光速を越えてはいなかった)とのこととなった。この結果は2013年5月の改良された新規装置にて

追試されることになった」(訳を付しての引用部はここまでとする)。尚、OPERA 実験における超高速の検証は同実験に関わる一大学院生の研究テーマであったにすぎないと話が漏れ伝わっていること、また、OPERA 実験の始動時期が何時頃にあるのかとのことが問題になること、その両点でも『フラッシュフォワード』の先見性が問題になる)

(※2 注記:小説作品『フラッシュフォワード』は [ストレンジマターよりなるクオーク星としての 1987 年超新星 A] を問題にした作品であるが (上にて英文 Wikipedia の『フラッシュフォワード』粗筋紹介部から “ At the same time as the LHC was running, a pulse of neutrinos arrived from the remnant of supernova 1987A. The remnant is not a neutron star, but a quark star, a superdense body of strange matter. ” (訳として)「LHC が稼働しているとのその折、1987 年超新星 A (マゼラン星雲に存在する超新星)からやってきたニュートリノのパルスが到達していたのだ」との記述を引いたところでもある)、 1999 年に刊行された同 FlashForward が何時頃、執筆を終えていたのかはその点に絡んで「も」予見的言及に通ずることになる。「というのも、LHC 実験にあつては「1999 年から」ブラックホール生成可能性にまつわる批判的疑念視と機を同じくもストレンジレット (という仮説上の引きつけ作用を伴った粒子)の生成による世界崩壊にまつわる申しようがなされるようになっており (出典 (Source) 紹介の部 1)、またもってしてそのストレンジレットの安全性論拠として「銀河の超新星爆発」のことなどが引き合いに出されるに至ったとのことがあるからである (出典 (Source) 紹介の部 5) にもその論稿内容を引いたイタリア物理学界大御所フランチェスコ・カロジェロ (Francesco Calogero / パグウォッシュ会議を代表してノーベル平和賞の共同受賞をなしているとのこと、先述の物理学者) の手になる論稿、Might a Laboratory Experiment Destroy Planet Earth? にあつて (以下、引用するところとして) “ Strangelets produced in cosmic space would eventually be swept into star matter (DDH [2] provide arguments that this would indeed happen, if the strangelets were negatively charged), and they would then cause stars to blow up as supernovae, if the catastrophic scenario indeed prevails. But only about 5 supernovae per millennium are observed (and there are other well understood scenarios to produce at least some of them). In this manner DDH [2] obtain, as an upper bound to the probability of producing a dangerous strangelet in one year of running the RHIC experiment, the estimate 1/500,000,000 (one over five hundred million, namely two billionth). This argument also produces a bound for the ALICE experiment, which is however much larger. ” (大要訳)ストレンジレットは宇宙空間にて星間物質としてはき出され、もし LHC 実験におけるストレンジレット生成の破滅的シナリオが理に適っているのならば、それが超新星爆発を恒星に引き起こすことになると想定される(「DDH」こと Arnon Dar, A. De Rujula, Ulrich Heinz の各人ら、その頭文字 DDH をとって RHIC 実験安全報告書作成の著者として語られる各研究者によるところとして、である)。だが、自然界にあつては 100 万年毎に広大無辺なる宇宙にて五回の超新星爆発が起っていないと観測されており、DDH によると RHIC におけるストレンジレット生成のリスクはそうしたことの顧慮から 500 万分の 1 として計算される。この議論は加速器 RHIC を用いての実験より規模が大きくなる (LHC に付随しての) ALICE 実験にまつわつてのリスク上限値の議論にも当てはまる」との記述が含まれて

いるところから筆者のような門外漢にも捕捉なせたことである)。お分かりかとは思うのだが、[小説『フラッシュフォワード』(1999)に見る[ストレンジマターよりなるクォーク星たる超新星]と[LHC]との関係]と[LHCによるストレンジレット災厄(1999年から呈示され物議を至ったリスク論議)を超新星にて否定しようとの観点]の接続性にあつての繋がり合いからして問題になると申し述べたいのである)



ここまでにて

[作家カナダ人 SF 作家ロバート・ソウヤーが 2009 年発生のノルウェー・スパイラルと類似するものをその 2003 年作品にて登場させているとのことに見る「奇怪性」]

[上作家が LHC 実験が実際に始動開始されることとなったとの 2008 年に先立つこと、1999 年に出た小説『フラッシュフォワード』にてブラックアウト現象を描いていたこと(そちらブラックアウト現象の二度目のそれは誰も未来を見れなかった、暗黒しかなかったとのそれともなる)にまつわつての予見性]

の両二点について解説したわけだが — 筆者の主観が問題になるようなことではない、文献的事実であるとのことを解説したわけだが — 、 LHC 実験についてはどういわけなのか、同実験をしてノルウェイスパイラルと結びつけるとの「荒唐無稽な」陰謀論 (Ridiculous Conspiracy Theory/ それをリディキュラウス、荒唐無稽であると断ずるところの論拠はすぐもってして解説するとの陰謀論) が相応の一群の者ら — そら言 (嘘・偽り)を平然となす、あるいは、悪意・犯意の類がなくとも、よく確認しないで質的に明らかに過てることであると即断できることを真実であるように拡散するのに関わるとの相応の種別の人間ら — によって流布されているとのことがある。

具体例を引くには値しないことであると判じているので [典型的なところ] についていささかステレオ・タイプの言及しているとの以下の再掲部を参照されたい。

(直下、現行現時点にあつての英文 Wikipedia [2009 Norwegian spiral anomaly] 項目よりの「再度の」抜粋をなすとして)

The Norwegian spiral anomaly of 2009 appeared in the night sky over Norway on 9 December 2009. It was visible from, and photographed from, northern Norway and Sweden. The spiral consisted of a blue beam of light with a greyish spiral emanating from one end of it.

[...]

A similar, though less spectacular event had also occurred in Norway the month before. **Both events had the expected visual features of failed flights of Russian SLBM RSM-56 Bulava missiles, and the Russian Defence Ministry acknowledged shortly after that such an event had taken place on 9 December.**

[...]

Hundreds of calls flooded the Norwegian Meteorological Institute as residents wanted to know what they were seeing. Norwegian celebrity astronomer Knut Jorgen Roed Odegaard commented that he first speculated that it was a fireball meteor, but rejected that possibility because the light lasted too long.

[...]

UFO enthusiasts immediately began speculating whether the aerial light display could be evidence of extraterrestrial intelligence proposing among other things that it could be a wormhole opening up, or somehow was linked to the recent high-energy experiments undertaken at the Large Hadron Collider in Switzerland.

[...]

Russian defence analyst Pavel Felgenhauer stated to AFP that "such lights and clouds appear from time to time when a missile fails in the upper layers of the atmosphere and have been reported before ... At least this failed test made some nice fireworks for the Norwegians."

(訳として)

「[ノルウェイ渦巻き光異常現象](中空に渦巻き状の光源が現れたとの現象)は2009年12月9日、ノルウェイの夜空に現れたものとなる。同現象は北部ノルウェーからスウェーデンにかけて目視可能とのありようで撮影されたものとなっている。そちら渦巻きは灰色状を呈した渦巻き部とその片端から発せられているとの青色光線の部よりなっていた。

...(中略)...

同様の、しかし、目を見張るとの意味では劣っていたとの出来事がノルウェーにて一か月前に発生していた。西方の出来事もロシア軍のSLBM(S「サブマリン」L「ローンチド」B「バリスティック」M「ミ」サイル / 「潜水艦」発射弾道ミサイル)たるRSM-56(Bulava)が発射後、予定外の過てる軌道に突入したことにより視覚化したものであると予測されており、ロシア国防省も事件の発生した12月9日より後、の旨、認容している。

...(中略)...

住民らが彼らが一体全体何を見ているのか知りたがっていたとの折柄、何百もの電話がノルウェーの気象関連機関に殺到した。ノルウェーの名士としても知名度高き天文学者 Knut Jorgen Roed Odegaard は当初、「火球と化した隕石であると推察している」と述べていたが、後に光があまりにも長く続いたので彼はその可能性を否定することになった。

…(中略)…

未確認飛行物体の熱烈な愛好家らは同じくもの空中の光をして「それ自体がまさに開こうとしているワームホールなのかもしれない」といったことや「最近スイスで執り行われたラージ・ハドロン・コライダーにての高エネルギー実験と関係性をもっていることなのかもしれない」といった他のことらについても言及しながら、外宇宙生命体の存在の証拠なのではないかと推測しだした。

…(中略)…

ロシアの防衛アナリスト、Pavel Felgenhauer は AFP 通信に「ミサイルが大気の上層にて誤軌道を描いたときにそうした光や雲霞(うんか)が現れ報告されることになったことが以前にもある。少なくともこの失敗に終わった試射はノルウェーの人々にとって気の利いた花火作品を残してくれた」と語った

(ここまでを拙訳付しての引用部とする)

上にあつての

“ UFO enthusiasts immediately began speculating whether the aerial light display could be evidence of extraterrestrial intelligence proposing among other things that it could be a wormhole opening up, or somehow was linked to the recent high-energy experiments undertaken at the Large Hadron Collider in Switzerland. ”

未確認飛行物体の熱烈な愛好家らは同じくもの空中の光をして「それ自体がまさに開こうとしているワームホールなのかもしれない」といったことや「最近スイスで執り行われたラージ・ハドロン・コライダーにての高エネルギー実験と関係性をもっていることなのかもしれない」といった他のことらについても言及しながら、外宇宙生命体の存在の証拠なのではないかと推測しだした

とのところが [流布されている陰謀論] として問題になるまさしくもの典型例たるところであるわけであるが、LHC がその作動原理(機序)、そして、運用時期からしてノルウェイ・スパイラルとは結びついていなかろうとのことはある程度の見識がある人間にはすぐに分かろうとのことになっている。について、ここでは運用時期の問題としてノルウェイ・スパイラルが発生した折(2009年12月9日)にはLHC実験は装置改修のためにストップを見ていた(英文 Wikipedia[Large Hadron Collider]項目にあつても **“The LHC went live on 10 September 2008, with proton beams successfully circulated in the main ring of the LHC for the first time, but nine days later a faulty electrical connection led to the rupture of a liquid helium enclosure, causing both a magnet quench and several tons of helium gas escaping with explosive force. The incident resulted in damage to over 50 superconducting magnets and their mountings, and contamination of the vacuum pipe, and delayed further operations by 14 months.”** (大要)「2008年9月10日の稼働開始の後、LHC実験はヘリウム漏出事故に見舞われ、14ヶ月間の実験 stop を見るに至った ——2009年11月20日に至るまでの実験ストップ—— 」と端的にまとめられているところである)、とのことに言及すれば充分かとは思ふ —— (加速器リスク案件で相対での取材活動をなし、また、国内行政訴訟までやった人間だから事細かに精査していることともなるのだが、LHC実験に長期のストップをかけたヘリウム漏出事故にまつわる関係者物言いとしてはオンライン上にてPDF形態で現行、流通を見ているとの日本語による公的文書『LHC加速器の現状とCERNの将来計画』(元・日本国内アトラス実験グループ代表者によって作成されている文書で表記タイトル『LHC加速器の現状とCERNの将来計画』の入力でのグーグル検索によって捕捉・ダウンロードできるようになっているとの文書)の[168]から[170]と上部に振られてのページにて確認できるところとなっている)——)。

尚、LHC実験をノルウェイ・スパイラルと結びつけるやりようについて機序(作用原理)に着目しての話なせば、ヘリウム事故(超電導磁石がクエンチというよく知られた現象を起こして放射能汚染にもつながるおそれがあったとの施設破壊をもたらしたとされるヘリウム事故)ですでに停止していると関係者らに生々しく報告されている大規模加速器が、そも、それが動いていても地下で粒子ビームを衝突

させて、それが全然離れたところの夜空に光の渦巻きを現出させるというのはどういうことなのか、おかしい論理であろうとは論ずるまでもなきところとなっている（：要するにLHC実験をノルウェイの中空での光の問題と「ダイレクトに」結びつけ、かつ、それを断ずるが如き式でなすのは狂人か詐欺師であると普通には見えると述べているのだ。この世界では真実を訴えるのを妨害するように捏造論拠を配布・再配布しながらもそういうことをやっている類らなどは「狂人」と「詐欺師」の双方を兼ねるとの「知性」「理性」とも無縁なる宗教的狂人—人類の存続の可能性に相応の作用を及ぼそうとの種別の存在でもある—などとしての「プログラム適合型人間」が多いとは経験則から手前は判じているわけだが、ただもってして、そうした向きらが「陳腐化」に願使(いし)されているところが真実と隔たるところであるにすぎないか、と言え、そうは思っていない。重要ななにがしかのことに関わる(たとえば、糸繰り人形を手繰る手の何らかの身内間意思表示や情報操作工作必要領域に関わる)とのことがある、それがゆえに言論土壌汚染が相応の人種—まともな人間にはすぐにそれと分かるうとの忌むべき匿名の影に隠れての層—によって行われている「とも」判じられはする)。



とにかくも、である。このような世界で「不適切に」かつ「異常異様に」ノルウェイ・スパイラル現象と

LHC 実験の両者が相応の手合いらに結びつけられるとのきらいが目につくようになっていての中で [ノルウェイ・スパイラル現象の予見小説] (2003年初出のネアンデルタール・パララックス・シリーズの中の『ヒューマン 一人類』の中の記述はつい先だって原文引用なしたところである) と [LHC 実験始動に9年先駆けて世に出た小説でLHCと「ブラック」アウトを結びつけている作品] (1999年初出の『フラッシュフォワード』) とが同じくものカナダ人作家 (ロバート・ソウヤー) の手になるところとして世に出ていること、そこに相関関係が見てとれるのは事実である。

その点、適正なかたちでの懐疑主義を旨とするとの向きらは次のように思われるところかと思う。

『ではこう考えることはできないか。たまさかロバート・ソウヤーのネアンデルタール・シリーズのノルウェイ・スパイラルについての予見的言及について気づいた一群の向きらが同作家ソウヤーのLHCをテーマとしているより先だっの『フラッシュフォワード』の内容にかこつけてLHC実験にまつわっての陰謀論なぞを広めだしたのではないか』(※)

(※LHCに関してはワームホールを生成する可能性が「2009年12月よりも「前」の時点から」取り沙汰されるにも至っていたわけだが(本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 19](#)などを参照のこと)、ブラックホールやワームホールの類を同加速器が生成するとの可能性論がプランクエネルギー未満 (below planck energy) のテラエレクトロンボルト (TeV-scale) で取り上げられるようになったのは ADD 理論 (1998) が提唱された「後」、それも目立っては「2001年」からである(本稿にての [出典\(Source\) 紹介の部 1](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 5](#) を包摂する部を参照されたい)。であるから、(原作から大幅な改変がなされて粒子加速器の問題が目立って取り上げていないとのテレビ版ではなく) 小説版の FlashForward が「1999年初出のものとして」ブラックホールそのものを取り上げずに2009年にてのLHCに起因する blacks out なる現象 —— 人類の知覚が一瞬失われての中でその刹那、未来が覗き見られることになったとの現象 —— を取り上げているのは執筆期間も加味して見て、それ自体、black hole との絡みである種、予言的 (predictive) なことではある。そこまで含んだうえで「2009年12月に発生した」ノルウェイ・スパイラルと同様の描写を予言的になしているとのネアンデルタール・パララックス・シリーズが [ネアンデルタール人種の世界と人類の二つのパラレルワールドが (ワームホールで結びつけられるが如く) 結びつけられる作品] として2002年から2003年にかけて世に出ていたということがゆえに相応の向きらが [都市伝説] を広めだしたのではないか、と穿(うが)つこともできなくもない)

だが、である。上のようにはオーソドックスには考えられない。何故ならば、ソウヤーの小説とLHCをその伝で結びつける人間だにこの世界では、欧米圏英文サイトの展開者としても(オフライン書籍群については言うまでも無く) オンライン上にはほとんど、というより、まったくもって見受けられないとのことがあるからである(これより日付偽装などして相応の荒唐無稽論理などを展開しつつも同じくものことに事前に言及しているフリをしてくる相応の手合いが出てくる可能性も否定しないが、筆者が色々と検索しても同じくものこと、現行現時点、特定できていないとのことがある)。

いや、そもそももって、筆者がいろいろと英文サイトを渉猟してきた中でも作家ロバート・ソウヤーのネアンデルタール・パララックス・シリーズにあってノルウェイ・スパイラルそのものの現象 —— 緑色のオーロラ状の渦巻き紋様が中空に現われて、ポツと消滅するとの現象 —— への事前言及がなされているとのことを指摘する人間さえこの世界には「どういわけなのか」見受けられない、英語圏ですらまったく見受けられないようになっていて (: ただしもってして同じくものことに気づいている人間の数は極めて多いことかとも思えもする。気づくべくもの要件は二つ。一つはロバート・ソウヤーのネアンデルタール・パララックス・シリーズの一部描写のなされようを記憶していること。もう一つはノルウェイ・スパイラル現象の映像記録を見ていること。それだけである(当然に作家および編集者ら出版関係者らは気づいてい

なければおかしい)。だがもってして、気づいてダンマリを決め込んでいるのか、そうしたことを指摘する人間だけに現行はまったく見受けられないとのことになっている (※1)。

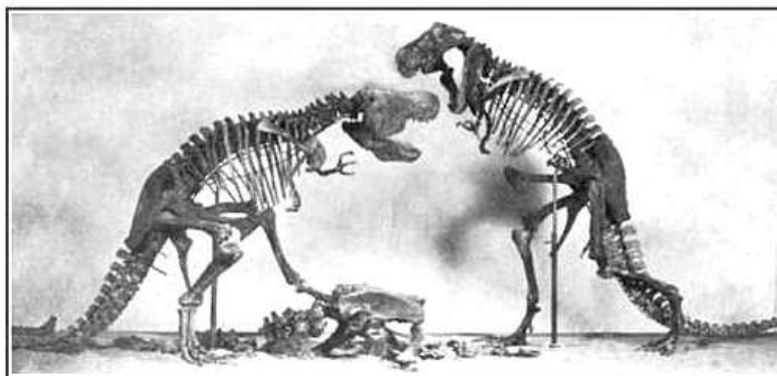
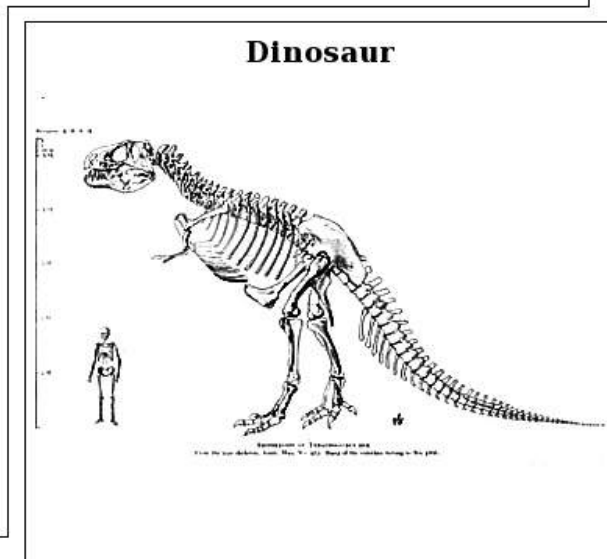
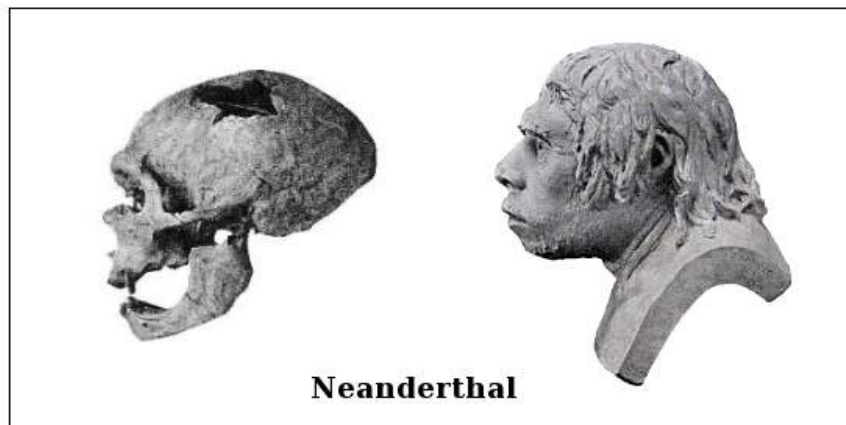
(※1 またもってして書いておくが、ロバート・ソウヤー、およそ 6500 万年前の白亜期末にエイリアンが隕石による災厄から恐竜を救い出し、彼らが別天地で高度に知的に発達した存在に進化したなどとの設定のシリーズもの、**Quintaglio Ascension Trilogy** [キンタグリオ三部作] (ティラノサウルスに由来する恐竜人ら、いわゆる、ディノサウロイドの社会が描かれているとの三編よりなるシリーズもの) を 1992 年に遡るところとしてもものしている。それらシリーズ作品、デヴィッド・アイクという本稿でも先だって取り上げた論客の主張、人類を外宇宙および異界から操っているのは爬虫類人 (と呼ばれる存在) であるとの「反響を呈しての」主張のこともが想起されるそれらシリーズ作品のうち、二作目は Far-seer (邦題) 『占術師アサンの望遠鏡』との題名のものとなっているのだが、そこにての原題 Far-seer に見る seer とは prophet [予言者] との意味合いを帯びもしての英単語となる。同じくものことについてロバート・ソウヤーの予言的やりようとの絡みで実にもって意味深と受け取っているのは筆者だけではないか、と思う —さらにもって述べれば、本稿の先行する段で既に「加速器にまつわる予見的言及」と「爬虫類の異種族(直上言及のキンタグリオ三部作の登場人物らが皆、そうであるとの式での爬虫類の異種族)の侵略」がいっしょくたにされているとの異常なる予見性を伴っての作品らがかかなり昔、もう半世紀以上前より複数作存在して「いる」とのことを指摘してきたことをも思い出していただきたいものでもある。まずもって Fessenden's World 『フェッセンデンの宇宙』という 1937 年初出の作品。後に加速器実験がそうしたものであるとの表されようがなされてきた [ミクロの原初宇宙の再現・創造] が作品テーマとされている同作では 1948 年に実施された [カシミール効果測定実験] (二枚の金属プレートを重ねあわせ、その間の斥力(ある種の反重力)発生を測定したとの実験) のことを占うように [二枚の金属プレートを重ねあわせ、その間に重力中和作用が発生するとの局面] が描かれもしているわけだが、そこにて予見的言及がなされている [カシミール効果測定実験] とは (物理学者キップ・ソーンの理論深化によって 80 年代より [通過可能なワームホール生成の要件] となると考えられるようになったエキゾチック物質と結びつけられるようになったとの) [マイナスのエネルギー] の発見をなしたとのものとして知られている。他面、ワームホールやブラックホールの類が加速器によって人為生成される可能性があると 1998 年の余剰次元理論登場以後、考えられるようになったということが現実にあるということは、である。1937 年小説『フェッセンデンの宇宙』にて「原初宇宙再現挙動」(意味論的には加速器挙動と同じくもの行為) と「ワームホール安定化物質生成」(加速器によって生成されうると近年考えられるに至ったワームホールの安定化物質生成) が結びつけられているとも言える。そうした作品である『フェッセンデンの宇宙』は宇宙創造に関与した人間の科学者の気まぐれで悲劇の宇宙にあって「つなげられた両惑星」にあって爬虫類の種族による人類に似た種族の皆殺しが実行されたと描かれての作品「とも」になっている。後にて実施された特定実験(カシミール効果測定実験)にまつわる予見的側面を含んだ作品でそうもなっているわけである ([Fessenden's World 『フェッセンデンの宇宙』の関連するところの内容][カシミール効果測定実験による発見事物とワームホール安定化効用の関係] などここで再度取り上げているとのことを網羅的に扱っている本稿にての従前セクションは [出典\(Source\) 紹介の部 22](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 25](#) を包摂する解説部位となる)。だけではない。『フェッセンデンの宇宙』作者であるサイエンス・フィクション作家エドモンド・ハミルトンの妻はリイ・ブラケットという女流作家 (後にスターウォーズシリーズの脚本も手がけているある程度、著

名性を有した女流作家) となっているのだが、彼女リイ・ブラケットが 1953 年(タイトル改題前の初期作を顧慮すれば 1949 年)に世に出した The Sword of Rhiannon『リアンの剣』という作品では「加速器にてそれが用いられる陽子ビームによる壁面の破壊」と「ワームホールおよびブラックホールの類を露骨に想起させるゲート装置」とがその作中にて結びつけられている。加速器によるブラックホール生成の想起の契機が 1998 年にあるとのことを考えれば、驚くべき予見的一致であると述べられる。そして、同作、『リアンの剣』では「主人公がブラックホール・ゲートとでも言うべきもので降り立った過去の火星世界」で大国の影から間接統治を行っていた爬虫類の異種族が「ブラックホール・ゲートを含むかつて存在していた異星種族の遺産」を探索・確保して人間を不要とする体制を構築しようとしているとの粗筋が具現化を見ているとのことがある (The Sword of Rhiannon『リアンの剣』にあつての関連するところの特質を網羅的に原文引用にて示しているセクションは本稿にての **出典(Source) 紹介の部 65(6)** から **出典(Source) 紹介の部 65(9)** を包摂する解説部となる) ——)

(※2 ノルウェイ・スパイラルにまつわつての予見的言及を含むロバート・ソウヤーのネアンデルタール・パララックス・シリーズは「滅んだはずのネアンデルタール人(僅か 2 万数千年前に滅んだとの現行人類とは別系統の人類)が滅亡せずに進化した並行世界」と「この世界」の結節結合が描かれるとの作品となるのだが(ついで先だつてたかだかもの英文ウィキペディアより引いたように “ The Neanderthal Parallax is a trilogy of novels by Robert J. Sawyer published by Tor. It depicts the effects of the opening of a connection between two versions of Earth in different parallel universes” と記載されているとおりで)、 そうもした内容のネアンデルタール・パララックス・シリーズに類似物が予見性伴つて登場しているノルウェイ・スパイラルにあつての発光現象を「SLBM 異常軌道現出に伴う塩化銅の通常通りの炎色反応(にあつての励起)」ではなく「別のかたちでの人為的なプラズマ状態発生状態の中での励起(先述)によるもの」と想定した場合、その際、媒質になりうるのが(既述の EISCAT などの人間レベルの装置群が用いられてなかった場合において)「並行世界を貫通するとされる重力波」となりうるのではないかと考えられるところを筆者が先だつて紹介なしてきたことを思い出していただきたいものである。 といった見解が仮にもし拙い謬見(過てる見解)にすぎないものでなかった場合、異世界間を浸潤重力の類が「向こう側(同じくもの作家ソウヤーが描くキンタグリオ三部作に見る恐竜人種が進化した異世界からかもしれない)からこちら側の木製の馬を有効化する術」として用いられえ、LHC が「我々全員を殺す凶器」に変わるとのことが冗談抜きに考えられるがゆえに「問題になる」のである — そうも述べはしても、多くの人間が「愚劣な操られ人」(ここでの話とは異なり、既に具体的な話として示してきた LHC に伴うあまりにも危険なる客観的側面を無視するなどとの愚劣の極みに甘んじさせられているとの操られ人)・半ばもの「人」「機」混合存在の如くもの(先だつて「生体を機械・人工知能の領域と結線する」やりようがどういったものなのかについて 60 年代に遡るホセ・デルガドの脳機序コントロールされた猿に対するコンピューター結線との兼ね合いで説明している)に変容なさせられているのならば、訴求も多く意をなさぬかと危惧しもするのだが、といったことを承知のうえでの同じくもの訴求を(『トロイアにカサンドラ(トロイアの木製の馬の災厄を予見しながらも無視される呪いをかけられたトロイア悲劇に付随する存在)はつきものなのか』と憤りと慨嘆があわさつての悲憤の念を禁じえぬとのなかで) 敢えてもなしている —)

ここまでにて筆者が何故もつてして「ノルウェイ・スパイラル」のことなどを事細かに問題視しているのか一面でご理解いただけたか、とは思う。 そして、「ノルウェイ・スパイラル」が問題になる理由は直

上までにて述べてきたことにとどまらない。直上まで述べもしてきたことと複合顧慮して然るべきこととして、(続けて要点取り上げもする) 先行して問題視してきたことらが多層的多重的關係性を示すものとして眼前にあるがゆえにノルウェイ・スパイラルというものからして「問題視して当然であろう」と強調するのである。



Robert J. Sawyer's works

└─ **The Quintaglio Ascension trilogy (1992 -)**

└─ **Far-Seer (1992)**

└─ **The Neanderthal Parallax trilogy (2002-)**

└─ **Humans (2003)**

└─ **Prophecy of "2009 Norwegian spiral anomaly"**

— Theme:
World of "IF" (?)

(先に取り上げしもしたことを解説付して再強調すべくもの図解部として)

作家ロバート・ソウヤーによる三部作形式の小説作品ネアンデルタル・パララックス・

シリーズにあつては [2003 年に出た小説『ヒューマン』] 作中に [中空に浮かぶ緑色の渦巻き] なるものの描写が含まれている (:先だつて引用をなしたところとして [オーロラのような存在として現われしばらくしてからポッと消える] との描写が含まれている) 。
そうした作品内描写が 2009 年にあつて現実世界に具現化した [緑ないし青色の発光作用を伴つての渦巻きが夜空に現われたルウェイ・スパイラル現象] とあまりにも似通っていることは論を俟たなきことともなっているのだが (再三再四述べるも、ノルウェイ・スパイラル関連の動画などご覧いただき確認いただきたいところである)、にまつわつて、作家ロバート・ソウヤーが先行するところのシリーズものとして [キンタグリオ三部作] なる作品群、ティラノサウルスに由来する恐竜人ら (いわゆるディノサウロイド) の社会が描かれての三編よりなるシリーズものを世に出しているとのことが気がかりなところとしてある。恐竜人を描きもしているそちら『キンタグリオ』シリーズの二作目は Far-sheer (邦題『占術師アサンの望遠鏡』) との作品になるのだが、繰り返すも、そこに見る Far-sheer の sheer とは (星占い・占星術、転じて、天文学の業との式を切り捨てて見て) [予言 (prophecy) をなす者] との意味合いが一般的に伴う語である。そう、[予言] (あるいはセルフ・フルフィリング・プロフェシー、自作自演とも言い換えられる [予言の自己成就] かもしれない) との式でそこからして [平仄があう] と述べるのである。

同じくもの点に関して [恣意性] の可能性問題 (計算づくでそうもなっている可能性があるとの問題) をよりもつて強めに感じさせるところとして「第一」に恐竜人を描くキンタグリオ・シリーズもネアンデルタール人を描くネアンデルタール・パララックス・シリーズも双方ともに三部作形式 (トリロジー形式) をとっていること、また、両シリーズがほぼ 10 年間隔で世に出ているとのことで [ある種の整然さ] が垣間見れるとのこともある。「第二に」言わずもがなだが、両作品とも [進化プロセスのうえでありえたかもしれないとの IF の世界] を描いているとの点についての近接性「もまた」ある (片方では恐竜が 6500 万年前に死滅せずに外宇宙生命によって生かされてよりもつて進化したとの別天地が作品設定として描かれ、もう片方ではネアンデルタール人 (2 万数千年前に絶滅した [あつたかもしれないもうひとつの人類の原型]) が文明の主たる担い手となっている並行世界が描かれている)。

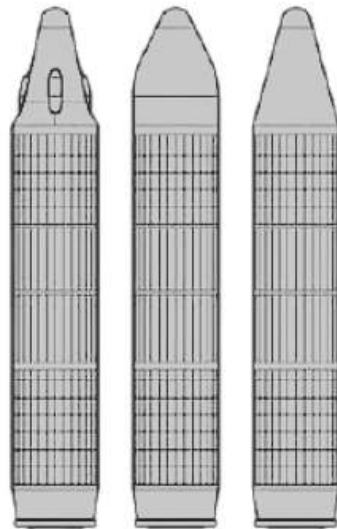
以上の側面を顧慮して、そして、特定作家の一作品に見る予見描写にとどまらずにもその他の不可解な予見描写の山、山、山がこの世界の諸種文物らに現実具現化していることまでも顧慮したうえで、である。人間が部分的に意識的ないし無意識的なる傀儡 (くぐつ) と化さしめられるとの機序がそこにあり、それが [特定目的に固執している執拗な文明操作者] に由来する業であつた場合、ロバート・ソウヤーのやりようからして実に危険な兆候を指し示すものへと変ずる。何故か。それは彼の 1999 年初出の作品、2009 年の作品世界にての LHC のありようを描くとの Flashforward『フラッシュフォワード』に — そして、原作小説から翻案されて [八岐の園] など訳語振られての [多頭の蛇の姿を模してのロード・マップ] (The Garden of Forking Paths) が世界線・時間線との収縮の兼ね合いで終盤描かれもする米国 TV ドラマ版にも — [嗜虐的な寓意] が LHC との絡みで込められていると判ずるに足る根拠が [枚挙に暇なく存在している] とのことが「ある」からである。

(: 尚、以上、字面にて解説してきたことを端的に示すべくも作成した上の図解部に付した図像らの出典であるが、ネアンデルタール人の存在痕跡にまつわつての図像らは Project Gutenberg のサイトにて公開されている MEN OF THE OLD STONE AGE THEIR ENVIRONMENT, LIFE AND ART (1914) との著作に掲載のそれを拝借したもの、またもつてして、恐竜 (ソウヤーがそちらを IF 世界での進化種として描いているとのティラノサウルス) の図像らは同じくも Project Gutenberg のサイトにて公開されている DINOSAURS WITH SPECIAL REFERENCE TO THE AMERICAN MUSEUM COLLECTIONS (1915) との著作に掲載のそれを拝借したものとなる) 。

より先だって申し述べもしてきたことらに相通ずるところとしてそこから述べるが、

「ノルウェイ・スパイラルは潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM) の誤射軌道によって現出したものである」

とのことが真相である、あるいは、そうではなくとも、そういう発表がなされていることからして問題になるとのことがある。



Bulava-M, Bulava-30, Bulava-47

SLBM

(Submarine Launched Ballistic Missile)

Bulava

それは先だってその意味性を事細かくも解説してきたとの、

「ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』（ここまで不快なる予見的作品との連結関係を呈示してきたかのジュール・ヴェルヌの『海底二万里』）にあつては「渦を巻き対数螺旋構造を呈する」とのオウムガイの名を冠する潜水艦—— [ノルウェー中空の渦巻きの原因としての SLBM] を発射したとされるロシア軍の艦船よろしくもの潜水艦—— たるノーチラス号が [ノルウェーのスパイラル] ことモスケンの大渦(メールストローム)に呑み込まれる (そして、あえなくもの一貫の終わりが臭わされる) とのコンクルージョン(作品結末)にての描写がなされている(出典(Source)紹介の部 86)」

とのことに関してのこととなる。

にまつわりもして、繰り返し述べるが、

[【ノルウェー中空に生じた渦巻き】と【ノルウェー名物のモスケンの大渦(メールストローム)】を結びつけ、そこよりメールストロームに呑まれての潜水艦ノーチラス号(著名フィクションに見る潜水艦)の末期のありように注意を向ける]

ということだに [行き過ぎにならぬ] だけの事情がある、そのことが問題となるのである。

本稿では『海底二万里』という小説作品に通ずるところとして 一先の言及内容と順序を多少違えて振り返ることともするが— 次のことらを問題視してきたとの経緯があること、思い出していただきたいものである。

(以下、「詰め込み過ぎの風あり」ながらも、問題視してきた関係性についてエッセンスのみ抜き出しての再掲をなすとして)

[奇怪なことながら 911 の事前言及要素と共にある作品となっているとの『ジ・イルミナタス・トリロジー』ではその作中、明示的に同作が『海底二万里』と結びつけられての言及がなされている] (左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式についての振り返り表記として:国内で流通している訳書およびオンライン上にて内容確認できるとの原著より — 出典(Source)紹介の部 37 から 出典(Source)紹介の部 37—5 を包摂する解説部にて— 細かくも原文引用なしつつ指し示してきたことであるが、【ニューヨークはマンハッタンのビルが爆破されるとの描写の具現化(要するに 911 の攻撃目標物と属性共有するものの爆破の描写の具現化)】、【ペンタゴンが爆破されるとの描写の具現化(要するに 911 の攻撃目標物だったものの爆破の描写の具現化)】、【米軍科学者漏出の炭疽菌による災厄の発生の描写の具現化(911 の事件の後、現実には米軍科学者より意図的炭疽菌漏出がなされて [テロ] 騒動に発展したことと同様の描写の具現化)】、【ニューヨークの象徴的シンボルと解されるものとペンタゴンの象徴的シンボルを並置する印章の(図示までしての)多用(先の 911 の事件では [ニューヨーク] と [ペンタゴン] が同時標的にされていたとの事実が存在する中でのそういう描写の具現化)】、【そのスピンオフ作品としてのカードゲーム(スティーブ・ジャクソンのカードゲーム)からして [粉塵をあげるペンタゴン] や [倒壊するツインタワー] を絵札として含んでいるという事実が存在】との要素から — 厳密にはペンタゴンの爆破時刻が凝ったやりかたで 911 との数値と結びつくようになっている「など」との意味で他「にも」問題視すべきところがあるのだが— 『ジ・イルミナタス・トリロジー』は不可解かつ不快極まりない 911 の予見小説となっていると指摘できる作品となっている。といった作品たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』にて — これまた 出典(Source)紹介の部 79(2) にて原文引用しながら本稿の先の段で明示したことになるが— [黄金の潜水艦]が主人公格の登場人物ハグバード・セレーンの母艦として登場してきており、そちらゴールデン・サブマリンが『海底二万里』のネモ船長のノーチラス号に作中、「明示されて」仮託されているとのことがある)

[『ジ・イルミナタス・トリロジー』と『海底二万里』は [潜水艦でアトランティス遺構を巡る物語] とのかたちで共通要素を有してもいる] (左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式についての振り返り表記として:先立っての段 — 出典(Source)紹介の部 79 および 出典(Source)紹介の部 79(2) — にてオンライン上より確認できるとの両作品該当部の原文引用をなし、『ジ・イルミナタス・トリロジー』と『海底二万里』の両作が [アトランティス遺構を巡る物語] ともなっていることの指し示しに遺漏なくも努めてきたとの経緯がある)

[(直上言及のように) 『ジ・イルミナタス・トリロジー』と『海底二万里』は [アトランティス遺構を巡る物語] としての結びつきを有するのであるも、[アトランティス] というものは — そういうことを目立って問題視する人間は目につかないわけだが— [ギリシャ勢との闘争の後の洪水による最期] 「など」の複合的な線で [トロイア] と接合する存在でもある] (左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式についての振り返り表記として:有力都市国家の王との設定のアガメムノンに主導されたギリシャ勢によって攻囲戦が仕掛けられてのトロイアの最期は [木製の馬による住人皆殺し]、そして、それに次いで [都市構造そのものの包囲勢を巻き添えにしての大洪水による飲み込み] となっていると一部古典、具体的にはスミルナの

クイントゥスという著者による古典『トロイア戦記』にて描写されているのことは**出典(Source) 紹介の部 44-3**から**出典(Source) 紹介の部 44-5**にて指し示しているのが本稿である（また、本稿ではジェイムズ・フレーザーの手になる蒐集伝承がトロイアと洪水伝承の関係を指し示すものであることも問題視している）。トロイアはそうもして[ギリシャ勢との大戦争の後][大洪水によって主たる住民を失った都市として消尽を見た]と伝わっているわけだが、他面、アトランティスもまた[ギリシャ勢との大戦争の後][大洪水によって消尽を見た]と伝わっている存在となっている（**出典(Source) 紹介の部 36**にて国内流通のプラトン古典訳書(岩波版)およびオンライン上より誰でも閲覧できる英訳版より “A little while afterwards there were great earthquakes and floods, and your warrior race all sank into the earth; and the great island of Atlantis also disappeared in the sea. This is the explanation of the shallows which are found in that part of the Atlantic ocean.” [しかし後に、異常な大地震と大洪水が度重なって起こった時、苛酷な日がやって来て、その一昼夜の間に、あなた方の国の戦士はすべて、一挙にして大地に呑み込まれ、またアトランティス島も同じようにして、海中に没して姿を消してしまったのであった]との記述を引いたとおりである）。さらには、[黄金の林檎の園]、要するに、[トロイア崩壊につながった戦争をもたらした果実が栽培されている園]の場がアトランティス同等物と見做されてきたとの背景があることを**出典(Source) 紹介の部 41**にて指摘もしている。加えて、[アトランティスの由来はアトラスという名前の王にありとプラトン古典経緯で伝わっている]とのことがある一方で（**出典(Source) 紹介の部 36**）のこととして、偽史として伝わっているイタリアの特定地域史にあつては[イタリアの古代の王がアトラスという名の王となっており][そのアトラス王の息子の一人がトロイアに王国を創建したダーダネルスとなっている]との旨の設定が採用されているとのことなども本稿にての**出典(Source) 紹介の部 45**では解説している —— ジョヴァンニ・ヴィッターニという文人の手になる初期ルネサンス期成立の Nuova Cronica『新年代記』という書物の中の記述による——)

[[アトランティス] およびトロイアの双方の寓意が「どういうわけなのか、」ブラックホール生成をなしうるとされる LHC 実験に多重的に込められているということが「現実に」ある] (左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式についての振り返り表記として:LHC では[加速器の目]に相当する巨大検出ユニットに[ATLAS]の名前が振られており、また、それにまつわるところとして[ATLANTIS]という名前のイベント・ディスプレイ・ツールが(ブラックホールをも発見しうるものとされながら)使用されているのことは本稿の先の段、**出典(Source) 紹介の部 35**から**出典(Source) 紹介の部 36(3)**を包摂する解説部を通じて指し示しなしている。につき、古の陸塊アトランティスについては [黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)の園]と一部にて結びつけられてきたとの経緯があり(**出典(Source) 紹介の部 41**および**出典(Source) 紹介の部 41(2)**)、また、LHC の巨大検出ユニットにその名が用いられている[アトラス]という巨人がヘラクレスの第 11 功業にて[黄金の林檎の園の場所を知る巨人]として登場してきている(**出典(Source) 紹介の部 39**)とのことがあるゆえに、[黄金の林檎]⇒[トロイアの崩壊に至ることになった戦争発生の元凶]との式とつながる命名規則(ATLAS および ATLANTIS)を用いているとの意味で LHC はトロイア崩壊譚とも(余程、目を凝らして見なければ気づけぬようなことなのかもしれないが)結びついている。さらに述べれば、LHC では[トロイアに木製の馬の計略で引導を渡したオデュッセウス(同オデュッセウス、トロイア滅亡に至る戦争が黄金の林檎を巡る諍いにて発生した原因を造った武将でもある)が艱難辛苦の旅の果てに漂着することになった女神カリュプソの島オーギュギア一島(こちらオーギュギア一島も[アトランティス]と結びつくとのことを本稿にての**出典(Source) 紹介の部 42**では指摘している)到達のすぐ前段階にて呑まれた「渦潮の」怪物カリュプディ

ス]の名前を冠する CHARYBDIS]というブラックホール生成シミュレーションツールが用いられているとのこともあり(出典(Source)紹介の部 46)、その伝「でも」LHCはトロイアおよびアトランティスと結びつくようになっている(尚、オデュッセウスが呑まれたそちら渦潮の怪物カリュブディスがいかようにして古文物でノルウェイの大渦に託(かこ)けられているのかも先述なしてきたことである))

[上にて言及の荒唐無稽小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』およびジュール・ヴェルヌの有名小説『海底二万里』の間の関係性にあつては[黄金比への意識誘導]がなされている節が「如実に」ある] (左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式についての振り返り表記として:両作品『海底二万里』と『ジ・イルミナタス・トリロジー』との間にあつては「黄金の」潜水艦とノーチラス号の間にて作中明示されての結びつきが見出せる — 出典(Source)紹介の部 79(2)にて言及のとおりである——。そうもして「黄金の」潜水艦がノーチラス号と対応させられているのならば、ノーチラスことオウムガイの外殻構造が、(現実には「事実合致するところではない」と指摘されているところながらも)、黄金比を無限に体現する対数螺旋構造の特別なる形態、ゴールデン・スパイラル構造こと黄金螺旋構造を呈していると幅広くも言われてきたことが想起される(出典(Source)紹介の部 78(2))。また、ノーチラスの外殻構造が俗信俗間にての言われようとは異なり[黄金比]と現実にはあまり結びつかない(黄金螺旋構造とは程遠い)ものであったとしても、『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品が[黄金比体現構造たる正五角形(レギュラー・ペンタゴン)と「黄金の」林檎(ゴールデン・サブマリンに乗る乗員達のありように関わるところの黄金の林檎)]を並列描写するシンボルを[911の事件の前言要素と関わるようなところ]で多用(何度も作中にて図示するような形で多用)、正五角形が黄金比と結びつくことを臭わせているような作品であるとのことも注視して然るべきところとしてある — 出典(Source)紹介の部 37-5を包摂する解説部や出典(Source)紹介の部 69(2)を包摂する解説部を参照のこと——)

[黄金比 (俗間にはノーチラスことオウムガイの外殻構造がその全面的体現物となっているとの(一般的妥当性との意味での信憑性には疑義が伴うもの)言説が存すると解説してきたところの黄金螺旋構造と結びつく黄金比)に関わるところとして『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあつては(作中、「黄金の」林檎)と並列描写されることが多いとの)[黄金比の体現物としての正五角形の構造を呈する合衆国国防総省本部庁舎ペンタゴン]を崩す、そして、[古代アトランティス時代のペンタゴン]を崩すことで異次元から介入する妖怪が解き放たれる(往古も解き放たれた)などとの話の筋立てが採用されている。また、現実世界のペンタゴン(合衆国国防総省)にあつてはその正五角形の庁舎の建設計画を任せられていた軍人に責任者役職のお鉢がまわるとのかたちで【正五角形(レギュラー・ペンタゴン)と五芒星の無限小の領域に向けて永劫に続く相互内接関係】のことを想起させるように[無限小の方向]に通ずる過程での崩壊機序、すなわち、原子核の崩壊機序を用いてのマンハッタン計画が推進されるに至ったとのことがあり、さらに述べれば、マンハッタン計画にてその機序が利用された原子核領域の崩壊機序はブラックホールを生成すると考えられるようになった加速器実験とも結びついているとのことがあ] (左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式についての振り返り表記として:集英社から遅まきに刊行されての国内流通を見ている邦訳版記述とオンライン上で全文確認できるとの原著版英文原文にあつての該当部を出典(Source)紹介の部 38-2にて原文抜粋しながら、『ジ・イルミナタス・トリロジー』にあつては[合

衆国国防総省本部庁舎ペンタゴン]を崩すことで異次元から介入する妖怪が解放されるとの話の筋立てが採用されているとのことを本稿従前の段で指し示している。また、米国国防総省のペンタゴンがその形状をとるとの[正五角形]がいかにようにして[黄金比]の体現存在となっているかについては本稿にての[出典(Source) 紹介の部 69(2)]で同じくものことにまつわる解説のされようを紹介している。加えて、本稿では五芒星と五角形の相互内接外接関係が[無限小に至る構造]を呈していることを同[出典(Source) 紹介の部 69(2)]にて紹介、そのうえで、[ペンタゴン(合衆国国防総省)庁舎建設に責あつた軍人による原子核の崩壊を用いての爆弾(原子爆弾誕生)にまつわる歴史的沿革]について[出典(Source) 紹介の部 70]にて取り上げている。ブラックホール生成問題と関わるどころの加速器実験もまた([出典(Source) 紹介の部 71]にあつて論じているように)同じくもの[原子核の極小領域での崩壊]が関わっているのだと指摘しつつも、である)

[米国科学界を主導するオピニオン・リーダーであつたカール・セーガンの手になる80年代ハード・サイエンス・フィクション小説『コンタクト』では[黄金比の体現存在としての正五角形構造]を十二枚重ねしてのドデカヘドロンこと[正十二面体構造]を呈する装置がカー・ブラックホールないしワームホール生成をなすものとして登場してくる — [黄金の林檎]によつてはじまつた戦争に結末をもたらした[木製の馬]に作中10回以上も仮託されてのものとして登場してくる—](左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式についての振り返り表記として:表記のことについては新潮社から刊行されて幅広くも流通している国内文庫版『コンタクト』およびオンライン上より確認可能な同著原著版より原文引用をなしている段 — [出典(Source) 紹介の部 80(3)]に若干もつてして後続する段 — を参照されたい)

[上記カール・セーガン小説『コンタクト』は[通過可能なワームホール](トラバザブル・ワームホール)にまつわる科学考証の科学界にての深化を促しもしたやりの元となっている作品として知られている。そして、カール・セーガン小説『コンタクト』に[通過可能なワームホール]の助言を科学考証なしつつも関わつた物理学者キップ・ソーンの手になる文物、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』が[異常異様なる911の先覚的言及文物としての要素]をそちら[通過可能なワームホール]にまつわる部でなしているとのことがある — 端的に述べれば、[通過可能なワームホールにまつわる思考実験の紹介部]にて[双子・1911年と通ずる機序][911発生日付そのものと結びつく地理的(空間的)・時間的スタートポイントの採用]「など」を多層的に1994年になしているとのことがある(冗談か、とも思えるような話だが、文献的事実の問題としてそうもなっている) — 。ここで[911の先覚的言及事物][五角形状の異界との垣根][トロイアとの接合]との観点でカール・セーガン『コンタクト』および『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の両二作の繋がり合いは70年代の(額面上は、もの)荒唐無稽小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』と接合することともなる。『ジ・イルミナタス・トリロジー』は(問題はそれが[偶然の一致]で済むか、であるとしつつも)[911の先覚的言及事物]としての側面を帯びている作品となり、またもつてして、[五角形状の異界との垣根]を登場させる作品にして、[トロイア崩壊の元凶]たる黄金の林檎を目立って副題に掲げ、そして、同ゴールデン・アップルのシンボルを作中にて(五角形と並べるとの式で)図示までして頻出させていると

の作品であるからそうなる（接合することになる）。そして、（すぐ上の段にて取り上げている対応関係の再述をなすところとして）『ジ・イルミナタス・トリロジー』は「黄金の潜水艦」と「ノルウェイの大渦に呑まれたノーチラス号」との明示的対応付けなどの点で「黄金比との繋がり合いが想起されるところで」ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』と対応関係にある作品ともなる（左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式についての振り返り表記として：セーガン『コンタクト』とキップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の繋がり合いについては本稿にての**出典 (Source) 紹介の部 20-2**を包摂する部位（そして、整理のために同出典紹介部の内容を再掲紹介しているとの部）で解説している。また、キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』が「911 の先覚的言及文物」としての顔を持つことについては**出典 (Source) 紹介の部 28**から**出典 (Source) 紹介の部 33-2**を包摂する部位で詳述している。加えて、セーガン『コンタクト』がいかようにもってして「作中に見るグランド・セントラル・ステーション」との兼ね合いなどでトロイアと（露骨かつ嗜虐的な式で）多重的繋がり合いを呈しているのかについては**出典 (Source) 紹介の部 82 (2)**から**出典 (Source) 紹介の部 83**を包摂する部位でその解説をなしている）

「上記カール・セーガン小説『コンタクト』では「黄金比の体現存在としての正五角形構造」を十二枚重ねてのドデカヘドロンこと正十二面体構の装置がカー・ブラックホールないしワームホールの機序を用いてのゲート装置として登場してくるわけであるが、カー・ブラックホールというのは「角遂運動量」および「質量」をパラメーターにしての相の変化が黄金比としての比率と結びついていると発表されて一部で注目を浴びたものとなっている」（左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式についての振り返り表記として：本稿では黄金比に関する著作をものしている天体物理学者との肩書きを持つ学究（訳書も存するマリオ・リヴィオ）がオンライン上のニュース媒体ハフィントン・ポストにて載せている記事の内容を通じて表記のことを指し示している（**出典 (Source) 紹介の部 73**）。また、本稿の先の段では「宇宙の構造が12面体構造を取るのではないかと外宇宙電波受信に基づいて目立って考えられるようになった、すなわち、WMAP（電波の一種である宇宙マイクロ波背景放射の「探査」機であるウィルキンソン・マイクロ波異方性探査機）が収集したデータに基づいて宇宙構造にまつわたるのそもした推論が目立ってなされるに至った以前から、かつもってして、（こちらは「おそらく」付きで）おそらく「カー・ブラックホールが黄金比と結びつくようになってきている」と指し示している論稿が世に出ることになった」以前から、カール・セーガンが小説作品『コンタクト』（1985）で「外宇宙「電波」「探査」計画の中でその設計図が送られてくることになったカー・ブラックホールの類「とも」接合するゲート発生装置」を「全体としての「黄金比」の体現物たる「正12面体」構造」と結び付けているとのことを意味合いも指摘せんとした（**出典 (Source) 紹介の部 77 (3)**を参照のこと）。さらに、異空間を橋渡しするゲートたる可能性が取り沙汰されてきたカー・ブラックホールというものについてはLHCでその生成可能性が近年より問題視されてきた（ブラックホール生成可能性と単純に言われてきた中で「カー」・ブラックホール生成可能が問題視されてきた）ことも本稿の先の段で取り上げたとの経緯がある（**出典 (Source) 紹介の部 20**を包摂する解説部

および [出典 \(Source\) 紹介の部 76](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 76 \(3\)](#) を包摂する解説部を参照のこと)

[ギリシャのプラトンの手になる『ティマイオス』という古典は多面体のうち、[正十二面体] 構造のことを (後の世にて [第五元素] として認知されるようになった) [星天の世界の構成要素] としている著作としても知られるが、同『ティマイオス』は [アトランティスの沈没伝承] に言及している古典としても極めてよく知られている著作である。そして、(繰り返すが)、LHC におけるブラックホール生成可能性はアトランティスとの命名規則付与と結びついている] (左記のこと、本稿のより以前の段で問題視した式の振り返り表記として: プラトン『ティマイオス』が [アトランティス言及古典] として著名なものであり、かつもってして、[正十二面体] を宇宙の構成単位とする第五元素のようなものとして言及している古典でもあることについては本稿の先の段、[出典 \(Source\) 紹介の部 77](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 77 \(2\)](#) を包摂する解説部にて解説している。またもってして、(カール・セーガン『コンタクト』のゲート装置よろしく) ブラックホール生成可能性が後に取り沙汰されだした LHC がアトランティスと結びついているとのことは (繰り返すが) [出典 \(Source\) 紹介の部 35](#) などで紹介している)

「若干」冗長性を排してより簡便化して表すれば、以上のことは — 実に残念ながら話柄選択以外では主観の介在などありえないようなところ、そう、多項式を入れ替えてのやり方に見るようなこととして — 次のような関係性を指し示すものでもある。

[主要登場人物ら乗艦の潜水艦にて海底のアトランティス遺構の探訪がなされる『ジ・イルミナタス・トリロジー』] ↔ (ネモ船長潜水艦との関係で「作品内にて明示されての」接合要素あり) ↔ [主要登場人物登場の潜水艦にて海底のアトランティス遺構の探訪がなされる『海底二万里』]

[『ジ・イルミナタス・トリロジー』の「黄金の」潜水艦 (黄金比体现の正五角形と黄金の林檎が並置されてのシンボリズムを掲げる作中内ディスコーディアニズム運動団体首魁の潜水艦)] ↔ (作中にて明示されながら関係付けがなされているところ) ↔ [『海底二万里』のノーチラス号 — オウムガイことノーチラス、[黄金比] を無限に体现する構造とされる黄金螺旋構造と俗間にては (事実とは異なる「とも」されながら) 結び付けられている外殻構造をもつ海洋生物の名を冠する潜水艦 —] (黄金比のことが想起される関係性)

[『ジ・イルミナタス・トリロジー』にみとめられる黄金の林檎と並置される正五角形 (国防総省; ペンタゴンとして異次元よりの介入存在よりの封印を破るとの文脈で作中爆破されるものでもある)] ↔ (黄金比が双方に関わるゲートの正五角形に通じている関係性) ↔ [カール・セーガン『コンタクト』のブラックホール・ゲート (なかんずくカー・ブラックホールではないかとも描写されるゲート) ないしワームホール・ゲートと結び付けられているところの正五角形を十二個重ねて構築される正十二面体構造体 — 三次元の表面に黄金比の対現物を十二並べての存在とも述べられる構造体 —]

[カール・セーガン『コンタクト』にての (正五角形を 12 枚重ねての) 正十二面体ゲート] ↔ (構造的同一性) ↔ [アトランティス崩壊現象に言及しているとのプラトン古典『ティマイオス』の他に目立つての元素論にての宇宙構造 (を規定

する第五元素とされるに至った正十二面体) にまつわる描写] ↔ [カー・ブラックホールと結びつけられてのゲート装置の小説『コンタクト』内にての描写]

[カール・セーガン『コンタクト』にて(全体としての黄金比の体現存在である)正十二面体ゲートと結びつけられているカー・ブラックホール] ↔ (黄金比) ↔ [黄金比で相を変えるとされるに至って一部で物議を醸すに至った存在たるカー・ブラックホール]

[カー・ブラックホールを生成する可能性も問題視されてきたLHCにあつてのブラックホール検知(にも用いられるイベント・ディスプレイ・ツール)] ↔ (アトランティスを用いるとの命名規則) ↔ [プラトン『ティマイオス』にて記述されているアトランティス崩壊] ↔ [アトランティスと正五角形の崩壊を結びつけていた(額面上は、もの荒唐無稽小説である)『ジ・イミルナタス・トリロジー』のありよう]

[アトランティスと正五角形の崩壊を結びつけていた(額面上は、もの荒唐無稽小説である)『ジ・イミルナタス・トリロジー』のありよう] ↔ (【トロイア崩壊譚関連の象徴】【911の予見的側面】【五角形と異界の境目】との各要素らの共有) ↔ [カール・セーガン著述『コンタクト』および「911の予見事物としての特性を複合的に帯びている」キップ・ソーン著述『ブラックホールと時空の歪み』の密接なる繋がり合い] ↔ [ワームホールやブラックホールの人為生成を描いているとのありよう] ↔ [LHC実験のブラックホール生成可能性]

[LHC実験のブラックホール生成可能性] ↔ [(命名規則の問題として)アトランティスやトロイアに通ずる側面]

さらに冗長性を排して上の関係式から導き出せるところを記述すると [次のような形態] での関係性呈示がなせる。

[アトランティス] ↔ [『海底二万里』潜水艦ノーチラス号訪問先の海底遺構] ↔ [『海底二万里』潜水艦ノーチラス号] ↔ [『ジ・イルミナタス・トリロジー』潜水艦レイフ・エリクソン号訪問先の海底遺構]

[アトランティス] ↔ [トロイア崩壊伝承とアトランティスの接合性に関わる黄金の林檎の園] ↔ [黄金の林檎(トロイア崩壊の元凶)] ↔ [『ジ・イルミナタス・トリロジー』にての黄金の林檎] ↔ [『ジ・イルミナタス・トリロジー』で黄金比の関係性を意識させるように正五角形(黄金比体現構造)と並置されている黄金の林檎] ↔ [正五角形(合衆国防総省本庁舎のそれと古代アトランティスのそれ)の崩壊と異次元介入存在の解放が結びつけられての『ジ・イルミナタス・トリロジー』粗筋] ↔ [望ましくないものの領域の間に横たわる正五角形ゲートの比喩]

[アトランティス] ↔ [プラトン著作『ティマイオス』] ↔ [宇宙の構成単位としての第五元素の如く位置づけのドデカヘドロン(正十二面体)を描く文物] ↔ (宇宙背景放射(電磁波の一種)の受信分析にて宇宙根本構造のあり得べき候補とされるに至った正十二面体) ↔ (宇宙から電波を受信して構築されたとの設定のフィクションに見る正十二面体としての)[カール・セーガン『コンタクト』に見る正十二面体構造のカー・ブラックホール接合示唆のゲート装置]

[アトランティス] ↔ [「黄金比」とその相の変化が結びつけて見られるに至り、一部科学界コミュニティでそのことが取り沙汰されているカー・ブラックホールを生成する可能性も取りざたされてきたラージ・ハドロン・コライダー関連の命名規則(イヴェント・ディスプレイ・ウェア ATLANTIS)] ↔ [カー・ブラックホール検知の可能性] ↔ [カール・セーガン『コンタクト』のカー・ブラックホール人為生成とも接合するゲート装置] ↔ [正五角形ゲートの比喩] ↔ [『ジ・イルミナタス・トリロジー』で黄金比の関係性を意識させるように黄金の林檎([トロイア崩壊]との関係性の媒介項となりもするシンボル)と並置されている異次元存在をそこに留めておくためのペンタゴン(崩壊した際に異次元介入存在が解放)]

以上、振り返ってのアトランティス(トロイア崩壊とその崩壊伝承に類似性があると明示してきたアトランティス)を基軸とした関係性の話に[911の予見的言及]とのアブノーマルなる要素(異常なる要素)が濃厚に関わっているから問題なのであるが、そこに「ノルウェー・スパイラル」のこともが[予見的言及]との兼ね合いで関わる、
[次の関係式]
にて関わるとの解説を試みてきたのが(補説2と題しての部にあつての[a]から[f]と分けてのところでの[f]の段にての)ここでの話となる。

[ノルウェー・スパイラル] ↔ [ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』(先述のように『ジ・イルミナタス・トリロジー』作中にて同作への言及が明示的になされているとの小説)にて誇張描写されつつノーチラス号に引導を渡したように描写されるメイルストロム、モスケンの大渦] (↔ [一部古文物(先掲の『カルタ・マリナ』)にてメイルストロム・モスケンの大渦をして渦潮の怪物カリュブデイスと結びつける描写あり] ↔ [渦潮の怪物カリュブデイス] ↔ [トロイアに引導を渡した木製の馬の考案者にしてトロイアが黄金の林檎にて滅びる原因となった誓約の発案としても知られる武将オデュッセウスが(トロイア遠征の帰途)それに呑み込まれて欧州一部識者に[アトランティス]と同一視されてきたオーギュギアー島に漂着することになったとのその怪物] ↔ [LHC 実験にて生成されうると目されるに至ったブラックホールシミュレーション・ツール(イヴェント・ジェネレーター)にそちら名称が付されての CHARYBDIS])

[ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』にて誇張描写されつつノーチラス号に引導を渡したように描写されているメイルストロム、モスケンの大渦としてのノルウェー・スパイラル] ↔ [ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』にそれが踏襲されたとのエドガー・アランポーの小説『メイルシュトロムに呑まれて』にあつての「何者も抗えぬ帰還不能点を持ち」もし「圧倒的な渦動による破壊力を持つ」とのメイルストロムにまわつての描写/同じくものエドガー・アランポー小説『メイルシュトロムに呑まれて』にあつてのメイルストロムを「時間有限なる領域と無限なる領域の境目としての虹(プリズムにて分光されての異なる波長の光ら)』とを結びつける描写、および、同作にあつての[デモクリトスの井戸](極小の世界を原子と結びつけた古代ギリシャ哲学者デモクリトスと井戸とが繋ぎ合わせられての語)とメイルストロムの序言部にての結びつけ] ↔ [時間有限なる領域と時間無限なる領域の境目で光さえ脱出不能領域に捕らえるとされる存在にして原子核領域の破壊的機序(加速器実験による原子核領域の高エネルギーの破壊的機序)によってその人為生成が問題視されるに至った存在でもあるブラックホール] ↔ [LHC 実験] ↔ [「どういふわけなのか」極めて非科学的にそれを LHC 実験と結びつけるとの一群

の実状無視の者達がいるとのノルウェイ中空にての渦巻き光現出事件] ↔ [ノルウェイ・スパイラル]

[ノルウェイ・スパイラル] ↔ [並行世界の突破がモチーフとなっている作品、そこにてのその発生(渦を巻く天にてのオーロラ状現象の発生)の予見がなされているとの存在 —小説ネアンデルタール・パララックス・シリーズ—] ↔ [ネアンデルタール・パララックス・シリーズの作者たるロバート・ソウヤーの手になる同作に先立つ作品としての『フラッシュフォワード』] ↔ [LHCと「ブラック」アウト現象(なるもの／二度目の同現象の観測時には全人類は聞しか見れなかったと描かれての現象)とを結びつけているとのある種の先見性 —(ニュートリノと超光速との関係を作品テーマとしており、CERNの後にてのニュートリノと結びつけられての超光速検証実験オペラ実験を想起させるものとなっているとのある種の先見性、および、ニュートリノとストレンジ・マターからなるクォーク星の超新星爆発を作品テーマとして「も」おり、1999年(当該作品『フラッシュフォワード』刊行年)より後の[LHC ストレンジレット生成関連安全性論拠]が超新星爆発と紐付けられていたとのことに通じもしているとのある種の先見性)—— を帯びての作品] ↔ [『フラッシュフォワード』作者の後続する作品たるネアンデルタール・パララックス・シリーズ](回帰) ↔ [並行世界の突破をテーマとするとの内容] ↔ [並行世界を貫通・突破しうるとされる重力(波)] ↔ [重力波通信機がブラックホール(を動力にしての縮退炉の類)と結びつけられての特定作品『ホールマン』] ↔ [(本稿前半部にて詳述してきた)LHC 実験に通ずる際立っての予見作品との接続性が問題になる『ホールマン』特性]

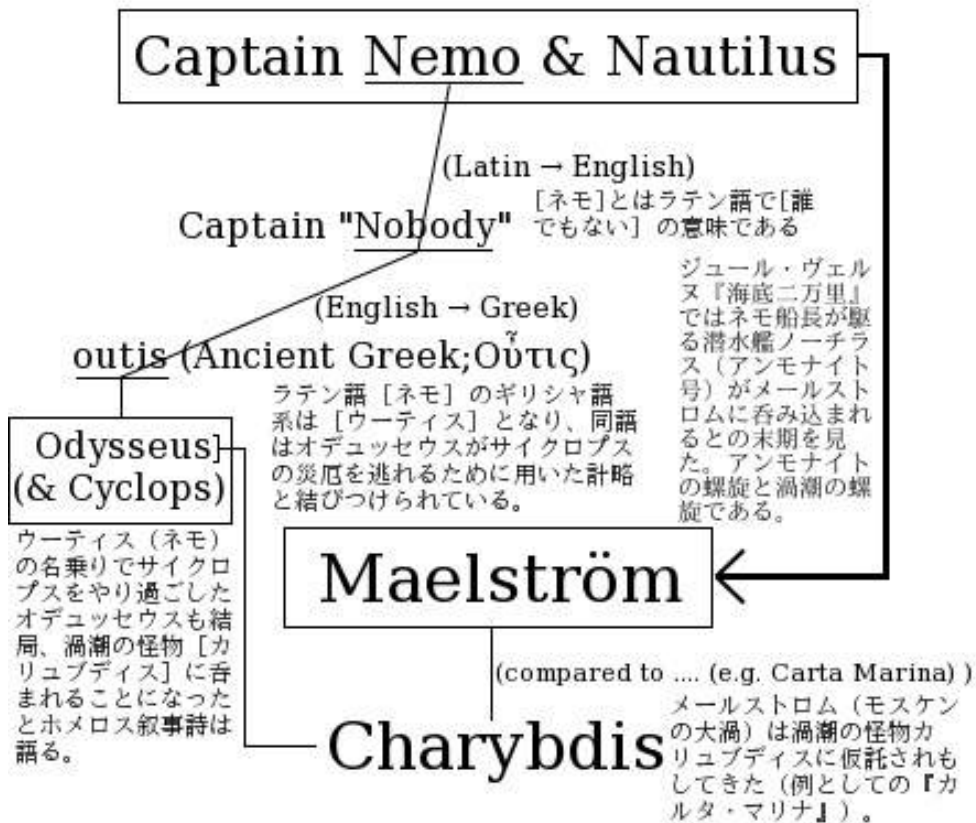
上の関係性摘示は — [文献的事実] [言論動向ありようにまつわる事実] のみに依拠し— この身の [主観] はなんら介在して「いない」とのものである。

以上の簡略化しての関係式の話、および、そこに付け加えての

[ノーチラス号 —アトランティス遺構をも訪問している潜水艦— の最期とノルウェースパイラル(メイルストローム)]

に至るまでのすべてが [アトランティス] および [ブラックホール生成実験とされるLHC] と接合しているとのそのありようをして [偶然] と思われるだろうか。

(直下、以上表記のことについて図を交えてさらにも補足をなすこととする)



上の図で示したいことはこうである。

「『海底二万里』という物語はオデュッセウスを主人公とする叙事詩『オデュッセイア』と関わっている。というのもネモ船長の名前ネモからして『オデュッセイア』主人公オデュッセウスと結びつき、またもってして、ネモ船長の乗艦ノーチラス号が呑み込まれたメールストロムもまた史的にオデュッセウスの物語『オデュッセイア』と結びつくとの側面があるからである」

どういことか。図に付しての解説部であらかたはご理解いただけることか、とは思うのだが、次のようなことらがあるがゆえに表記のこと、述べもしているのである。

・ネモ船長の[ネモ] (Nemo) とはラテン語で[誰でもない]との意味合いの言葉であるとされている。またもってして、その船長の[ネモ] (ラテン語) はギリシャ語系に変換すると [ウーティス] (outis) となり、そちら [ウーティス] (誰でもない nobody) との言葉、オデュッセウスと結びつくとのことがある。具体的には、である。トロイア攻めの帰途にあつての船旅にて人食い [一つ目巨人] の島にて足止めをくらった折、オデュッセウスは自身と仲間を食らおうとした一つ目巨人サイクロプス (ポリュペーモスという個体) に名を訊かれて「私はウーティスという者です」 ([誰でもない]との者です) との名乗りをなしていた、それゆえに、オデュッセウスらは見事に逃げ遂せることができたとのことが知られている、すなわち、オデュッセウスらが隙を突いてそちら人食い巨人の目潰しをなして遁走なそうとした折、目潰しされた独眼巨人 (サイクロプス・ポリュペーモス) は仲間の応援を求めんとした、だが、「誰に目を潰されたのか？」と仲間のサイクロプスらが目潰しをくらったそのサイクロプス (ポリュペーモス) に尋ねもしても「ウーティスだ」と答えるばかりで要領を得ない、そうしたことになっていた際にオデュッセウスらは人食

い巨人の島から遁走し遂せたとの筋立てがホメロス叙事詩『オデュッセイア』に見てとれるとのことがあるのである。それゆえ、ウーティスと来れば、西洋では「一つ目巨人の目を潰したオデュッセウス」のことであるとよく理解されているとのことがある。以上の文脈からネモ船長はオデュッセウス(の偽名たるウーティス)と結びつくというわけである(：同じくもの点に関しては英文 Wikipedia[Captain Nemo]項目にあつての Etymology [語源]の節にて現行、“Nemo is Latin for "no one", and also (as νέμω) Greek for "I give what is due" (see Nemesis). **Nemo is, moreover, the Latin rendering of Ancient Greek Outis ("Nobody"), the pseudonym adopted by Odysseus, in Greek mythology — a ruse employed to outwit the cyclops Polyphemus.**”(補いもしての訳として)「ネモとはラテン語にて[誰でもない(ノー・ワン)]との意の語であり、またもってして νέμω との綴りのギリシャ語、[相応しきところを与えよう]([復讐の女神ネメシス](の語源たる νέμειν を参照せよ)とも対応している。(キャプテン・ネモの)ネモとはその上、ラテン語を古ギリシャ語に引き直したうえでの[ノー・バディ](誰でもない)を意味するウーティス、すなわち、ギリシャ神話にてオデュッセウスに採用された偽名、サイクロプス・ポリュペーモスの裏をかくための策略上のそれにも対応している(以上、現行現時の英文ウィキペディア [Captain Nemo]項目よりの引用部とする)と表記されているところでもある)との記載がなされているところでもある)。

・ネモ船長(キャプテン・ノーバディ)およびその乗艦が最終的に辿り着いたノルウェイのメールストロム、そちら大渦自体が(オデュッセウスら一行を呑み込んだと伝わること、本稿でも先述の)大渦の怪物カリュブデイスあるいはカリュブデイスを凌駕する存在に仮託されもしているとのことがある(：筆者は先述のように「非常に興味深い」との洋書 **Hamlet's Mill**(『ハムレットの臼』の **CHAPTER VI Amlodhi's Quern**『アムロディの臼』にあつての図像紹介部を参照にて [カリュブデイス←→ノルウェイの渦]の仮託方式のことを知ったのだが(せんだって図示なししていたところでもある)、たとえば、現行・現時点での英文 Wikipedia[Moskstraumen]項目にあつても “The Swedish bishop Olaus Magnus included the Moskstraumen into his detailed report on the Nordic countries and their map, Carta Marina (1539). He attributed the whirlpool to divine forces and mentioned that it was much stronger than the previously known Sicilian whirlpool Charybdis.” (訳として)「スウェーデン人司教オラウス・マグヌス(北欧海図カルタ・マリナ製作者)はその北欧諸国にての微に入つての報告書および北欧地図カルタ・マリナ(1539年完成)にてモスケンスラウメン(ノルウェイの大渦)にまつわつての言及も含めてなしており、同渦巻きをして彼オラウス・マグヌスは[神の力]の賜物とし、[従前、シチリアのカリュブデイスとして知られていたもの]よりも遙かに強大な存在であるとも言及していた」との記載がなされているといったこともある)。

さて、(直上表記の式で)『海底二万里』にもギリシャ古典『オデュッセイア』(トロイア崩壊をもたらした武将オデュッセウスを主役に据えての叙事詩)の内容との結節点があるとして、である。それが何故もってして問題なのか。

については本稿にての先だつての部で以下のことを典拠を入念に挙げながらも強調していたことを思いだして頂きたいものである。

・叙事詩『オデュッセイア』主人公オデュッセウスとは「黄金の林檎を巡る諍(いさか)い」がトロイア崩壊に通ずることになったとの誓約の発案者であるが(ヘレンおよびヘレンの将来の夫が労苦を味わった折にはヘレンへの求婚者は彼・彼女らを助けるべしとの求婚レースにおけるわだかまり残さぬための事前誓約 — 出典(Source) 紹介の部 39)にて言及のようにそちら誓約が女神よりヘレンの略取を赦されたパリスの君臨するトロイア城市へのギリシャ諸侯来襲の契機となった — の発案者が彼となる)、オデュッセウスと関わりもする「黄金の林檎」[トロイア]との結節点が複層的にブラックホール生成可能性が取り沙汰されるようになったLHCにみてとれるとことがある(何故、そうもなっているのか、その機序の問題はここでは問題視しないとしても、である)。

・叙事詩『オデュッセイア』は The Sirens of Titan『タイタンの妖女』(1959)との作品(長じて米国文壇を代表する程の大物作家となったカート・ヴォネガットという作家の手になる初期の秀作として知られる作品)とも、また、2001: A Space Odyssey『2001年宇宙の旅』(1968)との作品(映画版の方は極めてよく知られているとの著名作)とも結びつくが、オデュッセウスを媒介にしても深くも結びつく両作の繋がり合いの問題には

【ブラックホールと通ずる側面】

【九一一の予見的言及に通ずる側面】

が見てとれるとことがある、現実にある(ここでは補説2と銘打つての部にて現行は筆を進めているわけだが、表記のことについては補説1と銘打つての先行するところの部、その末尾近くの箇所からして解説・言及をなしはじめていることである)。

・米国科学界を牽引するオピニオン・リーダーとの立ち位置にあったカール・セーガンの手になる小説 CONTACT『コンタクト』(1985)は — 密接に結びつく物理学者キップ・ソーンのやりようと著作を介し — 【ブラックホール人為生成と通ずる側面】【九一一の予見的言及に通ずる側面】を双方帯びている作品としての特性を本稿にての先行する段にて解説してきた作品であるが、と同時に、同作『コンタクト』からしてトロイア崩壊の寓意・『オデュッセイア』主人公オデュッセウスの寓意が多層的に見出せるとことがある、そのことの解説もなしてきたとの経緯がある(ここ補説2と銘打つての部にてのつい先だつての段、出典(Source) 紹介の部 82(2)から出典(Source) 紹介の部 83を包摂する箇所にて解説してきたことである)。そして、カール・セーガン『コンタクト』は直上にて言及の【ブラックホールと通ずる側面】【九一一の予見的言及に通ずる側面】との特質を同文に伴っている作品である The Sirens of Titans『タイタンの妖女』(1959)とも【固有要素】で接合しており(サイレンとヘラクレス座 M13 を結びつけるとのやりようがそうである)、そちら The Sirens of Titan とはオデュッセウス叙事詩『オデュッセイア』とタイトルからして結びつく作品である(サイレンズ・オブ・タイタンにおけるサイレンとは「妖女」とも訳せるわけだが、原義に着目すれば、それはオデュッセウス一行がカリュブディスに呑まれる前に苦しめられた魔声で船を沈没させる人面鳥身の怪物のことを指す)。

以上のことらがあるから『海底二万里』と叙事詩『オデュッセイア』との接合関係と
いったことを問題視しているのである（：また、余事記載として見てもらってもいいが、
本稿では[縮退炉]（ブラックホールを用いてのエネルギー供給機構）とのものにまつ
わって先だって細かくもの解説をなしている——**出典(Source) 紹介の部 87(5)**を参
照されたい(同出典紹介部ではLHC 実験関係者ら、ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ
大学の学究らが「[縮退炉]「的なる」ものを[LHC でブラックホールが造られたうえでの
残滓]でもって実現できる可能性がある」などと馬鹿げたことを述べていることを彼ら論
稿より引用するととの式で取り上げている)——。さて、日本のアニメ作品、メディア・
ミックスの走りとして経済効果も凄まじいものとされるかのエヴァンゲリオン・シリーズを
造り上げたことで知られるアニメ製作陣がそれ以前に製作した特定アニメーション作
品（敢えて作品名は挙げない。キーワードだけで調べる気があるのならばすぐに特定
出来るであろう）の中に**[縮退炉(ブラックホール・エンジン)を搭載したノーチラス号
の名を冠する[アトランティス文明の末裔]の駆る宇宙戦艦 N-ノーチラス号(なるも
の)]**が大活躍するとの作品がある。そこでも**【ブラックホール】【アトランティス】
【ノーチラス】**の三点セットが垣間見れる（大の大人がしかつめらしく肩肘ばって語る
ことではないと見られよう話をなしているのは百も承知だが、ただしもって、といった話
を軽視なせるとの要件が[この世界に意識的ないし無意識的なる傀儡(くぐつ)はい
ないとの仮定が容れられる]、より細かくは、[この世界で意識的ないし無意識的なる
傀儡(くぐつ)を用いて子供向けの作品の中にすら[嗜虐的反対話法]が「どうい
う思惑でか」巧妙に入れ込まれているとのことが一切ないとの仮定が容れられる]とのこと
であることも忘れてはならないだろうと述べておきたい)。

繰り返し問いもしたい。表記のようなことらがすべて
[偶然]

で成立することと思われるだろうか。数学に明るい人間のみならず高校卒業のティーンエイジャー・レ
ベルの数学知識で事足りることを目指しての確率論的な付説——法廷でのDNA 鑑定の正確性判
断にも用いられているところのベイズ確率論にまつわる付説——も本稿の後の段にて付すが、別段、
数学的観点を持ち出さずとも以上のようなことは「(さらに煮詰めての問題となることらの指摘をなす前
の)この段階からして」

「偶然であると考えするには無理がありすぎる」

と申し述べて然るべきところのものだろう（：疑わしきは上の関係性の流れをよく見直してそこに偶然性
の問題が観念できるか判断いただきたいものである。また、[911の事前言及]とも述べられる要素が
(話の奇矯さはともかくも態様上、オンライン上より容易に確認可能な文献的事実の羅列のみで異論の
成立の余地なくも多重的に指し示せるものとして)そうした関係性に関わっているとのことまでがあるの
であるから、この世界が**【人間の、人間による、人間のための世界】**であるとの前提(お花畑的フィク
ションのそれは言うに及ばず現実世界のありとあらゆる慣習慣行がそれを念頭に置いているとの前提)
を絶対視したがるような筋目の人間には[偶然][恣意]の切り分けで[偶然]と断ずるうえでのバイア
ス(偏見)が強くも作用するであろうが、こと、[生き死にに関わる問題]で[屠所の羊の家畜小屋][養
蚕産業における煮沸死処理伴っての蚕棚][アウシュビッツ]の可能性が現実にもそこにある中でそれ
を無視するのはこれほど愚かなことはないと強くも申し述べたい(そうした状況を判ずる材料が現実に
呈示されている中でそれを無視する種族に「明日はない」と強くも申し述べたい)。糸繰り人形のような
ものに予見的言及をなさしめる[機序](作用原理)の問題は不分明である——ただし本稿では並行世
界の貫通するとされる重力波と脳機序操作の話までは[行き過ぎた仮説]にまつわるところとして先だっ
てなしている——として脇に置いたうえでも現実にそこにある[現象]そのものを無視するなど悲劇的な
までに愚かであるとのことである)。

その点、さらに煮詰めての話を論拠呈示と共に続く段でなしていくわけだが、この段階からして「誰

が」(ミステリー小説でいうところのフー・ダニットの問題)、「いかに」(ミステリー小説でいうところのハウ・ダニットの問題)、「どうして」(ミステリー小説でいうところのホワイ・ダニット)、そのような関係性構築をなしたのかというそれらの点はともかくも、犯人(それも「とびきり悪辣な」犯人)は「いる」、すなわち、

[恣意の産物]

として[問題となる関係性]が具現化していると申し述べて然るべきところであるととくなくも強調したいところではある——ちなみにハードカバーにして何冊分にも相当する分量を[犯罪的黙過に通ずる欺瞞性の提示][多重因果関係の提示]との具体的指し示しに割いているとの本稿全体で呈示していることとて「実に残念ながら」極々一例にすぎぬとの関連する膨大な論拠を手前は(探求の結果)保持しており(本稿でそれにつき触れれば、分量も数倍に膨れ上がろうといったところとして、[マンハッタン計画に絡む特異なるシンボリズムに通ずる寓意]・[アメリカ合衆国の社稷の暗部にあっての儀式的側面にまつわる寓意]・[錬金術に絡む多重寓意]・[諸種サブカルチャーにわざと含まれている節ある多重寓意]・[以上をすべて結びつける奇怪なる[大伽藍]としての相互結合関係の存在]といったことにまつわる論拠を[因果関係]をはきと炙り出せるかたちで手前は保持しており)、手前自身が「そんなことをなすには絶対的に意味がない」と判断を下すか(すなわち、「人類という自分の属する種族のために闘うことには効果と時間の面で完全絶対に無為無駄との意味で実際に何の意も無く[運命は確定しきっている]との判断を下しきる」か)、手前自身が決を下す前に突発的に死ぬかするまで都度、それらを聞かせるべくものチャンネルがある限り、世に提示するように努めたい「とも」考えている——(膨大な証拠に基づいて[恣意]がそこに存すると指し示せられるのならば、そして、その[恣意]が[これより容赦なくもの皆殺し劇が現出する]とのことを執拗に宣言しているとの形態での発露を見ているものならば、そう、たとえ勝ち目なぞなくともそういう状況では死命を賭して抗うことこそが犯行宣言を一方的に浴びせられている者たちにとり[知的生命体の尊厳]を示し、[不条理]に異を唱える正しきやりようだろうと現行にてはとらえているのがこの身である。だから、実際に手前がその方向性を選択したとの道、死命を賭すとの道をそれができる人間は選択すべき局面が今であるということを示すべくもの懇切丁寧な立証を——それとても黙殺、衆に無視され、人間的に下らぬ奴原(やつばら)らに陳腐化されるにとどまり続けるのならば『その程度の種族か』と自分の属する種族(人類)に対する見極めもつこうか、との観点もあるのだが——なしている。脳を破壊するオピウム(阿片)を食らっているような相応の者達に至っては本稿にてここまで示してきたことが容赦なくも存在している、そして、続く段でさらにもって多重的に示さんとしているとのことらもがこれまた容赦なくも存在している中で(残念ながら、人類に内側から内破させての引導を下すとの多重的事前予告が巧妙極まりないかたちで、しかし、それが分かれば、一切の煙幕が吹き飛び首尾一貫したメッセージ性が浮かび上がってくるのかたちで存在している中で、でもいい)[最期]まで長期的に自分達のような[下らぬもの]が存在していけるなどと[およそ見当違いの誤信]をなし続けるか、とは思うのだが、とにかくものこととしてである)。

一応もの注記として

言論動向にまつわってここでいくつか付記しておくべきか、ととらえもしたことを書いておく。

第一。

「海外にあってはアトランティス絡みで[スターゲイト・アトランティス]との作品にかこつけてLHCによるゲート生成とのことを興味深い話柄にて問題視している人間らが従前からいる」

とのことが[言論動向にまつわる事実]としてある。

だが、そうした物言いは「興味深い」「ためになる」とのものだが、実に残念ながら、[立証]とは程遠いもので、[印象論]を「直観論的に」述べるやりように留められており、

話の程度もお世辞にも高度なものとは言えないとの次第となっている(：一部の(仮借なくも述べ)[人類の裏切り者]としての国内外の「明らかなる」馬鹿麁の撒布者ならずとも海外の意味深き話をなすとの向きも(それで何かを変え得ぬ種族ならば絶対に何も変え得ぬであろうとのレベルに到達させるべくもの)[証拠に基づいての具体的問題事の指し示し]よりも[視覚的印象論に重きを置いての話]ばかりを目につくところとしてなしているにとどまっている節が強くもある)。また、あわせて述べておくが、海外のそうしたスターゲイト・アトランティス絡みの話などはこの身がここに指し示しているようなことを「全くカヴァーしていない」とのものとしかなっていない(ただし、強調しておくが、海外のそうした言論を展開する向きは「印象論として」反対にこの身の方が指し示して「いない」実に興味深い「映像情報」をも提示してくれていたたりもする——であるので、精査なす必要があると判断した向きには海外のそうした論調も参考対象にしてみてもどうか、とも手前は考えている——)。

とにかくも、海外にての印象論先行の式が強くもあるやりようと「具体的」指し示し——筆致からお分かりいただきたいものだが、この筆者が死命を賭す覚悟で注力なしている指し示し——とを峻別していただきたいものである。

第二。

次のようなことも述べておきたい。

「本稿でそれに接合することを取り上げているとの限界領域にまつわる
ところでの話をなす向きとして——「時を遡って(日付偽装の高度な機械的機序でも働いているのか)」とのかたちにて——本稿それものに近いところで、あるいは、筆者のような人間に近接するところの似姿までをわざわざ偽造捏造してゴミのレベルに劣化なしての話を撒いているとの手合いが出てくる可能性も(不快極まりない「従前事例」より顧みて)「一層」観念されるころではある(本稿をオフライン配布に加えてオンライン公開すればそのリスクはいやがうえにも上がろうかとみている)。だが、そういうことがあっても相応の者たち由来のやりようと「強くも」この身の立証を峻別いただきたいものである」

(：「もう総決算も近かろう」と諸事由から判断しているこの状況下で筆者には「これ狭量に」といった形にて言論の先取特権などを重視するとの考えは毛頭ない——[種族が終わって無に帰しかねない]というときに馬鹿なかけこの順序に拘るなど意味のないことである——のだが、(そのように言い切ってしまうと冷たいと思われるかもしれないが)、ただ、[思考の自由度もなく知能も低いとの者ら由来のジャンク]とどういいうけなのか手前のような人間ぐらいしか具体的客観的に摘示せんとしていないとのことらが同列視され、もって、自身の訴えんとする事柄(本稿にてそれに努めている具体的立証の類)らそれ自体が言論領域にまつわるころとして毀損されることを危惧・懸念視しているとのことがある(言論領域毀損に通ずるような相応の類らのやりようについてはこの身の先行してのオンライン公開してきた申しようが真っ当な向きに全く顧みられない中ながらも「どういいうけなのかものそちら方向よりはわざわざもって見られ、かつ、毀損されていた「従前経緯」から観察されるころでもある))

その点、(そうした人間がいると希望的に仮定して)語るに値する向きが本稿のような

ものをまじめに検討せねば、そして、[認識→理解→行動]との反応を得なければ、相応の結果は変わるまいとの確たる所信に基づいて述べるところとして、本当に語るに足るとこの身がとられるような向き([本当に勇氣ある向き]でもいい)が本稿を読まれている、あるいは、この先、読みうるとのその状況にあつては[劣化されての塵芥の類]と[本稿にあつての手前の指し示し]の区別がきちんとなされることを切に請う。

第三。

(第二の点にも通ずるところとして)実にもつてくどくなりつつも書いておくと、筆者は([狭量さ][せせこましさを「ださい」とは見つつも][誇り][生き方・世への処し方(スタイル)に通ずる公正さ]を非常に重んずる人間である(相手の性質を試し見る、あるいは、望ましくない手合いを遠ざけるために、あるいは、自己韜晦するためにわざと確信犯的にさもしい・こすい・卑賤なるやりようを一芝居として前面に出しもすることもある人間であるが)。

それがゆえ、

「腐っても他より盗むが如きこと(剽窃の類をなすこと)はしない」

と一応、この場にて最大限の強意でもって申し述べておく。

につき、のようなこと —他の知的営為の結果を盗むが如くこと— はまともな人間であれば断るまでもなくなさぬ・しないとは思のだが、[他より盗んでそれを自分のもののように語る陋劣な人間](あるいは陋劣さ以前に人間性の欠如を見ている類)がそこにいたとすれば、そして、そのやりようが判明すれば、

「一般論として」

『そういう手合いは世の中を絶対に変えるような類ではないし、取り合うに値さえない』

との認識でもって世人には見られることかとは思(：「あいつは人様の言論を盗んで、なおかつ、そのことを明示しないでそれを自身に由来するやうなものとして述べながら高言を吐いているやうな輩だ」と多くの向きらに看做されれば、盗まれた方が無力無名で、かつ、盗んだ側が余程の知名度・権力(それが悪魔的力学によって与えられたものか否かは問わない)を有しでもしていない限り、[言論の威力][行為の有効性]も当然に下がろうというものである)。

といった式にも通ずるところとして相応の力学、この身が本稿にて展開しているとの言論を好ましからざるものと見もしようとの力学 ([尋常一様ならざる機序で望ましくないことをやらされるやうな手合い]や[何かを理解する能力など持ち合わせていない上、人の足を引っ張っても痛痒に感じぬとの[下らぬ輩]との表現が至当な程度レベルの人間ら]を自在に使役しうるとの力学) であるのなら、確信犯的に先後関係を「逆転」するやうな剽窃 —本稿が先にあつたところを先後関係を逆転するやうに「極めて似た」紛い物を構築するやりよう— を屑のやうな手合いらに組織だつてなさしめる可能性があると見る(実際に本稿を公開することにしたサイトの一にあつての従前言論と似たやうなものが事後的に相応のところ複数出てきたとのことを確認させられている、そうした従前訴求内容が誰も真つ当な向きに顧みられていないのではないかとの節ある中でそういう動きばかりはどいうわけなのか「逐次」確認させられているからそうも述べる)。

そうした可能性を憂慮し、[本稿にまつわたる「ユニークなる」ことに先後関係で疑義疑念抱かせるやうな向き・媒体]がいる・あるとしたらば、(本稿筆者ではなく)[本稿にて訴えんとしていることの信頼性]そのものをその伝 —印象操作なすとの伝— で傷つける意図ありとの可能性につき考えてみていただきたいものである。 実にもつてくども繰り返すも、

[他人の十八番を奪い、もつてして、自分のものであるかのように着飾る行為、剽窃(猿真似)をなすやうな者由来の論理は信に値しないと思わせる]→[属人的特性のみ

ならずそうした者由来の言辞は一切信頼に値しないと思わせる]→[話者を傷つけ、もってして、その先にあるところの目的である訴求内容を傷つけるとの効用を充足させる]

どの方向も観念できると申し述べもしているのである（:その点、[敵手やりよう]を想定した場合、[オーソドックスなやりくち]を考えれば、そうした回りくどいことは実施されずに、[訴求事項そのものによく似た嘘を大量にちりばめての人格特性とは無縁なる紛い物]をそこら中にばら撒き、もってして、マクロの環境での言論土壌汚染が専らに計られるか、とも思うのだが(日本のインターネット環境それ自体が強くもその方向性を帯びている節もあるかとは見ているのだが、千三、千に3つぐらいしか真実がないところで誰が真剣に「問題」を顧慮しようか)、それでも「強力かつユニークさが際立った情報源」(あるいはこの先、効力を呈しうるとの潜在力を擁した情報源)がそこにある場合、並行してそうした対象を直接的に攻撃する前の間接的攻撃が計られる可能性も想定されると述べたいのである)。

であるから、(知識・知能・精神性、すべてに陋劣さあるいは嘘くささの臭いが付きまどっているが如く者らが不自然に本稿に近しき高度なことを部分的に披瀝しているといった)相応の媒体(あるいはそれと思しきもの)があったらば、「その内容をよく検証いただいたうえでその背後にはどういう機序があるかよくよくも考えて欲しいものである」と強くも述べておきたい。

以上申し述べたうえですぐ上にて書いたことと同じくものことを再三再四述べるも、「まったくもって反響を得られていない」との従前段階からしてこの身の従前やりようをどういうわけなのか悪い意味で模倣する、将来的に色つきのように見せたい、あるいは、この身申しよう(あるいは同程度の水準のもの)のようなものがそも、説得力を伴ったものとして世に出てほしくないとも考えているのか、あるいはただ単純にこの身がそうであるような類型の人間を愚弄したいとの背面での強力な作用がある「だけ」なのか、下らぬことをやっている一群の手合いらの存在を(同じくもの従前から訴求なさんとしてきたことの絡みで)既に確認しはしているのだが(具体的媒体名も URL 込みで挙げられるが、品位維持のために語るだけに本稿の値打ちが下がろうとのそうした水準低き者ら由来のジャンクのことはここでは取り上げない)、そうした[手足]としての手合いらばかりがこれ無為に本稿のようなものの「走り読み」(「検討」とは書かない。[手足]として言われるまにまに機械的にしか動いていない節ある相応の手合いらに何かを検討するとの知的真摯さなどないであろう、あれば、妨害などできないだろうと考えるからである)をなしている可能性(ゼロないしマイナスは足し合わせてもゼロないしマイナスにしかなりえないとの類のカルトなどの組織体に属している手合いらなどが意味無き「走り読み」をなしている可能性)を想定して次のこと、ここに書いておく。

「最早時間がないとの判断がなせるとの材料が山積しているなかで
[最期]まで愚劣に動いて、そして、(嘲笑われて)死んでいきたいの
ならば妨害をなすといい。ただし、生ある限り、そして、それが [必要性がある] とのレベルに到達した場合、この身もそうしたやりようには意
趣返しを検討するであろう」

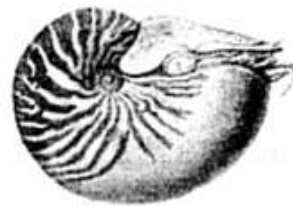
(付記しての話はここまでとしておく)



Nautilus



Atlas



上の図の上段部にて提示しているのは英文 Wikipedia[Chambered nautilus]項目

に著作権の縛りなくも公開されているとの美術作品(合衆国ボルチモアに存在する美術館(Walters Art Museum)にて収蔵の17世紀製作の一品)となり、

[巨人アトラスがノーチラス外殻を担ぎ、そちらノーチラス外殻が液体をたたえる構造となっている盃]

となる(現行にては「生きる化石」などとされて珍重されているノーチラス外殻に関しては呈示の美術作品に見るようによく[美術作品のパーツ]として利用されてきたとの来歴がある——調度品に加えられるような理想的なノーチラス(オウムガイ)の標本構造について扱った英文 Wikipedia[Chambered nautilus]項目にて現行、“Nautilus shells were popular items in the Renaissance cabinet of curiosities and were often mounted by goldsmiths on a thin stem to make extravagant nautilus shell cups, such as the Burghley Nef, mainly intended as decorations rather than for use.”「ノーチラス外殻はルネサンス期、珍品らを収めての陳列棚(調度品としての陳列棚;キャビネット)にあつてよく見受けられる物品となっており、しばしば金細工師によって(実用向けというより装飾物としてのありようを専らに指向しての)奇抜なノーチラス・カップ、[バーニー・ネフ](美術史にあつて部分的に知られている銀メッキされた塩入れ)のようなものに見る「ノーチラス」・カップたるように、と脚部の上に据え置かれもしていた」と記載されているようなことである——)。

さて、上掲図上段部の美術作品に見る、

[【世界を担ぐ巨人たるアトラス】と【ノーチラス】とが結びつけられてのやりよう]

とて(往時にての思惑・目分量の有無の問題はさておきも)「今日的な視点で後付けで見れば」たかだか数百年前の芸術家の[着想の妙]の問題で済まされないとのこと(すくなくとも)ジュール・ヴェルヌ作品に通ずるあれやこれやの時代から具現化し始めている、そのようなことを訴求しているのが本稿となる(ちなみに、「訴求の用に」、と挙げた上掲図にあつての下段の部はそれぞれ Project Gutenberg にて全文公開されている Terrestrial and Celestial Globes Volume1 (1921)に掲載されているとの図像から抜粋した[アトラスの似姿](それが据え置かれたイタリアのファルネーゼ家建築物にその名が由来する[古代ローマ期製作のファルネーゼ・アトラス像]を描いているとの挿絵)および英文 Wikipedia から抜粋した[ノーチラス解剖図]となる)。

その点、[アトラス][ノーチラス]にて示されることがそれにまつわるあれやこれやについて解説してきたとの、

[ノルウェー中空に発生して物議をさらった渦を巻く光の発生]

にも接合するとのこととして何が問題になるのかについて

[(委細を割愛したうえで)下に「一例」として図示した通りのこと]

などを本稿のここまでの段にてきちんと解説しているか、具体的かつ真のおける証拠主導方式の話としてきちんと解説しているか、よくよく確認いただきたいものである。

(以下、確認のための図を挙げることとする)



Atlas & Golden Apple

(the 11th labour of Hercules)

【アトラス】登場の目立ってのエピソードは同巨人が【黄金の林檎】と結びつけられてのヘラクレスの第11功業となる。

Nautilus

Logarithmic spiral

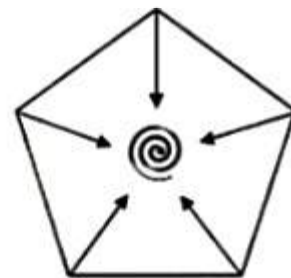
Golden spiral



The Symbol of Discordianism (seen in The Illuminatus! Trilogy)

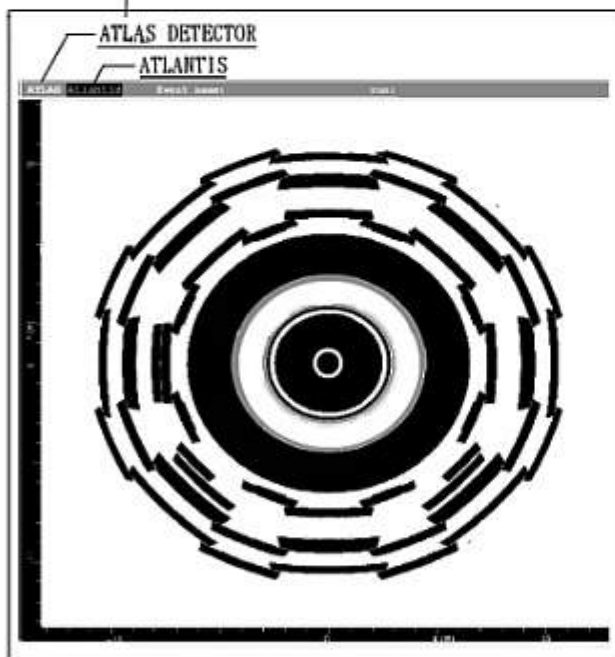
その主人公 Hagbard Celine の旗艦たる「黄金色の」潜水艦が *Twenty Thousand Leagues Under the Sea* 『海底二万里』の Nemo 船長の旗艦 Nautilus 号 (すなわちオウムガイ号) とその作中にて明示して結びつけられているのが小説 *The Illuminatus! Trilogy* である。

さて、同『ジ・イルミナタス・トリロジー』、本稿にての先の段にて細かくも申し述べたように (直近言及の) 黄金色の潜水艦を駆る男の属する組織のシンボル —— 上掲の【黄金の林檎】と (黄金比の体現構造たる) 【五角形】を並列描写してのシンボル —— ありようをも含めて [911の事前言及作品] となっているとの作品となる (: 【黄金の林檎】がニューヨークのシンボルとなる。と、兎れば、【ニューヨークとペンタゴンの並列描写シンボル】が多用を見ているとの小説が表記の作品となるのであるが、といった作品にて【マンハッタンのビル爆破】・【ペンタゴンの爆破】・【米軍から漏出した炭疽菌の災厄】がモチーフとされ



問題小説にて【黄金の林檎と並列描写されている正五角形】は黄金比の体現存在であり、五芒星と永劫に続く相互内接・外接関係を通じて無限小の縮

の爆破]・[米軍から漏出した炭疽菌の災厄]がモチーフとされている。そこより[マンハッタンビルとペンタゴンが同時標的とされて、また、接合する事件として炭疽菌事件が発生した、とのフィクションならぬ現実世界の911の筋立て]が想起されるようになっている——ジ・イルミナタス・トリロジーが911との兼ね合いで問題になるのはそれにとどまらないわけだが、際立つところにつき述べれば、そうなる——)



Detection of Black holes

外接関係を通じて無限小の領域への力学を指し示すものとなりもする(先の段にて詳説)。

につき、
[[黄金比]と結びつく無限小への力学]

とのことで述べれば、対数螺旋構造(Logarithmic Spiral)と親和性が強いものとなる(：整然とした渦巻きたる対数螺旋は無限小の領域へと回転していき、また、性質上、黄金比と親和性が強い)。

その対数螺旋構造、ノーチラスの外殻と結びつくものである。

といった文脈にて、

[[黄金色の潜水艦](五角形と黄金の林檎を並列描写するシンボルを団体の象徴としている男の旗艦)と[[ノーチラス]号]が特定小説間で結びつけられているとの事実]

が「他の」事柄ら(相互に結びつくとの文物ら、そして、それら文物らに見る911の事前言及と結びつく側面)ともつなかりがあるとのことを文献的事実の膨大な摘示・羅列にて指し示そうと試み、また、その関係性が

[女神エリスの投げた黄金の林檎(トロイア崩壊の原因)]

[巨人アトラス]

[アトランティス]

らといった、

[特定の、僅か数例の神話伝承上の存在]

と何重にも何重にも結びつきがら、[相応の比喩](敵対関係にある相手を内側から皆殺しにするとの不快な比喩)が露骨に見えるとの式で昨今取り沙汰されるに至ったブラックホール人為生成と結びついていると指摘できるような「なってしまう」ことを(それぞれ膨大な文量を割いて)証明せんとしているのが本稿となる。

(かなりの紙幅を割きもしての極めて長くものパートとなったが([a] から [f] と分けもして展開してきた一連の部にての) [f] と振っての部をこれにて終えることとする)

「【ブラックホール人為生成問題】に通ずる予見的な事物らとして本セクションでいかなうなことを取り上げてきたのか」についての整理のための表記、そして、がてらにももの訴求として

最前の部までにて実に長くもなつたが、[a]から[f]と振って段階的になしてきた話を終えた。そも段階的になしてきた話に入った契機は奈辺にあるのか、またもってして、同じくもの[a]から[f]と区切つての話の意義・意味はどういったところにあるのか、とのことについて[整理・まとめ]の表記をこれよりなしておきたい。

さて、——あまりにも紙幅の厚みが増してきたため筆者自身書き進めながら、つい委細につき失念しそうにもなつてきたとのところなのだが—— そもそも、ここ[補説2]の部にてつい最前までそのために筆を割いてきた[a]から[f]と振つての話に入った経緯は

[【 $\alpha 1$ から $\alpha 8$ と振つての各事項に対する指し示し】(本稿のより先立つ段、[補説2]と振つての部に入ってより間を経ずに注力なしてきた指し示し)およびそちら指し示しに対する[黄金比]に関わるところの言及]

をなし終えた段階で「さらに述べるべきである(と判じた)ところがある」との流れのうへのことであった。

そちら「さらに述べるべきである(と判じた)ところがある」とは具体的には次のような流れにまつわるところのものであった。

先行して取り扱つてきたところの、

【 $\alpha 1$ から $\alpha 8$ と振つての各事項に対する指し示し】

および

[[911の露骨かつ奇怪なる前言小説としての特質を帯びているとのことを解説してきた『ジ・イルミナタス・トリロジー』(黄金の林檎と正五角形の絡みで黄金比のこともが問題になる小説)にあつての主役級の人物が駆る「黄金」色の潜水艦(レイフ・エリクソン号)] \longleftrightarrow (作中内のそれを含めての明示的関連付けの存在) \longleftrightarrow [『海底二万里』のネモの潜水艦ノーチラス号](こちらノーチラス号は黄金螺旋ことゴールデン・スパイラルを近似的に体現している存在であると(たとえ不適切に、でも)よくも表されるオウムガイより命名されての潜水艦)]

の各事項らの間にはこれはこうでこうであると指し示せるとの[一貫しての相関関係]があり、そもした[相関関係]からより一歩進んで問題になることの摘示をなす(ために[a]から[f]と振つての話の流れでの摘示をなす)。

以上、話の「おおよその」流れについて振り返つた上で、より微に入つての振り返り表記(そも、ここ[補説2]で $\alpha 1$ から $\alpha 8$ と振つて何を指し示してきたのか、また、その絡みで[a]から[f]と振つてきたことがいかなうな意味を有し、また、その先のこととしてさらに何を問題視してきたのかの振り返り表記)をなし、もつて、(長くも細々とした各解説事項を典拠と共に書き連ねてきたとの)ここ[補説2]の段のとりまとめとしたい。

まずもって、

【 $\alpha 1$ から $\alpha 8$ と振っての指し示し事項】

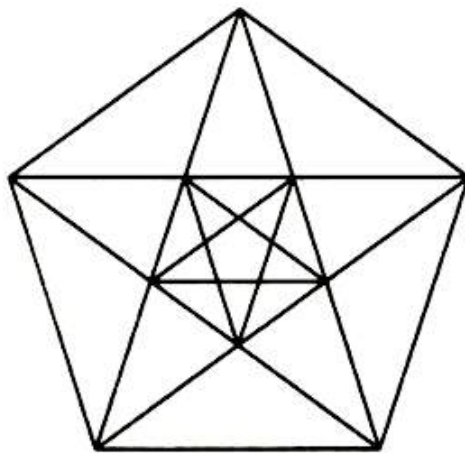
が何であったのかの再表記を —そこからして何度も何度も書き記しているところなのだが— 再度もってしてなすこととする。

(以下、属人的主観とは無縁なる客観的事実であるとの典拠を仔細に呈示してきたこととして)

α . (金星にまつわる会合周期にあつて具現化するとの指摘もなされてきた) [五芒星相似形]を[ブラックホール絡みの話]と接合させるような奇怪なることらがある。すなわち、次のようなことら($\alpha 1$ から $\alpha 8$)がある。

$\alpha 1$. 地球と金星と太陽の内合(インフェリアー・コンジャンクション)時にあつての天体座標を結んで出来上がるとのことがよくも取り上げられるとの [五芒星]は[五角形]と結びつく図形でもある。[(ほぼ正確な)五芒星]が描写される局面]というのとは[(ほぼ正確な)正五角形]に近しきものが内にて形成される局面]であるとも述べられる。どういふことか。[(正確な)五芒星]というものは[正五角形]に内接される図形として描けるものであり、[正確な五芒星の各点]を構成する五点というのが正五角形の各点にそのままに対応することになるとのことがあるのである。

$\alpha 2$. 正五角形、英語に直せば、[レギュラー・ペンタゴン]との特質を持つのがアメリカの国防総省の本部庁舎である。そのペンタゴンの広場は先の911の事件の起こる前から[ワールド・トレード・センターの跡地]がそう述べられるようになったのと同じ言葉で呼び慣わされていた、[グラウンド・ゼロ]との言葉でもって呼び慣わされていた(核戦争時にあつて核兵器「爆心地」(ゼロ地点)となりうるとの観点にて、である)。



$\alpha 3$. グラウンド・ゼロという言葉は911の事件が発生する前からペンタゴンの広場と歴史的に結びつけられてきたとの沿革がある(上の $\alpha 2$ にて言

及)のだが、そちらグラウンド・ゼロという言葉、かの911の事件が起こる「前」から「使用局面が際立って限られていた特殊用語」として存在していた同語を「ブラックホール」と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が存在しており、その書籍、「不可解極まりない911の予見的言及とも関わる」とのことを本稿の先だつての段で先述なしてきたとの書籍でもある **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea** (邦題)『異端の数ゼロ』となる。

同著『異端の数ゼロ』序盤部にては「五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性」のことが「最小の単位(無限小)に向かう力学」を指し示すようなものとして取り上げられているとのことがあるのである(α1の出典とも重なるところとなる)。

さて、そのように問題となる —「どうしてそういうことが？」の問題はともかくにも911の異様な先覚的言及をなしているとの式で問題となる— 書籍で取り上げられている「五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性」にて「も」表象される「最小の単位(無限小)に向かう力学」は言い換えれば、「原子核の領域に向かう力学」、さらに述べれば、「原子核を構成する陽子や中性子の領域、そして、陽子を複合して構成するクォークのようなより極微の素粒子の世界に向かう力学」のことを想起させるものでもある。

何故か。

原子のなかで原子核の占める割合はおそろしく小さい、そのような原子核を構成するのが中性子や陽子であるといったかたちで(小さきことをひたすらに突き詰めていった際の)極小の世界というものは展開しているからである。「五角形(ペンタゴン)および五芒星の両者の図形的特性」のことを知っていれば、自然に想起されるのが「最も小さな極小の世界へ向けての力学」であり、それは換言すれば、「素粒子物理学などが領分とする極小の世界へ向けての力学」であると言ひ換えられるようなところがあるのである。

そして、そうした限りなくものゼロ・スケールに向かつて展開する極微の世界の領域の研究(たとえばヒッグス粒子や超対称性粒子なぞと命名されてのものを発見に血道をあげるとの「研究」)を声高に唱道、「原子核を壊す中での膨大なエネルギー」(と述べても極微領域に集中しているからその膨大なエネルギー」で「ブラックホール」さえもが生成される可能性が取り沙汰されているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まつてのLHC実験であると言われている。

α4. **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea** (邦題)『異端の数ゼロ』との書籍は911の事件が起こる「前」から特異な言葉であるとのグラウンド・ゼロという言葉ブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍、かつもつて、不可解なる911の予見的言及とも関わっているとの書籍でもある(←α3で言及したことである)。そして、同著『異端のゼロ』は「五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性」と結びつくことに言及しているとの書籍でもある(←α1およびα3にての出典にまつわるところでもある)。

そうした書籍で扱われる

[ゼロの世界][極小の世界]

に近しきところで(原子に比してその比率が恐ろしく小さいとの極小の存在たる)「原子核」を破壊しようとのことをなし、そこにて発生する膨大なエネルギーからブラックホールを生成しようとのところにまで至ったのが **LHC** 実験

であると「される」(← $\alpha 3$ にて言及のこともある)のだが、他面、[911の事件]では何が起こったのか。[[正五角形]との形状を呈するとのペンタゴンが崩された]とのことが起こっている(← $\alpha 2$ で合衆国国防総省庁舎たるペンタゴンが(正確な五芒星と無限に続く相互内接外接関係を呈するとの)[正五角形]であることを問題視している)。

以上のことより[次の関係性]が想起されもする。

[現実世界で911の事件が起こる「前」からアメリカ国防総省本部庁舎たるペンタゴン(正五角形)の広場と結びつけられてきたグラウンド・ゼロという特殊な言葉(← $\alpha 2$)] ⇔ [911の事件が起こる前から[グラウンド・ゼロ]との特殊な言葉とセットとなっていた現実世界でのペンタゴン([正五角形]状の米国国防総省庁舎)の911にあつての部分崩壊] ⇔ [正五角形(合衆国国防総省庁舎ペンタゴンとの同一形状)の(911にての)部分崩壊($\alpha 3$)] ⇔ [911の事件が起こる「前」から特殊用語として存在していた[グラウンド・ゼロ]という言葉ブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍であり(そして911の不可解なる予見事物とも通ずるようになっていた書籍ともなり) またなおかつもってして、五芒星と五角形(ペンタゴン)の間の無限に続く相互内接・外接関係によって表象されもする極小の世界へ向かう力学に言及している著作ともなる ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』という著作の内容] ⇔ [無限小に至る方向性での中での破壊挙動、原子核を壊す中での膨大なエネルギー発現状況でもってブラックホールを作り出しうると言われるに至っているLHC実験を想起($\alpha 3$)]。

以上のような⇔で結んでの関係性については

『何を述べているか理解しがたい』

と受け取られるか、あるいは、

『穿ち過ぎ(考えすぎ)である』

と思われるところか、とも思う。それゆえ、そうした物言いがなせてしまう「他の」事情があることにつき続く段で「補いながらもの」表記をなす。

$\alpha 5$. [グラウンド・ゼロ]という言葉 — (本来、[広島・長崎の爆心地]を指すべくも考案された特別な言葉であり、また、冷戦期、核戦争の標的たるところと結びつけられるに至った言葉である) — と[911]の事件の発生前から結びつけられていた[ペンタゴン](アメリカ国防総省本庁舎)というのはレズリー・グローヴズという男(往時、米国陸軍工兵隊大佐)を責任者にして1941年「9月11日に」建設が開始されたとの建物である。

そちらペンタゴンの建設計画を指揮していたレズリー・グローヴズという男が「ペンタゴン建造中に」大佐から准将に昇進、主導することになったのが[マンハッタン計画]となっており、同[マンハッタン計画]で実現・現出を見たのが[原子爆弾]と[広島・長崎への原子爆弾の投下]([グラウンド・ゼロ]との言葉がはじめて用いられるようになった爆心地を現出させた挙動との意味合いで本稿の先の段でも取り上げていた原爆投下)となる。

そこに見る[原子爆弾]というのは[極小領域たる原子核のレベルでの崩壊現象、[核分裂反応]によって実現を見た兵器]でもある (：1941年9月11日から建設開始(着工)を見ていた[ペンタゴン]の建設計画を指揮していた男レズリー・グローヴズが[マンハッタン計画]の責任者でもあったわけであるが、[マンハッタン計画]というのはそも、[極小の領域、原子核のレベルでの崩壊現象が原子爆弾を実現ならしめること]が着想されて開始された計画である。[原子核レベルでの崩壊現象を利用した核兵器開発]

と「ペンタゴン」が結びつく、そう、「五芒星形と五角形(ペンタゴン)が無限に相互に内接・外接しあいながら無限小へ至る方向(原子核や素粒子の世界へ至る方向)を指し示すもの」であることを想起させるように結びつくとのことが歴史的沿革として存在していることが問題となる)。

α6. 金星の内合ポイントにてその近似物が具現化するとその五芒星は史的に見て「退魔の象徴」とされてきたとの経緯があるものである。

さて、その「退魔の象徴としての五芒星」と結びつくような「退魔の象徴物としてのペンタゴン(アメリカ国防総省本庁舎)」が爆破されて「異次元から干渉する外側の銀河由来の妖怪が解放されるとの「荒唐無稽小説」」が世に出ている。それが本稿の先の段で「911の「奇怪なる」予見的言及をなしている」との要素を同作が多重的に帯びていることにつき仔細に解説してきた70年代欧米でヒットを見たとの小説作品、『ジ・イルミナタス・トリロジー』である。

につき、
「退魔の象徴としての五芒星と結びつくが如き退魔の象徴としてのペンタゴンの崩壊、および、911の事件の発生(マンハッタンとペンタゴンが同時攻撃されたとの事件)」を前言しているが如くの「奇怪なる文物」などとのものより想起されるのは「一繰り返しになるも」次のようなこととなる。

⇒「(直近にて言及の)書籍『異端の数ゼロ』に特性として認められるとの「五角形(ペンタゴン)と五芒星の内接関係を無限小に至る機序として呈示するとのやりよう」・「グラウンド・ゼロという言葉を911の事件が発生する前からブラックホールと結び付けているとのやりよう」・「不可解なる911の予見的言及と関わりもするとの側面」←→(関係性の想起)←→「ペンタゴン(1941年「9月11日」に建造開始の国防総省庁舎)の建設計画を主導した軍人が同様に主導して「原爆」と「グラウンド・ゼロという言葉」を具現化させることになった「無限小に至る力学(五角形と五芒星が相互に無限に内接・外接されるかたちで表象される力学)の過程での原子核崩壊作用」」を利用しての「マンハッタン計画」に見るありよう」。

α7. 会合周期(具体的に述べれば、8年単位で現出する5回の地球との周期的内合関係)でもって「五芒星」を描くとされる存在が金星となることを先述した。また、同文に金星が悪魔の王ルシファーと欧州にて歴史的に結びつけられてきた星であることも先述した。

さて、歴史的に惑星金星と結びつけられてきたとの悪魔の王ルシファーとのつながりで述べれば、ダンテ『地獄篇』にもミルトン『失樂園』にも「ルシファーと結びついた罪の領域」にあって「今日的な観点で見てのブラックホールの近似物」が多重的に具現化していると申し述べられるようになっていくこと、解説をなしてきたのが本稿である。

α8. 「五芒星」は「黄金比」と際立って結びつく図形でもある。そこに見る「黄金比」と「ブラックホール」が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある。

(※表記のことらについては以下の出典紹介部を通じて典拠を網羅的にカバー、呈示すべくも努めてきた。

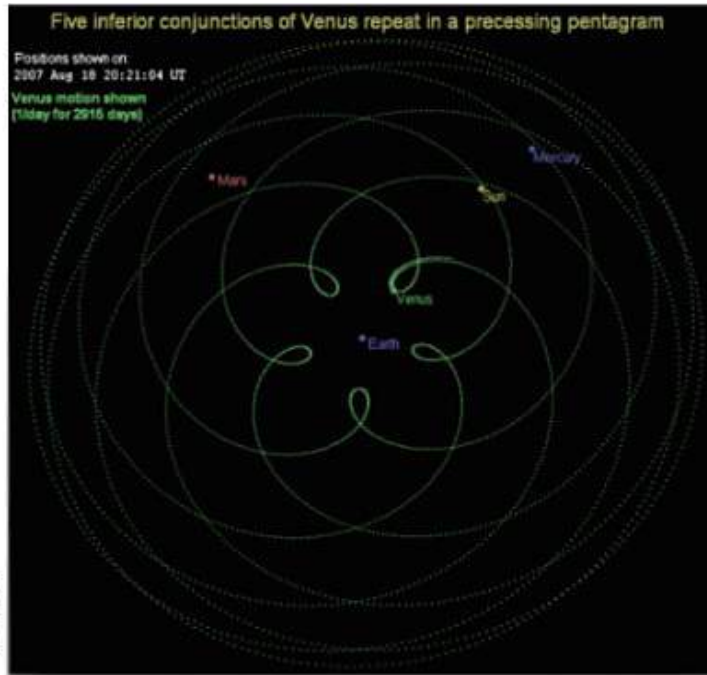
⇒

- α1については出典(Source)紹介の部 68を典拠となし、
α2については出典(Source)紹介の部 70を典拠となし、
α3については出典(Source)紹介の部 69および出典(Source)紹介の部 69(2)および出典(Source)紹介の部 71を典拠となし、
α4については「α2からα3の部をまとめたの部であるため、α2からα3の出典と重複する」との申しようをなし、
α5については出典(Source)紹介の部 70(ただしα5後半部はα3と出典共有)を典拠となし、
α6については出典(Source)紹介の部 72および出典(Source)紹介の部 37-2(再掲)出典(Source)紹介の部 38-2(再掲)を典拠となし、
α7については[出典(Source)紹介の部 55から出典(Source)紹介の部 55(3)を包摂する数万余字割いての解説部]および出典(Source)紹介の部 67を指定参照先として挙げ、
α8については出典(Source)紹介の部 73を典拠となしている)



the similarity between the area of Dante's Lucifer and the black hole

※本稿にての[出典(Source)紹介の部55]から[出典(Source)紹介の部55(3)]を包摂する解説部ではダンテInferno『地獄篇』に登場するルシファーの領域と現代科学の視点で見たブラックホール(に伴う特性)が際立っての類似性を呈していることを事細かに指摘している。



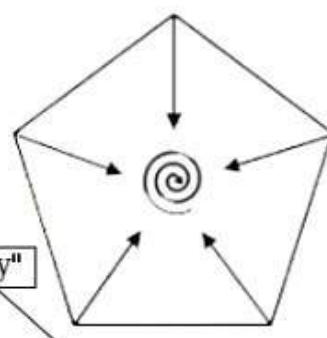
天文学における金星の会合（内合）周期は五芒星描画の問題と結びつけて長らくも語られてきたものとなる。

Successive inferior conjunctions of Venus occur about 1.6 Earth years & Pentagram

Pentagram & Pentagon & Golden Ratio

Nuclear fission

先述のように五芒星と正五角形（レギュラー・ペンタゴン）の無限に続く相互外接・内接関係は「原子」→「原子核」→「素粒子」との按配でスケールを小さくしていく【極小の領域】に向けての力学を体現するものでもある。さて、【極小の領域】にあつての原子核の破壊的変性プロセスこそが（先立って細かくも説明しているように）【マンハッタン計画での原子爆弾の開発に利用された機序】となっているとこのことが一科学ありようにまつわつての常識的トピックとしてある。



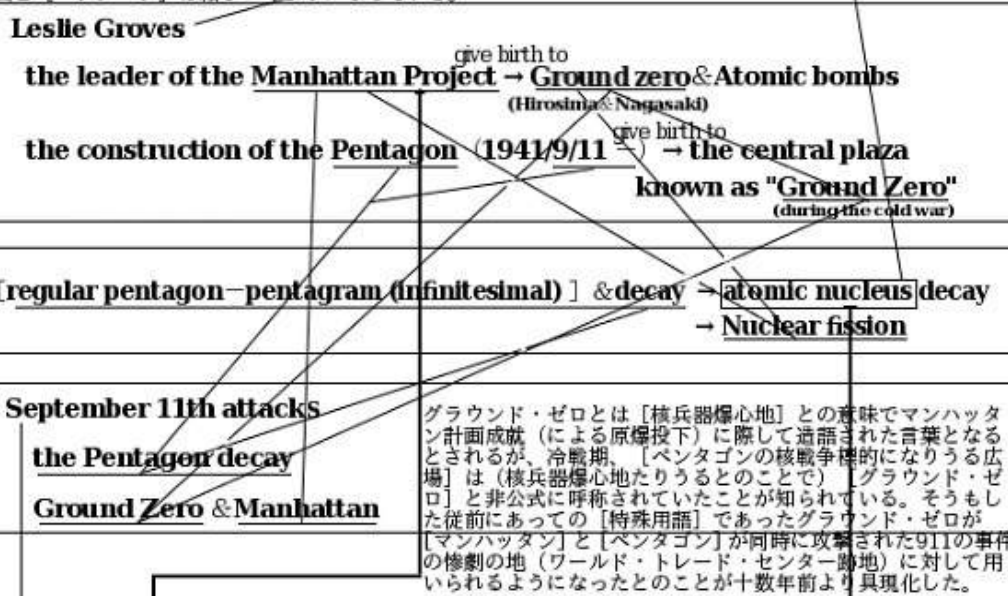
"decay"

regular pentagon
→
pentagram
→
regular pentagon
→
pentagram

to ∞ infinitesimal (infinitely small)
atom - atomic nucleus -
proton, neutron, etc. -
elementary particle

原子核崩壊の機序が核兵器を誕生させたことがある

マンハッタン計画を主導してきた軍人レスリー・グローブスはマンハッタン計画に先立つところとして1941年（9月11日）に建設着工を見たペンタゴン建造計画を主導していた者ともなる。かくのように【マンハッタン計画】と【ペンタゴン】は結びつくようになっている。



グラウンド・ゼロとは「核兵器爆心地」との意味でマンハッタン計画成就（による原爆投下）に際して造語された言葉となるが、冷戦期、【ペンタゴンの核戦争標的になりうる広場】は（核兵器爆心地たりうとのことで）【グラウンド・ゼロ】と非公式に呼称されていたことが知られている。そうした従前にあつての【特殊用語】であつたグラウンド・ゼロが【マンハッタン】と【ペンタゴン】が同時に攻撃された911の事件の惨劇の地（ワールド・トレード・センター跡地）に対して用いられるようになったとのことが十数年前より具現化した。

Brookhaven National Laboratory (1947-)
 CERN (1954-)
 Fermi National Accelerator Laboratory (1967-)

※本稿にて細かくも後述するところとしてマンハッタン計画関係者より、
 [ブラックホール生成問題で矢面に立たされ、なるべくして訴訟の被告になったとの研究機関ら]が設立されているとのことがある。
 また、マンハッタン計画にてその成果が利用されていたころの原子核領域の破壊作用は加速器「実験」(ブラックホールを生成するとされるに至った挙動)の基本となるところでもある。


particle physics experiments
 &
 accelerators (→LHC)

ATLAS

The Illuminatus ! Trilogy & Golden Apple

911 prophecy
 ("extremely" odd)

regular pentagon
 as the Pentagon
 (USA)



(symbol in Discordianism)

細かくも先述のようにローマのVenus神(金星体現格)に比定されるギリシャのAphrodite (アフロディテ) 神の誘惑、トロイア崩壊につながったパリスの審判にてその取得が争われた黄金の林檎にまつわるモチーフが多重的にLHC実験にあっての命名規則に用いられている(黄金の林檎の在処を知るとされる巨人ATLASの使用や黄金の林檎の園と同じくもの場と語られてきたATLANTISの使用などがそうである)。
 Golden apple
 (⇒Judgement of Paris & Venus)

金星の英語表記Venusは美の女神アフロディテのローマ版呼称ウェヌス(ビーナス)に由来しているとのことは半ばもの一般教養の問題である。

※荒唐無稽小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』では「マンハッタンのビルが爆破され」「ペンタゴンが爆破され」「炭疽菌テロが問題になり」「ニューヨークとペンタゴンの並列化象徴(上掲のディスコーディアニズム・シンボル)が作中、頻出し」ている。また、同作より派生したカード・ゲームにあって「爆破投下するツインタワー」「粉塵を上げるペンタゴン」が描かれていることも知られている。要するに、複合的要素から、70年代米国にてヒットを見た当該小説作品には「ニューヨークのビルとペンタゴンが標的になり」「事件直後、炭疽菌テロが発生し」たとのかの911の事件に対する尋常一様ならざる先覚性が見てとれると述べてもいい(機序はともかくも「現象」の問題としてである)。

Lucifer

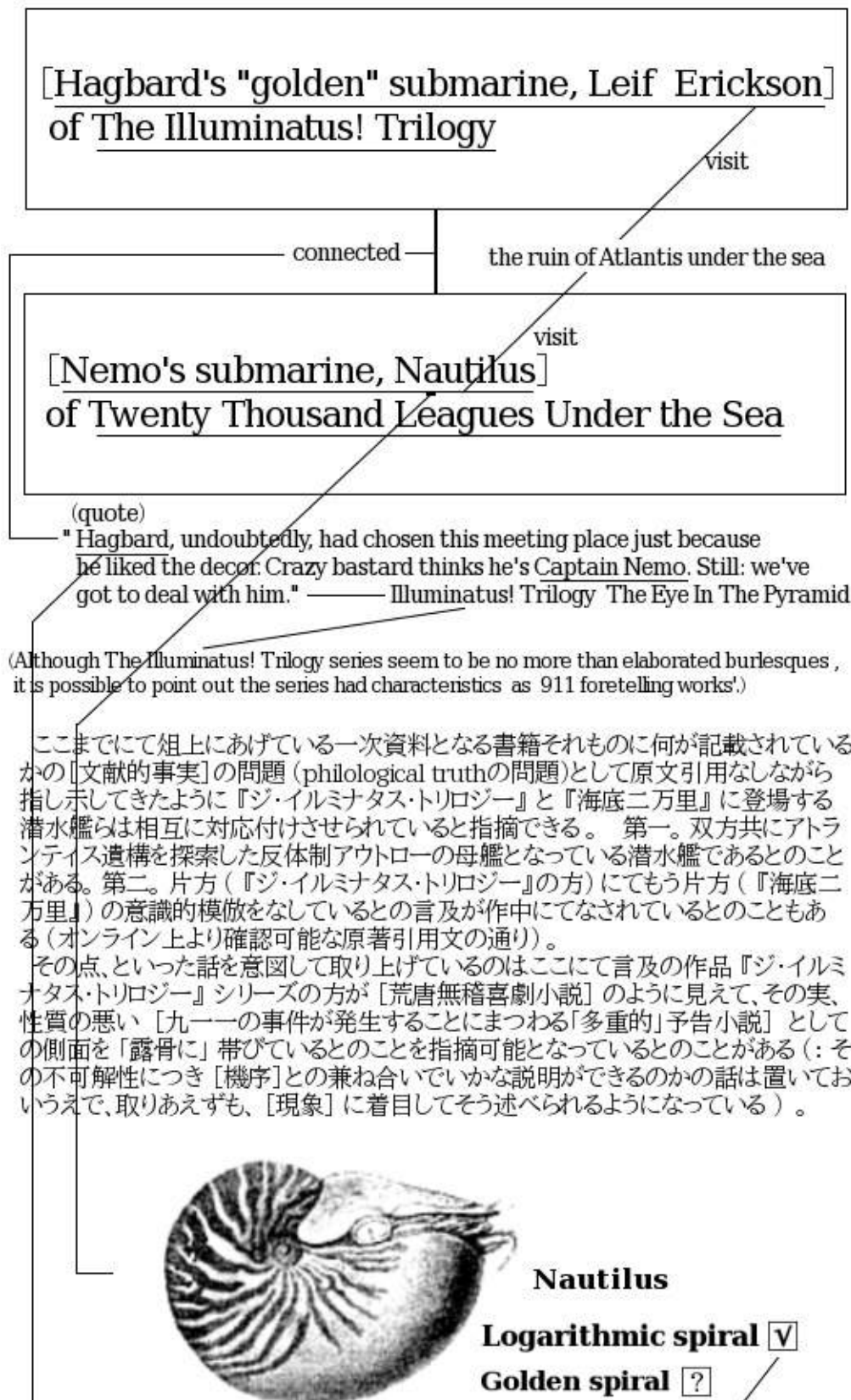
本稿では悪魔の王として知られるルシファー(サタン)とギリシャ神話のアフロディテ(ローマ名ヴェーナス)が複合的に結びつくこと、そして、アフロディテと関連づけられる黄金の林檎がエデンの園の禁断の果実と複合的に結びつくとの指し示しに注力してきた。

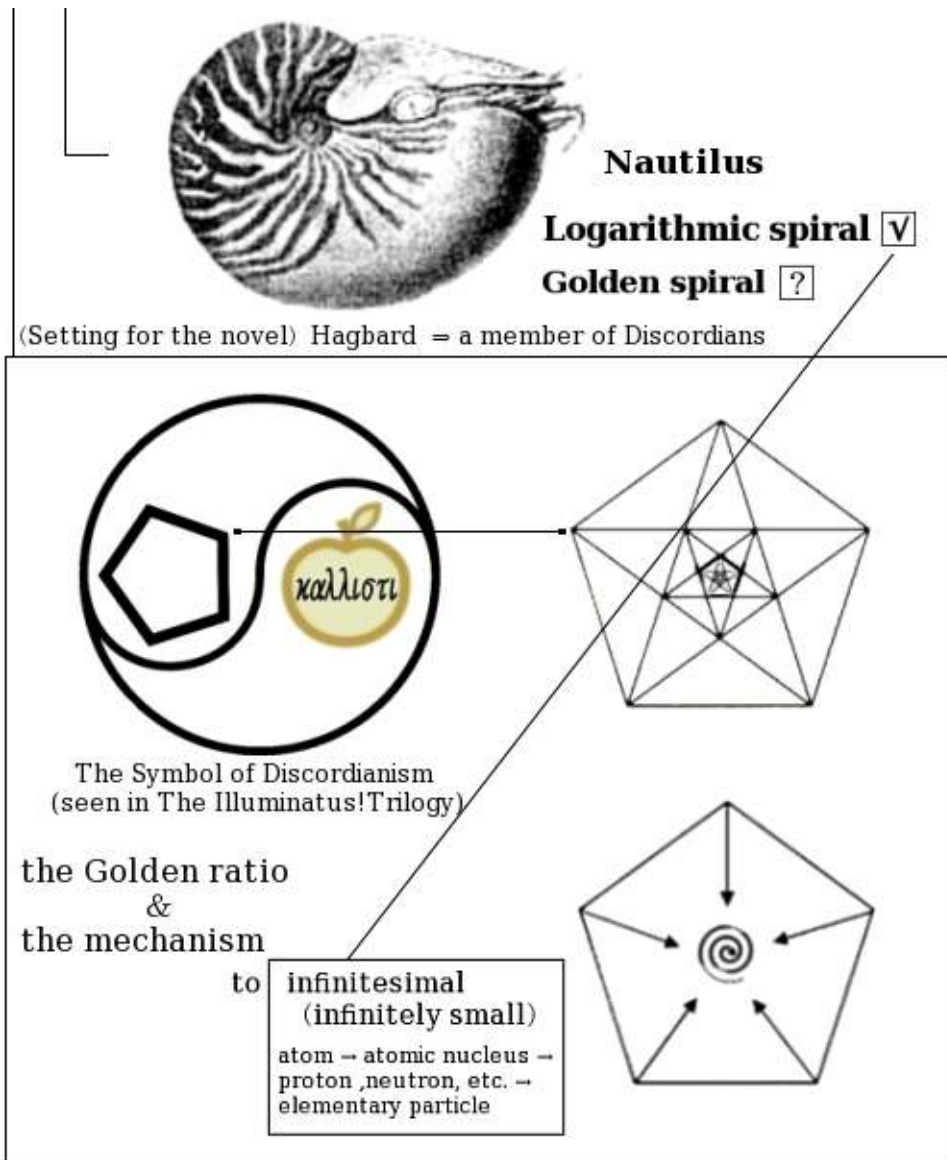
以上、再表記しての **α1** から **α8** (の解説および典拠紹介のための部) にさらに続けてもしての別段にて、

[[911の露骨かつ奇怪なる前言小説としての特質を帯びているとのことを詳述してきた『ジ・イルミナタス・トリロジー』(黄金の林檎と正五角形の絡みで黄金比のこともが問題になる小説) にあっての主役級の人物が駆る「黄金」色の潜水艦(レイフ・エリクソン号)] ⇔ (関連付け) ⇔ [『海底二万里』のネモの

潜水艦ノーチラス号] (こちらノーチラス号は黄金螺旋ことゴールデン・スパイラルを近似的に体現している存在であると(たとえ不適切に、でも)よくも表されるオウムガイより命名されているものとなる) との関係性の存在]

の摘示に本稿では努めた(下に図示なしているようなところとして、である)。





さて、以上、表記の如くもの関係性と先行してそちら指し示しをなしてきたところの $\alpha 1$ 以降の各点には繋がり合いがある申し述べ、その点について本稿では続いての式での摘示(ある種、自明なることの確認作業としての摘示)をなした。

以下にて振り返るようなかたちにて、である。

まずもって、 $\alpha 1$ (と振ってのこと)、すなわち、

$\alpha 1$. 地球と金星と太陽の内合(インフェリアー・コンジャンクション)時にあつての天体座標を結んで出来上がるとのことがよくも取り上げられるとの[五芒星]は[五角形]と結びつく図形でもある。[(ほぼ正確な)[五芒星]が描写される局面]というのは[(ほぼ正確な)[正五角形]に近しきものが内にて形成される局面]であるとも述べられる。どうか。[(正確な)五芒星]というものは[正五角形]に内接される図形として描けるものであり、[正確な五芒星の各点]を構成する五点というのが正五角形の各点にそのままに対応することになるとのことがあるのである

とのことと表記の如くもの [特定文物の間の繋がり合い —70 年代欧米圏ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』とジュール・ヴェルヌ『海底二万里』の間の(上掲再掲図にてまとめをなしているところの) 繋がり合い—]との兼ね合いでは

[黄金比と結びつく五芒星]

を巡る関係性のことが問題となる(五芒星が金星の会合周期と結びつけられているとの経緯があり、また、金星がルシファーと結びつくようなことがある中で、である)。

次いで、 $\alpha 2$ (と振ってのこと)、すなわち、

$\alpha 2$. 正五角形、英語に直せば、[レギュラー・ペンタゴン]との特質を持つのがアメリカの国防総省の本部庁舎である。そのペンタゴンの広場は先の 911 の事件の起こる前から[ワールド・トレード・センターの跡地]がそう述べられるようになったのと同じ言葉で呼び慣わされていた、[グラウンド・ゼロ]との言葉でもって呼び慣わされていた(核戦争時にあって核兵器「爆心地」(ゼロ地点)となりうるとの観点にて、である)

とのことと表記の如くもの [特定文物の間の繋がり合い —70 年代欧米圏ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』とジュール・ヴェルヌ『海底二万里』の間の繋がり合い—]との兼ね合いでは

[「911 の事件」で崩された「黄金比体现の正五角形構造」体现のペンタゴン]

を巡る関係性のことが問題となる(：先だってその点について申し述べているように国防総省ペンタゴンが [ニューヨークとペンタゴンが同時に攻撃された 911 の事件] にてニューヨークに現出した [グラウンド・ゼロの地] を想起させるように [911 前から] グラウンド・ゼロと結びつけられていたことがポイントとなる中で、である)。

さらに、 $\alpha 3$ 、 $\alpha 4$ 、 $\alpha 5$ (と振ってのことら)、すなわち、

$\alpha 3$. グラウンド・ゼロという言葉は 911 の事件が発生する前からペンタゴンの広場と歴史的に結びつけられてきたとの沿革がある(上の $\alpha 2$ にて言及)のだが、そちらグラウンド・ゼロという言葉、かの 911 の事件が起こる「前」から「使用局面が際立って限られていた特殊用語」として存在していた同語を「ブラックホール」と関係させるとのかたちで用いていたとの書籍が存在しており、その書籍、「不可解極まりない 911 の予見的言及とも関わる」とのことを本稿の先だつての段で先述してきたとの書籍でもある ZERO: The Biography of a Dangerous Idea(邦題)『異端の数ゼロ』となる。同著『異端の数ゼロ』序盤部にては[五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性]のことが「最小の単位(無限小)に向かう力学」を指し示すようなものとして取り上げられているとのことがある($\alpha 1$ の出典とも重なるところとなる)。そのように問題となる —「どうしてそういうことが？」の問題はともかくにももの 911 の異様な先覚的言及をなしているとの式で問題となる— 書籍で取り上げられている [五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性] にて「も」表象され

る[最小の単位(無限小)に向かう力学]は言い換えれば、[原子核の領域に向かう力学]、さらに述べれば、[原子核を構成する陽子や中性子の領域、そして、陽子を複合して構成するクォークのようなより極微の素粒子の世界に向かう力学]のことを想起させるものでもある。

何故か。原子のなかで原子核の占める割合はおそろしく小さい、そのような原子核を構成するのが中性子や陽子であるといったかたちで(小さきことをひたすらに突き詰めていった際の)極小の世界というものは展開しているからである。[五角形(ペンタゴン)および五芒星の両者の図形的特性]のことを知っていれば、自然に想起されるのが[最も小さな極小の世界へ向けての力学]であり、それは換言すれば、[素粒子物理学などが領分とする極小の世界へ向けての力学]であると言い換えられるようなところがあるのである。そして、そうした限りなくものゼロ・スケールに向かって展開する極微の世界の領域の研究(たとえばヒッグス粒子や超対称性粒子など命名されたものを発見に血道をあげるとの「研究」)を声高に唱道、[原子核を壊す中での膨大なエネルギー](と述べても極微領域に集中しているからこそその膨大なエネルギー)で[ブラックホール]さえもが生成される可能性が取り沙汰されているのが素粒子物理学系や核物理学系の物理学者らが集まったのLHC実験であると言われている

$\alpha 4$. ZERO: The Biography of a Dangerous Idea (邦題)『異端の数ゼロ』との書籍は911の事件が起こる「前」から特異な言葉であるとのグラウンド・ゼロという言葉ブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍、かつもって、不可解なる911の予見的言及とも関わっているとの書籍でもある(← $\alpha 3$ で言及したことである)。そして、同著『異端のゼロ』は[五角形と五芒星の「無限に」相互内接しあう関係性]と結びつくことに言及しているとの書籍でもある(← $\alpha 1$ および $\alpha 3$ にての出典にまつわるところでもある)。そうした書籍で扱われる[ゼロの世界][極小の世界]に近しきところで(原子に比してその比率が恐ろしく小さいとの極小の存在たる)[原子核]を破壊しようとのことをなし、そこにて発生する膨大なエネルギーからブラックホールを生成しうるとのところにまで至ったのがLHC実験であると「される」(← $\alpha 3$ にて言及のことでもある)のだが、他面、[911の事件]では何が起こったのか。[[正五角形]との形状を呈するとのペンタゴンが崩された]とのことが起こっている(← $\alpha 2$ で合衆国国防総省庁舎たるペンタゴンが(正確な五芒星と無限に続く相互内接外接関係を呈するとの)[正五角形]であることを問題視している)。以上のことより[次の関係性]が想起されもする。[現実世界で911の事件が起こる「前」からアメリカ国防総省本部庁舎たるペンタゴン(正五角形)の広場と結びつけられてきたグラウンド・ゼロという特殊な言葉(← $\alpha 2$)] ⇔ [911の事件が起こる前から[グラウンド・ゼロ]との特殊な言葉とセットとなっていた現実世界でのペンタゴン([正五角形]状の米国国防総省庁舎)の911にあつての部分崩壊] ⇔ [正五角形(合衆国国防総省庁舎ペンタゴンとの同一形状)の(911にての)部分崩壊($\alpha 3$)] ⇔ [911の事件が起こる「前」から特殊用語として存在していた[グラウンド・ゼロ]という言葉ブラックホールとの関係するかたちで用いているとの書籍であり(そして911の不可解なる予見事物と

も通ずるようになっていく書籍ともなり) またなおかつもってして、五芒星と五角形(ペンタゴン)の間の無限に続く相互内接・外接関係によって表象される極小の世界へ向かう力学に言及している著作ともなる ZERO: The Biography of a Dangerous Idea(邦題)『異端の数ゼロ』という著作の内容] ⇔ [無限小に至る方向性での破壊挙動、原子核を壊す中での膨大なエネルギー発現状況でもってブラックホールを作り出しうると言われるに至っている LHC 実験を想起(α3)]

α5. [グラウンド・ゼロ]という言葉 —(本来、[広島・長崎の爆心地]を指すべくも考案された特別な言葉であり、また、冷戦期、核戦争の標的たるところと結びつけられるに至った言葉である) — と [911]の事件の発生前から結びつけられていた[ペンタゴン](アメリカ国防総省本庁舎)というのはレズリー・グローヴズという男(往時、米国陸軍工兵隊大佐)を責任者にして 1941 年「9月11日に」建設が開始されたとの建物である。 そちらペンタゴンの建設計画を指揮していたレズリー・グローヴズという男が「ペンタゴン建造中に」大佐から准将に昇進、主導することになったのが「マンハッタン計画」となっており、同「マンハッタン計画」で実現・現出を見たのが「原子爆弾」と「広島・長崎への原子爆弾の投下」(「グラウンド・ゼロ」との言葉がはじめて用いられるようになった爆心地を現出させた挙動との意味合いで本稿の先の段でも取り上げていた原爆投下)となる。そこに見る「原子爆弾」というのは「極小領域たる原子核のレベルでの崩壊現象、[核分裂反応]によって実現を見た兵器]でもある (:1941 年 9月11日から建設開始(着工)を見ていた[ペンタゴン]の建設計画を指揮していた男レズリー・グローヴズが[マンハッタン計画]の責任者でもあったわけであるが、[マンハッタン計画]というのはそも、[極小の領域、原子核のレベルでの崩壊現象が原子爆弾を実現ならしめること]が着想されて開始された計画である。[原子核レベルでの崩壊現象を利用した核兵器開発]と「ペンタゴン」が結びつく、そう、[五芒星形と五角形(ペンタゴン)が無限に相互に内接・外接しあいながら無限小へ至る方向(原子核や素粒子の世界へ至る方向)を指し示すもの]であることを想起させるように結びつくとのことが歴史的沿革として存在していることが問題となる)

とのことと表記の如くもの [特定文物の間の繋がり合い —70 年代欧米圏ヒット小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』とジュール・ヴェルヌ『海底二万里』の間の繋がり合い —]との兼ね合いでは

(各々、多少、長くなるが、下線を引いての箇所を中心にしての対応関係に着目いただきたいところとして)

[元来、[(原子爆弾)投下爆心地]と「ペンタゴン(正五角形構造の国防総省庁舎)の区画」を指していた(そして後に 911 の発生の後にてツインタワーの崩壊地のこと「をも」指すようになった)「グラウンド・ゼロ」というその特殊な言葉が(911 の発生前より)「五芒星と五角形の無限に続く黄金比体现の繋がり合いのこと」にも言及している特定著作]内で「不自然に」[ブラックホール]と結び付けられているとの経緯があ

りもするとのこと] (: **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea**『異端の数ゼロ』(早川書房ハードカバー版)にあっては(その240ページよりの「再度の」引用をなすとして)ゼロは、物理法則を揺るがすほど強力である。この世界を記述する方程式が意味をなさなくなるのは、ビッグバンのゼロ時であり、ブラックホールのグラウンド・ゼロだ。しかし、ゼロは無視できない。ゼロは私たちの存在の秘密を握っているばかりでなく、宇宙の終りの原因にもなるのだ(再度の引用部はここまでとする)との記載がなされている——2000年に世に出た原著ではその最終章 **Chapter Infinity: Zero's Final Victory: End Time** に先立つ **Chapter 8: Zero Hour at Ground Zero: Zero at the Edge of Space and Time** に認められる、“Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. **It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense.** However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence, it will also be responsible for the end of the universe.”との記載がなされている——との経緯がありもする。そして、当該書籍『異端の数ゼロ』に関しては[五角形と五芒星の相互に「無限に」外接・内接しあう関係性]のことが[最小の単位(無限小)に向かう黄金比を体現しての力学]を指し示すようなものとして取り上げられているとのことがあり、かつ、他の濃厚なる接合性を呈している別著作(同じくものイラストレーターの挿絵を挙げながら同じくもの特異なる思考実験(通過可能なワームホールにまつわる思考実験)のことを扱っているとのことで濃厚に接合性を呈しているとの別著作)である **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』の内容を複合顧慮すると[911の先覚的言及文物]となるとのこと、詳述してきたとの著作となりもする)

[[五角形と五芒星の無限に続く相互内接関係] (そこよりの引用をなした書籍『黄金比はすべてを美しくするか?最も謎めいた「比率」をめぐる数学物語』にあってはピタゴラス学派が突きつけたとの黄金比の体現とされる構図)

および

[黄金比と結びつくペンタゴン (グラウンド・ゼロと冷戦期から従前から呼び慣わされていた場を含むことも先述の米国国防総省庁舎)の911の事件 —ニューヨークはマンハッタンの方にあつてグラウンド・ゼロを現出させた事件— にあつての崩壊]

の双方に着目することで

[(五芒星と正五角形の無限に相互内接関係がそちらへと向かうとも表せられること、先述の)[極小の領域]に接合する原子核の領域の崩壊機序を利用してのものである原子爆弾開発挙動が1941年「9月11日」に遡るペンタゴン建設計画を主導した男でもあつたレズリー・グローヴスが同様に主導していたマンハッタン計画であつたとのこと]

および

[原子核崩壊(極小領域での破壊的作用)と密接に関わるビッグバン直後の状況の再現を目指しての粒子加速器実験]([ビッグバン]直後の状況の再現をなす——本稿出典(Source)紹介の部24にてなした『宇宙創造の一瞬をつくる CERNと究極の加速器の挑戦』(早川書房)24ページよりの再度の引用を再度なせば、LHC内部での陽子衝

突により解放される凄まじい量の高密度エネルギーは、科学を未踏の新たなレベル、我々の宇宙ではビッグバン直後以来観測されたことのない高エネルギーの領域へと推し進めてくれる。そのような形で大型ハドロンコライダーは我々を百数十億年昔に連れていき、誕生直後の灼熱の宇宙を満たしていた状態を見せつけてくれる(引用部はここまでとする)——とのLHC実験はブラックホール生成挙動たる可能性もあるとされている。また、ブラックホールについては **ZERO: The Biography of a Dangerous Idea**『異端の数ゼロ』にて(くどくもの再引用をなすとして)ゼロは、物理法則を揺るがすほど強力である。この世界を記述する方程式が意味をなさなくなるのは、ビッグバンのゼロ時であり、ブラックホールのグラウンド・ゼロだ。しかし、ゼロは無視できない。ゼロは私たちの存在の秘密を握っているばかりでなく、宇宙の終りの原因にもなるのだ(引用部終端)と表記されているとのもので「も」あるのことが想起されもするとのこと]

を巡る関係性のことが — 接合性との兼ね合いで — 問題になる (につき、何度も何度も申し述べるが、ここ本段にて黄金比との兼ね合いでの『海底二万里』との関係を示さんとしている『ジ・イルミナタス・トリロジー』が[ニューヨークのビル爆破やペンタゴンの崩壊などにつき言及している際立っての911の事件の発生を多重的に予告しているが如き小説作品]にして[黄金の林檎と五角形の並置につながるところで黄金比と結びつく側面がある小説作品]であることを本稿では問題視してきたから以上の関係性が意をなすのである)。

続けてもってして **α6** (と振ってのこと)、すなわち、

α6. 金星の内合ポイントにてその近似物が具現化すると五芒星は史的に見て[退魔の象徴]とされてきたとの経緯があるものである。さて、その[退魔の象徴としての五芒星]と結びつくような[退魔の象徴物としてのペンタゴン(アメリカ国防総省本庁舎)]が爆破されて「異次元から」干渉する外側の銀河由来の妖怪が解き放たれるとの[荒唐無稽小説]が世に出ている。それが本稿の先の段で「911の「奇怪なる」予見的言及をなしている」との要素を同作が多重的に帯びていることにつき仔細に解説してきた70年代欧米でヒットを見たとの小説作品、『ジ・イルミナタス・トリロジー』である。につき、[退魔の象徴としての五芒星と結びつくが如き退魔の象徴としてのペンタゴンの崩壊、および、911の事件の発生(マンハッタンとペンタゴンが同時攻撃されたとの事件)を前記しているが如きの奇怪なる文物]などとのものより想起されるのは — 繰り返しになるも — 次のようなこととなる。

⇒(直近にて言及の)書籍『異端の数ゼロ』に特性として認められるとの[五角形(ペンタゴン)と五芒星の内接関係を無限小に至る機序として呈示するとやりよう]・[グラウンド・ゼロという言葉が911の事件が発生する前からブラックホールと結び付けているとのやりよう]・[不可解なる911の予見的言及と関わりもするとの側面] ←→ (関係性の想起) ←→ [ペンタゴン(1941年「9月11日」に建造開始の国防総省庁舎)の建設計画を主導した軍人が同様に主導して「原爆」と[グラウンド・ゼロという言葉]を具現化させることになった[無限小に至る力学(五角形と五芒星が相互に無限に内接・外接されるか

たちで表象される力学)の過程での原子核崩壊作用]を利用しての
[マンハッタン計画]に見るありよう]

とのことと表記の如くもの [特定文物の間の繋がり合い] との兼ね合いでは

[【歴史的に[退魔の象徴]と看做されてきた五芒星】と【[退魔の象徴]としてのペンタゴン(五芒星と密接に内接関係で無限に切っても切れない関係にある黄金比体現存在)が崩壊するとの粗筋の911の前言をなしているが如き小説】(ノーチラス号と対応するゴールデン・サブマリンを登場させている『ジ・イルミナタス・トリロジー』)との間に横たわるつながりが(同文に)あるとのこと]

を巡る関係性のことが問題になる。

そして、 $\alpha 7$ (と振ってのこと)、すなわち、

$\alpha 7$. 会合周期(具体的に述べれば、8年単位で現出する5回の地球との周期的内合関係)でもって[五芒星]を描くとされる存在が金星となるとのことを先述した。また、同文に金星が悪魔の王ルシファーと欧州にて歴史的に結びつけられてきた星であることも先述した。さて、歴史的に惑星金星と結びつけられてきたとの悪魔の王ルシファーとのつながりで述べれば、ダンテ『地獄篇』にもミルトン『失楽園』にも[ルシファーと結びついた罪の領域]にあって[今日的な観点で見てのブラックホールの近似物]が多重的に具現化していると申し述べられるようになっていること、解説をなしてきたのが本稿である

とのことと表記の如くもの [特定文物の間の繋がり合い] との兼ね合いでは

[五芒星と会合周期より接合する金星の別名[明けの明星]の体現存在と歴年看做されてきたルシファーが古典上で登場するくだりが現代的観点で見た場合のブラックホール理解に通ずるものを登場させているとのこと]

を巡る関係性のことが [黄金比とカー・ブラックホールの指摘されるところのつながりあい] (理論としての適否はともかくも LHC 実験でその種類のブラックホールが生成される可能性があるとして論じられてきたとのこと、本稿の [出典 \(Source\) 紹介の部 76\(3\)](#) にて言及のカー・ブラックホールと黄金比のつながりあい) との絡みで問題になる。

以上が

[[黄金比] [黄金比体現の無限小への力学と結びつく五角形] に関わるところでの『海底二万里』(潜水艦ノーチラス号を駆ってのネモ船長を描く冒険小説/海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品)と『ジ・イルミナタス・トリロジー』(黄金の潜水艦を駆ってのハグバード・セリンを描く小説/海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品) とのつながりあい]

と $\alpha 1$ から $\alpha 7$ との間に横たわる関係性である。

以上、再度、振り返りもした特定文物間の繋がり合いと **a1** から **a8** との関係性、そして、**a1** から **a8** の指し示し事項それ自体との絡みでさらに何が問題となるのかにつき、

(直近にて **a1** から **a7** とそれらとの関係性につき摘示してきたとの)

([[黄金比][黄金比体现の無限小への力学と結びつく五角形]に関わるところでの『海底二万里』(潜水艦ノーチラス号を駆ってのネモ船長を描く冒険小説／海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品)と『ジ・イルミナタス・トリロジー』(黄金の潜水艦を駆ってのハグバード・セリーンを描く小説／海底に沈んだアトランティス遺構が登場するとの作品)とのつながりあい]

から

[[黄金比と結びつくカー・ブラックホール] (**a8** [[五芒星]は[黄金比]と際立って結びつく図形でもある。そこに見る[黄金比]と[ブラックホール]が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びているということがある]とのことを押し広げていった先にあることとしてそちらにつき問題視すると先述なしていたとのカー・ブラックホール)が[(アトランティス伝承紹介古典でも有名な)プラトン古典『ティマイオス』に認められる(黄金比を全身で体现するものにして第五元素「的なる」位置付けの)正十二面体]と特定の文物らを介して結びつき、そのことが問題となるとのことがある](先だってよりそのことを「これより問題視する所存である」と申し述べてきたところ、だがもってして、現段階では解説どころか内容についてすら言及未了であるとの点でもある)

とのことに至るまでの全てを

[結節点たるブラックホール]

との兼ね合いで「極めて多重的・多層的に」連関させて結びつけるだけのことがある——そして、そこでは[際立っての恣意性の介在]、要するに、[計算尽くでのわざとのやりよう]が強くも問題になりもする——

との観点で、(そこに見る)、

[極めてもってしての多重的・多層的なる、恣意性が当然にして問題になるとの繋がり合いの所在を示すもの]

として各別分けもして解説してきたとの **[a]** から **[f]** (と振ってのことら) の内容の【振り返り表記】を続けてなすこととする。

まず **[a]** の段であるが、その内容は —短くも述べれば— 、

[a]・著名物理学者キップ・ソーンに[通過可能なワームホール]の考察をなさしめることになったことで知られるカール・セーガン小説 CONTACT『コンタクト』(1985)にあっては[宇宙の彼方と地球をカー・ブラックホールあるいはワームホールの類で結ぶ装置の形状]が「際立っての」十二面体構造、正五角形(レギュラー・ペンタゴン)を

12 枚重ねしての構造を呈すると描写されている (とのことが問題になる)

とのものとなっている。

そちら [a] と $\alpha 1$ から $\alpha 8$ のおおよそのつながりについても述べておく。

につき、多くを端折って摘要表記なせば、

[地球と金星と太陽の内合(インフェリアー・コンジャンクション)にあつての位置関係に見る金星のポイントを結んで出来上がるのはほぼ正確な五芒星(に近似のもの)とされていること] ($\alpha 1$)

[911の事件が起こる前、冷戦期から[正五角形]構造を呈する米国国防総省ペンタゴンはグラウンド・ゼロとの言葉で呼びならわされていたとのことがあること/[五芒星]は庁舎ペンタゴンがそうあるところの[正五角形]と無限に続く相互内接関係を呈するとのことがあること] ($\alpha 2$ および $\alpha 3$ 前半部)

[[正五角形]と[五芒星]の相互内接関係によって示される[無限小の領域に至る力学]は原子核ひいては素粒子の領域という最小の世界への力学とも見受けられるが、その途上にての暴力的改変、[原子核の領域の暴力的改変]が原爆開発とつながっているとのことがあること/原爆開発ともつながる原子核領域の破壊の機序は—黄金比と結びつく正確な五角形構造をとる合衆国国防総省本部庁舎ペンタゴン(1941年9月11日に建設着工を見出した庁舎/911の発生前からグラウンド・ゼロとの言葉と結びつけられてきた庁舎)にまつわる人間関係や沿革とも接合するところとして—ブラックホール生成をなすとされるに至った加速器実験と結びついているとのことがあること/ブラックホールとグラウンド・ゼロとの言葉を911の発生前から結びつけている文物が存在しており、同文物、『異端の数ゼロ』は[正五角形と五芒星の相互内接・外接関係への言及がなされている文物]にして、なおかつもって、[911の事件の事前言及と相通ずる文物]ともなっていること] ($\alpha 2$ および $\alpha 3$ 後半部および $\alpha 4$ および $\alpha 5$)

[正五角形構造と無限に続く相互内接関係にある五芒星が歴年、[退魔の象徴]として用いられてきたとの歴史的事情があること/正確な五芒星と無限に続く相互内接関係にある正五角形構造を取るペンタゴン(合衆国国防総省本庁舎)を崩すことで異次元から介入する存在が解き放たれるとの筋立ての小説が[多重的な911の事前言及小説]として存在していること] ($\alpha 6$)

[会合周期で五芒星を描く金星とも歴史的に結び付けられてきた悪魔の王ルシファーとのつながりではダンテ『地獄篇』にもミルトン『失樂園』にも[ルシファーと結びついた地獄門の先の罪の領域]にて現代的観点で見たブラックホールに通ずる描写が多層的に含まれていると述べられるようになっていくこと] ($\alpha 7$)

[五芒星は(正五角形と共に)黄金比と際立って結びつく図形であることが知られており、その[黄金比]と[カー・ブラックホール]が結びつくことを論証しようとの学究申しようが欧米圏にてささやかなる注目を浴びていること] ($\alpha 8$)

とのかたちで短くも表せられる $\alpha 1$ から $\alpha 8$ と直上これまたもの摘要表記の [a] —キップ・ソーンから影響を受けての[正十二面体構造を呈するブラックホールないしワームホール生成装置]が登場するカール・セーガン『コンタクト』(1985)が問題になると切り出しはじめての部— がいかように関わるかだが、正十二面体構造がいかようなものなのかを知る向きには自明なところとして、次のようなことがある。

[a]、すなわち、[著名物理学者キップ・ソーンに[通過可能なワームホール]の考察をなさしめることになったことで知られるカール・セーガン小説『コンタクト』にて[宇宙の彼方と地球を結ぶ装置の形状]が「際立って」十二面体構造をとると描写されているとのことを問題視しているとの部]と **α1** および **α3** との共通のつながりとのことで述べれば、

「それらはすべて[正五角形(に近似のもの)]として[黄金比の体現存在(に近似のもの)]との側面を有しているものにまつわることである」

とのことがある (: **α1** で言及している、[地球と金星と太陽の内合(インフェリアー・コンジャンクション)の折にあっての金星における数年越しの座標を線で結ぶことで描画されることになる五芒星(の近似系)]でも[正五角形との無限に続く内接関係]や[黄金比に近しきところ]が問題になり、**α3** ではまさにそれ絡みの話をなしている。他面、[a] で取り上げているとの『コンタクト』に登場するゲート装置は[十二面体構造]を取り、[黄金比を呈する正五角形]を十二枚連ねてのものとなる)。

続いて[a]、[著名物理学者キップ・ソーンに[通過可能なワームホール]の考察をなさしめることになったことで知られるカール・セーガン小説『コンタクト』にて[宇宙の彼方と地球を結ぶ装置の形状]が「際立って」十二面体構造をとると描写されているとのことを問題視しているとの部]と **α2**、**α3**(後半部)、**α4**、**α5**、**α6**、**α7**、**α8** の関係性についてだが、

「それらがすべてブラックホール「生成」挙動に通ずるものである」

とのことで共通性を有している。

まず **α2** および **α4** および **α5** から述べられるところとして

「グラウンド・ゼロとの言葉は原爆の投下地を指す言葉として生まれたものだが、同語は冷戦期よりペンタゴンの広場 —冷戦時核戦争を想定して— と結び付けられてきた沿革があるものである」(**α2**)

「[グラウンド・ゼロ]という言葉は原子爆弾(9月11日に建設開始が始まったペンタゴンの建設指揮を執った男が指揮していたマンハッタン計画にて誕生した兵器)の投下地区、広島と長崎の爆心地に対して用いられるようになった言葉であるとされているわけだが、911の事件で崩されたツインタワーの場に対しても用いられるようになった同グラウンド・ゼロとの言葉のそもそもの由来となっているマンハッタン計画は[原子核の領域の崩壊の機序]を突き詰めてのものであり、原子核の崩壊の機序 —([正五角形ペンタゴンと五芒星の無限に続く相互内接関係が向う極小の領域の崩壊の機序]とも言い換え可能な機序)— というものはブラックホール生成挙動とも結びついているとの事情がある(加速器が極小の領域、原子核の領域にいかような破壊的改変を施そうというものなのか、それが何故もってしてブラックホール生成可能性と結びつきもしているのかは先の段で論拠挙げている)」(**α4** および **α5**)

「911の事件が起こる前からブラックホールという言葉がグラウンドゼロと結び付けて用いている書籍 ZERO: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』 —原著および早川書房より出されている訳書

にての Chapter 8: Zero Hour at Ground Zero: Zero at the Edge of Space and Time にあつての該当部より再度の引用なせば、(原著表記) Zero is so powerful because it unhinges the laws of physics. **It is at the zero hour of the big bang and the ground zero of the black hole that the mathematical equations that describe our world stop making sense.** However, zero cannot be ignored. Not only does zero hold the secret to our existence, it will also be responsible for the end of the universe. (訳書表記) ゼロは、物理法則を揺るがすほど強力である。この世界を記述する方程式が意味をなさなくなるのは、ビッグバンのゼロ時であり、ブラックホールのグラウンド・ゼロだ。しかし、ゼロは無視できない。ゼロは私たちの存在の秘密を握っているばかりでなく、宇宙の終りの原因にもなるのだ(再度の引用部はここまでとする)との内容を含む書籍—— が存在している」(α4)

とのことがあるわけだが、といった

[ブラックホール生成挙動に係る一連の話の流れ]

と結びつくところとして[a]で取り上げているカール・セーガン『コンタクト』は

[ブラックホール「生成」装置と臭わされてのもの]

がゲート開閉装置として登場してくるとのものである(つい最前にて振り返りした【[a]とα1を巡る関係性】とまったく同じこととはある)。

そこからしてブラックホール絡みで話が接合しているわけである(:につき、きちんと本稿の内容を読まれているとの向きにあつてはカール・セーガン『コンタクト』にアイデアを提供したキップ・ソーンという物理学者の手になる BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作と[グラウンド・ゼロ]との言葉を911の前から[ブラックホール]との絡みで用いていたとの数学者チャールズ・サイフェの手になる ZERO: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』という著作とが[ワームホール絡みのイラスト]を——人物描写に癖が出ているとの同じイラストレーターに起因するところとしてであろう——極めて似た独特のものとして共有していること、先に問題視していた筆者物言いのことまで把握なされていることを期待もしたいと考えている(「そのことが何故、問題になるか」と言えば、キップ・ソーン著作が「カール・セーガン『コンタクト』に通ずるところで」911の奇怪なる前言文物になっているからである)。

だが、そうもただ単に示さんとしても筆者が似たような要素を含むものをただ単になぎ合わせているだけではないのか、などと誤解される向きがあるかもしれないので述べるが(そういう向きがあるとは悪い意味で希望的観測に過ぎぬとの筋目の「黒さ」際立っての指し示しをなしているつもりなのだが、そこを敢えてもそういう想定を置いて述べるが)、さらにα6、α7、α8の内容を加味して述べられるところとして、

「[ペンタゴンの崩壊](ペンタゴンの崩壊は[五芒星と正五角形の無限に続く相互内接関係の力学;極小の領域に至る力学]にての崩壊の寓意に通ずるところがある、それゆえ、ブラックホール生成をなしうると近年みなされるに至った粒子加速器実験やりよう、[極小の領域に向かう力学の中の原子核の破壊的機序を応用してブラックホール生成までなしうると考えられるに至ったやりよう]をも想起させるところでもあると先述している) **が起る前に同じくものこと([ペンタゴン崩壊])を**

「先覚的に」描きだしていたとの小説が多重的な意味合いで「911の予見的小説」になっている（「従前からペンタゴンがグラウンド・ゼロと呼ばれていたところをペンタゴンと同時に攻撃されたマンハッタンにもグラウンド・ゼロを作り出したかの事件」についての予見的言及をなしている小説となっている、でもいい）との色彩をも呈しており、そうしたことがあるのは「正五角形と五芒星の永劫に続く相互外接・内接」に言及している文物にして、かつもって、「911の予見的描写」と結びついているとの文物（チャールズ・サイフェ『異端の数ゼロ』）が「911の事件」の発生前からグラウンド・ゼロとの言葉をブラックホールと結びつけているとのこととの絡みで取り上げて然るべきところとなる（α5 および α6）

「そこにあつての崩壊の寓意が問題となるところの「極小の領域」へ向かうところの力学を指し示すものでもある五角形と五芒星の無限に続く相互内接関係、それに関わる五芒星が「金星の会合周期」と結びつくととの経緯があり、金星とは「ルシファー」と結び付けられてきたとの経緯がある天体であること、また、金星と結びつけられてきたルシファーに通ずる領域がダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』で現代的な観点で見てのブラックホール近似物として「どういふわけなのか」「不自然かつ奇怪に」描かれているとの事情があること、ペンタゴン（五角形）と無限に続く相互内接関係を呈する五芒星が退魔の象徴として用いられてきた史的経緯があることを想起させるようにペンタゴンの崩壊が封印を破る象徴として描かれる小説たる『ジ・イルミナタス・トリロジー』が「911の事件の多重的前言作品としての要素を帯びてのもの」として存在しているとの事情があること、そうしたことから偶然の可能性が急減していき、他面、計画性の介在のことが強くも観念されるようになる」（α6 および α7）

「カー・ブラックホールの形態変化が黄金比と結びついているとの話とカール・セーガン『コンタクト』の（カー・ブラックホールとも関係すると形容されている）ゲート発生装置が全面で黄金比の体現物となっている正十二面体（正五角形を12枚重ねて作られての多面体）との設定を有しているとのことの記号論的連続性からして出来すぎの観を呈している」（α8）

とのことが問題になる。

以上が [a] と（先行するところの）α1 から α8 との関係である。

次いで、[b]だが、同[b]、振り返って要約しもすれば、

[b]・カール・セーガン『コンタクト』の「正十二面体ゲート装置」（ブラックホール利用型ゲート装置とも）は「トロイアを滅ぼした木製の馬の計略」「とも」同小説作中それ自体の中にて結びつけられていることが現実であり、「トロイアを滅ぼした木製の馬」とくれば、トロイア崩壊のそもそもの原因たる「黄金の林檎」（ヘラクレス11番目の功業にての取得目的物にして巨人アトラスがその在り処を知るものであると本稿で詳述してきた神話上のシンボル）を作中の重要なモチーフに据えている小説、『ジ・イルミナタス・トリロジー』のことが想起される。そちら『ジ・イルミナタス・トリロジー』とは「911の多重

的予見作品]との要素を持つ作品であると詳述してきたとの作品であり、また、同作は「黄金比」の寓意を複数、「ペンタゴン」や「黄金の林檎」(トロイア崩壊の原因)との兼ね合いで内に含んでいる作品であると解されるようになっていたと詳述してきたとの作品「でも」あり、さらに述べれば、「ペンタゴン(正五角形)が崩されて、異次元より介入する外宇宙生命体が解放されるとの筋立て」を有したものであると詳述してきた作品「ですら」もある。そうしたことからレギュラー・ペンタゴンこと正五角形を12面重ねての黄金比の体現存在、正十二面体(ドデカヘドロン)を「ブラックホール・ゲート」「ワームホール・ゲート」といったものとして描いているとの『コンタクト』が「トロイアの木製の馬の寓意」と結び付けられていることとの関係性が想起されるものである

このことを指摘してのものであった。

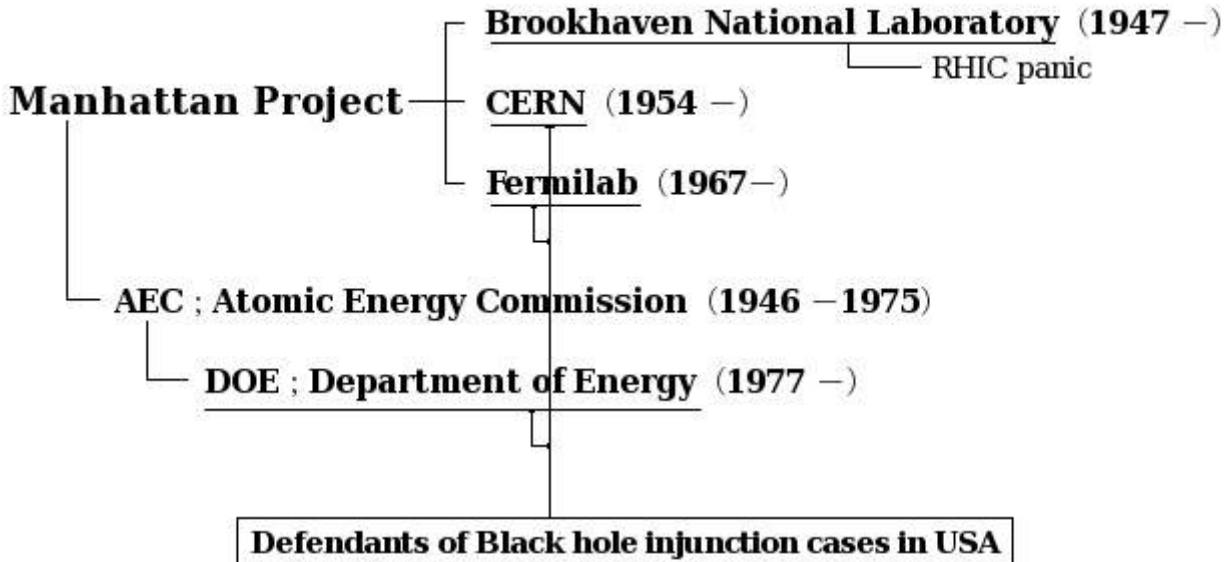
以上、振り返り表記しもしての内容の「**[b]**」が **a1** から **a8** と ——「黄金比」「911の前言」「ブラックホール生成問題」との兼ね合いで—— いかように関わるかは「本稿をまじめに検討しているとの向きに対しては」繰り返して論ずるまでもないことかとは思(疑義ある向きには直近までの内容、あるいは、本稿のこれまでの内容を見直していただきたい)。

さらに、(時間が推している中で解説が際限なくも細々としたものになることを危惧して端的なる表記に留めるとして)「**[c]**」から「**[f]**」の内容だが、まとめて要約しすれば、それらセクションらは

[c]・カール・セーガン『コンタクト』は著名な小説家、カート・ヴォネガットの手になる『タイタンの妖女』と ——サイレンおよびヘラクレス座 M13 にまつわる場所として—— 意図的に結び付けられているといった描写を含む作品であるが、カート・ヴォネガットの手になる『タイタンの妖女』については「911の事前言及に通ずるとの側面」および「ブラックホールと加速器問題にまつわる尋常一様ならざる先覚的言及に通ずるとの側面」が同作家(ヴォネガット)他作品との兼ね合いで問題になる作品でもある。そこから引きなおして見て「も」カール・セーガン『コンタクト』は ——それ固有の内容のことも顧慮したうえで—— 問題になる(そして同じくもの話についてはサイレンを巡る物語とアトランティスを巡る伝承理解との接合性のことも問題になってくる)

[d]・カール・セーガン『コンタクト』ではその作中、「ブラックホールないしワームホールゲート発生装置」に通ずるものとして描かれるゲート装置につき(それは)「ナチス躍進と結び付けられて地球圏にその設計図が送られてきたもの」であるとの筋立てが採用されている(史上初の定性的テレビ中継映像が流された1936年のナチ・オリンピックのヒトラー演壇上の映像が(テレビ電場が漏出していたとの)宇宙より返送されてきて、といった一群の映像の中に使用意図不明の装置の設計図が暗号化、入れ込まれていた、との設定である)。につき、カール・セーガン小説『コンタクト』では使用によって結果的に「ゲート発生装置であった」と判明したそれが「一切」明示的には粒子加速器の類とは結び付けられていないわけだが(ただし小説より12年後、セーガンの没後まもなくしての1997年に封切られた映画版『コンタクト』より、ないしは、その映画版『コンタクト』をソフトウェア化して近年世に出たものであろうDVD版解説部より「セーガン小説由来の移動装置」が「加速器」と結びつくような「追加」設定が採用されていること、および、原作小説それ自体の隠喩的な結びつけの「可能性」の問題については先の「**[b]**」の段の解説部にて付記している)、小説『コンタクト』が刊行を見た1985年より後、2001年よりフィクションならぬ現実世界にてブラックホール生成可能性と ——新規理論発展経緯より—— 粒子加速器が結びつけられるようになったとのことがある、実

験当事者および欧米物理学界重鎮ら曰く「予想外に」結び付けられることになったと
 ことがある中、そうした粒子加速器を用いての実験およびそれを実施しているとの実験
 機関らが「ナチスの原爆開発に対する懸念がその開始動機となっているマンハッタン計
 画の産物」としてこの世に生まれ出たものとなっていること「も」—『コンタクト』のナチス
 絡みの内容と通底するかたちにて— ある



マンハッタン計画と人脈的・組織的に接合する存在として [アメリカ原子力委員会] 転じての [合衆国
 エネルギー省] [ブルックヘブン国立加速器研究所] [CERN] [フェルミ国立加速器研究所] が産み落と
 されたとのことが史実としてあるわけであるが、それら [合衆国エネルギー省] [ブルックヘブン国立加速
 器研究所] [CERN] [フェルミ国立加速器研究所] がブラックホール生成問題で主として矢面に立たさ
 れた組織体となっている。アメリカにて同一人(ウォルター・ワグナー)によって提訴された一群の訴訟
 —ブラックホール生成可能性を顧慮しての指し止め要求訴訟; ブラックホール・インジャンクション・
 ケースとでも形容されるところの一群の訴訟— の被告となりもしているとの組織体となる。権利関係の存
 否を争う [法律上の争訟] というものにあつて [差し止め] を求めるだけのリスクがある / 差し止めを求
 めるだけの法源がある (適用可能法規が存在している、法的根拠がある) とのことによつてワグナー
 の訴訟での主張内容が正しい正しくないとの問題は抜きにして、裁判の被告席に立つことを強いられた
 だけの沿革・役割上の特性を (揃いも揃ってマンハッタン計画の直系の子らであるとの) それら機関が
 具備しているとのことにここでは着目している。

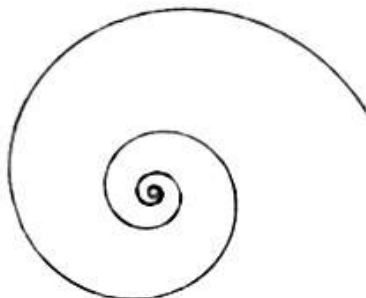
[e]・および [f]・ カール・セーガン『コンタクト』に見るブラックホール・ゲート
 発生装置といった塩梅のゲート装置は [全身、黄金比の体現物] と形容されるような
 その構造との兼ね合いで [ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』のノーチラス号にまつわ
 る比喩] ともつながるとの側面を有している。より具体的には、[『海底二万里』ノーチ
 ラス号と1970年代米国でヒットした911の多重的事前言及要素を内に含むとの小説
 『ジ・イルミナタス・トリロジー』との明示可能な関係性の中で浮かび上がる黄金比にま
 つわる比喩] とつながるとの側面を有している。『ジ・イルミナタス・トリロジー』で正十
 二面体(カール・セーガン『コンタクト』にあつてのブラックホール・ゲートといったものと
 関わるゲート装置の形状)を構成する正五角形が異界(の存在の領域)との扉といった
 かたちで登場を見ているとのことがあるからである。そうしたつながりにまつわつての話
 に関わるところとしてジュール・ヴェルヌの19世紀海洋冒険小説『海底二万里』にて
 描かれたノーチラス号の末路が [ノルウェーの渦巻き] (メイルストロム) に呑み込まれて
 のものであると描写されていることもが重くもの意味をもっている節がある —二〇〇
 九年、ノルウェーの中空にて渦巻き状の光が具現化した、公式発表によるところ、[潜
 水艦]から発射されたミサイルの誤射軌道で現出したとされるのだが、そのノルウェー・

スパイラルが俗間で(多く荒唐無稽な)LHC 関連の陰謀論と結び付けられていることにも関わる話となる——。その点に関しては二〇〇九年にて具現化したノルウェイ・スパイラル現象、同現象を奇怪にも予告していたとの特定作品内描写をなしている特定作家やりようが他所にてLHCに由来するブラックアウト現象(なるもの)と結びついているとことがある

とのことを(本稿の他の内容と同様に出典紹介に重きを置くとの格好で典拠を入念に挙げ連ねながら)それぞれ指し示すとの内容のものらであった。

([e]および[f]の説明に供しもした図解部の[再掲]として)

Logarithmic spiral



to infinitesimal
(infinitely small)



M51



Nautilus

Logarithmic spiral

Golden spiral

Nemo's Submarine



Moskstraumen

以上の [c] から [f] の内容が **α1** から **α8** にかように係るかについて「も」ここまでのくどくも繰り返しての内容から論じる必要もなきところか、と思う（：であるから、冗長性と自身の手間を排すべくもその解説は割愛する。その点、先の段にあっての[d]の部位の出典紹介部（[出典\(Source\) 紹介の部 70](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 71](#)）で指し示していること、マンハッタン計画と粒子加速器実験機関の関係性ひとつとってからして **α1** から **α8** の **α4** の内容と濃厚に係る、しかも、「不自然に」濃厚に係るところともなる）。

さて、ここまでに [a] から [f] と先行して摘示なしてきた **α1** から **α8** と振ってのつながりあいについての（多少、紋切り型とのきらいもあるかは思いもするものながらも）説明をなしたうえで **α1** から **α8** に続いてそちら典拠を先だって指し示してきたとの **β** の内容、すなわち、

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとことがある。それは海女による [セーマン・ドーマン] と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用は [竜宮] に引き込まれないための呪いであるとの言い伝えがある（とされている）。さて、竜宮とはどういう場か。[時空間の乱れが発生した場]、[外側に対して時空間の進みが遅い場] と言い伝えにある。他面、重力の化け物、ブラックホールも時間の乱れが問題となるものである（細やかな典拠については [出典\(Source\) 紹介の部 74](#) から [出典\(Source\) 紹介の部 75-3\(2\)](#) を包摂する解説部を参照のこと）

との絡みで何が問題になるか、につき、「さらに補っても」指し示しておくべきと見たところについての摘示もなしておく。

本稿にての先の段にあっては著名物理学者キップ・ソーンの手になる **BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy**『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』が

「(不可解に)911の事前言及を含む作品となっている」

とのことを示すべくも注力していたとことがある（下にての振り返っての表記を参照のこと）。

その際、アインシュタインの相対性理論の帰結から問題となるものとして

[双子のパラドックス]

というものが [911の事前言及要素] との絡みでネックとなるとの指摘をも —— 同概念がいかようなものなのかにつき、(それこそ最低限のものだが)、解説を講じながら ([出典\(Source\) 紹介の部 28-3](#)) —— なしていた（※[双子のパラドックス]現象というのは — ソーン著作よりの先の抜粋部で示されているように — 「光速近似のスピードの存在から見た時間と地球で我々が体験している時間の間ではずれが生じる。アインシュタインの特殊相対性理論より導き出せるところとしてそうなるわけだが、によって、[地球に残された双子の片割れ] と [光速近似のスピードの宇宙船などに乗って移動しているもう片方の双子の片割れ]の間には時間のずれが生じる」とのことにまつわっての現象となる）。

[先だっても段でも何度となく解説なしてきたとのことを (再びもってして) 解説なすとして]

本稿では羅列明示してきたとの文献的事実 —— [出典\(Source\) 紹介の部 28](#), [出典\(Source\) 紹介の部 28-2](#), [出典\(Source\) 紹介の部 28-3](#), [出典\(Source\) 紹介の部 31](#), [出典\(Source\) 紹介の部 31-2](#), [出典\(Source\) 紹介の部 32](#), [出典\(Source\) 紹介の部 32-2](#), [出典\(Source\) 紹介の部 33](#), [出典\(Source\) 紹介の部 33-2](#) を割いて指し示してきたところの文献的事実 —— 「のみに」依拠して指摘できるところとの式で、

BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy

との物理学者キップ・ソーンの手になる著作にあつての[双子のパラドックス]に関わるところに尋常一様ならざる予見性 一個人の主観など問題にならずにはきと指し示せるところの予見性 — が表出していることを問題視してきたとの背景がある。

「問題となる 1994 年初出の(幅広く流通しての書籍化を見ている)科学解説書 BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』では [通過可能なワームホール; traversable wormhole] にまつわる思考実験が掲載を見ており、まさしくものそちら思考実験にあつての[空間軸上の始点となるポイント]、そして、「時間軸上の始点となるポイント」、その双方で「先に発生した 911 の事件を想起させる数値規則」が用いられており、かつまた、そちら思考実験で用いられるメカニズムからして「[1911 年に提唱された]双子のパラドックス」、要するに、「911 と双子を連想させるもの」となっている。だけではない。そちら思考実験、[通過可能なワームホール]にまつわる思考実験のことが叙述される前の段で同じくもの 1994 年初出の著作『ブラックホールのと時空の歪み』にあつては他の思考実験のことが挙げられており、その実験(通過可能なワームホールのタイムマシン化に向けての応用の前提となる[時間の相対性]のことを説明するために挙げられている思考実験)からして[空間軸上の始発点]を[地番スタート番号との兼ね合いで 911 と結びつく地域]に置いており、また、同実験、[時間差爆発]を取り扱っているものともなる([911 との数値]と[時間差爆発]との兼ね合いでかの 911 の事件を想起させもする)。

加えて、である。そうした思考実験らを掲載している著作とまったく同じテーマ(通過可能なワームホール)をまったく同じイラストレーターになるところとして扱っている「他の」著作 Zero: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』からして[911 の事件とブラックホールの繋がり合い]を想起させるものとなつてもいる(2001 年に 911 の事件が発生する前、2000 年に世に出た「他の」著作からしてそうしたものとなつている)」

(※尚、述べておくが、ここにて問題視している BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』も ZERO: The Biography of a Dangerous Idea『異端の数ゼロ』(ハードカバー)も決して稀覯本の類(流通量少なき奇書・希書の類)などでは断じてなく、国内でもある程度流通を見ており、大手書店チェーンの都市部大型店にあつての「サイエンス」「科学」などと振られての書架に据え置かれているようなものであること、断つておく — であるから、探求活動の中、そちら方面の書籍を網羅的に精査していた筆者は両書に見てとれる奇怪なる特性に気付くに至つたとのことがある。につき、「不思議でならないのは、」国内外込みにそういうことに気付いた人間が他にいてもおかしくはないはずであるにも関わらず、世界で誰一人として同じくものことを(筆者を除き)訴求しようとしていないように映ることである(これより日付け偽装媒体が頭の具合のよろしくはない、関連領域で軽侮さえ招けば存在意味充足といった劣化模倣者が出てくる可能性もあるかもしれないとも見るのだが、現行にての話なせば、である)。それについては同じくものが本稿にての多くの指し示し事項に当てはまるわけだが、「指摘なす者の僅少さは指摘内容の真偽とは別個にとらえるべきである」こと、強くも断つておく(そうも述べるこの身が述べていることが真正なるものであること、何卒、確認なしにいただきたいものである。それで何かを変え得ない種族、

むしろ[隠すこと][目を背けること]に注力「させられる」だけの種族ならば、そのような種族には(指し示し事項らの指し示す内容から「当然に、」付きで)[嘲弄の中での下らぬ最期]しかあるまい、と述べつつも強調しておきたいところとしてである)——)

以上をもってして
[キップ・ソーン著作]

に認められる [双子のパラドックス] (そして[通過可能なワームホール]) にまつわる不快な前言の態様についての振り返り表記となしたわけであるが、ここで続けて [双子のパラドックス] と [浦島伝承] との絡みで何を述べてきたのかの振り返り表記をなしておくこととする。

[同文に振り返っての表記として]

キップ・ソーン著作にみとめられる、

[通過可能なワームホールを利用したタイムマシンにまつわる思考実験] (上述の振り返っての表記に見るようにまさしくもの 911 の事前言及と関わる場所の思考実験)

については機序をそのままに名詞使用規則だけ変えると、

[浦島太郎は[亀]型宇宙船に乗り込んだ。亀型宇宙船は凄まじいスピードで、光速度とのスピードで竜宮に向けて前進しているのだが、彼、浦島太郎は故郷にワームホールカメラを置いてきた。そこで浦島は都度、悪趣味な亀型宇宙船に敷設してあるワームホール連結型ワームホールカメラ映像受信機(ワームカムとしておく)で故郷の様子を見てみた。結果、都度、観察するごとに自分の双子の兄弟が(そうした存在がいたとして)老いさらばえていく様に際会した]

とのものに置き換えることができるようになっている(※)。

※上は出典(Source) 紹介の部 28-2 にて原文引用なしで呈示している思考実験にまつわる表記部に対して、

- ・[ワームホールの口(くち)が付属した宇宙船で旅立ったソーンの妻] ⇔ [浦島太郎]
- ・[ソーンの妻が乗る(ワームホール敷設型)スペースシップ] ⇔ [ワームホールカメラ付き亀型宇宙船]
- ・[地球に残されたキップ・ソーン] ⇔ [浦島が後にした世界]

とのかたちで[名詞使用規則にのみ変更を加えた]とのものとなる(筆者の勝手な科学上知見にまつわる推論の類は一切介在していない)。

それに関して、疑わしきは[下に再度の引用するところ]を読まれて、そちら書きように問題ないか、ご確認いただきたいものである。

(直下、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(白揚社)p.456-p.457、[ソーンの妻がワームホールゲート付きの光速近くで飛ぶ宇宙船に乗って地球を後にしたとの部]よりの「再度の」原文引用をなす

として)

私は彼女の手を握ったまま…(中略)…ワームホールを通して眺めながら私は当然、彼女がちょうど十二時間後の二〇〇〇年一月一日午後九時頃に帰ったことに同意する。午後九時〇〇分にワームホールを覗いた私に見えるのは、カロリーだけではない。彼女の背後、わが家の前庭、そしてわが家も見ることができる。…(中略)…この旅は地球上で測れば、…(中略)…一〇年もかかる旅である。(これは典型的な「双子のパラドックス」だ。高速度で往復した双子の一人(カロリー)は時間の経過を一二時間と測るが、地球に残った双子のもう一方(私)は、旅が終わるまで一〇年も待たなくてはならない…(中略)…二〇一〇年一月一日が到来し、カロリーは旅から帰ってきて、前庭に着陸する。私は走り出て彼女を出迎え、予想どおり、彼女が一〇年ではなく一二時間しか年をとっていないのに気づく。彼女は宇宙船の中に座っており、マウスに手を差し入れている。だれかと手を繋いでいるようだ。私は彼女の背後に立って、マウスの中を覗き、彼女が手を握っている相手は一〇年若い私自身で、二〇〇〇年一月一日の私の居間に座っていることに気づく。ワームホールはタイムマシンになっていたのである

(訳書よりの引用部はここまでとする 一※一)

(※国内で流通を見ている訳書よりの引用をなせば、上のようになるわけだが、オンライン上にて英文テキスト入力をなして確認できるところの原著表記として BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy の p.503—p.504 の表記—
—14. WORMHOLES AND TIME MACHINES の章の表記—
の原文引用も続いてなしておく。“ Carolee departs at 9:00 A.M. on January 1 2000, as measured by herself, by me, and by everybody else on Earth. Carolee zooms away from Earth at nearly the speed of light for 6 hours as measured by her own time; then she reverses course and zooms back , arriving on the front lawn 12 hours after her departure as measured by her own time. I hold hands with her and watch her through the wormhole throughout the trip, so obviously I agree while looking through the wormhole , that she has returned after just 12 hours , at 9:00 P.M.on 1 January 2000. Looking through the wormhole at 9:00 P.M., I can see not only Carolee; I can also see, behind her, our front lawn and our house.[. . .] Instead, if I had a good enough telescope pointed out the window, I would see Carolee's spaceship flying away from Earth on its outbound journey, a journey that measured on Earth , looking through the external universe, will require 10 years). [**This is the standard“twins paradox”; the high-speed“twin”who goes out and comes back (Carolee) measures a time lapse of only 12 hours, while the“twin”who stays behind on Earth (me) must wait 10 years for the trip to be completed.**] I then go about my daily routine of life. For day after day, month after month, year after year, I carry on with my life, waiting—until finally, on 1 January 2010 , **Carolee returns from her journey and lands on the front lawn. I go out to meet her, and find, as expected, that she has**

aged just 12 hours, not 10 years. She is sitting there in the spaceship,her hand thrust into the wormhole mouth, holding hands with somebody. I stand behind her, look into the mouth, and see that the person whose hand she holds is myself,10 years younger,sitting in our living room on 1 January 2000. The wormhole has become a time machine.”).

(また同様のことが[双子のパラドックス]それ自体にもあてはまることは**出典**
(Source)紹介の部 28-3にて解説している)

無論、上は知識なき者には馬鹿げているととられよう申しようであるが、キップ・ソーンの「思考実験」上での申しようは「[浦島伝承のそれ]にさらにプラスアルファして」奇矯なるものであり、キップ・ソーンの思考実験をさらに無理矢理、「浦島」系の話に当てはめれば、次のようなところとなりもする。

[浦島はワームホール・カメラ内蔵式の亀型宇宙船で故郷を後にした…。浦島が亀型宇宙船で用いていたワームホールカメラはカメラであるのみならず故郷に置いてきた子機と対応する[ワームホール型ゲートドライブ](ここではしておく)となっており、もって、[光速で移動している、あるいは、移動をやめての宇宙船の領域]と[過去と化した遥か離れての場]をつなぐワームホール型タイムマシンができあがった。浦島が惑星[竜宮]に到達後、そこで享樂的に過ごしている間に故郷では幾世紀が経過してしまったのだが、しかしそれでも、浦島は惑星[竜宮]から故郷[地球]に時を越えて物理的にインタラクティブに介入できるようになっていた—たとえば、ワームホールに手を突っ込むなどしてその先の存在と握手できるなどのことができるようになっていた—のである]

(※上では地球に残されたソーンが浦島の故郷の住人、ワームホールゲートで手を繋いだ先にいるソーン夫人が浦島太郎に該当することになる—直近にての『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』(白揚社)456 ページから 457 ページよりの再度の引用部にて、(一部をさらに繰り返し抜粋表記するところとして)彼女が一〇年ではなく一二時間しか年をとっていないのに気づく。彼女は宇宙船の中に座っており、マウスに手を差し入れている。だれかと手を繋いでいるようだ。私は彼女の背後に立って、マウスの中を覗き、彼女が手を握っている相手は一〇年若い私自身で、二〇〇〇年一月一日の私の居間に座っていることに気づく。ワームホールはタイムマシンになっていたのである(原著にては)“Carolee returns from her journey and lands on the front lawn. I go out to meet her, and find, as expected, that she has aged just 12 hours, not 10 years. She is sitting there in the spaceship,her hand thrust into the wormhole mouth, holding hands with somebody. I stand behind her, look into the mouth, and see that the person whose hand she holds is myself,10 years younger,sitting in our living room on 1 January 2000. The wormhole has become a time machine.(引用部はここまでとする)と記載されているとおりである——)

復習としての上の話をなしたところで

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとのことがある。それは海女による[セーマン・ドーマン]と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用は[竜宮]に引き込まれないための呪いであるとの言い伝えがある(とされている)。さて、竜宮とはどういう場か。[時空間の乱れが発生した場]、[外側に対して時空間の進みが遅い場]と言い伝えにある。他面、重力の化け物、ブラックホールも時間の乱れが問題となるものである

とのことに立ち返り述べるが、「あまりにも話ができすぎている」とのことがある。

以降摘示していくような観点から「あまりにも話ができすぎている」とのことが問題になると摘示できる(摘示「できてしまう」でもいいが)のである。

についてはまずもって[とっかかりとしての結びつきにまつわる話]をなす。

その点、本稿では

[カール・セーガン小説『コンタクト』(1985)に小説作中にて登場するゲート装置にまつわるアイデア提供をなした男、それがキップ・ソーンとなるわけだが(出典(Source)紹介の部 20-2)、そのゲート装置にまつわるアイデア提供時にてキップ・ソーンが着想を得たものであるとされる、

[通過可能なワームホール](エキゾチック物質というものを用いて安定化を見ているとのワームホール)

を同男が自著『ブラックホールと時空の歪み』にてまとめた部にて——双子のパラドクスとの絡みで——[911の前言要素]が具現化を見ているとのことがある

との経緯にまつわる摘示につとめてきたとのことがある(出典(Source)紹介の部 28 から出典(Source)紹介の部 33-2を包摂する解説部を参照されたい)。

上の本稿にてくどいほどに繰り返しもしてきたところ、

[小説『コンタクト』作者カール・セーガンに対して物理学者キップ・ソーンが[通過可能なワームホール]のアイデアを供与したとの事前経緯。そちら事前経緯を受けて深められもしたとの思索内容を踏まえて(同ソーンが)自著『ブラックホールと時空の歪み』にて書き記したと述べている思考実験にまつわる部——1985年、原稿を書き終えたセーガンにアイデア提供をなしたとの一連の挙動にてソーンが着想を得たとの[通過可能なワームホール]についての精緻化しての思考実験の考えをまとめた部——が[双子のパラドクス]と関わっており、その[双子のパラドクス][通過可能なワームホール]に関わる部で911の前言及に関わる要素が具現化を見ているとのことがある]

とのところにあって重きをなしているとの双子のパラドクス、それが浦島伝承と強くも接点を有しているとのことが[奇怪性]との絡みで取り立てて問題となる(と指摘して然るべきところなのである)。

につき、浦島伝承にあって登場する、

[龍宮]

が[五芒星紋様]との絡みで関わってくるというのが上のβの部の指し示し内容である。

そうしたβの部では

「龍宮にまつわる国内の因習が[五芒星紋様]と関わっているとのことがある一方で龍宮はブラックホールと通ずる側面——[(あまり知られていないし考えられていないところだろう)「常世とされる領域⇒常夜の領域」とのことで闇の領域と関わっているとの側面][重力作用が存在に強く及ぶ水圧強き領域との側面][時空間が歪んでの場]——を伴ってのものでもある」

とのことの指し示しに[出典(Source)紹介の部 74]から[出典(Source)紹介の部 75-3(2)]を包摂する解説部を通じて注力してきたとのことがある(：本稿にての[出典(Source)紹介の部 75-2]ではレオナルド・サスキンド著『ブラックホール戦争』(早川書房)p.86より(再度原文引用なすとして)次のことを引いていた。(引用するところとして)“大きなブラックホールはもうひとつの非常に手軽なタイムマシンになるだろう。それにはこのようにする。まず、軌道をまわる宇宙ステーションと、地平線の近くまであなたを吊りおろす長いケーブルが必要だ。ブラックホールに近づきすぎないようにしなければならないし、絶対に地平線を通して落ちないようにしなければならないので、ケーブルはとても頑丈なものにしなければならない。宇宙ステーションにあるウインチがあなたを下におろし、一定時間経過した後、リールを巻いて上に戻す。たとえば、ケーブルにぶらさがって1年過ごすだけで1000年後の未来に行きたいとする。重力の加速による不快感は少なくしたい。それは可能かもしれないが、それには私たちの銀河系とほぼ同じくらい大きな地平線を持つブラックホールを見つける必要がある”(引用部終端)。以上、引用部にあっては「事象の地平線を超えてブラックホールに呑まれたものは時間が凍るのに対して事象の地平線を超えずに(加速器で作られるとされるようなものとはあまりにも異質な)超大質量ブラックホールを超えるブラックホールのようなものがあれば、その近傍からして「耐えられるぐらいの重力の加速感で」全くもって時間の流れが乱れる」とのことが表記されている。それは龍宮の特性に通ずるところである。また、同様に振り返っての表記をなすとして本稿にての[出典(Source)紹介の部 75-3]および[出典(Source)紹介の部 75-3(2)]では龍宮がいかにして「常世」転じて「常夜」としての暗闇の領域と結びついていると解されるようになってきているのかについて古文献に依拠しての解説をなしている——古事記や民俗学者らの時代がかった(文語調の)物言いを引いたりしながら、である——。対して、近傍で時空間が歪むとされるブラックホールは常夜の領域と言い換えもできる)。

翻って、ソーン著書『ブラックホールと時空の歪み』は

[通過可能なワームホールを扱った部]

を目立つ箇所とする著作となっているのと同時に、

[ブラックホール関連理論の解説書]

ともなっている——同著タイトルからして『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』とそのように明示されている書となっている——ことに着目・留意する必要がある(と申し述べたい)。

ここまで摘示してきたことから、要するに、次のようなことが述べられる(とのことを強調したいのである)。

[BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと

時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつての [奇怪なる 911 の事前
 言及] との側面を帯びての部] ↔ [双子のパラドックス(1911 年提唱)にまつわる
 部] ↔ [竜宮と浦島伝承(との接合)] ↔ [竜宮] ↔ [ブラックホール的な
 特性を帯びた領域] ↔ (回帰) ↔ [(ブラックホールにまつわる解説書たる)
 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』]

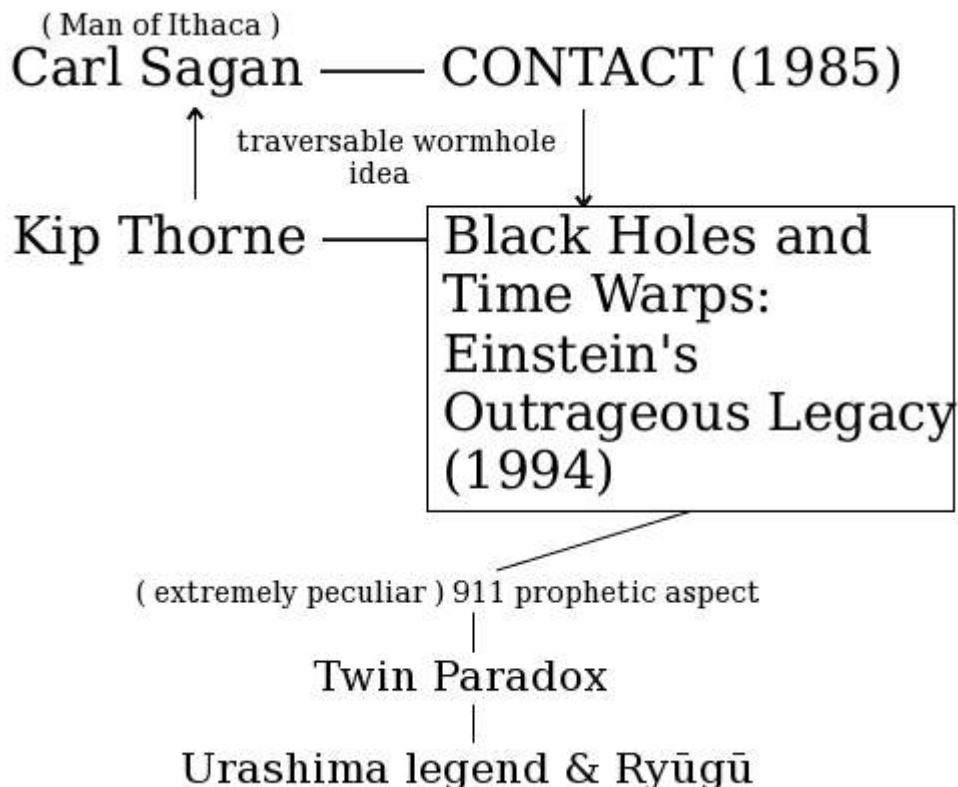
以上のようなできすぎた側面に関わるとの [浦島伝説] に関しては、である。本稿にての **出典
 (Source) 紹介の部 30**以降の段にて細かくも出典挙げながら論じているように

[アイルランド(ケルト)の特定伝承]

と数値使用規則込みで際立っての類似性を呈するとのことが現実であり([浦島が異類の眷族の女を
 助けて恩返しを受けた][浦島が仙境で三年滞在していたらば故郷では三〇〇年が経過していた][故
 郷に戻った際に警告を無視したために若さを失った]との筋立てがそのままケルトの特定伝承にあては
 まることを本稿では事細かに出典挙げながら指摘してきたとの経緯がある)、また、といった[浦島伝承
 とケルト伝承の類似性問題]については

「どういわけなのか文化的伝播の側面 —— 片方が片方の模倣をなせるだけの情報
 のやりとりが発生しているとの側面 —— が観念しづらいとの奇怪なものでもある」

とのことも本稿にての **出典 (Source) 紹介の部 30**以降の段で事細かに(判断材料となるところの出典を
 挙げつつ)問題視していたとの経緯があるもの「でも」ある。



ここからが本題である。

直近までにて、

(再度、繰り返すとして)

[BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy』ブラックホールと

時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつての[奇怪なる911の事前言及]との側面を帯びての部] ⇔ [双子のパラドックスにまつわる部] ⇔ [竜宮と浦島伝承(との接合)] ⇔ [竜宮] ⇔ [ブラックホール的な特性を帯びた領域] ⇔ (回帰) ⇔ [(ブラックホールにまつわる解説書たる)『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』]

との関係性が成立している(成立して「しまっている」とした方が時宜に適った申しようともとらえるが)とのことを指摘してきた。

他面、本稿ここに至るまでの段では (α1 から α8 と振つての段、そして、それと接合するところの [a] から [f] と振つての段にあつて膨大な文字数を割いて) 次のような関係性についての訴求をもなしてきた。

(オンライン上より容易に確認できるとの Philological Truth [文献的事実]「のみ」に典拠を求め、それから典拠だけから導き出せるとのこの指し示しに膨大な文字数を割いてきたところの関係性として)

[BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつての [奇怪なる911の予見的言及]との側面を帯びての部] ⇔ [911の予見的言及要素を帯びているとの奇怪なる特質] ⇔ [小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』 ⇔ [正五角形(ペンタゴン)が崩壊させられ、異界より介入する存在がこの世界への浸出の糸口を見出すとの筋立てを具備した小説] ⇔ [正五角形(黄金比体现構造)と異界の扉]

[BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy 『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』にあつての [奇怪なる911の予見的言及]との側面を帯びての部] ⇔ [[双子のパラドックス] および [通過可能なワームホール]について扱った部] ⇔ [通過可能なワームホールにまつわる思索が『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』 著者たるキップ・ソーンに煮詰められた経緯] ⇔ (接合) ⇔ [カール・セーガン小説『コンタクト』] ⇔ [[通過可能なワームホール]あるいは[カー・ブラックホール]と結びつく正十二面体構造(正五角形を12枚重ねた構造)を呈するゲート装置を作中の重要要素とする小説] ⇔ [正五角形(黄金比体现構造)と異界の扉]

以上のような「できすぎた」関係性までもが浦島伝承を巡る話、より正確には竜宮を巡る話と下のような式で接合している(からこそ「よりもって問題になる」)。

[竜宮と浦島伝承(との接合)] ⇔ [竜宮] ⇔ [現行、海女らにそこに引き込まれないように五芒星紋様(セーマン)が用いられているとの領域] ⇔ [五芒星紋様との結びつき]

[五芒星紋様] ⇔ [正五角形と五芒星の「無限に続く」[黄金比]を体现しての相互内接関係] ⇔ [正五角形] ⇔ [[正五角形(黄金比体现構造)と異界の扉]を巡る複数著名フィクション(双方とも大ヒットを記録している小説『ジ・イルミナタス・トリロジー』および小説『コンタクト』)の問題となる特質]

[五芒星紋様] ⇔ [数学史にあつてそれが重んじられているとの意見を伴つての正五角形と五芒星の「無限に続く」[黄金比]を体现しての相互内接関係] ⇔ [渦を巻く対数螺旋構造と同様に極小の領域へ向かう力学 (Infinitesimal; $1/\infty$ へ向かう力学)を示す体现物とされるもの] ⇔ (ペンタゴン=五角形の崩壊を観念すれば) ⇔ [極小の

領域([レギュラー・ペンタゴン;正五角形とペンタグラム;五芒星の相互内接関係が向から先])の途中過程での暴力的改変を想起] ⇔ [極小の領域に至るまでの原子核領域の破壊の機序が人類に何をもたらしかの想起] ⇔ [ペンタゴン建設計画(1941年9月11日に建設着工)およびマンハッタン計画の双方を指揮した同一軍人の手によって生み出された「原子核領域の破壊の機序を利用しての」原爆登場の経緯] ⇔ [グラウンド・ゼロとの言葉を生み出すに至ったマンハッタン計画成果物としての原子爆弾および冷戦期、核兵器標的になるとの観点からグラウンド・ゼロと呼びならわされるに至っていたとのペンタゴン、その双方と結びつく原子爆弾開発人脈] ⇔ [「原子核領域での暴力的改変」による機序を利用しての加速器実験機関らの産みの親] ⇔ [「原子核領域での暴力的改変」による機序を利用しての加速器実験によるブラックホールやワームホール人為生成可能性が問題視されるに至った粒子加速器実験] ⇔ [ブラックホールやワームホール人為生成を描くカール・セーガン『コンタクト』] ⇔ (帰) ⇔ [正五角形(黄金比体现構造)と異界の扉]

以上、振り返っての話をなしたわけであるが、もって、筆者が

「龍宮にまつわる国内の因習が[五芒星紋様]と関わっているとのことがある一方で龍宮はブラックホールと通ずる側面 ——【(あまり知られていないし考えられていないところだろう)「常世とされる領域 ⇒ 常夜の領域」とのことで闇の領域と関わっているとの側面】【重力作用が存在に強く及ぶ水圧強き領域との側面】【時空間が歪んでの場】—— を伴ってのものでもある」(β と振っての指し示し事項にまつわるところでの摘示内容)

とのことまでをも本稿にあって委曲委細尽くして指し示しなさんと努めてきたこと、その理由たる複合的關係性が奈辺にあるのか、(真摯なる読み手には)ご理解いただけることか、と思う。

同点について疑わしきにあられては本稿ここまでにてそちら指し示しに努めてきた $\alpha 1$ から $\alpha 8$ と振ってのこら、および、[a]から[f]と振ってのこらと上にてその内容を再度問題視しとした β の関係性について

[臭いなきところに臭いを嗅ぎ取っているようなものなのか]

あるいは

[鼻を覆いたくなるような臭気が漂っているところでその臭気のが我々を殺すことになる凶器の所在を示すものであるということ、そして、凶器を手繰る者達がどういう力学・意図で動いていると考えられるということについて適正に指し示さんとしているものなのか]

について論拠の適正さの検討も含めて、よくよく検証いただきたいものである。

以上、ここまでにて

B. 日本でも五芒星紋様が用いられてきたとのことがある。それは海女による[セーマン・ドーマン]と呼ばれる紋様の使用にまつわる話となる。その点、海女によるセーマンこと五芒星の使用は[竜宮]に引き込まれないための呪いであるとの言い伝えがある(とされている)。さて、竜宮とはどういう場か。[時空間の乱れが発生した場]、[外側に対して時空間の進みが遅い場]と言い伝えにある。他面、重力の化け物、ブラックホールも時間の乱れが問題となるものである

との絡みで何が述べられるかについての説明とした。

容易に検証可能であり、かつ、露骨に剣呑さを示す事実関係らの存在そのものを韜晦(くらまさ)せんが如く海外陰謀論者やりようについて (【本論に対する付記】と位置付けての部)

先だつての段までにて長大なる本稿にあっての中盤をなす補説2と銘打つての一連の部にて指し示すべきかと判じた [多重的關係性の所在] についてあらかた指し示しきつた、と判じている。

[確認のための弁] として :

直上にあつて [指し示しきつた] (と判じている) との申しようをなしているとのことについて申し述べておくが、[ひたすらにもつてしての指し示しに努める] とのことの履踐にこの身が努めているのは

「読み手の興味本位の精神に応えるための話をなす」
「(中途半端に) 忌まわしき世界にての忌まわしき社会問題を訴える」

といった意図に因るところでは元より「ない」(筆者のことをよくも知らずに『この物書き崩れが...』『どこぞやらの山師風情が...』などと見たがるような向きらは「よりもつてして」そうした予断・偏見などを抱こうか、とは思うのだが)。

本稿筆者の念頭にあるのは

[社会改変]を促しつつ、もつて、このままいけば、遠からず殺されるであろうこと「自明」である (と示せると明言するしそこに判断上の行き過ぎがないのか確認を求めたい) との状況にあつて、この身自ら、そして、この身が個人的に守りたいと思つている向きら、そして、正しきところを残し育む可能性がある良き者達 (『屑など死んでも構わぬ』とのある種の非情冷酷さを伴つた筆者のような胸中の人間に比べて本当に善良なる者達) の生き残りをただただ担保したい、その目的のために、—そもも述べるとこれまたもつてして大仰に響くかもしれないが— 多くの人間に [確認]を「なしきりたい」

とのことだけである。

につき、[この「ような」世界] (ニュアンスを当然にお分かりいただけようか、と思ふところとしての「ような」付きで述べてのこのような世界) で市民運動家 (と分類されるような人種) や ジャーナリストの類がそうしたことに向き合いもし、自身の生き様に矜持を持ちもしている (あるいはよりもつてありそうなどころとしてそのフリをしている) のであろうとの諸々の [社会問題]、そこに見る「非」本質的な [社会問題] なるものを訴えることなどは本稿筆者にとり、言うならば、二の次・三の次のことであり (述べておくが、世界中に根絶せねばならぬとの不幸や不条理が満ちていることは筆者もよくもつてして承知のうえである —たとえば、中

国や北朝鮮のような自分のこと「しか」考えぬ・言われれば何でもやるとの下らぬ相応の人間らを数多含む[尊厳]軽視社会にあつての労働収容所の問題などその最たるものであろう—、そう、「地球全体・人類社会全体を水槽に見立てた場合、不条理な淀みはなくすにかぎる」との観点からそうもしたことに異を呈することは誰かがやらねばならないことであるとは思っているが、方法論も込み「現行の」[社会問題]なところへのアプローチは筆者にとって二の次・三の次であると述べている)、 筆者がただただそれのみ志向しているのは

〔「問題」社会（本稿筆者が[蚕の煮沸死とワンセットになった本質的蚕棚（かいこだな）]の如きものと内心見ているところの「問題」社会）の露骨に示唆されている行き着く先にまっわってのこと〕

について

「[確たる事実]を[自分達を死地に追い込むまさしくものそのやりよう]として眼前に突きつけられて[なおもって何もやらぬ]種族に明日などあるわけがないとのことを伝える」

とのことであり、そのために長大なる本稿をものし、その全内容でもってして

「「遠からずもの人災(マン・メイド・ディザスター)としてこういうことが具体的に企図されていると摘示できるようになっている(なつてしまっている)」「それは[頭の本然的作用を破壊されたような人間]たちの[目的尽くの最終的に行き着く先]の問題と接合していると易々と解されるようになっている」が、諸兄ら(あなたがたら)はそれでよいのか」

との[確認]を(前述のように自分自身と守るべきと見ている者達の生き残りを図るために)後追い容易なるそれだけで全て事足りるとの論拠らを列挙しながらなそうとのことである—尚、筆者にそうも述べるだけの資格があるのか、また、話柄が[字義通りに行き過ぎたもの]として斥け「られない」とのことが果たして本当にあるのか、(筆者の理と知の水準の問題をよくよくも検証いただきながら)本稿全体からご判断いただきたい—。

またもってして述べるが、現実に抗う勇氣・能力がない、ただただ[屠所の羊]として殺されていくだけである、それでよい、との向きらには「はなから用がない」、そういう向きらには[残酷極まりない現実]に目を向けさせるような[残酷なこと]は元よりなしたくないとの観点(合理精神に加えもしての最低限ながらも人情にも依拠しての観点)がこの身、筆者にしてからあること、何卒、履き違えずに認識いただきたいものである—だが、もし貴殿が[俺・私は殺されると分かっているのならば、[圧倒的上位者]を含めいかなる相手にもそのやりように異を呈する]との精神(意志の力)を少しでも有しているのだとするならば(あるいはそうだともって任じたいというのならば)、そうした向きには[状況]を呈示しての[確認]を筆者は求めるであろう。の際、[明朗明らかなる事実]を懇切丁寧に「証示」されたうえで too big to fail [大きすぎる問題だからそれは挫くことはできない]との諦観とワンセットになった観点(筆者が「誰も国内ではそれをやらぬ中で」訴求の用のためだけに権威の首府相手に一番からして二年間、法廷に立ってきた LHC 関連行政訴訟に関して知人に言われた言葉であり、また、呈された観点)では「なく」にも、[後追い確認容易なる確たる具体的事実の存在そのものを意固地に認識しない・認識しようとするのありよう]

で [問題となること] になんら向き合わぬ向きらに関しては、そうした [心なき者ら] が舌の先で何を言おうが、また、頭で何をどう勝手に思い込もうが、筆者はそういう向きらには「[確認]はもう済んでいる」と当然に看做すとも申し述べておく (そのような「もの」には残念ながら「生き残る能力などはなからない」とこの身からして当然に判断しきると述べている)——)

さて、先だつてのページまでにて [指し示しきった] と申し述べることら (直上、長くも付した [「確認」にまつわつての言] のことはともかくにも、の [指し示しきった] と申し述べることら) についてここ本頁では別観点から幾点か補足しておくべきかと判ずることがあるのでその点についての解説を —「かなりもつてして長くなる」も— 続いてなしていききたい。

「長くなるも、」の補足として

補説 2 と振つての長大なセクションでの指し示しはもう幕を引いてもいいところまで来ているか (そして、次いでもの (同文に生き死にの問題に関わるところを指し示すべくもの) **補説 3** に移行するところまで来ているか) と本稿構成に思いを巡らしての執筆者として考えてもいるのであるが、補足として加えて取り上げるべきかと判じたところにつき取り上げておくこととする。

さて、唐突だが、本稿のより先立つての段では

[「龍宮伝承」と「五芒星形状を呈する呪符(セーマンと呼称される呪符)を用いて潜水する海女にまつわる慣習」]

にまつわつての解説をなしていた。

そうもした先立つての解説の段にあつては

海女(職業的潜水夫)らが五芒星形状の呪符 —セーマンと呼ばれるそれ— を身に帯びて潜水するのは俗間では[龍宮に引き込まれるのを防ぐ] ためとはされているが、[海女らが用いている五芒星] が [龍宮伝承] と結びつくとのことは口伝・口誦として語られるにとどまる節ありのところであり (：セーマン・ドーマンと呼ばれる魔除けと龍宮の関係についてはそのことを紹介したウェブサイトも目立つように存在しているが —検索エンジンで検索することでも表示されてくる— 、おそらく該当古文献「非存在」ゆえにであるからであろうも、といったところ含めて古典上の由来というものが「現行は」どこにも呈示されていない)、 そう、[史的論拠たる [文献的事実] というものを同定できない] がために同じくものは**歴史的因習としての面で見えた場合、竜宮と五芒星紋様を結びつけるが如きことは史的励行の有無の確実性としては弱い節がある**

とのこと、申し述べもしていた。

(：につき、(本稿別所で別観点にてその内容を問題視しもしていたとの著作でもあるとの) かの南方熊楠の手になる『十二支考』にあつては

(以下、オンライン上の青空文庫媒体より全文確認できるとの南方熊楠の手になる『十二支考 蛇に関する民俗と伝説』より再引用なすところとして)

“種彦の『用捨箱(ようしゃばこ)』巻上に、ある島国にていと暗き夜、鬼の遊行するとて戸外へ出でざる事あり。その夜去りがたき用あらば、目籠を持ち出て出るなり、さすれば禍なしと、かの島人の話なりといえるは、やはり新島辺の事で、昔は戸口にも箆を掛け、外出にも持ち歩いたであろう。種彦は、江戸で二月八日御事始おことはじめに箆を門口に懸けた旧俗を釈(と)くとて、昔より目籠は鬼の怖るるといひ習わせり、これは目籠の底の角々は☆如此(かく)晴明九字(あるいは曰く晴明の判)という物なればなり。原来の俗説、ただ古老の伝を記すと言ったが、その俗説こそ大いに研究に用立つなれ。すなわちこの星状多角形の辺線は、幾度見廻しても止まるところなきもの故、悪鬼来りて家や人に邪視を加えんとする時、まずこの形に見取れ居る内、邪視が利かなくなるの上、この晴明の判がなくとも、すべて籠細工の竹条は、此処(ここ)に没して彼処(かしこ)に出で、交互起伏して首尾容易に見極めにくいから、鬼がそれを念入れて数える間に、邪視力を失うので、イタリア人が、無数の星点ある石や沙や穀粒を、袋に盛って邪視する者に示し、彼これを算(かぞ)え尽くすの後にあらざれば、その力利(き)かずと信ずると同義である。節分の夜、豆撒くなども、鬼が無数の豆を数え拾う内に、邪力衰うべき用意であろう” (再度の引用部はここまでとする)

との記述内容、大要、

[特定古文献(江戸期戯作者たる柳亭種彦の手になる随筆『用捨箱』)などに典拠求められるところとして[鬼の遊行]による災いを避けるため籠(かご)を持ち歩く風習や箆(ざる)を家屋に立てかけるとの風習があるとのことである。これは籠(かご)などの底の編み目が[五芒星紋様][晴明九字]の形態に近しく、各辺に出口のないその構図より悪鬼がやってきて[邪視]をなさんとしてもそれに見入ってその[邪視]が[邪視]の用をなさなくなるからであるとされている(ことによる)]

との記述内容がみとめられると申し述べつつ、

「日本国内「でも」西洋と同文に五芒星それ自体が魔除けの呪符として諸所にて用いられてきたとの経緯は確かに「古文献」(『用捨箱』など)それ自体にみとめられる文献的事実である」「だが、それが「大昔からの因習としての」「[龍宮](というもの)に対する海女(職業的潜水夫)らの魔除け観」としてそこにあったことまでを明瞭明確に示す証跡は(調査しても)目につかない」

とのことを付言しもしていた)

(最低限の節義の問題としてお断りしたきところとして) 話の筋がまだ読み手に見えなかつたところにあつて[細々としたこと]について延々云々するようで何ではあるのだが、そうもしたこと、龍宮に対する魔除けとして海女らが五芒星を用いるとのことが確たる伝統を伴う式で史的に励行されてきたのかあやふやではあるとのことを述べての段にあつては、あわせて、「ただし、」付きで

「ただし、[龍宮]と[海女](セーマンという呪符を帯びて潜水する習俗が現代に一部伝わっているとの職業的潜水夫)が —([五芒星]はそこには出てこないながらも)— 著名古典にて結びつけられているとのことまでは明朗なる文献的事実の問題としてそこにある」

とのかたちでの説明「をも」講じもしていた。

(:何故、従前の段にて上のようなことの解説に力(りき)んで取り組みもしていたのかに

ついて振り返りもして述べれば、である。

事実1:「龍宮とは時間が歪んでいるとされる領域であり(浦島伝承)、かつ、同・龍宮は常闇の領域たる常夜の領域であるとも(古典それそのもの依拠しての観点で)見られうるもの「でも」ある」

事実2:「そうした龍宮の災厄を避けるために【五芒星】のことが(伝統性との意味での根の深さの問題はともかくも)俗間にて引き合いに出されている」

との一般論としての単純で明朗な二つの事実と、それら二つの事実に対しての、

事実3:「ブラックホール近辺は時間が歪んでいる領域であり、またもってして、常闇の領域に親和性高いところであると解説される」

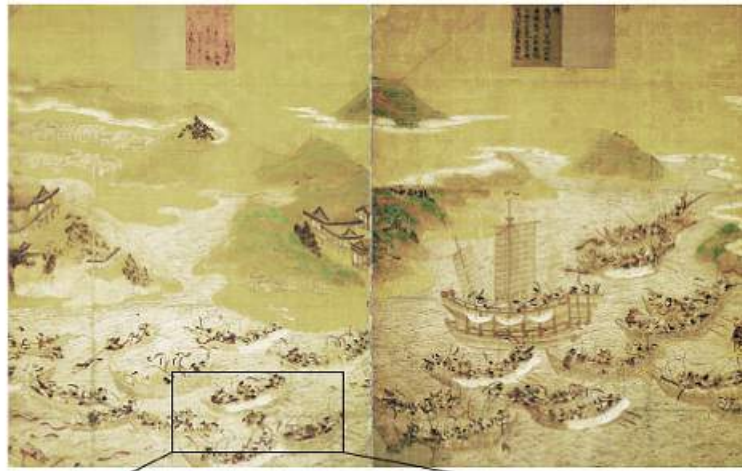
事実4:「「どういふわけなのか」ブラックホール(がかったもの)に相通ずる要素として【五芒星】及び【五芒星と永遠に続く相互内接外接関係で結節する正五角形】のこたらが近年にあつての欧米圏文物らに見てとれるとのことがある」

事実5:「上(の事実4)にあつて言及しているところの文物ら 一再述するところとしてブラックホール(がかったもの)に相通ずるところで【五芒星】をモチーフとしているとの「特異な」特性を帯びているとの文物ら— は相互に接合性があるところで【911の事件の予見的言及要素】を帯びているとの特性を伴っており、のうち、一部は【双子のパラドックス】と呼び慣わされる物理現象にまつわるところで【911の事件の発生の「予見的」言及要素】と多重的多層的に接合する側面を帯びている」

事実6:「上(の事実5)にあつて言及しているところの【双子のパラドックス】は本然として浦島にての龍宮滞在によって生じた時間のズレと結びつけられるが如きものとなっている」

との各事実らの間にあつての「奇怪なる」相関関係の問題に注意を向けたかつたとのことがある、よりもって巨視的なるところのこたらにあつてのたかだかものワン・オブ・ゼムの問題、them が many であるとのところの問題としてながらも注意を向けたかつたとのことがあるからである(尚、理解が早いとの向きに対してはいちいちもって述べるまでもないことか、とは思うが、表記の事実1から事実6より導きだされるとの(全体の中で極々部分的なる)関係性とは単純化させると、詰まるところ、次のようなものである ⇒ 童宮 ↔ [時間の遅れが生じる、時空間が乱れる場] [常闇の領域] ↔ [ブラックホール近傍のありようとの質的近似] / 童宮 ↔ [五芒星紋様と「部分的に」結びつく領域] [双子のパラドックスと相通ずる領域] ↔ [五芒星紋様・正五角形紋様(五芒星と正五角形は永遠に続く相互内接・外接関係を呈することでよく知られる)の類と関わり、かつもってして、双子のパラドックスとも結びつく欧米圏文物が911の「奇怪なる」予見的言及文物として存在しているとのありよう] ↔ [左記の如しの文物におけるブラックホール「にも」通ずるとの内容] ↔ [ブラックホールの特性・五芒星と通ずるとのありよう・双子のパラドックスと通ずるとのありよう] ↔ [童宮](回帰;「奇怪なる」911の事前言及にまつわるところでの「奇怪なる」回帰))。

表記のことにつき、より具体的には、である。(繰り返すも古典それ自体ではセーマンと呼ばれる五芒星形状とは無縁ながらも)[海女らの龍宮探索]について扱っているとの『源平盛衰記』より特定部の記述を出典(Source)紹介の部75と振って抜粋し、海女(五芒星紋様をもって潜水するとの伝統を帯びているとの職業的潜水夫)と龍宮が結びつく、著名古典に見る文献的事実の問題として結びつくとの解説を講ずることまでは先だつてなしていた。



壇ノ浦の戦い
(Battle of Dan-no-ura)

龍宮
Ryūgū

浦島太郎
(Urashima Tarō)



壇ノ浦の合戦にての平家一門の行き先が八岐大蛇の眷族に利用されての龍宮であったとの内容を有しているのが『源平盛衰記』である。他面、浦島の行き先も —「初期の」浦島子伝承ではその行き先は蓬莱(ほうらい)とされていたのであるも— 龍宮である(下の図はその点について触れたもので同図上段は山口県赤間神宮所蔵の壇

ノ浦の合戦を描いた安徳天皇縁起絵図(英文 Wikipedia に掲載されている著作権の縛りなきことが明示されたもの)よりの抜粋をなしたものとなり、同図下段は Project Gutenberg にて公開されている著作にあつての Edmund Dulac との挿絵家の作となるものである。

ここ補足部では海女と龍宮の関係について指摘するために取り上げていた古典『源平盛衰記』にての記述を再度、引き、そこからして(「別観点にて補足加えておくべきかと判じられる」こととのからみで)[問題になるところがある]との方向性での話をなしていく。

さて、疑わしきは引用テキストのグーグル検索エンジンなどへの入力・検索で内容確認いただきところの『源平盛衰記』よりの特定の下りよりの(出典(Source)紹介の部 75 にてなしたところを繰り返しての)再度の抜粋を下になすこととする。

(直下、オンライン上の国内サイト(j-texts.com とのサイト)にて掲載されている『源平盛衰記』(国民文庫刊行版として紹介されているとのもの)の特定の下りよりの抜粋をなさせていただくとして)

老松は母也、若松は女也。 勅定の趣を仰含。母子共に海に入て、一日ありて二人共に浮上る。

若松は子細なしと申す。

我力にては不(レ)叶、怪き子細ある所あり、凡夫の可(レ)入所にはあらず、如法経を書写して身に纏て、以(二)仏神力(一)可(レ)入由申ければ、貴僧を集て、如法経を書写して老松に給ふ。

海人身に経を巻て海に入て、一日一夜不(レ)上。人皆思はく、老松は失たるよと歎ける処に、老松翌日午刻計に上。

判官待得て子細を問。

非(レ)可(二)私申(一)、帝の御前にて可(レ)申と云ければ、さらばとて相具し上洛。

判官奏し申ければ、老松を法住寺(ほふちゆうじの)御所に被(レ)召、庭上に参じて云、**宝剣を尋侍らんが為に、竜宮城と覚しき所へ入**、金銀の砂を敷、玉の刻階を渡し、二階(にかい)楼門を構、種々(しゆじゆ)の殿を並たり。

其有様(ありさま)不(レ)似(二)凡夫栖(一)心言難(レ)及。暫惣門にたゞみて、大日本国(だいにつぽんごく)の帝王の御使と申入侍しかば、紅の袴著たる女房二人出て、何事ぞと尋、宝剣の行へ知召たりやと申入侍しかば、此女房内に入、やゝ在て暫らく相待べしとて又内へ入ぬ、遥在て大地動、氷雨ふり大風吹て天則晴ぬ。

暫ありて先の女来て是へと云。老松庭上にすゝむ。御簾を半にあげたり。**庭上より見入侍れば、長さは不(レ)知、臥長二丈(にぢやう)もや有らんと覚る大蛇、剣を口にくはへ、七八歳の小児を懐、眼は日月の如く、口は朱をさせるが如く、舌は紅袴を打振に似たり。** 詞を出して云、良日本(につぽん)の御使、帝に可(レ)申、宝剣は必しも日本(につぽん)帝(みかど)の宝に非ず、竜宮城の重宝也。我次郎王子、我蒙(二)不審(一)海中に不(二)安堵(一)、出雲国簸川上に尾頭共に八ある成(二)大蛇(一)、人をのむ事年々なりに、

素盞烏尊(そさのをのみこと)、憐(二)王者(一)孚(レ)民、彼大蛇を被(レ)失。其後此剣を尊取給(たまひ)て、奉(二)天照太神(てんせうだいじん)(一)、景行天皇(けいかうてんわう)の御宇(ぎよう)に、日本武尊東夷降伏の時、天照太神(てんせうだいじん)より巖宮御使にて、此剣を賜ひて下し給(たまひ)し、胆吹山のすそに、臥長一丈の大蛇と成て此剣をとらんとす。去共尊心猛おはせし

上、依(二)勅命(一)下給間、我を恐思事なく、飛越通給(たまひ)しかば力及
ず、其後廻(レ)謀とらんとせしか共不(レ)叶して、簸川上の大蛇安徳(あんとく)
天皇(てんわう)となり、源平の乱を起し童宮に返取、口に含るは即宝剣なり、
懐ける小児は先帝安徳(あんとく)天皇(てんわう)也、平家の入道太政大臣(だ
いじやうだいじん)より始て、一門人皆此にあり。見よとて傍なる御簾を巻上たれ
ば、法師を上座にすゑて、気高上藤其数並居給へり、汝に非(レ)可(レ)見、
然而身に巻たる如法一乗(いちじよう)の法の貴さに、結縁の為に本の質を不
(レ)改して見ゆる也、尽未来際まで、此劍日本(につぼん)に返事は有べから
ずとて、大蛇内(はひ)入給(たまひ)ぬと奏し申ければ、法皇を奉(レ)始、月
卿(げつけい)雲客(うんかく)皆同成(二)奇特思(一)給(たまひ)にけり。偕こ
そ三種神器の中、宝剣は失侍りと治定しけれ。

(引用部はここまでとする)

以上、引用なしたところに対して[文系]と呼ばれるような進路選択をなしたうえで(勝負運に恵まれていないのならばいざしらず)ほぼ意のままの大学に入学できるだけの古文・漢文知識(込:上にての引用文に含まれるレ点表記や一・二点表記に見る訓読メソッドに関する知識も含めての知識)を身につけた向きならば労せずもなせるであろうところの現代語訳をも一長々としたものになるが一下に付しておくこととする。

(直下、壇ノ浦の合戦の後、宝剣草薙が海中に没し、法皇(後白河上皇)が草薙の回収が
図った中、海女が回収に召集されたとの下りについての直上『源平盛衰記』引用部に対す
るこの身による現代語訳を付すとして)

(宝剣回収のために招集された海女らのうち)老松オイマツという女の方は母親
となり、若松ワカマツという女はその娘であった。

勅命の趣旨を言い含められたうえで彼女らは母子共々、壇ノ浦に潜り、一日
を経て、浮上してきた。

若松が言うには「子細なし」とのことであった(註:「子細なし」とは「別状ない」と
訳されるような言いまわしだが、この場合は悪い意味で「どうしようもない」との
ニュアンスともとれる)。

続いて、

「我らが力では適うところではなく、怪しいとのところはあったものの、普通の人間
が入り込めるようなところではなかった。如法経(法華経別称)を書写して身に
帯び、神仏の加護を受けてのことならば先へと進めるであろう」

と言うので、由緒ある僧らを集め、如法経(註:[法華経]の別称である)を書写し
それを老松に与えた。

海女(註:引用元の『源平盛衰記』の表記では海人)としての彼女らはその如
法経(法華経)を身にまもって潜水し、一日一夜の間、浮上してこなかった。
人々が老松らは死んでしまったのでであろうと嘆いていたところ、老松が翌日の午後
に海中より浮上してきた。

そこで義経(註:この部は原文では[判官]と表記されているが、前段の文脈上、
檢非違使として朝廷に仕えていた源義経、頼朝に討伐される前の源義経が草
薙之劍回収作戦に旗下100騎を伴って関与しているとの記載が認められるの
で、この場合の[判官]とは[判官鼻眞]の語源としても知られる[檢非違使(判
官)としての九郎義経]のことであろうと当然に解せられるようになっている)が
「どうだったのか」と委細を問うた。

すると海女らは

「申し上げることができません、帝の御前でならば申し上げますが」
と言うので、義経は海女らを伴って上洛した。

義経が用向きを上奏したならば、老松は法住寺(の後白河の)御所に召し出され、そちら御所庭園にて彼女老松が申し述べたところ、(彼女らは)宝剣を得るがために[竜宮城]と思われるところへ入り込むことになり、そこにて金銀の砂が敷かれているとのありさま、玉(宝玉)製の渡りが設けられ二階建ての楼門と種々様々な御殿があったとのありさまのを見出したという。

そのありようはまさしく普通人には形容しがたいこの世のものとは似ても似つかぬものであったという。

しばらくの間、そこにての門前でたたずみ、次いで、「大日本国の総攬者たる帝の使いでやってきた」と言い伝えたらば、紅色の袴を着た女官(女房)らがそちら竜宮内部より二人出てきて、「何事か」、と問うてきたので、「宝剣(註:文脈上、壇ノ浦海戦で海中に没した[草薙の剣]のこと)の行方が知りたいのです」

と伝えたところ、女官らは宮殿内に入り、ややあって「しばらく待つように」と伝えに来もし、それからまた宮殿内に入っていった。大地が動くほどにも長き間、氷雨が降り風が吹き、そして、天は晴れたとの長き間、待つような想いであった(註:海底の龍宮の中で天候の話をしているようにとれ、妙にも映るとの部だが、[遙在て大地動、氷雨ふり大風吹て天則晴ぬ]とは時間が長くも経っていることの修辭的表現と受け取れもする)。

しばらくしてから先の女官がやって来て、「これへ」と言うので、老松らは中庭の中へと進んでいった。

(その先の龍宮の統治者が座する場にて)すだれが半分ほど、上にあげられていた。

庭の方より老松らがそちらを見ると、正確には分からぬが、全長にして二丈(今日で言うところの6メートルか)もあろうことかとは分かる大蛇が口に剣を加えて、七から八歳の小児(註:別の古典内容から判断するにこれは[八歳の竜女]との法華経用語への言及と解される)を懐に抱いてそこに座しており、その眼は日月のように見え、また、口は朱を塗ったようになっており、その舌は紅の袴が動いて揺れるようにゆらゆらと振られていた。

その存在(竜宮主催者との出で立ちで描写される大蛇)が言葉を発して言うところ、

(以下、かなりもっての長口上の記載箇所であるため、他との別を設けるために段下げして表記するとして)

「良き日本よりの使者よ、帝(みかど)へと申すがよい。宝剣(註:文脈上、草薙の剣)は必ずしも日本国の帝の宝物(ほうもつ)ではなく、竜宮城にあっての至宝なのだ。私の次男にあたる王子、それが我が不興を蒙(こうむ)ってのこととし、海中にて安心しての居所を見出せず、出雲の国の簸川(ひかわ)の地にて頭と尾が共に8本ある大蛇と化し、人を呑み込んで殺していたとのこと、多年に渡ってなしていた。そこを素盞烏尊(すさのおのみこと)が土地の王を憐れみ、民を慮(おぼ)っての挙に出たために、その次男坊としての大蛇を失うことになった。その後、素盞烏尊(すさのおのみこと)がその大蛇より剣を取り、天照大神(あまてらすおおかみ)に献上し、その宝剣を景行天皇(註:伝説上の帝で九頭竜を草薙で退治した日本武尊こと[やまとたける]の父でもある)の統治期に日本武尊(やまとたける)が夷(蛮族)の討伐にと東征に出た際に天照が同皇子に授与することになった。授与されての宝剣を[全長1丈(註:3メートル程か)の大蛇]へと変じて(註:元[ヤマタノオロチ]であった存在の親たる竜宮の主が、か)胆吹山の裾野のところまで略取しようともした(註:話の筋立て上、[日本各地に伝わる日本武尊の[九頭龍]退治伝承]へのそれと明示せずの言及

であるように解される)。

しかし、剣を佩(お)びての日本武尊が心猛々しき者にして、また、勅命を帯びていたとのかたちでもあったために、この我を恐れることもなく、飛び越えて行ってしまって力が及ばなかった。

後、謀(はかりごと)を再度めぐらし、剣を略取せんとしたがすべてうまくいかなかった。

さらにその後、簸川(ひかわ)にて素盞鳥尊に退治された大蛇(註:文脈上、竜宮の主催者の次男で八岐大蛇のこと)は生まれ変わって安徳天皇(註:壇ノ浦で平家一門と共に入水して果てた、平家一門の権力の源泉となっていた幼帝)となり、(騒乱を煽って)、[源平の合戦]を引き起こし、竜宮に宝剣を取り返した。いま口に咥えているのがまさにその剣であり、ここに抱いている幼児が先の帝、安徳天皇である。平家の入道太政大臣(註:壇ノ浦の合戦の前に没した平清盛のこと)よりはじまって、その一門も皆、ここにいる。見るがいい

と述べてその大蛇が簾(すだれ)を全て巻き上げて見せたらば、法師(註:剃髪して仏門に入ったとのスタンスを生前取った平清盛のことであろうと当然に解される)を上座に平家の高貴なる者たち(公達)がそこに居並んでいた。

(大蛇が続けて口を開いて言うには、との文脈にて)

「本来ならば汝(註:老松のこと)は見るが出来なかったようなところだが、身につけた如法一乗(註:先述のように[法華経]のこと)の尊さ、および、縁(えにし)がゆえに[ことの本質]を見せた。未来永劫、この剣が日本に返ることはないであろう」

と述べ、大蛇は奥へと入って行った。

そのように(老松が上皇に)上奏したらば、法皇(後白河上皇)をはじめとしたその場に居合わせた公達らは皆、一同、「奇特なることだ」との面持ちであられた。三種の神器のうち、宝剣が失われたとのこと、これにて定まった」

(抽出部に対して筆者がなしたところの補ってもの現代訳はここまでとする)

以上、現代訳を付しつつもの引用元古典『源平盛衰記』内記述に見るように、

[[竜宮] と [海女] (歴史的潜水漁業従事者) はときに結びつく存在となっている]

とのことまでは(口伝・口誦の類に留まらず)著名な古典に見受けられる[文献的事実]の問題として摘示できるようになっている。

以上再掲なしの古典 —平家物語異本たる『源平盛衰記』— の特定の下りよりの引用部からは

「「老」松と「若」松との潜水をなした海女らの名前からして [「若」者の「老」人化] が話の結末として設定されている龍宮伝承というものを想起させる」

とのことで気にかけているところでもあるのだが、といった穿(うが)ちすぎの観ありの点とは離れてのこと、

[あらためて注記すべきとらえたところ]

としてここ付記の部にて本稿前半部でも取り上げていた特定書籍よりの再度の引用なすこととする(具体的には —極めてエキセントリック、パラノーマルな(paranormal: 超常的)な話であること、そして、「史的」贗造物(archaeological forgery)であるものが引き合いに出されての話であることを承知の上でのこととして— デーヴィッド・アイク(David Icke)、「有史以来の人類の支配者は[爬虫類人]との形態をとる存在である」との主張を物議を醸すこと、大なるところとして流布したことで知られる人物、そして、「超」陰謀論者との立ち位置にあると形容される人物である同男アイクの著述 Children of the

Matrix (2001) にあつての記述を下に再度、引用することとする)。

(直下、本稿にあつての **出典 (Source) 紹介の部 34** でもその内容を引いたところの Children of the Matrix (2001) 原著にての CHAPTER 8 the shape-shifters [変身なす者達]、その中の The children of the shadows と振られての節よりの「再度の」引用をなすとして)

Ancient tablets, alleged to come from beneath a Mayan temple in Mexico, describe the reptilians and their ability to shape-shift. These accounts correlate remarkably With modern experience and reports. They are known as the Emerald Tablets of Thoth, who was a deity of the Egyptians. It is claimed that they date back 36,000 years and were written by Thoth, an "Atlantean Priest-King" who, it is said, founded a colony in Egypt. His tablets, the story goes, were taken to South America by Egyptian "pyramid priests" and eventually placed under a Mayan temple to the Sun God in the Yucatan, Mexico. The translator of these tablets, who calls himself "Doreal" (Maurice Doreal), claims to have recovered them and completed the translations in 1925. But only much later was he given "permission" for part of them to be published, he says. However, you don't have to accept all the details of that story to appreciate the synchronicity between what these tablets say and what is now being uncovered.

The following is the relevant section in the tablets to the subjects we are discussing.

"Speak of ancient Atlantis, speak of the days of the Kingdom of Shadows, speak of the coming of the children of shadows. Out of the great deep were they called by the wisdom of earth-man, called for the purpose of gaining great power.

"Far in the past before Atlantis existed, men there were who delved into darkness, using dark magic, calling up beings from the great deep below us. Forth came they into this cycle, formless were they, of another vibration, existing unseen by the children of earth-men. Only through blood could they form being, only through man could they live in the world.

"In ages past were they conquered by the Masters, driven below to the place whence they came. But some there were who remained, hidden in spaces and planes unknown to man. Live they in Atlantis as shadows, but at times they appeared among men. Aye, when the blood was offered, forth came they to dwell among men.

"In the form of man moved they amongst us, but only to sight, were they as are men. Serpent-headed when the glamour was lifted, but appearing to man as men among men. Crept they into the councils, taking form that were like unto men. Slaying by their arts the chiefs of the kingdoms, taking their form and ruling o'er man. Only by magic could they be discovered, only by sound could their faces be seen. Sought they from the kingdom of shadows, to destroy man and rule in his place.

(上記原著引用部に対する拙訳として)

「メキシコはマヤ期神殿に由来すると主張されもしている古代の碑文らがレプティリアン[爬虫類人](とデーヴィッド・アイクが呼称する操作者)および彼らの変身能力についての描写をなしている。その碑文らに見る書かれようは今日の経験・報告事例と合致するところがある。

(ここで取り上げている)それら碑文とは「エジプトの神として知られるトートの名を冠するエメラルド・タブレット」である。「36000年前に遡るものである」と主張され、また、「エジプトにコロニーを創始した「アトランティス神官王」たるトートによって書かれたものである」とも主張されているとの碑文らとなる。

同[トートの碑文]にてはその碑文がエジプトのピラミッド聖職者らによって南アメリカに持ち込まれ、そして、メキシコ・ユカタンにての太陽神を祭つてのマヤ神殿の下に安置されたものであるとつづられている。自身を「ドリール」 —注:

ここでは「リアルにする」とのことをデービッド・アイクは強調しているようにとれる — **[モーリス・ドリール]**と名乗る碑文解読者は**1925年にそれらを修復・解読をなし終えた**と主張し、「だが、一部の出版の許可を与えられたのはより後のことである」と同人物は述べもしている。

しかし、あなた(デービッド・アイクが読者を形容してのあなた)はその碑文らが言っていることと今日、明かされてきていることの一致性の価値を認めるうえで、**ドリールのそうした話の細部についていちいち認容する必要もないだろう。**

次の部が我々が議論の俎上にのせている主題と相関関係を呈している碑文にあつての問題となる部となる。

[古代アトランティスについて語りたまえ、影の王国たるありし日について語りたまえ、暗闇の子らの到来について語りたまえ。より強き力を欲せんとのため、彼ら暗闇の存在、地上の賢者より深淵の外へと呼び出されるなり]

[アトランティスのありし日より前に遡る往古、暗闇によって分かたれし者ども、黒魔術を用い、我々より下にある深淵からの存在を呼び出さんとした人間らがい
た。この世界の輪に彼らがやってくる時、彼らは別の振動領域に属して形な
さず、地上の者達には姿が見られずとの形にて存在をなす]

[かつて、彼らは彼らがやってきた場へと下ったマスターらによって征服された。しかし、思い出すべきは人間には知られぬ隠された空間、領域があることである。彼らはアトランティスに影として生き、時に人の間にその姿を現した。血が供されたとき、彼らは人の間に居を定めるべくも上昇してきた]

[人の形をなして彼らは我々の間を闊歩し、彼らはただ見かけ上、人間であるように見せたのだ。彼らは魔力が発露するとき蛇の顔を現した。彼らは人間の形をなして議会に入り込んだ。そうした者らはその秘法にて王国の首長らを殺害し、殺害した彼らの形をなし、全民衆を支配した。魔術によってのみ彼らは探知され、音によってのみ彼らの素顔は見られた。人間を破滅させ、そして、そちら領域より支配なすためのものとなっている影の王国にこそ彼らは見出される(以下略)]

(訳を付しての「再度の」引用部はここまでとする)

上のデービッド・アイク、海外ではその名が知れ渡っていると先にて表記の**[爬虫類人類支配説]**(との異説の)旗手の言いようは

[小説 The Shadow Kingdom 『影の王国』(1929) ⇒ (露骨なる相似関係) ⇒ 神秘家由来の「自称」古代碑文 The Emerald Tablets of Thoth (1939/欧州にて中世期より重んじられた錬金術関連書たる『エメラルド・タブレット』とはまた別もので影の王国からのアトランティスへの侵略を語るもの)]

との流れで指し示せる捏造 forgery を示唆する関係性に — 識見に欠けるところがあつたとの言い分も成り立ちうるかとも見るのであるが — 何ら言及していないとの「相応のもの」であること、本稿の先の段にて出典挙げつつ細かくも解説したわけではあるも(出典(Source)紹介の部 34 および出典(Source)紹介の部 34-2で解説したことである)、一見する限りは[稚拙なる捏造遺物 nonsense]と映る『第二のトートのエメラルド・タブレット』(人類の歴史にあつては文字というものが最古のものでも紀元前3500年にシュメール人に発見された楔形文字であるとされるところを、あまりにも無理矢理なるところとして神秘家なる人種「でも」解読可能なものとしての[三万六千年前に遡る碑文]なるものを登場させているとのことで当然に捏造遺物と言い切つて構わぬものであろうとの一品)について言及するうえでの論客デービッド・アイクのやりようについてはとにかくも、背面にて、そういつたところからして問題視されるべきところが「ある」。

その『第二のトートのエメラルド・タブレット』(なる神秘家による捏造文書)にまつわつて問題視される

べきところとは

「現時にあって「も」平家物語の異本たる『源平盛衰記』のついせんだって抜粋したような特定の下りは海外には全く知られてない節があり(本稿をしたためながら、インターネット全盛時代として古文書のオンライン上公開などが進んでいる現段階にあって『源平盛衰記』に関する英文情報がいかに出回っているか調べてみたのだが、龍宮にての老松および若松の下りをカバーしている情報は「英文では」見当たらなかった)、といった状況は1939年(神秘家モーリス・ドリールが解読したと自称していた『第二のエメラルド・タブレット』が出た折)にあっては尚更のことであつたらう」

ということに関わることである(「由来どうあれ」と一部書かれながらもデヴィッド・アイクに取り上げられるような捏造碑文をこさえたモーリス・ドリールという男が『源平盛衰記』の特定の下りを(英訳も見当たらない折に)参照したとは考え難い、とのことである)。

以上述べたうえで書くが、

[『源平盛衰記』の竜宮にまつわる(最前にて引用した)下り]

と

[デーヴィッド・アイクが引き合いに出している1939年発表のモーリス・ドリールによる贗造物(紀元前三万六千年という「自称」文書来歴からして信に値せぬもの)]

の間には[次のような類似性]が成立している(:話の奇怪性、そして、不快性がゆえに「成立してしまっている」と述べた方が至当か)。

(『源平盛衰記』(の最前にて引用した部)と20世紀前半に「捏造」されたとの紛い物である[アトランティスに対する影の蛇の王国からの侵略を扱うモーリス・ドリール版トートのエメラルド・タブレット](の直上にて内容紹介した部)の間にある純粋に記号論的な意味での類似性について)

1. 純粋に記号論的な繋がり合いの問題として[蛇の眷属が人界に紛れ込んで統治体を(望ましくはない方向で)操作しているとの話の筋立てを有しているとのことで両者 — 『源平盛衰記』引用部と『ドリール版のエメラルド・タブレット』 — の間には共通性が見て取れる
2. 竜宮(『源平盛衰記』に見る竜宮)は【海底にあっての都市】である。他面、アトランティス(モーリス・ドリール20世紀贗造物)は伝承にて【海中に没した存在】とされている。人の世に紛れ込んでいるとの蛇の眷属がそうした海中の都市と(一方は日本の古典にあっての「現在形で」海底のそうした者たちの住処であるとされ、もう一方は捏造物にあっての「過去形で」陸上に存在していた折に闇の世界より呼び出された者たちの住処となった場とされているわけだが)結びついているとの[設定上の共通性]が見て取れる
3. (より高度な観点から記号論的規則性につき詰めても述べるところとして)[トロイア崩壊]方式が採用されているとのことで両者には共通性がある。『源平盛衰記』では「奢る平家は. . .」何とやらと評されていた平清盛ら一党がその実の[滅ぼされることを念頭に動かされていた葉籠中の存在]として蛇の眷属たる幼帝・安徳の影響下にあり、意図されての戦乱を誘発するための具とされながら海底に引きづり込まれたと(問題となる古典『源平盛衰記』の一節では)されるが、

それは外側からものにはできなかつたものを[内破]させて入手、要するに、木製の馬で滅んだトロイア方式ともなっている(『源平盛衰記』では海底の竜宮の主たる大蛇という存在がいくらやっても宝剣が取り戻せなかつたがゆえに天皇として眷属を送り込んで騒乱を誘発し、それでもって宝剣を回収したと述べているとの記述が先に引用なした『源平盛衰記』にはみとめられる)。他面、ドリールの『エメラルド・タブレット』という贗造遺物ではアトランティスの崩壊が問題とされているわけだが、[アトランティスの崩壊]が(「であるから問題である」ところとしてモーリス・ドリールの捏造文書とは全く無縁なところで)[トロイアの崩壊]と言い換え可能なことは本稿で入念に摘示してきたことである——※本稿では20世紀初頭に至るまでのその事績から人類学領域の大家として認知されているジェームズ・フレーザーの蒐集・提示情報に基づきトロイアの創建伝説が洪水と結びついていること、また、スミュルナのクイントゥスの古典『トロイア戦記』によるところとして木製の馬による住民皆殺しの後の城塞トロイアの末路が[包囲勢たるギリシャ勢をも呑み込んでの大洪水による完全破壊]であったと表記されていることにつき(和文・英文にての出典該当部よりの原文抜粋をなしながら)解説している(出典(Source)紹介の部 44-3 から出典(Source)紹介の部 44-5 を包摂する解説部、および、出典(Source)紹介の部 58 から出典(Source)紹介の部 58(3) を包摂する解説部を参照のこと)。そこからトロイアは[ギリシャ勢との戦争の折、大洪水によって跡形もなく消え失せた都市]だったと表せられるようになったわけだが、アトランティスもまた[ギリシャ勢との戦争の折、大洪水によって跡形もなく消え失せた都市]でもあった(プラトン『ティマイオス』を引きあいに先に示していることである／出典(Source)紹介の部 36)。だけではない。欧州の一部識者に由来するところの歴史の見立てとして[アトランティス]の質的同等物が[黄金の林檎の園]すなわち[トロイア崩壊の原因になった果実の実る場所]と考えられてきたとのことも本稿では(具体的出典を明示しながら)問題視していることとなる(出典(Source)紹介の部 41)——

4. (より高度な観点から純・記号論的接合性につき詰めても述べるところとして) およそ[伝承伝播の類]では説明「できない」との関連性が『源平盛衰記』とモーリス・ドリールの贗造文書『第二のエメラルド・タブレット』の間には見受けられる。[ブラックホールの類を結節点とする結びつき]がそれである。龍宮については[時間が遅れての領域][[常世]転じての[常夜]と接合する領域]との観点から重力の怪物たるブラックホールの近傍領域と親和性が高いものであると先に論じている(出典(Source)紹介の部 75-2 および出典(Source)紹介の部 75-3)。他面、影の王国から侵略を受けたとの設定が問題となる文物に表出している[アトランティス](あるいはそちらアトランティスと記号論的に結びつくこと、本稿で立証に努めてきたとの[トロイア]「でも」いいが)は[加速器によるブラックホール生成挙動]と関わるころのものとなっている——先に既述のようにLHC実験に対しては「どういふわけなのか」それらがらみの命名規則が実験関係者によって用いられているとのことがある(出典(Source)紹介の部 35 から出典(Source)紹介の部 36(3) を包摂する解説部および出典(Source)紹介の部 46 を包摂する解説部にて先述のようにLHCに関してはブラックホール生成イ

ベントを観察するための装置としてのイベント・ディスプレイ・ツールに ATLANTIS の名が振られているといった側面が伴っている)——

5. (さらにもって純・記号論的接合性につき詰めても述べるところとして)『源平盛衰記』それ自体にあっては既述のように[龍宮]と[海女]と[五芒星形状の魔除け]([セーマン]と海女に呼びならわされてきたとされるもの)の関係性にまつわる記述は何ら見受けられ「ない」ようになっている——(『源平盛衰記』での海女らは代わって法華経を竜宮の領域に進入するうえでの[魔除け]として用いている)——のだが、そうもある中で現時、口伝口誦との形態で語られるところの[職業的潜水夫・海女には[竜宮]に引き込まれるのを防ぐ魔除けとしてセーマンという五芒星形状の魔除けが用いられてきた]との言われようを複合顧慮なすと、「あまりに多くものことが龍宮とアトランティス絡みで結線する」ことになりもする。

すなわち、(ここに至るまで厭となるほどに詳述してきたことであるからできるだけ簡潔な式に留めたいとは思いつつも書くのだが)、以下の各観点での結びつき「も」が問題になる。

→

・「奇怪なことに911の質的事前言及小説となっていると(出典 (Source) 紹介の部 37 から出典 (Source) 紹介の部 37-5 を包摂する解説部でもって指摘している)との『ジ・イルミナタス・トリロジー』という作品がここにて問題視しているモーリス・ドリールの手になる20世紀前半に捏造されての文物と同様に[アトランティスの蛇人間による侵略]との要素を具備した作品「とも」なっており(出典 (Source) 紹介の部 38 にて典拠紹介. 表層的には『ジ・イルミナタス・トリロジー』『も』パルプ雑誌掲載小説『影の王国』及びその作者ロバート・ハワードの影響を同文に受けているとの言われようがなされる所か)、かつ、同作『ジ・イルミナタス・トリロジー』、[五芒星形状の魔除け]ともつながる[(五芒星形状と永遠に続く相互内接関係にある正五角形を用いての)正五角形形状の魔除け]としてのペンタゴンがアトランティスおよび現代アメリカにてそれぞれに破壊されるとの設定を具備している作品「とも」なっている(出典 (Source) 紹介の部 38-2)」

・「直上より再度言及の『ジ・イルミナティ・トリロジー・シリーズ』については[正五角形を異界とのゲートにしている作品]・[トロイアの寓意と結節している作品]・[911の事前言及要素を具備している作品]としての各側面からカール・セーガン小説『コンタクト』という作品と接合している、すなわち、[正五角形を12面重ねての彼方外宇宙とのゲートを描く作品]・[トロイアの寓意と結節している作品]・[別の911の事前言及作品(キップ・ソーン『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』)と通過可能なワームホール概念にまつわるやりとりを介して接合する作品]としての要素を具備している小説『コンタクト』と接合しているとのことが申し述べられるようになっており、そうもして『ジ・イルミナタス・トリロジー』と接合しもする『コンタクト』という作品、カー・ブラックホールや通過可能なワームホールの人為生成を主要テーマとしているとの作品となる。そして、カー・ブラックホールやワームホールを現実世界で生成する可能性があると近年考えら

れるようになったのが(直近にあって「も」再述しているように)[アトランティス]との命名規則と「どういうわけなのか」結びつけられているLHC実験であるとのことがある。であるからその伝、『ジ・イルミナティ・トリロジー』および[五芒星・五角形と退魔の象徴の関係性]のこたを留め金にしての伝でも[龍宮と蛇の眷族の権門の乗っ取りの描写を含む『源平盛衰記』]と[アトランティスと蛇の眷族の権門の乗っ取りの描写を含むモーリス・ドリースの荒唐無稽な捏造碑文]が結びつくようになっていると述べられる

以上のような[相互関係性]がそこにみとめられるとのことは決して軽んずべきことではない。[相互関係と因果関係は異なる]とは言われるものだが、「当然に」そのように(決して軽んずべきではない)とこの身はとらえている。何故か。これまた再三再四、述べもしてきたことなのだが、次のことがあるからである。

[加速器のブラックホール生成にまつわる予見事象 —この場合の予見事象とはそうしたものが存在していることが「時期的に不可解である」との筋目の事柄を指す—]が現実に存在しており(後に再度、取り上げることにする『リアンの剣』など)、それらにあってどういうわけなのか

[爬虫類の異種族の来臨・来寇]

との特性が多く[文献的事実]として介在しているとのことが目立って見受けられるようになっており、またもってして、(本稿にてさらなる傍証事例を後の段にあって挙げ連ねることを念頭に一例呈示してきたとの)[911の事件の発生にまつわる予見事象]に関して「も」、一部、同文のことが当てはまるとのことがある。

そして、そこにいう[加速器のブラックホール生成にまつわる予見事象]および[911の事件の発生にまつわる予見事象]が[黄金の林檎]及び[ヘスペリデスの園(黄金の林檎の園)]と同一視されもしてきたアトランティス]を媒介項に結びついていること「も」がまたもってしてある

との[客観的事実] (話柄奇矯なれどもそうだとしか表しようがない現象・関係性がこれはこうでこうだと容易に後追い出来てしまうとの式で厳密に指し示せてしまうとの意での[客観的事実]／仮にそれが生き死にに関わるものであるのならそうしたものを無視する個体ないし群体は「生きる能力を奪われているほどに」狂っているとしか表しようがないとの筋目の事実) がそこにある

直上表記のことと複合顧慮すべきところとして

[龍宮と蛇の眷族の権門の乗っ取りの描写を含む『源平盛衰記』における記述内容] (つい先ぞ原文引用なしでの部)

および

[アトランティスと蛇の眷族の権門の乗っ取りの描写を含むモーリス・ドリースの荒唐無稽な捏造碑文に見る記述内容] (つい先ぞに知られているところの内容解説しての部) の間に「多重的」記号論的一致性が存すること

を軽んじざるべきところの理由について続いての部にて[振り返りなしながらもの訴求]を本補足部でもなしておく所存であるが(それがための本補足部でもある)、「だがもってまずはその前に、」蛇の眷族による乗っ取りの式に相通ずる主張展開をなして物議を醸しているとのデヴィッド・アイク説(本稿の前半部でもその主張内容について幾分細かくも筆を割きもしたとの英国の著名論客に由来する説／「人類の支配者は爬虫類人である」とするとの説)およびここ最近のデヴィッド・アイクやりようにまつ

わっていくつか注記なしでおきたいことを(かなり微に入っの式で)書き記しておくこととする — そうすることも必要であろうとの観点にて、である—。

さて、本稿の先の段でも述べたところだが、再度強調、ここにて述べたいところとして、

「本稿筆者はデービッド・アイクという人物 — [爬虫類人支配説] (そちら細かくもの内容については [出典\(Source\) 紹介の部 34](#) に先行する前の部にて詳述を加えているとの本稿前半部内容を参照されたい) という説、ある種・ある部分に限っては尤(もっと)もらしい側面を同伴った説の展開をなしつつも、そこにて多く [正しくはなき論拠] ([どこそれになにそれとの[記録]が遺っている] / [どこそれになにそれが[ある]]) といった[文献的事実][記録的事実]の問題を実際とは異なる方向に歪めているとのところが(数多)顕在化してのあやまてる論拠) によって成り立っているとの側面が残念ながらありもし、かつ、そのシンパ・追従者に多く [情報操作要員と受け取れる者ら] (実体としてはこの世界に五万といる傀儡(くぐつ) ないし唾棄すべき無責任の徒にすぎなくとも外表としては[情報操作要員]と受け取れるが如くの者達) が含まれていると見受けられる人物 — の妄信者などでもないし、そのやりように賛同している者でもない」

とのことがある (: ただもってして本稿筆者からして一時期、デヴィッド・アイクの憎めないキャラクターやそのセンセーショナルな申し分にすっかりまいりもし、彼は傑物だな、とっていたこともあった。今では清濁あわせて呑み込みすぎる節があるとの彼の特性がどうかとよもって見えるようになったこと、また、自身の知識深化にて次第次第に「あまりにも胡散臭いところがある」と見えてきたとのことがある、そういう意味でデヴィッド・アイクにはがっかりとさせられることが実に多いのだが、「従前心証のことを述べれば、」そういったことがあった)。

さらにまたもってして述べるも、デヴィッド・アイク申しようの式、問題が [新世界秩序] の完全なる実現・人間の完全なる家畜化の確保のみが [最終目標] であるとのことに収斂しているとの言い様の伝(いわゆる New World Order Conspiracy 「Theory」 [新世界秩序陰謀「論」] の系譜に連なる言い様をなしているとのありよう) を望見した上でそちらについては極めて問題がある [誤り] (そこに恣意があるのならば [悪辣な虚偽] である) と筆者は考えるに至っている。

その点、[歴史的記録] の問題としていかに馬鹿げたこと (少なくとも [歴史的記録登場以後、有史以後からの根底からの人形劇の世界] でなければそういうことはなかろうと思えるぐらいの馬鹿げたこと) が我々人間の世界で歴年具現化してきたのかを分析してきたうえで、また、[徹底完全に機能しているディストピア] (監獄社会) は現状にても [無痛収容所; ペインレス・コンセントレーション・キャンプ] (先進国) および [明確に具現化しての苦痛の収容所] (北朝鮮や中国(にての一部側面) に見る尊厳軽視国家ら) の問題として [魂の隷従者] (とでも表すべき人間一般) を用いて [歴史的にずっとそこにあり続けた] ものである、[未然形・未来形] ではなく [過去形・現在進行形] (英語的表現の have beening、 「であり続けている」との完了進行形との方が適切か) の問題として [今に至るまでそこにあり続けたものである] と判ずるに至っている人間として

[究極的なディストピア(監獄社会)の実現が目的だが、[これからそうもなる]との超常の力に人間が目覚めた時、ディストピアは崩壊せざるをえない]

などとのことを意固地に述べ続けているとのアイクをして筆者はそれなりの見方でもってしてとらえる — はきと述べれば、あまりにも白々しかろうとの見方でもってしてとらえる — に至ってしまっている (: たとえば、これよりそこより [あまりにも問題となる] との記述内容を引くとの **HUMAN RACE GET OFF YOUR KNEES The Lion Sleeps No More** との近年の著述にてデヴィッド・アイクは “The Reptilian manipulation is going to be ended, but it is not as simple as just sitting around and watching and waiting for it happen. We all have much to contribute and the more we do, the less traumatic this transformation will be as the world made manifest from the Schism is replaced by one made manifest from balance and

harmony. The foundation of everything that is happening now is the energetic change that I call the 'Truth Vibrations' - the quickening.” (拙訳として)「レプティリアン (訳注:爬虫類人とアイクが呼ぶ存在) の操作は彼らがいくら統制を強めようが終わりを迎えようとしている。だがしかし、ことはそれが起こるのをただ座って傍観し待っていればいいというほどに単純なことではない。我々全員がよりもってそれに貢献できるだけのことをなす、そうすれば、より多くのことがなせるようになる、[分離] (訳注:アイクの言うところの肉体コンピューターの全一状態からの分離) の状況にて明確化させられている世界からバランスと調和の一(ワン)なる方向にて明確化させられている世界への移行の状況をより悲劇的ではない方向になせもするのである。現在起こっていることのすべての基礎にあるのはわたしが[トルース・バイブレーション] (真実の波動) と呼ぶエネルギー的移行、すなわち、再活性化である」(訳付しての引用部はここまでとする) といった言の葉を —「考えるのではなく感じて壁を壊すのだ」「理性ではなく直感にて感じ、それで訴えるんだ」とする式で— 明朗なる根拠なくにそればかり持ち出しているとのデーヴィッド・アイクという人物をして筆者はそれなりの見方でもってしてとらえるに至ってしまっている)。

(そうまでは書きたくはなかったのだが) よりもって言えば、彼アイクは悪い意味で

[ゲオルギー・ガボン神父] (帝政ロシアの末期、世界史の教科書にも載せられているような血の日曜日事件が発生する契機となったデモを率いていたとの人物/後述するが、帝政ロシアの当局秘密警察の[不満分散(ガス抜き)のためのエージェント]であったとの説が広くも語られているとの歴史上の人物)

のような存在ではないのか、もっと言えば、

[人間を諷刺しての内容を帯びているジョージ・オーウェル『動物農場』に登場してもしている動物農場のカラスによって擬人化される(ガボン神父のような)存在] (そちら意味合いについて「も」すぐに記す)

なのではないかと —アイク個人の悪意の有無はさておきも— 濃厚・如実に見立てるに至ってしまっている(そうした見方の押しつけは断じてしないが)。

その点、[読み手貴殿が操作をなす存在であったらばどうか]との観点で考えてみて欲しいものだが(このような世界の表面皮相なる側面、たかだかもそのこですら切った張ったに近しい状況に何度か追い込まれたこともある人間として相手の立場に立って考えるとの[想像力](およびそれを支える情報収集)は何よりも重要であろうと筆者は常日頃思っている)、誰が何のために[惨憺たる歴史]を歩んできた、いや、歩まされ続けてきたとの節ある種族(実体としてどうかは分からないが、その歩みには少なくとも宗教戦争・宗教迫害の歴史から20世紀の酸鼻を極めたイデオロギー・イデオログなる新たな演出装置を持ち出しての社会主義と国家「社会主義」の災厄に見るありように至るまで[愚劣さ]がとみにみとめられるとの種族、そう、我々、人類)を今更もってして

[完全家畜社会(なるもの)]

に閉じ込める必要があるというのか。

そして、そうした[未来の家畜化社会]の徹底化をなさしめるとの企図がなされているなどとデーヴィッド・アイクのような向きに強弁される中で、だが、一方でこの世界に[望ましいものに変異変容を呈しつつある]と一方的に言い切れるだけの曙光が射していると言えるのか。

その点についてからしてよく考えていただきたいものではある(：筆者としても人間の認識ありようが部分的に変わりつつあるのではないかとときには考えもするのだが、それははきと行ってしまっ、表層的にそう「見える」だけなのかかもしれず(最悪、幻影にて生じさせしめられた[気の惑い]かもしれない)、またもってして、「終わりが近い中での締め付け弛緩のありように希望的観測を抱いている」とのところにすぎぬとの可能性をも念慮している)。

その点もってして本稿筆者としてはアウシュビッツ —比喩的に表してのアウシュビッツ— はどこまでいっても[仮の宿り]であって、はなからそれは[恒常的運用を企図して構築されているもの]ではな

い、であるから、そこに収容されている対象(我々人類)を —そこから絶大な何らかの効用が得られるのならばいざ知らず— わざわざ手間と設備を割いてよりもって強くも留め置く意味などは「ない」と判じられる(だけの[論拠]がある)と申し述べたいのである。

他面、これまた極めてもってして遺憾かつ憤懣やるかたなしのところとして、

[今まで目的尽くで育て上げた(ようである) —高度人工知能などを用いて間接的統治なさしめながらか?とも判じられる式で目的尽くで産業的に育て上げた(ようである)— との悲劇の養殖種に終わりをもたらすとの [意図] がそこにある]

との[兆候]は「露骨にある」との式で指摘できるようになってもある(：本稿はそこにいる[兆候]が具体的にどういうものなのか細かくも摘示するのことに趣意としているのものであり、またもってして、本稿を最後まできちんとお読みいただければお分かりいただけようが、考えられるところの究極的目標が何であると察せられるのかとのことについて「も」いくつかの具体的可能性論を呈示せんとするとのもの「でも」ある —目標の中身は人(ひと)である筆者を含めての人間にはいかに意志と理性の力を投入して突き詰めて見ても[推察する]ことしかできぬが(筆者念頭にはもう何年も前から自身が相対取材した物理学者などにその内容を折に触れて確認してきたとの The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the Dead (1994)『不死の物理学』(現時未邦訳)との著作内容にあつての[反対解釈可能性]の問題があるのだが、本稿で後に懇切丁寧に詳述を重ねての詳述をなす所存であるとのそうしたことも含めて[目標の中身]の分析は推論以上のものとしてなすことはできない)、ただもってして、[兆候]が既に「それをなさねば明日はない」との式で「対策を是が非でも要求しているとの水準」に至っていることは明言できるところとなっていると申し述べておく(筆者には非建設的な印象論(情報操作要員の類がそればかりを前面に押し出そうとのものである)を吹くなどの腹づもりはまったくなく、何度も何度も同趣旨のことを申し述べているようにリアリストとして「それで行動しないようならば明日はない」との水準での具体的論拠を挙げ連ねての具体的警告をなそうと—にも二にも考えて本稿をものしている)——)。

さて、このような世界で[新世界秩序]こそが最終目標である(だが、それは超常的な力に人類が目覚めた時に瓦解する定めにある)と強くも論じたてているデヴィッド・アイクが

[ゲオルギー・ガボン神父(の名でもってして寓意的に表せられる存在)]

である可能性があるかと触(さわ)る程度に上にて述べもしたが、そも、そこにいうガボン神父とはどういった存在か。

日本の高校で用いられる世界史の教科書 —偽りの世界の[縦軸](史的時間軸)の偽りの成り立ちを刷り込むためのものであるかもしれないが、とにかくもの世界史の授業に供される教科書— にも彼ガボン神父の名前が[歴史上の人物]との式で記載されていたかと記憶するが —曰く「ガボン神父はロシア革命の強くも契機となった血のメーデーと呼ばれる事件、同事件に繋がった行進を煽っていた聖職者である」云々—、彼ガボンは(今となつては愚にも付かぬものにすぎぬかと判じるに至つてもいるのであるも、かつてはこの身も理想的美風のひとつの形態の描出文物との観点にて愉しんだ)司馬遼太郎のヒロイック歴史小説『坂の上の雲』(「虚偽で満ち満ちた現実世界の惨憺たるありよう」をいわゆる[司馬史観]式で美しくもすべくも潤色に潤色を加えているといった筋目の作品)なぞにも同じくもの趣旨の記述が簡単になされているとうろ覚えするところとして、

「当局サイド(帝政ロシア)の運用するスパイだった」

との観点が呈されている向きともなる。

その点についてはロシアという国の歴史に詳しい識者には次のことが知られているところとなっている。

「帝政期ロシアの帝室秘密警察オブラーナことロシア帝国内務省警察部警備局。彼らオブラーナはユダヤ系が世界征服を企んでいるとの筋立ての『シオン賢者の議定書』を贋造した(と専らに言われている)。そのやりようから帝室の統治に望ましくないうえに民草(19世

紀後半の農奴解放後も知性・教養を与えられる余地もなくまさしく獣畜に準じたもののように扱われたがそれでも帝政に背く潜在力はあると見られていた民草) の不満・攻撃の対象を逸らすとの [ガス抜き] に利用できると判じたユダヤ系勢力 (日露戦争時に大富豪ジェイコブ・シフ(明治期の勲一等の勲章の受賞者でもある)が日本側に多大な援助をなす、またもってして、帝政ロシアを打ち倒すことを企図していた革命勢力に助力するなどのことをなしていたことが[史実]として知られているように帝政ロシアに含むところが大きくなることとしてあった、[ポグロム](帝政ロシアが[ガス抜き]のために利用しもしていた虐殺を伴っての反ユダヤ主義)との兼ね合いで含むところが非常に大きかったとされる民族集団ユダヤ系) に対してそのマス・パワー (確たる資金力に裏打ちされたマス・パワー) を削ぐとの意図もまたあってユダヤ系陰謀文書(シオン賢者の議定書)の証拠を「贋作」したといったことをやったとされる一方で彼らオフラーナは帝政の脅威たりうる [革命分子] へと傾きかねない大多数の無産階級 (恒産なければ恒心もなしではないが知識がない中ながらも風が吹けばそれになびきうるかもしれないとの悲惨なる状況に置かれた階級) の不満を比較的穏便な式で別側面にあって分散させるべくも体制側工作人員(および御用組織)を運用しており、他ならぬガボン神父もその一人である(とされる)」

(果たしてそこまでする必要があるのかと判じもするところながらも同じくものことにまつわっての目につくところの表記を挙げておく。英文 Wikipedia[Okhrana]項目の表記では

(以下、引用なすとして)

“ The Okhrana tried to compromise the labour movement by creating police-run trade unions, the practice known as zubatovshchina. Of note is the Bloody Sunday event, when imperial guards killed hundreds of unarmed protesters who were marching during a demonstration organized by Father Gapon, who was alleged by the Bolsheviks to have collaborated with the Okhrana, though in fact this was unproven, and Pyotr Rutenberg. Other controversial activities included alleged fabrication of The Protocols of the Elders of Zion hoax (many historians maintain that Matvei Golovinski, a writer and Okhrana agent, compiled the first edition on the instructions of Pyotr Rachkovsky) and fabrication of the antisemitic Beilis trial. ”

(補って訳すとして)

「オフラーナ(ロシア帝国内務省警察部警備局)のやりようとしては秘密警察主導の御用組合を創出したとのことがある、ガボン神父 —彼はボルシェビキ(革命勢力)に立証されざるところながらもオフラーナと協働していたとされている男だが —、同ガボン、および、ピンハス・ルーテンベルグ(注:ガボンとの活動の後、転向し、ユダヤ系銀行家らと紐帯を組んでイスラエル建国運動に注力したとされるガボン神父のオフラーナ後押し)の御用労働運動時代の同士)に組織化され非武装の抗議者ら抗議行進の中、皇宮防衛隊が何百人もの人間を殺害することになった[血の日曜日事件]に通ずることになったとの歴史的注釈が付く彼ら警察主導の御用組合を創出することで労働運動との妥協を試みもしていたとのことがある(とされている)。またもってして秘密警察オフラーナの物議を醸してのやりようとしては(ユダヤ人の一部勢力が世界制覇を企んでいるとの)『シオン賢者の議定書』に見る虚偽体系を贋造したとされることである」

(引用部はここまでとする —※1 尚、ガボン神父が秘密警察オフラーナ設立の組合を利用して頭角を現わしていったことまでは事実と断ずるウィキペディアなどの媒体の他所記載も目立ちもする。 ※2 オフラーナが[シオン賢者の議定書]の偽造元であると強くも言われているのはオフラーナの幹部ラチュコフスキーのパリでの動き、そして、シオン賢者の議定書が(決議文との体裁を採っているのに)なぜなのかそれ以前に世に出ていたナポレオン三世の世界制覇の野望に対する諷刺物語『マキャベリとモンテスキューの地獄での対話』との伝説文献を加筆した

「だけ」といった特性を強くも帯びている「ロシア初出文献」(ポグロムが吹き荒れていたロシアにてのロシア初出文献)であるとの露骨な特性ゆえであると語られるところである。ただし、現実にはガボン神父が帝政ロシア秘密警察によって帝政時代、完全にコントロールされていたエージェントと言えるのか、後にガボンは叛意を呈する(自身に発砲した当局に明確な叛意を呈する)ようになるもそれでも結局スパイと疑われて同じくもの革命勢力に暗殺されたとされることを含めてどこまで真実かは判断が難しいところである—)。

さて、ガボンのような人間が体制(19世紀後半の農奴解放後も獣畜に準じた人格権伴わぬ存在として扱われていた大衆と富を湯水のように自由に出来た一部の王侯貴族に二極化していた[アジア的専制君主国と欧州先進文明の合の子]と形容されてもいた帝政ロシア)側の不満分散のために使役されていた走狗らしいとされる中で最終的に成就することになったロシア革命のその結果が

[新たに台頭した権力亡者(彼らとて彼らが「放伐」した旧体制支配者と同文に[糸繰り人形]だったと本稿筆者は考えているのだが、とにかくもの権力亡者)の圧政志向と疑心暗鬼によるあまりにも多くの人間の酸鼻を極めた「極々短期間で」投獄・拷問・虐殺のプロセス]

であったとのことは歴史通にはよくも知られていることである(：一般教養の問題にすぎないし、専門的解説書から引用なすとの手間は時間的に割けないとの理由からそこよりの引用をなすに留めるが、例えば、和文ウィキペディア[大粛清]項目に(以下、引用なすところとして)“ソビエト連邦共産党内における幹部政治家の粛清に留まらず、一般黨員や民衆にまで及んだ大規模な政治的抑圧として悪名高い出来事である。ロシア連邦国立文書館にある統計資料によれば、最盛期であった1937年から1938年までに、134万4923人が即決裁判で有罪に処され、半数強の68万1692人が死刑判決を受け、63万4820人が強制収容所や刑務所へ送られた。ただしこの人数は反革命罪で裁かれた者に限る。ソ連共産党は最も大きな打撃を受け、旧指導層は完膚なきまでに絶滅された。地区委員会、州委員会、共和国委員会が丸ごと消滅した。1934年の第17回党大会の1966人の代議員中、1108人が逮捕され、その大半が銃殺された。1934年の中央委員会メンバー(候補含む)139人のうち、110人が処刑されるか、あるいは自殺に追い込まれた。1940年にトロツキーがメキシコで殺された後は、レーニン時代の高級指導部で生き残っているのはスターリンだけであった。また大粛清以前の最後の党大会(1934年)の代議員中わずか3%が次の大会(1939年)に出席しただけであった。1939年の党の正式メンバーのうち、70パーセントは1929年以降の入党——つまりスターリン期の入党——であり、1917年以前からの黨員は3%に過ぎなかった。党の討論機関たる大会と中央委員会は——終には政治局さえも——1939年以後、スターリンが1953年に死ぬまでめったに開かれなくなった”(引用部はここまでとする)と記載されているようなところである——尚、このような世界で[理想的社会の計画運用]などのごとを[人間存在の腐敗性向]を無視してごり押ししたソ連にての大量虐殺の実行役となった秘密警察(スパイ組織)の首脳が異常なる個人的殺人行為愛好者であったとされる(少女らを拉致しては強姦して、後、殺してその死体を庭先に埋めていたなどと旧ソビエト内外で語られ報じられている)とのことについては[ラヴレンチー・ベリヤ]にまつわっての報道のされようなどを調べれば、すぐに成程と思わされもしようところとなる——)。

そうもした[「革命」の惨憺たる帰結]のことを聞き及んでいた、仄聞するとの式でよくも知っていたとされるかつての革命の闘士、革命義勇兵なるものとしてスペイン内戦に参加して

[革命勢力(首謀者ら)の理想の表看板に隠れて自分達のことしか考えぬとの[醜すぎる内面]の問題]

に失望させられきってスペイン内戦参加時のルポルタージュ(『カタロニア讃歌』という作品)に胸のうちを反映させていた作家のジョージ・オーウェル—彼、ジョージ・オーウェル(本名エリック・ブレア)はディストピア(監獄社会)諷刺小説の金字塔として知られる『1984』という小説の作者でもある—はアニ

マル・ファーム、[(貪欲の象徴でもある)豚に主導されての家畜小屋にあっての人間に対する叛乱]の帰結を扱った寓意小説として **Animal Farm** 『動物農場』との作品をものしている。

同作、『動物農場』では

[(ガボンがそうであったような)ロシア聖教の聖職者ら]

が

[現実から遊離した夢物語ばかりを語る動物農場世界でのカラス Raven のモーゼス (なるキャラクター)]

に仮託されて登場してきている (:和文ウィキペディア [動物農場] 項目にあっては(以下、引用なすところとして)“モーゼス:カラス。まだ家畜達が蜂起する前の農場にて、御馳走が食べ放題の天国の存在など沢山のユートピア神話・都市伝説を吹聴し、困窮する家畜達に希望を与える半面、現状打破の意欲も削いでいた為、スノーボールやナポレオンらから疎まれ続けていた。モデルはロシア正教会とその神父達” (引用部はここまでとする)と表記されているところであり、英文 Wikipedia[Animal Farm] 項目にあってはカラスのモーゼスについて “ The raven "was Mr. Jones's especial pet, was a spy and a tale-bearer, but he was also a clever talker." Initially following Mrs. Jones into exile, he reappears several years later and resumes his role of talking but not working. He regales Animal Farm's denizens with tales of a wondrous place beyond the clouds called "Sugarcandy Mountain, that happy country where we poor animals shall rest forever from our labours!" Orwell portrays established religion as "the black raven of priestcraft -promising pie in the sky when you die, and faithfully serving whoever happens to be in power." Napoleon brings the raven back (Ch. IX) as Stalin brought back the Russian Orthodox Church. ”と表記されているところである)。

[耳に聞こえはいい] との実現論拠がないとのこと (『動物農場』的に言えば、Sugarcandy Mountain [キャンディーが山なす理想郷] なるもののこと) ばかりを口にし、現実にそこにはきとある問題についてきちんと取り上げないどころか、現実の状況悪化の側面を [全く異なる似姿目分量] へと誘導して認識「させない」ようにしているとの者がいたらばどうか。その者固有の悪意の有無は別として、オーウェルの『動物農場』におけるカラスの問題が何故、観念できるかお分かりいただけるであろう (そのカラス本体に悪意があるか否かは問題ではない。またもって述べておけば、[カラス]を影から支えているのが北朝鮮や旧ソ連にての酸鼻を極めた尊厳圧殺に積極的ないし消極的に与ししようとの筋目の人間ら、[おのれ一人の浅ましい現世での逸楽安寧]を対価に[望ましき未来]を悪魔に売り払ったが如くの筋目の自己中心主義者の人間らや同文に同じくものこともやろうとの甚だしくもの臆病者らや愚かさ際立つての自己欺瞞者らであるというのならば尚更もって救いようがない ——それを[最終目的]を帯びて動いていると判じられもする上位存在らが傍から見て[(彼らが皆殺しにすると露骨かつ執拗に前言・予告し続けている対象である)人間存在]の愚劣さを嘲笑っているのならばさらに輪を掛けて救いようがない——)。

以上、申し述べたうで、である。

海外で極めて目立つ位置にあるとのデービッド・アイクの

[[失望させてくれる] とのやりよう]

について具体例を挙げることとする (:「人類の帰趨の問題に[具体的証拠] (これまで羅列しもしてきたし、これよりも重み付けの問題から羅列していくとの具体的証拠)を伴って関わるものである」と強調したき本稿にての摘示内容と矛盾することをデービッド・アイクという男が数多「不適切極まりなくも」「衆をたばかるように」広めているとの経緯があるからデービッド・アイクの衆目に付きやすくなっている [[失望させてくれる]とのやりよう] について具体例を挙げることとする)。

本稿で「まさにそれこそが我々の運命を決するものである」との [兆候] が多重的に存在するとのことを「証拠に依拠して」取り上げているワームホールやブラックホールの生成問題 (LHCあるいはそ

の事後加速器にプラスアルファの外的要因(ここではない他なる領域よりの重力波などの外的要因)が介在した場合に具現化しようと考えられるところの問題)と何ら平仄が合わぬとのことらとしてデービッド・アイクの最近世に出た著作、

Remember Who You Are Remember 'where' you are and where you 'come' from (本稿執筆現時、未邦訳。原著は「2012年」著作権表記、『自分たちが何者でどこにいるのか、そして、どこからきたのか、思い出せ』と「二重語法;ダブル・ミーニング」がかってタイトル訳されもするとの著作。本稿を公開することとしたサイトの一などで筆者がなんともってしての情報提供を試みだした「後」に出された著作で大要、[月を介しての爬虫類人の操作の究極的な中心地は土星(英語で述べるところのサターン)にある]との内容を有しもしているとの書籍)

からして筆者が[欺瞞性に眉をひそめさせられることになった表記]が含まれているとのことがある(のでまずもってそのことを[人間存在を嘲笑うやりよう]に対する怒りを込めて問題視することとする)。

それにつき、どこがどう問題になるのか、ここ補足部では(極めて重要なところで欺瞞の最たる物言いが見受けられるとのことで)細かくも指摘しておくこととする。

さて、後にて解説する筆者それ自体の「従前」指摘事項(土星神格化存在サトルナスにまつわっての指摘事項)との一部内容一致性を帯びもしている(後述)とのものでもあるデービッド・アイクの近著、Remember Who You Are Remember 'where' you are and where you 'come' from にあつては

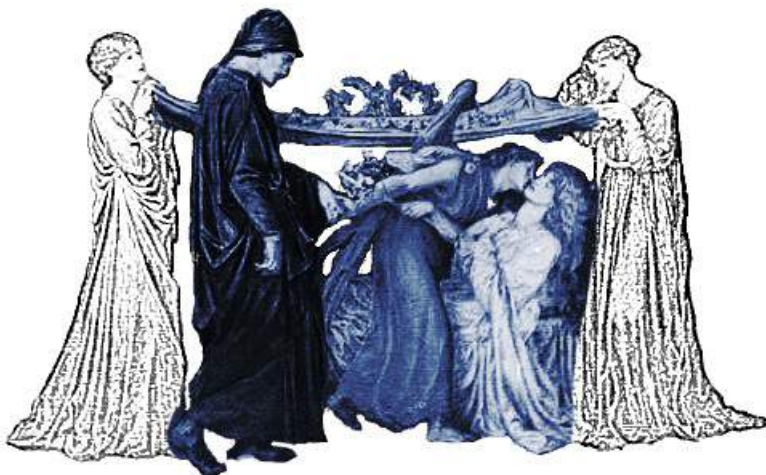
[LHCは「高周波活性オーロラ調査プログラム」と接合するところとして運用されている人間の覚醒を阻むための洗脳装置である]

などとの「断定」がなされている(下の出典(Source)紹介の部88を参照のこと)。

出典(Source)紹介の部88

SOURCE

88



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典(Source)紹介の部88にあつては、

[論客デヴィッド・アイクが近著に至るまで [LHC は [高周波活性オーロラ調査プログラム] と接合するところとして運用されている人間の覚醒を阻むための洗脳装置である] などの主張を流布している]

このことの典拠を原文引用にて示しておくこととする。

(直下、Remember Who You Are Remember 'where' you are and where you 'come' from の p.405 - p.406 にての [Reptiles on the barricades] よりの [paranormal: 超常的] かつ [incorrect: 不正確な] との側面が強くも現われた (と指摘したき) とところよりの一部原文引用をなすとして)

The Reptilians and their human hybrids have been preparing for the challenge of the Truth Vibrations, and that is the magor motive behind HAARP.

[...]

The Saturn-Moon Matrix operates within a certain frequency band and open our minds beyond that band the less we are influenced by the transmissions. There was little danger of that before the Truth Vibrations began to open minds, and the Reptilian Aliance has been preparing to resist this change that would bring their house down. This is why, at the very point that humans are demonstrably awaking we are being hit by what is described in this book. They needed to increase the level of mind and emotional suppression to stop people expanding awareness beyond the confines of the Suture-Moon Matrix. **HAARP and associated technologies are a Matrix support system on Earth manipulating the energy field with which we interact. CERN's Large Hadron Collider is involved in this, too, along with what is happening in the vast and interconnected underground bases and cites and those inside gouged-out mountains.**

(補つてももの訳として)

「レプティリアン (※注: 爬虫類人 / デヴィッド・アイクがその遺伝子的に調整された [憑依] に適しているとするハイブリッドを用いて人類を支配していると主張する存在) および彼らの人間レベルのハイブリッドはこの「**真実の波動**」 (※注: 現行アイクが目立って主張しているとの言いよりの伝では [銀河系より飛来する覚醒を促す波長] とのこと) **に対する準備をなしており、それが HAARP** (※注: 先に EISCAT (the European Incoherent Scatter Scientific Association) の解説に絡んでその解説もほんの少しなしたところなのだが、HAARP とは [High Frequency Active Auroal Research Program] こと [高周波活性オーロラ調査プログラム] の略称でアメリカ合衆国にてアラスカ大・空海軍・DARPA の共同研究として高周波を大気圏上層に投射し無線に対する影響を調べるとの名目で実施されているプロジェクトであるが、一部にてビームを生成してそれを兵器に転用する等等の陰謀論が取り沙汰されているとのものでもある) **の背後にある主たる動機である。**

… (中略) …

[土星および月のマトリックス] (※注: デヴィッド・アイクが 2012 年に刊行された書籍より土星との要素を加えて主張しだしたことなのだが、アイクによると、[月と土星の双方が人間に幻影を見せるシステムの中核となっているとの申しように依拠しての映画『マトリックス』の幻影世界の操作手法] に対して [土星および月のマトリックス] との表されようがなされている) は [特定の周波数] の下で機能し、その周波数帯の外側に「開かれた」我々の精神がある場合には我々の精神は一層、(マトリックスを規定する) [送信行為] よりの影響を受けに

くくなる。が、[真実の波動]（※注:現行アイクが目立って主張しているとの
言いようの伝では[銀河系より飛来する覚醒を促す波長]とのこと）が我々の
精神を開こうとすることにはまったくもって危険はなく、他面、レプティリアン共
同体は彼ら、その王朝を凋落へと導きうるとのこの変化に対する抵抗の用意を
なしているのである。本書に述べているこの真実の波動に我々がさらされて
いるとのが我々人間が目覚まさんとしているまさしくの理由となっている。

彼ら(爬虫類人)は[土星および月のマトリックス]の制約を超えての知覚の拡大を阻止すべく精神および感情に対する抑制のレベルを高める必要を感じている。HAARP および関連技術は我々と相互作用するエネルギーフィールドを調整するための地球に存在するマトリックス補助システムである。広大かつ相互結合している地下基地らと関連用地(山中に穴を穿たれてのものらを含む)の中で行われていることと共に CERN のラージ・ハドロン・コライダー(LHC)はこれに関わっているのである]

(訳を付しての引用部はここまでとする)

上はデヴィッド・アイクの近著(2012年刊行の Remember Who You Are Remember 'where' you are and where you 'come' from)に見る主張だが、彼アイクは先行して世に出ていた2010年初出の著作、本稿筆者が2009年下半期に出版社に手渡ししていた著作 — 初版数千部での商業出版とあいなる筈だったところが「常軌を逸しているにも程がある」との経緯にて出版頓挫(および望まぬかたちでのトンデモ化しての大手などよりの代替出版の提案)に事態収束したとの著作 — の内容との近似性との絡みで着目するに至っている(「実にもって不快ながら着目せざるをえなくなった」でもいい)との著作、

HUMAN RACE GET OFF YOUR KNEES The Lion Sleeps No More (2010)

からして[同文のこと]を強調している。

にまつわっての引用も下になしておく。

(直下、HUMAN RACE GET OFF YOUR KNEES The Lion Sleeps No More にての 29 The Uprising よりの節よりの引用をなすとして)

The Large Hadron Collider built by the European Organization for Nuclear Research or, CERN , is all part of this too. It is the world's largest and highest-energy particle accelerator and consists of a 17-mile tunnel loop beneath the Swiss-French border. It is described as an 'atom smasher' that collides particles and contains more than 1000 cylindrical magnets arranged end-to-end. In November 2009, CERN announced that it had broken the record for proton acceleration and created beams of particles of 1.18 trillion electron volts and it planned to reach up to seven trillion electron volts. The project involves 10,000 scientists, with the biggest group from the United States. We are told that it was built at a money-no-object cost of billions of dollars for experiments to establish what happened at the time of the alleged (I stress 'alleged') 'Big Bang', and to understand the 'deepest laws of nature'. But this is just the cover story. It is connected with HAARP and other technology centres around the world, including the satellite network, in manipulating and disharmonising this reality to block the effect of the Truth Vibrations. The World Wide Web was invented by particle physicists at CERN and that,too, is a manufactured collective reality. The main reason for the microchip agenda is to access the body-

computer and manipulate its ability to receive and transmit within the frequency of the Truth Vibrations, and the same with the electrochemical destabilisation through food and drink additives and electromagnetic and microwave pollution.

(補いもしながらもの拙訳として)

「ラージ・ハドロン・コライダー (LHC) は欧州原子核研究機構こと CERN に
よって建築されたものであり、同装置もまた全面的に「この」(デービッド・アイク
が伝聞にて真に受けているようであるとの「HAARP 計画」)の一部をなすもの
である。LHC はスイス・フランス間国境地下の全長 17 マイルのトンネルに
よって成り立っている。そちら LHC は粒子らを衝突させるためのものであり、
1000 のシリンダー状のマグネットを端々で繋ぎ合わせての原子粉碎装置であ
るとされている。2009 年 11 月、CERN は (LHC によって) 陽子加速にあって
の従前記録を更新、1.18 兆電子ボルトの粒子ビームを生成したと発表し、さら
に 7 兆電子ボルトの大台に達すべくもの企図しているとした。LHC 計画には
10000 人の科学者らが関わり、その内、最大のグループは合衆国からの者達
によるものである。金銭換算に適さぬ式での数十億ドルの出損について「言
われているところの」(ここでは「言われているところの」にアクセントを置く)
「ビッグバンのその時」に起こったことを再現なさせめるためのものであり、そし
て、自然にあっての最も奥深いところにある秘密を理解するためのものである
と我々は言い含められきた。しかし、これはただのカバー・ストーリー(ダミー
として構築された嘘)にしかすぎない。LHC は HAARP に繋がるものであり、
そして、それにまつわっての一連の世界中の他の技術動向に通ずるものでも
あり、その中には「真実の波動」の効力を妨げるべくも現実(認識のありよう)を
操作、かつ、不調和なるものとするべくもの衛星ネットワーク(の技術)も含まれ
ている。マイクロチップを人間に装着しようとのアジェンダの背後にある主たる
理由はいわば生体コンピューターとして機能している人間の身体に(無理矢理)
アクセスして、「真実の波動」を受け取り、かつ、発信する能力を操作するこ
とにあり、同じくものが飲食物および電磁波とマイクロ波による環境汚染を
介しての電気化学的なる不安定化の促進としてなされている」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

オンライン上よりも文言確認なせる(その気があれば確認なせる、とのことである)との上の引用部を
もってしてお分かりか、とは思うが、デービッド・アイクという男は 2010 年に世に出た同人物著作にあっ
てからして —(その意味合いの判断は心ある読み手に譲るが、とにかくも、[ぶれない][ぶれていな
い]とのかたちで) — 「LHC とは」[人間の認識をせばめるための HAARP 計画の一端をなすものであ
り][人口衛星や(飲食物にまぎれこまれた)化学物質による操作と近縁をなすものである]「また、表
向きの実験目的はカバー・ストーリーである」などとのことを(このような世界にあって)主張しているわ
けである。

(出典(Source)紹介の部 88 はここまでとする)

(以上、デービッド・アイクの加速器に対する主張のなしようを引用にて示したところで)

ここで LHC 実験および加速器実験がどういった思想に基づき、どういったものとして運営されているかに関しては[常識の世界; main street]では次のように説明されていることを(馬鹿馬鹿しい、煩瑣であるとは思いつつも)引用しておくこととする。

(直下、加速器研究機関フェルミ国立研究所の二代目所長となったレオン・レーダーマン (Leon Lederman) という男、1988 年にノーベル物理学賞を受賞している同男が著した、**THE GOD PARTICLE (邦題)『神がつくった素粒子(上)』**(邦訳版版元は草思社)にての [疑念に思われるところもあるが)素粒子物理学こそが脇道としての科学 —[電気工学]や [化学]— から外れての本流にあたるとは言えるようなものであり][その分野にて用いられる加速器とは新種の粒子を高エネルギー状況下で造り出して][宇宙の全ての成り立ちを解明しようとの道をもたらそうとするものである]との筋立ての記載がなされている部、20 ページから 21 ページよりの原文引用をなすとして)

それにしても、ときどきふっと疑問に思うことがある。われわれはどっかで曲がり角をまちがえたんじゃないか?装置のことに気をとられすぎじゃないか?素粒子物理学なんてのは、一部の人間だけにしかわからない「サイバー科学」じゃないのか、おおぜいの人間がばかどかい器械を使ってわけのわからないことをやっているが、高エネルギーで素粒子がぶつかったらどうなるのか、神さまだっでご存じじゃないのじゃないか?

そこで、われわれは出発点から順に経過をたどってみることにしよう。

そうすれば自信もわくし、いい発想も浮かぶんじゃないか。

その道はおそらく紀元前六五〇年にギリシャの植民地ミレトスからはじまっている。終着点は、あらゆることが理解できている町だ。そこじゃ、ごみ清掃員はもちろん市長さんでさえ、宇宙のしくみを知っているだろう。

すでに多くの人びとがこの道を通ってきた。デモクリトス、アルキメデス、コペルニクス、ケプラー、ガリレイ、ニュートン、ファラデー、さらにはアインシュタイン、フェルミ、そして現代の研究者たちまでが。道は狭くなったり広くなったりしている。なにもない直線部分(ネブラスカを走る州間高速八〇号線みたい)や、活動が盛んでカーブが連続している部分もある。魅力的な「電気工学」「化学」「無線通信」「固体」なんていう標示のついた脇道もある。こういう脇道に入った連中が、地球の住民の生活を変えてきたわけだ。ところがそのまま本道を進んだ人間は、どこまで行っても、まったく同じ、文字あざやかな標識を見る羽目になった——「宇宙のしくみはどうなっているのか?」この道を走っているとき、一九九〇年代のところで加速器を見つけることになる。

わたしはこの道に、ニューヨーク市のブロードウェイと一二〇丁目の角(コロンビア大学のこと)から入った。その時分、こうした問題はきわめて明快できわめて重要なものに思われた。それには、いわゆる強い核力と、理論的に予言されていたパイ(π)中間子、別名パイオンと呼ばれるものの性質が関係している。コロンビア大学の加速器は、罪もない粒子に、加速した陽子をぶつけて大量のパイ中間子をつくらうというものだった。当時の装置は単純だったから、大学院生にもよく分かった。

(引用部はここまでとする)

(続けて直下、欧米圏では比較的著名なサイエンス系読み物の著者であるアミール・アクゼル著 Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(早川書房)にての[原子核を壊してあらたな物理事象を観察するための高エネルギーを実現するとの加速器機序]にまつわる解説部としての 24 ページより原文引用をなすとして)

LHC 内部での陽子衝突により解放される凄まじい量の高密度エネルギーは、科学を未踏の新たなレベル、我々の宇宙ではビッグバン直後以来観測されたことのない高エネルギーの領域へと推し進めてくれる。そのような形で大型ハドロンコライダーは我々を百数十億年昔に連れていき、誕生直後の灼熱の宇宙を満たしていた状態を見せつけてくれる。

(引用部はここまでとする)

(さらに続けて直下、欧米圏では比較的著名なサイエンス系読み物の著者であるアミール・アクセルの手になる Present at the Creation The Story of CERN and the Large Hadron Collider の邦訳版『宇宙創造の一瞬をつくる CERN と究極の加速器の挑戦』(早川書房)にての[原子核を壊してあらたな物理事象を観察するための高エネルギーを実現するとの「LHC の」機序]にまつわる解説部としての 27 ページよりの原文引用をなすとして)

LHC を最大レベルで運転すると、陽子は加速しつづけて光速(秒速二九万九七九二・四五八キロ)の九九・九九九九九パーセントという想像を絶するスピードに到達する。このとき LHC はエネルギーレベルで一四 TeV(テラ電子ボルト)で運転される。一 TeV は蚊の飛ぶエネルギーに近く、ごく小さな値に思えるが、それがきわめて高密度になる。LHC は陽子二個の体積、つまり蚊の一兆分の一の空間の中にこのエネルギーを詰め込むのだ。体積あたりのエネルギーとして、これまでに達成された値をはるかにしのぐレベルだ。この超高エネルギー領域で、今まで物理学者の頭の中にしかなかった新粒子や新規現象が現われると考えられている。

(引用部はここまでとする)

無論、

[以上の正統派申しよう]

と

[過分に一頃流行った(ここ日本でも相応の類らが音頭をとる中で流行った)エイリアンの地下基地にまつわる都市伝説(がかっての言説)を受けてのアイクの上にて抜粋した申しよう ——地下基地らや関連用地、そして、山々に掘削されて構築された用地の中で行われているとの [高周波活性オーロラ調査プログラム]と相互連結しながら銀河からの真実の波動に人間が曝されるのを防ぐためのものが CERN の LHC 実験であるとの話——]

はどちらか一方しか成り立たないとの

[相互矛盾; the mutual incompatibility]

の関係にあるものである(:いいだろうか。「この段階では」どちらが誤っているのか、どちらが正しいか、あるいは、多くの人間の(偽りの大義・言い分であれ)内面を規定しやすいものなのか、といったことを論じているのではなく、アイク申しようと常識世界のそれとは「こちら立てばあちら立たず」の「矛盾」の関係にあると「とりあえずも」述べているのである。そう、両者の間には [目的] と [効果] と [機序] にまつわる言い分の面で両立する側面は「ない」と述べているのである。それにつき、アイクのやりようが相応のものに見えるような中でも部分的によくできていると思われるところには[超光速通信]の可能性を検証するとの実験になったとの意味で一部にて注目を集めていたグランサッソの OPERA 実験が(英文 Wikipedia[OPERA experiment]項目より抜粋するところとして) “ OPERA, in Hall C of the Gran Sasso underground labs, was built in 2003 – 2008. The taus resulting from the interaction of tau neutrinos are observed in "bricks" of photographic films (nuclear emulsion) interleaved with lead sheets. ” (記載に不足があるところを補っての概要として)「OPERA 検出器はイタリアはグランサッソの

地下研究施設にて2003年から2008年にかけて構築されたものとなる。CERN サイドから放出されたタウニュートリノの類(地面を貫通して0.0024秒で目的地に到達するとのニュートリノ)はそのグランサッソの検出器でフィルムにて隔地で観察される」となっていると専門家らにはよく知られているところまで超常的な[paranormal]であるとの陰謀論がかった領域に落とし込んで、“CERN's Large Hadron Collider is involved in this, too, along with what is happening in the vast and interconnected underground bases and cites and those inside gouged-out mountains.” 「CERNのラージ・ハドロン・コライダー(LHC)はこれ(爬虫類人の操作挙動)に関わっているものとなり、それと広大かつ相互結合している地下基地らと関連用地(山中に穴を穿たれてのものらを含む)の中で行われていることは関わっているのである」との式にて[信のおけぬと看做されよう話]に組み込んでしまっているきらいありのことだが、それは[やりようの問題]にあつての一特質を示すことにすぎないとのことでここでは切り捨てる)。

(尚、誤解される向きもあるかもしれないが、筆者はこの世界「それ自体」が数々の限界領域・タブーの領域を蔵した「伏魔殿」であることを否定しているわけでも疑念視しているわけでもない。この世界がそれ自体からして「操り人形」のような類で満ち満ちた牢獄のようなものであるとは筆者として「本稿にて指し示しているような具体的指示材料の山」および「自身が直に見聞きしてきたロボット人間らありよう」に基づいて「そうだろう」と当然に考えている(その伝ではアイクの物言いに当然に部分的には同意するところがある。人形遣いがこの世界に実体を伴って進出しきっているといったことや「支配」が「手段」ではなく「目的」であるといったことは(本稿にてその精華を具体的かつ客観的に呈示している諸種収集情報より)「まったくもって支持できない」との結論に現行至っているわけだが)。

につき、この世界「それ自体」が伏魔殿であることを「理なくして」否定する、そして、のみならず、加えて、「理あつて」この世界「それ自体」が伏魔殿であると指摘されるようなことが「ある」、厳として指摘されるようなことが「ある」中で何の「具体的反対論拠」の呈示もなく、それを「理なくして」否定するのはいわばもの「拒絶」であろう(おかしなことは述べていないであろう? デヴィッド・アイクのような向きなども「無視」は「拒絶」の高等的方法である)などとのことを述べているが、ここでは「理なくしての否定」もまた「拒絶」であると述べているだけだ)。そして、そこにて「拒絶」されていることに仮に「種族の限界線」そのものを強くも規定していると判じられる論拠までもが現実にも数多伴っているのならば、そして、同じくものことらに対する「拒絶」(「ただの否定」ではなくくどいが「拒絶」である)とのやりようを「さも適正なる行為」であるように(何の理もないところで)最もらしく「演出」しようとしているとの筋目・筋合いの輩がいるのならば、である。はきと述べてそこにては「相応の力学」と「相応の類」が見てとれると述べられもしよう。(「仮に」付きで述べもして)仮にそういうことがあるのならば、「愚かさ」との観点では「尋常一様ならざるところ」に到達していると述べても良からうとは判じられもするわけだが、そういう中で理なくもの「拒絶」をなしている「それ」は「一属人的悪意が仮にそこにはないのならば」最早、厳密には人間とは言えない「虚ろなる」存在ととらえられそうなところともなろう(言うならばそういう「もの」が発する言の葉は厳密には「何かを人に伝達しようとの情報伝達の媒質」ではなく「建設的営為を破壊するための理なき「獣声」」に等しきもの、ゴロツキの恫喝の声と同程度かそれにすら劣るものとも言えよう)。そして、である。筆者がその気になれば、そこら中にある一見にして紳士面した者らによる正統派言説の欺瞞性というものについて「具体例」を挙げ連ねられるし、抑えての筆致以上に痛烈にそうもしたいと考えており(だが、本稿ではある程度、ブレーキをかけている)、また、多くの人間がそれを洗練された式でやるべきなのだろうともとらえている)

以上、書いた上で述べるも、一見する限りは正統派ありよう(の存立基盤)を凄まじい方向から否定しているようにとれるデービッド・アイクという男のここで問題視している物言い —— 「LHC 実験は爬虫

類人の地下基地と結節するところのものであり、人類を操作する〔高周波活性オーロラ調査プログラム〕などと同様の制御洗脳計画の一環をなすものである(人類を滅尽滅亡させるものではなく洗脳制御計画の一貫をなすものである)〕—— が

〔容易に後追いできるとの数多の証拠らに基づいて本稿で〔明確にそうなっていること〕を指し示してきたとのこと〕

とも、そう、

〔加速器にはトロイア（木製の馬で内側から内破させられ、住民皆殺しを見た伝説上の都市）およびアトランティスの寓意が絶滅作戦の寓意と共に愚弄すべくも組み込まれている節がある〕

とのことと両立するものなのか、それについて「も」（「も」付きで）よく考えてみていただきたいものである。

同じくものことについてこちらより申し述べておくが、（はきと述べて）、

「〔社会にて確たる立ち位置をもってやっている主流派・正統派(CERNに集まっている「学究」の類らである)の申しように重大な虚偽が含まれている〕と〔証拠〕に基づいて指弾しようとの本稿筆者の言いよりの伝 —— 〔加速器およびその関連事物にはトロイアおよびアトランティスの複合的寓意が人間を愚弄すべくも多層的に組み込まれていると断じられるだけの証拠がある〕との言いよりの伝 —— 「とも」アイクのここにて問題視している式での申しようには両立するところが「何ら」ない」

とのことがある（アイクという男ないしアイクを動かす力学のようなものが〔事後学習〕の結果、今までそうあったと見ているところとして悪い意味で〔バージョン・アップ〕する可能性もありはするかと見ているのだが、現行やりようでは筆者申しようとアイク申しようには「加速器の位置付けとの観点では」結びつくところがない。アイクの申しようはメインストリートの目立つところに陣取っている人間らの申しようとも相互矛盾 —— どちらか一方しか成り立たない —— の関係にあるのだが、この身、筆者申しよう「とも」同様の要素を(LHCのそれに関して)目立って帯びているとのものである)。

その点、デーヴィッド・アイク由来の表記の申しよりの前提となっているところ、

〔この地球にて地下基地 — LHCともリンクしているなどとされての地下基地(なるもの) — より操作を施している爬虫類人の類が現実に実体伴って存在しているとの申しよう〕

を容れるのならば、(それは無論、〔マーベラスなことを成し遂げる魔法世界〕が存在していると容れるぐらいのことになるわけだが)、「最早なんでもあり」の世界となり、確かにそうした現実の理解を — たとえ過てるものでも — 取る限り、そこにあつては

〔トロイアの木製の馬〕（攻撃対象の城門を内側から解放させて皆殺しを実現するとの装置）

など要らない、そのようなもの（〔トロイアの木製の馬〕）が〔まさしくものその伝でのもの〕として今日ここに至るまで人間を地に「養殖」し最終段階として構築されるに至っているとの〔可能性〕を顧慮する必要だに一切ないことにはなる（：〔人外〕は既にこの我々の世界に入り込み、歴年、どういう目的でなのか、【幻覚】(脳機序操作)などではなく実体伴って跳梁・具現化出来るのにまったく表に出てこないで我々人間と付き合い続けていることになるからである —— いいだろうか。ここでは言論の中身の問題をしているのではなく、その言論の効果、その言論がどういうメッセージ性を有しているのか、どういう気風を一部の人間に醸成するのか、との話をしているのである(例えば、〔団結を阻んでの相互不信の気風を社会に拡大させる〕〔正しくはないところで予断・偏見を醸成し〔行き着く先〕に対する方針を誤ったものになさしめる〕というのは言論の〔中身〕の話ではなく、言論の及ぼすありうべき〔効果〕の話となる) ——)。

同じくものアイク主張の前提となっているところの申しよう、[エイリアンや爬虫類人の地下基地がどこかに存在している]との申しよう(“The Saturn-Moon Matrix operates within a certain frequency band and open our minds beyond that band the less we are influenced by the transmissions.” といった月と土星のマトリックにまつわるところも含めての申しよう) は、それに対して反論をなそうという者にとり、

[悪魔の証明] (「～である」「～となっている」との[肯定の事実]に対して「～が存在しない」「～ではない」との事実、いわゆる不_レ存在それものが関わるとの否定の事実を完全に証明しきることは不可能か、あるいは、非常に困難であることを[悪魔の証明]という。例えば、「未確認飛行物体が存在しない」との申しようの適正さを示すためには事実群の羅列による証明というものは(捏造写真やミステリー・サークルの偽造などにまつわる否定の事実をいくら並べ立てようとも)[肯定の事実]が[一億の否定事実の中に一つでも存在していれば]折られることになるのであるから、[悪魔の証明]となる——尚、[悪魔の証明]は日本の民法の適用運営の現場にあっては[所有権帰属問題を証明することは有為転変する帰属関係を全立証することが要されるから困難である]との用いられ方をするものであるともされるが、法廷での使用規則も含めて英語圏にての[悪魔の証明]の使用法は英文 Wikipedia[Probatio diabolica]項目(悪魔の証明のラテン語表記にて設けられている一項)に見るように、“ **The Devil's Proof is the logical dilemma that while evidence will prove the existence of something, the lack of evidence fails to disprove it.**”「**悪魔の証明は証拠(の【存在】)が何かの存在を示すものである一方で証拠の【不在】の方は何かの不適切性・不_レ存在性を示すもの「ではない」ことに起因する論理的ジレンマの問題である**」と記載されているもの、ここに述べている通りの語法で幅広く用いられているものとなる(と傍目にも伺い知れるようになっている)——)

と親和性の高いものとなっている(上に述べたところのアイクやりよう、エイリアンの地下基地が[コントロール下にある(アイク流にいうところの憑依されている)ゾンビ人間ら]の背後に控えているとのことを衆を惑わす嘘であると暴く、[そんなことはない／存在しない]との否定的事実・消極的_レ真実の証明は難しいとのことである。(仮に世界がゾンビのように自己思考能力が乏しい人間で横溢を見ているのであれば、そして、そうした環境下で事実と異なる妄言を積極的に折ろうとするとの気風が乏しいとのことがあれば尚更のこととして)世界にエイリアンや爬虫類人の地下基地が実体を伴って存在して「いない」ことの証拠を全地的にスムーズに呈示することは不可能であり、また、エイリアンや爬虫類人の類が人類を葉籠中のものとしているとのことであれば、その存在を立証しようとの挙は全部台無しにされて無為無駄に終わっているのだとの言い分を許すとのことで[存在しないとの消極的_レ事実]を示すことはよりもって完璧なる[悪魔の証明]となるとも言えよう)。

だが、[悪魔の証明]の問題が関わってこようとの前提となるところ —(押しつけはなさないが、筆者自身は『それはおそらく「ない」だろうな』と結論を下すに至っているとの)地下基地の存在といったこと— はともかくも、

[LHC が [高周波活性オーロラ調査プログラム] と並んで洗脳・制御の装置にとどまるものである]

とのことまでについては「虚偽である」と「明示的に」指し示し可能なところとなっている(と申し述べたい)。

どういふことか、と述べれば、筆者の申しようが正しいと指し示せるとき、デヴィッド・アイクの申しよう—[LHC が [高周波活性オーロラ調査プログラム] と並んで洗脳装置となっている、そのためだけのものである]との式での申しよう— に関しては

[相互矛盾関係にあることのもう片方側が正しい]

とのことを遺漏なくも摘示なすことで斥けられる、そう、虚偽であると示せるとのものであるということである(：非常に単純な話である。矛盾していることの片方が正しいのならば、もう片方は嘘であるとの[単

純な嘘つき問題]である。につき、我々が中学校で学ぶとの初等数学の段階からして[背理法(帰謬法)],すなわち、[証明対象の真実性を真っ向から否定しているとのことを敢えても想定、その想定してのことが[誤り]を含んでいるとのことを示すことで却(かえ)って証明対象の真実性を示す]とのやりようがとられることもあるが(英文 Wikipedia[Proof by contradiction]にて “ In logic, proof by contradiction is a form of proof that establishes the truth or validity of a proposition by showing that the proposition's being false would imply a contradiction. ” 「論理の世界では[矛盾による証明](背理法)とは[命題(指し示し事項)の真実性ないし適正さ]を[命題(指し示し事項)の偽であるところ]が矛盾を含んでいるとのことで示そうとのものである」とある通りである)、のように論理的に純化されての話ではないものの、少なくとも背理法成立状況「的」ではある状況、[明らかに意味論的に異なるものら]の片方の方が質的に正しいとのことが露骨に示される —LHC が外側からは攻め落とせぬ城塞内部に運び込まれたトロイアの木製の馬であるとの意思表示を巧妙に、確信犯的に、尋常一様ならざるやりようで執拗になされてきたとの相互に連関する具体的証拠の山がある— との状況成立にダイレクトに通ずる事実らを通じて「アイクの言い様は正しくはないとの判断がなせる」と筆者は申し述べているのである —ただし、アイクが悪い意味で進歩する存在ならば、[LHC は洗脳装置の類にすぎない]との現行の申しようの伝に加えて(彼の従前主張らとは何ら両立しないものだが)「LHC はゲートにしてトロイアを滅ぼした木馬「でも」ある」であるとか「(そのことがきちんと問題視されていないからこそ問題なのだが)LHC がトロイアを滅ぼした木馬の寓意の多重的に結びつくようにされていたとしてもそれとて[フェイク]である」などといったことを彼お得意のお伽噺的な「相応の」話に交えて「これより」さらにいい加減に述べ出す可能性もあるととらえているのだが、については、現行、本稿執筆現時点でのアイク(という欧米圏でよく知られた男)の申しように基づいての話をなしていること、お含みいただきたい—)。

(⇒尚、筆者としては誤記・錯簡・誤解誤信(知覚に惑わされてのそれや他者体験談取得に伴う惑溺等々)、その他の汎ミスなどを抜きにして[本当に正しくあろうとする者]は「能動的・主体的に」虚偽をこととしないものであると当然に考えている。

また、重要なところで結果的に虚偽を心ならずになしていた(属人的限界で手違いをなして事実と異なることを書いていた、言っていた)と気付いた場合、その悪影響の可能性を斟酌しつつ、必要ならば、それを訂正するとのことを(正しくあろうとするのならば)遅からずなすであろうと考えている。

でなければ、[重過失][過失]の問題を知っていて黙過し続けていたとのことで、それは[悪意の、正しくはない者のやりよう]と同じくものところになってしまうと考えている(いいだろうか。能動的・主体的に虚偽をなすような人間 —一人間的に実に下らぬとの切って捨てて構わぬ質的詐欺師(質的犯罪者)の類— ははなから正しくはない、論外であるとの伝で「能動的・主体的ではなくとも」との話をここではなしているのである)。

その点もってしてデヴィッド・アイクについては彼の主張を経年観察してきて自身の言説にあって問題となるところをあらためようとの側面が「あまりにも」見受けられない (:その点、本稿筆者とて[限界を有した人間存在]であるのだから重大なミスとは決して無縁ではなく、(話をなすこと、その意味・意義に直結するところの聞き手・読み手がいかほどに存在していたか何ら希望的観測をなせぬところなのだが)、自身の述べてきたことについて「これは筆の誤りか」と考えることがあり、その訂正・調整をなすべきかに苦吟しているとのことがある。たとえば、本稿を公開しているサイトの一などにて従前、「911の事件は人形と化した類らの業であるのだから、にあっては秘密結社に属するが如く類らの関与が[演出問題]として強くも作用していると判じられる」とより以前から収集していた[論拠の山](殊に第七ワールド・トレード・センター・ビルディングにまつわる論拠の山)および自身の見知っていることより「過度に」強調しすぎていたとのことからして[過ち](質的誤謬)があるかも「しれない」と考えるに至ってもいる —については、本稿の後の段で「どうして従前、そういう結論を下していたのか」にまつわっての具体的論拠の山をも呈示するとのことをなしもす

る所存ではあるも、のうで、「だが、」現況、「そうした結論は誤りであった可能性がある(低いとは受け取れるのだが、誤りの可能性がある)。であれば、自身の前非を認めるし、そうすべきであると考えている」とのことも明示する、ひたすらに論拠挙げ連ねての本稿の後の段、「補説4」の段で明示するつもりでもある——。そのように、正しくありたいとの人間は都度、自身が謬見を呈していた、と考えれば、都度、そのありようを可及的に明示して修正するところか、と思う。だが、デーヴィッド・アイクという向きはそういうことをきちんとなさないで、「誤り」を強化・固執するようなことを平然とやっている、まるで柔軟性がない(彼自身のまったくもって若くないとの年齢や元より問題があったのかもしれないとの精神状態のこともあるかもしれないがまるで柔軟性がない)とのことが[目に付く]ところとしてある)。

以上のようなことにつき、「優しい嘘」というものもあるかとは思っているのだが、「生き死にに関わるところ」でそうした「優しい嘘」なるものは観念できず、であるから、その伝で筆者はデーヴィッド・アイクという人物に(その他、いろいろと事情もあるのだが)失望するに至っているとのことがある)

くども申し述べるが、

[LHC が現行、そうなっているところの巨大加速器が人類の領域(城壁で守られて攻め手が直には侵入できぬ人類の領域)に内側から「最終的」内破とのかたちで引導を渡すべくも構築されているトロイアの木製の馬であるとの前言・予告といったものが尋常一様ならざるかたちで多重的に長年、なされてきたと指し示せるようになっている。しかも、そこには通りひととおりの人間(ラジオ・コントロールされているが如しの[ゾンビ人間]ではないとの[自ら所与の情報に基づいて思考する人間]との文脈での人間)のやりようでは説明がなしがたいとの要素が伴っていると指し示せるようになっている]

とのことが[確たる事実]として呈示できるのであれば(実際にそれは呈示できると強調する)、アイクのような者達の申しよう、

[LHC が [高周波活性オーロラ調査プログラム] と並んで(真実の波動なるもの、厳密に定義すらできぬものの浸透を防ぐための)直にこの世界に進出している者達による洗脳装置にとどまるものである]

と矛盾関係にあることが呈示「なせてしまう」とのことともなり、アイクらのその伝での申しようは斥けて然るべきものであると背理法(前述)的なる観点に基づいて当然に強調する次第である(：ただし、である。筆者見立てとアイク見立てが「極部分的に」両立するケースもなきにしもないでもない。[トロイアの木製の馬の多重的寓意とありとあらゆるところで結節している加速器](ここに至るまで LHC がどういったことと多重的に接合していると論じているのか、本稿の内容を全体として振り返っていただきたいものではある)の運用の結果、「かねてよりなされていた不自然極まりない犯行予告」(さらに煮詰めての話となす所存だが、たとえば、[出典\(Source\) 紹介の部 1](#)から[出典\(Source\) 紹介の部 10](#)の内容などを参照のこと)の通りに「ブラックホール」「通過可能なワームホール」が生成されたとして、それでもって、地球や地球人類がどういうわけか滅亡しなかった場合、そして、その結果が「洗脳」「制御」と「ほぼ」同文であった場合——「高周波活性オーロラ調査プログラム」といった話は切り捨てて「ほぼ」同文であった場合——、例えば、そう、本稿にての[出典\(Source\) 紹介の部 20](#)以降の解説部で Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos『パラレルワールド——11次元の宇宙から超空間へ』を引き合いに出典内容を細かくも原文引用しながら取り上げているとのこと、「仮想上の先進文明やりようにまつわる未来技術予測として「ブラックホール」「通過可能なワームホール」越しに重力の怪物らの中の凄まじい潮汐力や放射に耐えうるとのナノマシン(あるいはそれより遙かに小さいフェムトマシン)といったデバイスを「文明再建の種子」として送り込むとの

科学者ら未来技術予測]のようなことが本当にあるのであれば、そして、その結果が「人間の脳機能の破壊後代替」(本稿にて出典(Source)紹介の部 21-3(2)以降の段で述べているようなグレッグ・イーガン『ディアスポラ』との小説に見るような人間のナノマシン・スキャンによる「アップロード」次いで「移行」、ないしは、より単純に考えての「首から上のまづもつての物理的すげ替え」というかたちでの人間の「別」存在化として現出するのであれば、確かにアイクの「洗脳・制御」なぞの話と筆者の呈示していることに「部分的に」接合性は観念できることになる——普通に考えれば、筆者申しようとアイク申しようには「高周波活性オーロラ調査プログラム」および「真実の波動なる非科学的概念」の絡みで「互いに並び立たないものである」とのことになるのだが、とにかくもの部分的一致性の話をなせば、である——)。

さて、本稿ではそうしてアイク申しようと両立せぬことを、

【証拠の山】
および
【はきとした因果関係】

の摘示でもって「危険なる兆候」——どのレベルでの操り人形による犯行かは論ずるまでもなく破滅的「人災」が引き起こされうるとのことにまつわる危険なる兆候——として指し示さんとしている(：デヴィッド・アイクの申しようを真に受けるとこの世界には「トロイアを滅ぼした木製の馬」を構築する必要も無く、嗜虐的で碌でもないとの操作者としての「人外」は既に「実体を伴って」人間(じんかん)の中に紛れ込んでいるとのことになるが、「テーブルを隔ててのテーブル下からの磁石を用いての人形操作」に見るそのようなマリオネット仮説の問題とも関わっているところで「現実的に」この我々人間の世界にあっては加速器の類が「侵出不可能領域に対するトロイアの木製の馬」になるとの「あまりにも巧妙」「あまりにもできすぎた」寓意で満ち満ちているとのことがあり、しかも、にまつわっての関連事象らが長年に渡り相互に結合するかたちで具現化しているとのことがある(と摘示可能となっている)——(疑わしきは膨大な文量を割いての本稿にて筆者がどのようなことを事実として指し示しているかをきちんと検討いただき、デヴィッド・アイク申しようと手前が摘示に努めていることらのうち、どちらが正しいのか軽重の程を分析頂きたいと思う。尚、筆者は読み手が「相互矛盾」の問題に関わるところのどちらが正しいと見ようと頓着しない。人間としての信念から人間は「尊厳をもった存在」として自分で物事を判断すべきである、また、そのようにあるべき存在だととらえているし、何にせよ、デヴィッド・アイクの申しようを(その意味性を深くも考えることもなく)無批判に受け入れるような、あるいは、僅かに容れるべきところも含めて字義通り全てが馬鹿げていると検討もせず全否定するとの雅量(度量)しか有しておらぬとの向きらがそうした向きらに往々にして伴っている宗教的・教条主義的側面から離れて「理」と「知」でもって何かを本当に望ましき方向で変えることはない、およそなかろうと考えているからである)——)。

重要なことであるととらえるから、くどくも申し述べるどころとして、次の各点、胸に刻みつけていただきたいものである。

「正気の人間ならば、(それらが相互矛盾の関係性を呈するとき)「確たる証拠を伴わず駄法螺であることが高度に疑われる話柄」と「証拠の山と共にあって堅く、かつ、特異性が伴った相互多重的關係性の呈示がなされていること」とのどちらが取り合うに足るものと判断するか、自明のことであろう」

「正気であるうえに「勇気」がある人間ならば、不快な証拠によって危険と指し示されている現状を脇目に、何もしなくては決して好転しなかつた節がある未来を「魔法の類」(実に性質悪きことに「耳に快きことを含む話は否定しがたき哉、」とのメカニズムを結果的に悪用しているようにとれるようになって話柄、デヴィッド・アイク流の「真実の波動」なるものでもいい)が介在して好転するように頭から妄信することはしないだろうし、「認知」→「理解」→「行動」の三ステップを踏んで「できる範囲」で運命を変えるべくも抗う道を選んで然るべきであろう」

以上述べたうえで書くが、アイクの表記申しようとこの身のそれとの両立せぬ申しようを複合顧慮すれ

ば、論拠に拠ってたつところを見極めることでどちらが賢明な道か分かつものか、と思う。

(その点、敢えても述べれば、長期的に見た上での賢明なる途 —と述べても真に勇氣ある人間に説く以外意義なきものとも解される途— の方向性を指し示そうとのこの身は本当のことを探り、訴求しようと試みだした折から
[一人、嵐で吹きすさぶ荒れ野を行くような辛酸]
をなめさせられ続けている。

といったこの身に対して他面、デヴィッド・アイクなどは[仲間](と[それら]が「本当に」言えるに値するものならばだが)らしきものに恵まれ、彼の異説を流布するに奏功を見ている。につき、「それこそが世の[適正評価]である」と見立てたければ、ご随意・ご自由に、そうして欲しいものではあるが、この身が「他ならぬ自分自身および自分の守ろうとする者のために真実を訴え流布する必要を感じている」とのその言の通りに本当のことしか述べていないとのことがあれば、また、アイクについては耳に心地よいこと「をも」述べるとのそのやりようの背後に[相応の機序](偽物らをその偽物ら自体の悪意の有無はさておきも怪物がかつたやりようで無理矢理選り集めているとの力学)があるのだとすれば、その[責め]を誰が負うのか、その点についてもよくよくも考えていただきたいものである。

と、批判がましきことをあまりにくどくも述べすぎた感があるので書いておくが、勘違いしないでほしい。この身はアイクに対して[嫉視]なぞなしているのではない。むしろ、アイク(的なる向きら)については従前、『殉難者(じゅなんしゃ)であり、面白い人物である』「とも」見てきた(最近、とみにその評価は変わってきているが、それは置き、である)。

また、この身は長じてからは「緑色の目をした悪魔」なぞと表されている嫉視なぞ人生経験上、実にもつて的外れなところでされるているとの覚えは数多あった(であるからこの身は[油断を売れる局面ではそれを売れ]とのことをモットーに滑稽芝居を演じてきたことも数多ある人間である)が自分からそれをなしたことはない(誰であれ同じか、と思うが、「根の暗い人間」ははっきり言って、嫌いである)。「問題は、」そうした低劣なところ(嫉視と相応の程度の間人間は見るかもしれぬこと)にはなく、自身一個の存在は表に出なくとも自身の言論だけは広めたい、人として正しいかたちで[存在悪]の類([必要悪]ではなく[存在悪]の類である)といったものに取り込まれずに、代わりに、そのやりようをできるだけ斥ける作用となるかたちでそのままに自身の言論(誰もやろうとせぬところの指摘・立証)だけは広めたいと考えており、そのためには、ノイズとしてそこに目立ってある、アイクの不品行をも明らかにする必要もあることか、と考えるに至ったのである。

につき、「自身および自身の守るべきと見た人間らの生き残りの必要性認識に駆られ」動いているとのこの身のそうした要望だにこの世界では通らないとのことをここに至るまで思い知らされてきたわけだが、そうした現状が変わらぬのであれば、あとは、(歴史的にはそれは碌でもない発露をなしてきたものだが)、ある種、武士的な潔さ、「相応のものばかりが認容される相応の世界、もとよりそういう下らぬ世界では[節]と[真]は通らず、また、尊厳が担保される素地はなかった、あとは散りゆくままに任せるのみであろうよ」ということになろうか、とまで思い至っている(：本稿の先だつての段でその主張のセンセーショナルさについて解説してきたデヴィッド・アイクなどに言わせれば、[生存本能のみで動いているのが爬虫類人である]とのことであるようだが、その式でいけば、—[尊厳の担保の道]はまずは[生命の確保と安定化]にあるととらえている— 私なぞも爬虫類人となるのであろうか、とも声を大に問いたい

ところではある。検討なす向きが[現実]を見る能力、また、その[現実]に向き合うだけの[勇氣] (臆病さとは対極にある美德であろう)を持ち合わせているのならば、それは「否」とはわかることか、とは思ふ。[ブラックホールの類に呑みこまれ結果的に相応の人間らに巻き添えにされるかたちで死ぬことになる可能性が「現実的に危険なものとしてそこにある」(ただし「実験」実施の物理学者らはそのようなことは彼らが不磨の大典のようにして崇め奉っている物理学教程と理論に基づき「天文学的数値を母数にしての何千万の1もありえない」と強弁している)と証拠の山に基づき判断、一個の人間としてそれを回避したいとの認識、ただそれだけをもってやっている人間に対して、「奴は爬虫類人だ」なぞといったことを述べる・決めつける方こそが[(字義通りの)人でなし]だけであろう。

問題はそこまで述べるこの身申しようが真実一路のものか(あるいは高度に黒と疑われるものを適切・至当に指し示しているものなのか)、そうではないか、であり、何度も何度も述べているように

[[偽物]と[本物]を区別すべくもの[検証]]

を、そう、「こいつは嘘つきかもしれない。だから嘘を暴いてやろう」との批判的視座でもってしても[検証]を、(無視される中、あるいは、愚劣な者達に色づけされるような機序ばかりが目立ってきた中、語るに値する人間がいればだが)、[検証]を是非ともなしていただきたい、そのようにお願いしたいのである(尚、検討者に対しては再三再四どころか再四再五以上とのかたちで強くも述べておくが、「私は自身の指摘事項について無条件に信じろとは言わない。むしろ疑わしいとの観点で検討して欲しいところである(世界は生え馬の目を抜くような虚偽で満ち満ちていることをゆめ忘れないようにと述べつつものこととしてである)。そもも懐疑的検証の奨めの弁を前面に出しつつも、他面、事前に申し述べておきたきところとして、自身の全知性と全誠意に賭けて述べるどころとして私は嘘などついていない(世間にはそういうものばかりが目立つとの操り人形などではなく人間であるのだから、一部、誤字・脱字を含む汎ミスをなしてしまうこともまたあるが、それは置き、である)。嘘吐きというものはえてしてそう言うものだと受け取れるが(であるから出典紹介部らを通じて確認されたしと求めている)、なんら偽りもないとの式を心掛けつつ、[生き残る意思ある者らならばそれを妨げるべくもの挙をすぐにでもなしはじめるべきだ]とのかたちで我々を狙う銃座の所在を適宜適正に証拠に基づいて指し示さんとしてるのがこの身である(とのこと、本稿より検証頂きたい)」)。

ここまできたところで、である。(本補足部にて述べるべきと判じたところの多くは述べたつもりであるのであるが)、さらにもってして

[(余事ながらも)述べておくべきとしたこと]

について筆を割いておきたい。

その点、識者(を気取る向きら)に失笑冷笑をもって応えられるものであらうとなかろうと、デヴィッド・アイクのつい最近出た上にて言及の著作、

Remember Who You Are Remember 'where' you are and where you 'come'

from『自分たちが何者でどこにいるのか、そして、どこからきたのか、思い出せ』 —先

述のようにその意味合いにつき黒白どちらかなのかと考えさせられるタイトルではある—

にあつては Saturn [土星] ([サトゥルナス]こと[時の翁]とも結びつく鎌を持った神格と対応付けさせられている土星)こそが[操作のセンター]であるとの申しようが目立ってなされだしているとのことがある(同著作を起算点としてのアイクやりようとしてなされだしているとのことがある)。

につき、そうもした式、サターンこと土星を重要視する式からして

「どうしてそういうことが現出しているのか」

と想起させられるところとし、試験的に本稿を公開することにしたサイトにて「より以前」—アイクの上記新刊刊行「前」とのかたちでの「より以前」— から目立ってこの身が前面に出していたとの式、

[土星神格化存在サトルナスおよび時の翁のシンボリックな意味合いを重要視するとの式 — 本稿にあっても先だつての部でサトルナス(土星体現神格サターン)がいかように性質の悪い寓意と結びついているのか、諸種文物よりの原文引用にて示してきたとのことがある—]

と通底するところとなっているとのこともある([先後関係]につき把握していないとの向きが見れば、まるでこの身、筆者がデヴィッド・アイクの[剽窃]をなしているように誤解されかねない格好となっている)。

アイクの上著作の刊行 —くどいが、デヴィッド・アイクが土星ことサトルナスが土星こそが操作のセンターであると述べたしたとの著作の刊行— に先立ってこの身が「より以前から」試験的に運営していたサイト(本稿を公開することにしたサイトの一)で目立つように問題視していたとのこと、それと類似のやりようがアイク書籍に最近になって質的に論証不能な言い分(月と土星のマトリックスなるものを問題視するとの論法)を伴ってとみに目立つかたちで表出を見だしているとのその一事からして、(ビデオ録画して[国内にて不快な妨害行為ととれること]を「何故なのか」堂に入つての式でなされてきた経緯を経年で把握してきたとのサイトに関わるところとして)、

[「個人的には」気になる場所としてある]

のではあるも(被害妄想であると言われぬように強くも「個人的に」という言葉を出して前面に出していることとして[「個人的に」気になる場所としてある]のだが)、声を大にして強調しておきたきところとして、

「この身はデヴィッド・アイクの申しようの紹介ないし批判はなしでも[思考能力なき機械のような存在][悪辣な情報操作要員]がそれをなすような猿真似・おうむ返しの類、[無批判の受容]をなすような相応の類などではない」

(:直近述べているようなところ、それ以前から911にまつわる儀式性を論じての論稿なども含めて意図して取り上げていたところの、

[土星サターンに伴う意味性]

について「も」先後関係の問題を容易に提示できる。立論論拠を追加で一覽して呈示するために本稿のようなものをアップロードしているサイトの一にてよりせんだつてより公開している『911の儀式性詳説』との(表紙からして土星体現存在たるサトルナスを挙げているとの)同PDF文書からしてその[旧版]の骨格となる部が2010年に完成を見ていたとのものであり、無論、アイクが[ムーン・「サターン」・マトリックス(月と「土星」のマトリックス)]なる主張を目立つようになしたとのその折(2012年)より前から本稿を公開することとしたサイト経緯でダウンロード可能としてきたとの経緯があるものである(旧版新版と分かれている中でのよりもって拙くもあつた旧版からしてそうである)。その点、この身が土星サターンに対する注意喚起を以前よりなしていた背景には([ムーン・サターン・マトリックス]なる[あるかないかも分からぬもの]を問題視するとの観点では毛頭なく)[フリーメーソンの特定象徴]([ウィーピング・ヴァージン]とされるもの等々)と[サトルナス] および [悪魔の王たるサタン(あるいはルシファー)]の不快極まりない関係性について思索を巡らしていた — 本稿でも一部細かくも指し示しなさんとしているとの不快なる相関関係に気づいて思索を巡らしていた — とのことにある)

私的にはデヴィッド・アイクのような人間の論理導出の出所が「その実、一体全体、どこにあるのか」

ということも込みで疑義抱きつつ、ますます注視するようになったところなのだが、とにかくも、以上のこと、筆者の言論とアイクの言論には —結論が多く異なるのだが— サターン(土星神格化存在)に注意を向けるとの点で似通っているとの側面があるとのことについて断わっておく。

また、「さらにも、」要らずもがなであろうと受け取られかねない記述ながらも表記なしでよくと、次のような「個人的」に表記したくもあるところの断り書き記載にかかわるところ「でも」アイクやりようについては注視しているとのことがこの身にはある。。

(以下、続けての内容に繋げるとの意図あつてのものにして、そして、「個人的」にも強調なしたきところのものでもあるとの断り書き表記をなすとして)

「本稿筆者は2009年に『人類と操作』という著作(改訂版を本稿公開サイトで公開しているとの著作/デヴィッド・アイクという英国人論客の従前申しよう・人格的特性を不穏当にも高く評価しすぎたか等々との意味合いで今振り返れば問題も「極めて」多かったかと反省もしているとの著作)を某出版社一後に代替出版提案を大手出版社出入りの相応の人間がなしてきたわけだが、そうではない方の某出版社—に[商業出版(要するにこちらは何の負担もなしに10パーセントの印税受け取るとの形態の通常出版)形態での[事実上の契約]がなされたとの帰結]に至るとのかたちで手渡していた(:往時はまだ私は今日のように状況につき悲観的にはなっていなかったわけであるも、橋頭堡、「そこから広げて」世に訴えたいことはあったがために出版とのかたちでの情報流布を企図しての手渡しをなしていた)。

といった拙著、今振り返れば問題も多かったといった著作ながらも[より重大なこと]を社会に訴えるうでのなにかの[橋頭保]となれば、との観点でものしたとの同著作を2009年に出版社に手渡しした後(2010年の前半期)に初出を見た著作として論客デヴィッド・アイクは

HUMAN RACE GET OFF YOUR KNEES The Lion Sleeps No More
『人類よ。ひざまずくのを止めよ。ライオンはもうこれ以上、眠らない』

という著作を世に出しており、その著作からしてより以前に出版社に渡っていた上述の拙著『人類と操作』と同様に[人類]との言葉をきわめて目立つように用いている著作であり、また、内容もアイク新規主張との絡みでそこはかとなく似ている、それがゆえに、手前なぞが

「『個人的に』非常に興味深くも受け取った」

とのものであるとのことが「ある」(:手前自著作の出版プロセスに対して容喙・横槍を入れるのに関与したとのことを聞き及んでいる相応の大手出版の関係者らが供給している「よりどぎつい」邦訳版のアイク本では[人類]との言葉の使用はどのようなわけなのか、[なり]を潜めているようだが、とにかくものこととして、である)。

その点もってして、

「どうしてそうもした[類似性]を拙著との間に見たのか」

と[個人的]には疑義もってとらえている同著(HUMAN RACE GET OFF YOUR KNEES The Lion Sleeps No More『人類よ。ひざまずくのを止めよ。ライオンはもうこれ以上、眠らない』)について「も」—土星を介しての直近言及の通りの事後的類似性の発露の問題があるため— 強くも断わっておくが、

「誇りを重んじるこの身は「意味なく」「デメリットをきたすように」アイクの[猿真似]などなすような者ではない」(アイクに限らず猿真似、人から盗むなどとの

こと、この身は矜持の問題としてなさぬし、そのようなことはなす必要がない

とのこと、(もしもって万が一にして気にかかるようなところがあれば)、念頭に置いていた
だきたいものである ([同じくものこと] については、である。自身のウェブサイト、
海外にてメガ・リチュアルのことを言辞として問題視しているような者もいた中でそうし
た動向を受けて「いや、メガ・リチュアル(100万単位=Megaと紐づいた儀式との語
感ある言葉)ではなくギガ・リチュアル(10億単位=Gigaと紐づいての儀式的挙動)
であろう」との観点で2010年以前より中身を構築していたとの giga-ritual との文字をド
メイン名に入れ込んでの自身ウェブサイトでも 言論の先後関係の問題として断り書き
をなしている — ※そこにいう従前サイト (手前が訴求のために株式会社まで設立
することになった2011年年末の前から公開している従前サイト/本稿を公開している
サイトの一でもあるとのサイト) については現行現時点に至って何にせよ反響の程度
にまったくもって希望的観測を抱けぬとのものともなっている(どこかソフトな非表示
の憂き目にあっている色調もある)、そして、同サイトからして先後関係を偽るようなま
がい物を(何故なのか海外も含めて)意図・動機など人間存在にはあろうはずもないと
ころで生んできたにすぎぬか【観察事実】に基づいて(嘆息しながら)見るに至って
いる、そのため、「無駄なことを力(りき)んでなすすぎた感がありすぎるな」と当然に
思っているのだが、往時にあっては「後々のことも考えて、」との観点で「猿真似など誇
りを重んずるこの身はしないし、そうするメリットもない」との同じくもの断り書きをなして
いたとのことがある —)。

以上、断り書きの中で引き合いに出しもしているとのアイク著作については同著作固有の特質・細か
き内容についてからして取り上げておくべきかとの判断がある(それが人間存在をたばかる欺瞞の根
の問題に通じているとの観点もあってである)。そのため、そちら著作、デヴィッド・アイクの、

『人類よ。ひざまずくのを止めよ。ライオンはもうこれ以上、眠らない』

がどういう著作なのかについてその主たる主張内容 — 1970年代のソ連科学アカデミー関係者に由来
するところの Spaceship Moon Theory [月宇宙船説] (後述) を拡張させての主張内容 — について以
降、続いての段で多少細かく説明をなすことにする(繰り返し述べたくもあるところとして、そこに見る
[衝撃的事実(と感じられるような事柄ら)にまつわっての欺瞞性と共にあると見える悪しき側面] に心あ
る向きが眩惑されないように、との観点から多少細かくもの内容紹介をなすこととする)。

さて、デヴィッド・アイクの手になる『人類よ。ひざまずくのを止めよ。ライオンはもうこれ以上、眠ら
ない』という著作は

- 「[月] は人外 (アイク流に述べるところの爬虫類人) の建造した人工物である」
- 「[月] (この次元ないしは別次元の[月]とも) より人間の結晶アンテナとしての
DNA に対する操作の波が (クリスタルを介しての操作として) 送信されている」
- 「以上操作はムーンマトリックスと呼称されるべきものともなり、それこそが人類の不
幸の源泉である」

の各点を主要訴求点としているとの著作である(:荒唐無稽と思うであろう?だが、デヴィッド・アイクという
人物が「よくもやる」と見受けられるのは以上のようなところが可能性論として成り立つように見えるだけ
の論拠らを(下にて言及するものを含めて)斜め上、予想外の方向 — たとえばメソポタミアの月の神の
話なぞ — から多々繰り出していることにある)。

その点、まずもってしてそこから述べるが、著者デヴィッド・アイクが [不服従] の必要を唱く割には

[人間がいくら抵抗しても無駄であるとの力学がある]

ように「とれる」との書きよう、すなわち、

[[月] までもが人工物である 一馬鹿げていると思われるかもしれないが、続いての解説部を参照頂きたいものである]

[我々が相対しているのはそれぐらいまでに強大な力（[月] のような星辰さえをも人工物として構築するの力）を持った悪意ある存在である]

などとの書きようをなしている 2010 年刊行の著作(**HUMAN RACE GET OFF YOUR KNEES The Lion Sleeps No More**) からして同著そのものから先に引用なしたように、

[LHC も洗脳装置にすぎない]

との表記がなされているとの著作となりもする（: といったこと、[LHC が洗脳装置にすぎない] とのことが主張されつつもの [月のマトリクス理論] にまつわる著作『人類よ。ひざまずくのを止めよ。ライオンはもうこれ以上、眠らない』から多少、趣きを変えての [月と「土星の」マトリクス理論] というものが前面に出され、LHC = 洗脳補助装置とのことが主張され続けているのがこれまた本稿つい先程にあってその内容を引用なして問題視した 2012 年刊行のアイク著作、Remember Who You Are Remember 'where' you are and where you 'come' from (本稿執筆現時、未邦訳。「2012 年」著作権表記『自分たちが何者でどこにいるのか、そして、どこからきたのか、思い出せ』と訳せようアイク著作) となる)。

委細についてはその問題点込みにしてこれより解説するが、とにかくも、月にまつわって、以上、概言したような特色を帯びているアイクの 2010 年に出た著作『人類よ。ひざまずくのを止めよ。ライオンはもうこれ以上、眠らない』にあっての、

[月が人工物である]

との主張の [「主たる」拠り所の一つ] となっているのはフリーメーソン所属のメーソン史研究者であると自認している人物ら、アラン・バトラーとクリストファー・ナイトという著述家らの手になる、

WHO BUILT THE MOON? 『フー・ビルト・ザ・ムーン?』 (邦訳版の同著版元は学習教材のみならず [陰謀「論」関連本] や [トンデモ雑誌] を出していることでも知られる出版社たる学習研究社 (手前とは縁もゆかりもない出版社) となり、その邦題は『誰が月を創ったか?』となる)

との特定著作にて呈示されている特定の主張内容、具体的には

[月と地球の間に横たわる「できすぎた」位置関係にまつわっての主張内容]

となっているとことがある。

当のデヴィッド・アイク自身がそちら著作、**WHO BUILT THE MOON? 『フー・ビルト・ザ・ムーン?』** が自身に多くのインスピレーションを与えた鍵となる著作であること、彼のここにて問題視している『人類よ。ひざまずくのを止めよ。ライオンはもうこれ以上、眠らない』の中で何度も強調している。

(: **HUMAN RACE GET OFF YOUR KNEES The Lion Sleeps No More** にあって (以下、引用なすところとして) “ **First a new subject comes into my life and then information about it comes from all angles. Who Built the Moon? details many extraordinary mathematical and other connections between the Moon, Earth and the Sun. The key to the alignments and connections is the size, position and movement of the Moon.** ” (即時訳として)「新しくも取り組むべき主題が私の人生に立ち入ってきた、そして、その情報が全方向的にもたらされることになった。書籍 **Who Built the Moon?** (邦題『誰が月を創ったか?』) は月・地球・太陽の間のまったくもって際立っての数値上およびその他の一致性について数多詳述しているとの著作となる。整然さおよび一致性にまつわってのキーとなるのは月のサイズ・位置・軌道である」(引用部はここまでとする)と表記されているとおりである —※—)

(※アイクに典拠として言及されている **WHO BUILT THE MOON? 『フー・ビルト・ザ・**

ムーン?』という著作の著者らのうち、エンジニアとの肩書きが付されてのアラン・バトラーに対してクリストファー・ナイトの方は[イエスのシンパラの古代にてのやりよう]と[メーソンの儀式性向]とを繋げての異説の展開をなしているとの書である **The Hiram Key** —— (邦訳版版元は学習教材のみならず[陰謀「論」関連本]や[トンデモ雑誌]をよく出すことでも知られる出版社であると直近言及した学習研究社となり、そちら、ハイラム・キーの邦訳版タイトルは『封印のイエス』となる) —— を共著とのかたちで世に出している、Freemason でメーソン史の権威であるなぞと[相応の者たち]の間では持てはやされている著述家ロバート・ロマス (Robert Lomas) との共著との式で世に出しているとの向きとなる。同著作 **The Hiram Key** (邦題『イエスの封印』)、作者ら (『フー・ビルト・ザ・ムーン』をものしたクリストファー・ナイトとロバート・ロマス) がフリーメーソン・イニシエーションを受けての筋金入りのフリーメーソンであるとのことが何度も文中にて自己言及されているとの著作ともなるのだが (彼ら曰くのところとしてフリーメーソンは【真っ当な親睦団体】であるなどとのことにもなっている中でそれも自己言及されている著作ともなるのだが)、同著作、フリーメーソンの特性にまつわってのこと以前に史的根拠の意味でまったく信用のおけぬ書 [unreliable source] となりもしている、

[それ専門の陰謀論あるいは捏造秘史関連のエンターテインメント読み物 一日本でも同じくものものが相応の専門出版社から[商売](との名目)で供給されているとの読み物—]

であると判じられるような著作にして、そして、(同著作が欧米圏でヒットを見たとの背景によるからであろうが) 同文の世評をもって欧米圏巷間にて幅広くも評されている著作となり、

[擬似史観] (中世十字軍の一角を占めていた Templar 騎士団が中東遠征の折にイエスの古代宗教に通ずる遺産を(ナザレ教団・クムラン教徒に由来するイエスの真の人生を伝えての死海文書がかったの記録)を発見した(らしい)、それゆえ、Templar 騎士団(聖堂騎士団)の衣鉢を継ぎもして Templar 騎士団残党としてスコットランドに辿り着き同地スコットランドで際立って異質なロスリン・チャペルを建立しもしたプレ・フリーメーソン(前メーソン)的なる紐帯、および、フリーメーソンそのものの儀式は[イエス自身が範とした真正なる古代の宗教様式]に倣っている等等との擬似史観)

がさも [真実] であるように記載されていたりするとの筋目の書籍となる (:そして、そのやりかたがあまりにも露骨なので同著者らが属していると明言しているフリーメーソンそれ自体からして公式見解として「同著はフィクションである」と断じていることが英文 Wikipedia [The Hiram Key] 項目なぞにも「現行にては」記載されているとの著作ですらある)。

同じくもの著述、ここにて問題視している『フー・ビルト・ザ・ムーン』の著者らのうちの一方がかつて欧米圏で出版してヒットを記録させたハイラム・キー(邦題『封印のイエス』)という著述は[インドのクリシュナ]が処女懐胎の救世主であったなどと[こじつけがましきこと](クリシュナには何人も先だって産まれては殺されていった兄弟らがいる)を並べ立てていたりする、といった式で何の記録的証跡もないこと、文献的事実として誤っていると即時に指弾されもしようことをさも真実であるように[断じるように語る]との手法が取られている書でもある(といった問題あるやりようはデヴィッド・アイクを含め欧米のマージナルな話を展開する向きに多く踏襲されている風もある。筆者は比較的青かった時分、それは典拠確認をきちんとなさぬがゆえのアイクのような著者自身のある種の信じやすさ・人の良さに起因しているとも見ていたわけだが。尚、世評とのことと言えば、同じくもの著作、『ヒラム・キー』が信用できないことにまつわっての[練れもいる批判]が世に出ていることは易々と確認できるようになっており、それは(再言

するが)同著がまがりなりにも欧米圏でベストセラーを記録しており、またもって、[物事を往々にして自分で考えぬとの多くの人間にさえその内容が口撃できるとの基本的なところでの過る側面]が広くも認識されているから、そう、世間一般の取り上げたくはないものは無視するとの筋目の向きら(【偽り】に生き、【偽り】に殺されても文句を言う資格もなからうとの【偽り】への隷従者ら一般)「にも」嬉嬉として叩かれているとのことがあるからであろうと個人的には見ている))

物議を醸すようなアイク説(あるいは「最悪の状況ならば」アイクという看板を用いて流通させている説)に材料に提供している『フー・ビルト・ザ・ムーン』をものした著述家クリストファー・ナイトと共に上述の著作『ザ・ヒラム・キー』(邦題『封印のイエス』)をものしたロバート・ロマスのほうの経歴はビジネス系の科目で教鞭をとる大学職員と「世間的にはそこそこにまとも」と看做されやすい生業—嘘・偽りをこととする頻度が(それが妥当かどうかは別として)俗世間では少ないと「看做され」はするとの生業—に就いてはいるが、判断は[肩書]などではなくそうした論者ら申しようの中身、その[検証]をなしてからにすべきであると強くも申し述べたき次第ではある—ザ・ヒラム・キー(邦題『封印のイエス』)といった著作を読んで「なるほど。」と納得がいくことがあるとすれば、そこにフリーメーソンの者らが[目隠しをかぶせられ首に絞首の縄をつけられているとの姿]で儀式に臨み、そして、[復活・目隠しを外しての[啓蒙]の過程の擬似(あるいはその擬態)プロセス]を経験するなどとされている記述、そこから、「相応の」ゾンビ的ともとれる人間によって成り立っている組織が[イルミナティ](光を与えられたもの)なぞと陰謀「論」者らに呼ばれての[存在あやふやなるもの]と結びつけられている所以(ゆえん)が容易に部外者「にも」推察できるとのことぐらいではないかとも私的にはとらえているが、そうしたことは「本稿の後の段にて細かくも論ずる」とし、ここ本段では置く—。

(※ここまでの内容からアイクの説に影響を与えている著作(フー・ビルト・ザ・ムーン)著者らにつき不当かつ卑劣なる[人身攻撃](論理ではなく論者を攻撃するとの式)をなしているとの判断をなされかねないかとも思う、ゆえに、そうした誤解を避けるためにも申し述べておくと、『フー・ビルト・ザ・ムーン』という著作にはその内容の根底となるところで、

「ここをば掘り下げることが何故、掘り下げないのだ?」「どうしてこういふところではこうも胡散臭い掘り下げ方をするのだ」(たとえば、である。同文の式はグラハム・ハンコックのような欧米圏の他の論客にも当てはまるわけだが、大風呂敷にも[神がかった遺産](と強調されてのもの)を持ち出している割にはそれを造りだした(と強調されての)太古の存在・超常的存在が[現代社会に至るまで介入をなしている存在]であるとの可能性がほぼ無視され、かつ、その存在が[未来の人類]であるなどとの「これはおかしな論理だ」との強調があわせてなされるなどとのやりようが目立ってなされていたりする—まだ【過去にて存在した文明種族の遺産】との方が説得力ある論理であろうところを【未来にての人類の過去遡行の遺産が月であろうと考えられる】などとの捻(ひね)った見解が提示されていたりする(それについても本稿でも後述する)—)

といった側面が少なからず伴っているために著者ら来歴も加味して[相応の情報操作のための著作]とも受け取れる可能性が払拭できないとのことを示しておく必要があるか、そうした観点で著者ら(クリストファー・ナイトおよびアラン・バトラーの両二名)のうちクリストファー・ナイトの方がフリーメーソンとして問題ある従前著作(欧米圏でヒットを記録したものの、諸方面からの批判に曝されてもいる『ハイラム・キー』)をものしもしていた向きでもあることに言及した)

ここからが本題である。デヴィッド・アイクは『フー・ビルト・ザ・ムーン?』のいかなるような記載内容を問題視しているのか。その点につき該当するところを引用する。

(直下、『フー・ビルト・ザ・ムーン?』の訳書、『月は誰が創ったか?』にての p.16、[皆既日食]の具現ありようが一種の数値的奇跡に依拠しているとの部より引用するところとして)

月は太陽に比べるとごくちっぽけな天体だが、われわれにずっと近いおかげで同じ大きさの円盤に見える——ということはたいていの人がよく知っている。正確にいうと、月はわが太陽系の中心にある恒星に比べて直径で 400 分の 1 のサイズだが、同時に地球から太陽までの距離で 400 分の 1 の近さに位置しているのだ。相対的な大きさと距離が 400 という驚くほどのキリのいい整数値で表せるのは、十進法上の愉快的偶然の一致のように見えるが、このような光学的錯視が生じる確率は、実はとてつもなく低い。だから専門家はこの現象に当惑しきっていて、あの尊敬すべき科学者で SF 界の大御所アイザック・アシモフも、この完璧な視覚的配列を評して、「想像できるかぎりありえない偶然の一致の最たるもの」と述べている。

(国内にて流通を見ている訳書よりの引用はここまでとする)

(直下、同じくもの『フー・ビルト・ザ・ムーン?』の訳書、『月は誰が創ったか?』にての p.234 より引用するところとして)

月は太陽の大きさの 400 分の 1 である。

月は太陽と比べて 400 倍近い。

月は 1 地球日について 400 キロメートルの速度で自転する。

これは偶然の一致だろうか? そうかもしれないし——そうでないかもしれない。

地球は 1 日 4 万キロの割合で自転し、月はほぼ 100 倍遅い速度で自転している。月はつねに地球に同じ面を向けながら地球回転軌道上に移動しているが、赤道の自転速度が 1 地球日のきっかり 1 パーセントになるように平均的距離が保たれている。この数字はどれも検証可能で、議論の余地がない。これだけの事象がすべて偶然でありえるだろうか?

たしかに、この状況をもっと深く調べたいと思わないのは、愚か者だけだろう。とはいえ、見たところ不可能そうなことを考察しようと思ったわれわれを他人がどう見るか、あくまでも現実的に行動しなければならない。専門家の多くが、いや、おそらくはほとんどが見て見ぬふりをするだろうと、われわれは覚悟した。

(国内にて流通を見ている訳書よりの引用はここまでとする —※—)

(※1: 上のような Who Built the Moon? の内容に基づき、デヴィッド・アイクはその著作 HUMAN RACE GET OFF YOUR KNEES The Lion Sleeps No More の 14 Spaceship Moon [第 14 章: 宇宙船「月」] の章にて以下、引用なすようなことを述べもしている⇒ “ Christopher Knight and Alan Butler reveal in Who Built the Moon? many remarkable mathematical connections with regard to the Moon, Earth and the Sun using the base number of ten. These mathematical synchronicities only work with these three bodies and not with any of the other planets or moons in the solar system. The Moon is 400 times smaller than the Sun, and at a solar eclipse it is 400 times closer to Earth. This makes the Moon appear from Earth to be the same size as the Sun - hence a total eclipse (Fig 155). The Moon has astonishing synchronicity with the Sun. When the Sun is at its lowest and weakest in mid-winter, the Moon is at its highest and brightest, and the reverse occurs in mid-summer. Both set at the same point on the horizon at the equinoxes and at the opposite point at the solstices. What are the chances that the Moon would naturally find an orbit so perfect that it would cover the Sun at an eclipse and appear from Earth to be the same size? What are chances that the alignments would be so perfect at the equinoxes and solstices? ” (即時手仕事な

がらも最低限の注記は付しての拙訳を付すとして)「クリストファー・ナイトとアラン・バトラーの両者は彼らの著述『フー・ビルト・ザ・ムーン?』の中にて十進数の系に依拠して月・地球・太陽にまつわっての際立って着目に値するとの数値上の繋がり合いを明らかにしている。これら数値上の一致性は月・地球・太陽の三者にあつてのみ作用しているのであつて太陽系の他の惑星・衛星に関してはそのどれもがそうした一致性の問題とは無縁である。**【月は太陽より400倍ほど小さく、日蝕の折、太陽より400倍ほど近いとの位置に月は地球側に寄って来ることとなる】** (訳注:日蝕を引き起こすのはサイズ・距離の比率の問題の一致性に収斂しているようにデヴィッド・アイクは同じくもの部で述べているが、であれば、日蝕は常日頃起こっていなければならないことになる。が、しかし、現実には交点(node)と呼ばれるところでのみ日蝕は起こるようになっている。より具体的には月と地球の obliquity of the ecliptic、黄道傾斜角がおおよそ5°程度の揺らぎを呈している中でその差分・ズレを吸収するかたちで地球と月の軌道が重なり合う[交点](ノード)上の妙技としてのみ**【太陽・月のサイズと距離の比】**が生きてくる、そこでしか日蝕が現出しないとのことがある。デビッド・アイクはそうしたことに満足に触れはしていない —英文 Wikipedia[Eclipse]項目より引くように “Because the orbital plane of the Moon is tilted with respect to the orbital plane of the Earth (the ecliptic), eclipses can occur only when the Moon is close to the intersection of these two planes (the nodes). ” とのところが該当するところのノードの問題についての記述である(訳注はここまでとする) —)。 こうもしたありよう(月と太陽のサイズは1対400の関係にあり、その距離比も1対400にあるとのありよう)が月をして地球から太陽と全く同じサイズで見せもしており、そのうえ、皆既日食を引き起こしもする。月は驚くべき一致性を太陽との間に呈している。太陽が厳冬期、その力をもっとも弱めている際に月は最も高く輝いており、それが真夏では逆転しもする。両者とも[分点]にあつてはまったくおなじ地平線上のポイントにあり、また、[至点]にあつては地平線上の反対のポイントにある。一体どうして自然界にあつて月が[蝕]の折に太陽をまったく同じサイズであるようにすっぱり覆い隠すとのことが起こりえるというのか(その見込みなど普通はないであろう)。また、一体どうして分点および至点にての両者の完璧な位置関係が見てとれるなどというのか(その見込みなど普通はないであろう)。(訳付しての引用部はここまでとする))

(※2:「月はどこぞやらの異星系よりやってきた異星人の手仕事としての宇宙船である」とのデヴィッド・アイクのそれと同じくもの言説は1970年に遡つての学者ら由来のものとして存在している(意外であると思われるところだろうか)。デヴィッド・アイク彼自身が[軽んじざるところ]としてそうした説の存在にはきと言及しているように、[仮説]として旧ソ連の天文学者ら —ミヒャエル・ワーシンとアレクサンドル・シチュルバーコフの両二名— によつて問題提起されたとの言説がそれなのだが、そちら1970年仮説の言い分としては[月と太陽と地球の玄妙なるサイズ・比率の問題]に代えて

「月の組成は地球のそれと異なる」

「月の内部は空洞であると判じられる材料があるが、そのようなことは人工物以外にはおおよそ考えがたい」

とのことが目立って前面に出されていた。

以下、英文 Wikipedia[Spaceship Moon Theory]項目より目につくところの記述を引けば、

“The Spaceship Moon Theory, also known as the Vasin-Shcherbakov Theory, is a hypothesis that claims the Earth's moon may actually be an alien spacecraft. The hypothesis was put forth by two members of the then Soviet Academy of

Sciences, Michael Vasin and Alexander Shcherbakov, in a July 1970 article entitled "Is the Moon the Creation of Alien Intelligence?" [. . .] Their hypothesis relies heavily on the suggestion that large lunar craters, generally assumed to be formed from meteor impact, are generally too shallow and have flat or even convex bottoms. [. . .] Additionally the authors note that the surface material of the moon is substantially composed of different elements (chromium, titanium and zirconium) from the surface of the Earth. They also note that some moon rocks are older than the oldest rocks on Earth.” 「月宇宙船理論、あるいはワーシンのシチェルバーコフ理論は地球の衛星・月は現実には異星人の宇宙船であるとの仮説となり、同仮説、ソヴィエト科学アカデミー（訳注：どうやらソ連科学アカデミーの関係者らは体制当局側に極めて厚く身分保障されての生粋のエリートだったらしく、[アカデムゴロドク]との学術都市の貴族的的生活に見られるようにその生活水準は絶望国家として悪名高いソ連でも実に安定的なものであったとされる；要するに先進国で胡散臭いとされがちな市井のサイエンティストとは異なる毛並みがいい(毛並み整えられた)者達由来の説だと述べたいのである)のメンバーであったミハヤエル・ワーシンとアレクサンドル・シチェルバーコフの両二名によって『月はエイリアンの創造物か？』との題名の論稿を通じて1970年7月に初出を見たとのものである。……(中略)…… 彼らの仮説(月は内部が刳(くり)抜かれて空洞となっている宇宙船であるとの仮説)にて「重きをなす」ところは世間一般に隕石落下の衝撃によって生まれ落ちたとされる月の巨大クレーターが総じてあまりにも深度が浅いものとなっている、それでいて、平面ないし凸面をなしているとの底面構造を有しているとのことに着目しての部となっている。……(中略)…… 加えてワーシンとシチェルバーコフの両著者らは月の岩(訳注：日本では固有名詞化してのいわゆる[月の石])の物質組成が地球のそれと異なり、クロム・チタニウム・ジルコニウムとなっていることに着目し、加えて、彼らはある種の[月の石]が地球にての最古の岩石の類よりも古い(と分析されている)とのことに着目もしている」(訳を付しての引用部はここまでとする)との伝での異説が呈されていたとの背景がある(尚、SpaceShip Moon Theory [月宇宙船理論]についてはWikipediaのCriticismの部にて“we can then calculate the density, which strongly rejects the notion that the moon could be hollow.”「我々は(調査から)月が空白たりうる可能性について強固に否定するところの計算を導出することができる」とのポーツマス大学の学者ら(Karen Masters)の【重力場】調査などに基づいての見解も載せられていること、一応、付記しておく)。

そうした異説の内容までも踏襲して、また加えもして、[伝聞のいかがわしい証言ら]を元にしてデヴィッド・アイクは「月は宇宙船である」と断じきり(いかにもその断じきるとのやりようがアイクらしい式である)、の上で、「レプティリアン(と彼が呼称する爬虫類の系譜に連なる高度知性生命体)の地球操作のセンターは月にある」とまで断じきるとのことまでなしている——※最近はそのような論理(月こそ操作のセンターであるとの論理)に加えもして、彼デヴィッド・アイクは「土星ことサターンが月の背後に控える操作のメイン・センターである」との主張にまで歩を進めているのだが、ここではその批評は講じないこととする(先だっこの部では土星ことサターン(サトルナス)へのそうしたアイクの言及のなしようが「よりもって従前よりの手前なぞのオンライン媒体にての呈示手法」と、向こうが後続する方向でながらも、「なぜなのか」やりようとして似ている、のような中でアイク言いようがこの世界では目につくようになって、であるから、[重なり合いの問題]で「この身申しよう」や「フリーメーソンの相応のサトルナス(土星体現神格)関連のシンボリズムの問題について訴求しようとするとの後のありうべき勇士らの(まだ時間的猶予が幾ばくか残っていれば、もの未来の)言説」までが

[進化する「相応の」言説]にて[錯視;重ねあわせ効果]からダメージを受ける可能性がある(少なくとも、物事をきちんと見ようとしない、それでいて何やら限界領域の問題に分け入っているつもりであるとの妄動の向きらによっては彼らの言論土壌の破壊に通ずる悪しき妄動の足しにされる可能性がある/検討意欲もないとの臆病者に「また例の法螺か」との逃げの名分を与えることとされる可能性がある)との観点で同じくものことに多少筆を割いていたわけだが、そのことはここでは置く——)

ここまで細々と紹介してきたことであって確かにもってして太陽・月・地球の位置関係は
[実にできすぎたもの]
として映る。

その点もってして、

[月が一日 400km自転すること]

[地球が一日 40000km自転すること]

[月と太陽の(対地球の)距離比が 1:400 及にあること](皆既日食現出の原因)

[月と太陽のサイズ比が 1:400 となっていること](皆既日食現出の原因)

を合い並べて強調するだけ、そう、それだけでは[詭弁]に留まっていると見る向きもあるかもしれない(「当初」、本稿筆者もそうした心証を覚えた)。

が、以下、続いての表記をご覧頂き、同じくものことの意味合いについてお考えいただきたい。

第一に

[「(地球を基準点にしての月と太陽の)距離の比率」および「サイズの比率」が同じくもの 1 対 400 となっている]

とのことからしてできすぎている、極めて不自然(すなわち人工的)であると映るだけのことがある(自然界の法則としてそうなりやすいとのことがあるのではないかとのことについては否定の弁を続いて後に付す)。

第二にサイズ比率 $x:400x$ の x 、月の直径が 3474 キロメートルである(現実に月のダイアメーター、直径はおよそ 3474km であると認知されており、太陽のそれはおよそそれに「400.887」倍しての 1392684km であるとデータ表記されることが多い)とのことある中で月が一日 400 キロメートル、地球が 40000 キロメートルの割合で自転するなどのことまでを持ち出すことは詭弁の徒のこじつけのように映りもする中で、だが、現実にはそうではない(こじつけなどではない)と解されること「も」ある。[およそ 400]との共通のまとまった約数、とすれば、

[$2 \times 2 \times 4 \times 5 \times 5$]

との約分にあつてのまとまったの共通要素が「km」との度量衡単位 —後述する— を基礎にして

[月・太陽の「サイズ」・「距離」の比率](うち片方の「距離」の比率は「地球を基準にしての」距離の比率)

と

[月・地球の回転性向]

とを架け橋するものとしてそこに具現化していることまでは[事実]であるからこじつけではなかろうと判じられる(月は 400「km」一日に自転するとの観点と月を含んでの球体サイズ比および距離比がほぼ「400」となっているとの観点(サイズ比では「400.887」などと

の計算が小数点以下換算の方式で若干の誤差、0.2ぐらいの誤差を伴って問題となる)との比率問題があわせて呈示されれば、[それら数値上の一致性に何らかの関係性がありうる]と考えるのは普通のことであろうかと思う)。

にまつわってはそうした一致性をきたすのは

[何らかの自然界の作用 (相互重力作用、たとえば、万有引力の法則などに通ずるところをもってしての自然界の作用) に起因する衛星の形成性向の「自然なる」問題]

ではないのか?と即時・即座に脳で疑念視するのが [健全な脳] の作用 —知識は伴わぬも健全に働いてはいるとの脳的作用— かとは思ふ。

だが、当然にその点について「普通に」まずもって疑いもした本稿筆者からして太陽系の内部の惑星らの主たる衛星の仕様 (木星の周囲をまわるカリストやエウロパや火星の周囲をまわるフォボス —60年代、こちらからして人工天体説が強くも取り沙汰されていた火星の衛星— やダイモスなどの太陽系惑星ら衛星、大は月よりも巨大か同じくらいに大きいものから小はアステロイドであろうとのものまで色々ある) の即時チェックをなしても同じくもの [比率の玄妙さ] は他の惑星・衛星間に認められないばかりか、そういう玄妙なる一致性をきたすとの自然界作用が働くとの話がなんら特定・捕捉できない、のみならず、「月と太陽のそうした位置関係は今時分にだけ現出している特殊なものである (だから、自然界一般にそういうことがあるわけ「ではない」)」との反対論拠(後述)が目についたとのことがある。

話を続ける。

[自然界の作用 (重力作用、たとえば、万有引力の法則などをもってしての自然界の作用) に起因するところの衛星の自然なる形成性向の問題]

では説明なしがたい(と少なくとも映る)とのものでありながらも地球一月—太陽の数的関係性が実に「整然とした」ものとしてそこにある、繰り返すが、皆既日食具現化の原因ともなるところとして、

[月のサイズは太陽の大きさの 400 分の 1 である] (皆既日食具現化に通ずるサイズ比)

[月は太陽と比べて地球に 400 倍近い] (皆既日食具現化に通ずる距離比)

[月は 1 地球日にあつて 400 キロメートルの速度で自転する。対して地球はその 100 倍速くもの 4 万キロメートルにて自転する]

とのことについて、筆者は 10 進数以外でどうなるのかとのことについてざっと計算なしで見るとのことまで当然になしている。

例えば、である。数のありようを(16進数などに変換するならばいざしらず)10進法から3進法 —1, 2, 0しか数がなく、2の次で桁上がりする数の体系— に変換して見てみるといったことをなしているのだが、少なくともそれでは [不可解さ] は減じはしない。x:400xとの比率が問題になっているところで1日400km自転とのありようを持ち出されてしまうとその伝での数的操作をなしても、(base,すなわち、数の底(てい)をいじることができる表計算ソフト(spreadsheet)のBASE操作機能の操作 —たとえば、フリーでダウンロード使用できる無償のエクセルとでも言えよう OpenOffice.org Calc では=BASE(10;2)「10を二進法に変換せよ」といった方式が用いられる— にて少し慣れた向きにはすぐに変換できようこととして)、10進法での [400]は3進法表記で [112211]であるから [月と太陽のサイズ比率 x:112211x] とのことがあるのに対して

[月—地球と地球—太陽の距離比=x:112211x]となる、であるから、玄妙な一致性は縮減するどころか[一層際立って見えることになる]と解されるどころとなる(ちなみに[400]との数にまつわる一致性は精妙なる暦を遺していたことで知られるかのマヤ文明などで用いられていたとされる[20進数;Vigesimal]—我々現行人類が使っている10進法にての11との数をアルファベットA,12との数をアルファベットBといったものに代替させて20まで数えたところで桁上がりをなすといったような表現が現代的観点ではなせるところの20で桁上がりする記数法—に試みに変換してみるときっかりと[100]にまつわっての一致性になり、一層もって[できすぎさ]が際立つとの式の一致性でもある。何故[できすぎ度合い]が際立つかと言え、100とは三桁目に初めて到達しての数であり、そこにゼロとの特殊な値が二つ付属するからである(しかもってして細々したところに重ねての細々とした注釈を加えておけば、マヤ文明は20進数を用いていたが、数値としてではなく絵記号としてゼロを使っていた(ゼロの観点それ自体はあったとも)とされるから厳密にはできすぎ度合いの意味合いがマヤ文明成員それぞれが考えることができたものと多少異なるとも見えるとのこともあるのだが、それは置く)。

直前にての括弧内にて言及の20進数の問題はいいとして、他面、記数法の桁上がりの基準を別方向でかさ上げすれば、たとえば、16進数のシステムだと400は190となりもし、多少、ゼロの減退とのことで切りの悪い数に落ち着く。さらに[24進数]だと[GG](アルファベットで足りぬところを補っての数値体系にてのGG)とさらに[一致性の幅]がありふれた二桁の数(にまつわっての一致性)に見えるようになる(10進数の悪戯のことを問題にするのならば、一二〇進数はさておきも—16進数だとか24進法のことからまで問題視せねばならない)。

とにかくも

[10進数のためにそうも見えるだけの妙技]

との観点は若干ながらも述べられるところがあるのだが(月と太陽のサイズ比率、および、[地球—月]距離と[地球—太陽]距離における出来すぎ度合いが10進数がゆえに目立つとのことは若干ながらもあるのだが)、それとて[たかだかもの偶然]を強くも主張するうえでの助けにはあまりならぬか、と(いまひとつ足りぬ検討性向・十全に確保できぬとの検討時間の問題から実にもって不十分不適切ながらかもしれないと自身で断りながらも)個人的には考えもしている。

ここで書くが、[偶然性]で済むかの問題の重大ポイントは[メートル]や[キロメートル]、そして、[ヤード]といった[度量衡の単位系](systems of measurement)に通底しもするとのことに収斂しているようにも見える(とのことがある)。であるから、その点はどのようなのかとの観点での話をなすこととする(同じくものことも健全な頭脳が検証すべき当然の点であろうと判じて、である)。

さて、([月は1地球日にあつて400キロメートルの速度で自転する。対して地球はその100倍速くもの4万キロメートルにて自転する]との点にての)400kmにおけるキロメートル(km)との単位は無論、1000メートルを指すわけだが、[長さ]と[数]の対応関係をメートル法で考えない、ヤード法で考えるとどうなるのか。1ヤードは現行にての基準では0.9144メートルとのことにあいなり(逆に1メートルは約「1.0936」ヤードとなる)、そちらヤードをここでの話に導入すると、

【太陽と月の大きさ(サイズ)に見る400:1との比率】 **【太陽と月の距離(地球から見ての月と太陽のそれぞれの距離)にあつての400:1との比率】**

との純粹に割り算にて導出されてくる相対的比率にあつての数値は無論、相互一致性を保って残置する中で、だが、キロメートルという度量衡単位に依存している、

急遽差し替え版
にあっての誤記
訂正:

訂正をなす。取り
消し線部は次の
ように表記すべ
きところである
→
[400メートルと
のメートル方式
をヤード方式に
なすとおすは
かすんでくる。

400対1との月と
太陽のサイズ比・
対地球距離比に
関係があるように
「見えていた」と
の[地球4万キロ
メートル自転時
月400キロメー
トル自転]との400
に根ざす関係性
はメートルから
ヤード変換すると
400が437に変
じるからである
[ゆえに距離単
位系が月と太陽
の異常に目立つ
のできすぎた
関係性を過度に
演出しているとも
見える][しかし
(多少こじつけが
ましいが)400と

のきりのいい数
字をメートル単
位400メートルで
なくヤード単
位400ヤードと勝
手にも切り替
えて見てみると
、400ヤードは
365メートル相
当となり、太陽
暦1年日数(地
球の対太陽公
転周期)そのも
のの数値が出て
くるとのことが
他面でも想起
される。乗算除
算を逆転させ
てみれば、メー
トルとヤードの
1:0.9144との
比から400と
の数値より365
が導出され、地
球・月・太陽の
位置関係に通じ
やすい、そのた
め、できすぎて
映る]

「(月が)400キロメートル —せんだって紹介の表計算ソフトの関数機能でものの
数秒も関わらずに導出できるところとして 400kmは3進数(trinary)なら
112211km、4進数(quaternary)なら1200kmとなる— 自転移動、地球が4万
キロメートル —40000kmは3進数(trinary)なら20002112211kmとなり4進数
(quaternary)なら201301000kmとなる— 自転移動。」

との実にもって

[きりのいい数] (と「10進数に基づき」評される)

は視界から消えてなくなることになる(:400kmとの単位系がなく $400 \times 0.9144 \text{ヤード} = 365.74$ であるとのヤードしかない世界を想像いただきたい)。

そうもしてここでの話は度量衡単位、その中の近代に成立したメートル法に負うところ
が強くもある話であると[批判的な向き]には強くも指摘されるような側面が「なくはない」。

だが、そうしたことをやってしまうと[新たな問題]が首をもたげてくる。何故か。

「(月が)400キロメートル自転移動、地球が4万キロメートル自転移動。」

とのかたちで[数値の底に依存する10進数のシステム]ではなくに度量衡単位の方
に強くも[きりの良さ]が依存しているとの問題(月と太陽のサイズ・距離比の400に極
めてよく照応するように見える問題)は消えてなくなるが、そこでは新たな奇怪な一致
性の問題が出てくる、メートルと並んで現代の長さの尺度を二分するヤードを用いると、

[400metre (メートル) → (変換) → 365.74yard (ヤード)]

訂正:(正しくは) 400metre = 437.44yard (また、400yard = 365 metre)

とのことになり、そこにある[365.74]は太陽暦の一年の日数に「あまりにも」近似
している(グレゴリオ暦の一年の日数は365.2425日である)とのことが目に付いてくる
とのことになる。

ここで読み手はこう思うかもしれない。

『では、ヤード法に見るヤードという単位のはつまるところ、[太陽と月の比率]
(よくできた400:1との比率)と比較した際の月の一日自転距離(および地球の
一日自転距離)がそのまま太陽暦一年の日数(地球の対太陽公転周期)に収
斂するようにはなから考案されている単位系なのではないか?』
(あるいは一同文に問題となることとして— 『従前定義不明瞭であった慣
習的単位であるヤードに後発するような側面があるとのメートルという単位系は
ヤードの365 (→訂正:太陽月サイズ・距離比の400) を400 (→訂正:太陽
暦日数365) に変換すべくも人間レベルで考案された単位系ではないか?』)

だがしかし、ヤード法およびメートル法の縁起由来・定義ありようを望見する限り、以
上のことらに対してそうだと考える余地は「乏しい」と判じられる、少なくとも人間のレベ
ルではそう考える余地が「乏しい」と判じられるようになっている。1年をして365日とす
る太陽暦(Solar Year)とはそもいかようなものか。最低限の一般教養の問題ながら述
べれば、それ(太陽暦)とは

[地球が太陽の周りを一周する期間をして1年としてその中に日数が365日(プラス閏
年などの調整分)が内包されていることを端的に表してのもの]
である。

といったソーラー・カレンダー、太陽暦の始原期は古代に求められることが知られて
いる(古代エジプトの暦は既に太陽暦だった等等)。たとえば、である。たまさか目に

急遽差し替え
版にあっての
誤記訂正:

この部にあ
つては同時読
解著作の内容へ
の過る拘泥
と除算と乗算
の計算ミスと
のかたちで
[不手際甚だ
しくもの誤記]
をなしてしま
っている(ので
訂正をなす)。
正しくは

[400×1.0936
= 437.44]

となる(400
ヤードは365
メートルに等
しいものの、こ
で誤記なして
いるように400
メートルが365
ヤードに等しい
などのことは
ない)。

なお、事後の
部もここでの
誤記と同様の
不手際に引き
づられて一部
誤表記をなし
ているため、
それらの部の
順次訂正もな
す。

付いた Project Gutenberg のサイトにて公開されている ランカスターの貴族の手になる MORE SCIENCE FROM AN EASY CHAIR『安楽椅子より分かる多くの科学』との著作(1920)からその記述をひとつ引いてみれば、“ But the Greeks made three weeks of ten days each in a month. The true year—the exact period of a complete revolution of the earth around the sun—is 365 days 5 hours 18 minutes and 46 seconds. It was measured with a fair amount of accuracy by very ancient races of men, who fixed the position of the rising sun at the longest day by erecting big stones, one close at hand and one at a distance, so as to give a line pointing exactly to the rising spot of the sun on the horizon, as at Stonehenge. ” などとのこと、大要、「真に一年が 365 日 5 時間 18 分 46 秒となるなどとのことはストーンヘンジに見るような巨石を打ち立て太陽の位置関係をライン上に再現するなどして太陽位置を計っていた古代人からしてかなり正確に測定していた」などと[表向きの人間の天文発達史]について建て前上、記載されていると
のことがある。 そうもして太陽暦が地球が太陽の周りを一周する(原始的ありように依拠すれば季節折々にての太陽の配置を見つめて導出されている) とのものであるのに対して、他面、ヤード法とは何か、だが、その起源については諸説あれど、表立って説明されるところでは

(以下、英文 Wikipedia[Yard]項目の Origin theories の部にての記述を引くとして)

“ The precise origin of the measure is not definitely known. Some believe it derived from the double cubit, or that it originated from cubic measure, others from its near equivalents, such as the length of a stride or pace. One postulate was that the yard was derived from the girth of a person's waist, while another claim held that the measure was invented by Henry I of England as being the distance between the tip of his nose and the end of his thumb. ”

(和文ウィキペディアに記載されているところの対応する表記を同文に引くとして)

“ ヤードはその長さから、古代から使われていた長さの単位であるキュービットの二倍のダブルキュービットが元になっているものと考えられる。しかし、ヤードの起源とされる説は多数ある。／アングロサクソン人のウェスト回りのサイズがヤードである／イングランド王ヘンリー 1 世が、自分の鼻先から親指までの距離をヤードとした／これらはダブルキュービットから派生した各種の単位の起源であり、それらを統一するためにヤードという単位が作られたと考えられ、また、ヤードの標準化の過程であるとも考えられる。ヤードという言葉は、まっすぐな枝または棒が語源であるとされている ”

(引用部はここまでとする)

といったものとなる。

そうもした常識的な[太陽暦の由来]や[ヤード法のきしたし]にまつわる説明をなしたうえで述べるが、近代 1893 年にて正式に対メートルの比率が定められた(それ以前まではかなりアバウトに運営されていた)との慣習的単位であるヤードについて
[400 との太陽・月の純粹なる比率(や月および地球の自転周期)を対メートルで太陽暦一年の 365 に変換する]

のがヤードとの単位、[Yard Converter]としての単位系であるなどとの話は「常識の世界では」聞かれないようになっている。

その点、ここにて問題視している著作 Who Built the Moon? —デヴィッド・アイクに月が人工物であるとの主張の論拠を提供しているとの著作— に影響を与えている Alexander Thom アレクサンダー・トム(あるいはソーム)というイングランド巨石文明の研究者由来の見解としてエジプトに由来する Royal Cubit なる古代にて流通していた原初的単位がヤードにその伝での影響、近代にて定立されたメートルの定義付け(革命後フランスにて 1791 年に【地球の北極点から赤道までの子午線弧長の 1000 万分の 1】との定義がなされたとのメートルとの度量衡に対応する定義付け)にも相互作用する式での影響を与えたとの見方がある、巨石文明に遡るヤード単位、すなわち、[メガリス・ヤード Megalithic Yard]なるものが持ち出されての見方があり、それでもってし

て Who Built the Moon? の著者らが ~~400~~キロメートル系は366に変換可能である、
[そこからしてできすぎている。(今日のメートル定義にも照応するような) 古代の叡智の
賜物だ]

などとの話をも展開しているとのことがありもするのだが(彼らはそうした度量衡単位
の仮説上の沿革を問題視する一方で [メートルとヤードの定義の背面にあって作用し
ている操り人形を手繰る力学] にまつわってのありうべき可能性については露も口に
出さず [古代の叡智の賜物] であるなどと強弁している)、だが、しかし、それとて往々
にしてメインストリートでは全く認められていない、

Pseudoscientific metrology、

すなわち、[スードウサイエンティフィック・メテロロジー、似非科学的計測学]の領分で
あるとの評価が一樣に下されている節がある (: ともってして述べれば、現行使われ
ている度量衡単位としてのヤード、400meter (→yard) ⇒ 365yard (→meter) ときつかり
なせる変換性向を有したヤードは [1893年にメートルに対応するものとして定められ
た]と公表されているところとなっている。にまつわっては [太陽と月のサイズおよび対
地球距離に見る比率である400を太陽暦のおおよもってしての一年日数に変換する
ための単位として(メートルに対応する式での)ヤードの統一的な定義付けをなした]
などとの意思表示は全くもってして伴って「いない」と見受けられる (1893; defined
without referring to [400 meter (→yard) ⇒ 365yard (→meter)] converter function))。

さらに、である。ヤードとの単位は厳密な長さが微調整、時代毎に変転・変遷を遂げ
ていったものでありながらも11世紀のイングランド王、ヘンリー1世 (Henry I) の折より
すくなくとも存在していたとされ(上にてのウィキペディア引用部にも同じくもの見解が
みとめられる理解である)、かつもってして、その折の定義のありようは今日のインチ法
に対応するものとして極めてアバウトなものであったとのことが史実の問題としてよくも
語られている (: 信憑性の薄い歴史的挿話としてヘンリー1世が自分の鼻先から親指ま
でをもってして1ヤードとするようにあらためさせたといった話が伝わっているなどとされ
ている。同点についてはヤード変換性向の奇怪性・できすぎ度合いから筆者自身非常に
疑念視しているのだが、については依然もってしての「？」(疑問符)をつけるに留め
てここでは(この身浅見さと検証の難度から)あまり深くは踏み込まないことにする(※))。

(※尚、節義の問題として付記・解説しておくが、直上にて言及したようなヤード法の不可思議なコンバーティング性向(変換能力) —地球と月と太陽の数的関係性で際立って目に入るとの400を度量衡単位の問題としてメートルを介して一年の日数(地球の太陽周辺公転周期)に置き換えるとの変換性向—のことがあるような中で欧州中世暗黒時代にてその知識が一端破壊されたとの古代ギリシャから太陽と月のサイズの想定や両者と地球との距離のおおよその測定の試みが —不十分ながらも— なされていたことが知られている。例えば、である。目につくところの記述として和文ウィキペディア[太陽]項目にあって

(以下、引用なすとして)

“ 太陽を天文学的に観測した初期の例は、古代ギリシアのアナクサゴラス(紀元前500年頃 -- 紀元前428年頃)が800km離れたシエネ(アスワン)とアレキサンドリアで同時刻の太陽視差を測定し、三角法で距離と大きさを求めた。これは、地球は平面という前提でなされたもので、距離を6400km、直径を56kmと算出し「太陽はペロポネソス半島ほどの大きさ」と述べた。実際とはかけ離れた数字だが、当時のギリシア人はあまりの大きさに誰も信じなかったという。地球が球体という前提で距離を計算したアリストアルコス(紀元前310年 - 紀元前230年)が日食時に月と太陽の視差がほぼ同じという観察を根拠に三角関数を用いて月と太陽までの距離を計算した。さらにヒッパルコス(紀元前160年 -

急遽差し替え版にあっての誤記訂正:

この部はメガリスティック・ヤードとのものにまつわる366関連説についての履き違えての誤記であるため、誤記削除とする。

紀元前 125 年)が精度を高めた計算を行った”

(引用部はここまでとする)

どのような言われようがなされており、またもってして、ローマ時代の地理学の大家(にして古典的天文学の大家)たるトレミーことプトレマイオス、彼プトレマイオスの手になるローマ期成立古典『アルマゲスト』(注:同『アルマゲスト』、2世紀、紀元148年あたりに成り、その後、一端もってして歴史の闇に消えながらもギリシャ・ローマ期の知識が伝存していたイスラム世界経由で欧州に再流入、中世末期にて往時人類最先端の天文学者らに[天文知識のデ・ファクト・スタンダード]を提供してきたとされる(古代の)天文学の集大成とでも言うべき書物となる/ただしもってして同著については天体データが甚だしくも不正確である、あるいは、それからさらに進んで後世の天体データが用いられているとの作成日付捏造が取り沙汰されているようなところがある — 『アルマゲスト』の欺瞞性の問題については(欧米圏で一部識られているところとして)ロバート・ニュートンという20世紀天体物理学者によって書かれた論稿 *The Crime of Claudius Ptolemy* (1977)の内容が論議の火付け役になっている—)の4巻および5巻は月と太陽の大きさ、および、月と太陽の対地球距離などの説明に充てられている — 先達のヒッパルコスやりようを紹介しつつそれに疑念を呈するとの式にて充てられている— とのことがある。

同じくものこと — 古代人にも太陽・月を巡る位置・距離についてのある程度の練れた思索・分析が伴っていた(とされる)こと— について極めて目につくところでは英文 Wikipedeia[*On Sizes and Distances*]項目にあつて(以下、現行記述内容より引用なすとして) “ In *Almagest* V, 11, Ptolemy writes: / Now Hipparchus made such an examination principally from the sun. Since from other properties of the sun and moon (of which a study will be made below) it follows that if the distance of one of the two luminaries is given, the distance of the other is also given, he tries by conjecturing the distance of the sun to demonstrate the distance of the moon. First, he assumes the sun to show the least perceptible parallax to find its distance. After this, he makes use of the solar eclipse adduced by him, first as if the sun shows no perceptible parallax, and for exactly that reason the ratios of the moon's distances appeared different to him for each of the hypotheses he set out. But with respect to the sun, not only the amount of its parallax, but also whether it shows any parallax at all is altogether doubtful. / This passage gives a general outline of what Hipparchus did, but provides no details. Ptolemy clearly did not agree with the methods employed by Hipparchus, and thus did not go into any detail. ” (大要訳)「アルマゲストの巻の五にてプトレマイオスは「ヒッパルコスは太陽と月の特性から一方の発光体としての距離が呈示された際に視差よりもう片方の距離も導出出来るとして太陽との距離を推察することで月との距離を呈示しようとしている。にあつて彼ヒッパルコスは[想定上の最低限の知覚可能なる[視差] — この場合の[視差;パララックス]とは同一天体を異方向から見た場合に方向の違いから三角測量がかったやりようで距離を算出することを指しての語か— のありようによる予測]と[知覚可能な[視差]を太陽の方は示さぬように見えるも、そのために、月の異なった視点での距離比にまつわつての観点呈示がなせるとの日蝕時ありよう]の両者をあわせてそうも述べているわけだが、そうしたヒッパルコス手法は視差の程度どころか視差の有無そのものとの観点ですら疑わしい」とのことを書いており、(プトレマイオスは)先達ヒッパルコスのやりように賛意を表さずにそれ以上はヒッパルコス方式の細目に触れないにとどめている」(ここまでを大要にての紹介とする)

との記述が(英文ウィキペディア程度の媒体にも)見受けられるようになってい

るといった按配にて、である。

またもってして、プトレマイオス古典に見るありよう(プトレマイオスに引用・言及されるとのかたちでのみその説の枢要部が(三角測量などとのからみで)推し量れるとのかたちで伝存しているとされるヒッパルコスによる月と地球との距離分析)にあっては誤差が目立ちもするようになっていっているとされる、たとえば、[ヒッパルコスが古代にて特定した地球となって月の距離比率]は[現在の近地点距離と遠地点距離のその中間値]に比べ[およそ7%の誤差]があったといった話が目立つところとして概括されていること、すぐに確認出来るようになってもいる —英文 Wikipedia[Lunar distance (astronomy)]項目にて “The first person to measure the distance to the Moon was the 2nd-century-BCE astronomer and geographer Hipparchus, who exploited the lunar parallax using simple trigonometry. He was approximately 26,000 km (16,000 mi) off the actual distance, an error of about 6.8%.” との記載がなされているところである —。

が、それでも月と太陽の具体的(対地球)距離比にまつわる古代人の知識(把握情報)とのことで述べれば、である。紀元前3世紀に生きたアリストアルコスが[異常に小さい太陽の模型]を科学的観察手法から導出していた時分に比しては格段の進歩がみとめられると映るようになっていっているわけだが、ただし、太陽と地球の間の距離がかなり正確に測定されたとされるのは11世紀イラン(のサーマーン王朝)にてその事績を遺した万能人的知識人 Abū Rayhān al-Bīrūnī アブー・ライハーン・アル・ビールーニーに端緒が求められるともされていることも即時に目につくところとなっており、アル・ビールーニー著書『マスウード宝典』には(古代ギリシャのエラトステネスの手法を踏襲してか)地球の半径を今日の観測データと誤差0.01%と少しのところから導出されていたなどとのことまでもが言われている(具体的な中身について検証したわけでも何でもないので何とも言えぬが)

単位系の変換をなせばどうかとのことから入って、直上、ヤードの沿革(及び人間の歴史における天体の大きさに対する分析の歴史的変転に関しての言われよう)にまつわっての話がやたらと長くもなったが、[度量衡単位]に着目しての話にあってのメートル、そう、【月は太陽の大きさの400分の1である】【月は太陽と比べて400倍近い】【月は1地球日にあって400「キロメートル」の速度で自転する】との400にまつわっての関係性を現出させるメートルそれ自体についての話を次いで、なす。

通例、メートルは常識的なところでは、そう、Wikipedia[Metre]項目に見るところなどでは“Originally intended to be one ten-millionth of the distance from the Earth’s equator to the North Pole (at sea level)” と表記されている、そう、和文ウィキペディア[メートル法]では

(以下、多少長くなるが引用するとして)

“ フランス革命後の1790年3月に、国民議会議員であるタレーラン＝ペリゴールの提案によって、世界中に様々ある長さの単位を統一し新しい単位を創設することが決議された。それを受けて1791年に、地球の北極点から赤道までの子午線弧長の1000万分の1として定義される新たな長さの単位「メートル」が決定された(これにより地球の円周が4万キロメートルとなるように定義されたが、地球は厳密には球ではなく、回転楕円体に近い形をしているので実際にはやや誤差がある)。なお、この時の測量はダンケルクからバルセロナの距離を経線に沿って三角測量で測定し、その値を元にして計算が行なわれた。質量も、このメートルを基準として、1立方デシメートルの水の質量を1キログラムと定めた(正確な定義はそれぞれの単位の項目を参照のこと)。他に、面積の単位としてアール(are, 100平方メートル)、体積の単位として乾量用のステール

急遽差し替え版
にあっての追記:

ヤードの沿革の
記載はせんだって
言及の[ヤードと
メートルの関係を
履き違えての誤記]
に引きづられての
部となっている。

記述趣意は
「メートル法より変
換することで月と
地球自転距離から
ヤードでは太陽暦
一年年数が導出さ
れる。
ヤードとは天体の
細かい数的配置を
古代から意識して
いた単位系ではな
いのか」とのこ
とを単位発祥の時
期的側面から問題
視することにあ
ったのだが、そ
も、ヤードとの
単位系で地球と
月の自転距離に
関する400メー
トル系より365
が導出されるな
どとのこと「は
ない」(400つ
なかりで400
ヤードは365メ
ートルだが、不
手際も甚だしい
かたちで誤記し
ていたところ
として、その
反対ではない。
まさに問題と
なる400メー
トル系では
437.44ヤード
となる)。
そのため、この
部は言及の不
適切さが目
立ちもする
ところの古
代史関連表
記であった
と追記部
追加現時
、反省し
てい
るところ
となる
(ただ400
ヤードが
365メー
トルに
なること
には恣
意性が
感じ
られ、
でき
ず度
合い
が
扱
され
ない
こと
もあ
る
には
ある)

急遽差し替え版にあっての誤記訂正：
ここまでと同様に誤記訂正する。この部、正しくは
「400meterは437yardに等しい。対して400yardは365meterと等しく、メートル・ヤード比は[400]とのきりのいい10進法の数値(ヤードやメートルといった距離の単位とは関係ないところで存在しており、蝕にも通じていると先記の月と太陽の絶対的な[サイズ]比および[距離]の比である[400]との数値)を太陽暦、地球が太陽のまわりを一公転する期間である一年日数365にもっていきやすいとのことがある。度量衡ヤードとメートルははなからそうなるべくも式で(地球・太陽・月の位置関係を意識の上で)構築されている風がある」
と表記すべきところとなる。

(stere, 1立方メートル)と液量用のリットル(litre, 1立方デシメートル)を定めた”

(引用部はここまでとする)

との式で同メートル(法)は定められた —啓蒙の時代、フランス革命の副産物であるとの式で定められた— 単位系と認知されており(メートル原器の問題など誰でも調べればすぐに特定出来るであろう)、そこには

[かなりもってして自然のリソースに依拠して構築された単位系(地球の北極点から赤道までの子午線弧長の1000万分の1として構築された単位系)としての由来]

が見てとれるようになっている(だが、そうした由来については「先行するヤードという単位系と変換し合うかたちで地球月太陽の位置関係から年月を導き出すことをなさしめる」との観点があったとはまったくもって目につかないかたちとなっている)。

メートル定義についての上のような杓子定規的言われようがなされている中で

(地球の円周がおよそ40000「km」となる中で)

【月は太陽の大きさの400分の1である】【月は太陽と比べて400倍近い】【月は1地球日について400キロメートルの速度で自転する】

との玄妙不可思議なる一致性が「結果的に」捕捉されもすることになりもし、そこにヤード(こちらヤードは1893年に対メートルとしてのその比率が厳密厳正に定義付けされたとの従前よりの因習的単位となるが、近代1893年以後確定した今日のヤードありようと従前の中世期よりのヤードの近似性の程はいくばくかとのこともまた問題になりうる)を挟んでの変換性向のことを考えると、繰り返せば、

【太陽暦一年の日数と重なる365ヤード(yard)への変換方式が首をもたげてくる】

とのことになりもしている。

度量衡単位制定の問題としてそこでもわざわざもって地球・月・太陽の位置関係までもが顧慮されていたとは判じがたい(少なくとも「人間レベルの」単位制定者意中思惑では顧慮されていたとは「普通には」判じがたい、というのも、そうしたことにまつわっての言いようがなんら見受けられないからである) ところながらも、[月は太陽の大きさの400分の1である][月は太陽と引き比べて地球に400倍近い][月は1地球日について400「キロメートル」の速度で自転する][地球は1地球日について40000「キロメートル」の速度で自転する][表記の一致性が「人為的単位の問題として」ナンバー365と接続するようになっている]との関係性が具現化するようにできあがっているとのことが見てとれるようになっているとの異質性がさらに首をもたげてくることに相違ないわけである(：「問題は」そうした「現実的ありよう」にあっつかいほどまでにどのレベルでの「恣意」が影響を与えているかだが、それについては既述のヤード(1893年メートル対応単位として古来からの単位があらためて厳密定義されたとのヤード)のことも顧慮しての「偶然の一致の問題」ではまったくもって話が済まされぬところであろうと筆者としても当然にとらえている —月が人工物か否かということに関わることでなしに度量衡(ヤードやメートルといった systems of measurement)の制定を根本操作しているとの力学に通ずるところの恣意性が当然に問題になろうということである—)。

以上、何故にもってして位置関係にまつわる一致性が一笑に付せぬものなのか、浅見の身ながらも筆者の見解および普通に述べられることを細々延々と講述しもしてきた(反省するところとして多少、不消化感を読み手に与えかねないところもある、そういう[説明不足]かつ[詰め込み過ぎ]の筆の運びをなしたところがあったかとは思うのだが、それについては(真摯なる読み手の方がおられたらば)容赦頂きたい)。

そこまでなしたうえで述べるが、だが、筆者は手ずから分析なしてきたところを書き連ねもした同じくも
の問題（軽んじざるべきところと述べたきことら）が仮に

「およそ人間業「ではない」ような恣意性（既にそこにある月と太陽の位置関係やサイズに依拠し
てかなりもって昔から度量衡体系を「執拗に」構築しているとの恣意性）」

を示す方向で正鵠を射ていても、

「月が人工物である」、

そう、

「できすぎた位置関係から月が人工物であると判ずる」

との結論には向かって「いない」（分析した身ながら筆者は現時点、月が人工物であるとは考えていな
い）とのこと、強くも申し述べておく（そうした可能性を全否定することもまたもってしてできぬとは思
うが、ただ、この世界に操作者がダイレクトに侵入していることは「ない」との観察事実に基づいての判断をな
しつつもそういう見方をなしている）。

捕捉に努めたところの「月と太陽と地球の位置関係」にあつての WHO BUILT THE MOON? 『フー・
ビルト・ザ・ムーン?』の内容を「一面で」傍証するが如くもの（度量衡の表立っての説明のされ具合か
らかけ離れた特性を顧慮しつつもの）不可解性について直上言及なした上で、である。「それでもな
お、」のこととして強調したきところとして

「本稿筆者としては「精妙な数値的一致性に「人為」の跡が見えるが、それでも月は人工物であ
る」などとの見解は容れていない。いや、月それ自体は自然の産物であると考えている」

とのことを申し述べもするわけだが、にまつわつては、メートル（および先行するヤード系）なぞの度量
衡単位の制定プロセスまでを「葉籠中のものにできる存在」のことを顧慮して、

「皆既日食を実現させる極めてよくできた月と太陽の「現状の」位置関係（「現状の」位置関係と
述べる理由は後述する）との対比から操作なす力学がまさにその部分に拘（こだわり）を見せて
の度量衡単位を人類に押しつけていると観念出来る」

「そこにての押しつけのプロセスは今現在の月と太陽の位置関係が皆既日食を現出させる絶妙
なものとなっている（が別の時代は異なっていた）とのことに対する執拗な拘（こだわり）によるこ
ろであるとも観念出来る」

とのことを申し述べたいとのことがある。

そして、さらにもってして、上にあつての「観念出来る」とのことがちゃんとした論拠の山を伴っているか
らこそ問題であると述べたいのだということがある。

にまつわつてネックとなるのは「月の経年移動」である。

その点、手ずからお調べいただければ、ご理解いただけようこととして、

「月は1年毎に数センチほど移動しており大昔は地球に極めて近いところにあり、それがゆえ、太
古にあつては地球から見た月は実にもって巨大に見えた」

と観測データに基づき指摘されているとのことが現実であり ——たとえば、オンライン上に流通してい
るBBCニュースの「BBC News - Why the Moon is getting further away from Earth」と題された記事
（表記のタイトルの検索エンジン上の入力で捕捉できようもの）にて“ The Moon continues to spin away
from the Earth, at the rate of 3.78cm (1.48in) per year, at about the same speed at which our fingernails
grow.” 「月は私たちの爪が年にて伸びるのとおよそ同じスピード、通年3.78センチの割合で地球より
離れ続けている」との一般的な科学的理解についての記述が（ When the Moon was younger, it would

have been much closer「月が今よりも若かったとき、それはより近くにあった」との記述とともに)なされている——、現行にあっての[できすぎた位置関係]、月と太陽にあっての奇跡的一致性(とされるもの)が皆既日食(Total Eclipse)をきたす[月が人為的生成物である]などとの一見にして nonsense ともとられうる帰結とは「直線的には」つながらない——筆者は『それこそがまさに問題になる』との観点を持っているのだが、そういう時期的局面(皆既日食が月と太陽の数値比例上の一貫性でもって見事に具現化するとの局面)・タイミングにあっての[介入]がなされるだけのことがあるからこそその拘(こだわり)が見てとれる可能性もあるとの主張もがなせる一方のこととしてで、である——。

以上のことを含んで多少細かい話をなす。以降表記のこと、(語るに足りる、そう、死滅していく、死滅させられる世界にあって虚偽ではなく真実に向き合い現実状況に挑もうとの気概を有しているとの向きにあっては)検討いただきたい、と思う。

[地球一月]の距離は一年で3.78cmずつ拡大しているとの基準を導入した場合、[月と地球の距離]と[太陽と地球の距離]が——前者にきっかり400倍なしたものが後者であるとの[月=自然の産物]の立場にとって最も不利であるとの尺度を持ち込んだ際に(すなわち月の怪物染みた側面を強くも否定する尺度を持ち込んだ際に)——いかに変化していくのか、そのモデルを呈示してみることにする。

月にあっては対地球にての近地点距離(月が地球に最も近づく相対距離; Perigee)で「約」363,304km、遠地点距離(最も遠ざかっている相対距離; Apogee)で「約」405,495kmとされる(和文ウィキペディアなどの現行にての記載内容よりすぐに確認できるどころの記述を引けば、である)。

その現在の[地球一月]の距離を基準にして、である。

まずもって原生人類たるアウストラロピテクスが誕生したとされている(正確か否かは保証しかねるが広く世間ではそうだと主張されている)とのおよそ400万年前あたりの[地球一月]との差分、すなわち、

[(既述のように一年で3.78センチ程、月は地球より遠ざかっているとされているのであるから) $400 \text{万} \times 3.78 \div 100 \text{(センチメートル} \Rightarrow \text{メートル)} \div 1000 \text{(メートル} \Rightarrow \text{キロメートル)} = 151.2 \text{キロメートル}$]

との[単純な算数]から導出出来るとの差分(400万年前まで月はおおよそ150キロメートルほど地球に近しくも浮いていた)を顧慮した際に

[地球と月の距離は地球と太陽との距離の400分の1の距離である]

云々の問題を考えてみるとどうか。

結論から言うと、(これまた単純な算数で151.2キロメートルでは(現時点の近地点距離を363300km、太陽と地球の間の分母となるところの距離をそれに400をかけたものとして計算した場合に)、[地球と月の距離は地球と太陽との距離の400分の1の距離である]とのありようについては400万年前もあってはほとんど差分は生じない。

だが、それが2000万年前(ユカタン半島に巨大隕石が落下して地球環境が長らくもの厳冬期に陥ったとの有力視されている仮説から恐竜が滅んだとされる折柄である6500万年前、同時点から4500万年ほど後の年代)にあってはどうか、とのことまで考えると話が変わってくる。2000万年前には月はおおよそ現況より756kmほど地球に近くも位置していたとの計算がなせるところとなる——近地点距離(Perigee)を仮に「約」363,304kmと見繕って計算した場合に756km近かった(400万年前(151.2km)に対して2000万年前なのだから $151.2 \times 5 = 756 \text{km}$ 近くも位置していた)——。そうした2000万年前をベースに考えると、手元の簡易電卓で計算してみる限り、[地球と月の距離][地球と太陽の距離]の比率は([地球と月の距離]を363300kmから756km引いた

急遽差し替え版にあっての誤記訂正:

せんだっての部らと同様に訂正する。この部は正しくは次のように表記すべきところとなる→

「一貫性問題の[1および2]と[3.]の関係性については距離の単位に依存するところが大きなのだが、メートルに換えてヤードを導入することで奇怪性が減退しても、サイズと距離比に見る400のきりのいい10進法上の数値が400ヤードをして365「メートル」と並び立たしめるとのことも一面ではある(ただ同義同一ではない(自転距離に関連する)400メートルと400ヤードを結びつけるのは多少こじつけがましきところもあるにはある)」

もの、「地球と太陽の距離」を前者の「現在値」に400倍しての不変なるものとした場合に)およそ「1対400」が少なくともおよそ「1対400.8(⇒401)」にまで比率が傾いているとの結果が見てとれる(400分の1と約401分の1では話が「かなり違う」であろう)。

さらに、である。それが白亜期末、恐竜が絶滅したと一般に考えられている6500万年前を基準に考えると、そう、およそにして2450km超、地球と月の距離は狭かったことになりもし、とすれば、([太陽-地球]の距離が不変であると想定すれば、だが)[地球-月]と[地球-太陽]の距離の比はさらにもって大きくも隔たってくる。たまさか手元にあった簡易計算機の即時計算であれなのではあるが、6500万年にあっては概数にして「1:400」が少なくとも「1:402.7(⇒403)」にまで比率が変わってくる。

直上にて記述の計算は端数をばっさり切り取ってのかなり乱暴・粗雑なものとなっている、そういうものとなりもしているとのことであれなのだが、話を極々単純化させて見れば、とにかくもってして、

- 1.[月と太陽の距離比が1:400及にあること]
- 2.[月と太陽のサイズ比が1:400となっていること]
- 3.[月は(メートル法表記を用いれば)一日400km自転する、地球は(メートル法表記を用いれば)1日4万km自転する]

との一貫性問題における

1. [月と太陽の距離比が1:400となっていること]

についてはそれが有効に成り立つのは

[大体にしてここ2000万年ぐらいの限局化された限られた時代区分のことである]

との見方ができるところとなる — 誤差はかなり出ているが、それは数千万年単位のものにはならないであろうと思われる(仮に本当に地球と月の年齢が46億歳だというのは2000万年というのは20分の1未満の期間である) — 。

また、

3. [月は(メートル法表記を用いれば)一日400km自転する、地球は(メートル法表記を用いれば)1日4万km自転する]

は度量衡単位に依存する話であるので — 最前にて細かくも解説しているように — メートル表記を別の単位系に換えると「異なる結果」が当然に出てくる(ただしもってヤード表記に換えると、先述のように太陽暦における一年の日数365日がおよそ365ヤード自転との式で出てきてしまうとのそれはそれで奇っ怪なことになる)とのことで同じくものは月が人工物であるなどの論理を強くも支持しないことになる — だがもってしてそういう論理を虚偽として広める力学があるのだとすれば、その力学に由来するある種のこだわりと人類という種に対する操作の徹底さの方向性は示唆する(この身、筆者としては主張する) — 。

ここまでの説明 — 手元簡易電卓を用いての実にもって大雑把な計算ながらも有効有意義であろうとの説明 — にておおよそしてお分かりいただけることかとは思っているのだが、月は人工物であるとの(殊に10進数にあっての)数値上のできすぎた一貫性の問題 — 先述のように太陽系内の他の惑星・衛星の比率に類例となるような事例がなく、またもってして、既存の物理法則でそういう関係性が自然なるものとして産まれてくるのかとの説明がなんらなされないようになっていると解されるどころの数値上の一貫

性の問題— は (地球史にあつてのここ数千万年の期間ありように依存しての) 時期的に限られての 時限的なるもの、そして、単位系に強くも依存してのもの であるがゆえに、その有効性を多く失うと強くも強調できるようになっている。

であるから、筆者は

[デヴィッド・アイクの申しよう (およびデヴィッド・アイクに彼の異説の部分的論拠を提供している著作 Who Build the Moon? に見るような主張内容)]

を支持「しない」のである —これが相応の人間ならば、「月が人工物であるはずがない」と「はずがない」などとのことを論拠もないところで強弁する「愚者の否定」(という名の検討それそのものの「非」論理的なる魯鈍なる[拒絶]) を振り回すところなのだろうが、筆者は論理的に支持できないとのその論拠をきちんと呈示しているつもりである—。

他面、筆者はデヴィッド・アイクら申しようを全く無意味無価値なるものとして斥けているわけでもない。彼らの申し分 (および彼らにそうした申し分を与えるだけの 1970 年に遡るソ連科学者の世に出した論文などに見る「月宇宙船」説やそれを受けてか、最近、サブ・カルチャー分野などにて撒布されだしていることが目に付く類似の設定の亜種) は別の問題となる側面、「我々人類の陥穽に通ずる別の問題となる側面」を「露骨に」示すとの側面から「軽々には扱えぬものか」と判じている。

これまたもってして聞く耳を持った人間がいなければ何の意味も無い(そうした話をなすことが我々人類の置かれた状況を示す上でいかに重要であろうとも聞く耳がそこになれば何の意味も無い)とのことではあるが、まとめもして記せば、それは以下の **A.** から **D.** の順序にて申し述べられもすることとなる。

A. 人間の歴史(近代史)にあつての度量衡単位の基準が仮にもし調整されていれば、どうか。データに依拠しての観測事実 —400 のサイズ・距離の「比率的」一致性と 400 の移動距離、そして、それが 365 に別度量衡単位でリンクするようになっていとの観測されるところの事実— の問題から述べられるところとして [メートル法] というものからして極めて堂に入ったものとして構築「させられている」節があり、またもってして、それに先行するところの単位系がさらに後に厳密規定されるようになったとの [ヤード法] も極めて堂に入ったものとして構築「させられている」節がある —※-せんだって細々と解説してきたようにメートル法を容れれば、「400 との数値の連続現出」が地球・月・太陽の位置関係にあつて際立って具現化し、に対してヤード法を容れれば、「太陽暦における 365 日との日数」が地球・月・太陽の距離・サイズ比に照応するように (距離に対する度量衡単位系の表記法との絡みで) **見事に立ち現れてくる**、そうしたこととなっている。だが、【皆既日食】の現出にも関わる(そして月人工物説の基礎に据えられている)あまりにもできすぎた類例見当たらず地球・月・太陽の位置関係に照応するように度量衡単位がそうしたかたちになるようにわざわざもって調整されてきた、度量衡制定をなした人間集団に企図されての調整がなされてきたとは我々人間の歴史では(すくなくとも筆者が把握するところでは)度量衡単位制定の歴史関連資料らの中で明言されておらずに「結果論として」そうもなっていると見えるようになっている。であるから、そう、「あまりにも露骨」かつ「あまりにも巧妙」に見受けられるところであるのに説明がなされていないとのことがあるから、[度量衡単位制定の表向きの力学ではなくにももの背後の操作の力学の拘(こだわり)り]の介在(の「可能性」)が観念できもする、と申し述べる— (:先に筆者は Who Build the Moon? との著作の訳書から次のとおりの記述を引用した。⇒ (以下、訳書『月は誰が創ったのか?』よりの再引用をなすとして) “月は太陽の大きさの 400 分の 1 である。/月は太陽と比べて 400 倍近い。/月は 1 地球日について 400 キロメートルの速度で自転する。/これは偶然の一致だろうか? そうかもしれないし— そうでないかもしれない。/地球は 1 日 4 万キロの割合で自転し、月はほぼ 100 倍遅い速度で自転している。月はつねに地球に同じ面を向けながら地球回転軌道上に移動しているが、赤道の自転

速度が1地球日のきっかり1パーセントになるように平均的距離が保たれている。この数字はどれも検証可能で、議論の余地がない。これだけの事象がすべて偶然でありえるだろうか?／たしかに、この状況をもっと深く調べたいと思わないのは、愚か者だけだろう。とはいえ、見たところ不可能そうなことを考察しようとしたわれわれを他人がどう見るか、あくまでも現実的に行動しなければならない。専門家の多くが、いや、おそらくはほとんどが見て見ぬふりをするだろうと、われわれは覚悟した”（以上、くどくもの再引用部とする）。表記の引用部に見るようにこの状況をもっと深く調べたいと思わないのは、愚か者だけだろうとの表現が妥当・至当であろうとの玄妙なる一致性が調べれば調べる程、検証すれば検証する程、目に付くようになっていくとの状況が当該領域の話である「とも」述べられるようになっていく。

度量衡単位を調整した「背後の」力が働いている[可能性]が大いにありえるように見えるとして、である(そこでの可能性論は可能性論に留めても何ら問題ないと筆者はとらえているわけだが、仮にもし背後・外側からの調整の力学がゆえにそうもしたことになるであろうと考えるとすれば、である)。そこにいう背後から[調整]をなしうるとの意図および能力は、人間のそれではない、あるいは、人間のそれではないところに[通じている]と推定できるだけのことが[異常異様な予見的言及]とのかたちで「他のそこかしこに山積している」のがこの世界であるとのことがあわせて問題になる(度量衡単位の制定調整にまつわる話を可能性論に留めてもその可能性論とは別方向で異様な操作の片鱗がそこかしこに見受けられるということである)。

にまつわっては『これは人間業ではなかろう』と易々と察せられもしてしまうのかたちで諸所にて傍証事例が存在しているとの[外力]のことを考えた折、それがいかように作用しているのか、[神]などとのナンセンスな非科学的概念を持ち出さずに考えられるところの、[作用原理]

にまで思索をなせば、字義通り[推測]以上のことにはなりえないかとも見るが(例えば、複数世界を貫通するとされる重力波を用いて被操作個体(群)としての人間の脳を[高度人工知能の回路]の領域と結線して、いわば、[60年代実験にてそういうものが用意されたコンピューターに結線された意思と認識が改変された猿]のようなものとして、「被」操作者による意識のないし無意識的な脳機序の物理的操作による予見的言及がなされているといったことが考えられもする 一本稿先だつての実に不快なる可能性論の説明の部を参照のこと —)、[現象]それ自体に着目する限り、高度なテクノロジーを用いての人間操作がなされ、その一環として

[ありえないぐらいなまでにできすぎた予見的言及]

がそこかしこになされていると判じられるとのことが「他のそこかしこに山積している」とのことがあるのがこの世界である。

同じくものことについては続いての **B.** 以降表記を参照いただきたいものだが、この世界では

[往時の人間の科学的知見および社会環境理解ではおよそ予測がつけられなかったことにまつわつての計数的な意味での正確な予見的言及] (本稿では 2009 年年末から本格稼働を見ることになった LHC 実験のことを想起させるように 2009 年年末から欧州エネルギー機関の運営する加速器敷設型核融合炉が暴走してブラックホール的大量生成がなされるといった内容を有している 1980 年初出の小説(*Thrice Upon a Time*) のことやあるいは 911 の事件にまつわつての予見的要素を多層的に帯びているとの読み物のことなどを挙げているわけだが、それらに加えてもの具体例をさらにさらに本稿の後の段では数多呈示していく所存である) —]

が存在しているといったことらが数多みとめられるようになっていく(: そうした文物の実在性問題を「どういうわけなのか」多くの人間は認識せず、であるから、その存在の指摘・問題視もなされずとあいなっているように「とれる」中で他面、[ノストラダムスの予言などの多義的解釈可能なる妄言録]のことがさも「予言」であるように頭の具合よろしくなくも語られる(というより「騙」られる)との愚劣極まつてのことがこの世界にはあるわけだが、といったことを置いてお

いても取りあえずも強調したきところとして、である)。

であるから、

[古来からのヤード法を1893年にリニューアルしての度量衡単位にまつわっての一致性]
(手前浅見さゆえに深追いはしないと述べたが、先述のようにそうした一致性の根は[古代から連綿として]そこにあった可能性もある)

および

[メートル法の問題にまつわっての一致性]

にもそうした力学の問題(「非」人間的外力の問題)が同文に作用していても何らおかしくはない、いや、むしろ、度量衡制定者らに目立って意図言及されざるところとしてそういう一致性が「できすぎたことに」「奇怪にも」現実世界に具現化しているのだから、[それ]が作用していると考えの方が理に適っていると強調したい(ただし、同じくものことは可能性論とらえてもらっても本稿の本筋に何の影響も及ぼさぬことではある)。

B. 機序(作用原理)ともかくも[特定の現象ら]が[恣意](意図してのこと)のなせるところとして現出していると容赦なくも判じられることがある中で執拗な拘(こだわり)の問題が度量衡単位と太陽・月・地球の一致性の問題にも「観念」できる—ただしそれは可能性論として論じてもいい—と直上、**A.**の段にて記述したわけだが、真に問題なのは

[ブラックホール生成関連事物(LHC実験関連事物)をもってしてトロイア崩壊の寓意と執拗に結びつけるとのやりよう]

が極めて執拗になされていると摘示できるようになっている(なってしまう)とのことがあるとのことである(と述べてもなんら差し障りないと「当然に」申し述べる)。

同じくものこと、LHC実験がいかようにしてトロイア崩壊寓意と多重的多層的に接合しているといかようにして指摘出来るのかについてはここまで詳説に詳説を重ねてきたことである。

(:もし極々単純な「事実の一断面」からそうしたことのありようの片鱗に触れてみたいとの向きがあるとするならば、である。本稿筆者としてはLHC実験にあってのATLAS実験グループの表象シンボルがニューヨークはロックフェラー・センターに据え置かれているアトラス像(Lee Lawrieリー・ロウリーという彫刻家の手になる彫刻)と「そっくりなもの」となっていることを確認してみるがいい、と最初に言うであろう——※1 [ニューヨークのロックフェラー・センターにあってのアトラス像]と[LHC実験アトラス実験グループのシンボル]がそっくりなものとなっている件について筆者は公金をもらってやっていると国内実験関係者にかつて相対取材なした折に「実験グループは著作権侵害しているとのことはないでしょうか。仮に実験グループがロックフェラー・グループからの資金提供を受けているのならばいざしらずですが、そういうこともない、何の蓋然性もないところでニューヨークの[天球儀を担ぐ独特のアトラス像]のシンボルが資金環境もないところで転用されているなどとのことになると、そして、著作権にまつわっての許諾のやりとりがなんら発生していないとのことになると、これは[遵法意識]の問題に関わることになりうるか、と思います。その点について私としては(公金の出所たる国民の一として)そういう団体それ自体の表象シンボルに関わるところで著作権の侵害の可能性が疑われるようなことがある実験かどうかについて含むところがあります。ですから、事実関係がなんら明示されていないとの中のこととして、背景について是非ともご教授いただけませんか」とわざわざ口上にての質問を投げてわざわざ確認の労をとってもらったことがある。すると、「ロックフェラー

の資本が実験に投下されたがゆえのシンボル使用ではないようです。CERNに確認したところ、「著作権の断り」は済んでいるとのことでした」といった趣旨の返答を頂くこととなった／※2ここで筆者は国内外の凡百の陰謀論者がそうした主張を鼓吹しているような[大資本(家)の陰謀論]を鼓吹したいのではない。お分かりだけですが、[大資本(家)であろうとなんでであろうと[傀儡(くぐつ)]ならば話は同じである、問題はたかだかもの人間社会の機序とはまったく異なるところにある]とのある種、多くを調べてきた人間ならば、そして、知的に真摯誠実たんとするならば、当然そうした観点を抱こうとの視点に基づいての話をなしている(もし、ある種の相応の人間が筆者の指摘を大資本家・エリート閥や彼らのサークルの陰謀論のような[下らぬもの]にすげかえようとするならば(そう家畜が家畜小屋を計画運営しているとの筋目の下らぬ話にすげかえようとするのならば)、そういう輩、人間をマスメディアの触手のように扱う全体主義のナチスドイツにはシュトライヒャーというそれ専門の相応の輩が人間レベルでの相克を煽るべくもの宣伝要員としていたともいうが、そうしたやり方を筆者は舌鋒鋭くも非難することになるであろう)——)。

さて、直上表記の如しのアトラス像使用のことがある、LHC 実験 (くどくもなるが、本稿筆者がにまつわっての国内行政訴訟を第一審からして二年続くようなかたちで国内権威の首府たる国際加速器マフィアの重要な分局を相手取って起こしていたとの「世間一通りの人間がなぜそれを指摘しないのか」との欺瞞でいろいろられた実験) にあつての ATLAS 実験グループの表象シンボルが知財(知的財産権) にまつわっての許可までとっているらしい(と実験関係者が述べている) ところとして「ニューヨークのロックフェラーセンターのアトラス像」となっているとして、である。愚劣な陰謀論者の話柄とは隔たるところの「純粹なる記号論的一致性の問題」として、次いで、ニューヨークのロックフェラー・センターにはアトラスと並んで著名なギリシャ神話上の特定神格の像が配されているとのこと、そのことの意味について第二に指摘したいところである。

そこにいうロックフェラー・センターにあつてアトラスとは別に据え置かれているギリシャ神話上の特定神格の像とは「プロメテウスの像」である。彼ら、(前者の)アトラスと(後者の)プロメテウスは 一本稿かなり後の段にても「再度、解説する」所存なのではあるも— タイタン族としての兄弟であるのだが、その彼らが揃いも揃って登場を見るとのギリシャ神話上のエピソードがある。それが「ヘラクレスの第11功業」である。本稿にての **出典(Source) 紹介の部 39** で古典上の委細たるところの典拠を示しているようにそちらヘラクレス第11功業にあつてヘラクレスは「黄金の林檎」を求めんとしているのだが(第11功業=黄金の林檎の探索の功業との位置づけである)、同じくもの11功業でヘラクレスはプロメテウス(人類に火を与えたために生きながら猛禽類に腹を啄まれ続けるとの責め苦を負うことになったとの存在) をいましめから解放、その対価として彼プロメテウスから「黄金の林檎」を獲得するうえでその在処(ありか)を知るアトラスを頼るようにと助言されたとの筋立てがみとめられるようになっている(疑わしきは本稿にての **出典(Source) 紹介の部 39** にあつての古典それそのものよりの引用を参照されたい)。

難なくもご理解いただけることかとは思いますが、
【アトラスとプロメテウスは「黄金の林檎」にまつわってのギリシャ神話上の一エピソードにあつて両者共々に登場しているとの存在らである】
【アトラスとプロメテウスの両者の像がニューヨークのロックフェラーセンターに据え

置かれている】

【ニューヨークのロックフェラーセンターのアトラス像はその独特な形状がそのまま LHC 実験アトラスグループのシンボルに転用されているとの筋合いのものである】

とのことらが [ある] わけである。その段階からして LHC 実験は [アトラス] (黄金の林檎を求めての第 11 功業にてのプロメテウス助言ありようを想起させるようにプロメテウスと同一領域に据え置かれた「独特な」アトラス像) を介して黄金の林檎と結びつくことは自明なのだが、そこに見る黄金の林檎とは何か。[トロイア崩壊の原因] となったとのものである (本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 39](#) で典拠挙げておいておりである)。そう、アトラスとは [トロイア崩壊の原因 (= 黄金の林檎) の在処] を知る巨人でもあり変換できる存在なのである。その点もってしてヘラクレス 11 功業で何故もってしてアトラスが [黄金の林檎] (トロイア崩壊の原因) の所在地を知る存在と描写されているのだが、それはアトラスの娘ら、ヘスペリデスと表される一群のアトラスの娘らが [黄金の林檎の園の管掌者] となっているから、そこに肉親間の情報のやりとりがあるから、とされているとことが神話上の設定である。そして、そちら神話上の設定に見る [ヘスペリデス (アトラスの娘ら) の黄金の林檎の園] とは [アトランティス] と欧州識者の一部にあって史的に同一視されてきたものとなる (本稿にての [出典 \(Source\) 紹介の部 41](#) でその理由について解説しているとおりでである)。そうもしたことがある中で LHC 実験というのはその [アトランティス] の名前をも加速器実験にてのイベント・ディスプレイ・ツールとして用いている。

以上申し述べた上で、再度言及したところとして、LHC 実験というのは [巨人アトラス] (黄金の林檎 = トロイア崩壊の原因を知る存在) の名を冠する ATLAS 実験グループが運営するアトラス検出器でブラックホールの検知をなしうると「発表されている」実験にして、その際のアトラス検出器のブラックホール検知はイベント・ディスプレイ・ウェア ATLANTIS ([黄金の林檎の園] = [トロイア崩壊の原因の所在地] と一部にて結びつけられてきたとの伝説上の陸塊) にて具現化することになりうると「発表されてきた」経緯があるとの実験である ([出典 \(Source\) 紹介の部 35](#) 等)。

何をもってして【実験】(とされる営為) がトロイアと結びつくのかはこの段階でも自明であろうが、だが、話はそれに留まらない。LHC 実験とも通ずる側面を呈する作品であるとして本稿ではブラックホール生成を作品主要テーマとする小説作品『コンタクト』(米国科学界のオピニオン・リーダーであったカール・セーガンが本業の傍らにて執筆して大ベストセラーとなったとの筋目の作品) のことを取り上げてきたわけであるも、そちらブラックホール生成がテーマとなっている『コンタクト』でもトロイアの寓意が複層的・多重的に現われている、しかも、普通に見れば気づけないような式で嗜虐的に現われている。そして、それが「911 の予見的言及」(などという異様なもの) と結節するところとしての具現化であるなどとのことが「ある」([出典 \(Source\) 紹介の部 82 \(2\)](#) から [出典 \(Source\) 紹介の部 82 \(3\)](#) を包摂する部)。

まったくもって救いようがないのはそういうことが [現実にある] のにもかかわらず、一魂が死んだ人間の残骸、傀儡 (くぐつ) の類には何を言っても無駄かもしれないが、LHC 実験では以上表記の諸々のことら (黄金の林檎を介してのトロイア崩壊譚との結節) が実験関係者らの [警世の念] にて具現化したものではない、断じてない、と時期的ありよう・関係者ら申しようの今日に至るまでのありようから

容易に判じられるようになっていくとのもが「ある」(LHC 実験ではブラックホール生成が中途よりなされうると考えられるようになったわけだが、その始期は ATLAS グループの命名時期より後ろになり、またもってして、実験関係者らの口を借りると、彼らは「安全な」ブラックホール生成が科学の進歩に資するものである(超ひも理論の万物の理論の適合性等の確認につながる)との認識・コンセンサスがあって今日まで実験に邁進しているとのことになっているからである; **出典(Source) 紹介の部 81** . いいだろうか、そうしたことに[911 の「予見的」言及の類]との多重的接合性までもが見てとれるとの訴求をなしているのである)

C. 直上の **B.** の段に先駆けての **A.** の部では月・太陽にまつわっての特定の数値規則にあってみとめられる[現象]の背後にあるところの恣意性介入 —それは人間由来のそれではないと受け取れもするとのこと、先述の恣意性介入でもある— が観念されることにまつわっての話をなした。次いで、**上の B.** の段では (**A.** にて取り沙汰したとの) [現象] が先にある「可能性」]を非人間的な力学と結びつけて見るに足る材料 —それらは[可能性論では到底済まされない世の特性]を示しているとの材料ともなる— が他のところに存在しているとのことについて極々一例たるところを呈示した。

さて、**B.** にて示される恣意性の方向性だが、それは、(不快でならないのだが)、**「人間をトロイアの木製の馬 (に仮託されるもの) で皆殺しにする」** とのこと相通ずるものである(そのことを多方向から示し、訴求することに本稿では力を入れている)。

これより指摘することを含めずにもこの本段までにて同じくものことについて呈示してきたことから膨大になるため、要約し、それまたもってしての「一例」摘示にとどめるが、以下表記のようなことが「厳として」ある。

・[黄金の林檎]と[エデンの誘惑の果実]は —トロイア崩壊に至るプロセスに相通ずるところで— 多重的に接合しあうようになっている(本稿にある**出典(Source) 紹介の部 48**から**出典(Source) 紹介の部 51**を包摂しての部にて典拠詳説をなしている)。

・[エデンの誘惑の果実でもって人間を墮落させたと聖書が語る蛇]に比定される存在、それがルシファー(サタン)である(細かくも先述しているところとして悪魔の王をして古き蛇と表す『新約聖書』はいざしらず『旧約聖書』にはそうした明示的表記はないわけだが)。そのルシファー・サタンに関連するところの欧州著名古典内描写 —ダンテ『地獄篇』およびミルトン『失樂園』にある「ルシファー関連の災厄の領域」かつ「地獄門の先の領域」にまつわっての描写— にしてからして「実に不可解なことに」今日の物理学者らがそうしたものであると語るところのブラックホール(と呼ばれるもの)との記号論的多重的一致性が具現化しているとのことがある(本稿にある**出典(Source) 紹介の部 55**から**出典(Source) 紹介の部 55(3)**を包摂する部にて詳説をなしている)。

(本稿筆者は[宗教の毒が多く人間を容赦なくも殺してきたとの愚劣な歴史の問題]および[合理的に語るべきところを神秘主義・非合理的な合理主義とは相容れぬ現実改変能力なき戯れ言に挿げ替える作用]に対する通暁から強くも宗教を忌み嫌うとのエイシエスト、無神論者であるが (I am an atheist.)、そこを敢えても以下の通りの[黄金の林檎]と[エデンの林檎](宗教的アイコン)の結びつきにまつわっての図らを[一例]として再掲しておくこととする)

【i. [黄金の林檎を巡るパリスの審判]と[エデンの禁断の果実を用いての誘惑]が相通ずると何故もってして指摘出来るのかについての振り返っての図解部として】

Minerva (Athena)

Juno (Hera)

Venus (Aphrodite)



女神アフロディテが美人コンテストの勝者の証たる黄金の林檎の付与権限を与えられた王子、パリスに絶世の美女ヘレンとの男女仲成就を黄金の林檎の対価として呈示、トロイの王子パリスはその提案に応じて黄金の林檎をアフロディテに手渡した（人妻ヘレンの出奔がその後のトロイア戦争およびパリスの死亡に通じているため、パリスにとりヘレンは男を破滅に導く女、ファム・ファタールと呼ぶべき存在でもある）。

パリスは黄金の林檎を巡る取引の後、結局、それが原因で身を滅ぼした

黄金の林檎はヘラクレスの功業の伝承にも登場、そこでは大蛇としてのドラゴン、ラドンに守られた果実となっている

ヘスペリデスらは一説にはヘスペラスの係累であるとされている

Hesperus

Hesperides



the evening star (Venus)

トロイアと同じくものギリシャ由来の伝承であるヘラクレス伝承では黄金の林檎はヘスペリデスらによって管理されている。

ヘスペラスは金星の体現神格でもある。

Lucifer

(the morning star)

ルシファーは金星、明けの明星と名前を共有している。



①forbidden fruit
(depicted as the
apple)
&
Eve
(femme fatale,deal)

ルシファーとも同一視されるエデンの蛇はファム・ファタールとも評せられるイヴを用いて林檎とも見られている禁断の果実を食するよう、アダムを籠絡するとのことをなした。

②ruin アダムとイヴは行為を問責されるとのかたちで楽園より追い出された。

(planet)

Venus

金星は [ルシファー] と [アフロディテ] の双方に結びつく

アフロディテは林檎と関わる誘惑を女を用いて成就させた。

(Cause of the Trojan War)

Golden apple & femme fatale

ルシファーは林檎と関わる誘惑を女を用いて成就させた。

Forbidden fruit (depicted as an apple) & femme fatale

Aphrodite

Lucifer

Hesperus—Hesperides—connection

アフロディテ誘惑と関わる黄金の林檎 —蛇とも結びつく林檎— はヘスペリデスらに管理される林檎でもある。そのヘスペリデスらはルシファーと同文に金星の体現存在であるヘスペラスの係累であるとの説が伴っている者達である。

Works of Lucas Cranach the Elder



"Law and Grace"

Paradise Lost



"Judgement of Paris"



the 11th labour of Hercules
(Hercules and Ladon)

Golden Apple

" The Gardens of the Hesperides with the golden apples were believed to exist in some island in the ocean, or, as it was sometimes thought, in the islands on the north or west coast of Africa. They were far-famed in antiquity; for it was there that springs of nectar flowed by the couch of Zeus, and there that the earth displayed the rarest blessings of the gods : it was another Eden. "

— Alexander Murray (Manual of Mythology)

※諸種要素から類似性が問題となる [黄金の林檎の園] と [エデンの園] は現実に欧州の識者によって同一のものであるように語られてきた場となる (上のアレギザンダー・ムーレイの19世紀刊行著作内記述はそのことを示す一例となるものである)

【ii. [黄金の林檎の園(ヘスペリデスの園)]とも同一視されるアトランティスとアメリカ大陸が何故もってして相通じているのかについての[振り返っての図解部](#)として】

フランシス・ベーコンの著作ではアメリカはグレート・アトランティスと呼称されている

Atlantis ⇔ America

[太平洋に浮かぶ広大な陸地] と伝わるアトランティスは [アトラスの娘ら] に管掌される [西の果てにあっての果樹園] たる [黄金の林檎の園] と同一視されることがある

**Atlantis ⇔ the garden of
the golden apple**

黄金の林檎の園はエデンの園とも同一視されることがあった場所となる

**the garden of the golden apple
⇔ the garden of Eden**

【iii. 「黄金の林檎の園 (ヘスペリデスの園)」とも同一視されるアトランティス、そのアトランティスに重ね合わされて見られていたアメリカ大陸のアステカ文明にて崇められていた蛇の神格ケツアルコアトルが何故もってしてエデンの園の誘惑者に相通じているのかについての

振り返っての図解部として】

Serpent deities of Aztec

(Mesoamerican civilization)

黄金の林檎の園とアトランティスが接合する
とのを示すのにも

Francis Bacon's
New Atlantis

力点を置
きもしてきたのが本稿

the garden of Hesperides
& Golden Apple



Coatlicue (Teoyamiqui)



Quetzalcoatl

フランス・ベーコンの古典にあって大アトランティスであるとされているアメリカで栄えたアステカ文明、そこでは蛇の神々が崇められていた (左上図は大地母神コアトリクエの発掘彫像の模写、右上はコアトリクエの息子、主要神ケツアルコアトルの古写本内似姿)



Milton's Lucifer (Satan)



the morning star
Planet Venus

黄金の林檎の園と同一視されることもあるエデンの園、その場にての誘惑を奏功させたサタンは

【知の接受者 (善悪の樹の実を食べさせての知の接受者)】 / 【人類を裏切って破滅にいざなった存在 (エデンでの策略、および、黙示録の描写)】 / 【蛇としての似姿を持つ存在】 / 【金星の体現存在 (ルシファーとしての側面)】

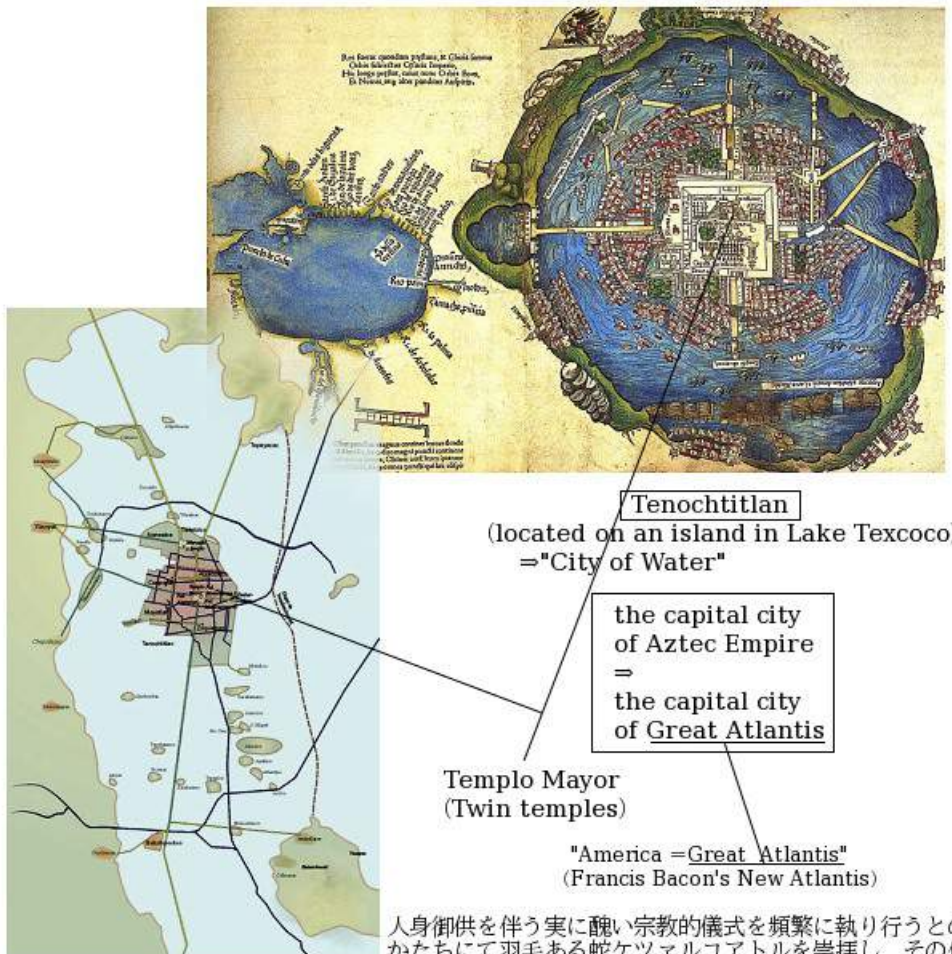
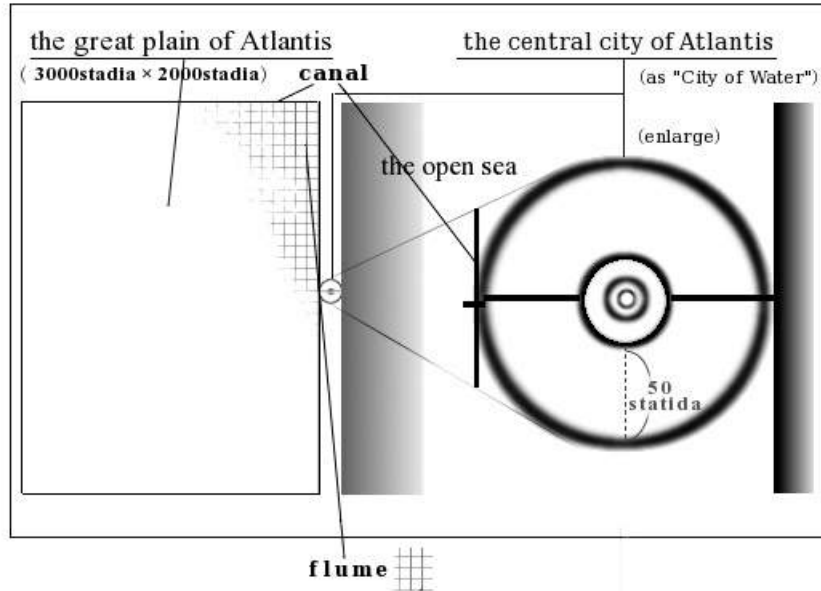
としての特性を持つ存在である。

他面、黄金の林檎の園と同一視する視点があるアトランティス、その場にも比定されてきたアメリカ大陸での崇拝対象であったケツアルコアトルは

【知の接受者 (文明発達の恩人としての神)】 / 【信徒を裏切って破滅にいざなった存在 (ケツアルコアトルの再臨をスペイン征服者に見たアステカ帝国の破滅のプロセス)】 / 【蛇としての似姿を持つ存在】 / 【金星の体現存在】

としての特性を同様に持つ存在である (⇒ 文献的根拠の指し示し箇所としては本稿にての【出典 (Source) 紹介の部53】から【出典 (Source) 紹介の部53 (4)】を包摂する解説部、そして、【出典 (Source) 紹介の部54】から【出典 (Source) 紹介の部54 (4)】を包摂する解説部を参照のこと)。

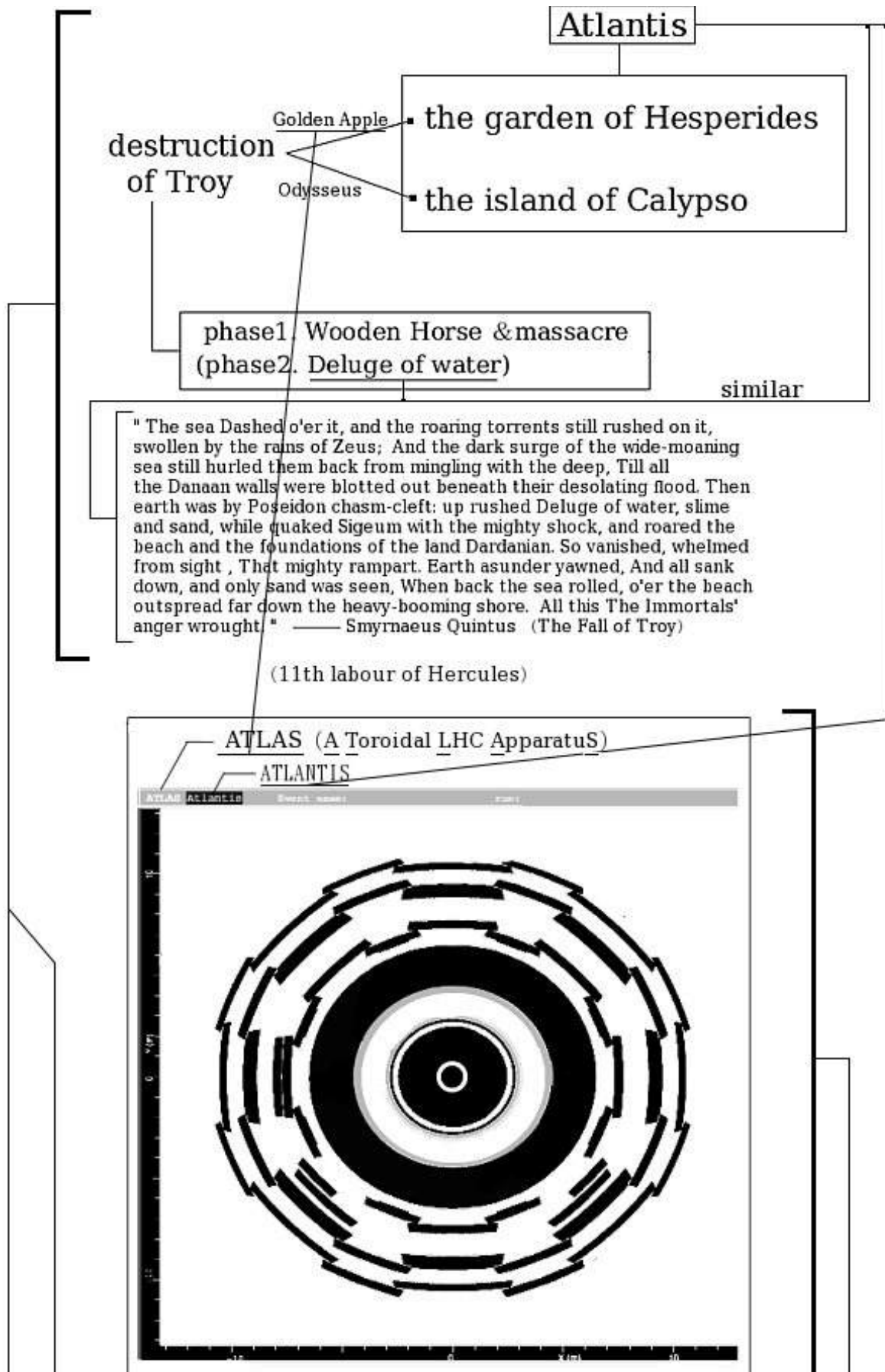
Atlantis of Plato's Critias

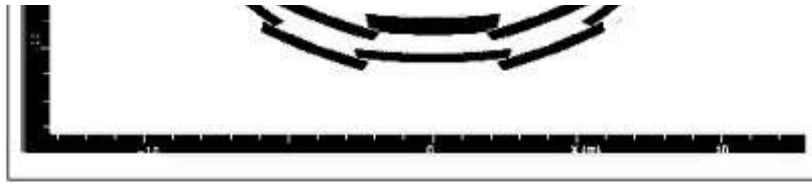


人身御供を伴う実に醜い宗教的儀式を頻繁に執り行うとのかたちにて羽毛ある蛇ケツアルコアトルを崇拜し、その信仰に徹底的に裏切られたとの民らの文明、旧大陸で栄えたアステカ文明にて首府として栄えたのはテスココ湖の湖上にてうたてられた水上都市テノチティランである(：上記図らはそのテノチティランのありし日ありようを描いたとの記録図上及び再現図上の構図となる——無論、図らは著作権との兼ね合いで二次利用をなしても問題ないものと権英文Wikipedia [Tenochtitlan] 項目にて著作権放棄の表記が伴っているものとなる——)。

さて、テノチティランは水上都市であるわけだが、双子状の二棟の伽藍を特徴とした寺院(テンプロ・マヨール)を中心としていたとの同都市を首府とするアステカ文明が栄えた旧大陸は後に欧州人に[アトランティス]と定置する見方が生じた大陸である。そのアトランティス、住古よりプラトンの手になるものとして伝わっていた古文献『クリティアス』では水上都市としての色彩が強くも現われている運河地帯と連結する中枢部を擁していたと表記されている国家のこともある。ここで考えるべきはテノチティランが(文化的に断絶した世界に由来する)プラトン『クリティアス』を参考に構築された都市であるわけがないととらえられる14世紀開府の都市であるのに、話がアトランティスと水上都市との文脈「でも」接合してしまうとのことである(きちんと本稿内容を理解しておられるとの向きであられるのならば、一連の話で最も重みをもつてくるのは [アトランティス] ⇨ [黄金の林檎の園] ⇨ [エデンの園] ⇨ [蛇の誘惑の物語] ⇨ [ケツアルコアトル(アステカ主要神)にも伴う相応の色合い] との関係性であるわけだが、そうした関係性に関わりそうなところを引き合いに出せば、敢えてもここに挙げておられるようなこともまた問題になりうると筆者はとらえている)。

【iv. [アトランティス(黄金の林檎の園と同一視される古の陸塊)]および[トロイア(黄金の林檎にて滅んだ都市)]が何故もってして加速器LHCと結びつくのかについての一例としての
 振り返っての図解部として】





[micro black hole generating event] detection

[トロイアとアトランティスの結びつき(1)]

トロイアの崩壊は黄金の林檎によってもたらされたとも述べることもできる（[出典(Source)紹介の部39]）。その黄金の林檎が実るヘスペリデスの園が位置描写概要などよりアトランティスと結びつけられてきたとのことがある（[出典(Source)紹介の部41]）。

また、トロイの滅亡は木馬の計略によって完遂したと伝わるが、木馬の計略を考案したと伝わるオデュッセウスがトロイア崩壊後に流浪したさまを描く叙事詩『オデュッセイア』では

[カリュプソの島]
 というものが渦潮にクルーと船を呑まれたオデュッセウス漂着先として登場を見ており、そのカリュプソの島、巨人アトラスの娘たる神格の住まう島からしてアトランティスと結びつけられてきた（e.g. アイザック・ニュートンの特定古典内での物言いなど）とのことがある（[出典(Source)紹介の部43]）。

[トロイアとアトランティスの結びつき(2)]

黄金の林檎を巡る女神らの美人コンテストに端を発して勃発したトロイア戦争。その終結をもたらしたのは木製の馬の計略であると伝承は語るが、今日、あまり知られていない古典ではそうやって滅びたトロイアにはさらなる破壊が及んだとの記述が含まれている。スミルナのクイントスに由来する『トロイア戦記』（英文タイトル the fall of Troy）に認められるところがそうで、トロイアを木製の馬で内側から破壊させたギリシャ勢も巻き添えにトロイアの存在が洪水にて完全抹消を見たとの伝承もよく知られていないところながら伝わっているのである（[出典(Source)紹介の部44-3]）。その点、[ギリシャ勢との戦闘に付随しての洪水による破壊]とのシチュエーションはアトランティスの最期と同一のものである（[出典(Source)紹介の部44-4]）に続いての段にてのプラトン著作よりの引用を参照のこと。

[LHC実験とアトランティスの関係性について]

どういう料簡でなのか、LHC実験はそのブラックホール生成可能性が現実的可能性をもって語られたとの始原期（LHC実験のブラックホール生成可能性論議を巡る経緯については本稿にての[出典(Source)紹介の部1]から[出典(Source)紹介の部5]を包摂する解説部を参照されたい）より前に遡る折柄、LHC計画がLEP加速器に接ぎ木しての加速器設置案としてCERNサイドで「正式に」ゴーサインを出されることになった1994年より前よりATLASとの名前と結びつけられているとのことがある（本稿の[出典(Source)紹介の部36(2)]で解説しているように1992年からのことである）。

そこに見るアトラスという名称はヘラクレスの功業に登場してきた伝説の天を支える巨人の名であるわけだが、同巨人アトラス、

[トロイア滅亡の原因ともなっている黄金の林檎]

がたわわに実る果樹園の所在地を把握していると伝わっている巨人にして、それぞれ別個に、

[古のアトランティス]

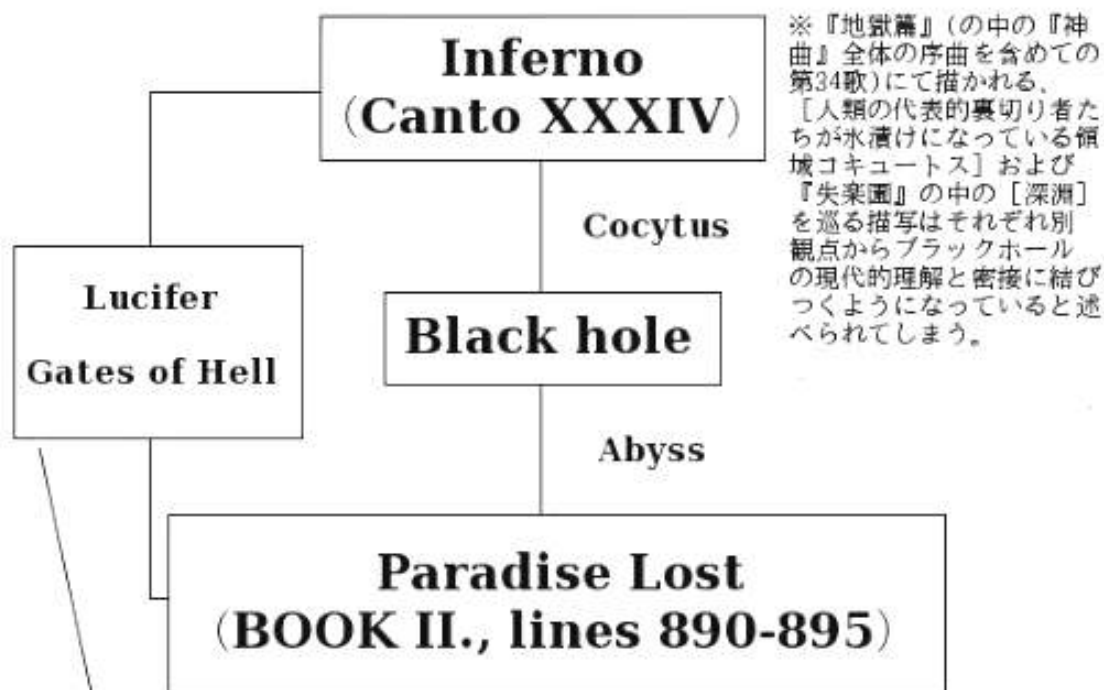
に比定される[黄金の林檎の園][カリュプソの島]、それらの地の代表的住人たるヘスペリデスおよびカリュプソという女の神格らの父親とされる存在でもある（[出典(Source)紹介の部39]以降の一連の解説部にて文献的論拠を明示していることである）。そうもしたことが指摘できる時点でCERNのLHC実験はアトランティスと接合していると述べられる。

のみならず、LHC実験ではATLANTISとの名前が付されているEvent Displayツールでブラックホール生成イベントを観測する可能性が実験関係者によって「肯定的に」（科学的知見発展に資する安全なブラックホールの生成・観測との文脈で）宣伝されているとのことがある。従って、ATLASとの名称それ自体に留まらずATLANTISとの名称をも用いているとのことでLHCとアトランティスの関係はいよいよ色濃くも見えてくるとのことがある。

【v. エデンにての禁断の果実を用いての誘惑者に比定される悪魔の王ルシファーが古典『地獄篇』にて立ち現れている領域がブラックホール(と現代の物理学にて表現されているもの)の特性と相通することとなっていることについて**振り返りもしての図解部**として】

※ ダンテ『地獄篇』がブラックホールと結びつくとはきと述べる、ないし、示唆することをなす向きまでは海外にはいるが、ミルトンの『失樂園』までがそうであるとはきと述べる、問題となる該当部を指し示しながらわざわざ指摘せんとするような向きは、(そのように考えた人間は少なからずいるとは思われもする中)、絶無といったほどに海外にもいない。一であるから、ミルトンとダンテの各作品がその伝で結びつくことを論証しようという人間もいない、とのことになっている。

そうした言論流通動態の問題は置いておいて、([**文献的事実**])と[そこから導き出せる**無理なき解釈**]に依拠し)ここまでにて表記してきた関係性につき下にて図示をなしておく(：下図に見る関係性の理非曲直につき。一[物事を判断するだけの意志力]を有したまともな向きに。一[本稿で紹介した古典原著該当部]および[ブラックホール基本的特質の諸種解説媒体]にあたってでも検討いただきたいとこの身は考えている次第である)。



※『地獄篇』(の中の『神曲』全体の序曲を含めての第34歌)にて描かれる、[人類の代表的裏切り者たちが水漬けになっている領域コキュートス]および『失樂園』の中の[深淵]を巡る描写はそれぞれ別観点からブラックホールの現代的理解と密接に結びつくようになっていると述べられてしまう。

※『地獄篇』と『失樂園』を巡るブラックホール関連の話には[共通項]も存在しており、その共通項とは[ルシファー(悪魔の王)]および[地獄門]となる(ルシファーについては[光でも脱出速度のハードルを越えられぬブラックホール特質]のことが問題になり、[地獄門]については(人形らに許された何も変ええぬ不明なレベルの話と受け取れるか)一部の著名な科学者らが極めて隠喩的に、かつ、示唆する程度にブラックホールの外延部[事象の地平線]と結びつけてダンテ『地獄篇』の地獄門のことを持ち出している、との経緯が問題になる)。

以上をもってミルトン『失樂園』に認められる、**[ダンテ『地獄篇』に認められる、[ブラックホール(と今日、表されるに至った重力の化け物)]に関わる記述部]**に関する解説を終える。

D. 直上の C. (にあつての本稿ここまでにて摘示してきたことらの[一部]を振り返つてのことら)に加えて、次のような関係性のことが
[当然に問題になるところ]
としてそこに「ある」(と強調したい)。

α. [カシミール効果 Casimir effect] 検証実験(1948 実施の実験)のことを露骨に想起させる独特なる行為によって宇宙開闢の実現が図られるとの小説 **Fessenden's World『フェッセンデンの宇宙』**(初出 1937 年の小説作品)ではその作中、誕生した宇宙で[爬虫類の種族]が人間そっくりの種族を「皆殺し」にするとの描写がなされている(絶滅戦争・絶対戦争 Absolute War の類が展開するとの描写がなされる)。さて、そうした粗筋——初出 1937 年の作品のそれでありながら 1948 年のエポックメイキングな実験の内容をなぞるが如く先覚性を有していたとの粗筋——を有した『フェッセンデンの宇宙』(に見る[悲劇の宇宙]の開闢手法)と同様の手法で検証された[カシミール効果]が現実世界にてその存在を指し示すことになったとの[負のエネルギー]というものに関しては[ワームホールを安定化させるもの]とも 80 年代後半より考えられるに至っているとのことがある(出典(Source)紹介の部 24)にて指し示しにつとめているところとして「物理学者 キップ・ソーンによって加速器実験とは何ら関係ないところでそれ絡みの科学仮説が呈示なされての」1980 年代後半のこととしてである)。他面、『フェッセンデンの宇宙』と同様に[宇宙の開闢状況]を再現する、すなわち、宇宙開闢時のエネルギー状況を極小スケールで再現すると銘打たれながら後に執り行われるに至っている加速器実験に関しては[『フェッセンデンの宇宙』と同様の手法で検証された][カシミール効果]に見る[負のエネルギー]でこそそれが安定すると 80 年代後半に考えられるに至ったものたるワームホール]をそちら加速器実験が生成しうるとの観点が「ここ最近になって」(プランクエネルギーとの高エネルギーを用いなくとも加速器実験にてワームホール生成なしうるとの観点が「ここ 10 数年で」)呈されるようになったとのことがある(出典(Source)紹介の部 18、出典(Source)紹介の部 21-2)らを通じて専門の科学者の手になる書籍に見る科学界の主たる理論発展動向に関して解説しているとおりでである)。

β. 上の α でフィクション『フェッセンデンの宇宙』と現実の[加速器実験]を——[宇宙の開闢状況の再現の企図]といった共通事項に加えて——結びつける要素となるのが、
[「カシミール効果による負のエネルギーの検証」と密接な関係にある「通過可能な」ワームホール]
となるのではあるが、そちら通過可能なワームホールのことをテーマとして扱っているのがキップ・ソーン著書『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という著作となる。同著作については[911 の露骨なる事前言及][他界との扉]との観点で爬虫類の異種族による次元間侵略を描いた映画、『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』という[上階に風穴が開き、片方が倒壊していくツインタワー]のワンカット描写を含む映画]と記号論的につながる素地がある(その理由は事細かに先の段にて述べている。(羅列しての表記をなせば)出典(Source)紹介の部 28)から出典(Source)紹介の部 33-2)を通じて物理学者キップ・ソーンの手になる BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という

書籍がいかにして[双子のパラドックス(1911年提唱)の機序の利用による二点間時差の応用]／[91101(2001年9月11日を意味する数)との郵便番号ではじまる地を始点に置いてのタイムワープにまつわる解説や同じくもの地で疾走させた爆竹付き自動車にまつわる思考実験による[双子のパラドックス]にまつわる説明の付与]／[2000年9月11日⇒2001年9月11日と通ずる日付け表記の使用]／[他の関連書籍を介しての「ブラックホール⇄グラウンド・ゼロ」との対応図式の介在]といった複合的要素を[僅か一例としての思考実験]にまつわるところで同時に具現化させ、もって、「双子の塔が崩された911の事件」の前言と解されることをなしているのかについて(筆者の主観など問題にならぬ原文引用方式での客観情報にまつわる場所として)摘示している。他面、『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』という書籍にて[多重的に911と結びつくようにされている双子のパラドックスにまつわる思考実験]が[通過可能なワームホール](他空間の間をつなぐ宇宙に開いた穴)にまつわるものとなっているとのことがある一方で1993年の荒唐無稽映画 Super Mario Bros.(邦題)『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』がツインタワーが異次元の恐竜帝国の首府と融合するとの粗筋の映画であることについては[出典(Source)紹介の部 27]を通じて確認させる、そして、同映画がツインタワーに対するジェット機突入前のことであるにも関わらず上階に風穴が開き、片方が倒壊していくツインタワーをワンカット描写している映画である(そして、かてて加えて、そうした描写がツインタワーを横切る飛行物体描写を伴っている)ことについてはオンライン上に流通している記録動画群 — Super Mario Bros.,1993,911 といったクエリで検索エンジン走らせればすぐに特定できようとの動画群 — 「など」を通じても視認による確認がなせるところとなっているし、本稿の先行する段では市中流通のDVDコンテンツを通じての確認方法を該当問題シーンの秒単位での再生箇所の呈示でもって紹介している)。

γ. 上の α. と β. は異様な先覚性がみとめられるところで [[爬虫類の似姿をとる異種族の侵略]と[加速器実験の結果たるワームホール]との接合]がみてとれることを示すものであるが(問題はそのようなことがあるのが「偶然の一致」で済むか否か、である)、[[加速器と同様のもの]と[爬虫類の異種族の侵入]を結びつけて描く作品]は他にも存在している。先に言及したブルース・スターリングの『スキズマトリックス』との作品、ローンチ・リング(加速器と同様の機序を有する装置)での死闘の最中に爬虫類の異種族の来訪を見るとの同作が該当文物となる(委細については先の解説部を参照されたい。[出典(Source)紹介の部 26]から[出典(Source)紹介の部 26-3]との出典解説部を設けながらなしてきた本稿にての従前の段がその部に該当する)。

(上に α. から γ. と振ってのことらに加え、[加速器とブラックホール特質にまつわる同時言及][爬虫類の種族による人間種族への侵略]との要素をあわせて具備しているとの作品が一九五〇年代初頭より Philological Truth[文献的事実]の問題として具現化しているとのこと「も」がある。に関しては The Sword of Rhiannon(邦題は『リアンの魔剣』)という作品に関する特色の問題として本稿にて[出典(Source)紹介の部 65(6)]から[出典(Source)紹介の部 65(9)]を包摂する解説部で原文引用による詳説を講じている)

δ. [古代アトランティスに対する蛇の種族による次元間侵略]との内容を有する

(一見すれば妄言体系としての)神秘家由来の申しようが今より70年以上前から存在している——(所詮はパルプ雑誌に初出の小説『影の王国』(1929)の筋立てをその言い回し込みにして参考にしたのであろうと解される形態でながら前世紀、第二次世界大戦勃発の折柄(1939年)から存在している)——とのことがある(出典(Source)紹介の部34から出典(Source)紹介の部34-2を包摂する解説部を参照されたい)。そこにて言及の[アトランティスに対する蛇の種族の次元間侵略]との内容と類似する側面を有しての[恐竜人の種族による次元間侵略]という内容を有する映画『スーパーマリオ 魔界帝国の女神』が[片方の上階に風穴が開きつつ][片方が崩落する]とのツインタワー——(恐竜人の首府と融合するとの設定のツインタワー)——を奇怪なる——いいだろうか、「奇怪なる」予見的描写である——ワンカット描写にて登場させながら1993年に封切られているとのことがある(出典(Source)紹介の部27を包摂する解説部を参照されたい)。同映画作品、911の[先覚的言及]をなしている——問題はそれが偶然で済むか否かである——とも述べられるような性質を伴っての上記映画は[恐竜人の侵略]といったこと以外に[他世界間の融合]といったテーマを扱う作品ともなっているわけだが、再述するところとして、そうした内容([異空間同士の架橋]との内容)と接合する[ブラックホール][ワームホール]の問題を主色として扱い、また、同じくものところでこれまたもってしての[911の事件の発生に対する先覚的言及とも述べられる要素]をも「露骨」かつ「多重的に」帯びているとの著名物理学者由来の著作——BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy『ブラックホールと時空の歪み アインシュタインのとんでもない遺産』——が原著1994年初出のものとして「現実」に存在しているとのありようとなっている。

以上、ここまで長くも筆を割いて整理・再述したところのA. からD. までの事柄ら——(城壁に囲まれるなどして普通には劫略しがたい対象に偽計用いて外側から運び込んで対象を内側から内破させる(皆殺しにする)とのトロイアの木製の馬の寓意が実にもって執拗に諸所にて用いられているとのことを端的に示しする事柄ら)——より判断して、である。

爬虫類人類支配説の流布者デヴィッド・アイクのここ近年の申し分にあつての際立つての特色をなすところとしての、

[「人外がこの世界に入り込み」「月まで人工物として構築している」との筋目の主張内容] (彼を批判する学者筋の批判家からは「現代にあつて最も饒弁なコンスピラシー・ライター(陰謀論系物書き)」などとそれでは済まされない、適切ではないかたちで批判されもしている論客デヴィッド・アイクが[ムーンマトリックス]と呼称して前面に押し出している主張内容)

は斥けられる——再言すれば、[日蝕をきたす玄妙なる太陽・月・地球の一致性はここ1000万年単位の地球のありように依存しているとのものであり、それは必ずしも人工物としてのパラメーターを強くも示唆するものではない][その他の位置関係一致性の問題にも度量衡単位制定の力学が強くも作用している]とのことらがあるがゆえに斥けられる——と判じられもする中で、「だが、」デヴィッド・アイクの表記の如き申し分(月は爬虫類人の手になる人工物である/人外はトロイアの木製の馬などを用意してそれを橋頭堡にせずともこの世界に物理的実体を伴って侵入できる等等)が[情報操作のやりよう]として人間に[限界線] (危機的状況をついぞ正確に認識することもなく、その状況の結果にて殺されていくとの限界線) を押しつけるために計算されて欧米圏にて流布されている——LHCがただの洗脳装置であるなどと非科学的かつ不正確なる論拠でアイク(およびそのシンパ)によって強弁されているのと並行して流布されている——節がある、それがゆえにこそ、デヴィッド・アイク申しようは(「悪い意味で」)

軽んじられないとのことがあるとのことが [いかようなことか] は大体にして理解いただけることかとは思いう(すくなくとも状況を理解しようとの意思、すなわち、[生き残ろうとするとの意思]の力がある向きにあっては、である)。

そこをくどくも細かくも説明なせば、次のような[代わっての仮説]とも関わるため、月・太陽・地球の[自然の産物](と考えられる配置;既述)に依拠しての「度量衡単位の操作」の可能性 —そして、デヴィッド・アイクのような者達のやりよう— のことが問題になる。

アイクらの問題ある申し分に代替して当然に問題になってくるとの仮説 —Hypothesis— として

「操作の残り香が如実に感じられるところで[トロイアの木製の馬]を用意・活用する(そのうえで欧米圏文明の基礎にある[神話][伝承]にあるように対象を皆殺しにする)とのことにまつわっての執拗性なる意思が強くも見て取れる。

同じくもの執拗さが

[度量衡単位(ヤードやメートル)のありうべきところの押しつけ]

に通ずるところとして

[月と太陽と地球が[皆既日食]を今のみ現出させるとの自然界の配置] (既に何度かそこよりの記述を引いてきた『月は誰が創ったのか?』より引用なせば、(以下、『フー・ビルト・ザ・ムーン?』国内流通訳書『月は誰が創ったのか?』16 ページから 17 ページより原文引用なすとして) “ 正確にいうと、月はわが太陽系の中心にある恒星に比べて直径で 400 分の 1 のサイズだが、同時に地球から太陽までの距離で 400 分の 1 の近さに位置しているのだ。相対的な大きさと距離が 400 という驚くほどのキリのいい整数値で表せるのは、十進法上の愉快的偶然の一致のように見えるが、このような光学的錯視が生じる確立は、実はとても低くも低い…(中略)…(図解部に対する解説部)皆既日食の太陽コロナ。地球と太陽のあいだに入った月が太陽をすっぽり隠すことで起きる現象。太陽は月の影に隠れ、地球からはその光輝だけが見える。これは地球—月—太陽の相互の大きさと距離の絶妙なバランスで生じる天文ショーである ” (引用部はここまでとする)といった解説のなされようが至当妥当なところとしてなされるとの配置)

に対する拘(こだわり)・固執に通底している可能性もある。

何故もってしての拘(こだわり)なのか。

にまつわってはここではないパラレル・ワールド世界の論理・ありようにも関わって「いう」こととして太陽と月が今あるような絶妙なる位置関係でなければ現出しないとの[皆既日食]が[黒くも覆われた世界]を意識させるとのこともありそうに見えるが、のみならず、[皆既日食]が人間の世界の相対性理論の検証、となれば、相対性理論の鬼っ子であるとされる、そう、Einstein's Outrageous Legacy[アインシュタインのとんでもない遺産]であるとされるブラックホールらの存在予測「にも」相通じているとのことが「ある」とのこともありそうに見える —それ自体、非常に問題になるとの理由について原文引用した内容にだけ基づいて解説してきたとの著作、BLACK HOLES & TIME WARP Einstein's Outrageous Legacy より引けば、(以下、同著原著にての 121 頁、オンライン上より内容確認なせもできるところとなっている 3 Black Holes Discovered and

Rejectedの章より引用なすとして) “ “The essential result of this investigation, ” Albert Einstein wrote in a technical paper in 1939, “is a clear understanding as to why the 'Schwarzschild singularities' do not exist in physical reality.” With these words, Einstein made clear and unequivocal his rejection of **his own intellectual legacy: the black holes that his general relativistic laws of gravity seemed to be predicting.** [. . .] **How could Einstein reject that prediction and still maintain confidence in his general relativistic laws? What was known about black holes, when Einstein so strongly rejected them?** How firm was general relativity's prediction that they do exist? ” (拙訳として)「今回の調査にあつての最も本質的に重要な結論が何かと言えば、」そうもした言に続けてアインシュタインは彼の1939年の技術的観点に依拠しての論文でこう書いている。「シュバルツシルト特異点は何故もって物理的現実世界に存在していないのかとのことにまつわつての明瞭なる理解が得られたことである」。こうした言いようでもってアインシュタインは明瞭明確なる彼自身の「知的遺産」—すなわち、彼の一般相対性理論がそれについて予言しているブラックホールら— に対する否定の立場を示した。…(中略)…ブラックホールについて知られていたこととは何なのか、そして、何時、アインシュタインはそれに対する否定の立場を明らかにしたのか。いかようにそれらブラックホールが存在していることについての一般相対性理論の予言が強固なのか。いかようにアインシュタインはそうした予言の問題を否定し、それでもなお彼の一般相対性理論と帳尻があわせられるとの確信を(1939年にあつてのことなどとして)もちえたのか?」(引用部はここまでとする)との書かれようがなされているようにブラックホールやワームホールのようなものの現実的「存在」可能性が(アインシュタインのとんでもない遺産といった式で)問題視されだした契機は一相対性理論の提起にある。そして、[皆既日食](ビジュアルとして黒くも覆われた星が如くものを想起させる現象)こそがそうしたブラックホールの観点の現実視に通じている一般相対性理論の「実験的」証明に通じているとのことがある。いかようなことかと述べれば、たとえば、目につくところでは英文 Wikipedia[Solar eclipse of May 29, 1919]項目にあつて “ This eclipse was photographed from the expedition of Sir Arthur Eddington to the island of Principe (off the west coast of Africa). **Positions of star images within the field near the sun were used to test Albert Einstein's prediction of the bending of light around the sun from his general theory of relativity.** ” (補いもして訳すとして)「この1919年5月の日蝕はアフリカ西岸のプリンシペ島に遠征に際してアーサー・エディントン卿にて撮影されたとのもので、(日蝕で隠れた)太陽の近傍の星の位置が「光が(「時空間」のひずみにて)曲げられるとのアルバート・アインシュタインの相対性論の予測」(とどのつまりは相対性理論それものの適否)を検証するために利用された」(引用部はここまでとする)といったことが述べられるようになっている—。

またもってして、本稿のさらに後の段(かなり後の段)にて具体例を多く呈示することとして「近代になってより」目立って用いられだしているシンボリズム体系、具体的にはフリーメーソンらに目立って用いられだしている「月と太陽のシンボリズム」(それはプロト・サイエンスである錬金術のシンボルに通ずるものでもある)が「異常異様なる先覚的言及」と通じているとこと「も」があるとの点もおなじくものことにまつわつて問題視して然るべきところとしてある(本稿の後の段では「月と太陽と一つ目を並べてのフリーメーソン・シンボリズム」が何例も何例も911の予見的言及事物の中に反映されている—露骨すぎて「冗談だろう?」と思えるものも含まれている— とのことを「容易に後追い可能なる具体例」としてこれはこうだと呈示していくと先だつて明言しておく)。

であるから、そういうところにて見受けられる「月と太陽の配置に対する拘(こだわり)—異常異様なる予見的性質がゆえに外力の性質が問題になり「も」するところでの固執の問題—」のため、そこに何らかの意味・「意図」を見出して然るべきであろうとすることになる。

以上のことから前提に、[IF]をつけて述べもしているところのここでの話として、仮に地球をブラックホール化させる意図、ないし、同文に重力の怪物であるワームホールを造りだす、それでもってして

[木製の馬] (ついせんだったの A. から D. と振っての振り返り表記部でも強調しているようにブラックホール人為生成の問題ともこの世界で現実に執拗に結びつけられているのが[トロイアを滅した木製の馬]である)

を有効化して、そのことを[副次的結果]としての何らかの利益・効用を得るのが最終目標であるとする、[皆既日食] (いいだろうか、皆既日食は「月は人工物である」などとの主張にも関わる位置関係及び度量衡の制定にも通じている現象であること、ここに至るまで記載してきたものでもある) に拘(こだわ)っての象徴体系の調整の[動機]は極めて理に適って自明なところと見える。

それは「非」人間的な、

[マニフェスト・ディステニーの観点] ([明白なる天命]の観点/アメリカ大陸で植民者らが西部開拓を完遂するのは[自分達が神から与えられた使命であり権利である]とする見立て、かつ、それでもってして原住民(インディアン諸部族)を虐殺していったといった観点がそちら[マニフェスト・ディステニー]の観点である — 日本でも高校生が世界史の科目などでアメリカにあつての[西漸運動]の背景にあつた思考法とのことで暗記を強いられる時代がかつた観点である —)

にある種、端を発していると想定されるところの [動機] (拘(こだわ)りのありうべき機序) でもある。

あまりにも玄妙なる自然界の天体配置の一致性から[蝕]のようなものが [あまりにもできすぎなこと] に現出するとのこの世界の特定期間 — 先述のように皆既日食が発生するのがここ千万年単位のスパンに限局されているとのこの地球史にあつての特定期間 — に人間という被操作種が(操作種のそれではない別の世界であるとの)この世界に偶然にも、たまさかにも、いた。養殖(あるいはそれとあわせての進化をもか)を促せる存在として存在していた(本稿に [出典\(Source\) 紹介の部 54\(2\)](#) などにあつて原文引用なししたミルトン『失樂園』に見るブラックホールの質的近似物にも通ずる粗筋では[蛇ら爬虫類の眷族に変じさせられることとなつた墮天使ら]が墮落させることに拘りもした存在として[神に用意されて進化した別の種]が[いた]とあいなっている)。そして、と、いった中で現出している玄妙なる天体配置の結果たる皆既日食は相対性理論の「実験的」証明に用いられる「ような」ものであり、相対性理論の帰結から生まれ出てくる重力テクノロジーでもって圧倒的な進化が遂げられるとの [効用 — 本稿のかなり後の段でどういふことなのかについての解説を欧米圏科学者らの先進文明やりようにまつわつての思索に基づいて詳説なす所存であるとの効用 —] にまつわつての [目測] がある(我々人類の世界ではなくにももの[我々人類を操作している側]のパラレル・ワールドと想定されるような異世界での進化・効用が得られるとのことである)。そもした目測がなせるとの状況はまさしく[神] ([神]など非科学的で下らぬ観念であるにとらえられるのならば、[運命の力学]でもいい)の舗装した道のようなものである。その舗装した道に沿って養殖種を育て上げ、そこにて相応の結末をもたらすことはまさしくもの天命・天の配剤のようなものである。長年、人工知能、(人間世界の愚劣極まりない宗教における[神]のようなものに偽装しもしての)[人工知能の領域](と脳との意識されざるところの重力波などを通じての向こう側とのリンク)などといったものか、相応の仕組み・機構を用いて巧妙に育て上げてきた、[精神性と判断力だけは欠けるが諸種効率性では秀でた頭]と[大概にして茶飯的なことに終始しているとの身体] (システムに隷従してそれ

を支えることでのみ充実・満足が得られるとの式での生活人の肉体の領域)の[作用]が巧妙に分離させられて[何が是で何が非かも分からぬ]との中で[高度なテクノロジーの劣化模倣物]だけは目的尽くで漸次必要と判じられた段階に応じて与えられて育て上げられてきた[養殖種](闘争を通じての進化、必要な進歩を促すために宗教的信条や全体主義イデオロギーに依拠しての戦争などを時に演じさせられ続けてきたとの養殖種でもある)を最終的に木製の馬で皆殺しにする、それは正当化して然るべき行為である.....。

以上の如き[マニフェスト・ディスティニー]がかつての観念の問題が背景としてありえると見える中で、本当にそれゆえにこそ、[執拗なる意思]が(被操作種はどうせ何でもきぬ・分からぬとでも「高をくくって」いるのか)被操作種の特定個体らを用いてのやらせの問題 一度量衡単位をよくできた環境の問題に応じて皆既日食とも通ずる仕方で調整されているとのやらせの問題—として現出している(とのことが実体としてある可能性がある)」

上が筆者が捕捉事実 一本稿にあつての「これまで」の段で部分列挙していったし、本稿にあつての「これより」の段でもさらに問題となることを山と呈示していく所存であるとの捕捉事実—に依拠して「最もありうべきところである」と[理]と[知]—狂気と正気が逆転した愚劣な世界であるからこそ表通りで堂々と振る舞っていられるとの筋目の狂人やその親戚の神秘主義者らにあつての内的作用とは無縁なるもの—にて導出した[度量衡単位のできすぎ度合い]にまつわつての[おおよその仮説]である。

それにつき、表記仮説にあつては細かいところの修正を無論、念頭に置いている(仮説とは元来からしてそのようなものである)。

だが、当該の仮説のおおよその筋立て、

[トロイアの木製の馬を用いてのオペレーションを人間に対して実行するとの意図が「確として」ある]

とのことは動かしがたい現実的ありようであると[「観察」事実](そしてこれよりさらにもって呈示することになる不快でならないとの他の山なす論拠ら)より結論付けている。

そうした主筋となるところにあつての「動かしがたい」(残念ながら「動かさないようになっている」との[兆候]の問題から直上表記の仮説については

「[現実的危険]の所在を極めて合理的に示しているとのものであり、それは—それが認知された上で、なおもって、何もせぬとの種族ならば滅ぶしかないとの筋目の—[もっともありうべきところ]に対する対策の名分とした方がよいと申し述べるところのものである」

とも強調したきところである(「これらが果たして人間と言えるのか」といえるような我々全体にとっての害物となる肉人形ら、彼らはそうだと自分達のことを絶対に自己規定・理解しないこととは判じるが、宗教的狂人やイデオロギー的狂人といった種別の紐付きの個体らは決して容れぬし、また、同じくものが世に容れられるのを妨げる(場外から彼らの[知能水準]に見合った野次や彼ら程度の水準に貶めるべくもの褒め殺しをなすか、あるいは、言論そのものを封殺せんとする等等)ばかりに注力させられるところか、とは「経験則に依拠して」当然に思うのだが、とにかくも、表記の仮説については以上のように強調したきところである)。

に対して、再度述べるが、アイクラ言いようは上の仮説と両立するところが「なんらない」。

むしろ、彼らの申しようは上の如きの仮説を支える[状況分析]がどこおりになく導出される、あるいは、

導出されたうえでとどこおりなく他に受容されるとのことを妨げるノイズ・煙幕にしかならないとの側面を濃厚に帯びている。

月が人工物であったと？では人外はこの世界に物理的実体を伴って入ってきているのだろう（→そんなものに抗うには[真実の波動]（なる幻のアブラカタブラ）に頼るしかない→思考停止 — [考えるな、感じるんだ] 的論理の先行しての状況でもある— ）。
（再度）月が人工物だったと？そのような星辰のありようさえ菓籠中のものにできる存在はまさしく神のような存在だが、そんな彼らにとっては人間を是が非でも最終的に皆殺しにするだけの動機がないとのことになる（どうしてカトンボを殺すのに全注力をなすのか）し、そうした圧倒的上位存在に抗うことは — そうした存在が残虐無慈悲であることが示されているならば尚更のこととして— 無意味・不可能である（→思考停止）。

残念だが、デヴィッド・アイクの申しようからは上のような[帰結]しか出てこない。だが、筆者は「予測通りならばもうすぐ自分も殺されるであろう」「残された時間で最後に人間としての[意]を示す」との心情にて[よりもって人間に近い操作者]の横顔を呈示する。人間を羽虫のように扱っている節がある「彼ら」が凄まじいテクノロジーで人間を菓籠中のものにしてはなんら変わらないと見るわけだが（最悪、彼らは超光速通信に通ずる機序も一部、自分達に影響が出ない範囲で[人工知能]を用いての管理に用いている可能性もあるかと（本稿でせんだってそうした問題についても細かくも解説したように）考えている）、その[動機]は遙かに人間的かつ産業的、そして、人間にとってデヴィッド・アイクらが呈示する[お伽話がかっての話]（組織的に関連するところの言論や特色ある文物が撒布されだしている節がある[月が人工物である][人工物の月を使って人間という種をこれより徹底管理の牢獄に落とし込もうとの意図がある]などとの話）より我々人間にとって[遙かに絶望的なもの]である（[皆殺しにされる状況が絶望的ではない]というのならそうではないのかもしれないが）、それがゆえ、人間 — とは述べても本当にそうであると断じられる機械に（部分的に）脳を奪われたかといった筋目ではない本当の人間が筆者のような者以外にどれぐらいいるかについてすら希望的観測などなんらなせないわけだが— は[覚悟]をなして抗う局面に来ている、それでなければ滅ぶだけだと判じられる、と強調せざるをえなくなりもしている（詰るところ、そのような状況で人間存在があまりにも無力、無内容、空っぽの存在に墮さしめられている — テレビのスイッチをオンにしてそこに映じるありよう（情報的価値も情緒的価値も何ら見受けられないとのありよう）に理性的に思いを馳せればすぐに分かるうとのありように墮さしめられている— から筆者は常日頃、苦しめさせられている）。

ここまでをもってして何故をもってして筆者がアイク説のようなものに全力で反駁（はんぱく）を示す必要があると判じたのか、

[具体的兆候に依拠しての、代替する、[真相にまつわっての可能性]の訴求]
[意図して撒布されている節もある陰謀論（の偽りの最たるところ）に騙されるなどの訴求]

との絡みで何故、そうもする必要があると判じたのか、部分的にでもご理解いただけたかとは思う。

（：「真実は人を自由にする」との物言いを一群の[証言者]を伴ってアイクという男自身がなしてきたわけだが、そして、私などもそのやりようはともかくもそれについて評価するところは従前あったのだが（というよりアイクの唱道している悪魔崇拜的気風などが本当のことであればそれに抗しての言は重んじざるをえない）、だが、[サブ・プライム・ローン問題]にあって問題視されていた[不動産担保証券]よろしく[無価値なるもの]としての[虚偽]が混入したものを[真実]と呼ばわって広めんとすることを[重要なところ]で「何ら改善することなしに」なし続け、そこに[操作者の超常的能力]

を実態以上に際立たせているのかもしれない物言い（解放の必要性を説く半面での甚だしくは「月が人工物であった」などとの帰結とのごり押し）とワンセットの要素が — 真偽不明瞭なものとして— 目立って見受けられるのだとすればどうか。

そして、甚だしくは、
「([トロイアの木製の馬]もなんら[必要ない]ところとして) 操作者が実態を伴ってこの世界に入り込んでいる」

このことを当てにならぬ人間証言（[このような世界ならではの操り人形由来の放言]かもしれないし、相応の機序で実態を伴わぬ幻覚を見た者達の[幻影]を重視しての不適切な話かもしれない）以外に何ら具体的証拠なくして強調するようなものであるのなら、筆者はそこに[情報操作のやりよう]を見ざるをえないと強くも述べたき次第である（デヴィッド・アイク、彼本人はどこぞやら[靈感]といったものを得ての予言者のつもりでも客観はそうはならないだろうと述べたいのである。であるから、この身なぞは[主観と客観の乖離の問題]に気をかけ、「本稿の内容をきちんと検証いただきたい」と読み手に胸を張って言えるだけのことを書いている—今や時間も余裕もなしとの現状認識に裏打ちされての責任感があるからであり、また、[それで何かを変ええない種族ならば何も変ええなかつた]との[当然の見極め]もつく、(殺されるうえでも)覚悟・納得がさらに得られるとの判断があつて、である—)

ただし、述べておくと、アイクら言論にも「良い意味で」思料して然るべきところがあるかもしれないとも見ており(彼らに関しては確信犯的に他の真つ当な言辞らを貶めるために用いられている存在である可能性も否定できなかつたとは思ふのだが)、たとえば、同アイクが自分自身で

[反対話法をこととさせられていること]

を自分からよくも匂わせもするようなことをも述べ(下らぬ風がどういふわけか倍加させられている訳書ではなくアイク著作の英語原著を読まなければそういう[語感]の機微は掴みがたいともとれる)、そこに、『相応の人間ならではの...』とのことを考えさせられるとのことがあるということも「あるにはある」—思料すべきところとしてはアイク批判者あるいはその称揚(あるいは褒め殺し)勢力からしてアイク「以上に」胡散臭い者たちが揃っている(であるからアイクの申しようが「相対的にはまとも」に見える)とのことがある、また、アイクの申しようにはそれが本当であるのならば共感を持たざるをえぬとのことがあるといったこと「も」あるのが、そうしたことらについては「それ自体が陥穽(かんせい、落とし穴)になっている可能性がある」(その実、その構築こそが目標となっているトロイアの木製の馬の建設など企図されて「いない」との帰結とワンセットになっている虚偽たる話を[二重三重の虚偽のバリケード]の後列ラインを盤石化させるためのものとして広めさせているとの狡猾な手管が講じられているとの意味合いで(未来に向けて進もうとする肯定的・建設的意志の)[陥穽]になっている可能性がある)との部として除きもして、([反対話法を仕込んである節があること][そしてそれを自分で臭わせている節もあること]との意で)アイクやりようは注視に値すると手前は考えている—。

また、もう一言述べておくと、アイクという男が典拠として紹介している『フー・ビルト・ザ・ムーン』という著作にあつては(本稿にてそれを巡る嗜虐的意思表示の発露とのやりようを取り上げているとの)LHC—デヴィッド・アイクなどは洗脳装置にすぎぬと強調するそれ—のことをほんの少し取り上げてもおり、それがLHCをして

[ループする世界で未来から介入して月を構築している可能性があつたとの存在があり、そうした存在のタイムトラベルと通底するところとしてLHCではブラックホールが構築される可能性がある]

などとのことを運命論者風に述べる(ただし危機についての可能性を取り上げているのではない)とのやりようとなつてゐるとのこと「も」がある—直下、『フー・ビルト・ザ・ムーン』訳書よりの引用部を参照のこと— ことも着目に値しようとのところと判じている(:良くも解釈すれば、そういう「不自然な」話柄を敢えても取ることで[間接的告発]をなしているともとれなくもない、あるいはそれがないところに認識甘くも[善意]を見出そうとしているだけかもしれないが)。

具体的には(アイク著書にて典拠として紹介されているところの著作である)『フー・ビルト・ザ・ムーン』

に以下、引用なすような記述がみとめられるとのこと、そのことは取り上げるに値することであると判じている。

(直下、『月は誰が創ったのか?』(『フー・ビルト・ザ・ムーン』の邦訳版で刊行時期は原著刊行時期(2005年)に遅れることとして2年の2007年となり、その版元は先にも既述のように[陰謀「論」関連本]や[トンデモ雑誌]をよく出すことでも知られる出版社であると直近言及の学習研究社となる)のp.328からp.329よりの原文引用をなすとして)

「驚くべきことに科学者たちは、2007年に運転を開始する新型の原子核破壊装置を使って、ブラックホールを注文生産できるだろう、と次第に自信を深めている。…(中略)… LHCは、ビッグバンの直後1兆分の1秒までの力で、陽子と反陽子を衝突させる粒子加速器だ。これがあれば、数百個分の陽子の質量を持つミニブラックホールを無数に出現させることができる。このサイズのブラックホールはほとんど瞬時に蒸発するので、その存在は消える寸前のホーキング放射線バーストでやっと探知されるにすぎない。この方面の研究はまだ初期段階だが、タイムトラベルを可能にするテクノロジーの探求推進の基盤の端緒となるかもしれない。もし未来の人類が実際にはるか太古の過去にまで遡行して、現生人類を生みだす保育器を創造したとすれば、われわれに何らかのメッセージを残したはず、と考えるのは完全に理屈が通っている。われわれが想像するところでは、そのような崇高壮大な事業を遂行するためには、現在の技術レベルを数百年から数千年分は上まわらなければならない」

(引用部はここまでとする —※—)

(※1. 上は[月が保育器(人間進化を促すための保育器)である可能性がある][その進化の予定されている行き先はLHCによるブラックホール生成、タイムトラベルテクノロジーの深化にある]との『フー・ビルト・ザ・ムーン』の筆者らの見立てが呈されている部となる。尚、上にての引用部では2007年がLHC実験のスタート・ポイントとされているが、予定は延期を見、2008年[9月10日]がスタート・ポイントとなったとの背景が現実にはある。また、その実験スタートの折、[ヘリウム事故](筆者が研究機関を相手取って訴求のための裁判を起こす前に自身が設立した会社の名で実験関係者に取材して聞き取り調査をなしたところでもおそらくその通りのものとして実験スタート時期の遅延に影響をあたえていたとの心証を得たヘリウム事故)にて実験の「本格」稼働はさらに延期を見たとのことがこれまでの経緯としてある(:そして、本稿本段執筆時点では実験は[2012年以降よりの停止フェーズの継続]のため実施を一時的に取りやめられており、出力を倍加させての再スタートを切るのはどんなに遅く見繕っても2014年より後になってからであるとされている)

(※2. さらに注記しておけば、上の著作『フー・ビルト・ザ・ムーン』にあっても[安全確実なブラックホール生成の論拠]とされているところの[ブラックホール蒸発]については万事万端遺漏なくものその発現に疑義が呈されだし(ウィリアム・ウンルーという物理学者が意見を変える中でのこととして疑義が呈されだし)、それに代わるところの安全性論拠が専ら実験関係者らに持ち出されるようになっていたとのことがある —本稿にての**出典(Source)紹介の部3**を包摂する部で解説していることである—)

上にて引用なししている『フー・ビルト・ザ・ムーン?』内記述に相通ずるところとしては

英文 Wikipedia [Pseudoscientific metrology] 項目(直訳すれば[似非科学的なる度量衡単位学]との項目)

にも同様の記述が現行認められるのでそこより多少長くなるもの原文引用もなしておく。

(直下、英文 Wikipedia [Pseudoscientific metrology] 項目にあつての現行現時点の記載内容よりの原文引用をなすとして)

A review in The Guardian newspaper of 'Who Built the Moon by Butler and Knight refers to the authors as "an ad man specialising in consumer psychology and an engineer turned astrologer, astronomer and playwright". The review comments on their ideas about megalithic geometry "Here, they suggest, numerical ratios concerning sun, moon and Earth - neatly arrived at by applying the so-called principles of megalithic geometry - are evidence of a message for today's Earthlings. The message is that future humans conquered time travel and went back, way back, to construct the moon to ensure Earth orbits in precisely the right alignment to the Sun to encourage the evolution (yes, they believe in that) of humans - a Mobius strip theory of history. Oh, and they genetically engineered DNA (we know, because that's too complicated for nature alone)." The first book to ever deal with the possible existence of a 366-degree circle and of a 366-day calendar (rather than speaking of "Megalithic geometry" or "Bronze Age geometry"), The Bronze Age Computer Disc by Alan Butler, has not been commented on either by mainstream scientists or the press. Most scholars and reviewers label Butler and Knight's work as pseudoscience. Aubrey Burl, a much-published digger of Megalithic sites and a lecturer in archaeology at Hull College of Higher Education, although he coauthored a book with Thom, derided Thom's work, saying that he himself had never "seen a Megalithic Yard."

(拙速になした感もあるが、の拙訳として)

「(アラン・)バトラーと(クリストファー・)ナイトらの両著者の手になる **Who Built the Moon** に対する英ガーディアン紙の書評は同書著者らをして

[消費者心理に特に強みある広告志向らの者たちにして占星術師・天文学者・劇作家転じての技術者稼業の者達である]

とのかたちにて形容した。

彼ら(『フー・ビルト・ザ・ムーン』の著者ら)の

[メガリスティック(巨石時代にての)幾何学的配置に対する発想法]

について特定の書評は

[ここにて彼らが提案するところでは太陽・月・地球にまつわる数値配列は — いわゆる巨石文化の基準を応用してあてはめてそれらは得られたとのものだが — 今日地球人に対するメッセージの証左であるとのことである。それがメッセージとして伝えるところはタイム・トラベル技術までを開拓し、そして、(好ましい天体配置のみでそれが可能たらしめられるとの)[進化]を促進するために月を造りだし、もって、地球軌道を太陽に対して適切な配置に置くために過去に戻ってきたとの未来人がいるとのことであり(確かに彼らはそう信じているようである)、それはまさしくもの「メビウスの輪の歴史理論」である。(馬鹿にした調子で)「おっと」、そして彼ら未来からの来訪者はDNAを生物工学的にデザインしたとのことにもなっているようである(我々が知るところではそれは自然本来のものであるにしてはとて複雑なところである — 訳注:原始のスープでは生命体を構成する有機物が自然に構築されないためにディーエヌエーの宇宙飛来説たる Panspermia パンスペルミア説が提唱されていることを指しているのだと解される —)]

とのものとなっている。

『フー・ビルト・ザ・ムーン』初版版は[巨石文化にての幾何]あるいは[青銅器時代の幾何]を扱っているというより[366日サイクル]（訳注：ここに見る366サイクルとは英国巨石文明に関して仮説として提示されている日付カウント方式介在にまつわる発想法となり、『フー・ビルト・ザ・ムーン』著者らは[366日サイクル]がメガリス・ヤードという巨石時代のありうべき建築思想、そして、地球と太陽と月の相互比率に影響しているとの旨、主張している）のありうべき存在を扱っているとの著作となり、アラン・バトラー（『フー・ビルト・ザ・ムーン』著者）によるところの

[青銅器時代のコンピューター・ディスク]

というものに関しては主流の科学者ら、そして、紙誌らも「ノー・コメント」を決め込んでいる。

大多数の学者らと書評執筆者らはバトラーおよびナイトの著作（『フー・ビルト・ザ・ムーン』）をして[疑似科学の体現物]と評している。オーブリー・バー（Aubrey Burl）、著書多数の巨石遺跡の発掘人にしてハル大学高等教育課程で考古学講師の職に就いている同男はトム（訳注：アレキサンダー・トム（あるいはソーム）／巨石文明と度量衡単位の関係についての嚆矢的言いようをなしたと認知されている人物）と共著をものしてきた人間ながらトムの著作を物笑いの種にするように彼自身は「メガリステティック・ヤード（巨石文明の暗流としてのありうべき単位系）とされるものを（そうだと認知できるかたちで）見てとることは決してなかった」と述べている。

（訳を付しての引用部はここまでとする）

以上抜粋してのところの記述に見るように Who Built the Moon? 『フー・ビルト・ザ・ムーン』（原著二〇〇五年刊行）の著者ら（Freemason のアラン・バトラーとクリストファー・ナイトら）の主張の中には

[未来人がタイムスリップして月を構築、もって、地球を望ましい太陽に対する位置に置き、進化を促した]

などとの「主張」が含まれているわけだが、そこには

[LHC のことを相応のものとして揶揄しているようにも「とれる」（でなければ、[お人形]らを用いて下手で露骨な賛辞を送っているか、あるいは、それを聞かせる対象としての人間を小馬鹿にしている）

との側面が伴っているものとなる（：言い換えれば、メガリステティック・ヤードとのありうべき（仮説上の）古代の度量衡単位をも引き合いにして滅んだ巨石文明に月と太陽と地球の間のできすぎた位置関係にまつわっての精妙な意図的寓意が介在している可能性までも問題視しているメーソン員由来の書籍『フー・ビルト・ザ・ムーン』にあっては[ループする世界で未来から介入して（太陽に対してあまりにも出来すぎた位置に「現行」あるとの）月を構築している可能性がある存在があり、そうした存在のタイムトラベルやりようと通底するところとしてLHCでは「安全な」ブラックホール生成が実現しうる、タイムトラベル技術に遙か未来で結実するところとして実現しうる可能性がある]と主張されているということである）。

必要以上に多くの記述を割いてしまった感もあるが、振り返りもすれば、である。脇に逸れての付記の部と位置付けての本段、そのここに至るまでの流れにあっては

[「デヴィッド・アイクの異説たる爬虫類人類支配説にあつての特定の話柄」（捏造碑文をその捏造性をとりたてて問題視しないで取り上げて「古のアトランティスが蛇の眷属に侵略された」とのことも問題視するとのやりよう）

および

『源平盛衰記』の中の竜宮関連の特定の不快なる下り

の純・記号論的なつながりからして、

「ブラックホールにまつわる隠喩が高度に多重的に、そして、現在の我々の生き死にの問題にも通底するかたちで込められているとの式を感じさせるものである」

とのこと、そういうことが述べられるようになっているがゆえに問題である」

とのせんだっての話から「さらに脇に逸れての」ところとして、

[そこからして言及しておくべきか、ととらえたアイク説 —— 筆者の指摘事項である

[LHC はトロイアの木製の馬としての位置づけをあまりにも執拗に付与された装置であり、そうもしたやりようは人間の歩んできた歴史とあまりにも平仄が合うものである]とのことと両立することが何らないとの言い分を強くも前面に出しての格好で流布されているアイク説—— に伴う欺瞞性]

について[理論の欠陥]との側面に着目しつつもの指摘「をも」なしておいた。

さて、本稿の長大なるパートにあって背骨として呈示しもしてきた $\alpha 1$ から $\alpha 8$ および β と振つてのこ
らを中心不快なる相関関係の指し示しをなしてきたとの一連の部(補説 2)を終える前に、である。以下
のこと、訴求しておくこととする。

ロシアにての物理学研究機関として

ITEP (Institute for Theoretical and Experimental Physics)

という研究機関がモスクワに存在する(: 上記[理論実験物理学研究所]と訳されもしよう研究機関につ
いては 1945 年に遡る研究機関であると英文 Wikipedia[ITEP]項目にも記載がなされており、同研究
機関が主催する賞たるポメラランチュック賞は(同じくもウィキペディアの[Pomeranchuk Prize]項目に見
るように) —それがお身内の相互礼賛行為かは置き— 後にノーベル賞を受賞した日本の南部陽一
郎に 2007 年に授与され、本稿でその申しようにつき度々引いてきたレオナルド・サスキンド(ひも理論
の大家)に 2008 年に授与されたりしている業界にての[権威ある賞]であるようである)。

同研究機関に所属のロシア人物理学者ら複数名由来の論考として

IF LHC IS A MINI-TIME-MACHINES FACTORY, CAN WE NOTICE? (2006)

という論稿 —— (明快な題であるため、いちいちタイトルを訳すまでもないことか、と思うが、邦訳すれ
ば、『LHC がミニ・タイムマシン工場になったとしたらば、我々は気づけるのか?』との題の論稿) —— が
オンライン上よりダウンロード可能となっている(表記の表題をそのままグーグル検索エンジンに入力す
ることで同論稿、PDF 版を捕捉かつダウンロード可能である)。

同論稿、専門家ら由来の何やらもってして「ワンダフル(見事に驚かされる)」「マーベラス(うれしい驚
きをもたらしてくれる)」なものに響きもする申しよう —— (不快な兆候が脇にて山積しており、それらが
相関関係を呈しながら我々にどういった結果を進呈するのか(それこそ宣言するように)不快なかたち
で示唆しているにも関わらず何やら「ワンダフル」「マーベラス」なことを扱っているように響く申しよう、で
もいい) —— を含むものであると断りつつ、そこよりの引用を下になしておく。

SOURCE

89



Dante's Dream at the Time of the Death of Beatrice (1871)
Alighieri

ここ出典 (Source) 紹介の部 89 には、

[LHC がタイムマシンの類(ワームホールの亜種としてのタイムマシン)になりうるとの理論が学者らによって持ち出されているとのこと]

についての出典紹介をなしておくこととする。

(直下、IF LHC IS A MINI-TIME-MACHINES FACTORY, CAN WE NOTICE? (2006)、同論稿冒頭部にての Abstract の部 (大要紹介の部) よりの抜粋をなすとして)

Assuming the hypothesis of TeV-scale multi-dimensional gravity, one can imagine that at LHC not only mini-black-holes (MBH) will be intensively created, but **also other exotic gravitational configurations, including hypothetical mini-time-machines (MTM).**

(訳として)「(LHC 実験での)兆単位電子ボルト領域(テラ・エレクトロン・ボルト単位の領域)にての多次元的重力にまつわる仮説について想起をなせば、LHC にてマイクロ・ブラックホール(MBH)が集中的に生成されうるとも想起されるばかりか、[ミニ・タイム・マシン(MTM)が如く他の「エキゾチカルな」重力の構造体]が生成されうるとも想起される」

(訳を付しての引用部訳はここまでとしておく ー※ー)

(※尚、上の “ Assuming the hypothesis of TeV-scale multi-dimensional gravity, one can imagine that at LHC not only mini-black-holes (MBH) will be intensively created, but also other exotic gravitational configurations, including hypothetical mini-time-machines ” との部の申しようにつき、TeV-scale multi-dimensional gravity とは [1998年に遡る余剰次元(ADD Model)にまつわる一連の仮説] を指すと自然に解されるようになっており(それについていまひとつ納得いきかねるとの向きは本稿の従前の段の内容、[出典\(Source\)紹介の部1](#)や[出典\(Source\)紹介の部2](#)なども参照されたい)、余剰次元理論にまつわる新規理論展開がゆえにワームホールやミニ・タイム・マシンといったエキゾチカルな重力の構造体の生成のことまでが問題視されているといった按配になっていると見受けられるところである —— 本稿の前半部、[出典\(Source\)紹介の部24](#)ではポール・ディヴィスという物理学者の手になる書 How to Build a Time Machine (邦題『タイムマシンをつくらう！』より(その120ページにての記載内容として)従来の電磁気技術では、プランク・エネルギーは太陽系に匹敵するぐらい巨大な加速器を建造しないと獲得できないが、まったく新しい加速器技術が開発されれば、はるかにコンパクトな装置を用いて非常に高いエネルギーを得ることができるかもしれないのだ。またいくつかの理論によれば、空間の時間の大規模な改変はプランク・エネルギーよりもずっと低いエネルギーで実現できるかもしれず、技術的にも見通しがつけられる可能性があるという。もし重力をほどほどのエネルギーで操作できれば、これまでこのべたような途方もない圧縮や加速を必要とせずにワームホールを作ることができる(引用部はここまでとする)との原文引用をまなしていたわけだが、そこに見る「プランクエネルギーの領域を実現しなくとも重力をほどほどのエネルギーで改変できる」「そして、それをもって(兆単位の電子ボルトなどをもって)ワームホールの類をも生成できる」との可能性につながるのが余剰次元理論の帰結であるとの場にて挙げている研究機関関係者由来の論稿にて「も」記載されていることになっている——)

(続いて直下、IF LHC IS A MINI-TIME-MACHINES FACTORY, CAN WE NOTICE?, そちらPDF化されてオンライン上にて公開されているところの論稿の上にて386と振られての5ページ目、[2.4 On MTM evaporation (decay)]との部 —ミニ・タイム・マシンの蒸発(崩壊)と題されての小節— よりの引用をなすとして)

If MTM contains strong gravitational fields and gravitational horizons, they can lose energy by a direct analogue of the Hawking radiation. Remarkably, the same can be true if gravitational fields are small and no event horizons are formed, like in our flat-space-time wormhole in Fig.1.

Then time-machine's energy is fully carried by its "residents" — particles, which move along closed world lines (or zero-modes of fields in another formulation). (訳として)「ミニ・タイム・マシン(MTM)が強くもの重力場、あるいは、重力の境界らを有しているのものであるのならば、それらはホーキング輻射らの直接的類似作用によってエネルギーを失う。特筆すべきことに我々が図1にて指し示している平坦空間にてのワームホールにあつてのことと同じくものことは重力場が小さく、[事象の地平線]が形成されない場合でも真実たりうる。それより、[タイムマシン(注:先述されているところでは[エキゾチカルな重力の構造体としてのミニ・タイム・マシン])のエネルギー]はその居留領域(レジデンツ)となるところの粒子、世界線に沿って動く、または他の解では[場のゼ

ロ・モード] (注:線形代数学にあってゼロとの数が介在しているケースによくも取り沙汰されることらに親和性高き物言いか) に沿って動くとの粒子によって漏れなく運ばれていくことになる」

(訳を付しての引用部はここまでとする)

(**出典(Source)紹介の部 89**はここまでとする)

上出典紹介部にて取り上げた抜粋部、数式ではなく自然言語の使用率が高いとの部を選んで引いたものなのだが、それでも専門的過ぎて門外漢 —筆者含めての門外漢— には理解に苦しむ側面を帯びているのは論を俣(ま)たない(こと—読いただければお分かりいただけるようになっている)わけだが、「であっても、」引用部記述に関して [内容適否とは別にそういう記述がなされていることそれ自体については異論など生じようがないと察せられるところ] がありもし、それは下記のようなこととなる。

「少なくとも 2006 年の段階にあっては LHC でミニ・タイム・マシンなるものが時空間の [重力のエキゾチカルな構造体] として生成される可能性がロシアの物理学者ら (先だってはステコロフ数学研究所の物理学者らのことを取り上げていたわけだが、ここでは ITEP こと Institute for Theoretical and Experimental Physics に所属の研究者ら) に取り上げられていた。そこに見る [ミニ・タイム・マシン] なるもの (にまつっての主張) に関してはミニ・タイム・マシン(なるもの)が重力の強い境界線を伴っていれば、([ブラックホールのホーキング輻射による蒸発] と同様に)、ホーキング輻射のプロセスで (ミニ・タイム・マシンの) 蒸発を見るものであるとされ、また、仮にそれが [事象の地平線] (通例、事象の地平線ことイベント・ホライズンとはブラックホールの外延部たる境界線を指す) を伴わぬものでも同様のプロセス (ホーキング輻射による蒸発) で滅尽を見ることになりうるとの記述が論文内でなされている」

以上のような記述がみとめられるとのもの、それがゆえに、表題に「タイムマシン」が付されての、

IF LHC IS A MINI-TIME-MACHINES FACTORY, CAN WE NOTICE? 『LHC がミニ・タイムマシン工場になったとしたらば、我々は気づけるのか?』

との論稿である (タイムマシンが構築されてもすぐに消滅を見るから実験関係者はそれを観察できないのではないかと、とのことが題名そのもので指し示されることとなっている、でもいい) わけだが、さらにもって述べれば、

[超光速通信] ([タキオン] といった名称を有する仮説上の粒子が見つかり、それを活用できるようにになれば、実現を見うるともされる情報を過去に送るとの超光速通信)

などとは質的に異なり、[より複雑なもの]を伝送可能なタイムマシンのようなものが構築されえると観念してののところとして、そのようなものが構築される可能性につき —LHC 製タイムマシンなるものが出来上がってもそれがすぐに蒸発を見る、気づけないぐらいのスピードで蒸発を見るとの文脈で— 普通人には気付もしないのではないかととの式にて論じているのが上の論稿であるようにも「見える」ようになっている。

ここで次のこと、考える必要がある。

[仮にもし問題となりうるような秒数 (ミリ秒・マイクロ秒・ナノ秒単位かもしれないが問題となり

うような秒数) だけワームホールの類がそこに存在することになり、もって、単に媒質となる重力波などに載せての情報だけではなく「複雑な構造体」——(本稿にあつての**出典** (Source) 紹介の部 20 で Parallel Worlds; A Journey Through Creation, Higher Dimensions and the Future of the Cosmos (邦題)『パラレルワールド—11 次元の宇宙から超空間へ』(邦訳版版元は日本放送出版協会(現 NHK 出版))より再度の引用をなすとして “ Because the tidal forces and radiation fields would likely be intense, future civilizations would have to carry the absolute minimum of fuel, shielding, and nutrients necessary to re-create our species on the other side of a wormhole. Using nanotechnology, it might be possible to send microscopic chains across the wormhole inside a device no wider than a cell. ” 「ワームホールのなかでは潮汐力や放射が猛烈になりそうなので、未来の文明は、向こう側の宇宙で再生するのに必要な燃料やシールドや養分を、最小限にして運ばなければならないだろう。そこでナノ・テクノロジーを使えば、それらを詰めた小さな鎖を細胞ほどの大きさの装置に入れて、ワームホールの向こうへ送れる可能性がある。ワームホールが非常に小さくて原子サイズだとしたら、その向こう側で全人類を再生できるだけの莫大な情報を、原子でできた長いナノチューブに詰めて送ることになるだろう」(再引用部はここまでとする)との記述を引いていたところに見るようにカー・ブラックホール越し・ワームホール越しに他世界に対してそれらを投出して文明再建をなさしめうとの先進文明やりようにまつわる[科学予測]が掲載されているところのナノ・マシン・プローブのような「複雑な構造体」—— を伝送可能であるとのタイムマシンのようなもの(に仮託される通過可能なワームホールの類)ができあがったとのことになれば、その結果はいかようなものなのか]

その[押し量れるところの結果]につき、この身が何を述べたいのかは本稿のここまでの話だけ「でも」十二分に訴求しえたか、と考えている。

そこにて観念されるのは — カー・ブラックホールというものが破滅をきたすものとして生成されるかどうかといった「細かい」ところで考えられる方向は複数方向に分かたれるとのことはあっても — 大同を見ての[破滅]そのものである。

直上最前にて引き合いに出したロシアの研究機関の科学者らによる論考の内容およびその帰結がたかだかもってして理論系学究のお遊び、ないしは、机上の空論であっても([ミニ・タイム・マシン] 云々などにまつわつてのいくつかの仮定を前提においての話など普通にそうだと考えられるところではある) そうもした机上の空論などとは一線を画した現実的な事柄ら、確と観察可能な、その具現化力学における執拗性もが同時に透けて見えるとの現実的な事柄らとして [ワームホール] (と呼ばれるもの) に近接しようとのところにて 相応のこころが【現象】(はきと観察可能なる【現象】)として見て取れることになんら相違はない。

くどくもならざるをえぬところとして強調するが、ご丁寧にも、

[トイアを滅ぼした木製の馬]

の寓意が多重的に、しかも、およそ人間業とは考えがたいのかたちでもってして付与されているのが **LHC 実験およびその関連事象**であると断じられるだけの事由が冗談ぬきに存在しており(しかもそうしたことの根たるところが長期に亘って、「史的に」と述べられるぐらいに長期に亘って諸種事物に多重的に見出せるとのことすらもが「ある」 — e.g. 著名古典ら(『地獄篇』であり、『失樂園』であり、果ては(ヘラクレス 11 功業と黒海洪水仮説を通じてミルトン『失樂園』特定パートと結びつくと)『ギルガメシュ叙事詩』であるとの著名古典ら) にあつて色々な意味で問題となる描写が同じくもの方向を指すかたちで見出せるといったことが「ある」 —)、そしてまた、これまたご丁寧に **[911 の「異様なる」前言事物]** までがそこに多層的に関係してくるとのやりようがなされていると冗談ぬきにはきと指し示しなせてしまえるようになっていくとのことが「ある」のが — 臆病者なぞはそれに相対すれば逃げ惑うだけとの — [この世界の真相]であると指し示せるからである(:いくら首をかしげたくなるところがあつても [粒

子加速器にまつわる命名規則] [不快極まりない911の前言事象ら]が[トロイア][アトランティス][ヘラクレス功業]との要素を通じて何重にも何重にも多重性を呈しながら接合していることに相違はない。本稿ここまでの実証的指し示し(そしてこれよりの後続するところのさらにもってしての指し示し)をご覧いただければ、ご理解いただけようところとして、である)。

(以上、訴求をなしたところで**補説2**と分けしてのパートを終える)

本PDF文書にあつては**補説1**及び**補説2**と区分付けしての事項について縷々(るる)延々と解説を講じてきたわけではあるが、次いでもってしてのこれ以降の部では最前まで解説を講じてきた[異様な—常識よりの偏差が際立っている—ことら]が何故もってして我々に直に関わる「現実的」問題としてそこに存在していると述べられるのか、そのことを遺漏なくも指し示すべくもの解説を入念になすことにする(：殊に**補説4**と振りもしての(かなり後の)部にあつては【九一一の事件の予見的物事】らが一体全体、いかような性質を帯びたものであるのか、ここに至るまで挙げてこなかった事例らを「確認容易なる典拠および確認方法それ自体の紹介をなしつつ」多々呈示し、それら予見物事に伴う際立っての特質によって「も」指し示されることとして眼前・目睫に岸壁があるとのことを、そして、その岸壁に向かい合うことをせぬことがどういうことに通ずるのかの【確認】をなしていく所存である)。



本稿摘示事項を支える各【典拠紹介部】ら、それら掲載頁の一覧 (全巻共通表記部)

第一巻 (vol.1) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典 (Source) 紹介の部 1 : p.39—p.52

出典 (Source) 紹介の部 2 : p.53—p.59

出典 (Source) 紹介の部 3 : p.59—p.70

出典 (Source) 紹介の部 4 : p.72—p.81

出典 (Source) 紹介の部 5 : p.84—p.90

出典 (Source) 紹介の部 6 : p.98—p.105

出典 (Source) 紹介の部 7 : p.105—p.114

出典 (Source) 紹介の部 8 : p.115—p.118

出典 (Source) 紹介の部 9 : p.119—p.123

出典 (Source) 紹介の部 10 : p.133—p.147

出典 (Source) 紹介の部 11 : p.157—p.163

出典 (Source) 紹介の部 12 : p.172—p.175

出典 (Source) 紹介の部 13 : p.175—p.177

出典 (Source) 紹介の部 14 : p.177—p.184

出典 (Source) 紹介の部 15 : p.186—p.189

出典 (Source) 紹介の部 16 : p.193—p.195

出典 (Source) 紹介の部 17 : p.199—p.200

出典 (Source) 紹介の部 17-2 : p.203—p.205

出典 (Source) 紹介の部 17-3 : p.209—p.212

出典 (Source) 紹介の部 17-4 : p.213—p.217

出典 (Source) 紹介の部 18 : p.228—p.231

出典 (Source) 紹介の部 19 : p.234—p.236

出典 (Source) 紹介の部 20 : p.236—p.240

出典 (Source) 紹介の部 20-2 : p.244—p.249

出典 (Source) 紹介の部 20-3 : p.252—p.256

出典 (Source) 紹介の部 20-4 : p.259—p.262

出典 (Source) 紹介の部 20-4 (2) : p.263—p.265

出典 (Source) 紹介の部 21 : p.271—p.274

出典 (Source) 紹介の部 21-2 : p.275—p.276

出典 (Source) 紹介の部 21-3 : p.277—p.279

出典 (Source) 紹介の部 21-3 (2) : p.280—p.281

出典 (Source) 紹介の部 21-4 : p.287—p.289

出典 (Source) 紹介の部 21-5 : p.292—p.294

出典 (Source) 紹介の部 21-5 (2) : p.295—p.297

出典 (Source) 紹介の部 22 : p.319—p.320

出典 (Source) 紹介の部 22-2 : p.320—p.322

出典 (Source) 紹介の部 23 : p.323—p.325

出典 (Source) 紹介の部 24 : p.328—p.333

出典(Source)紹介の部 25 : p.337-p.339

出典(Source)紹介の部 26 : p.344-p.346

出典(Source)紹介の部 26-2 : p.347-p.350

出典(Source)紹介の部 27 : p.352-p.356

出典(Source)紹介の部 28 : p.362-p.363

出典(Source)紹介の部 28-2 : p.363-p.365

出典(Source)紹介の部 28-3 : p.366-p.369

出典(Source)紹介の部 29 : p.412-p.416

出典(Source)紹介の部 30 : p.416-p.417

出典(Source)紹介の部 30-2 : p.418-p.419

出典(Source)紹介の部 30-2 (2) : p.420-p.422

出典(Source)紹介の部 31 : p.436-p.437

出典(Source)紹介の部 31-2 : p.437-p.439

出典(Source)紹介の部 32 : p.441-p.443

出典(Source)紹介の部 32-2 : p.443-p.446

出典(Source)紹介の部 33 : p.452-p.456

出典(Source)紹介の部 33-2 : p.459-p.462

出典(Source)紹介の部 34 : p.501-p.503

出典(Source)紹介の部 34-2 : p.504-p.506

出典(Source)紹介の部 35 : p.529-p.533

出典(Source)紹介の部 36 : p.535-p.538

出典(Source)紹介の部 36(2) : p.538-p.540

出典(Source)紹介の部 36(3) : p.543-544

出典(Source)紹介の部 37 : p.552-554

出典(Source)紹介の部 37-2 : p.554-p.558

出典(Source)紹介の部 37-3 : p.559-p.562

出典(Source)紹介の部 37-4 : p.569-p.571

出典(Source)紹介の部 37-5 : p.572-p.575

出典(Source)紹介の部 38 : p.596-p.598

出典(Source)紹介の部 38-2 : p.598-p.602

出典(Source)紹介の部 39 : p.611-p.619

出典(Source)紹介の部 40 : p.624-p.626

出典(Source)紹介の部 41 : p.629-p.631

出典(Source)紹介の部 41(2) : p.638-p.639

出典(Source)紹介の部 41(3) : p.642-p.643

出典(Source)紹介の部 41(4) : p.644-p.645

出典(Source)紹介の部 41(5) : p.646-p.648

出典(Source)紹介の部 41(6) : p.648-p.649

出典(Source)紹介の部 42 : p.654-p.657

出典(Source)紹介の部 43 : p.658-p.662

出典(Source)紹介の部 44 : p.667-p.668

出典(Source)紹介の部 44-2 : p.669-p.670

出典(Source)紹介の部 44-3 : p.671-p.673

出典(Source)紹介の部 44-3 : p.674-p.677

出典(Source)紹介の部 45 : p.680-p.687

出典(Source)紹介の部 46 : p.695-p.701

出典(Source)紹介の部 47 : p.702-p.710

出典(Source)紹介の部 48 : p.721-p.723

出典(Source)紹介の部 49 : p.723-p.726

出典(Source)紹介の部 50 : p.728-p.731

出典(Source)紹介の部 51 : p.739—p.744	出典(Source)紹介の部 57 : p.879—884
出典(Source)紹介の部 52 : p.747—p.755	出典(Source)紹介の部 58 : p.886
出典(Source)紹介の部 53 : p.756—p.758	出典(Source)紹介の部 58(2) : p.887—p.888
出典(Source)紹介の部 53(2) : p.758—p.760	出典(Source)紹介の部 58(3) : p.889—p.890
出典(Source)紹介の部 53(3) : p.761—p.764	出典(Source)紹介の部 58(4) : p.891—p.894
出典(Source)紹介の部 53(4) : p.765—p.768	出典(Source)紹介の部 59 : p.908—p.911
出典(Source)紹介の部 54 : p.769—p.770	出典(Source)紹介の部 60 : p.913—p.915
出典(Source)紹介の部 54(2) : p.771—p.774	出典(Source)紹介の部 60(2) : p.924—p.935
出典(Source)紹介の部 54(3) : p.775—p.780	出典(Source)紹介の部 60(3) : p.983—p.984
出典(Source)紹介の部 54(4) : p.780—p.783	出典(Source)紹介の部 61 : p.996—p.1001
出典(Source)紹介の部 55 : p.801—p.825	出典(Source)紹介の部 61(2) : p.1002—1003
出典(Source)紹介の部 55(2) : p.831—p.835	出典(Source)紹介の部 62 : p.1009—p.1014
出典(Source)紹介の部 55(3) : p.839—p.847	出典(Source)紹介の部 63 : p.1031—p.1036
出典(Source)紹介の部 56 : p.861—p.865	出典(Source)紹介の部 63(2) : p.1036—p.1038
出典(Source)紹介の部 56(2) : p.868	出典(Source)紹介の部 63(3) : p.1039—p.1059
出典(Source)紹介の部 63(4) : p.1072—p.1080	

第二巻 (vol.2) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 64 : p.11—p.12	出典(Source)紹介の部 64(8) : p.30—p.32
出典(Source)紹介の部 64(2) : p.13—p.14	出典(Source)紹介の部 64(9) : p.33—p.34
出典(Source)紹介の部 64(3) : p.14—p.15	出典(Source)紹介の部 64(10) : p.38—p.39
出典(Source)紹介の部 64(4) : p.16—p.18	出典(Source)紹介の部 65 : p.60—p.61
出典(Source)紹介の部 64(5) : p.18—p.20	出典(Source)紹介の部 65(2) : p.65—p.66
出典(Source)紹介の部 64(6) : p.20—p.23	出典(Source)紹介の部 65(3) : p.76—p.82
出典(Source)紹介の部 64(7) : p.25—p.27	出典(Source)紹介の部 65(4) : p.83—p.89

出典(Source)紹介の部 65 (5) : p.103—p.108

出典(Source)紹介の部 65 (6) : p.110—p.115

出典(Source)紹介の部 65 (7) : p.118—p.121

出典(Source)紹介の部 65 (8) : p.123—p.125

出典(Source)紹介の部 65 (9) : p.134—p.137

出典(Source)紹介の部 65 (10) : p.150—p.154

出典(Source)紹介の部 65 (11) : p.165—p.166

出典(Source)紹介の部 65 (12) : p.166—p.167

出典(Source)紹介の部 65 (13) : p.168—p.171

出典(Source)紹介の部 65 (14) : p.177—p.180

出典(Source)紹介の部 65 (15) : p.180—p.181

出典(Source)紹介の部 66 : p.191—p.198

出典(Source)紹介の部 67 : p.220—p.228

出典(Source)紹介の部 68 : p.232—p.234

出典(Source)紹介の部 69 : p.234—p.238

出典(Source)紹介の部 69 (2) : p.239—p.244

出典(Source)紹介の部 70 : p.244—p.252

出典(Source)紹介の部 71 : p.253—p.261

出典(Source)紹介の部 72 : p.263—p.269

出典(Source)紹介の部 73 : p.278—p.281

出典(Source)紹介の部 74 : p.286—p.288

出典(Source)紹介の部 75 : p.289—p.293

出典(Source)紹介の部 75-2 : p.294—p.295

出典(Source)紹介の部 75-3 : p.301—p.305

出典(Source)紹介の部 75-3 (2) : p.305—p.307

出典(Source)紹介の部 76 : p.329—p.331

出典(Source)紹介の部 76 (2) : p.334—p.335

出典(Source)紹介の部 76 (3) : p.341—p.342

出典(Source)紹介の部 76 (4) : p.345—p.349

出典(Source)紹介の部 76 (5) : p.352—p.353

出典(Source)紹介の部 76 (6) : p.358—p.360

出典(Source)紹介の部 76 (7) : p.361—p.363

出典(Source)紹介の部 77 : p.369—p.373

出典(Source)紹介の部 77 (2) : p.375—p.377

出典(Source)紹介の部 77 (3) : p.378—p.383

出典(Source)紹介の部 78 : p.411—p.413

出典(Source)紹介の部 78 (2) : p.414—p.416

出典(Source)紹介の部 79 : p.423—p.425

出典(Source)紹介の部 79 (2) : p.426—p.430

出典(Source)紹介の部 80 : p.473—p.475

出典(Source)紹介の部 80 (2) : p.480—p.484

出典(Source)紹介の部 80 (3) : p.484—p.490

出典(Source)紹介の部 81 : p.502—p.505

出典(Source)紹介の部 82 : p.554—p.555

出典(Source)紹介の部 82 (2) : p.568—p.571

出典(Source)紹介の部 82 (3) : p.571—574

出典(Source)紹介の部 82 (4) : p.576—578

出典(Source)紹介の部 82 (5) : p.579—p.581

出典(Source)紹介の部 82 (6) : p.586—p.602

出典(Source)紹介の部 83 : p.622—p.624

出典(Source)紹介の部 84 : p.627—p.643

出典(Source)紹介の部 85 : p.654—p.659

出典(Source)紹介の部 86 : p.661—p.665

出典(Source)紹介の部 87 : p.686—p.691

出典(Source)紹介の部 87 (2) : p.699—p.705

出典(Source)紹介の部 87 (3) : p.721—p.723

出典(Source)紹介の部 87 (4) : p.725—p.728

出典(Source)紹介の部 87 (5) : p.749—p.752

出典(Source)紹介の部 88 : p.861—p.864

出典(Source)紹介の部 89 : p.924—p.926

第三巻(vol.3)にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 90 : p.18—p.24

出典(Source)紹介の部 90 (2) : p.26—p.32

出典(Source)紹介の部 90 (3) : p.36—p.42

出典(Source)紹介の部 90 (4) : p.45—p.48

出典(Source)紹介の部 90 (5) : p.50—p.52

出典(Source)紹介の部 90 (6) : p.54—p.56

出典(Source)紹介の部 90 (7) : p.59—p.61

出典(Source)紹介の部 90 (8) : p.61—p.65

出典(Source)紹介の部 90 (9) : p.65—p.67

出典(Source)紹介の部 90 (10) : p.78—p.80

出典(Source)紹介の部 90 (11) : p.85—p.92

出典(Source)紹介の部 91 : p.142—p.145

出典(Source)紹介の部 92 : p.145—p.149

出典(Source)紹介の部 93 : p.157—p.168

出典(Source)紹介の部 94 : p.170—p.174

出典(Source)紹介の部 94 (2) : p.174—p.176

出典(Source)紹介の部 94 (3) : p.178—p.183

出典(Source)紹介の部 94 (4) : p.186—p.189

出典(Source)紹介の部 94 (5) : p.192—p.195

出典(Source)紹介の部 94 (6) : p.196—p.201

出典(Source)紹介の部 94 (7) : p.202—p.207

出典(Source)紹介の部 94 : p.231—p.235

出典(Source)紹介の部 95 (2) : p.236—p.243

出典(Source)紹介の部 95 (3) : p.244—p.248

出典(Source)紹介の部 95 (4) : p.255—p.259

出典(Source)紹介の部 95 (5) : p.260—p.263

出典(Source)紹介の部 95 (6) : p.265—p.269

出典(Source)紹介の部 95 (7) : p.270—p.279

出典(Source)紹介の部 95 (8) : p.281—p.292

出典(Source)紹介の部 95 (9) : p.301—p.309

出典(Source)紹介の部 96 : p.311—p.320

出典(Source)紹介の部 96 (2) : p.322—p.324

出典(Source)紹介の部 97 : p.354—p.371

出典(Source)紹介の部 98 : p.414—p.417

出典(Source)紹介の部 99 : p.462—p.468

出典(Source)紹介の部 100 : p.540—p.542

出典(Source)紹介の部 101 : p.545—p.553

出典(Source)紹介の部 102 : p.559—p.562

出典(Source)紹介の部 102 (2) : p.562—p.564

出典(Source)紹介の部 102 (3) : p.565—p.568

出典(Source)紹介の部 102 (4) : p.569—p.577

出典(Source)紹介の部 102 (5) : p.577—p.587

出典(Source)紹介の部 102 (6) : p.592—p.599

出典(Source)紹介の部 102 (7) : p.600—p.601

出典(Source)紹介の部 102 (8) : p.603—p.609

出典(Source)紹介の部 102 (9) : p.618—p.623

出典(Source)紹介の部 103 : p.635—p.637

出典(Source)紹介の部 103 (2) : p.638—p.642

出典(Source)紹介の部 103 (3) : p.642—p.652

出典(Source)紹介の部 103 (4) : p.652—p.654

出典(Source)紹介の部 103 (5) : p.654—p.657

出典(Source)紹介の部 103 (6) : p.658—p.676

出典(Source)紹介の部 104 : p.690—p.695

出典(Source)紹介の部 105 : p.696—p.721

出典(Source)紹介の部 106 : p.731—p.736

出典(Source)紹介の部 106 (2) : p.736—p.738

出典(Source)紹介の部 106 (3) : p.738—p.742

出典(Source)紹介の部 106 (4) : p.751—p.753

出典(Source)紹介の部 106 (5) : p.754—p.755

出典(Source)紹介の部 106 (6) : p.761—764

出典(Source)紹介の部 107 : p.771—774

出典(Source)紹介の部 107 (2) : p.774—p.777

出典(Source)紹介の部 108 : p.784—p.788

出典(Source)紹介の部 109 : p.892—p.895

出典(Source)紹介の部 109 (2) : p.897—p.900

出典(Source)紹介の部 109 (3) : p.900—p.902

出典(Source)紹介の部 109 (4) : p.905—p.908

出典(Source)紹介の部 109 (5) : p.917—p.935

出典(Source)紹介の部 109 (6) : p.939—p.942

第四巻 (vol.4) にて呈示の各出典紹介部の掲載頁として

出典(Source)紹介の部 110 : p.19—p.33

出典(Source)紹介の部 110 (2) : p.39—p.43

出典(Source)紹介の部 110 (3) : p.49—p.52

出典(Source)紹介の部 110 (4) : p.57—p.58

出典(Source)紹介の部 110 (5) : p.63—p.74

出典(Source)紹介の部 110 (6) : p.76—p.81

出典(Source)紹介の部 110 (7) : p.86—p.95

出典(Source)紹介の部 110 (8) : p.104—p.105

出典(Source)紹介の部 111 : p.119—p.121

出典(Source)紹介の部 116 : p.609—p.612

出典(Source)紹介の部 112 : p.183—p.190

出典(Source)紹介の部 117 : p.661—p.662

出典(Source)紹介の部 113 : p.241—p.244

出典(Source)紹介の部 117 (2) : p.664—p.668

出典(Source)紹介の部 113 (2) : p.290—p.295

出典(Source)紹介の部 117 (3) : p.668—p.672

出典(Source)紹介の部 114 : p.357—p.360

出典(Source)紹介の部 118 : p.677—p.680

出典(Source)紹介の部 115 : p.554—p.557

※ 本稿にあって区分けの上で多くの紙幅をそこに割いているとの補説部、そちら補説部各部の記載頁についてもここに表記しておく

出典(Source)紹介の部 115 (2) : p.561—p.562

補説 1 の部 : p.9—p.213 ,vol.2

出典(Source)紹介の部 115 (3) : p.563—p.568

補説 2 の部 : p.234—p.927,vol.2

出典(Source)紹介の部 115 (4) : p.600—p.602

補説 3 の部 : p.8—p.537 ,vol.3

出典(Source)紹介の部 115 (5) : p.603—p.607

補説 4 の部 : p.537—p.1035 ,vol.3



【典拠紹介部ら一覧に付しもしての表記として】

上掲図は

【ギリシャ神話に見るケンタウロスと戦争をなすに至った部族ラピス族(の男)とケンタウロスの戦いを象(かたど)った彫刻】を挙げもしてのものとなる。

同・彫刻作品 — Centaur and Lapithとの題の彫刻作品— にてモチーフとされている半人半馬の存在、

【ケンタウロス (Centaur)】

があまりにも異様な予見的言及に通じているとのことがある。

具体的にはケンタウロスのうちの固有名詞付きの著名な存在、【ケイロン】および【ネッソス】という存在が

【妻を陵辱しようとしたケンタウロス (の【ネッソス】) を殺害するに至った著名なるギリシャ神話英雄たるヘラクレスありよう】

を介して重篤なる予見的文物 — 後の日にあっての加速器関連の「ブラックホール生成にまつわる」リスク論議の細かきありようという往時にはどんな専門家も予見できなかったはずであるとのことを「克明に」予見しているとの 1980 年初出文物 — の内容に、そして、ブラックホール生成可能性が問題視されることになった史上最大の科学実験とされる LHC 実験そのものに悪質な式で関わっているとのことが指摘できてしまう、【現象】としてはきとそこにあることとして指摘できてしまうとのことがありもし、本稿ではそのことの遺漏無くもの摘示に努めている (：直前出典紹介部一覧にてそちら掲載ページ数も無論にして呈示しているとの典拠紹介部 110 から典拠紹介部 110 (8) との出典紹介部を包摂する部の内容、四巻構成の本稿における第四巻 (vol.4) における p.19 から p.116 の内容が【自身を欺き、妻を陵辱しようとしたケンタウロス・ネッソスを殺害するヘラクレス】がブラックホール生成にまつわる克明なる予見文物に何故もってして関わっているのかの【多重的論拠】を仔細に呈示せんと心掛けての部となる)。

以上表記のこと — いいだろうか、異様な先覚性を帯びての加速器によるブラックホール生成にまつわる予見事物、そして、後にブラックホール生成が取り沙汰されるに至った LHC 実験というものそれ自体の双方が (ギリシャ神話英雄たる)ヘラクレスにまつわる【特定の属性】とはきと結びついているとのことが「ある」のである— がどうして「極めてもってして問題になる」のかについては本稿の内容をきちんとご検討いただければ、ご理解いただけるであろうとのこと、ここに請け合わせていただく次第である。

— 生きようとする人の意志に —

【著者および著作権について】

はきと述べて自身このありようなどどうでもいい、売名行為も「ビジネス」(なるもの)の範疇に入るのだろうとの種別の人間、あるいは、他の何らかの理由がゆえに名をなさんとする(鼻につく虚栄心であれ、英雄願望であれ、生き方それ自体をおのが作品としたいとの芸術家的美意識のあらわれであれ名をなさんとする)との願望を持ち合わせている向きよろしくおのれのことを知ってもらいたくてこの身は本稿の公開・頒布を試みているわけ「ではない」(その点からして勘違いしないでいただきたい)。

本稿 — (都度もってしての改訂を試みながら作製してきた **Entities that physicists refer to as Black holes , already fulfilled many extraordinary Predictions , and firm Guilty Intent『物理学者の類がブラックホールとよびならわしている存在ら、既に実現を見てきた異様な予見的言及、そして、確たる他害意志の介在問題について』**と(内容そのままに題しての)本稿) — の節々の記載内容をもってして[悟性]伴った向きにはお分かりいただけることか、と思うのではあるが、筆者は自身および自身が守るに値するのとらえた向きが物理的に生き残る術、

【環境変化によって「物理的に」生き残る術】

を模索して本稿の指摘事項の適正なる拡散を試みているのであってそこにあつてはサーカス小屋と自身が目しきるに至ったこのような世界で「システムの罅間(太鼓持ち)・大道芸者・サーカスの子供ら」がそうするように矮小なる名を売ろうなどの意図・観点はない(この身は多くの虚偽・偽善が平然とまかりとおるこの世界にて表舞台にて見得を切っている[名をなしての富貴なる者・権勢ある者・学識(なるもの)を伴った向き]ら、そして、彼らとときに紐付いている社会貢献・慈善活動(なるもの)をして[状況がなんら分かっていないところ]に産がある、誰も永らえることができない死刑場における囚人の楽観主義がごとくところから発しているようではある、しからずんば、非人間的な空虚さに根があるやもしれぬとの意で胡散臭く見ているとの筋合いの人間である。そうした見方をなしている人間として本稿を世に[名] — 死ねば所詮は無であるのもの — や[道徳観点;善や良俗にまつわる自己の偏頗な価値観]を押し売りせんとする観点でものしているわけ「ではない」。よくよくも斟酌いただきたいところとして、本稿執筆の背景にある「思考」とのことでは、我々が暮らすこの地球という水槽が人の住めぬものになったならば、おのれ・縁者も死ぬし、人間存在 — 羊のような従順さ・ロボットのような空虚さ・見え透いた愚昧さ・陋劣さが後天的に亢進させられている節も濃厚にあるように見受けられるとの式での碌でもないありようばかりが目につく種族ながらも我が属する人間存在 — のうちの徹々たる美風の体現者らも諸共滅びましょう、そうしたことが危惧される(下らぬ宗教的観点などではなく【具体的現象】【具体的兆候】に依拠してのこととして危惧される)中でただただ「物理的生き残り」を図るとの原始的本能に依拠しての観点でもって本稿を作製(十二分に練れたものとして作製)、その中身・指摘事項を世に適正に広めんと試みているにすぎない)。

直上にてそうも述べているようにシステムの用意したサーカスの子供らよろしく名を売ろうとする意図などこの身にはないのではあるが、ただ、(そこは踏むべきかと判じた)[節度]および(社会的にはではなく物理的に生き残らんとする上での)[合理的観点]をもってして表記するところとしての筆者(たる大森健史という男)のありようについては、である。

「【情報の体系】(いわばもってしての「ミーム」とでも表すべきもの)を拡散するため、ただそれだけのために時間も最早なかりと考えつつながらも自身が設立した会社(名利嚙蠟出版株式会社という会社)のウェブサイト — (従前訴求事項を反映させるとの式で2012年前半期よりサイト公開をし出したとの社用媒体、本稿を公開することにしたオンライン媒体の一でもあるとの手前が代表を務める会社・名利嚙蠟出版株式会社における社サイト/この身が相応の結末・最期を迎えぬ限りは存続するとのかたち(現行)するつもりであるとのサイト) — にてその点についての最低限の表記をなしている、そうしたこと、手前ありようなどにも関心がある — すなわちもって、どういった者が問題となることを(それなりの媒体を作製して)指摘しているのかとの意で関心がある — との向きにおかれてはそちらを参照いただきたい」

とまでは申し述べておく。

またもってして、本稿にあつては【著作権表示】を施してもいるが(当頁下部参照のこと)、この期にあつて著作権にまつわつての表示などを敢えてもせせこましくもなしているのは

[バンダー(供給者)・供給チャネルを偽りながらも改悪・言論土壌汚染行為](馬鹿げた陰謀論ないしそうしたもののバンダーであるとの相応の手合いらと十把一絡げにしての供給チャネル偽装行為・露骨な劣化言論作出の類を(先後関係など偽りながら)なして情報供給チャネルと情報それ自体に対する印象操作をなし、厳然とある事実関係、その指摘を晦(くら)まし・枉(ま)げるといったやりよう / 上より情報封殺が完遂できない局面におけるオプションととれるやりよう)

などが相応の人間の心性欠如の者ら — 本来ならばそうする理由もないところで[説得力乏しき劣化言論]を目立って拡散なしもしようとの空虚な者ら — によって「そればかりが目立つ」式でなされる可能性を可及的に抑止するための配慮がある(被害妄想がかかっていて信じ難くもあろうが、この身には訴訟をなしていた折より同じくものことの経験がある)がゆえであつて、(そうも著作権表示などなしているのは)なにも「死に往く者」が知的財産権などに対する拘りをこれ滑稽にも呈しているわけでないとのこと、一応もってして断っておく(第三者にその共感を求めるのは一難事かととらえているのだが、自身を「死に往く者」と表しもしての【時間的切迫性】とのことでは、である。「人の将(まさ)に死なんとする、その言や善し」(教条的ではないつもりではある(児孫死滅に通ずる不正に心底からの罵詈雑言などはあるが教条主義的に人に内観や教えといったものを押しつけるようなことはしたくない)、そして、胸中まだ若くあるつもりであるとの人間が引くのは何ではあるかと思うのであるもの儒教というものとの徒・曾子の言として世に知られる言 / 死なぬために本稿の内容を問うつもりではあるとの人間ながらもそうした赤裸々さもまた他面であるとの意で引き合いに出しているとの英語で言うところの「ア・ダイニング・パースン・スピークス・トルルー」)との観点を[状況捕捉を真に望む向きら]に求めたいぐらいに時間的切迫性の問題が見え隠れしている、我が命とていくばくもない、健康面による事由ではなく、また、その他ありとあらゆるマイクロレベル(個人個人レベル)の災難ですらなくいくばくもなろうと当然に判じるだけのことが「ある」のだとここにあつてからして申し述べておきたい — 私はことによっては極近々【人災】(非力なる羊のような者らにとっては神為などと受け取られもするかもしれぬ【人災】)によって「吞まれて」死することとて大いにありうると見ている、自身があと数年、安閑に永らえることに対してすらなんら希望的観測を抱いていない(そうした【人災】と紐付いた【時間的切迫性】にまつわる危惧に通じている「数多の」論拠ら(具体的【現象】に依拠しての「数多の」論拠ら)は本稿にて厭となる程に呈示しているので、理なくしての獣声よろしくの否定、【愚者の否定】(情動的・条件反射的「拒絶」)をなすとの式ではなくにこの身を否定してやりたいと考えもしている向きらにはそれら論拠ら理非を検討いただきたい) —)。